

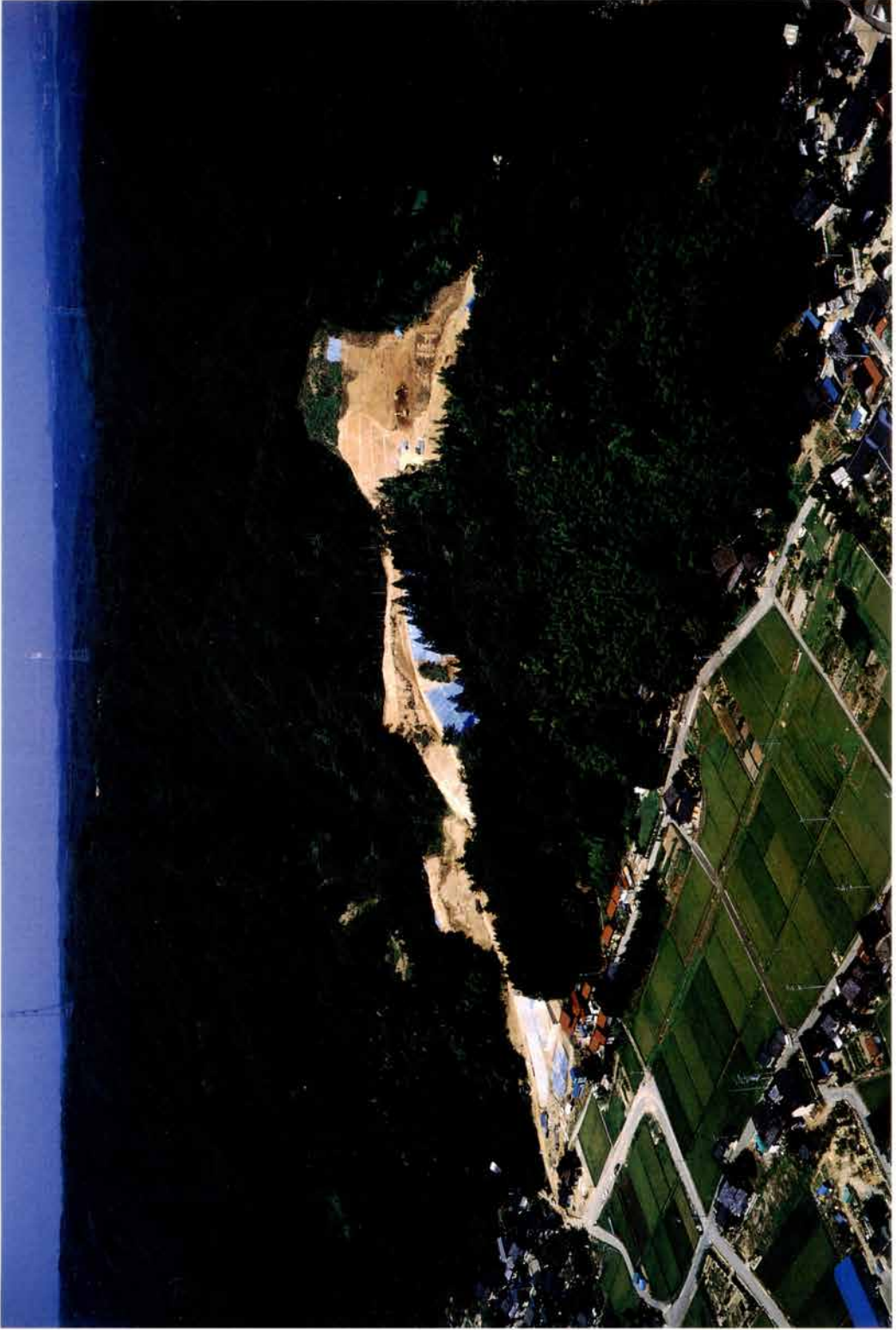
谷内・杉谷遺跡群

1995

石川県立埋蔵文化財センター

谷内・杉谷遺跡群

石川県立埋蔵文化財センター



遺跡群全景（1987年、東から）



遺跡全景(1989年、南東から)



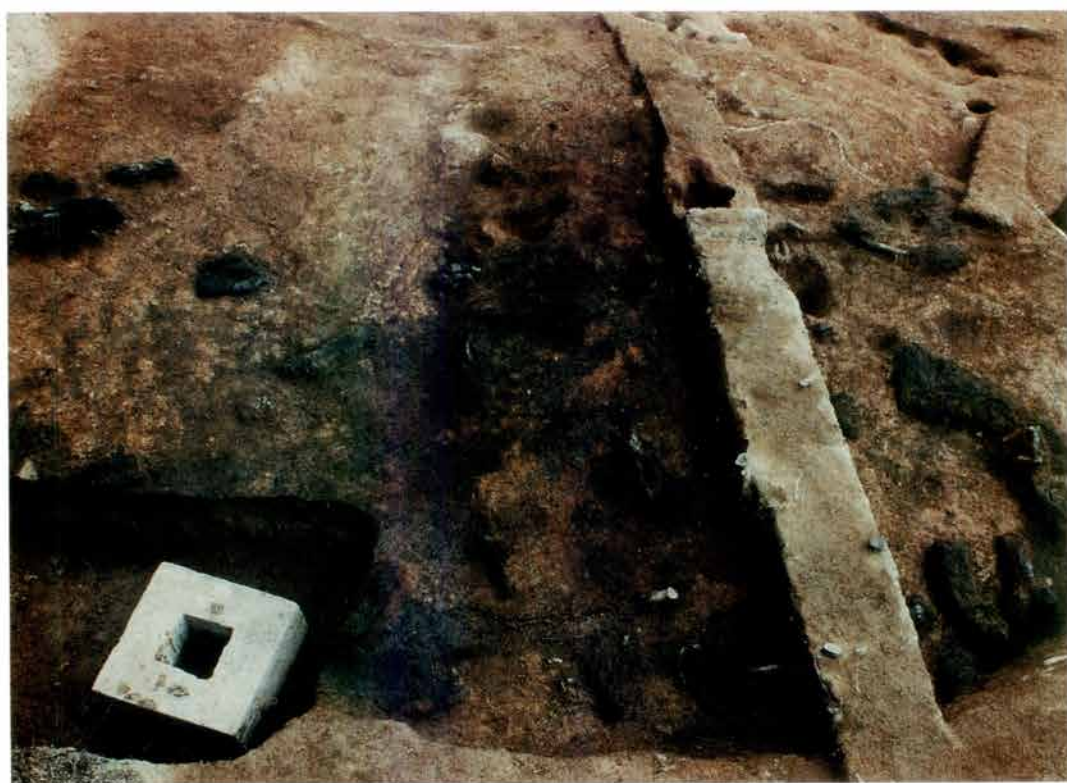
第1号小穴群(第34号土坑)遺物出土状況(北から)



B地区全景 (1987年、南から)



C地区掘削作業



第28号竖穴炭化材検出状況（西から）



第36号竖穴炭化材検出状況（北西から）



A地区第12号竖穴炉



A地区第18号竖穴炉



A地区第1号環濠内小土坑土層断面（部分）



B地区第22号竖穴炉



C地区第28号竖穴炉



C地区第28号竖穴壁上層断面



谷内ブンガヤチ遺跡第2号土坑出土炭化米



杉谷チャノバタケ遺跡炭化米塊(CR2)



1

4

10



杉谷チャノバタケ遺跡炭化米塊(CR1)



19

20

25

27

45

(番号は第7章第4節資料番号に同じ)

杉谷チャノバタケ遺跡B地区第22号竪穴式建物出土チマキ状炭化米塊(CR2)脱落米

例 言

1 本書は、石川県鹿島(かしま)郡鹿西(ろくせい)町金丸(かねまる)谷内(やち)・杉谷(すぎたに)地内所在の谷内・杉谷遺跡群(谷内ブンガヤチ遺跡、杉谷チャノバタケ遺跡、杉谷A古墳群、金丸杉谷遺跡)の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は石川県水道用水供給事業に係るもので、県企業局(能登送水工事事務所・送水管理事務所)の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが昭和60(1985)年度から平成元(1989)年度にかけて現地調査を、平成2(1990)年度から平成6(1994)年度にかけて出土品整理・報告書刊行事業を実施した。事業に要した費用(140,324,000円)は総て県企業局が負担した。

3 現地調査(実働550日)は栃木英道(埋蔵文化財センター主事)が担当し、下記の埋蔵文化財センター職員・調査補助員及び市町村埋蔵文化財専門職員長期研修生(いずれも当時)が参加した(年次別の調査期間等詳細は第1章第2節を参照されたい)。

昭和60年度 宮下栄仁・山本泰幹(補助員)、干場道治(長期研修生、鳥屋町)
昭和61年度 山本直人(主事)、宮下栄仁・田畑弘・津田耕吉(補助員)
昭和62年度 松山和彦(主事)、田畑弘・安宅務・池腰博之・広田謹一郎(補助員)
昭和63年度 宮下栄仁・田畑弘・大藤雅男・広岡吉紀・真智敏郎・西谷昌司(補助員)
平成元年度 宮下栄仁・田畑弘(補助員)

4 現地では下記の調査作業員(延べ10,278人)の参加を得た。記して深謝の意を表する。
〔鹿島郡鹿西町金丸〕磯辺 豊子、河内栄次郎、河内 重雄、河内惣次郎、河内 敏一、
藏田宇三郎、高崎貞二郎、山口 清、山本 忠嘉、山本 利雄(杉谷)、池島 国彦、
池島 作一、井上 慶治、井上 外治、川原 嘉男、幸松 正男、中村 政一、宮島 庄平、
宮島 安藏、宮田 良孝、宮田 良平、岡野作右衛門(宮地)、石田 善二、中井 三郎、
中村喜久男、中村 清、中村 重吉、中村 清吉、中村善太郎、中村外次郎(谷内)、
館 與之吉、堀内 新作、八十田佳造、八十田清司、八十田 弘、山辺喜三雄(沢)、
出越 幹夫、中川 睦雄(横町)、武部 秦山、田中 外雄、山辺 八郎(正部谷)
〔鹿島郡鹿西町能登部下〕茂森 雅彦
〔羽咋市鹿島路町〕備後 尚正、備後 陽一、松生 朋広
〔鹿島郡中島町外〕細口 喜則 (順不同、敬称略、46名)

5 本書の編集と第1～6・8章の執筆は埋文センター主任主事栃木が担当し、(財)石川県埋蔵文化財保存協会資料第2係班長辻森由美子(第7章第6節)、埋文センター主事滝川重徳(第7章第9節)が報告の欠を補っている。

第7章第1～5・7・8節では下記の先生方に依頼し玉稿をいただいた。深謝の意を表する。

第1節	鹿西町谷内・杉谷遺跡群出土の石器・石製品の石質について	藤 則雄
第2節	杉谷チャノバタケ遺跡の花粉分析	
	—— 花粉分析に基づく植物群落・微地形・気候 ——	藤 則雄
第3節	杉谷チャノバタケ遺跡出土の植物遺体	渡辺 誠
第4節	チマキ状炭化米の米粒解析	佐藤 敏也
第5節	土器の表面に見られる砂礫	奥田 尚
第6節	石川県における弥生時代の石器製作址について	辻森由美子
第7節	石川県鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡出土木製品の樹種	鈴木 三男・能城 修一
第8節	鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡出土漆器の塗膜分析	四柳 嘉章
第9節	谷内ブンガヤチ遺跡出土の中近世陶磁器類について	滝川 重徳

6 掲載遺物の番号は、先頭に各遺跡の頭文字(Y, C, S, K)を、次に遺物の材質をしめす頭文字(P, S, M, W, C, R)を付し、以下は各遺跡ごとの通し番号とした。同一個体ではあるが接合しない破片を複数掲載したものについては、遺物番号に続けて必要に応じて各破片に英小文字(a, b, c…)を付した。

Y : 谷内ブンガヤチ遺跡
C : 杉谷チャノバタケ遺跡
S : 杉谷A古墳群
K : 金丸杉谷遺跡

P : 土器・土製品
S : 石器・石製品
M : 金属器・金属製品

W : 木器・木製品
C : 粘土塊
R : 炭化米塊

例えばY P 1 は、谷内ブンガヤチ遺跡の土器・土製品の1番であり、本文、挿図、観察表、図版総ての遺物番号が一致する。

7 本書における挿図の扱いは下記のとおりである。

- (1) 平面図の方位には座標北(第Ⅶ系)、磁北(西偏約 $7^{\circ} 10'$)の二種があり、前者を方位記号にCを付した。方位記号のないものは座標北を用いており、天地の軸を南北(上が北)にとっている。
- (2) 断面図の水準線に付した数値は海拔高で、単位はメートルである。
- (3) 挿図の縮尺については標題に明示し、原則としてスケールを付した。

8 遺物実測図の表現のうち、断面黒塗は須恵器、同粗網は両面黒色処理(土器)を、表面細網(No. 21)は赤彩(弥生土器・土師器)、油痕・炭化物(土師器椀・皿)、自然面(打製石器)、欠失箇所(炭化米塊)を、同粗網(No. 1202)は黒色処理(土器)を表す。

9 本書の遺構・遺物にたいする時代(時期)的な表現は下記のとおりとした。

- (1) 縄文時代は草創期・早期…、前葉・中葉…、さらに○○式とした。
- (2) 弥生時代は前期、中期、後期、終末期とし、中期と後期は前半と後半に大別したうえ、前者については前半の古段階を初頭、後半の新段階を末葉とした。
- (3) 古墳時代前半期は前半と後半に大別し、前者の古段階を古墳時代初頭とした。
- (4) 古墳時代後半期以降については原則として西暦を用いたが、古墳時代と古代、古代と中世、中世と近世の境界は、それぞれ7世紀初頭、11世紀中頃、16世紀末頃を目安とした。

10 谷内・杉谷遺跡群に係るこれまでの成果の発表のうち、栃木の文責になるものと本書との間に齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。

11 本調査に関する出土品、写真等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。随時貸出しをおこなっているので利用されたい。

目 次

第 1 章	経緯と経過	（栃木 英道）	1
第 1 節	発掘調査にいたる経緯		1
第 2 節	発掘調査事業の経過		9
第 2 章	位置と地理的環境	（ ” ）	19
第 1 節	谷内・杉谷遺跡群の位置		19
第 2 節	遺跡群の地理的環境		21
第 3 章	谷内ブンガヤチ遺跡	（ ” ）	23
第 1 節	遺跡群と遺跡・調査の概要		23
第 2 節	弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物		31
第 3 節	奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物		103
第 4 節	遺構外他出土土器類		179
第 5 節	石器・金属器・木器・他		227
第 4 章	杉谷チャノバタケ遺跡	（ ” ）	255
第 1 節	遺跡と調査の概要		255
第 2 節	A 地区の遺構と遺物		259
第 3 節	B 地区の遺構と遺物		301
第 4 節	C 地区の遺構と遺物		345
第 5 章	杉谷 A 古墳群	（ ” ）	405
第 1 節	古墳群と調査の概要		405
第 2 節	西支群の遺構と遺物		407
第 6 章	金丸杉谷遺跡	（ ” ）	427
第 7 章	関連調査等		437
第 1 節	鹿西町谷内・杉谷遺跡群出土の 石器・石製品の石質について	（藤 則雄）	437
第 2 節	杉谷チャノバタケ遺跡の花粉分析 —— 花粉分析に基づく植物群落・微地形・気候 ——	（藤 則雄）	445
第 3 節	杉谷チャノバタケ遺跡出土の植物遺体	（渡辺 誠）	449
第 4 節	チマキ状炭化米の米粒解析	（佐藤 敏也）	453
第 5 節	土器の表面に見られる砂礫	（奥田 尚）	461
第 6 節	石川県における弥生時代の石器製作址について	（辻森由美子）	465
第 7 節	石川県鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡 出土木製品の樹種	（鈴木 三男 ・能城 修一）	471
第 8 節	鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡出土漆器の塗膜分析	（四柳 嘉章）	485
第 9 節	谷内ブンガヤチ遺跡出土の中近世陶磁器類について	（滝川 重徳）	503
第 8 章	考 察	（栃木 英道）	519

挿図目次

第1図	石川県水道用水供給事業に係る 埋蔵文化財の位置(S=1/1,000,000)	4	第33図	第3号土坑出土土器(S=1/3)	73
第2図	第1次拡張事業と谷内・杉谷遺跡群 (S=1/10,000)	7	第34図	第7・8・12号 土坑出土土器(S=1/3)	74
第3図	年次別調査箇所 (S=1/1,000・=1/2,000)	10	第35図	第14・20~22・24号 土坑他出土土器(S=1/3)	75
第4図	谷内・杉谷遺跡群(●印)の位置 (S=1/200,000)	20	第36図	第2号土坑出土土器(S=1/3)	76
第5図	遺跡群の位置(S=1/25,000)	22	第37図	第2号土坑出土土器(S=1/3)	77
第6図	遺跡群調査区全体図(S=1/3,000)	24	第38図	第2号土坑出土土器(S=1/3)	78
第7図	谷内ブンガヤチ遺跡遺構配置図 (S=1/500)	26	第39図	第2号土坑出土土器(S=1/3)	79
第8図	谷内ブンガヤチ遺跡全体図 (S=1/300)	28・29	第40図	第2号土坑出土土器(S=1/3)	80
第9図	第1号竪穴式建物(S=1/60)	49	第41図	第2号土坑出土土器(S=1/3)	81
第10図	第2号竪穴式建物(S=1/60)	50	第42図	第2号土坑出土土器(S=1/3)	82
第11図	第3号竪穴式建物(S=1/60)	51	第43図	第2号土坑出土土器(S=1/3)	83
第12図	第4・7号竪穴式建物(S=1/60)	52	第44図	第2号土坑出土土器(S=1/3)	84
第13図	第8・9号竪穴式建物(S=1/60)	53	第45図	第10号土坑出土土器(S=1/3)	85
第14図	第10・11号竪穴(S=1/80・=1/40)	54	第46図	第10号土坑出土土器(S=1/3)	86
第15図	第12号竪穴式建物(S=1/60)	55	第47図	第10号土坑出土土器(S=1/3)	87
第16図	第1・4~8・10・13~15・17 ・19~22・24・30号土坑(S=1/60)	56	第48図	第10号土坑出土土器(S=1/3)	88
第17図	第2号土坑(S=1/20)	57	第49図	第19号土坑出土土器(S=1/3)	89
第18図	第3・12号土坑(S=1/20)	58	第50図	第19号土坑出土土器(S=1/3)	90
第19図	第1・4号竪穴出土土器(S=1/3)	59	第51図	第30号土坑出土土器(S=1/3)	91
第20図	第2号竪穴式建物上部~中部・他 出土土器(S=1/3)	60	第52図	第30号土坑出土土器(S=1/3)	92
第21図	第2号竪穴下部出土土器(S=1/3)	61	第53図	第30号土坑出土土器(S=1/3)	93
第22図	第2号竪穴下部他出土土器(S=1/3)	62	第54図	第30号土坑出土土器(S=1/3)	94
第23図	第2号竪穴下部出土土器(S=1/3)	63	第55図	第30号土坑出土土器(S=1/3)	95
第24図	第2号竪穴下部出土土器(S=1/3)	64	第56図	第4・7・14・15・35・51号 溝出土土器(S=1/3)	96
第25図	第3号竪穴式建物上部~中部・他 出土土器(S=1/3)	65	第57図	第5号竪穴状遺構(S=1/40)	134
第26図	第3号竪穴下部他出土土器(S=1/3)	66	第58図	第1号掘立柱式建物(S=1/100)	135
第27図	第7~9号竪穴出土土器(S=1/3)	67	第59図	第2号掘立柱式建物(S=1/100)	136
第28図	第10号竪穴式建物出土土器(S=1/3)	68	第60図	第3~5号掘立柱式建物(S=1/100)	137
第29図	第12号竪穴式建物出土土器(S=1/3)	69	第61図	第6・7号掘立柱式建物・ 第2号柱列(S=1/100)	138
第30図	第12号竪穴式建物出土土器(S=1/3)	70	第62図	第6・7号掘立柱式建物(S=1/100)	139
第31図	第1・4・5号土坑出土土器(S=1/3)	71	第63図	第8・17~19号 掘立柱式建物(S=1/100)	140
第32図	第3・6・(・8)号 土坑出土土器(S=1/3)	72	第64図	第9~14号掘立柱式建物(S=1/100)	141
			第65図	第9~11号掘立柱式建物(S=1/100)	142
			第66図	第15号掘立柱式建物(S=1/100)	143
			第67図	第16号掘立柱式建物・ 第78号溝(S=1/100)	144
			第68図	第1・3~5号井戸(S=1/60)	145

第69图	第6~13号井戸(S=1/60)	146		土器集中地点出土土器(S=1/3)	183
第70图	第14~23・27号井戸(S=1/60)	147	第99图	小穴・遺構外他出土土器(S=1/3)	184
第71图	第24~26・28~35号井戸(S=1/60)	148	第100图	遺構外他出土土器(S=1/3)	185
第72图	第1号土器埋納小穴(S=1/20)・ 第1号室(S=1/40)	149	第101图	遺構外出土土器(S=1/3)	186
第73图	第2・5号室・第1号墓・ 第14号溝(S=1/60)	150	第102图	遺構外出土土器(S=1/3)	187
第74图	第1号小穴群(第33・34号土坑) ・土坑(S=1/60)	151	第103图	遺構外出土土器(S=1/3)	188
第75图	第5号竖穴状遺構他 出土土器(S=1/3)	152	第104图	遺構外出土土器(S=1/3)	189
第76图	掘立柱式建物柱穴他 出土土器(S=1/3)	153	第105图	遺構外他出土土器(S=1/3)	190
第77图	小穴(・柱穴)他出土土器(S=1/3)	154	第106图	遺構外出土土器(S=1/3)	191
第78图	第1号土器埋納小穴 出土土器(S=1/3)	155	第107图	遺構外出土土器(S=1/3)	192
第79图	第3・4・6号 井戸他出土土器(S=1/3)	156	第108图	遺構外出土土器(S=1/3)	193
第80图	第8・9号井戸出土土器(S=1/3)	157	第109图	遺構外出土土器(S=1/3)	194
第81图	第10号井戸出土土器(S=1/3)	158	第110图	遺構外他出土土器(S=1/3・=1/6)	195
第82图	第11号井戸出土土器(S=1/3)	159	第111图	遺構外出土土器(S=1/3)	196
第83图	第11・12・14号井戸他 出土土器(S=1/3)	160	第112图	遺構外出土土器(S=1/3)	197
第84图	第20号井戸出土土器(S=1/3・1/6)	161	第113图	遺構外出土土器(S=1/3)	198
第85图	第16・17・19・21・22・24~ 27・29号井戸出土土器(S=1/3)	162	第114图	遺構外出土土器(S=1/3)	199
第86图	第30・31・35号井戸 出土土器(S=1/3)	163	第115图	遺構外出土土器(S=1/3)	200
第87图	第1号小穴群(第34号土坑)・ 他出土土器(S=1/3・1/6)	164	第116图	遺構外出土土器(S=1/3)	201
第88图	第1号小穴群(第33号土坑)・ 他出土土器(S=1/3・1/6)	165	第117图	遺構外出土土器(S=1/3)	202
第89图	第1号墓、第1・2号室、第5 ・58号溝出土土器(S=1/3・1/6)	166	第118图	遺構外出土土器(S=1/3)	203
第90图	第20・19・29・60号溝他 出土土器(S=1/3・1/6)	167	第119图	遺構外出土土器(S=1/3)	204
第91图	第60号溝出土土器(S=1/3・1/6)	168	第120图	遺構外出土土器(S=1/3)	205
第92图	第50号溝出土土器(S=1/3)	169	第121图	遺構外出土土器(S=1/3)	206
第93图	第50号溝出土土器(S=1/3)	170	第122图	遺構外出土土器(S=1/3)	207
第94图	第50号溝出土土器(S=1/3)	171	第123图	遺構外出土土器(S=1/3)	208
第95图	第50号溝出土土器(S=1/3)	172	第124图	遺構外出土土器(S=1/3)	209
第96图	第50号溝出土土器(S=1/3)	173	第125图	遺構外出土土器(S=1/3)	210
第97图	小穴・遺構外他出土土器(S=1/3)	182	第126图	遺構外出土土器(S=1/3)	211
第98图	K-7・8区遺構上面・P-5区		第127图	遺構外出土土器・土製品(S=1/3)	212
			第128图	遺構外出土土器(S=1/3)	213
			第129图	遺構外出土陶磁器(S=1/3)	214
			第130图	遺構外出土磁器(S=1/3)	215
			第131图	遺構外出土土器(S=1/3)	216
			第132图	遺構外出土陶磁器(S=1/3)	217
			第133图	石斧・石鏃・管玉・他(S=1/2)	229
			第134图	軽石製品(S=1/3)	230
			第135图	砥石・行火・他(S=1/3)	231
			第136图	砥石・硯・他(S=1/3)	232
			第137图	砥石・他(S=1/3)	233
			第138图	粉挽き臼(上臼)(S=1/5)	234
			第139图	粉挽き臼(下臼)(S=1/5)	235
			第140图	茶臼・粉挽き臼(下臼)(S=1/5)	236
			第141图	錢貨(S=4/5)	237

第142図	金属製品(S=1/2)	238	第183図	B地区遺構配置図(S=1/400)	302
第143図	刀・鎌・鉄滓(S=1/3)	239	第184図	B地区全体図(S=1/300)	303
第144図	鉄滓・粘土塊(S=1/3)	240	第185図	土坑(S=1/60)	318
第145図	井戸(周辺)出土木製品(S=1/3)	241	第186図	土坑(S=1/60)	319
第146図	井戸出土木製品(S=1/3)	242	第187図	第20・21・37号竪穴式建物他 (S=1/80)	320
第147図	井戸出土木製品(S=1/3)	243	第188図	第20・22・23号竪穴式建物(S=1/80)	321
第148図	第20号井戸出土木製品(S=1/3)	244	第189図	竪穴式建物・段状遺構 (S=1/40・=1/8)	322
第149図	第20・24号井戸出土木製品(S=1/3)	245	第190図	段状遺構(S=1/60)・ 小穴群(S=1/100)	323
第150図	第50号溝出土木製品(S=1/3)	246	第191図	B地区出土縄文土器他(S=1/3)	324
第151図	第50号溝出土木製品(S=1/3)	247	第192図	B地区出土縄文土器(S=1/3)	325
第152図	漆器・漆製品(S=1/3)	248	第193図	竪穴式建物他出土土器(S=1/3)	326
第153図	礎板(S=1/4)・柱根他(S=1/8)	249	第194図	第1号段状遺構出土土器(S=1/3)	327
第154図	柱根(S=1/8)	250	第195図	第22・23号竪穴式建物他 出土土器(S=1/3)	328
第155図	第50号溝出土土杭(S=1/4)	251	第196図	第22・23号竪穴式建物・段状施設 出土土器(S=1/3)	329
第156図	杉谷チャノバタケ遺跡全体図 (S=1/2,000)	256	第197図	段状遺構・土坑出土土器(S=1/3)	330
第157図	A地区遺構配置図(S=1/300)	260	第198図	B地区流土出土土器(S=1/3)	331
第158図	A地区全体図(S=1/300)	261	第199図	B地区流土出土土器(S=1/3)	332
第159図	竪穴式建物・土坑他(S=1/60)	274	第200図	B地区流土出土土器(S=1/3)	333
第160図	竪穴式建物・段状遺構他(S=1/60)	275	第201図	B地区流土出土土器(S=1/3)	334
第161図	第13号竪穴式建物他(S=1/60)	276	第202図	C-4区流土上部出土土器(S=1/3)	335
第162図	第12号竪穴式建物(S=1/60)	277	第203図	C-4区流土上部出土土器(S=1/3)	336
第163図	第18号竪穴式建物(S=1/60)	278	第204図	B地区流土上部出土土器(S=1/3)	337
第164図	第1号掘立柱式建物他(S=1/60)	279	第205図	B地区流土上部出土土器(S=1/3)	338
第165図	段状遺構(S=1/80)・ 環濠(S=1/100)	280	第206図	B地区出土石器他(S=1/2・=1/1)	339
第166図	第1号環濠(S=1/60、S=1/150)	281	第207図	B地区出土石器(S=1/3)	340
第167図	A地区出土土器(S=1/3)	282	第208図	C地区遺構配置図(S=1/400)	346
第168図	第12号竪穴式建物出土土器(S=1/3)	283	第209図	C地区全体図(S=1/300)	347
第169図	第12号竪穴式建物出土土器他(S=1/3)	284	第210図	竪穴式建物・土坑(S=1/60・=1/30)	366
第170図	第18号竪穴式建物出土土器(S=1/3)	285	第211図	竪穴式建物・段状遺構(S=1/60)	367
第171図	第1号環濠(S区)出土土器(S=1/3)	286	第212図	竪穴式建物・上屋・土坑(S=1/60)	368
第172図	第1号環濠(S区)出土土器(S=1/3)	287	第213図	竪穴式建物・上屋・土坑(S=1/60)	369
第173図	第1号環濠(S区)出土土器(S=1/3)	288	第214図	第30・31・38号土坑(S=1/60)	370
第174図	第1号環濠(W区)出土土器(S=1/3)	289	第215図	第3号上屋・第35号土坑(S=1/60)	371
第175図	第1号環濠(W区)出土土器(S=1/3)	290	第216図	上屋・土坑・段状遺構(S=1/60)	372
第176図	第1号環濠(W区)出土土器(S=1/3)	291	第217図	第33・34・37号土坑(S=1/60)	373
第177図	第1号環濠(W区)出土土器(S=1/3)	292	第218図	第40~43号土坑(S=1/60)	374
第178図	第1号環濠(N区)出土土器(S=1/3)	293	第219図	第3~5号段状遺構(S=1/100)	375
第179図	第1号環濠(N区)他出土土器 ・石器(S=1/3)	294	第220図	第4号段状遺構(S=1/100)	376
第180図	A地区出土石器(S=1/2)	295	第221図	段状遺構	
第181図	A地区出土石器他(S=1/2・=1/1)	296			
第182図	第12号竪穴式建物出土石器他(S=1/3)	297			

	(S=1/40・=1/80・=1/100)	377	第258図	金丸杉谷遺跡調査区全体図(S=1/400)	
第222図	集石・環濠・土坑			・1区土層断面(S=1/100)他	428
	(S=1/60・=1/100)	378	第259図	1区出土土器(S=1/3)	431
第223図	第1号地下式墳(S=1/60)	379	第260図	2区出土土器(S=1/3)	432
第224図	第26・27号竪穴出土土器(S=1/3)	380	第261図	3・4区出土土器他(S=1/3)	433
第225図	竪穴・段状遺構他出土土器(S=1/3)	381	第262図	4区出土土器(S=1/3)	434
第226図	第36号竪穴式建物出土土器(S=1/3)	382	第263図	4区出土土器(S=1/3)	435
第227図	竪穴・土坑他出土土器(S=1/3)	383	第264図	鹿西町谷内・杉谷遺跡群出土	
第228図	第4号上屋他出土土器(S=1/3)	384		石器等石材の分布	443
第229図	上屋・段状遺構出土土器(S=1/3)	385	第265図	鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡の	
第230図	土坑・段状遺構出土土器(S=1/3)	386		花粉ダイアグラム	447
第231図	土坑・段状遺構他出土土器(S=1/3)	387	第266図	花粉分析試料の層準(S=1/80)	448
第232図	上屋・土坑他出土土器(S=1/3)	388	第267図	米粒各部名称(文献(6)より)	453
第233図	C地区中段他出土土器(S=1/3)	389	第268図	杉谷チャノバタケ遺跡出土米塊の	
第234図	第2号環濠(南側)出土土器(S=1/3)	390		粒形の変異(粒長・粒幅)	455
第235図	第2号環濠(南側)出土土器(S=1/3)	391	第269図	杉谷チャノバタケ遺跡出土米塊の粒型	455
第236図	第2号環濠出土土器(S=1/3)	392	第270図	観察試料一覧(S=1/5)	463
第237図	第2号環濠(東側)出土土器(S=1/3)	393	第271図	遺跡の位置(S=1/2,000,000)	465
第238図	土坑・段状遺構他出土土器(S=1/3)	394	第272図	杉谷チャノバタケ遺跡石器製作址	
第239図	C地区中段下谷部出土土器(S=1/3)	395		および台石・剥片出土地点	
第240図	C地区出土石器(S=1/3)	396		(S=1/150・=1/2,500)	466
第241図	C地区出土石器(S=1/2)	397	第273図	藤野遺跡遺構配置図(S=1/1,200)	467
第242図	C地区出土石器(S=1/2)	398	第274図	漆器・漆製品(S=1/3)	
第243図	第2号環濠出土石器(S=1/2)	399		(第3章第5節第152図)	498
第244図	C地区出土石器(S=1/3)	400	第275図	主要中世陶磁器(S=1/4)	505
第245図	杉谷A古墳群全体図(S=1/2,500)	406	第276図	主要近世陶磁器(S=1/4)	512
第246図	第1～4号墳(S=1/300)	415	第277図	近世陶磁器供膳具地区別構成比	516
第247図	第1・2号墳(S=1/150)		第278図	特大型・大型長胴壺類(S=1/6)	521
	・出土遺物(S=1/3・=1/2)	416	第279図	特大型球胴壺類(S=1/6)	523
第248図	第1・2号墳埋葬施設(S=1/40)・		第280図	大型球胴壺類(S=1/6)	525
	第1号周溝鉄鏃出土状況(S=1/20)	417	第281図	大型球胴・中型壺類(S=1/6)	527
第249図	第3・4号墳(S=1/150)		第282図	中型・小型壺類(S=1/6)	529
	・出土土器(S=1/3)	418	第283図	甕a・c～g・h類(S=1/6)	531
第250図	第3・4・6・7・10号墳		第284図	甕b類(S=1/6)	533
	埋葬施設他(S=1/40)	419	第285図	甕d～f類(S=1/6)	535
第251図	第5号墳・出土土器		第286図	無台・有台鉢類(S=1/6)	537
	(S=1/200・=1/3)	420	第287図	脚付鉢類(S=1/6)	539
第252図	第5号墳(S=1/150)	421	第288図	高杯・脚付鉢類(S=1/6)	541
第253図	第5・11号墳(S=1/40・=1/200)	422	第289図	器台類(S=1/6)	543
第254図	第6・7号墳(S=1/300・=1/150)	423	第290図	有孔鉢・結合器台・蓋類・	
第255図	第7・8号墳(S=1/150・=1/300)	424		その他(S=1/6)	544
第256図	第9・10号墳(S=1/300)	425	第291図	土器細分編年1(S=1/12)	546・547
第257図	第10号墳・出土土器他		第292図	土器細分編年2(S=1/12)	548・549
	(S=1/150・=1/3)	426	第293図	土器細分編年3(S=1/12)	550・551

表 目 次

第1表	谷内・杉谷遺跡群出土 石器・石製品石質別器種一覧	439	第16表	中世土師器皿出土頻度(形態/地区)	506
第2表	谷内・杉谷遺跡群出土 石器・石製品器種別石質一覧	441	第17表	近世陶磁器集計表(1)	513
第3表	ドングリ類の分類	450	第18表	近世陶磁器集計表(2)	513
第4表	ドングリ類計測値一覧表	451	第19表	近世陶磁器集計表(3)	516
第5表	炭化米粒の形態	453	第20表	特大型・大型長胴壺類	520
第6表	杉谷チャノバタケ遺跡出土米粒の 形態・粒型とその大きさ	454	第21表	特大型球胴壺類	522
第7表	粒の組成	456	第22表	大型球胴壺類	524
第8表	杉谷チャノバタケ遺跡出土 チマキ状炭化米計測表	458	第23表	中型壺類	526
第9表	砂礫観察表	464	第24表	中型・小型壺類	528
第10表	鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡 出土木製品の樹種(標本番号順)	477	第25表	特大型・大型・極小型甕 a～d 類	528
第11表	鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡 出土木製品の樹種(樹種別)	478	第26表	中型・小型甕 a～c 類	530
第12表	器形・木取りと樹種による分類	494	第27表	蓋類	532
第13表	漆器の上塗色・器形と下地分類	494	第28表	中型・小型甕 d、甕 e～h 類	534
第14表	漆器観察一覧表	497	第29表	無台・有台鉢類	536
第15表	中世陶磁器集計表	506	第30表	脚付鉢類	538
			第31表	有孔鉢	538
			第32表	結合器台	538
			第33表	その他	538
			第34表	高杯・脚付鉢類	540
			第35表	器台類	542
				[報告書抄録]	552

写真目次

写真1	遺物の洗浄(昭和62年度)	18	写真11	杉谷チャノバタケ遺跡A地区 第18号竪穴式建物出土石器	470
写真2	遺物の記名・分類・接合(昭和60年度)	18	写真12	木製品の断面	479
写真3	金属・木・石器の実測(昭和62年度)	18	写真13	木製品の断面	480
写真4	遺構実測図の浄書(平成5年度)	18	写真14	木製品の断面	481
写真5	C地区第28号竪穴式建物他掘削作業	258	写真15	木製品の断面	482
写真6	谷内ブンガヤチ遺跡 環状石斧(Y S 3)出土状況	444	写真16	木製品の断面	483
写真7	第13号土坑土層断面(東から)	448	写真17	木製品の断面	484
写真8	杉谷チャノバタケ遺跡出土 ドングリ類(S=1/1)	451	写真18	漆器塗膜層断面顕微鏡写真	499
写真9	炭化米粒	459	写真19	漆器塗膜層断面顕微鏡写真	500
写真10	杉谷チャノバタケ遺跡出土 米粒の粒型ならびに粒の大きさ	460	写真20	漆器	501
			写真21	漆器・漆製品	502

図版目次

原色図版第1 谷内・杉谷遺跡群

原色図版第2 谷内ブンガヤチ 遺跡・遺構

原色図版第3 杉谷チャノバタケ 調査

原色図版第4 杉谷チャノバタケ 遺構

原色図版第5 杉谷チャノバタケ 遺構

原色図版第6 谷内・杉谷遺跡群 遺物

図版第1 谷内・杉谷遺跡群

遺構：竪穴式建物

図版第2 谷内・杉谷遺跡群

図版第30 杉谷チャノバタケA地区 遺構：環濠

図版第3 谷内ブンガヤチ 調査：1985年

図版第31 杉谷チャノバタケA地区 遺構：環濠

図版第4 谷内ブンガヤチ 調査：1986年

図版第32 杉谷チャノバタケB地区 調査：1987年

図版第5 谷内ブンガヤチ 調査：1986年

図版第33 杉谷チャノバタケB地区 調査：1987年

図版第6 谷内ブンガヤチ 調査：1987・88年

図版第34 杉谷チャノバタケB地区 調査：1987年

図版第7 谷内ブンガヤチ 調査：1988年

図版第35 杉谷チャノバタケB地区 遺構：土坑

図版第8 谷内ブンガヤチ 調査：1989年

図版第36 杉谷チャノバタケB地区 遺構：土坑

図版第9 谷内ブンガヤチ 調査：1989年

図版第37 杉谷チャノバタケB地区

図版第10 谷内ブンガヤチ 遺構：竪穴式建物

遺構：竪穴式建物他

図版第11 谷内ブンガヤチ 遺構：竪穴式建物

図版第38 杉谷チャノバタケB地区

図版第12 谷内ブンガヤチ 遺構：竪穴式建物

遺構：竪穴式建物

図版第13 谷内ブンガヤチ 遺構：土坑

図版第39 杉谷チャノバタケC地区 調査：1988年

図版第14 谷内ブンガヤチ 遺構：土坑・小穴群

図版第40 杉谷チャノバタケC地区 調査：1988年

図版第15 谷内ブンガヤチ 遺構：小穴群・小穴他

図版第41 杉谷チャノバタケC地区

図版第16 谷内ブンガヤチ 遺構：墓・溝

遺構：竪穴式建物・他

図版第17 谷内ブンガヤチ 遺構：井戸

図版第42 杉谷チャノバタケC地区

図版第18 谷内ブンガヤチ 遺構：井戸

遺構：地下式墳・土坑・他

図版第19 谷内ブンガヤチ 遺構：井戸

図版第43 杉谷チャノバタケC地区 遺構：

図版第20 谷内ブンガヤチ 遺構：井戸

段状遺構・土坑・他

図版第21 谷内ブンガヤチ 遺構：井戸

図版第44 杉谷チャノバタケC地区 遺構：

図版第22 谷内ブンガヤチ 遺構：室・竪穴状遺構

環濠・土坑・他

図版第23 谷内ブンガヤチ 遺構：掘立柱式建物

図版第45 杉谷A古墳群 試掘調査他：1986年

図版第24 谷内ブンガヤチ 遺構：掘立柱式建物

図版第46 杉谷A古墳群 遺構：第1～4号墳

図版第25 谷内ブンガヤチ 1985・89年

図版第47 杉谷A古墳群 遺構：第1・2号墳

図版第26 杉谷チャノバタケA地区 調査：1987年

図版第48 杉谷A古墳群 遺構：第2～4号墳

図版第27 杉谷チャノバタケA地区 調査：1987年

図版第49 杉谷A古墳群 遺構：第5～8号墳

図版第28 杉谷チャノバタケA地区

図版第50 杉谷A古墳群 遺構：第6～10号墳

遺構：竪穴式建物

図版第51 杉谷A古墳群 遺構：第9～11号墳

図版第29 杉谷チャノバタケA地区

図版第52 金丸杉谷遺跡 調査：1989年

図版第53	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第81	杉谷チャノバタケ遺跡A地区	遺物
図版第54	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第82	杉谷チャノバタケ遺跡A地区	遺物
図版第55	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第83	杉谷チャノバタケ遺跡A地区	遺物
図版第56	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第84	杉谷チャノバタケ遺跡A地区	遺物
図版第57	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第85	杉谷チャノバタケ遺跡A地区	遺物
図版第58	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第86	杉谷チャノバタケ遺跡A地区	遺物
図版第59	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第87	杉谷チャノバタケ遺跡A地区	遺物
図版第60	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第88	杉谷チャノバタケ遺跡A地区	遺物
図版第61	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第89	杉谷チャノバタケ遺跡B地区	遺物
図版第62	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第90	杉谷チャノバタケ遺跡B地区	遺物
図版第63	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第91	杉谷チャノバタケ遺跡B地区	遺物
図版第64	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第92	杉谷チャノバタケ遺跡B地区	遺物
図版第65	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第93	杉谷チャノバタケ遺跡B地区	遺物
図版第66	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第94	杉谷チャノバタケ遺跡B地区	遺物
図版第67	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第95	杉谷チャノバタケ遺跡B地区	遺物
図版第68	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第96	杉谷チャノバタケ遺跡C地区	遺物
図版第69	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第97	杉谷チャノバタケ遺跡C地区	遺物
図版第70	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第98	杉谷チャノバタケ遺跡C地区	遺物
図版第71	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第99	杉谷チャノバタケ遺跡C地区	遺物
図版第72	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第100	杉谷チャノバタケ遺跡C地区	遺物
図版第73	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第101	杉谷チャノバタケ遺跡C地区	遺物
図版第74	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第102	杉谷チャノバタケ遺跡C地区	遺物
図版第75	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第103	杉谷チャノバタケ遺跡C地区	遺物
図版第76	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物			
図版第77	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第104	杉谷A古墳群	遺物
図版第78	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物			
図版第79	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第105	金丸杉谷遺跡	遺物
図版第80	谷内ブンガヤチ遺跡	遺物	図版第106	金丸杉谷遺跡	遺物

第1章 経緯と経過

第1節 発掘調査にいたる経緯

1 石川県水道用水供給事業と埋蔵文化財

手取川総合開発事業

谷内・杉谷遺跡群の発掘調査は、石川県企業局が実施した水道用水供給事業に係るものである。同事業の始まりは、昭和41(1966)年に石川県土木部によって事前調査が開始された「手取川ダム」の建設に遡る。手取川は石川、福井、岐阜の三県にまたがる霊峰白山に源を発し、加賀地域を南北に貫流する流路72km、流域面積809km²におよぶ県下最大の一級河川である。流域が北陸地方有数の豪雪地帯であるところから融雪水が豊富で、半径約13km、扇開角約110度の典型的な扇状地を形成しつつ平野部を潤してきた反面、「石川」の地名の由来となったことからわかるように、古来より「あばれ川」として幾多の洪水の被害をもひきおこしてきた。とりわけ死者・行方不明者112名を数えた昭和9(1934)年7月の大出水は、流域住民のうちに長く語り伝えられている空前の災害であった。

高さ153m、有効貯水量190,000千m³を誇る日本有数のロックフィルダムの建設を核とする手取川総合開発事業は、石川県、建設省、電源開発(株)、北陸電力(株)が共同で実施したもので、その目的はダム地点での洪水量毎秒2,400m³のうち毎秒800m³を調節する上述の治水のほか、「新日本海時代」をめざした電力源、水道・工業用水源の確保にあった。年々増加するエネルギー需要にたいして、供給の大半を富山、福井両県に依存している体質を緩和し、ピーク時需要にも有効に対処するため、渇水期に出力が低下する既設の流れ込み式発電所ではなく、大型のダム水路式発電所が必要とされたのである。同発電施設は最大出力367千kw、年間発生電力量887,000千kwを実現している。ダム本体の建設工事は電源開発(株)がおこなった。以下はその経過である。

昭和41(1966)年	県土木部事前地質・地形調査開始
昭和42(1967)年	建設省計画参加、基礎調査開始
昭和43(1968)年	電源開発(株)・北陸電力(株)計画参加、基礎調査開始
昭和45(1970)年6月	地元鶴来町、河内村、鳥越村、吉野谷村、尾口村、白峰村に計画公表
昭和46(1971)年	計画発表(3月)、正式決定(6月)
昭和49(1974)年11月	起工式
昭和54(1979)年6月	湛水開始
昭和55(1980)年5月	竣工式

これにたいして県企業局が実施した水道用水供給事業は、電力源の確保とともに手取川総合開発事業の二大目的のひとつで、増加傾向をたどる水需要に呼応して、ダム建設に

第1節 発掘調査にいたる経緯

よって利用可能となる水道(最大44万 m^3 /日)・工業(同5万 m^3 /日)用水を一括浄水し、金沢市以下13市町各水道事業者に自然流下方式、一市町村一地点受水の基本原則にもとづき広域供給しようとするものであった。明治23(1890)年の水道条例(現水道法)の公布以来、水道事業は市町村が主体となり進められてきたが、自己行政区域内での水源確保の限界、表流水利用にともなう浄水処理費増、地下水依存による水位の低下や地盤沈下などの弊害等が指摘され、安定的な表流水による水源確保が必要とされていた。同事業は将来の水需要の増加にたいして水源確保の不安を抱える市町村の強い要望に沿うものとされ、昭和45(1970)年9月、各市町村からの水道水需給調査報告をうけて動きだした。その経過は以下のとおりである。

昭和45(1970)年9月	各市町村水道水需給調査報告受理
昭和47(1972)年3月	第一期加賀地区：金沢市以下13市町受水申込書受理(昭和50年1市追加、昭和54年3市町辞退、平成3年1市追加)
昭和49(1974)年1月	石川県水道用水供給事業認可
昭和53(1978)年6月	鶴来浄水場起工式
昭和55(1980)年7月	金沢市、加賀市、野々市町、津幡町、七塚町、押水町給水開始
昭和55(1980)年11月	高松町給水開始
昭和56(1981)年3月	小松市給水開始
昭和57(1982)年	宇ノ気町(2月)、内灘町(7月)、鶴来町(12月)給水開始
平成3(1991)年5月	松任市給水開始

谷内・杉谷遺跡群の発掘調査が県水道用水供給事業に係るものであることは冒頭でふれたが、直接の原因は上記第一期加賀地区供給事業ではなく、昭和56(1981)年8月に認可され第一期地区事業と並行して実施された第1次拡張事業である。同事業は第二期能登地区供給をめざすもので、七尾市、羽咋市、鹿西町、能登島町4市町を対象としていた。その経過は次項でふれることとし、以下では手取川総合開発事業と埋蔵文化財とのかかわり、とくに発掘調査の経過についてまとめておきたい。

埋蔵文化財発掘調査

県勢の発展に大きく寄与するとされた手取川総合開発事業は、一方で事業地周辺に少なからぬ影響をあたえた。水没土地面積499.7ha、国道157号線付替延長12.6km、水没世帯数は白峰村桑島全戸を含め330世帯にのぼった。こうした巨大開発事業は、水没はもとより発電所建設、家屋移転代替宅地造成、林道付替、送水管埋設、受水施設建設等を原因として、各事業予定地に所在する埋蔵文化財にも大きな影響をおよぼした。以下は同事業に直接起因し、県教育委員会と町教育委員会が、昭和49(1974)年度から昭和56(1981)年度までの8年にわたって実施した4町村8遺跡9件の発掘調査一覧である。

なお、表中①～⑤の調査主体は県教委文化財保護課、⑥、⑧、⑨は県埋文センター、⑦は宇ノ気町教育委員会であり、⑦の調査には町教委の派遣申請をうけ、埋文センターが職員を派遣している。

遺 跡 名	所 在 地	現 地 調 査 期 間	原 因 者	事 業 内 容
①御所の館縄文遺跡	尾口村東二口	S.49.10.4~12.	電源開発(株) 県住宅供給公社	発電所建設 代替宅地造成
②安養寺遺跡群	鶴来町安養寺 ・柴木 ・部入道	S.49.5.2~8.4 S.49.9.10~11.6		
③桑島・東島遺跡	白峰村桑島	S.50.7.2~7.30		
④桑島・東島遺跡	白峰村桑島	S.51.9.21~11.3	電源開発(株) 電源開発(株) 電源開発(株)	水没 林道付け替え 水没
⑤桑島館跡・象ヶ崎遺跡	白峰村桑島	S.50.9.8~11.10 S.51.4.26~11.30 S.52.5.16~12.9		
⑥白山遺跡・白山町墳墓遺跡	鶴来町白山町	S.54.9.5~11.9		
⑦鉢伏茶臼山遺跡	宇ノ気町鉢伏	S.55.4.17~8.7	県企業局	送水管埋設 受水施設建設
⑧鉢伏茶臼山遺跡	宇ノ気町鉢伏	S.55.8.18~9.17		
⑨安養寺遺跡群	鶴来町安養寺	S.56.10.16~11.19	県企業局	送水管埋設

参考文献

- 『尾口村御所の館縄文遺跡』 石川県教育委員会 1975
- 『白峰村桑島・東島遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会 1976
- 『桑島館跡』（資料編） 石川県教育委員会 1977
- 『桑島館跡』 石川県教育委員会 1978
- 『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡発掘調査報告書』 石川県立埋蔵文化財センター 1980
- 『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1981
- 『安養寺遺跡群発掘調査報告書』（図版編） 石川県立埋蔵文化財センター 1985
- 『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡』 宇ノ気町教育委員会 1987

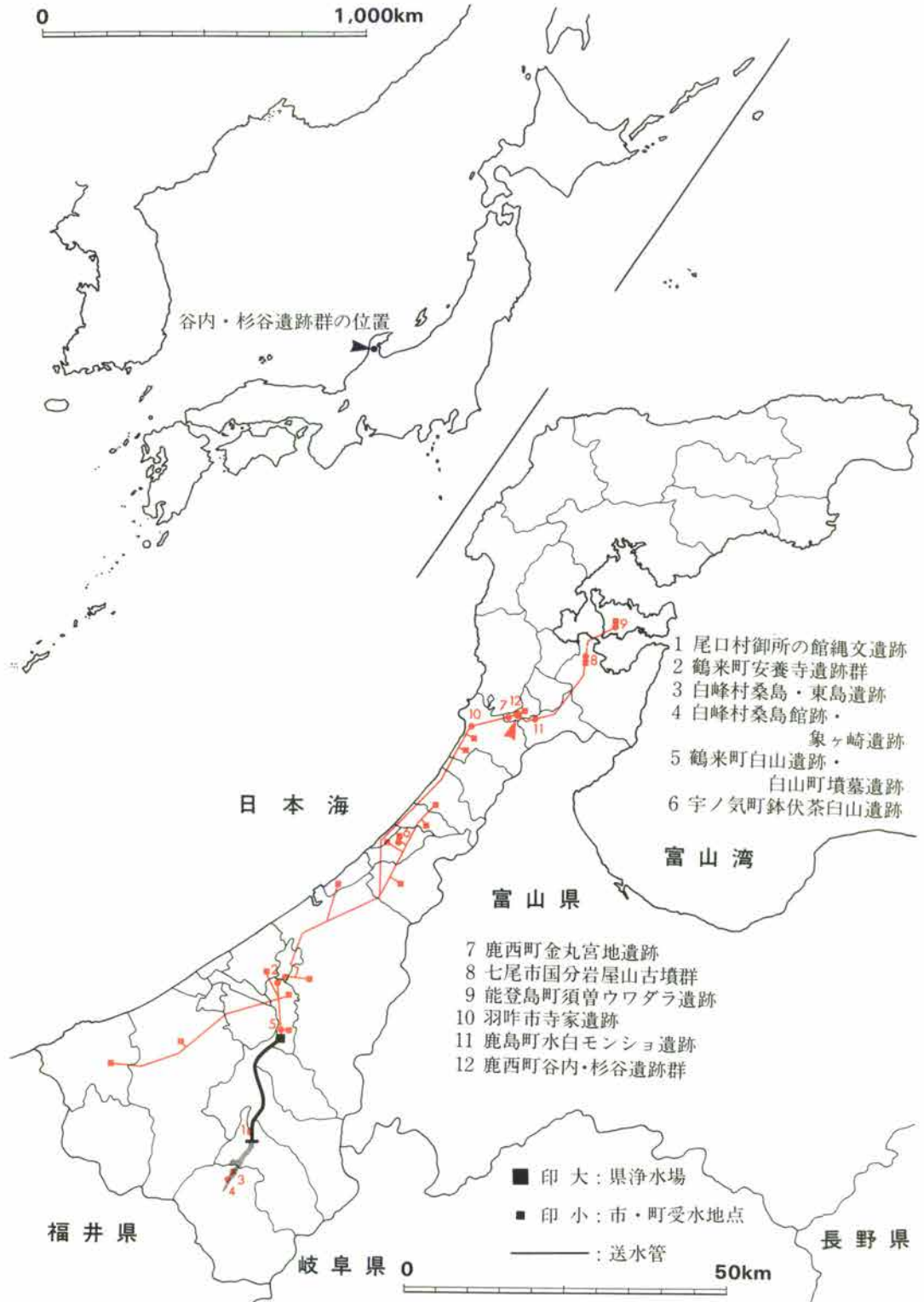
2 第1次拡張事業と埋蔵文化財

事業経過

谷内・杉谷遺跡群発掘調査の直接の原因である県水道用水供給第1次拡張(第二期能登地区供給)事業は、七尾市、羽咋市、鹿西町、能登島町の4市町へ水道用水を供給するもので、昭和56(1981)年3月に申込書を受理、8月の事業認可を経たのち、一時期第一期加賀地区供給事業と並行して実施された。同事業にともなう送水管は、津幡町のポンプ場をでて宇ノ気、七塚、高松、押水、志雄の5町を通りまず羽咋市へ達する。さらに主要地方道七尾羽咋線(通称西往来)下を鹿西町金丸杉谷まで進み、本遺跡群杉谷チャノバタケ遺跡A地区で同町が受水した後、鹿島町を経由し七尾市(岩屋町で受水)から最終受水地点能登島町(須首)へ至るものである。この結果、最北の能登島町では手取川ダムから実に100kmもの距離をへて「霊峰白山の水」を受水することとなった。その経過は以下のとおりである。

- 昭和56(1981)年3月 第二期能登地区：七尾市以下4市町受水申込書受理
- 8月 石川県水道用水供給事業変更(第1次拡張)認可
- 昭和60(1985)年4月 羽咋市給水開始
- 昭和61(1986)年4月 七尾市、能登島町給水開始
- 昭和63(1988)年1月 鹿西町給水開始

第1節 発掘調査にいたる経緯



第1図 石川県水道用水供給事業に係る埋蔵文化財の位置(S=1/1,000,000)

発掘調査

前記事業にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、基本計画をもとに県企業局水道建設課と埋文センターが昭和56(1981)年3月にはじめて協議をおこなっている。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地のいくつかが影響をうけることがわかり、翌昭和56年度からは、県企業局手取川水道事務所能登出張所(昭和56年度)、能登送水工事事務所(昭和57年度～)、送水管理事務所(昭和61年度～)と埋文センターとの間で具体的な協議が続けられ、関係市町水道課、同教育委員会とも随時協議をおこなっていった。

この間、埋文センターからは、埋蔵文化財保護の観点から埋蔵文化財が影響をうける箇所について個別計画の変更を申し入れた。それが主たる要因かどうかは別として、実際基本計画はいくどか見直され、影響を回避することができた箇所もあるが、最終的には県市町教育委員会が、昭和58(1983)年度から平成元(1989)年度までの7年にわたって、5市町9遺跡10件の発掘調査を実施することとなった。以下はその一覧である。表中⑩・⑬～⑱の調査主体は県埋文センター、⑪は七尾市教育委員会、⑫は能登島町教育委員会である。⑫の調査には町教委の派遣申請をうけ、埋文センターが職員を派遣している。

遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	原因者	事業内容
⑩金丸宮地遺跡	鹿西町宮地	S.58. 9.19～10.28	県企業局	送水管埋設
⑪国分岩屋山古墳群	七尾市岩屋町	S.59. 5.17～7.26	七尾市	受水施設建設
⑫須曾ウワダラ遺跡	能登島町須曾	S.59. 6.29～7.14	能登島町	受水施設建設
⑬須曾ウワダラ遺跡	能登島町須曾	S.60. 6.13～6.20	県企業局	送水管埋設等
⑭寺家遺跡	羽咋市寺家町	S.60. 6.3～6.10	県企業局	送水管埋設
⑮水白モンショ遺跡	鹿島町水白	S.60.11.18～12.25	県企業局	送水管埋設
⑯谷内ブンガヤチ遺跡	鹿西町谷内	S.60. 9.25～12.20	県企業局	送水管埋設等
		S.61. 4.23～9.5		送水管埋設等
		S.62. 4.16～5.14		雨水調整池建設
		S.63. 8.29～12.9		ポンプ場建設等
⑰杉谷A古墳群	鹿西町杉谷 ・谷内	H.元. 8.24～12.12	県企業局	ポンプ場建設等
		S.61. 9.8～11.25		送水管埋設等
		S.62. 4.17～5.21		送水管埋設等
		7.11～8.4		送水管埋設等
⑱杉谷チャノバタケ遺跡	鹿西町杉谷	S.63. 4.18～9.2	県企業局	浄水調整池建設等
		S.62. 4.16～7.16		送水管埋設等
		8.3～12.11		浄水調整池建設等
⑲金丸杉谷遺跡	鹿西町杉谷	S.63. 4.18～9.2	県企業局	浄水調整池建設等
		H.元.10.23～11.9		道路補償工事

参考文献

『国分岩屋山古墳群』 七尾市教育委員会 1985

3 第1次拡張事業と谷内・杉谷遺跡群

事前協議と計画変更

鹿西町金丸谷内・杉谷地内での第1次拡張事業の内容は、大きく二つに分けられる。一つは羽咋方向から主要地方道七尾羽咋線(通称西往来)下に埋設されてきた送水管を同地内丘陵部へ導き、将来の水需要に備え裾部にポンプ場、中腹に浄水調整池を建設し、折り返し鹿島方向へ送水管を埋設すること、今一つは県水を鹿西町が受水するための施設を中腹に建設し、そこから下って同町への送水管を埋設することである。

同事業は当初(昭和56(1981)年3月)、東側の杉谷地内から丘陵部へ上がるルートが有力視されていたが、同箇所には周知の埋蔵文化財包蔵地である本遺跡群金丸杉谷遺跡、杉谷A古墳群杉谷ガメ塚古墳(前方後円墳、全長60m)、金丸杉谷川遺跡が所在し、かなりの影響をうけることが予想されたため、埋文センターでは協議の始めから一貫して計画の変更を申し入れていた。特に杉谷ガメ塚古墳は遺存状態もよく、将来の県指定、国指定史跡の候補とも考えられるもので、まづもって回避してほしいとしていた。

上記の当初計画は、昭和57年(1982)年度にはやや西側へと見直され、遅くとも昭和59(1984)年度までにはほぼ現在のルートに落ち着いたものと考えられる。そうした変更が埋文センターの申し入れの結果であるかどうかは判然としないが、いずれにせよ杉谷ガメ塚古墳は影響を免れることとなった。これにたいして埋文センターでは、おそらくは事業計画の変更に備えたものであろうが、県内遺跡詳細分布調査昭和57(1982)年度事業のなかで、当該地区を踏査し谷内ブンガヤチ遺跡などを確認し、金丸杉谷川遺跡などを再確認している。

一方同事業にかかる実際の土木工事は、昭和60(1985)年度七尾市・能登島町給水を目標に、基本測量(昭和56年度)、工事設計(昭和57年度)をへて、用地交渉と並行しつつ昭和58年度から開始され、それにとまなう発掘調査(鹿西町宮地遺跡)も同年度から始まった。昭和59年度には市、町事業として2遺跡(七尾市国分岩屋山古墳群、能登島町須曾ウワダラ遺跡)の発掘調査がおこなわれたが、用地交渉の遅れからか工事とそれにかかる発掘調査の大部分は最終年度に持ち越されることとなり、昭和60年度には小規模なものが多いとはいえ、4件の発掘調査(羽咋市寺家遺跡、能登島町須曾ウワダラ遺跡、鹿島町水白モンショ遺跡、鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡)が埋文センターによって実施され、県企業局は昭和61(1986)年4月、七尾市・能登島町給水を実現している。

このうち本遺跡群谷内ブンガヤチ遺跡は、前年度末までの事前協議により事業に先立って約1,000㎡の発掘調査が必要とされていたのであるが、最終的には約3,800㎡が影響をうけることとなった。また昭和60年当時には確認されていなかった杉谷A古墳群の広がり(円墳4基、方墳7基)や、事業中丘陵部で確認された杉谷チャノバタケ遺跡(約5,700㎡)、さらには事業の進展につれて金丸杉谷遺跡(約630㎡)の調査も必要となっていっ



第2図 第1次拡張事業と谷内・杉谷遺跡群(S=1/10,000)

第1節 発掘調査にいたる経緯

た。その結果、同事業にかかる鹿西町谷内・杉谷地内での発掘調査は、昭和60年度当初の2箇月という調査予定とは掛け離れ、実に30箇月を要することとなり、現地調査の終了は5年後の平成元年度であった。その経過の詳細については次節でふれることとし、以下では遺跡群確認の経緯について簡単にふれておきたい。

遺跡群確認の経緯

谷内ブンガヤチ遺跡は、県内遺跡詳細分布調査昭和57(1982)年度事業によって確認、地表面に散布する土器から古代～中世の集落跡と推定された。遺跡名の谷内は鹿西町金丸(大字)の小字名、ブンガヤチは通称名であるが、遺跡の中心部は実際にはテラダヤチ(寺田谷内)であり、ブンガヤチは東側に隣接する杉谷地内の谷部であることが後に判明する。調査の結果、縄文時代～江戸時代にわたる集落跡であった。

杉谷チャノバタケ遺跡は、昭和61(1986)年杉谷地内丘陵部での工事中に確認された。環濠と推定される遺構から弥生土器が出土し、いわゆる高地性集落が想定されたのである。遺跡名の杉谷は小字名、チャノバタケは通称名である。調査の結果、弥生時代の高地性集落を含め、縄文時代～江戸時代にわたる複合遺跡であった。

杉谷A古墳群(前方後円墳1基、円墳9基、方墳10基、一部は谷内地内に所在)は、昭和60年当時杉谷ガメ塚古墳(前方後円墳、全長60m)他円墳1基が知られているにすぎなかったが、昭和61(1986)年唐川明史氏の精力的な踏査によって杉谷B古墳群とともに確認されたものである。本事業にかかるものは、杉谷チャノバタケ遺跡での環濠確認が契機となっている。61年7月中旬の確認時、遺構が古墳の周溝である可能性を考慮し、周辺の丘陵部でも試掘(7月下旬)をおこない、10基前後の古墳を確認した。調査の結果、前期に属するものを確実に含むものの、所属時期不明のものが少なくなかった。

金丸杉谷遺跡は、昭和32(1957)年杉谷地内での耕地整理中、通称イゲタといわれる水田(金丸井48甲番地)より、土師器壺に内蔵された隆平永宝(延暦15(796)年初鑄)11枚他が出土したことで知られていた。本事業(道路補償工事)にかかり、昭和61(1986)・63(1988)年度に試掘調査を実施し、遺跡の所在範囲を確認した。発掘調査の結果、明確な遺構は検出できなかったものの、弥生時代～中世にわたる集落跡と想定される。

参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 『県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』(昭和56～59年度) 石川県立埋蔵文化財センター 1985
- 古墳文化を学ぶ会 「加賀・能登の古墳測量調査」『石川考古学研究会々誌』 第35号 石川考古学研究会 1992
- 浜岡賢太郎・吉岡康暢 「隆平永宝を包蔵した土師質壺の新例」『石川考古学研究会々誌』 第9号 石川考古学研究会 1965

第2節 発掘調査事業の経過

1 第1次(昭和60(1985)年度)発掘調査

谷内ブンガヤチ遺跡

前年度末までの協議の結果、送水管埋設・管理用道路建設に係り約1,000㎡の発掘調査を実施することとなったが、用地交渉の遅れからか着手は予定より2箇月遅れの9月となった。この間ポンプ場建設に係りさらに約1,700㎡の調査が必要であることが判明したが、単年度による現地調査終了は不可能であるため、緊急度の高い箇所約1,200㎡の終了を目標に調査を進めた。しかし最後まで用地補償未了箇所が残り、立木の伐採も進展しなかったことから、実際に着手できた箇所は約720㎡であり、予想に反して遺構密度の高い集落跡であったことや悪天候も重なって、調査終了箇所は約600㎡であった。

日誌抄

〔9月〕5日

〈25日水 曇、26・27日木・金 晴、28日土 曇時々雨、30日月 晴〉

現地仮設事務所設置、機材搬入、表土除去。

〔10月〕22日

〈1日火 曇時々雨、2～4日水～金 晴〉

調査区南側包含層掘削・遺構検出、グリッド設定。

〈7日月 曇時々雨、8・9日火・水 晴、12・15・16・18・19日土・火・水・金・土 曇〉

標高移動、A-B3～5区遺構検出、B-H6～8区包含層掘削・遺構検出。

〈21～23日月～水 晴、24日木 曇時々雨、25・26日金・土 晴〉

D-E6～8区遺構検出・写真撮影・遺構掘削。

〈28日月 晴、29・30日火・水 曇時々雨、31日木 晴〉

D-E6～8区遺構掘削、H7区包含層掘削、実測、C-H7区包含層掘削・遺構掘削。

〔11月〕20日

〈1・2日金・土 曇時々雨、5～8日火～金 晴〉

実測、A-B3～5区遺構掘削。

〈9・12～14日土・火～木 曇時々雨、19～22日火～金 晴、25・26日月・火 曇時々雨〉

実測、調査区南側拡張・包含層掘削・遺構検出・掘削。

〈27日水 晴、28～30日木～土 曇時々雨・霰〉

調査区北側拡張・遺構検出・掘削。

〔12月〕13日

〈3～6日火～金 晴時々曇、9～11日月～水 曇時々雪〉

遺構掘削、清掃・写真撮影、調査区南側再拡張・遺構検出・掘削、除雪・実測。

〈13日金 曇、14日土 曇時々雨、16～18・20日月～水・金 曇時々雪〉

実測、遺物取上げ、撤収。

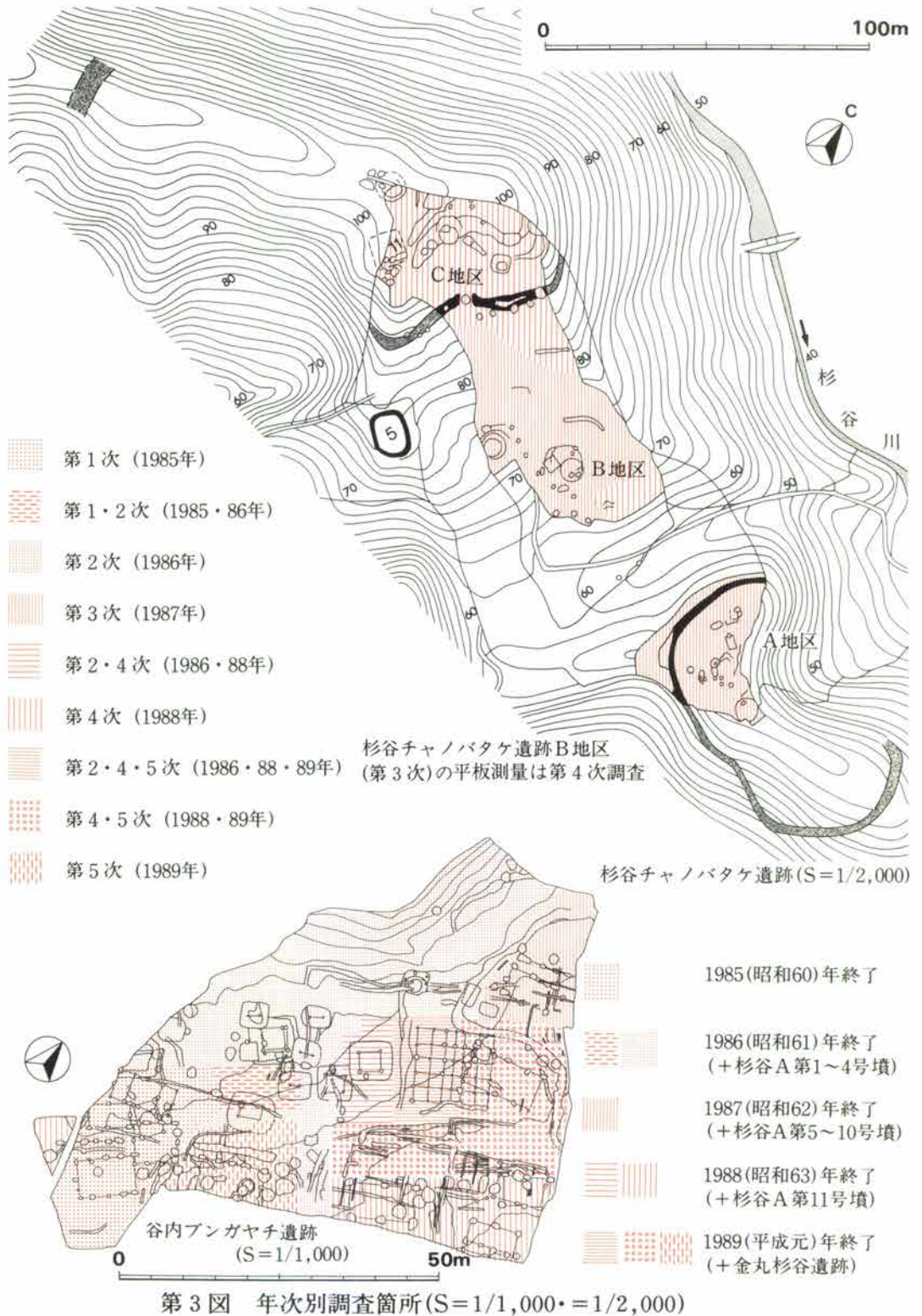
〔現地実働60日、延べ作業員数 516名〕

2 第2次(昭和61(1986)年度)発掘調査

谷内ブンガヤチ遺跡

前年度末までの協議によって、送水管埋設・ポンプ場建設等に係り約3,000㎡の発掘調査を実施することとなったが、家屋の移転が遅れたことや排土置場の確保等から、6月ま

第2節 発掘調査事業の経過



でに着手できた箇所は約1,500㎡であった。その後7月下半期に丘陵部で杉谷チャノバタケ遺跡や杉谷A古墳群が確認されたため(後述)、緊急度の高い送水管埋設・管理用道路建設に係る箇所約1,200㎡について8月末までに終了、以後杉谷A古墳群(1～4号墳)の調査を実施することとなった。

日誌抄

[4月]5日

<18・23～25・30日金・水～金・水 晴>

現地仮設事務所設置、機材搬入、表土除去。

[5月]21日

<1日木 晴、2・6日金・火 曇時々雨、7～9・12・13日水～金・月・火 晴>

表土除去、F-K7・8区遺構検出。

<14～16・19・20日水～金・月・火 曇時々雨、21日水 曇、22日木 晴>

F-J7・8区遺構検出・掘削・写真撮影。

<23・24・27・28日金・土・火・水 晴、29～31日木～土 曇時々雨>

F-J7・8区遺構掘削、実測作業。

[6月]19日

<2～6日月～金 晴、9～13日月～金 晴>

F-J7・8区遺構掘削、I3～6区遺構検出、L-M7区遺構検出。

<16・17日月・火 曇時々雨、18～21・23日水～土・月 曇、24日火 曇時々雨、27日金 晴>

E-M7～9区包含層掘削・遺構・遺構掘削、表土除去・搬出。

[7月]14日

<1～4・7・8日火～金・月・火 曇、9・10日水・木 曇時々雨、11日金 晴>

D-L8～11区遺構検出、H-J9～11区包含層掘削。

<12日土 晴のち雨、14日月 曇、29～31日火～木 晴>

写真撮影、D-L8～11区遺構掘削(15日～28日、作業を中断し丘陵部範囲確認調査実施)。

[8月]18日

<4日月 曇、5日火 曇時々雨、6日水 晴、7日木 曇時々雨、8・9日金・土 晴>

D-J8～11区遺構掘削、J-O10～14区包含層掘削。

<18～22日月～金 晴、23日土 曇時々雨、25～30日月～土 晴>

G-K8～10区遺構掘削、N-P11～14区遺構掘削。

[9月]5日

<1・2日月・火 晴、3・4日水・木 曇時々雨、5日金 晴>

実測、写真撮影。

範囲確認調査

谷内・杉谷地内丘陵部では、昭和61(1986)年春から鹿西町への給水を目指し立木の伐採、雑木の処理、工所用仮設道路の建設、抜根、表土除去等の作業が急ピッチで進められていた。前年度までに埋文センターでは幾度か現地を踏査し埋蔵文化財の確認に努めたが、用地交渉中でもあり立木が繁茂する状態での踏査には自ずと限界があった。それでも年度当初には、最も平野部に近い丘陵平坦面(後の杉谷チャノバタケ遺跡A地区)の削平にあたっては、着手前に確認の試掘をおこないたい旨申し入れていた。同作業は7月15日におこなわれ、いわゆる高地性集落の環濠を確認した。当初は環濠が古墳の周溝である可能性もあったため、谷内ブンガヤチ遺跡の調査を中断し引き続き周辺の丘陵部でも試掘をおこなったところ、さらに杉谷A古墳群に含まれる古墳10基前後を確認したのである。

協議の結果、杉谷A古墳群のうち緊急度の高い箇所(後の1～4号墳)については、谷内ブンガヤチ遺跡の調査を8月末を目安に一旦終了9月から調査に着手、杉谷チャノバタ

第2節 発掘調査事業の経過

ケ遺跡のうち一部道路線形などを変更しなお影響の及ぶ箇所と杉谷A古墳群の残りの箇所については、翌昭和62(1987)年度に調査をおこなうこととなった。

ところが10月22日、春以降抜根、表土除去等が進行していた丘陵中腹(後のB地区南側)の流土中に遺物の散乱を確認、周辺を試掘した結果、同地区とその西側の丘陵最高所(後のC地区)にも埋蔵文化財が所在することが判明したため、翌年度中に丘陵部の発掘調査を完了することは困難となり、事業計画に一層大きな影響が生じることとなった。

日誌抄

〔7月〕6日

〈15日火 曇時々豪雨、17・19日木・土 晴、23日水 曇、24・28日木・月 晴〉

杉谷チャノバタケ遺跡A地区・杉谷A古墳群試掘調査。

〔10月〕2日

〈22日水 曇時々雨、29日水 曇、30日木 晴〉

杉谷チャノバタケ遺跡B地区遺物採集・試掘調査。

〔11月〕1日

〈7日金 晴、10・11日月・火 曇時々雨、12日水 晴〉

杉谷チャノバタケ遺跡B地区試掘調査・平板測量。

杉谷A古墳群

7月下旬の試掘調査では3基を想定したが、調査により方墳2基(第1・2号墳)、円墳2基(第3・4号墳)、他に中世の方形周溝1基が確認された。

日誌抄

〔9月〕11日

〈2日火 晴、4日木 曇時々雨、5・8・9日金・月・火 晴〉

調査区清掃、第1・2号墳平板測量。

〈10日水 曇時々雨、19日金 曇、20日土 曇時々雨〉

第2～4号墳平板測量、第1号墳表土除去・遺構検出。

〈24～27日水～土 晴、29・30日月・火 曇〉

第1・2号墳表土除去・遺構検出・掘削、第3号墳平板測量・表土除去・遺構検出。

〔10月〕17日

〈2日木 曇時々雨、3・6・7日金・月・火 曇、8日水 曇時々雨、9日木 晴〉

第3号墳平板測量・表土除去、第1・2号墳遺構掘削。

〈13～15日月～水 晴、17日金 曇時々雨、18・20・21日土・月・火 晴〉

第2～4号墳表土除去・遺構検出・掘削、第1～3号墳清掃・写真撮影。

〈22日水 曇時々雨、23・27日木・月 晴、28日火 曇〉

第3・4号墳遺構掘削、実測、平板測量。

〔11月〕13日

〈5日水 晴、6日木 雨、7日金 晴、11日火 曇時々雨、12日水 晴〉

実測、平板測量。

〈13日木 曇時々雨、14・18～22・25日金・火～土・火 晴〉

実測、平板測量、写真撮影、撤収。

〔現地実働 132日、延べ作業員数 2,036名〕

3 第3次(昭和62(1987)年度)発掘調査

谷内ブンガヤチ遺跡

前年度末までの協議によって、調査必要箇所約1,900㎡(当時)のうち、雨水調整池建設に係り約200㎡の発掘調査を実施することとなった。調査は全期間杉谷チャノバタケ遺跡

A地区、杉谷A古墳群(第5号墳)発掘調査と並行しておこなわれた。

日誌抄

[4月]12日

<14・17・20～24日火～金・月～金 晴、27・28・30日月・火・木 晴>

現地仮設事務所設置、機材搬入、表土除去、包含層掘削、遺構検出・写真撮影、遺構掘削。

[5月]8日

<1・6～8・11日金・水～金・月 晴、12・13日火・水 曇時々雨、14日木 曇>

遺構掘削、実測、写真撮影。

杉谷A古墳群

送水管理設・管理用道路建設に係り方墳4基(第5～7・10号墳)、円墳2基(第8・9号墳)の発掘調査を実施することとなったが、調査は7月下旬を除きほとんどの期間谷内ブンガヤチ遺跡、杉谷チャノバタケ遺跡発掘調査と並行しておこなわれた。第10号墳については西側約二分の一が民地となったが、前年度の協議合意にもとづき、復旧することを条件に借地し調査することとなった。

日誌抄

[4月]

<17・22・28・30日金・水・火・木 晴>

第5号墳清掃、写真撮影、表土除去。

[5月]5日

<1日金 曇、7・8日木・金 晴、11日月 曇、12・13日火・水 曇時々雨>

第5号墳表土除去・遺構検出・掘削。

<14・15・18日木・金・月 曇、19～21日火～木 晴>

第5号墳表土除去・遺構検出・掘削、清掃・写真撮影、実測、平板測量。

(5月22日～7月10日 杉谷チャノバタケ遺跡発掘調査実施)

[7月]15日

<11日土 晴、13・14日月・火 曇時々雨、16・17・20日木・金・月 晴>

調査区清掃・写真撮影、第6～8号墳表土除去・遺構検出・掘削。

<21日火 晴、22日水 曇、23・24日木・金 晴、27日月 曇、28日火 晴>

第6～10号墳表土除去・遺構検出・掘削、写真撮影、実測、平板測量。

<29・30日水・木 晴、31日金 曇時々雨>

第9・10号墳表土除去・遺構検出・掘削、写真撮影、実測、平板測量。

[8月]2日

<3日月 晴、4日火 曇>

第9・10号墳平板測量。

杉谷チャノバタケ遺跡

調査必要箇所約5,700㎡のうち、C地区約2,000㎡を除くA(受水施設等建設予定地、約1,500㎡)・B(浄水調整池等建設予定地、約2,200㎡)2地区約3,700㎡の発掘調査を実施することとなったが、全期間を工事並行でおこなったため方法に制約があったこと、一部谷内ブンガヤチ遺跡、杉谷A古墳群発掘調査と並行しておこなわれたこと、検出された遺構・遺物が予想以上に多かったことなどから、B地区の一部(約200㎡)が未着手となかったほか、B地区大半の平板測量も次年度へ繰り延べることとなった。

日誌抄

[4月]

<16・17・20～24・28・30日木・金・月～金・水・木 晴>

A地区清掃、表土除去、遺構検出。

第2節 発掘調査事業の経過

[5月] 6日

<1・15・18日金・金・月 曇、19～22日火～金 晴>

A地区遺構検出。B地区谷流土掘削。

<25日月 曇、26日火 曇時々雨、27～29日水～金 晴>

A地区表土除去、遺構検出。

[6月] 23日

<1日月 晴、3日水 曇時々雨、4・5・8日木・金・月 晴>

A地区遺構検出、清掃、写真撮影。

<9日火 曇時々雨、10～13・15～19・22～27・29・30日水～土・月～金・月～土・月・火 晴>

A地区遺構掘削、実測。B地区谷流土掘削・遺構検出。

[7月] 9日

<1・2日水・木 晴、3・6日金・月 曇時々雨、7～11日火～土 晴>

A地区遺構掘削、実測、写真撮影、平板測量、掘削工事着手。B地区谷部遺構検出。

<13～15日月～水 曇時々雨、16日木 晴>

A地区東側法面写真撮影、断面実測。B地区谷部遺構掘削、写真撮影、実測。

(週末の掘削工事によって、A地区東側法面に堅穴の断面が露出した。調査では全く検出できなかったもので、自責の念に駆られる。残存部は崩落の恐れがあり県有地(前年度の計画変更により影響範囲外となった箇所)でもあったため、協議の結果緊急に断面の実測のみをおこない、後日(11月上旬)完掘(第18号堅穴)することとなった。)

[8月] 10日

<6・7日木・金 曇、11・12日火・水 晴>

B地区表土除去・搬出。

<24・25日月・火 晴、26日水 曇時々雨、27・28・31日木・金・月 晴>

B地区杭打(グリッド設定)、B-C4・5区流土掘削、遺構検出。

[9月] 16日

<1～3・7・8日火～木・月・火 晴、10日木 曇時々雨、11日金 曇>

B地区B-C3～6区流土掘削、遺構検出・掘削・実測、平板測量。

<16・17日水・木 曇、21・22日月・火 晴、24・25・28～30日木・金・月～水 曇>

B地区B-D4～6区流土掘削、遺構検出・掘削・実測。

[10月] 18日

<1・2・5日木・金・月 晴、6日火 曇時々雨、7～9日水～金 晴>

B地区B-E4～6区流土掘削、遺構検出・写真撮影・掘削、排土搬出。

<13～15日火～木 曇、16日金 曇時々雨、21～23日水～金 晴>

B地区B-C7区流土掘削、遺構検出、第20・21号堅穴掘削・実測。

<26～29日月～木 晴、30日金 曇時々雨>

B地区B-C8～10区流土掘削、第20・21号堅穴実測。

[11月] 18日

<4日水 曇、5日木 曇時々雨、6・9～13日金・月～金 晴>

B地区B-E4～9区遺構検出・掘削。A地区第18号堅穴遺構検出・掘削・写真撮影・実測。

<16～20・24～26日月～金・火～木 晴、27日金 曇時々雨、30日月 晴>

B地区遺構検出・掘削・写真撮影。実測・平板測量。20日チマキ状炭化米塊出土。

[12月] 9日

<1・3～5日火・木～土 曇時々霰・雪・雨、7～11日月～金 晴>

B地区実測、撤収。

[現地実働 151日、延べ作業員数 3,158名]

4 第4次(昭和63(1988)年度)発掘調査

杉谷チャノバタケ遺跡

前年度未了のB地区の平板測量および未着手約200㎡の発掘調査に続き、C地区(浄水調整池建設予定地)約2,000㎡の発掘調査を実施した。調査の進捗をはかるため後者の調査には写真測量を導入したが、一方で第2号環濠、大型土坑(貯蔵穴)、焼失堅穴などが検出

され調査終了が予定より一箇月程遅れた。

日誌抄

〔4月〕7日

〈18日月 曇時々雨、19・20日火・水 晴、21日金 曇時々雨〉

現地仮設事務所設置、機材搬入、B地区表土除去、遺構検出・掘削・写真撮影、平板測量。

〈25日月 曇、26・27日火・水 晴〉

B地区平板測量(B地区終了)。C地区表土除去。

〔5月〕16日

〈9日月 晴、10・11日火・水 曇時々雨、13日金 曇、16～20日月～金 晴〉

表土除去、遺構検出、谷流土掘削。

〈23日月 曇時々雨、24～26・30・31日火～木・月・火 晴〉

表土除去、流土掘削、遺構検出・掘削。

〔6月〕22日

〈1日水 曇、2・3日木・金 曇時々雨、6・7日月・火 晴〉

表土除去、流土掘削、遺構検出・掘削。

〈8・10日水・金 曇時々雨、13～17・20～23日月～金・月～木 晴〉

表土除去、流土掘削、遺構検出・掘削、谷流土掘削。

〈27日月 曇時々雨、28～30日火～木 曇〉

遺構検出・掘削。

〔7月〕20日

〈4日月 曇時々雨、5～7日火～木 曇、8日金 曇時々雨〉

表土除去、遺構検出・掘削、谷流土掘削。

〈12・13日火・水 晴、14・15日木・金 曇、18・19日月・火 曇〉

遺構掘削、谷流土掘削、第2号環濠谷部検出(14日)・掘削。

(前年度、杉谷A古墳群第5号墳調査終了後、送水管埋設・管理用道路建設に係り同古墳の北西側を暫定的に法切りする必要が生じた。同地区は畑作により段状を呈していたが、基本的には急斜面であることからC地区の遺構は延びていないと判断し、6月上旬に工事立会いを実施した。若干の遺物は認められたものの遺構は確認できなかったが、13箇月後、谷部で検出された第2号環濠が同法面最上部へ延びていくことが判明した。法面が環濠にはば並行していたために断面では遺構と確認できず、やや厚めの流土が堆積しているものと考えていたのである。もはや危険を伴うため掘削することができず、法面を精査するに止めざるを得ない状況であったが、精査の結果新たに環濠を切って大型土坑(貯蔵穴)が3基確認された。返す返すも無念であった。)

〈20日水 曇時々雨、21・22日木・金 曇、23・25日土・月 曇時々雨〉

遺構掘削、第2号環濠谷部・谷部第1号集石掘削。

〈26・28・29日火・木・金 曇〉

遺構掘削、第2号環濠尾根部検出・掘削。

〔8月〕23日

〈1～4・6・8～12・17・18日月～木・土・月～金・水・木 晴〉

遺構検出・掘削、第2号環濠検出・掘削、調査区清掃。

〈19日金 晴のち雷雨、20・22・23日土・月・火 曇、24～26日水～金 曇時々雨〉

遺構掘削、調査区清掃、写真測量。

(25日測量の準備をしていたが、富山空港が雨のためヘリコプターが離陸できず順延。26日富山空港よりヘリコプターをトレーラーで陸送し測量、直後雨となる。)

〈27・29～31日土・月～水 晴〉

第36号竪穴掘削・実測。

〔9月〕2日

〈1・2日木・金 晴〉

第36号竪穴掘削・実測。

杉谷A古墳群

杉谷チャノバタケ遺跡C地区調査中の4月下旬、西側尾根部で埋葬施設を検出し第11号墳としたが、周溝は確認できなかった。埋葬施設の約二分の一が民地となるため、県送水

第2節 発掘調査事業の経過

管理事務所を通して所有者に完掘したい旨申し入れたが、同意が得られず断念した。

谷内ブンガヤチ遺跡

杉谷チャノバタケ遺跡の調査が遅れたため、必要箇所約1,800㎡のうち雨水調整池・ポンプ場建設予定地に係る約1,450㎡の終了を目標に着手したが、遺構密度が特に高い地区であったため、うち約750㎡が未了となった。

日誌抄

〔8月〕

〈29～31日月～水 晴〉

西側拡張調査区表土除去・流土掘削。

〔9月〕12日

〈1・2日木・金 晴、5・8日月・木 曇時々雨、9日金 晴〉

西側拡張調査区流土掘削・遺構検出・掘削、J-K 8・9区流土掘削・遺構検出。

〈13・14・16・17日火・水・金・土 晴、26～30日月～金 曇〉

西側拡張調査区写真撮影・実測、J-M 8・9区流土掘削・遺構検出・掘削・実測。

〔10月〕20日

〈3～5日月～水 晴、6日木 曇時々雨、7・11日金・火 晴〉

表土除去・搬出、J-M 3・4・N-Q 7～9区流土掘削・遺構検出。

〈12～14日水～金 曇時々雨、17～20日月～木 曇、21日金 曇時々雨〉

J-P 2～6区流土掘削・遺構検出・掘削・実測。

〈24～27日月～木 晴、28日金 曇時々雨、31日月 晴〉

K-Q 3～6区流土掘削・遺構検出・掘削・実測。

〔11月〕14日

〈1日火 晴、2日水 曇時々雨、4日金 晴、5日土 曇時々雨、8日火 晴〉

L-P 3・4区流土掘削・遺構検出・掘削・実測。

〈14～17日月～木 曇時々雨、21・22日月・火 曇、28～30日月～水 曇時々雨〉

N-P 2～4区流土掘削・遺構検出・掘削・実測、写真撮影、J-P 2～4区一部埋め戻し。

〔12月〕7日

〈1・2日木・金 晴、5・6日月・火 曇時々雨、7・8日水・木 晴、9日金 曇時々雨〉

N-P 2～4区実測、撤収。〔現地実働 143日、延べ作業員数 3,100名〕

5 第5次(平成元(1989)年度)発掘調査

谷内ブンガヤチ遺跡

年度当初の調整によって後半の着手となったが、前年度未了の約750㎡(A地区)に未着手約350㎡(B地区)の計約1,100㎡の調査を実施した。10月下旬～11月上旬は、金丸杉谷遺跡の調査と並行しておこなわれた。B地区はクレーンによる写真測量を実施した。

日誌抄

〔8月〕6日

〈24・25日木・金 曇、28～30日月～水 曇時々雨、31日木 晴〉

現地仮設事務所設置、機材搬入、N-Q 7～9区流土掘削・遺構検出・実測。

〔9月〕14日

〈1・4日金・月 曇、5・6日火・水 曇時々雨、8・11・12日金・月・火 曇〉

A地区L-Q 5～9区流土掘削・遺構検出・実測。

〈13日水 曇時々雨、14・21・25日木・木・月 曇、28日木 曇時々雨、29・30日金・土 曇〉

A地区J-Q 5～9区流土掘削・遺構検出・実測。

〔10月〕19日

〈2・3日月・火 曇、4日水 曇時々雨、5～7日木～土 曇、11・12日水・木 曇時々雨〉

A地区J-Q5~9区流土掘削・遺構検出、実測。
 <16~18日月~水 曇、19日木 曇時々雨、20・23~26・30・31日金・月~木・月・火 晴>
 A地区清掃・写真撮影、実測、L-Q5・6区埋め戻し。
 (10月23日~11月7日は金丸杉谷遺跡の調査と並行。)
 [11月]16日
 <1日水 曇時々雨、2・6日木・月 晴、7~9日火~木 曇時々雨、16・17日木・金 晴>
 A地区L-N7~9区埋め戻し、実測。B地区表土除去・流土掘削・遺構検出。
 <20・21日月・火 曇、22日水 曇時々雨、24・27日金・月 曇、28~30日火~木 雨・霰>
 A地区M-Q8・9区埋め戻し、N-Q8・9区実測(終了)。B地区遺構掘削。
 [12月]9日
 <1日金 曇時々雨、2・4~7日土・月~木 晴、8日金 曇時々雨、11・12日月・火 曇>
 B地区実測、写真撮影、写真測量(7日)、撤収。〔現地実働 64日、延べ作業員数 1,468名〕

金丸杉谷遺跡

補償(道路舗装)工事に係り、昭和61(1986)年10月、同63(1987)年8月の二度にわたり試掘調査を実施した結果、約630㎡の発掘調査が必要となり、谷内ブンガヤチ遺跡第5次発掘調査と全期間並行しておこなわれた。

日誌抄

[10月]
 <23~26・30・31日月~木・月・火 晴>
 表土除去・搬出、1~3区流土掘削、1区写真撮影・平板測量。
 [11月]
 <1日水 曇時々雨、2・6日木・月 晴、7日火 曇時々雨>
 2~5区流土掘削・写真撮影・平板測量。〔現地実働 10日〕

第1次調査から第5次調査までの各遺跡の調査面積、期間、作業日数、延べ作業員数は以下のとおりである。

遺 跡 名	面積㎡	期 間	日数	員 数	備 考
①谷内ブンガヤチ遺跡	600	S.60. 9.25~12.20	60	516	120㎡調査未了
② "	1,200	S.61. 4.23~ 9. 5	82	1,265	300㎡調査未了
③ "	200	S.62. 4.16~ 5.14	20	418	
④ "	700	S.63. 8.29~12. 9	53	1,149	750㎡調査未了
⑤ "	1,100	H.元. 8.24~12.12	54	1,239	
小 計	3,800		269	4,587	
⑥杉谷A古墳群	-	S.61. 9. 8~11.25	41	632	方墳2基、円墳2基
⑦ "	-	S.62. 4.17~ 8. 4	22	460	方墳4基、円墳2基
⑧ "	-	S.63. 4.18~ 9. 2	-	-	方墳1基
小 計	-		63	1,092	方墳7基、円墳4基
⑨杉谷チャノバタケ遺跡	-	S.61. 7.15~11.12	9	139	範囲確認調査
⑩ "	3,500	S.62. 4.16~12.11	109	2,280	
⑪ "	2,200	S.63. 4.18~ 9. 2	90	1,951	
小 計	5,700		208	4,370	
⑫金丸杉谷遺跡	630	H.元.10.23~11. 9	10	229	
谷内・杉谷遺跡群	10,130		550	10,278	+方墳7基、円墳4基

6 出土品整理及び報告書刊行

出土品整理及び報告書刊行事業は、現地調査と並行して主に(株)石川県埋蔵文化財整理協会(～昭和63年度)・(株)石川県埋蔵文化財保存協会(平成元年度～)への委託事業として実施したが、平成2年度からは前年度の協議合意にもとづき平成5年度までの4箇年継続事業として実施することとなった。ところが事業量が予想以上に多く計画どおりの実施が困難であったため、平成4年度に再度協議をおこなった結果、事業をさらに1年延長し報告書刊行を平成6年度とすることで合意に達した。出土品整理事業の年次別の内容は以下のとおりであるが、下記以外の作業については総て直営事業として実施した。

作業名\作業年度	S.60	S.62	S.63	H.元	H.2	H.3	H.5	合計
遺物の洗浄	22	67	50	81	—	—	—	220箱
遺物の記名・分類・接合	22	67	—	100	35	—	—	224箱
土器の復元	—	35	—	70	57	26	—	188点
土器の実測・実測図の浄書	—	350	—	100	620	960	—	2,030点
金属・木・石器の実測・浄書	—	25	—	100	100	153	6	334点
遺構実測図の浄書	—	—	—	—	—	260	70	300枚



写真1 遺物の洗浄(昭和62年度)



写真2 遺物の記名・分類・接合(昭和60年度)



写真3 金属・木・石器の実測(昭和62年度)



写真4 遺構実測図の浄書(平成5年度)

第2章 位置と地理的環境

第1節 谷内・杉谷遺跡群の位置

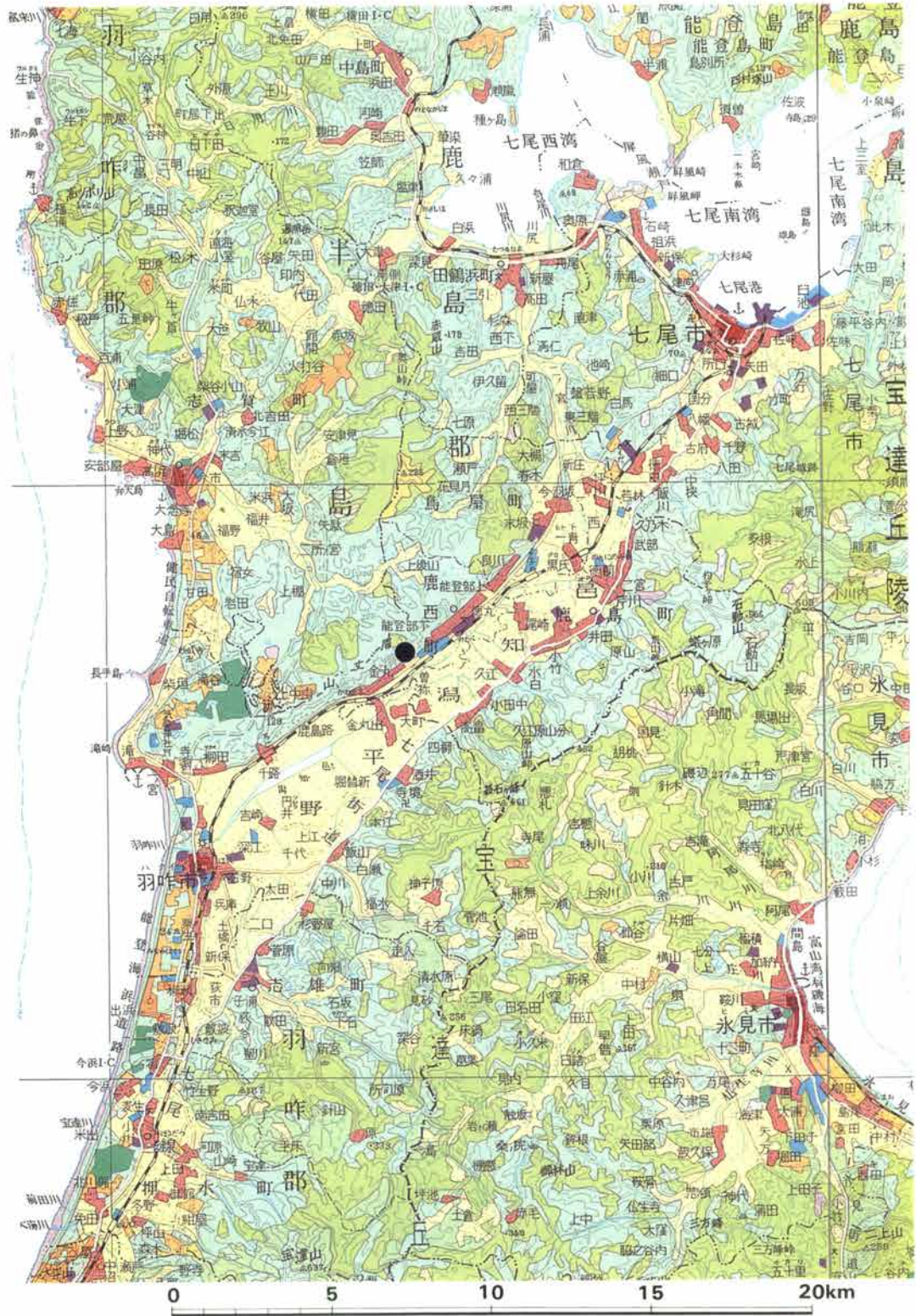
人口117万余人、面積4,185km²、8市27町6村よりなる石川県は、北陸3県の中程に位置し、東は富山県、南東は岐阜県、南西は福井県に接し、北および北西は日本海に面している。明治4(1871)年の廃藩置県によって成立した金沢県・大聖寺(だいしょうじ)県・他から石川県・七尾(ななお)県・他(明治5(1872)年)を経て、旧能登・加賀二国よりなる現在の県域が確定したのは明治16(1883)年であるが、このうち県北西部、県土の5割弱を占める能登地域は、日本海に大きく突出した能登半島に、北から珠洲(すず)、鳳至(ふげし)、鹿島、羽咋(はくい)の4郡を構成している。

谷内・杉谷遺跡群は、その中央部やや南西寄り鹿島郡鹿西町に所在する。人口5千余人の鹿西町は、面積14.33km²と能登地域では最も狭小であるが、人口密度は比較的高く、北東は鹿島郡鳥屋(とりや)町、南東は鹿島郡鹿島町、西は羽咋郡志賀(しか)町、南西は羽咋市の1市3町に接している。昭和31(1956)年、能登部(のとべ)町と金丸村が合併して成立したもので、町名は鹿島郡の西部に位置することに困っている。その名のとおりの遺跡群は、町の南西部を占める金丸(旧金丸村、現鹿西町の大字)谷内・杉谷(ともに小字)地内にまたがって展開する。

金丸村は、加賀藩から金沢藩、金沢県、七尾県を経て、明治5(1872)年石川県に所属、明治22(1889)年の市制町村制施行後も、1字1村として能登部町との合併まで存続した。北東から杉谷、谷内、沢(さわ)、宮地(みやじ)、横町(よこまち)、正部谷(しょうぶだに)の6集落よりなり、藩政時代には藩の米蔵が立ち並び、潟岸に置かれた波止場は邑知(おうち)潟から日本海を経て大野港へ至る御用船ルートの起点であったというが、近代以降の村の産業(就業)構造は、農業(水稲)に次いで次第に製造業(機業)が優勢となっていった。前者は邑知潟周辺の低湿地を基盤としていたが、後者は「能登上布」(現県指定無形文化財)を中核とした隣接能登部町の産業構造の影響を受けたものである。事実、遺跡群が所在する杉谷・谷内の両集落は最も能登部町に近く、他の集落に比較して製造業従事者の占める割合が高かったことが知られている。

両集落はともに小規模な扇状地(谷部平地)に立地するが、遺跡群は両集落間の平地(丘陵裾部)とその背後の丘陵部に所在し、一部両集落にも重複しているものと推定される。具体的には、丘陵裾部では谷内地内に谷内ブンガヤチ遺跡、杉谷地内に金丸杉谷遺跡、丘陵部では杉谷地内に杉谷チャノバタケ遺跡、杉谷・谷内両地内にまたがって杉谷A古墳群が所在している。

第2節 発掘調査事業の経過



第4図 谷内杉谷遺跡群(●印)の位置(S = 1/200,000)

第2節 遺跡群の地理的環境

石川県の地形は、面積比にして山地(49%)・丘陵(29%)が8割弱をしめ、台地・段丘は5%、低地は17%と少ない。南部の加賀地域では、南東部に戸室・白山・大日の3火山地と加越(医王・富樫・加賀・能美)山地が北東から南西方向に連なり、その北西側に津幡・森本、能美・江沼の両丘陵、さらに潟埋積平野、(手取川)扇状地、砂丘が展開する。北部の能登地域では、北西部に能登(宝立・高洲・鳳至)山地が北東から南西方向に連なり、その南東側に能登丘陵(奥能登丘陵、能登島、中能登丘陵)、さらに邑知低地帯を挟んで石動・宝達山地が連なっている。

谷内・杉谷遺跡群が立地する邑知低地帯と中能登丘陵(眉状山(びじょうざん))をいま少し詳しくみると、前者は両側あるいは片側が断層によって画された凹地が埋積作用によって埋め立てられた能登地域最大(長さ30km、幅2~4km)の低地で、北東部は石動(せきどう)・宝達(ほうだつ)山地から流入する二ノ宮川などの河川によって形成された複合扇状地であるのに対し、南西部の邑知潟周辺は潟埋積平野といえ、さらに南西側には日本海沿岸屈指の規模を誇る海岸砂丘の一部をなす羽咋砂丘が展開している。

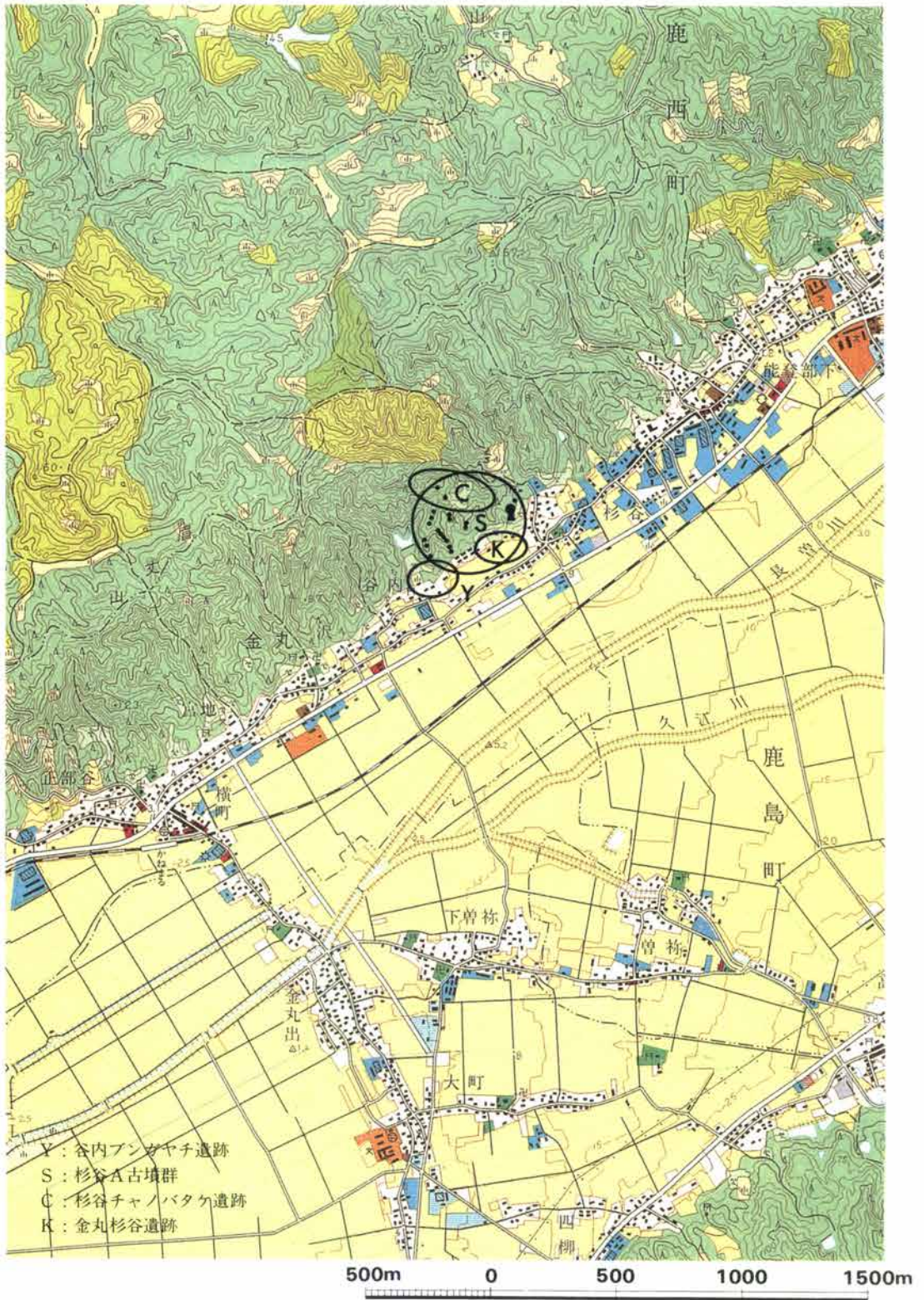
邑知低地帯の北西側に連なる後者の眉状山は、鳥屋町西部から羽咋市北部までのびる長さ16km、幅4kmの山塊で、最高所は雨の宮古墳群が所在する鹿西町西馬場(にしばんば)の雷ヶ峰で標高は約188mを測る。その名のとおり山容は優しいものの、分水嶺が低地帯側によっていることから、北西側に比して南東側斜面は概して急で、河川も細流が多く扇状地も小規模である。また基盤となる船津花崗岩類(ジュラ紀)とその上をおおう礫岩・砂岩(中新世中期・前期)が脆弱であるため、土砂の崩落により裾部には谷部を中心に部分的に厚い二次堆積が認められ、丘陵部においても地形の変容が著しい。

谷内・杉谷遺跡群のうち、谷内ブンガヤチ遺跡と金丸杉谷遺跡は邑知低地帯北西縁辺部(眉状山系裾部)に所在し、杉谷川などがつくりだした小規模な扇状地(更新世後期~)上に立地する。土地利用上は水田・畑地・山林・一般住宅地区であり、遺跡の南東側には邑知低地帯そのものが広がる。また杉谷チャノバタケ遺跡と杉谷A古墳群は眉状山系の南東側丘陵に所在し、前者は丘陵平坦面から斜面一部谷部にかけて、後者は丘陵尾根部および平坦面に立地する。土地利用上は山林(針葉樹林・竹林)が卓越しており、遺跡群の北西端杉谷チャノバタケ遺跡C地区からは邑知低地帯が一望できる。

参考文献

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 『金丸村史』 | 金丸村史刊行委員会 1959 |
| 『角川日本地名大辞典』 | 17 石川県 角川書店 1981 |
| 「北陸の丘陵と平野」『アーバンクボタ』 | No.31 株式会社クボタ 1992 |
| 『石川県地質誌』 | 石川県・北陸地質研究所 1993 |

第1節 谷内・杉谷遺跡群の位置



第5図 遺跡群の位置 (S=1/25,000)

第3章 谷内ブンガヤチ遺跡

第1節 遺跡群と遺跡・調査の概要

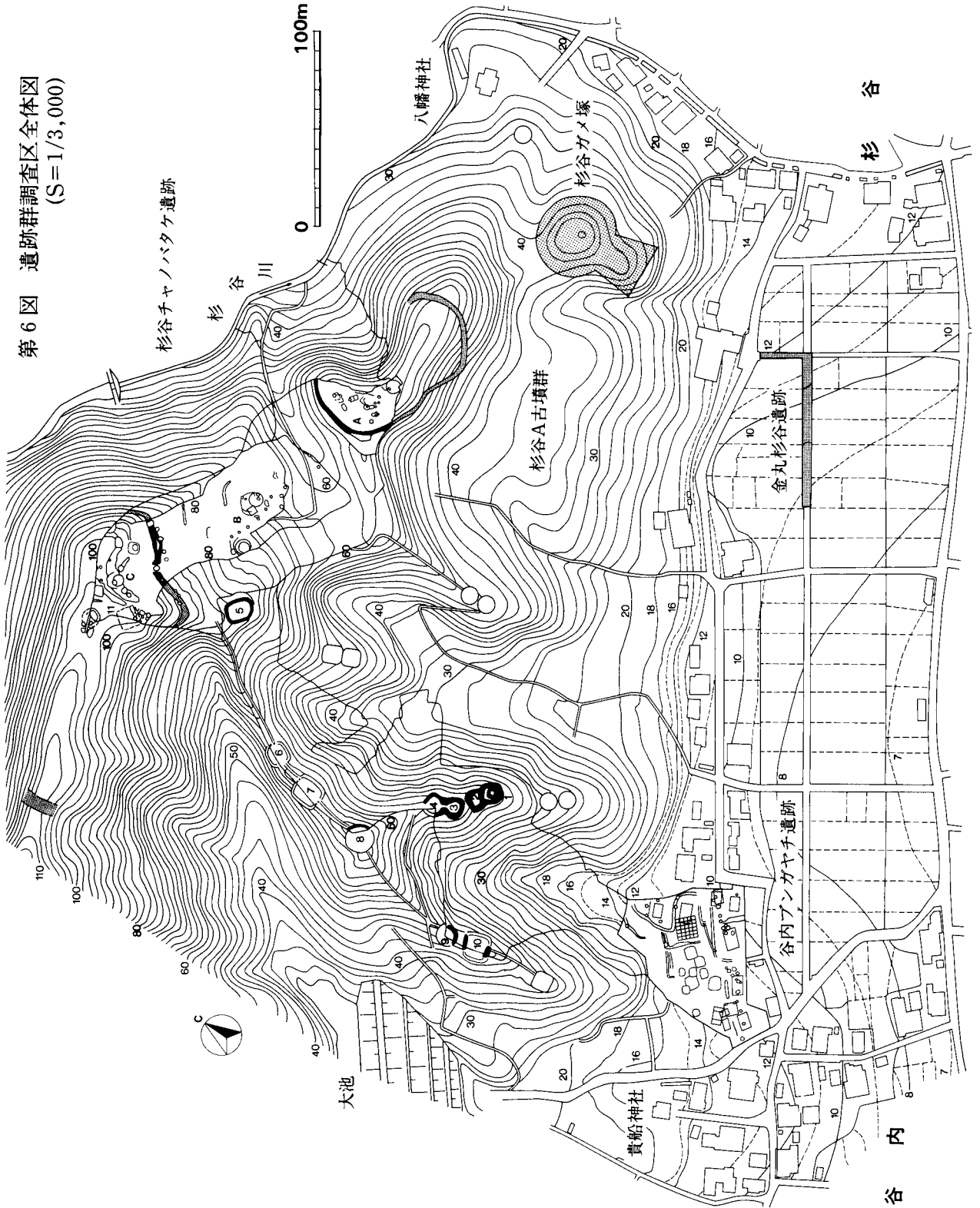
1 遺跡群の概要(第6図)

石川県水道用水供給事業に起因する鹿島郡鹿西町金丸谷内・杉谷地内所在の谷内・杉谷遺跡群(谷内ブンガヤチ遺跡、杉谷チャノバタケ遺跡、杉谷A古墳群、金丸杉谷遺跡：遺跡群の名称は、本書刊行にあたっての利便性を考慮した便宜的なものであるが)発掘調査によって検出された遺構と遺物の概要は以下のとおりである。

検出された遺構は、竪穴式建物27基(谷内ブンガヤチ遺跡10基、杉谷チャノバタケ遺跡17基)、竪穴状遺構7基(谷内ブンガヤチ遺跡1基、杉谷チャノバタケ遺跡6基)、掘立柱式建物21基(谷内ブンガヤチ遺跡19基、杉谷チャノバタケ遺跡2基)、柱列2基(谷内ブンガヤチ遺跡)、井戸34基(谷内ブンガヤチ遺跡)、室3基(谷内ブンガヤチ遺跡)、土器埋納小穴1基(谷内ブンガヤチ遺跡)、小穴群2基(谷内ブンガヤチ遺跡1基、杉谷チャノバタケ遺跡1基)、墓13基(谷内ブンガヤチ遺跡1基、杉谷A古墳群12基)、地下式墳1基(杉谷チャノバタケ遺跡)、落とし穴10基(杉谷チャノバタケ遺跡)、環濠2基(杉谷チャノバタケ遺跡)、集石1基(杉谷チャノバタケ遺跡)、貯蔵穴16基(杉谷チャノバタケ遺跡)、(貯蔵穴)上屋4基(杉谷チャノバタケ遺跡)、段状遺構13基(杉谷チャノバタケ遺跡)、土坑52基(谷内ブンガヤチ遺跡28基、杉谷チャノバタケ遺跡24基、杉谷A古墳群1基)、溝数十基(谷内ブンガヤチ遺跡)、小穴多数(谷内ブンガヤチ遺跡、杉谷チャノバタケ遺跡)であり、縄文時代(落とし穴他)、弥生時代(竪穴式建物、掘立柱式建物?、環濠、貯蔵穴、(貯蔵穴)上屋、段状遺構他)、古墳時代(竪穴式建物、古墳11基他)、奈良～平安時代(竪穴状遺構、掘立柱式建物他)、中世～近世(掘立柱式建物、柱列、井戸、室、土器埋納小穴、小穴群、墓、地下式墳他)におよぶ。

実測図掲載遺物は、土器類2,007点(谷内ブンガヤチ遺跡1,334点、杉谷チャノバタケ遺跡602点、杉谷A古墳群9点、金丸杉谷遺跡62点)、石器類230点(谷内ブンガヤチ遺跡78点、杉谷チャノバタケ遺跡150点、杉谷A古墳群1点、金丸杉谷遺跡1点)、木器類86点(谷内ブンガヤチ遺跡83点、杉谷チャノバタケ遺跡3点)、金属器類56点(谷内ブンガヤチ遺跡48点、杉谷チャノバタケ遺跡5点、杉谷A古墳群1点、金丸杉谷遺跡2点)、炭化米塊2点(杉谷チャノバタケ遺跡)、粘土塊1点(谷内ブンガヤチ遺跡)の計2,382点を数え、遺物の総量(土壌サンプル・出土炭化材他を含む)は、遺物整理箱(LⅡ型コンテナバット他)にして250箱(谷内ブンガヤチ遺跡158箱、杉谷チャノバタケ遺跡86箱、杉谷A古墳群1箱、金丸杉谷遺跡5箱、収蔵可能なもののみ)におよぶ。

第6図 遺跡群調査区全体図
(S=1/3,000)



2 遺跡・調査の概要(第7・8図)

本遺跡は眉丈山系から邑知低地帯へと派生した丘陵の裾部に立地し、標高は8(第16号井戸)から16m(第25号土坑)を測る。調査区の中央が北西側から下りてくる尾根部にあたっていて、それを挟んで両側に開口する谷部(中央)を遺跡の一応の限界と考えると、北東-南西方向の広がりは約100mとなる。北西-南東方向のそれについては、西側の谷奥への主として弥生時代の、南西側の低地部への主として中世~近世の遺構展開が、いずれも厚い流土の堆積とおそらくは切り盛りをともなった度重なる整地によって不分明な点が多いが、60~80mといったところであろうか。

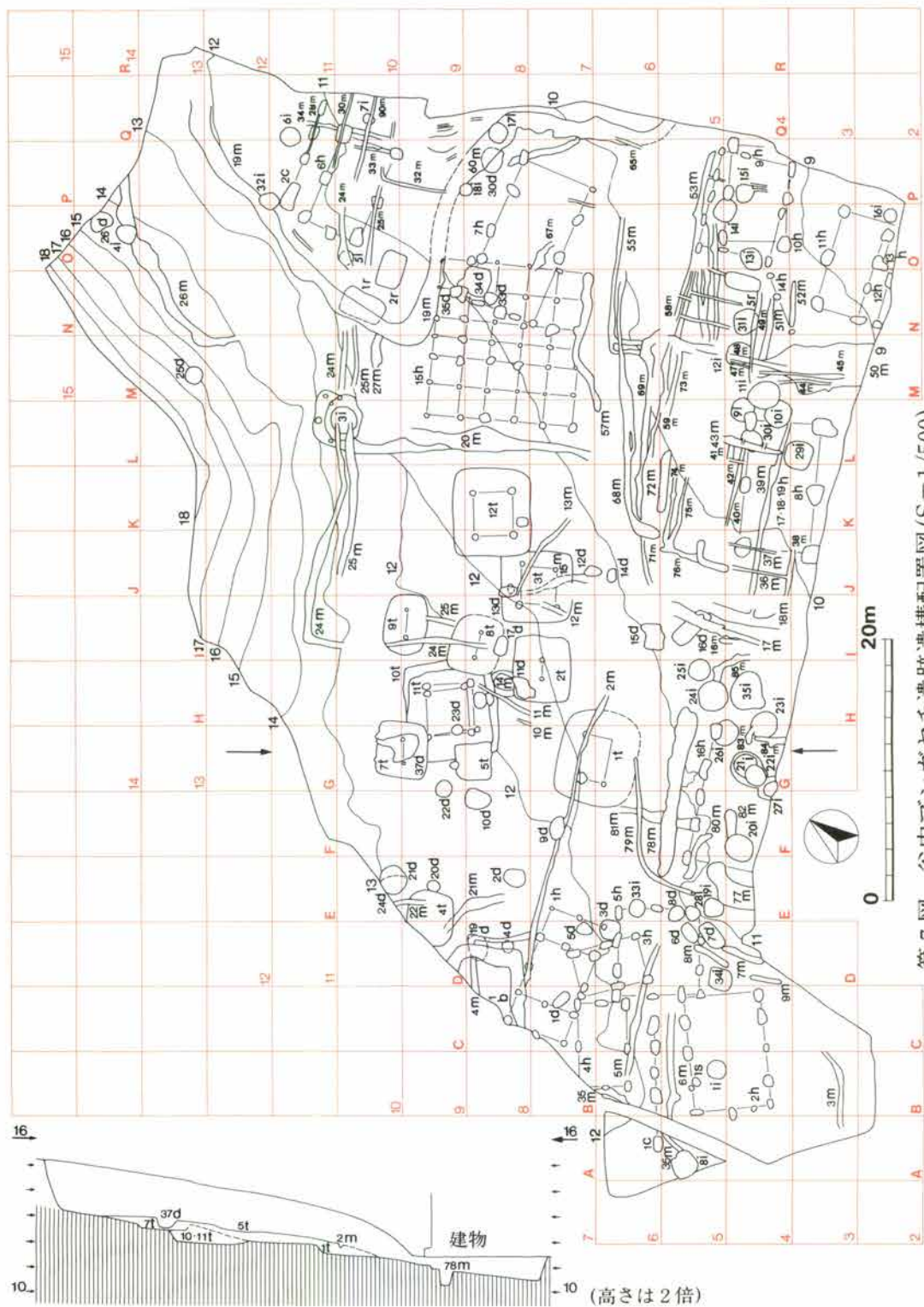
発掘調査の着手は昭和60(1985)年9月で、同年は12月までに約600㎡を終了している。翌昭和61(1986)年度から平成元(1989)年度まで、約1200、約200、約700、約1100㎡と継続して調査を実施(合計面積は約3800㎡)した。調査は(第1次調査区の)地形にあわせて任意に5m格子を設定して進めた。北西-南東方向をアルファベット列、北東-南西方向をアラビア数字列とし、ともに南から北へ昇らせ、各区画を南側格子杭名で呼称した。第5次最終調査区の写真測量によれば、G5〔X: +105,427.82 Y: -28,055.91〕、G6〔X: +105,431.09 Y: -28,059.69〕であり、G(5-6)列(北西方向)は座標北から西へ49度8分15秒振れていた。

遺跡の存続期間は縄文時代~近世におよび、なかでも弥生時代後期後半~古墳時代初頭、奈良時代~平安時代前期、中世後半~近世前半の大きくは三時期に顕著な遺構展開をみせるのであるが、調査区を小規模に分割せざるを得なかったこと(第1章第2節参照)から、各時期の遺構の広がりを面として充分捉えることことができなかった。丘陵側から平野側へと順に調査が可能であったならという思いを、報告にあたって改めて強くしている。

検出された遺構は、竪穴式建物10基(弥生時代後期後半~古墳時代初頭)、竪穴状遺構1基(平安時代前期)、掘立柱式建物19基(奈良時代、中世~近世他)、掘立柱式建物にともなう柱列2基(中世)、井戸34基(中世~近世)、室3基(中世?)、土器埋納小穴1基(中世)、小穴群1基(中世)、墓1基(中世)、土坑52基(弥生時代後期後半~中世?)、溝数十基、小穴多数である。土器埋納小穴は掘立柱式建物にともなう可能性が高く、小穴群は掘立柱式建物の内部の、竪穴状遺構は鍛冶関連の施設である。溝は平安時代前期に属し竪穴状遺構に関連する規格性のあるもの、中世~近世に属する屋敷地の区画溝を含み、小穴には掘立柱式建物(および竪穴式建物)の柱穴が含まれる可能性が高いが、調査上の制約(前述)から確定できなかった。

出土遺物には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・中世~近世の(一部近代以降に属するものを含む)陶磁器・土製品、石器・石製品、木器・木製品、金属器・金属製品・粘土塊があり、それぞれ1334点(YP1~1334)、78点(YS1~78)、83点(YW1~83)、48点(YM1~48)、1点(YC1)の計1544点を実測し、第2号土坑出土炭化米約60

第1節 遺跡群と遺跡・調査の概要



第7図 谷内ブンガヤチ遺跡遺構配置図(S=1/500)

粒(原色図版第6参照)とともに報告する。遺物の総量は、遺物整理箱にして158箱(うちLⅡ型コンテナバット131箱、大甕や柱根など収納不能なものを除く)におよび、本遺跡群出土遺物総量の6割以上を占めている。

主な遺構の概要は以下にあげたが、その他の遺構を含め詳細は次節以下時代ごとの報告を参照されたい。

竪穴式建物(弥生時代後期後半・弥生時代終末・古墳時代初頭)

	平面形	長径m×短径m	時期		平面形	長径m×短径m	時期
第1号	隅丸方	(7.3) × (5.8)	終末	第8号	隅丸方	(4.5) × (3.6)	初頭
第2号	長方形	5.0 × 4.45	終末	第9号	小判形	4.5 × 3.3	終末
第3号	方形	5.5 × 5.35	後期後半	第10号	隅丸方	7.7 × (7.1)	終末
第4号	隅丸方	(4.1) × 3.6	初頭	第11号	隅丸方	(6.9) × (6.1)	終末
第7号	隅丸方	4.3 × 3.7	初頭	第12号	隅丸方	6.75 × 6.0	初頭

掘立柱式建物(奈良時代：1号、中世～近世：2～13・15～19号)

	規 模			規 模	
第1号	2間	4.4～4.6×4間	9.2～9.4m	第10号	1間 4.6～4.7×2間 7.6m
第2号	4間	5.7～6.0×5間	8.4～8.9m	第11号	1間 4.8×2間 7.3m
第3号	1間	3.4～3.6×2間	5.2～5.3m	第12号	?間 × 3間 7.0m(～)
第4号	2間	3.6×2間	7.0m	第13号	?間 × 1間 2.3m～
第5号	3間	6.3×2間	6.5m	第14号	(1)間 × 3間 4.5m
第6号	1間	4.4×2間	7.4m	第16号	1間? × 4間 10.0m
第7号	4間	5.7×4間	11.2～11.7m	第17号	1間 5.6～5.9×2間 9.6m
第8号	1間	5.4～5.6×2間	9.8～10.0m	第18号	1間 5.9×2間 9.2m
第9号	3間	5.4～5.5×4間	7.3～7.5m	第19号	1間 6.0×2間 7.7m

第15号	6間 11.75～11.95m×5間 11.10～11.20m以上総柱(本遺跡最大規模の建物)
------	---

竪穴状遺構

	平面形	規 模	備 考
第5号	方形	長径 2.78 × 短径 2.74m 最大深度 9cm	平安時代前期の小鍛冶遺構



第8図 谷内ブンガヤチ遺跡全体図(S=1/300)



第1節 遺跡群と遺跡・調査の概要

土器埋納小穴(中世)

	平面形	規 模	備 考
第1号	楕円形	長径 0.67 × 短径 0.52m 最小深度 11cm	土師器皿大小41枚一括出土

井戸(中世～近世)

	検出面径m	内径cm	深度・磔高m		検出面径m	内径cm	深度・磔高m
第1号	1.55×1.50	40～45	0.74 0.54	第19号	1.63×1.63	65～70	0.47 0.47
第3号	3.70×2.73	85～100	3.43 2.17	第20号	2.31×2.00	75	0.96 0.91
第4号	1.55×1.45	55～70	2.04 2.04	第21号	2.38× —	75～85	1.93 1.42
第5号	1.15×1.05	——	0.81 —	第22号	2.07×1.87	80	1.47 0.89
第6号	1.62×1.50	50～75	1.21 0.9	第23号	2.20×1.94	65～100	1.20 0.68
第7号	0.90×0.80	0～40	0.87 0.83	第24号	2.50×2.35	60～100	2.17 1.57
第8号	2.05×1.90	55～75	0.92 0.92	第25号	1.79×1.63	45～75	1.03 0.93
第9号	1.73×1.73	40～	1.26 1.00	第26号	1.98×1.84	80～85	1.69 1.03
第10号	2.12×1.80	40～80	1.45 1.29	第27号	1.97× —	50～70	1.77 0.72
第11号	2.27×2.08	60～80	1.72 1.18	第28号	1.19× —	55～60	0.44 0.44
第12号	2.08×1.71	70	0.77 0.77	第29号	2.38×2.18	——	0.78 —
第13号	2.32×1.70	80～90	1.32 1.32	第30号	1.82×1.57	——	1.22 —
第14号	1.80×1.56	50～90	0.85 0.82	第31号	2.05×1.84	——	0.74 —
第15号	1.52×1.33	50～85	0.94 0.92	第32号	1.55×1.30	——	——
第16号	1.20×1.20	50～	0.18 0.18	第33号	1.38×1.23	——	——
第17号	1.56×1.45	25～70	0.86 0.78	第34号	2.09×1.90	——	——
第18号	1.10×1.10	30～50	0.62 0.62	第35号	3.08×2.40	——	——

室(中世?)

	平面形態	長径m×短径m×深度cm		平面形態	長径m×短径m×深度cm
第1号 第2号	長方形 長方形	3.40 × 2.16 × 35 2.88 × 1.83 × 25	第5号	隅丸長方	2.77 × 1.22 × 47

墓(中世)

	辺m × 幅m × 深度cm	備 考
第1号	5.85～ 0.88～1.18 ～25	一辺4m程度の方形部を巡る周溝(東側二分の一を検出)、南東側の溝底に小穴5基

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

1 概要(第7・8図)

弥生時代～古墳時代の遺構は、概ね南北方向に走る標高12mの等高線の前後1mを中心に、調査区の中央から西側にかけて多く分布する。北および南端は中世～近世に属する遺構を主体とするが、それらが基盤とする土層の堆積は比較的新しいものとみられ、弥生時代～古墳時代にはより深い谷地形を形成していたものと考えられる。なお遺構密度の低い北東および東側は、中心的な区域とは考えにくいものの、中世以降に屋敷地として整地されていることから削平をうけ消滅した遺構もいくらかはあろう。

検出された主な遺構は、竪穴式建物10基(第1～4・7～12号)、土坑20基(第1～8・10・12～15・17・19～22・24・30号土坑、可能性のあるものを含む)、溝10基(第4・7～9・14・15・21・35・51・52号、可能性のあるものを含む)。第14号溝の遺構図は第3節参照)である。このほかに弥生時代～古墳時代に属する可能性のある掘立柱式建物および小穴があるが、前者は第3節(第14号掘立柱式建物)で、後者は遺構外出土土器とともに第4節(P86004・86023・86033・86063・86119)で報告する。

竪穴式建物は調査区の中央から西側にかけて所在するが、両者の間には幅10m前後の帯状(北西方向から南東方向)の空間地がある。同箇所には弥生時代～古墳時代の遺物を大量に包含する流土が比較的厚く堆積しており、当該時期(以前)には小規模な鞍部が形成されていたものとみられる。土坑は竪穴式建物の分布域に重複(やや範囲は広がるが)して所在するが、調査区南側にやや離れて(第6～8号)所在するもの、北東側に単独(第30号)で所在するものもある。溝も半数近くが竪穴式建物・土坑分布域に重複しているが、南西側(第35号)、南側(第7～9号)および東側(第51・52号)にも所在する。

本節では弥生時代～古墳時代の遺構から出土した土器・土製品413点(YP1～413)、石器・石製品5点(YS7～10・21、実測図および観察表は第5節参照)を報告(個々の土器の詳細は節末の観察表を参照)するが、図化しなかった石製品(石核・剝片・台石)、炭化米粒(第2号土坑出土)については写真図版を参照されたい。以下竪穴式建物、土坑、溝の順に報告する。

2 竪穴式建物(第9～15・19～30・133～135)

第1号竪穴式建物

竪穴式建物群の南端(F・H-6・7区)に位置する。北側には約1.1m離れて第2号竪穴式建物が所在する。検出面前後の一部を1985年に、遺構本体を1986年に調査した。北側で東西方向に走る第2号溝(古代)と交錯するが、流土(遺物包含層)を挟んでおり直接的な切り合いはない。東側は現況建物下で損壊していた。

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

平面形は隅丸長方形(7.3×5.8m前後)と推定され、検出面からの深さは北西側壁で最大20cmを測る。壁際に幅28～45cm、床面からの深さ4～13cmの周溝が巡るほか、支柱穴としてP1～3(径79～85、44～54、35～37cm、床面からの深さ51、21、57cm、P1-2、P1-3間は3.05、1.75m)、P1-2間で土坑(径1.49×1.28m、深さ14cm)を検出した。埋土は上部に(竪穴廃棄後の)暗褐色砂質土が堆積し、以下周溝(濁暗茶褐色粗砂)・土坑(炭粒を含んだ濁褐色砂質土)・小穴(P4:濁暗褐色砂質土)埋土が、竪穴南側を中心に堆積する下部埋土(褐色砂質土:6層、明褐色砂質土:7層、黄褐色砂礫:8層)を切り込んでいる。下部埋土が竪穴構築にかかる整地土と考えられることから、南側床面は地山(掘削)面より上位(最大20cm程度)にあったことになる。

遺物の出土は少量で、土器6点(YP1～6、1・2・6:床面付近、4:P2、5:床面)を実測し、埋土中より鉄石英(赤玉石)の剥片1点(26g)を得たとどまる。遺構の所属時期は、YP1・4を根拠に(やや心許ないが)弥生時代終末と考えておきたい。

第2号竪穴式建物

竪穴式建物群の中央やや東側(H・I-7・8区)に位置する。南側に第1号、北側に西から第11・10・8・3号竪穴が1～2mの距離をおいて近接する。検出面前後の一部を1985年に、遺構本体を1986年に調査した。北側に第11号土坑(古代)およびその基盤となる整地土が重複するが、流土(遺物包含層)を挟んでおり直接的な切り合いはない。西側で先行する第14号溝を切っている。

平面形は隅丸方形(4.45×5.0m)、検出面からの深さは北西側壁で最大25cmを測る。周溝は(南および東側では検出に失敗したが)全周するものと考えられ、幅20～40cm、床面からの深さは最大10cmを測る。支柱穴としてP1-2(径28～33、41～45、床面からの深さ24、18cm、P1-2間は1.40m)を検出した。埋土は上位に暗褐色砂質土、中位に褐色砂質土が堆積し、以下周溝埋土((暗)茶褐色砂質土)が下位埋土(濁黄褐色砂質土)を切り込んでいる。下位埋土は竪穴構築にかかる整地土と考えられ、本来の床面は地山(掘削)面より最大で10cm程度高い。本竪穴からは多量の遺物が出土したため、取り上げは上部(上位埋土にほぼ対応する)、中部(中位埋土上部にほぼ対応する)、下部(中位埋土下部にほぼ対応する)に分け、床面および竪穴内の小穴(支柱穴を含む)出土の大形破片については出土状況を図化した。遺物は概ね北西壁(上位長辺)直下から南東壁(下位長辺)中央にかけて分布し、南および東側隅では少ない。

土器では上部10点(YP12～20・37)、中部6点(YP21～26)、下部(床面)37点(YP28～36・38～65)を実測した。下部出土土器のうち、YP34は支柱穴P2、YP51はP2および小穴P4からも破片が出土、YP40とYP41は同一個体の可能性がある。他に竪穴(周溝)を切り込む小穴(P3)出土品1点(YP27)をあわせて掲載した。石器では台石(YS21:S2地点)1点を実測し、他に図化しなかったがS1地点出土品も台石(683g)であろう。下部出土土器には、YP27のように後出遺構に属するものや、下位埋土(整地土)出土品を分離しな

かったため、(第14号溝(弥生時代後期後半)を切っている)本遺構構築以前の土器が混入している可能性(このほうが高い)があるが、大形破片については概ね弥生時代終末に属し、本遺構の所属時期(下限)を表すものと考えられる。

半数以上が完形もしくは図上完形品であるが、竪穴内で使用されていたものとしては多すぎることから、竪穴廃棄(主柱抜き取り)後さほど時間を置かず北西側から一気に廃棄された土器群と考えられる。人為的な埋め戻しについては判然としないが、本竪穴に隣接ししかも若干後出する第11号竪穴(弥生時代終末)との併存が考えにくいことからその可能性は否定できない。土器群の組成は、有孔鉢(YP53)を含み甕(11点:31%)、壺(12点:33%)を主体とするなど、本遺跡の弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて大量の土器が出土した第2・10・30号土坑に共通する要素をもっており、当該時期の(集落内の)土器廃棄の一類型を構成するものと考えられる。

第3号竪穴式建物

竪穴式建物群の東側(I・J-7・8区)に位置する。南西側に約1m離れて第2号竪穴が近接し、西側に第8号竪穴が(おそらくは)ほぼ接している。調査は1986年。上部に小穴・第12・13号溝(いずれも古代)、第13号土坑が重複し、前者の下部は本遺構の壁・埋土上部に達している一方、床面では先行する第15号溝を検出した。北側隅は第12号竪穴に切られている(隣接するK-8区(南東端)遺構検出作業中(1986年)に確認)が、調査時には本遺構の北側が立木伐採未了区域であったため、切り合いを想定できないまま輪郭の不明瞭な同部分を不用意に掘削したもので、後出する第12号竪穴の壁は、1988年の調査の際本竪穴床面で検出した周溝から推定した。

平面形は方形(5.5×5.35m)、検出面からの深さは北西側壁で最大35cmを測る。周溝は南側でしか検出できなかったが、幅16~24、床面からの深さは最大4cmを測る。主柱穴としてP1~4(径48~63、約40、35~38、約40cm、床面からの深さ28、28、17、9cm、P1-2、P2-4、P4-3、P3-1間はそれぞれ3.02、2.60、2.85、2.90m)、P1-2間と北西側壁と間(やや南西によった箇所)で平面長方形の二段掘りの土坑(屋内貯蔵穴:径100×57、深さ36cm、坑底と上段の比高18cm)を検出した。埋土は上位に淡褐色砂質土、中位に褐色砂質土が堆積し、以下周溝(地山土混褐色砂質土)・小穴(黄茶褐色砂質土、暗褐色砂質土)埋土が下位埋土(黄褐色砂質土、黄褐色細砂)を切り込んでいる。下位埋土は竪穴構築にかかる整地土と考えられ、本来の床面は地山(掘削)面より最大で15cm程度高い。黄褐色砂礫を埋土とする第15号溝は、下位埋土および本遺構の基盤層下で検出された。

遺物は北西壁際から中央にかけて一定量の出土をみた。取り上げは上部(上位埋土にはほぼ対応する)、中部(中位埋土上部にはほぼ対応する)、床面(中位埋土下部にはほぼ対応する)に分け、土器では上部~中部20点(YP66~84・93)、床面7点(YP85~88・90~92)、土坑1点(YP89)を実測し、石器は上部で管玉1点(YS7)を得ている。また図化しなかつ

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

たが鉄石英(赤玉石)の石核が上部(583g)および土坑(1252g)から1点ずつ出土している。完形品に乏しいため廃棄時に遺棄されたものとは考えにくい、大形の破片を含んでいることもあり、単なる流入ではなく上位(北西側)から竪穴へ投(廃)棄されたものと考えたい。(床面)出土土器から、本遺構の所属時期は弥生時代後期後半である。

第4号竪穴式建物

竪穴式建物群(および調査区)の西端(D-9・E-9・10区)に位置し、西側の一部は調査区外である。北東側に所在する第7号竪穴からは8.5m程離れている。調査は1986年。北側で第22号溝に切られ、北東側で第20号土坑をわずかに切っている。床面および本遺構の基盤層下で第21号溝を検出した。

平面形は隅丸長方形(4.1×3.6m、長径は推定)、検出面からの深さは北西側壁で最大20cmを測る。北側壁際の二箇所(周溝状の細長い落ち込み(長さ50および80、幅10～15、床面からの深さを3cm前後)が認められたが全周はしない。支柱穴としてP1(床面からの深さ20cm)を考えたが、対応するものを検出できなかった。埋土は上部に褐色砂質土、下部に中央から南東側壁にかけて、範囲は特定できなかったものの礫を含んだ黒色の炭粒層が堆積する。

遺物の出土は少なく土器5点(YP7～11)を実測したにとどまるが、YP8・9・11の3点はいずれも(ほぼ)完形品である。11(壺)は北西壁に据え置かれるような状態で、8(台付鉢)と9(鉢)は上記炭粒層からそれぞれ出土しており、前者は竪穴内に遺棄されたもの、後者は竪穴廃棄時に投(廃)棄されたものであろうか。これらの土器から、本遺構の所属時期は古墳時代初頭と考えられる。

第7号竪穴式建物

竪穴式建物群の北西側(G・H-9・10区)に位置する。東側は先行する第10・11号竪穴の西側隅と重複するが、流土(遺物包含層)を挟んでおり直接的な切り合いはない。調査は1986年。上部には第37号土坑および小穴(いずれも古代)とその基盤となる整地土が重複し、遺構下部は一部本竪穴の床面にまで達している。

平面形は隅丸長方形(4.3×3.7m)、検出面からの深さは北西側壁で最大15cmを測る。西側隅から北西側中央にかけて周溝(長さ220、幅14～30、床面からの深さは最大7cm)が認められたが全周はしない。支柱穴としてP1-2(径30～34、38、床面からの深さ13、35cm、P1-2間は1.75m)を検出した。埋土は褐色砂質土の単層、遺物の出土は少ない。

埋土中より出土した土器6点(YP94～99)を実測したほか、図化しなかったが同じく埋土中より台石1点(831g)を得ている。本遺構の所属時期は、土器が古相を呈しているのが気になるが、第10号竪穴に後出することから古墳時代初頭と考えたい。

第8号竪穴式建物

竪穴式建物群の中央やや北側(H・I-8・9区)に位置する。調査は1986年。上部に小穴(古代)とその基盤となる整地土および中世以降の第24・25号溝が重複し、前者の下部

の一部は本遺構の床面に達している。南西側で第10・11号竪穴を切っているほか、北西側に約2m離れて第9号竪穴、確定はできないものの南側に約1m離れて第2号竪穴、東側にほぼ接して第3号竪穴が所在する。南東部で重複関係にあるとみられる第17号土坑との切り合いは確認できなかった。

東および南東側のプランを把握できなかったが、平面形は隅丸長方形(4.5×3.6m)と推定され、検出面からの深さは北西側壁で最大20cmを測る。同壁中央に周溝(長さ180、幅33~42、床面からの深さは最大13cm)が認められたが全周はしない。支柱穴としてP1-2(径10、24、床面からの深さ16、15cm、P1-2間は1.9m)を検出したが、前者(P1)は上部から切り込んでいる可能性があり不安が残る。中央やや南東よりで検出した黒褐色土を埋土とする二段掘りの小穴(P3:径99×83、深さ21cm、上段の深さ10cm)は、本竪穴にともなわない可能性もある。埋土は褐色砂質土の単層、遺物の出土は少ない。

埋土から出土した土器3点(YP100~102)と、P3から出土した土器1点(YP103)を実測した。本遺構の所属時期は、第7号竪穴同様第10号竪穴に後出することを重視し、古墳時代初頭と考えておきたい。

第9号竪穴式建物

竪穴式建物群の北側(I・J-9・10区)に位置する。調査は1986年。上部に小穴(古代)とその基盤となる整地土および中世以降の第24号溝が重複するが、直接的な切り合いはない。南西側に約1m、南東側に約2m離れて第10号竪穴、第8号竪穴が所在する。

平面形は小判形(ないしは隅丸長方形、4.5×3.3m)、検出面からの深さは最大35cmを測るが、基盤となる地山(黒灰色粘質土、黄褐色粘土、黄褐色土)が湿潤あるいは軟弱なためか、構築時に黄色粘土ブロックを含んだ茶褐色土を下部に入れ整地しているため、床面は掘削面より最大15cm高い。全周する周溝(幅23~43cm、床面からの深さは15cm(掘削面)前後)、支柱穴P3-4(径35、27、床面からの深さ39、27cm、P3-4間は2.05m)、南東側壁中央の小穴(P5:径38、床面からの深さ32cm、長辺が壁に平行する上部を整地土中で検出できなかったとすれば屋内貯蔵穴(の下部)の可能性が残る)が床面から切り込んでいる。周溝中では、断面V字状の小穴(長径10cm前後、溝底からの深さ10~20cm)が7箇所(以上)、床面中央やや北西よりでは、略方形(115×120cm)の焼土・炭化物面(最大厚2cm)がそれぞれ認められ、前者は板壁を固定した痕跡かと推定される。なお、竪穴中央整地土下で検出された黒色粘質土を埋土とする方形の小穴(104×80cm、深さ11cm以上)は、本遺構に先行するものであろう。埋土は全体に褐色土(調査時は上部埋土として扱った)、小穴P5に炭化物を多く含んだ褐色土・炭粒を含んだ淡茶褐色土、周溝に地山土を含んだ褐色土が堆積する。遺物の出土は少なく、調査時に下部埋土として扱った整地土以下からはほとんど出土していない。

土器は埋土(上部)出土6点(YP104・106~110)と床面出土1点(YP105)を実測した。本遺構の所属時期は、105に根拠を求めるよりなくやや不安が残るが、弥生時代終末と考

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

えられ、その場合隣接する第11号堅穴に先行することになる。

第10号堅穴式建物

堅穴式建物群の中央やや北西側(G-8・9、H-8～10、I-8・9区)に位置する。床面で検出した第11号堅穴と西側および支柱穴P1を共有しており、同堅穴から建て替え拡張されたものである。調査は1986年。上部には第5号堅穴(状遺構)・第37号土坑・第11号溝・小穴およびその基盤となる整地土(いずれも古代)、第7・8号堅穴(古墳時代初頭)が重複しているが、第8号堅穴以外は流土・遺物包含層を挟んで直接的な切り合いはない。北東側に約1m、南東側に約1.5m離れて第9号堅穴、第2号堅穴がそれぞれ所在する。南東側で第14号溝を切っている。

平面形は隅丸長方形(7.7×7.1m、南東側壁中央の立ち上がりが不明瞭であったため短径は推定値)、検出面からの深さは北西壁で最大30cmを測る。(おそらくは)全周する周溝(幅18～46cm、床面からの深さは最大14cm)、礫と炭粒を含んだ褐色土を埋土とする支柱穴P1-4(径50～59、41～46、42、54～66、床面からの深さは39、44、30、43cm、P1-2、P2-4、P4-3、P3-1間は3.90、3.65、3.60、3.90m)、南東側壁際で(おそらくは隅丸長方形の二段掘りの)土坑1(屋内貯蔵穴：(下段の)径95×67、深さ49cm)を検出した。支柱穴P1・P2には、東および南東側にそれぞれ支柱抜き取り穴(支柱穴底との比高23および27cm)が掘削されている。埋土は上部から下部へ暗褐色土、茶褐色土、淡茶褐色土、周溝には地山土を含んだ淡茶褐色土、土坑1には淡褐色土(上位)、淡黄灰色土(中位、やや粘質)、暗灰褐色土(下位、やや粘質)が堆積し、土坑1の上位埋土と中央よりの壁との間隙を濁黄褐色土が縦方向に薄く埋めている。埋土に層序の乱れがみられないことから、自然堆積とまではいえないにせよ廃棄直後の人為的な埋め戻しの可能性は低いものと考えられる。遺物の出土は少ないが、床面北側を中心に大形破片が得られている。

土器は埋土出土9点(YP111～114・116・118・120～122)、床面出土3点(YP115・117・123)、支柱穴(P2)出土1点(YP119)の計13点を実測し、他に図化しなかったが検出面で輝石安山岩製(?)の剥片1点(84.7g)を得ている。床面北側隅で近接して出土した117(小形甕)、123(鉢)、およびやや南東によった壁際で正位で潰れた状態で出土した115(広口壺)は、口縁(端)部や肩部あるいは体部の一部を欠くなどの不具合があるため、あるいは本来の機能は望めなかったかもしれないが、堅穴内の隅に遺棄されたものと考えられることから、ある程度使用可能な予備的な器物として廃棄時まで保持されたものであろう。これにたいして支柱穴P2出土の119は、胴部下半の二分の一を欠くため使用に耐えない。支柱抜き取り後に(その意図は別として)投棄されたものと考えておきたい。本遺構の所属時期は、床面および支柱穴出土土器から弥生時代終末と考えられる。

第11号堅穴式建物

堅穴式建物群の中央やや北西側(G・H-8・9区)に位置し、第10号堅穴の床面で検出した。第10号堅穴と西側および支柱穴P1を共有しており、同堅穴へ建て替え拡張され

たものである。調査は1986年。上部の遺構との重複関係は第10号堅穴と同様で、北東側に約1.5m、南東側に約2m離れて第9号堅穴、第2号堅穴がそれぞれ所在する。

平面形は径6.9×6.1mの隅丸長方形と推定され、(第10号堅穴)検出面からの深さは北西壁で最大35cmを測る。(おそらく)全周する周溝(幅12~46cm、床面からの深さは最大11cm)、礫と炭粒を含んだ褐色土を埋土とする支柱穴P1・5-7(径50~59、41~54、49~56、50~68、床面からの深さは39、36、44、36cm、P1-5、P5-7、P7-6、P6-1間は3.35、3.00、3.50、3.30m)、南東側壁際で隅丸長方形二段掘りの土坑2(屋内貯蔵穴：径100×134、深さ24cm、坑底と上段との比高14cm、短径は推定値)を検出した。

埋土(第10号堅穴の整地土の可能性が高いが)は上部から下部へ黄茶褐色土、褐色土、地山土を含んだ褐色土、周溝には礫・地山土を含んだ褐色土、土坑2には上位に褐色土、下位に灰褐色土が堆積する。遺物の出土はほとんどなく、実測しうるものは得られていないが、第10号堅穴への建て替え拡張が連続的なものと推定されることから、本遺構の所属時期も弥生時代終末と考えておきたい。

第12号堅穴式建物

堅穴式建物群の北東端(J・K-8・9区)に位置する。上部に古代の小穴が重複するが、本遺構との直接的な切り合いはない。調査は1988年であるが、南および南東側周辺は1986年に終了しており、その際本遺構南側隅については先行する第3号堅穴の調査にともない、切り合いを確認できないまま重複箇所の上部を、南東側約1.4mについては本遺構上部を遺物包含層として不注意に掘削してしまった。西側隅の攪乱は1986年の周辺調査終了直後の工事が未調査の本遺構におよんだものであるが、北側壁については遺構埋土と基盤層との識別に失敗したものである。

平面形は隅丸長方形(6.75×6.0m)で、検出面からの深さは北西側壁で最大55cmを測る。南および北西側で周溝(幅17~47、床面からの深さは最大10cm)、支柱穴としてP1-4(径42~51、58~61、59、43~46cm、床面からの深さは70、74、70、66cm、P1-2、P2-4、P4-3、P3-1間はそれぞれ3.20、3.40、3.00、3.50m)、南東側壁際やや南によった箇所平面隅丸長方形の土坑(屋内貯蔵穴：径86×58、床面からの深さ深さ31cm)を検出した。支柱穴P4と南東側壁との間に土坑に平行して周溝に連結する溝(幅23~46、床面からの深さは10cm)、P3-4間の中央およびやや内側の二箇所に床面の赤化(径24×27および59×85cm)、さらにその内側に小穴P5(径50×53cm、床面からの深さ13cm)が認められたが、それぞれの性格は判然としない。埋土は上部に古代の遺物を包含する暗茶褐色土、下部に厚く黒褐色土、周溝およびその周辺には黄褐色の砂礫を含んだ黒褐色土が堆積する。北西側壁では周溝および下部埋土と壁との間隙を黄褐色の砂をブロック状に含んだ黒褐色土が埋めており、板壁を固定する際の裏込め土であろうか。本遺構の基盤層は、淡黒褐色土(遺物を極少量含む可能性がある)、黄褐色礫、黄褐色砂である。床面出土品は得られなかったが遺物そのものの出土は少なくなく、堅穴を北西-南東

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

方向に二分割しそれぞれをさらに北東－南西方向に三分割して取り上げた。

遺物は土器32点(YP124～155)、軽石製品1点(YS8)を実測した。このほか、1986年に南東側の上部約1.4mを掘削した際、比較的まとまって土器(YP755～759)が出土しており、本来本遺構出土品であった可能性がある。出土土器(古相を呈するものもあるが)から本遺構の所属時期は、古墳時代初頭と考えられる。

3 土坑(第16～18・31～55・134図)

第1号土坑

西側土坑群の南西端(C-7区)に位置する。第1号掘立柱式建物(古代)が重複するが、直接的な切り合いはない。調査は1985年。

平面形は隅丸長方形(1.64×0.69m)、深さは22cmを測る。検出面では遺物が周辺遺構外にも認められ遺構内出土品と接合したことから、上部は(おそらくは古代(以降)に)削平をうけ、規模も検出時より大きかったと推定される。

遺物の出土は多くはないが、土器6点(YP156～160)を実測した。本遺構の所属時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。

第2号土坑

西側土坑群のほぼ中央(E-8区)に位置する。北東側で流土(灰褐色土、樹根痕跡の可能性もある)を切っているが、(他の)遺構との切り合いはない。調査は1985年。

平面形は隅丸長方形(1.63×1.35m)、深さは北西側で最大50cmを測る。北側は二段に掘られている(上段と坑底との比高24cm)が、上段では遺物が(ほとんど)出土していないことから、本来の輪郭は同部を含まない可能性も残る。埋土は炭化物を含む暗褐色砂質土の単一土層、遺物の出土は上部では極少量であるが、下部から坑底にかけて大形破片を中心として集中的かつ多量に出土した。YP248のような小片(同一個体小片が本遺構に後出する第10号土坑からも出土)は、本来本遺構にともなわない(混入品の)可能性があるが、大形破片および(図上)完形品については人為的な一括(同時)廃棄と考えられ、廃棄後比較的短期間のうちに埋め戻された可能性が高い。本遺構の所属時期は、後述の出土土器から弥生時代後期後半である。

土器48点(YP217～264、胴(体)部片を除き端部の遺存するもの総て)を実測したほか、埋土中より炭化米約60粒(0.4g)を得ている。土器は、甕類21点、壺類15点、鉢類4点、高杯類2点、器台類2点、有孔鉢1点および底部片3点で、底部・口縁端部片および小片9点(YP228・229・235～238・248・249・251)を除いた構成比は、それぞれ49%(19点)、33.5%(13点)、7.5%(3点)、2.5%(1点)、5%(2点)、2.5%(1点)となり、図上復元を含めて全形を窺えるものは甕10点、壺11点、鉢2点、有孔鉢1点と二分の一以上を占めている。

これらの(図上)完形品のなかには、坑底からほぼ正位で出土したもの(YP263:P14、極一部欠損)もあるが、そうした例はむしろ少なく、逆位で出土したもの(YP252:P7)、

比較的広い範囲から出土したもの(YP254:東側(P1・4)・中央(P11)・西側(P7)、YP233:東側(P1)・中央(P11)・西側(P8))などがある。また完形ではないものの図化範囲に限定すれば(ほぼ)完存という個体で、同一個体とみられる破片が本遺構から全く出土していないもの(YP220・253・262およびYP261、前者はほぼ一箇所(P1・5、P1、P13)で、後者は東側(P4)と西側(P7・8)に分かれて出土した)、さらには肩部以下の破片が本遺構の南西側(P6~8)から出土(復元の結果(ほぼ)完形となった)し、口縁部の小片と頸部の1/4(いずれも本遺構からは出土していない)のみ北西に隣接する調査区(E-9区、1986年調査)の遺物包含層から出土したもの(YP230)などがある。こうした土器廃棄のありかたは一見無造作のようにもみえ、土坑内の5ないし6地点のそれぞれわずか40~50cmの範囲に10個体前後(重複があり、いずれもが完形品というわけではない)もの土器が折り重なるように出土していることになり、少なくとも完形品のまま本遺構に持ち込むという意図は感じられない。遺構外のどこかで使用されたものを、使用可能の如何にかかわらず一括して廃棄し(片づけ)たものとするのが妥当ではなからうか。その場合、出土品の欠損は使用後本遺構への廃棄までのあいだに生じた可能性が高い。

大形破片のみで39個体(完形品は24個体)という出土量は、単一堅穴内で日常保持・使用されるものをはるかに凌いでおり、壺・甕類が8割を越える器類構成も、当該時期の堅穴のそれ(本遺跡第3号堅穴では6割)とは異なっている。器種・器形構成をみると、壺類では、長胴の長頸直口壺(241・242)、長胴の広口壺(244・252)、球胴大型の長頸直口壺(240・253)、球胴倒卵形の大型有段口縁壺(255・256)が2個体ずつみられ、球胴大型の広口壺(245)と球胴倒卵形の大型(大形)有段口縁壺(254)、長胴の長頸直口壺(243)と球胴倒卵形の大型直口壺(260)も、機能は別にして用途面では補完関係にあった可能性がある。甕類では、特大型(230・233)、大型(217・231)、中型の大形でくの字口縁平底系のもの(218・219)・無文有段口縁系で口縁部(と底部)がやや厚手のもの(227・234)・薄手のもの(223・224)、中型の小形(221・225)、小型の大形(222・226)の5(細別)器種7(細別)器形でそれぞれ2個体ずつ確認できる。また法量(器種)は異なるものの同一器形で色調・胎土が類似するもの(221・222:無文有段口縁系、258・232:(おそらくは)くの字口縁平底系)があり、そうした例は中型および小型の椀形低脚台付鉢(246・247)にも認められる。このほか液状物(酒?)容器と考えられる扁平球胴の(頸部)突帯付(有段)細頸壺(261)は、その支持具として大型の中形上下有段(厚手)器台(262)をともなっており、対応関係は不明であるが焼成前穿孔の中形尖底有孔鉢(263)や(無台)中型の無頸鉢(264)なども注目される場所である。

こうした特異な対応関係を構成する土器群の廃棄の同時性についてはすでにふれたが、これらを日常生活の中で日々消費されるもののなかから、個別堅穴を越えた単位(集落?)で一定期間をかけ抽出・集積し一括廃棄するなどということは考えにくく、生産時期や場所を含め(最終)使用の場にいたるまでの個々の土器の経歴は異なるにせよ、廃棄(直)前

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

の使用は短期間であって、かつ使用の場はその特異性からみて非日常的なものといえる。

本遺構出土土器の器類・器種(・器形)構成は、七尾市矢田遺跡B区第4号溝下層〔七尾市教委1986〕、河北郡高松町中沼C遺跡〔高松町教委1987〕出土土器をそれぞれ典型例(いずれも弥生時代後期後半(主体))とする水辺、墳墓で執り行われた祭祀に使用されたものに共通する点があり、集落内においても同様の行為があったことを窺わせるが、基本的には高杯類を含まないなど異なる点もあり、具体的な内容と性格は今後の検討課題である。本遺構出土土器についていえば、壺・甕類のうち外面に煤あるいは内面に炭化物の少なくともどちらか一方が付着している個体が6割以上あり、炭化米の伴出からも飲食をとまなう行為であったことが想定され、本遺跡では同様の構成をもつ第10・30号土坑および前述の第2号竪穴出土土器がそれぞれ時期を異にして検出されていることから、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて継起的に執り行われたことが知られる。

第3号土坑

西側土坑群の南東側(D-6・7・E-6区)に位置する。第1・5号掘立柱式建物の柱穴およびその他小穴計3基に切られているが、第1号建物の柱穴については検出時には切り合いを確認できず、上部掘削後に古代の遺物(YP422)が第18図の破線の範囲に出土したことから判明した。調査は1985年。

平面形は円形(1.66×1.52m)、深さは74cmを測る。埋土は濁灰褐色土系(2・3層)の二段掘りの小穴を切るかたちで最上部に黒褐色土(1層)、小穴以下上部では壁からひと回り内側に暗褐色土系(4・5層)、その外側の壁との間は東側では砂質土を含む茶褐色土系(6～8層)、西側では灰褐色土系の砂質土・シルト(9・10層)、さらに下部では濁灰色の細かい砂(11層)が堆積するというやや特異な状況を呈している。遺物は中央上部(4・5層)を中心に大形破片が出土した。

土器17点(YP170～186)を実測したほか、図化しなかったが鉄石英(赤玉石)の剝片1点(約35g)を中央上部から得ている。出土地点の明らかなものは総て中央上部からで、そのうちYP183のみ東側上部からも破片が出土している。中央上部からのみ得られている大形破片(YP170・172・173・175・176・184)は概ね弥生時代終末に属するものと考えられるが、口頸部の破片である183を含め他の破片については判断が難しい。埋土は複数の遺構の重複あるいは井戸(の内部と掘り方)といった状況を示しているが現状では確定できない。本遺構の所属時期の下限を弥生時代終末とするにとどめたい。

第4号土坑

西側土坑群の西側(D-8区)に位置し、第1・4号溝に切られている。調査は1985年。

平面形は円形(1.00×0.90m)、深さ20cmを測る。遺物の出土は少なく土器2点(YP162・163)を実測した。弥生時代後期後半に属するものであろうか。

第5号土坑

西側土坑群の南東側(D-7区)に位置し、小穴に切られている。調査は1985年。

平面形は隅丸の菱形(1.32×1.05m、短径は推定値)、深さ58cmを測る。遺物の出土は少なく土器3点(YP164~166)を実測した。弥生時代終末に属するものであろう。

第6号土坑

西側土坑群の南東側(D、E-5区)に位置し、暗渠排水に切られている。調査は1985年。

平面形は隅丸長方形(1.68×0.97m、短径は推定値)、深さ37cmを測る。遺物の出土は少なく土器3点(YP167~169)を実測した。弥生時代終末に属するものであろうか。

第7号土坑

西側土坑群の南東端(D-5区)に位置し、暗渠排水に切られている。調査は1985年。

平面形は隅丸長方形(2.25×1.27m)、深さ26cmを測る。遺物の出土は中量、土器8点(YP187~194)を実測したが小片が多い。弥生時代終末に属するものであろうか。

第8号土坑

西側土坑群の南東側(E-5区)に位置、小穴・暗渠排水に切られている。調査は1985年。

平面形は円形(1.23×1.17m、長径は推定値)、深さ20cmを測る。遺物の出土は少なく土器2点(YP195~197)を実測した。弥生時代終末に属するものである。

第10号土坑

西側土坑群の北東側(F、G-8・9区)に位置する。上部に小穴およびその基盤となる整地土(古代)が重複するが直接的な切り合いはない。調査は1986年。

平面形は楕円形(2.00×1.58m)、深さ92cmを測る。埋土は上位に褐色土および淡褐色土、中位に暗褐色土、下位に黄褐色土が堆積する。遺物が大量に出土したため南側を掘削した段階で一度層位を確認し、北側については上層、中層、下層の3回に分けて取り上げたが、対応関係は厳密なものではない。

土器62点(YP265~326)、軽石製品1点(YS10)を実測したが、器面に縄文を施したYP283は天王山系土器の可能性が考えられることから、本来本遺構にともなわないものとして本書の構成にしたがえば第4節でふれるべきであった。(YP283を除く)実測土器の内訳は、北側(にも)出土のものが上層6点、上・中層2点、中層38点、中・下層1点、下層2点の計49点、南側(のみ)出土のものが12点となり、中位暗褐色土に概ね対応するものが主体を占めている。

出土土器から本遺構の所属時期は古墳時代初頭と考えられ、(おそらくは台付の)細頸壺(296)と有孔鉢(299)を含み、壺・高杯・鉢・蓋類の4割以上(17点)が赤彩品であるなど、特異な器種・器類構成をもつ一括廃棄土器群として、時期的な変移をみせながらも第2号竪穴および第2・30号土坑出土土器群に共通する性格をもつものと考えられる。

第12号土坑

中央土坑群の東側(J-6・7区)に位置する。下部に第15号溝が重複するが、流土を挟んで直接的な切り合いはない。調査は1986年。平面形は楕円形(1.23×0.84m)、深さ30cmであるが、遺物は検出面の上位からすでに顔みせており本来の深さは10cm以上深くな

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

る。埋土は褐色土の単一土層、遺物の出土は多くはないが大形破片が得られている。

土器5点(YP198～202)を実測した。200～202は上部に横位(201)からさらに傾いて(200・202)出土している。201・202は完形品で、202の底部が201の口縁部に少し入り込むような状態であった。200は底部を欠くが、検出状況を考えると完形品であった可能性が高い。他の2点(198・199)は口縁～肩部の破片である。出土土器は弥生時代後期後半に属し本遺構の所属時期をあらわしているが、遺構そのものの性格は判然としない。

第13号土坑

中央土坑群の北端(I・J-8区)に位置する。第13号溝(古代)に切られ、第3号堅穴を切っている。調査は1986年。

平面形は楕円形(1.45×0.83m)、深さは34cmを測る。遺物の出土は極少量、実測しうるものが得られなかったため所属時期は不明である。古代に属する可能性もあるが、茶褐色土系の埋土であることから本節で報告する。

第14号土坑

中央土坑群の東端(J-6区)に位置し、南東側は中世以降に削平されている。調査は1986年。

平面形は楕円形(0.86×0.91m、短径は残存値)と推定され、深さは28cmを測る。遺物の出土は少なく土器2点(YP203・204)を実測した。弥生時代後期後半に属する。

第15号土坑

中央土坑群の南端(I-6区)に位置する。小穴に切られている。調査は1986年。

平面形は長方形(2.00×1.40m)、深さは40cmを測る。遺物の出土は極少量、実測しうるものが得られず所属時期は不明。茶褐色土系の埋土であることから本節で報告する。

第17号土坑

中央土坑群の北西端(I-8区)に位置する。中央(P86033)および南側で小穴に切られている。調査は1986年。

平面形は楕円形(1.60×1.02m)、深さは30cmを測る。埋土は褐色土系、遺物の出土は極少量で、実測しうるものは得られず遺構本体からは所属時期を明らかにしえないが、後出する小穴86033出土土器から弥生時代に属するものと考えられる。

第19号土坑

西側土坑群の西端(D-8・9区)に位置する。第4号溝(弥生時代後期後半?)を切り第1号溝(中世)に切られている。調査は1986年。

平面形は楕円形(2.04×1.41m、短径はやや削平されている)、深さは58cmを測る。埋土は上部のみに褐色土、以下炭粒と礫を含んだ暗褐色土、茶褐色土である。細かな記録を残すことができなかったが、遺物の出土は多く大形破片も得られている。

土器25点(YP327～351)を実測した。その内訳は甕類11点、壺類8点、器台類1点および底部片4点、脚部片1点である。弥生時代終末に属し、本遺構の所属時期をあらわすも

のと考えられる。

第20号土坑

西側土坑群の北西側(E-9区)に位置する。第4号竪穴にわずかに切られている。調査は1986年。平面形は円形(0.98×0.92m、長径は推定値)、深さは35cmを測る。埋土は褐色土系、遺物の出土は多くはないが大形破片が得られている。

土器3点(YP205~207)を実測した。弥生時代終末に属するものであろうか。

第21・24号土坑

西側土坑群の北西端(E-10区)に位置する。当初は2基の土坑が重複するものと考えたが、同一遺構の可能性があるため一括して報告する。南東側で小穴に切られている。調査は1986年。平面形は上部の第21号土坑が円形(2.31×2.00m、深さ25cm)、第21号土坑の南西側下部に位置する第24号土坑が楕円形((1.96)×(1.49)m、(40)cm)を呈する。土層観察ができなかったため埋土の状況は不明である。遺物の出土は少ない。

実測した土器は、第21号土坑が3点(YP212~214)、第24号土坑が2点(YP215・216)、他に小穴出土土器1点(YP211)をあわせて掲載した。小穴出土土器を含めて明確な時期差を見出しにくく切り合い関係の検証ができないが、全体的な様相は弥生時代終末に属するものであろうか。

第22号土坑

西側土坑群の北端(F・G-9区)に位置する。西側を小穴(図化しなかったが坑底近くにまで達している)に切られている。調査は1986年。

平面形は円形(1.34×1.24m)、深さは43cmを測る。埋土は褐色土系、遺物の出土は少ない。土器3点(YP208~210)を実測した。弥生時代終末に属するものであろう。

第30号土坑

調査区の北東端(P-8区)に位置し、弥生時代(~古墳時代前期)の土坑としては単独で所在する。第60号溝(近世)に切られている。調査は1989年。

平面形は円形(1.90×1.85m、短径は推定値)、深さ101cmを測るが、当初は重複する第60号溝の溝底で弥生土器がまとまって出土したことから、流土を挟んで下部に同期の遺物包含層があるのではないかと考え溝底を断ち割ったもので、その結果南側を除いて壁が検出され土坑を確認したが、平面的な輪郭は依然として確定できず、下部の壁を追い掛けるように掘削したため土層の記録をとることができなくなった。その間にも下部を中心に大形破片が大量に出土し続けた。遺物は上部では少なく、また周辺の中世~近世を主体とする遺構検出面と本遺構の本来のそれとの間には、少量の遺物を包含する間層が介在した可能性がある。

土器47点(YP352~398)を実測した。底部片4点(384~386・394)を除いた器類構成は、甕類58%(25点)、壺類30%(13点)、鉢類7.0%(3点)、高杯類2.5%(1点)、有孔鉢2.5%(1点)となり、第2号土坑出土土器のそれと酷似する。また器種構成のうえでは細頸壺

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

(381)と有孔鉢(396)を含む点などが(第10号土坑にも)共通している。甕・壺類の個体識別が困難で接合が充分ではないこと、検出過程に不備(前述)があり小片については混入品(特に後出品)の可能性があることなど問題点はあるが、大形破片については弥生時代後期後半の一括廃棄土器群であって、第2号堅穴および第2・10号土坑出土土器群に共通する類型をもつものと考えられる。

4 溝(第7・8・56・73図)

第4号溝

調査区の南西側(C・D-8・9区)に所在する。第4号土坑を切り、第19号土坑、第1・2号溝、第1号掘立柱式建物柱穴、小穴に切られている。調査は1985・1986年。

流路および延長は南西側調査区外から北東方向へ4.4m、南東へ向きをかえて4.9mで第1号掘立柱式建物の柱穴に切られたのち検出不能となる。幅25～62cm、深さは最大24cmを測る。遺物の出土は少なく、土器1点(YP399)を実測した。弥生時代後期後半に属するものであろうか。

第7号溝

調査区の南側(D-4・5区)に所在する。小穴および暗渠排水に切られている。調査は1985年。

南北方向に3.36mを測る。溝底に水準の差はなく両端は明瞭に立ち上がっている。幅は35～48cm、深さは最大31cmを測る。遺物の出土は多くはないが、土器4点(YP400～403)を実測した。弥生時代終末に属するものであろう。

第8号溝

調査区の南側(D-5区)に所在する。北側では小穴に切られているようである。調査は1985年。

南北方向に3.10mを測る。溝底に水準の差はほとんどなく両端は明瞭に立ち上がる。幅は35～41cm、深さは最大20cmを測る。遺物の出土は極少量で実測しうるものは得られなかったが、埋土が茶褐色土系であること、第7号溝に近接し規模・形態が類似することから本節で報告する。

第9号溝

調査区の南側(D-4区)に所在する。切り合い関係は不明ながら溝状の落ち込みの中で検出した。南端は小穴に(おそらく)切られている。調査は1985年。

南北方向に1.96m(以上)を測る。溝底に水準の差はなく北端は明瞭に立ち上がる。幅は27～41cm、深さは最大19cmを測る。遺物の出土は極少量、実測しうるものは得られていない。第8号溝同様第7号溝に近接し規模・形態が類似することから本節で報告する。

第14号溝(第73図)

調査区の中央(H-8区)に所在する。上部に第11号土坑・小穴(古代)およびその基盤

となる整地土が重複し小穴の一部が本遺構を切っているほか、南東側および北西側も第2・10号竪穴に切られている。調査は1986年。

円形(1.9×2.5m、長径(南北方向)は推定値、(最小)内径(東西方向)は1.26m)に巡るものと推定され、幅26～49cm、深さは最大21cmを測る。若干の炭化材・礫とともに少量の土器が出土し1点(YP413)を実測した。弥生時代後期後半に属するものである。性格は判然としないが、羽咋市吉崎・次場遺跡第13次発掘調査SX01〔羽咋市教委1994〕に本遺構の類例を求めることができる。

第15号溝

調査区の中央(J-7・8区)に所在する。第3号竪穴および第12号土坑により削平をうけ、南東側延長方向は流失している。調査は1986年。

流路は北西方向から南東方向、延長5.2mを検出した。幅は28～67cm、深さは最大17cmを測る。埋土は黄褐色の砂礫、遺物の出土は非常に少ないが土器2片(YP404・405)を実測した。ともに器面に条痕を施すもので、弥生時代前期～中期初頭に属するものであろう。第3号竪穴の基盤層下で検出されていることから、本遺構の所属時期をあらわしているものと考えたい。

第21号溝

調査区の南西側(D-9・E-8・9区)に所在する。第4号竪穴および小穴に切られ、東側延長方向は流失している。調査は1986年。

流路は西方向から東方向(やや南に振れるが)、延長5.8mを検出した。幅34～94cm、深さは最大25cmを測る。遺物はほとんど出土せず実測しうるものは得られなかったが、埋土(黄褐色砂礫)および検出状況が第15号溝に類似することから、同時期(弥生時代前期～中期初頭)のものと考えておきたい。

第35号溝

調査区の南西端(A-5・6・B-6・7区)に所在する。南側では第8号井戸、北側では小穴(おそらくは)切られており、北側延長方向はやや西に振りながら調査区外へ延びる。調査は北側が1985年、南側が1988年である。前者は当時調査区の端にあたり遺構の認定が困難であったが、後者の調査によって溝(本遺構)の一部と判明したものである。両調査区の間には本遺構の延長部分を含め幅1m前後の未調査箇所が残ったが、1985年当時民地への影響を避けるため調査区法面上端をやや内側に設定したこと、加えて当初は工事区域外であった後者の(追加)調査においても、既に東側に完成していた道路法尻のコンクリート製U字溝下の調査を断念せざるを得なかったことによる。

流路は北方向から南方向で、検出延長は北側で約3m、南側で約2m(両者の間は約3m)、幅28～65cm、深さは最大25cmを測る。遺物は北側ではほとんど出土していないが、南側では比較的多く、土器4点(YP409～412、すべて南側出土)を実測した。弥生時代後期後半に属するもので、本遺構の所属時期をあらわすものと考えられる。

第51号溝

調査区の東側(M・N-4区)に所在する。南西側は第50号溝に切られ、北東側は流失している。調査は1988年。

流路は南西方向から北東方向で、延長4.8mを検出した。幅26～48cm、深さは最大25cmを測る。遺物の出土は多くはないが土器3点(YP406～408)を実測した。弥生時代終末に属するものであろうか。

第52号溝

調査区の東側(N-3・4区)に所在する。他の遺構との切り合いはない。調査は1988年。

溝底は南西方向から北東方向に約30cmの比高差(南西方向が高い)をもつが、南西端はわずかに(約3cm)壁が立ち上がり、北東端も小穴に連結することから水が流れるようなものではない。長さ3.53m、幅21～38cm、深さは最大15cmを測る。溝底で性格は不明の小穴4基(溝底からの深さは5～39cm、穴底の標高は9.065～9.425m)を検出した。遺物はほとんど出土せず実測しうるものも得られていない。所属時期も不明であるが、古代以降に属するものとは考えにくいことから本節で報告する。

5 小結

本節では、弥生時代～古墳時代に属する竪穴式建物10基、土坑20基(可能性のあるものを含む)、溝10基(同)を報告した。

竪穴は弥生時代後期後半から古墳時代初頭まで、後期後半の新段階を除いてほぼ途切れることなく存続するが、出土土器の細分編年上の位置づけと相互の位置関係に照らせば、同時に存在するものは多くても2(最大3)基(第9号と第1あるいは2号、第12号と第4あるいは7号(あるいは第12・4・7号))程度と推定され、今回の調査区が集落の全域ではない(おそらくは西側に延びるのであろう)ことを窺わせている。小規模とはいえ集落モデルを考えるうえで示唆的である。

土坑も存続期間は竪穴と同様であるが、本文でもふれたとおり特異な器類・器種構成よりなる一括廃棄土器群が得られ、集落内で執り行われる祭祀行為について新たな視点を提供した。第30号土坑(弥生時代後期後半古段階)、第2号土坑(同新段階)、第2号竪穴(弥生時代終末古段階)、第10号土坑(古墳時代初頭)出土土器は、共通する(あるいは補完関係にある)器種(有孔鉢、(台付)細頸壺・有段口縁壺結合器台他)を保持しつつ段階的な変容を遂げていくように見え、興味深いものがある。同様の土器群は本遺跡以外にも認定可能と考えており、今後の研究の進展が見込まれる。

参考文献

- 七尾市教育委員会 1986 『矢田遺跡』 七尾市埋蔵文化財調査報告 第7集
高松町教育委員会 1987 『高松町中沼C遺跡』
羽咋市教育委員会 1994 『吉崎・次場遺跡』

第3章第2節挿図断面図土層一覧

第9図

- 1 暗褐色砂質土
- 2 濁暗茶褐色粗砂
- 3 濁褐色砂質土(炭粒を多量に含む)
- 4 濁褐色砂質土(炭粒を少量含む)
- 5 濁暗褐色砂質土
- 6 褐色砂質土
- 7 明褐色砂質土
- 8 黄褐色砂礫

第10図

- 1 暗褐色砂質土
- 2 褐色砂質土
- 3 茶褐色砂質土
- 4 暗茶褐色砂質土
- 5 濁黄褐色砂質土

第11図

- 1 茶色砂質土(小穴埋土)
- 2 淡褐色砂質土
- 3 褐色砂質土
- 4 黄茶褐色砂質土
- 5 褐色砂質土(地山土を含む)
- 6 暗褐色砂質土
- 7 黄褐色砂質土(地山土を含む)
- 8 黄褐色細砂(やや明るい)
- 9 黄褐色砂礫(第15号溝埋土)

第12図

- 1 褐色砂質土
- 2 黒色土(炭粒)

第13図

- 1 褐色砂質土
- 2 灰褐色土(炭粒を含む)
- 3 褐色土
- 4 焼土・炭化物
- 5 黄色粘土
- 6 褐色土(炭化物を多量に含む)
- 7 淡茶褐色土(炭粒を含む)
- 8 褐色土(地山土(11~13層)をブロック状に含む)
- 9 茶褐色土(黄色粘土をブロック状に含む)
- 10 黒色粘質土
- 11 黒灰色粘質土
- 12 黄褐色粘土
- 13 黄褐色土

第14図

- 1 暗褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 淡茶褐色土
- 4 淡茶褐色土(地山土を含む)
- 5 黄茶褐色土
- 6 褐色土
- 7 褐色土(地山土を含む)
- 8 褐色土(礫・地山土を含む)
- 9 淡褐色土
- 10 濁黄褐色土
- 11 淡黄灰色土(やや粘質)
- 12 暗灰褐色土(やや粘質)
- 13 灰褐色土

第15図

- 1 暗茶褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土(黄褐色礫を含む)
- 4 黒褐色土(黄褐色砂を含む)
- 5 黒褐色土(黄褐色砂をブロック状に含む)
- 6 淡黒褐色土
- 7 黄褐色礫
- 8 黄褐色砂

第16図

- 1 褐色土
- 2 淡褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 暗褐色土(炭粒・礫を含む)
- 6 茶褐色土

第17図

- 1 暗褐色砂質土(炭化物を含む)

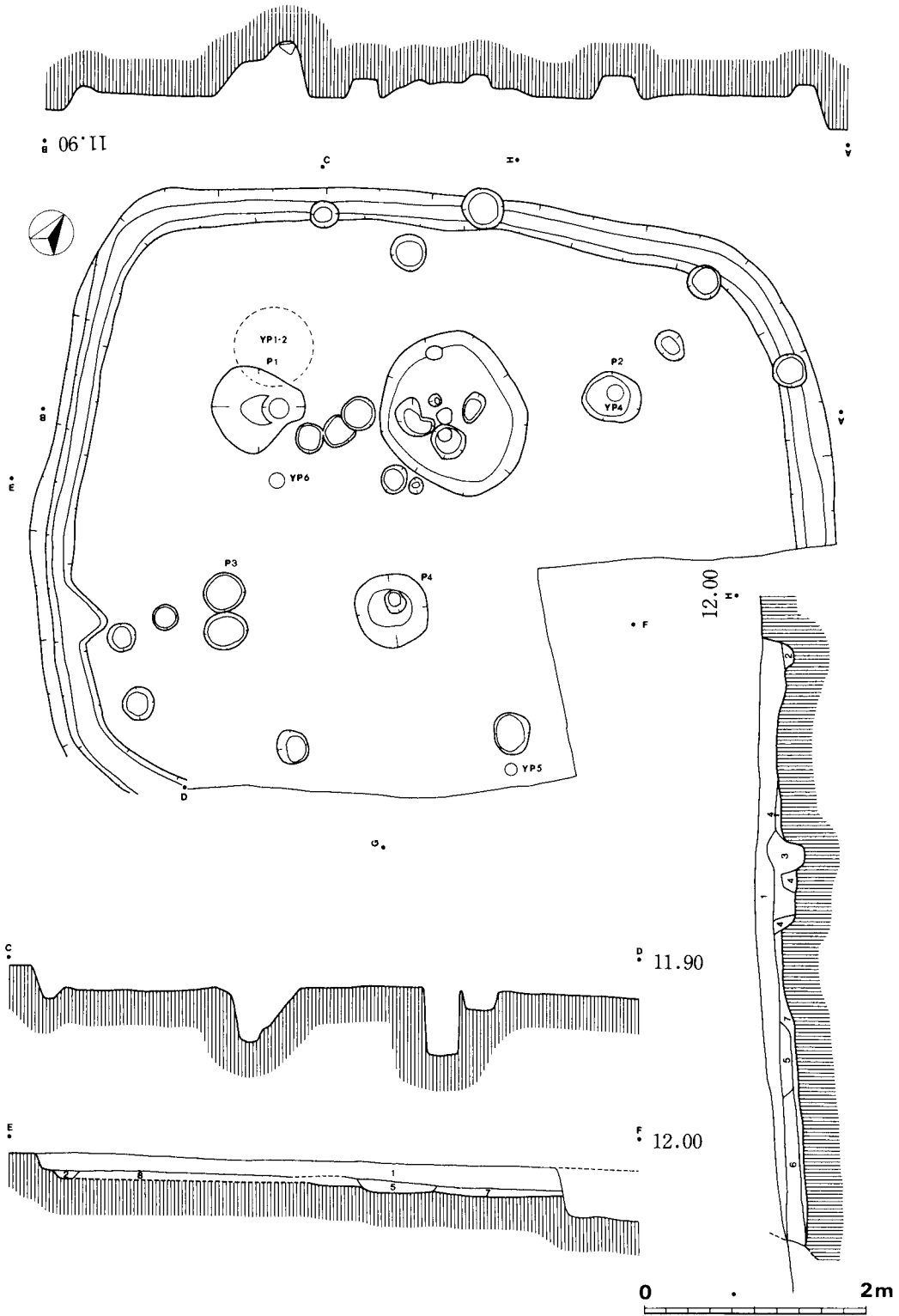
第18図

- 1 黒褐色土
- 2 濁灰褐色土
- 3 濁灰褐色土(暗青灰色土をブロック状に含む)
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土(やや暗い、炭化物を含む)
- 6 暗茶褐色土
- 7 茶褐色砂質土
- 8 濁暗茶褐色土(6・7混土層)
- 9 灰褐色土砂質土
- 10 灰褐色シルト(やや暗い)
- 11 濁灰色細砂
- 12 褐色土

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

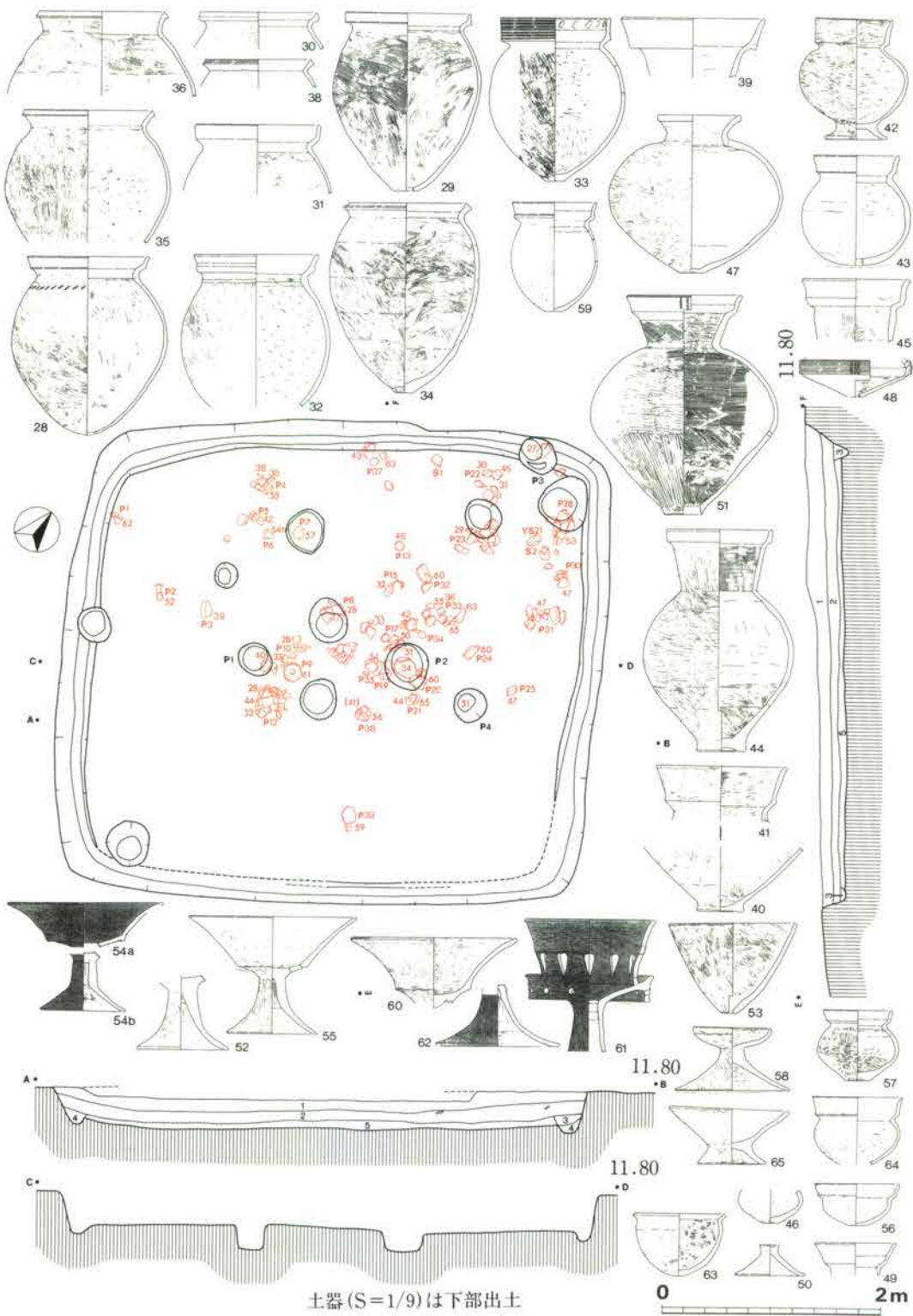
弥生時代～古墳時代遺構一覧

遺構名	位置	平面形態	長径m×短径m×深さcm			備考
第1号竪穴式建物	F-H6・7区	隅丸方形	(7.3) × (5.8) × 20			弥生時代終末
第2号竪穴式建物	H. I 7・8区	長方形	5.0 × 4.45 × 25			弥生時代終末
第3号竪穴式建物	I. J 7・8区	方形	5.5 × 5.35 × 35			弥生時代後期後半
第4号竪穴式建物	D 9. E 9・10	隅丸方形	(4.1) × 3.6 × 20			古墳時代初頭
第7号竪穴式建物	G. H. 9・10	隅丸方形	4.3 × 3.7 × 15			古墳時代初頭
第8号竪穴式建物	H. I 8. 9区	隅丸方形	(4.5) × (3.6) × 20			古墳時代初頭
第9号竪穴式建物	I. J. 9. 10	小判形	4.5 × 3.3 × 35			弥生時代終末
第10号竪穴式建物	G-I. 8～10	隅丸方形	7.7 × (7.1) × 30			弥生時代終末
第11号竪穴式建物	G. H 8・9区	隅丸方形	(6.9) × (6.1) × (35)			弥生時代終末
第12号竪穴式建物	J. K 8・9区	隅丸方形	6.75 × 6.0 × 55			古墳時代初頭
第1号土坑	C - 7区	隅丸方形	1.64 × 0.69 × 22			弥生時代後期後半
第2号土坑	E - 8区	隅丸方形	1.63 × 1.35 × 50			弥生時代後期後半
第3号土坑	DE 6. D 7区	円形	1.66 × (1.52) × 74			弥生時代終末
第4号土坑	D - 8区	円形	1.00 × 0.90 × 20			弥生時代後期後半?
第5号土坑	D - 7区	隅丸菱形	1.32 × (1.05) × 58			弥生時代終末
第6号土坑	D E 5区	隅丸方形	(1.68) × (0.97) × 37			弥生時代終末?
第7号土坑	D - 5区	隅丸方形	2.25 × 1.27 × 26			弥生時代終末?
第8号土坑	E - 5区	円形	(1.23) × 1.17 × 20			弥生時代終末
第10号土坑	F. G 8・9区	楕円形	2.00 × 1.58 × 92			古墳時代初頭
第12号土坑	J. 6. 7区	楕円形	1.23 × 0.84 × (30)			弥生時代後期後半
第13号土坑	I J 8区	楕円形	1.45 × 0.83 × 34			?
第14号土坑	J - 6区	楕円形?	(0.86) × 0.91 × 28			弥生時代後期後半
第15号土坑	I - 6区	方形	2.00 × 1.40 × 40			?
第17号土坑	I - 8区	楕円形	1.60 × 1.02 × 30			弥生時代
第19号土坑	D. 8. 9区	楕円形	2.04 × (1.41) × 58			弥生時代終末
第20号土坑	E - 9区	円形	(0.98) × 0.92 × 35			弥生時代終末?
第21号土坑	E - 10区	円形	2.31 × 2.00 × (25)			弥生時代終末?
第24号土坑	E - 10区	楕円形	(1.96) × (1.49) × (40)			弥生時代終末?
第22号土坑	F G 9区	円形	1.34 × 1.24 × 43			弥生時代終末
第30号土坑	P - 8区	円形	1.90 × (1.85) × 101			弥生時代後期後半
遺構名	位置	延長m	幅cm	深さcm	備考	
第4号溝	C・D - 8・9区	9.3～	25～62	24	弥生時代後期後半	
第7号溝	D - 4・D - 5区	3.36	35～48	31	弥生時代終末	
第8号溝	D - 5区	3.10	35～41	20	弥生時代終末?	
第9号溝	D - 4区	1.96～	27～41	19	弥生時代終末?	
第14号溝	H - 8区	(6.0)	26～49	21	弥生時代後期後半	
第15号溝	J - 7・J - 8区	5.2～	28～67	17	弥生時代前期～中期初頭	
第21号溝	D - 9・E - 8・9区	5.8～	34～94	25	弥生時代前期～中期初頭?	
第35号溝	A - 5・6・B - 6・7区	8.0～	28～65	25	弥生時代後期後半	
第51号溝	M - 4・N - 4区	4.8～	26～48	25	弥生時代終末?	
第52号溝	N - 3・N - 4区	3.53	21～38	15	?	

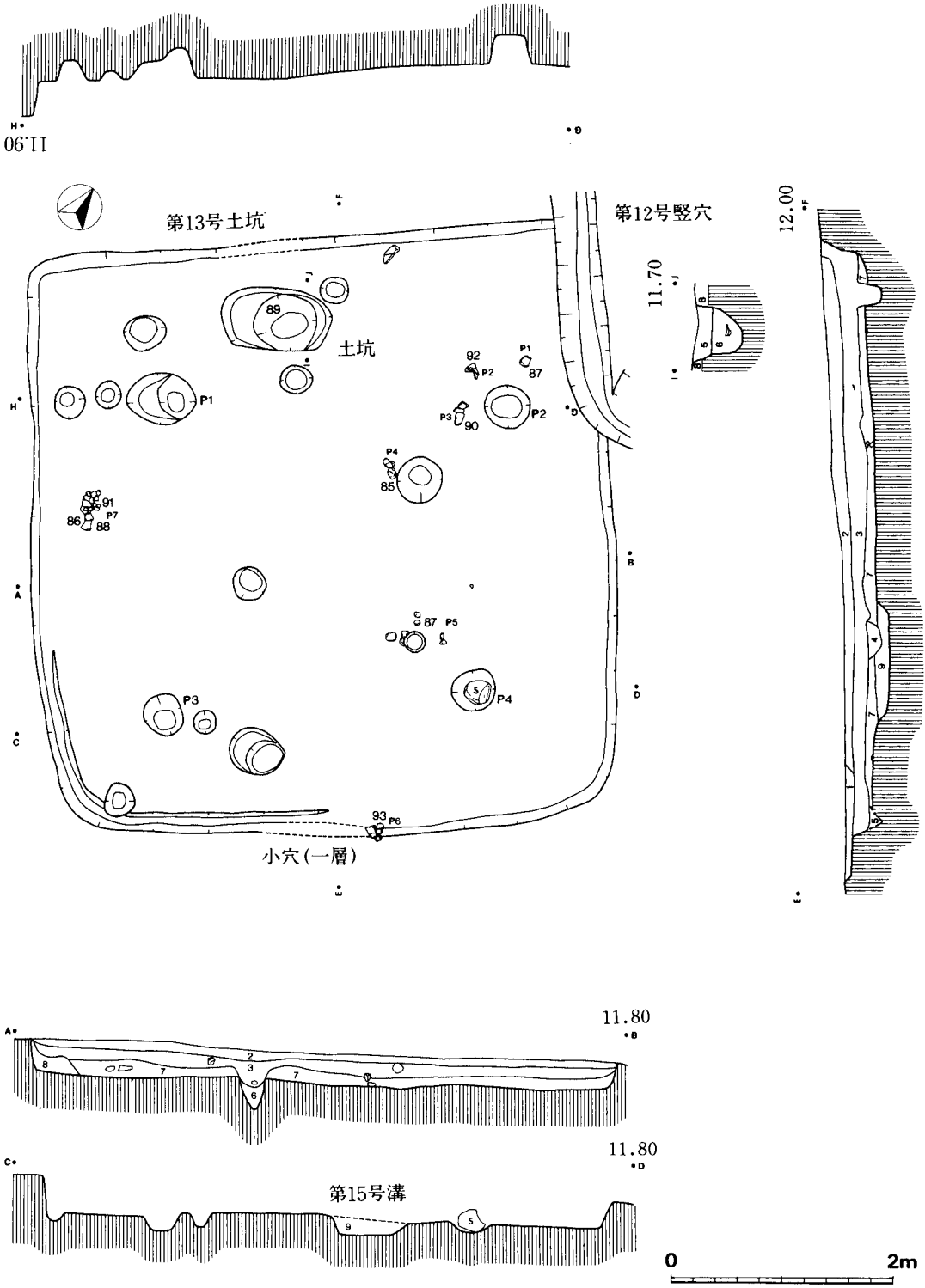


第9図 第1号竖穴式建物(S=1/60)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

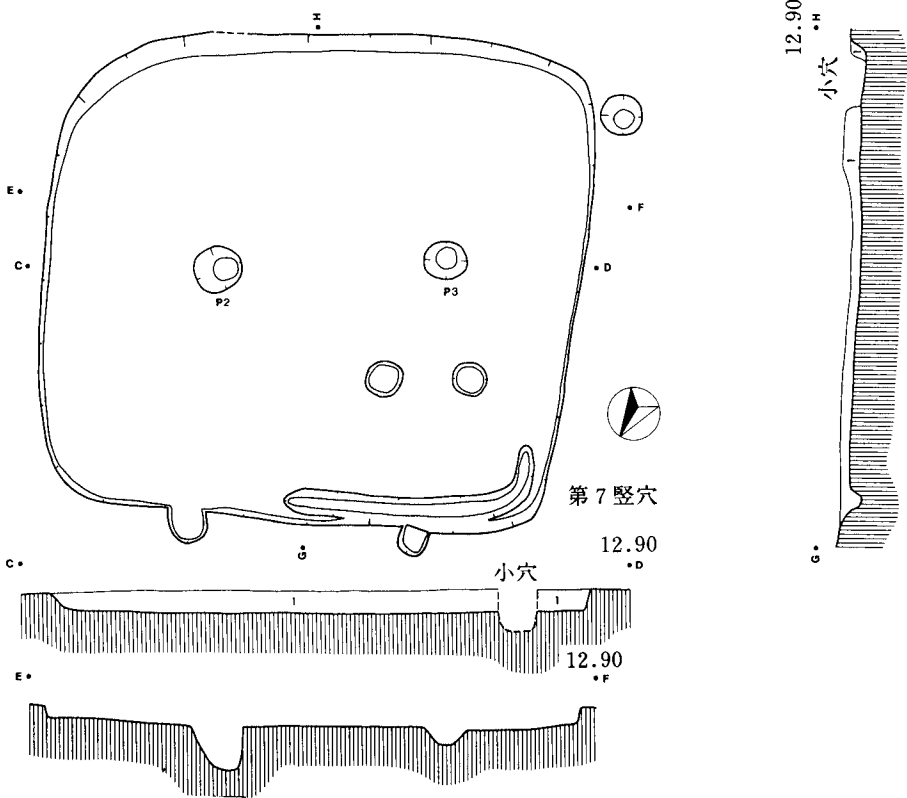
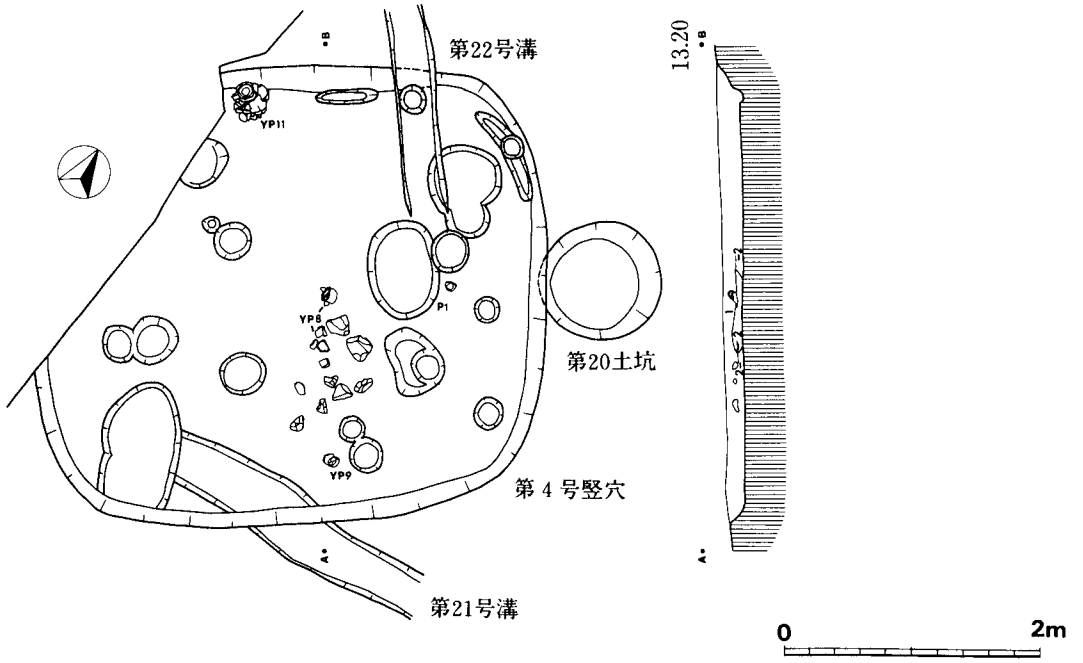


第10図 第2号竪穴式建物(S=1/60)

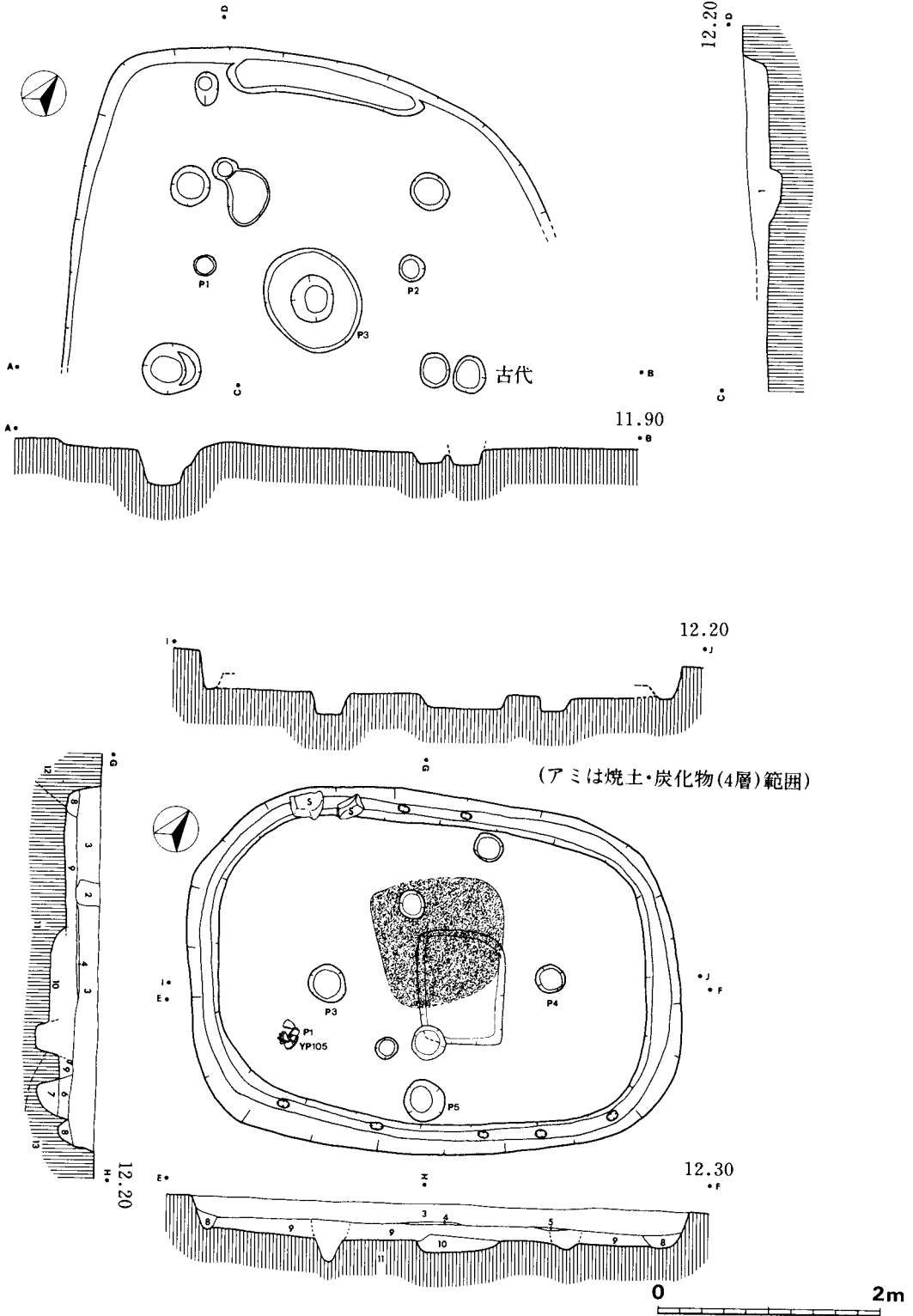


第11図 第3号竖穴式建物(S=1/60)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物



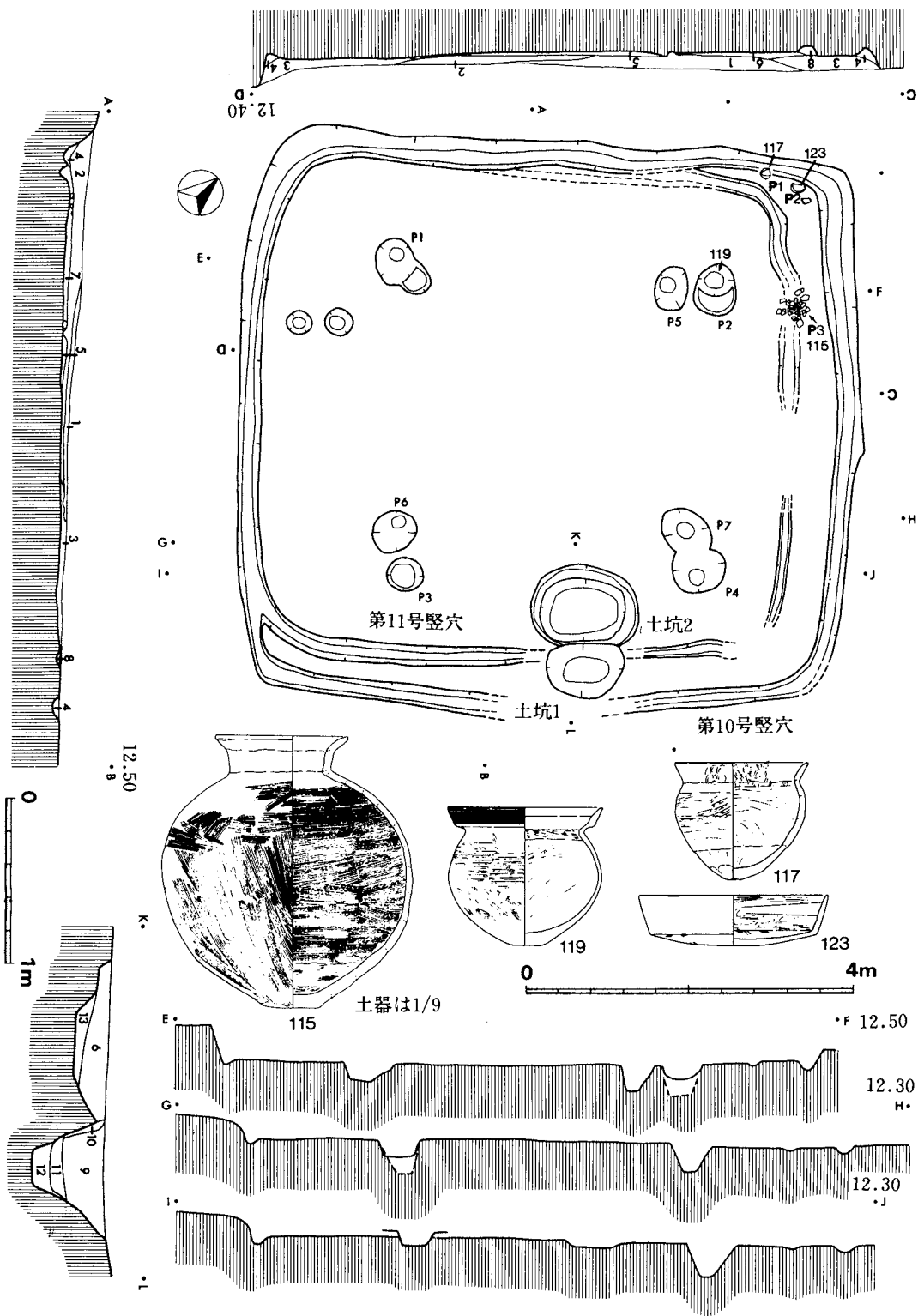
第12図 第4・7号竖穴式建物(S=1/60)



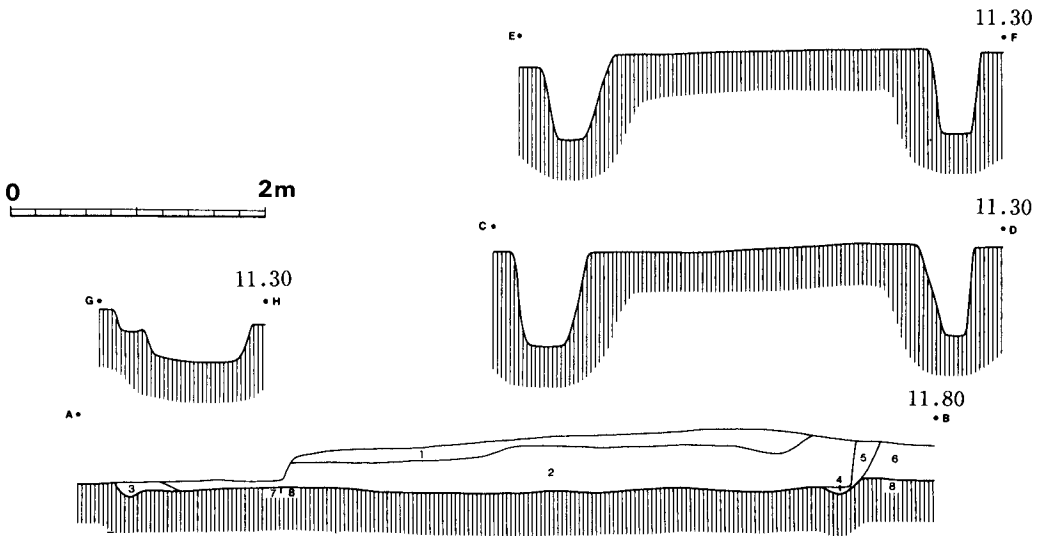
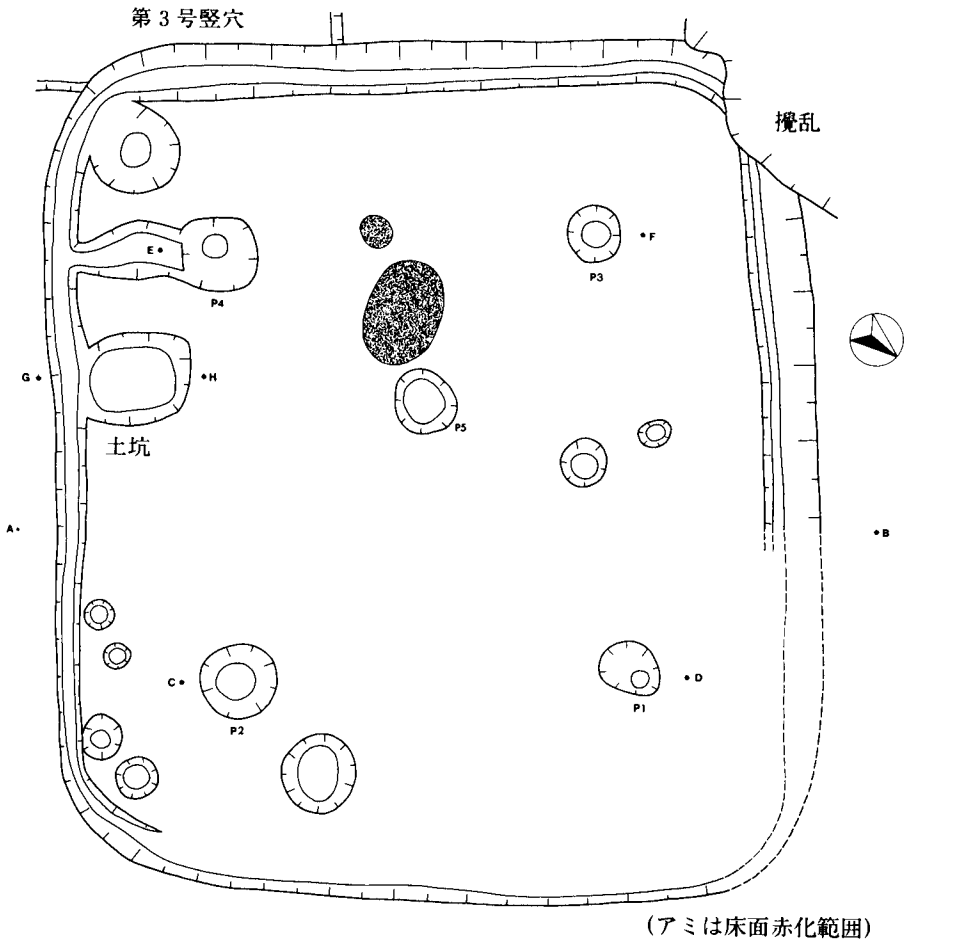
(アミは焼土・炭化物(4層)範囲)

第13図 第8・9号竪穴式建物(S=1/60)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

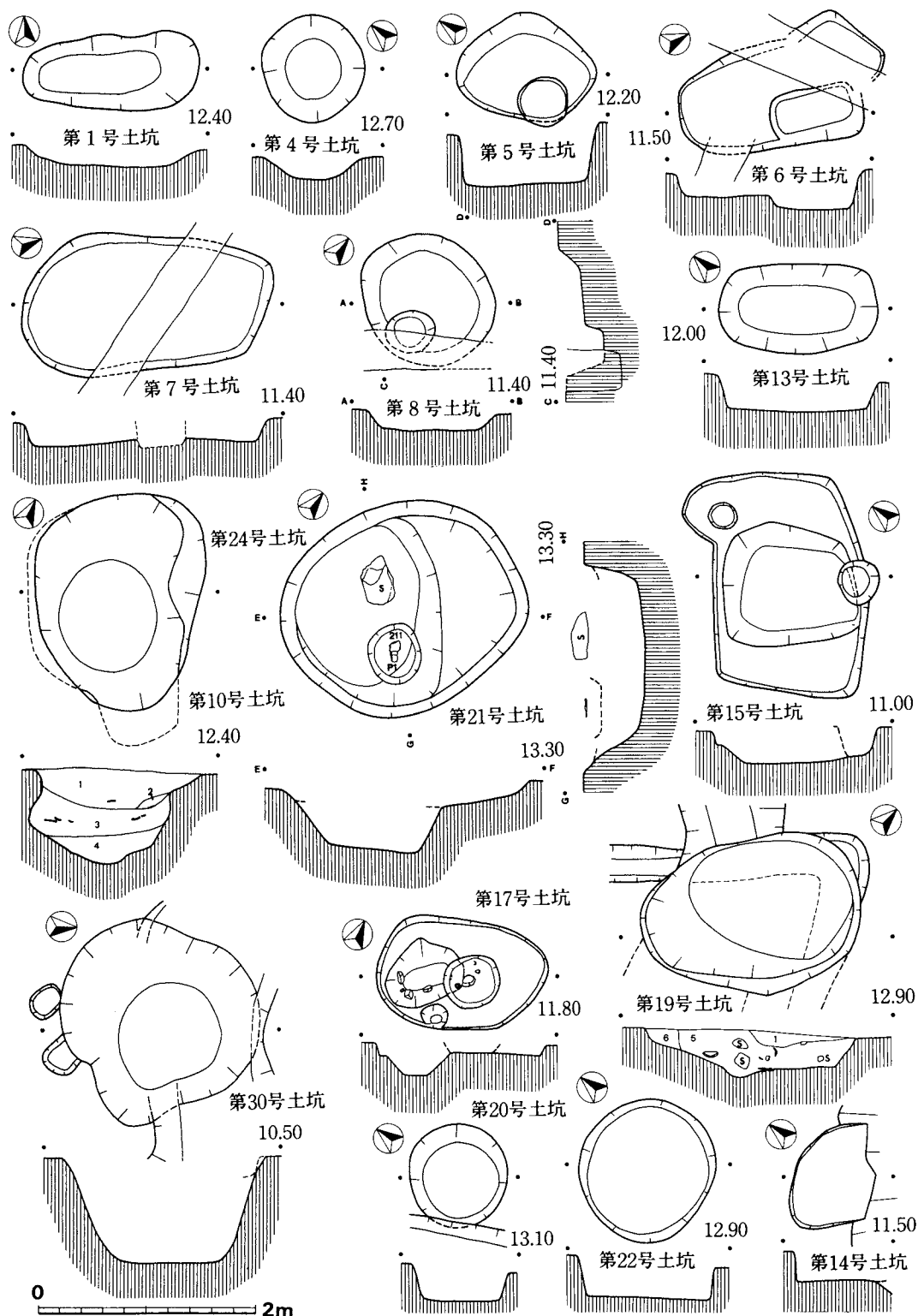


第14図 第10・11号竖穴(S=1/80・=1/40)

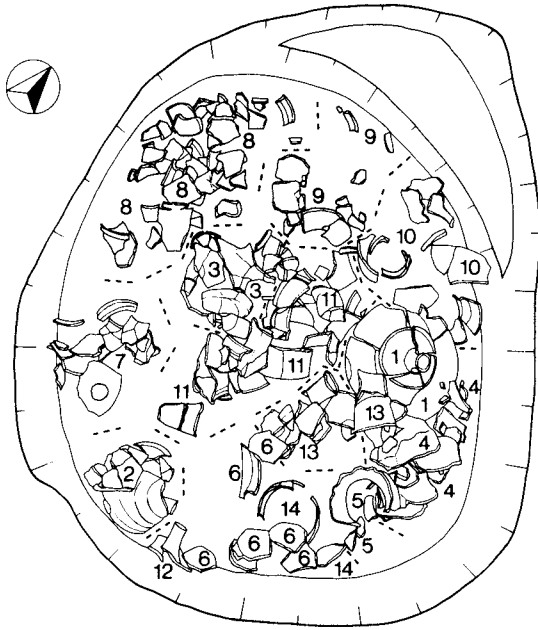


第15図 第12号竖穴式建物(S=1/60)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

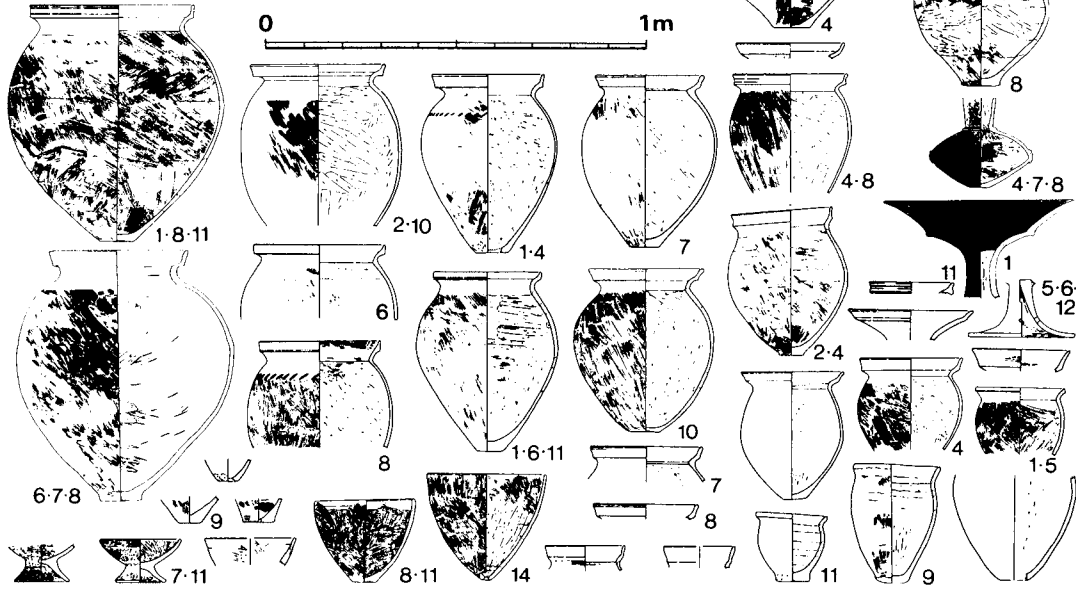
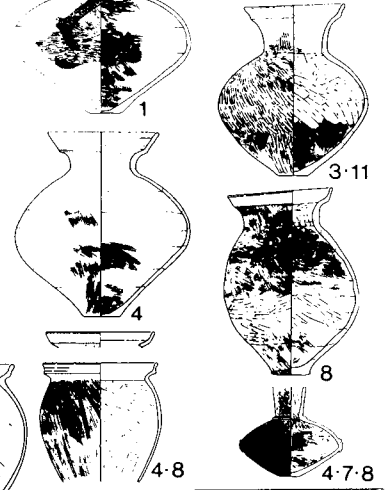
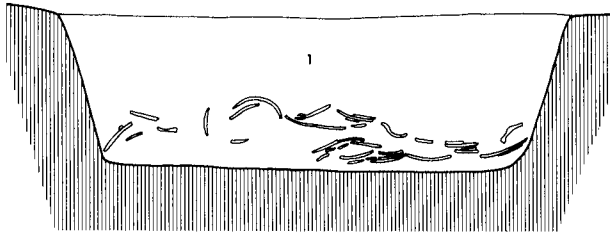
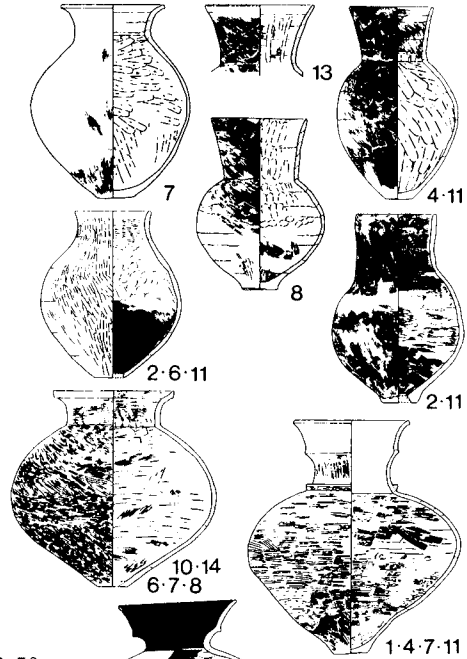


第16図 第1・4～8・10・13～15・17・19～22・24・30号土坑(S=1/60)



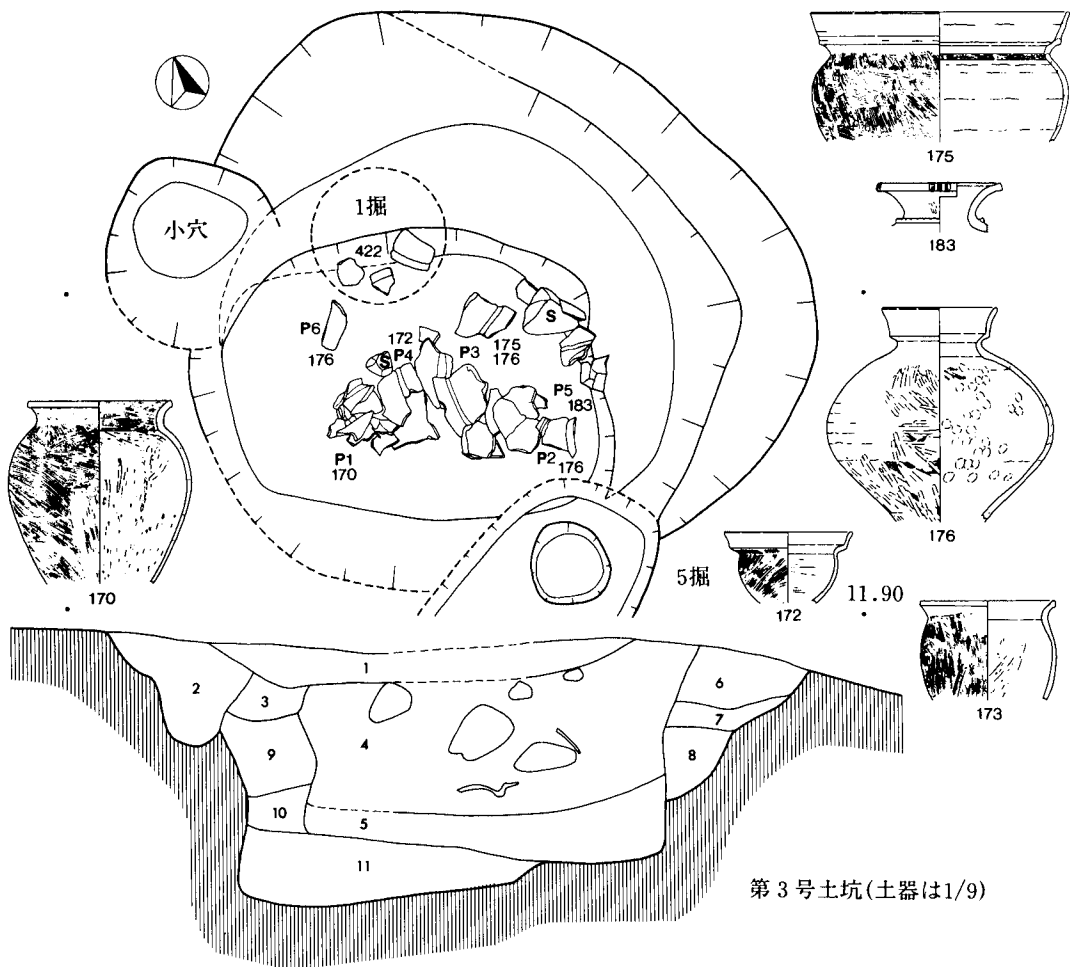
数字は取り上げ番号
(土器は1/12)

12.50

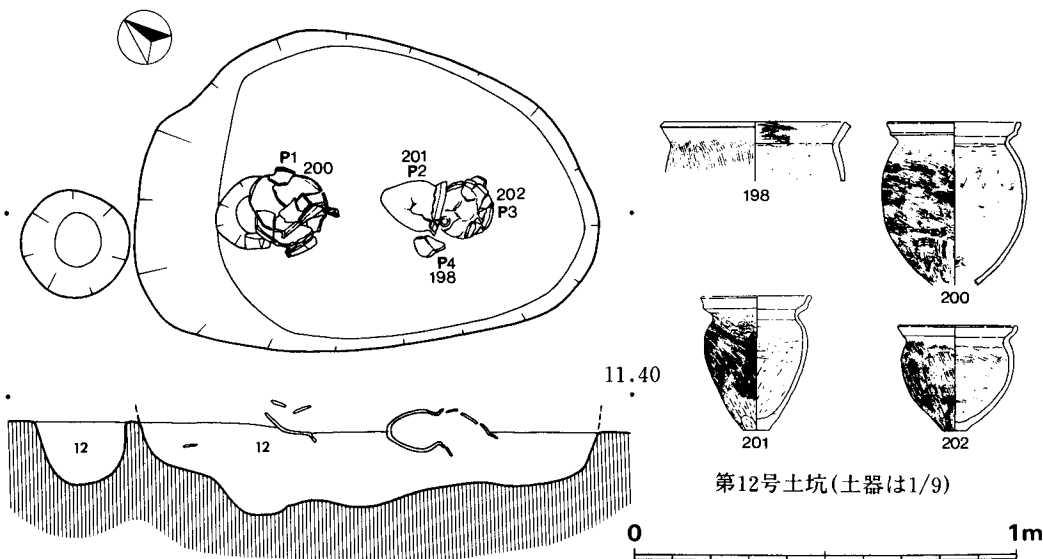


第17図 第2号土坑(S=1/20)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

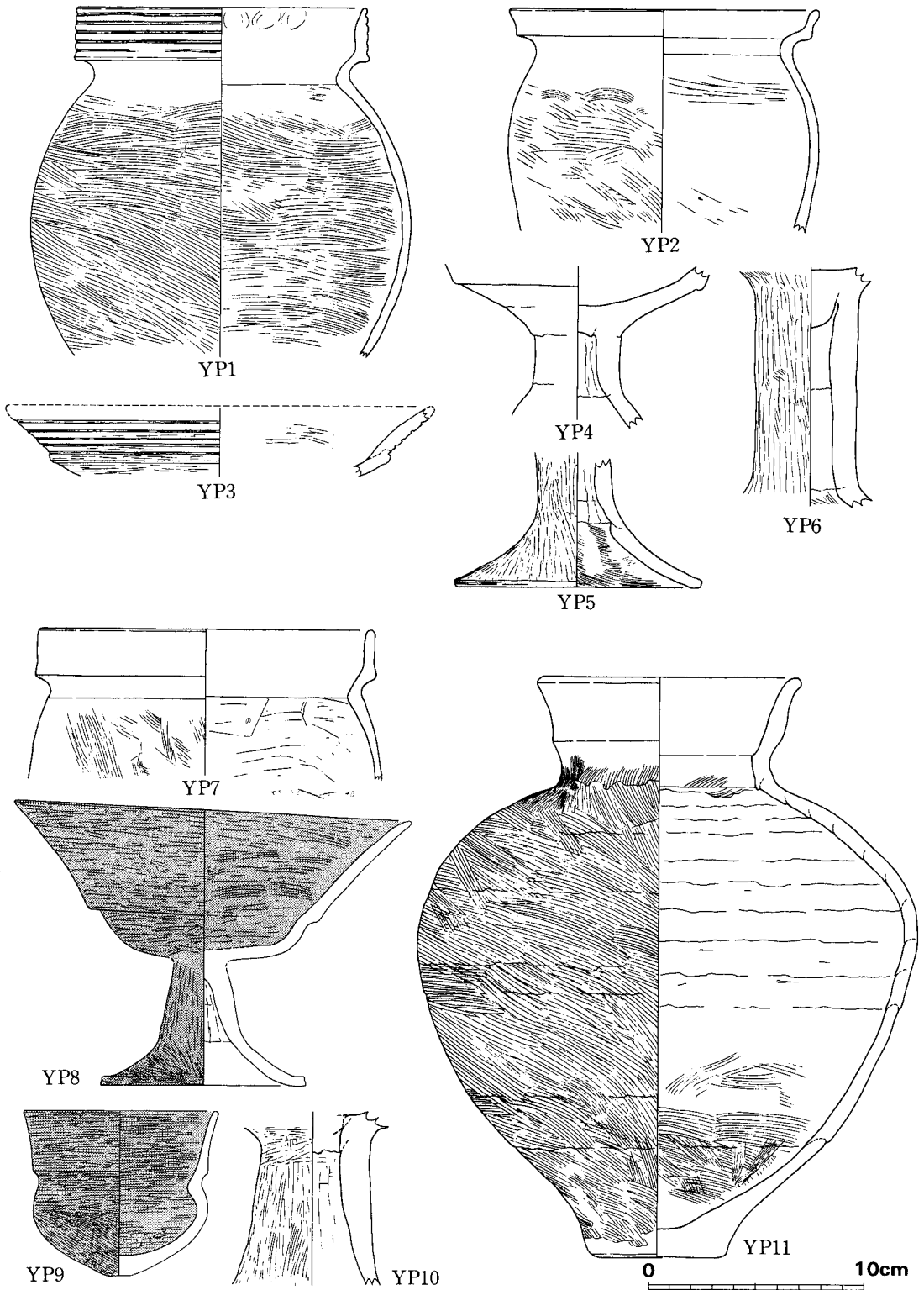


第3号土坑(土器は1/9)



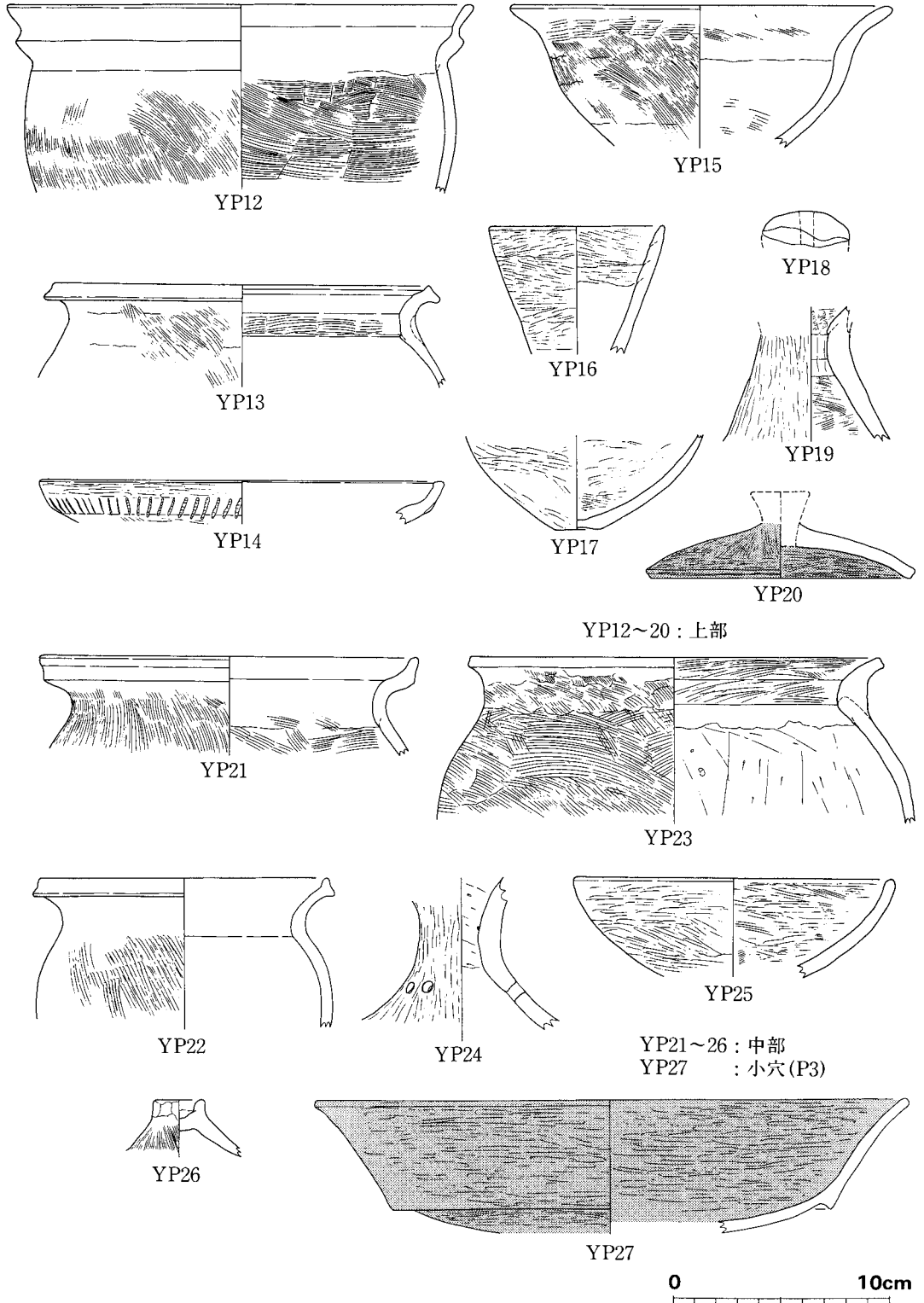
第12号土坑(土器は1/9)

第18図 第3・12号土坑(S=1/20)

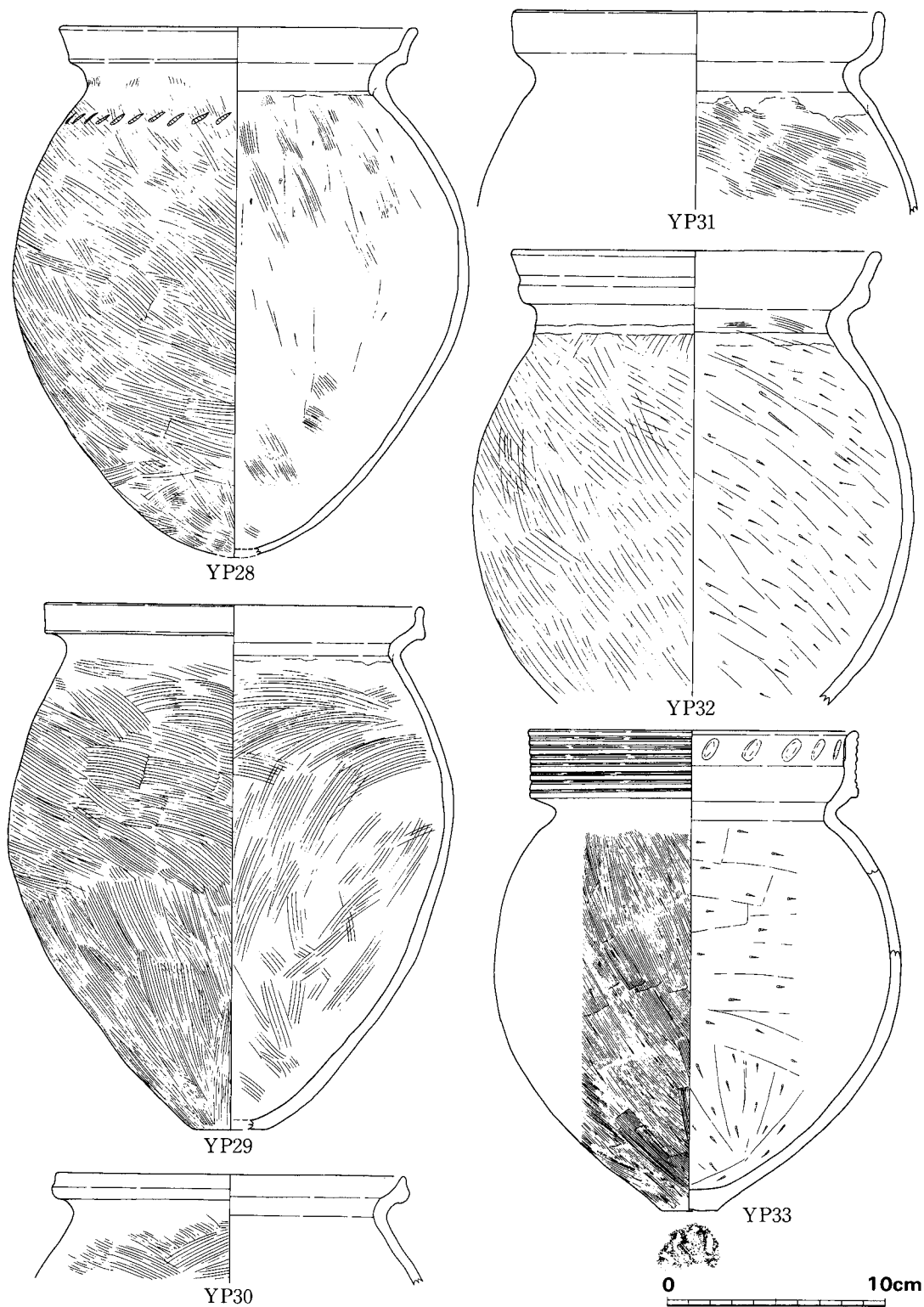


第19図 第1・4号竖穴出土土器(S=1/3)

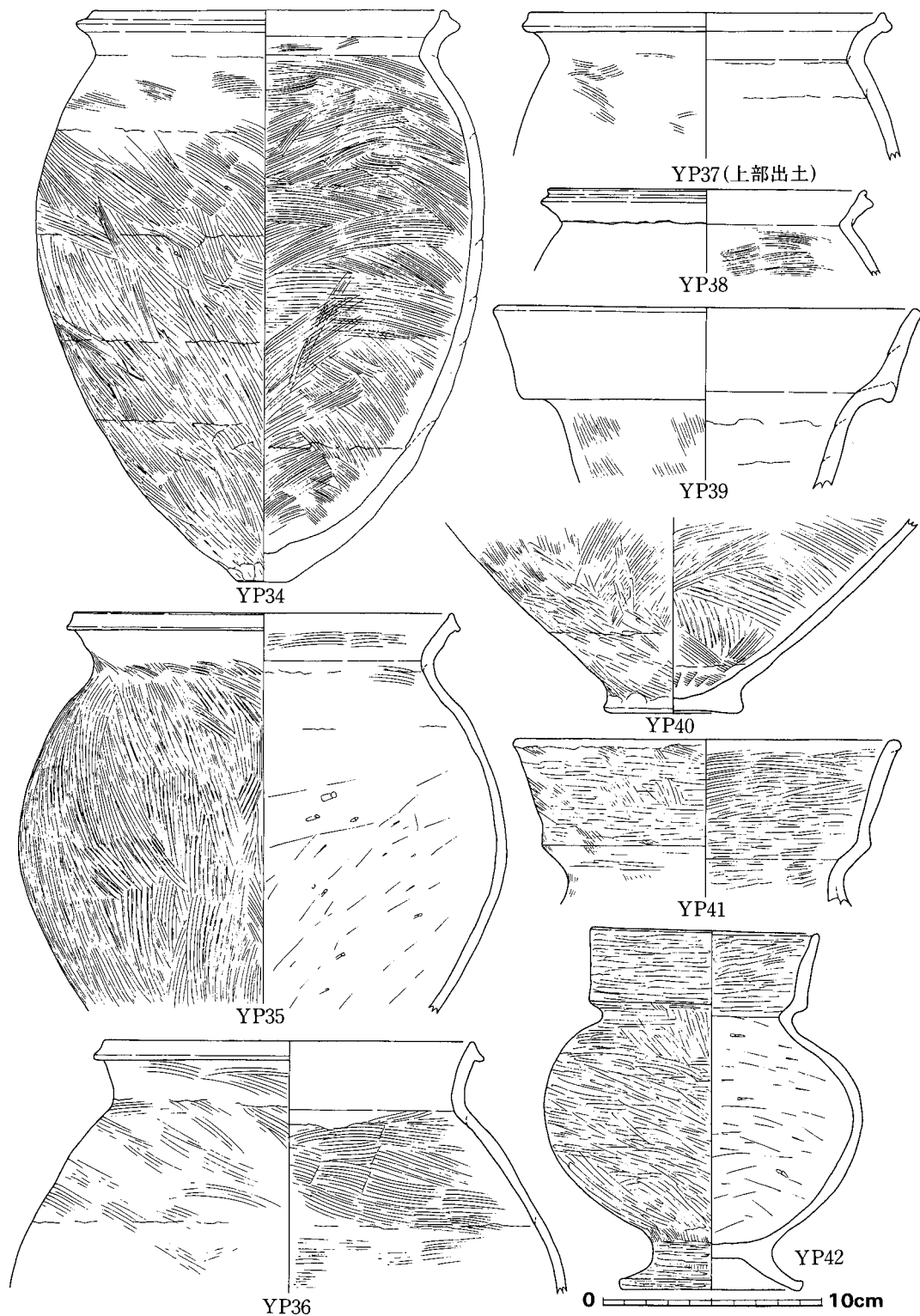
第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物



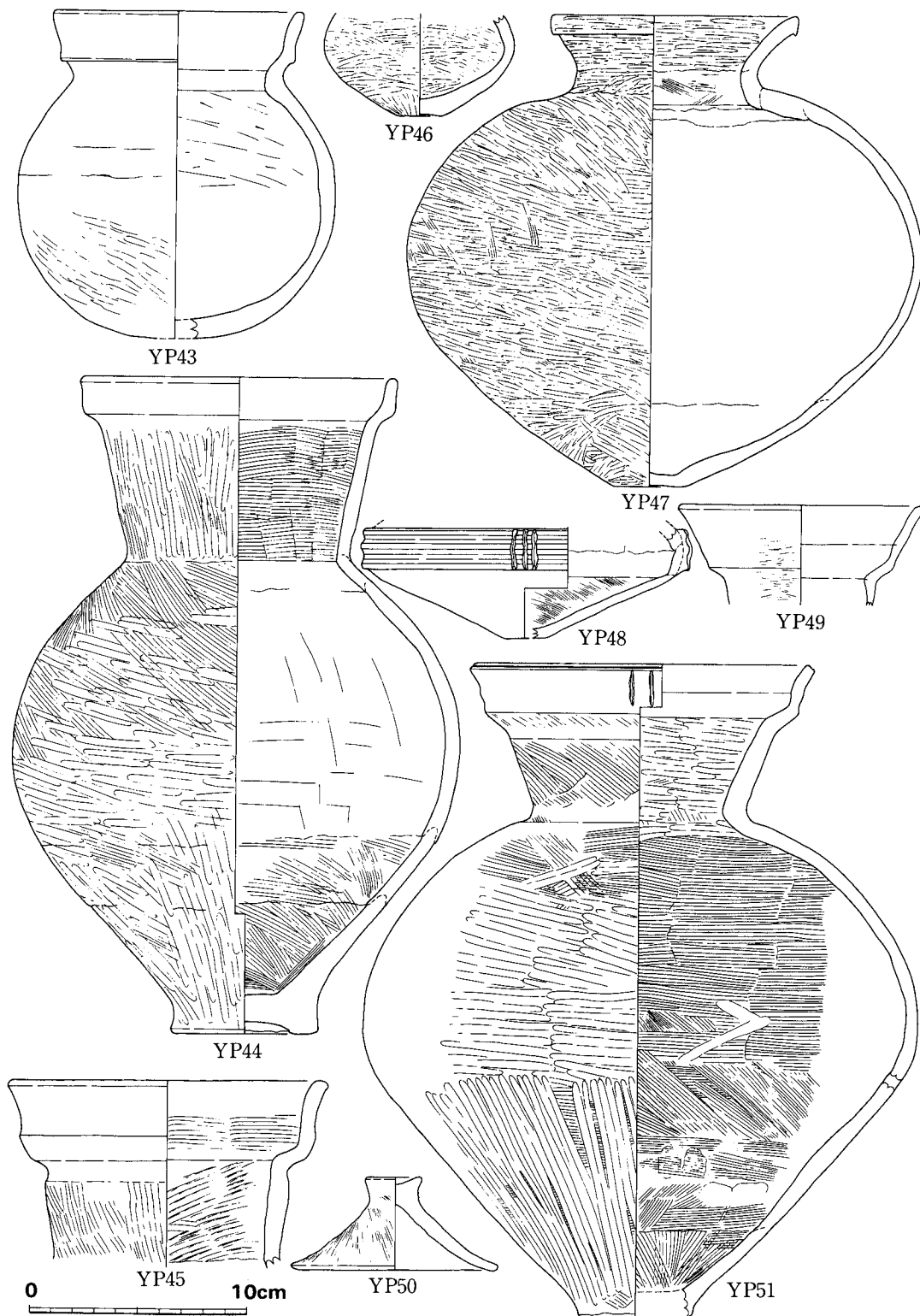
第20図 第2号竖穴式建物上部～中部・他出土土器(S=1/3)



第21図 第2号竖穴下部出土土器(S=1/3)

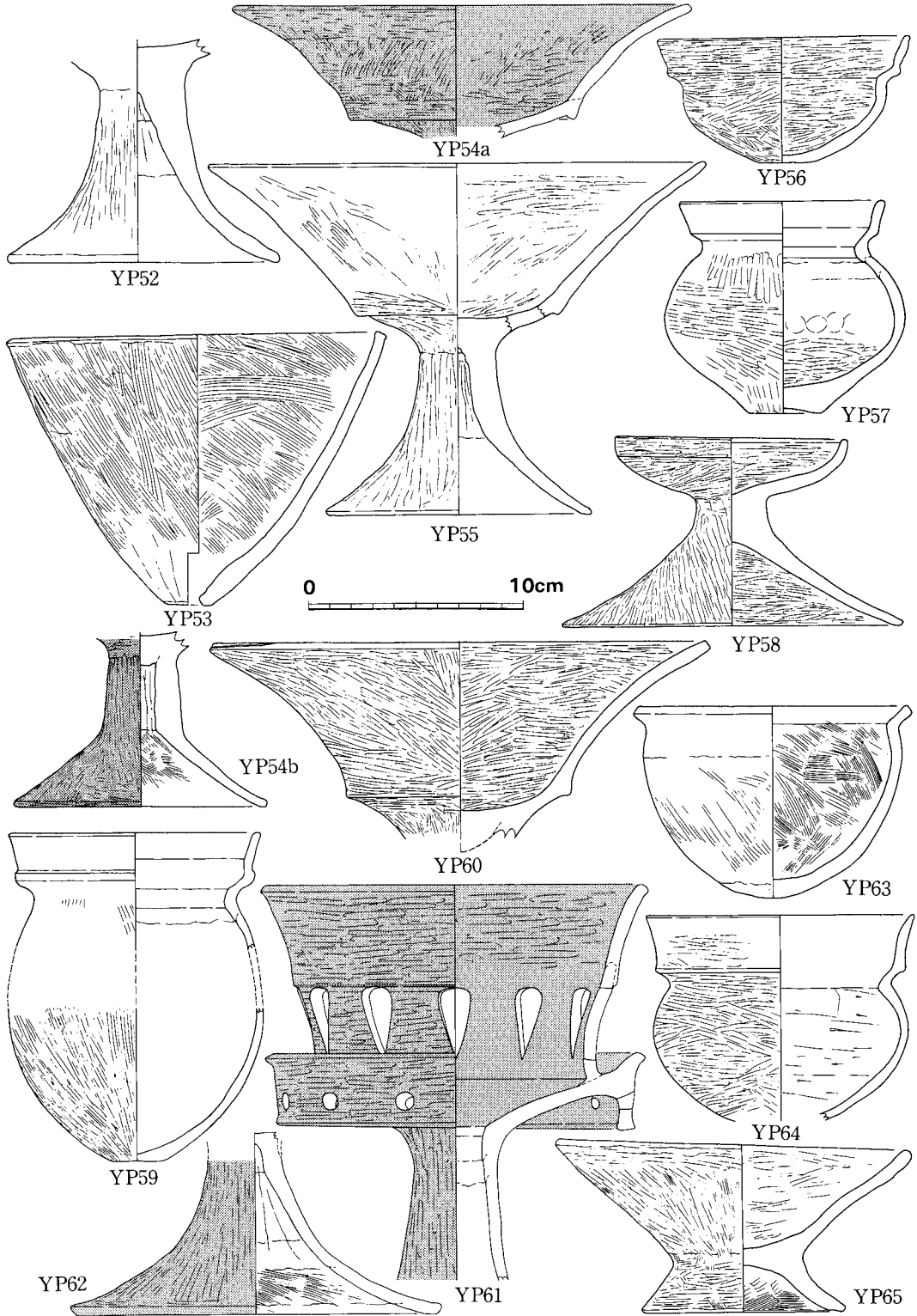


第22図 第2号竖穴下部他出土土器(S=1/3)

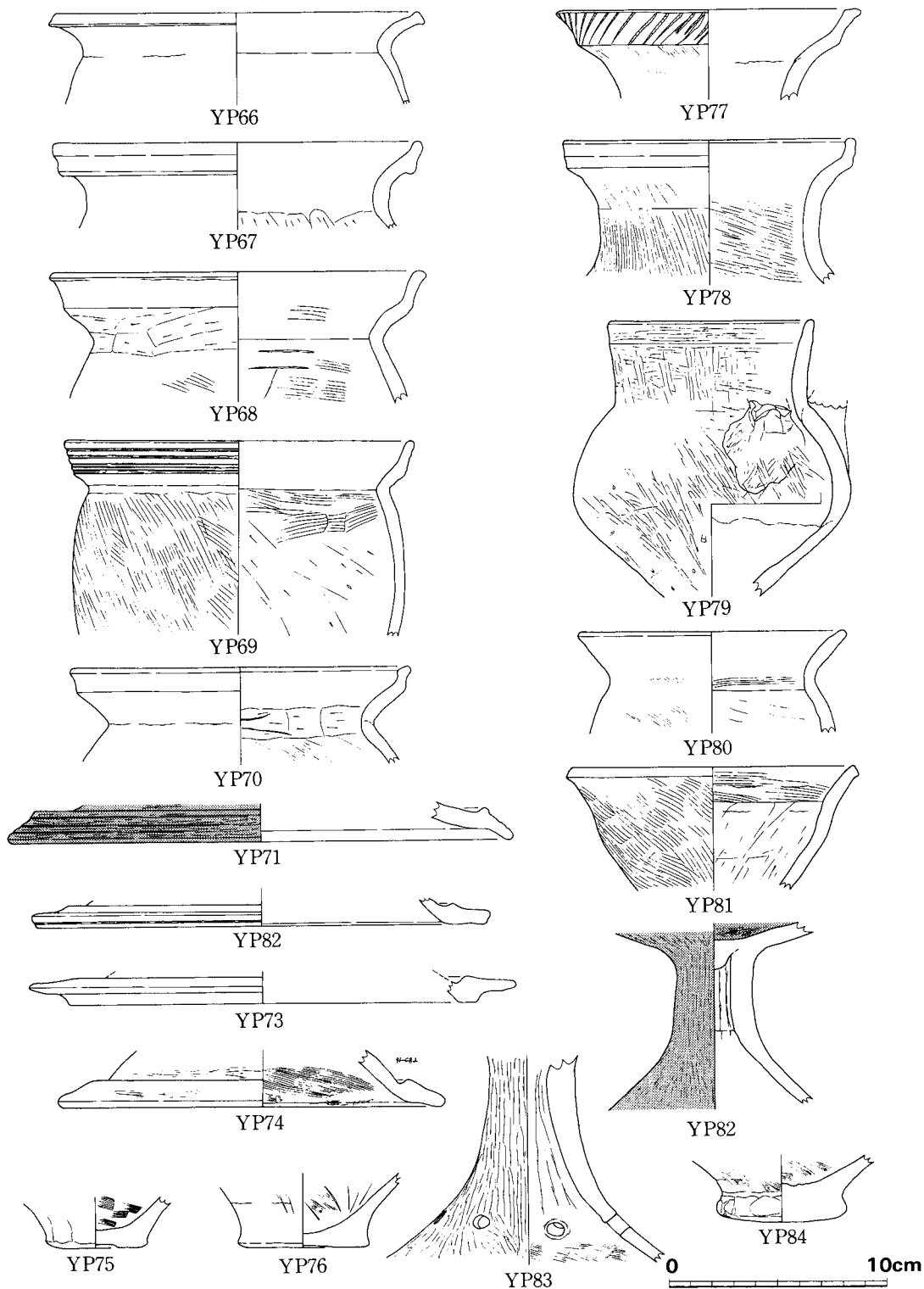


第23図 第2号竖穴下部出土土器(S=1/3)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

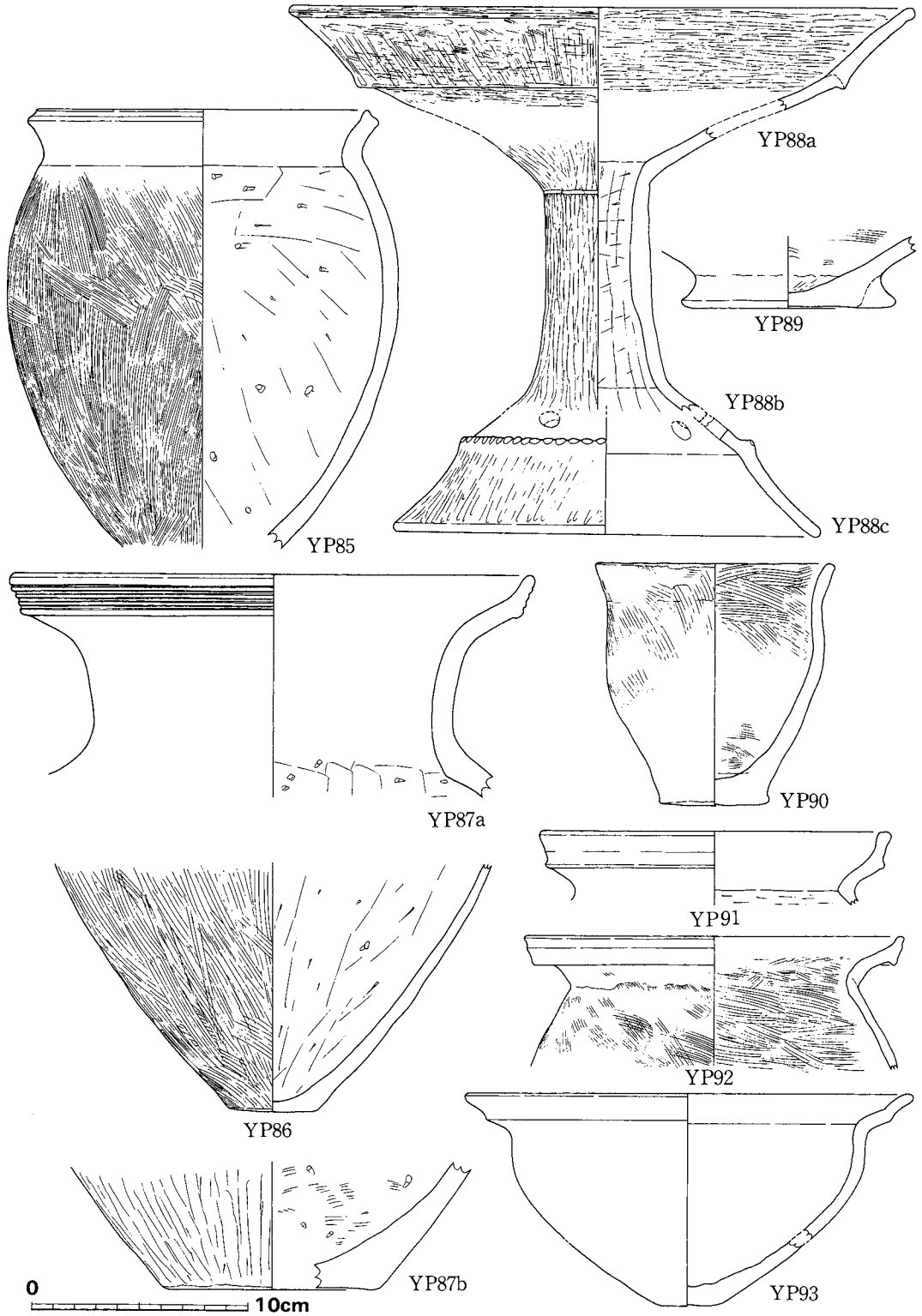


第24図 第2号竖穴下部出土土器(S=1/3)

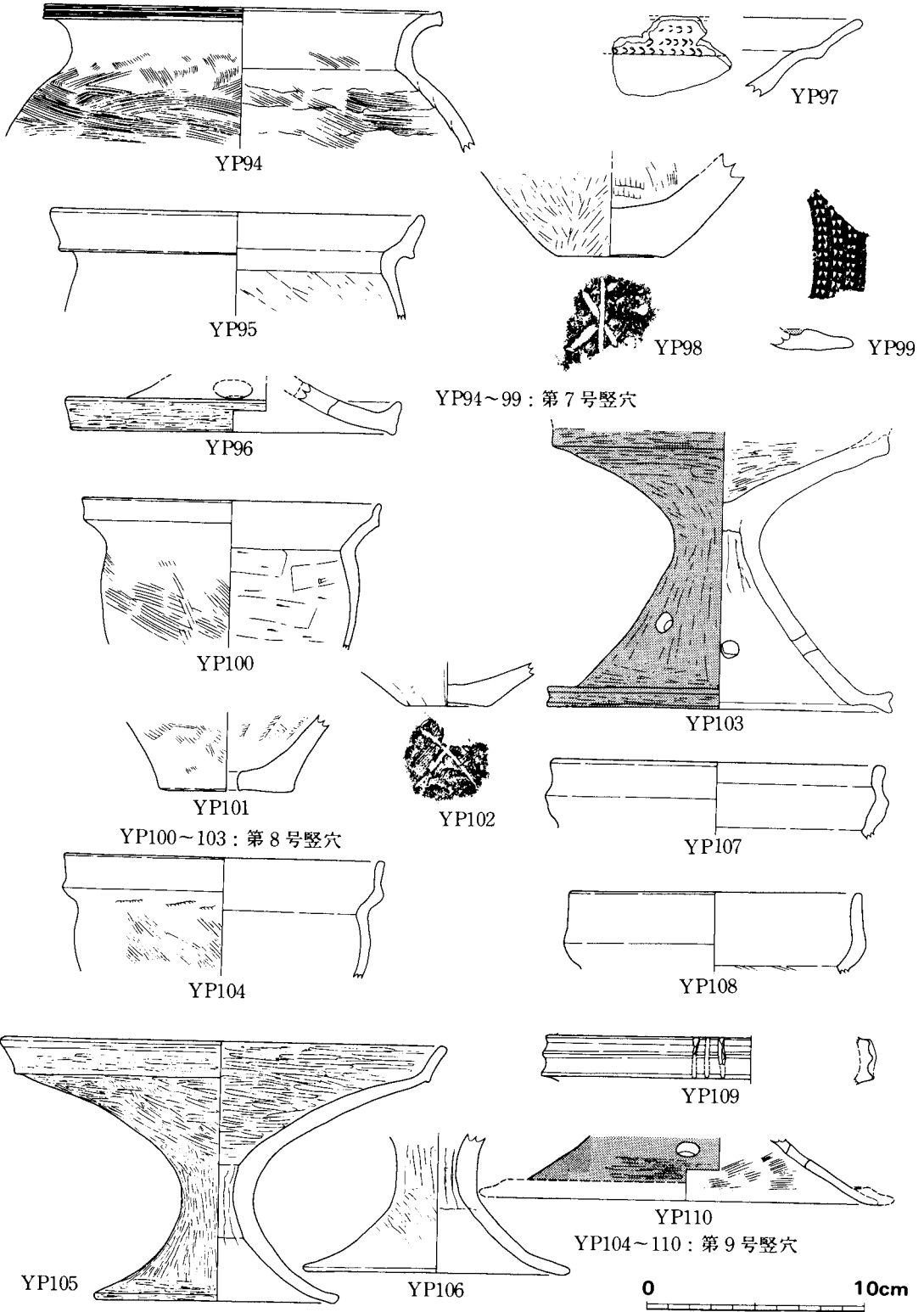


第25図 第3号竪穴式建物上部~中部・他出土土器(S=1/3)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物



第26図 第3号竖穴下部他出土土器(S=1/3)



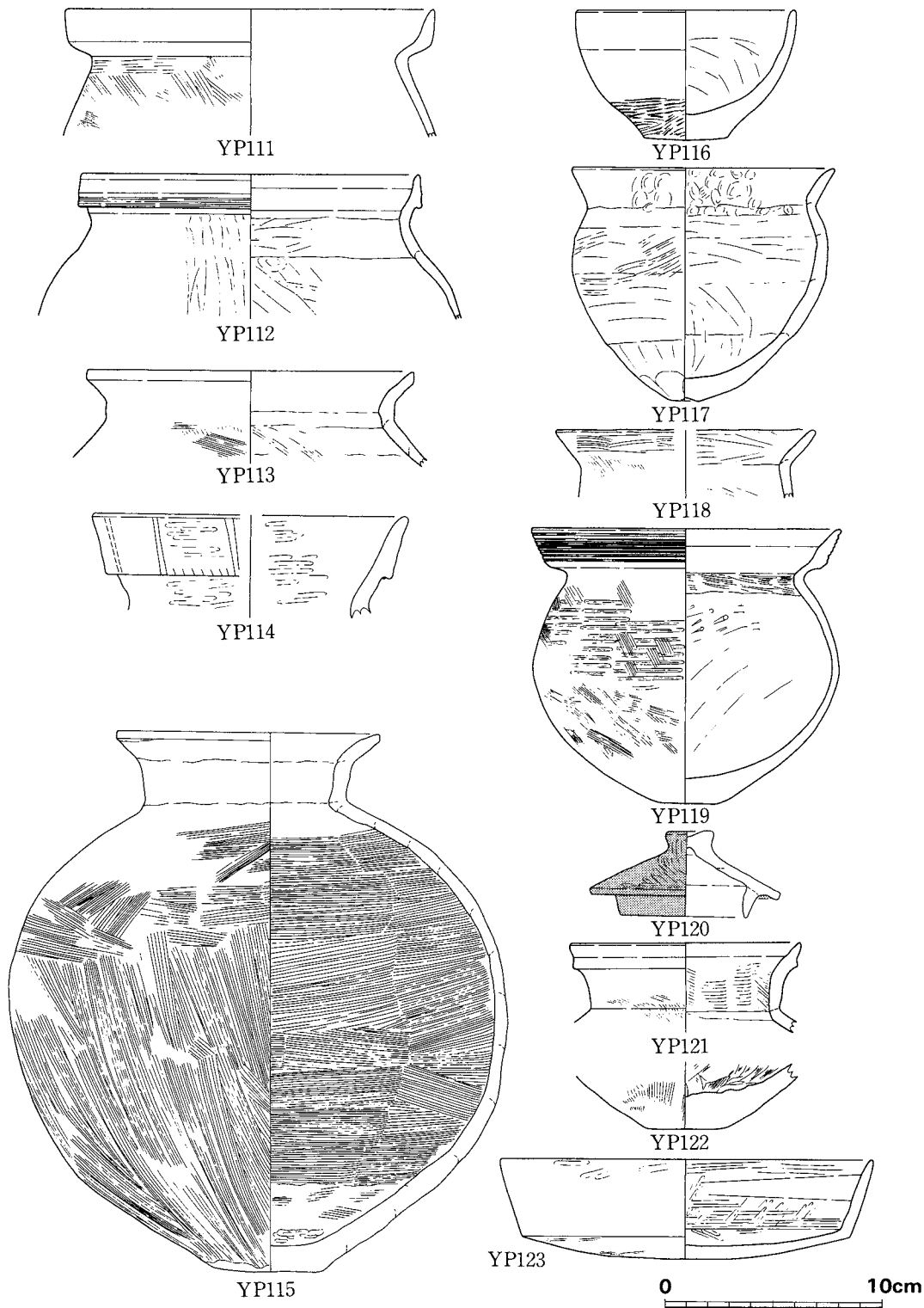
YP94~99: 第7号竖穴

YP100~103: 第8号竖穴

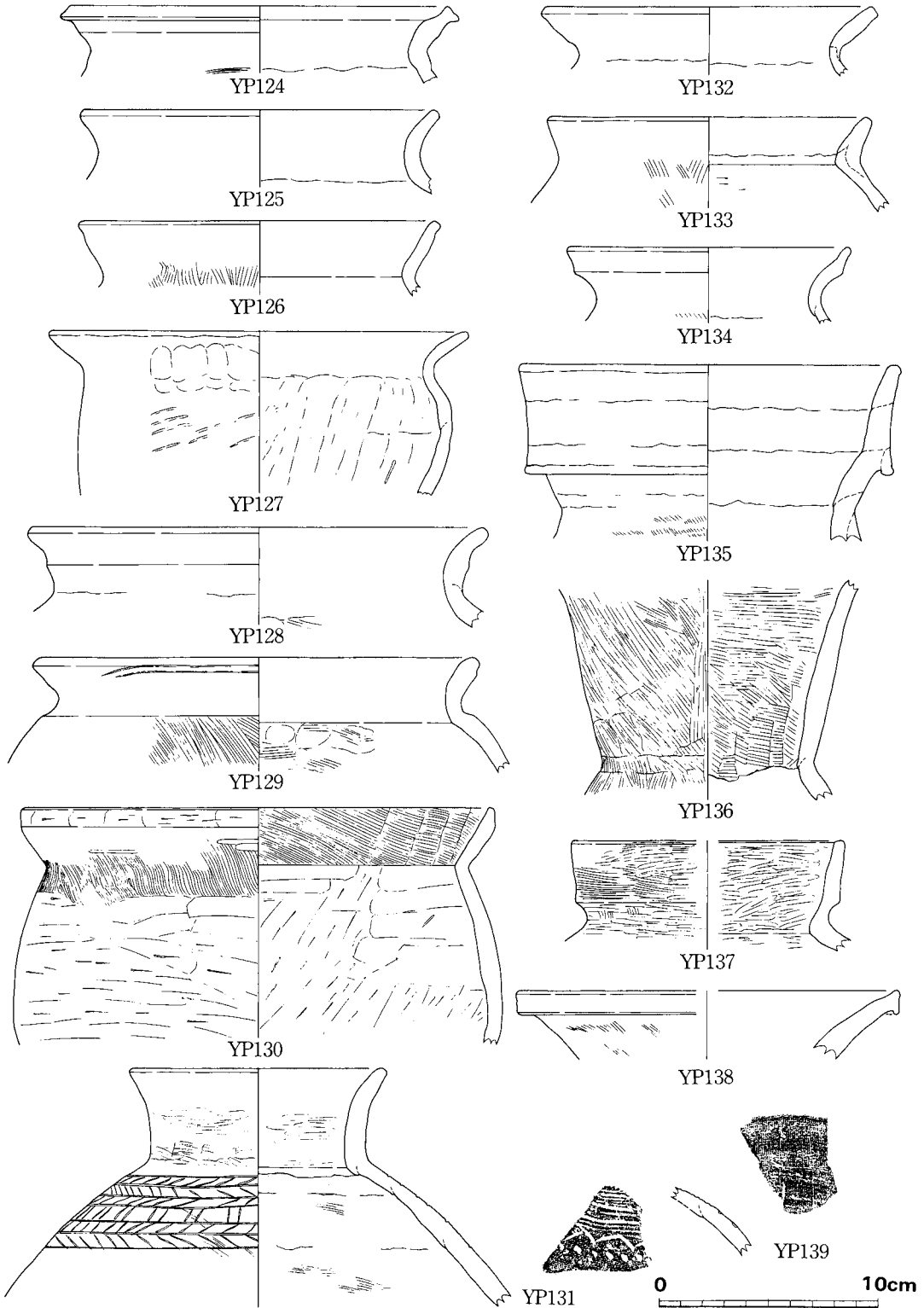
YP104~110: 第9号竖穴

第27図 第7~9号竖穴出土土器(S=1/3)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

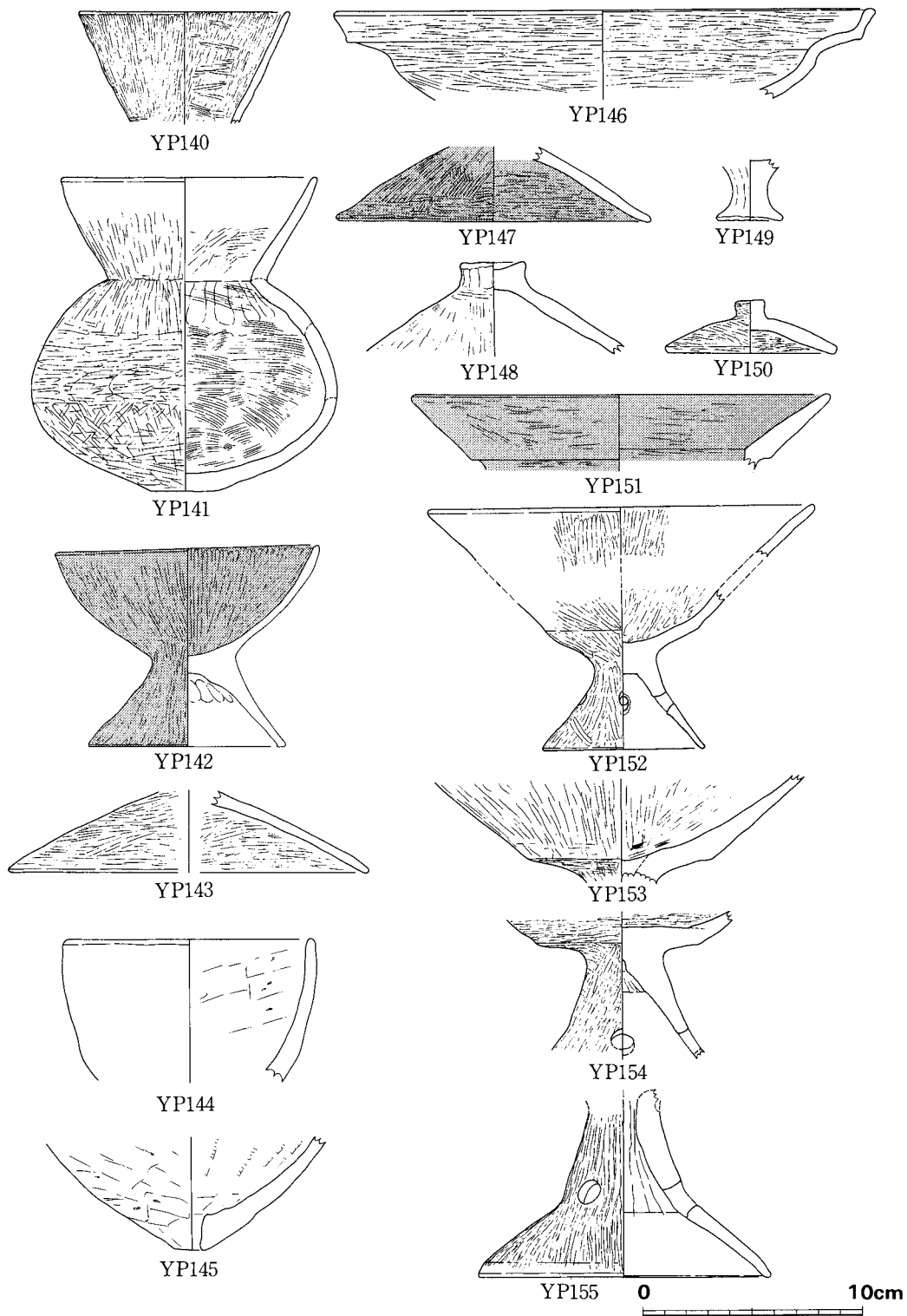


第28図 第10号竖穴式建物出土土器(S=1/3)

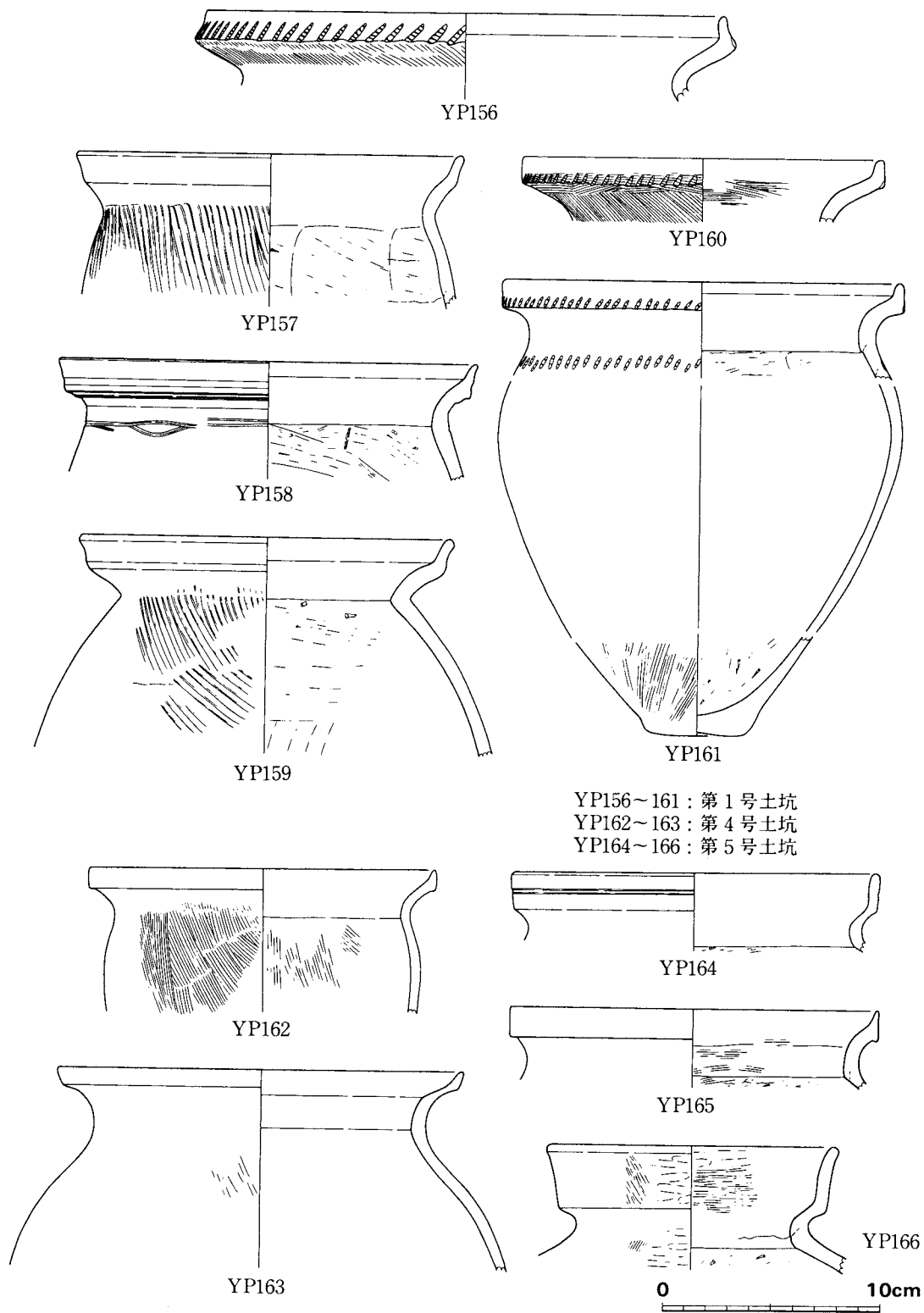


第29図 第12号竖穴式建物出土土器(S=1/3)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物



第30図 第12号竖穴式建物出土土器(S=1/3)

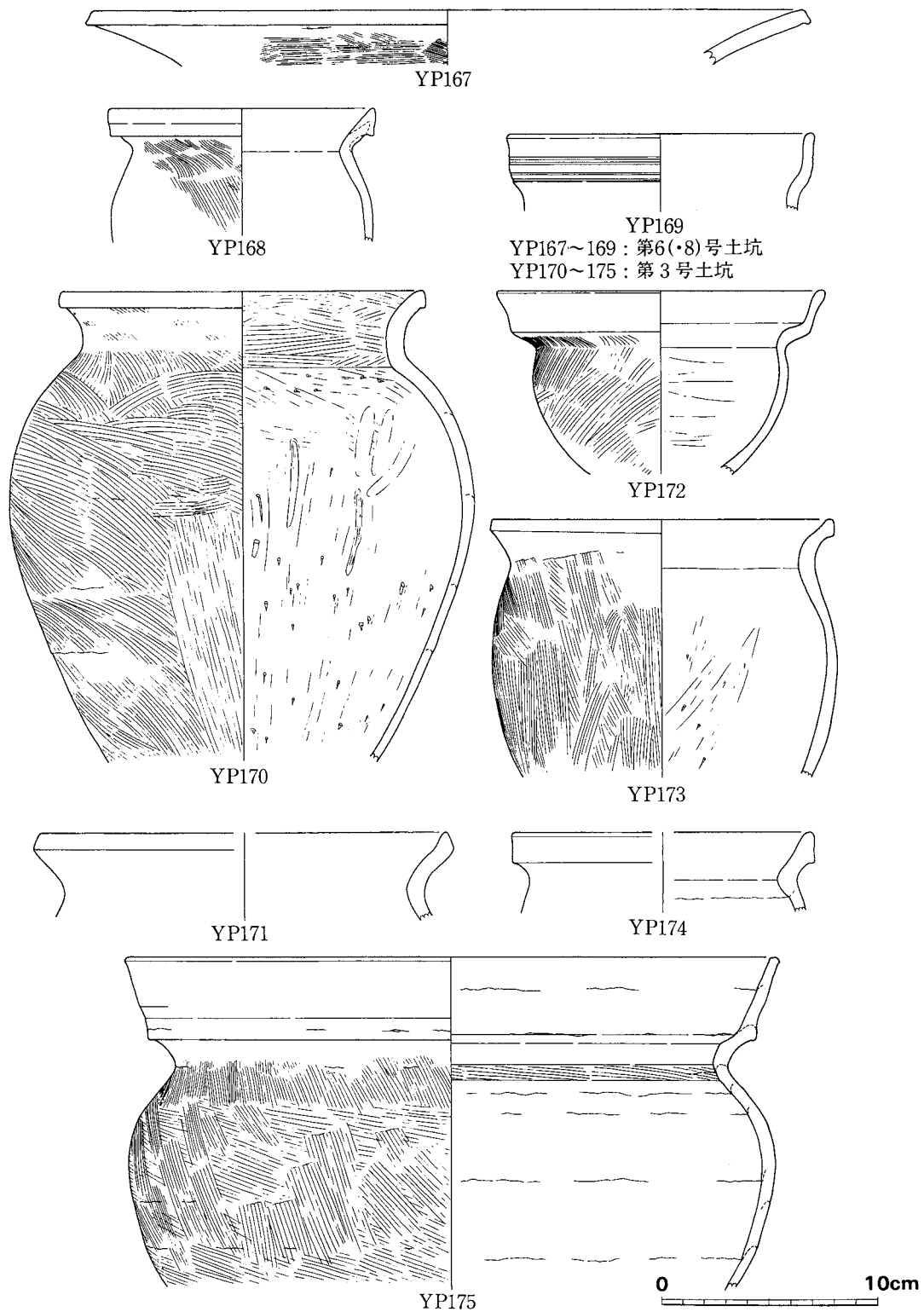


YP156~161 : 第1号土坑

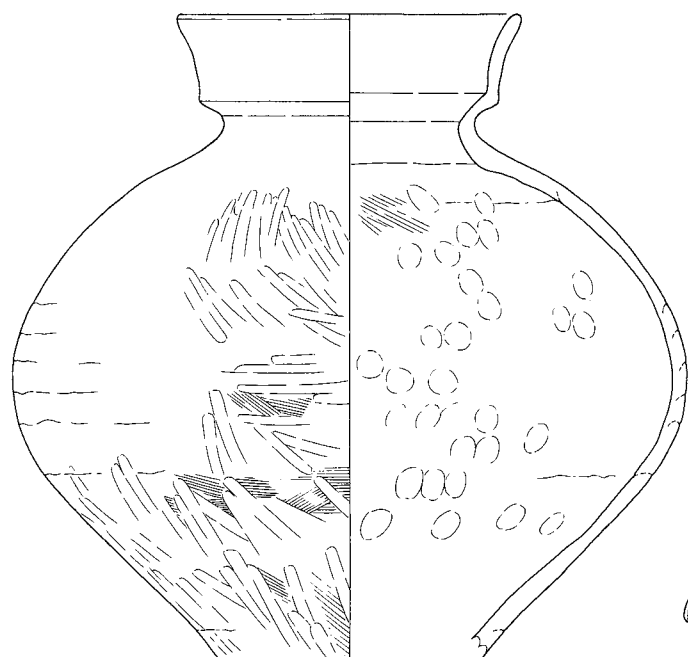
YP162~163 : 第4号土坑

YP164~166 : 第5号土坑

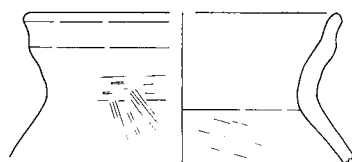
第31図 第1・4・5号土坑出土土器(S=1/3)



第32図 第3・6・(・8)号土坑出土土器(S=1/3)



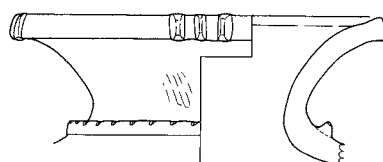
YP176



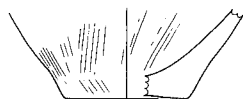
YP181



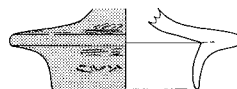
YP182



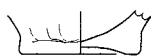
YP183



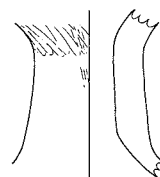
YP177



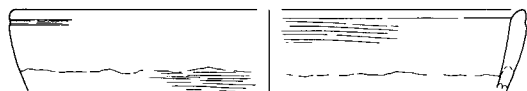
YP184



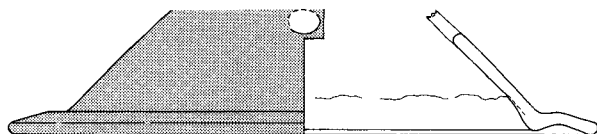
YP178



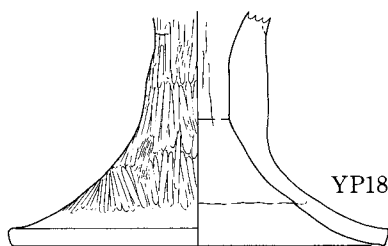
YP185



YP179



YP180

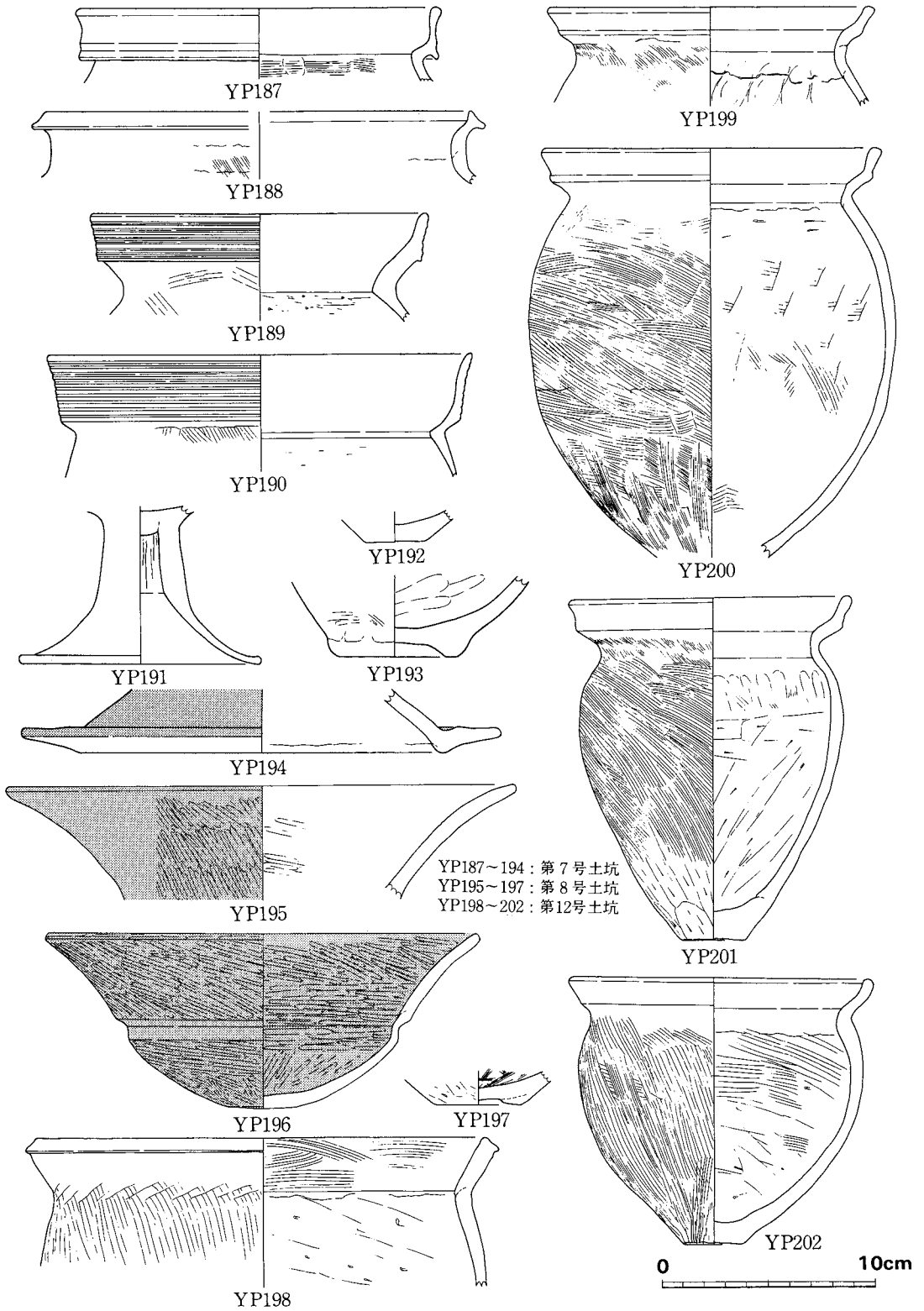


YP186

0 10cm

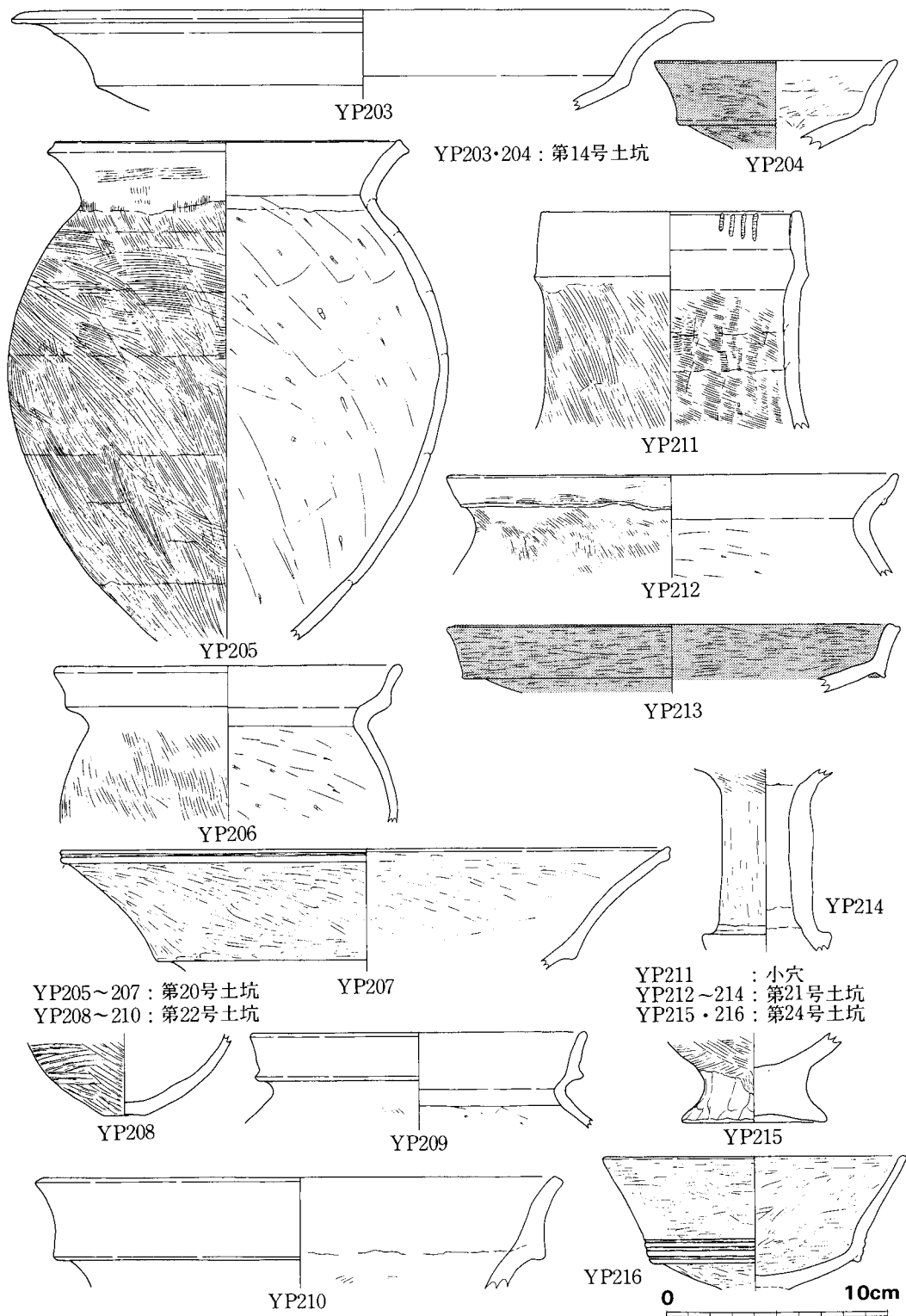
第33図 第3号土坑出土土器(S=1/3)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物



YP187～194：第7号土坑
 YP195～197：第8号土坑
 YP198～202：第12号土坑

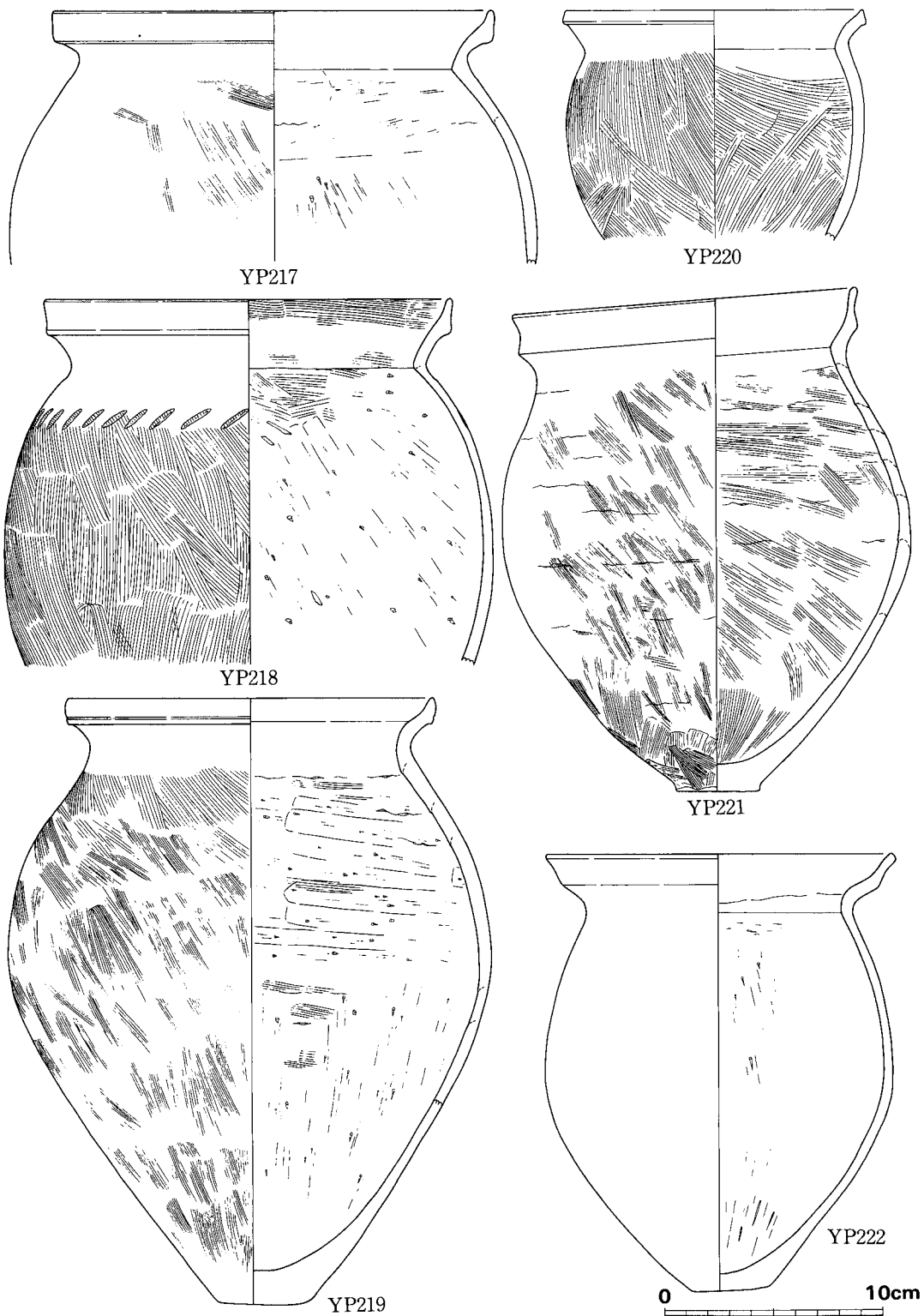
第34図 第7・8・12号土坑出土土器(S=1/3)



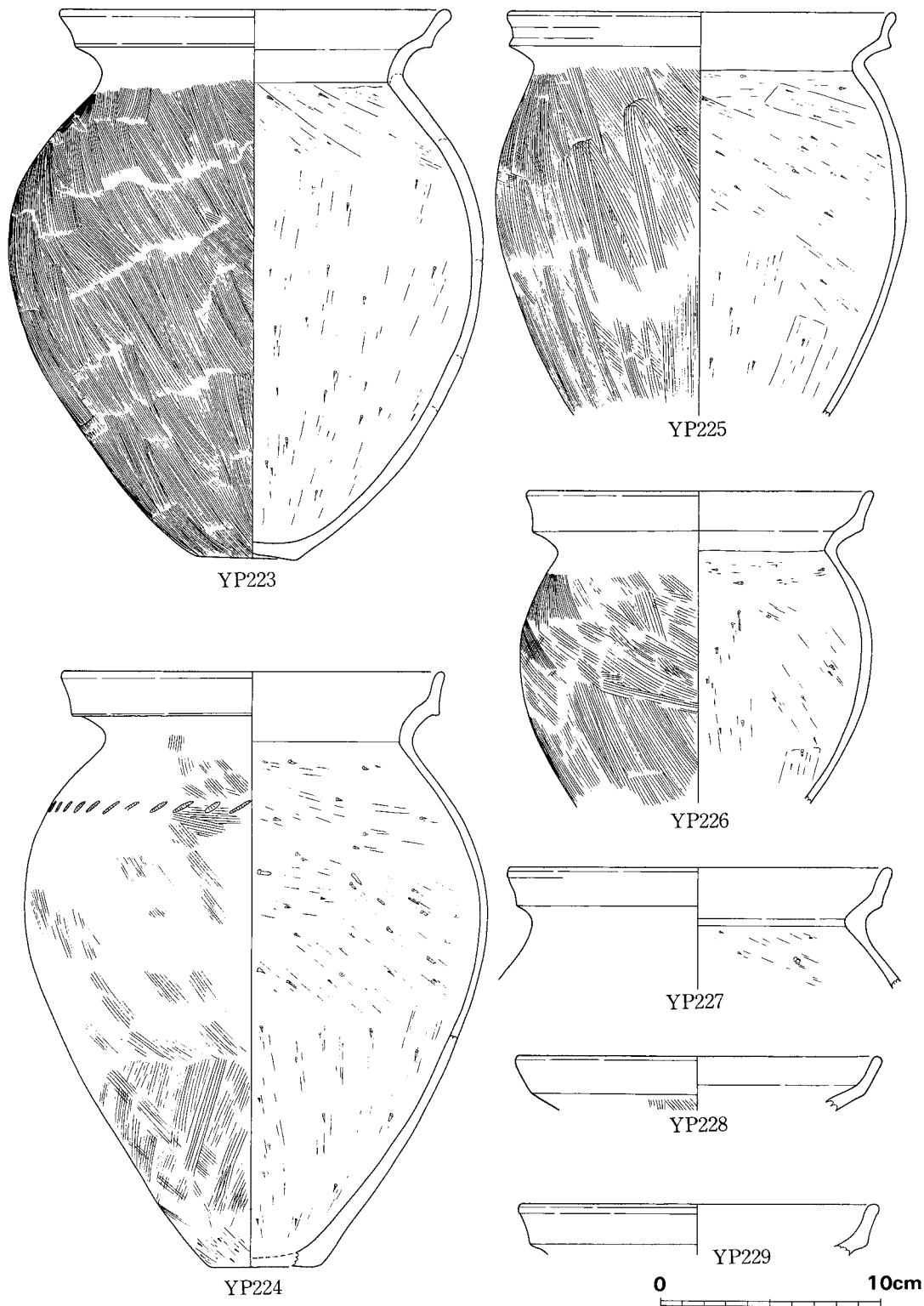
YP205～207 : 第20号土坑
 YP208～210 : 第22号土坑

YP211 : 小穴
 YP212～214 : 第21号土坑
 YP215・216 : 第24号土坑

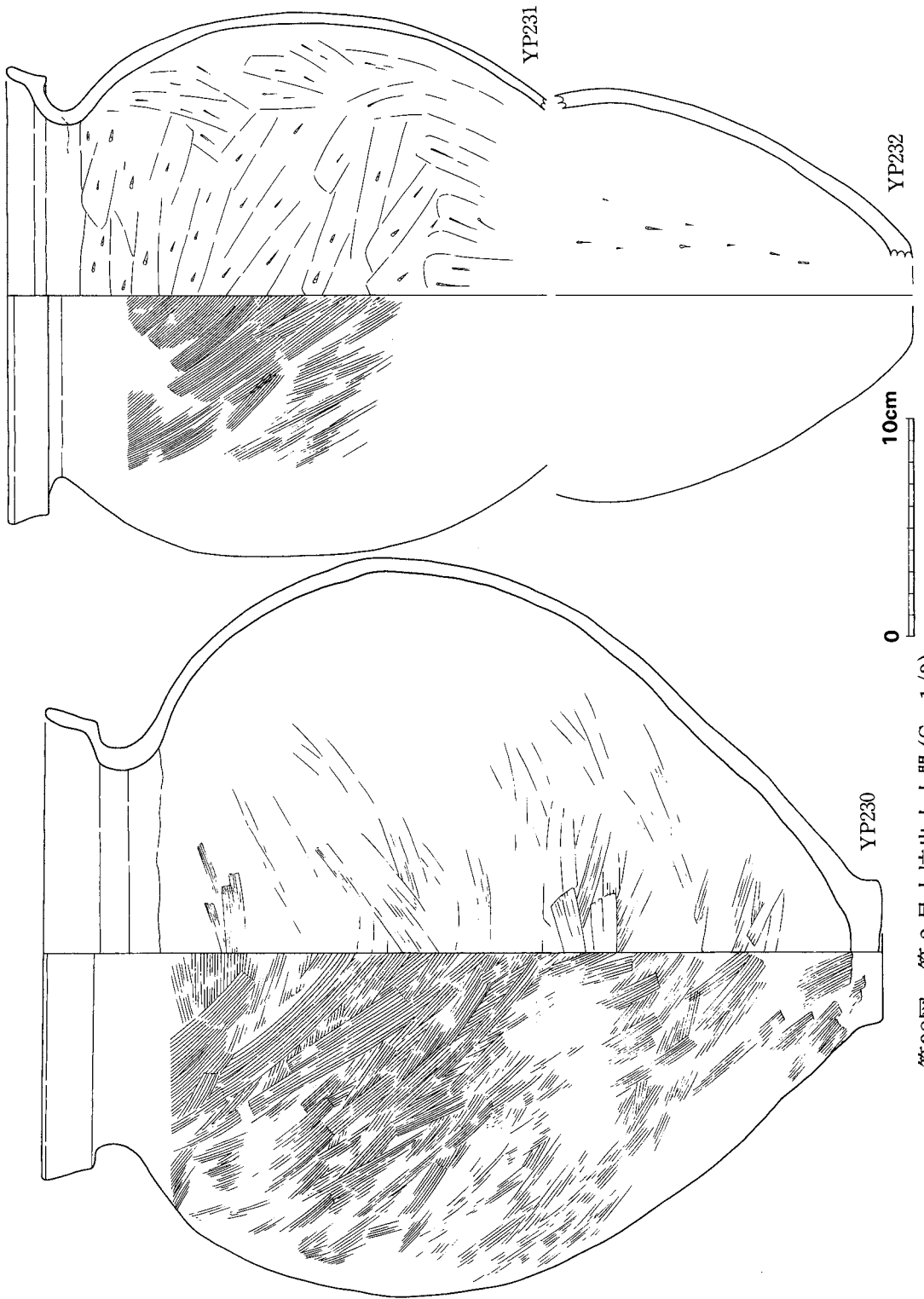
第35図 第14・20～22・24号土坑他出土土器(S=1/3)



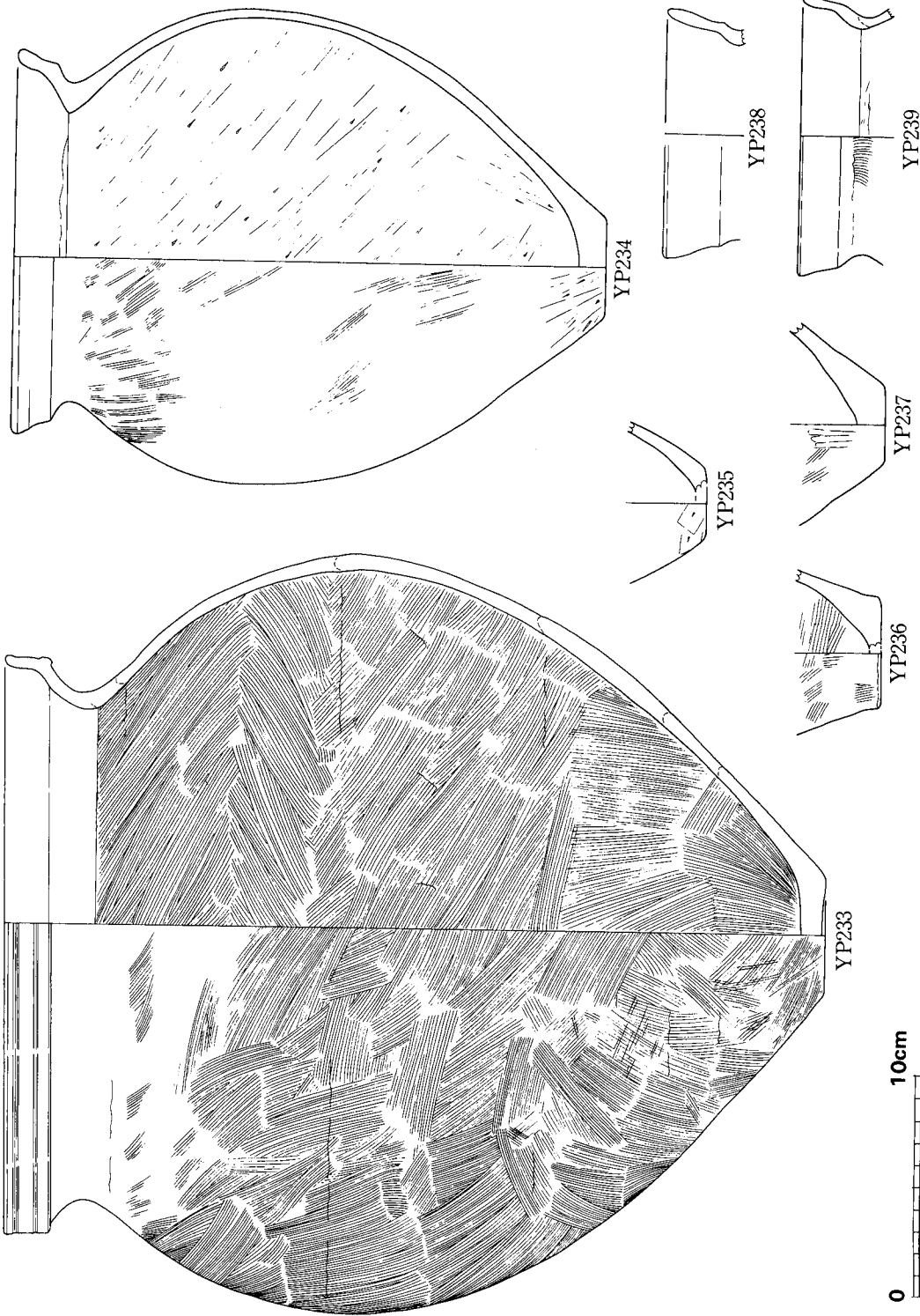
第36図 第2号土坑出土土器(S=1/3)



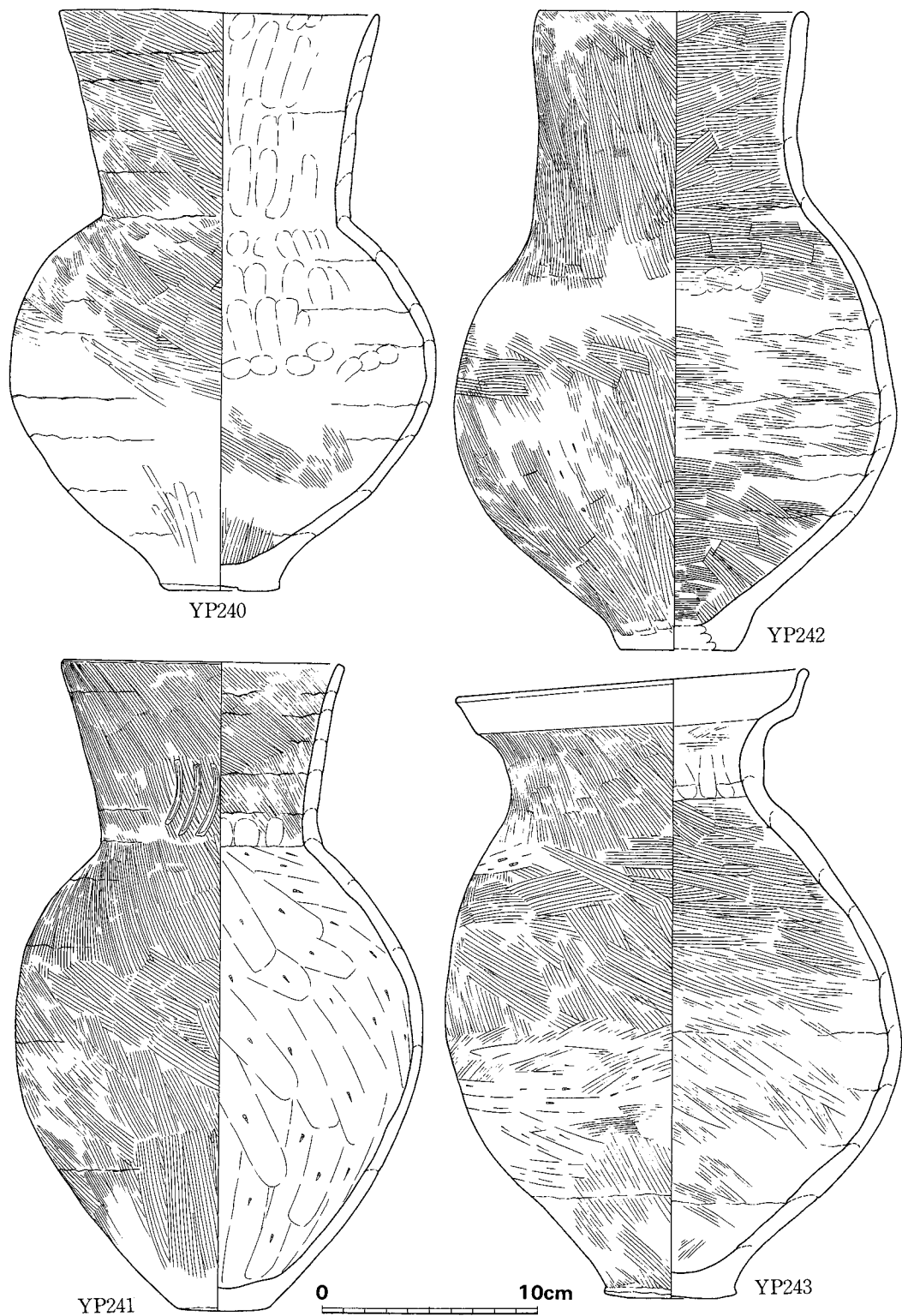
第37図 第2号土坑出土土器(S=1/3)



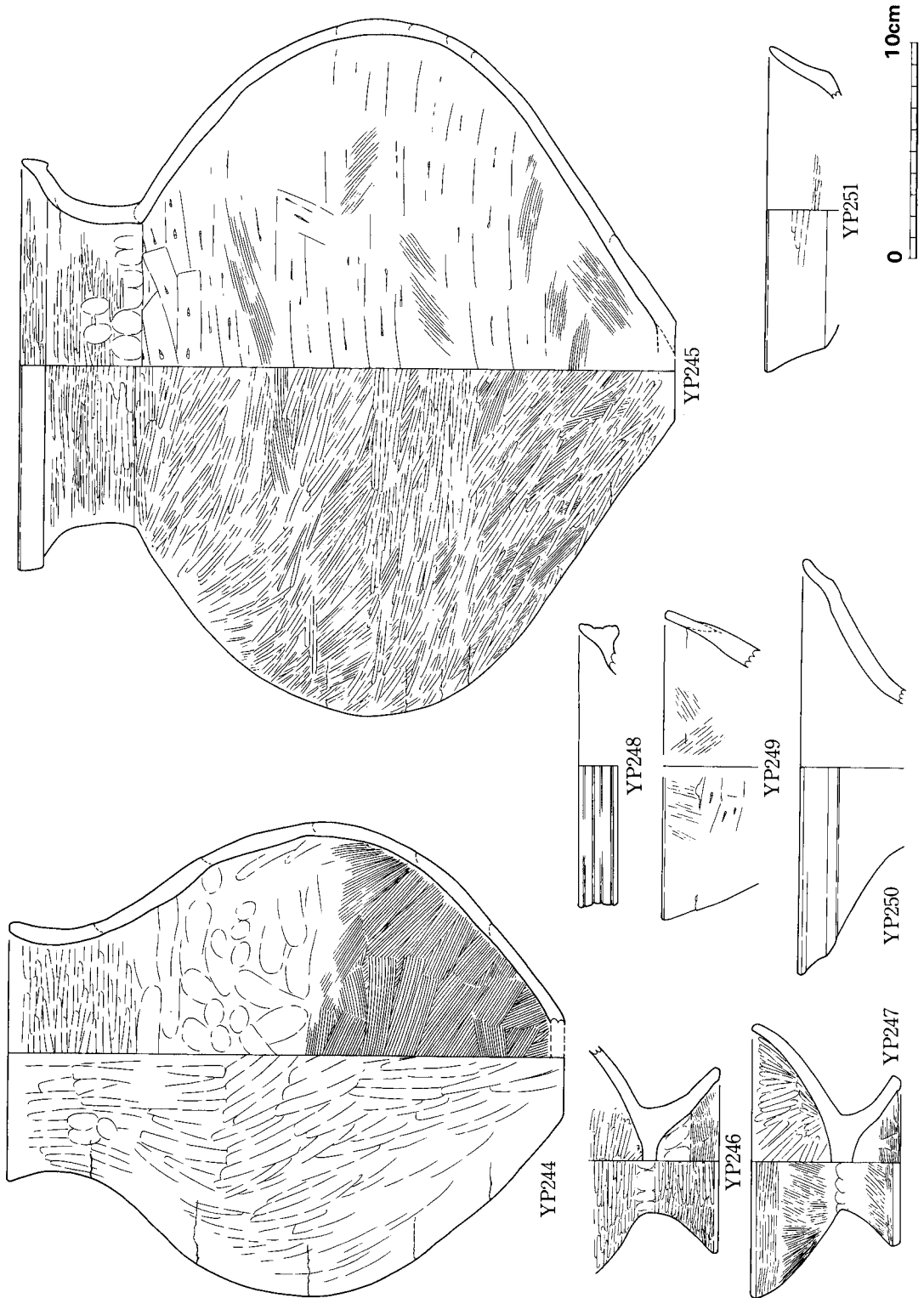
第38図 第2号土坑出土土器(S=1/3)



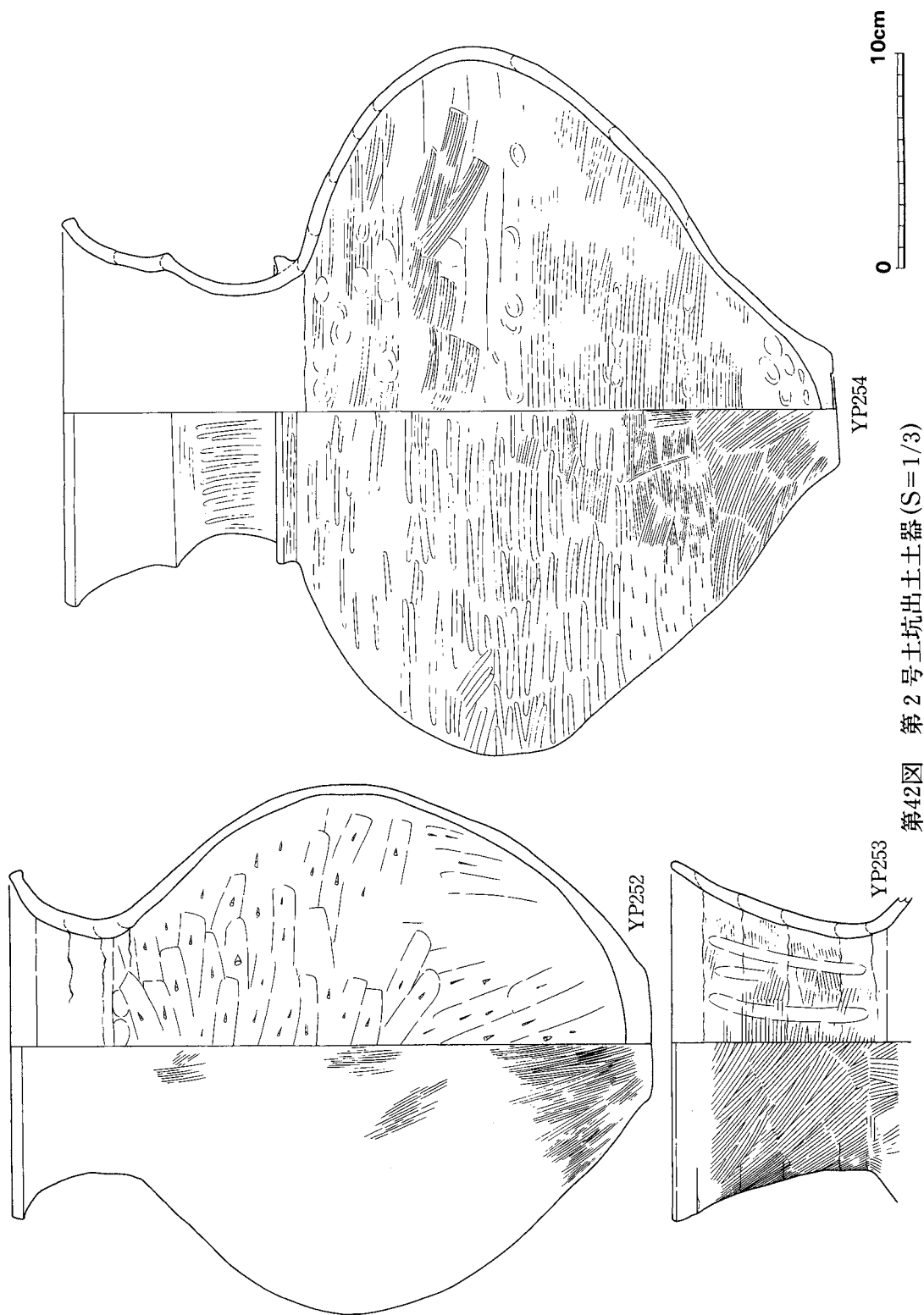
第39図 第2号土坑出土土器(S=1/3)



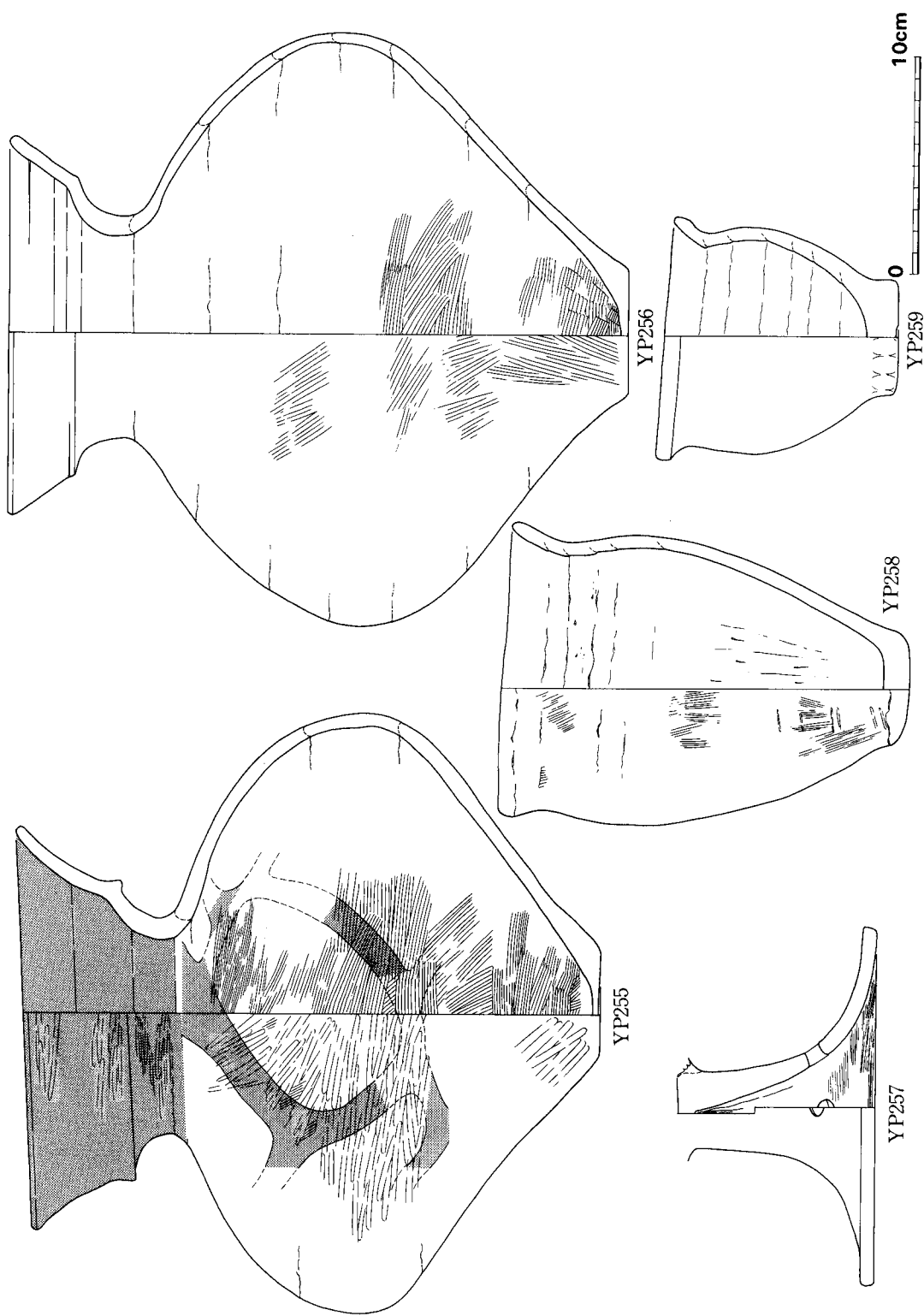
第40図 第2号土坑出土土器(S=1/3)



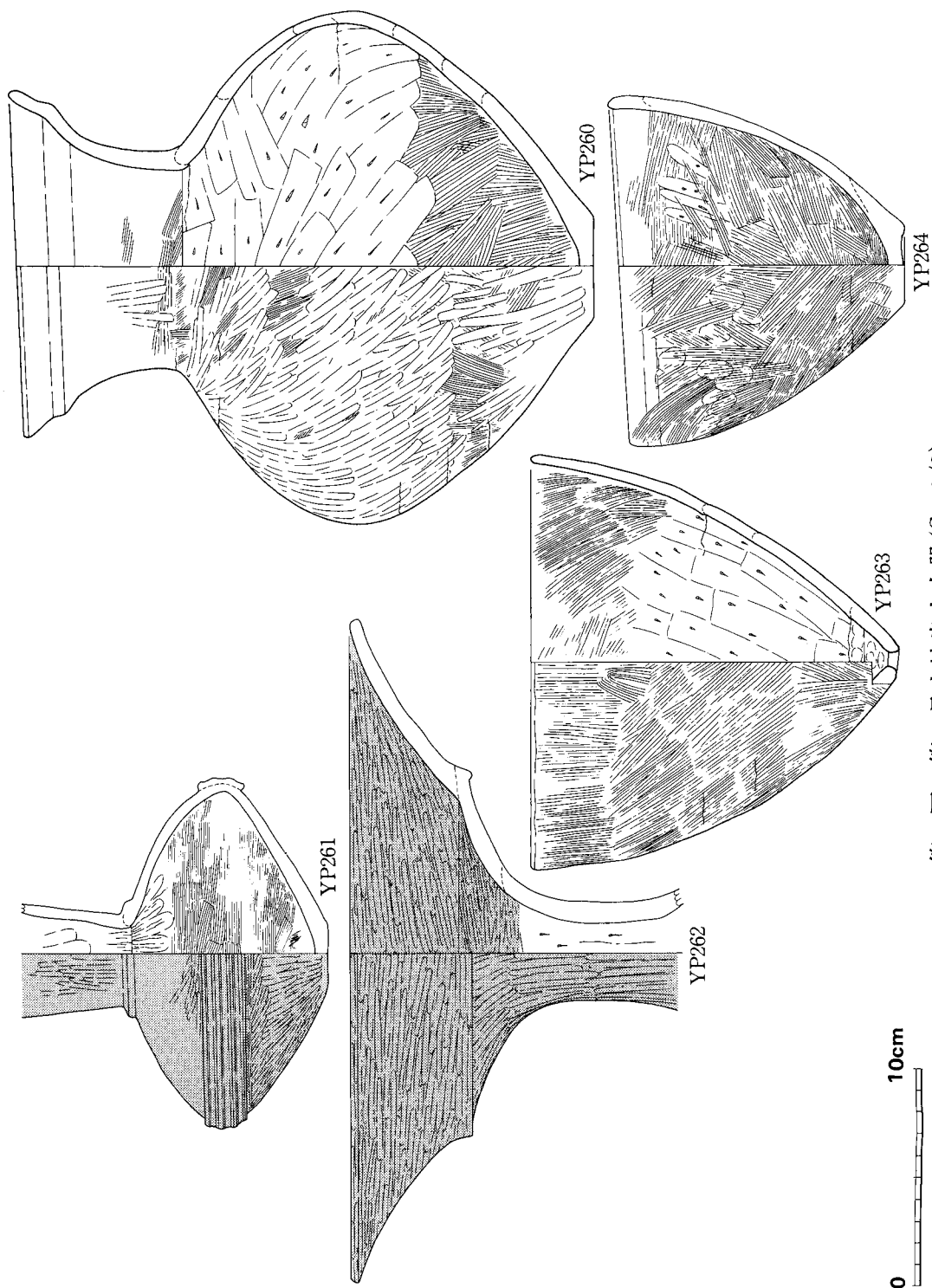
第41図 第2号土坑出土土器 (S=1/3)



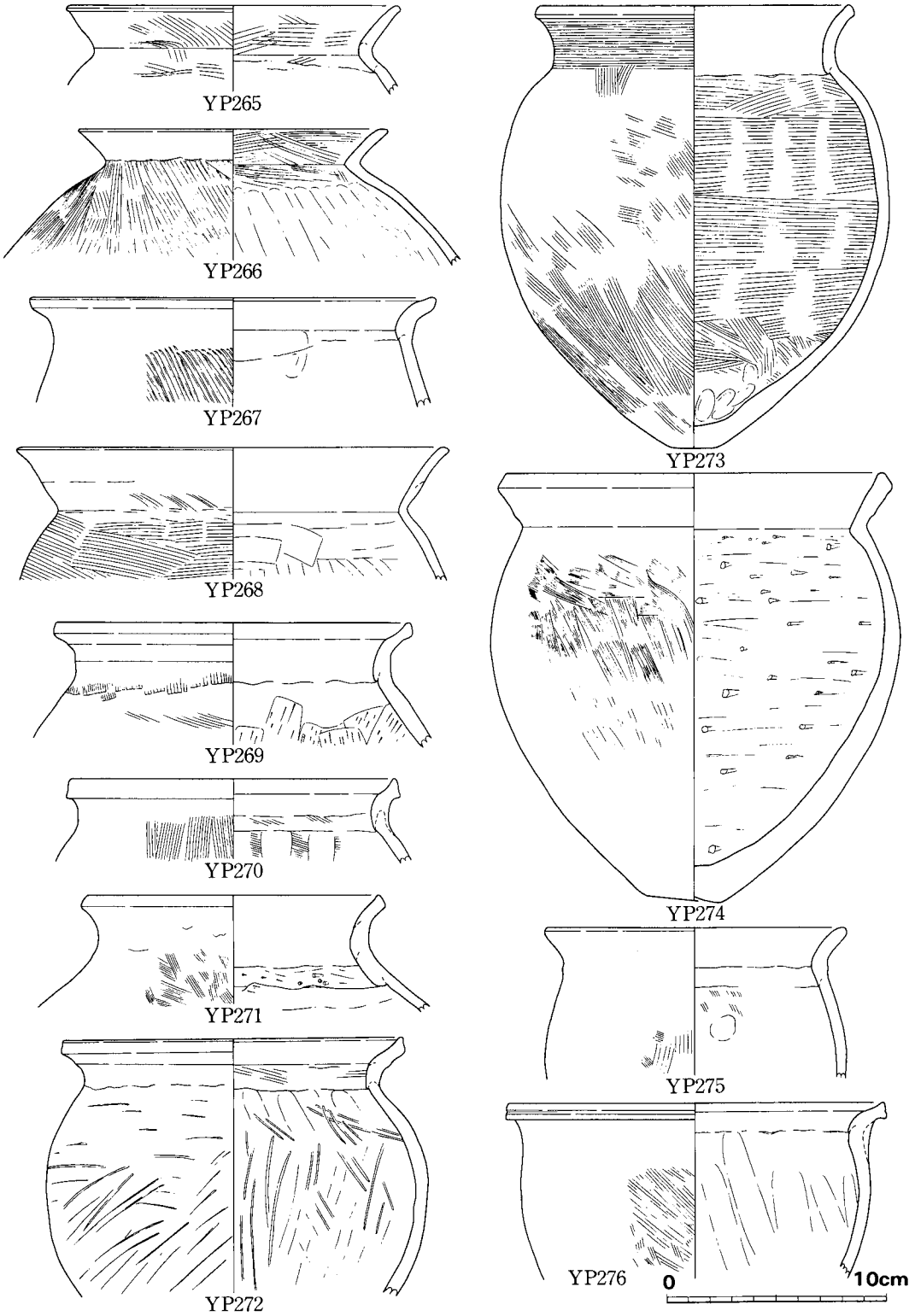
第42図 第2号土坑出土土器(S=1/3)



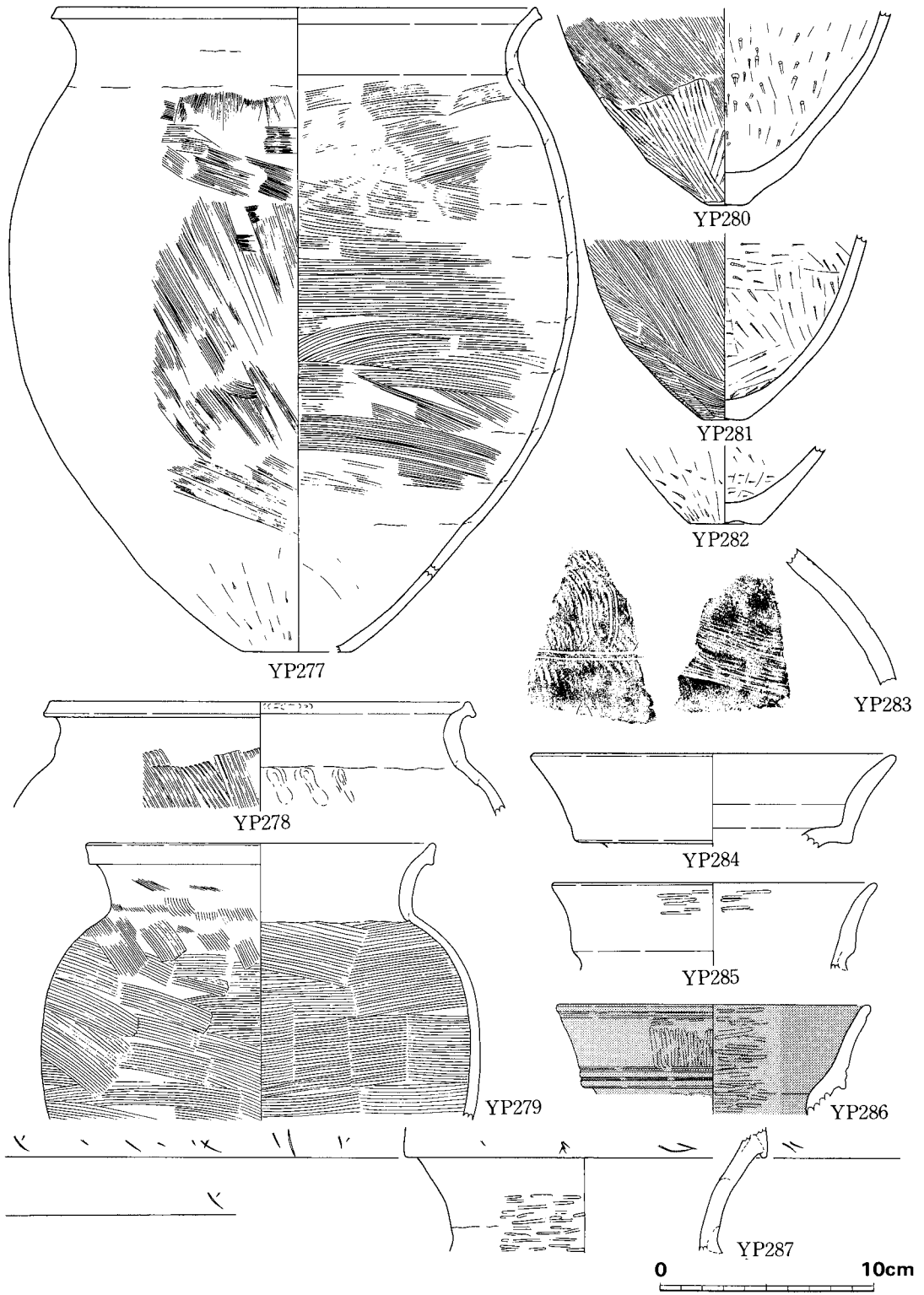
第43図 第2号土坑出土土器(S=1/3)



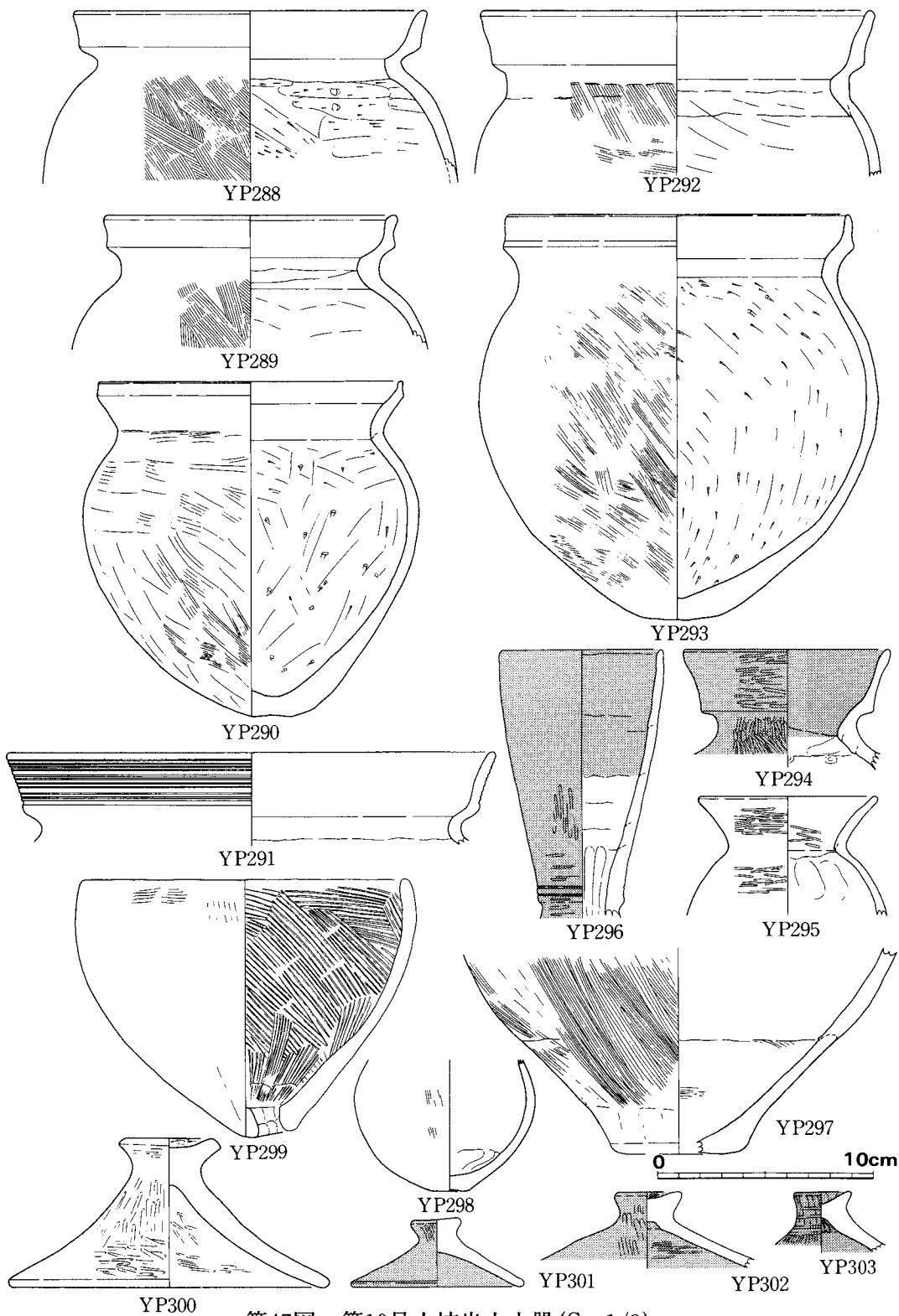
第44図 第2号土坑出土土器(S=1/3)



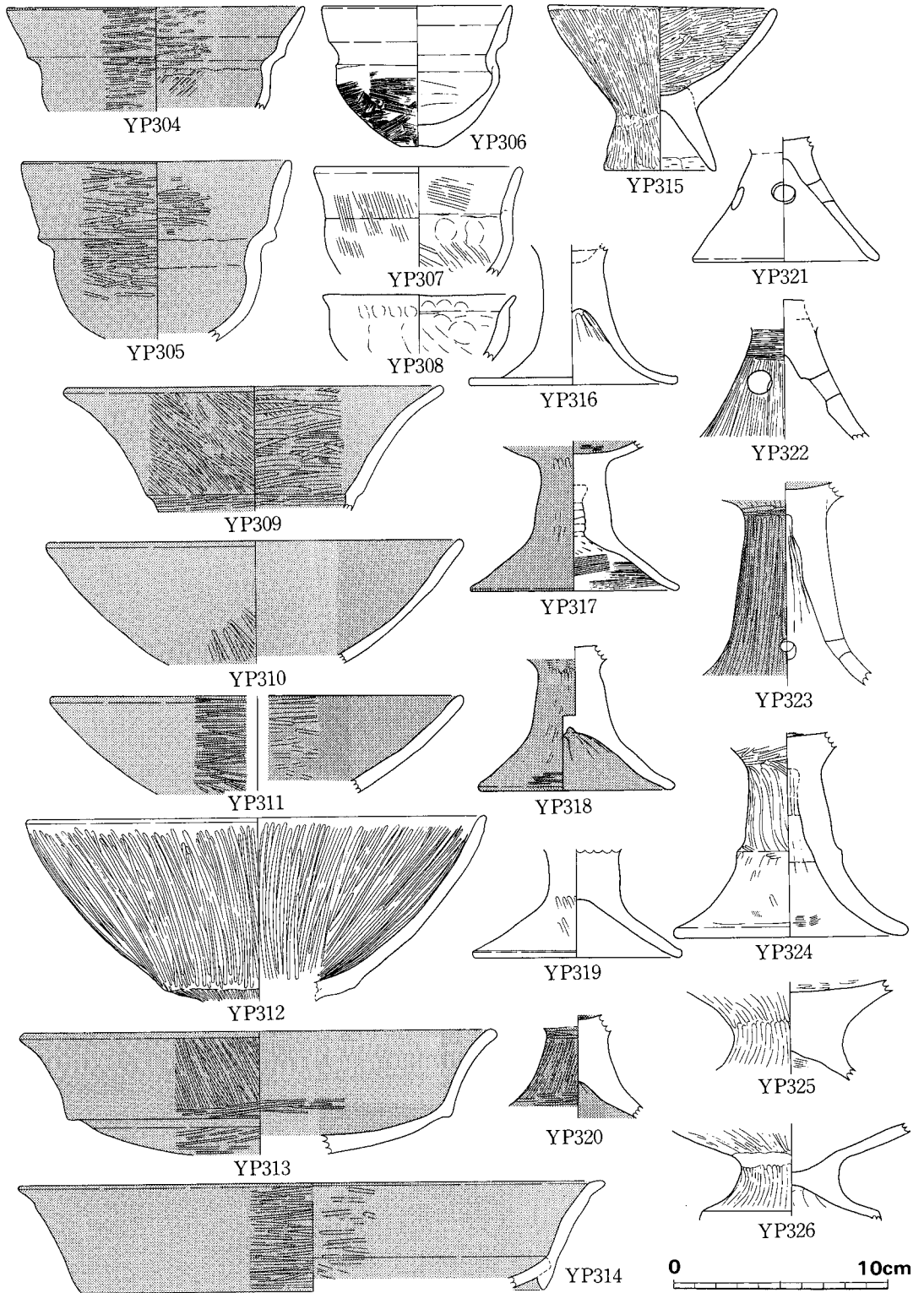
第45図 第10号土坑出土土器(S=1/3)



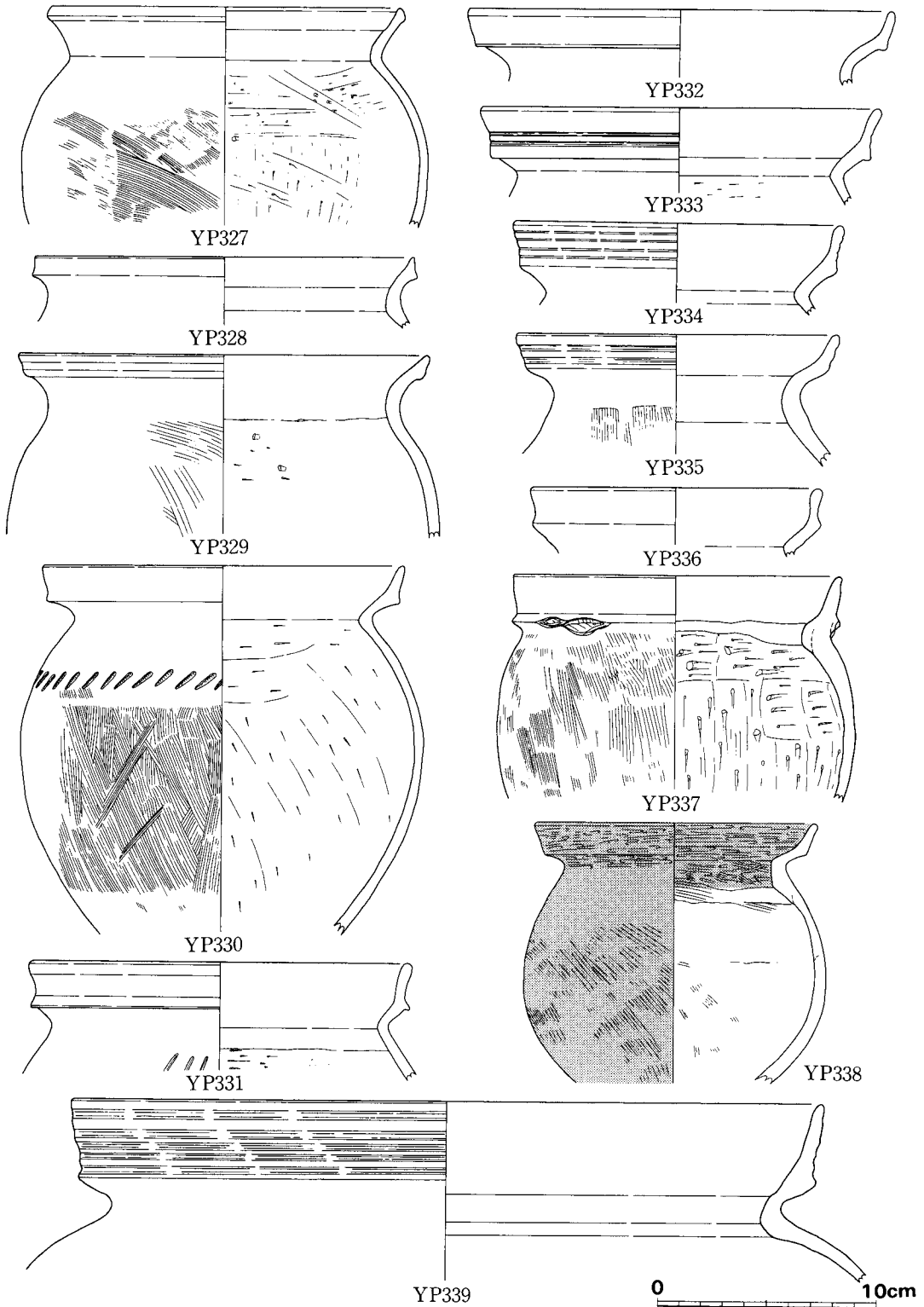
第46図 第10号土坑出土土器(S=1/3)



第47図 第10号土坑出土土器(S=1/3)

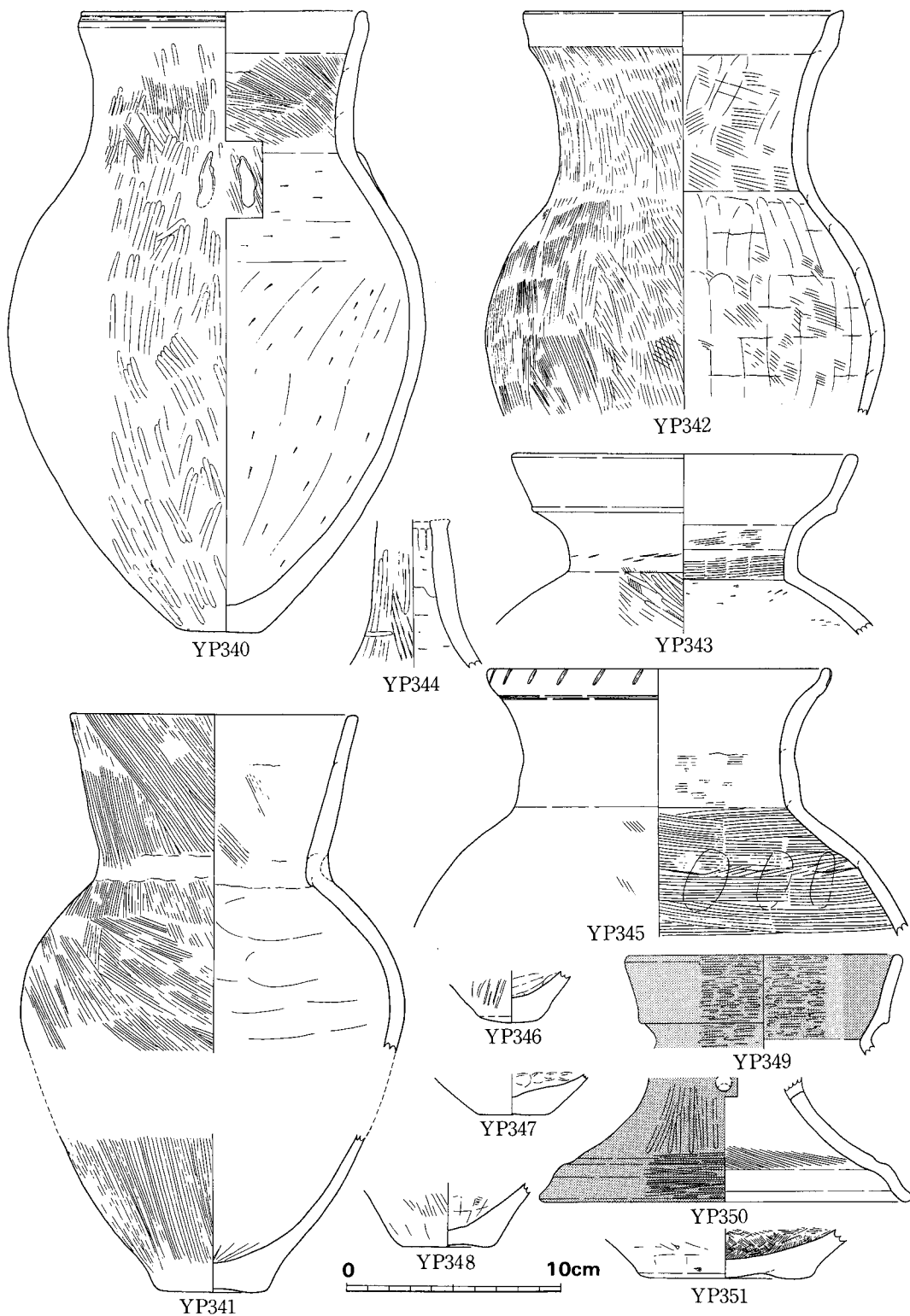


第48図 第10号土坑出土土器(S=1/3)

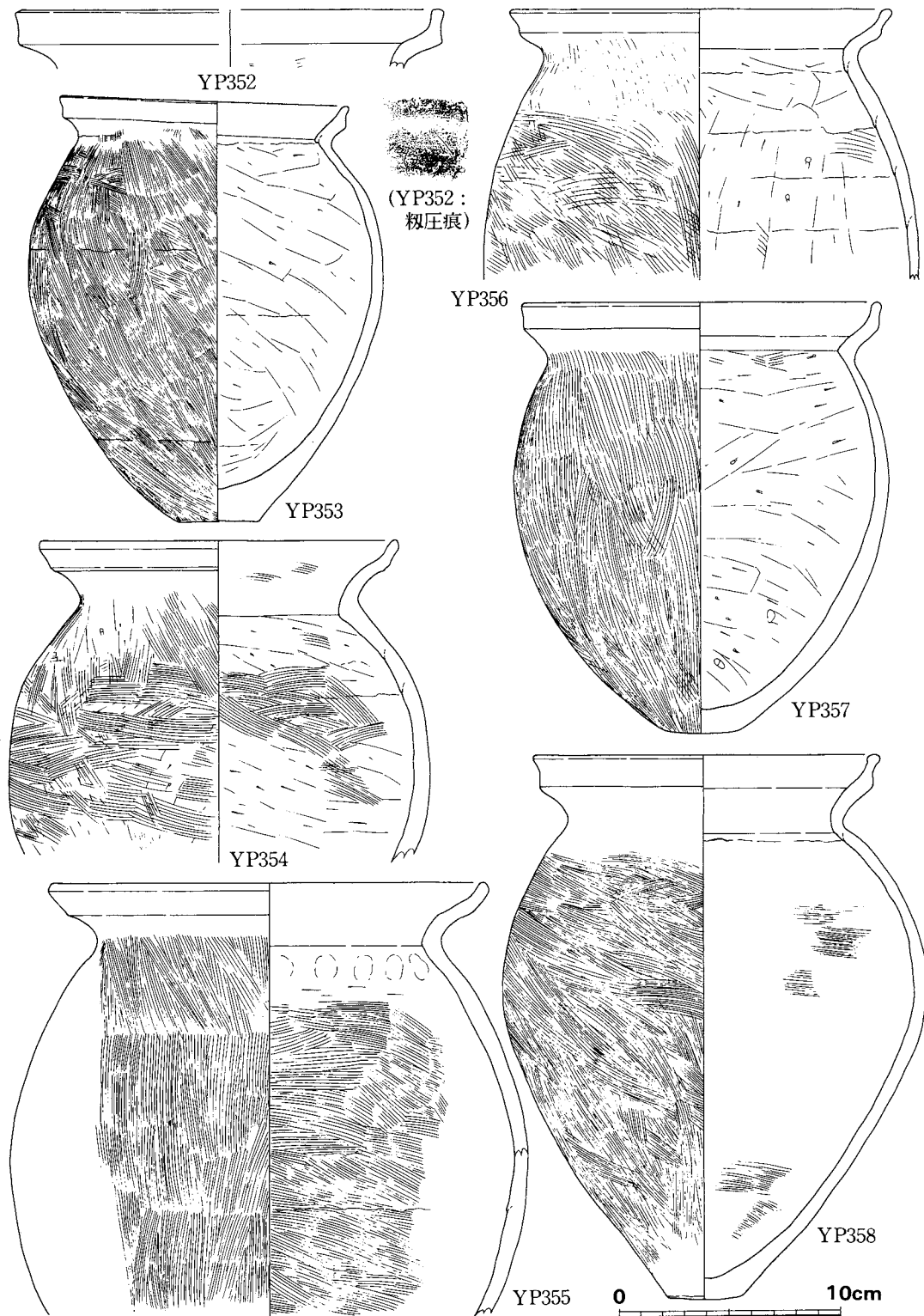


第49図 第19号土坑出土土器(S=1/3)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

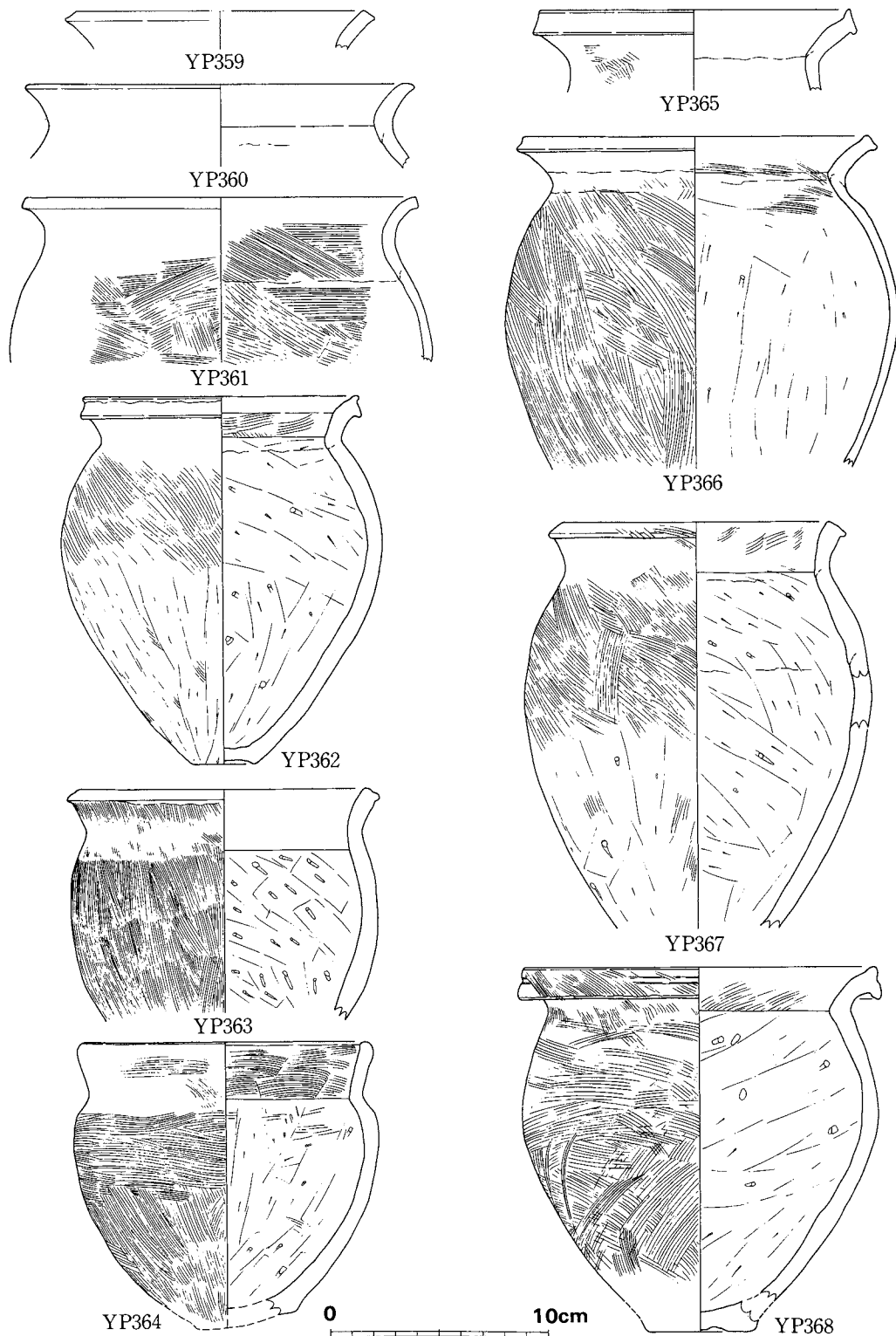


第50図 第19号土坑出土土器(S=1/3)

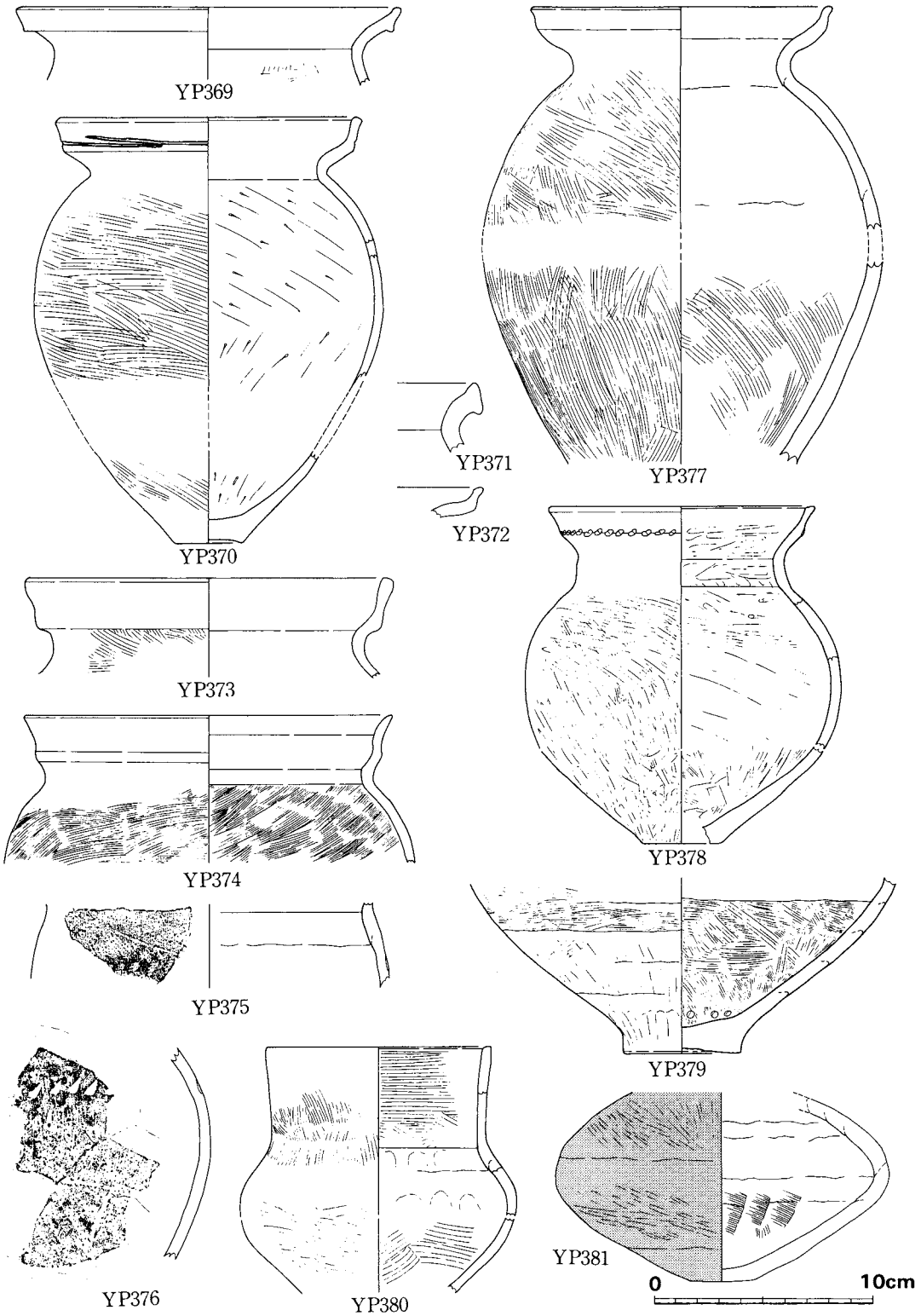


第51図 第30号土坑出土土器(S=1/3)

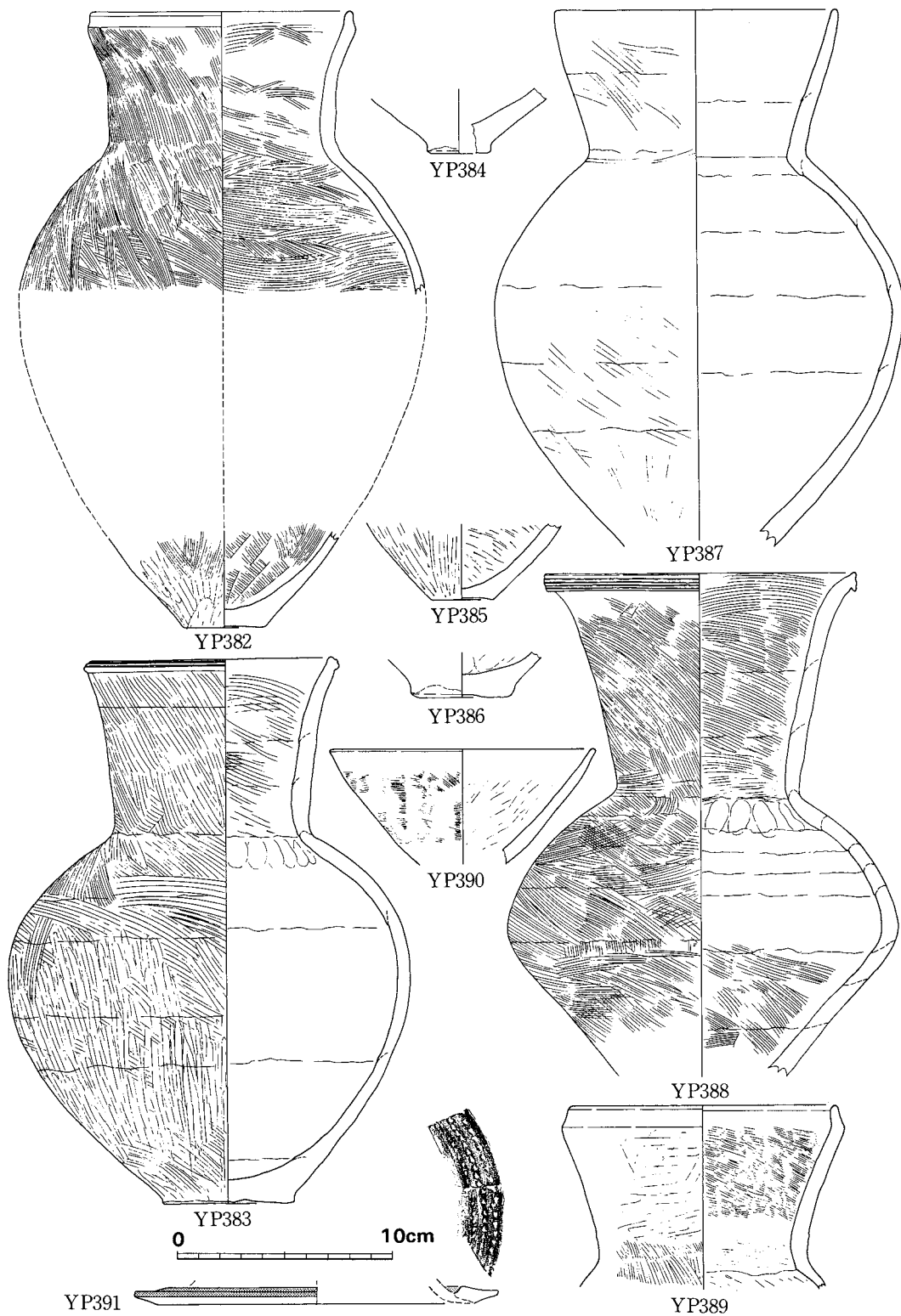
第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物



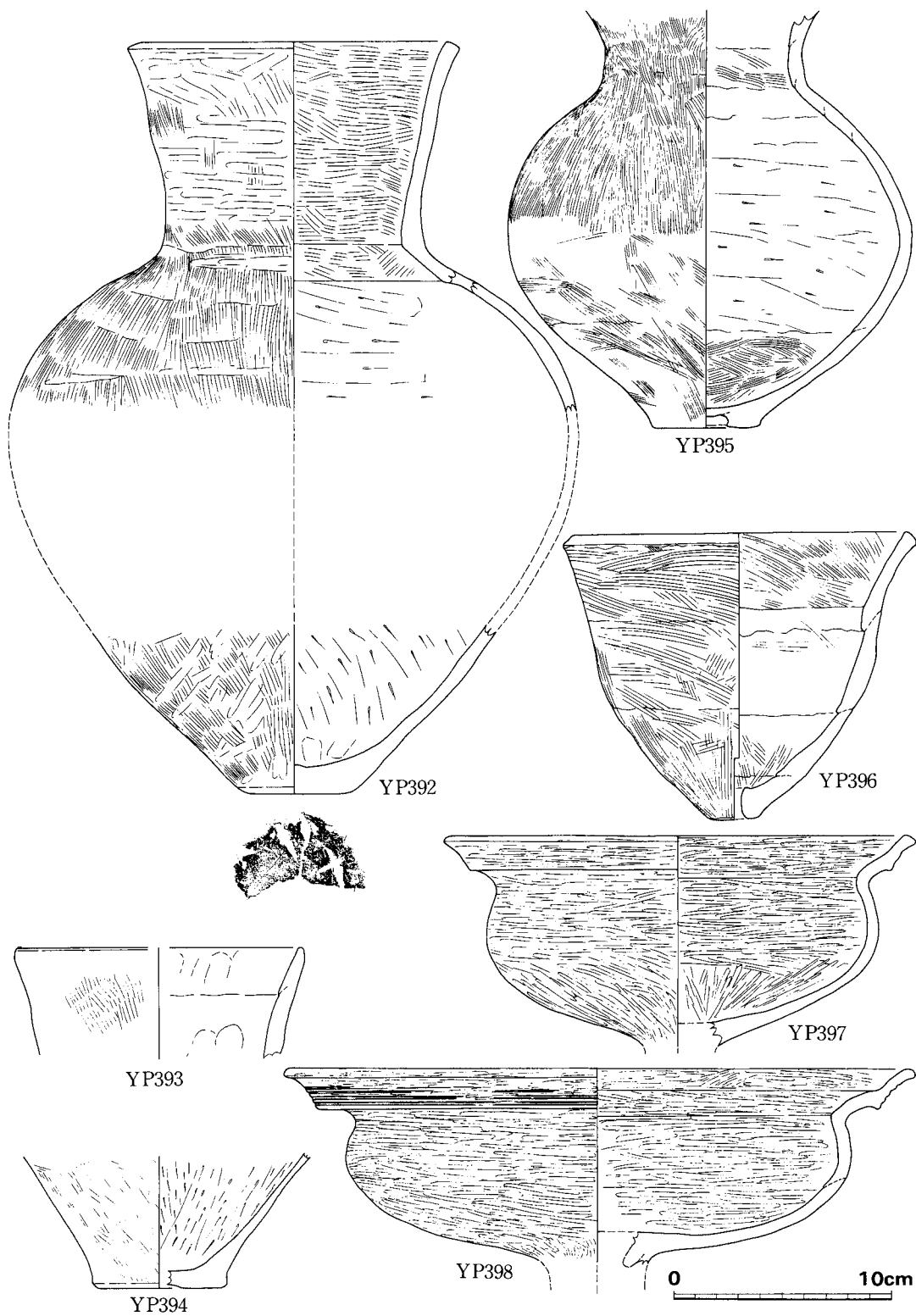
第52図 第30号土坑出土土器(S=1/3)



第53図 第30号土坑出土土器(S=1/3)

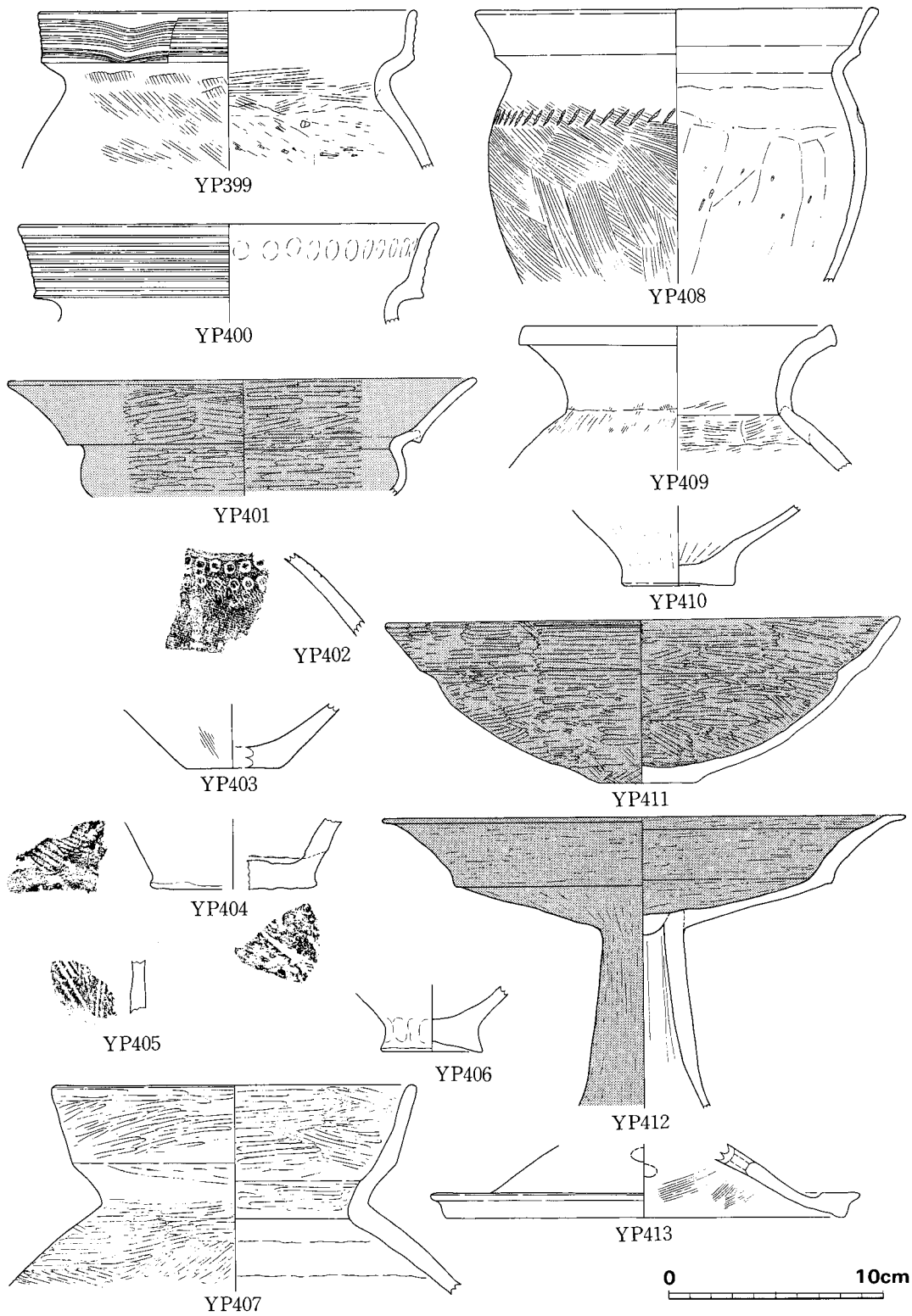


第54図 第30号土坑出土土器(S=1/3)



第55図 第30号土坑出土土器(S=1/3)

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物



第56図 第4・7・14・15・35・51号溝出土土器 (S=1/3)

出土土器観察表 (a:口径・蓋鈕径 b:胴径・脚最小径・蓋最大径・結合壺受部径
c:底径・台径・裾径・蓋口径・結合壺脚最小径 h:器高)

番号整理No	出土地点	器類	法量等色調	特記事項 遺存度	番号整理No	出土地点	器類	法量等色調	特記事項 遺存度
YP 1 91C 60	1号 壺穴	壺	a:13.5 b:17.8 P1北 淡橙色	擬凹線5、外面胴部小片	YP 36 91C 39	2号 壺穴	壺 P33	a:17.0 b:25.8 91C 39 浅黄橙色	1/4
YP 2 91C 61	1号 壺穴	壺	a:14.3 b:14.4 P1北 におい橙	外面煤付着 1/3	YP 37 91C 34	2号 壺穴	壺 上部	a:16.3 黄橙色	外面煤付着 口頸部1/2、肩小片
YP 3	1号 壺	?	91C62 におい橙	擬凹線5(~) 小片	YP 38	2号 壺	P4	a:14.5 浅黄橙	91C33、外面煤付着、1/4
YP 4 91C 54	1号 壺穴	P2 高杯	b: 4.0 浅黄橙	91C55 杯1/2、脚完	YP 39	2号 壺	P3	a:19.1 浅黄橙	91C11 1/4
YP 5 91C 55	1号 壺穴	脚部	b: 3.5 c:11.7 浅黄橙色	東側床面 脚部完、裾部ほぼ完	YP 40 91C 38	2号 壺	P10	a: 6.3 浅黄橙 +西側下部	YP41と同一個体(?) 底部完、胴部1/3
YP 6	1号 壺	高杯	b: 4.65 浅黄橙	91C53、P1南 完	YP 41 91C 7	2号 壺	P38	a: 7.4 P38周辺 浅黄橙色	YP40と同一個体(?) 1/3
YP 7	4号 壺	?	a:15.5 浅黄橙	91C46 1/4	YP 42 91C314	2号 壺	P5-34	a:10.2 b:14.5 c: 8.2 h:16.7 におい橙色	外面煤付着 口縁部3/4、頸部以下 ほぼ完
YP 8 91C323	4号 壺	台付鉢	a:18.5 b: 2.4 c: 9.6 h:13.3	外・内体部赤彩・炭 化物付 浅黄橙 完	YP 43 91C315	2号 壺	P37	a:11.4 b:14.6 h:(15.1)淡黄橙	口1/2、頸部ほぼ完、胴 上半2/3、胴下半小片
YP 9 87B203	4号 壺	小型土器	a: 9.1 b: 8.15 c: 1.0 h: 7.8	鉢形、全面赤彩 浅黄橙色 完	YP 44 91C313	2号 壺	P12- P21	a:14.2 b:20.6 c: 6.8 h:30.2	淡黄、外煤?付着、 口頸部1/2、胴ほぼ完
YP 10	4号 壺	脚部	b: 5.1 橙色	91C45 ほぼ完	YP 45	2号 壺	P13	a:14.4 浅黄橙	P22、91C 25、1/4
YP 11 91C324	4号 壺	壺	a:11.8 b:23.3 c: 6.3 h:27.2	外面煤付着 におい橙色 ほぼ完	YP 46 91C 29	2号 壺	P13	b: 8.8 c: 2.2 におい黄橙色	胴上半1/4、胴下半 完
YP 12 91C 32	2号 壺	壺	a:21.4 b:20.1 におい黄橙色	外面煤付着 小片	YP 47 91C317	2号 壺	P25- P30- P31	a:11.1 b:23.6 c: 3.3 h:19.9 におい黄橙色	口端小片、口縁1/2、 頸部上半ほぼ完、 胴下半1/4、底部完
YP 13 91C 43	2号 壺	壺	a:17.4 橙色	外面煤付着、 口縁1/4、肩部小片	YP 48 91C 9	2号 壺	P25- P29	b:15.3 c: 1.9 2/3 浅黄橙色	突帯+沈線2+3本 一組織状浮文縦数?
YP 14 91C 40	2号 壺	壺	a:18.6 浅黄橙色	口縁部外面刻み目 1/4弱	YP 49	2号 壺	P25	a:10.9 橙色	91C14 北側下部 1/4
YP 15	2号 壺	鉢	a:17.2 91C12	におい黄橙色 小片	YP 50 91C 22	2号 壺	P17	a: 2.5 c: 9.4 浅黄橙色	完(口縁端部1/4)
YP 16	2号 壺	壺	a: 8.0 91C 8	におい橙色 1/4	YP 51 91C145	2号 壺	Pit2 Pit4	a:15.3 b:25.4 c: 5.2(h:30.1) 浅黄橙色	口縁外面2本一組縦 位置沈線(記号文?) 1/4(底部小片)
YP 17	2号 壺	鉢?	c: 2.0 91C30	黄橙色 ほぼ完	YP 52 91C 21	2号 壺	P2	b: 3.9 c:12.3 浅黄橙色	脚部完、裾部小片
YP 18	2号 壺	土鉢	径(4.0) 91C24	孔径6mm 橙色 1/4?	YP 53 91C 2	2号 壺	P28	a:17.9 c: 2.4 h:12.4 浅黄橙	ほぼ完
YP 19	2号 壺	器台	b: 4.1 91C19	橙色 ほぼ完	YP 54a 91C 15	2号 壺	P28 西下	a:20.9(h:13.3) 浅黄橙色	内外面赤彩 口縁1/2、体部ほぼ完
YP 20	2号 壺	壺	c:11.8 91C 6	浅黄橙 赤彩 1/2	YP 54b 91C 18	2号 壺	P6	b: 3.4(h:13.3) c:11.5 浅黄橙	外面赤彩 完
YP 21 91C 31	2号 壺	壺	a:17.4 におい橙色	小片	YP 55 91C 16	2号 壺	P4- P33	a:23.0 b: 3.6 c:12.3(h:16.1) 浅黄橙色	口縁小片、体部2/3、 脚部完、裾部1/2
YP 22 91C 44	2号 壺	壺	a:13.3 b:13.6 におい黄橙色	外面煤付着 小片	YP 56 91C 3	2号 壺	P38	a:11.3 b: 9.3 c: 2.2 h: 5.8	浅黄橙色 ほぼ完
YP 23	2号 壺	壺	a: 18.9 91C42	b:(22.6) 橙 1/4	YP 57 87B202	2号 壺	P7	a: 9.2 b:11.0 c: 3.3 h: 9.7	黄橙色 口縁1/2、頸部以下完
YP 24 91C 20	2号 壺	器台	b: 3.8 におい黄橙色	2孔3方透(径5mm) 脚ほぼ完、裾1/4	YP 58 91C320	2号 壺	P28 北下	a:10.3 b: 3.2 c:15.4 h: 8.7	におい黄橙色 ほぼ完(裾部1/4)
YP 25	2号 壺	鉢	a:14.6 91C13	浅黄橙色 1/4	YP 59 91C 37	2号 壺	P39	a:10.5 b:11.8 c: 2.3 h:15.0	におい黄橙、口縁~ 肩部1/3、胴下半1/2
YP 26	2号 壺	壺	a: 2.1 91C23	橙色 ほぼ完	YP 60 91C 28	2号 壺	P28 北下	a:22.6 浅黄橙 P20-24-32	完(口縁部1/4)
YP 27 91C 10	2号 壺	高杯	a:27.0 浅黄橙色	壺穴を切っている小 穴(P3)出土 1/4	YP 61 91C312	2号 壺	P9	a:17.4 b:17.6 c: 3.9 橙色 逆雨滴形透穴12	円形透穴12、完(口 縁部1/4、垂下帯2/3) 赤彩(脚内を除く)
YP 28 91C319	2号 壺	壺	a: 16.4 b:21.2 h:(24.4) 浅黄橙色	外面肩部刻目、外面 胴部煤付着、ほぼ完	YP 62 91C 17	2号 壺	P1	b: 3.4 c:16.6 におい黄橙色	赤彩(脚内を除く) 脚部完、裾部1/3
YP 29 91C321	2号 壺	壺	a:17.4 b:20.7 c: 3.4 h:24.3	外煤・内炭化物付着 浅黄橙色 ほぼ完	YP 63 91C318 18流土	2号 壺	P33- P37	a:12.2 b:11.8 c:(1.6) h: 8.8 浅黄橙色	外面煤・内面炭化物 付着、口縁1/4、胴上 半3/4、胴下半ほぼ完
YP 30 91C 35	2号 壺	壺	a:16.1 黄橙色	口縁~肩部1/4、胴 部小片	YP 64 91C 26	2号 壺	P4 西下	a:12.2 b:13.6 浅黄橙色	口頸部小片、胴1/3
YP 31 91C 41	2号 壺	壺	a:16.9 におい黄橙色	外面煤付着、口縁~ 肩部1/4、胴部小片	YP 65 P21-33	2号 壺	P21- P33	a:15.9 b: 5.9 c: 9.1 h: 8.1	91C1、におい黄橙色 体部1/3、脚台ほぼ完
YP 32 91C316	2号 壺	壺	a:16.8 b:20.4 におい黄橙色	外煤付着、口縁~頸 部ほぼ完、胴部1/2					
YP 33 90C146	2号 壺	壺	a:15.0 b:18.7 c: 2.6 h:22.3 浅黄橙色	擬凹線7、外煤・内 炭化物付着、口縁1/2 頸部ほぼ完、胴1/2					
YP 34 91C322	2号 壺	壺	a:16.3 b:20.7 c: 2.4 h:26.1 浅黄橙色	外面煤・内面炭化物 付着					
YP 35 91C 36	2号 壺	壺	a:17.5 b:22.6 赤橙色・浅黄橙色	外面煤・内面炭化物 付着 1/4					

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特記事項 遺存度	番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特記事項 遺存度
YP 66 91C 86	3 堅 南上	甕	a:16.8 浅黄橙色	1/3 (肩部小片)	YP104 91C 74	9 号 堅穴	甕	a:14.7 b:13.8 にぶい黄褐色	北側上部 外面煤付着 小片
YP 67	3 堅	甕	a:16.9にぶい橙	外面煤付着、91C89、1/3	YP105 91C327	9 号 堅 P 1	器台	a:20.3 b: 3.3 c:11.0 h:12.2	浅黄褐色 ほぼ完 (受端部 1/2)
YP 68 91C 83	3 堅 北上	甕	a:17.1 にぶい橙色	外面煤付着 1/2(頸～肩1/4)	YP106 91C 71	9 号 堅穴	器台	b: 3.7 c:12.4 浅黄褐色	東側上部 2/3
YP 69 91C 92	3 堅 北上	甕	a:14.0 b:13.4 浅黄橙色	擬凹線 4、外面煤付着、 1/3(頸～胴1/4)	YP107 91C 72	9 号 堅穴	甕	a:15.0 にぶい黄褐色	東側上部 外面煤付着 1/4
YP 70 91C 87	3 堅 南中	甕	a:15.6 浅黄褐色	外面煤付着 1/4 (肩部小片)	YP108 91C 75	9 号 堅穴	甕	a:13.3 にぶい橙色	西側上部 外面煤付着 1/4
YP 71	3 堅	脚部	c:23.2 浅黄橙	外赤彩、91C78 小片	YP109 91C 73	9 号 堅穴	壺 突帯	b:15.2 12号堅穴からも 出土 浅黄褐色	北および南側上部、 棒状浮文 3本一組 2 箇所以上 1/3
YP 72	3 堅	高杯	c:20.8 浅黄橙	南中部、91C94 小片	YP110 91C 76	9 号 堅穴	高杯	c:(19.2)北・東 側上部 浅黄橙	孔 2 以上・径 10mm、 外面赤彩 1/4
YP 73	3 堅	高杯	c:19.0 浅黄橙	東上部、91C77 1/2	YP111	10 堅	甕	a:17.0 89P4	東側 橙色 小片
YP 74	3 堅	高杯	c:16.6 浅黄橙	91C82 1/4	YP112	10 堅	甕	a:15.5 89P3	にぶい橙色 小片
YP 75	3 堅	底部	c: 4.7 褐灰色	北上部、91C70 完	YP113	10 堅	甕	a:15.0 89P5	西、外煤、橙 小片
YP 76	3 堅	底部	c: 8.0 浅黄橙	東上部、91C68 完	YP114 89P 8	10 号 堅穴	壺 東側	a:14.3 橙色 小片	二本一組の縦位沈線 (2箇所)間に刻み目
YP 77 91C 84	3 堅 北上	壺	a:14.0 にぶい橙色	口縁端部外面刻目 小片	YP115 89P 14	10 号 堅穴	壺 P 3	a:12.0 b:22.9 c: 5.1 h:24.7	灰白色、外面煤付着 ほぼ完 (口端部 1/4)
YP 78	3 堅	壺	a:13.2にぶい橙	東上部、91C79 小片	YP116 89P 11	10 号 堅穴	鉢 南側	a:10.0 c: 4.0 h: 5.9 浅黄橙	外面煤付着 上部 1/2、下部完
YP 79 91C 91	3 堅 南上	壺	a: 9.2 b:12.7 橙色	肩部外面把手 口縁 1/3、胴部 1/4	YP117 89P 10	10 号 堅穴	壺 P 1	a:11.9 b:11.7 c: 1.4 h:10.7	浅黄橙、上 (口縁～ 肩)部 1/2、下部完
YP 80	3 堅	壺?	a:12.0 橙色	東中部、91C93 1/4	YP118	10 堅	壺	a:11.8 89P7	北側、橙色 小片
YP 81	3 堅	鉢	a:13.0 橙色	北上部、91C80 1/4	YP119 89P 13	10 号 堅穴	壺 pit2	a:14.2 b:14.0 c: 2.4 h:12.5 外煤付 浅黄橙	擬凹線 7、外面肩部 叩き痕、口縁・胴下 半 1/2、胴上半ほぼ完
YP 82 91C 64	3 堅 南中	高杯	b: 3.7 浅黄褐色	赤彩 (脚部内面を除く) ほぼ完	YP120 89P 1	10 号 堅穴	蓋 西側	a: 2.2 b: 8.7 c: 5.7 h: 3.9	橙色、外面赤彩 ほぼ完
YP 83 91C 66	3 号 堅穴	脚部	b: 4.6 にぶい褐色	孔 5 ほぼ完	YP121	10 堅	壺	a:10.5 89P6	西側、橙色 1/4
YP 84 91C 67	3 堅 西上	底部	c: 5.9 浅黄褐色	外面煤付着 完	YP122	10 堅	底部	c: 4.0 89P9	北側、橙色 ほぼ完
YP 85 91C 81	3 堅 P 4	壺 東中	a:15.0 b:18.0 浅黄褐色	外面煤付着、口縁部 小片、肩部以下 1/4	YP123 89P 2	10 号 堅穴	鉢 P 2	a:17.0 c:15.1 h: 4.6 橙色	体部 2/3、底部完
YP 86 91C 27	3 堅 P 7	底部 南中	c: 4.1 橙色 YP91と同一?	外面煤・内面炭化物 付着 ほぼ完	YP124 91C215	12 号 堅穴	壺	a:17.4 にぶい黄褐色	土層観察用土手 外面煤付着 小片
YP 87 91C 85	3 堅 P 1・5	壺 東中	a:26.4 c: 9.6 浅黄褐色	擬凹線 4、口縁～頸 部 1/2、底部 1/4	YP125 91C216	12 号 堅穴	壺	a:16.0 黄褐色	北東側 外面煤付着 小片
YP 88 a: 南側 中部 b: P 7	3 号 堅穴	器台	a:28.6 b: 4.8 c:19.8(h:24.1) 浅黄褐色 c: I - 8・9区小穴	脚部孔 4・径 12mm、 外面刻み目、上部下 部小片、脚部ほぼ完 a、b:91C65 c:91C171	YP126 91C210	12 号 堅穴	壺	a:16.2 黄褐色	南西側 外面煤付着 1/4
YP 89	3 堅	底部	c: 9.8 淡黄色	土坑、91C69 ほぼ完	YP127 91C209	12 号 堅穴	壺 東側	a:19.2 浅黄褐色	外面肩部叩き痕 外面煤付着 1/4
YP 90 91C 63	3 堅 P 3	甕	a:10.5 b:10.0 c: 5.0 h:11.1	外面煤付着、にぶい 褐色 1/4 (底部完)	YP128	12 堅	壺	a:20.8 浅黄橙	北東側、91C214 1/4
YP 91 91C 88	3 堅 P 7	甕	a:15.8 褐色 YP86と同一?	外面煤付着 1/3	YP129 91C213	12 号 堅穴	壺	a:19.8 にぶい黄褐色	南側～南西側間 外面煤付着 1/4
YP 92	3 堅	壺 P 2	a:17.2 褐色	91C90 外面煤付着 3/4	YP130 91C208	12 号 堅穴	壺	a:21.2 b:22.6 褐色	西側～南西側間 外面煤付着 1/4
YP 93 90C144	3 堅 P 6	鉢	a:20.0 b:16.2 c: 3.0(h: 9.9)	褐色、中部 1/4 (底部完)	YP131 91C189	12 号 堅穴	壺 南側	a:11.4 浅黄橙 第 10 号土坑 (F.G 8.9)からも出土	胴部外面横位沈線 に縦位・斜位の沈線 口縁部 1/4、胴部 1/3
YP 94	7 堅	壺	a:18.4 浅黄橙	91C47、擬凹線 3、小片	YP132	12 堅	壺	a:14.8 外煤付	橙、西側 91C211 小片
YP 95	7 堅	壺	a:17.2にぶい橙	91C52 2/3	YP133	12 堅	壺	a:14.6 外煤付	橙、南西 91C212 1/4
YP 96 91C 51	7 号 堅穴	脚部	c:15.0 にぶい黄褐色	孔 1 以上・径 17mm 1/3	YP134 91C217	12 号 堅穴	壺 pit2	a:12.8 にぶい黄褐色	外面煤付着 小片
YP 97	7 堅	高杯	91C49 浅黄褐色	横 V 字状刺突、小片	YP135 91C190	12 号 堅穴	壺	a:17.2 にぶい褐色	南側 1/4
YP 98	7 堅	底部	c: 5.0 91C48	橙、外底記号文、1/2	YP136 91C202	12 号 堅穴	壺	にぶい褐色	北東側～南西側 1/3
YP 99	7 堅	脚部	91C50 橙、小片	三角形刺突、外赤彩	YP137	12 堅	壺	a:(12.3) 西側	褐色 91C191 1/3
YP100 91C 59	8 号 堅穴	壺	a:13.8 b:12.0 褐色	外面煤付着 小片	YP138 91C198	12 号 堅穴	壺	a:(17.6) 浅黄褐色	北東側、内面縦位沈 線 2 小片
YP101 91C 57	8 号 堅穴	底部	c: 6.2 にぶい褐色	烧成前穿孔 1・径 10mm 1/4					
YP102	8 堅	底部	c: 3.8 91C58	橙、外底記号文、3/4					
YP103 90C 56	8 堅 pit3	高杯	b: 3.9 外赤彩 浅黄橙	脚孔 5・径 8mm、体 部 1/3、脚部ほぼ完					

第3章 谷内ブンガヤチ遺跡

番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項 遺存度	番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項 遺存度
YP139 91C199	12号 壺穴	壺 北東	外面赤彩 浅黄橙色	外面平行沈線・山形 沈線・刺突文 小片	YP175 87B 70	3号 土坑	鉢 P 3	a:30.0 b:30.3 4層 浅黄橙色	外面煤・内面炭化物 付付着 ほぼ完
YP140	12号 壺	壺	a: 9.4 浅黄橙	南側 91C207 ほぼ完	YP176 87B 67	3号 土坑	壺 P2-3 -6	a:13.4 b:26.6 4層 にぶい橙色	外面煤・内面炭化物 付付着 1/2
YP141 91C187	12号 壺穴	壺	a:11.5 b:13.9 c: 3.2 h:14.2	南側～東側、橙色 ほぼ完	YP177	3土	底部	c: 4.8 87B 57	にぶい橙色 1/4
YP142 91C205	12号 壺穴	台付 鉢	a:11.8 b: 3.8 c: 8.6 黄褐色	外面・体部内面赤彩 外面煤付着 ほぼ完	YP178	3土	底部	c: 4.8 87B 62	浅橙色 1/2
YP143 91C197	12号 壺穴	蓋?	c:(16.2) にぶい橙色	北東側 小片	YP179	3土	鉢	a:20.0 87B 63	浅黄橙色 小片
YP144	12号 壺	鉢	a:11.1 浅黄橙	南西側 91C193 小片	YP180 87B 55	3号 土坑	高杯	c:22.7 浅黄橙 外面赤彩	脚孔1以上・径11mm 端部砂礫多 1/4
YP145 91C192	12号 壺穴	有孔 鉢	c: 1.4 黄橙色	西側～南西側間 ほぼ完	YP181	3土	壺?	a:12.0 87B 59	浅黄橙色 小片
YP146	12号 壺	鉢	a:24.5にぶい橙	南西側 91C195 小片	YP182	3土	底部	c: 5.6 87B 53	浅黄色 ほぼ完
YP147 91C203	12号 壺穴	蓋	c:14.2 浅黄橙色	西側・西側～南西側 間、赤彩 1/3	YP183 87B 65	3号 土坑	壺 P 5	a:14.0 浅黄橙 4層 6～8層 からも出土	口縁部縁状厚文三本 一組4箇所、頸部突 帯+刻み目 ほぼ完
YP148 91C200	12号 壺穴	蓋	a: 3.0 浅黄橙色	西側～南西側間 紐部完、体部小片	YP184 87B 58	3号 土坑	蓋 4層	b: 9.1 c: 5.6 にぶい橙色	外面赤彩 1/2
YP149 91P 1	12号 壺穴	鉢?	b: 1.6 c: 2.8 黒褐色	北東側 ほぼ完	YP185	3土	器台	b: 4.3 87B56	にぶい橙 4層 完
YP150 91C194	12号 壺穴	蓋	a: 1.2 c: 7.6 h: 2.4 橙色	北東～南西側 ほぼ完	YP186	3土	高杯	b: 4.3 c:14.4	87B66 浅黄橙色 完
YP151 91C196	12号 壺穴	鉢	a:18.9 浅黄橙色	北東側、赤彩 小片	YP187	7土	壺	a:16.6にぶい橙	87B81 外面煤 小片
YP152 91C204	12号 壺穴	台付 鉢	a:17.4 b: 2.9 c: 7.2 (h:11.0) 浅黄橙色	土層観察用土手 脚孔4・径6mm、上 部小片、下部ほぼ完	YP188	7土	壺	a:19.9 灰白色	87B82 外面煤 小片
YP153	12号 高杯	高杯	浅黄橙色	西側 91C201 3/4	YP189 87B 85	7号 土坑	壺	a:15.6 淡橙色	擬凹縁6、外面煤付 着 1/3
YP154 91C201	12号 高杯	高杯	橙色	脚孔4・径11mm 南西側 ほぼ完	YP190 87B 79	7号 土坑	壺	a:20.0 にぶい橙色	擬凹縁9、外面煤付 着 1/4
YP155 91C188	12号 壺穴	高杯	c:13.2 にぶい橙色	脚孔3・径13mm 南西側 3/4	YP191 87B 78	7号 土坑	高杯	b: 3.5 c:11.2 にぶい橙色	完 (裾端部2/3)
YP156 87B 5	1号 土坑	壺	a:24.0 浅黄橙色	外面刻目・煤付着 小片	YP192	7土	底部	c: 2.8 淡赤橙	87B80 ほぼ完
YP157	1土	壺	a:17.8 灰白色	外面煤付着 87B1 1/3	YP193	7土	底部	c: 6.0 淡黄橙	87B84 ほぼ完
YP158 87B 3	1号 土坑	壺	a:18.9 にぶい橙色	外面煤・内面炭化物 付着 1/3	YP194	7土	高杯	c:22.6にぶい橙	87B83 外赤彩 小片
YP159 87B 2	1号 土坑	壺	a:17.1 にぶい橙色	外面煤・内面炭化物 付着 1/4	YP195	8土	高杯	a:23.8 灰白色	87B88 赤彩 小片
YP160	1土	壺	a:16.4 浅黄橙	外面刻目 87B6 小片	YP196 87B 87	8号 土坑	鉢	a:20.0 b:12.6 c: 3.2 h: 8.3	浅黄橙色 1/2 (底部完)
YP161 87B 4	1号 土坑	壺	a:13.9 c: 4.4 外面煤 淡橙色	外面口縁・肩部刻目 口縁 1/3、底部 3/4	YP197	8土	底部	c: 4.1 灰色	87B86 1/3
YP162	4土	壺	a:16.0 橙色	87B71 小片	YP198	12土	壺	a:21.2にぶい褐	91C103 P 4 小片
YP163	4土	壺	a:18.8 橙色	87B89 1/4	YP199	12土	壺	a:15.0 淡黄色	91C104 外煤 1/3
YP164	5土	壺	a:16.6にぶい橙	87B74 小片	YP200 91C326	12号 土坑	壺 P 1	a:15.4 b:17.1 浅黄橙色	外面煤付着、胴1/2、 口縁部～肩部ほぼ完
YP165	5土	壺	a:11.9 灰白色	87B73 1/4	YP201 91C329	12号 土坑	壺 P 2	a:13.1 b:12.4 c: 3.0 h:16.1	橙色、外面煤付着 完
YP166 87B 72	5号 土坑	壺	a:13.0 にぶい黄橙色	外面煤付着 1/4	YP202 91C329	12号 土坑	壺 P 3	a:13.9 b:13.3 c: 3.0 h:12.6	橙色、外面煤付着 完
YP167	6土	高杯	a:32.8 黄褐色	87B75 小片	YP203 91C 98	14号 土坑	高杯	a:22.2 淡黄色 1/3	他に脚・裾部の破片 (縁状無段脚)あり
YP168 87B 76	6号 土坑	壺	a:12.2 b:12.1 にぶい赤橙色	小片 (口縁部1/4)	YP204	14土	高杯	a:10.9 浅黄橙	91C99、外赤彩 1/4
YP169 87B 77	6号 土坑	壺	a:14.0 橙色	外面煤付着、6・8 土坑より出土 小片	YP205 91C325	20号 土坑	壺	a:15.8 b:20.3 浅黄橙色	外面煤付着、口縁ほ ぼ完、頸部以下1/2
YP170 87B 69	3号 土坑	壺 P 1	a:16.8 b:22.2 4層 にぶい橙色	外面煤・内面炭化物 付着、口縁完、胴上 半 3/4、胴下半 1/2	YP206 91C 95	20号 土坑	壺	a:15.0 b:15.5 褐色	外面煤付着 1/2
YP171	3土	壺	a:13.8 浅黄橙	87B61 小片	YP207	20土	高杯	a:27.8 浅黄橙	91C109 ほぼ完
YP172 87B 52	3号 土坑	壺 P 4	a:15.0 b:11.7 灰白色	外面煤・内面炭化物 付着、1/4(口頸1/3)	YP208	22土	底部	c: 1.9 浅黄橙	91C102 1/2、底部完
YP173 87B 68	3土	壺	a:15.0 b:11.7 4層下部 浅黄橙	外煤・内炭化物付着 口縁 2/3、胴部 1/2	YP209 91C100	22号 土坑	壺	a:15.2 にぶい黄褐色	外面煤付着 小片
YP174	3土	壺	a:13.7 浅黄橙	外面煤、87B60 小片	YP210	22土	壺	a:23.6 浅黄橙	内炭化物91C101小片
					YP211 91C108	小穴	壺 P 1	a:11.8 明褐色 1/3(端部2/3)	口内縁位刻目1(4-)、 21号土坑を切る小穴
					YP212	21土	壺	a:20.4にぶい橙	91C107 外煤 小片
					YP213 91C106	21号 土坑	器台	a:19.0 褐色 内外面赤彩	第4・7号壺穴から も出土 1/4

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

番 号 整 理 No	出 土 地 点	器 類	法 量 等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度	番 号 整 理 No	出 土 地 点	器 類	法 量 等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度
YP214	21土	器台	b: 4.1 浅黄橙	91C105 ほぼ完	YP246	2号土	台付鉢	b: 4.9 c: 8.7 におい褐色	脚ほぼ完、体部1/4
YP215	24土	脚台	b: 4.6 c: 6.3	91C111 橙 ほぼ完	YP247	2号土	台付鉢	a: 12.3 b: 4.5 c: 8.0 h: 6.8	におい褐色、脚ほぼ完、口縁～体部小片
YP216	24号土坑	高杯	a: 13.6 浅黄橙色	外面沈線3 1/2	YP248	2号土坑	壺 P11	a: 13.0 浅黄橙色	擬凹線4、第10号土坑からも出土 小片
YP217	2号土坑	壺 P6	a: 20.2 b: 24.4 橙色	口縁部～頸部 1/4、胴部 1/2	YP249	2号土	鉢	a: 14.0 87B14	におい褐色 小片
YP218	2号土坑	壺 P8	a: 18.7 b: 22.5 褐色	外面肩部刻目、外面煤付着	YP250	2号土	器台	a: 19.0 87B12	灰白色、脚部? 1/4
YP219	2号土坑	壺 P1・6・11	a: 16.8 b: 22.5 c: 4.2 h: 27.9 におい褐色	内面炭化物付着、口縁部 1/2、胴部 ほぼ完、底部完	YP251	2号土	高杯	a: 15.0 87B15	浅黄橙色 小片
YP220	2号土坑	壺 P1・5	a: 13.6 b: 13.6 淡赤橙色	外面煤・内面炭化物付着	YP252	2号土坑	壺 P7	a: 16.3 b: 24.8 c: 5.9 h: 29.9	におい黄褐色1/2、ほぼ完(口縁部1/2)
YP221	2号土坑	壺 P2・4	a: 15.8 b: 18.7 c: 3.7 h: 23.1	赤橙色、外面煤付着 ほぼ完(口縁3/4)	YP253	2号土	壺	a: 16.6 87B21	P13、外面煤付着、完
YP222	2号土坑	壺	a: 15.8 b: 15.9 c: 3.5 h: 20.1	赤橙色、口縁部 ほぼ完、胴 1/2、底部完	YP254	2号土坑	壺 P1・4・7・11	a: 17.4 b: 32.9 c: 5.1 h: 36.0 灰黄色	外面煤付着、口縁部・胴部 3/4、頸部～肩部・底部完
YP223	2号土坑	壺 P10	a: 17.9 b: 22.0 c: 4.5 h: 25.4	赤橙色、外煤・内炭化物付着 ほぼ完	YP255	2号土坑	壺 P1	a: 18.6 b: 27.6 c: 4.7 h: 27.0 におい褐色	口縁部内外面赤彩、外面胴上半赤彩 ほぼ完
YP224	2号土坑	壺 P1・4	a: 17.5 b: 21.4 c: 5.2 h: 27.6 赤褐色	外肩部刻目、外煤付着、口縁部 ほぼ完、胴上 1/4、胴下 1/2	YP256	2号土坑	壺 P4	a: 17.0 b: 27.2 c: 5.6 h: 28.6 浅黄褐色	口縁部～胴上半 ほぼ完、胴下半 1/2、底 部完
YP225	2号土坑	壺 P4・8	a: 12.6 b: 18.9 におい褐色	外煤・内炭化物付着、胴 1/2、口～頸 ほぼ完	YP257	2号土坑	高杯 P5・6 P12	b: 3.5 c: 16.3 浅黄褐色	孔4: 径9mm、内外面煤付着、完(胴3/4)
YP226	2号土坑	壺 P4	a: 15.7 b: 16.1 橙色	外煤・内炭化物付着、胴 3/4、口～頸 ほぼ完	YP258	2号土坑	壺 P9	a: 13.2 b: 13.3 c: 5.2 h: 18.8 におい黄褐色	口縁部～胴上半 3/4、胴下半～底部 ほぼ完
YP227	2号土	壺 P7	a: 12.4 87B20	におい褐色 2/3	YP259	2号土坑	壺 P11	a: 10.8 b: 10.3 c: 5.2 h: 10.6 淡赤褐色	口縁部～胴上半 1/3、胴下半～底部完
YP228	2号土	壺	a: 16.6 87B17	淡黄褐色 小片	YP260	2号土坑	壺	a: 15.5 b: 23.3 c: 5.5 h: 26.8	P3-11、浅黄橙、外煤 ほぼ完(口縁部1/4)
YP229	2号土	壺 P8	a: 16.2 87B13	におい褐色 1/4	YP261	2号土坑	壺 P4・7・8	b: 15.9 c: 3.1 褐色	頸部突帯、胴部突帯 + 凹線3、外面赤彩 ほぼ完
YP230	2号土坑	壺 P6・7・8	a: 21.6 b: 34.3 c: 6.4 h: 39.0 浅黄褐色	口(小片)頸部(1/4)はE9区流土出土、胴部 ほぼ完、底部完	YP262	2号土坑	器台 P1	a: 29.8 b: 4.5 浅黄褐色	外面・内面受部赤彩 ほぼ完
YP231	2号土坑	壺 P2・10	a: 21.0 b: 25.0 におい黄褐色	外煤付、口縁3/4、胴上 ほぼ完、胴下小片	YP263	2号土坑	有孔鉢	a: 16.3 (-18.5) b: 1.3 h: 16.7	P14、褐色、孔径8mm ほぼ完
YP232	2号土	壺	b: 19.0 黄褐色	89P12 1/2	YP264	2号土坑	鉢 P8・11	a: 15.2 b: 3.6 h: 13.5 褐色	上半3/4、下半 ほぼ完
YP233	2号土坑	壺 P1・8・11	a: 25.7 b: 34.0 c: 5.1 h: 36.8 におい褐色	外面煤・内面炭化物付着、口縁部 1/2、胴部 ほぼ完	YP265	10号土	壺	a: 15.1 浅黄橙	89P16、外煤付着、1/3
YP234	2号土坑	壺 P7	a: 16.7 b: 21.2 c: 4.6 h: 26.5 黄灰色	外面煤・内面炭化物付着、口縁 3/4、頸～肩部完、胴部 1/2	YP266	10号土	壺	a: 14.2 中層 橙	89P28、外煤付着、1/3
YP235	2号土	底部	c: 3.2 87B7	黄褐色 1/4	YP267	10号土	壺	a: 18.6 橙	89P21 小片
YP236	2号土	底部	c: 5.0 87B9	におい黄褐色 1/4	YP268	10号土	壺	a: 19.5 橙	89P29、外煤付着、1/4
YP237	2号土坑	底部 P9	c: 3.6 におい褐色	外面煤・内面炭化物付着 1/2	YP269	10号土	壺	a: 16.2 中層 橙	89P18、外煤付着、1/4
YP238	2号土	壺?	a: 10.8 87B16	淡赤橙、内煤 小片	YP270	10号土	壺	a: 14.9 中層 橙	89P22、外煤付着、1/4
YP239	2号土	壺	a: 12.2 87B18	におい褐色 2/3	YP271	10号土	壺	a: 13.4 中層	89P23、におい褐色、1/3
YP240	2号土坑	壺 P8	a: 14.7 b: 19.7 c: 5.5 h: 26.6 におい黄褐色	外面煤付着、口縁部 ほぼ完、胴上半 3/4、胴下半 1/4、底部完	YP272	10号土坑	壺 中層	a: 15.5 b: 17.6 灰赤色	外面煤付着 ほぼ完
YP241	2号土坑	壺 P4・11	a: 13.0 b: 18.8 c: 4.3 h: 29.9 浅黄褐色	外煤付、外頸部、口縁部完、胴上 3/4、胴下 ほぼ完、底部完	YP273	10号土坑	壺 上・中層	a: 14.0 b: 17.8 c: 2.0 h: 20.4 におい褐色	外面煤付着 1/3(底部完)
YP242	2号土坑	壺 P2・11	a: 12.2 b: 20.5 c: 5.2 h: 29.3 におい褐色	外面煤付着、口縁部 ほぼ完、胴上半 3/4、胴下半 2/3、底部 1/4	YP274	10号土坑	壺 中・下層	a: 17.4 b: 18.8 c: 3.4 h: 19.7 におい黄褐色	外面煤付着 1/3(底部完・口縁1/4)
YP243	2号土坑	壺 P8	a: 16.1 b: 21.0 c: 6.0 h: 29.0 におい黄褐色	外煤・内炭化物付着、口縁部 2/3、頸部 ほぼ完、胴部 3/4、底部完	YP275	10号土坑	壺 中層	a: 13.5 b: 13.8 褐色	外面煤付着 小片
YP244	2号土坑	壺 P2・6・14	a: 12.0 b: 22.0 c: 4.4 h: 24.8 におい黄色	外煤・内炭化物付着、口縁部～胴上半 ほぼ完、胴下半～底 3/4	YP276	10号土坑	壺 中層	a: 17.2 b: 16.0 褐色	外面煤付着 1/2
YP245	2号土坑	壺 P6・8・10・14	a: 19.0 b: 32.2 c: 4.6 h: 30.4 におい褐色	外面煤・内面炭化物付着、口縁部 3/4、胴上半 1/2、胴下半 1/3、底部 3/4	YP277	10号土	壺 中層	a: 22.6 b: 26.8 c: 5.0 h: 30.0	橙、外面煤付着、2/3(底小片、胴上1/3)
					YP278	10号土	壺	a: 19.6 浅黄橙	89P17 小片
					YP279	10号土坑	壺 中層	a: 16.0 b: 20.6 におい黄褐色	外面煤付着 1/2

第3章 谷内ブンガヤチ遺跡

番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項 遺存度	番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項 遺存度
YP280 89P 64	10号 土中・ 下層	甕	c: 2.1 灰黄褐 外面煤付着	YP288と同一? 1/2 (底部完)	YP315 89P 96	10号 土坑	台付鉢	a:10.7 b: 3.8 c: 5.2 h: 7.8	中層、淡黄色 ほぼ完
YP281 89P 65	10号 土坑	甕	c: 1.8 褐灰色 外面煤付着	YP292と同一?(傾き?) 1/3 (底部完)	YP316 89P 50	10号 土坑	脚部 中層	b: 2.9 c: 9.8 淡黄色	ほぼ完
YP282	10号 土坑	底部	c: 3.3 浅黄橙	89P63 中層 ほぼ完	YP317 89P 56	10号 土坑	脚部 中層	b: 3.0 c: 9.6 浅黄橙色	外面・体部内面赤彩 ほぼ完 (裾部1/4)
YP283 91C175	10号 土坑	壺 中層	にぶい黄橙色 小片	縄文+二本一組横位 沈線・同縦位弧線3-	YP318 89P 49	10号 土坑	脚部	b: 2.9 c: 9.2 黄橙色	赤彩 ほぼ完 (裾部1/4)
YP284	10号 土坑	壺	a:16.7にぶい橙	89P38 中層 1/4	YP319	10号 土坑	脚部	b: 3.3 c: 9.6	89P54、橙色 ほぼ完
YP285	10号 土坑	壺	a:14.8 浅黄橙	89P41 2/3	YP320	10号 土坑	脚部	b: 2.9 橙色	89P48、赤彩 ほぼ完
YP286 89P 37	10号 土坑	壺 上層	a:14.8 橙色	外面沈線3、赤彩 1/3	YP321 89P 47	10号 土坑	脚部 中層	b: 2.8 c: 8.4 橙色	孔4:径12mm ほぼ完
YP287 89P 26	10号 土坑	壺 中層	にぶい橙色	外面へラ描きによる 文様 ほぼ完	YP322 89P 53	10号 土坑	脚部 中層	b: 3.0 にぶい橙色	孔3:径12mm ほぼ完
YP288 89P 24	10号 土坑	壺 上層	a:16.2 にぶい橙色	YP280と同一? 外面煤付着 1/3	YP323 89P 51	10号 土坑	脚部 中層	b: 3.8 ほぼ完 にぶい橙色	孔4:径7-10mm、外面 ・体部内面赤彩
YP289	10号 土坑	壺	a:13.4 外煤付	89P15 中層 橙 1/4	YP324 89P 52	10号 土坑	脚部 中層	b: 3.4 c:10.9 橙色	ほぼ完 (裾部1/4)
YP290 89P 98	10号 土坑	壺 下層	a:14.2 b:15.8 c: 1.8 h:15.7	浅黄橙色、外煤・内 炭化物付着 ほぼ完	YP325	10号 土坑	脚部	b: 5.0 橙色	89P32、中層 ほぼ完
YP291 89P 20	10号 土坑	壺 中層	a:22.7 浅黄橙色	擬凹線11 小片	YP326 89P 33	10号 土坑	脚部 中層	b: 4.6 にぶい橙色	外面煤付着 ほぼ完 (裾部小片)
YP292 89P 91	10号 土坑	壺 中層	a:16.0 褐色 外面煤付着	YP281と同一? 口縁 ほぼ完 (肩部小片)	YP327 89P 87	19号 土坑	壺	a:16.0 b:18.8 橙色	外面煤付着 1/4
YP293 89P 91	10号 土坑	壺 中層	a:16.0 b:18.6 c: 3.2 h:19.0 橙色	外面煤・内面炭化物 付着、口縁2/3、胴 部小片、底部1/2	YP328	19号 土坑	壺	a:17.4にぶい橙	89P74 1/4
YP294 89P 36	10号 土坑	壺	a: 9.5 にぶい橙色	外面・内面口縁部赤 彩 1/4	YP329	19号 土坑	壺	a:18.8 浅黄橙	89P83、外煤付、小片
YP295 89P 42	10号 土坑	壺 中層	a: 8.0 にぶい黄橙色	1/3(頸部3/4)	YP330 89P 95	19号 土坑	壺	a:16.7 b:18.6 浅黄橙色	外面肩刻目、外煤付 口縁部1/3、胴部1/2
YP296 89P 39	10号 土坑	壺 中層	a: 7.7 橙色	外・内口縁部赤彩 ほぼ完 (上部1/2)	YP331	19号 土坑	壺	a:17.2 橙色	89P82、外肩刻目、1/3
YP297	10号 土坑	壺	c: 6.2 橙色	89P66 中層 1/2	YP332	19号 土坑	壺	a:19.5 橙色	89P71 小片
YP298	10号 土坑	壺	b: 8.5 c: 1.6	89P34 中層 橙 完	YP333	19号 土坑	壺	a:18.2 浅黄橙	89P75、擬凹線2 小片
YP299 89P 97	10号 土坑	有孔 鉢 上層	a:15.3 c: 2.6 h:12.0 浅黄橙色	孔径14mm、上~中層 口縁部3/4、体部1/2、 底部完	YP334	19号 土坑	壺	a:14.8 橙色	89P72、擬凹線4 1/4
YP300 89P 92	10号 土坑	壺 中層	a: 4.8 b:14.5 h: 7.1にぶい橙	口縁部1/4、体部1/2、 鈕部完	YP335 89P 79	19号 土坑	壺	a:14.6 浅黄橙色	擬凹線2 口縁1/4、肩部ほぼ完
YP301 89P 55	10号 土坑	壺 中層	a: 2.4 b: 8.0 h: 3.3 黄橙色	赤彩、口縁部1/3、体 部1/2、鈕部完	YP336	19号 土坑	壺	a:13.1 橙色	89P73、外煤付 小片
YP302 89P 46	10号 土坑	壺 中層	a: 3.1 浅黄橙	赤彩、体部1/3、鈕部 完	YP337 89P 86	19号 土坑	壺	a:15.0 b:16.4 橙色	外煤・内炭化物付着 ほぼ完 (胴部小片)
YP303 89P 45	10号 土坑	壺 上層	a: 2.7 にぶい黄橙色	赤彩、体部1/2、鈕部 完	YP338 89P 85	19号 土坑	壺	a:12.8 b:13.8 赤橙色	外煤・内炭化物付着 外・内口縁赤彩、1/2
YP304 89P 44	10号 土坑	鉢 上層	a:13.8 b:10.6 淡黄色	赤彩 1/4	YP339	19号 土坑	壺	a:34.6にぶい橙	89P77、擬凹線5 1/2
YP305 89P 40	10号 土坑	鉢 上層	a:13.0 b: 9.7 橙色	赤彩 1/4	YP340 89P 90	19号 土坑	壺	a:13.1 b:19.3 c: 4.0 h:28.4 淡黄色	外面肩部逆J字状浮 文、口縁部3/4、胴 上2/3、胴下~1/2
YP306 89P100	10号 土坑	鉢 上層	a: 8.8 b: 7.8 c: 1.7 h: 6.6	淡橙色 体部~ 底部完 (口縁部1/4)	YP341 89P 88	19号 土坑	壺	a:13.3 b:17.8 c: 5.0 浅黄橙色	口縁部1/4、頸部~ 胴上半1/2、胴下半 ~ほぼ完
YP307	10号 土坑	鉢	a: 9.8 b: 8.9	89P35、黄橙、中 1/4	YP342 89P 93	19号 土坑	壺	a:14.6 b:18.4 外面煤付着 橙色	YP348と同一? 口縁部1/2、頸部~胴 部ほぼ完
YP308	10号 土坑	鉢	a: 8.9 b: 8.8	89P43、黄橙、中 1/4	YP343	19号 土坑	壺	a:15.2にぶい橙	89P80 1/4
YP309 89P 60	10号 土坑	台付 鉢	a:17.4 中層 にぶい黄橙色	赤彩 小片	YP344	19号 土坑	脚部	b: 3.3 橙色	89P84 ほぼ完
YP310 89P 62	10号 土坑	高杯 中層	a:19.2 にぶい赤褐色	赤彩、外面煤付着 小片	YP345	19号 土坑	壺	a:15.5 にぶい橙色	89P78 1/3(口頸部3/4)
YP311	10号 土坑	高杯	a:19.0にぶい橙	89P59、赤彩 小片	YP346	19号 土坑	底部	c: 2.7 橙色	89P67 2/3
YP312 89P 61	10号 土坑	高杯	a:21.4 にぶい黄橙色	口縁部1/4、体部1/2	YP347	19号 土坑	底部	c: 3.4にぶい橙	89P68 ほぼ完
YP313 89P 57	10号 土坑	台付 鉢	a:22.0 中層 橙色	赤彩 1/3	YP348 89P 69	19号 土坑	底部	c: 4.3 にぶい橙色	YP342と同一? ほぼ完
YP314 89P 58	10号 土坑	台付 鉢	a:27.0 中層 淡黄色	赤彩 小片	YP349 89P 76	19号 土坑	壺	a:12.4 にぶい橙色	外面・内面口縁部赤 彩 1/3
					YP350 89P 81	19号 土坑	器台	c:16.6 浅黄橙色	孔1以上、外面赤彩 1/3
					YP351	19号 土坑	底部	c: 8.0にぶい橙	89P70 1/3

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構とその遺物

番号整理No.	出土地点	器類	法量等 (cm) 調色	特記事項 遺存度	番号整理No.	出土地点	器類	法量等 (cm) 調色	特記事項 遺存度
YP352 91C248	30号 土坑	甕	a:19.7 浅黄橙色	内面頸部粗庄痕 小片	YP383 91C295	30号 土坑	壺	a:11.2 b:18.7 c: 6.2 h:25.3	にぶい黄橙、外煤付 口端凹線2、ほぼ完
YP353 91C301	30号 土坑	甕	a:13.1 b:16.2 c: 3.6 h:19.6	淡黄色、外面煤付着 ほぼ完	YP384	30土	底部	c: 3.0 灰黄褐色	91C267 1/4
YP354 91C291	30号 土坑	甕	a:16.3 b:19.4 橙色	外面煤付着 1/2	YP385 91C259	30号 土坑	底部	c: 3.0 灰褐色	外面煤付着 1/4
YP355 91C262	30号 土坑	甕	a:20.2 b:23.8 浅黄橙色	外面煤付着 小片	YP386 91C258	30号 土坑	底部	c: 4.7 浅黄橙色	外面煤付着 ほぼ完
YP356 91C288	30号 土坑	甕	a:17.2 b:19.8 にぶい黄橙色	外面煤付着 ほぼ完(口縁部小片)	YP387 91C299	30号 土坑	壺	a:12.9 b:18.9 にぶい黄橙色	外面煤付着 1/2(口頸部小片)
YP357 91C300	30号 土坑	甕	a:16.2 b:17.0 c: 3.2 h:19.7 にぶい黄橙色	外面煤付着 ほぼ完(口縁部 2/3、肩部小片)	YP388 91C302	30号 土坑	壺	a:14.4 b:18.0 灰黄褐色	外面煤付着、口端部 凹線2 (胴上半ほぼ完) 3/4
YP358 91C300	30号 土坑	甕	a:15.5 b:19.3 c: 3.5 h:25.1	にぶい橙、外煤付着 ほぼ完(底部1/4)	YP389 91C246	30号 土坑	壺	a:12.5 灰白色	小片
YP359	30土	甕	a:14.0 灰白色	91C257 小片	YP390 91C261	30号 土坑	鉢	a:12.4 淡褐色	外面煤付着 1/3
YP360	30土	甕	a:17.6 外煤付	91C245 浅黄橙 1/3	YP391 91C261	30号 土坑	高杯	c:17.0 にぶい黄橙色	外面赤彩、外面脚端 部横位のV字状刺突 文 小片
YP361	30土	甕	a:18.0 外煤付	91C263 褐灰 小片	YP392 91C260	30号 土坑	壺	a: 15.4 c: 5.0 h:(35.0) 灰白色	外面煤付着、外底面 記号文?(x・-)、 口頸部 3/4、 底部 2/3、胴部小片
YP362 91C293	30号 土坑	甕	a:12.3 b:14.6 c: 2.8 h:16.6 にぶい褐色	外面煤付着 口縁部 1/4、胴上半 1/2、胴下半ほぼ完	YP393 91C253	30号 土坑	壺	浅黄褐色	小片
YP363 91C249	30号 土坑	甕	a:14.1 b:13.9 明褐色	外面煤付着 口縁小片、胴部 1/4	YP394 91C255	30号 土坑	底部	c: 6.2 灰白色	外面煤・内面炭化物 付着 2/3
YP364 91C275	30号 土坑	甕	a:12.8 b:13.8 c: 4.6 h:13.1	にぶい橙、外煤付着 口縁小片、胴部 1/2	YP395 91C304	30号 土坑	壺	b:18.6 c: 5.0 にぶい黄褐色	肩部完・底部完、口 頸部 1/2、胴部 2/3
YP365 91C252	30号 土坑	甕	a:17.0 にぶい橙色	外面煤付着 小片	YP396 91C305	30号 土坑	有孔 鉢	a:15.4 b:12.8 c: 2.2 h:13.4	橙色、孔径9mm ほぼ完
YP366 91C292	30号 土坑	甕	a:15.5 b:18.2 にぶい褐色	外煤・内炭化物付着 口縁部 1/2、胴上半 1/2	YP397 91C298	30号 土坑	合付 鉢	a:21.0 b:18.1 c:(3.2)	にぶい橙色 ほぼ完
YP367 91C292	30号 土坑	甕	a:12.1 b:15.6 にぶい橙色	外煤・内炭化物付着 口縁部 1/2、胴上半 3/4、胴下半小片	YP398 91C297	30号 土坑	合付 鉢	a:29.2 b:23.5 c:(4.4) にぶい橙色	口縁外面凹線7 ほぼ完
YP368 91C287	30号 土坑	甕	a:15.8 b:16.0 c: 4.8 h:16.6 にぶい橙色	外面煤付着 胴部 1/4	YP399 87B 91	4号 溝	壺	a:17.4 にぶい橙色	凹線6、外面煤付 着 1/3
YP369 91C251	30号 土坑	壺	a:17.8 灰白色	YP376と同一? 小片	YP400 87B 93	7号 溝	壺	a:14.4 橙色	凹線7、外面煤付 着 1/4
YP370 91C265	30号 土坑	壺	a:13.6b: 16.1 c: 3.1h:(14.7) にぶい黄褐色	外面煤付着 1/2(胴部1/4)	YP401 87B 92	7号 溝	鉢	a:21.8 b:15.2 浅黄褐色	赤彩 小片
YP371 91C254	30号 土坑	壺	浅黄褐色	小片	YP402 87B 95	7号 溝	壺	浅黄褐色	外面二段の竹管文 小片
YP372 91C268	30号 土坑	壺	灰白色	小片	YP403 87B 94	7号 溝	底部	c: 4.2 にぶい褐色	外面煤・内面炭化物 付着 1/3
YP373 91C247	30号 土坑	壺	a:17.0 浅黄褐色	小片	YP404 91A 18	15号 溝	壺	c: 7.8 黄褐色	胴部内外面条痕、外 底面? 庄痕 小片
YP374 91C244	30号 土坑	壺	a:17.1 にぶい橙色	外面煤付着 1/3	YP405 91A 17	15号 溝	壺	にぶい黄褐色	胴部外面条痕、内面 ナテ 小片
YP375 91C269	30号 土坑	壺	灰白色	外面刻目、外面煤付 着 小片	YP406 91C225	51号 溝	底部	c: 4.6 橙色	2/3
YP376 91C269	30号 土坑	壺	外面肩部刻目 灰白色	外面煤付着、YP369 と同一? 小片	YP407 91C224	51号 溝	壺	a:16.2 橙色	ほぼ完
YP377 91C292	30号 土坑	壺	a: 13.7 b:(18.3)	にぶい橙色、外面煤 付着 1/2	YP408 91C221	35号 溝	壺	a:18.2 にぶい浅黄褐色	外面肩部刻目、外面 煤・内面炭化物付着 1/4
YP378 91C243	30号 土坑	壺	a: 12.3 b:16.1 c: 3.4 h:(14.5) にぶい赤褐色	外面口縁部刻目、外 面煤付着 1/4(口頸3/4)	YP409 91C220	35号 溝	壺	a:14.2 橙色	口縁部ほぼ完、肩部 1/4
YP379 91C250	30号 土坑	壺	c: 5.4 にぶい黄褐色	完(胴部1/4)	YP410 91C222	35号 溝	底部	c: 5.3 にぶい褐色	外面煤付着 ほぼ完
YP380 91C264	30号 土坑	壺	a:10.4 b:12.8 灰白色	1/4(口縁部小片)	YP411 91C219	35号 溝	鉢	a:23.7 c: 4.5 h: 7.6 浅黄橙	赤彩 ほぼ完
YP381 91C296	30号 土坑	壺	b:15.3 c: 2.9 浅黄褐色	外面赤彩 上半完(下半3/4)	YP412 91C218	35号 溝	高杯	a:24.4 b: 3.8 灰黄褐色	外面・杯部内面赤彩 脚ほぼ完、杯部 1/2
YP382 91C290	30号 土坑	壺	a:12.1(b:19.8) c: 3.6(h:28.5)	にぶい黄褐色、外面 煤付着 ほぼ完	YP413 91C 97	14号 溝	高杯	c:18.6 浅黄褐色	孔数不明、径約8mm 小片

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

1 概要(第7・8図)

奈良時代～江戸時代の遺構は調査区のはほぼ全域に分布するが、古代(奈良時代～平安時代)と中世～近世とではその中心が異なっている。前者は中央から西側にかけて分布し、弥生時代～古墳時代のそれと重複(東側では中世以降に削平をうけ、若干の遺構が消滅した可能性があるのも同様)している。中央では古墳時代以降の流土を挟んで上位で検出されるものの、当該時期までの丘陵側からの土砂の堆積は相対的には少なく、地形の変化も大きなものではなかったと推定される。

これにたいして後者は、調査区の中央から東側にかけて分布し、調査区の北および南端では、谷地形を埋めるかたちでおそらくは当該時期までに堆積した土砂を基盤として第2～6号掘立柱式建物建物が構築される一方、中央では逆に、第20および24・25号溝(前者は第15号掘立柱式建物にともなう屋敷地の南西側の境界)などが平安時代以前の遺構を覆う流土を切り込んでいる。南西隅に位置する第1号墓(中世)が当時の集落域の背後に所在するとの理解にたてば、調査区の西側は中世にはすでに山林であった可能性が考えられ、現況地形の祖形がほぼ形成されていたとみることができる。

検出された主な遺構は、竪穴状遺構1基(第5号)、掘立柱式建物19基(第1～19号：弥生時代～古墳時代に属する可能性のある第14号を含む)、柱列2基(第1・2号)、土器埋納小穴1基(第1号)、小穴群1基(第1号：第33・34号土坑他)、井戸34基(第1・3～35号、2号は欠番：近代以降に属する可能性の高い第35号を含む)、室3基(第1・2・5号、3・4号は欠番)、墓1基(第1号)、土坑8基(第9・11・16・23・25・26・35・37号、18・27～29・31・32・36号は欠番)、溝(第2・5・6・10～13・17～20・24～26・29・50・53・55・58・60・62・68・69・71・72・78・79・82号溝他)・小穴(P85049・86074・87028・88033・047・89004・030・061・096・107・125・130・154・214・222・238他)多数であり、次項以下順に報告する。

第2号掘立柱式建物・第1号柱列・第6号溝・第1号土器埋納小穴、第7号掘立柱式建物・第1号小穴群、第15号掘立柱式建物・第20号溝・第3号井戸など、関連性が高いと推定される遺構群については、初出時にまとめてふれるように努めたため検索に不便が生じたこと、検出された溝・小穴の総てを個別に報告することができず、代表的なものおよび大形破片(実測個体)が得られたもの(それぞれ28、16基)に限定せざるを得なかったことをあわせて了解されたい。本節では所属時期の異なるものおよび若干の遺構外出土品を含め、土器・土製品326点(YP414～739、個々の土器の詳細は節末の観察表を参照)を報告し、当該遺構から出土した石器・石製品29点(YS3・22～32・48・60～63・67～78)、金属器・金属製品25点(YM1～9・13～15・19・21～26・29・31・34～36・39)、木器・木

製品80点(YW 1～68・72～83)についてふれるが、後者の実測図・観察表は第5節を参照されたい。

2 竪穴状遺構(第57・75・143図)

第5号竪穴状遺構

調査区の中央西側(G-8・9区)に位置する。先行する第10・11号竪穴式建物と重複するものの、流土を挟んで直接的な切り合いはない。検出面からの深さは7～9cmと浅く、竪穴内(外)に(主)柱穴となるべきものを確認できなかったことから、竪穴状遺構として報告する。調査は1986年であるが、南東側(約二分の一)検出時には北西側(同)が山林であったため、立木の伐採・搬出を待って拡張・検出しあわせて掘削したものである。

平面形は方形(2.78×2.74m)、埋土は炭化物と焼土を含んだ茶褐色土である。竪穴内あるいは竪穴に重複して小穴12基(径12～63cm)を検出したが、このうち焼土を含んだ黄色粘土を埋土とするP1、(茶)褐色土系の埋土のP86088・P86089・P86091の4基(深さはそれぞれ21、12、32、28cm)は竪穴埋土を切っている。他の小穴は竪穴床面で確認したもので、P2・P4・P86093の3基(深さはそれぞれ10、4、11cm)は黄色粘土、P86092・P3・P5・P6の4基(深さはそれぞれ32、10、8、3cm)は茶褐色土系、P86145(深さ7cm)のみ焼土で充たされていた。本遺構は小鍛冶遺構(後述)と考えられ、検出面・床面の双方で同様の埋土(黄色粘土)をもつ小穴がみられ、床面も北西側から南東側へ傾斜(比高約20cm)していることから、竪穴床面を生活(活動)面と考えるのは難しく、検出面で把握した遺構の輪郭も、整地土(的なもの)の相違であった可能性がある。

遺物の出土は多くはないが、土器8点(YP414～421)、鉄滓1点(YM39)を実測した。このうち須恵器甕胴部片(YP421)、土師器有台杯(YP420)、土師器甕(YP414)・須恵器無台杯(YP417)はそれぞれ小穴P86088、P86091、P86092から、YP418(須恵器無台杯)は西側隅床面、YP415・416・419(土師器甕・須恵器無台杯・須恵器有台杯)は埋土から出土している。8世紀代に属するもの(YP419)もみられるが、概ね9世紀末から10世紀初頭頃の所産と考えられる。また、小穴P86145の東側床面で炉体に融着した状態で検出されたYM39は、鉄滓および炉体の縁弧がP86145を中心とする同心円上に位置することから、P86145を基底として内径46cm(鉄滓縁弧径)以上の鍛冶炉を想定した場合(P86145内に充満する焼土との関係は明らかではないが)、ほぼ原位置を保っていると考えられるものである。花崗岩起源の砂礫と焼土塊?を含んだ炉体は、木質等不純物を含む鉄滓側から順に黄色、浅黄色、にぶい橙色を呈し、最大厚3.5cmの鉄滓の外側に3.5cm、下部に2.5cm遺存している。同様に黄色粘土を埋土とする4基の小穴(P1・P2・P4・P86093)も炉(底)であった可能性があるが、このうちP1・P4は竪穴東側でP86145に隣接し、しかもP1は上位(竪穴検出面)から切り込んでいる。いずれもが炉(底)であるとすれば、同時存在はせずに順次(深さを考慮すればP4→P86145→P1の順か)構築・使用・廃棄されたものと推定

される。

本遺跡では、YM38・40～47をはじめとして計5,334gの鉄滓が出土しているが、本遺構出土YM39(595g)と第11号土坑(H-8区)出土品(125g)以外は総て流土・遺物包含層から得られたもので、遺構出土品を含めたグリッド別の出土状況は下表のとおりである。本遺構(G-8・9区)を中心にみた場合、その範囲は南西および南東側にそれぞれ15m、北東側に25m、北西側(山側)には広がっていない。この分布は、中世～近世の遺構のそれとは異なるもので、本遺構関連の遺構群(後述)の範囲に類似するものと考えられる。中世以降の土地利用によって二次的な移動を受けている可能性はあるが、隣接グリッドおよびJ-9区から得られた韃の羽口片YP423(H-8)、YP424(F-8)、YP1059(J-9: 下表*印)とともに本遺構との関連が有力視され、所属時期も同期である可能性が高い。

区	D	E	F	G	H	I	J	K	L	区	計
9			72	139			*314			9	525
8	176	48	1305 韃	911 韃	366	71	407			8	3284
7	176	48	701	158	69	15	15	36	55	7	1273
6	16		118							6	134
5			118							5	118
区	D	E	F	G	H	I	J	K	L	区	計
計	68	96	2314	1208	435	86	736	36	55	-	5334g

本遺構に関連するものとして、第13・2・5号溝、第10～12号溝、第11・37号土坑(第23号土坑も可能性がある)があげられる。第13・2・5号溝は、調査区の西側を北からそれぞれ約10mの距離をおいて東西方向に並走するもので、本遺構は第2号溝の北約8mに位置する。第10～12号溝は、調査区の中央(第13・2号溝の間)を西からそれぞれ約1、8mの距離をおいて南北方向に並走するもので、本遺構は第11号溝の西側約5.5mに位置する。第11号土坑は第11号溝の東側約1.5mに位置する不整楕円形の土坑、本遺構との距離は約7m、第37号土坑は本遺構の北西側約5.5mに位置する不整形の土坑である。これらの多くは黄褐色の砂礫を埋土とするところに大きな特徴があるが、遺物をほとんど含まないことから所属時期の確定が困難であった。重複関係では弥生時代～古墳時代のものに後出し中世～近世のものに先行するが、古代のなかでも本遺構に先行する第1号掘立柱式建物を第2号溝が切っていること、わずかに出土する土器細片の下限が本遺構の所属時期と同期であることなどから、遺構配置のうえからも本遺構との関連性が高い遺構群と判断した。なお主として本遺構の東側から北側にかけて検出された整地土(黄褐色砂礫)とそれを切り込む小穴群も、上記遺構群と同様本遺構に関連するものと考えられ、その密度からみて小穴群のなかに建物を構成するものが含まれる可能性が高いが、重層的な遺構群にたいして調査上の制約が少なからずあり、力及ばず確定するにはいたらなかった。

以上、甚だ不十分なものではあるが、本遺構および本遺構に関連する遺構・遺物の総体

は、小鍛冶関連遺構群としての当該時期の本遺跡の性格を端的に表すものといえ、本遺跡の北東約300mに所在し同期に盛期のひとつを迎える金丸杉谷遺跡(その実体は必ずしも明らかではないが)との関連性が注目される場所である。

3 掘立柱式建物(第8・58～68・72・74～79・87・89・90・135・136・141・142・143・152・153・154図)

第1号掘立柱式建物

調査区の南西側(C-7・8, D-6・7・8, E-7区)に位置する。柱穴は第3号土坑・第4号溝・小穴を切り、第2号溝・第1号墓に切られている。調査は1985年。

梁間2間(4.6m)×桁行2間(4.4～4.6m)の側柱南北棟で、東西両側にはそれぞれ1間(2.4m, 2.2～2.4m, 桁方向は4.4～4.6m)の底をもつ。柱穴は円形ないしは略円形を呈し、径は26～82cm、穴底の標高値は11.585～12.235mを測る。

柱穴出土遺物は少量で、図化し得たものは西側柱列の北隅柱穴出土土師器甕(YP626:第73図5層出土)、東側底列の南隅柱穴出土土師器甕(YP422)の2点である。後者は第3号土坑(弥生時代終末頃)内の北側でまとまって出土したもの(第18図)で、出土標高値が11.4mとやや低いものの、その範囲が想定される柱穴規模にとどまることから、調査時には第3号土坑を切る本建物の柱穴の輪郭を把握できなかったものと判断した。8世紀の所産とみられ、本建物の所属時期を表すものと考えたい。

8世紀代の遺物は調査区から少なからず出土するが、遺構は本建物のほかにはわずかに第23号土坑が該当する可能性をもつのみで、当該時期の本遺跡の性格は判然としない。

第2号掘立柱式建物・第1号柱列・第6号溝・第1号土器埋納小穴

第2号掘立柱式建物 調査区の南側(ABC-4・5, D-5区)に位置する。一部不明なものもあるが、柱穴は総じて小穴・暗渠排水路等に切られている。調査は1985年。

梁間4間(5.7～6.0m)×桁行5間(8.4～8.9m)の側柱建物と考えたが、柱穴間の距離は必ずしも一定ではなく、梁間では総てを確認できたわけではない。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、径は36～125cm、穴底の標高値は10.640～11.415mを測る。検出された柱穴15基のうち9基に柱根(総じて樹皮をのこした丸柱)が遺存しており、最も長いものは1mにも達し、柱根の最上部が検出面より44cmも高いものがあった。検出面がさらに上位の流土(遺物包含層)中にあったのか、あるいは柱を柱穴に納めたのちさらに整地がなされ、廃棄時に地表近くで柱が截断されたものかなどは判然としないが、樹皮が遺存する部位は少なくとも使用時には地中にあると考えることができ、なんらかの事情で廃棄時に柱を地上で截断したといった状況は想定しにくい。

柱穴出土遺物は弥生土器(・土師器)・須恵器など極少量で、図化可能なものは得られていないが、本建物にとまうとみられる第1号土器埋納小穴(後述)の年代観から、構築時期を14世紀(後半)と考えておきたい。

第1号柱列 調査区の南側(A, B-6区)に位置する。他の遺構との切り合いは少ないが、一部小穴を切っている。調査は1985・1988年。

第2号掘立柱式建物の北西側桁行に並行(距離は2.7~2.9m)して5基の柱穴を検出したが、第1次調査区と第4次調査区の間隙(本章第2節45頁参照)を考え、5間(9.4m)の柱列を想定した。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、径は56~143cm、穴底の標高値は11.090~11.310mを測る。

柱穴出土遺物はほとんどなく所属時期は不明であるが、位置関係から第2号掘立柱式建物にともなう可能性が高いと判断した。建物本体とは独立した構造物と考えられ、柵の下部構造といった性格を想定することもできるが確証を欠いている。

第6号溝 調査区の南側(B, C-5区)に位置する。小穴他と重複するが切り合いは不明、調査は1985年。

第2号掘立柱式建物北西側桁行と第1号柱列の間(距離はそれぞれ1.5~1.9、1.1~1.3m)を南西から北東方向へ延びるもので、延長8m以上、幅30~60cm、深さは最大32cmを測る。溝底水準(11.595m)が最も高い南西端は第1次調査区外へ続くが、第4次調査区では検出されていないことから両調査区の間隙(前述)で途切れるものと推定され、同水準(11.475m)が最も低い北東端はしだいに浅くなり解消する。

出土遺物はほとんどなく所属時期は不明であるが、位置関係から第2号掘立柱式建物にともなう可能性が高いと判断した。より上位にあった検出面が確認できなかったのであれば、建物廃棄時には(使用時にも?)埋まっていたとも考えられ、暗渠のような施設なのかもしれない。

第1号土器埋納小穴 調査区の南側(B-5区)に位置する。他の遺構との切り合いはない。調査は1985年。第2号掘立柱式建物の北西側の桁行上に位置し、南西隅の柱穴から約2.5m、P85047とP1との間に所在する。平面形は楕円形(径67×52cm)、深さ11cmを測るが、後述するように土師器皿41枚が埋納されており、最上部の皿は検出面より2cm高い位置で出土している。埋土は暗灰色を呈するやや締まりのない粘質土である。

皿(YP469~509)は完形ないしはほぼ完形(欠損は掘削中に生じた可能性がある)で、土圧で割れていたものも完形の状態を保っていたことから同様に復することができた。検出時および掘削中に他の破片は全く出土せず、数点が横位で出土したものの、ほとんどが正位(N)あるいは逆位(R)で重なって出土していることなどから、実測個体が埋納個体であって、出土状態も埋納状態に近いものと推定される。

皿には口径10.4~12.4、器高2.0~3.8cmのもの(YP469~485、大皿(L)と呼称する)と、口径7.9~9.3、器高1.6~1.9cmのもの(YP486~509、小皿(S)と呼称する)の二種があり、それぞれ17、24枚を得ている。出土状態が埋納状態に最も近いと考えられるものに、穴底から順(以下同様)にL479N→S493R→L478R→L484R→L480R(A群、5枚)、S486N→L483R→L476R(B群、3枚)、S506N→S500R→L475R(C群、3枚)、S503N→L

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

477R→L471R(D群、3枚)、S497N→L473R→L482R(E群、3枚)といった3枚ないしは5枚重ねのまとまりが5群17枚あり、大皿と小皿の組合せは一部異なるものの、いずれも正位の皿のうえに逆位で皿を重ね最上部には大皿を配するといった共通点が認められる。同様の埋納状態であった可能性のあるものに、S492N→S504R→S495R→L474R→L485R(F群、5枚)、S501N→S507R→L481R(G群、3枚)の2群8枚があるが、他の群とやや錯綜した状態にあることから確証を欠いている。また、L469R→S502R→S509R→S508R(H群、4枚)、S505R→S499R→L470R(I群、3枚)の2群7枚は、最下部に正位の皿をもたないことなどがA～G群とは異なっている。その他小穴の南側では正位の小皿4枚(490・491・496・498)の上に大皿(472)が逆位で(J群、5枚)、西側では小皿2枚(487・488)がそれぞれ475(P4)・508(P20)の西側に横位で、さらに487・488の下に小皿2枚(489・494)がそれぞれ正位で出土している。

以上、埋納の基本的な単位と組合せは上記A～Gの7群と考えられるが、H～Jといった他の組合せや横位埋納などの存否については、埋納時の制約や埋め戻し時の移動などの可能性を考えれば判然としない(総てが3枚ないしは5枚の組合せであった場合、総数41枚は7組の3枚重ねと4組の5枚重ねの和として表すことができる)。

いずれにせよ本埋納小穴は、その配置から第2号掘立柱式建物構築時の地鎮にとりなうものと推定され、所属時期は出土土師器皿から14世紀(後半)と考えられる。建物の構築方法との関連から、より上位にあった検出面が確認できなかったのであれば、土師器皿の埋納は小穴の下部に限定されていたことになり、上記埋納の単位と組合せ同様、他の例との比較のなかから、その糸口が得られるものと期待される。

第3号掘立柱式建物

調査区の南側(C、D-6・7区)に位置する。柱穴は第5号溝を切り、第4・5号掘立柱式建物の柱穴に切られている。調査は1985年。

梁間1間(3.4～3.6m)×桁行2間(5.2～5.3m)の建物で、柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を主とし、径は50～110cm、穴底の標高値は11.400～11.890mを測る。検出された柱穴6基のうち2基に柱根が遺存し、3基が二段に落ち込んで(あるいは掘り込まれて)いる。柱穴からは弥生土器(・土師器)・須恵器・越前甕(P85043)・青白磁瓶?(同)などが出土しているがいずれも細片で、実測し得た青磁皿小片(P85015: YP425、中世後半?)も建物の所属時期を表すものかどうかは判然としない。

第4号掘立柱式建物

調査区の南側(B、C-6・7区)に位置する。柱穴は第5・35号溝、第3号掘立柱式建物の柱穴を切り、小穴に切られている。調査は1985年。

梁間2間(3.6m)×桁行2間(7.0m)の側柱建物(西隅は調査区外)と考えた。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、径は33～102cm、穴底の標高値は11.505～11.885mを測る。検出された柱穴5基のうち1基に柱根が遺存し、2基が二段に落ち込んで(あるいは

は掘り込まれて)いる。柱穴からは弥生土器(・土師器)・須恵器・越前甕(P85019)などが出土しているが細片が多く、実測し得たものは越中瀬戸播鉢(P85016: YP426)、唐津溝縁皿(P85023: YP427)および黒色の漆器皿(P85102: YW56)の3点である。土器は17世紀前半頃の所産であるが、建物の所属時期とそれほどの隔絶はないものと考えたい。

第5号掘立柱式建物

調査区の南側(CDE-5・6区)に位置する。柱穴は第3号土坑、第3号掘立柱式建物の柱穴を切り、先後関係は不明ながら一部小穴等と切り合っている。調査は1985年。

3間(6.3m)×2間(6.5m)の側柱建物と考えられるが、第28号井戸(1989年調査)と重複する可能性のある東隅の柱穴は検出できなかった。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を主とし、径は35~116cm、穴底の標高値は11.000~11.595mを測る。検出された柱穴9基のうち1基に柱根が遺存し、それを含め6基が二段に落ち込んで(あるいは掘り込まれて)いる。柱穴からは弥生土器(・土師器)・須恵器・染付(P85020)などが出土しているが細片が多く、実測し得たものは唐津播鉢(P85020: YP428、17世紀代)のみで、建物の所属時期を表すものかどうかは判然としない。

第6号掘立柱式建物・第2号柱列

第6号掘立柱式建物 調査区の北側(P-9.OPQ-10・11区)に位置する。柱穴は第33・34号溝を切り、第25(東側)・30・31号溝に切られている。調査は1987年。

梁間1間(4.4m)×桁行2間(7.4m)の東西棟と考えたが、柱穴間の距離は一定ではない。柱穴は(長)隅丸長方形ないしは(長)楕円形を呈し、径は77~165cm、穴底の標高値は10.345~10.930mを測る。検出された柱穴6基のうち2基に柱根が遺存し、それを含め3基が二段に落ち込んで(あるいは掘り込まれて)いる。柱穴出土遺物は多くはなく、建物の所属時期を表すものかどうかとも判然としないが、明染付皿(P87001: YP429、15~16世紀)、土師器皿(P87001: YP430、14世紀)、砥石(P87025: YS31)の3点を実測した。

第2号柱列 調査区の北側(OPQ-11区)に位置する。一部先後関係が不明なものもあるが、柱穴は第34号溝を切り、第28→31号溝・小穴に切られている。調査は1987年。

第6号掘立柱式建物の北側桁行に並行(距離は1.8~2.2m)する4基3間(6.8m)よりなる柱列。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、径は49~204cm、穴底の標高値は10.580~10.895mを測る。1基に柱根(下端は穴底より30cm低い)が遺存し、1基が二段に掘り込まれている。柱穴出土遺物はほとんどなく所属時期は不明であるが、位置関係から第6号掘立柱式建物にともなう可能性が高いと判断した。第2号掘立柱式建物にともなう第1号柱列同様、建物本体とは独立した構造物と考えられる。

第7号掘立柱式建物・第1号小穴群(第33・34号土坑)

第7号掘立柱式建物 調査区の北東側(O-9.NOP-7・8区)に位置する。柱穴は小穴・溝などと切り合うが、先後関係を明らかにし得たものは少ない。重複する第15号掘立柱式建物に後出し、第35号土坑に切られている。西隅で第33・34号土坑他をともなうもの

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

と考えられる。一部上面を1988年に、大部分を1989年に調査した。

4間(5.7m)×(おそらくは)4間(11.2～11.7m)の側柱建物で、北側および南側の両東西柱列の西側や東側の南北柱列で確認できなかった柱穴があり、柱穴間の距離(特に東西柱列)も一定ではない。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を主とし、径は31～154cm、穴底の標高値は9.685～10.670mを測る。検出された柱穴12基のうち5基に柱根が遺存しており、それを含め4基が二段に落ち込んで(あるいは掘り込まれて)いる。

柱穴からは珠洲甕(P89007)・珠洲播鉢(P89105)・越前甕(P89105)などが出土しているものの細片が多く、北側東西柱列に属する東側の柱穴(P89007)から出土した土師器皿(YP431・432)、越前播鉢(YP433)および柱根(YW78)の4点を実測した。土器は概ね15世紀代の所産と考えられるが、本建物廃棄時の遺物を含む第1号小穴群出土品(後述)には先行するようである。柱根を残していることから廃棄時(後)の混入の可能性は少ないものとみられ、建物構築時に近い時期のものと考えたい。

第1号小穴群(第33・34号土坑) 調査区の北東側(N. O-8・9区)に所在する。第33号土坑と第34号土坑の西側が南北方向に隣接するもので、調査当時は別個の遺構と考えたが、第33号土坑の東側の小穴(P89121)および第34号土坑下の3基の小穴(P89169・172・173)を含め、第7号掘立柱式建物にともなう第1号小穴群として報告する。本文執筆時の変更であるため、挿図の割り付けに不具合が生じてしまったことを了承されたい。同建物の北西隅に位置し、3基の小穴(P89300・168・174)、第15号掘立柱式建物柱穴(P89117)および第7号掘立柱式建物柱穴(P89128)の掘方他を切り、第35号土坑他に切られている。

第7号掘立柱式建物の西側の南北柱列および北側の東西柱列に接して、南北3.08～3.25m、東西2.14～2.34mの方形の区画に、南北に3基、東西に2列の計6基の小穴を配置するもので、調査時は西側南端の小穴(径97～110、深さ54cm)を第33号土坑、東側南端の小穴(径101～103、深さ73cm)をP89121とした。前者は上部に焼土(多量)および炭化物を含んだ暗褐色土(1)、下部にやや暗い褐色土(上位)およびやや褐色味をおびた灰褐色土(下位)(2)が堆積し、土師器皿(YP612・613)・鉄製鑊(YM26)が出土した。後者は埋土の状況は明らかではないが、土師器皿(YP445)・鉄製釘(YM31)が出土している。

中央から北側の3基の小穴(P89169・172・173)の上部には、南北2.15×東西2.28mの範囲に焼土(多量)および炭化物を含んだ暗褐色土(第33号土坑上部と同一)(1)、焼土・炭化物を含む暗褐色土(2)、炭化物(材)(3)が堆積していた。検出面からの深さは38cmで、第34号土坑(上部)として扱ったが、赤化した(焼けた)面がなく性格的には周辺での火の使用とその後の片付けといったところであろうか。第34号土坑出土遺物の大部分はここから得たもので、土師器皿6点(YP601～604・606・607)、越前甕3点(YP608～610)の計9点を実測した。このうち北東側(A群)から完形で出土した土師器皿2点(YP602・603:603は油痕が認められ、602もその可能性がある)と、完形ではないが全形を知ることができた越前甕1点(YP608)はともに15世紀(後半)代の所産と考えられ、上記片付け時

期を表しているものと考えられる。後者の甕は上部では北東側(A群)、南西側(B群)、南東側(C群)でまとまって出土したが、北西側(D群)では下部(後述)にまとまっていた。接合の過程で打点(裏側が円錐状に剝離している)を中心として放射状および同心円状に割れているブロックがいくつか確認され、完形の状態からではないにせよ廃棄の段階で意図的に破碎されたことが知られるが、剝離部分を含め欠損なく復することができるブロックもあることから、その行為は廃棄(出土)地点で(も)おこなわれたと考えられる。

第34号土坑下部は、前述の甕(608)が含まれる土層を根拠に設定したもので、南北2.15×東西2.34mの範囲に、焼土・炭化物を基本的には含まない褐色土・灰褐色土・暗灰褐色土・灰色土系の埋土(4)～(10)が堆積する。608以外の遺物はほとんど含まず、坑底の凹凸が激しいが、東側の南北2箇所が小穴状に深くなっている点が注目される。北側(深さ66cm)のそれ(P89301と呼称する)は、下部に608(D群)を含んでいることから上部と一連のものであることは明らかであるが、南側(同)のそれ(P89302と呼称する)も、埋土は北側と類似しており同様である可能性が高い。小穴群東側南端のP89121を含め、第1号小穴群の最終段階に開放していた小穴列と考えたい。

第34号土坑の下部では、東南部でP89173(径72～115cm、深さ60cm)、北西部でP89172(径88～91cm、深さ54cm)、南西部でP89169(径92～94cm、深さ62cm、漆器(YW72:塗膜のみ)出土)、中央でP89174(径～40cm、深さ60cm)の計4基の小穴を確認した。埋土はそれぞれ(灰)茶褐色・黄褐色土系(20)～(24)、(灰・黄)褐色土系(11)～(19)、黄・灰褐色土系(27)・(28)、茶褐・灰色土系(29)～(31)、総じて地山質土を介するのが特徴であるが、このうち西側の2基の小穴(172・169)は、小穴群西側南端の第33号土坑とともに本小穴群最終段階の東側小穴列に先行するものと考えられる。東側南部の小穴173も上部の小穴302に先行するものという見方もできるが、むしろ302構築時の掘方(後述)とした方が妥当ではなかろうか。なお中央の小穴174からは、完形の土師器皿1点(YP605:E群)が出土したが、当初は重複する第15号掘立柱式建物の柱穴かとも考えたもので、土器様相および切り合いのうえからも明らかに本小穴群に先行するものである。

以上南北3基、東西2列、計6基の小穴を配する本小穴群は、まず西側小穴列が先行して構築され、同小穴列廃棄後に東側小穴列が再構築されたとみられる。性格的には大甕を据え置く施設と考えられ、YP608もそうした甕の一つであろう。各小穴列における小穴間の距離は、胴径1m弱を測る同甕を納めるには十分であって、小穴173を大甕を据え置いた小穴302の掘方と考えたのもそのためである。本小穴群は、その配置から第7号掘立柱式建物にともなうものとみられるが、多量の焼土と炭化物を含んだ最終埋土(整地土?)のありかたからみて、本遺構廃棄時が建物本体のそれであった可能性が高い。

第8・17～19号掘立柱式建物

第8号掘立柱式建物 調査区の南東側(JKL-3・4区)に位置する。柱穴は第9・30号井戸を切り、小穴(柱穴)と切り合っている。調査は1988年。

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

梁間1間(5.4～5.6m)×桁行2間(9.8～10.0m)の建物(南隅の柱穴は完掘できていない)と考えたが、桁方向の柱穴間の距離は一定ではない。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、径は78～168cm、穴底の標高値は8.935～9.290mを測る。検出された柱穴6基のうち2基に柱根が遺存する。柱穴からは珠洲・越前・青磁・越中瀬戸などが出土し、志野菊皿(P88048:YP434)、唐津向付(P88048:YP435)、銅製(?)小柄(P88013:YM22)の3点を実測した。土器は16世紀末頃を上限とするもので、建物の所属時期も同期を大きく下ることはないと考えられる。

第17～19号掘立柱式建物 調査区の南東側(I-3.JKL-3・4.J-5区)に位置する梁間1間×桁行2間の建物群。挿図作製時に確信がもてなかったことから、結果として割り付けに不具合が生じてしまった。調査は1988年。

第17号掘立柱式建物の柱穴(P8806・14・20・28・32・49)は、第19号掘立柱式建物・第30号井戸他を切り、第36・43号溝他に切られている。梁間5.6～5.9m、桁行9.8m、柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、径は86～163cm、穴底の標高値は9.025～9.375mを測る。検出された柱穴6基のうち3基に柱根(P8828からは2点出土)が遺存している。柱穴からは珠洲甕(8806)・青磁椀(8806・14・32)などが出土し、鉄製燧金1点(P8814:YM29)、柱根1点(P8832:YW77)を実測した。青磁椀は15世紀前半代の所産と考えられるが、先行する第19号掘立柱式建物も同期を上限とする可能性が高いことから、若干の使用期間を考慮する必要がある。建物の所属時期もやや下るのであろう。

第18号掘立柱式建物の柱穴(P8812・29・36・51)は、第8・19号掘立柱式建物・第10・30号井戸他を切り、第37・39号溝に切られている。梁間5.9m、桁行9.2m程度と推定され、柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、径は100～145cm、穴底の標高値は8.955～9.505mを測る。検出された柱穴4基のうち2基に柱根が遺存している。柱穴出土遺物はほとんどないが、銭貨1点(P8812:YM15)を得ている。第8号掘立柱式建物に後出することから、所属時期は17世紀以降と考えられる。

第19号掘立柱式建物の柱穴(P8807・16・31(・32)・41)は、第8・17・18号掘立柱式建物、第36号溝他に切られている。梁間6.0m、桁行7.7m程度と推定され、柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、径は105～143cm、穴底の標高値は9.205～9.310mを測る。検出された柱穴5基のうち2基に柱根が遺存している。柱穴からは珠洲甕(8807)・青磁椀(8831)などが出土し、白磁皿1点(P8807:YP461)、硯1点(P8841:YS48)を実測した。白磁皿は15世紀前半代の所産とみられ、建物の所属時期の上限を表すものと考えたい。

第9号掘立柱式建物

調査区の東側(P-3.O.P-4・5区)に位置する。柱穴は第53・54号溝および第13号井戸(確実ではない)を切り、小穴に切られている。調査は1988年。

梁間3間(5.4～5.5m)×桁行4間(7.3～7.5m)の側柱建物と考えたが、北側の桁行列を除き総ての柱穴を検出できたわけではない。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、

径は33～110cm、穴底の標高値は8.915～9.335mを測る。検出された柱穴10基のうち8基に柱根ないしは柱根の樹皮が遺存し、それらを含め4基が二段に落ち込んで(あるいは掘り込まれて)いる。柱穴出土遺物はほとんどなく、所属時期は判然としない。

第10号掘立柱式建物

調査区の東側(OPQ-4, O, P-5区)に位置する。柱穴は第14号井戸他を切っている。調査は1988年。

梁間1間(4.6～4.7m)×桁行2間(7.6m)の建物(東隅の柱穴は調査区外)と考えたが、桁行は4間の可能性もある。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形、径は72～124cm、穴底の標高値は8.870～9.125mを測る。検出された柱穴5基のうち2基が二段に落ち込んで(あるいは掘り込まれて)いる。柱穴出土遺物は少ないものの、唐津椀1点(P88068:YM458)、礎板1点(P88068:YW76)を実測した。土器は17世紀前半代の所産とみられ、建物の所属時期も同期を大きく下ることはないと考えられる。

第11号掘立柱式建物

調査区の東側(N-2, N, O-3区)に位置する。柱穴は小穴と切り合うが、先後関係は明らかではない。調査は1988年。

梁間1間(4.8m)×桁行2間(7.3m)の建物(南東隅柱穴は調査区外)と考えた。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、径は62～134cm、穴底の標高値は8.465～8.695mを測る。検出された柱穴5基のうち1基が二段に落ち込んで(あるいは掘り込まれて)いる。柱穴出土遺物はほとんどなく、所属時期は判然としない。

第12号掘立柱式建物

調査区の東側(N-3, N, O-2区)に位置する。柱穴は第13号掘立柱式建物と切り合うが、先後関係は明らかではない。調査は1988年。

桁行3間(7.0m)(以上)の建物と考えたが、調査区隅に所在するため北西側桁行列(の大部分)のみの検出である。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形、径は47～120cm、穴底の標高値は8.520～8.730mを測る。検出された柱穴4基のうち1基に柱根が遺存する。柱穴出土遺物は少なく、所属時期は判然としない。

第13号掘立柱式建物

調査区の東側(N, O-2区)に位置する。柱穴は第12号掘立柱式建物と切り合うが、先後関係は明らかではない。調査は1988年。

桁行1間(2.3m)以上の建物と考えたが、調査区隅に所在するため北西側桁行列の一部のみの検出である。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形、径は(46)～97cm、穴底の標高値は8.450～8.515mを測る。柱穴出土遺物はほとんどなく、所属時期は判然としない。

第14号掘立柱式建物

調査区の東側(M, N-4区)に位置し、柱穴は小穴に切られている。調査は1988年。桁行3間(4.5m)の建物と考えたが、検出されたのは北西側の桁行列の大部分(3基)のみで

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

ある。梁間はおそらく1間と推定され、南東側の桁行列は流失したものと考えた。柱穴は円形を呈し、径は(44)～56cm、穴底の標高値は9.200～9.295mを測る。

柱穴出土遺物は少ないが、弥生土器1点(P88057:YM437)を実測した。外面に条痕を施した甕の底部片で、弥生時代中期前半(以前)の所産であるが、直接建物の所属時期を表すものとはいえない。二段に落ち込んで(あるいは掘り込まれて)いる柱穴P88055から、細片ではあるが弥生時代終末以降と推定される無文有段口縁の甕を得ているためである。とはいえ本建物の形式は、本章第2節第1項でもふれたとおり弥生時代から古墳時代に属する可能性が高く、本遺跡では唯一の例となる。

第15号掘立柱式建物・第20号溝・第3号井戸

第15号掘立柱式建物 調査区の中央やや北東側(LMN-7・8・9区)に位置する。柱穴は小穴と切り合い、第1号小穴群に切られている。調査は1989年。

梁間6間(11.75～11.95m)×桁行5間(11.10～11.20m)(以上)の総柱建物。南東側梁間列は一部流失している。桁行列の距離は、中央の2間が1.4～1.6mと狭く、その両側が1.9～2.3m、一番外側が2.2～2.6mと相対的に広がっている。円形主体の柱穴の最大径は86cmであるが、実質的には40cm前後を中心に20～60cmの間におさまり、穴底の標高値(10.140～11.085m)も全体の6割は10.4～10.5mを中心に10.3～10.6mの間におさまっている。検出された柱穴35基のうち、柱根が遺存する(確実に本建物にともなうとはいえないが)ものは1基(P89117)である。柱穴出土遺物はほとんどなく図化可能なものは得られていないが、第7号掘立柱式建物(15世紀代)に先行し本建物にともなうとみられる第20号溝の年代観とも矛盾しないことから、所属時期を14世紀代と考えておきたい。最大級の礫組井戸(第3号井戸)をとめない、総柱建物という古相を呈する形式からみても、本遺跡で確認された中世の建物のなかでは最も古いものものといえる。

第20号溝 調査区の中央やや北東側(L-7・8・9区)に位置する。小穴他と重複するが先後関係は判然としない。南東部および北西部をそれぞれ1986・89年に調査した。

第15号掘立柱式建物の南西側桁行に並行(距離は0.7～1.5m)して北西から南東方向へ延びるもので、延長14m以上、幅40～190cm、深さは最大13cmを測る。溝底水準はしだいに浅くなって解消する北西端(11.395m)が最も高く、現況水田耕作にともなって截断されたと推定される南東端(11.145m)との比高は25cmである。埋土は地山質の黄色粘土ブロックと焼土ブロック・炭粒を含んだ褐色土で、水の流れたような形跡はない。上位北西端がそのまま第3号井戸の南西側に附帯する段状の切土面に接続することから、第15号掘立柱式建物(構築時)の屋敷地は、本遺構を南西界として造成されたものとみられ、機能的には柵の下部構造ないしは暗渠(前者より可能性が高い)などが考えられる。

出土遺物は少ないが、南東部と北西部から完形の土師器皿をそれぞれ1点(YP634・635)得ている。概ね14世紀代の所産と考えられ、どの段階に対応するものかという問題はあるが、建物の所属時期を考える指標となろう。

第3号井戸 調査区の中央やや北側(L. M-10・11区)、丘陵裾部に位置する。中央を第24・25号溝に切られている。調査は1986年。

検出面の平面形は楕円形(3.7×2.73m)、内径85~100cm、深さ3.41mを測る礫組の井戸。本遺跡のなかでは最大級のもので、礫組は底面から2.17m遺存している。個々の礫の最も広く平坦な面を内側へ向ける組み方は出色のもので、内壁の立ち上がりもほぼ垂直である。北西側上位斜面にも若干手を入れ小穴5基を配することから、上屋様施設の存在が想定される。南西側には第20号溝へ接続する段状の施設が附帯し、井戸が第15号掘立柱式建物にかかる屋敷地造成と一体的に構築されたこと、上記上屋様施設が南西側にも架かっていた可能性などを示している。なお屋敷地の北西界は、本遺構の東側に接続する切土面とその延長上に位置する第27号溝であったのかもしれない。

埋土は上位、中位、下位に三大別でき、青灰色粗砂(24)の下位埋土は廃棄前、青灰色の粘質(地山)土ブロックを含む暗灰色砂質・粘質混土(23)の中位埋土は廃棄時、粗砂・砂質土・シルト・粘質土の互層である上位埋土(1~22)は廃棄後の堆積土と考えた。正確な記録はないが、少量出土した遺物のほとんどは自然堆積とみられる上位埋土中より出土している。大形の破片はなく、実測した土器5点(YP510~514: 瓦質火桶・越前播鉢・天目碗・越前甕・珠洲播鉢)の所属時期も15~16世紀代と幅をもつようで、井戸の廃棄年代に直接結びつくものかどうかは判然としない。

第16号掘立柱式建物・第78号溝

第16号掘立柱式建物 調査区の南側(EFG-4・5, H-5区)に位置する。小穴と相互に切り合うほか、第26号井戸・第80・81号溝を切っている。調査は1989年。

4間のおそらくは北西側)桁行列(10.0m)を確認した。梁間(1間?)は5.4m以上、南東側桁行列は調査区外と推定される。柱穴は隅丸長方形ないしは長楕円形を呈し、径は56~157cm、穴底の標高値は10.25~10.53mを測る。検出された柱穴5基のうち2基に柱根(P89206からは2点出土)が遺存している。

柱穴出土遺物は弥生土器(土師器)、須恵器、珠洲甕・播鉢などの小片が出土し、珠洲甕1点(P89206: YP438)、金銅製?煙管(吸口)1点(P89244: YM24)を実測した。後者は17世紀代の所産と考えられ、建物の所属時期の上限を示すものであろう。

第78号溝 調査区の南側(EFGH-5, E, F-6区)に位置する。先後関係が明らかなのは少ないが小穴と重複し、第81号溝を切っている。調査は1989年。

第16号掘立柱式建物の(北西側)桁行に並行(距離は1.1~1.5m)して南西から北東方向へ延びるもので、延長13m、幅70~194cm、深さは最大23cmを測る。溝底水準は南西側(11.12m)が北東側(10.55m)よりも高いが、北東端が明瞭に立ち上がることから水の流れるようなものではない。出土遺物は少なく実測可能な個体は得られていないが、位置関係から第16号掘立柱式建物にともなうのは確実とみられ、所属時期も同期と考えたい。柵の下部構造ないしは暗渠のような機能が考えられる。

小穴

第76・77図では、掘立柱式建物(柱穴)出土土器のほか、小穴から出土した古代以降の土器27点(YP439～444・446～457・459・460・462～468)を報告した。このほかに砥石(P89107:YS32)、銭貨(P87010:YM14、P88047:YM19)、柱根(P89004:YW76)が小穴出土品であるが、柱根出土小穴はいうまでもなく、その他実測可能な個体の得られなかったものを含め掘立柱式建物の柱穴となる可能性の高い小穴は少なくない。力及ばずして19基を確認するにとどまったが、調査区の南部第2号掘立柱式建物周辺、南東部第8号掘立柱式建物周辺、北部第6・7号掘立柱式建物周辺などにおお該小穴が集中している。

4 井戸(第79～86・135・138～140・145～149・152図)

調査区南部の井戸

第1号井戸

B-5区に所在し、小穴を切っている。調査は1985年。平面形は円形(1.55×1.50m)、内径40～45cm、深さ0.74mを測る礫組井戸。残存礫組高は0.54mである。

遺物の出土は少なく、埋土より曲物底板(YW1:柄杓?)・結桶底板(YW2)を得たが遺構の所属時期は判然としない。第2号掘立柱式建物内に位置する。

第8号井戸

A-5区に所在し、第35号溝を切っている。調査は1988年。平面形は円形(2.05×1.90m)、内径55～75cm、深さ0.92mを測る礫組(上端まで遺存する)井戸。

遺物の出土は多くはないが、埋土から無釉の溝縁皿(YP519)・越前播鉢(YP520)・唐津皿(YP521)・染付皿(YP522)を得ている。概ね17世紀(中頃)の所産とみられ、遺構の所属時期を表すものと考えられる。第2号掘立柱式建物の西側に位置する。

第19号井戸

E-5区に所在し、第77号溝を切っている。調査は1989年。平面形は円形(1.63×1.63m)、内径65～70cm、深さ0.47mを測る礫組(上端まで遺存する)井戸。

遺物の出土は極少量、須恵器長頸瓶(YP575)・瀬戸灰釉皿(YP576)を埋土から得たが遺構の所属時期は判然としない。第5号掘立柱式建物の東側に位置する。

第20号井戸

E、F-4・F-5区に所在し、第82号溝と重複する。調査時には確認できなかったが、同溝に先行する可能性が高い。調査は1989年。平面形は楕円形(2.31×2.00m)、内径75cm、深さ0.96mを測る礫組井戸。残存礫組高は0.91m、北東側を除いて掘方が比較的大きい。

遺物の出土は多いとはいえないが、大形の破片を主体に埋土から得た珠洲壺(YP566)・珠洲甕(YP567)・須恵器横瓶(YP568)・鍋蓋(YW21)・柄杓?(YW22)・曲物(YW23?・24)・漆器椀(YW60)を実測した。珠洲陶器は15世紀前半代の所産とみられ、遺構の所属時期を表すものと考えたい。第16号掘立柱式建物内に位置する。

第21・22・27号井戸

第21号井戸 G-4・5区に所在し、小穴と切り合い第22号井戸に切られているが、後者の先後関係は上部では確認できなかった。調査は1989年。平面形は楕円形?(2.38m、短径は不明)、内径75~85cm、深さ1.93mを測る礫組井戸。残礫組高は1.42m、礫組南側上部は第22号井戸(の礫組)によって損壊している。

遺物の出土は多くはないが、埋土から得た土師器皿4点(YP577・578・580・581)・須恵器無台杯(YP579)・砥石(YS22)・曲物?(YW19)を実測した。YP581・YS22、YP580は取り上げ時にそれぞれ第22号井戸、周辺小穴出土品と区別できなかったもので、遺構の所属時期はYP577・578の年代観にしたがうよりないが、一見14世紀中頃とみられる当該土師器皿の位置づけにはいま一つ不安が残る。第16号掘立柱式建物内に位置する。

第22号井戸 G-4区に所在する。先後関係の不明なものもあるが、第21・27号井戸および小穴を切っている。調査は1989年。平面形は楕円形(2.07×1.87m)と推定され、内径80cm、深さ1.47mを測る礫組井戸。残礫組高は0.89mである。

遺物の出土は少量で、第21号井戸出土品との区別ができなかった前記土師器皿(YP581)・砥石(YS22)を含め、埋土から得た珠洲壺(YP582)・箸(YW20)・漆器椀(YW61)を実測したのみで、遺構の所属時期は判然としない。第16号掘立柱式建物内に位置する。

第27号井戸 F・G-4区に所在し、小穴と切り合い第22号井戸に切られているが、調査区の端にあたり完掘はできなかった。調査は1989年。平面形は楕円ないしは円形(1.97m)、内径50~70cm、深さ1.77mを測る礫組井戸。残礫組高は0.72mである。

遺物の出土は極少量、埋土から土師器皿(YP588:14世紀代)・漆器皿(YW62)を得たが遺構の所属時期を表すものかどうかは不明。第16号掘立柱式建物内に位置する。

第23号井戸

G・H-4区に所在し、第83(手順に不備があり延長部分を図化することができなかった)・84号溝に切られている。調査は1989年。平面形は円形(2.20×1.94m)、内径65~100cm、深さ1.20mを測る礫組井戸。残存礫組高は0.68mである。

遺物はほとんど出土せず所属時期は不明。第16号掘立柱式建物の北東側に位置する。

第24号井戸

H-5区に所在し、小溝・小穴を切り、第85号溝にも後出する(少なくとも先行はしない)ようにみえた。調査は1989年。平面形は円形(2.50×2.35m)、内径60~100cm、深さ2.17mを測る礫組井戸。残存礫組高は1.57m、礫組は底面に据えられた三個の板状の礫の上に組み上げられており、小口でもより小さな(尖った)面を内側に向けている。

遺物の出土は多くはないが、埋土から得た唐津皿(YP583)・瀬戸香炉(YP584)・越中瀬戸皿(YP585)・結桶(YW25)・角切折敷(YW26)・器種不明木製品(YW27)を実測した。YP584は別として土器は17世紀中頃を下限とするようで、同期が遺構の所属時期に近いものと考えたい。第16号掘立柱式建物の北側に位置する。

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

第25号井戸

H・I-5区に所在し、小穴を切っている。調査は1989年。平面形は円形(1.79×1.63m)、内径45～75cm、深さ1.03mを測る礫組井戸。残存礫組高は0.93mである。

遺物の出土は少ないが、埋土から得た染付鉢(YP586：17世紀中頃)が遺構の所属時期を表すものと考えたい。第16号掘立柱式建物の北側に位置する。

第26号井戸

G・H-4・5区に所在する。小穴と切り合い第16号掘立柱式建物の柱穴に切られている。調査は1989年。平面形は円形(1.98×1.84m)、内径80～85cm、深さ1.69mを測る礫組井戸。残存礫組高は1.03mである。

遺物の出土は少なく、埋土から得た珠洲播鉢(YP587：15世紀後半)、礫組の一部となっていた粉挽(下)臼(YS71)を実測したのみで、遺構の所属時期は判然としない。

第28号井戸

E-5区に単独で所在する。調査時(1989年)西側(1985年調査区)がすでに道路(法尻)となっていたため、掘方の確認は十分ではない。平面形は円形ないしは楕円形(1.98m)、内径55～60cm、深さ0.44mを測る礫組(上端まで遺存する)井戸。

遺物の出土はほとんどなく、凶化可能なものも得られていないことから遺構の所属時期は判然としない。第16号掘立柱式建物の南西側に位置する。

第33号井戸

E-6区に単独で所在する。調査時(1985年)は上部を小穴(P85042)としたものの攪乱と考え下部は掘削しなかった。位置関係などから井戸の可能性はある。平面円形(1.38×1.23m)を知るのみで詳細は不明。第3号掘立柱式建物の西側に位置する。

第34号井戸

C・D-5区に所在し、溝状の落ち込みを切っている。調査時(1985年)は上部を小穴(P85041)としたものの攪乱と考え下部は掘削しなかった。位置関係などから井戸の可能性はある。平面円形(2.09×1.90m)を知るのみで詳細は不明。第2号掘立柱式建物の北東側に位置する。

第35号井戸・第79号溝

第35号井戸 H-4区に所在し、小穴・小溝を切っている。調査時(1989年)は上部を第36号土坑として掘削したが、埋土に締まりがなく(赤)瓦小片が出土するなど調査前に移転した家屋にともなうことが确实視されたため下部は掘削しなかった。

平面は楕円形(3.08×2.40m)、唐津? 椀(YP597)・染付皿(YP598)・染付椀(YP599)・肥前播鉢(YP600)・砥石(YS23)を得ている。陶磁器は19世紀代に属するもの(YP599)が下限であるが、昭和末期の埋土から出土するにいたるその経歴については不明である。

第79号溝 第35号井戸の西側10～16m(E-5、EFG-6区)に所在する。延長13m、幅18～32cm、最大深度21cmを測る。調査前に移転した家屋をしの字形に囲む(山側の)暗渠

排水溝と考えられるもので、溝内には埋設された竹が遺存していた。

調査区北部の井戸

第4号井戸

0-14区に所在し、第26号溝を切っている。調査は1986年。平面形は円形(1.55×1.45m)、内径55~70cm、深さ2.04mを測る礫組(上端まで遺存する)井戸。

遺物の出土は多くはないが、埋土から珠洲甕(YP515)・珠洲播鉢(YP516)および曲物底板(YW3)、周辺から白磁碗(YP517)・粉挽(下)臼2点(YS67・68)・茶(下)臼(YS74)を得ている。正確な記録はないが、安山岩製の茶(下)臼(YS75)は礫組の一部と記憶している。遺構の所属時期を表すものかどうかは別として、埋土出土土器は15世紀代の所産であろうか。本遺跡北端の丘陵斜面(井戸では最高所)に位置する。

第5号井戸

0-10区に所在する。第24号溝に切られ性格不明の落ち込みとも重複している。調査は1987年。平面形は円形(1.15×1.05m)、深さは0.81m以上、残存はしていないが礫組井戸(の掘方)と推定される。埋土は上部(6~8)と下部(9)に大別できるが、礫を多量に含む下部の黄褐色砂質土(地山質)は、礫組抜き取り後の埋め戻し土であろう。

遺物の出土は少なく、埋土より角切折敷(YW4)・鍋蓋?(YW5)を得たが遺構の所属時期は判然としない。第6号掘立柱式建物の南西側に位置する。

第6号井戸

P、Q-11、Q-12区に所在し、腐植物を含んだ黒色粘土を埋土とする不整形な落ち込み(小穴に切られている)をとまう。調査は1987年。平面形は円形(1.62×1.50m)、内径50~75cmを測る。掘方底面から礫組最上部までの比高は1.21mであるが、礫組は同底面から約20cm高い位置に置かれた板状の礫の上に組み上げられているため、実際上の深さは90cm程度となる。埋土は廃棄後(1~5)と掘方(6・7)に大別されるが、前者は腐植物を含んだ黒褐色土系で構成されることから、周辺落ち込み同様流れの(少)ない水面下での堆積が想定される。このうち礫組の外側最上部に堆積する腐植物を含んだ黒褐色粘質土(5)は、鉄分の含みかたで周辺落ち込み埋土と区別したが、厳密な先後関係は把握していない。

遺物の出土は多くはないものの、埋土から越前甕(YP518)・粉挽(上)臼(YS62)・漆器碗(YW57)、周辺落ち込みから鍋蓋?(YW6)を得ている。甕は16世紀(前半)代の所産と考えられ、遺構の所属時期を表している可能性がある。第2号柱列の北側に位置する。

第7号井戸

Q-10区に所在する。第90号溝(後出)と重複するが直接的な切り合いはない。南北に長軸をもつ楕円形の落ち込みをとまう。調査は1987年。平面形は円形(0.9×0.8m)、内径0~40cm、深さ0.87mを測る礫組井戸。残存礫組高は0.83mで、底に平坦面をもたない本遺跡最小規模の井戸である。

遺物の出土は極少量、埋土から粉挽(上)臼(YS61)を得たが遺構の所属時期は判然とし

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

ない。第6号掘立柱式建物の東側に位置する。

第17号井戸

P・Q-8区に所在する。第62号溝に後出するが、大きく重複する第60号溝との先後関係は確認できていない。調査は1989年。平面形は円形(1.56×1.45m)、内径25～70cm、深さ0.86mを測る礫組井戸。残存礫組高は0.78mである。

遺物の出土は極少量、埋土から皿2点(YP573・574)を得たが遺構の所属時期は判然としない。第7号掘立柱式建物の北東側に位置する。

第18号井戸

P-8・9区に所在し、小(柱)穴(P89004)・第60号溝を切っている。調査は1989年。掘方は確認できなかったが、平面形は円形(1.10×1.10m、推定値)、内径30～50cm、深さ0.62mを測る礫組(上端まで遺存する)井戸。底面にも礫が組まれている。

礫組のなかから粉挽(下)臼(YS69)を得たが、埋土からはほとんど遺物が出土せず遺構の所属時期は判然としない。第7号掘立柱式建物の北側に位置する。

第32号井戸

O・P-11・12区に所在し、第19号溝を切っている。調査時(1986・87年)は攪乱と考え掘削しなかった。位置関係などから井戸の可能性がある。平面円形(1.55×1.30m)を知るのみで詳細は不明。第2号柱列の西側に位置する。

調査区東部の井戸

第9号井戸

L・M-4区に所在し、第8号掘立柱式建物(P88048)・第11号井戸に切られている。調査は1988年。平面形は円形(1.73×1.73m)、深さ1.26mを測る礫組井戸。柱穴(P88048)掘削時の抜き取りによるためかどうかは判然としないが、残存礫組高こそ1.00mを測るものの総じて遺存状態は不良で、内径は40cm以上を測るにとどまる。

遺物の出土は多くはないが、上面で青磁皿(YP529)、埋土より青磁椀(YP524)・越前甕(YP525)・珠洲甕(YP526)・珠洲播鉢(YP527・528)・鍋蓋(YW7)・曲物(?)底板(YW8)、掘方から青磁皿(YP523)を得ている。遺構の所属時期は、青磁椀の年代観から16世紀代と考えておきたい。第17号掘立柱式建物の北側に位置する。

第10号井戸

L-4区に所在し、第18号掘立柱式建物(P88051)・第11号井戸・小(柱)穴(P88045)に切られている。調査は1988年。平面形は楕円形(2.12×1.80m、短径は推定値)、内径40～80cm、深さ1.45mを測る礫組井戸。残存礫組高は1.29mで、礫組との直接的な先後関係はないが、底面に板状の礫が三個張りついている。

遺物は小片主体であるが比較的多様性に富んでいて、上面から粉挽(下)臼(YS70)・銅(?)製の鐺(の一部:YM21)、埋土から珠洲播鉢(YP530・538・540)・越前播鉢(YP532～535)・瀬戸瓶子(YP539)・青磁皿(YP531)・土師器皿(YP536・537)・鍋蓋(? : YW

9)・折敷(?底板:YW10)が出土している。15世紀後半代を上限として、第9号井戸に若干先行する可能性がある。第19号掘立柱式建物の北東側に位置する。

第11号井戸

L・M-4区に所在し、第9・10号井戸に後出する。調査は1988年。平面は円形(2.27×2.08m)、内径60~80cm、深さ1.72mを測る礫組井戸。残存礫組高は1.18mであるが、礫は底面中央付近から組み上げられている。

遺物の出土は比較的多く、埋土から唐津皿(YP541・542・547~549)・白磁皿(YP543)・越中瀬戸皿(YP545・546)・染付皿(YP550・551)・染付椀(YP552)・瀬戸?鉄釉皿(YP544)・土師器皿(YP553・554)・越前甕(YP555)・越前播鉢(YP556)・粉挽(下)臼(YS72)・柄杓柄(YW13)・柄杓底板?(YW16)・折敷?(YW14)・結桶?(YW15)・漆器杓子(YW58)、掘方から粉挽(上)臼(YS63:礫組の一部の可能性もある)を得ている。このほか第50号溝から出土した越中瀬戸向付(YP672)には、本遺構から出土した破片が接合している。

陶磁器には16世紀後半以前のもの(543・544他)も含まれるが、まとまったものとしては16世紀末から17世紀初頭(541・546他)、17世紀前半代(547・549他)、17世紀中頃(550・551他)をそれぞれ中心とする3群があり、一部年代観が下るものがあるのかもしれないが、遺構の廃棄年代の上限を17世紀中頃と考えておきたい。古相の一群と新相の一群の双方に二次加熱を受け釉が白濁しているもの(YP546・551)があり、廃棄(直)前の3群同時使用の可能性を示唆するものであろう。第18号掘立柱式建物の北側に位置する。

第12号井戸

M-4・5区に所在し、小穴を切り第47~49号溝(後出)と重複するが、後者とは直接的な切り合いはない。調査は1988年。平面形は楕円形(2.08×1.71m)、内径70cm、深さ0.77mを測る礫組(上端まで遺存する)井戸。裏込めを中心に小礫を多用している。

遺物の出土は多くはないが、埋土から越中瀬戸皿(YP557)・染付椀(YP558)・結桶底板(YW17・18)、掘方から礫組の一部である茶(下)臼(YS76)を得た。遺構の所属時期は、染付椀の年代観から18世紀代と考えておきたい。第17号掘立柱式建物の北側に位置する。

第13号井戸

N・O-4区に所在し小穴他と切り合うが、第9号掘立柱式建物の柱穴(後出?)を含め先後関係は明瞭ではない。調査は1988年。平面形は楕円形(2.32×1.70m、長径は推定値)、内径80~90cm、深さ1.32mを測る礫組(上端まで遺存する)井戸。

遺物の出土は極少量、埋土から瀬戸灰釉皿(YP559)を得たが遺構の所属時期は判然としない。第10号掘立柱式建物の南西側に位置する。

第14号井戸

O・P-4・5区に所在する。小穴を切り第10号掘立柱式建物の柱穴に切られている。調査は1988年。平面形は円形(1.80×1.56m)、内径50~90cm、深さ0.85mを測る礫組井

戸。残存礫組高は0.82mである。

遺物の出土は少ないが、土師器皿3点(YP560～562：15世紀後半頃?)・白磁皿(YP563)・珠洲壺(YP564)・漆器椀(YW59)を埋土から得ている。(ほぼ)完形の土師器皿の年代観を遺構の所属時期の目安と考えたい。第9号掘立柱式建物内に位置する。

第15号井戸

P-4区に所在する。小穴と切り合い小規模な溝(後出)が重複している。調査は1988年。平面形は円形(1.52×1.33m)、内径50～85cm、深さ0.94mを測る礫組井戸。残存礫組高は0.92mで、底面に板状の礫が三個張りついている。

遺物の出土は少なく、埋土から土師器皿(YP565)・箕(YW11)を得たが遺構の所属時期は判然としない。第9・10号掘立柱式建物内に位置する。

第16号井戸

O-2区に単独で所在する。調査は1988年。平面形は円形(1.20×1.20m)、内径50cm以上、深さ0.18mを測る礫組井戸(残存礫組高も0.18m)。地山付近で径1m強の円形の小礫の集積となって検出されたものであるが、井戸との確信がもてず北東および北西側の二箇所断ち割りをいれたため、礫組の一部が図化できていない。

遺物の出土は少ないが、内部から染付皿(YP569)・染付椀(YP570)・唐津皿(YP571)・土師器皿(YP572)・器種不明の木製品(YW12)を得ている。遺構の所属時期は、染付の年代観から18世紀代と考えておきたい。第11号掘立柱式建物の東側に位置する。

第29～31号井戸

第29号井戸 K・L-3・4区に所在し、小穴に切られている。平面形は円形(2.38×2.18m)、深さは0.78mを測る。調査時(1988年)は第27号土坑としていたが、礫(組)を抜き取った井戸(の掘り方)と推定される。

遺物の出土は極少量で、埋土より得た土師器皿(YP589)を実測したのみで遺構の所属時期は判然としない。第8号掘立柱式建物内に位置する。

第30号井戸 L-4区に所在し、小溝・第43号溝・第8・17・18号掘立柱式建物の柱穴に切られている。平面は円形(1.82×1.57m)、深さは1.22mを測る。調査時(1988年)は第28号土坑としていたが、礫(組)を抜き取った井戸(の掘り方)と推定される。

遺物の出土は極少量で、埋土より得た越前甕(YP590)・須恵器有台杯(YP591)を実測したのみで遺構の所属時期は判然としない。第19号掘立柱式建物の北側に位置する。

第31号井戸 M・N-4区に所在し、小穴と切り合い第49号溝に切られている。平面形は円形(2.05×1.84m)、深さは0.74mを測る。調査時(1988年)は第29号土坑としていたが、礫(組)を抜き取った井戸(の掘り方)と推定される。

遺物の出土は少ないが、埋土より得た土師器皿(YP592～594)・染付皿(YP595)・越中瀬戸皿(YP596)を実測した。17世紀後半から18世紀前半頃(YP595)が下限であるが、遺構の所属時期との関連は判然としない。第9号掘立柱式建物の南西側に位置する。

5 室(第72・73・88図)

第1号室

調査区の北側(N-10区)に所在し、第19号溝・小穴に切られている。調査は1986年。平面形は長方形(3.40×2.16m)を呈し、深さは35cmを測る。壁際の砂質土による斜め堆積の性格については検討の余地があるが、以下の埋土は廃棄後の自然堆積であろう。床面付近で拳大から人頭大の礫が数箇所にとどまって検出された。

遺物の出土は少なく、北東側床面で礫に混じって出土した越前壺(YP618)、埋土から出土した越前播鉢(YP617)・土師器皿(YP616)を実測したにとどまる。遺構の所属時期は判然としないが、本遺構の南側で、本遺構が基盤とする20・21層の下(地山直上)から出土した土師器皿(YP619)がその上限となろう。

第2号室

調査区の北側(N.O-9・10区)に所在し、小穴に切られている。調査は西側が1986年、東側が1987年、南側(検出に失敗した)が1989年である。第1号室の東側1mに位置する。平面形は長方形(2.88×1.83m)を呈し、深さは25cmを測る。埋土は淡褐色土系である。

遺物の出土は極少量で、上面で検出した土師器皿2点(YP620・621)を実測したのみで、遺構の所属時期は判然としない。

第5号室

調査区の東側(N-4・5区)に所在し、第49号溝・小穴に切られている。調査は1988年。平面形は隅丸長方形(2.77×1.22m)を呈し、深さは47cmを測る。北西側隅床面に礫が集積している。遺物はほとんど出土せず、遺構の所属時期は不明である。

6 墓(第73・89図)

第1号墓

調査区の南西側(C.D-8.D-9区)に所在する。調査時は第1号溝と呼称していたもので、第4・19号土坑・第2・4号溝・第1号掘立柱式建物柱穴他を切っている。総じて上部が流失しており、特に北側については本来の掘削面はさらに上部にあったと推定され、検出された輪郭も下部の形状である可能性が高い。調査は南東側が1985年、北西側が1986年であるが、調査区の切替え方法が不適切で北東側の検出に失敗している。

西側約二分の一が調査区外であるため確定はできないが、幅0.88~1.18m、最大深度25cmを測る溝によって一辺4m程度の方角部を区画するもので、溝の規模は外側では一辺が5.85m以上と推定される。区画内で本遺構にともなう遺構・遺物は確認できず、溝の北側でも礫と若干の遺物を検出したにとどまるが、比較的遺存状態の良好な(南西側調査区端はやや流失しているが)南東側の溝からは以下の知見が得られている。

同箇所は小礫混じりの灰褐色砂質土を埋土とし、溝底に径29~56cmを測る小穴5基(P1

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

～P5、深さはそれぞれ20、34、12、13、10cm)を0.8～1.3mの間隔で配している。このうち暗灰褐色砂質土を埋土とするP3は、第1号掘立柱式建物の西側柱列北隅柱穴の上部にたまたま重複している。遺物の出土は少量で小片がほとんどであるが、溝埋土から得た珠洲甕3点(YP622・623・630)、珠洲播鉢2点(YP624・625)、瀬戸灰釉椀(YP629)、須恵器杯(YP627)、製塩土器(YP628)を実測した。遺物(YP627・628は除く)の年代観から、遺構の所属時期の上限は14世紀前半頃と考えられる。

その性格については定見をもたないが、中央埋葬施設・石塔・蔵骨器・火葬骨などは検出されていないものの、近年類例が増加しつつある周溝をもつ中世墓として、南東側溝底小穴の用途を中心に今後検討を進めていくのが妥当ではなかろうか。

7 土坑(第74・87・88・138・143・152・153区)

第9号土坑

調査区の中央やや南側(F-7区)に所在し、第2号溝を切っている。調査は1985年。平面形は不整楕円形(1.84×1.19m)、深さ19cmを測る。坑底から刀(腰刀?)他(YM36)が出土したが、伴出遺物はなく遺構の所属時期は不明である。

第11号土坑

調査区のはぼ中央(H-7・8区)に所在する。平面は不整楕円形(2.10×1.17m)、深さ33cmを測る。坑内には人頭大までの礫が充満していたが、遺物は鉄滓1点(125g)を得たのみである。黄褐色の砂礫を埋土とする(おそらくは)古代の整地土と一体的に検出していることから、第5号竪穴状遺構他との関連が想定される。

第16号土坑

調査区の中央やや南東側(I-5区)に所在し、第17号溝に切られている。平面形は長方形(3.16×1.23m)、深さ19cmを測り、埋土は褐色土系である。遺物がほとんど出土せず所属時期は不明であるが、規模から古墳時代以前には遡らないという印象を受けた。

第23号土坑

調査区の中央やや西側(G, H-9区)に所在し、先行する第10・11号竪穴式建物に重複するが、直接的な切り合いはない。平面形は円形(0.96×0.90m)、深さ38cmを測り、埋土は褐色土系である。遺物の出土は極少量で、8世紀代の所産とみられる須恵器有台杯(YP611)を実測したにとどまる。遺構の所属時期は、同須恵器を上限の資料として第5号竪穴状遺構他に関連する可能性も考えられる。

第25号土坑

調査区の北側(M-13区)に単独で所在する。本遺跡では標高16m代と最高所に位置する遺構である。平面形は円形(1.40×1.34m)、深さは240cmを測る。埋土は厚さ約35cmの貝層を挟んで上位に淡茶褐色土、下位に獣骨・貝を含む茶褐色土が堆積していた。他の遺物は坑底で数個の礫とともに出土した粉挽(上)臼(YS60)のみで、遺構の所属時期は漠然

と中世以降とするよりない。獣骨はタヌキの頭蓋骨・左下顎骨・右下顎骨・上顎骨切歯、貝類はオオタニシ、マルタニシ、ドブガイ、イシガイの殻と推定される。

第26号土坑

調査区の北側(O-14区)に所在する。第4号井戸の北側に隣接するが、他の遺構との切り合いはない。平面形は楕円形(1.84×1.24m)、深さ44cmを測る。坑底で拳大から人頭大の礫8個を検出したが、他に出土遺物はなく遺構の所属時期は不明である。位置関係から奈良時代(おそらくは中世)以降と考えた。

第35号土坑

調査区の北東側(N-8・9区)に所在し、第1号小穴群(第34号土坑上部および下部の小穴P89172)・第7号掘立柱式建物の西側柱列の北隅の柱穴P89127他を切っている。平面形は隅丸長方形(1.30×0.94m)、深さは140cmを測る。埋土から越前甕(YP615)、越前播鉢(YP614)、漆器椀(YW63)を得たほか、南東側から出土した長大な木製品2点(YW74・75)を実測した。周辺の遺物包含層および小穴P89056(第61図参照)からも破片が出土しているYP615はやや遡る可能性もあるが、YP614とともに16世紀前半頃が下限とみられ、遺構の所属時期を表すものと考えられる。

第37号土坑

調査区の西側(G-9・10区)に所在し、東端を小穴に切られている。先行する第7・10・11号竪穴式建物にも重複するが、直接的な切り合いはない。平面形は不整形(3.23×1.90m)、深さ32cmを測る。遺物はほとんど出土せず遺構の所属時期は不明であるが、黄褐色の砂礫を埋土とすることから第5号竪穴状遺構他との関連が想定される。

8 溝(第7・8・89～96・133・135・140・141・142・ 150～152・155図)

第2・5・10～13号溝

調査区の中央から南西側に所在する溝群で、弥生時代～古墳時代の遺構に後出し中世～近世のそれに先行し、第5号竪穴状遺構の報告(本節第1項)でふれたとおり、古代に属する可能性の高いものである。調査は1985(第2・5号)・1986年(第2・10～13号)年。第13・2・5号溝は、調査区の西側を北からそれぞれ約10mの距離をおいて東西方向に並走し、第10～12号溝は、調査区の中央(第13・2号溝の間)を西からそれぞれ約1、8mの距離をおいて南北方向に並走する。

遺物の出土は極少量、第2号溝から環状石斧(YS3)、第5号溝から須恵器杯蓋(YP631)・同杯身(YP632)を得たが、いずれも遺構の所属時期を表すものではない。

第62号溝

調査区の北東側(P・Q-8区)に所在する。東側は第17号井戸に切られるが、西側に重複する小穴(P89185)との先後関係は確認できていない。調査は1989年。

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

延長(東-南)は1.83m、最大深度7cmを測るものの、南側肩部のみの検出であるため溝であるかどうか、整地土あるいは遺物包含層として扱うべきかもしれない。

銭貨9点(YM1～9)が一箇所にとどまって出土している。初鋳年の下限は1253年(YM8：皇宋元寶)であるが、遺構の所属時期(中世?)は判然としない。

第72号溝

調査区の東側(K、L-5・6区)に所在する。北東端は整地土下で検出しているが、他に遺構との切り合いはない。調査は1989年。

延長(北東-南西)4.78m、最大深度は21cmを測るが溝底水準に顕著な差はない。

遺物の出土は極少量で、染付椀(YP636)、唐津椀(YP637)を実測(調査の手順に不備があり、いずれも第59号溝に属する遺物が混入した可能性がある)したにとどまり、遺構の所属時期(近世?)・性格は判然としない。

第82号溝

調査区の南側(F-4・5区)に所在する。第20号井戸と重複し、調査時には確認できなかったが同井戸を切っていた可能性が高い。調査は1989年。

延長(北東-南西)2.00m以上、最大深度20cmを測るが溝底水準に顕著な差はない。

筭1点(YM25)を得たが、遺構の所属時期(近世?)は不明である。

第55号溝

調査区の東側をL字形に区画する。第68・69号溝に切られている。調査は1989年。

O-6区から南西に延び、M-6区で南東へ直角に折れる(屈曲後は二条に分岐)。延長は12および13m、溝底水準に顕著な差はない。

出土遺物はほとんどなく、遺構の所属時期は不明である。

第24・25号溝

調査区の中央から北西および北側をL字形に区画する。第8・9号竪穴式建物(直接的な切り合いはない)・第3・5号井戸・第6号掘立柱式建物柱穴を切っている。調査は南西側が1986年、北東側が1988年。種々の事情で検出できなかった箇所がある。

延長はそれぞれ49、48mを測り、I-8・9区からI区を北西側へ延び、I-10・11区ではほぼ直角(北東側)に折れ10・11区をO・P区に到る。両溝の距離は0.2mから2.1m以上、第24号溝が終始外側(西側)を巡る。溝底水準はいずれも屈曲部(I-10・11区)が最も高く(それぞれ13.180、12.765m)、南東部(同12.220、12.295m)、北東部(同10.985、10.915m)と低く(比高は最大2.195m)なる。

遺物の出土は極少量、第25号溝から越前甕(YP639：L-10区)を実測したにとどまり、遺構の所属時期、両溝の先後関係、他の遺構との関連性などは判然としない。

第17・69・71号溝

調査区の東側をしの字形に区画する。第16号土坑・第16号溝を切り、第55・68号溝に切られている。調査は南側(第17号溝)が1986年、北および北東側(第69・71号溝)が1989年。

第17号溝と第71号溝との間は、コンクリート製擁壁によって損壊している。

延長は30m、N-6区から南西にJ-6区まで延び、おそらくはI-6区で南東に折れI-4区までつづくものと推定される。溝底水準に顕著な差はない。

出土遺物はほとんどなく、遺構の所属時期・性格は不明である。

第18・53・58号溝

調査区の東側をしの字形に区画する。第54・68号溝に切られている。調査は西側(第18号溝)が1986年、東側(第53号溝)が1988年。中央(第58号溝)が1989年。

延長は44m、P-5区から南西にK-6区まで延び、おそらくはJ-6区で南東に折れI-4区までつづくものと推定される。溝底水準に顕著な差はない。

遺物の出土は極少量、産地不明(瀬戸?)の播鉢(YP633)を実測したが、遺構の所属時期・性格は判然としない。

第68号溝

調査区の東側をしの字形に区画する。第55・71号溝を切っている。調査は1989年。

延長は21m、6区を北東から南西側(N区からJ区)に延び(L・M-6区では部分的に二条に分かれる)、J-6区で短く南東側に折れる。溝底水準に顕著な差はない。

銭貨1点(YM13)を得たが、遺構の所属時期・性格は不明である。

第26号溝

調査区の北側に所在し、第4号井戸に切られている。調査は1986年。

延長は17m以上、深さ3.5cmを測るP-14区から解消していくM・N-12区まで、やや西に膨らみながら南北方向に延びる。形態的には第19・29・60号溝のような小河川跡に見えるが、溝底水準は中央が高くどちらか一方に水が流れるようなものではない。

出土遺物はなく、遺構の所属時期も不明である。

第50号溝

調査区の東側(M-2～4区)に所在する。第51号溝(北東-南西)他を切り、第44・45・48(北西-南東)・46(北東-南西)号溝他に切られている。調査は1988年。

幅(1.15m)が最も狭く、溝底水準(9.460m)の最も高い北西端(M-4区)から南東方向(M-2区さらには調査区外)へ、延長9mにわたって幅(M-2・3区では3mを越える)と深さ(最大55cm、南東端の溝底水準は8.925m)を増していくもので、断面形は皿形、北東および南西両側の肩部には所々に平坦面がみられる。黒色(上部)および青灰色系(下部)の砂質土を主体とする埋土や遺構配置(後述)、南西側肩部を中心に遺存する杭列などから、本遺構は人為的に護岸された屋敷地境界を流れる小河川と考えられる。杭列の内側を正味の幅とすれば南東側のそれは1.5m前後となり、翻って遺構北西端を越えてさらに北西側(M-5区)に遺存する杭列が、北西端を含め当該箇所が削平を受け、遺構がさらに2.5m以上は存在していた可能性を示唆している。

埋土からは多種多様な遺物が大量に出土し、陶磁器類62点(YP668～739)、石器・石製

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

品9点(YS24～30・73・78)、金属製品2点(YM23・34)、木器・木製品38点(YW28～55・64～68・79～83)の計102点を実測した。陶磁器類(詳細は第7章第9節参照)の所属時期は16世紀末頃を上限として18世紀前半頃までの幅をもつようであるが、(検出時の状態という意味での)存続期間の上限は17世紀前半頃と考えたい。遺物の出土状況は南西側杭列の外側と内側とに区分できるが、前者は護岸の裏込めに相当するとの理解から南西(SW)肩部として取り上げた。護岸後の水流は(少)なく、廃棄時の土留め用板材の撤去や廃棄後の最上部への堆積などを別とすれば、護岸時の上限を示す資料で占められている可能性が高く、当該遺物が16世紀末から17世紀初め頃の陶磁器を主体とするからである。後者は基本的には自然堆積とみられ、底浚えはおこなわれたであろうが廃棄時までの遺物(北東側にも護岸がなされていたとすればそれらをも)含むものと推定される。

南西側に所在する第8・18号掘立柱式建物や、北東側に所在する第10号掘立柱式建物などと併存した可能性が考えられ、屋敷地の配置を復元する手掛かりとなろう。

第19・29・60号溝

調査区の北東側を延長58m(幅は68～212cm)にわたってS字状に蛇行する。先後関係不明なものも少なくないが、第30号土坑・第15号掘立柱式建物柱穴・第27号溝・第1号室などを切り、第18・32号井戸などに切られている。調査は西側(第19・29号溝)が1986・87・89年、東側(第60号溝)が1989年、中央では検出できなかった箇所がある。

Q-12・13区(溝底水準は約11.9m)から南下しM・N-9・10区(同約11.0m)で東へ屈曲、Q-8区(同約10.0m)で再度南東へ屈曲しP・Q-5・6区(同約9.5m)で東へ折れ調査区外となる。溝底水準の一貫したありかたや溝底中央にさらに基盤層を削り込んだ小溝が確認される箇所もあることから、一定期間水の流れる状況が容易に想定される。調査区の北側奥に源を発する小規模な河川といったところであろうか。

遺物の出土は比較的多く、土師器皿19点(YP640・641・645～648・655～667)をはじめ、染付皿2点(YP643・651)、越前甕3点(YP642・649・654)、同播鉢(YP644)、珠洲壺(YP652)、青磁椀(YP653)、須恵器瓶(YP650)、茶(下)臼(YS77)を実測した。遺構の存続期間をこれらの出土遺物から確定することは難しいが、本遺構を挟んで南北に所在する第6・7号掘立柱式建物との関連性が遺構配置という点からは注目される。

9 小結

本節では、奈良時代～江戸時代に属する竪穴状遺構1基、掘立柱式建物19基、土器埋納小穴1基、(大甕据置用)小穴群1基、井戸34基、室3基、墓1基他について報告した。小鍛冶関連資料を主体とする(奈良・)平安時代については、調査時の制約もあって流土を基盤とする遺構群の検出が不十分であったたうえ、鍛冶炉(第5号竪穴状遺構)周辺での土壌選別(未実施)などに課題を残した。

長期にわたって存続した集落の一角をまるごと検出した中世(後半)から近世について

は、遺構・遺物の双方で新知見が得られたが、掘立柱式建物の構造の詳細や井戸・室・溝・墓といった他の遺構との位置関係、いかえれば屋敷地内外の遺構配置とその変遷について、あるいは当初集落内の道と考えた建物間の遺構密度の希薄な箇所について、いずれも取り組みが浅く整合的な理解を得ることができなかった。再検討が必要であろう。

第3章第3節挿図断面図土層一覧

第68図 第3号井戸

- 0 青灰色粘質土
(第25号溝)
- 1 淡灰褐色砂質土
- 2 灰褐色砂質土
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 暗灰褐色シルト
- 5 灰褐色砂質土
- 6 灰褐色砂質土(茶褐色砂質地山土
ブロックを少量含む)
- 7 灰褐色砂質土(茶褐色砂質地山土
ブロックを多量に含む)
- 8 暗灰褐色砂質土
- 9 暗灰褐色砂質土(やや粘質)
- 10 黒褐色粘質土
- 11 暗灰褐色粘質土(茶褐色腐植土を含む)
- 12 暗灰褐色粘質土
- 13 暗灰褐色粗砂
- 14 暗灰褐色粗砂(茶褐色砂質地山土
ブロックを多量に含む)
- 15 暗灰褐色シルト(砂混じり)
- 16 暗灰褐色砂質土
- 17 暗灰褐色粗砂(茶褐色砂質地山土
ブロックを少量含む)
- 18 灰褐色粘質土(茶褐色腐植土を含む)
- 19 灰褐色粘質土
- 20 青灰色シルト
- 21 青灰色シルト(砂混じり)
- 22 青灰色粘質土
- 23 暗灰色砂質・粘質混土
(青灰色粘質地山土ブロックを含む)
- 24 青灰色粗砂
- 25 淡黄色シルト
- 26 茶褐色砂質土
- 27 淡黄色シルト

第68図 第5号井戸

- 1 茶褐色砂質土
- 2 褐色土(黄色土ブロックを少量含む)
(以上第24号溝)
- 3 黄褐色粘質土
- 4 暗茶褐色土
- 5 淡褐色土
(以上上部の落ち込み)
- 6 暗褐色土
- 7 灰色砂質土
- 8 暗灰色粘質土
- 9 黄褐色砂質土(隙を多量に含む)
(以上第5号井戸)

第69図 第6号井戸

- 1 灰褐色砂質土
- 2 黒褐色土(腐植物を含む)
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色弱粘質土(腐植物を含む)
- 5 黒褐色粘質土(腐植物を含む)
(以上廃棄後の堆積土)
- 6 暗灰色土
- 7 暗灰色砂質土
(以上掘方)
- 8 暗茶褐色土(腐植物を含む)
- 9 暗灰色粘質土(砂混じり)
- 10 暗茶褐色土(腐植物を含む)
- 11 灰色粘質土
- 12 暗茶褐色土(腐植物を含む)
- 13 暗茶褐色砂質土
- 14 灰褐色粗砂
(以上基盤層)

第72図 第1号土器埋納小穴

- 1 暗灰色弱粘質土

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

第72図 第1号室

- 1 暗灰色粘質土（炭粒を含む）
- 2 暗橙灰色粘質土
- 3 黒褐色粘質土
- 4 濁灰色粘質土
- 5 濁オリーブ灰色砂
（以上第19号溝）
- 6 灰褐色粘質土（地山土を含む）
- 7 地山土ブロック
- 8 暗灰褐色粘質土
- 9 地山土ブロック
- 10 濁暗灰褐色粘質土
- 11 地山土ブロック
- 12 濁暗灰褐色砂
- 13 暗灰色粘質土（砂をふくむ）
- 14 暗灰色粘土
- 15 濁灰色砂質土
- 16 オリーブ灰色砂質土
- 17 黄灰色砂質土
- 18 灰色砂質土
- 19 濁灰色砂質土
（以上第1号室）
- 20 濁黄灰色粘質土
- 21 濁黄灰色粘質土（地山土を多量に含む）

第73図 第1号墓

- 1 灰褐色砂質土（小礫混じり）
- 2 暗灰褐色砂質土（小穴）
（以上第1号墓）
- 3 黄灰色細砂（シルト混）
- 4 暗黄灰色粗砂（シルト混）
（以上第2号溝）
- 5 暗灰色砂質土（やや粘質）
- 6 暗灰色砂質土（やや粘質、
黄橙色地山土ブロックを含む）
- 7 濁灰色土（地山土ブロックを含む）
（以上第1号掘立柱式建物
西側柱列北隅柱穴）

第74図 第25号土坑

- 1 淡茶褐色土
- 2 貝層
- 3 茶褐色土（獣骨・貝を含む）

第74図 第33号土坑（第1号小穴群）

- 1 暗褐色土（焼土(多量)・炭化物を含む）
- 2 やや暗い褐色土(上部)および
やや褐色味をおびた灰褐色土(下部)

第74図 第34号土坑（第1号小穴群）

- 1 暗褐色土（焼土(多量)・炭化物を含む）
- 2 暗褐色土（焼土・炭化物を含む）
- 3 炭化物（材）
（以上第34号土坑上部）
- 4 やや暗い褐色土
- 5 褐色土
- 6 やや褐色味をおびた灰褐色土
- 7 灰褐色土
- 8 暗灰褐色土
- 9 暗灰色土（やや暗い）
- 10 暗灰色土
（以上第34号土坑下部）
- 11 明褐色土
- 12 灰褐色土（やや暗い）
- 13 褐色土（やや明るい）
- 14 褐色土（やや暗い）
- 15 淡灰褐色土（やや明るい）
- 16 淡灰褐色土
- 17 黄褐色土
- 18 灰褐色土（やや暗い）
- 19 灰褐色土
（以上pit89172）
- 20 茶褐色土
- 21 茶褐色土（やや明るい）
- 22 茶褐色土（やや暗い）
- 23 灰茶褐色土（やや暗い）
- 24 灰茶褐色土
- 25 灰褐色土
- 26 黄褐色砂質土（地山質）
（以上pit89173）
- 27 やや灰色味をおびた黄色土
- 28 暗灰褐色土
（以上pit89169）
- 29 暗茶褐色土
- 30 暗茶褐色土（黄褐色土ブロックを含む）
- 31 暗灰色土
（以上pit89174）
- 32 褐色味を強くおびた灰褐色土
- 33 暗褐色土（以上遺物包含層？）
- 34 暗黄褐色土
- 35 褐色土
- 36 灰色味をおびた褐色土
（以上pit89300）

奈良時代～江戸時代遺構一覧

遺構名	位置・平面形態	規	模	備考
第5号竪穴 第2号溝 第5号溝 第10号溝 第11号溝 第12号溝 第13号溝	G-8・9 方形 CDEFGH7. CD8. H6 BCD-6 GH-7・8 H-7・8 I-7 IJ-8. JK-7	径2.78×2.74m 延長m26 幅cm10～54 10 26～66 1.3 ～22 4.8 24～36 2.2 36～40 7 24～34	深さcm～9 深さcm～28 ～30 ～8 ～13 ～9 ～7	小鍛冶遺構
第1号掘立	C-7・8. D-6. E-7	2間(4.4～4.6m)×4間(9.2～9.4m)		2間×2間+東西両面庇
第2号掘立 第1号柱列 第6号溝 第1号小穴	ABC-4・5. D-5 AB-6 BC-5 B-5 楕円形	4間(5.7～6.0m)×5間(8.4～8.9m) 5間(9.4m) 延長8m～ 幅30～60cm 径0.67×0.52m	深さ～32cm 深さ11cm～	土器埋納小穴、14世紀
第3号掘立 第4号掘立 第5号掘立	C. D-6・7 B. C-6・7 CDE-5・6	1間(3.4～3.6m)×2間(5.2～5.3m) 2間(3.6m) × 2間(7.0m) 3間(6.3m) × 2間(6.5m)		第4・5号掘立より古い 第3号掘立より新しい 第3号掘立より新しい
第6号掘立 第2号柱列	OPQ-10・11. P-9 OPQ-11	1間(4.4m) × 2間(7.4m) 3間(6.8m)		
第7号掘立 第33号土坑 小穴P89121 第34号土坑 P89172 P89169 P89301 P89302	NOP-7・8. O-9 N -8 円形 N -8 円形 NO -8・9 方形 円形 円形 円形 円形	4間(5.7m) × 4間(11.2～11.7m) 長径1.10m×短径0.97m×深さ54cm 長径1.03m×短径1.01m×深さ73cm 長径2.34m×短径2.15m×深さ66cm 長径0.91m×短径0.88m×深さ54cm 長径0.94m×短径0.92m×深さ62cm 第34号土坑上部と一連 第34号土坑上部と一連		15世紀 第1号小穴群西側南端 " 東側南端 " 北側 2/3 " 西側北端 " 西側中央 " 東側北端 " 東側中央
第8号掘立 第17号掘立 第18号掘立 第19号掘立	JKL3・4 JKL3・4. J-5. I-3 JKL3・4 JKL3・4. J-5	1間(5.4～5.6m)×2間(9.8～10.0m) 1間(5.6～5.9m)×2間(9.6m) 1間(5.9m) × 2間(9.2m) 1間(6.0m) × 2間(7.7m)		17世紀 15世紀～ 17世紀～ 15世紀～
第9号掘立 第10号掘立 第11号掘立 第12号掘立 第13号掘立 第14号掘立	P -3. O. P-4・5 Q -4. O. P-4・5 N -2. N. O-3 N -3. N. O-2 N. O-2 M. N-4	3間(5.4～5.5m)×4間(7.3～7.5m) 1間(4.6～4.7m)×2間(7.6m) 1間(4.8m) × 2間(7.3m) ?間 × 3間(7.0m)(～) ?間 × 1間(2.3m)～ (1)間 × 3間(4.5m)		第14号井戸より新しい 第13号掘立と切り合う 第12号掘立と切り合う 弥生時代～古墳時代?
第15号掘立 第3号井戸 第20号溝	LMN- 7・8・9 L. M-10・11 楕円 L - 7・8・9	6間(11.75～11.95m)×5間(11.10～11.20m)以上の総柱 長径3.70m 短径2.73m 内径85～100cm 延長14～m 幅40～190cm 深さ～11cm		14世紀 深度3.43m 礫組高2.17m
第16号掘立 第78号溝	EFG -4・5. H-5 EFGH-5. EF-6	1間? × 4間(10.0m) 延長13 m 幅70～194cm 深さ～23cm		17世紀～

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

遺構名	位置	検出面径	内径cm	深度	礫組高	備考
南部の井戸						
第1号井戸	B-5区	1.55 × 1.50m	40~45	0.74m	0.54m	第2号掘立柱式建物内
第8号井戸	A-5区	2.05 × 1.90	55~75	0.92	0.92	17世紀
第19号井戸	E-5区	1.63 × 1.63	65~70	0.47	0.47	第5号掘立の東側
第20号井戸	EF4.F5区	2.31 × 2.00	75	0.96	0.91	15世紀
第21号井戸	G-4・5区	2.38 × —	75~85	1.93	1.42	第16号掘立柱式建物内
第22号井戸	G-4区	2.07 × 1.87	80	1.47	0.89	第16号掘立柱式建物内
第23号井戸	GH-4区	2.20 × 1.94	65~100	1.20	0.68	第16号掘立の北東側
第24号井戸	H-5区	2.50 × 2.35	60~100	2.17	1.57	17世紀
第25号井戸	HI-5区	1.79 × 1.63	45~75	1.03	0.93	17世紀
第26号井戸	GH-4・5区	1.98 × 1.84	80~85	1.69	1.03	第16号掘立より古い
第27号井戸	FG-4区	1.97 × —	50~70	1.77	0.72	第16号掘立柱式建物内
第28号井戸	E-5区	1.19 × —	55~60	0.44	0.44	第16号掘立の南西側
第33号井戸	E-6区	1.38 × 1.23	—	—	—	旧pit85042下部は未調査
第34号井戸	CD-5区	2.09 × 1.90	—	—	—	旧pit85041下部は未調査
第35号井戸	H-4区	3.08 × 2.40	—	—	—	旧36号土坑下部は未調査
北部の井戸						
第4号井戸	O-14区	1.55 × 1.45	55~70	2.04	2.04	本遺跡北端の丘陵斜面
第5号井戸	O-10区	1.15 × 1.05	—	0.81~	—	第6号掘立の南西側
第6号井戸	PQ11.Q12	1.62 × 1.50	50~75	1.21	0.9	16世紀
第7号井戸	Q-10区	0.90 × 0.80	0~40	0.87	0.83	第6号掘立の東側
第17号井戸	PQ-8区	1.56 × 1.45	25~70	0.86	0.78	第7号掘立の北東側
第18号井戸	P-8・9区	(1.10) × (1.10)	30~50	0.62	0.62	第7号掘立の北側
第32号井戸	OP-11・12	1.55 × 1.30	—	—	—	未調査
東部の井戸						
第9号井戸	LM-4区	1.73 × 1.73	40~	1.26	1.00	16世紀
第10号井戸	L-4区	2.12 × (1.80)	40~80	1.45	1.29	第19号掘立の北東側
第11号井戸	LM-4区	2.27 × 2.08	60~80	1.72	1.18	17世紀
第12号井戸	M-4・5区	2.08 × 1.71	70	0.77	0.77	18世紀
第13号井戸	NO-4区	(2.32) × 1.70	80~90	1.32	1.32	第10号掘立の南西側
第14号井戸	OP-4・5区	1.80 × 1.56	50~90	0.85	0.82	第9号掘立柱式建物内
第15号井戸	P-4区	1.52 × 1.33	50~85	0.94	0.92	第9・10号掘立内
第16号井戸	O-2区	(1.20) × (1.20)	50~	(0.18)	(0.18)	18世紀
第29号井戸	KL-3・4区	2.38 × 2.18	—	0.78	—	旧27号土坑
第30号井戸	L-4区	1.82 × 1.57	—	1.22	—	旧28号土坑
第31号井戸	MN-4区	2.05 × 1.84	—	0.74	—	旧29号土坑

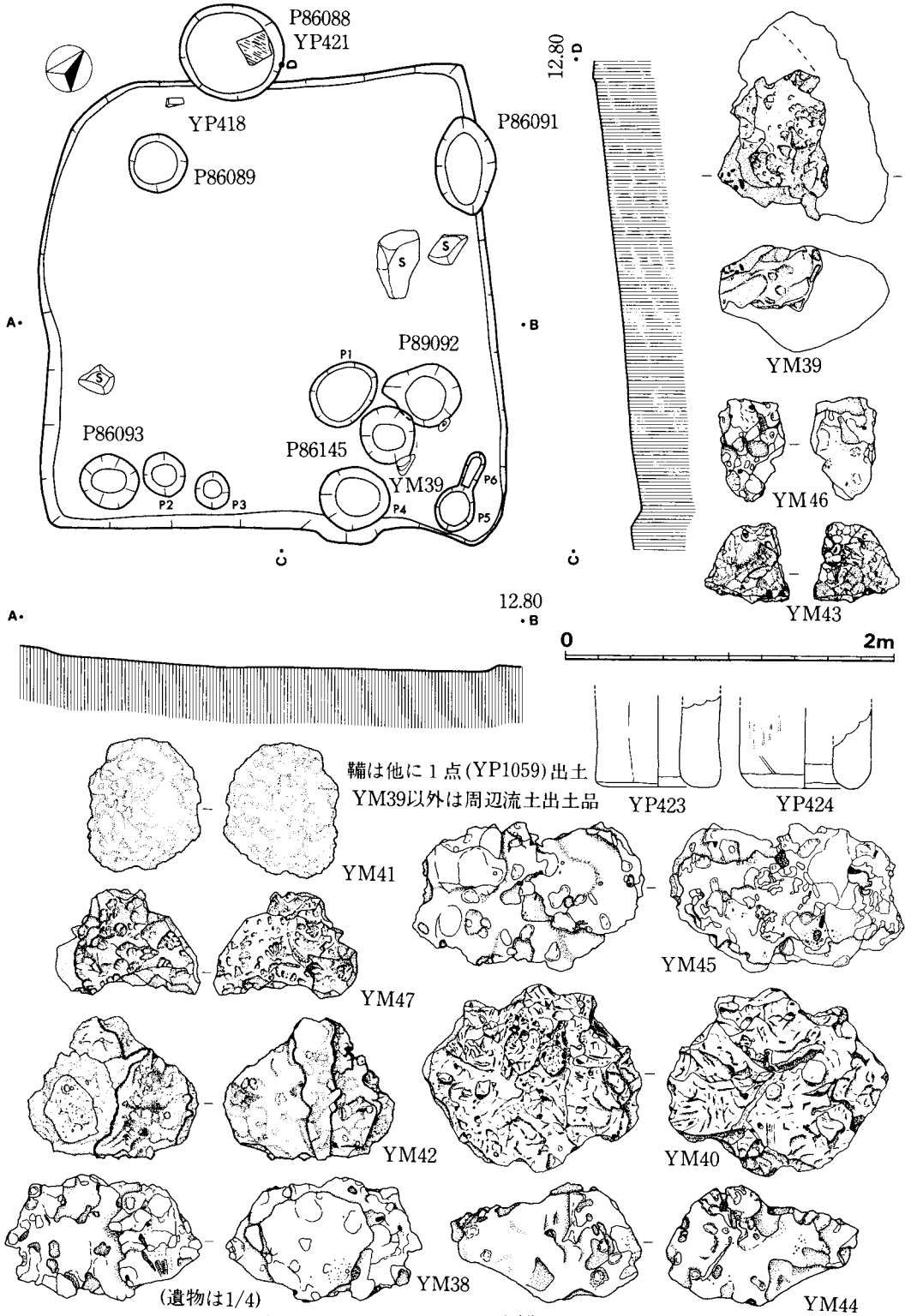
遺構名	位置	幅 m	深さ cm	備考
第1号墓	CD-8区 D-9区	0.88~1.18	~25	一辺4m程度の方形状を巡る周溝(西側二分の一は調査区外)、南東側の溝底に小穴5基

遺構名	位置	平面形態	長径 m × 短径 m × 深さ cm	備考
第1号室	N-10区	長方形	3.40 × 2.16 × 35	中世?
第2号室	N・O-9・10区	長方形	2.88 × 1.83 × 25	中世?
第5号室	N-4・5区	隅丸長方形	2.77 × 1.22 × 47	中世?

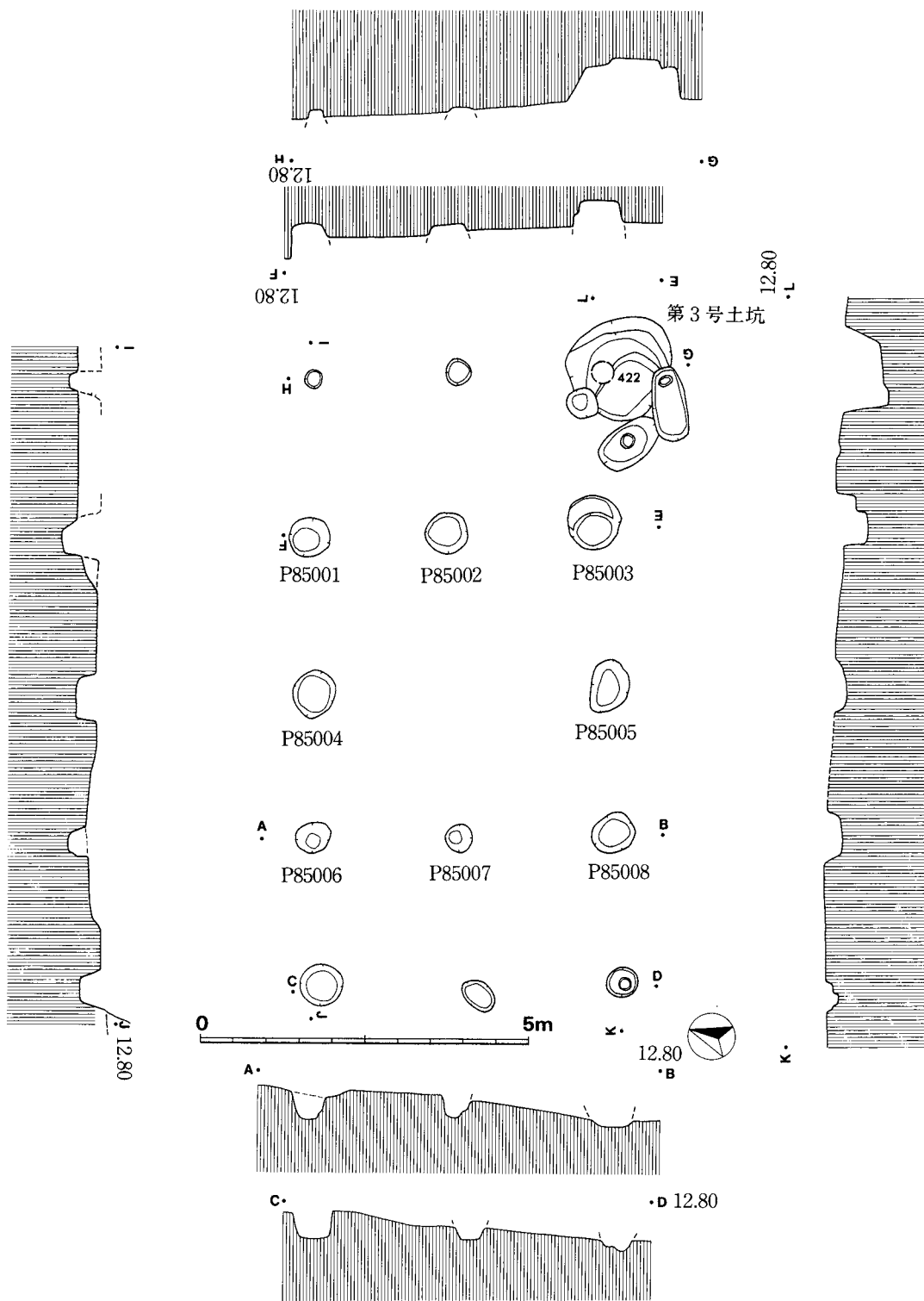
遺構名	位置	平面形態	長径 m × 短径 m × 深さ cm	備考
第11号土坑	H-7・8区	不整楕円形	2.10 × 1.17 × 33	古代
第23号土坑	G・H-9区	円形	0.96 × 0.90 × 38	古代
第37号土坑	G-9・10区	不整形	3.23 × 1.90 × 32	古代
第9号土坑	F-7区	不整楕円形	1.84 × 1.19 × 19	中世?
第25号土坑	M-13区	円形	1.40 × 1.34 × 240	中世~
第35号土坑	N-8・9区	隅丸長方形	1.30 × 0.94 × 140	16世紀前半
第16号土坑	I-5区	長方形	3.16 × 1.23 × 19	?
第26号土坑	O-14区	楕円形	1.84 × 1.24 × 44	?

遺構名	位置	延長 m	幅 cm	深さ cm	備考
第62号溝	P・Q-8	1.83	——	~7	中世?
第72号溝	K・L-5・6	4.78	46~62	~21	近世?
第82号溝	F-4・5	2.00~	62~97	~20	近世?
第55号溝	MNO-6	12~13	25~54	~20	区画溝
第24号溝	I-8・9・10・11・KLMNO-10・JK-11	49	17~102	~61	区画溝
第25号溝	I-9・JKLMNO-10	48	12~70	~23	区画溝
第17・69・71号溝	I-4・5・6・JKLMN-6	30	20~100	~22	区画溝?
第18・53・58号溝	I-4・IJLMNO-5・JKL-6	44	18~113	~14	区画溝?
第68号溝	JKLMN-6	21	15~114	~21	区画溝?
第79号溝	E-5・EFG6	13	18~32	~21	暗渠排水溝
第26号溝	M・N-12・13・O-13・O・P-14	17~	32~78	~57	小河川跡?
第50号溝	M-2・3・4	9~	115~372	~55	小河川跡
第19・29・60号溝	MNOPQ-5・6・7・8・9・10・11・12・13	58	68~212	~68	小河川跡

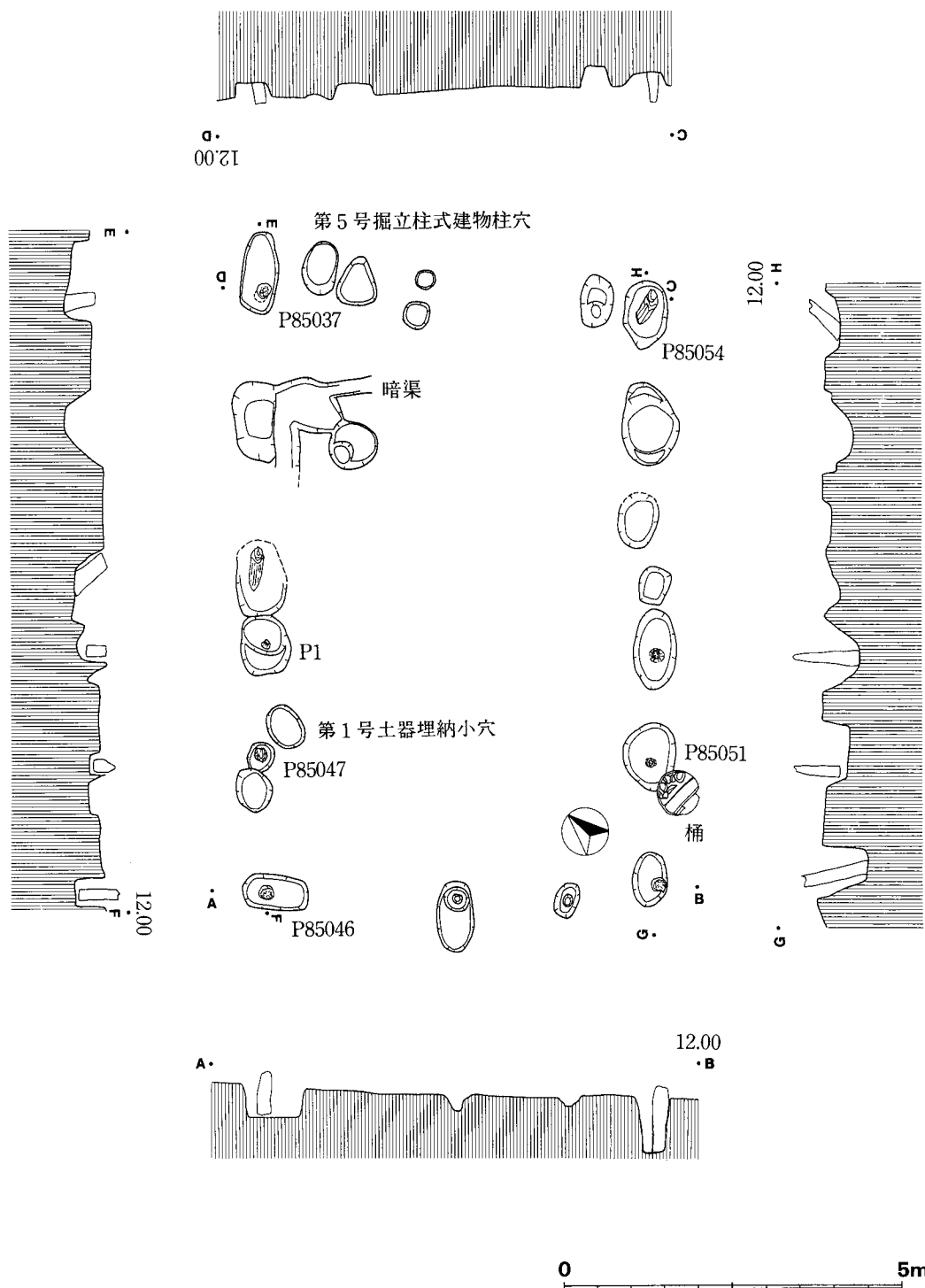
第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物



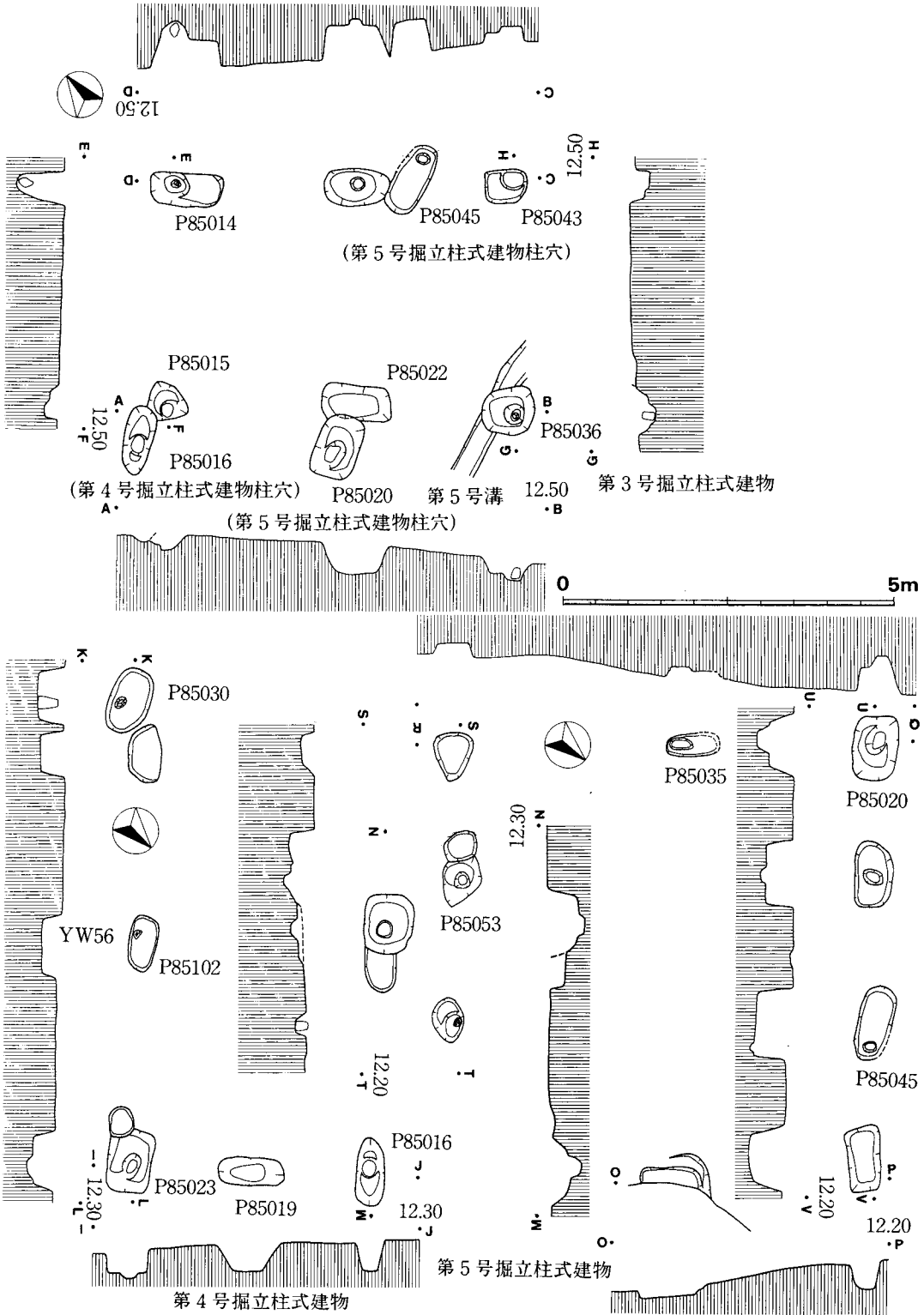
第57図 第5号竖穴状遺構(S=1/40)



第58図 第1号掘立柱式建物(S=1/100)

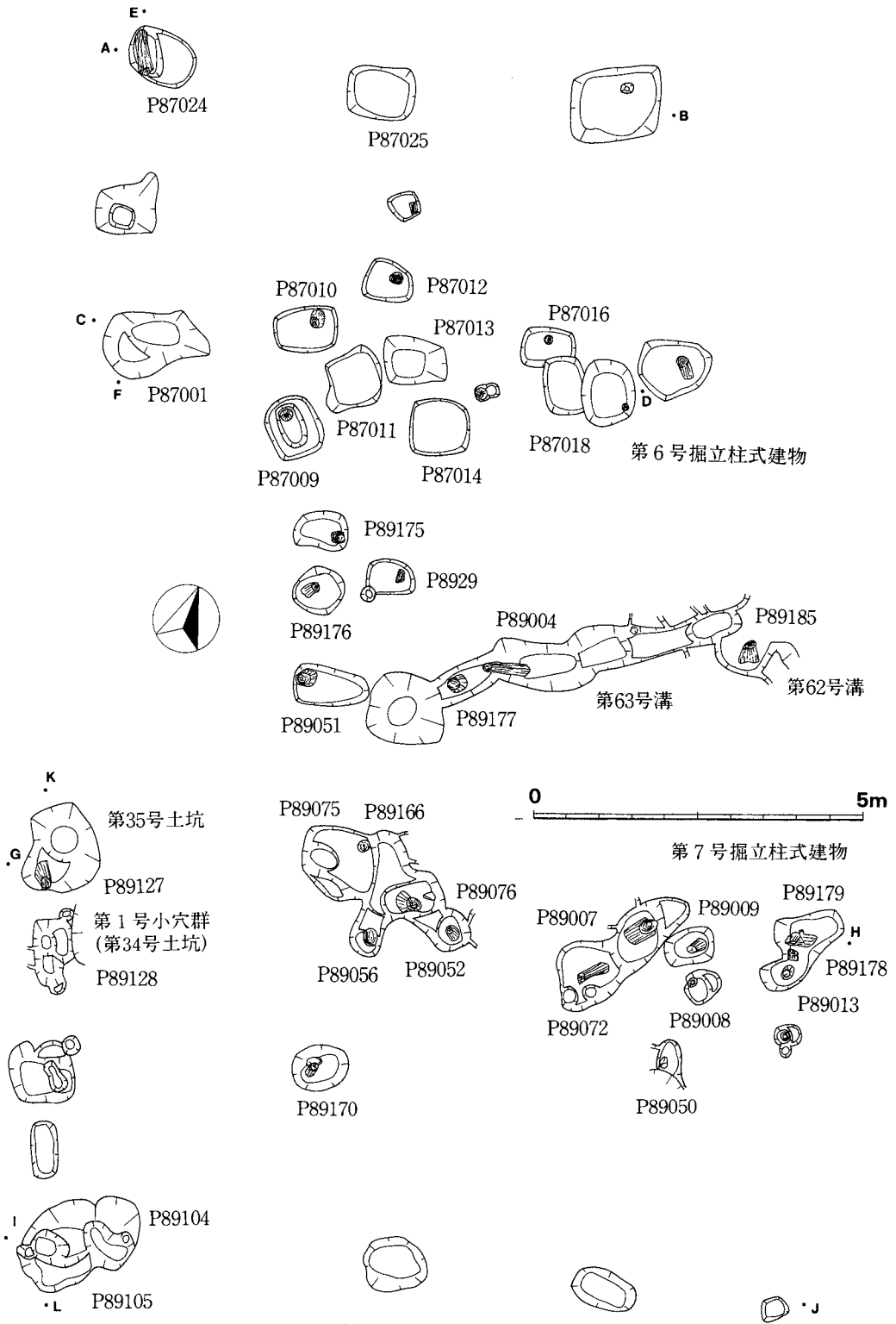


第59図 第2号掘立柱式建物(S=1/100)

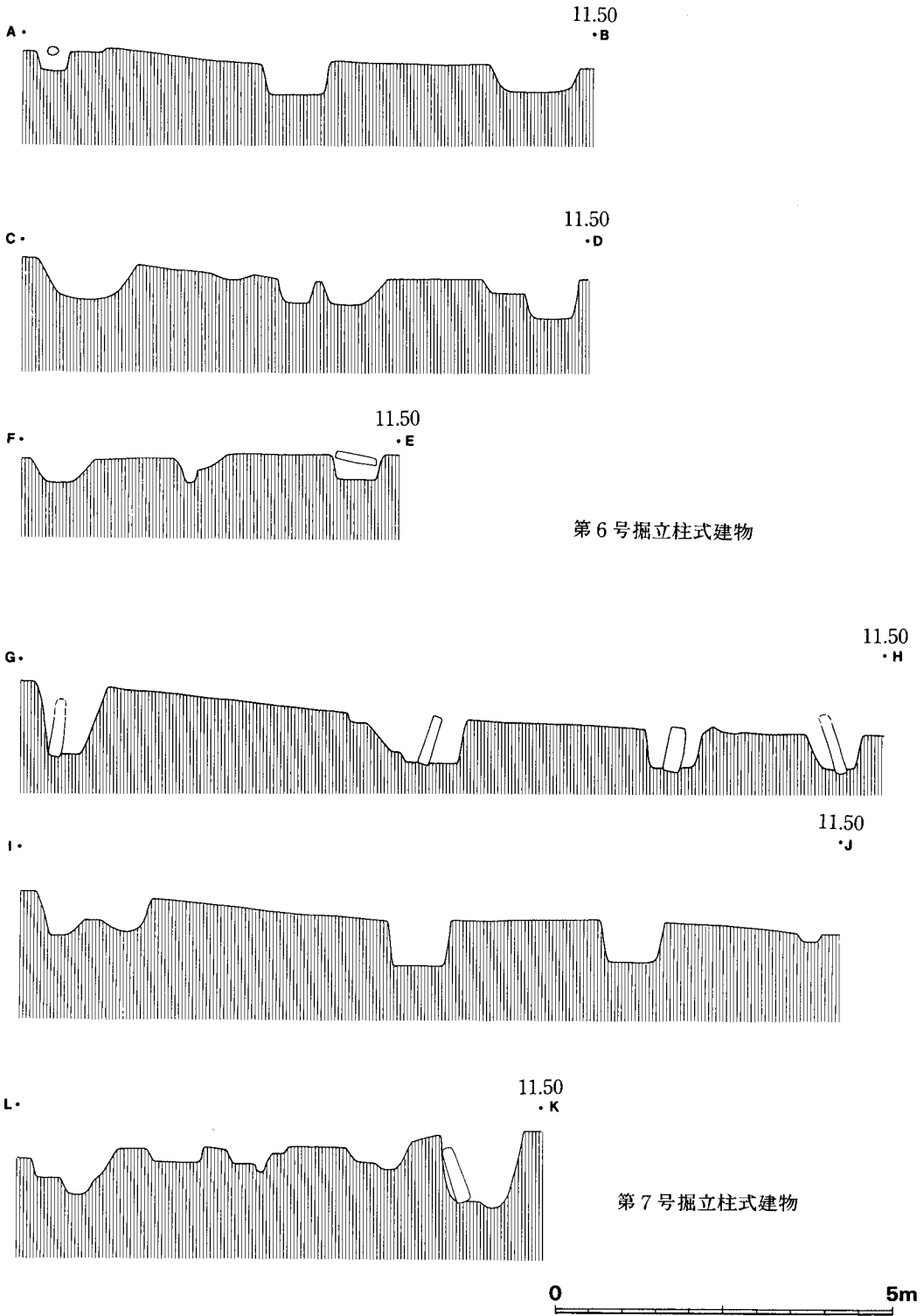


第60図 第3～5号掘立柱式建物(S=1/100)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物



第61図 第6・7号掘立柱式建物 (S=1/100)

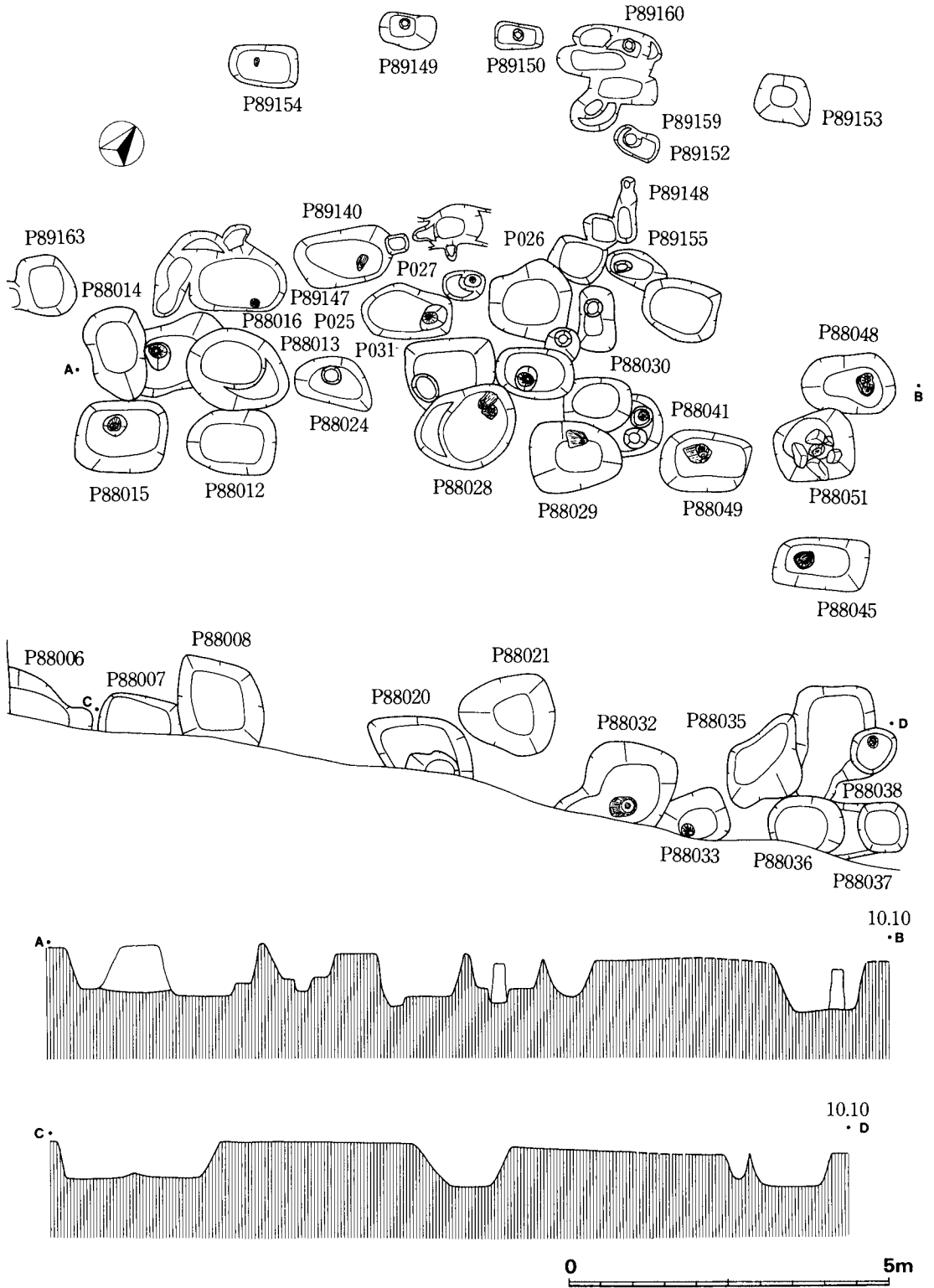


第6号掘立柱式建物

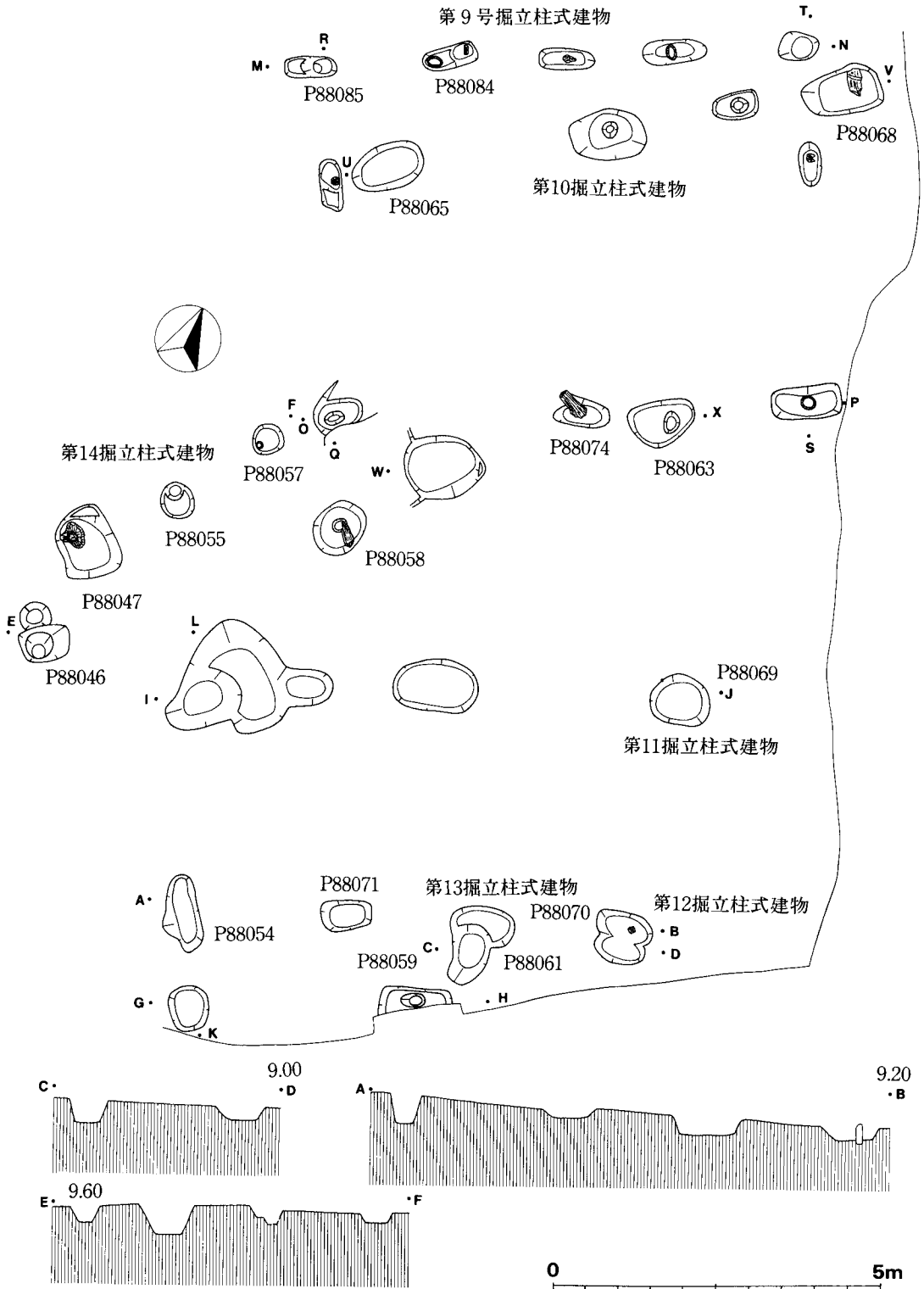
第7号掘立柱式建物

第62図 第6・7号掘立柱式建物(S=1/100)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

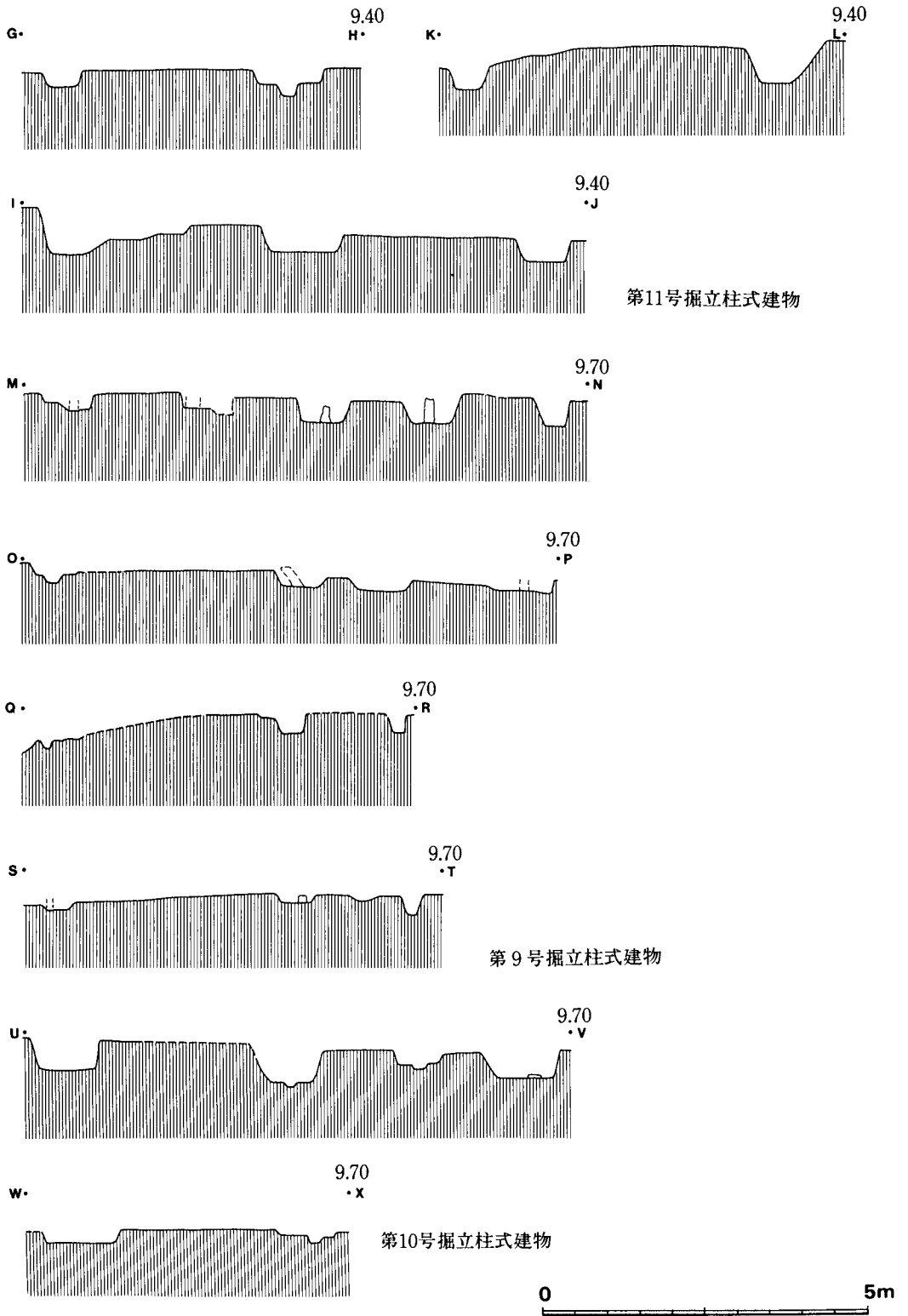


第63図 第8・17～19号掘立柱式建物(S=1/100)

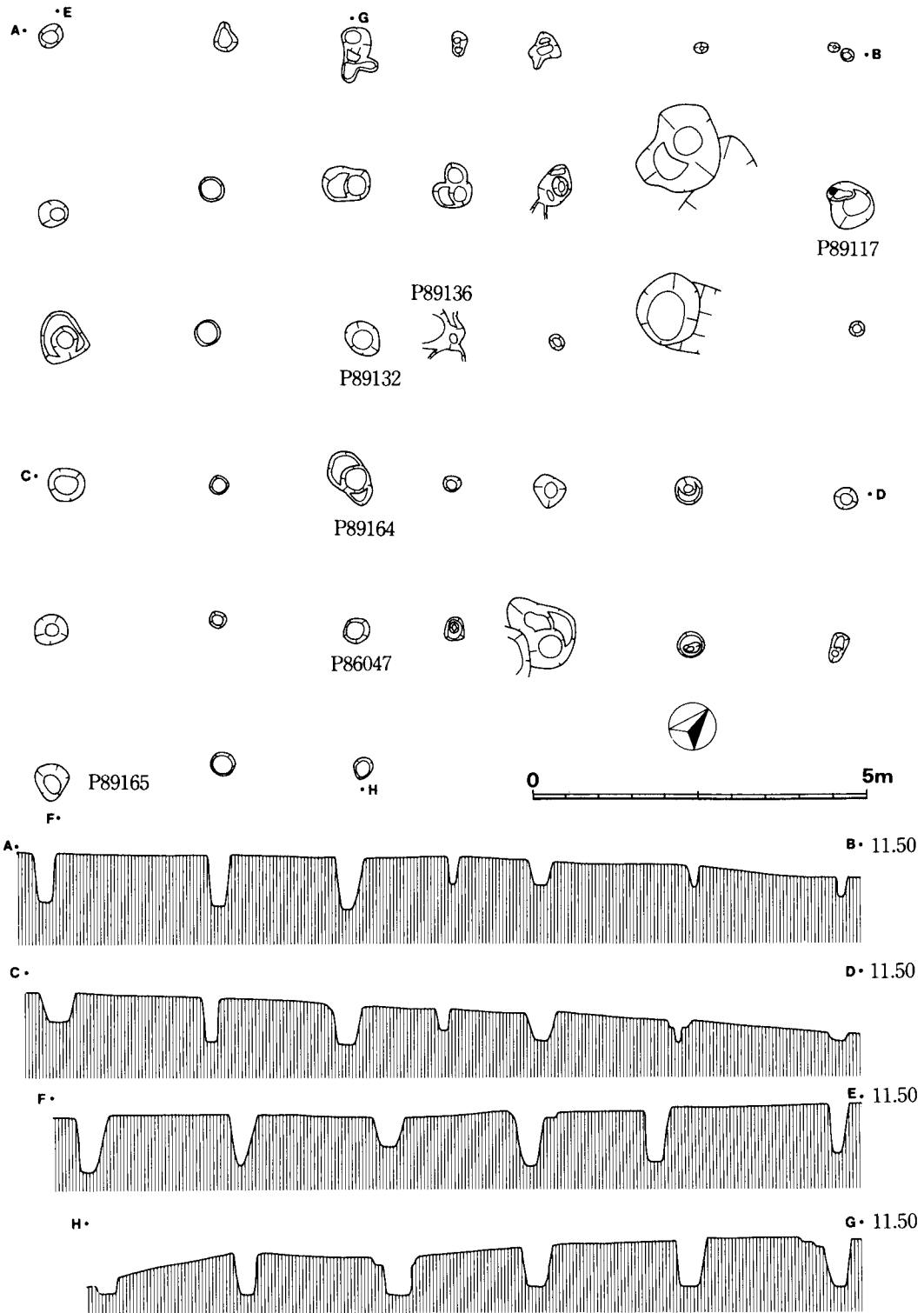


第64図 第9～14号掘立柱式建物 (S=1/100)

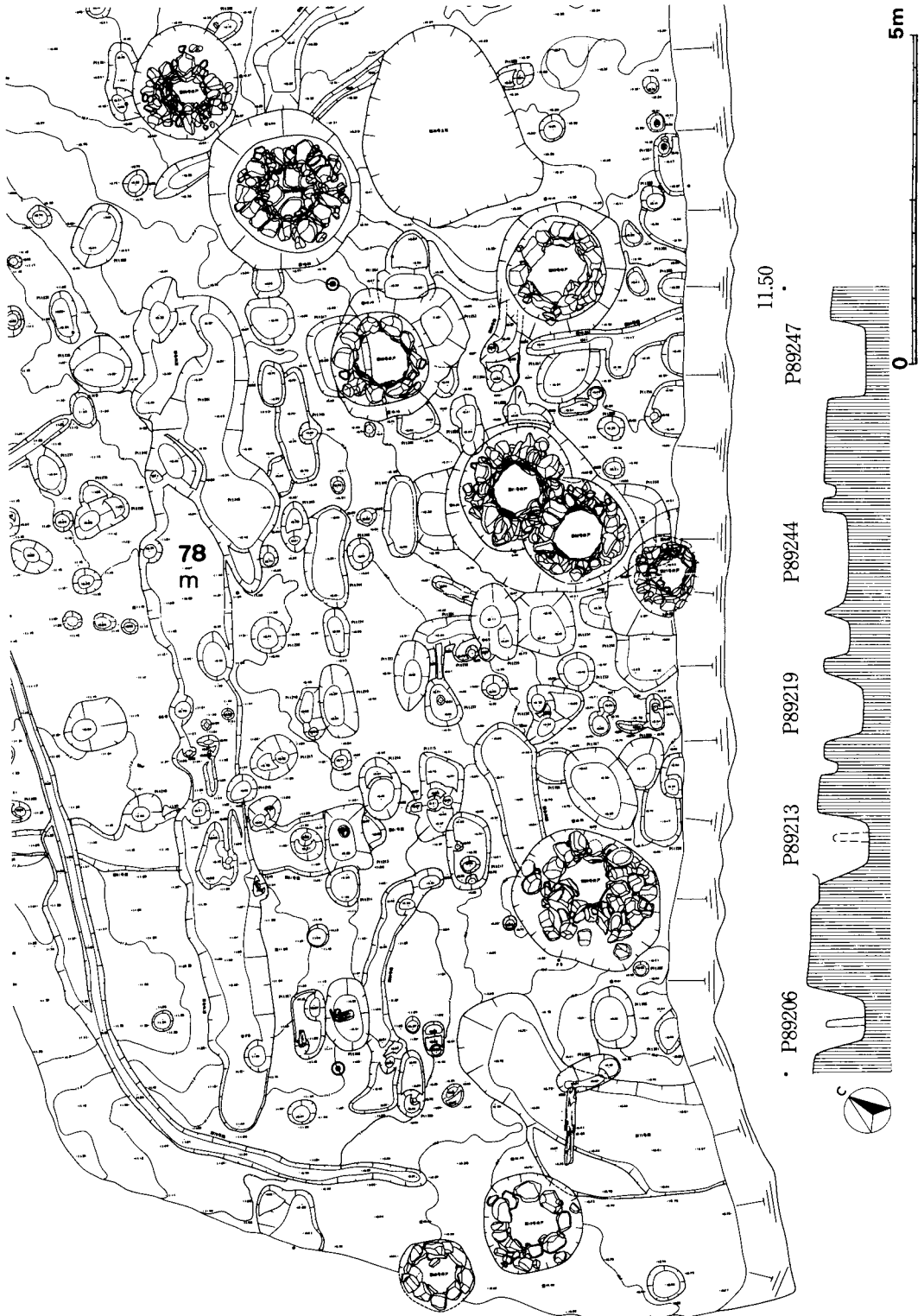
第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物



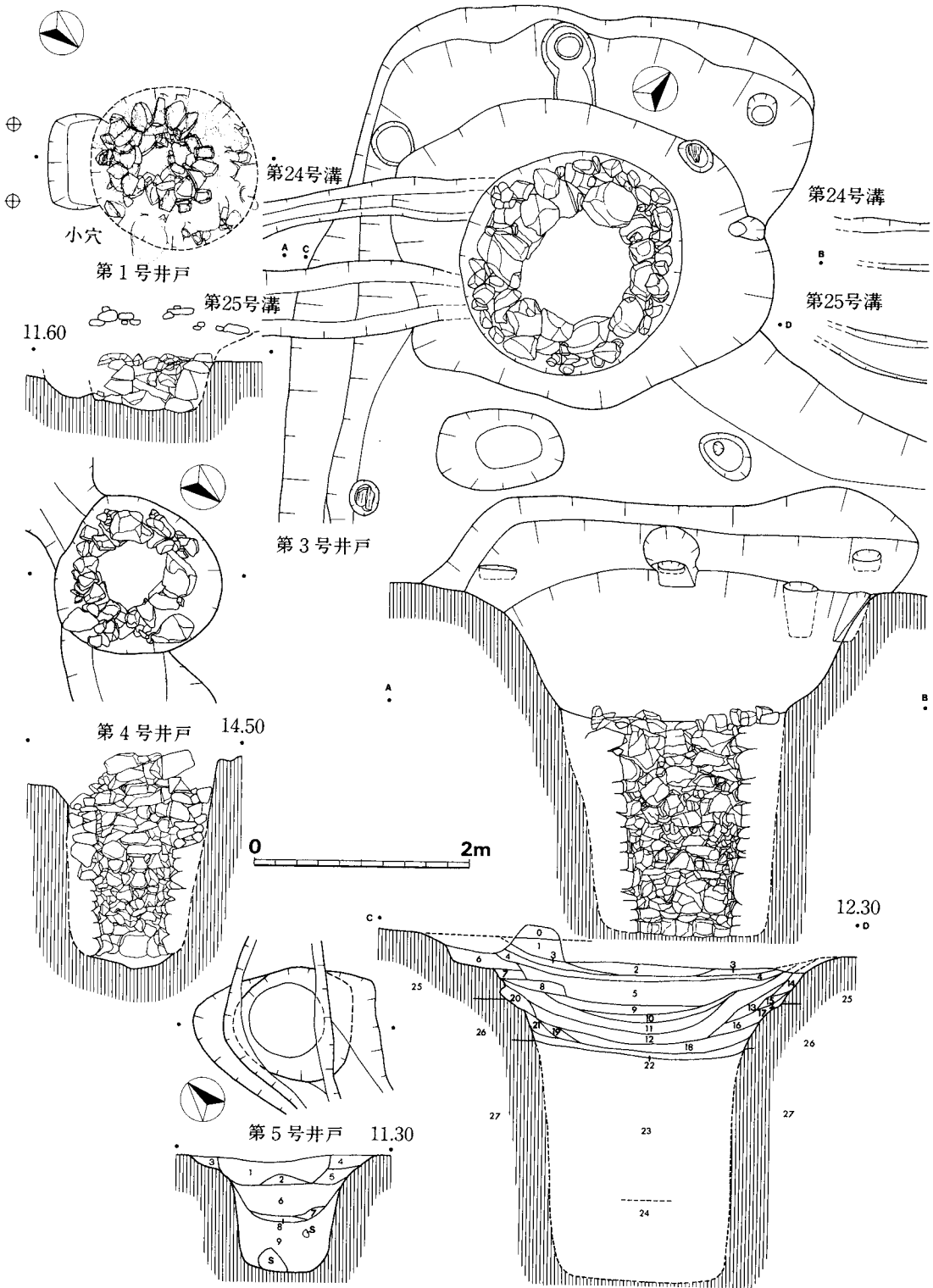
第65図 第9～11号掘立柱式建物(S=1/100)



第66図 第15号掘立柱式建物 (S=1/100)

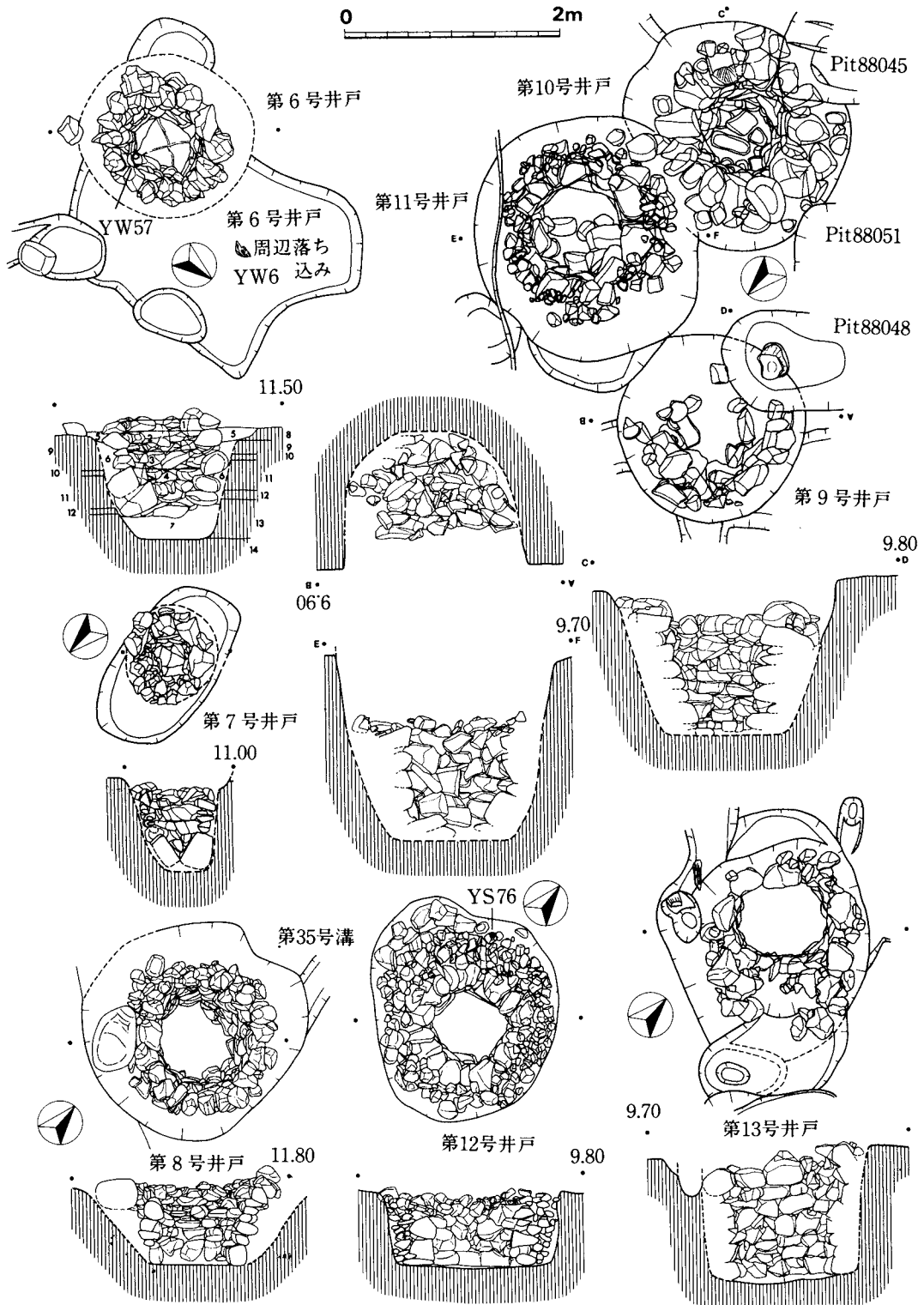


第67図 第16号掘立柱式建物・第78号溝(S=1/100)

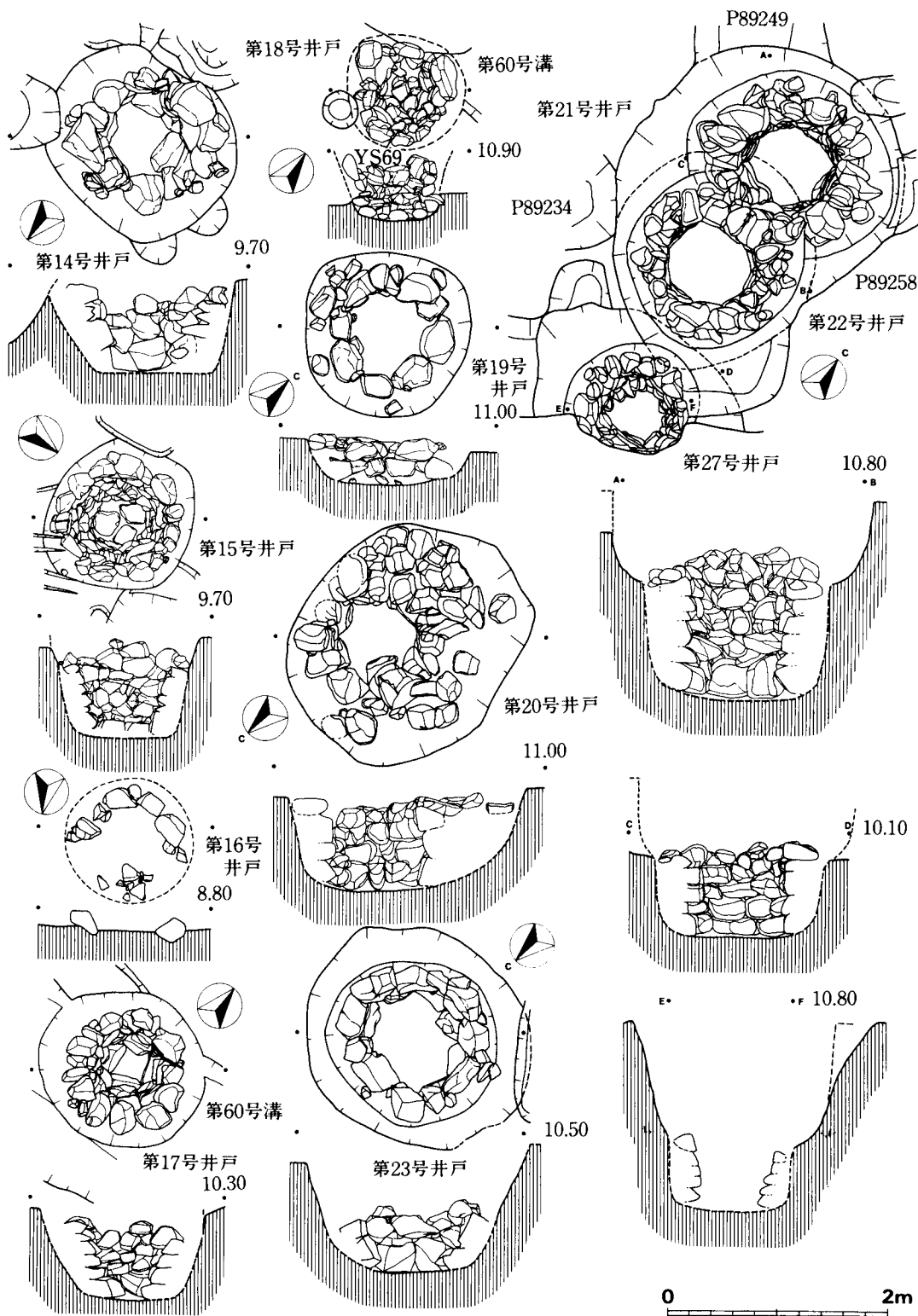


第68図 第1・3～5号井戸(S=1/60)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

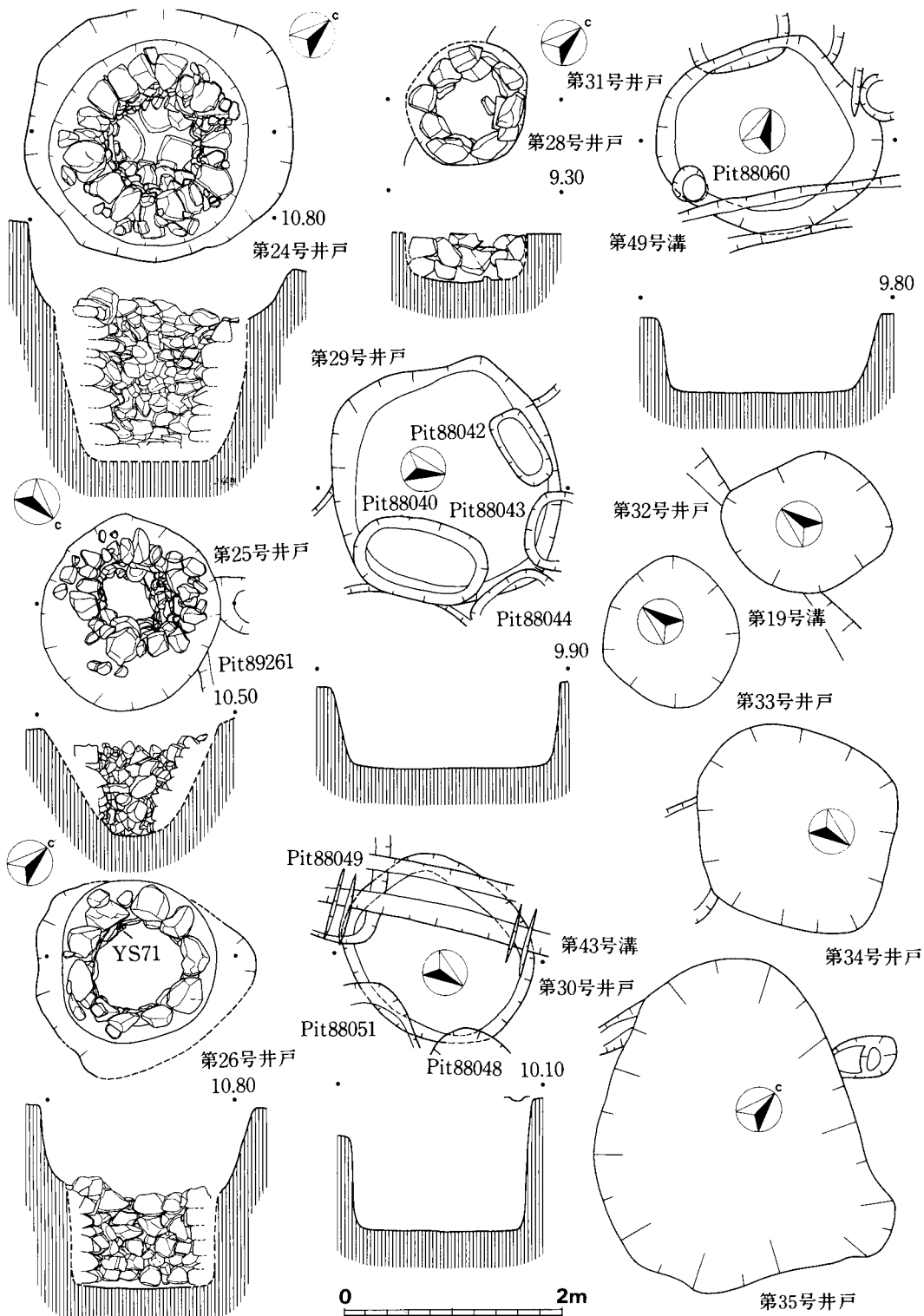


第69図 第6～13号井戸(S=1/60)

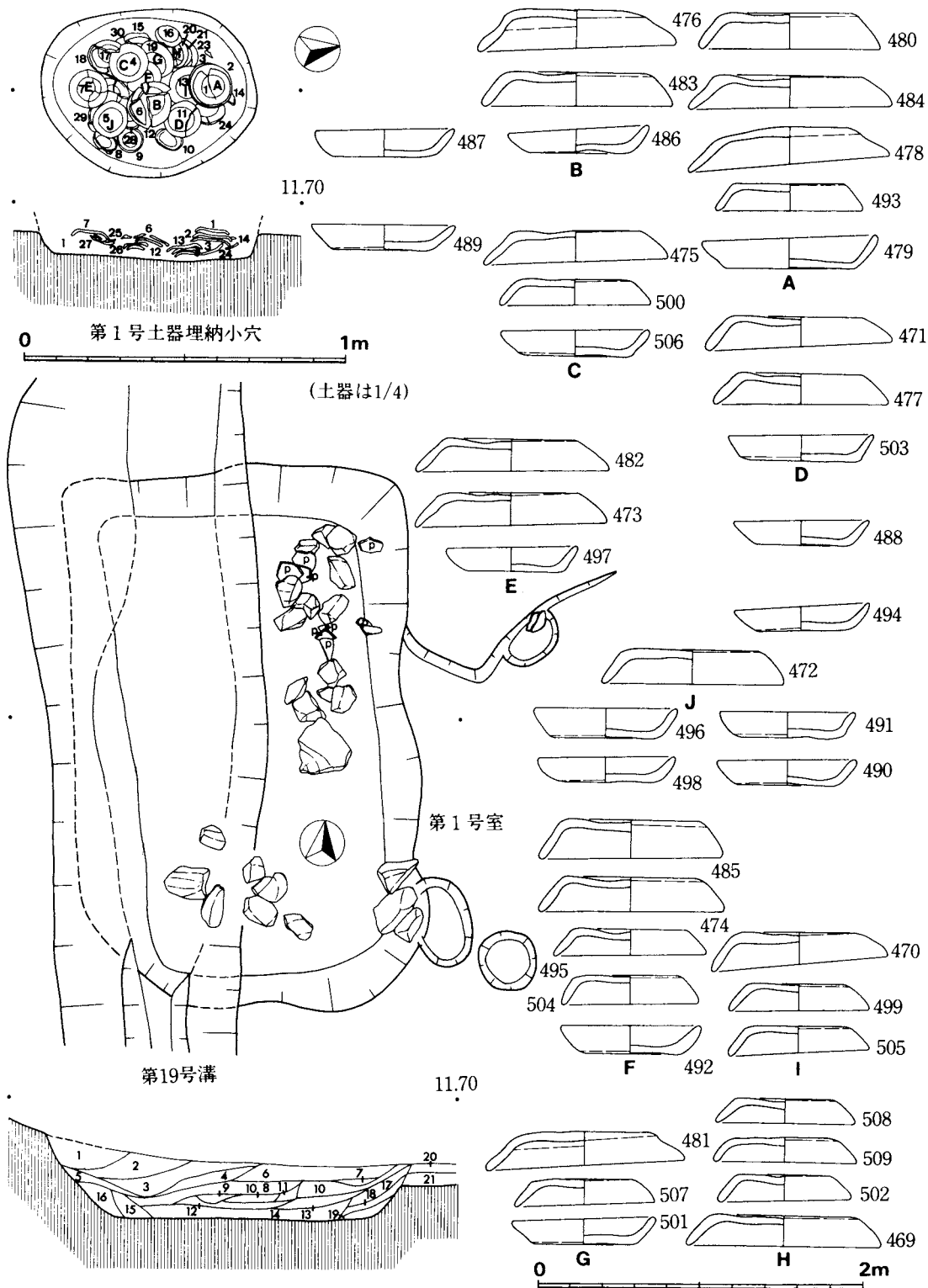


第70図 第14～23・27号井戸(S=1/60)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

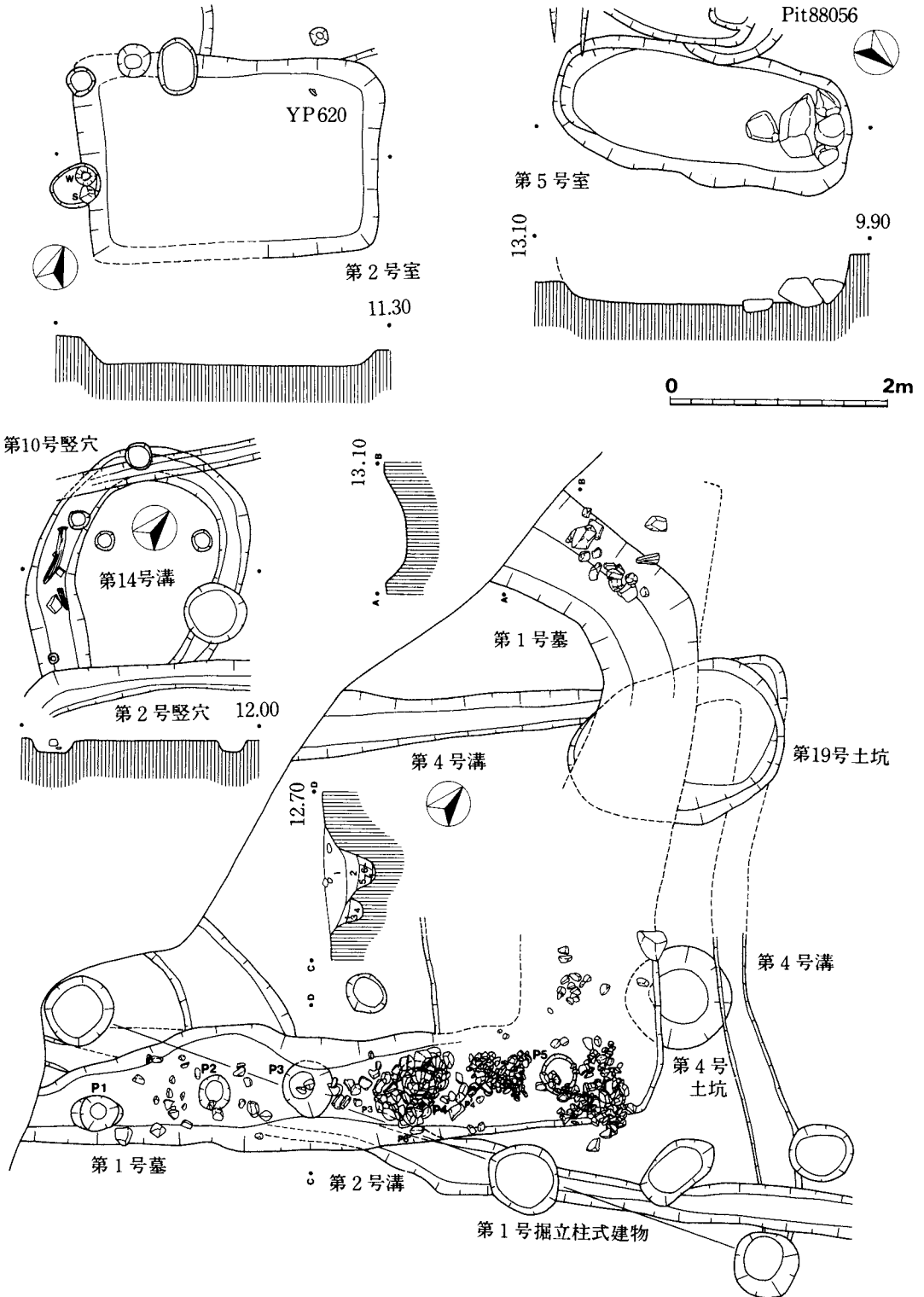


第71図 第24～26・28～35号井戸(S=1/60)

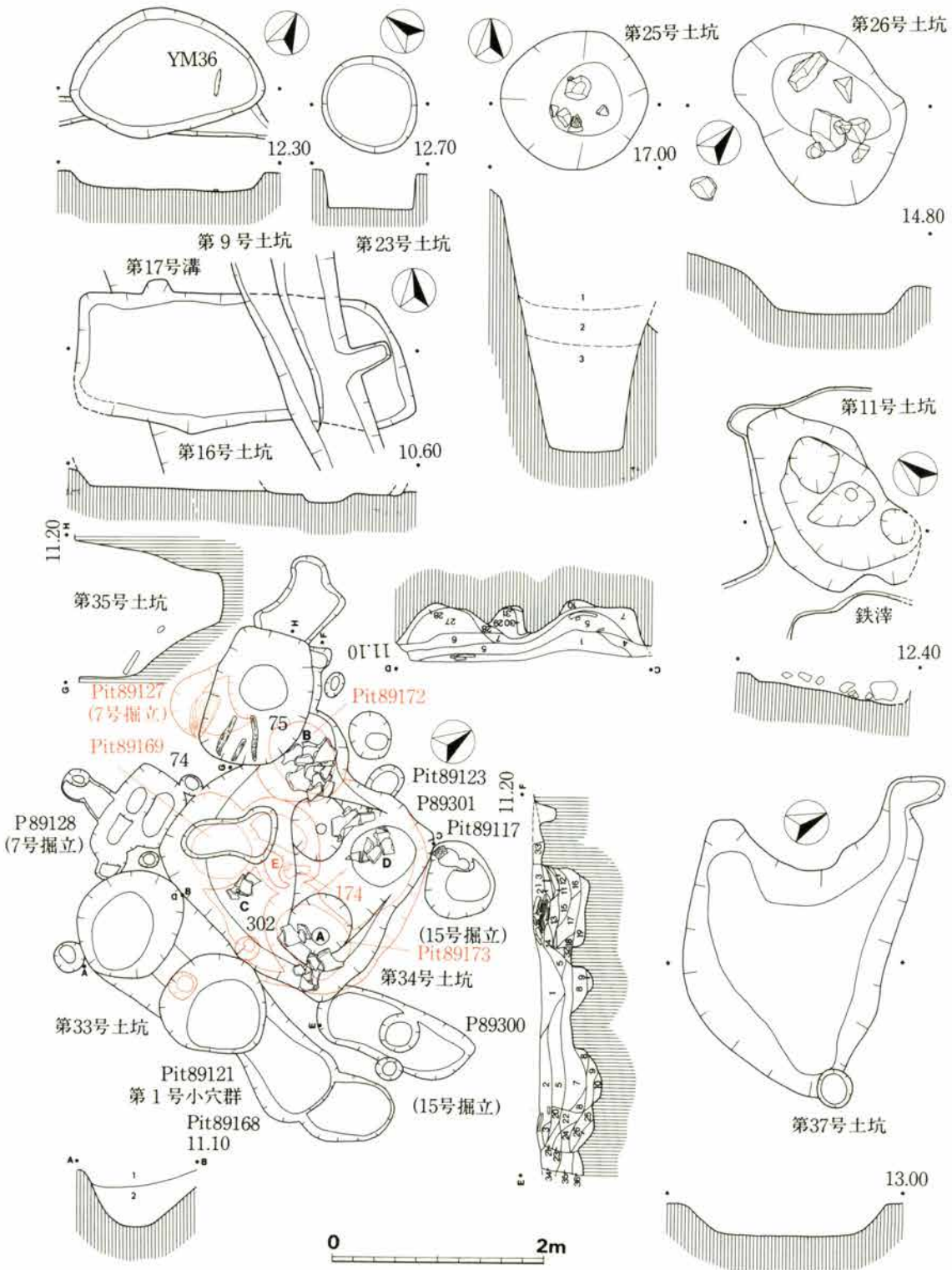


第72図 第1号土器埋納小穴(S=1/20)・第1号室(S=1/40)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

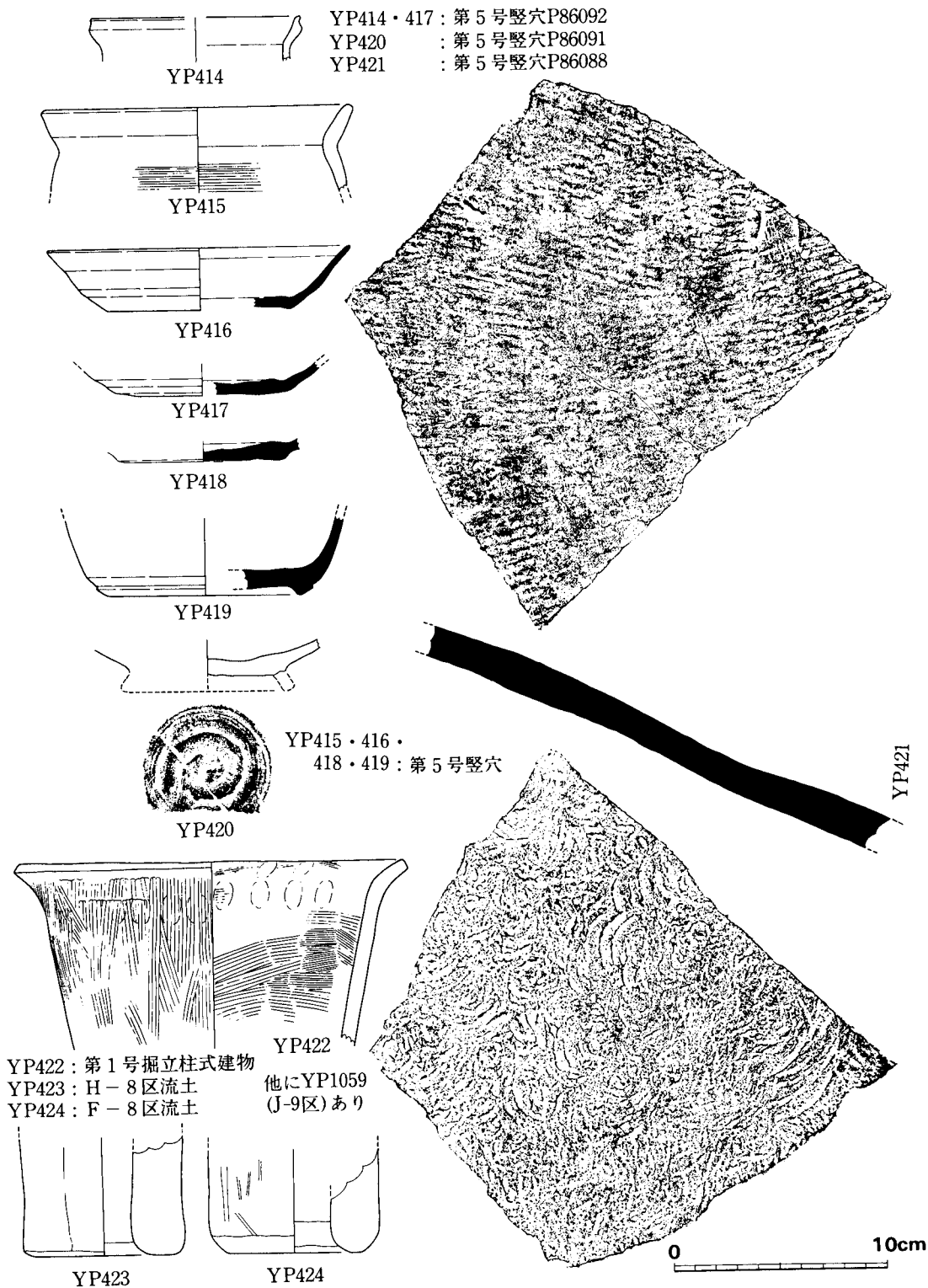


第73図 第2・5号室・第1号墓・第14号溝(S=1/60)



第74図 第1号小穴群(第33・34号土坑)・土坑(S=1/60)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物



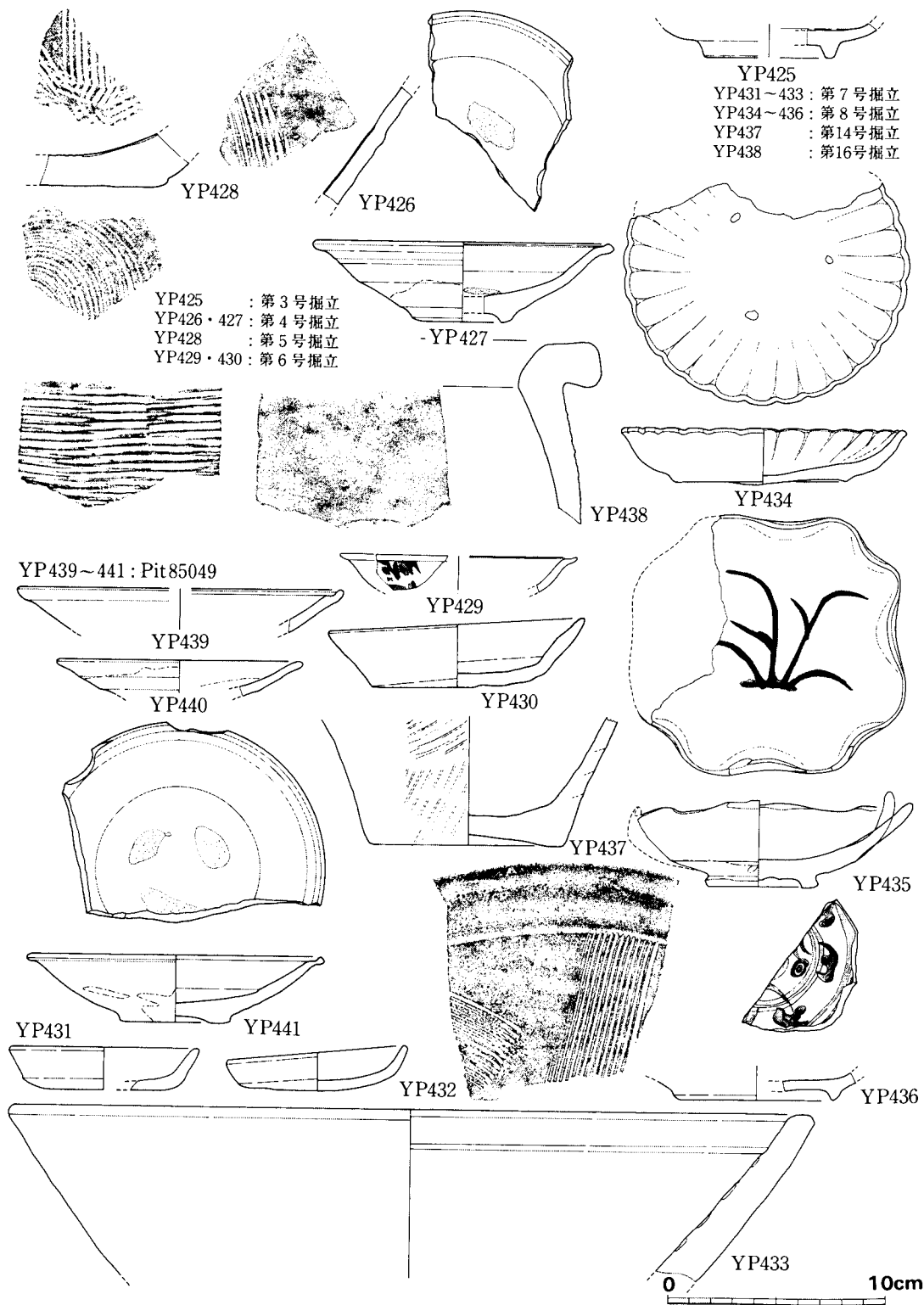
YP414・417 : 第5号竖穴P86092
 YP420 : 第5号竖穴P86091
 YP421 : 第5号竖穴P86088

YP415・416・
 418・419 : 第5号竖穴

YP422 : 第1号掘立柱式建物
 YP423 : H-8区流土
 YP424 : F-8区流土

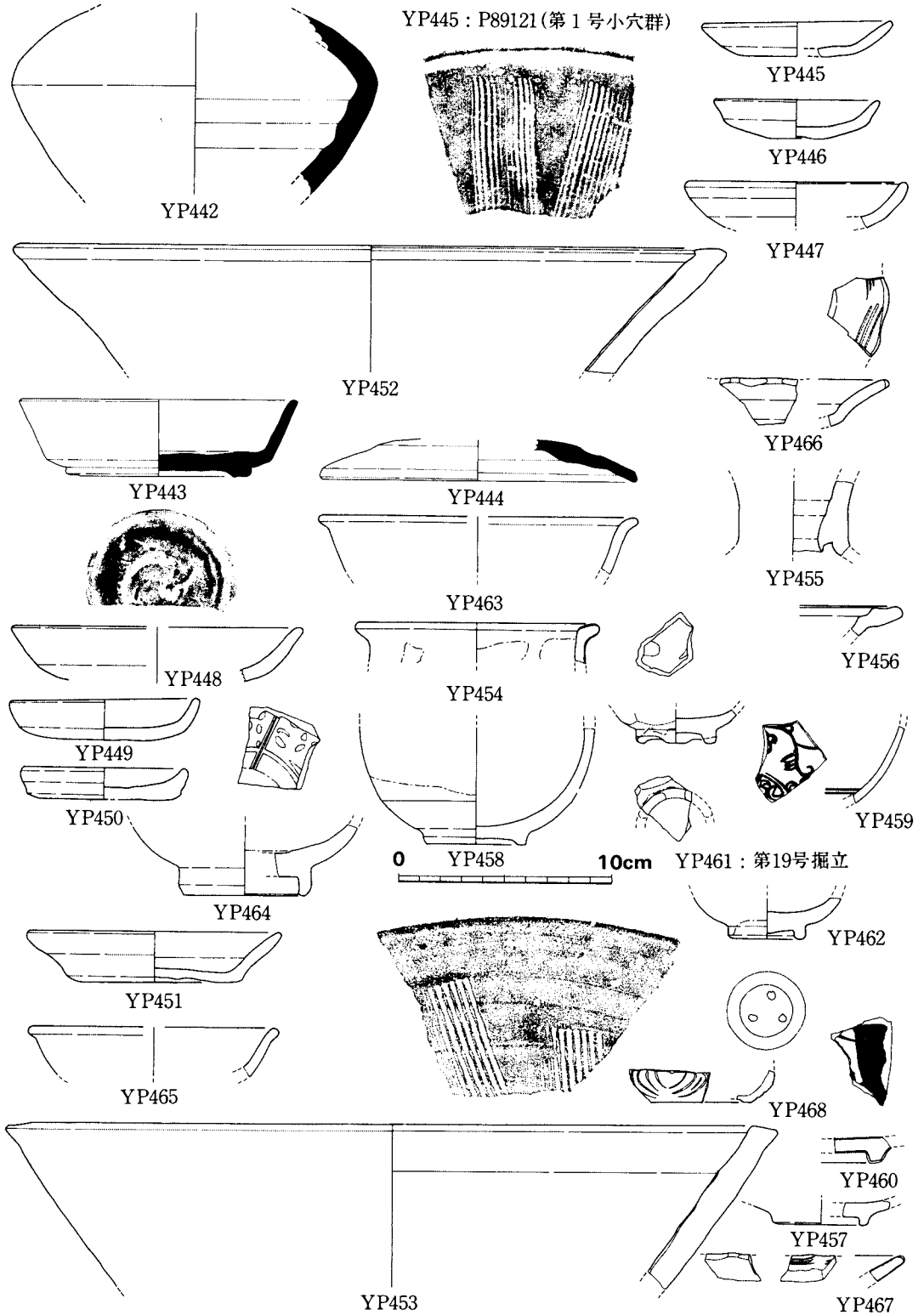
YP422
 他にYP1059
 (J-9区)あり

第75図 第5号竖穴状遺構他出土土器 (S=1/3)

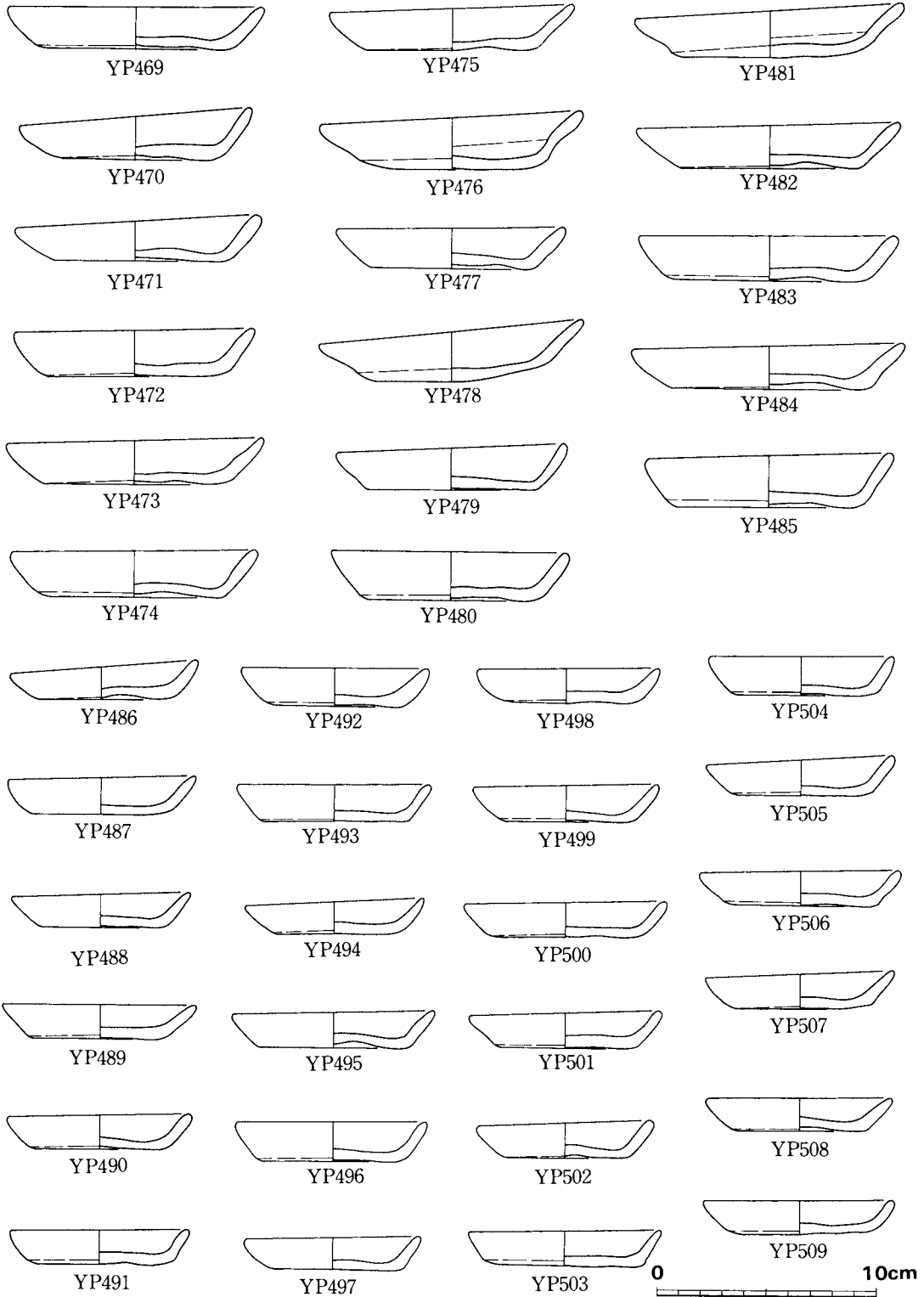


第76図 掘立柱式建物柱穴他出土土器(S=1/3)

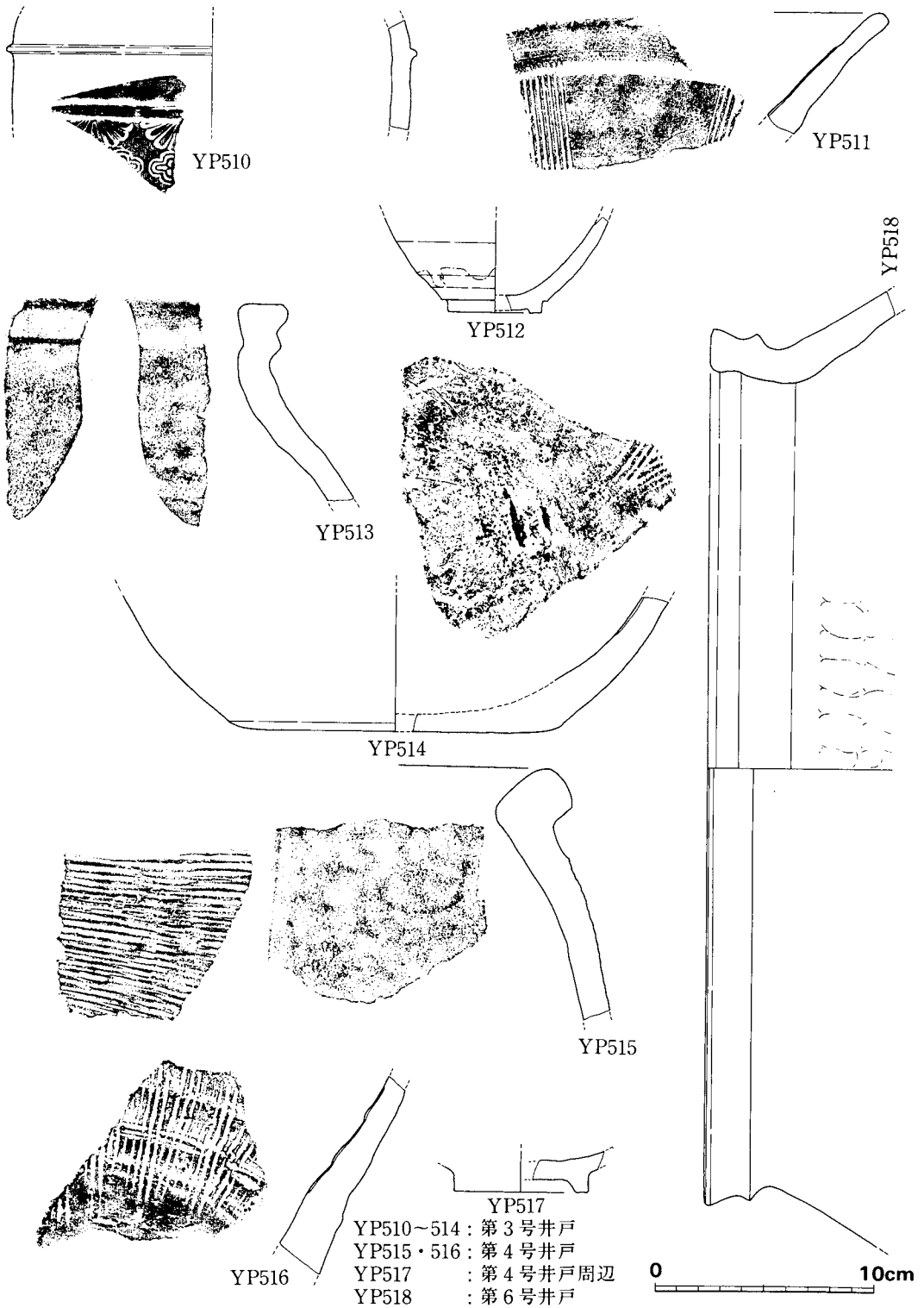
第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物



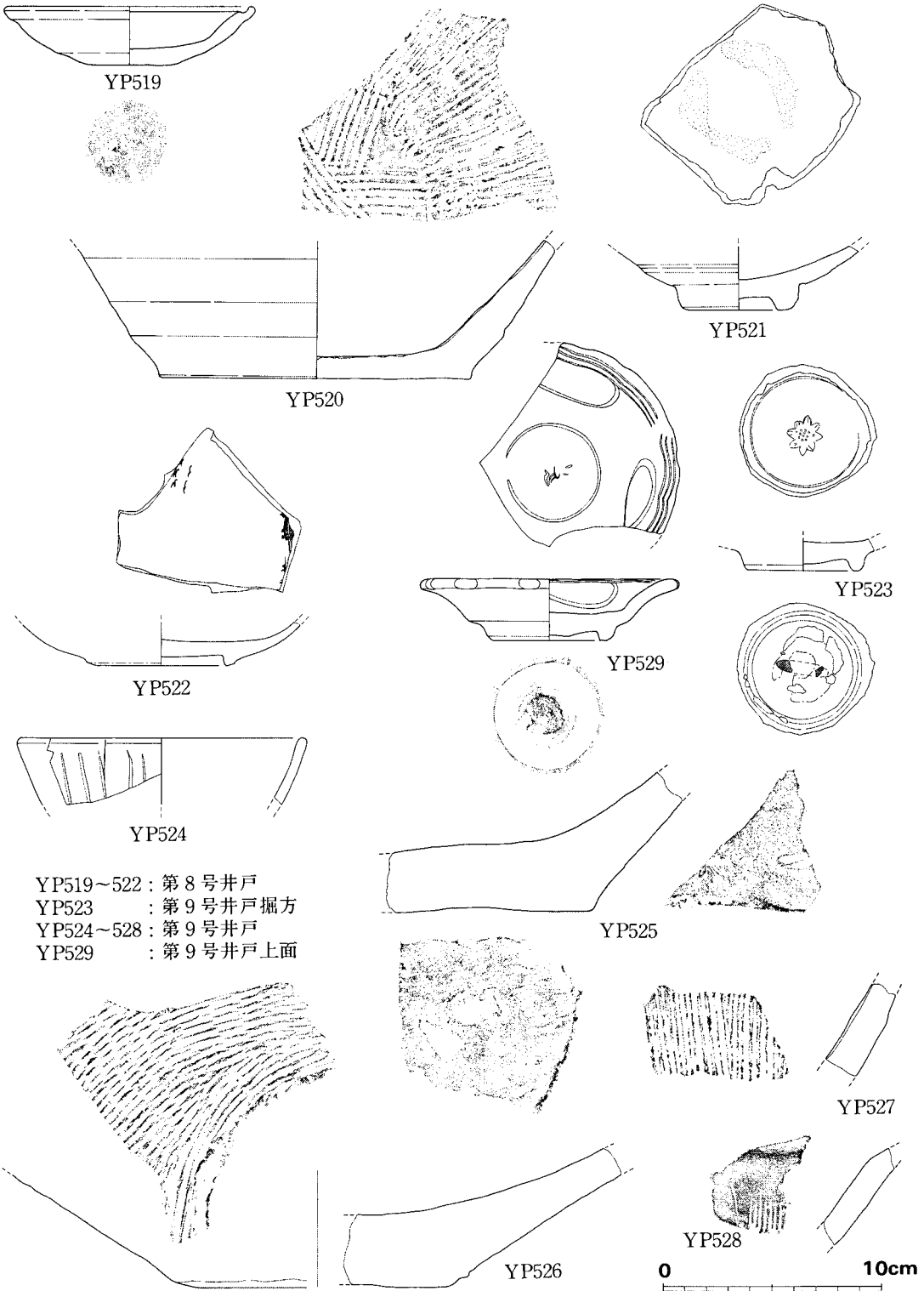
第77図 小穴(・柱穴)他出土土器(S=1/3)



第78図 第1号土器埋納小穴出土土器(S=1/3)



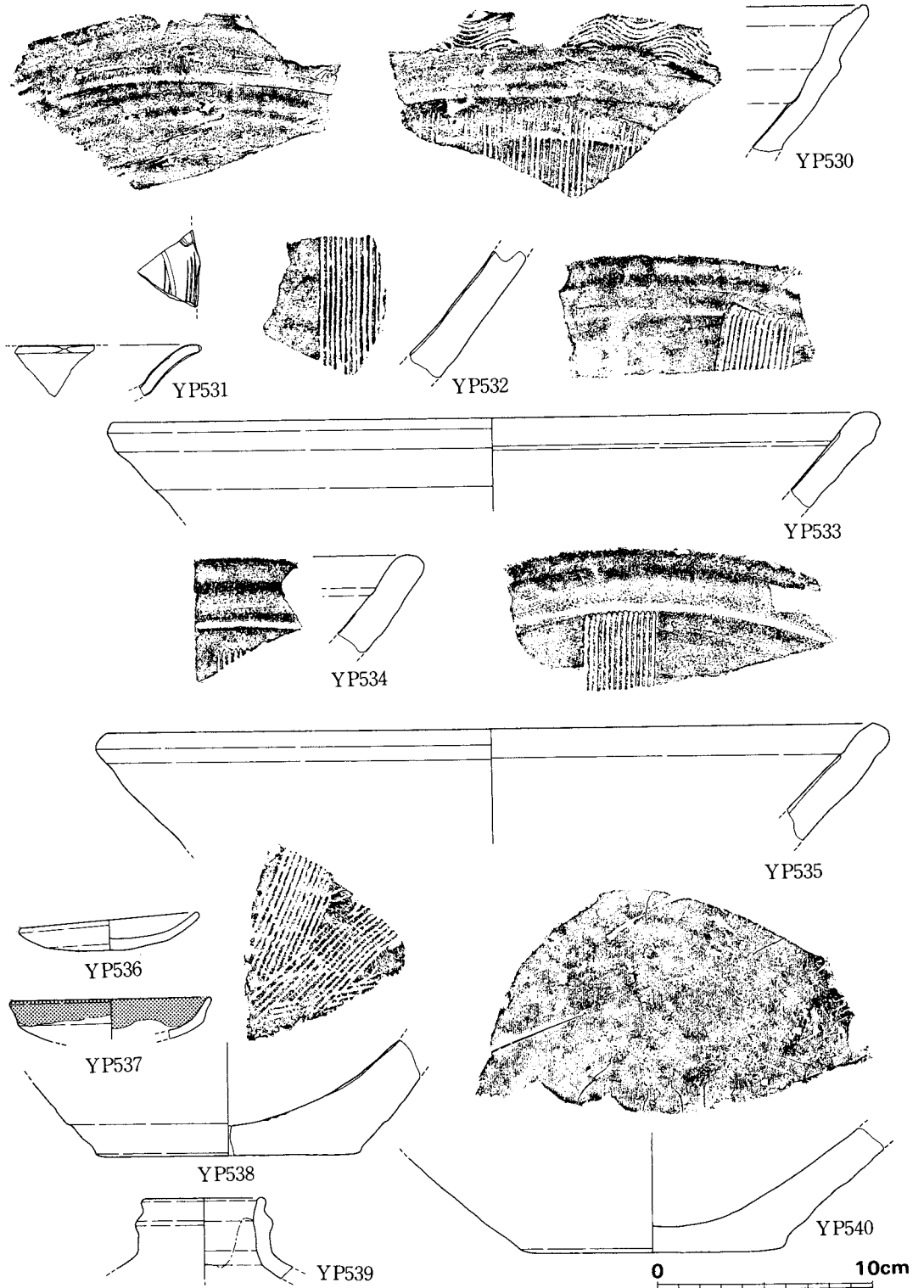
第79図 第3・4・6号井戸他出土土器 (S=1/3)



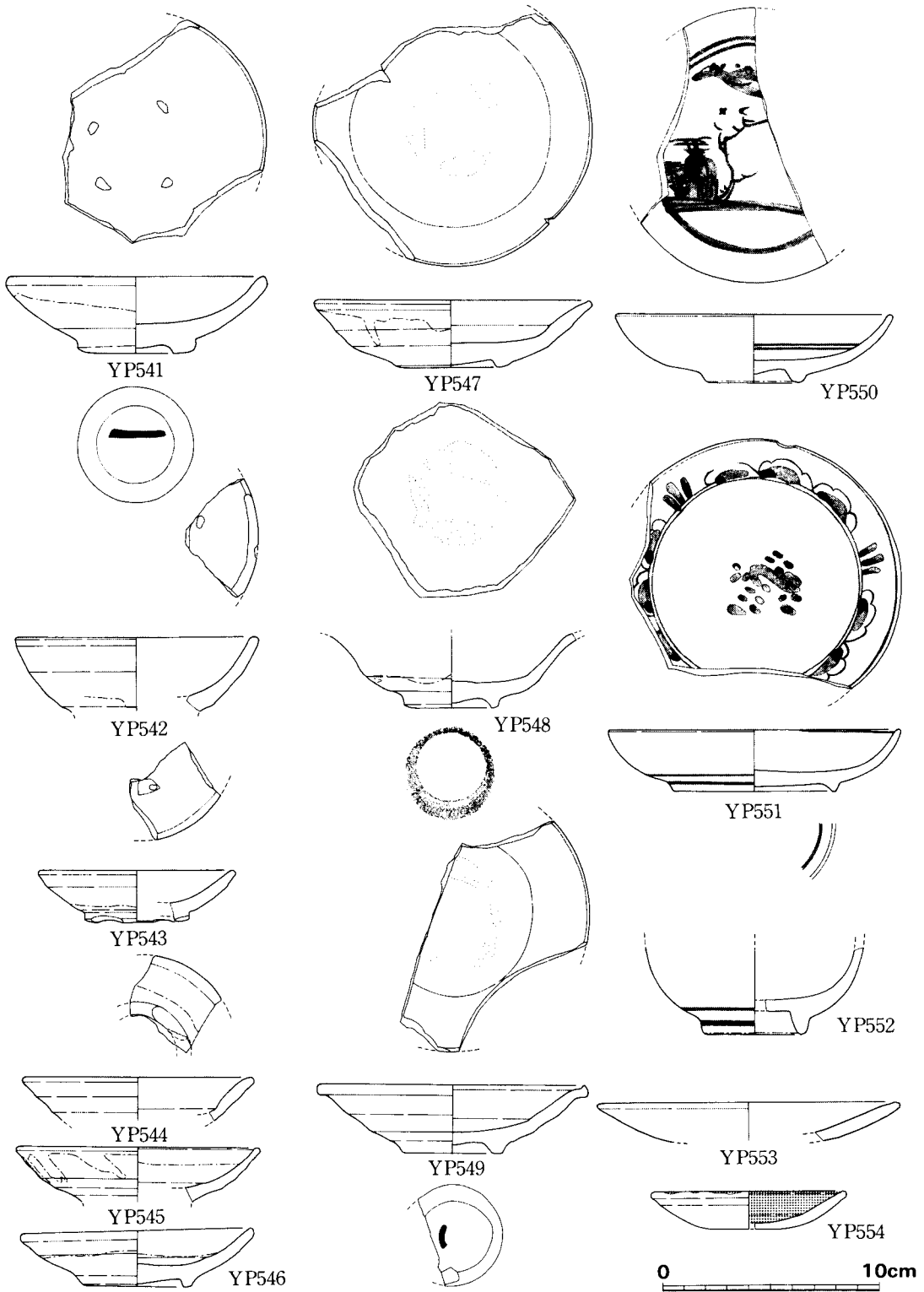
YP519~522 : 第8号井戸
 YP523 : 第9号井戸掘方
 YP524~528 : 第9号井戸
 YP529 : 第9号井戸上面

第80図 第8・9号井戸出土土器(S=1/3)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

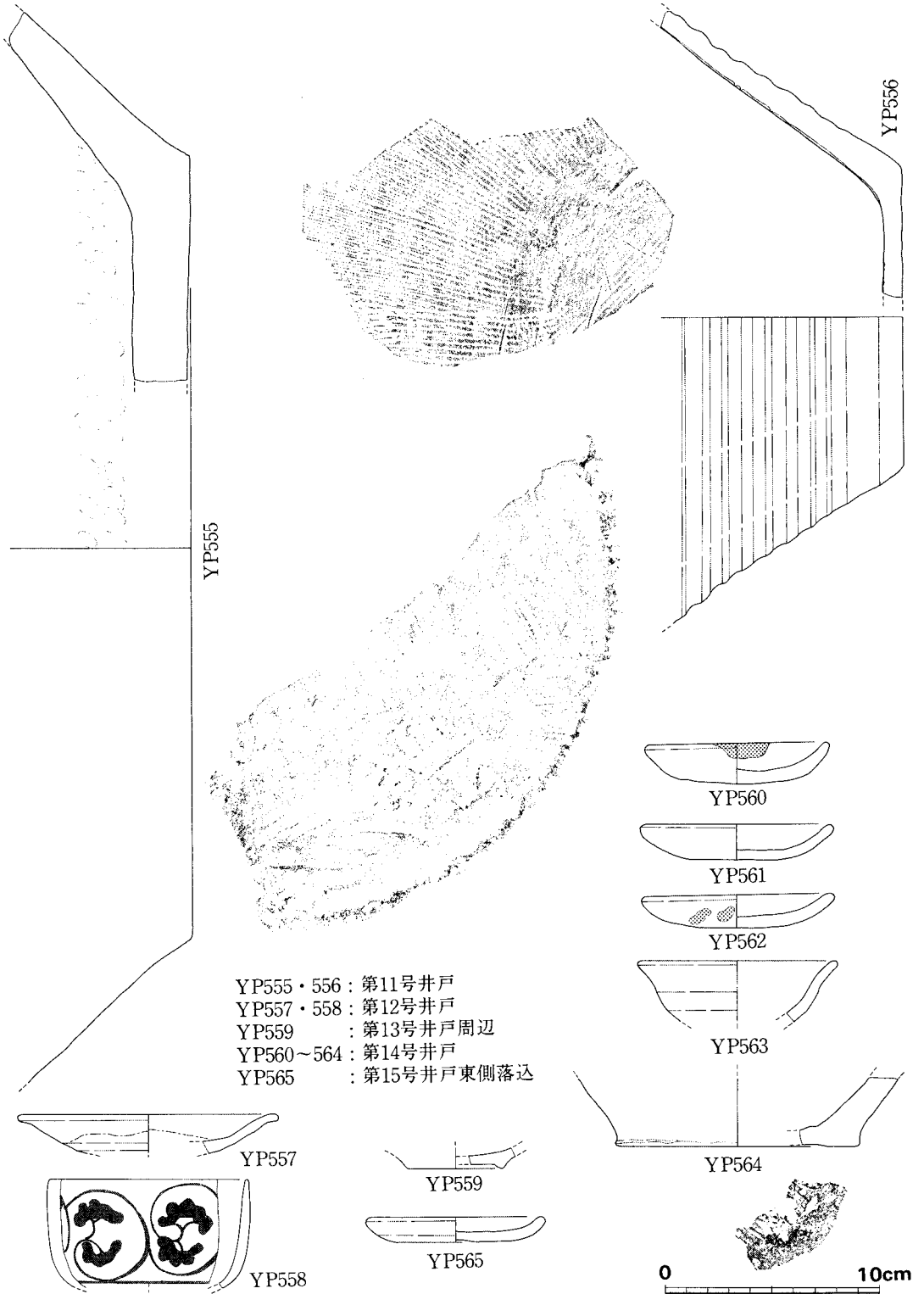


第81図 第10号井戸出土土器(S=1/3)



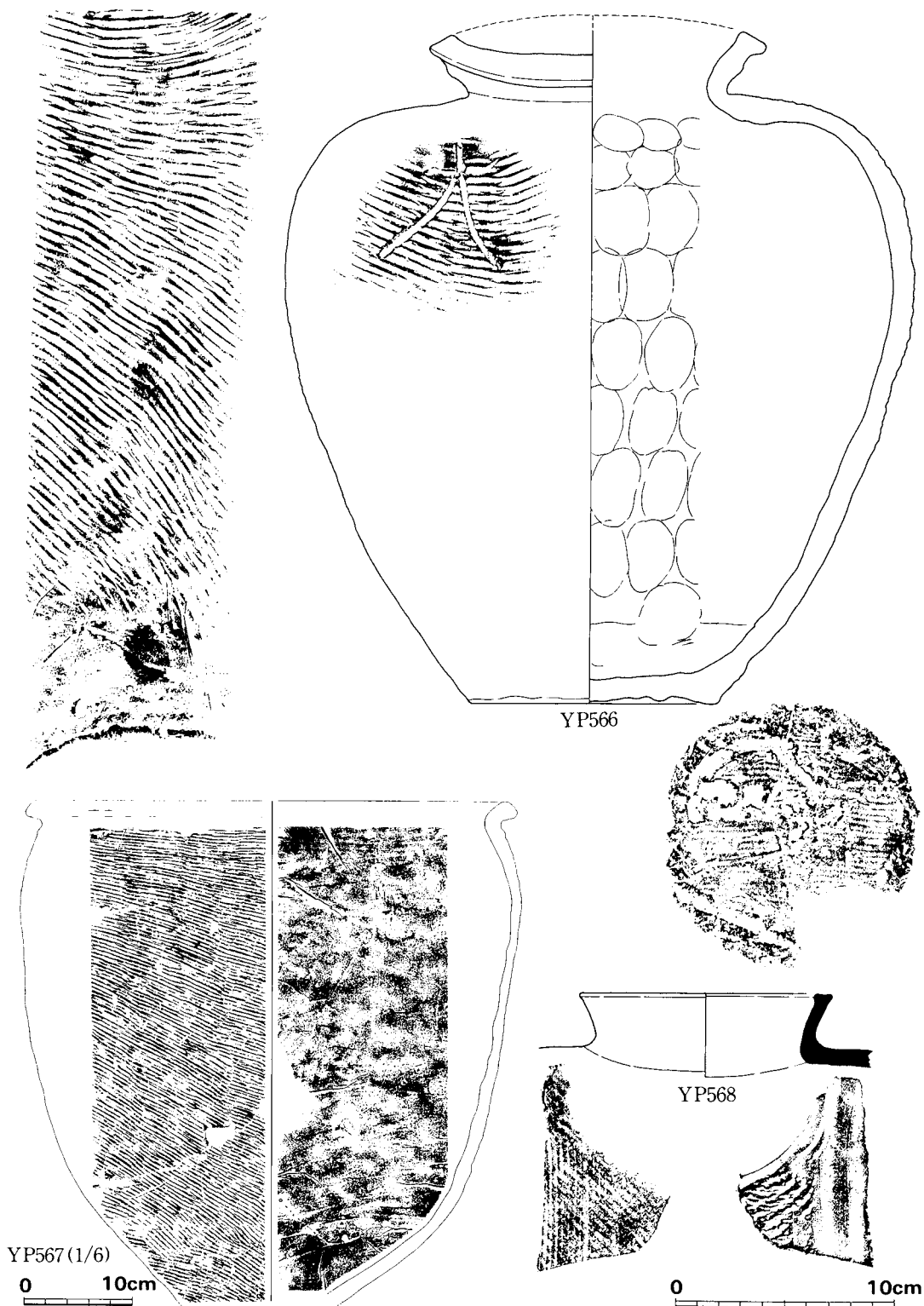
第82図 第11号井戸出土土器(S=1/3)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物



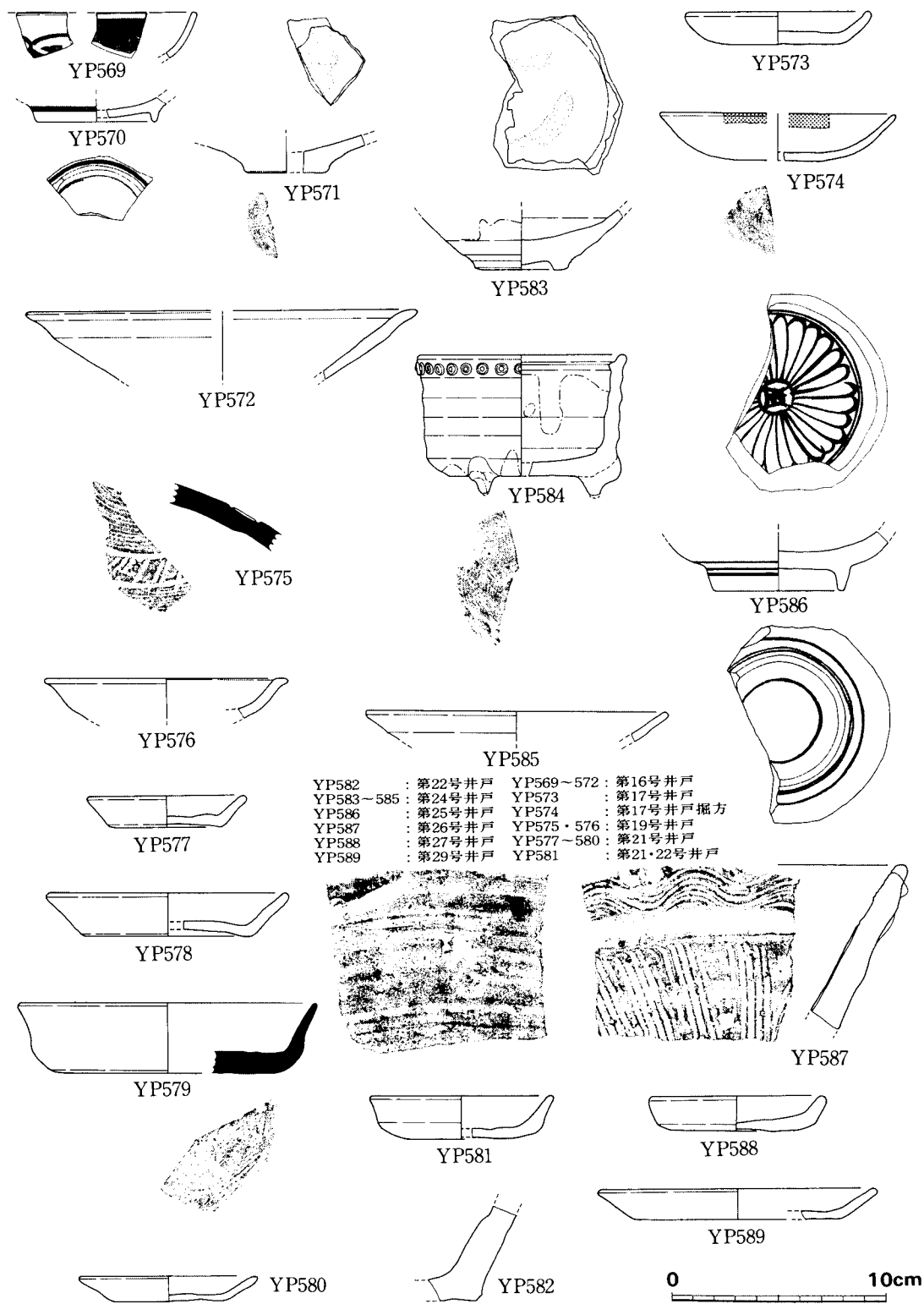
YP555・556 : 第11号井戸
 YP557・558 : 第12号井戸
 YP559 : 第13号井戸周辺
 YP560～564 : 第14号井戸
 YP565 : 第15号井戸東側落込

第83図 第11・12・14号井戸他出土土器(S=1/3)



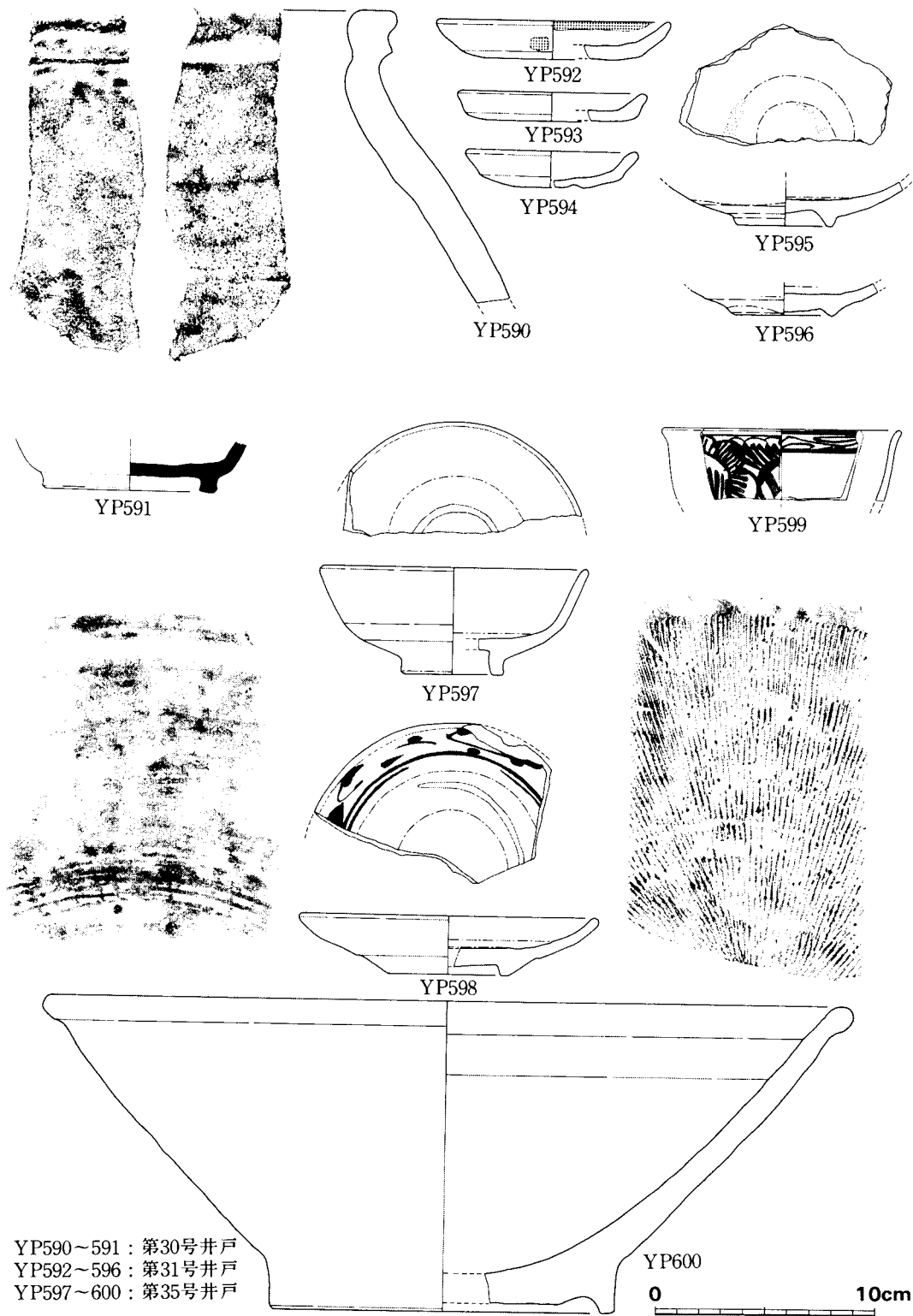
第84図 第20号井戸出土土器(S=1/3・1/6)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物



- | | | | |
|-----------|----------|-----------|-------------|
| YP582 | : 第22号井戸 | YP569～572 | : 第16号井戸 |
| YP583～585 | : 第24号井戸 | YP573 | : 第17号井戸 |
| YP586 | : 第25号井戸 | YP574 | : 第17号井戸掘方 |
| YP587 | : 第26号井戸 | YP575・576 | : 第19号井戸 |
| YP588 | : 第27号井戸 | YP577～580 | : 第21号井戸 |
| YP589 | : 第29号井戸 | YP581 | : 第21・22号井戸 |

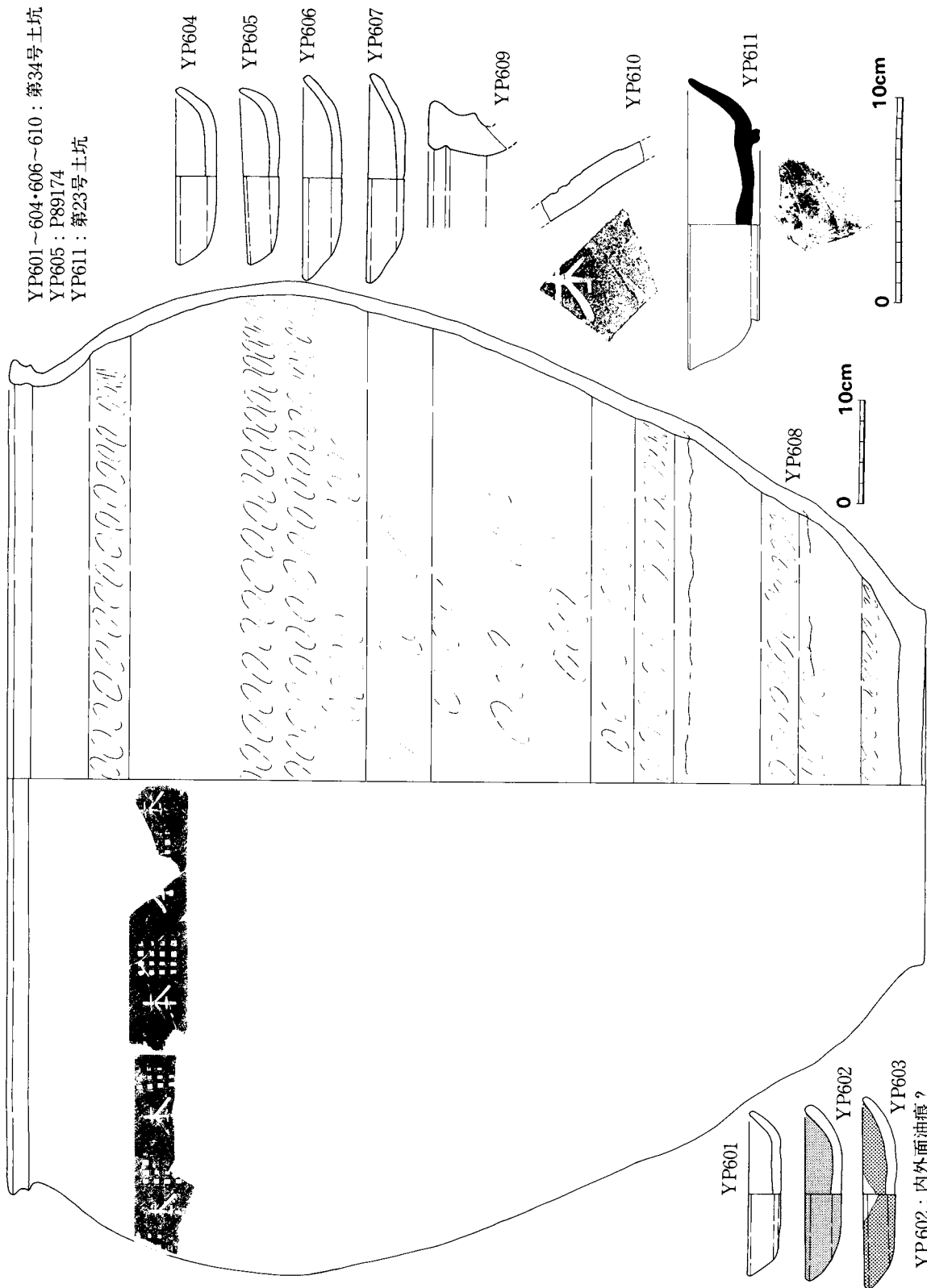
第85図 第16・17・19・21・22・24～27・29号井戸出土土器(S=1/3)



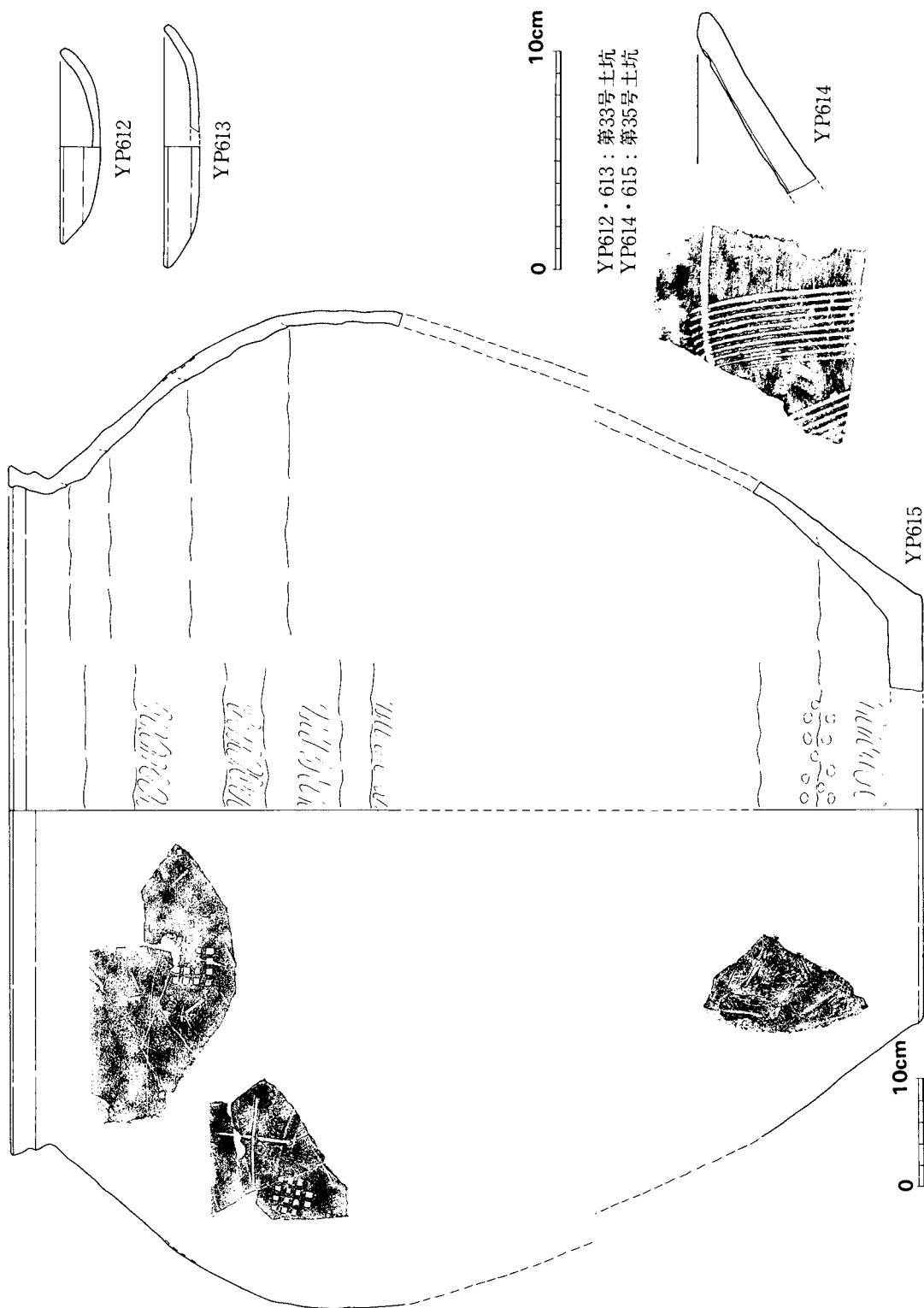
YP590～591：第30号井戸
 YP592～596：第31号井戸
 YP597～600：第35号井戸

第86図 第30・31・35号井戸出土土器 (S=1/3)

YP601～604・606～610：第34号土坑
 YP605：P89174
 YP611：第23号土坑

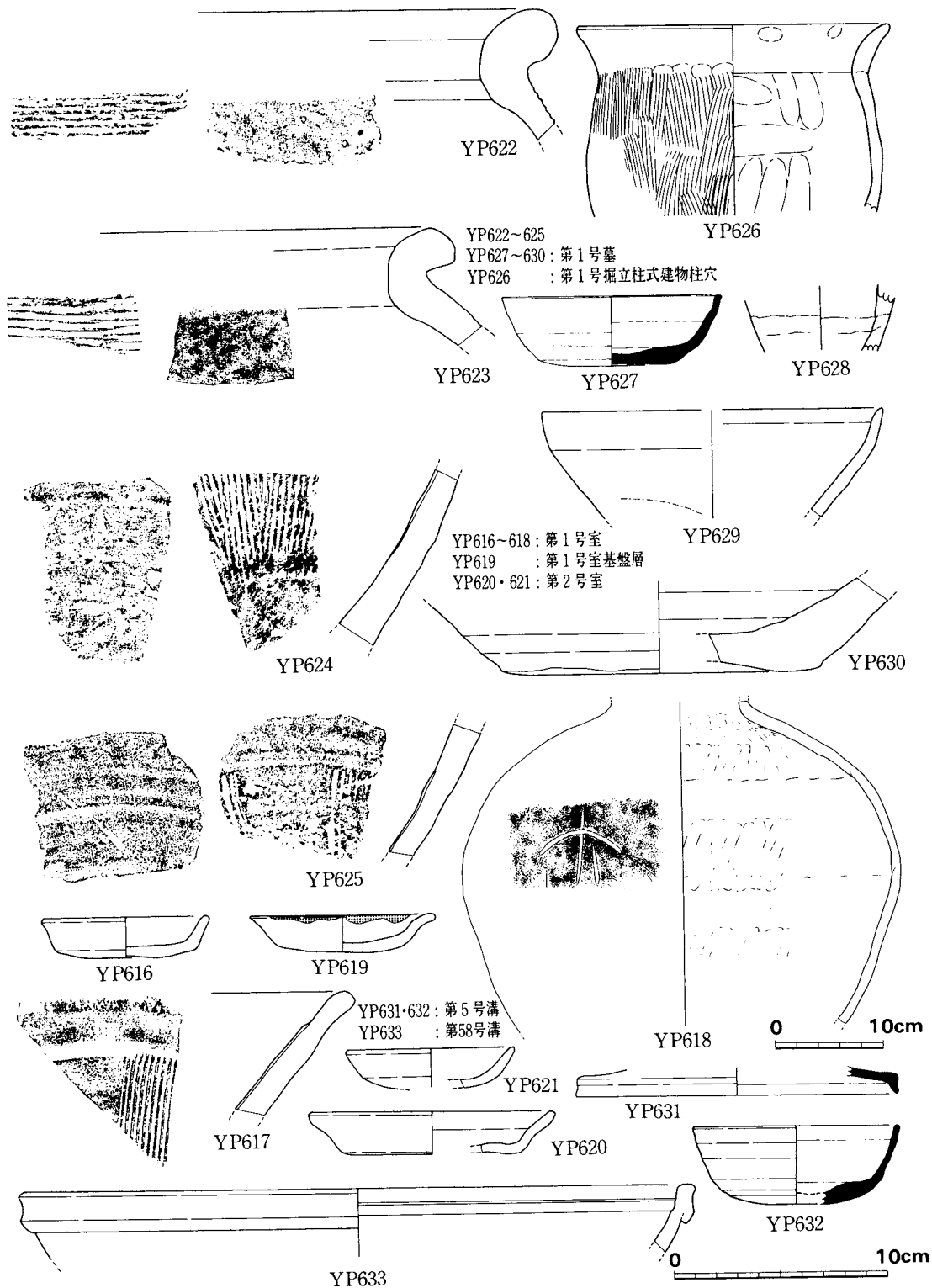


第87図 第1号小穴群(第34号土坑)・他出土土器(S=1/3・1/6)

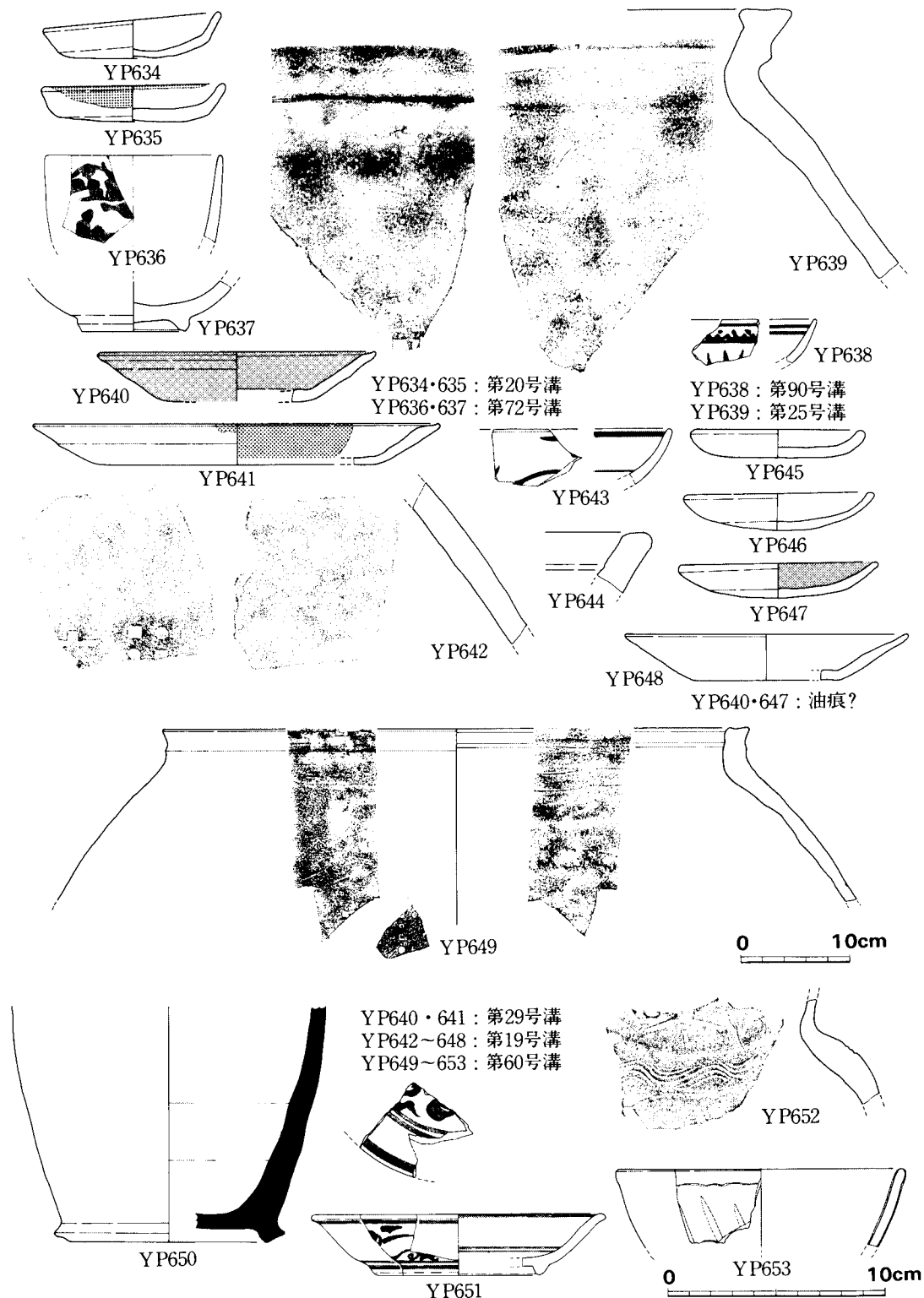


第88図 第1号小穴群(第33号土坑)・他出土土器(S=1/3・1/6)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

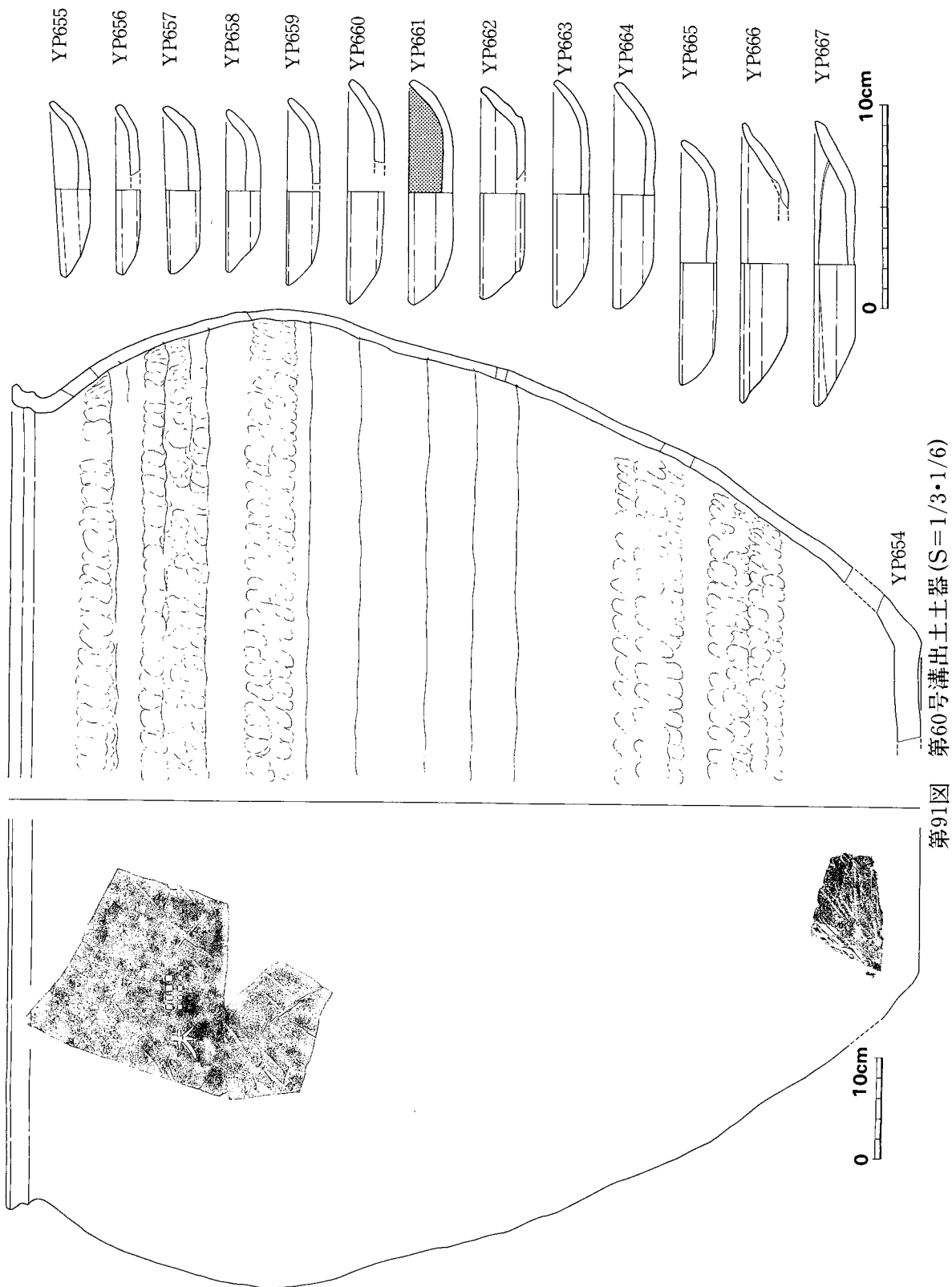


第89図 第1号墓、第1・2号室、第5・58号溝出土土器 (S=1/3・1/6)

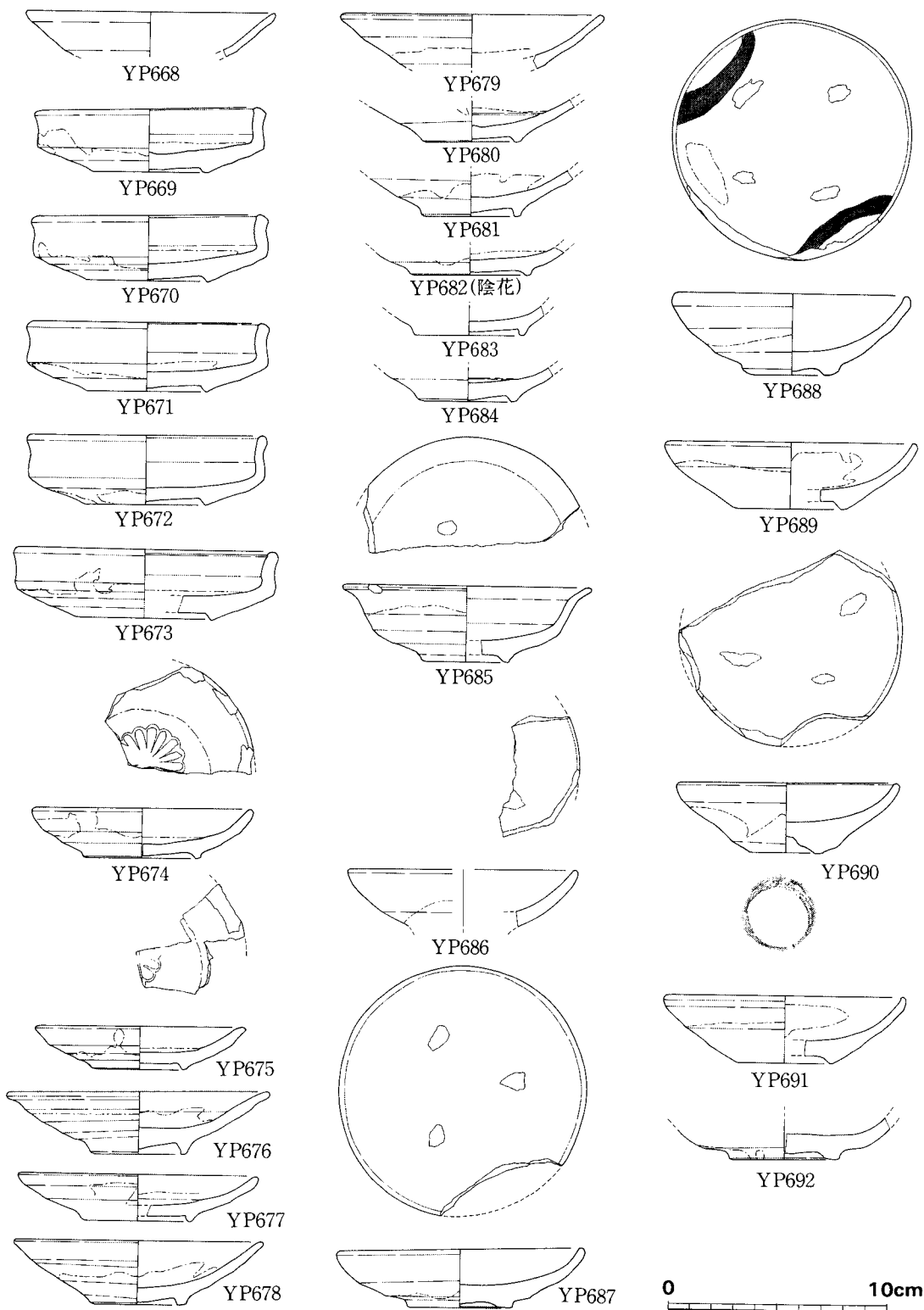


第90図 第20・19・29・60号溝他出土土器(S=1/3・1/6)

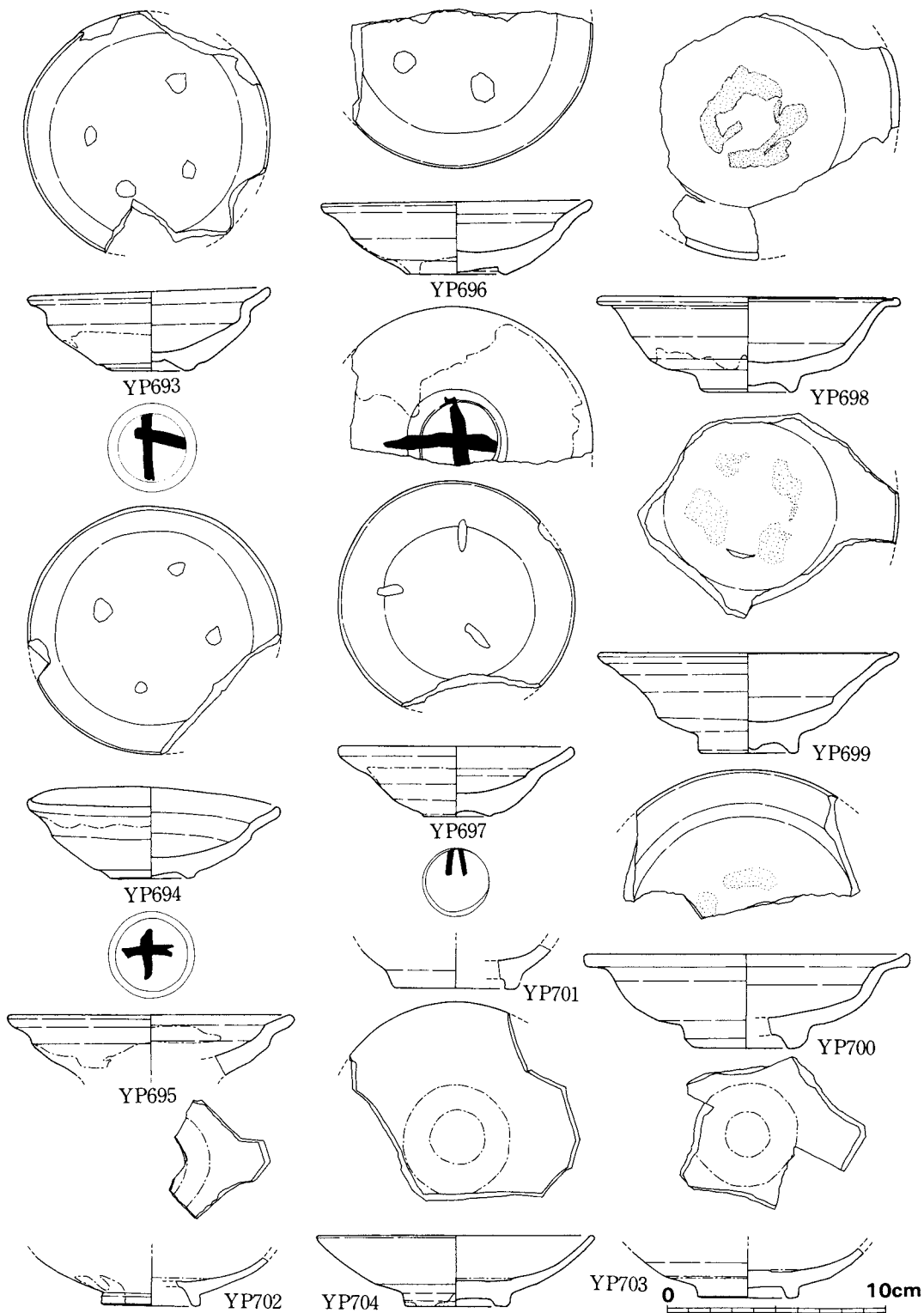
第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物



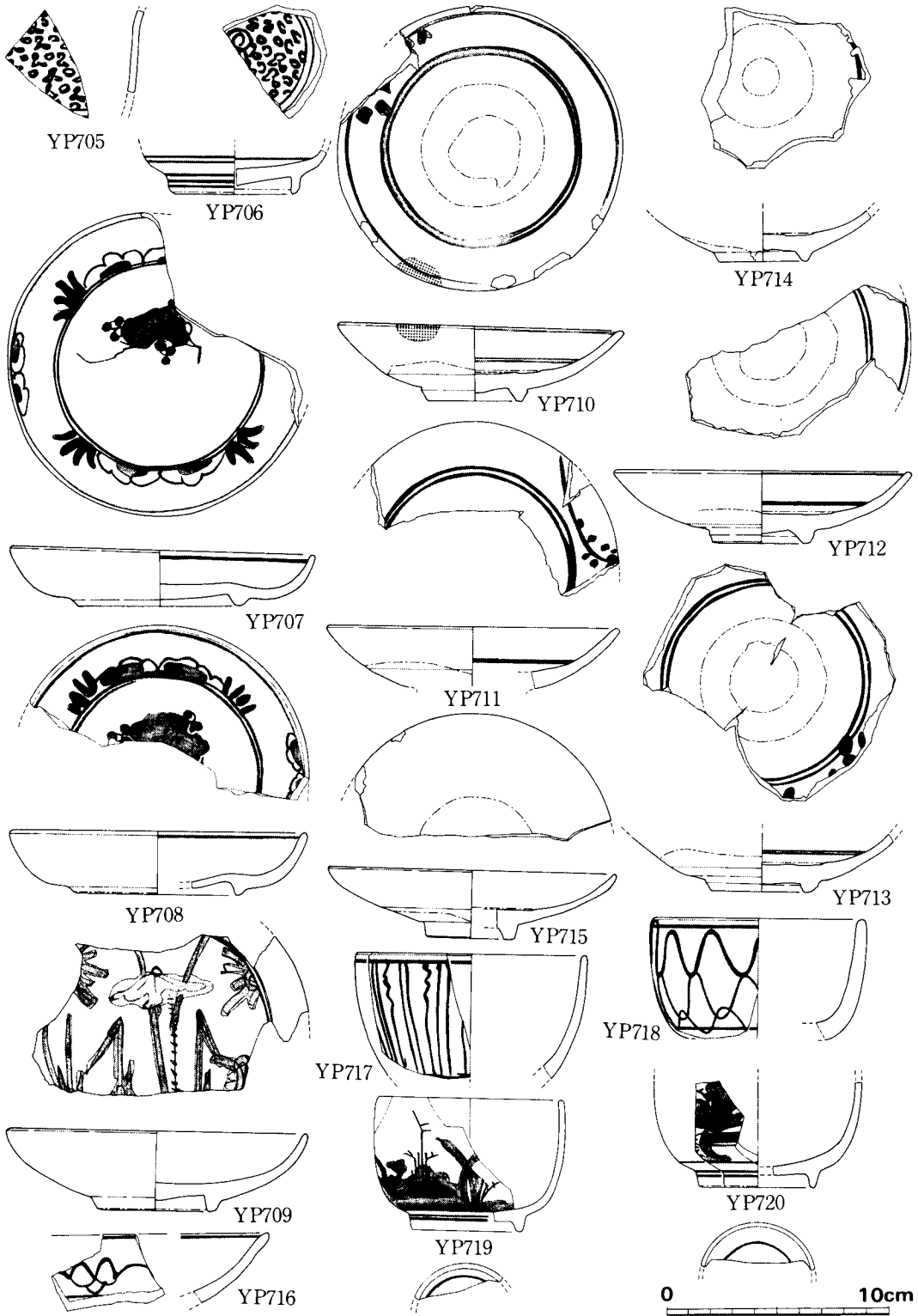
第91図 第60号溝出土土器(S=1/3・1/6)



第92図 第50号溝出土土器(S=1/3)

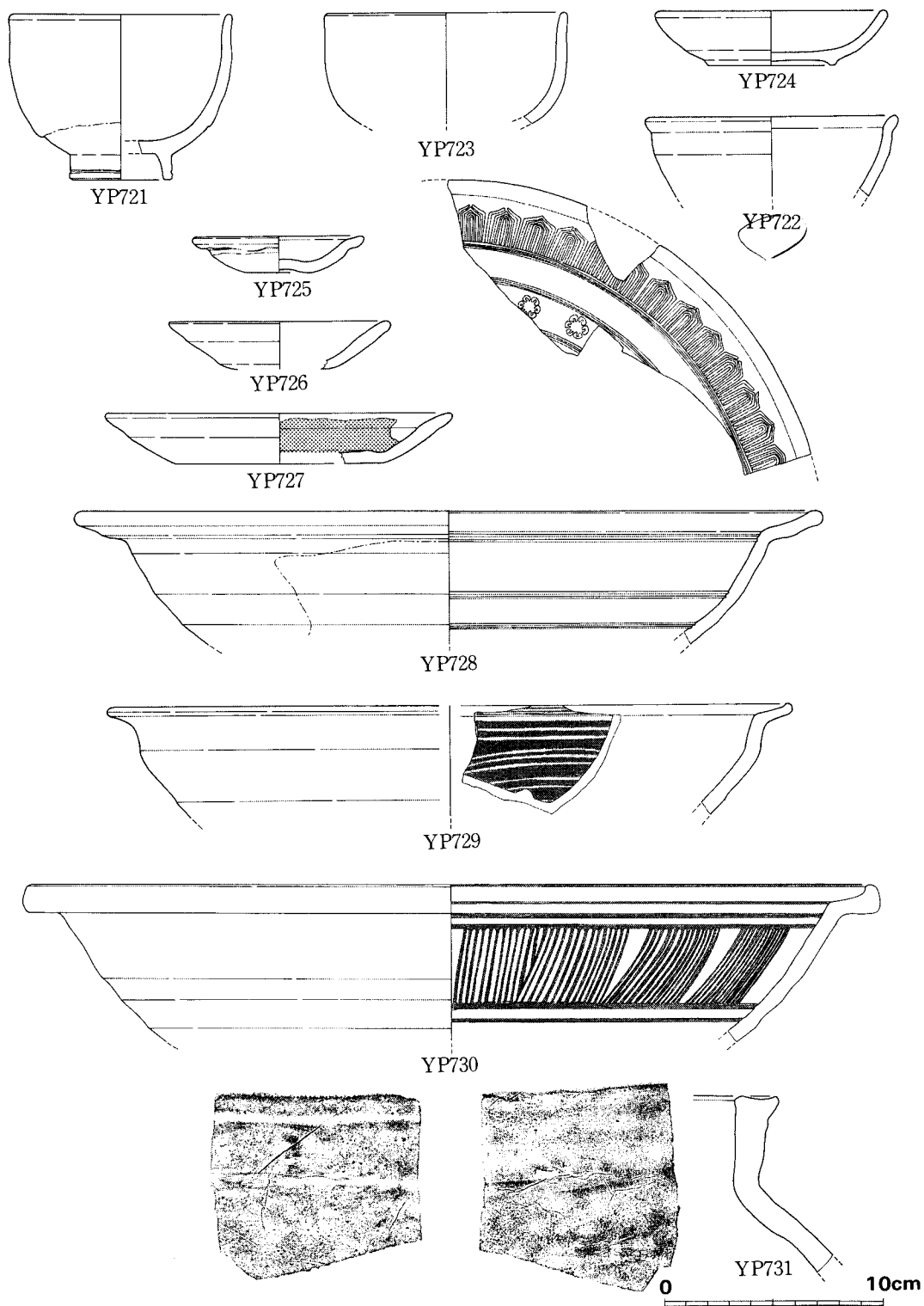


第93図 第50号溝出土土器(S=1/3)

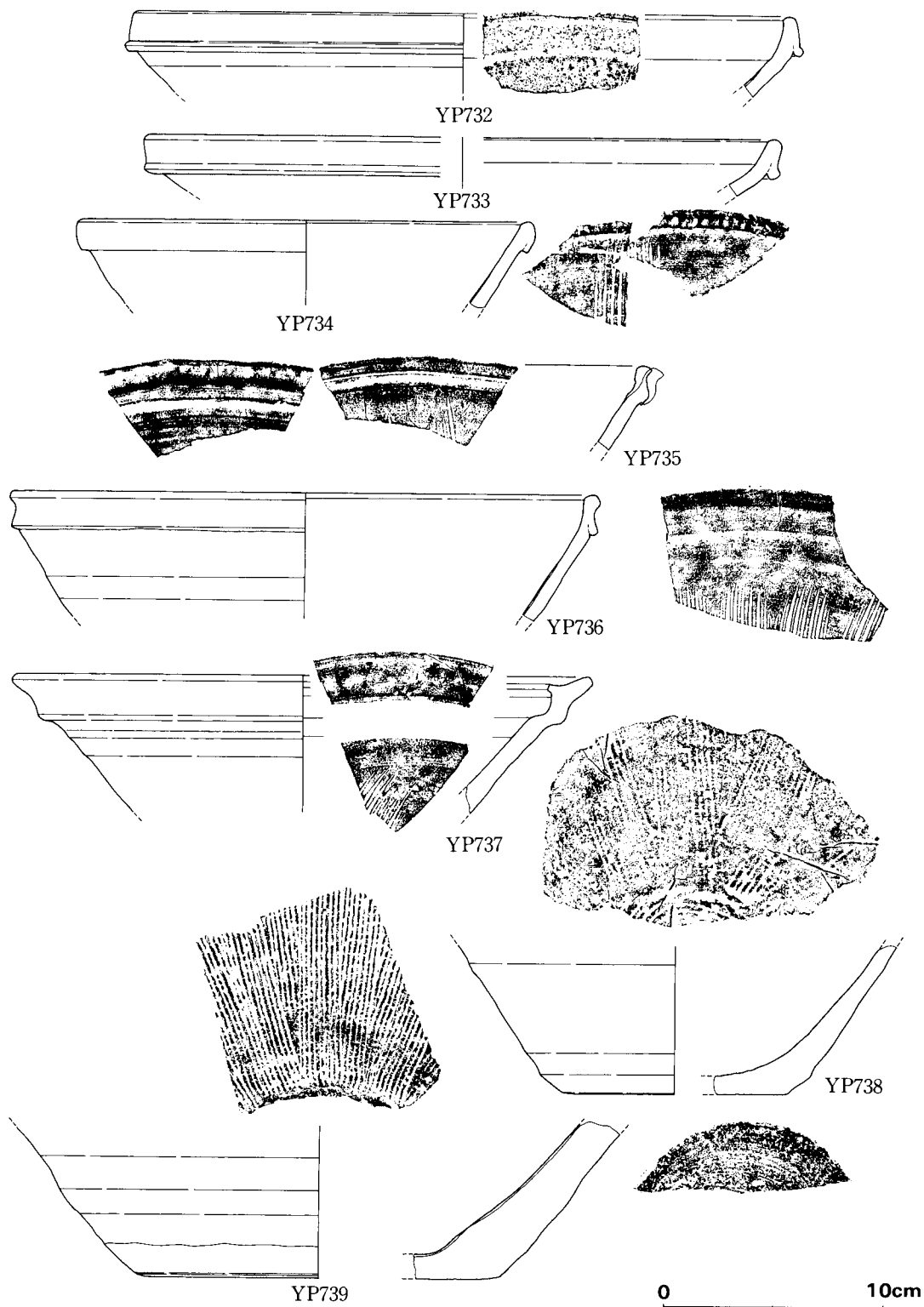


第94図 第50号溝出土土器(S=1/3)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物



第95図 第50号溝出土土器(S=1/3)



第96図 第50号溝出土土器(S=1/3)

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

出土土器観察表 (a:口径 b:胴径 c:高台径・底径 h:器高)

番号 整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)	番号 整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)
YP 414	5 壺	土師器甕 a:(9.8)91D61 灰白 小片 P86092	YP 447	小穴	瀬戸灰釉皿 a:10.0 91D408 1/2 P89158
YP 415	5 壺	土師器甕 a:14.6 91D62 灰白 小片 埋土	YP 448	小穴	土師器内黒碗 a:13.2 91D396 小片 P89039
YP 416 91D 63	5号 壺穴	須恵器無台杯 a:14.6 c:8.5 h:2.9 小片 埋土	YP 449	小穴	土師皿 a: 8.9 h:2.1 91D57 灰白 完 86144
YP 417	5 壺	須恵器無台杯 c: 8.0 91D64 1/4 P86092	YP 450	小穴	土師皿 a: 7.4 h:1.5 91397 灰白 1/3 89053
YP 418 91D 59	5号 壺穴	須恵器無台杯 c: 7.3 完 西隅 外底一部炭化物(煤?) 附着	YP 451	小穴	土師皿 a:11.8 h:2.4 91399 灰白 2/3 89091
YP 419	5 壺	須恵器有台杯 c:10.2 91D66 1/4 埋土	YP 452	小穴	越前播鉢 a:32.6 91D243 小片 P89017
YP 420 91D 60	5号 壺	土師器有台杯 にぶい橙色 2/3 P86091 内外面一部炭化物(煤?) 附着	YP 453	小穴	珠洲播鉢 a:36.0 91D243 小片 P89017
YP 421	5 壺	須恵器甕 91D65 小片 P86088	YP 454	小穴	瀬戸香炉鉄軸? a:11.2 91D402 1/4 P89136
YP 422 87B 64	1号 掘立	土師器甕 a:18.0 橙色 1/2 外・内口縁端煤附着 東側底列南隅柱穴	YP 455	小穴	瀬戸灰釉(花?)瓶 91D411 1/4 P89162
YP 423	流土	襷羽口 外径7.6 内径3.6 91D76 橙 1/2 H-8	YP 456	小穴	瀬戸灰釉鉢 断面漆継 91D410 小片 P89163
YP 424	流土	襷羽口 外約8 内約5 91D75 橙 1/4 F-8	YP 457	小穴	瀬戸灰釉皿 91D417 1/4 P89234
YP 425	3 掘	青磁皿 c:(5.8) 87C5 小片 P85015	YP 458	10掘	唐津碗 c: 4.7 91D284 2/3 P88066・88068
YP 426	4 掘	越中瀬戸播鉢 91D3 小片 P85016	YP 459	小穴	明架付碗 91D130 小片 P87028
YP 427	4 掘	唐津皿 a:13.6 c:3.8 h:3.7 87C8 1/4 85023	YP 460	小穴	明架付皿 91D414 小片 P89222
YP 428	5 掘	唐津播鉢 87C006 小片 P85020	YP 461 91D239	19号 掘立	白磁八角皿 c:3.6 高台下面挟り 4 1/4 P88007
YP 429	6 掘	明架付皿 a:(11.0) 91D131 小片 P87001	YP 462 91D415	小穴	白磁皿 c3.6 外底面褐色漆 3箇所 1/4 P89214
YP 430 91D132	6号 掘立	土師皿 a:12.0 c:7.5 h:3.2 ほぼ完 P87001 灰白 内外面一部炭化物(煤?) 附着	YP 463	小穴	青磁碗 a:(14.6) 91D409 小片 P89154
YP 431 91D392	7号 掘立	土師皿 a: 8.8 c:5.6 h:2.0 1/4 P89007 灰白色	YP 464	小穴	青磁碗 c: 5.6 91D398 小片 P89061
YP 432 91D393	7号 掘立	土師皿 a: 8.4 h:2.1 3/4 P89007 灰白 内外面一部炭化物(煤?) 附着	YP 465	小穴	青磁碗 a:(11) 91D401 小片 P89096
YP 433	7 掘	越前播鉢 a:37.5 91D394 小片 P89007	YP 466	小穴	青磁皿 91D240 小片 P88033
YP 434 91D278	8号 掘立	志野菊皿 a:12.7 c:7.8 h:2.6 3/4 P88048	YP 467	小穴	青磁皿 91D405 小片 P89258
YP 435 91D277	8号 掘立	唐津向付 a:11.5~13.3 c:4.9 h:4.55 3/4 P88048	YP 468	小穴	青白磁合子 91D416 小片 P89238
YP 436	8 掘	明架付皿 c:7.0 91D238 底部漆継 1/2 88008	YP 469 87C 33	埋納 小穴	土師器大皿 a:11.2~11.8 c: 9.2 h: 2.0 P 23 G群 逆位 (P 22の下) 完 浅黄色
YP 437	14掘	甕底部 c:8.8 91A028 外条痕 完 P89057	YP 470	埋納 小穴	土師器大皿 a:10.5~11.0 c: 7.8 h: 2.5 P 13 I群 逆位 (P3・6の下) 完 浅黄色
YP 438	16掘	珠洲甕 91D449 小片 P89206	YP 471 87C 28	埋納 小穴	土師器大皿 a:11.0 c: 8.4 h: 2.2 P 11 D群 逆位 (P6の下) 完 浅黄色
YP 439	8549	皿 a:(14.8) にぶい橙 87C3 小片 柱穴?	YP 472 87C 25	埋納 小穴	土師器大皿 a:10.7~11.9 c: 8.5 h: 2.2 P 5 J群 逆位 (上面) 完 浅黄色
YP 440 87C 2	小穴	越中瀬戸鉄軸皿 a:11.0 1/4 P85049 柱穴?	YP 473 87C 35	埋納 小穴	土師器大皿 a:10.8~11.5 c: 8.8 h: 2.2 P 25 E群 逆位 (P7の下) 完 浅黄色
YP 441 87C 1	小穴	唐津漆縁皿 a:13.4 c:5.1 h:3.1 P85049 1/2 柱穴?	YP 474 87C 37	埋納 小穴	土師器大皿 a:11.0~11.4 c: 8.8 h: 2.2 P 26の下 逆位 F群 完 浅黄色
YP 442	小穴	須恵器瓶 b:17.0 91D391 1/3 P89030	YP 475 87C 24	埋納 小穴	土師器大皿 a:11.0~11.4 c: 8.0 h: 2.1 P 4 C群 逆位 (上面) 完 浅黄色
YP 443 91D 55	小穴	須恵器 有台杯 a:12.8 c:7.2 h: 3.6 1/2 P86074	YP 476 87C 30	埋納 小穴	土師器大皿 a:12.0 c: 8.7 h: 2.7 P 6 B群 逆位 完 浅黄橙
YP 444	小穴	須恵器蓋 a:14.8 91D403 小片 P89130	YP 477 87C 27	埋納 小穴	土師器大皿 a:10.6 c: 7.5 h: 2.0 P 11の下 逆位 D群 完 浅黄色
YP 445 91D407	1 小 穴群	土師皿 a:8.8 h:1.7 P89121 灰白色 1/3	YP 478 87C 23	埋納 小穴	土師器大皿 a:12.2 c: 8.7 h: 3.8 P 3 A群 逆位 (P2の下) 完 浅黄色
YP 446	小穴	土師皿 a:7.6 h:1.8 D404 浅黄橙 1/2 89125	YP 479 87C 34	埋納 小穴	土師器大皿 a:10.4~11.0 c: 8.1 h: 2.2 P 24 A群 正位 (P13の下の上) 完 浅黄色

第3章 谷内ブンガヤチ遺跡

番号 整理No	出土 地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)	番号 整理No	出土 地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)
YP 480 87C 21	埋納 小穴	土師器大皿 a:10.6~11.2 c: 8.7 h: 2.3 P 1 A群 逆位(上面) 完 浅黄色	YP 506 87C 49	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.2~ 9.2 c: 7.0 h: 1.7 P 18 C群 正位(P17の下) 完 浅黄色
YP 481 87C 32	埋納 小穴	土師器大皿 a:12.2 c: 9.5 h: 2.5 P 19 G群 逆位(P26の下) 完 浅黄色	YP 507 87C 50	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.5 c: 6.1 h: 1.8 P 19の下 逆位 G群 完 浅黄色
YP 482 87C 29	埋納 小穴	土師器大皿 a:11.1~12.0 c: 8.5 h: 2.2 P 7 E群 逆位(上面) 完 淡黄色	YP 508 87C 52	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.0~ 8.4 c: 6.2 h: 1.6 P 20 H群 逆位(P19の下) 完 浅黄色
YP 483 87C 26	埋納 小穴	土師器大皿 a:11.4~12.0 c: 9.4 h: 2.2 P 12 B群 逆位(P6の下) 完 浅黄色	YP 509 87C 53	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.4~ 9.1 c: 6.4 h: 1.6 P 21 H群 逆位(P20の下) 完 浅黄色
YP 484 87C 22	埋納 小穴	土師器大皿 a:12.1~12.4 c: 9.0 h: 2.2 P 2 A群 逆位(P1の下) 完 浅黄色	YP 510	3井	瓦質火桶 91D016 小片 埋土
YP 485 87C 36	埋納 小穴	土師器大皿 a:10.6~11.3 c: 9.0 h: 2.5 P 26 F群 逆位(P12の下) 完 浅黄色	YP 511	3井	越前插鉢 91D017 小片 埋土
YP 486 87C 41	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.3~ 8.7 c: 6.3 h: 1.8 P 12の下 正位 B群 完 浅黄色	YP 512	3井	天目碗 c: 4.3 91D014 小片 埋土
YP 487 87C 45	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.3~ 8.7 c: 6.6 h: 1.8 P 15 横位(P4の西) 完 浅黄色	YP 513	3井	越前甕 91D018 小片 埋土
YP 488 87C 46	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.2 c: 6.0 h: 1.7 P 16 横位(P20の西) 完 浅黄色	YP 514	3井	珠洲插鉢 c:15.4 91D015 1/4 埋土
YP 489 87C 61	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.4~ 8.9 c: 6.6 h: 1.6 P 30 正位(P17の下) 完 浅黄色	YP 515	4井	珠洲甕 91D020 小片 埋土
YP 490 87C 38	埋納 小穴	土師器小皿 a: 7.9~ 8.5 c: 6.5 h: 1.7 P 8 J群 正位(P5の下) 完 浅黄色	YP 516	4井	珠洲插鉢 91D021 小片 埋土
YP 491 87C 39	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.0~ 8.5 c: 6.4 h: 1.7 P 9 J群 正位(P28の下) 完 浅黄色	YP 517	4井	白磁碗 c: 6.0 91D023 1/2 周辺
YP 492 87C 56	1号 埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.2~ 8.6 c: 6.6 h: 1.8 P 26の下の下の下の下 F群 正位 完 浅黄色	YP 518	6井	越前甕 a:40.0 91D145 1/4 埋土
YP 493 87C 44	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.8 c: 7.0 h: 1.7 P 14 A群 逆位(P3の下) ほぼ完 浅黄色	YP 519 91D167	8号 井戸	無釉滑緑皿 a:11.3 c:3.8 h:2.7 上部 1/3、下部完
YP 494 87C 47	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.1~ 8.5 c: 6.3 h: 1.7 P 16の下 正位 完 浅黄色	YP 520	8井	越前插鉢 c:14.4 91D332 小片 埋土
YP 495 87C 55	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.7~ 9.3 c: 7.1 h: 1.8 P 26の下の下 F群 逆位 完 浅黄色	YP 521	8井	唐津皿 c: 5.1 91D165 ほぼ完 埋土
YP 496 87C 60	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.5~ 8.8 c: 6.2 h: 1.9 P 28 J群 正位(P5・12の下) 完 浅黄色	YP 522	8井	染付皿 c: 6.0 91D166 1/3 埋土
YP 497 87C 59	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.0~ 8.5 c: 5.6 h: 1.7 P 27 E群 正位(P25の下) 完 浅黄色	YP 523 91D379	9号 井戸	青磁皿 c: 5.0 断面漆継(1/2) 外底面黒色漆(-) 完 掘方
YP 498 87C 58	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.4 c: 6.5 h: 1.6 P 29 J群 正位(P5の下) 完 浅黄色	YP 524	9井	青磁碗 a: 13.1 91D261 小片 埋土
YP 499 87C 43	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.4 c: 6.4 h: 1.8 P 13の下 逆位 I群 完 浅黄色	YP 525	9井	越前甕 91D262 小片 埋土
YP 500 87C 48	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.6~9.2 c: 7.2 h: 1.7 P 17 C群 逆位(P4の下) 完 浅黄色	YP 526	9井	珠洲甕 c:(11.5) 91D263 1/4 埋土
YP 501 87C 51	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.8 G群 c: 6.7 h: 1.8 P 16の下の下・P19の下 正位 完 浅黄色	YP 527	9井	珠洲插鉢 91D265 小片 埋土
YP 502 87C 54	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.2~9.0 c: 5.9 h: 1.8 P 22 H群 逆位(P21の下) 完 浅黄色	YP 528	9井	珠洲插鉢 91D264 小片 埋土
YP 503 87C 40	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.2~8.8 c: 7.5 h: 1.8 P 10 D群 正位(P11の下) 完 浅黄色	YP 529 91D260	9号 井戸	青磁皿 a:12.0 c:5.8 h:2.9 上面 外底墨痕? 上部 1/3、下部完
YP 504 87C 57	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.2~9.0 c: 7.0 h: 1.8 P 26の下の下の下 F群 逆位 完 浅黄色	YP 530	10井	珠洲插鉢 91D276 小片 埋土
YP 505 87C 42	埋納 小穴	土師器小皿 a: 8.0~8.4 c: 6.5 h: 1.9 P 13の下の下 I群 逆位 完 浅黄色	YP 531	10井	青磁皿 91D266 小片 埋土
			YP 532	10井	越前插鉢 91D270 小片 埋土
			YP 533	10井	越前插鉢 a:36.0 91D272 小片 埋土
			YP 534	10井	越前插鉢 91D271 小片 埋土
			YP 535	10井	越前插鉢 a:37.0 91D273 小片 埋土
			YP 536 91D268	10号 井戸	土師器皿 a: 8.4 h:1.7 1/3 埋土 内外面炭化物? 付着 灰白色
			YP 537 91D269	10号 井戸	土師器皿 a: 9.4 1/4 埋土 内外面油痕 灰白色
			YP 538	10井	珠洲插鉢 c:12.4 91D274 小片 埋土
			YP 539	10井	瀬戸瓶子 a: 5.4 91D267 1/4 埋土
			YP 540	10井	珠洲插鉢 c:12.3 91D275 1/2 埋土

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

番号整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)	番号整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)
YP 541 91D254	11号井戸	唐津皿 a:11.8 c:5.4 h:3.6 埋土 外底墨書(-) 上部 1/4、下部完	YP 574 91D380	17号井戸	焼締陶器皿(ロクロ成形)赤褐 小片 掘方 a:(10.8) c:(3.9) h:2.2 内外面油痕
YP 542	11井	唐津皿 a:11.0 91D250 小片 埋土	YP 575	19井	須恵器長頸瓶 91D607 小片 埋土
YP 543	11井	白磁皿 a: 9.0 c: 4.9 91D257 小片 埋土	YP 576	19井	瀬戸灰釉皿 a:11.2 91D376 小片 埋土
YP 544	11井	鉄釉皿 a:10.4 91D249 1/4 埋土	YP 577 91D387	21号井戸	土師皿 a: 7.2 c:5.1 h:1.5 完 浅黄橙色 北側埋土
YP 545 91D255	11号井戸	越中瀬戸鉄釉皿 a:11.2 埋土 内外面煤付着 1/4	YP 578 91D373	21号井戸	土師皿 a:11.0 c:7.5 h:1.9 1/4 浅黄橙色 北側埋土
YP 546 91D247	11号井戸	越中瀬戸皿 a:10.9 c:4.4 h:2.9 埋土 釉は白濁 内外面煤付着 完	YP 579 91D377	21号井戸	須恵器無台杯 a:13.8 c:10.0 h:3.3 外面煤?付着 小片 埋土
YP 547 91D248	11号井戸	唐津皿 a:12.8 c:4.3 h:3.2 埋土 口縁端部内外面煤?付着 上部 1/2、下部完	YP 580 91D374	21号井戸	土師皿 a: 8.2 c:5.0 h:1.2 1/2 P89249を含む可能性あり 浅黄橙色 埋土
YP 548	11井	唐津皿 c: 4.4 91D251 ほぼ完 埋土	YP 581 91D388	21・22井	土師皿 a: 8.4 c:5.0 h:2.1 1/2 浅黄橙色 埋土
YP 549 91D592	11号井戸	唐津溝縁皿 a:12.4 c:4.7 h:3.2 埋土 外底墨書○? 上部 1/4、下部 2/3	YP 582	22井	珠洲壺 91D389 小片 埋土
YP 550	11井	染付皿 a:12.5 c:4.5 h:3.2 91D253 1/3 埋土	YP 583	24井	唐津皿 c: 4.4 91D385 2/3 埋土
YP 551 91D252	11号井戸	染付皿 a:13.3 c:7.3 h:2.9 埋土 釉は白濁 上部 1/2、下部完	YP 584 91D384	24号井戸	瀬戸香炉 a: 9.5 c:6.8 h:6.6 1/3 埋土 釉は二次加熱により黒色
YP 552	11井	染付碗 c:4.5 91D256 1/4 埋土	YP 585	24井	越中瀬戸皿 a:(14) 91D390 小片 埋土
YP 553	11井	土師皿 a:14.0 灰白色 91D244 小片 埋土	YP 586	25井	染付鉢 c: 6.0 91D383 2/3 埋土
YP 554 91D245	11号井戸	土師皿 a: 9.0 h:1.8 におい黄橙色 埋土 内外面油痕(?) 1/4	YP 587	26井	珠洲插鉢 91D381 小片 埋土
YP 555	11井	越前甕 c:36.3 91D259 1/4 埋土	YP 588	27井	土師皿 a:7.8 h:1.7 D386 浅黄橙 完 埋土
YP 556	11井	越前插鉢 c:13.8 91D258 1/4 埋土	YP 589 91D286	29号井戸	土師皿 a:12.6 c:9.4 h:1.5 小片 淡黄色 埋土
YP 557	12井	越中瀬戸皿 a:11.8 91D288 小片 埋土	YP 590	30井	越前甕 91D290 小片 埋土
YP 558	12井	染付碗 a: 9.2 91D289 1/4 埋土	YP 591	30井	須恵器有台杯 c:8.0 91D285 2/3 埋土
YP 559	13井	瀬戸灰釉皿 c: 4.4 91D291 1/4 周辺	YP 592 91D280	31号井戸	土師皿 a:10.6 c:6.2 h:1.3 1/4 埋土 内外面油痕 浅黄橙色
YP 560 91D292	14号井戸	土師皿 a: 8.4 h:1.4 浅黄橙色 埋土 内外面油痕 ほぼ完	YP 593 91D282	31号井戸	土師皿 a: 8.3 c:7.0 h:1.3 1/4 埋土 橙色
YP 561	14井	土師皿 a: 8.5 h:1.7 浅黄橙 D293 完 埋土	YP 594	31井	土師皿 a:7.6 h:1.1 D283 浅黄橙 1/3 埋土
YP 562 91D294	14号井戸	土師皿 a: 8.6 h:1.6 浅黄橙色 埋土 外面油痕 完	YP 595	31井	染付皿(半磁胎) c:4.3 91D279 1/2 埋土
YP 563	14井	白磁皿 a: 9.0 91D296 小片 埋土	YP 596 91D281	31号井戸	越中瀬戸皿 c:4.4 ほぼ完 埋土 内外面煤?付着
YP 564	14井	珠洲壺 c:11.0 91D295 1/4 埋土	YP 597 91D367	35号井戸	唐津(?)碗 a:12.2 c:4.7 h:4.9 埋土 釉は褐色 1/2
YP 565 91D297	15号井戸	土師皿 a: 8.0 h:1.2 浅黄橙色 埋土 東側の落ち込み出土 1/3	YP 598	35井	染付皿 a:13.5 c:5.5 h:2.7 D369 1/2 埋土
YP 566 91D579	20号井戸	珠洲壺 a:13.4 b:28.9 c:11.3 h:31.6 埋土 外面肩部へラ記号(大) 上部1/2、下部ほぼ完	YP 599	35井	染付碗 a:10.6 91D368 小片 埋土
YP 567 91D580	20号井戸	珠洲壺 a:45.5 b:46.4 埋土 上部 1/4、下部 3/4	YP 600 91D366	35号井戸	肥前插鉢 a:36.4 c:15.6 h:14.4 埋土 全面施釉 断面漆継? 上部小片、下部 1/2
YP 568	20井	須恵器横瓶 a:11.4 91D375 1/4 埋土	YP 601 91D361	34号土坑	土師皿 a: 8.2 h: 1.6 灰白色 第1号小穴群 上面(B群)出土 1/3
YP 569	16井	染付皿 91D299 小片 埋土	YP 602 91D357	34土1小	土師皿 a: 8.7 h: 1.9 褐灰色 内外面油痕? 上面(A群)出土 完
YP 570	16井	染付碗 c: 5.6 91D596 1/4 埋土	YP 603 91D356	34土1小	土師皿 a: 9.6 h: 1.8 灰白色 内外面油痕 上面(A群)出土 完
YP 571	16井	唐津皿 c: 3.9 91D597 1/2 埋土	YP 604 91D358	34号土坑	土師皿 a: 8.6 h: 2.0 灰白色 第1号小穴群 上面(A群)出土 1/3
YP 572	16井	土師皿 a:(18) 91D298 浅黄橙 小片 埋土			
YP 573 91D378	17号井戸	土師皿 a: 8.4 h:1.5 浅黄橙色 埋土 ほぼ完			

第3章 谷内ブンガヤチ遺跡

番号 整理No	出土 地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)	番号 整理No	出土 地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)
YP 605 91D355	P89 174	土師皿 a: 8.6 h: 2.0 灰白色 完 E群P1 (第34号土坑下の小穴)	YP 638	90溝	明染付皿 91D129 小片
YP 606 91D359	34号 土坑	土師皿 a:10.0 h: 1.9 灰白色 小片 第1号小穴群 南側上部	YP 639	25溝	越前甕 肩部外面押印「格子」 91D 29 小片
YP 607 91D360	34号 土坑	土師皿 a:10.2 h: 1.8 灰白色 小片 第1号小穴群 南側上部	YP 640 91D163	第29 号溝	土師皿 a:13.0 c:(7.1) h:(2.3) 1/3 内外面油痕? 浅黄橙色
YP 608 91D609	34号 土坑	越前甕 a:77.8 b:97.4 c:34.7 h:90.1 上部・北側下部・P89121・P89123・A~D群 肩部外面押印「格子・本・格子・」 第1号小穴群 口縁部 1/3、底部完	YP 641 91D139	第29 号溝	土師皿 a:19.0 c:(13.0) h:(1.9) 小片 内外面油痕 灰白色
YP 609	34土	越前甕 南側上部 1小穴群 91D363 小片	YP 642	19溝	越前甕 肩外押印「本・格子」 91D148 小片
YP 610	34土	越前甕 上面 (A群) 1小穴群 91D362 小片	YP 643	19溝	染付皿 91D 24 小片
YP 611	23土	須惠器有台杯 a:14.0 c:9.2 h:3.5 D23 1/4	YP 644	19溝	越前播鉢 91D 27 小片
YP 612	33土	土師皿 a: 9.0 h: 1.9 D364 灰白 1小群 2/3	YP 645	19溝	土師皿 a: 7.6 h:1.3 灰白色 91D427 1/2
YP 613	33土	土師皿 a:11.2 h: 1.6 D365 灰白 1小群 1/3	YP 646	19溝	土師皿 a: 8.3 h:1.7 浅黄橙 91D420 完
YP 614	35土	越前播鉢 91D365 小片	YP 647 91D419	第19 号溝	土師皿 a: 8.9 h:1.6 におい浅黄橙色 3/4 内面油痕?
YP 615 91D446	35号 土坑	越前甕 a:62.8 b:92.0 c:38.4 h:(90) 肩部外面押印「本 (不明瞭)・格子・」 へら記号「十」 口縁部 1/3、底部 1/4 西側包含層および小穴P89056からも出土	YP 648 91D 28	第19 号溝	土師皿 a:13.0 c:6.8 h:2.2 浅黄橙色 小片
YP 616	1室	土師皿 a:7.6 h:1.9 91D22 浅黄橙 1/3	YP 649 91D444	第60 号溝	越前甕 a:54.8 口縁部 1/4 肩部外面押印 「本・格子 (方形と8角形を交互に配置)」
YP 617	1室	越前播鉢 91D19 小片	YP 650	60溝	須惠器瓶 c:9.0 91D441 1/3
YP 618	1室	越前壺 c:41 外面へら記号「大」91D581 1/3	YP 651	60溝	明染付皿 a:13.4 c:7.6 h:2.9 91D443 小片
YP 619 91D 25	1室 基盤	土師皿 a: 8.6 h:1.7 浅黄橙色 完 内外面油痕 第1号室基盤層最下部	YP 652	60溝	珠洲壺 91D439 1/4
YP 620	2室	土師皿 a:11.7 c:8.2 h:2 灰白D135上面 1/4	YP 653	60溝	青磁碗 a:13.0 91D442 小片
YP 621	2室	土師皿 a: 7.9 灰白D125上面 1/3	YP 654 91D445	第60 号溝	越前甕 a:(81.2) b:(96.4) c:(32.4) h:(90) 肩外押印「本・格子・」 口縁・底部小片
YP 622	1墓	珠洲壺 P8地点 87C16 小片	YP 655	60溝	土師皿 a: 8.7 h:2.0 灰白色 91D431 3/4
YP 623	1墓	珠洲壺 P4地点 87C15 小片	YP 656	60溝	土師皿 a: 8.4 h:1.2 灰白色 91D428 1/2
YP 624	1墓	珠洲播鉢 P6地点 87C18 小片	YP 657	60溝	土師皿 a: 8.2 h:1.9 灰白色 91D434 1/2
YP 625	1墓	珠洲播鉢 南東側溝埋土 87C19 小片	YP 658	60溝	土師皿 a: 8.0 h:1.7 灰白色 91D429 1/2
YP 626 87C 11	1号 堀立	土師器甕 a:14.4 浅黄橙色 1/4 内面炭化物付着 1墓重複西側柱北隅柱穴	YP 659	60溝	土師皿 a: 9.2 h:1.6 灰白色 91D438 1/2
YP 627	1墓	須惠器杯 南埋 a:10.2 C:6.7 h:3.3 14 2/3	YP 660	60溝	土師皿 a:11.0 h:1.8 灰白色 91D498 1/3
YP 628	1墓	製塩土器 南東側溝埋土 橙 87C13 1/4	YP 661 91D433	第60 号溝	土師皿 a:11.0 h:2.2 灰白色 内面油痕 2/3
YP 629	1墓	瀬戸灰軸碗 a:(15.8) P3地点 87C20 小片	YP 662	60溝	土師皿 a:10.4 h:2.2 c:7.6 灰白 91432 1/3
YP 630	1墓	珠洲壺 小穴P4上部 c:(15.0) 87C17 小片	YP 663	60溝	土師皿 a:11.2 h:1.8 灰白色 91D486 1/2
YP 631	5溝	須惠器杯蓋 c:(14.9) 87C10 小片	YP 664	60溝	土師皿 a:11.1 h:2.1 灰白色 91D436 完
YP 632	5溝	須惠器杯 a: 9.4 C:6.3 h:3.8 87C9 1/2	YP 665	60溝	土師皿 a:12.0 h:1.8 灰白色 91D437 小片
YP 633	58溝	播鉢 a:31.4 91D426 小片	YP 666	60溝	土師皿 a:13.8 h:2.3 淡黄色 91D430 1/3
YP 634	第20 号溝	土師皿 a:8.1 h:1.8 91D 30 南東部 灰白色 完	YP 667	第60	土師皿 a:14.0 h:2.0 c:7.0 灰白 91435 1/4
YP 635	第20 号溝	土師皿 a:7.4 c:7.0 h:1.8 91D418 北西部 内外面油痕 浅黄橙色 完	YP 668 92D 2	第50 号溝	李朝陶器皿 a:11.6 軸:オリーブ灰色 胎土:灰褐色 小片 (底部同一個体片あり)
YP 636	72溝	染付碗 a:8.0 (59号溝混入) 91D447 小片	YP 669 91D180	50溝 南西	越中瀬戸鉄軸向付 a: 9.8 c:5.2 h:3.1 2/3 胎土:灰白色
YP 637	72溝	唐津碗 c:4.8 (59号溝混入) 91D448 1/3	YP 670	50溝 南西	越中瀬戸鉄軸向付 a:10.2 c:5.6 h:3.1 2/3 胎土:灰白色
			YP 671 91D182	50溝 南西	越中瀬戸鉄軸向付 a:10.5 c:5.6 h:3.2 1/4 胎土:灰白色

第3節 奈良時代～江戸時代の遺構とその遺物

番号整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)	番号整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)
YP 672 91D246	第50号溝	越中瀬戸鉄釉向付 a:10.8 c:5.6 h:3.2 2/3 胎土:灰白色 第11号井戸出土土器と接合	YP 704 91D209	第50号溝	唐津皿 a:12.7 c:4.7 h:3.3 釉:青緑色 上部 1/4、下部完
YP 673 91D235	第50号溝	越中瀬戸鉄釉向付 a:11.7 c:6.3 h:3.2 小片 胎土:灰白色	YP 705	50溝	明染付碗 91D225 YP706と同一? 小片
YP 674 91D185	50溝 南西	越中瀬戸灰釉陰花皿 a:10 c:5.4 h:2.3 1/3 胎土:灰白色	YP 706	50SW	明染付碗 c:5.4 YP705と同一? 91D188 1/4
YP 675 91D351	第50号溝	越中瀬戸灰釉陰花皿 a:9.5 c:4.4 h:2 小片 胎土:灰白色	YP 707	50溝	肥前染付皿 a:13.8 c:7.4 h:2.8 91D203 3/4
YP 676 91D179	50溝 南西	越中瀬戸鉄釉皿 a:11.9 c:4.4 h:3.0 ほぼ完 胎土:にぶい黄橙色	YP 708	50SW	肥前染付皿 a:13.4 c:7.7 h:2.9 91D195 1/3
YP 677 91D233	第50号溝	越中瀬戸鉄釉?皿 a:11.0 c:5.2 h:2.2 1/4 胎土:にぶい橙色	YP 709	50溝	肥前染付皿 a:13.5 c:5.4 h:3.7 91D176下完
YP 678 91D218	第50号溝	越中瀬戸鉄釉皿 a:11.3 c:4.5 h:3 胎土:灰白色 上部1/3、下部完	YP 710 91D174	第50号溝	染付皿(半磁胎) a:12.8 c:4.4 h:3.6 内外面油痕 ほぼ完
YP 679	50溝	越中瀬戸鉄釉皿 a:12 浅黄橙 91D595 小片	YP 711	50溝	染付皿(半磁胎) a:13.2 91D183 1/3
YP 680 91D223	第50号溝	越中瀬戸鉄釉?皿 c:4.6 (釉は白濁) 2/3 胎土:にぶい橙色	YP 712 91D173	第50号溝	染付皿(半磁胎) a:13.2 c:4.4 h:3.2 上部小片、下部完
YP 681	50溝	越中瀬戸鉄釉皿 c:4.6 淡黄 91D215 ほぼ完	YP 713	50溝	染付皿(半磁胎) c:4.5 91D172 ほぼ完
YP 682 91D221	第50号溝	越中瀬戸灰釉陰花皿 c:5.6 1/4 胎土:にぶい橙色	YP 714	50溝	肥前磁器染付皿 c:3.9 91D224 ほぼ完
YP 683	50SW	瀬戸鉄釉皿 c:4.9 にぶい褐 91D593 ほぼ完	YP 715	50溝	肥前青磁皿 a:13.1 c:4.1 h:3.1 91D194 1/2
YP 684	50溝	越中瀬戸鉄釉皿 c:4.6 浅黄橙 91D230 1/2	YP 716	50溝	肥前染付青磁中皿 91D232 小片
YP 685	50溝	唐津皿 a:11.4 c:4.1 h:3.5 91D210 1/3	YP 717	50溝	肥前磁器染付碗 91D201 小片
YP 686	50SW	唐津皿 a:10.6 91D236 小片	YP 718	50溝	肥前磁器染付碗 91D202 1/4
YP 687	50SW	唐津皿 a:12.3 c:4.9 h:2.9 91D178 ほぼ完	YP 719	50溝	肥前磁器染付碗 91D212 1/3
YP 688	50SW	鉄絵唐津皿 a:10.6 c:4.4 h:3.8 91D189 完	YP 720	50溝	肥前磁器染付碗 91D212 上部小片、下部 1/3
YP 689	50溝	唐津皿 a:11.2 c:5.1 h:3.1 91D226 1/3	YP 721	50溝	唐津鉄釉碗 a:9.9 c:4.7 h:7.6 91D175 1/3
YP 690	50溝	唐津皿 a:10.0 c:3.3 h:3.3 91D211 3/4	YP 722	50溝	瀬戸鉄釉天目碗 a:11.2 91D207 小片
YP 691	50溝	唐津皿 a:10.8 c:4.3 h:3.1 91D186 1/3	YP 723	50溝	唐津系碗 a:11.0 91D213 釉:淡黄色 小片
YP 692	50SW	唐津皿 c:5.0 91D214 1/2	YP 724	50溝	瀬戸灰釉皿 a:10.2 c:5.8 h:2.5 91D234 1/4
YP 693 91D184	第50号溝	唐津皿 a:11.0 c:4.1 h:3.8 釉は白濁 外底墨書(十) ほぼ完	YP 725	50溝	土師皿 a:7.6 c:3 h:1.7 91D227 黄橙 1/4
YP 694 91D196	第50号溝	唐津皿 a:11.3 c:3.9 h:4.2 外底墨書(十) ほぼ完	YP 726 91D190	50溝 南西	土師器皿 a:10.2 c:(4.5) h:(2.2) 内外面煤付着 褐灰色 小片
YP 695	50溝	唐津皿 a:12.8 91D231 1/4	YP 727 91D193	第50号溝	土師器皿 a:15.9 c:9.4 h:2.3 内面油痕 黄褐色 1/4
YP 696 91D187	50溝 南西	唐津皿 a:12.4 c:4.7 h:3.4 外底墨書(十) 1/2	YP 728 91D217	第50号溝	三島手唐津鉢 a:33.8 白土/透明釉 断面漆継 1/3
YP 697 91D192	第50号溝	唐津皿 a:10.7 c:3.1 h:3.2 外底墨書(二) ほぼ完	YP 729	50溝	刷毛目唐津鉢 a:(31) D198 白/透明 小片
YP 698 91D177	第50号溝	唐津皿 a:12.8 c:4.4 h:5.1 上部 1/4、下部完	YP 730 91D206	第50号溝	二彩手唐津鉢 a:38.6 1/3 白土/内:オリーブ褐・外:透明釉
YP 699 91D219	第50号溝	唐津皿 a:13.5 c:4.6 h:4.6 上部小片、下部完	YP 731	50溝	越前甕(鉄塗り) 91D200 小片
YP 700	50溝	唐津皿 a:14.6 c:5.6 h:4.3 91D191 1/3	YP 732	50溝	越中瀬戸挿鉢 a:30.2 91D208 小片
YP 701	50SW	瀬戸灰釉碗 c:5.6 91D228 1/4	YP 733	50溝	越中瀬戸挿鉢 a:(29) 91D594 小片
YP 702	50溝	唐津皿 c:4.5 釉:にぶい黄褐 91D179 1/4	YP 734	50SW	越中瀬戸挿鉢 a:21.3 91D237 小片
YP 703	50溝	唐津皿 c:4.6 釉:青緑 91D216 ほぼ完	YP 735	50溝	挿鉢(赤灰) 91D222 小片
			YP 736	50溝	挿鉢(赤灰) a:27.4 91D204 小片
			YP 737	50溝	唐津挿鉢 a:27.0 91D199 小片
			YP 738	50溝	越中瀬戸挿鉢 c:10.4 91D205 1/3
			YP 739	50溝	越前挿鉢 c:16.8 91D197 1/4

第4節 遺構外他出土土器類

1 概要

本節では、谷内ブンガヤチ遺跡から出土した遺構外出土土器類を中心に、小穴出土の弥生時代～古墳時代前期前葉の土器(YP740～744・784・785?)、遺構出土品ではあるが所属時期が遺構本来のそれより明らかに古いと考えられるもの(YP754・771～783・866、これにしたがえば、本章第2節で報告した第10号土坑出土壺(YP283)も本節でふれるべきであった)、本来遺構出土品であった可能性のあるもの(YP755～759)、遺構出土品ではないが一括出土した(と考えられる)もの(YP760～770)、遺構出土品に関連する可能性のあるもの(YP745～753)など、土器・陶磁器・土製品595点(YP740～1334、一部同一個体を含む)を報告する。

個々の土器類の詳細は節末の観察表にまとめたが、同表中出土地点不詳とあるもの(次節報告分も同様であるが)は、各調査区における表土(・上部流土)除去作業からグリッド設定作業までの採集品が大半で、他に各調査時における掘削土(排土)採集品・試掘溝出土品を含めた未調査区採集品が該当する。

土器類の所属時期は縄文時代から江戸時代(一部明治時代以降を含む)におよぶが、量的に稀少なものをより積極的に実測したこともあって、出土総量の構成比を正確に反映しているとはいいがたいものの、検出された遺構の配置や消長にある程度は対応しているものと考えられる。以下、縄文時代から順に概観する。

2 縄文時代～弥生時代中期後半

縄文時代に属すると考えられるものはYP787・795・797・798など極めて少なく、出土グリッド(E-7・H-10・M-6・P-8)も分散していて、細かな時期比定とともに性格は判然としない。

弥生時代中期初頭頃に属するものは、YP771・775・776・778・779・781～784・785?・786・788～793・799?・800?・801～805・808など(他に第14号掘立柱式建物柱穴からも出土：YP437)があげられる。出土グリッドは調査区の中央から西側にかけてが多く、同地点で第15・21号溝など若干遺構も検出されていることから、集落の縁辺部という可能性が考えられる。

弥生時代中期後半頃に属するものは、天王山系土器を含めYP741?・772～774・777?・780・794?・796・806・807・809～815・903?・904などがあげられる。出土グリッドは上記弥生時代中期初頭頃と同様調査区の中央から西側にかけてが多いが、やや西側に集中する傾向が窺え、遺構は検出されなかったものの厚い流土下さらに谷奥での集落展開が期待されるところである。

3 弥生時代後期後半～古墳時代前期前半

細かな時期比定の困難なものが少なくないが、YP740・742～770・816～902・905～916・921～951(他に当該時期以前に属する土錘4点(YP917～920)を得ている)など多量を占めていて、出土グリッドも調査区の中央から西側(両者の間のF-8～10区を中心とした鞍部に特に集中する)にかけてと、当該時期の遺構のそれに概ね対応している。

このうち、E-7～10区出土YP745～753は、集落内(の何処か)で一括使用された後あまり時間を置かずに廃棄されたと考えられるE-8区所在第2号土坑出土土器(YP217～264、本章第2節参照)に関連する可能性を考えた。同土坑出土の甕(YP230)に、E-9区から出土した口縁(同部位は土坑内からは出土していない)・胴部片が接合し、それらの破片とYP745～753が同様の出土状況とみられるからである。同一個体の認定、型式学的な同時代性、器種・器形構成上の整合性等検討が必要であるが、その一部でも関連があるとすれば、土坑出土土器群(+ α)の使用場所あるいは使用後の仮置場所などを考えるうえで手掛かりとなろう。

また、K-7・8区出土YP755～759は、1986年の調査上の諸々の制約もあって、第12号竪穴式建物の南東側壁際埋土の一部をそれと認識しないまま不用意に掘削した際に出土した可能性のあるもの(本章第2節参照)である。

さらに、P-5区出土YP760～770は、基盤層(地山)直上の流土掘削中比較的狭い範囲にまとまって出土した(直後の調査作業員の話)と考えられるものである。いずれも器面に鉄分を厚く吸着させており、同グリッド出土の他の土器(片)とは容易に区別し得ることから、確定はできないが土器溜まり的な出土状況が想定される。時期的には古墳時代初頭に属する第4・12号竪穴式建物・第10号土坑出土土器などより下って、同前期前葉の所産とみられ、弥生時代後期後半から継続してきた集落展開の下限を示している可能性があり、集落の消長を考えるうえで注目される。

このほか、型押しによる紋様いわゆるスタンプ紋を施した土器片が4点(YP869・870・932・936)出土(本遺跡の総てである)しており、若干ふれておきたい。YP869は細頸壺の肩部片、突帯を貼付した頸部直下に横位逆J(し)字状渦紋(長8、幅6、渦径5mm、渦は外縁では二本沈線であるが中心への巻きこみは単独：YP870・932も同様)を一段施している。YP870は有段口縁鉢の口縁部片(内外面赤彩)と考えたもので、外面に鋸歯紋(R、高さ8、底辺7mm)と横位逆J(し)字状渦紋(長さ8、幅6、渦径5mm)を3段以上施している。YP932は棒状有段脚高杯の裾端部片(YP936も同様)、二段に施された横位V字状刺突列の間に横位逆J(し)字状渦紋(長さ7、幅・渦径5mm)を1段配している。YP936は端部に横位D類スタンプ紋(長33、幅13mm)を1段施すもので、連結部の沈線は3本、不鮮明ではあるが渦の中心は巻き込み反転巻戻しと推定される。いずれも弥生時代後期後半に属するものである。

4 7世紀～13世紀

7世紀に属するものは、YP957～967・1037・1042・1050・1051など一定量を占める。遺構は検出されていないものの、空白とみられる(4世紀後半～)5・6世紀代をはさんで、以後は再び増減はあるもののほぼ継続して遺物が出土する点に意義を認めたい。なお須恵器は鳥屋窯跡産を主体とするようである。

8世紀～10世紀初頭に属するものは、YP968～1006・1008～1019・1021・1022・1030～1032・1038～1041・1043～1046・1048・1049・1053～1059など、(若干前後の時期に属するものを含むかもしれないが)多い。第1号掘立柱式建物(性格不明：8世紀)や第5号竪穴状遺構他(小鍛冶関連：9世紀末～10世紀初頭頃)にみられる人々の活動を反映するものと考えたい。製塩土器(YP1060～1062)も本時期を中心とするものであろう。なおYP1031は硬質の緑釉陶器碗で、本遺跡唯一のものである。

10世紀前半～13世紀に属するものは、YP952～956・1007・1020・1023～1030・1063～1069・1096・1135・1136・1313・1315・1317など少量で、遺構も検出されておらず性格は判然としない。なお土師器皿YP1063～1066(F-7区)は一括出土した可能性が高く(掘削直後の調査作業員の話)、Q-13区から出土したYP952～956も、同時性は強調できないがその位置づけが注目されるところである。

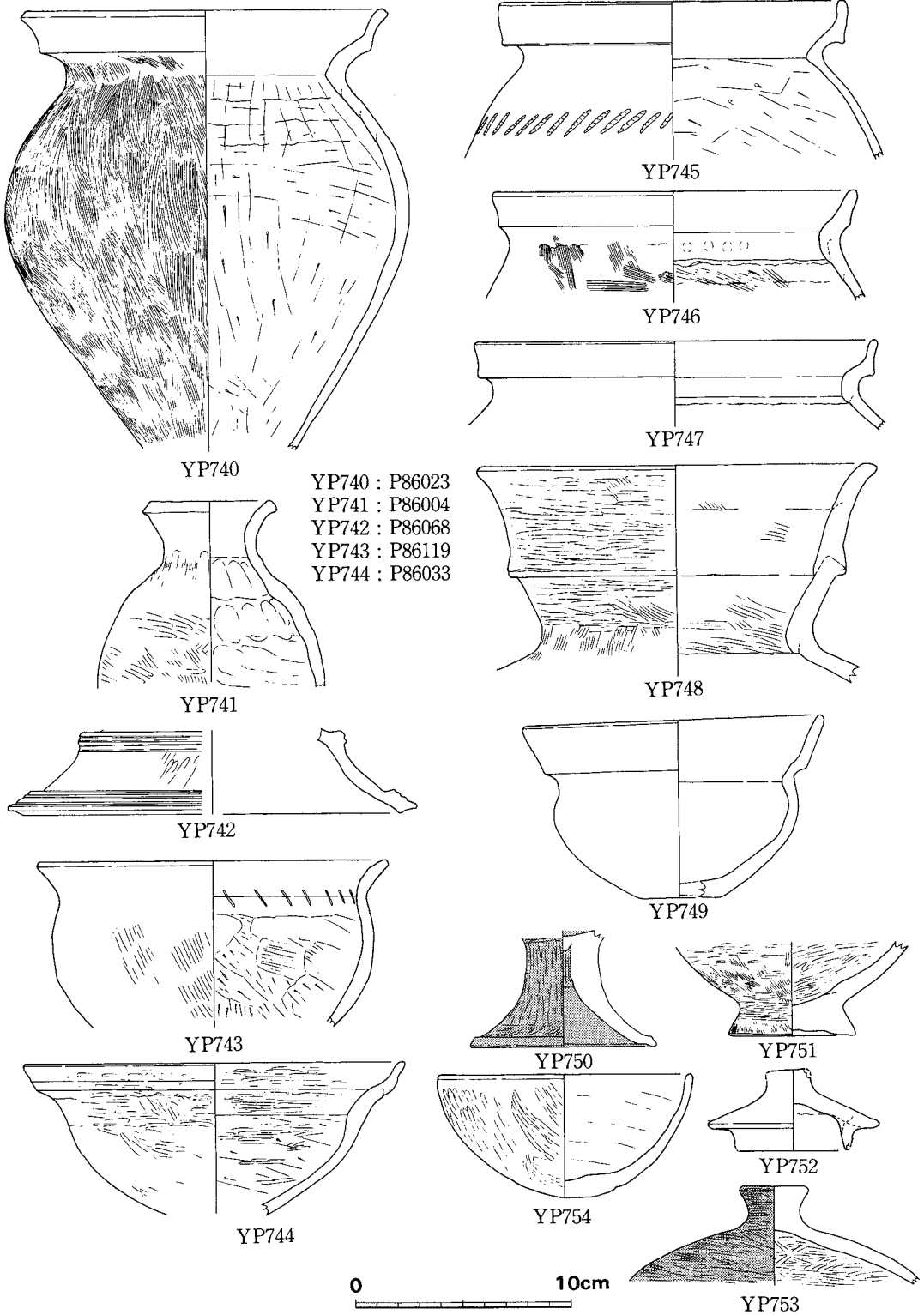
5 14世紀～18世紀前半頃

14世紀～16世紀後半に属するとみられるものはYP1070～1095・1097～1129・1137・1138・1140～1143・1146～1149・1151～1161・1166・1175～1177・1179・1198～1201・1211・1213・1219～1223・1230・1231・1233・1236・1312・1318～1328など多く、第15号掘立柱式建物(・第3号井戸・第20号溝)を最古として、調査区の西側を除くほぼ全域に展開する集落活動を反映しているものと考えられる。

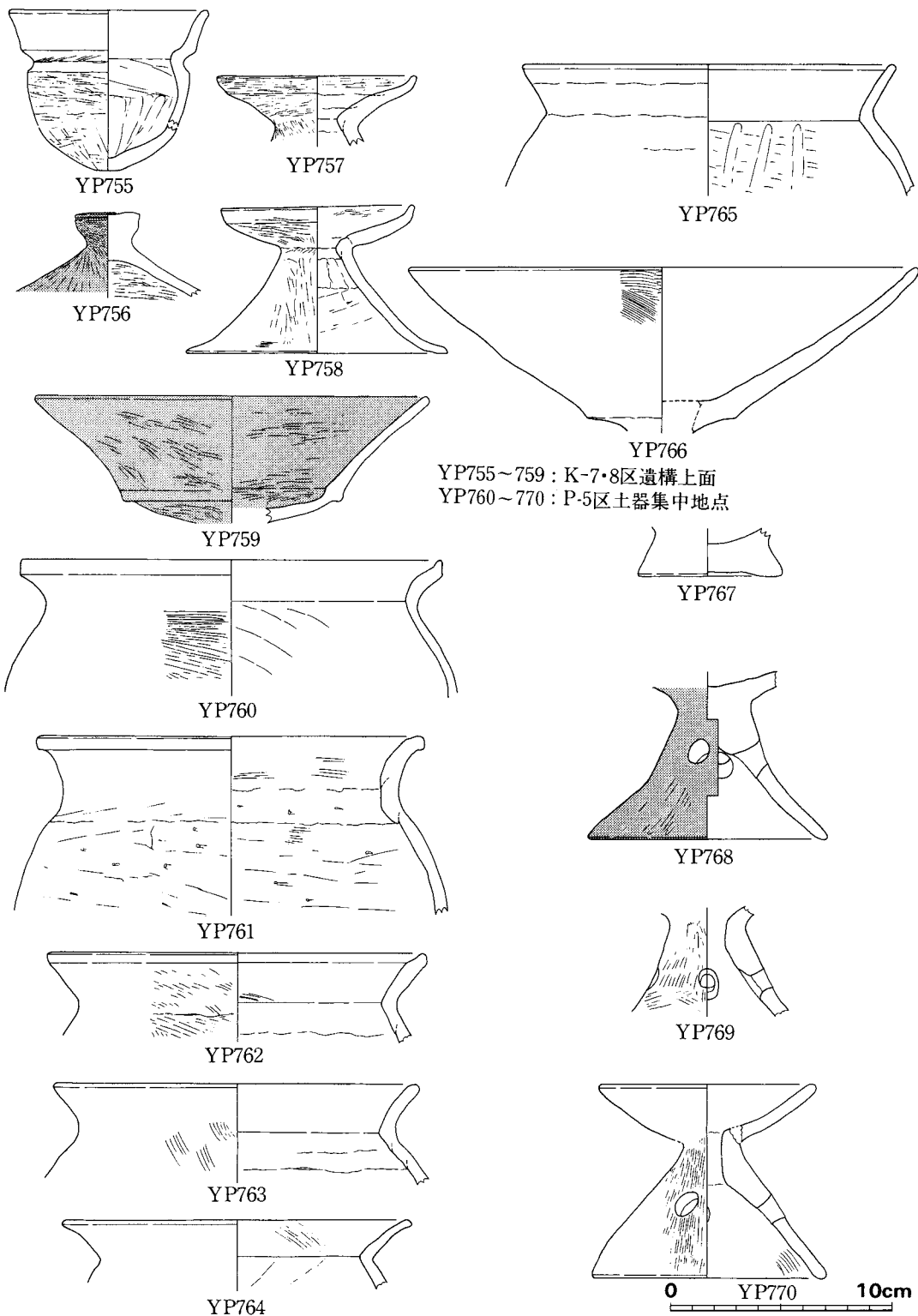
16世紀末葉～18世紀前半頃に属するとみられるものも、YP1174・1180～1182・1184・1185・1187～1195・1202～1210・1212・1214～1218・1224・1227～1229・1234・1235・1240～1263・1265～1278・1285～1292・1298～1309・1329～1331など多種多量である。その背景は前代と同様であるが、土師器皿を基本的に含まない点が対照的である。

6 18世紀後半頃～

18世紀後半頃以降に属するとみられるものはYP1239・1279・1281・1284・1293～1297・1311など少ない。出土グリッドは調査区の南側(第1次調査区)、南東側(J-5区他)および北側(Q-11～13区他)に限定され(前二者については調査中に移転した現況建物との関連性が考えられる)、調査区は概ね林地を含め生産域(後者が持ち込まれるにいたった事情は判然としないが)へと変貌するのであろう。



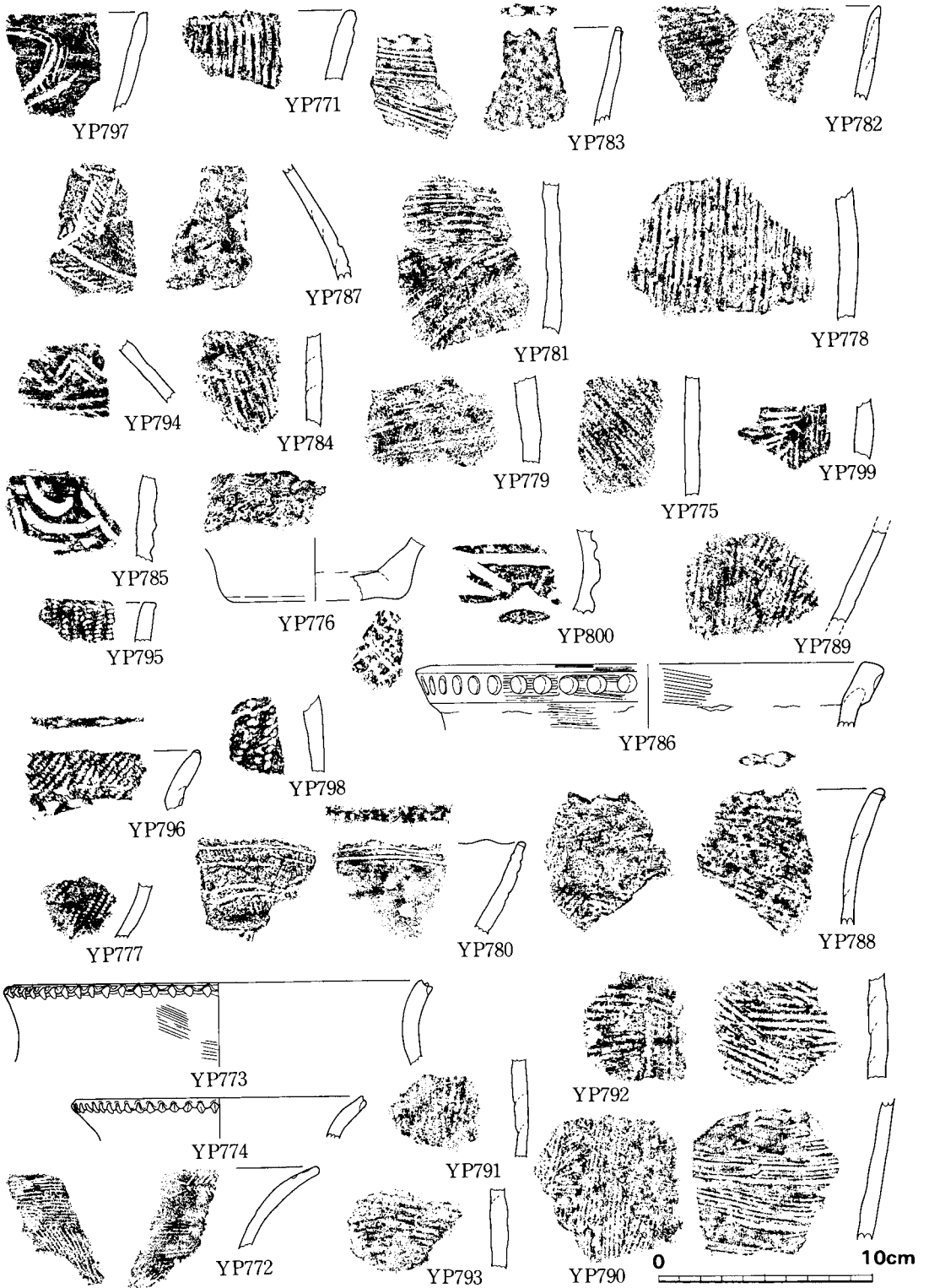
第97図 小穴・遺構外他出土土器 (S=1/3)



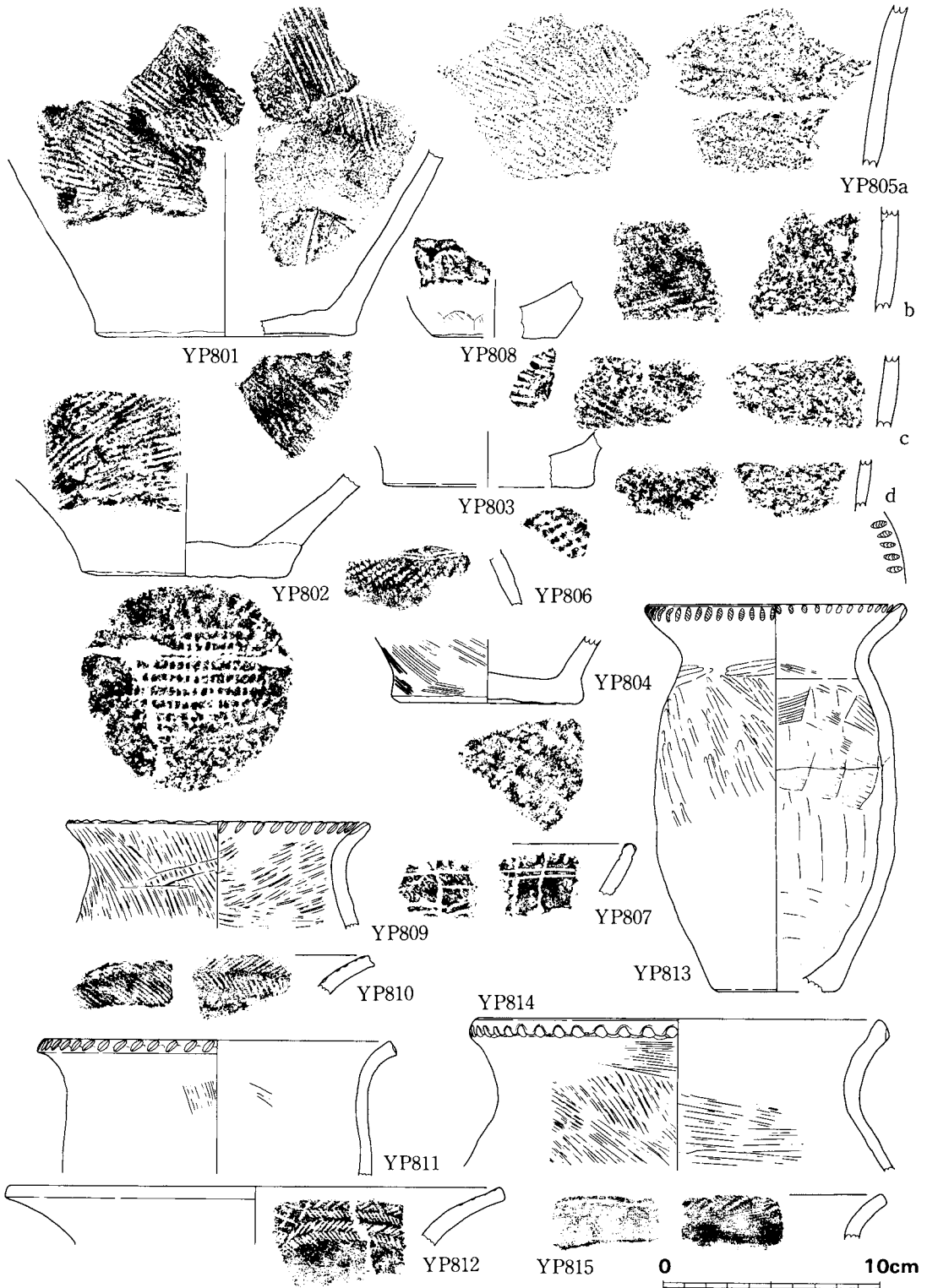
YP755~759: K-7・8区遺構上面
 YP760~770: P-5区土器集中地点

第98図 K-7・8区遺構上面・P-5区土器集中地点出土土器(S=1/3)

第4節 遺構外他出土土器類

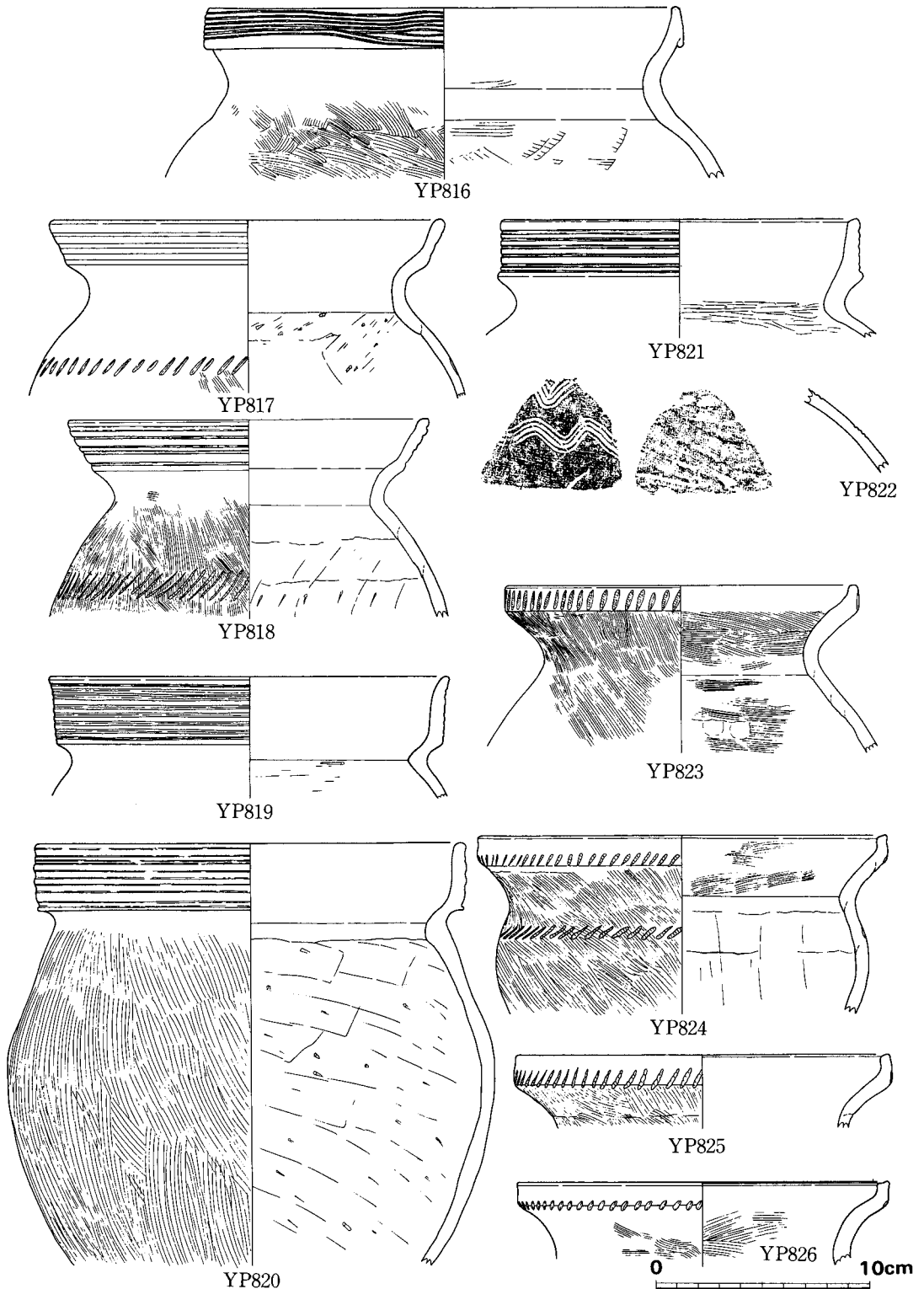


第99図 小穴・遺構外他出土土器(S=1/3)

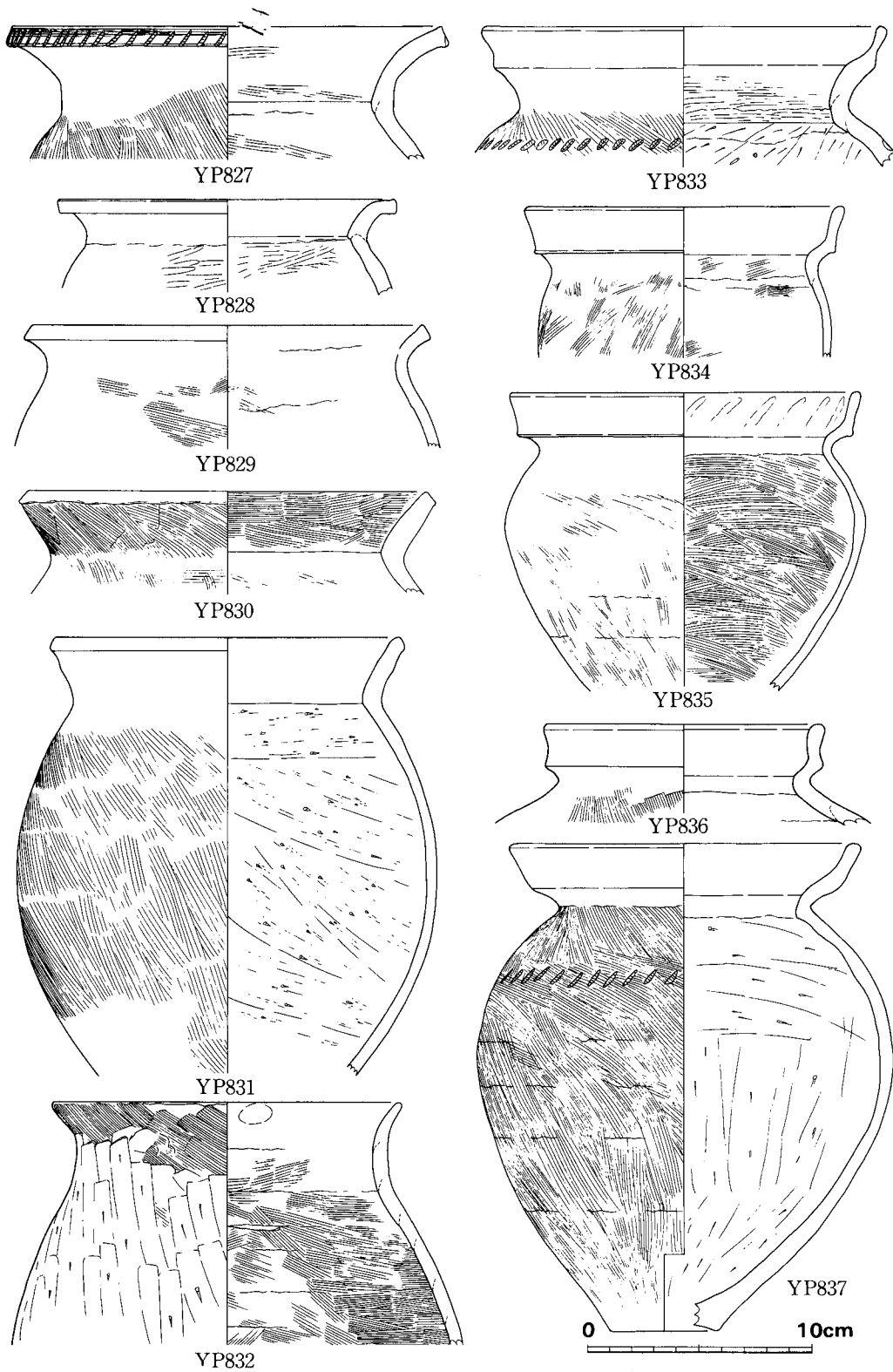


第100図 遺構外他出土土器(S=1/3)

第4節 遺構外出土土器類

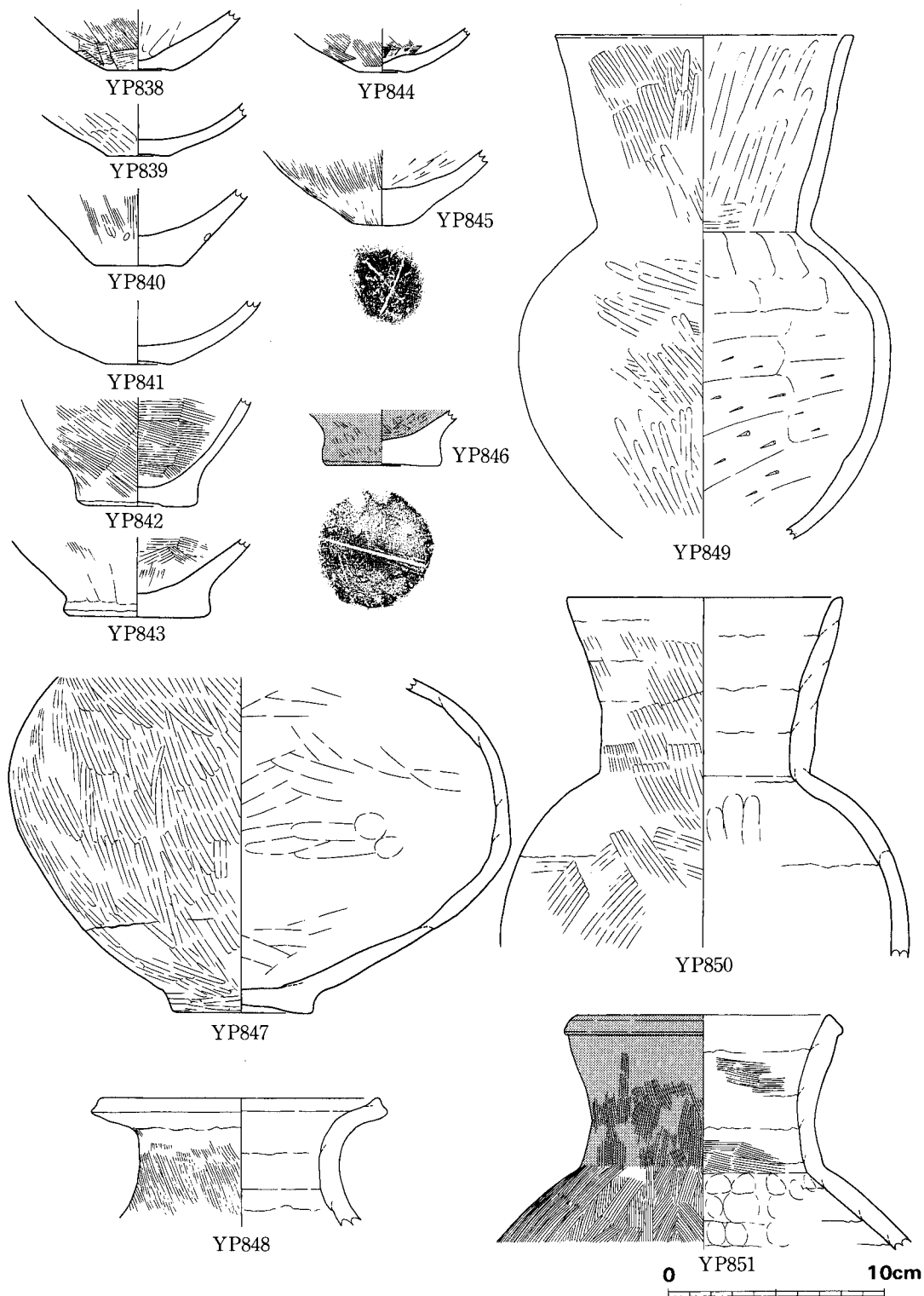


第101図 遺構外出土土器(S=1/3)

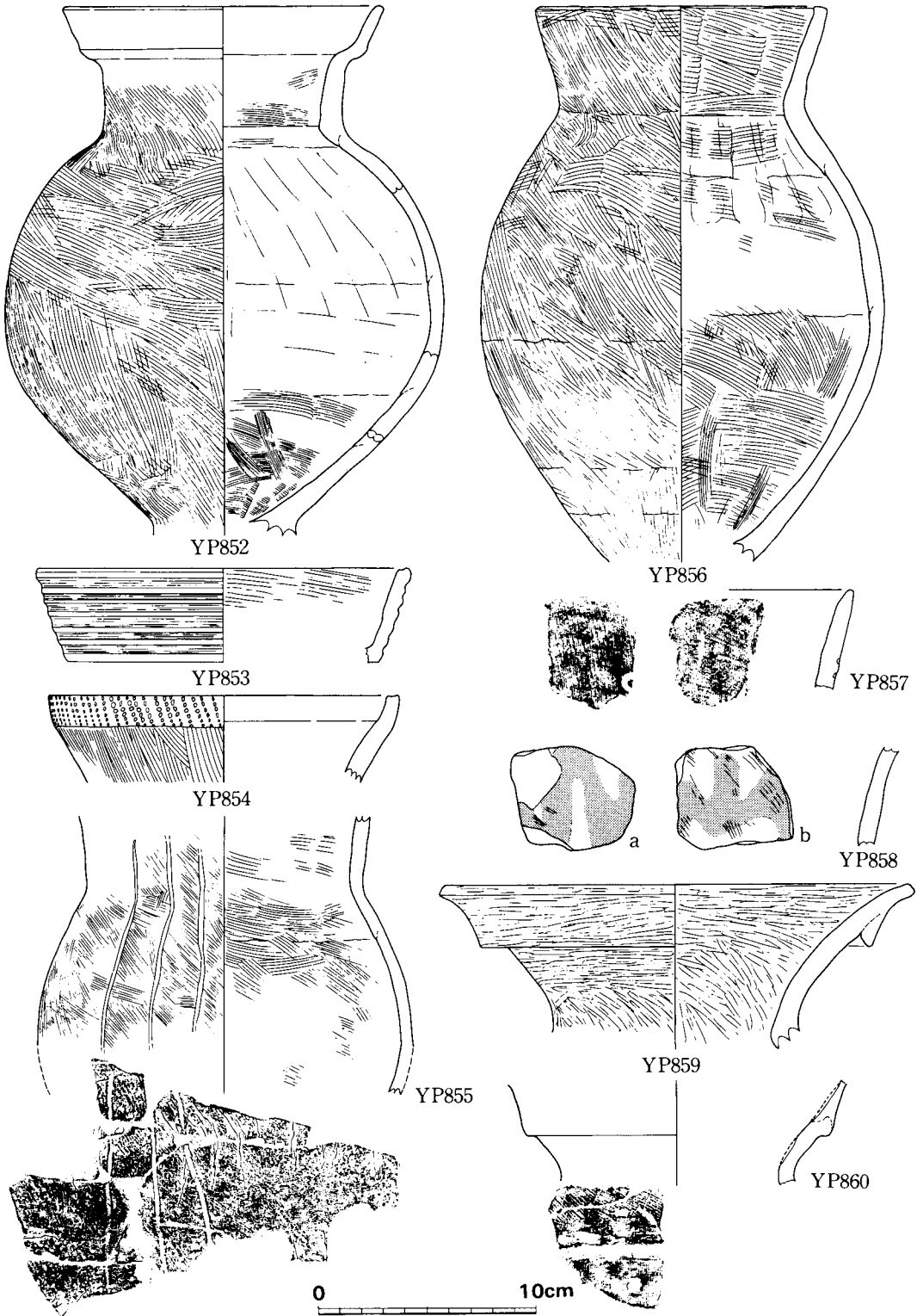


第102図 遺構外出土土器(S=1/3)

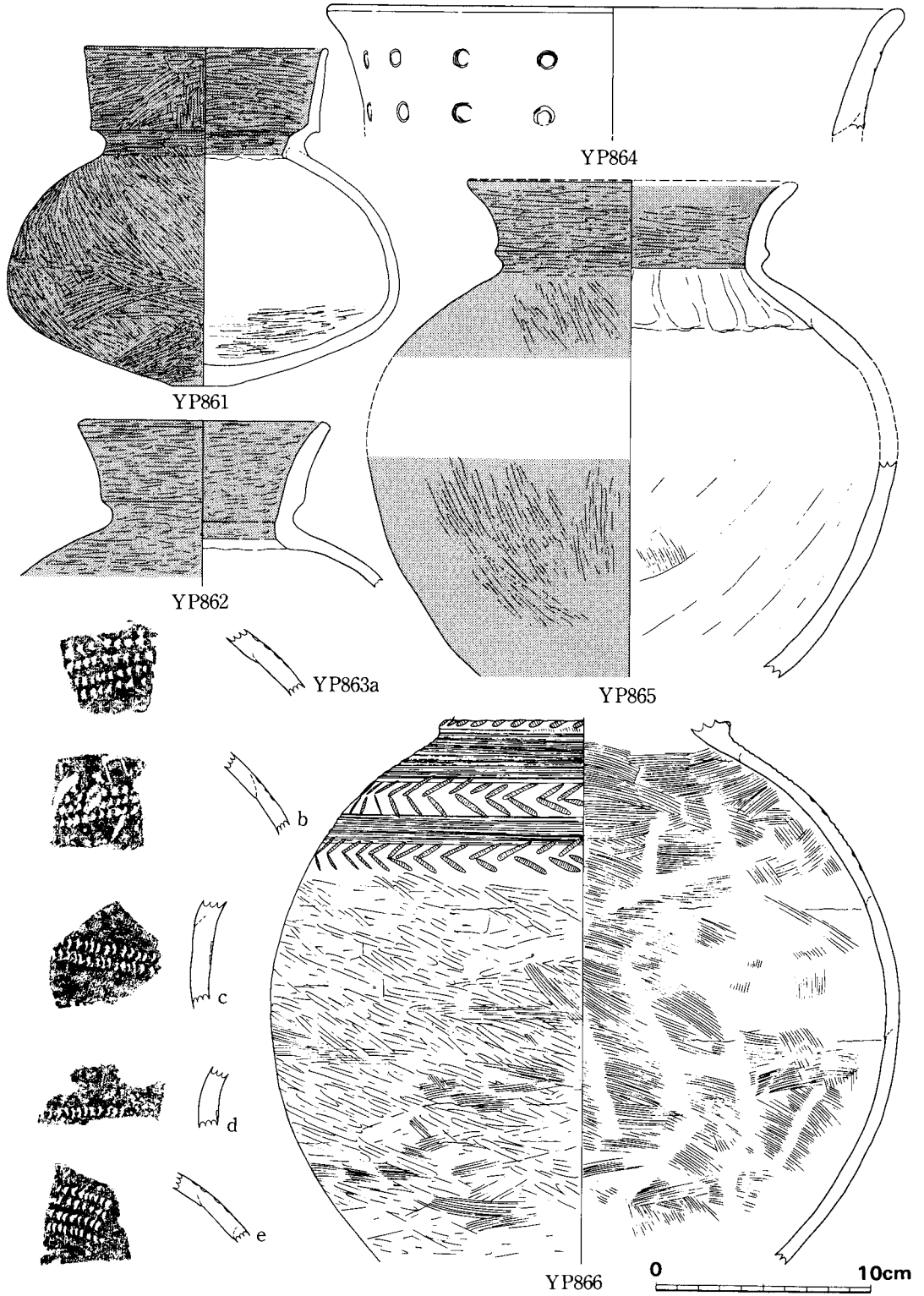
第4節 遺構外他出土土器類



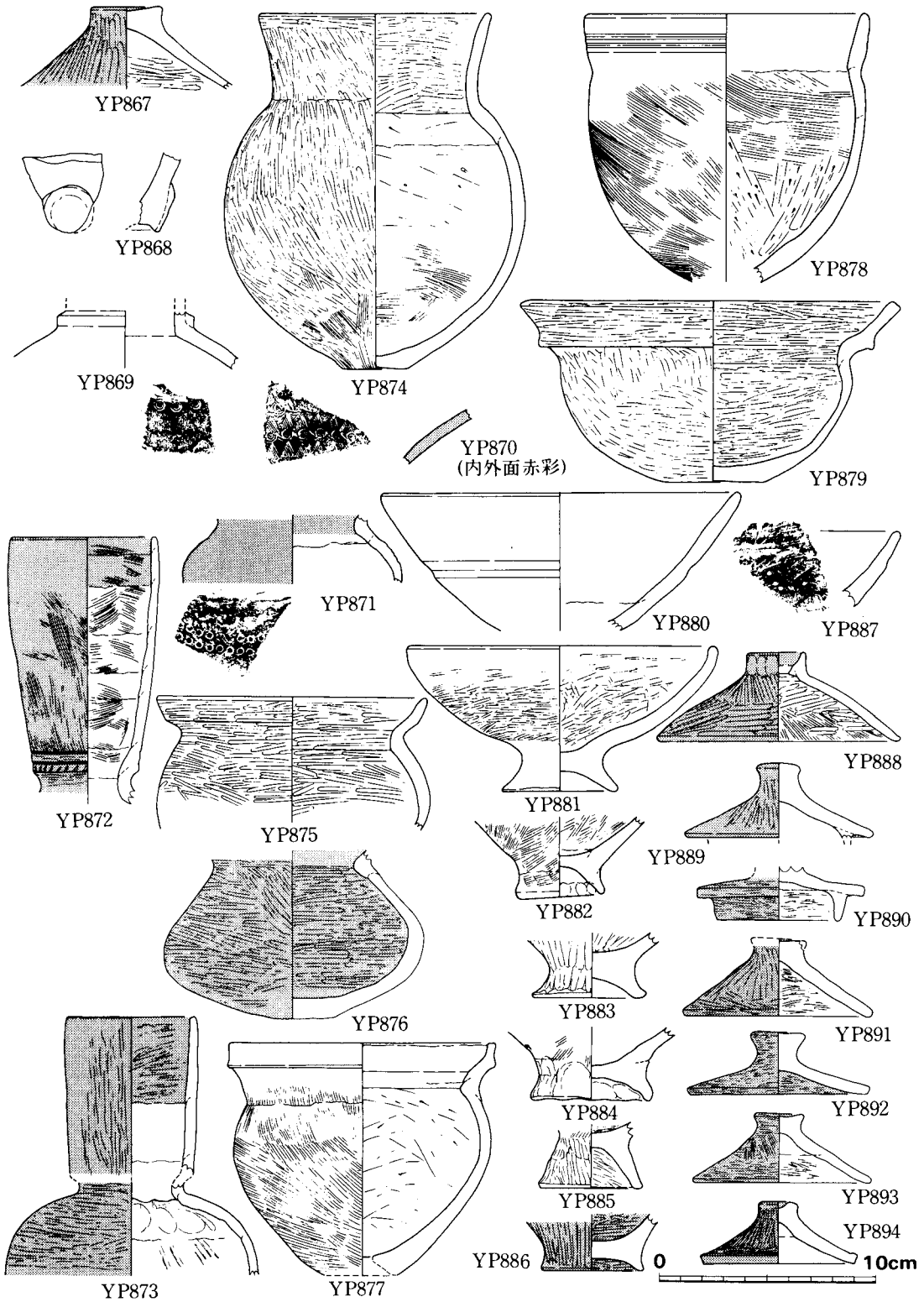
第103図 遺構外出土土器(S=1/3)



第104図 遺構外出土土器 (S=1/3)

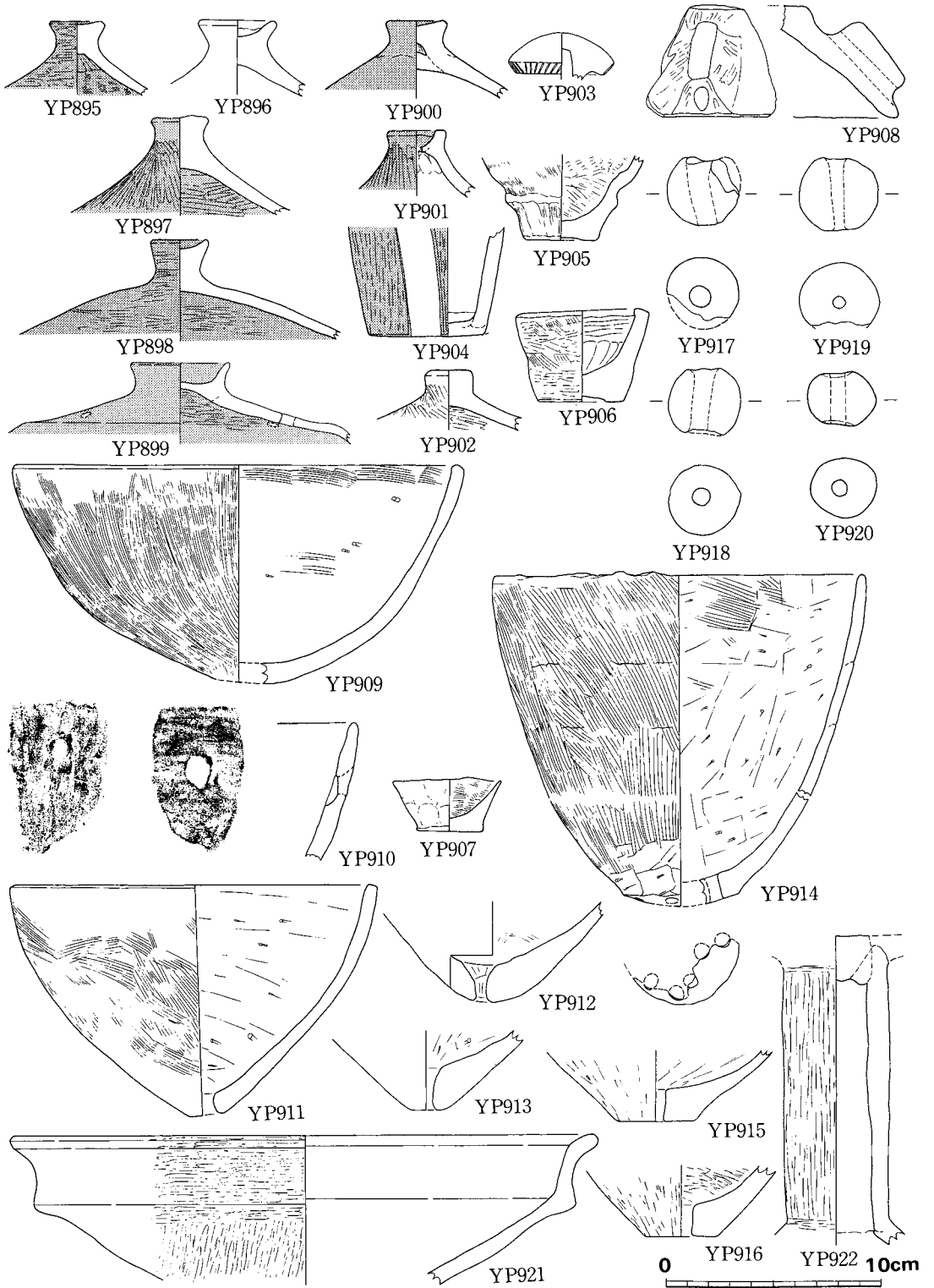


第105図 遺構外他出土土器(S=1/3)

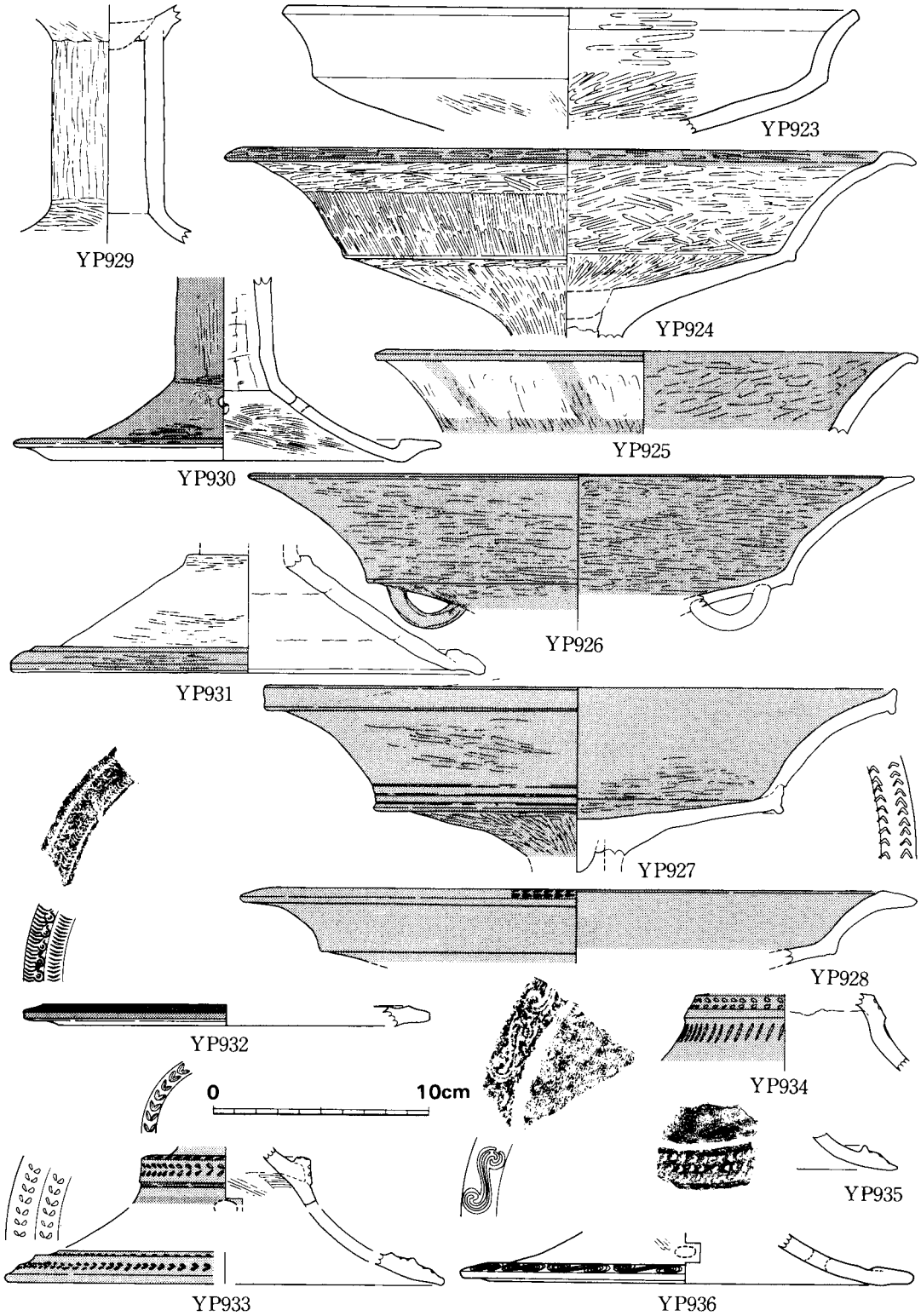


第106図 遺構外出土土器(S=1/3)

第4節 遺構外他出土器類

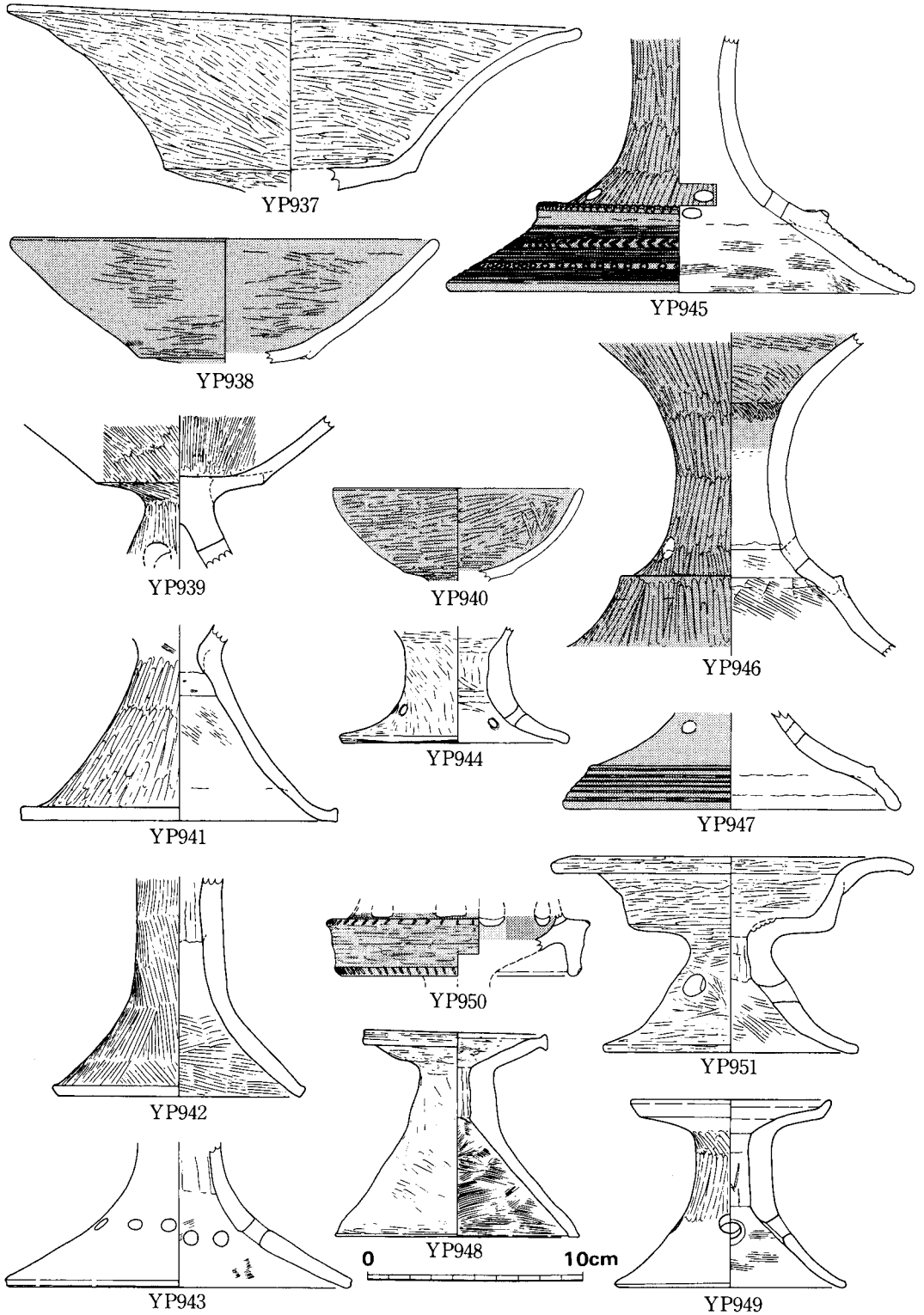


第107図 遺構外出土土器(S=1/3)

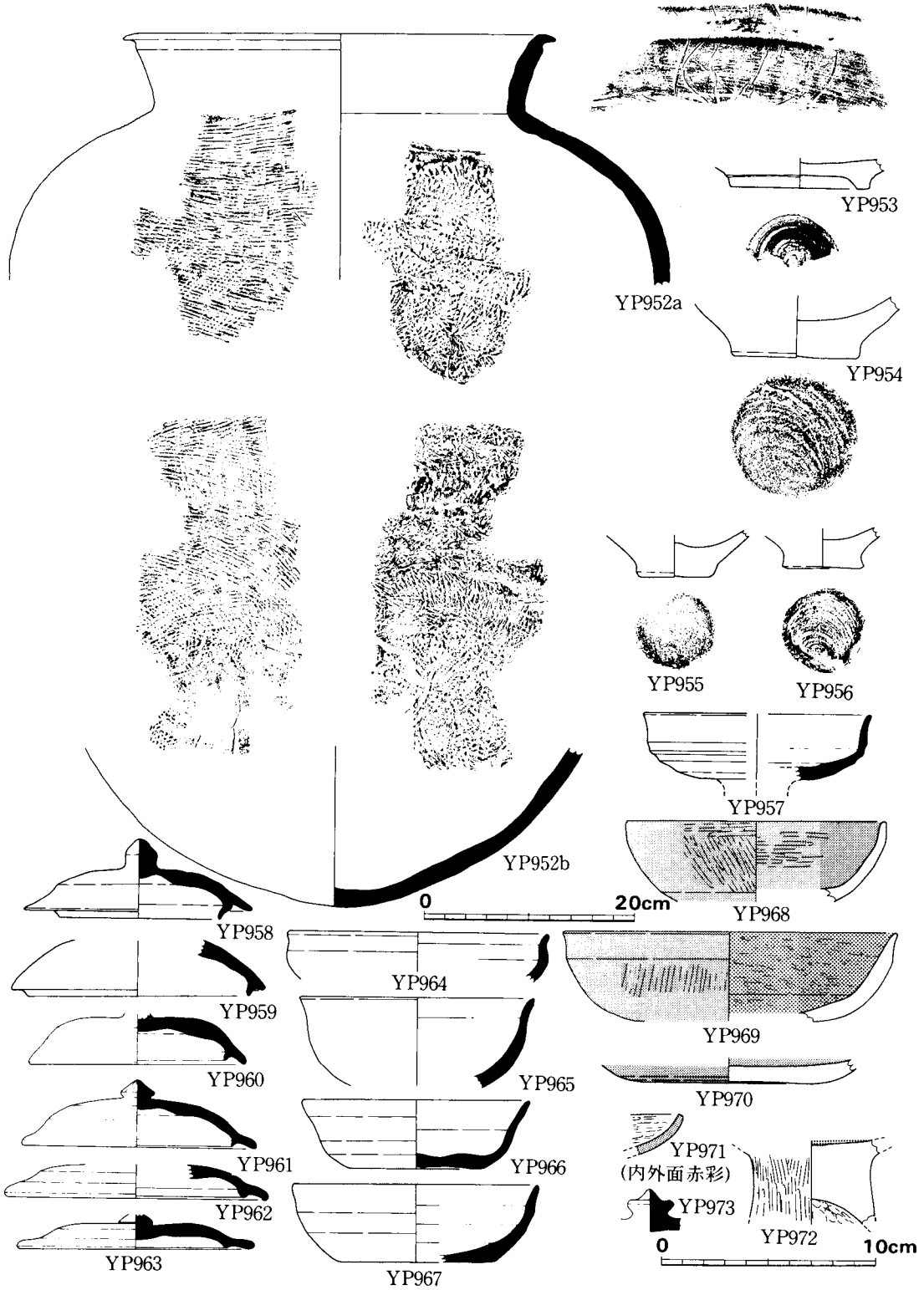


第108図 遺構外出土器(S=1/3)

第4節 遺構外出土土器類

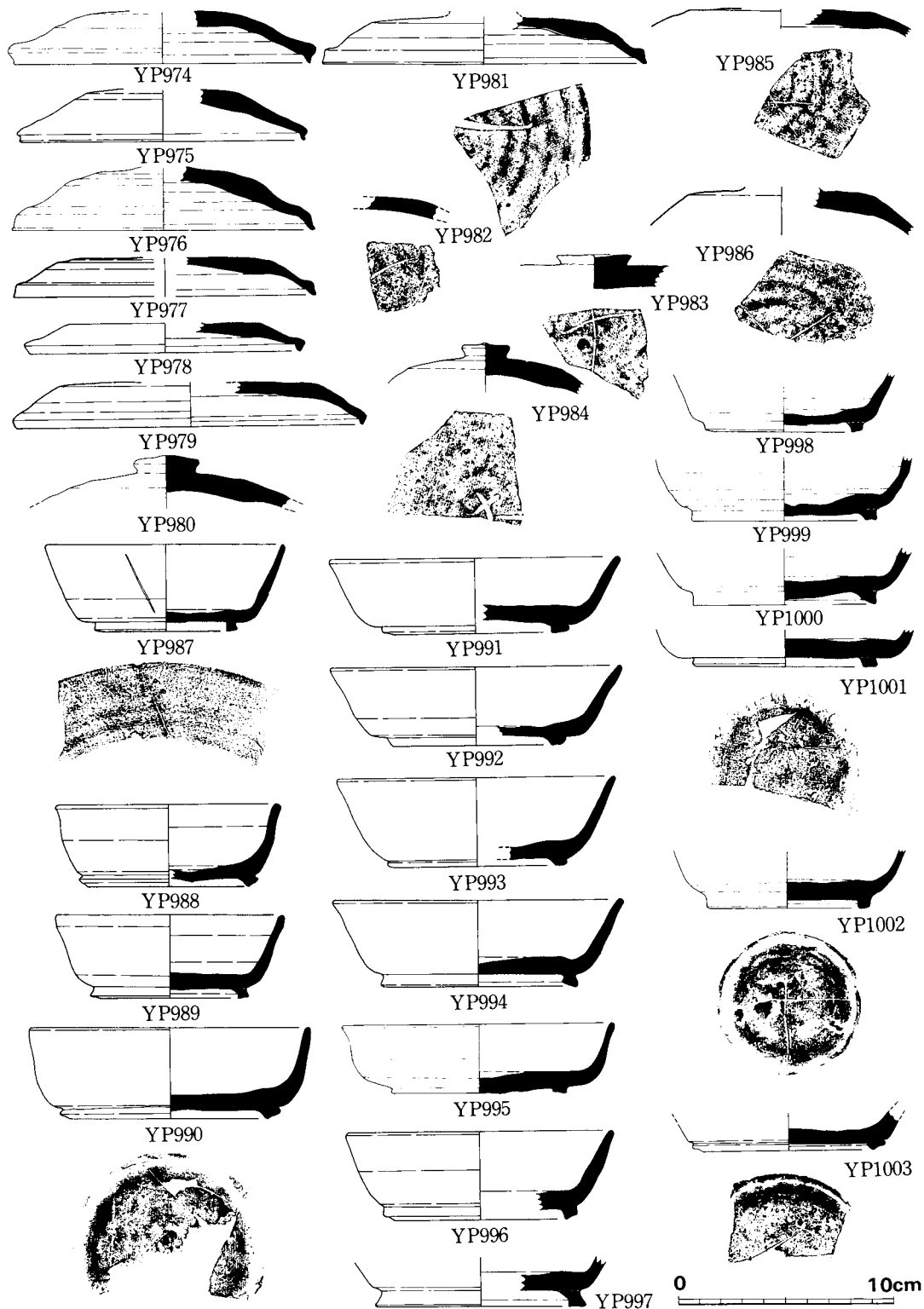


第109図 遺構外出土土器(S=1/3)

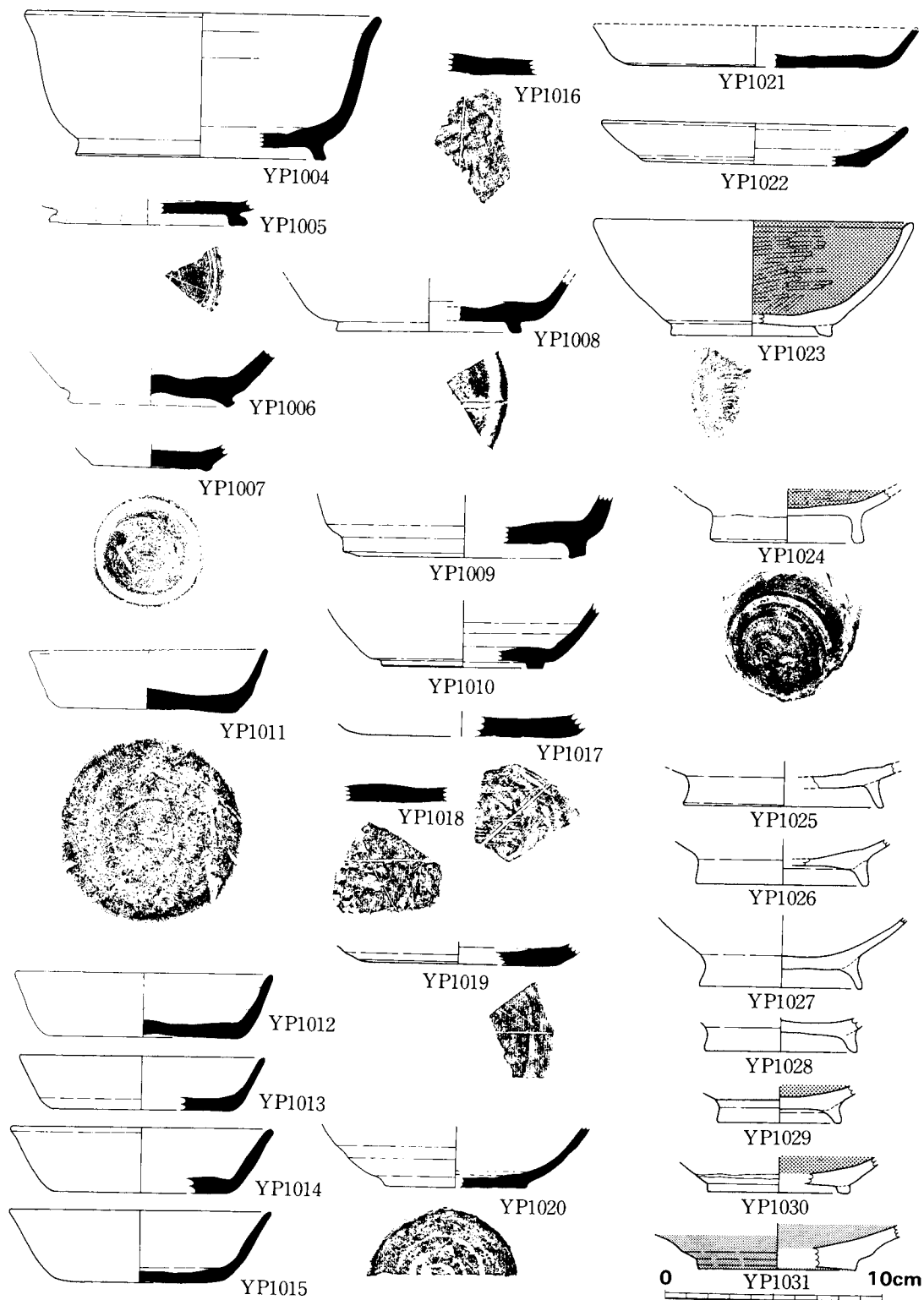


第110図 遺構外他出土土器 (S=1/3・=1/6)

第4節 遺構外出土土器類

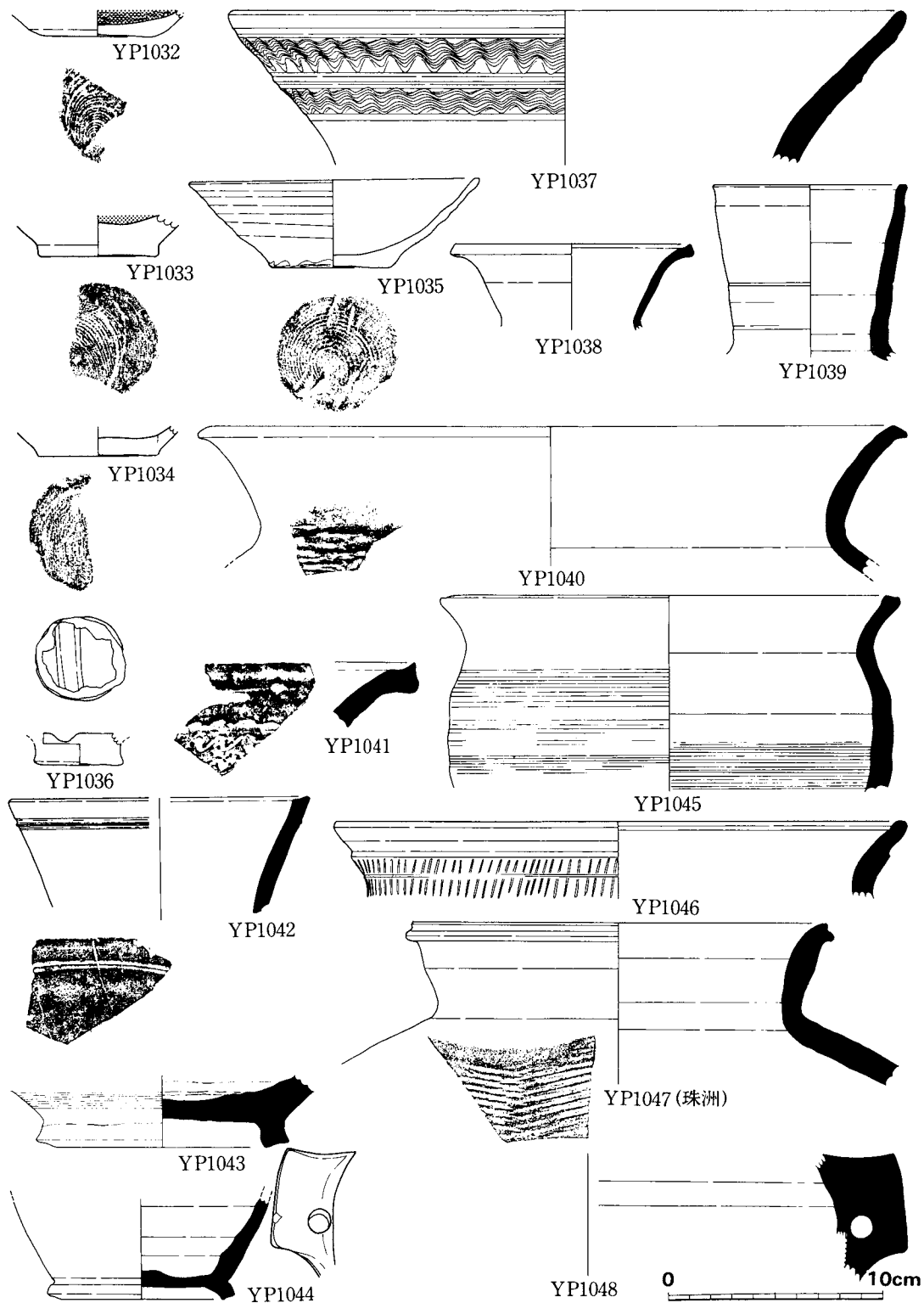


第111図 遺構外出土土器(S=1/3)

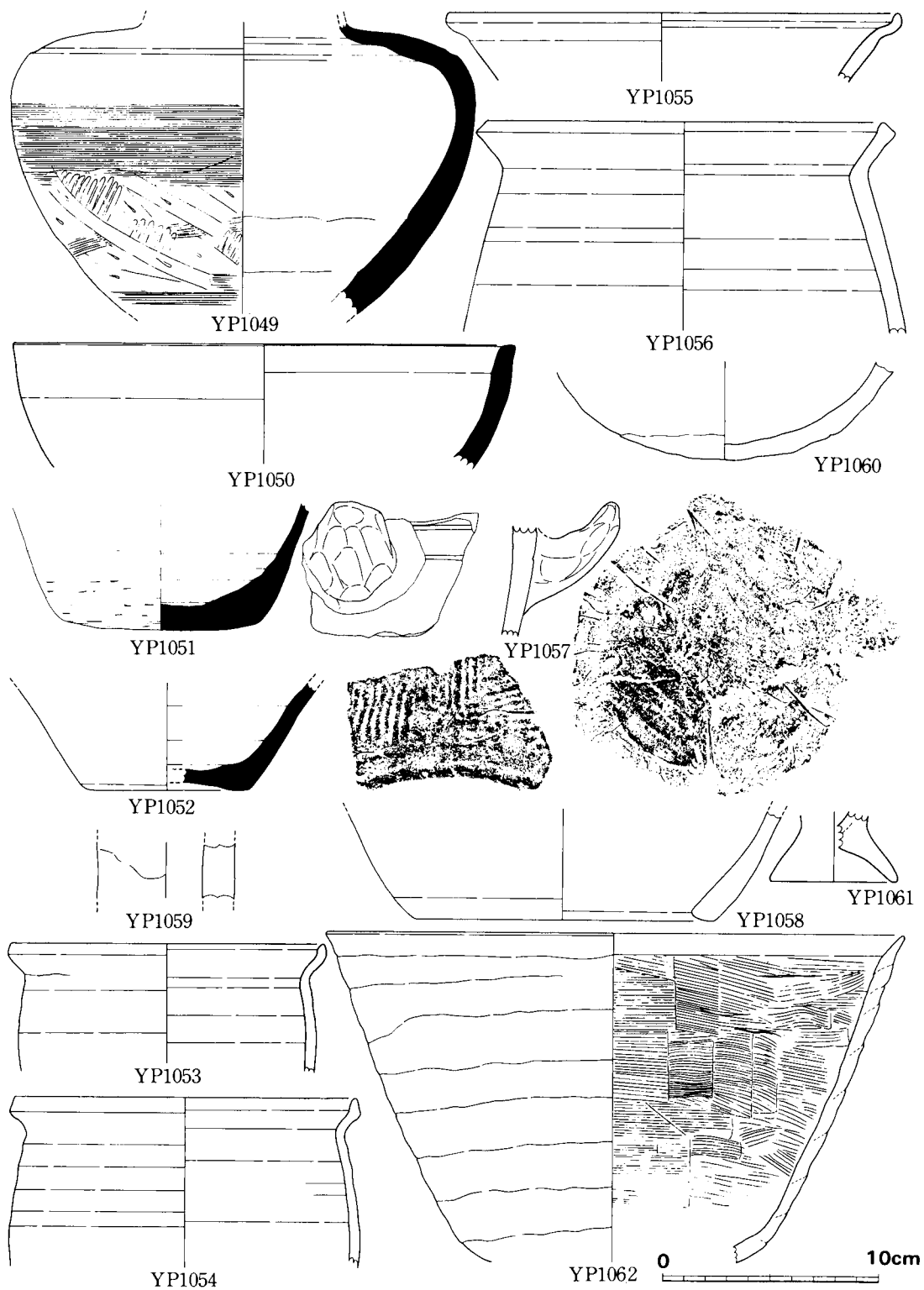


第112図 遺構外出土土器 (S=1/3)

第4節 遺構外出土土器類

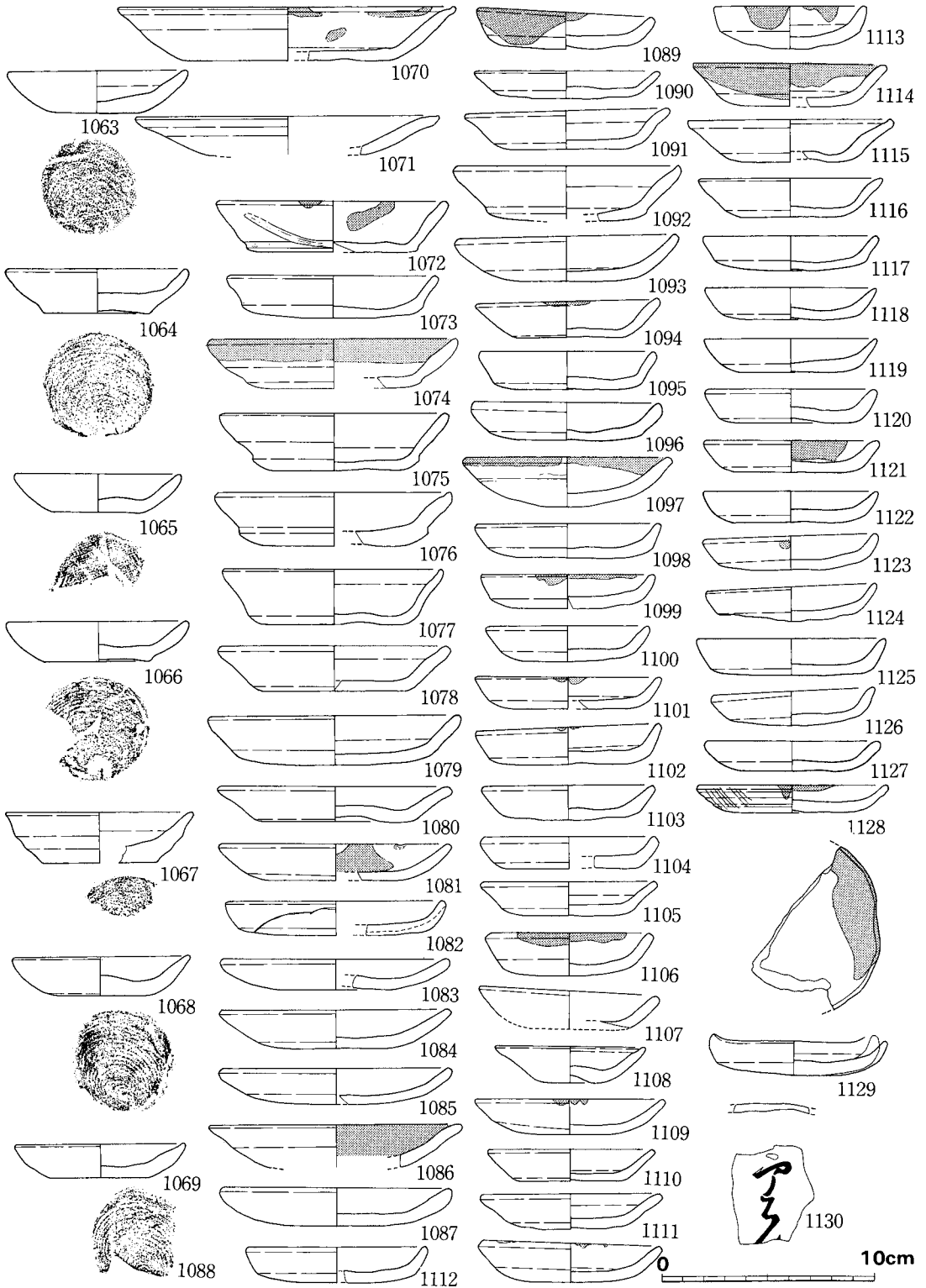


第113図 遺構外出土土器 (S=1/3)

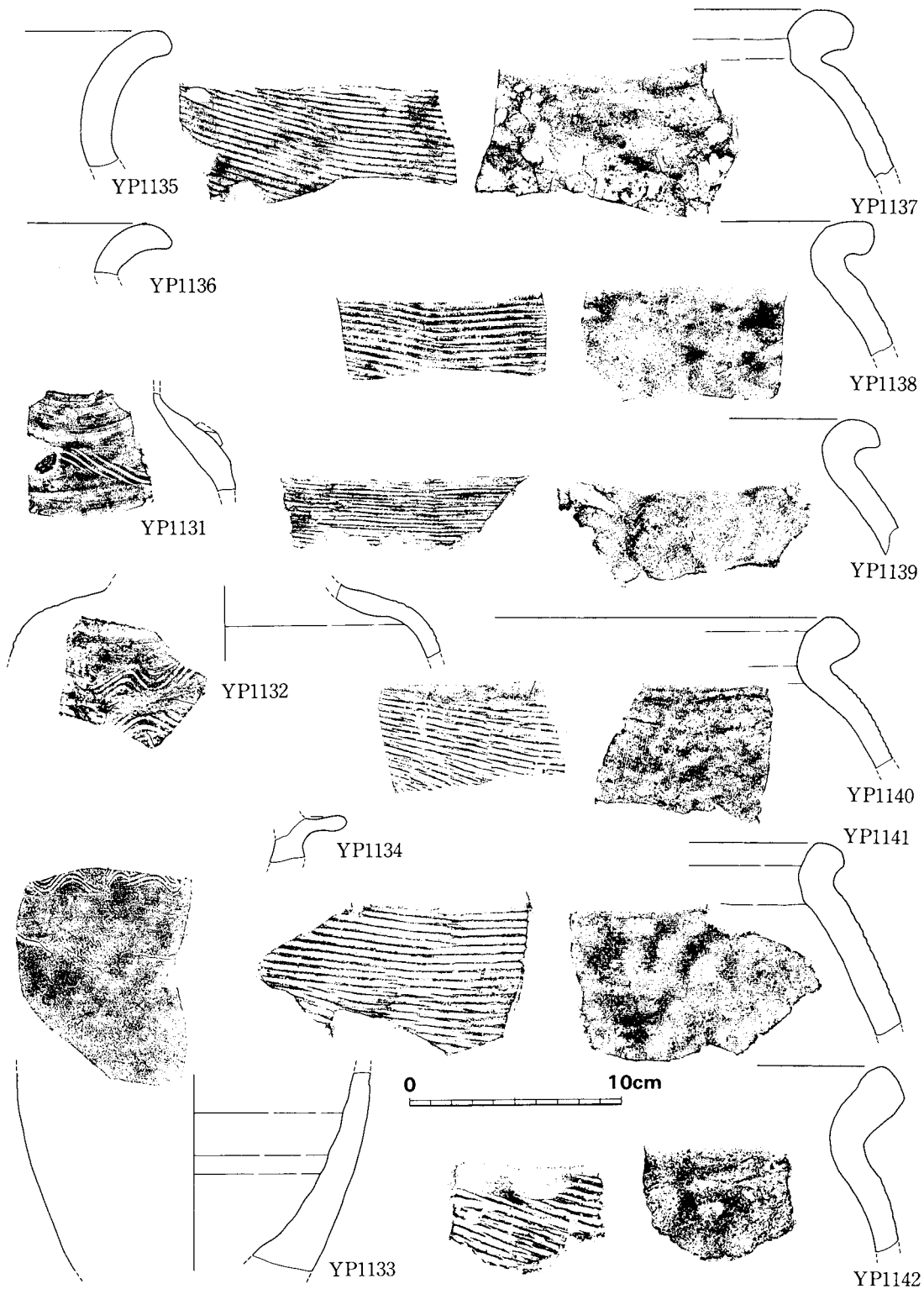


第114図 遺構外出土土器(S=1/3)

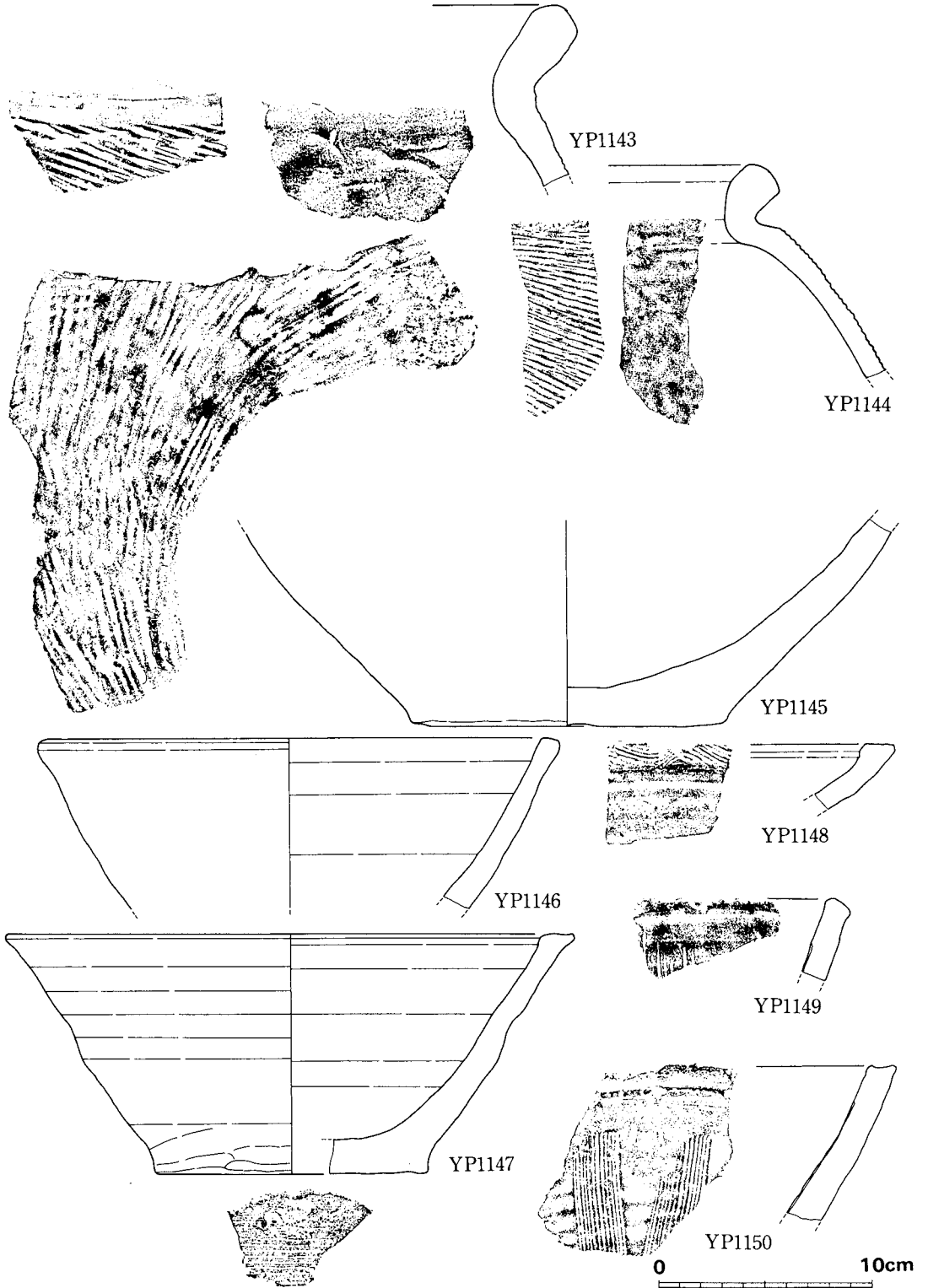
第4節 遺構外他出土土器類



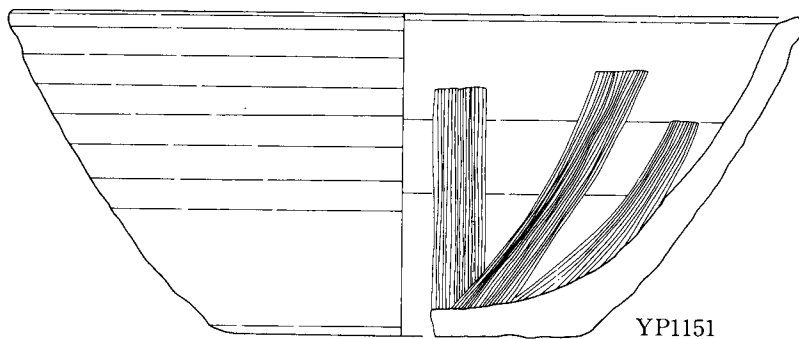
第115図 遺構外他出土土器 (S=1/3)



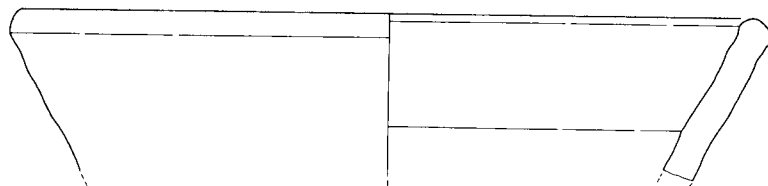
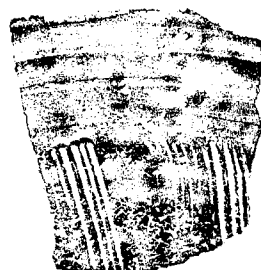
第116図 遺構外出土土器(S=1/3)



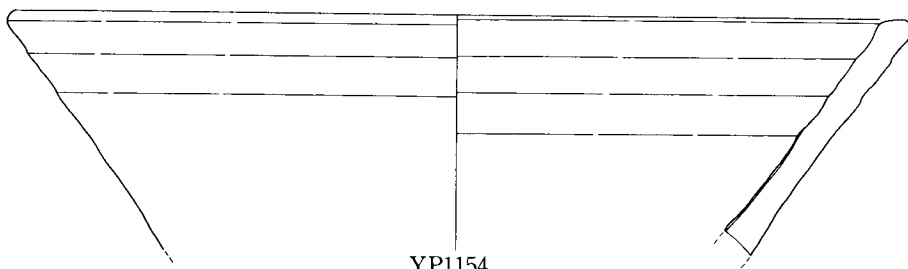
第117図 遺構外出土土器(S=1/3)



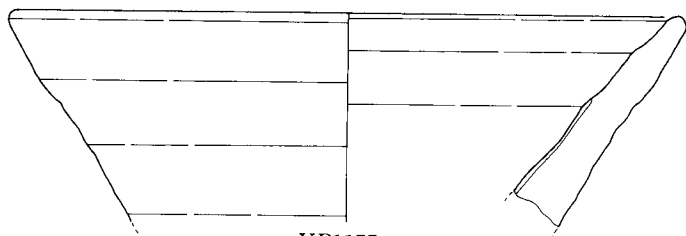
YP1152



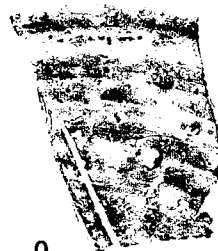
YP1153



YP1154

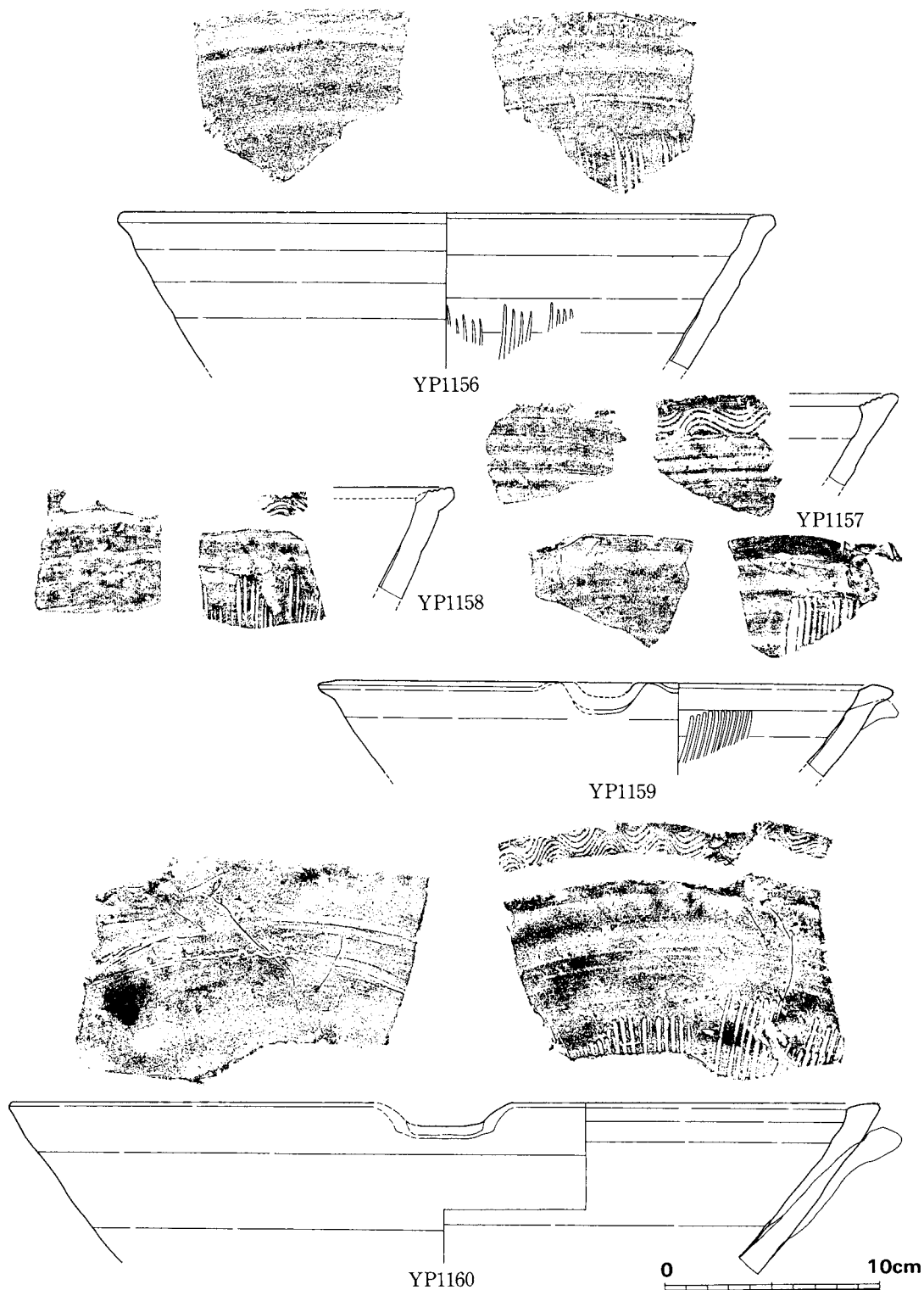


YP1155

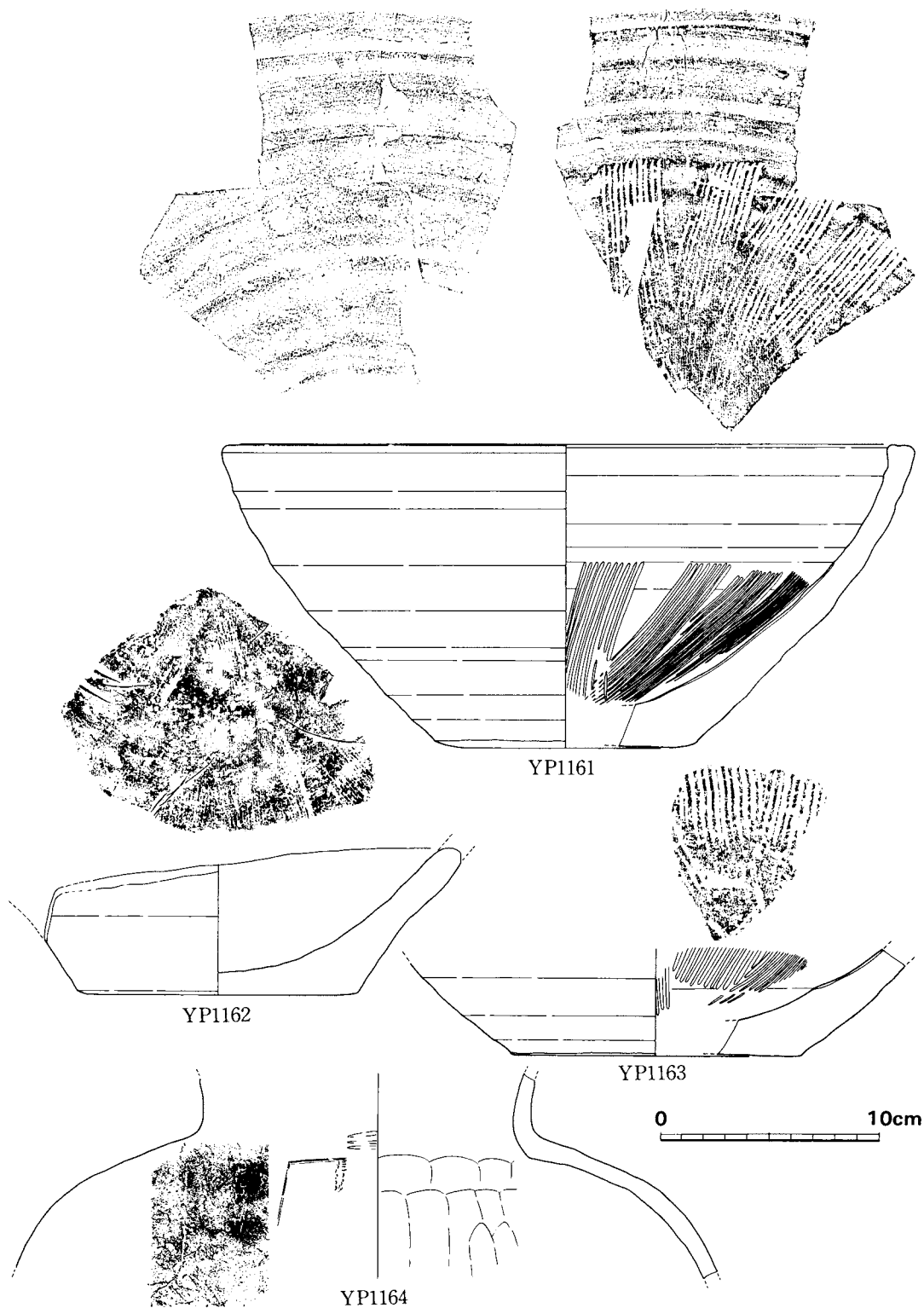


0 10cm

第118図 遺構外出土土器(S=1/3)

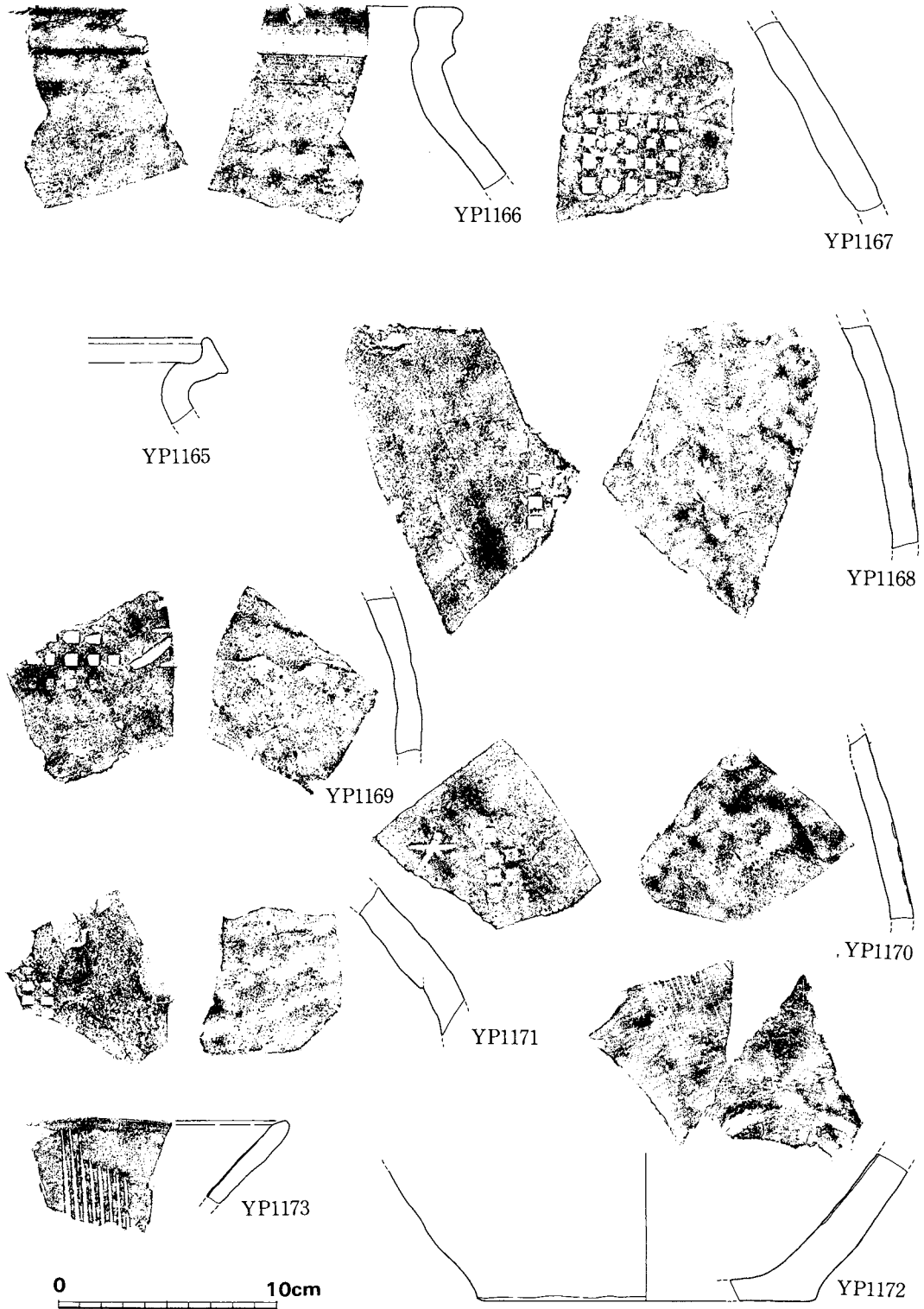


第119図 遺構外出土土器(S=1/3)

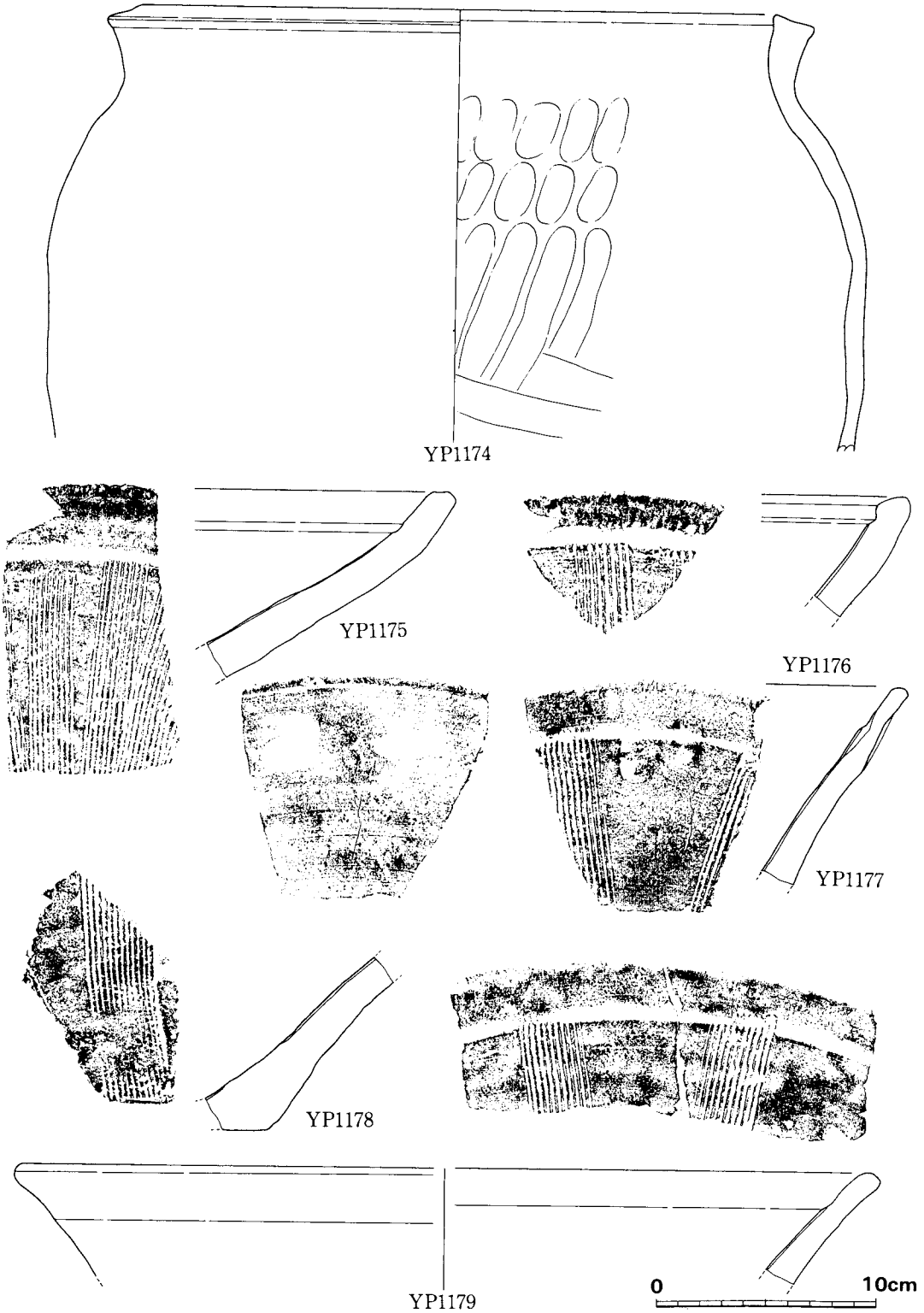


第120図 遺構外出土土器(S=1/3)

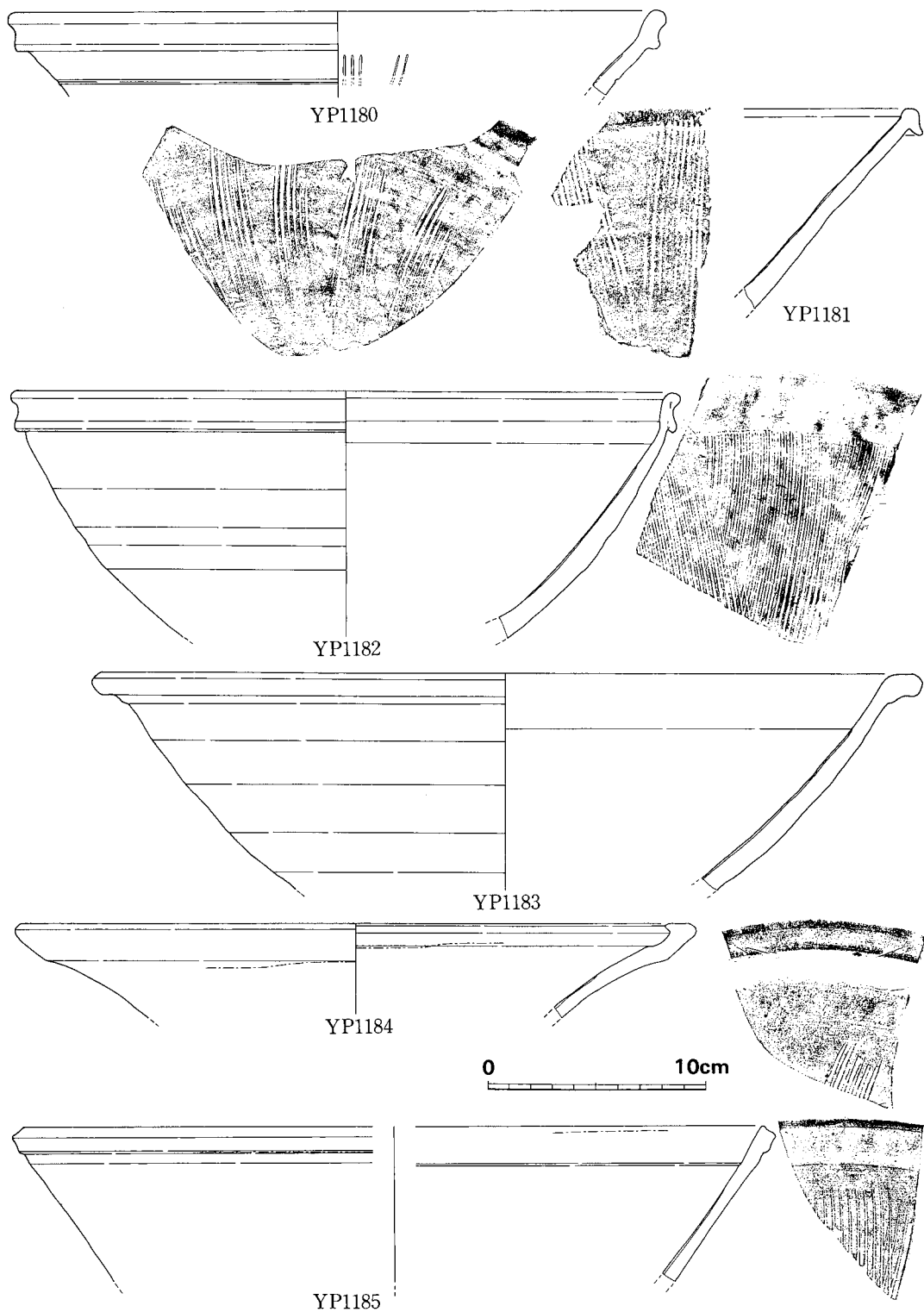
第4節 遺構外出土土器類



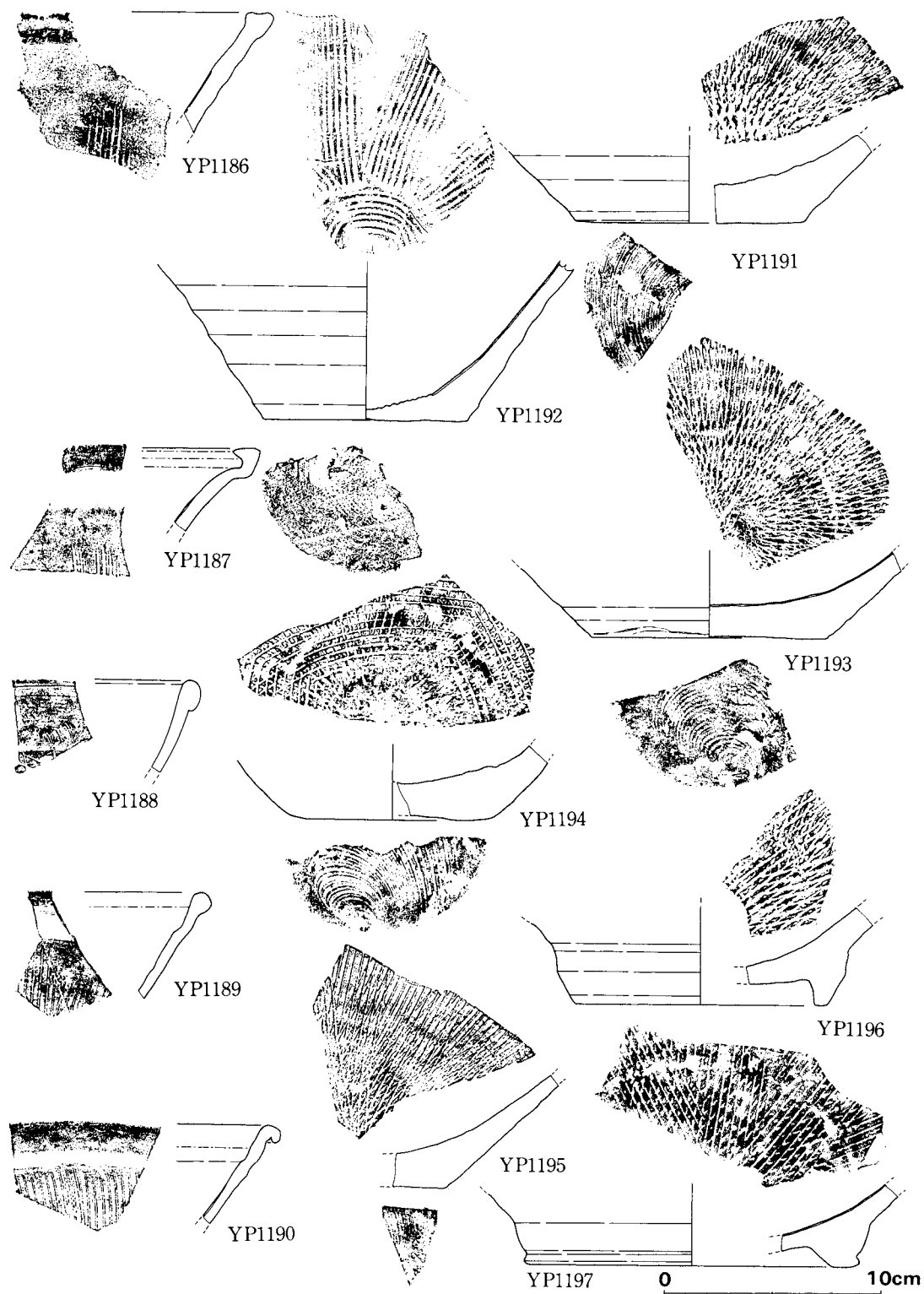
第121図 遺構外出土土器 (S=1/3)



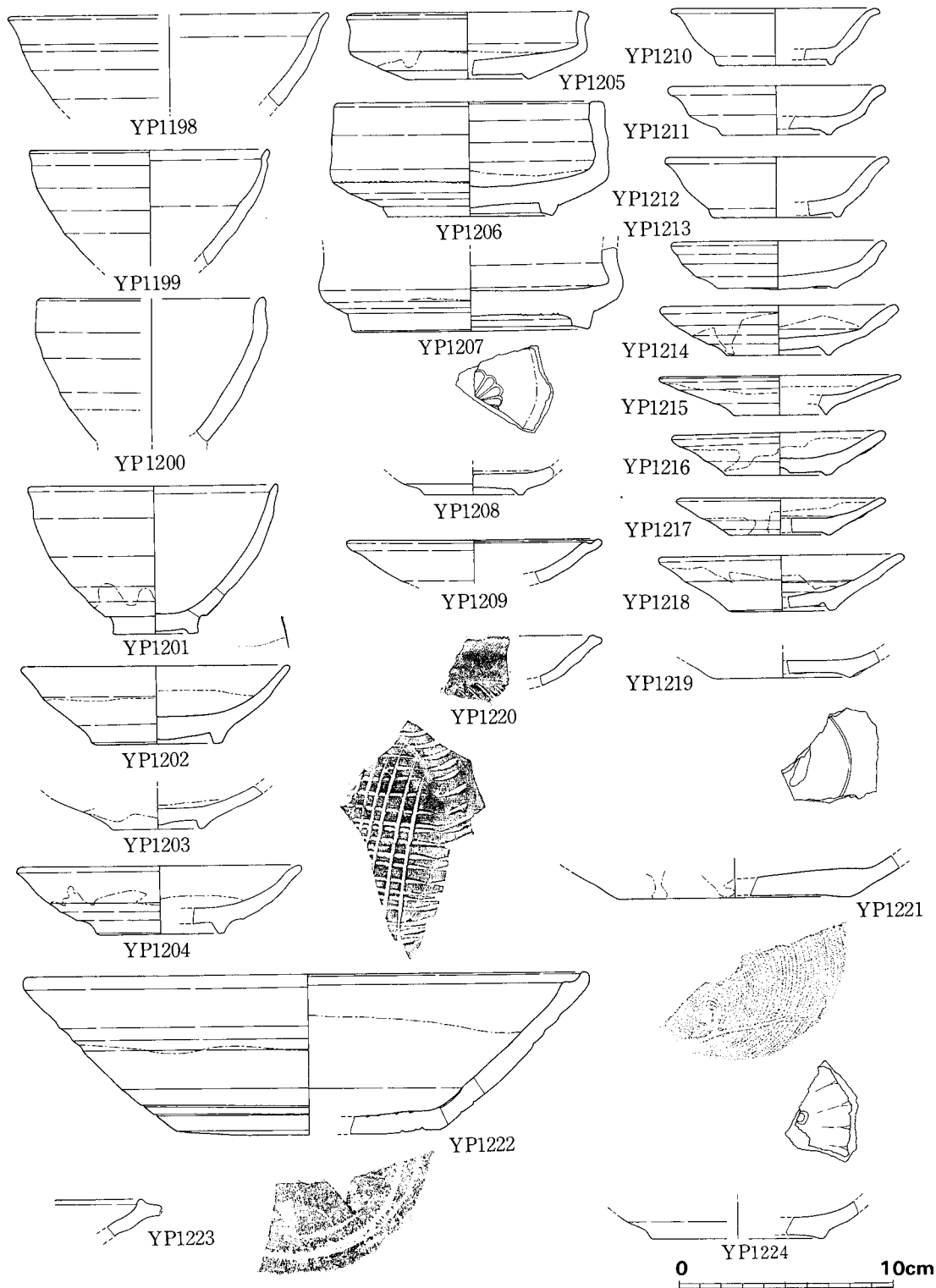
第122図 遺構外出土土器(S=1/3)



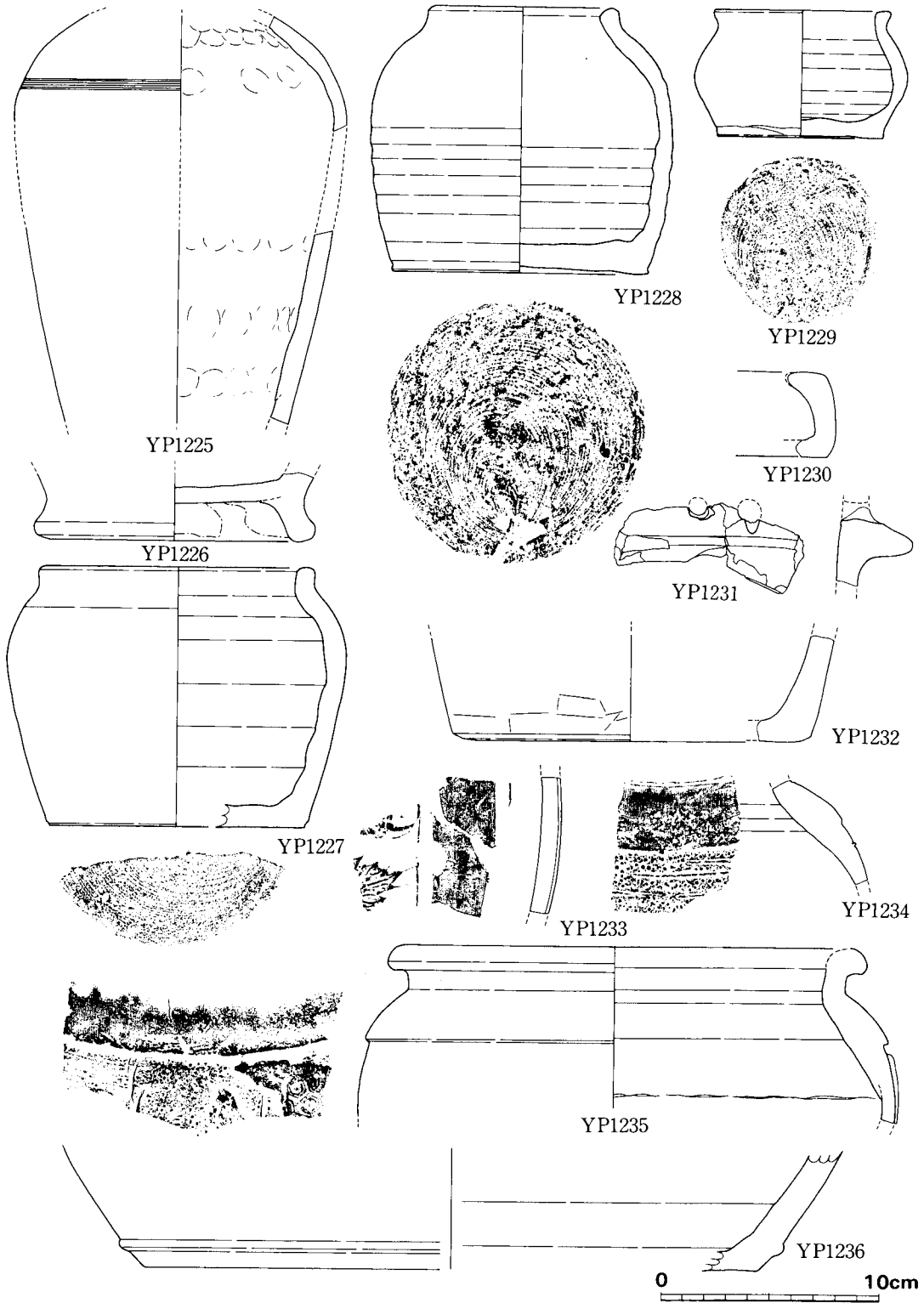
第123図 遺構外出土土器(S=1/3)



第124図 遺構外出土土器(S=1/3)

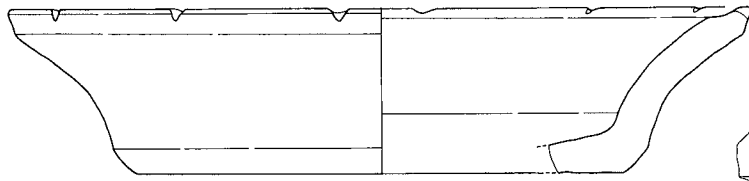


第125図 遺構外出土土器(S=1/3)

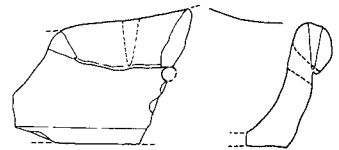


第126図 遺構外出土土器(S=1/3)

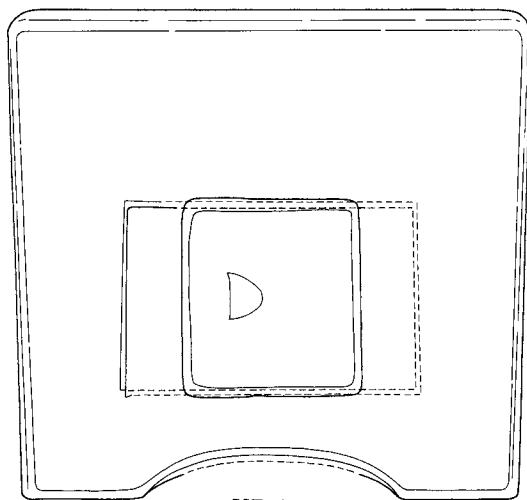
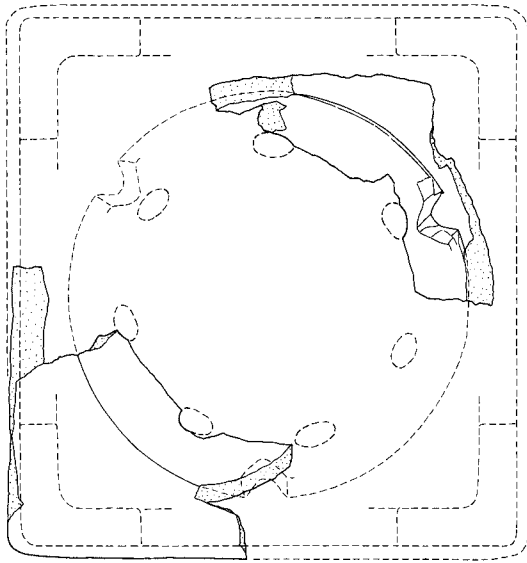
第4節 遺構外出土土器類



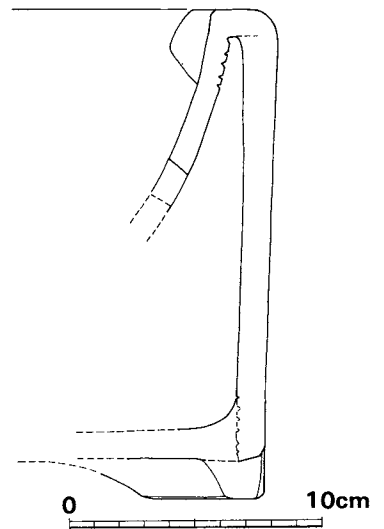
YP1237



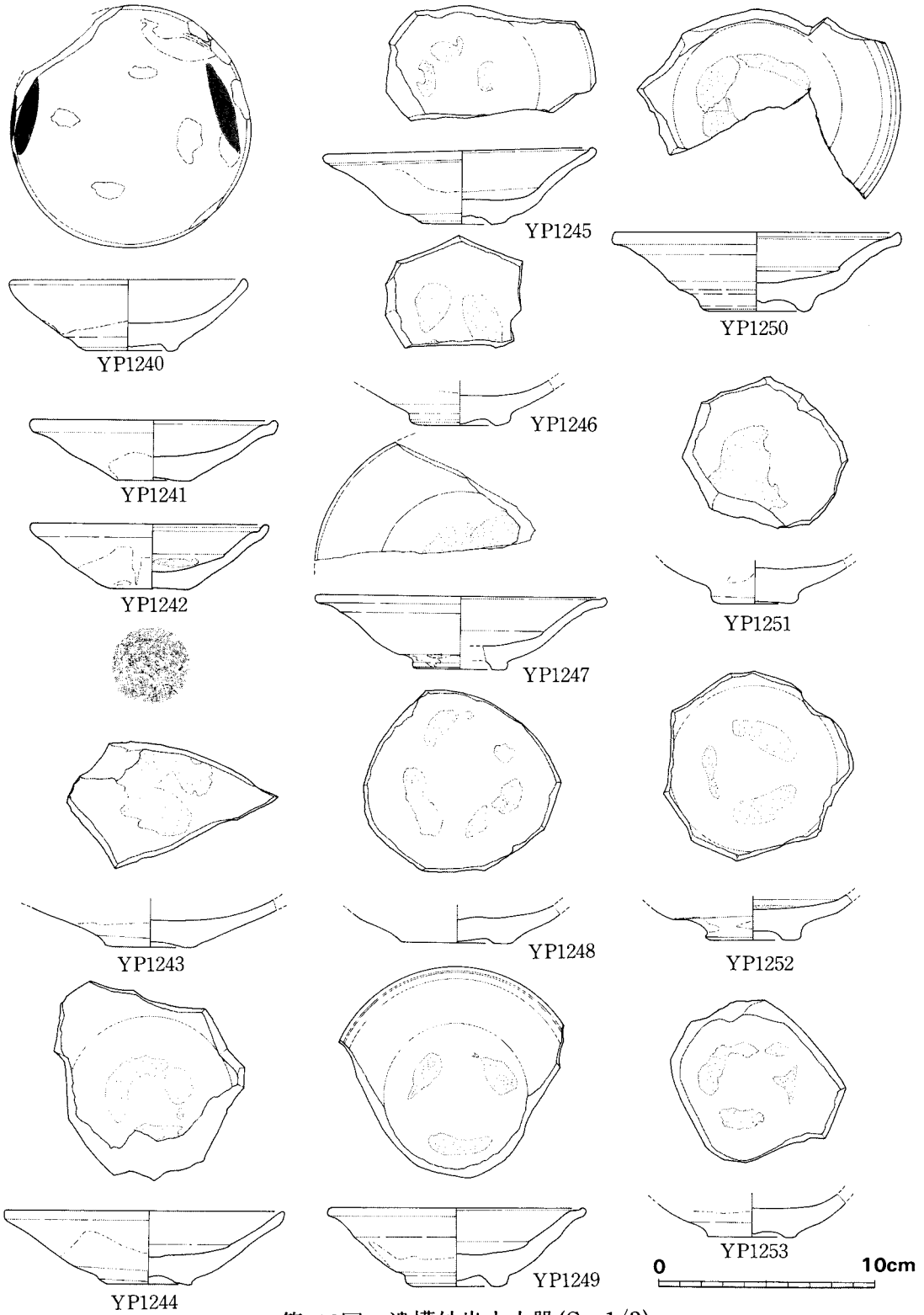
YP1238



YP1239

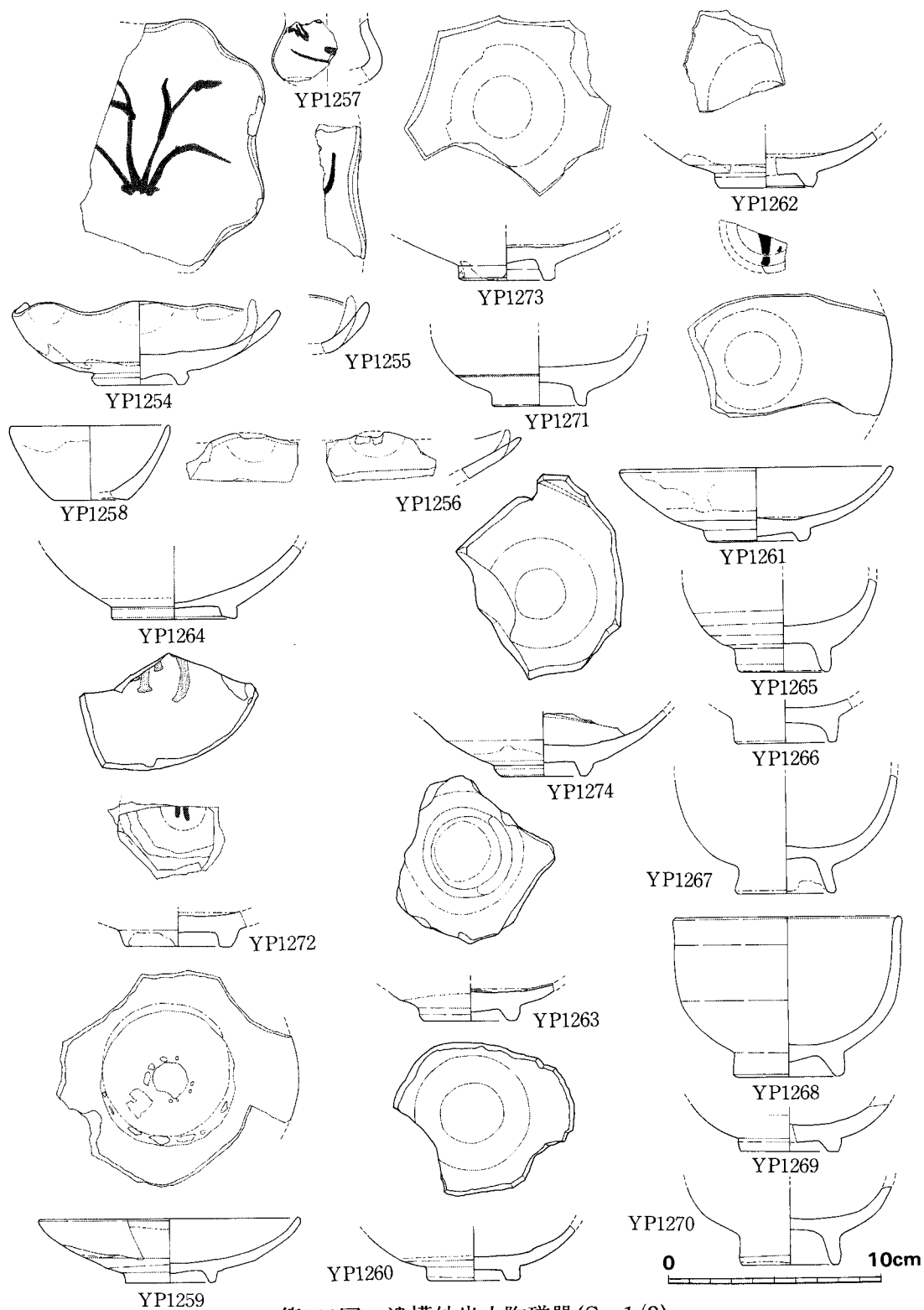


第127図 遺構外出土土器・土製品(S=1/3)

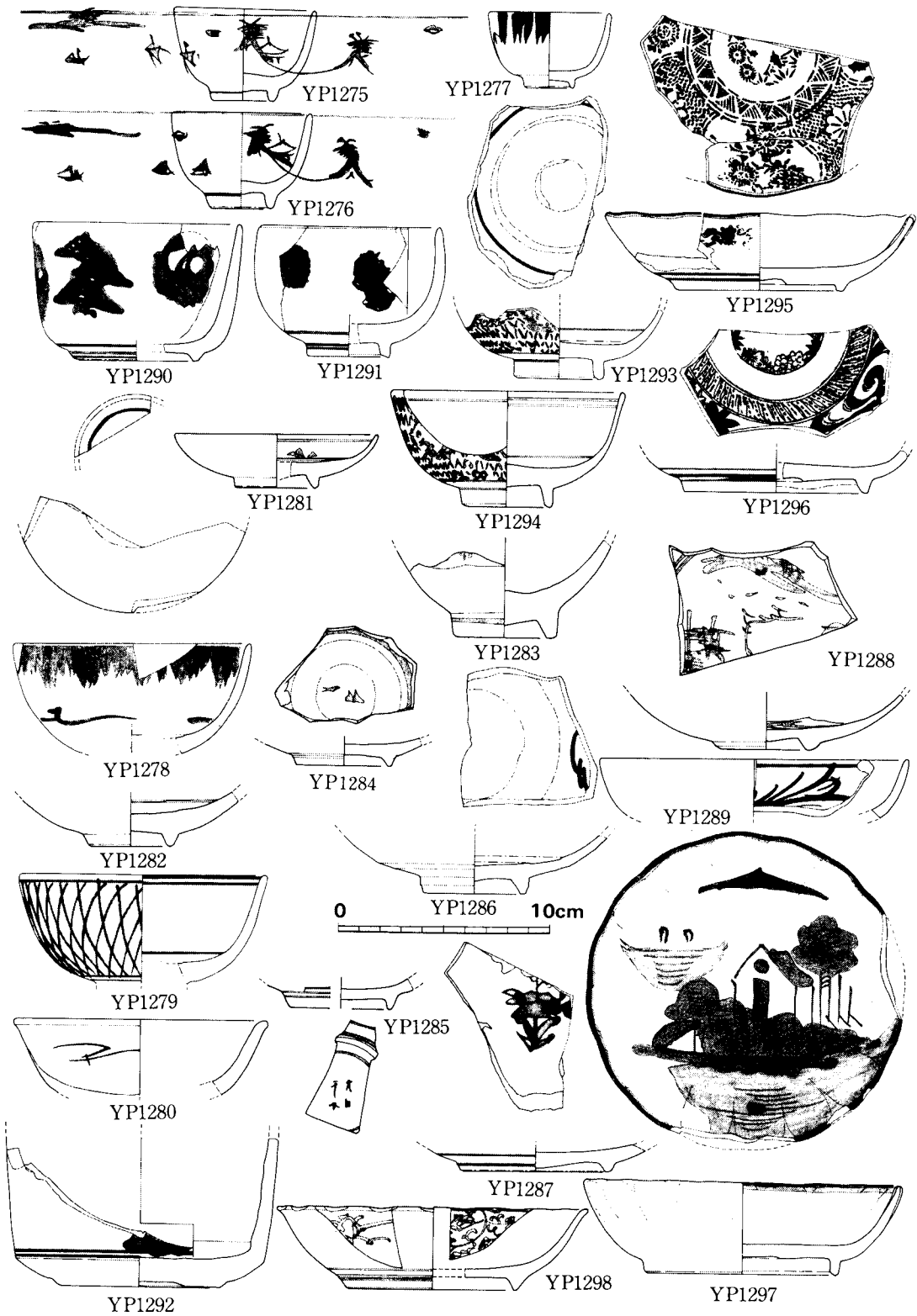


第128図 遺構外出土土器(S=1/3)

第4節 遺構外出土土器類

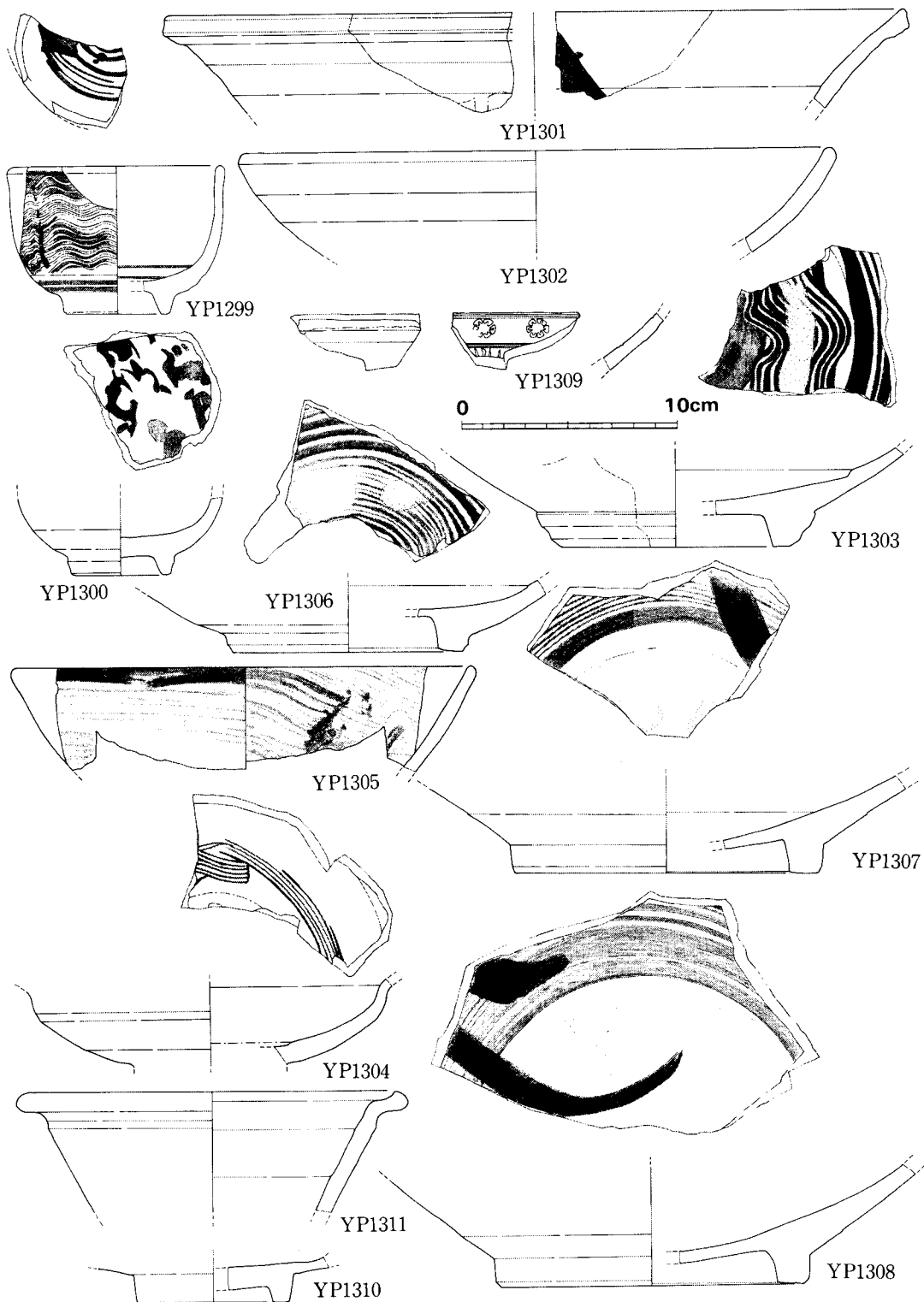


第129図 遺構外出土陶磁器(S=1/3)

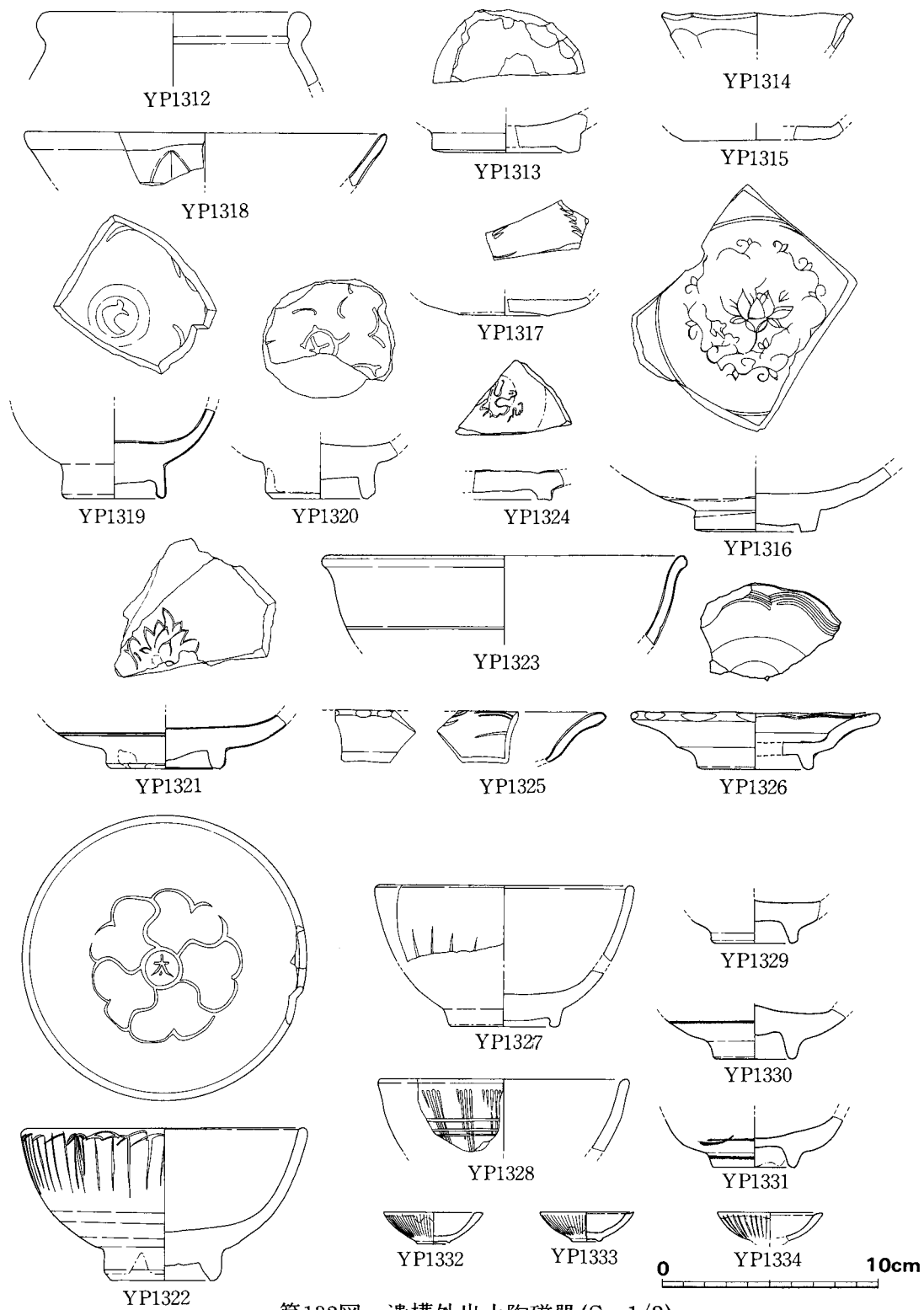


第130図 遺構外出土土器(S=1/3)

第4節 遺構外出土土器類



第131図 遺構外出土土器(S=1/3)



第132図 遺構外出土陶磁器(S=1/3)

第4節 遺構外他出土土器類

出土土器観察表 (a:口径・蓋鈕径 b:胴径・脚最小径・蓋最大径・結合壺受部径
c:底径・台径・裾径・蓋口径・結合壺脚最小径 d:結合器台裾部径 h:器高)

番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項	番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項
YP740 91C310	I 8 小穴	甕	a:16.5 b:18.6 P86023 浅黄橙	外面煤付着	YP778	10区	甕	91A16 ぶい橙	外面条痕
YP741 91C169	F 7 小穴	壺	a: 5.6 P86004 橙色		YP779	10区	甕	91A14 淡黄色	外面条痕 西側埋土
YP742 91C172	G 10 小穴	高杯	c:17.4 P86068 橙色	沈線 5	YP780 91A 13	12号 整穴	甕	南西側埋土・外付 煤・内炭化物付 着、ぶい黄橙	外面縄文、交互刺突 文・山形突起・沈線
YP743 91C170	I 9 小穴	鉢	a:16.0 b:14.8 P86119 黄橙色	頸部内面列点文?	YP781	12区	甕	91A15 ぶい橘	外面条痕、東側埋土
YP744 91C166	I 8 小穴	鉢	a:17.5 P86033 橙色		YP782	2土	甕	灰黄褐色	外面条痕 87B171
YP745	E 9	甕	a:15.8 浅黄橙	外肩部刻目、91C156	YP783 87B165	第7 号溝	甕	ぶい橙色	波状口縁、外面条痕
YP746	E7-8	甕	a:16.6 灰白色	外面煤付着、87B105	YP784 91A 19	K 4 小穴	甕	P88028 浅黄橙	外面条痕
YP747	E 8	甕	a:18.2 浅黄橙	87B108	YP785 91B 1	L 3 小穴	甕?	P88035 褐色	外面沈線
YP748	E 10	壺	a:17.8 橙色	91C136	YP786 87B162	地点 不詳	壺	第1次(1985)調 査区 灰白色	口縁外面突帯・指頭 による押圧文
YP749 91C165	E- 9区	鉢	a:13.4 b:11.2 c: 3.8 h: 8.4	浅黄橙色	YP787 87B163	E- 7区	壺形	注口土器? ぶい橙色	外面縄文・沈線文、 外面煤付着
YP750 91C130	E- 9区	台付 鉢	b: 3.3 c: 8.5 浅黄橙色	赤彩(脚部内面は赤 彩痕?)	YP788 87B164	E 7 - 8	甕	ぶい黄橙色	波状口縁、内外面条 痕
YP751	E 9	鉢	c: 5.6 橙色	91C147	YP789	E 8	甕	ぶい黄色	外面条痕 91A 1
YP752 87B137	E 7 - 8	蓋	a:(2.0)b: 7.8 c:(5.0)h:(3.8)	浅黄橙色	YP790	F7-8	甕	灰黄褐色	内外面条痕 87B169
YP753	E 9	蓋	a: 3.2 91C116	ぶい橙、外面赤彩	YP791	G 9	甕	ぶい黄褐色	外面条痕 91A 27
YP754	G 5	鉢	a:11.5 h: 5.7	浅黄橙 91C276 78溝	YP792	G 10	甕	浅黄褐色	外面条痕 91A 25
YP755 91C128	K 7 - 8	小型 鉢	a: 9.0 b: 7.4 c: 1.2 h: (7.9)	浅黄褐色	YP793	G 11	甕	ぶい褐色	外面条痕 91A 26
YP756	K7-8	蓋	a: 3.0 91C126	浅黄褐色、外面赤彩	YP794	H 10	?	橙色	外面沈線文 91A 12
YP757	K7-8	器台	a: 9.0 b: 3.8	浅黄橙 91C127 小型	YP795	H 10	深鉢	黒褐色	外面縄文 91B 2
YP758 91C163	K 7 - 8	小型 器台	a: 8.7 b: 3.3 c:12.0 h: 6.8	浅黄褐色	YP796 91B 4	L- 7区	?	外面頸部刻突文 浅黄褐色	外面口縁端部は刻目 により波状を呈する
YP759	K 7	鉢	a:18.0 浅黄橙	内外面赤彩 91C127	YP797 91A 32	M- 6区	深鉢	外面煤付着 浅黄褐色	外面縦位に蛇行する 沈線文
YP760	P 5	甕	a:19.2 浅黄橙	外面煤付着 91C232	YP798	P 8	深鉢	ぶい橙色	外面縄文 91B 5
YP761	P 5	甕	a:17.4 91C226	ぶい黄橙 外煤付	YP799	P 8	?	浅黄褐色	外面状痕 91A 30
YP762	P 5	甕	a:17.4 黄褐色	外面煤付着 91C233	YP800 91A 34	地点 不詳	?	第5次(1989)調 査区 浅黄褐色	外面沈線文
YP763 91C235	P- 5区	甕	a:16.6 ぶい橙色	内面炭化物付着	YP801 91A 20	I- 10区	甕	c: 11.4 浅黄褐色	内外面条痕、内面炭 化物付着
YP764	P 5	甕	a:15.8 浅黄橙	外面煤付着 91C237	YP802 91A 29	P 3 - 4	甕	c: 9.7 褐色	外面胴部条痕、底部 簾状圧痕
YP765	P 5	甕	a:17.0 褐色	外面煤付着 91C234	YP803 91A 22	I- J 10	甕	c: (9.8) 褐色	外底面簾状圧痕
YP766	P 5	高杯	a:23.0 浅黄橙	外面煤付着 91C238	YP804 87B161	地点 不詳	甕	c: (9.8) 第1 次(1985)調査区	外面条痕 褐色
YP767	P 5	鉢	c: 6.5 褐色	外面煤付着 91C236	YP805	B 6	甕	浅黄橙	外面条痕 87B161
YP768 91C241	P- 5区	高杯	b: 3.3 c:10.6 浅黄褐色	3孔、外面赤彩	YP806	B 7	甕?	外煤付着 91A35	外沈線・刻目 黄色
YP769	P 5	器台	b: 3.4 褐色	4孔、91C242 小型	YP807 91A 31	L- 7区	甕	ぶい橙色	交互刺突文・直線文 ・弧線文・外面縄文
YP770 91C240	P- 5区	小型 器台	a: 9.8 b: 2.5 c:10.4 h:(9.0)	3孔、浅黄褐色	YP808	N 4	?	c:(6.0) 浅黄橙	外底面圧痕 91A 33
YP771	2区	甕	91A23 褐色	外面条痕、南側下部	YP809 91A 10	E- 9区	甕	a:14.2 淡黄色	内面口縁端部刻目、 外面口縁端部煤付着
YP772 91A 3	2号 整穴	甕	浅黄褐色	内面綾杉文地 南側下部	YP810 91A 8	I- 6区	甕	外面煤付着 褐色	内面口縁部綾杉文・ 斜行短線文
YP773 91A 5	4号 整穴	甕	a:19.2 ぶい黄褐色	外面煤付着 北側埋土	YP811 91A 9	F- 11区	甕	a:16.2 黄褐色	口縁端部刻目、外面 煤付着
YP774 91A 6	4号 整穴	甕	a:13.4 暗褐色	外面煤付着 西側埋土	YP812 91A 7	H- 11区	壺?	a:23. 0 褐色	内面口縁部綾杉文地
YP775	4区	甕	91A24 褐色	外面条痕、北側下部	YP813 91A 2	G- 10区	甕	a:11.8 c: 5.4 h:18.0 褐色	口縁端部刻目
YP776 91A 21	10号 整穴	甕	c: 7.8 浅黄褐色	外面胴部条痕・底部 簾状圧痕、西側下部					
YP777	10区	?	91B 3 褐色	外面縄文、東側埋土					

第3章 谷内ブンガヤチ遺跡

番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特 記 事 項	番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特 記 事 項
YP814 91A 11	E-9区	甕	a:18.6 浅黄橙色	外面口縁端部刻目、 外面煤附着	YP847	D 8	壺	b:23.4 c: 6.5	浅黄橙色 87B150
YP815	G 11	甕	91A4 橙色	内面口縁端部刻目	YP848	G 10	壺	a:12.8	浅黄橙色 91C139
YP816 91C 5	F-10区	甕	a:22.0 橙色	外面口縁部擬凹線 8	YP849	F 10	壺	a:13.8 b: 17.2	にぶい黄橙 90C150
YP817 87B144	H-7区	甕	a:18.3 外面煤 付着 浅黄橙色	外面口縁部擬凹線 3 外面肩部列点文	YP850	C 7	壺	a:12.6 b:(19)	橙色 87B147
YP818 91C158	I-9区	甕	a:16.8 外面煤 付着 浅黄橙色	外面口縁部擬凹線 5 外面肩部刻目	YP851 87B148	D 6 - 7	壺	a:11.6 浅黄橙色	外面口頸部赤彩文様 (詳細不明)
YP819 87B143	D-7区	甕	a:18.6 にぶい黄橙色	外面口縁部擬凹線 8	YP852	F 9	壺	a:14.5 b:20.2	浅黄橙色 91C155
YP820 91C152	F-10区	甕	a:20.0 b:23.0 にぶい橙色	外面口縁部擬凹線 5 外面煤附着	YP853	F 10	壺	a:16.8 91C186	橙 外口縁擬凹線 6
YP821	F-10区	壺?	a:16.6 浅黄橙色	外面口縁部擬凹線 6 外面煤附着	YP854 87B152	地点 不詳	壺	a:16.0 第1 次(1985)調査区	外面口頸部刻目 にぶい黄橙色
YP822 87B122	C-8区	甕?	浅黄橙色	外面肩部波状文 2 外面煤附着	YP855 91C153	地点 不詳	壺	b:17.2 第2 次(1986)調査	外面頸部～胴部記号 文
YP823 87B101	C-6区	甕	a:16.3 にぶい橙色	外面口縁部刻目 外面煤附着	YP856 91C332	L-7区	壺	a:12.8 b:18.4 橙色	外面煤・内面炭化物 附着
YP824 91C160	F-10区	鉢?	a:19.0 b:17.5 浅黄橙色	外面口縁部・肩部刻 目	YP857	G 9	壺	外口頸部竹管文	橙色 91C182
YP825 91C159	G-11区	甕	a:17.4 浅黄橙色	外面口縁部刻目 外面煤附着	YP858 91C183	E 9 G 11	壺	にぶい黄褐色	外面頸部?赤彩文様
YP826 87B110	地点 不詳	甕	a:17.5 第1 次(1985)調査区	外面口縁部刻目 灰白色	YP859	J 8	壺	a:21.0 橙色	91C154
YP827 87B145	D-7区	甕	a:19.4 浅黄橙色	外面口縁部刻目	YP860 91C178	G-10区	壺	外面口縁部右下がり のナデ→上部横 の沈線・下部横 方向の沈線	がりのハケ→下部横 先による左下がり の沈線 浅黄橙色
YP828 91C181	J-9区	甕	a:15.0 橙色	外面肩部叩き目	YP861 91C309	地点 不詳	壺	a:11.2 b:18.4 c: 3.0 h:15.8 浅黄褐色	第2次(1986)調査区 外面・内面口縁部赤 彩、外面煤状物附着
YP829	G 7	甕	a:17.6 灰黄褐	外面煤附着 87B124	YP862 91C279	N-7区	壺	a:11.8 浅黄褐色	外面・内面口頸部赤 彩
YP830 87B125	地点 不詳	甕	a:17.9 第1 次(1985)調査区	外面煤附着 浅黄色	YP863 87B154	D 6 - 7	壺	外面三日月形刻突 文列(頸部2列、胴 部上位3、下位4列)	浅黄褐色
YP831 87B149	F-7区	甕	a:15.6 b:19.0 淡赤橙色	外面煤・内面炭化物 附着(内外面とも境 界部が非常に明瞭)	YP864 91C112	F-8区	壺	a:26.6 浅黄褐色	外面口縁部竹管文2 列(~)
YP832	C6-7	甕	a:17.9 橙色	87B151	YP865 91C331	J 9 - 10	壺	a:15.0 b:(25) にぶい黄褐色	外面・内面口縁部赤 彩
YP833 91C231	地点 不詳	甕	a:17.8 第4次 (1988)調査北東	外面肩部刻目 外面煤附着 橙色	YP866 91C294	Q6-7 60溝 66溝	壺	b:29.6 にぶい黄褐色	外面突帯+刻目、直 線文、直線文、綾 彩文、直線文、綾 彩文
YP834 91C157	G-10区	甕	a:14.2 b:13.2 浅黄褐色	外面煤附着	YP867 87B127	AB-3 ・4・5	蓋	a: 3.4 にぶい橙色	外面赤彩
YP835 91C330	F-9区	甕	a:15.4 b:16.2 にぶい黄褐色	外面煤・内面炭化物 附着	YP868	F 8	壺	浅黄橙 91C185	外面円形浮文
YP836	H 7	壺	a:12.4 浅黄橙	87B106	YP869 91C223	地点 不詳	壺	第4次(1988)西 調査区 浅黄橙	外面頸部突帯+逆J (し)字状渦文
YP837 91C333	G-11区	甕	a:15.5 b:18.7 c: 4.8 h:22.0	外面肩部刻目、外面 煤附着、にぶい黄橙	YP870 91C179	K-7区	鉢?	内外面赤彩 橙色	外面J(し)字状渦 文+鋸歯文(R)3 段以上
YP838 87B123	A.B- 3・4	甕? 底部	c: 3.0 浅黄橙色	外底面は不整多角形	YP871 91C180	F-9区	壺	外面・内面頸部 赤彩 橙色	外面肩部竹管文2段
YP839 87B118	地点 不詳	鉢? 底部	c: 2.5 第1 次(1985)調査区	淡黄色	YP872 91C135	F-10区	壺	a: 5.8 b:11.9 浅黄褐色	外面・内面口頸部上 位赤彩
YP840 87B116	D 6 - 7	甕? 底部	c: 4.0 にぶい橙色	外面剝痕跡	YP873 91C140	M-7区	壺	a: 6.7 浅黄褐色	外面・内面口頸部上 位赤彩
YP841 87B115	G-7区	甕底部	c: 2.9 浅黄橙色	外面煤?附着	YP874 91C311	K-7区	壺	a:10.8 b:14.2 c: 3.0 h:16.7	にぶい橙色
YP842	F 7	底部	c: 5.6 橙色	甕? 87B117	YP875	F 10	壺	a:12.6 b:12.8	にぶい黄橙 90C148
YP843 87B126	D 6 - 7	甕? 底部	c: 6.8 浅黄褐色	内面炭化物?附着	YP876 91C229	J.K- 8・9	壺	b:12.2 c: 2.5 浅黄褐色	内外面赤彩
YP844 87B120	地点 不詳	甕? 底部	c: 2.1 にぶい赤褐色	外面煤附着	YP877 91C164	F-9区	甕	a:12.4 b: 12.1 c:(3.4)h:(11)	外面煤附着 淡 褐色
YP845 91C143	I-9区	甕? 底部	c: 2.7 浅黄褐色	外底面記号文	YP878 87B113	地点 不詳	甕	a:12.8 b:12.8 赤褐色	外面煤附着 第1次 (1985)調査区
YP846 91C150	H-8区	鉢? 底部	c: 5.3 橙色	外底面記号文、外底 面を除き赤彩	YP879 91C167	G-10区	鉢	a:16.9 b:13.5 c: 4.6 h: 8.5	にぶい橙色
					YP880	G 7	鉢	a:16.6 橙色	87B114

第4節 遺構外他出土土器類

番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特記事項	番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特記事項
YP881 91C142	F-9区	鉢	a:14.2 b:3.8 c:5.4 h:6.8	浅黄橙色	YP915 91C146	J-9区	有孔鉢	c:3.6 にぶい黄橙色	底部焼成前穿孔1、 径7mm
YP882 87B121	地点不詳	鉢?	b:3.9 c:3.8 灰白色	第1次(1985)調査区	YP916 91C144	F-10区	有孔鉢	c:3.3 橙色	底部焼成前穿孔1、 径10mm
YP883	B6	鉢?	b:4.0 c:4.8	浅黄橙色 87B136	YP917 91C285	Q-7区	土鉢	長:3.2 幅:3.4 明褐色	重さ:25.3g 径9mm
YP884	H10	鉢?	b:5.1 c:5.4	灰黄褐色 91C148	YP918 91C227	M-6区	土鉢	長:3.1 幅:3.4 浅黄褐色	重さ:32.2g 径9mm
YP885	G9	鉢	b:3.3 c:4.7	浅黄褐色 91C151	YP919 91C118	L-7区	土鉢	長:3.4 幅:3.7 にぶい橙色	重さ:36.1g 径5mm
YP886 87B119	H-7区	鉢?	b:4.5 c:4.5 淡褐色	内外面赤彩	YP920 87B133	地点不詳	土鉢	長:2.5 幅:3.1 重:20.5g灰黄褐	径7mm 第1次(1985)調査区
YP887 91C174	J-7区	鉢	橙色	外面体部に曲線状の刺突列	YP921	O6	高杯	a:27.2 91C230	にぶい黄橙色
YP888 87B112	C-6区	蓋	a:2.7 c:11.0 h:4.2 浅黄橙	鈕部に孔1、径13mm 外面赤彩・内面?	YP922	F10	高杯	b:4.9 91C122	浅黄褐色
YP889 87B138	C6-7	蓋	a:2.0 b:8.7 浅黄褐色	外面赤彩	YP923	D6-7	高杯	a:26.0 浅黄橙	87B111
YP890 91C117	H-8区	蓋	b:7.8 c:5.7 浅黄褐色	外面赤彩	YP924 90C149	E9 F10	高杯	a:31.8 赤褐色	口縁端部赤彩
YP891 91C115	1J6-7・8	蓋	a:(2.5) c:8.6 h:(3.7) 浅黄橙	外面赤彩	YP925 91C284	L-7区	高杯	a:25.0 浅黄褐色	内面赤彩・外面赤彩 文様
YP892 91C114	G-10区	蓋	a:2.4 c:8.2 h:2.9 浅黄橙	内外面赤彩	YP926 91C131	I8 J7	高杯	a:30.4 内外面 赤彩(全面かど うかは不明)橙	体部外面に環状把手 (残存1) YP930と 同一個体の可能性有
YP893 91C113	G-10区	蓋	a:2.2 c:8.1 h:3.3 浅黄橙	内外面赤彩	YP927 91C121	G-10区	高杯	a:29.0 浅黄褐色	体部外面屈曲部沈線 3、内外面赤彩
YP894 87B134	D-7区	蓋	a:1.8 c:6.9 h:3.0 橙色	外面赤彩	YP928 91C280	L-8区	高杯	a:31.2 灰白色	口縁端部V字状刺突 列2、内外面赤彩痕
YP895	L8	蓋	a:2.6 浅黄橙	内外面赤彩 91C283	YP929	K7	高杯	b:5.2 浅黄橙	91C138
YP896 87B139	地点不詳	蓋	a:3.7 にぶい橙色	第1次(1985)調査区	YP930 91C133	M7-8	高杯	c:16.4 YP926と 同一の可能性有	外面赤彩(全面かど うかは不明) 橙色
YP897	F7	蓋	a:2.7 橙色	内外面赤彩 87B107	YP931	J6	高杯	c:22.0 浅黄橙	外脚端赤彩 91C134
YP898	F9	蓋	a:2.5 浅黄橙	内外面赤彩 91C119	YP932 87B109	B-6区	高杯	c:18.8 にぶい黄褐色	外面脚端部横V字状 刺突列・逆J(し) 字状・横V字状
YP899 91C120	J-7区	蓋	a:4.5 浅黄褐色	二孔一對結束孔 内外面赤彩	YP933 87B102	C-7区	高杯	c:20.0 外赤彩 浅黄褐色	外横V字状刺突列4 段、径1~径10mm
YP900 87B128	地点不詳	蓋	a:2.9 橙色	第1次(1985)調査区 外面赤彩	YP934 87B153	地点不詳	高杯	第1次(1985)調 査区 浅黄褐色	外横V字状刺突列・ 斜線帯、外面赤彩
YP901 87B135	地点不詳	蓋	a:2.9 浅黄褐色	第1次(1985)調査区 外面赤彩	YP935 91C176	D-8区	高杯	浅黄褐色	外面脚端部横V字状 および半截竹管状刺 突列3
YP902	C7	蓋	a:2.3 浅黄橙	87B129	YP936 87B104	地点不詳	高杯	第1次(1985)調 査区 浅黄褐色	外面脚端部D類スタ ンプ紋列、径1~ 径不明
YP903 92C1	地点不詳	?	最大径4.9cm 不明土製品	第2次(1985)調査区 灰白 外面斜線帯	YP937	F9	高杯	a:26.4 浅黄橙	91C127
YP904 91C277	N-7区	把手付鉢	c:5.4 浅黄褐色	外面赤彩	YP938	H8	高杯	a:19.4 浅黄橙	91C129 内外面赤彩
YP905	G9	鉢	c:3.4 91C149	にぶい黄褐色	YP939 87B130	A,B-3・4	高杯	b:3.1 浅黄褐色	脚孔3・径15mm
YP906 91C278	N-7区	小型鉢	a:6.3 c:4.1 h:4.3	にぶい橙色	YP940	I9	高杯	a:7.7 91C147	にぶい黄褐色 赤彩
YP907 91C282	L-8区	小型鉢	a:5.2 c:3.2 h:2.5 灰黄褐		YP941 87B143	地点不詳	脚部	b:3.8 c:14.4 浅黄褐色	第1次(1985)調査区
YP908	E9	蓋	91C173 橙色	結束孔1~、径6mm	YP942 87B141	地点不詳	脚部	b:3.9 c:11.6 褐色	第1次(1985)調査区
YP909 91C308	F-10区	鉢	a:20.7 c:(2.7) h:10.2	有孔鉢の可能性が僅 かに残るにぶい褐	YP943 91C281	M-7区	脚部	c:16.0 浅黄褐色	脚部孔二孔一對二組 計8・径8mm
YP910 91C177	I7-8	鉢?	橙色 体部に径8mm の焼成前穿孔→浅 黄褐色を呈する粘土 を外面から充填		YP944 91C125	I-9区	器台	b:4.9 c:10.3 浅黄褐色	脚部孔二孔一對一組 計4・径4mm
YP911 91C168	F-9区	有孔鉢	a:16.5 h:11.1 浅黄褐色	底部焼成前穿孔1、 径11mm	YP945 87B140	D-8区	器台	b:4.8 c:21.4 にぶい褐色 外面赤彩、脚部 孔4・径9mm	外面刻目列・沈線3 ・横V字状刺突列・ 沈線4・竹管文列・ 沈線4
YP912 91C228	K-6区	有孔鉢	浅黄褐色	底部焼成前穿孔1、 径5mm	YP946	C6-7	器台	b:5.0 にぶい黄褐色	脚部孔3・径12mm、 外面・内面受部赤彩
YP913 91C145	G-10区	有孔鉢	浅黄褐色	底部焼成前穿孔1、 径6mm					
YP914 91C141	G-9区	有孔鉢	a:17.0 c:(5.3) h:(15.4) にぶい黄褐色	底部に焼成前の穿孔 5以上、各孔の径は 7mm前後					

番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項	番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項
YP947 91C132	F-9区	器台	c:15.0 淡橙色 外面赤彩	脚部孔3・径7mm、 外面脚部擬凹線6	YP950 91C184	H-9区	結合器	b:11.8 外面 内面受部 赤彩 橙	体部に兩滴の透穴8 ? (正受部・垂 ? 刻目列2)
YP948 91C162	G-9区	器台	a: 8.5 b: 3.5 c:11.2 h: 9.5	浅黄橙色	YP951 91C161	I-9区	結合器	a:16.6 b: 9.4 c: 3.7 d:11.5 h: 8.9 橙	脚部孔3・径8mm
YP949 87B142	G-7区	器台	a: 9.0 b: 3.5 c:10.6 h: 8.7	浅黄橙色、脚部孔4 ・径11mm					

(a:口径・蓋鈕部径 b:胴径・蓋最大径 c:高台径・底径・蓋口径 h:器高)

番号整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)	番号整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)
YP 952	Q 13	須恵器壺 a:40.8 b:62.4 91D121 灰白色	YP 979	FG-7	須恵器杯蓋 c:16.0 87C161 灰色
YP 953	Q 13	土師器有台碗 c: 6.6 91D164 淡赤橙	YP 980	I7-8	須恵器杯蓋 a: 3.1 91D 45 灰白色
YP 954	Q 13	土師器無台碗 c: 6.0 91D586 浅黄橙	YP 981	F 7	須恵器 c:15.2
YP 955	Q 13	土師器無台皿 c: 3.6 91D152 浅黄橙	87C165	- 8	杯蓋 内面天井部記号文 (-?) 灰色
YP 956	Q 13	土師器無台皿 c: 3.8 91D141 淡赤橙	YP 982	I J	須恵器
YP 957	B 6	須恵器高杯 a:(11.8) 87C149 灰白色	91D 54	- 8	杯蓋 内面天井部記号文 (-?) 灰色
YP 958	G-9区	須恵器 a: 1.5 b:10.6 c: 7.2 h: 3.7 杯蓋 灰白色	YP 983	H-7区	須恵器 a: 3.5 杯蓋 内面天井部記号文 (x) 灰色
YP 959	Q-8区	須恵器 b:12.0 c:10.4 杯蓋 (身?) 灰白色	YP 984	地点	須恵器 a: 2.3 第1次(1985)調査区
YP 960	地点	須恵器 b:10.2 c: 8.2 杯蓋 第1次(1985)調査区 灰色	87C167	不詳	杯蓋 内面天井部記号文 (大) 灰色
YP 961	C-6区	須恵器 a: 1.6 b:10.9 (c: 9.0) h: 3.2 杯蓋 灰色	YP 985	B 6	須恵器杯蓋 内天井部記号文 (x) 87C171 灰
YP 962	N-4区	須恵器 b:12.2 c:10.1 杯蓋 灰色	YP 986	H-7区	須恵器 杯蓋 内面天井部記号文 (x?) 灰色
YP 963	A.B-3-4	須恵器 a: 1.6 b:11.2 (c: 8.6) h:(1.8) 杯蓋 灰色	YP 987	E 7	須恵器 a:11.0 c: 5.6 h: 4.0 有台杯 外面体部記号文 (!) 灰色
YP 964	地点	須恵器 a:12.2 b:12.4 蓋の可能性もある 碗? 第1次(1985)調査区 灰色	YP 988	F-7区	須恵器 a:10.2 c: 7.4 h: 3.8 有台杯 暗赤褐色
YP 965	H 9	須恵器高杯? a:11.9 91D 77 灰色	YP 989	地点	須恵器 a:10.4 c: 6.4 h: 3.9 有台杯 第1次(1985)調査区 灰色
YP 966	地点	須恵器 a:10.8 c: 6.4 h: 3.3 無台杯 第1次(1985)調査区 青灰色	YP 990	H-8区	須恵器 a:13.0 c: 9.1 h: 4.2 有台杯 第1次(1985)調査区 灰色
YP 967	地点	須恵器 a:11.6 c: 7.8 h: 3.7 無台杯 第1次(1985)調査区 にぶい赤褐色	YP 991	G 4	須恵器 a:13.4 c: 7.6 h: 3.5 有台杯 灰色
YP 968	H 7	土師器碗 a:12.0 87C82 内外面赤彩 橙	91D372	- 5	
YP 969	G-10区	土師器 a:15.6 高杯 外面赤彩・内面黒色処理 橙	YP 992	K 7	須恵器 a:13.7 c: 7.8 h: 3.6 有台杯 灰白色
YP 970	C 6	土師器碗 c: 9.0 87C83 内外面赤彩 橙	YP 993	I-9区	須恵器 a:13.0 c: 7.3 h: 4.1 有台杯 灰白色
YP 971	I 7	土師器高杯 91D72 内外面赤彩 浅黄橙	YP 994	J-9区	須恵器 a:13.6 c: 8.8 h: 4.0 有台杯 灰白色
YP 972	H 8	土師器高杯 91D70 内黒色処理 浅黄橙	YP 995	G-8区	須恵器 a:12.8 c: 8.2 h: 3.2 有台杯 灰白色
YP 973	地点	須恵器 a: 2.2 杯蓋 第5次(1989)調査? 灰色	YP 996	G-7区	須恵器 a:11.3 c: 8.0 h: 4.2 有台杯 灰白色
YP 974	L 7	須恵器杯蓋 c:14.2 91D 53 灰色	YP 997	地点	須恵器 c: 9.6 有台杯 第1次(1985)調査区 灰色
YP 975	M 7	須恵器杯蓋 c:13.0 91D 49 灰色	YP 998	G-7区	須恵器 c: 6.3 有台杯 暗青灰色
YP 976	K7-8	須恵器杯蓋 c:14.0 91D 48 灰白色	YP 999	G-7区	須恵器 c: 8.4 有台杯 灰色
YP 977	E7-8	須恵器杯蓋 c:13.9 87C168 灰白色	YP1000	G-7区	須恵器 c: 8.4 有台杯 灰色
YP 978	A.B-3-4	須恵器 c:12.6 87C166 杯蓋 灰色	YP1001	G-7区	須恵器 c: 8.2 有台杯 外面底部記号文? (-?) 灰色

第4節 遺構外他出土土器類

番号整理No.	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)	番号整理No.	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)
YP1002 91D 52	G-11区	須恵器有台杯 c: 7.2 外面底部記号文 (×) 灰色	YP1033 87C 84	E 7 ・ 8	土師器無台碗 c: 7.6 内面黒色処理? 橙色
YP1003 91D 47	G-11区	須恵器有台杯 c: 7.8 外面底部記号文 (-?) 灰赤色	YP1034 87C 81	C-8区	土師器無台皿 c: 5.6 橙色
YP1004 87C139	G-7区	須恵器有台杯 a:16.4 c:11.4 h: 6.7 灰色	YP1035 91D 99	J-9区	土師器有台碗 a:13.4 c: 5.4 h: 4.1 浅黄橙色
YP1005 91D170	地点不詳	須恵器有台杯 c: 7.8 外面底部記号文 (×) 第4次西(1988)調査区 灰色	YP1036 91D171	地点不詳	土師器無台皿 c: 4.1 淡黄色 第4次(1988)西調査区 底部内面に二次的な使用痕 (溝状の擦痕: 幅11~12、深さ4mm)
YP1006 91D 35	G-7区	須恵器有台杯 c: 7.2 灰白色	YP1037 87C152	A, B-3・4	須恵器甕 a: 31.0 表面褐灰色・内部灰色 外面沈線4・波状文2
YP1007 90D107	B-4区	須恵器有台碗 c: 5.4 外面底部回転糸切り痕 灰色	YP1038 87C154	地点不詳	須恵器甕 a: 11.0 第1次(1985)調査区 灰色
YP1008 91D 51	F-9区	須恵器有台杯 c: 8.6 外面底部記号文 (-?) 灰色	YP1039 87C178	地点不詳	須恵器甕 a: 8.9 第1次(1985)調査区 灰色
YP1009 87C144	D-7区	須恵器有台杯 c:10.0 灰色	YP1040 91D 33	G-9区	須恵器甕 a: 33.0 灰色
YP1010 87C147	地点不詳	須恵器有台杯 c: 7.4 第1次(1985)調査区 灰色	YP1041 91D 46	I 6 ・ 7	須恵器甕 外面波状文3~ 灰色
YP1011 91D 39	G-9区	須恵器無台杯 a:11.1 c: 8.3 h:3.0 灰白色	YP1042 91D 68	H-7区	須恵器平瓶? a:(14.0) 外面沈線2 灰色
YP1012 87C155	E 7 ・ 8	須恵器無台杯 a:12.0 c: 8.0 h:3.0 灰白色	YP1043 91D462	Q-7区	須恵器壺? c: 11.8 灰色
YP1013 87C158	H 7	須恵器無台杯 a:11.4 c: 8.6 h:2.5 灰色	YP1044 91D 38	M 7 ・ 8	須恵器壺 c: 8.8 灰色
YP1014 87C159	E 7 ・ 8	須恵器無台杯 a:12.0 c: 8.4 h:3.1 灰色	YP1045 91D 36	J-9区	須恵器鉢 a: 21.4 b:20.7 灰白色
YP1015 87C160	C-6区	須恵器無台杯 a:12.0 c: 8.0 h:3.4 灰色	YP1046 87C153	D 7 ・ 8	須恵器甕 a: 26.5 外面沈線2 灰色
YP1016 87C174	E 7 ・ 8	須恵器無台杯 外底記号文 (-?) 灰白色	YP1047 91D146	地点不詳	珠洲壺 a:20.0 第3次(1987)調査区 灰色
YP1017 87C172	H-7区	須恵器無台杯 c:11.0 外底記号文 (-?) 灰白色	YP1048 87C179	地点不詳	須恵器双耳埴 c:24.0 第1次(1985)調査区 灰色
YP1018 87C173	C-7区	須恵器無台杯 外底記号文 (×) 灰白色	YP1049 91D 44	I-9区	須恵器長頸瓶 c:21.8 灰色
YP1019 87C175	B-6区	須恵器無台杯 c: 9.4 外底記号文 (-?) 灰白色	YP1050 87C181	AB-3 ・ 4	須恵器鉢 a:23.4 灰白色
YP1020 91D 50	G-9区	須恵器無台碗 c: 6.6 灰色	YP1051 91D460	Q-7区	須恵器横瓶 (c: 9.0) 灰白色
YP1021 91D465	N-9区	須恵器無台皿 a:(14.8) c:12.0 h:(1.9) 灰白色	YP1052 91D 37	I 7 ・ 8	須恵器壺 c: 7.6 灰色
YP1022 87C183	E-7区	須恵器無台皿 a: 14.0 c:10.0 h: 1.9 暗青灰色	YP1053 87C 86	G-7区	土師器甕 a:14.6 b:13.9 橙色
YP1023 87C 80	A, B-3・4	土師器有台碗 a: 14.6 c: 7.3 h: 5.3 浅橙色 外底面回転糸切り痕 内面黒色処理	YP1054 87C 89	A B-3 ・ 4	土師器甕 a:16.0 b:16.4 橙色
YP1024 91D 71	G-9区	土師器有台碗 c: 6.8 浅黄橙色 外底面回転糸切り痕 内面黒色処理	YP1055 87C 85	地点不詳	土師器甕? a:20.0 第1次(1985)調査区 橙色
YP1025 91D485	P-7区	土師器有台碗 c: 9.0 橙色	YP1056 87C 87	A B-3 ・ 4	土師器甕 a:18.4 浅黄橙色
YP1026 87C 77	地点不詳	土師器有台碗 c: 7.8 第1次(1985)調査区 浅橙色	YP1057 91D326	K-8区	土師器甕 淡黄色
YP1027 87C 75	G-7区	土師器有台碗 c: 7.4 橙色	YP1058 91D 73	I-8区	土師器甕 (c:14.0) 浅黄橙色
YP1028 87C 74	F-8区	土師器有台碗 c: 6.9 橙色	YP1059 91D 74	J-9区	輪羽口 外径:6.5 内径:3.5 灰白色
YP1029 87C 79	E, F-6・7	土師器有台碗 c: 5.6 内面黒色処理 にぶい橙色	YP1060 91D 67	F-9区	製塩土器 外底面木葉痕 にぶい橙色
YP1030 87C 78	B-6区	土師器有台碗 c: 6.4 内面黒色処理 にぶい橙色	YP1061 87C 12	D 6 ・ 7	製塩土器 b: 3.0 c: 5.8 橙色
YP1031 91D519	地点不詳	棘軸陶器碗 c: 7.2 第5次(1989)西調査区 (硬質) 体部内外面・外面底部縁の軸は オリーブ灰色、素地は灰色	YP1062 91D610	F-10区	製塩土器 a:26.8 浅黄橙色
YP1032 91D327	I-5区	土師器無台碗 c: 5.4 内面黒色処理 橙色			

第3章 谷内ブンガヤチ遺跡

(a : 口径 b : 胴径 c : 高台径 h : 器高)

番号 整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)	番号 整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)
YP1063 87C 71	F-7区	土師器皿 a:8.2 c:4.2 h:2.1 橙色	YP1096	F 7	土師器皿 a: 8.8 c: 7.4 h:1.8 87C 67 橙色
YP1064 87C 71	F-7区	土師器皿 a:8.2 c:4.2 h:2.1 橙色	YP1097	L 4	土師器皿 a:10.0 h:2.3 91D308 灰白
YP1065 87C 70	F-7区	土師器皿 a: 9.6 c: 4.0 h:1.8 橙色	YP1098	Q 10	土師器皿 a: 8.8 h:1.7 91D123 灰白
YP1066 87C 73	F-7区	土師器皿 a: 8.4 c: 5.0 h:1.9 橙色	YP1099	N 9	土師器皿 a: 8.2 h:1.6 91D307 灰白
YP1067 91D493	O-7区	土師器皿 a: 8.8 c: 5.4 h:2.4 淡橙色	YP1100	N 9	土師器皿 a: 7.8 h:1.7 91D305 灰白
YP1068 91D 94	O-7区	土師器皿 a: 8.2 c: 4.9 h:1.8 橙色	YP1101	O 7	土師器皿 a: 8.8 h:1.5 91D492 橙色
YP1069 91D 92	FG-6	土師器皿 a: 7.8 c: 4.7 h:1.6 橙色	YP1102	O 7	土師器皿 a: 8.8 h:1.9 91D491 灰白
YP1070 91D134	地点不詳	土師器皿 a:16.0 c:10.2 h:2.5 灰白色 第3次(1987)調査区	YP1103	P 7	土師器皿 a: 8.2 h:1.6 91D501 灰白
YP1071	P 7	土師器皿 a:14.4 91D483 浅黄橙色	YP1104	P 8	土師器皿 a: 8.4 h:1.5 91D503 灰白
YP1072 91D310	P-9区	土師器皿 a:11.0 c: 8.1 h:2.4 灰白色	YP1105	P 8	土師器皿 a: 8.4 h:1.6 91D484 灰白
YP1073 91D304	L 3-4	土師器皿 a:10.0 c: 8.6 h:2.0 灰白色	YP1106	Q 7	土師器皿 a: 8.0 h:2.0 91D494 灰白
YP1074 91D313	P-9区	土師器皿 a:11.8 c: 8.3 h:2.3 灰白色	YP1107 91D422	N-9区	土師器皿 a: 8.3 浅黄橙色
YP1075 91D312	N-6区	土師器皿 a:10.9 c: 7.9 h:2.7 灰白色	YP1108 91D 95	FG 11区	土師器皿 a: 7.9 h:1.7 浅黄橙色
YP1076 91D309	N-7区	土師器皿 a:11.2 c: 8.0 h:2.5 灰白色	YP1109 91D482	P-9区	土師器皿 a: 9.0 h:1.7 灰白色
YP1077 91D137	地点不詳	土師器皿 a:10.5 c: 7.0 h:2.6 灰白色 第3次(1987)調査区	YP1110 91D499	Q-7区	土師器皿 a: 8.0 h:1.5 灰白色
YP1078 91D133	N-7区	土師器皿 a:11.0 c: 6.8 h:2.1 灰白色	YP1111 91D496	Q-7区	土師器皿 a: 8.6 h:1.7 灰白色
YP1079 91D487	P-7区	土師器皿 a:12.0 h:2.3 灰白色	YP1112 91D505	P-8区	土師器皿 a: 8.7 h:2.0 灰白色
YP1080 91D 93	I 7-8	土師器皿 a:10.7 c: 7.0 h:1.7 浅黄橙色	YP1113 91D138	P-12区	土師器皿 a: 7.2 h:2.0 灰白色
YP1081 91D497	Q-7区	土師器皿 a:11.0 h:1.7 におい黄橙色	YP1114 91D489	N-9区	土師器皿 a: 9.0 h:2.0 灰白色
YP1082	N 9	土師器皿 a:10.4 h:1.6 91D488 灰白	YP1115 91D502	P-8区	土師器皿 a: 9.6 h:2.0 灰白色
YP1083	M 7	土師器皿 a:10.6 h:1.4 91D 91 灰白	YP1116 91D 98	N-10区	土師器皿 a: 8.4 c: 4.6 h:1.8 浅黄橙色
YP1084	P 8	土師器皿 a:11.0 h:1.8 91D504 灰白	YP1117 87C 64	E-7区	土師器皿 a: 8.0 c: 7.0 h:1.7 浅黄橙色
YP1085	Q 8	土師器皿 a:11.0 h:1.8 91D507 灰白	YP1118 87C 65	E-7区	土師器皿 a: 8.0 c: 6.4 h:1.5 浅黄橙色
YP1086 91D140	Q-13区	土師器皿 a:12.0 灰白色	YP1119 87C 62	地点不詳	土師器皿 a: 8.0 c: 6.8 h:1.6 におい黄橙 第1次(1985)調査区
YP1087 91D 97	G-11区	土師器皿 a:11.6 h:1.8 浅黄橙色	YP1120 91D 96	J-9区	土師器皿 a: 7.6 c: 5.0 h:1.6 浅黄橙色
YP1088 91D306	L-8区	土師器皿 a: 8.6 h:1.7 灰白色	YP1121 91D 90	Q-12区	土師器皿 a: 8.0 h:1.5 浅黄橙色
YP1089 91D124	P-10区	土師器皿 a: 8.4 h:1.9 灰白色	YP1122 87C 66	E 7-8	土師器皿 a: 8.0 c: 7.0 h:1.5 浅黄色
YP1090 91D424	N-7区	土師器皿 a: 8.4 c: 6.0 h:1.3 浅黄橙色	YP1123 91D126	地点不詳	土師器皿 a: 8.2 h:1.7 灰白色 第3次(1987)調査区
YP1091 91D311	O-8区	土師器皿 a: 9.8 h:1.9 灰白色	YP1124 91D122	地点不詳	土師器皿 a: 8.0 h:1.8 灰白色 第3次(1987)調査区
YP1092 91D500	P-8区	土師器皿 a:10.8 c: 7.4 h:2.6 灰白色	YP1125 87C 63	地点不詳	土師器皿 a: 8.8 c: 7.4 h:1.8 黄橙色 第1次(1985)調査区
YP1093 91D506	P-8区	土師器皿 a:10.6 h:2.2 灰白色	YP1126 91D423	N-9区	土師器皿 a: 7.5 c: 6.1 h:1.6 褐灰色
YP1094 91D 89	N-10区	土師器皿 a: 8.5 c: 5.0 h:1.7 淡黄色	YP1127 87C 69	H-7区	土師器皿 a: 7.8 c: 6.8 h:1.4 浅黄橙色
YP1095 87C 68	H-7区	土師器皿 a: 8.2 c: 7.0 h:1.8 淡黄色	YP1128 91D425	L-9区	土師器皿 a: 9.0 c: 6.0 h:1.3 灰白色
			YP1129 91D490	O-7区	土師器皿? a: 8.8 h:1.9 灰白色
			YP1130 91D495	Q-7区	土師器皿 外底面墨書 灰白色

第4節 遺構外他出土土器類

番号 整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)	番号 整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)
YP1131	Q 8	珠洲壺 波状文+円形浮文 91D440 灰色	YP1173	M 3	越前插鉢 91D350 にぶい橙
YP1132	Q 12	珠洲壺 波状文2 91D 85 灰色	YP1174 91D110	地点 不詳	越前甕 a:29.2 b:37.6 褐色 鉄塗り 第1次(1985)調査区
YP1133	P 12	珠洲壺 波状文 91D151 灰白	YP1175	M 3	越前插鉢 91D333 にぶい赤褐
YP1134	O 8	珠洲羽釜 91D464 灰白	YP1176	L 4	越前插鉢 91D325 橙色
YP1135	P 8	珠洲壺 91D453 灰色	YP1177	Q 8	越前插鉢 91D458 淡黄色
YP1136	O 9	珠洲壺 91D454 灰色	YP1178	P 9	越前插鉢 91D371 橙色
YP1137	O 9	珠洲壺 91D451 緑灰	YP1179	LM10	越前插鉢 a:(39.0) 91D 88 明赤灰色
YP1138	L 10	珠洲壺 91D115 灰色	YP1180 91D517	Q - 7区	唐津插鉢 a: 29.4 橙色
YP1139	I 11	珠洲壺 91D118 灰色	YP1181 91D342	地点 不詳	唐津插鉢 第4次(1988)調査 にぶい赤褐色
YP1140 87C134	地点 不詳	珠洲壺 第1次(1985)調査区 灰色	YP1182 91D144	Q - 10区	唐津插鉢 a:30.3 赤褐色
YP1141	Q 8	珠洲壺 91D452 灰色	YP1183 91D 81	F G H 8	唐津插鉢 鉄釉 a:46.6 橙色
YP1142	Q 7	珠洲壺 91D455 灰色	YP1184 91D353	地点 不詳	唐津插鉢 鉄釉 a:30.6 赤褐色 第4次(1988)西調査区
YP1143	I 11	珠洲壺 91D119 緑灰	YP1185 91D324	M 3 ~ 5	唐津插鉢 鉄釉(a:34.0) 9 暗赤褐色
YP1144	D6-7	珠洲壺 87C135 灰色	YP1186 91D154	Q - 10区	唐津? 插鉢 にぶい赤褐色
YP1145	Q 12	珠洲壺 c:14.4 91D120 灰色	YP1187 91D349	地点 不詳	唐津插鉢 鉄釉 第4次(1988)調査 淡赤橙色
YP1146	Q 12	珠洲控鉢 a:23.6 91D 84 灰色	YP1188	M 5	唐津插鉢 鉄釉 91D472 赤灰色
YP1147 91D457	O - 9区	珠洲控鉢 a:23.6 c:12.8 h:11.2 青灰色	YP1189	Q910	唐津插鉢 鉄釉 91D479 赤橙色
YP1148	M 9	珠洲插鉢 91D341 灰色	YP1190	M 4	唐津插鉢 鉄釉 91D340 赤褐色
YP1149	Q 11	珠洲插鉢 91D 26 灰色	YP1191 91D 1	地点 不詳	唐津插鉢 c:10.6 第1次(1985)調査区 赤色
YP1150	H 3	珠洲插鉢 91D348 灰色	YP1192 91D108	地点 不詳	唐津插鉢 c: 9.6 第1次(1985)調査区 灰赤色
YP1151 91D456	O - 9区	珠洲插鉢 a:30.8 c:13.5 h:12.7 青灰色	YP1193 91D 82	地点 不詳	唐津插鉢 c:10.8 第2次(1986)調査区 赤橙色
YP1152	C 8	珠洲插鉢 87C132 灰色	YP1194 91D480	Q - 8区	唐津插鉢 c: 9.8 橙色
YP1153	Q 12	珠洲插鉢 a:29.0 91D 87 灰色	YP1195 91D481	Q - 9区	唐津插鉢 暗赤灰色
YP1154	L 10	珠洲插鉢 a:34.6 91D 80 灰色	YP1196 91D 2	地点 不詳	唐津插鉢 c:11.6 (鉄釉) 第1次(1985)調査区 赤灰色
YP1155	Q 12	珠洲插鉢 a:26.2 91D 83 灰色	YP1197 91D 78	J - 6区	唐津插鉢 c:14.8 赤灰色
YP1156	FG-7	珠洲插鉢 a:30.1 87C128 灰色	YP1199 91D127	P - 12区	瀬戸鉄釉天目碗 a:11.2 灰白色
YP1157	H 7	珠洲插鉢 87C131 灰色	YP1198 91D470	P - 8区	瀬戸灰釉碗 a:14.8 灰白色
YP1158 87C130	地点 不詳	珠洲插鉢 第1次(1985)調査区 灰色	YP1199 91D127	P - 12区	瀬戸鉄釉天目碗 a:11.2 灰白色
YP1159	H 7	珠洲插鉢 a:25.0 87C133 灰色	YP1200 91D513	O - 7区	瀬戸鉄釉天目碗 a:10.4 灰黄色
YP1160	M 10	珠洲插鉢 a:40.6 91D 86 灰色	YP1201 91D128	P - 12区	瀬戸鉄釉天目碗 a:11.7 c:3.9 h:6.9 灰白色
YP1161 87C127	地点 不詳	珠洲插鉢 a:31.4 c:12.1 h:14.0 灰色 第1次(1985)調査区	YP1202 87C121	地点 不詳	越中瀬戸鉄釉皿 a:12.3 c:3.7 h:3.6 赤褐色 第1次(1985)調査区
YP1162 91D509	P - 7区	珠洲插鉢 c:13.0 灰色 破断面研磨後再生利用	YP1203	R 12	越中瀬戸鉄釉皿 91D142 c:4.2 黄褐色
YP1163	E7-8	珠洲插鉢 c:13.4 87C129 灰色	YP1204 91D338	L - 5区	越中瀬戸鉄釉皿 a:13.0 c:6.0 h:3.2 灰白色
YP1164 91D459	O - 9区	珠洲壺 肩部外面線刻・刺突文 青灰色	YP1205 91D473	M - 5区	越中瀬戸鉄釉向付 a:10.6 c: 2.8 h:3.1 灰白色
YP1165	P 7	越前甕 91D511 橙色	YP1206 91D347	地点 不詳	越中瀬戸鉄釉向付 a:12.4 c: 7.8 h:5.3 灰白色 第4次(1988)調査
YP1166 91D114	Q - 12区	越前甕 オリーブ灰色			
YP1167 91D354	地点 不詳	越前甕 押印: 格子文 明褐色 第4次(1988)調査			
YP1168	Q 12	越前甕 押印: 格子文 91D111 橙色			
YP1169 91D117	Q - 12区	越前甕 押印: 格子+本 にぶい赤褐色			
YP1170 91D116	地点 不詳	越前甕 押印: 格子+本 オリーブ色 第2次(1986)調査区			
YP1171	Q 12	越前甕 押印: 格子文 91D113 淡黄色			
YP1172	Q 12	越前插鉢 c:15.4 91D102 橙色			

第3章 谷内ブンガヤチ遺跡

番 号 整理No	出 土 地 点	器 類 ・ 法 量 ・ 色 調 他 特 記 事 項 (cm)	番 号 整理No	出 土 地 点	器 類 ・ 法 量 ・ 色 調 他 特 記 事 項 (cm)
YPI207 91D413	Q-10区	越中瀬戸鉄軸向付 c:11.2 にぶい橙色	YPI239 91D508	J-5区	土師器七厘 上部辺(19.5) 下部辺(19.2) 橙色 h:19.4
YPI208 91D318	J K-5	越中瀬戸鉄軸印花皿 c:4.7 にぶい橙色	YPI240 91D471	L-5区	唐津鉄絵皿 a:10.8 c:4.6 h:3.4 灰白色
YPI209 87C 98	地点不詳	唐津? 無軸皿 a:11.7 第1次(1985)調査区 淡赤橙色	YPI241 87C111	地点不詳	唐津皿 a:11.3 c:3.4 h:2.8 灰色 第1次(1985)調査区
YPI210 91D328	L-4区	??? 鉄軸皿 a:9.3 c:5.2 h:2.8 にぶい橙色	YPI242 87C104	地点不詳	唐津皿 a:10.7 c:3.5 h:3.1 にぶい橙 第1次(1985)調査区
YPI211 91D315	Q-9区	瀬戸 灰軸皿 a:9.7 c:5.0 h:2.3 灰白色	YPI243 87C102	D 6・7	唐津皿 c:4.2 灰白色
YPI212 91D339	地点不詳	??? 鉄軸皿 a:10.0 c:5.8 h:2.8 第4次(1988)調査 橙色	YPI244 87C124	地点不詳	唐津皿 a:12.9 c:3.5 h:4.0 灰色 第1次(1985)調査区
YPI213 91D336	M-4区	瀬戸 灰軸皿 a:5.6 c:5.5 h:2.3 灰白色	YPI245 87C106	地点不詳	唐津皿 a:12.4 c:4.2 h:3.4 にぶい橙 第1次(1985)調査区
YPI214 91D345	L-5区	越中瀬戸鉄軸皿 a:10.8 c:4.8 h:2.3 にぶい橙色	YPI246 87C120	地点不詳	唐津皿 c:4.6 灰色 第1次(1985)調査区
YPI215 87C 90	地点不詳	越中瀬戸鉄軸皿 第1次(1985)調査区 a:10.9 c:4.3 h:1.9 灰白色	YPI247 91D 6	地点不詳	唐津皿 a:13.6 c:4.4 h:3.4 灰色 第1次(1985)調査区
YPI216 87C125	地点不詳	越中瀬戸鉄軸皿 第1次(1985)調査区 a:9.6 c:4.9 h:2.1 淡橙色	YPI248 87C118	C-6区	唐津皿 c:5.4 灰色
YPI217 87C 91	地点不詳	越中瀬戸鉄軸皿 第1次(1985)調査区 a:9.2 c:4.7 h:1.8 淡赤橙色	YPI249 87C113	地点不詳	唐津皿 a:11.9 c:3.7 h:4.8 淡赤橙 第1次(1985)調査区
YPI218 91D352	地点不詳	越中瀬戸鉄軸皿 第4次(1988)調査 a:11.1 c:5.0 h:2.6 にぶい橙色	YPI250 87C105	地点不詳	唐津皿 a:13.1 c:4.7 h:5.0 灰色 第1次(1985)調査区
YPI219 91D316	地点不詳	瀬戸灰軸皿 第4次(1988)調査 c:6.2 灰白色	YPI251 87C 94	地点不詳	唐津皿 c:3.9 灰黄色 第1次(1985)調査区
YPI220 91D323	P-4区	瀬戸灰軸おろし皿 灰白色	YPI252 87C 95	地点不詳	唐津皿 c:4.4 灰白色 第1次(1985)調査区
YPI221 87C 99	地点不詳	瀬戸灰軸盤 c:10.8 第1次(1985)調査区 灰白色	YPI253 87C103	地点不詳	唐津皿 c:4.1 灰白色 第1次(1985)調査区
YPI222 91D467	O P Q 8	瀬戸灰軸おろし皿(盤) a:26.2 c:12.4 h:7.5 灰白色	YPI254 91D300	L-3区	唐津鉄絵向付 a:13.0 c:4.1 h:3.9 灰色
YPI223 91D100	I-6区	瀬戸灰軸鉢? 灰白色	YPI255 91D314	L M-3	唐津鉄絵向付 灰色
YPI224 91D317	地点不詳	志野菊皿 c:8.0 第4次(1988)調査 灰白色	YPI256 91D155	地点不詳	唐津鉄絵向付 灰色 第3次(1987)調査区
YPI225 91D478	O-9区	瀬戸灰軸瓶子 灰白色	YPI257 91D101	地点不詳	唐津鉄絵鉢? 灰白色 第1次(1985)調査区
YPI226 91D106	I 7・8	瀬戸灰軸瓶子 c:11.4 灰白色	YPI258 87C110	B-6区	唐津杯? a:7.4 c:3.5 h:3.5 灰白色
YPI227 91D474	Q-7区	越中瀬戸壺 a:8.2 c:11.8 h:12.3 赤褐色	YPI259 91D466	P-9区	肥前陶器 銅緑釉皿 a:12.1 c:4.1 h:3.1 灰白色
YPI228 91D105	地点不詳	越中瀬戸壺 第1次(1985)調査区 a:12.0 c:15.8 h:12.0 灰赤色	YPI260 87C101	地点不詳	肥前陶器 銅緑釉皿 c:4.3 第1次(1985)調査区 灰色
YPI229 91D106	地点不詳	越中瀬戸壺 第1次(1985)調査区 a:8.1 c:7.6 h:5.9 灰赤色	YPI261 91D337	地点不詳	肥前陶器 銅緑釉皿 a:12.5 c:4.6 h:3.5 第4次(1988)調査 灰白色
YPI230 91D149	Q-13区	瓦質土器 鉢	YPI262 91D520	地点不詳	肥前陶器 銅緑釉皿 c:4.4 第5次(1989)調査 灰白色
YPI231 91D329	P 5 N 9	瓦質土器 羽釜?	YPI263 91D510	Q-7区	肥前陶器 銅緑釉皿 c:4.5 灰白色
YPI232 91D346	M 3・5	瓦質土器 鉢	YPI264 87C100	地点不詳	京焼系鉄絵皿 c:5.9 第1次(1985)調査区 灰白色
YPI233 91D153	Q-13区	瓦質土器 鉢?	YPI265 91D600	地点不詳	京焼系碗 c:5.9 第4次(1988)調査 灰白色
YPI234 91D150	地点不詳	瓦質土器 火鉢 第3次(1987)調査区	YPI266 91D598	L-5区	京焼系碗 c:4.6 灰白色
YPI235 91D104	F G-11	瓦質土器 火鉢 a:21.0	YPI267 91D344	地点不詳	京焼系碗 c:4.6 第4次(1988)調査 灰白色
YPI236 91D109	地点不詳	瓦質土器 火鉢 第1次(1985)調査区	YPI268 91D110	I-9区	京焼系碗 a:10.4 c:5.3 h:7.5 灰白色
YPI237 91D508	O-7区	土師器盤? a:29.4 c:19.4 h:6.5 浅黄橙色	YPI269	C 6	唐津碗 c:4.6 87C108 灰白
YPI238	N 5	土師器盤? 91D421 黄褐色	YPI270 91D599	地点不詳	京焼系碗 c:4.5 第4次(1988)調査 淡黄色

第4節 遺構外他出土土器類

番号整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)	番号整理No	出土地点	器類・法量・色調他特記事項 (cm)
YP1271 91D343	K-5区	肥前陶器染付碗 (陶胎染付碗) c:4.4 灰色	YP1303 91D169	地点不詳	刷毛目唐津鉢 第4次(1988)西調査区 c:10.5 にぶい橙色
YP1272	Q-9	肥前磁器染付皿 c:5.0 91D477 白色	YP1304 91D601	地点不詳	刷毛目唐津鉢 第4次(1988)調査 灰白色
YP1273 91D107	I-3-4-5	肥前磁器青磁皿 c:4.6 白色	YP1305 87C116	地点不詳	刷毛目唐津鉢 第1次(1985)調査区 a:21.0 にぶい赤褐色
YP1274 87C 97	地点不詳	肥前磁器染付皿 c:3.2 灰白色 第1次(1985)調査区	YP1306 91D476	Q-7区	刷毛目唐津鉢 c:10.7 灰赤色
YP1275 91D303	L-5区	肥前磁器染付小碗 a: 6.5 c:2.8 h:3.4 白色	YP1307 91D475	Q-9区	二彩手唐津鉢 YP1308と同一個体 c:14.0 灰黄色
YP1276 91D469	L-5区	肥前磁器染付小碗 a: 6.4 c:2.9 h:3.5 白色	YP1308 91D302	Q-9区	二彩手唐津鉢 YP1307と同一個体 c:14.0 灰黄色
YP1277 91D512	Q-7区	肥前磁器染付小碗 a: 5.6 c:2.4 h:3.6 白色	YP1309	O11	三島手唐津鉢 91D157 にぶい赤褐色
YP1278 91D 4	地点不詳	肥前磁器染付碗 第1次(1985)調査区 a:11.0 白色	YP1310 91D605	地点不詳	?陶器鉢 c:7.0 灰白色 (灰釉) 第4次(1988)調査
YP1279 91D521	地点不詳	肥前磁器染付碗 第5次(1989)西調査区 a:11.4 白色	YP1311 91D 7	地点不詳	?陶器鉢 c:7.0 淡赤橙色 (鉄釉) 第1次(1985)調査区
YP1280 91D330	O-5区	肥前磁器染付碗 a:11.5 灰色	YP1312 91D147	R-12区	東南アジア?陶器壺(褐釉) a:11.8 灰黄褐色
YP1281 87C114	地点不詳	肥前?磁器染付皿 第1次(1985)調査区 a: 9.4 c:3.7 h:2.5 白色	YP1313 91D105	I 6-7	白磁碗 c: 6.9 白色
YP1282 87C107	地点不詳	肥前磁器染付皿 第1次(1985)調査区 c:4.0 灰白色	YP1314 91D516	O-7区	白磁杯 a: 8.6 c: 6.9 白色
YP1283 87C 92	地点不詳	肥前磁器染付碗 第1次(1985)調査区 c:4.8 白色	YP1315 91D514	L-8区	白磁皿 c: 6.8 白色
YP1284 87C115	地点不詳	? ?磁器染付皿 第1次(1985)調査区 c:4.5 白色	YP1316 91D468	O-9区	白磁碗 c: 5.6 灰白色
YP1285 87C 96	地点不詳	肥前磁器染付碗 第1次(1985)調査区 c:4.8 白色	YP1317 91D320	地点不詳	青磁皿 c:4.2 灰白色 第4次(1988)調査区
YP1286 91D 5	地点不詳	肥前磁器染付皿 第1次(1985)調査区 c:4.8 白色	YP1318 91D156	Q-11区	青磁碗 a:16.8 c:4.2 灰色
YP1287 91D604	Q-7区	肥前?磁器染付皿 c:7.0 白色	YP1319 91D158	Q-12区	青磁碗 c:4.5 灰白色
YP1288 87C123	地点不詳	肥前磁器染付皿 第1次(1985)調査区 c:4.0 白色	YP1320 91D518	地点不詳	青磁碗 c:4.4 灰色 第5次(1989)調査
YP1289 91D522	地点不詳	肥前磁器染付皿 第1次(1985)調査区 a:14.2 白色	YP1321 91D319	Q-5区	青磁碗 c:5.1 灰色
YP1290 91D168	地点不詳	肥前磁器染付碗 第4次(1988)西調査区 a: 9.5 c:5.4 h:6.5 白色	YP1322 91D108	N-10区	青磁碗 a:13.0 c:5.1 h:7.2 灰白色
YP1291 91D334	O 5-6	肥前磁器染付碗 a: 8.6 c:3.7 h:6.1 白色	YP1323 87C119	地点不詳	青磁碗 a:16.6 灰白色 第1次(1985)調査区
YP1292 91D301	地点不詳	肥前磁器染付鉢 第4次(1988)調査 c:7.4 白色	YP1324 91D515	N-8区	青磁碗? 灰白色
YP1293 91D160	地点不詳	? ?磁器染付碗 第3次(1988)調査区 c:4.2 白色	YP1325 91D322	地点不詳	青磁皿 第4次(1988)調査 灰白色
YP1294 87C 93	地点不詳	? ?磁器染付碗 第1次(1988)調査区 a:10.8 c:4.9 h:5.4 白色	YP1326 87C122	地点不詳	青磁皿 a:11.3 c:5.4 h:2.6 灰白色 第1次(1985)調査区
YP1295 91D161	Q-11区	? ?磁器染付皿 a:14.0 c:7.7 h:3.6 白色	YP1327 91D103	Q-12区	瀬戸灰釉碗 a:11.8 c:5.2 h:6.6 灰白色
YP1296 91D162	Q-13区	? ?磁器染付皿 c:8.4 白色	YP1328 91D159	P-12区	瀬戸灰釉碗 a:11.6 灰白色
YP1297 91D109	Q-12区	肥前磁器染付皿 a:14.5 c:8.7 h:4.4 白色	YP1329 92D 1	地点不詳	肥前陶器染付碗 (陶胎染付碗) c:3.5 灰白色 第1次(1985)調査区
YP1298 87C126	地点不詳	肥前磁器染付皿 a:14.6 c:8.0 h:3.9 白色	YP1330 92D 2	K-11区	肥前陶器染付碗 (陶胎染付碗) c:3.6 灰白色
YP1299 91D335	地点不詳	刷毛目唐津鉢 第4次(1988)調査 a: 9.5 c:4.6 h:6.8 にぶい赤褐	YP1331 92D 3	P-9区	肥前陶器染付碗 c:3.7 灰白色 (陶胎染付碗)
YP1300 91D603	L-3区	刷毛目唐津碗 c:4.6 赤褐色	YP1332 92D 4	地点不詳	肥前磁器白磁紅皿 第1次(1985)調査区 a: 4.6 c:1.4 h:1.5 白色
YP1301 91D602	NOP-2-3	鉄絵唐津鉢 (a:34) にぶい橙色	YP1333 92D 5	地点不詳	肥前磁器白磁紅皿 第1次(1985)調査区 a: 4.4 c:1.2 h:1.4 白色
YP1302 91D606	地点不詳	唐津鉢 第4次(1988)調査 a:27.2 淡橙色	YP1334 92D 6	地点不詳	肥前磁器白磁紅皿 第1次(1985)調査区 a: 4.8 白色

第5節 石器・金属器・木器・他

1 概要

本節では、谷内ブンガヤチ遺跡から出土した石器・石製品78点(YS 1～78、石質については第7章第1節参照)、金属器・金属製品48点(YM 1～48)、木器・木製品83点(YW 1～83、樹種については第7章第7節、漆器塗膜については同章第8節参照)、粘土塊1点(YC 1)の計210点を報告する。木器・木製品については漆器・箸などほぼ総てを図化した器種もあるが、建築部材などわずかしかな図化できていないものもあり、特に柱根は標本的な扱いとなり問題を残した。出土状況については第2・3節で遺構出土品を中心にふれたため、本節では遺構外出土品を含め材質および器種別に報告する。個々の遺物の詳細は節末の観察表を参照されたい。

2 石器・石製品(第133～140図)

石斧類 太型蛤刃石斧(YS1)、両刃磨製石斧(YS 2)、環状石斧(YS 3)、扁平片刃石斧(YS 4)各1点が出土している。弥生時代中期(後半)を中心とするものであろう。

軽石製品 第12号竪穴式建物、第3号土坑、第10号土坑他から大小あわせて12点(YS8～19)を得た。主として弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

台石 第2号竪穴式建物から2点(YS21および未実測1点)、第7号竪穴式建物から1点(未実測)を得ている。

砥石類 計35点(YS5・22～47・52～59)を得ている。器種・所属時期が不明確な2点(YS5・52)は別として、ほとんどは中世～近世に属するものと考えられる。

石臼類 粉挽臼では上臼7点(YS60～66)、下臼7点(YS67～73)、茶臼では上臼1点(YS78)、下臼4点(YS74～77)が出土している。中世～近世に属するものであろう。

硯 3点(YS48～50)を得ている。中世～近世に属するものであろうか。

その他 打製石鏃(YS 6)、管玉(YS 7)、行火(YS20)、石板(YS51)各1点を得たほか、第1・3・10号竪穴式建物から素材石核・剝片が出土している。

3 金属器・金属製品(第141～144図)

鉄滓 総重量5,334 gを得、10点(YM38～47)を図化した。第3節でふれたとおり、主として古代に属するものと考えられる。

銭貨 第62号溝他から21枚(YM 1～20・40)を得たが、ほとんどは621年初鑄の開通元寶(YM 9～12)をはじめとした渡来(中国)銭であって、中世ないしは中世に属する可能性が高いものである。1636年初鑄の寛永通寶はわずかに1点(YM20)にすぎず、近世における本遺跡の性格の一端を物語るものといえる。

刀 類 腰(?)刀1点(YM36)、刀子(?)1点(YM33)、小柄1点(YM22)、鐔の一部1点(YM21)が出土している。所属時期は近世初頭頃が下限であろうか。

鎌 包含層より1点(YM37)を得ている。

釘 第1号小穴群(pit89121)他より2点(YM31・32)を得ている。

鋸 包含層より1点(YM28)を得ている。

煙 管 第16号掘立柱式建物柱穴(pit89244)より吸口1点(YM24)を得ている。

筭 第82号溝より1点(YM25)を得ている。

鑷 第1号小穴群(第33号土坑)より1点(YM26)を得ている。

燧 金 第17号掘立柱式建物柱穴(pit88014)より1点(YM29)を得ている。

器種不明 鉄製品4点(YM30・34・35・36)・銅(?)製品1点(YM27)・金銅(?)製品1点(YM23)を得ている。

4 木器・木製品(第145～155図)

漆 器 類 椀13点(YW57・59～61・63～71)、皿2点(YW56・62)、杓子1点(YW58)、器種不明1点(YW72)他を得ている(詳細は第7章第8節参照)。

箸 第50号溝他から13点(YW20・42～53)を得ている。

折 敷 類 不確実なものを含むが5点(YW4・10・14・26・36)を得ている。

曲 物 類 不確実なものを含むが、側板+底板1点(YW24)、側板1点(YW4)、底板9点(YW8・19・23・28～30・33・34・37)が出土している。

柄 杓 類 側板+底板1点(YW22)、底板2点(YW1・16)、柄3点(YW13・54・55)が出土している。

結 桶 類 側板2点(YW15・35)、底板4点(YW2・17・18・25)を得た。第50号溝出土のYW41も手(結)桶(釣瓶桶?)の把手であろう。

鍋 蓋 類 7点(YW5～7・9・21・31・32)を得た。第50号溝出土のYW39・40の2点も鍋蓋の把手であろう。

箕 第15号井戸より1点(YW11)を得ている。(竹)笹類製である。

柱 下部(柱根)3点(YW76～78)を実測した。

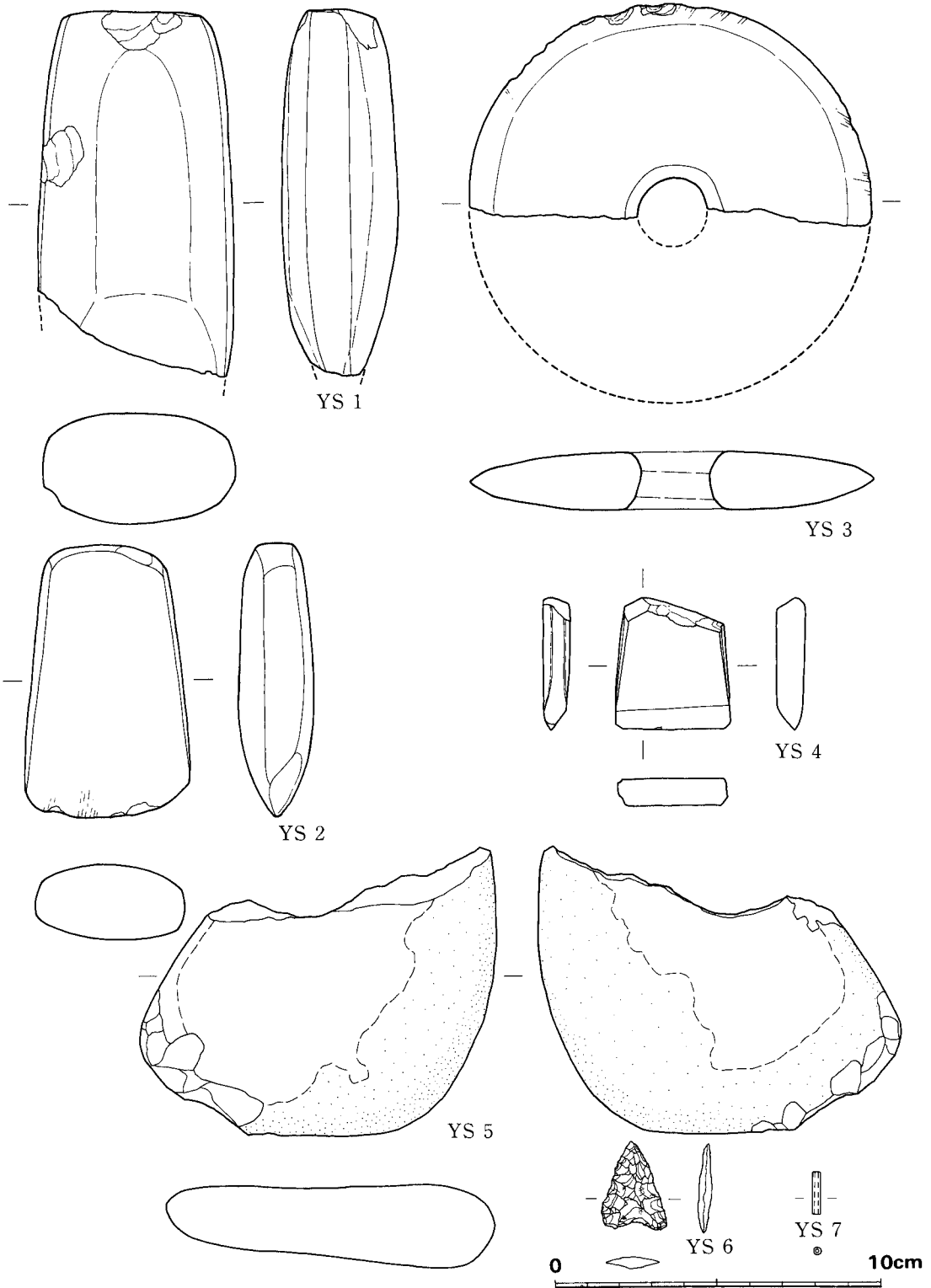
礎 板 第10号掘立柱式建物柱穴(pit88068)から1点(YW73)を得ている。

杭 第50号溝出土の5点(YW79～83)を実測した。

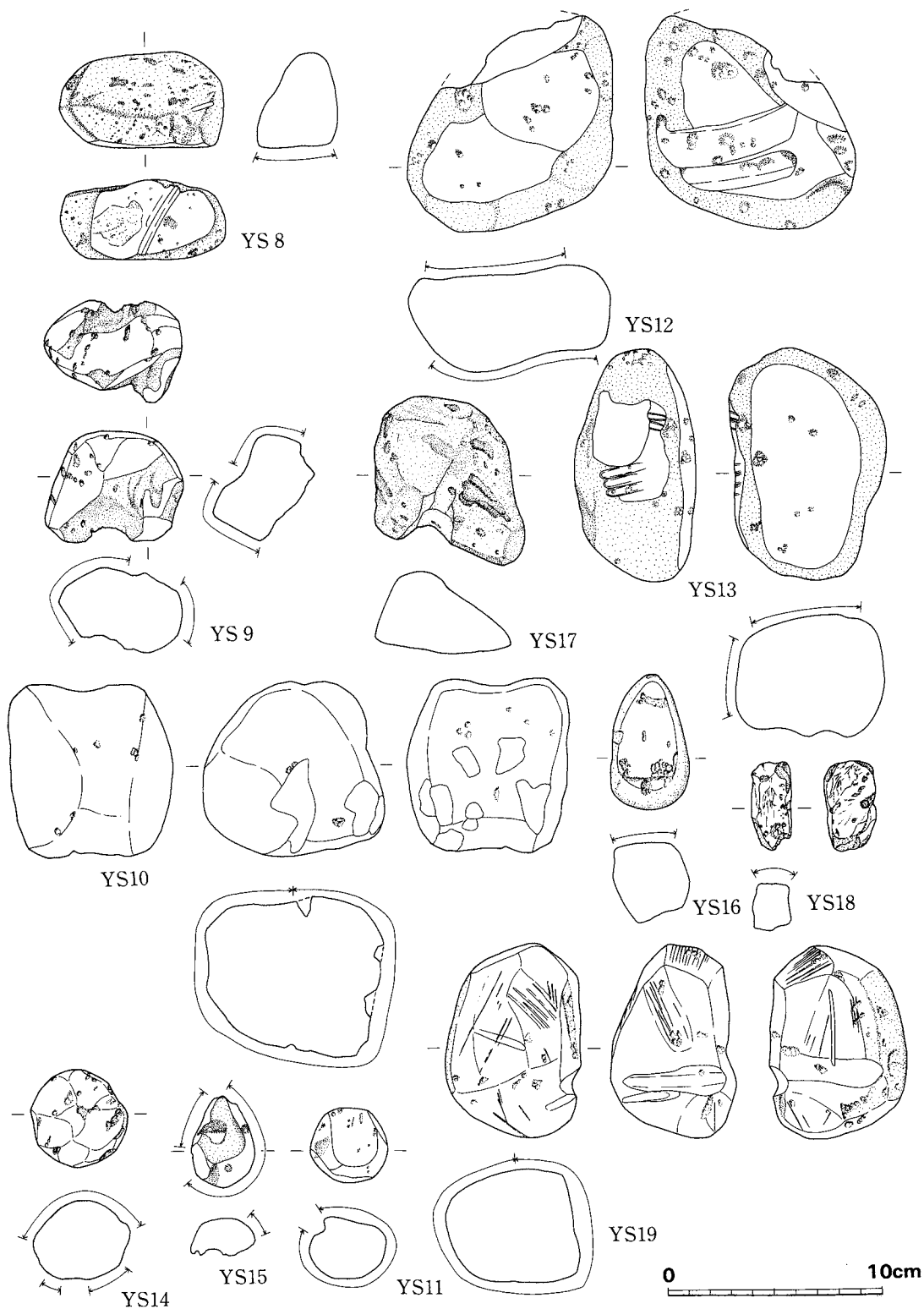
器種不明 5点(YW12・27・38・74・75)を得ている。

4 粘土塊(第144図)

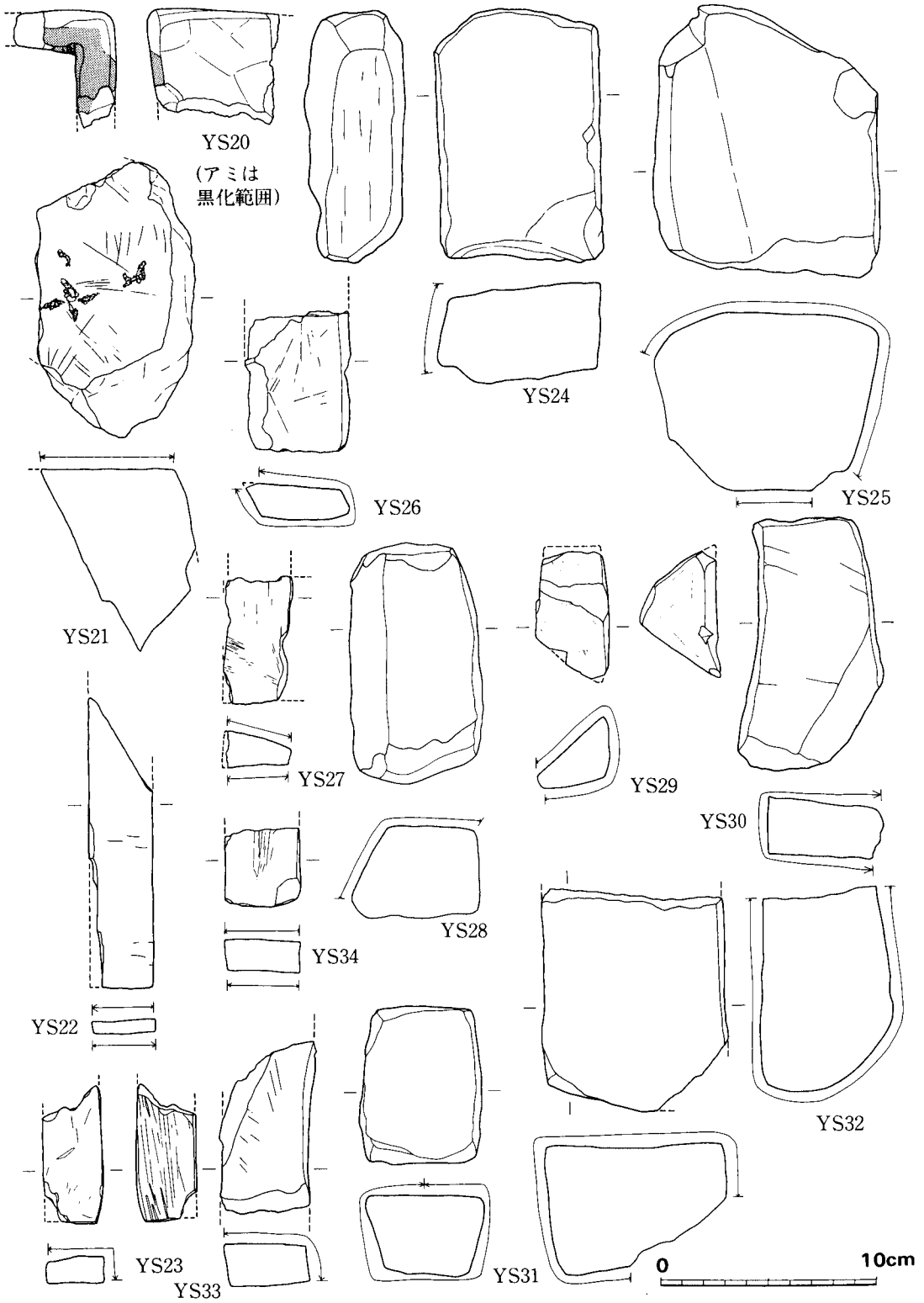
O-9区遺物包含層から長径17.1cm、短径13.7cm、厚さ5.0cm、重さ917gを測る灰白色粘土塊1点(YC1)を得ている。それ自体が(土)製品とは考えられないが、所属時期や用途については不明である。



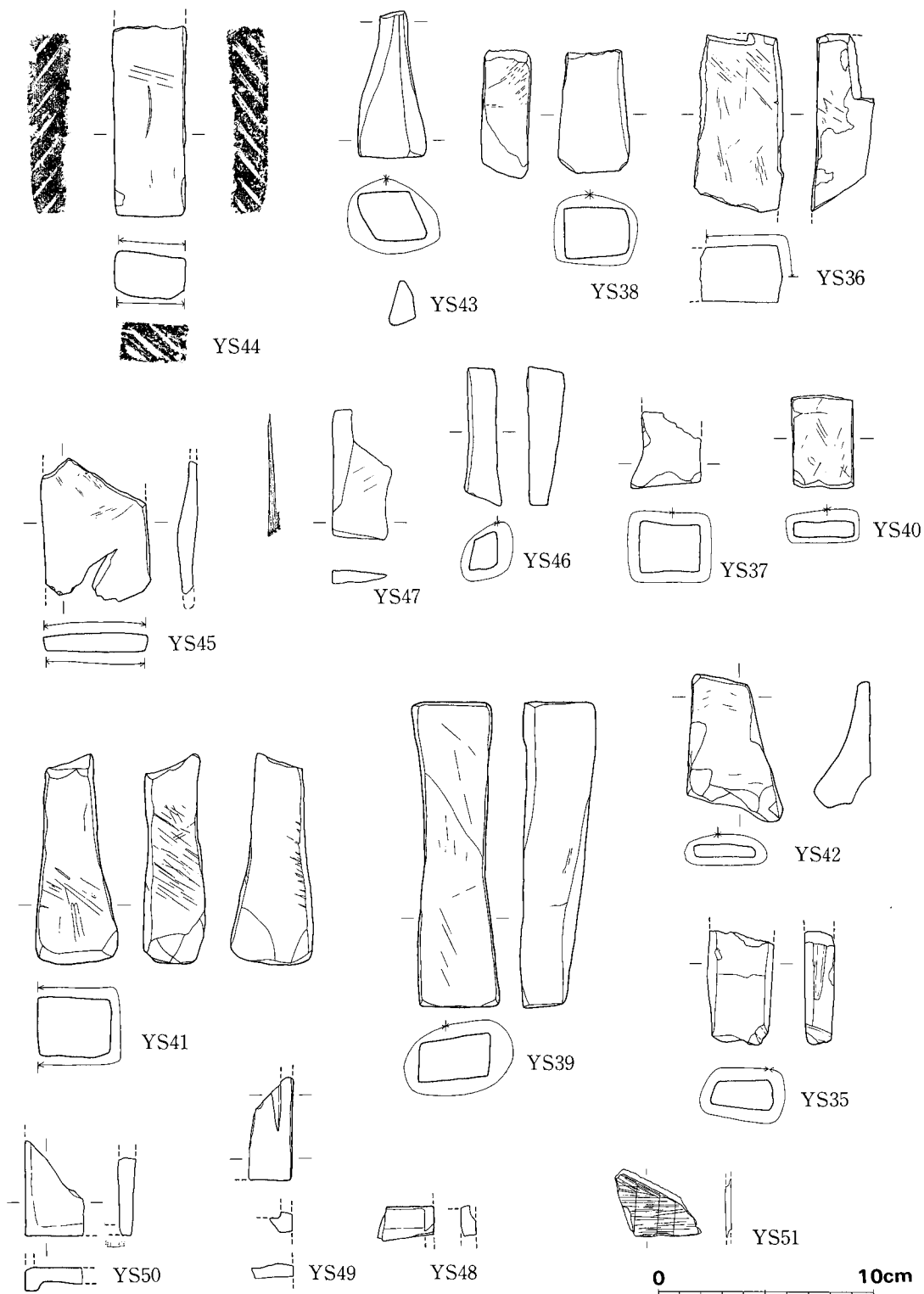
第133図 石斧・石鏃・管玉・他(S=1/2)



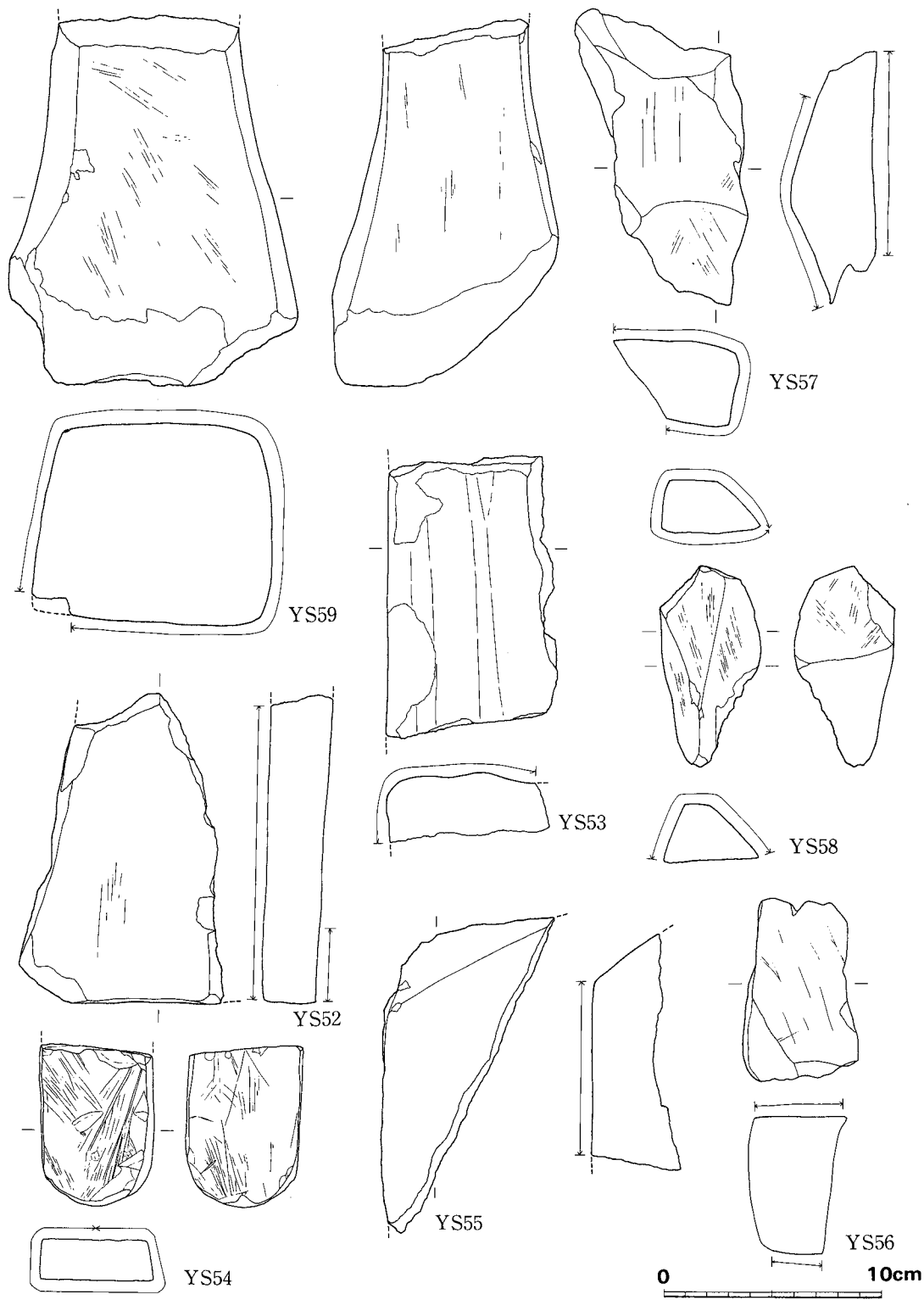
第134図 軽石製品(S=1/3)



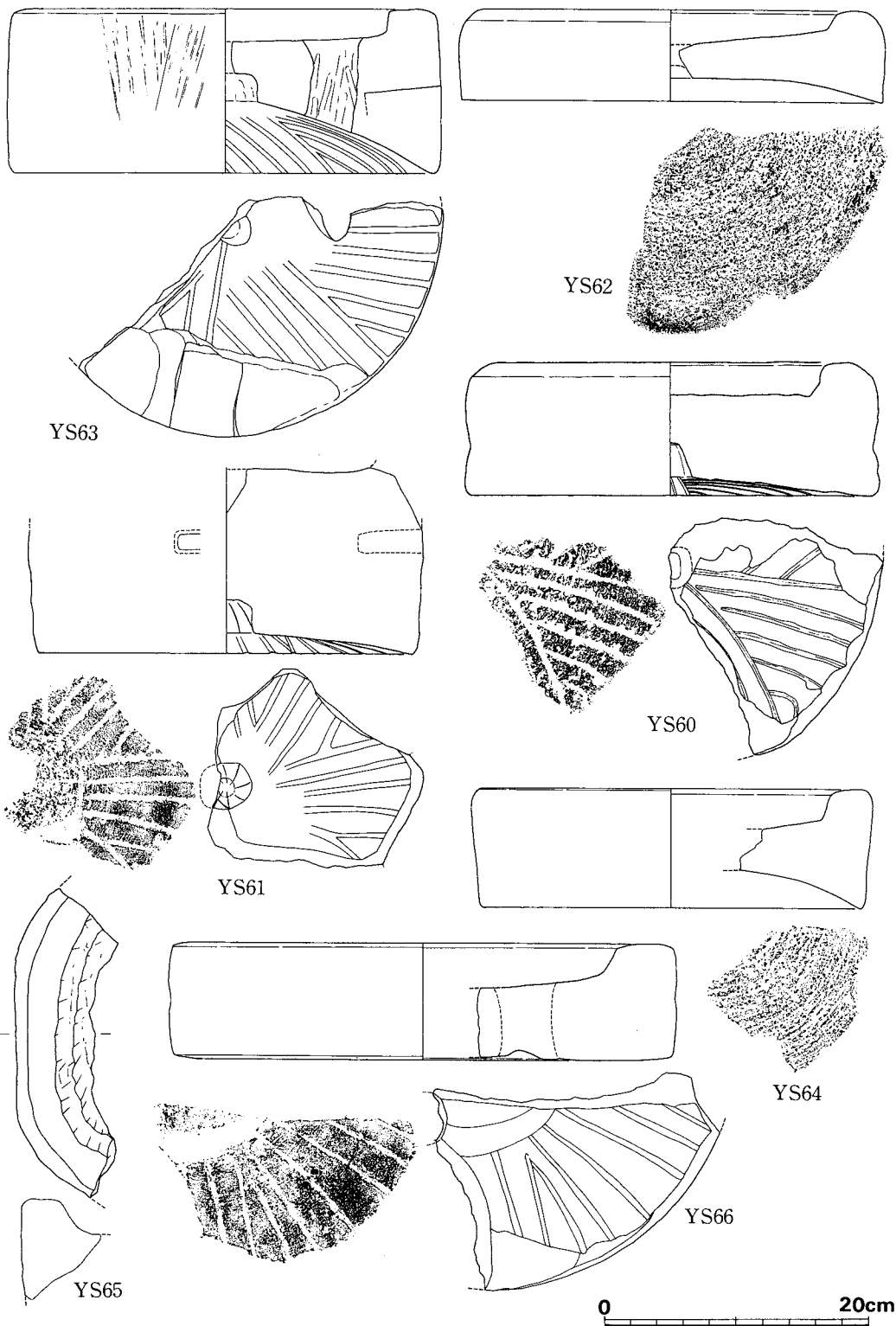
第135図 砥石・行火・他(S=1/3)



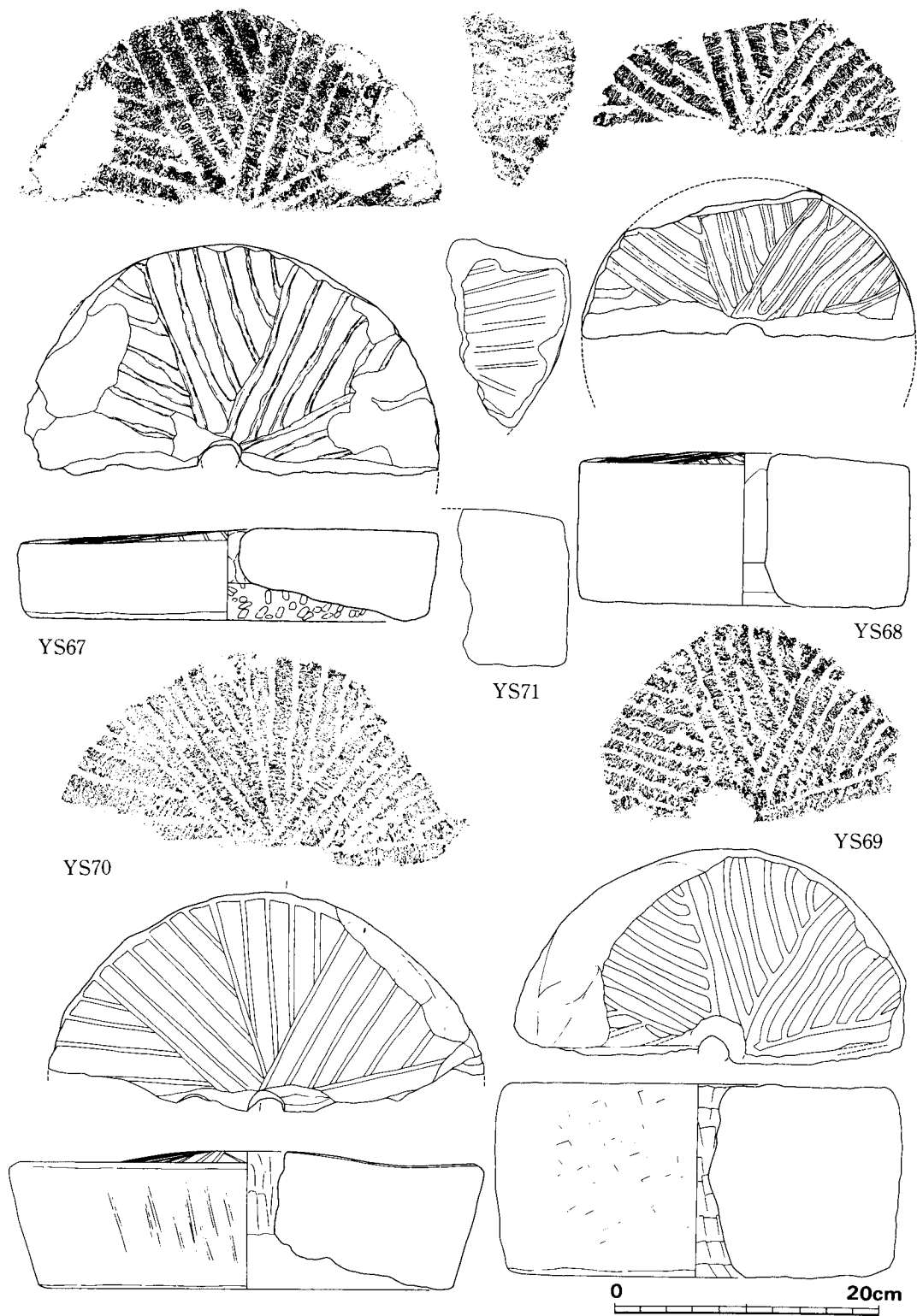
第136図 砥石・硯・他(S=1/3)



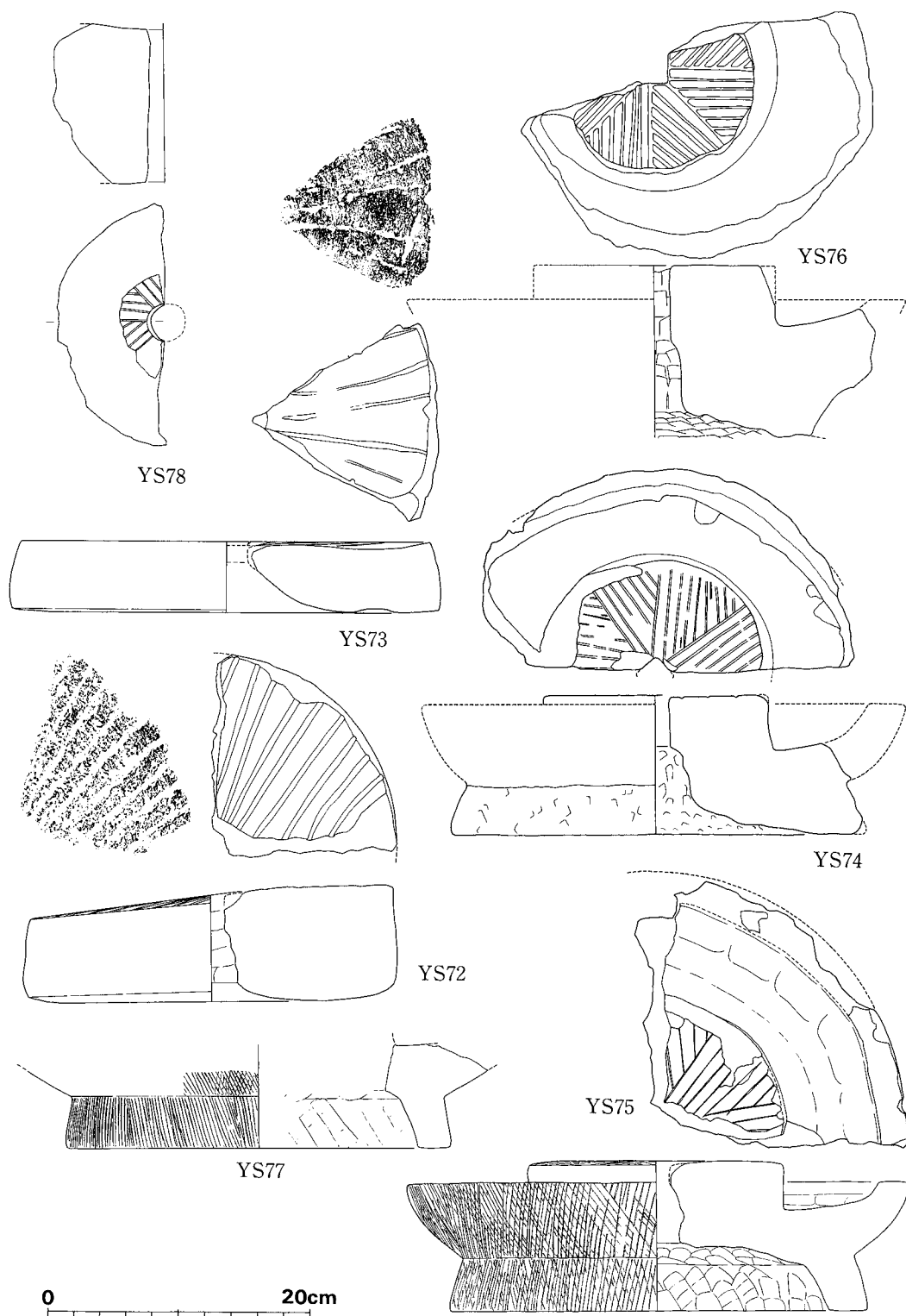
第137図 砥石・他(S=1/3)



第138図 粉挽き臼(上臼)(S=1/5)



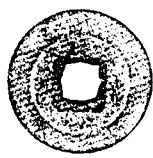
第139図 粉挽き白(下白)(S=1/5)



第140図 茶白・粉挽き白(下白)(S=1/5)



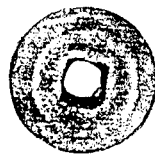
YM1



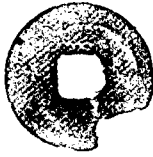
YM2



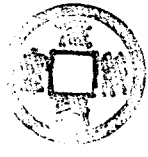
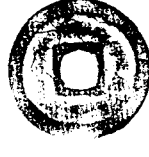
YM3



YM4



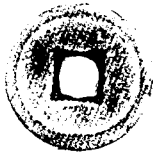
YM5



YM6



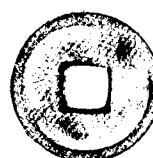
YM7



YM8



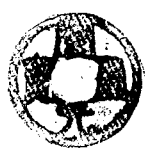
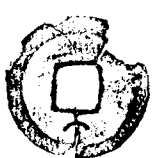
YM9



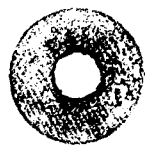
YM1 ~ 9 : P-8区第62号溝



YM10



YM11



YM12



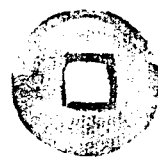
YM13



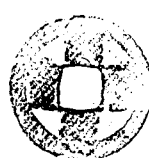
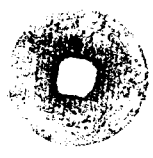
YM14



YM15



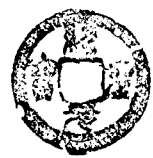
YM16



YM17



YM18



YM19



YM12 : P 89124
 YM13 : 第68号溝
 YM14 : P 87010
 YM15 : 第18号掘立
 YM19 : P 88047

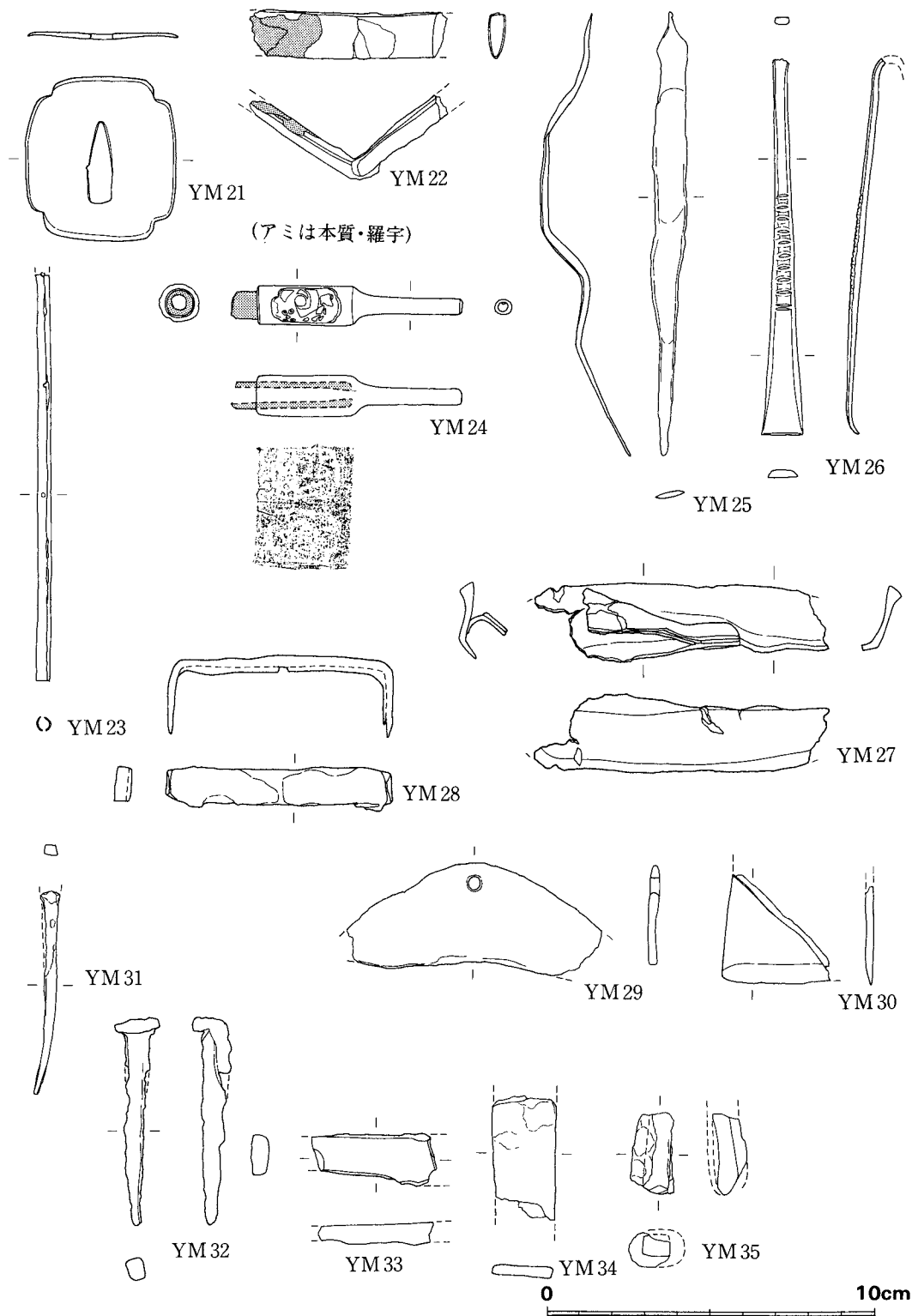


YM20

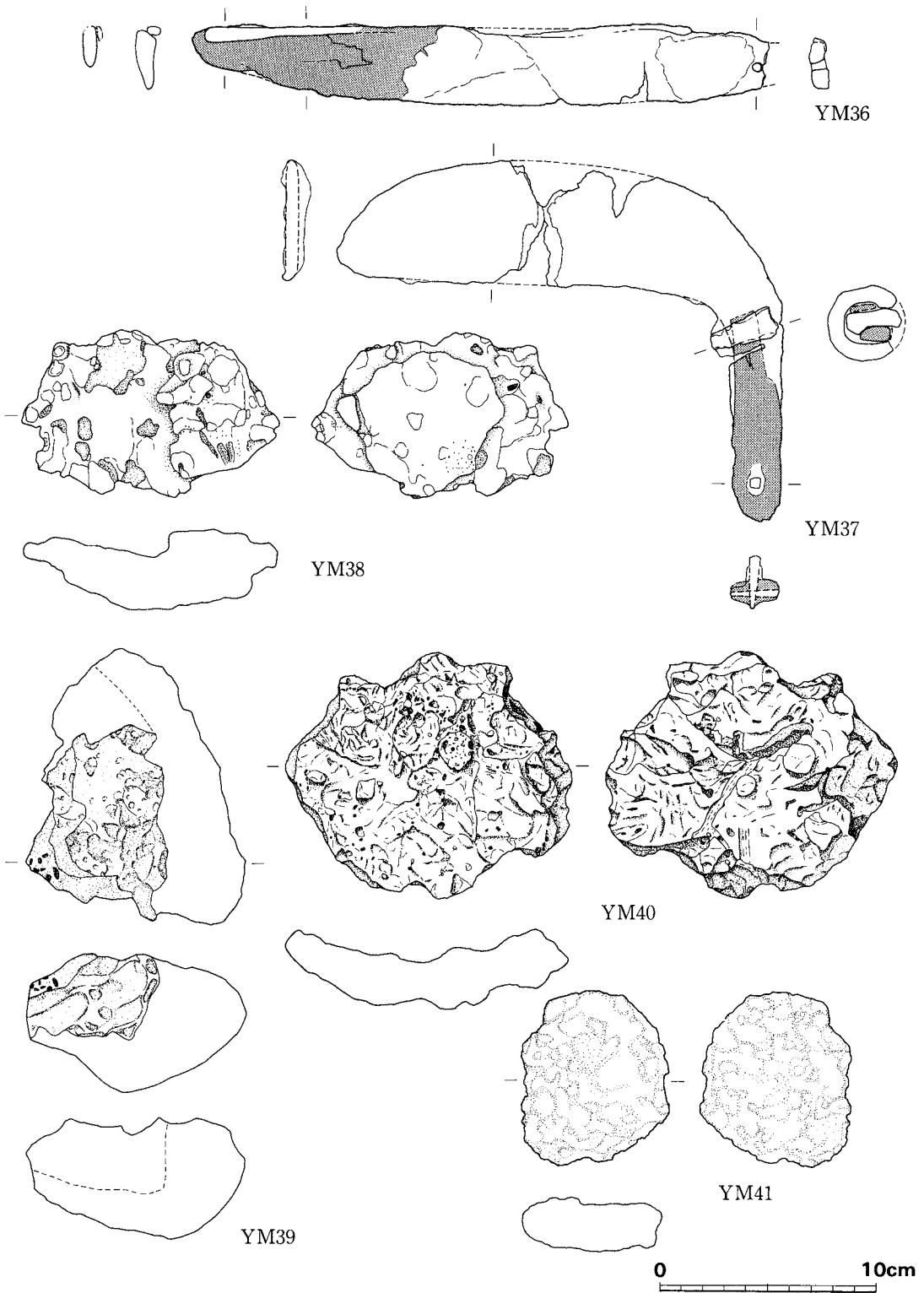


0 5cm

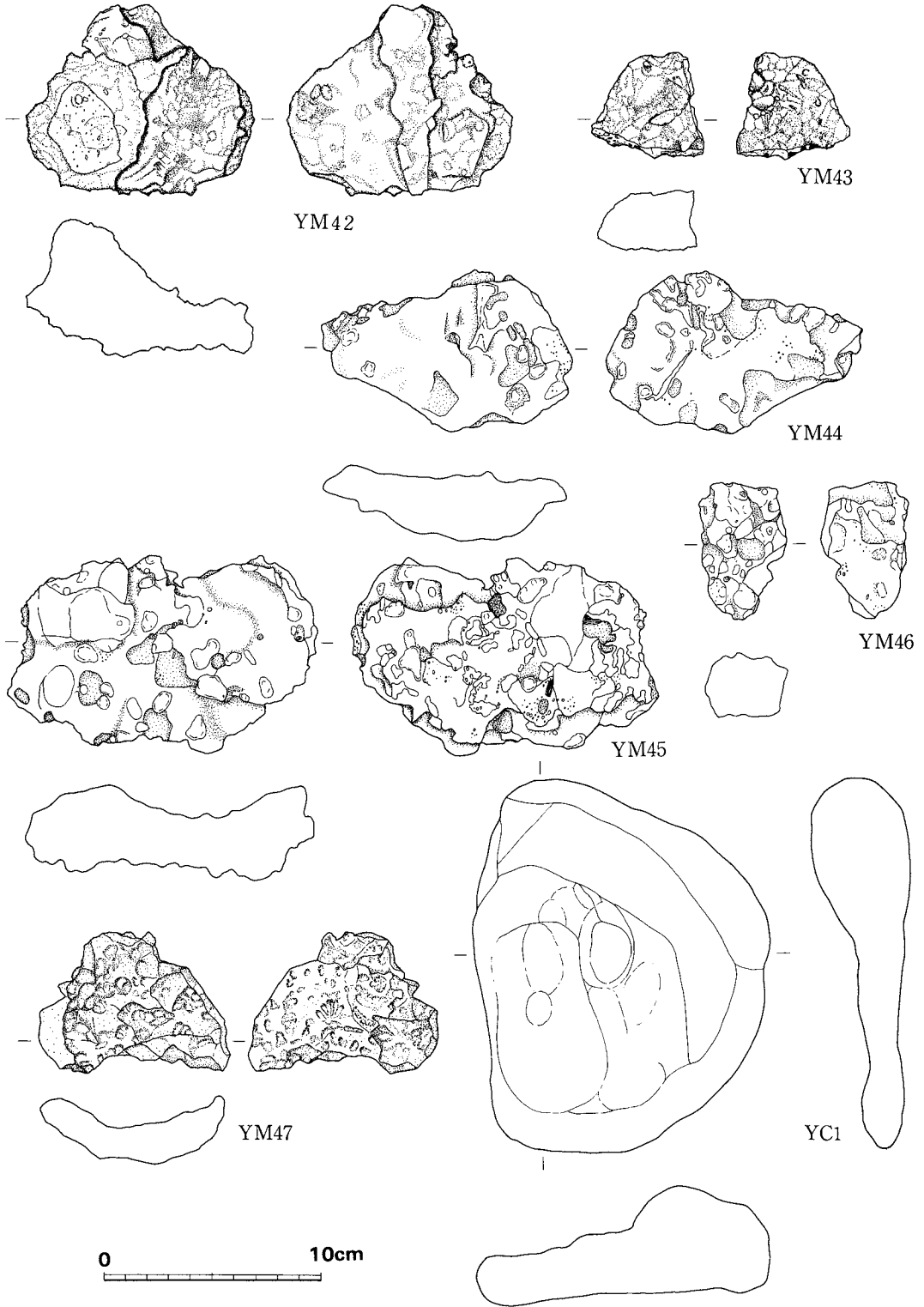
第141図 錢貨(S=4/5)



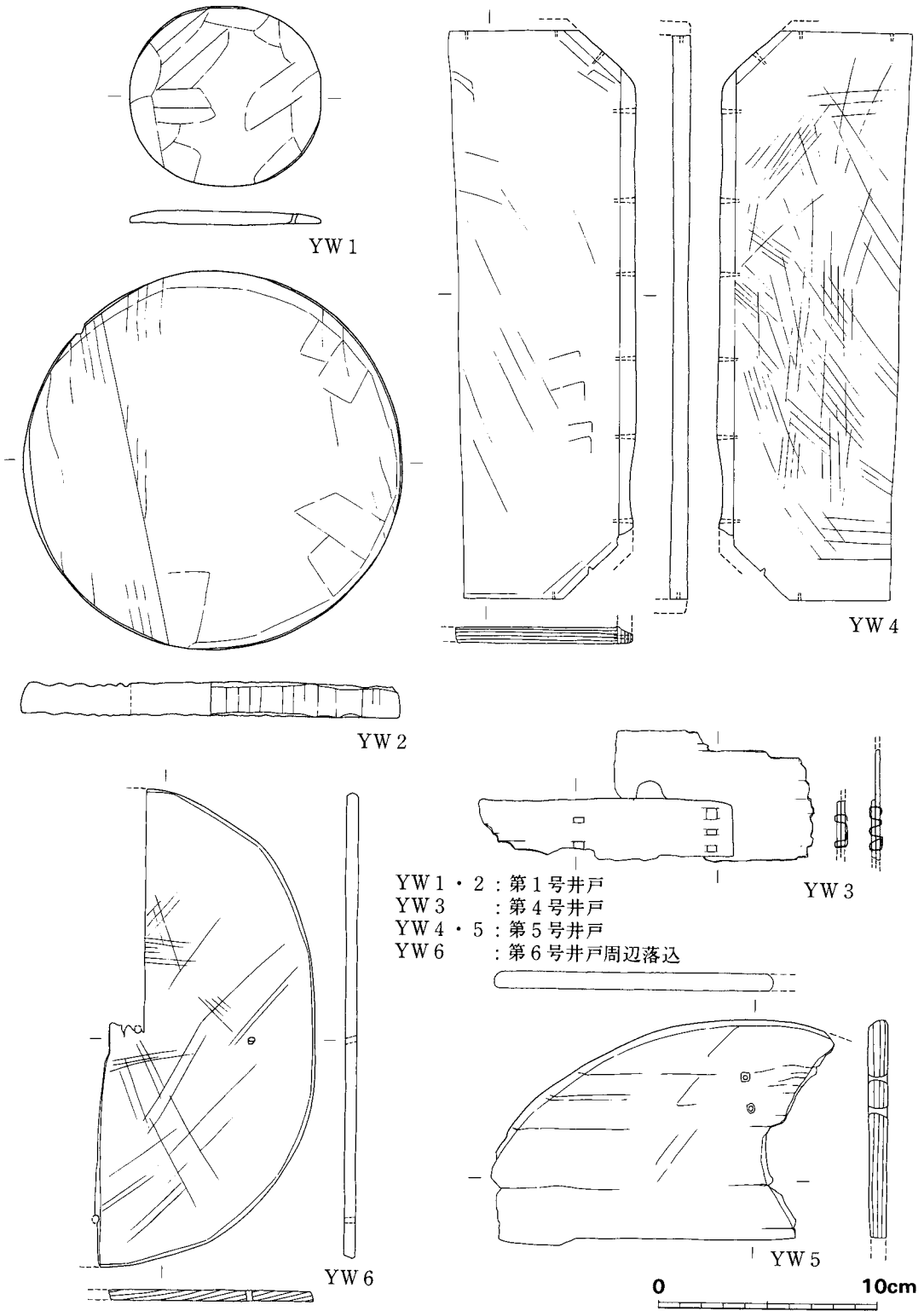
第142図 金属製品(S=1/2)



第143図 刀・鎌・鉄滓(S=1/3)

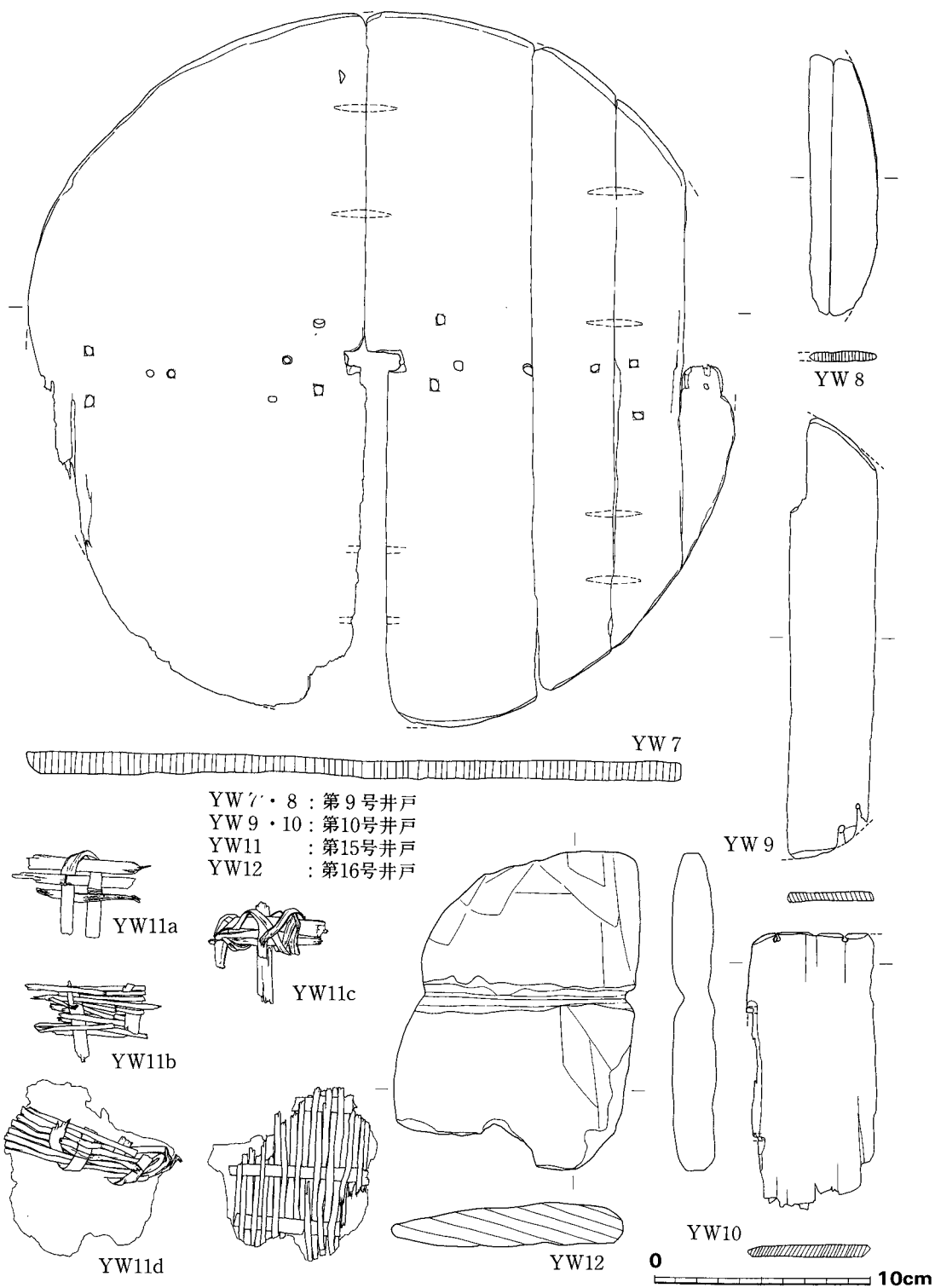


第144図 鉄滓・粘土塊(S=1/3)

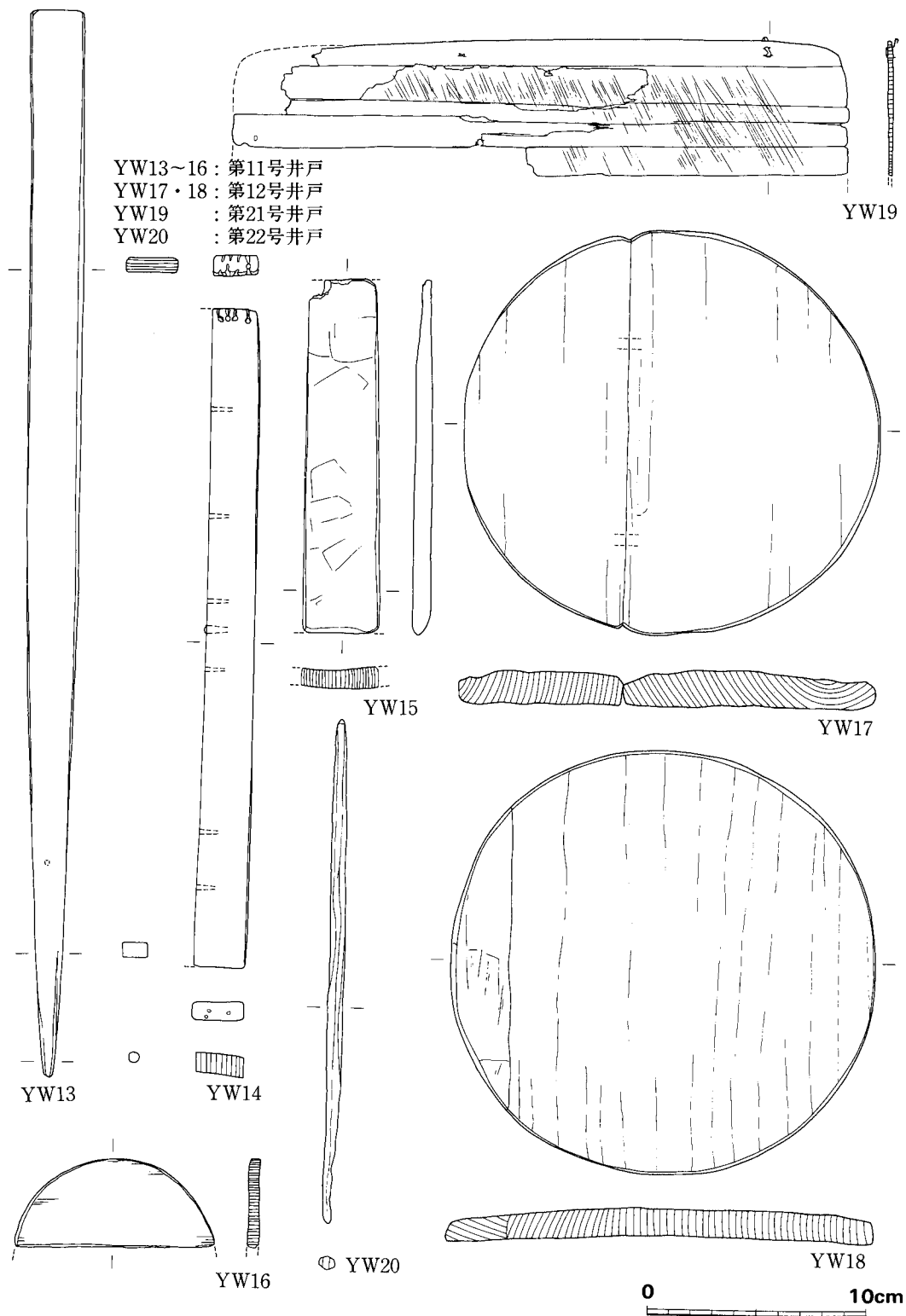


- YW1・2 : 第1号井戸
- YW3 : 第4号井戸
- YW4・5 : 第5号井戸
- YW6 : 第6号井戸周辺落込

第145図 井戸(周辺)出土木製品(S=1/3)

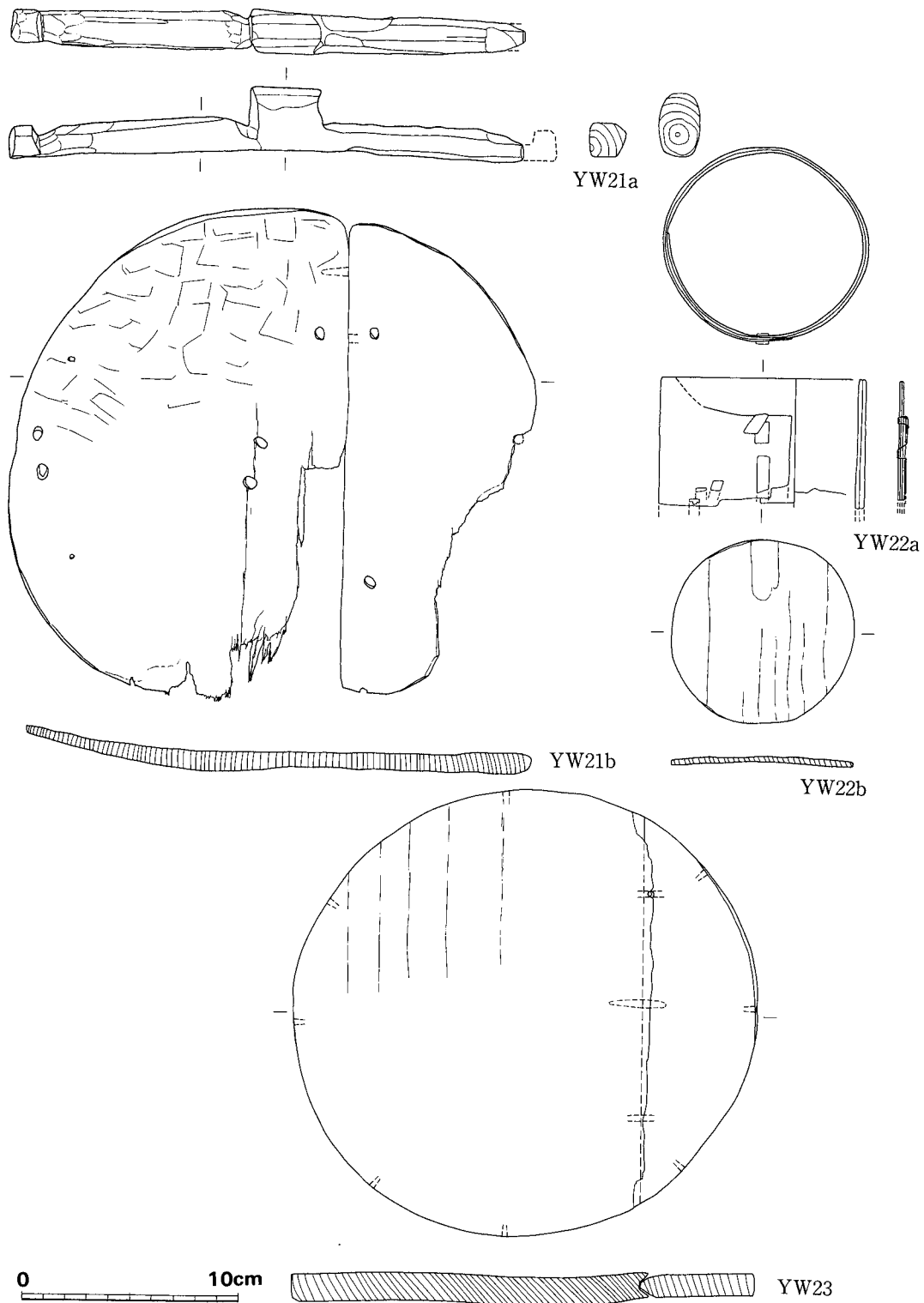


第146図 井戸出土木製品(S=1/3)

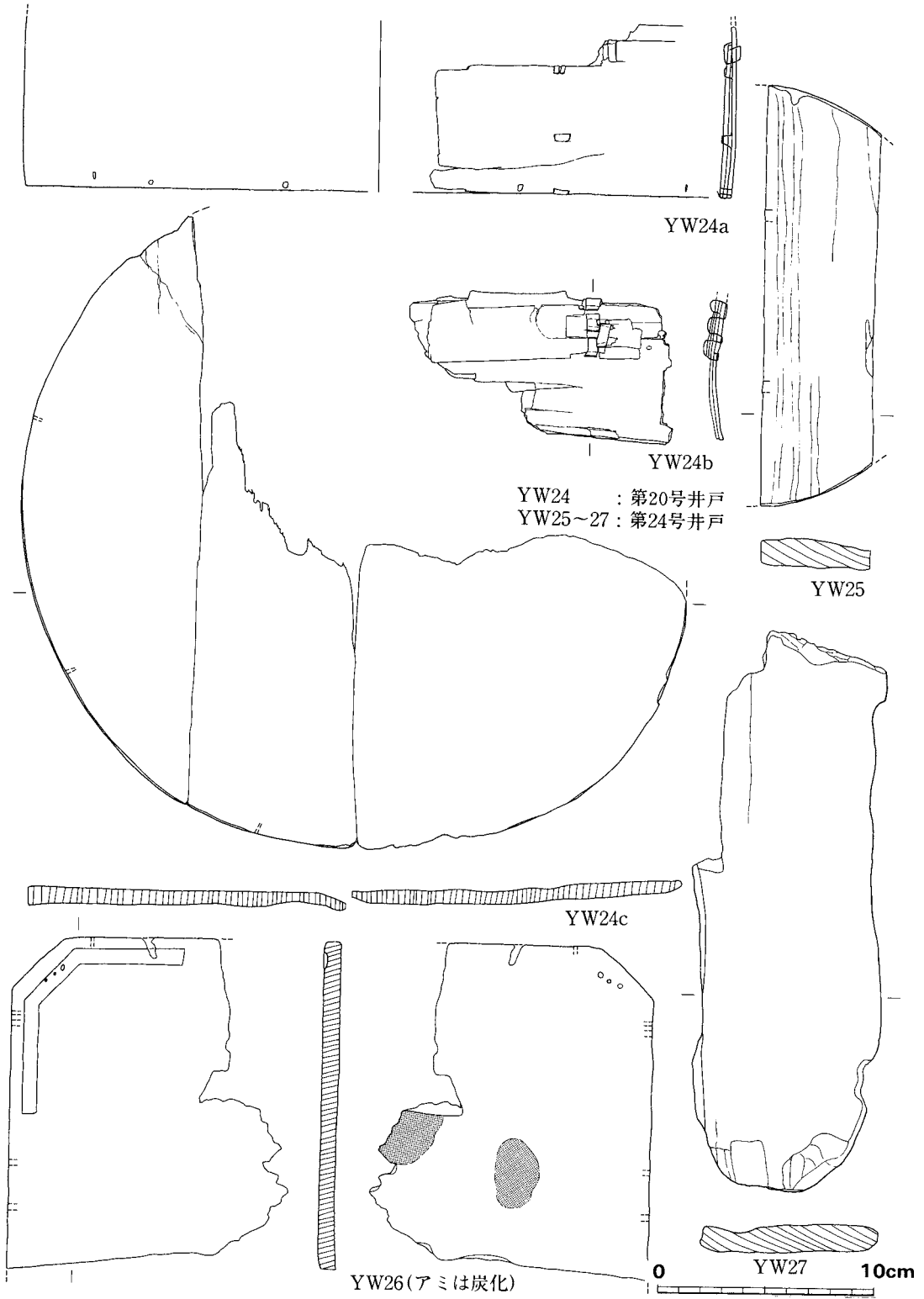


第147図 井戸出土木製品(S=1/3)

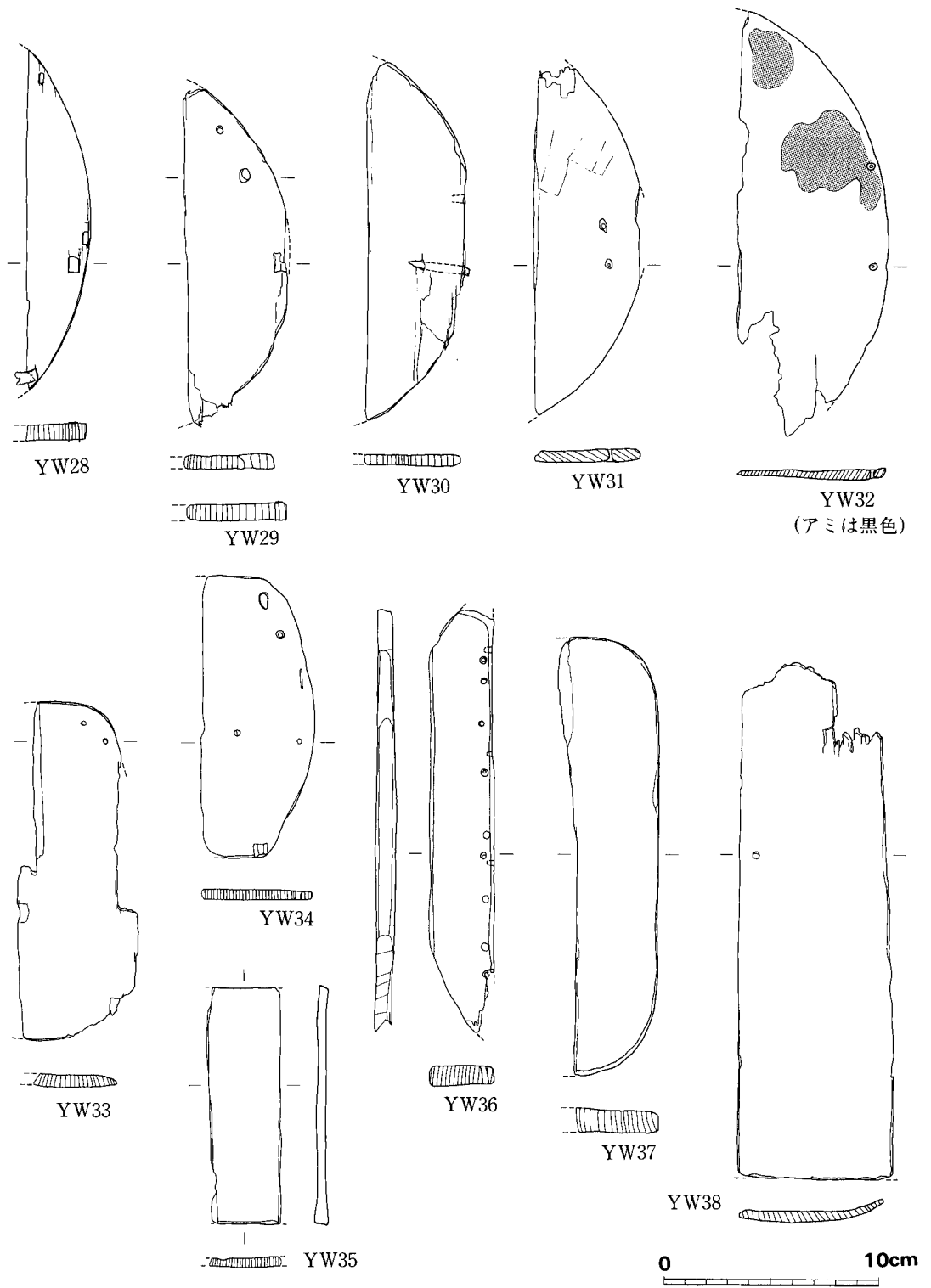
第5節 石器・金属器・木器・他



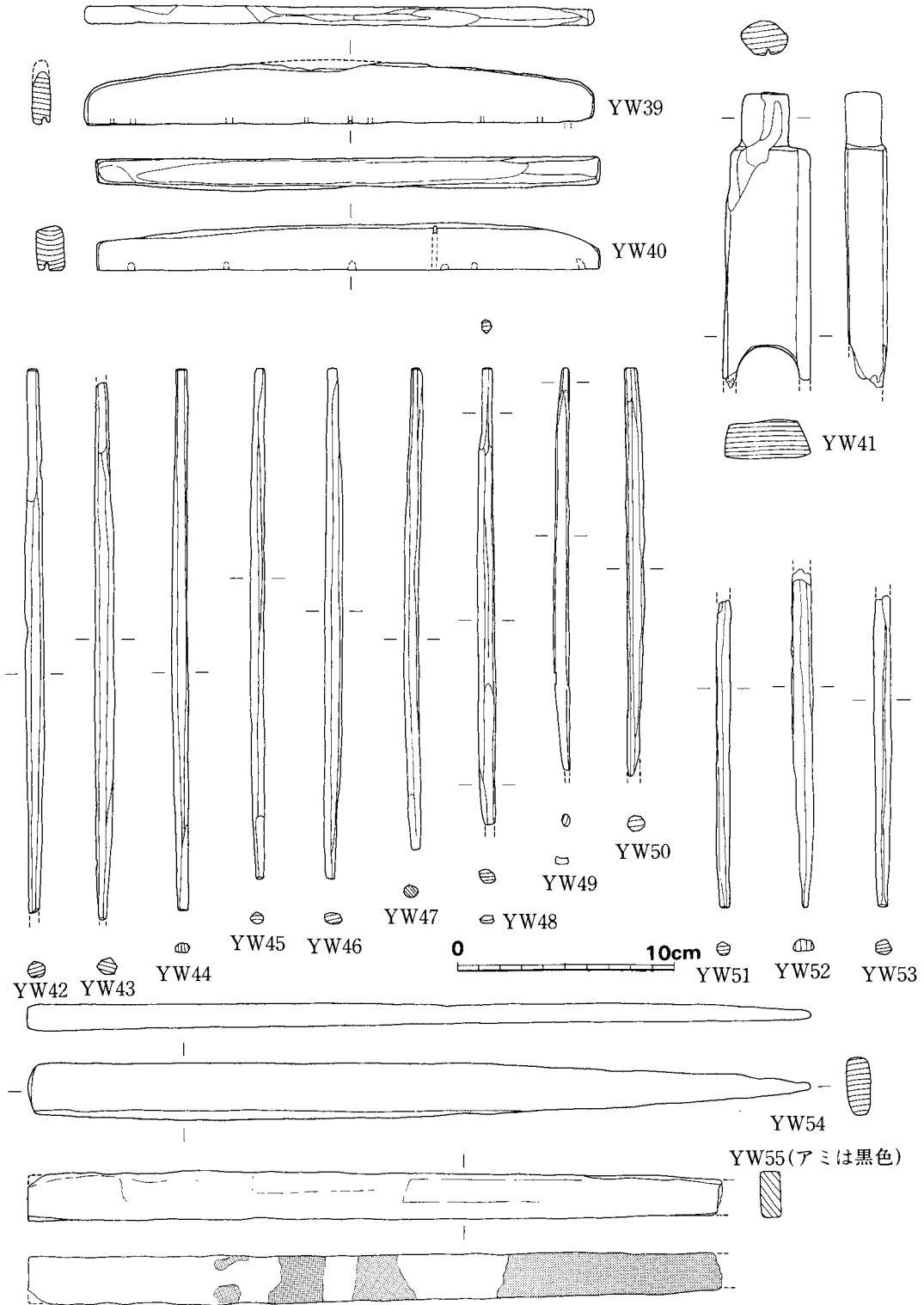
第148図 第20号井戸出土木製品(S=1/3)



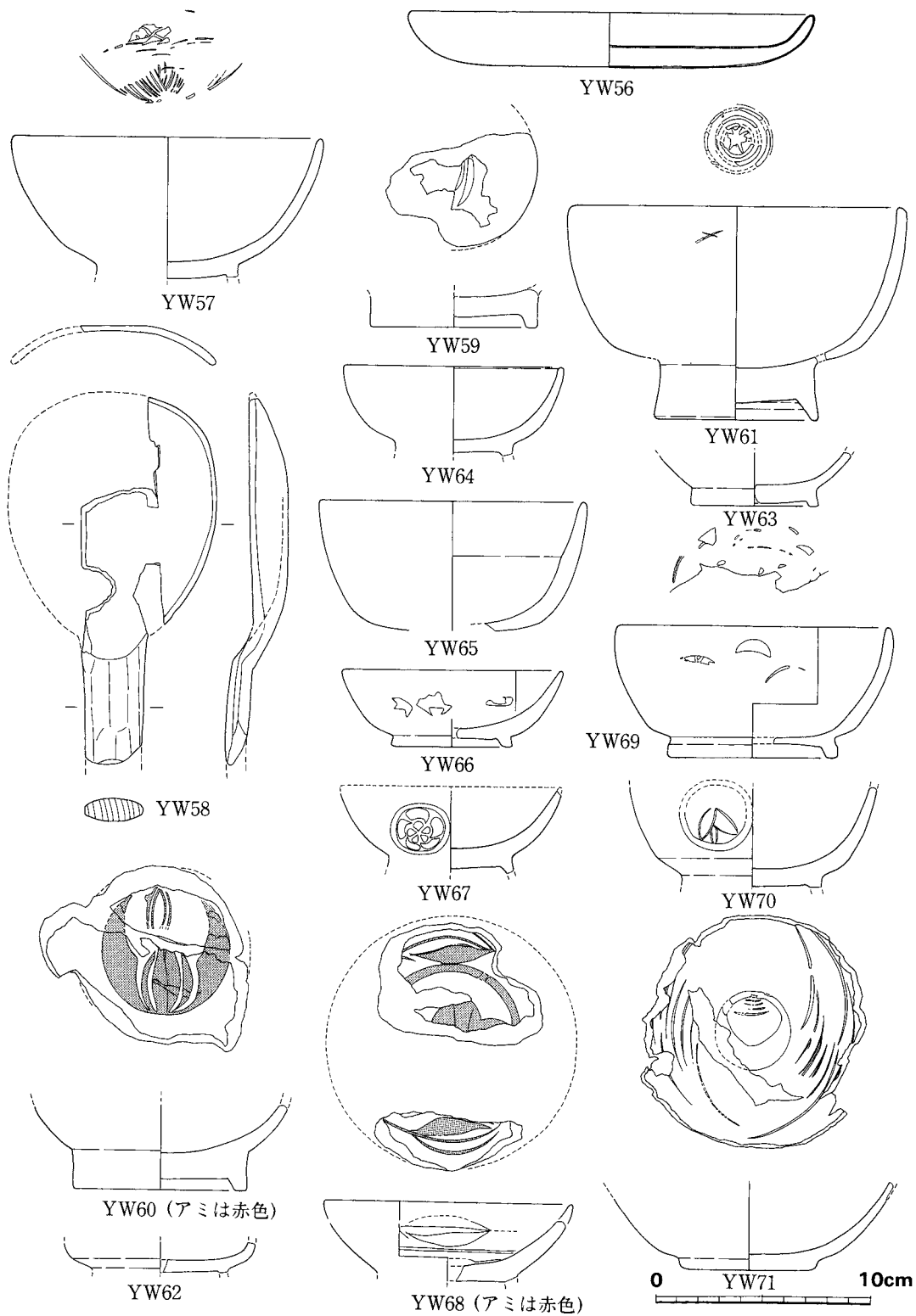
第149図 第20・24号井戸出土木製品(S=1/3)



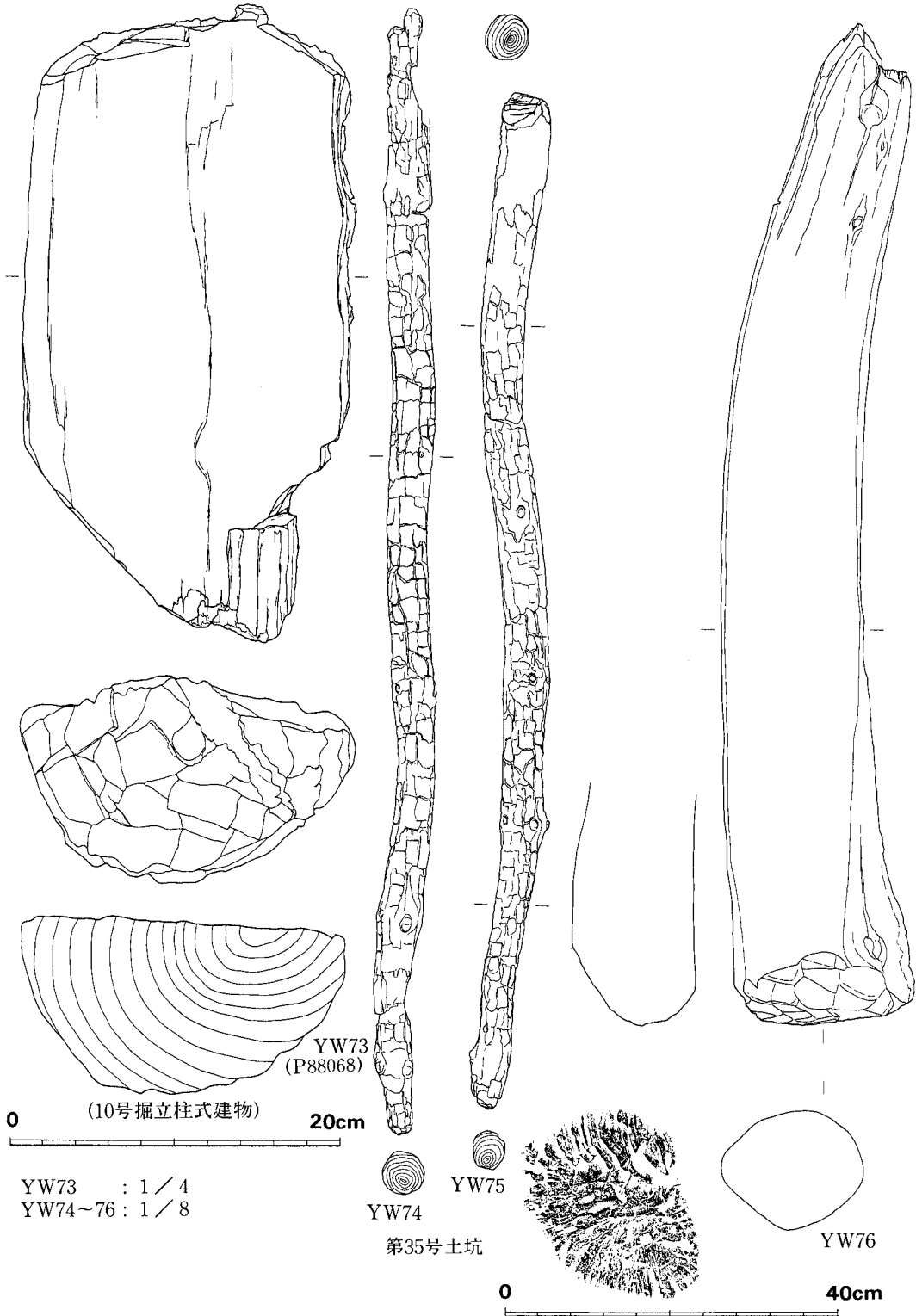
第150図 第50号溝出土木製品(S=1/3)



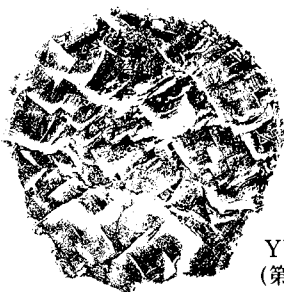
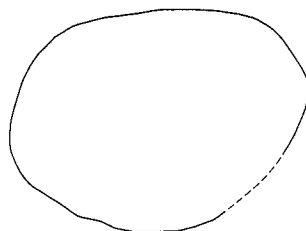
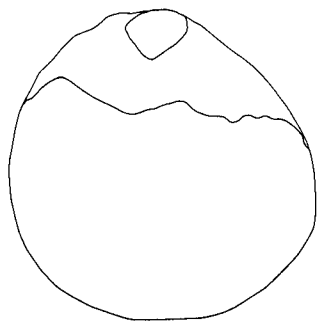
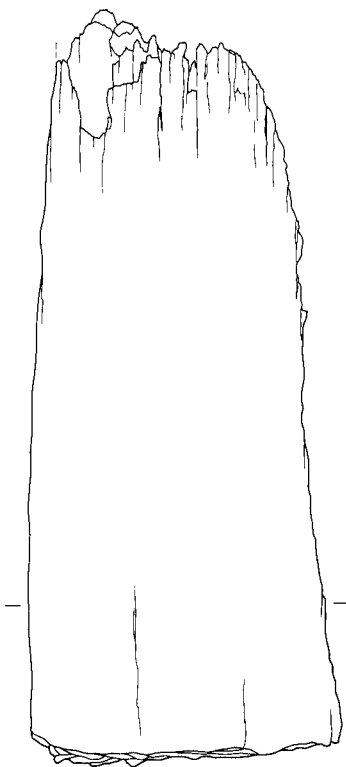
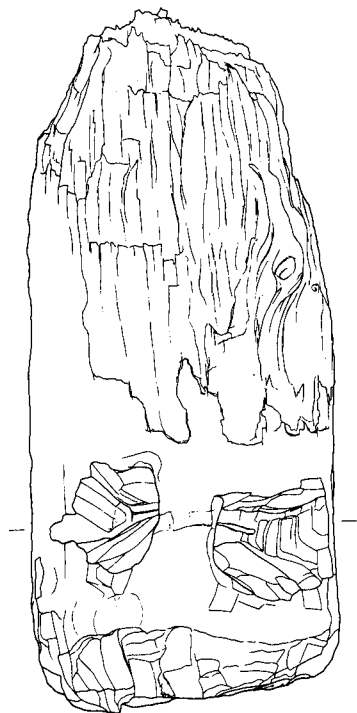
第151図 第50号溝出土木製品(S=1/3)



第152図 漆器・漆製品(S=1/3)



第153図 礎板(S=1/4)・柱根他(S=1/8)



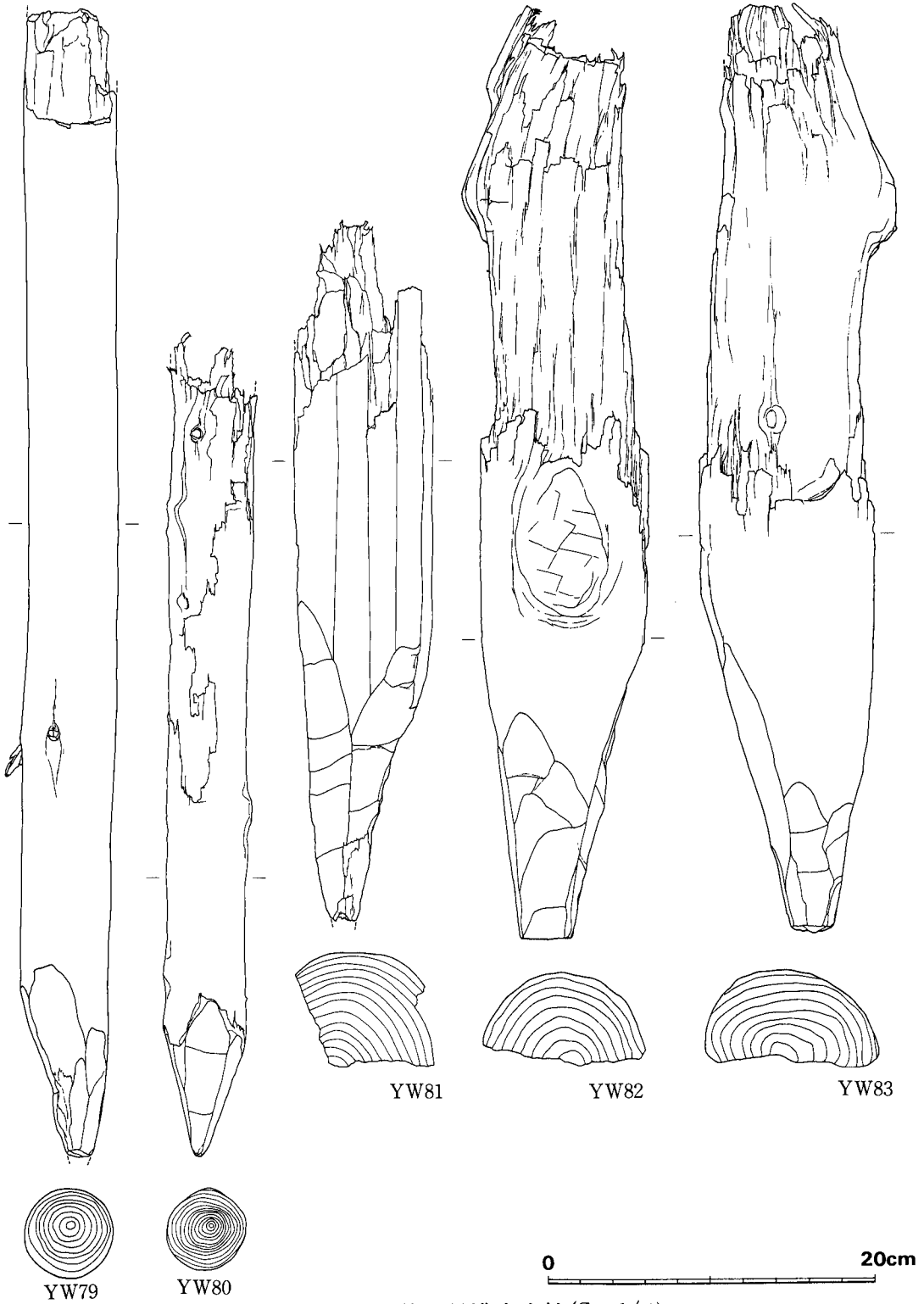
YW77(P88032)
(第17号掘立柱式建物)



YW78(P89007)
(第7号掘立柱式建物)

0 40cm

第154図 柱 根 (S=1/8)



第155図 第50号溝出土杭(S=1/4)

第5節 石器・金属器・木器・他

谷内ブンガヤチ遺跡出土石器・石製品観察表 (*:残存値)

番号	整理No	出土地点	器種等	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質等特記事項
YS 1	87 S 9	包含層 (詳細地点?)	大型蛤刃石斧	*11.3	6.2	3.7	* 464	輝石安山岩 (基部の直下面に敲打痕各一箇所)
2	87 S 8	"	両刃磨製石斧	8.4	5.2	2.4	148	硬質安山岩
3	87 S 10	第2号溝 (E7)	環状石斧	12.5	12.5	1.8	* 199	輝石安山岩
4	89 S 2	包含層 (I-8区)	扁平片刃石斧	4.1	3.6	0.9	27.7	流紋石角閃石安山岩
5	89 S 3	" (H-8区)	砥石?	10.6	* 9.0	2.7	* 387	輝石安山岩
6	87 S 1	" (D-7区)	打製石鏃	2.8	2.0	0.4	1.4	輝石安山岩
7	89 S 1	第3号壑穴上部 (J7)	管玉	1.32	0.24	0.24	0.1	硬質緑色凝灰岩
8	89 S 65	第12号壑穴 (K7)	"	7.7	4.4	3.8	27.4	輝石
9	87 S 13	第3号土坑東側 (D6)	"	6.4	* 5.2	4.8	* 42.8	輝石
10	89 S 12	第10号土坑 (FG-89)	"	8.5	8.2	7.9	101	輝石
11	89 S 9	遺構上面 (F-10区)	"	3.6	3.6	2.9	8.5	輝石
12	89 S 7	"	"	10.0	9.7	5.0	85.8	輝石
13	89 S 8	"	"	10.8	7.3	5.7	89.0	輝石
14	87 S 12	包含層 (D-6,7区)	"	4.6	4.5	3.7	13.7	輝石
15	89 S 6	" (FGH-7区)	"	4.3	3.0	* 1.9	* 4.9	輝石
16	89 S 11	" (F-9区)	"	6.3	3.7	3.6	21.5	輝石
17	87 S 14	" (H-7区)	"	7.9	7.0	3.8	25.0	輝石
18	89 S 13	" (H-8区)	"	4.2	2.3	1.9	3.3	輝石
19	89 S 10	" (J-7区)	"	9.1	6.4	6.0	64.6	輝石
20	87 S 11	" (BC-3区)	行火石	* 5.5	* 4.8	* 6.1	* 83.4	白色凝灰岩
21	89 S 5	第2号壑穴 S2地点	行火石	*12.7	* 7.4	* 9.1	* 96.8	白色凝灰岩
22	91 S 15	第21・22号井戸 (G4)	砥石	*13.5	3.0	0.7	* 44.6	硬質白色砂岩
23	91 S 3	第35号井戸 (H4)	"	* 6.4	2.8	1.3	* 37.1	細粒砂岩 (中生代)
24	91 S 50	第50号溝 (M3) 南西部	"	11.6	* 7.6	4.3	* 771	片麻岩の優
25	91 S 48	"	"	*12.4	*10.4	8.3	*1456	中粒砂岩 (中生代)
26	91 S 49	"	"	* 6.4	5.0	1.8	* 87.4	変質白色砂岩
27	91 S 59	" 南西部	"	* 5.8	* 2.9	2.2	* 51.9	変質白色砂岩
28	91 S 52	"	"	*11.2	6.2	* 5.7	* 485	中粒砂岩 (中生代)
29	91 S 60	"	"	* 6.0	* 3.5	* 3.1	* 62.7	凝灰岩
30	91 S 51	" 南西部	"	*11.9	6.4	2.8	* 292	中粒砂岩 (中生代)
31	91 S 65	第6号掘立建物P87025	"	* 7.2	5.6	3.9	* 266	粗粒砂岩 (中生代)
32	91 S 7	pit89107 (N-6区)	"	*10.5	6.1	6.1	* 806	中粒砂岩 (中生代)
33	91 S 55	包含層 (N-4区)	"	* 8.2	* 4.1	* 2.9	* 127	硬質白色砂岩
34	91 S 2	" (PQ-9区)	"	* 3.8	3.6	2.0	* 40.7	白色凝灰岩
35	87 S 6	" (F-7,8区)	"	* 5.4	3.0	1.5	* 31.0	白色凝灰岩
36	87 S 5	" (FG-7区)	"	* 8.2	* 4.2	* 2.8	* 128	黑色頁岩 (中生代)
37	91 S 58	" (I-4区)	"	* 3.6	3.3	2.5	* 28.2	白色砂岩
38	91 S 57	" (M-3区)	"	* 5.6	3.2	2.2	* 67.3	細粒砂岩 (中生代)
39	91 S 53	" (M-4区)	"	14.0	3.5	3.3	264	中粒砂岩 (中生代)
40	91 S 66	" (M-5区)	"	* 4.2	2.9	0.8	* 17.2	中黒色頁岩 (中生代)
41	91 S 14	" (O-8区)	"	* 9.6	3.4	2.9	* 137	硬質白色砂岩
42	91 S 16	" (O-9区)	"	* 6.9	4.4	2.4	* 64.0	白色細粒砂岩 (中生代)
43	91 S 56	" (3次調査区)	"	* 6.7	3.1	2.2	* 50.3	凝灰岩
44	91 S 67	" (4次調査区)	"	* 8.8	3.4	2.1	* 114	緑色凝灰岩
45	91 S 61	"	"	* 6.6	4.9	0.9	* 33.1	白色凝灰岩
46	91 S 70	" (詳細地点?)	"	* 6.3	1.9	1.8	* 23.0	緑色凝灰岩
47	91 S 4	" (5次調査区)	"	* 5.9	* 2.8	* 0.6	* 8.2	硬質白色凝灰岩
48	91 S 62	第19号掘立建物P88041	硯	* 2.7	* 1.5	* 0.6	* 4.1	黑色頁岩 (中生代)
49	91 S 64	包含層 (R-13区)	"	* 4.8	* 1.8	* 0.8	* 9.8	輝石安山岩
50	91 S 68	" (3次調査区)	"	* 4.4	* 2.7	* 1.2	* 15.2	細粒砂岩 (中生代)
51	91 S 63	" (Q-13区)	石板(?)	* 3.9	* 3.2	0.2	* 3.8	千枚岩
52	87 S 3	" (AB-3,4区)	砥石(?)	*14.3	* 9.5	2.9	* 626	輝石角閃石安山岩
53	87 S 2	" (C-5,7区)	"	*13.1	* 8.0	* 3.2	* 502	中粒砂岩 (中生代)
54	89 S 4	" (F-9区)	"	* 7.4	5.3	2.0	* 136	硬質白色凝灰岩
55	87 S 4	" (O-8区)	"	*14.7	* 8.1	5.1	* 332	中粒砂岩 (中生代)
56	91 S 6	" (P-7区)	"	* 8.5	* 5.3	6.5	* 301	細粒砂岩 (中生代)
57	91 S 5	" (P-7区)	"	*13.8	* 7.0	4.0	* 384	細粒砂岩 (中生代)
58	87 S 7	" (1次調査区)	"	* 9.3	4.6	* 2.7	* 110	黑色頁岩 (中生代)
59	87 S 15	"	"	*17.1	*13.4	10.5	*3070	硬質白色砂岩
			芯: 芯棒孔	白径	緑径	器高	区画/溝	挽: 挽木挿入孔 供: 供給孔
60	89 S 16	第25号土坑 (M13)	粉挽臼 上	30.4	26.7	10.1	7分/5	安山岩 芯: 3cm
61	90 S 96	第7号井戸 (Q10)	"	28.6	-	-	8分/5?	中粒砂岩 (中生代) 挽遺存 芯: 3.5
62	90 S 95	第6号井戸 (Q11)	"	31.8	28.8	7.0	?/?	安山岩
63	90 S 90	第11号井戸 (M4) 掘方	"	32.0	29.4	12.4	6分/6	角閃石安山岩 挽・供遺存 芯: 2.5
64	90 S 89	包含層 (L-3区)	"	28.8	29.0	9.0	?/?	輝石安山岩 平面多角形
65	91 S 54	" (M-3区)	"	-	-	-	-/-	角閃石安山岩 供給孔遺存
66	90 S 97	" (Q-13区)	"	38.1	36.0	8.8	7?分/5?	角閃石安山岩 供給孔遺存
67	89 S 14	第4号井戸周辺 (Q14)	" 下	31.8	29.6	7.1	8分/5	含緑石白色凝灰岩 芯: 3cm
68	89 S 15	"	"	24.6	24.0	11.7	8分/5	変質白色砂岩 (増穂層?) 芯: 3cm
69	91 S 148	第18号井戸 (P8) S1	"	28.2	25.6	15.0	8分/6?	輝石安山岩 芯: 2.5
70	90 S 94	第10号井戸 (L4) 上面	"	34.8	30.1	10.7	8分/5	火山礫色凝灰岩 芯: 3cm
71	91 S 149	第26号井戸 (GH-5,6) S1	"	25.0	24.2	12.1	5?分/10?	細粒砂岩 (中生代)
72	90 S 92	第11号井戸 (LM4)	"	27.6	27.0	8.8	4?分/6?	輝石角閃石安山岩 芯: 2cm
73	90 S 93	第50号溝 (M3)	"	31.3	32.7	5.4	8?分/4?	角閃石安山岩
74	89 S 17	第4号井戸周辺 (Q12)	茶 臼 下	16.8	31.2	10.6	8分/6~8	安山岩 芯: 2cm
75	89 S 18	第4号井戸 (Q14)	"	14.2	31.7	11.5	8分/6?	白色凝灰岩 灰岩 受け皿径38cm
76	91 S 150	第12号井戸 (M4) S1	"	18.2	-	-	8分/7	輝石安山岩 芯: 2.5
77	90 S 98	第29号溝 (Q12-13)	"	-	29.5	-	-/-	硬質凝灰岩
78	90 S 91	第50号溝 (M3) 南西部	" 上	-	-	-	8分/3~	安山岩 中央供給孔: 2.7cm

谷内ブンガヤチ遺跡出土金属器・金属製品等観察表 (*:残存値)

番号	整理No	出土地点	器種等	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	特記事項
YM 1	91 M 31	第62号溝 (P-8区)	銭貨 (一文)	径 2.4	—	0.08	2.5	天福通寶 1017年初鑄
2	91 M 20	"	"	径 2.4	—	0.12	3.2	天福通寶 1017年初鑄
3	91 M 34	"	"	径 2.4	—	0.15	3.8	天聖元寶 1023年初鑄
4	91 M 32	"	"	径 2.5	—	0.13	* 2.5	皇宋通寶 1039年初鑄
5	91 M 38	"	"	径 2.4	—	0.12	3.7	元豐通寶 1078年初鑄
6	91 M 26	"	"	径 2.4	—	0.10	2.9	元符通寶 1098年初鑄
7	91 M 27	"	"	径 2.5	—	0.10	3.1	政和通寶 1111年初鑄
8	91 M 28	"	"	径 2.4	—	0.12	3.7	皇宋元寶 1253年初鑄
9	91 M 37	"	"	径 2.5	—	0.12	3.3	開通元寶 621年初鑄
10	91 M 24	包含層 (M-3区)	"	径 2.4	—	0.12	* 2.1	開通元寶 背月文 621年初鑄
11	91 M 33	詳細地点不明 1989年	"	径 2.7	—	0.10	1.9	開通元寶 621年初鑄
12	91 M 36	pit89124 (N-7区)	"	径 2.5	—	0.12	* 1.0	開通元寶 621年初鑄
13	91 M 39	第68号溝 (N-6区)	"	径 2.5	—	0.14	2.7	祥符元寶 1008年初鑄
14	87 M 3	pit87010 (O-10区)	"	径 2.5	—	0.12	2.5	景祐元寶 1034年初鑄
15	91 M 23	第18号掘立建物P88012	"	径 2.5	—	0.12	2.2	皇宋通寶 1039年初鑄
16	91 M 19	包含層 (Q-9区)	"	径 2.3	—	0.15	2.8	至和元寶 1054年初鑄
17	91 M 40	詳細地点不明 1989年	"	径 2.4	—	0.10	1.9	熙寧元寶 1068年初鑄
18	91 M 30	包含層 (P-8区)	"	径 2.5	—	0.15	1.7	熙寧元寶 1068年初鑄
19	91 M 22	pit88047 (L-4区)	"	径 2.3	—	0.14	2.3	紹聖元寶 1094年初鑄
20	87 M 2	詳細地点不明 1985年	"	径 2.4	—	0.12	* 1.9	寬永通寶 1636年初鑄
48	未採拓	包含層 (O-5区)	"	径 2.4	—	0.13	* 1.1	紹聖元寶 1094年初鑄
21	91 M 47	第10号井戸上面 (L4)	鐺 (の一部)	5.0	4.6	0.16	12.7	銅製?
22	91 M 46	第8号掘立建物P88013	小柄	* 7.8	1.4	0.58	* 10.8	銅製? 鉄製刀子・木質遺存
23	91 M 42	第50号溝 (M-3区)	?	* 12.3	径0.43	径0.36	* 3.5	金銅?
24	91 M 10	第16号掘立建物P89244	煙管 (吸口)	6.3	径1.23	径0.46	15.1	金銅? 羅字 (長37mm) 遺存
25	91 M 9	第82号溝 (F-4・5区)	斧	14.7	1.1	0.20	8.5	銅製?
26	91 M 29	第33号土坑 (N-8区)	錘	* 11.5	1.2	0.26	* 9.0	鉄製 (第1号小穴群)
27	87 M 1	詳細地点不明 1985年	?	* 9.1	* 2.4	0.36	* 33.6	銅製?
28	89 M 1	包含層 (FG-6区)	鍔	6.9	1.1	0.35	12.4	鉄製
29	91 M 45	第17号掘立建物P88014	鍔金	* 7.9	3.0	0.32	* 9.9	鉄製
30	91 M 44	包含層 (M-8区)	?	* 3.3	* 3.3	0.27	* 7.7	鉄製
31	91 M 35	pit89121 (N-8区)	釘	* 6.1	* 0.6	0.34	* 2.4	鉄製 (第1号小穴群)
32	89 M 11	包含層 (MN-7区)	"	6.3	1.4	1.12	4.9	鉄製
33	91 M 11	" (P-8区)	刀子?	* 3.8	* 1.6	0.71	* 7.8	鉄製
34	91 M 43	第50号溝 (M-3区)	?	* 3.8	1.9	0.33	* 4.5	鉄製
35	91 M 12	包含層 (P-9区)	"	* 2.4	0.8	0.42	* 1.5	鉄製
36	91 M 69	第9号土坑 (F-7区)	刀 (腰刀?)	* 26.9	3.6	1.5		鉄製 木質遺存
			?	* 22.8	* 1.3	0.5	* 207	鉄製 上記木質に付着
37	91 M 8	包含層 (P-7区)	鍔	20.8	5.5	1.0	284	鉄製 柄・目釘・鉄環遺存
38	89 M 4	" (D-7・8区)	鉄滓	12.0	7.4	3.6	321	
39	89 M 2	第5号壑穴 (G-8区)	"	11.9	6.3	5.6	595	炉体付着
40	89 M 3	包含層 (F-8区)	"	13.4	11.5	2.9	362	
41	91 M 18	" (F-5・6区)	"	8.1	6.9	2.8	237	
42	89 M 9	" (F-7・8区)	"	10.5	8.8	5.7	472	
43	89 M 8	" (F-7区)	"	5.0	4.8	2.8	107	
44	89 M 10	" (J-9区)	"	11.5	7.2	3.1	297	
45	89 M 5	" (FG-7区)	"	13.6	8.4	3.8	563	
46	89 M 7	" (FG-7区)	"	6.3	3.9	2.9	89	
47	89 M 6	" (F-8区)	"	8.7	6.1	2.0	172	
YC 1	89 C 4	" (O-9区)	灰白色粘土塊	17.1	13.7	5.0	917	

谷内ブンガヤチ遺跡出土木製品観察表 (*:残存値)

番号	整理No	出土地点	器種・部位	長径cm	幅径cm	厚さcm	特記事項
YW 1	87 W 2	第1号井戸 (B-5区)	柄杓? 底板	8.8	8.3	0.6	小孔1
2	87 W 3	"	結桶 底板	17.4	—	1.6	二枚合わせ
3	93 W 1	第4号井戸 (O-14区)	曲物 側板	* 15.5	* 6.1	0.2	樹皮綴じ (二箇所)
4	93 W 2	第5号井戸 (O-10区)	角切折敷底・縁	26.2	—	0.8	外寸推定27.4cm 内外面黒色
5	93 W 3	"	編蓋?	* 15.7	* 10.3	0.9	小孔2 内外面一部炭化
6	93 W 4	第6号井戸周辺落込 (Q-11)	編蓋?	* 22.1	* 9.7	0.5	小孔3
7	91 W 86	第9号井戸 (L-4区)	編蓋?	32.8	—	1.0	小孔16、方形孔1、三枚合わせ
8	91 W 87	"	曲物? 底板	* 12.0	* 3.1	0.5	小判形
9	91 W 94	第10号井戸 (L-4区)	編蓋?	* 20.3	* 3.9	0.5	小孔2
10	91 W 93	"	折敷? 底板	* 12.8	* 5.8	0.6	木釘4
a 11	91 W 124	第15号井戸 (P-4区)	箕?	—	—	—	YW11bcdと同一個体
b 11	91 W 126	"	"	—	—	—	YW11acdと同一個体
c 11	91 W 125	"	"	—	—	—	YW11abdと同一個体
d 11	91 W 127	"	"	—	—	—	YW11abcと同一個体
12	91 W 101	第16号井戸 (O-2区)	?	* 14.7	* 10.7	2.0	
13	93 W 5	第11号井戸 (LM-4区)	柄杓	49.2	2.5	0.7	両面一部黒色 図の裏面木釘1
14	91 W 123	"	折敷? 縁板	30.4	* 2.4	1.0	
15	91 W 121	"	結桶? 側板	16.4	3.5	0.9	内面黒色
16	91 W 122	"	柄杓? 底板	9.2	—	0.5	

第5節 石器・金属器・木器・他

番号	整理No	出土地点	器種・部位	長径cm	幅径cm	厚さcm	特記事項
YW17	91 W 89	第12号井戸 (M-4区)	結桶 底板	19.1	18.7	1.7	二枚合わせ
18	91 W 88	"	結桶 底板	19.5	—	1.3	二枚合わせ
19	91 W 79	第21号井戸 (G-4区)	曲物? 底板	28.4	* 6.3	2.5	樹皮纏じ (二箇所)
20	91 W 72	第22号井戸 (G-4区)	箸	* 23.2	0.7	0.6	
a 21	91 W 83	第20号井戸 (F-4.5区)	鍋蓋 把手	* 23.7	2.9	1.9	推定長25.3cm YW21bと同一個体
b 21	91 W 112	"	鍋蓋	* 23.8	—	0.9	推定径25.3cm YW21aと同一個体
a 22	91 W 92	"	曲物柄杓? 側板	9.3	高*5.9	0.2~.4	YW22bと同一個体
b 22	91 W 91	"	曲物柄杓? 底板	8.5	8.3	0.3	YW22aと同一個体
23	91 W 111	"	曲物? 底板	21.5	20.6	1.4	二枚合わせ、側面木釘8
a 24	91 W 113	"	曲物 側板	—	—	—	YW24bcと同一個体
b 24	91 W 114	"	曲物 側板	—	—	—	YW24acと同一個体
c 24	91 W 115	"	曲物 底板	—	—	—	YW24abと同一個体
25	91 W 98	第24号井戸 (H-5区)	結桶 底板	* 19.7	—	1.3	二枚(-)合わせ
26	91 W 100	"	角切折敷 底板	* 15.7	* 13.1	0.8	足付 上面一部炭化 下面黒色
27	91 W 99	"	?	* 26.3	* 8.3	1.3	
28	91 W 116	第50号溝 (M3区) 南西部	曲物 底板	* 15.7	* 3.0	0.8	樹皮纏じ (四箇所)
29	91 W 120	"	曲物 底板	* 15.6	* 4.5	0.6	樹皮纏じ (一箇所) 小孔2
30	91 W 119	"	曲物 底板	* 16.1	* 4.6	0.6	木釘2
31	91 W 139	" (M3.4区)	鍋蓋?	* 16.1	* 4.9	0.6	小孔2 内外面黒色
32	91 W 146	"	鍋蓋?	* 19.7	* 7.0	0.6	小孔2 上面? 黒色
33	91 W 25	" (M3区) 南西部	曲物? 底板	15.8	* 5.6	0.6	小孔2
34	91 W 141	" (M3.4区)	曲物 側板	13.1	* 5.3	0.5	樹皮纏じ (二箇所) 小孔4
35	91 W 151	"	結桶? 側板	11.1	* 3.5	0.7	
36	91 W 147	"	折敷? 足板	* 19.7	3.1	1.0	小孔・木釘13
37	91 W 117	" (M3区) 南西部	曲物? 底板	20.3	* 4.5	1.2	
38	91 W 118	"	?	* 24.0	* 7.2	0.7	小孔1
39	91 W 143	" (M3.4区)	鍋蓋 把手	23.4	2.7	0.9	木釘9
40	91 W 144	"	鍋蓋 把手	23.1	2.1	1.3	木釘7
41	91 W 142	"	手 (結) 桶把手	* 13.2	3.9	1.8	
42	91 W 129	"	箸	* 24.8	0.9	0.8	
43	91 W 132	"	箸	* 24.7	1.0	0.8	
44	91 W 135	"	箸	25.0	0.8	0.5	
45	91 W 131	"	箸	23.4	0.6	0.6	
46	91 W 130	"	箸	23.4	0.8	0.5	
47	91 W 128	"	箸	22.1	0.7	0.6	
48	91 W 134	"	箸	* 21.0	0.8	0.7	
49	91 W 152	"	箸	* 18.4	0.6	0.5	
50	91 W 133	"	箸	* 18.7	0.8	0.8	
51	91 W 137	"	箸	* 14.1	0.7	0.7	
52	91 W 136	"	箸	* 15.5	1.0	0.6	
53	91 W 138	"	箸	* 14.2	0.8	0.7	
54	91 W 140	"	柄杓	35.9	2.7	1.3	
55	91 W 145	"	柄杓	* 31.9	2.2	0.9	片面一部黒色
56	87 W 1	第4号掘立柱式建物P85102	漆器 血碗	a 18.8	c —	h 2.5	黒色 a:口径 c:底径 h:器高
57	91 W 78	第6号井戸 (Q-11区)	漆器 杓子	a 14.4	c —	h —	黒色+赤色文様
58	91 W 80	第11号井戸 (LM-4区)	漆器 碗	* 17.0	推 9.7	1.1	黒色
59	91 W 97	第14号井戸 (O-5区)	漆器 碗	a —	c 7.8	h —	黒色+赤色文様
60	91 W 82	第20号井戸 (F-4.5区)	漆器 碗	a —	c 8.0	h —	黒色+赤色文様
61	91 W 71	第22号井戸 (G-4区)	漆器 碗	a 15.0	c 7.3	推 9.9	黒色+赤色文様
62	91 W 81	第27号井戸 (PG-4区)	漆器 血碗	a —	c —	h —	内面赤色・外面黒色
63	91 W 90	第35号土坑 (N-8区)	漆器 碗	a —	c 5.7	h —	黒色
64	91 W 74	第50号溝 (M-3区)	漆器 碗	a 10.2	c —	h —	内面赤色・外面黒色
65	91 W 77	"	漆器 碗	a 12.2	c —	h —	内面赤色・外面黒色
66	91 W 95	"	漆器 碗	a 10.3	c 5.4	h 3.5	内面赤色・外面黒色+赤色文様
67	91 W 75	"	漆器 碗	a —	c —	h —	内赤色・外黒色+赤色 (花卉)・他 (外縁・花芯) 文様2箇所
68	91 W 76	"	漆器 碗	a 11.6	c —	h —	黒色+赤色文様
69	91 W 96	包含層 (O-9区)	漆器 碗	a 12.4	c 7.5	h 6.1	黒色+赤色文様
70	91 W 73	" (NOP2.3区)	漆器 碗	a —	c —	h —	内赤・外黒+赤色他文様2箇所
71	91 W 85	" (Q-8区)	漆器 碗	a —	c 5.4	h —	黒色+赤色文様
72	実測不能	P89169 (N-8区)	漆器 ?	—	—	—	小片 (第1号小穴群)
73	91 W 103	第10号掘立柱式建物P88068	礎板 ?	38.7	20.2	12.6	
74	91 W 109	第35号土坑 (N-9区) W2	?	* 136.6	5.9	—	表面炭化
75	91 W 108	" W1	"	* 123.3	6.1	—	表面炭化
76	91 W 203	P89004 (P-9区)	柱根	* 123.5	21.5	—	
77	91 W 202	第17号掘立柱式建物P88032	柱根	* 73.8	34.3	—	下部に目達穴1
78	91 W 201	第7号掘立柱式建物P89007	柱根	* 79.2	32.6	—	
79	91 W 102	第50号溝 (M-3区) W3	杭	* 69.9	5.9	—	
80	91 W 107	" W2	杭	* 50.9	5.3	—	
81	91 W 104	" W1	杭	* 42.9	8.7	—	
82	91 W 105	" (M-4区) W5	杭	* 57.8	10.0	—	YW83と接合 (半載品)
83	91 W 106	" W4	杭	* 57.5	10.6	—	YW82と接合 (半載品)

第4章 杉谷チャノバタケ遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

発見の経緯と所在範囲

本遺跡は眉丈山系から邑知低地帯へと派生した丘陵部(斜面を含む)と一部谷部に立地し、東西約350m、南北約80m、標高約60~110mの範囲に所在するものと推定される。遺構・遺物の広がりや谷部や急斜面を介して大きく三地区に分かれることから、平野部側からそれぞれA・B・C地区と呼称している。昭和61(1986)年7月にまずA地区が、同年10~11月に次いでB地区がそれぞれ試掘調査によって確認され、同時に最高所のC地区の存在も確実視されるようになった。

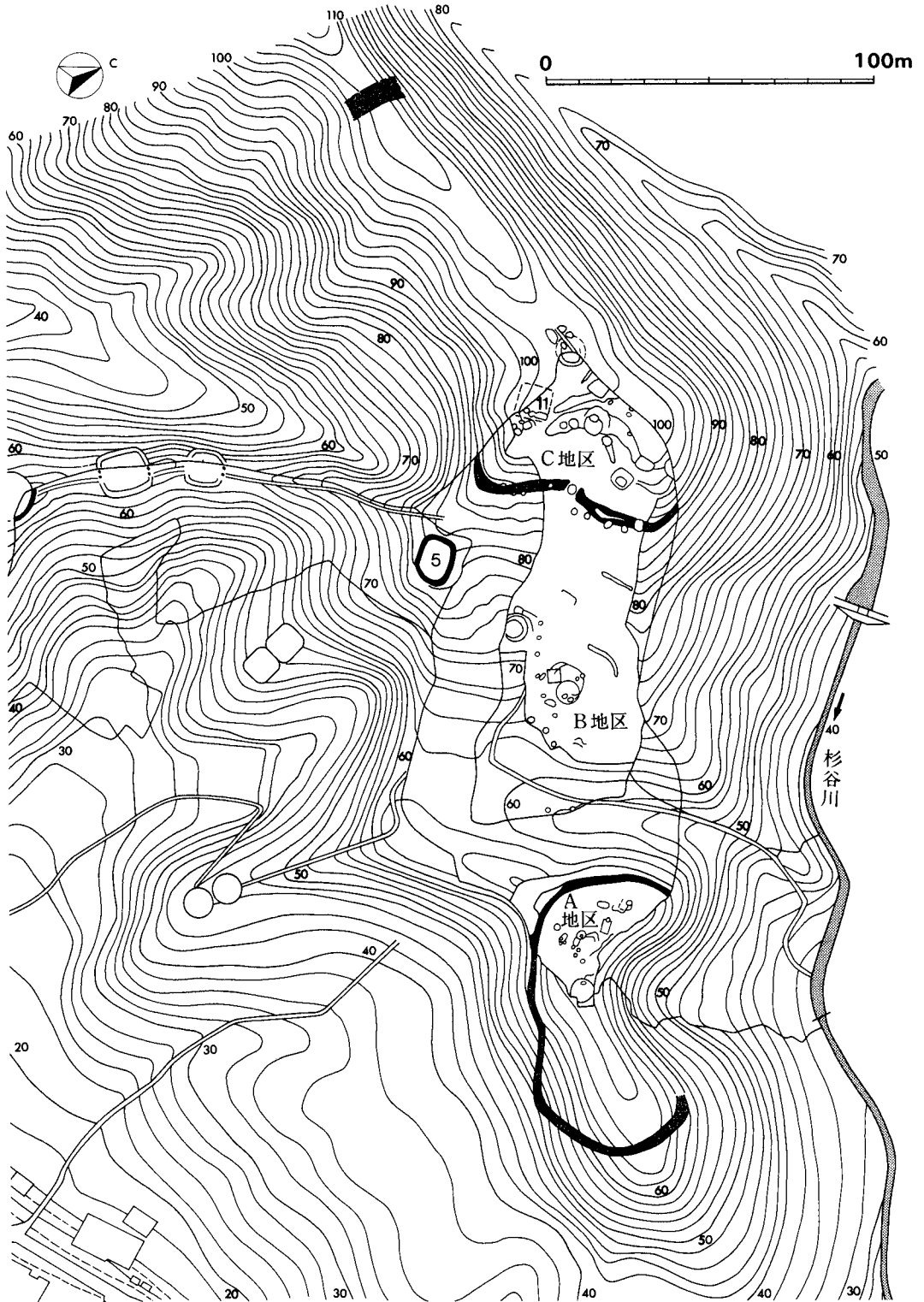
調査の概要

発掘調査は昭和62(1987)年にA地区の西側二分の一(約1,500㎡)とB地区の大半(約2,000㎡)、翌昭和63(1988)年にB地区の一部(約200㎡)とC地区の東側三分の一(約2,000㎡)計5,700㎡についておこなった。いずれも工事にかかる箇所であるが、このほか範囲確認前に損壊した箇所や、すでに地山付近まで掘削が終了していたため遺物採集のみをおこなった箇所がある(本章第2~4節参照)。

検出された遺構は、竪穴式建物17基(いわゆる焼失竪穴3:12・28・36号、石鏝製作竪穴(可能性のあるものを含む)4:12・18・36(・37)号)、竪穴状遺構6基(A地区)、掘立柱式建物2基(A地区:1・B地区:1)、(貯蔵穴)上屋4基、段状遺構13基(A地区:2、B地区:4、C地区:7)、土坑50基(A地区:9、B地区:18、C地区:23)、環濠2基、地下式墳1基(C地区)、小穴(ピット)群1(B地区)基、集石1(C地区)基で、時間的には縄文時代から(おそらくは)中世におよんでいる。竪穴状遺構は、竪穴式建物に類似するものの柱穴を確認できなかったもの、(貯蔵穴)上屋は、貯蔵穴と推定される土坑の上にとまう(架かる)と考えられるもの。また段状遺構は、構造的には「傾斜地を等高線に沿ってL字状にカットし、細長い一定の平坦面を築成する。平坦面上には溝やピット列が存在する例がある」〔森岡1986〕る遺構に該当する。段状遺構、地山整形遺構、地山切込み遺構、段状整形遺構などと呼称されるが、ここでは段状遺構と呼称する。機能的には柵・道あるいは掘立柱式建物等遺構造成にかかる山側の切土面他が想定される。なお土坑50基には、貯蔵穴16基(C地区)、落とし穴10基(B地区)が含まれる。

出土遺物は縄文土器・石器、弥生土器・土製品・石器・木器・木製品・金属器・炭化米塊、須恵器・土師器、磁器、銭貨で、土器・土製品601点(CP 1~254・256~602)をはじめ、石器150点(CS 1~150)、木器3点(CW 1~3)、金属器5点(CM 1~5)、炭化米塊

第1節 遺跡と調査の概要



第156図 杉谷チャノバタケ遺跡全体図(S=1/2,000)

2点(CR1・2)の計761点を実測し掲載した。時期的には縄文時代から江戸(・明治)時代におよぶもので、遺物総量は土壌サンプルおよび焼失竪穴出土炭化材14箱を含め、遺物整理箱(LⅡ型コンテナバット72)にして86箱を数える。

縄文時代および弥生時代の主な遺構の概要は以下にあげたが、その他の遺構を含め詳細は次節以下地区ごとの報告を参照されたい。

参考文献

森岡 秀人 1986 「段状整形と高地性住居」『弥生文化の研究』 7 弥生集落 雄山閣出版

竪穴式建物(時代は総て弥生時代、A:5・6・9・12~14・18 B:20~23・37 C:26~28・31・36)

	平面形	長径m×短径m	時 期		平面形	長径m×短径m	時 期
5号	隅丸方	(2.8) × (2.0)	時期不明	22号	円	(7.0) × (7.0)	中期後半
6号	長 方	(2.85) × (2.5)	時期不确实	23号	円	(6.0) × (6.0)	中期後半
9号	隅丸方	2.35 × (1.5)	時期不明	37号	円?	(7.0) × (7.0)	中期
12号	隅丸方	4.5 × 3.9	中期後半	26号	円	(8.5) × (8.5)	中期後半?
13号	長 方	3.9 × (3.7)	時期不确实	27号	隅丸方	(6.5) × (6.0)	終末
14号	隅丸方	3.1 × 2.25	中期後半?	28号	隅丸方	(5.4) × (5.0)	中期後半?
18号	円?	(7.0) × (7.0)	中期後半	31号	方	2.5 × 2.5	後期後半
20号	等脚台	11.3 × (9.4)	終末	36号	円	(6.0) × (6.0)	中期後半
21号	等脚台	9.9 × 7.8	終末				

(貯蔵穴)上屋(時代は総て弥生時代、総てC地区)

	平面形	長径m×短径m	時 期		平面形	長径m×短径m	時 期
1号	隅丸方	(7.0) × -	中期後半	3号	隅丸方	5.8 × 5.3	中期後半
2号	隅丸方	- × -	中期後半	4号	隅丸方	(7.5) × -	後期後半

土坑(貯蔵穴、時代は総て弥生時代、総てC地区)

	平面形	長径m×短径m	時 期		平面形	長径m×短径m	時 期
29号	隅丸方	(2.90) × 2.54	中期後半	37号	隅丸方	3.90 × 3.46	後期後半~?
35号	円	3.22 × 2.70	中期後半	40号	隅丸方	2.34 × 2.02	後期後半
38号	円	3.12 × 2.58	後期後半	41号	隅丸方	2.80 × 2.51	後期後半
30号	円	2.70 × 2.32	後期後半	42号	円	2.34 × 2.12	後期後半
31号	円	3.49 × 2.42	後期後半	43号	隅丸方	2.07 × 1.70	後期後半~?
33号	円	2.46 × 2.04	後期後半~?	44号	-	- × -	未調査
34号	隅丸方	2.80 × 2.18	後期後半~	45号	-	- × -	未調査
36号	円	2.60 × 2.26	中期後半他	46号	-	- × -	未調査

第1節 遺跡と調査の概要

土坑（落とし穴、時代は総て縄文時代、総てB地区）

	平面形	長径m×短径m	時 期		平面形	長径m×短径m	時 期
9号	方	2.12 × 1.92	前期	14号	隅丸方	0.86 × 0.66	時期不明
10号	不整方	3.14 × 2.56	時期不明	21号	隅丸方	1.38 × 1.26	時期不明
11号	隅丸方	1.41 × 1.31	前期?	23号	略 円	0.86 × 0.75	時期不明
12号	隅丸方	1.16 × 0.94	時期不明	24号	隅丸方	1.30 × 0.93	時期不明
13号	隅丸方	1.40 × 1.38	前期?	25号	略 円	1.29 × 1.25	時期不明

環濠（時代は総て弥生時代、A地区：1号 C地区：2号）

	幅m×深さm	断面形	時 期		幅m×深さm	断面形	時 期
1号	0.7～3×1.1～1.8	V字形	後期後半	2号	～3.6×～2.1	V字形	中期後半



写真5 C地区第28号竪穴式建物他掘削作業

第2節 A地区の遺構と遺物

1 概要(第156～158図)

A地区は本遺跡の中で最も平野部に近い地区で、東西約100m、南北約50mの丘陵(標高60～70m)上に遺構が展開するものと推定されるが、発掘調査(昭和62(1987)年度)はそのうち西側約二分の一についておこなっている。調査にあたっては、平坦面中央のベンチマークと前年度におこなった第1号環濠試掘トレンチ南東側試掘壁面とを結ぶ北東-南西ラインとベンチマークから同ラインに直交する北西-南東ラインを任意に設定し、4区画をそれぞれN、E、S、W区とした。調査区の西側は、範囲確認調査前にすでに土木工事がおこなわれていたため遺構・遺物の有無は不明である。一方東および南側については急斜面のために一部調査を断念した箇所があるが、少なくとも東側はすでに崩落しており遺構・遺物は遺存していないと推定される。遺構は平坦面中央部(70m以上)とその周辺(上段、69～70m)、やや下がった中段(67～69m)、そして斜面下の下段(63～66m)といったかたちで等高線に沿うように展開する。

検出された遺構は、竪穴式建物7基(第5・6・9・12～14・18号、第1・3・10・11号は欠番)、竪穴状遺構6基(第4・4B・5B・7・8・8B号、第2・15～17・19号は欠番)、掘立柱式建物1基(第1号)、段状遺構2基(第9・10号)、土坑9基(第1・3・5・6・47～51号、第2・4号は欠番)、小穴(ピット)7基(第1～7号)、環濠1基(第1号)である。包含層がほとんど遺存しないため、遺物の大半は遺構からの出土で20箱を得ている(個々の遺物の詳細は節末の観察表を参照されたい)。

2 竪穴式建物・竪穴状遺構(第159～163・167～170・180～182図)

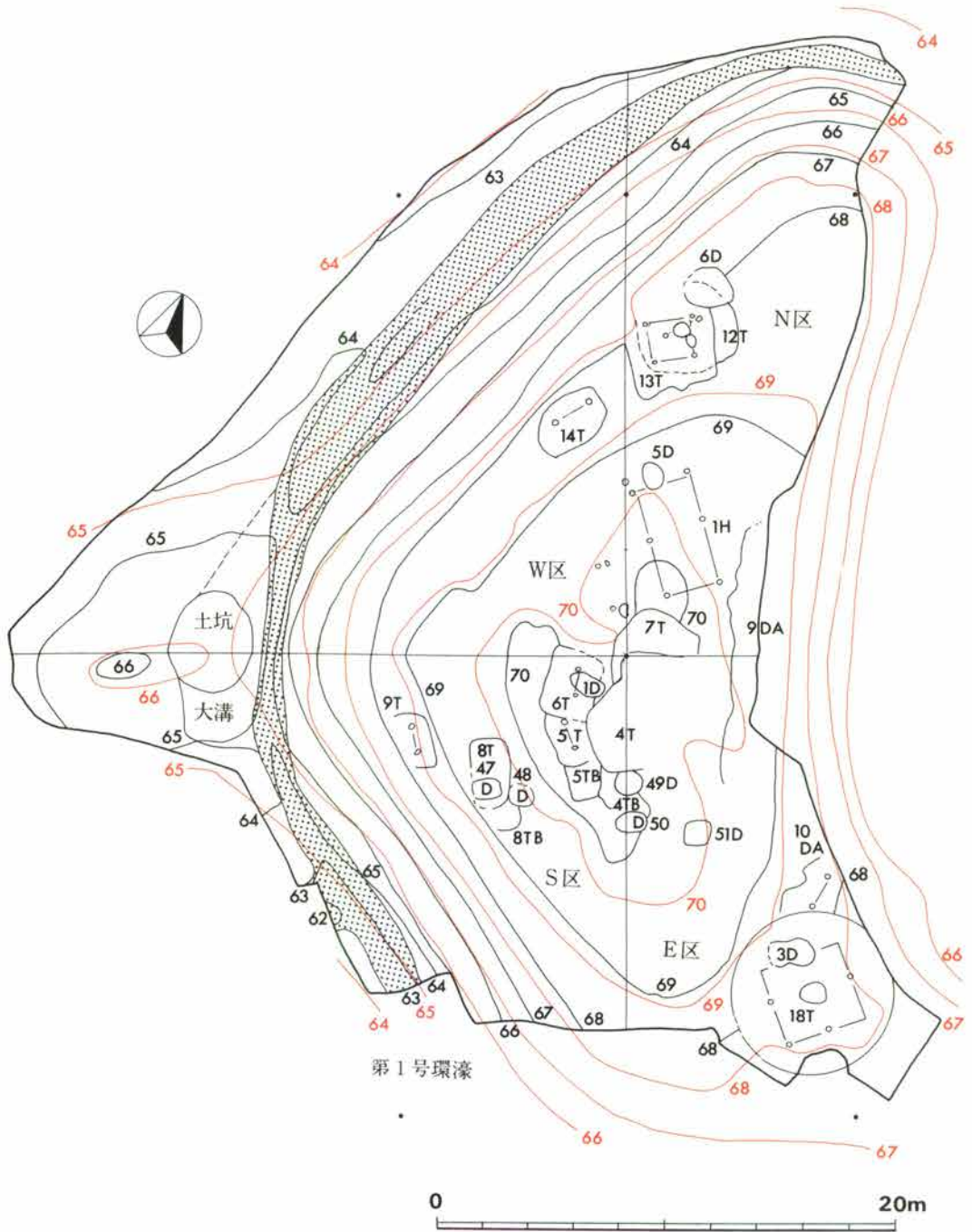
第5号竪穴式建物

S区中央に位置する。北側約二分の一は第4・6号竪穴に切られているが、南東側に重複する第5号B竪穴との切り合いは不明。平面形は隅丸方形を呈し、長径2.8、短径2.0m(いずれも推定)、深さは約20cm。柱穴としてP1(径25cm)、P2(径20cm)を検出した(距離は約1.2m)が深さは16、20cmと浅い。埋土は黄褐色土、遺物の出土は少なく石器1点(珪質岩製剥片、CS4)を実測した(他に黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の石鏃素材剥片2点(約6g)あり)にとどまり、所属時期も不明である。

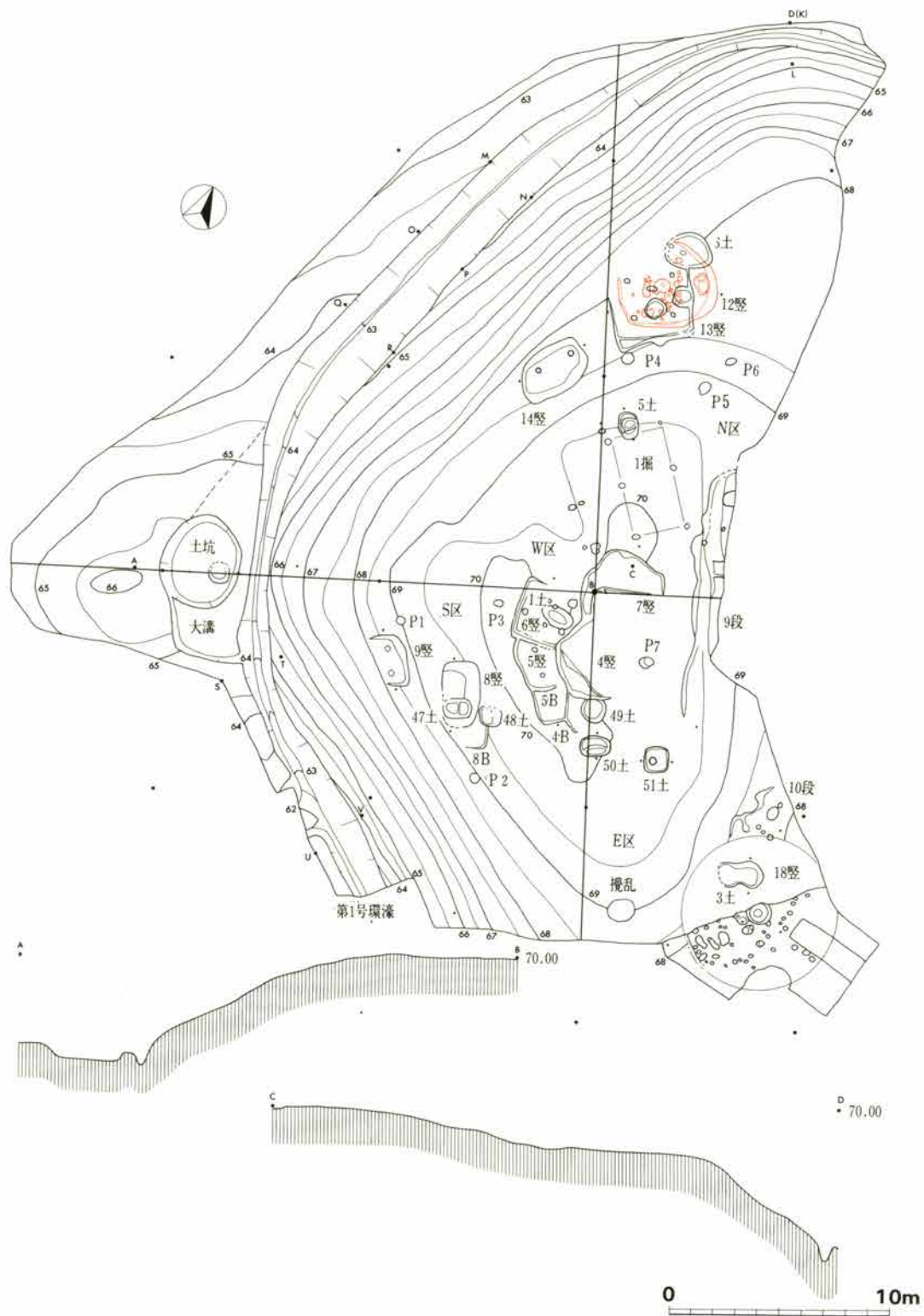
第6号竪穴式建物

中央部S区とW区の境界付近に位置する。東側と南東隅は第1号土坑・第4号竪穴に切られ、南側では第5号竪穴を切っている。平面長方形を呈し、長径2.85、短径2.5m(いずれも推定)、深さは約15cmである。西および南側壁では幅約13cm、深さ4cmの周溝が確認された。柱穴としてP1、P2(ともに径20cm)を検出した(距離は約1.15m)が、深さは8cm

第2節 A地区の遺構と遺物



第157図 A地区遺構配置図(S=1/300)



第158図 A地区全体図(S=1/300)

第2節 A地区の遺構と遺物

と浅い。埋土はやや暗い黄褐色土、遺物の出土は少量で実測した土器2点(壺、鉢、CP5・6)のほか、黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の石鏃素材剥片5点(約7g)を得ている。土器はいずれも弥生時代中期の所産であるが、他の遺構と切り合うことからこれらが遺構の所属時期を表すものかどうかは不明である。

第9号竪穴式建物

S区中段に位置する。他の遺構との切り合いはないが、南西側はやや流出している。平面隅丸長方形(推定)を呈し、長径2.35、短径1.5(推定)m、検出面(上位)からの深さは約35cmである。距離約1.15mを測る柱穴P1、P2(いずれも径25cm)は深さは6、12cmと浅く、北東側壁面の傾斜は緩やかである。埋土は黄茶褐色土、遺物の出土は極少量で実測しうるものはなかった。所属時期は不明である。

第12号竪穴式建物

N区中段に位置する。北東側の一部を除き大部分は第13号竪穴が上部に重複するほか、第6号土坑と攪乱にも切られているが、辛うじて床面の損壊は免れている。打製石鏃を製作していた焼失竪穴であり、埋土下部から床面にかけて、原位置を保つものを含む多量の焼土、炭化材、土器・石器・木器・ドングリ類の種子(子葉)が検出された。

平面形は隅丸長方形を呈し、長径約4.5、短径約3.9m、深さは南東隅壁では約60cmを測る。主柱穴はP1(径40、深さ51cm)、P2(同30、46cm)の2基(距離は約1.65m)で、主柱穴間(竪穴中央)にすり鉢状の炉(長径75×短径65×深さ40cm)、炉の南東側に隣接して灰穴(同65×45×30cm)、灰穴の両側に主柱穴ラインに平行する性格不明の2基の小穴(P3:20×25cm、P4:20×13cm、P3-P4間の距離は約0.75m)、北東壁際に南西側のみ二段掘り(坑底との比高約45cm)の土坑(屋内貯蔵穴、90×60×55cm)、南西および南東側の一部で周溝(幅10cm前後、深さ3~5cm)他が検出された。

埋土は最上部にやや暗い黄褐色土(1)、その下にやや明るい褐色土(2、壁際では床面にまでおよぶ)が堆積し、ともに地山との識別が困難でほぼ水平に堆積しかつ遺物をほとんど含まないことから、焼失後人為的に埋め戻された可能性が高い。壁際を除く下部では炭化物を含む褐色土系の土(3~6)、さらに灰穴の上部(範囲73×47cm、下部は灰穴内に入り込む)および主柱穴間を北西側にV字形に迂回する(幅約35~60cm)焼土・炭化物(粒)を多量に含む褐色土ブロック(7、最大厚約20cm)、南東壁から中央にかけて炭化材(物)ブロック(8、幅50~75、長さ170、厚さ数cm)が検出された。このうち主柱穴間を結ぶ7層は完全には焼失(灰化)しなかった主柱の倒壊にかかるもの、8層は主柱間の梁(?)に架かる建物部材、3~6層は埋め戻し土と炭化材の混土層と考えた。基本的には7層が部材の上で検出されることから、その主体となる焼土の性格は屋根の構成土(別途被せられた土の可能性がわずかに残るが)が焼土化したものと推定しておきたい。

炉および灰穴の下部の埋土は、黒色土(灰、15、最大厚12cm)および焼土・炭化物を多く含む暗褐色土(12、炉内黒色土を切る、同13cm)で、その上面に各々土器(CP27・29)が

正立していたと推定される(後述)ことから、それぞれの上部の埋土(炉：7・13・14、灰穴：7・9～11)は焼失後に堆積したものと見える。炉での煮炊にあたっては、黒色土中に土器底部をやや埋め込むかたちでなされたと考えられ、同層が干渉材となり(最上部を除き)炉壁が焼ける可能性は低い。灰穴は炉内で生成される過剰な(しかし有用な)灰あるいは消し炭の一時的な貯蔵穴、内容物保温のための煮炊具の仮置き場等の機能が考えられるが、両側に位置する2基の小穴とともに性格究明にはさらに類例の増加が必要である。なお焼失時か焼失前かは確定できなかったが、灰穴の北(範囲12×9 cm)および西(同20×15 cm)側の2箇所のみ床面が熱を受け赤化している。

遺物の出土は多くしかも大形かつ多様であって、土器・土製品17点(壺・甕・土製円盤(紡錘車未製品)、CP25～41)、石器・石製品18点(石鏃・同素材剥片・砥石・扁平片刃石斧・台石・敲石他、CS31～44・54～57)、木器・木製品3点(火鑽棒・火鑽板・建物部材、CW1～3)を実測し、他に石鏃素材剥片・石屑(総重量224 g)、炭化したドングリ類の種子の子葉(土坑内22点以上、埋土北側10点以上、同南側数点他)を得た。埋土中の遺物の取り上げは、土層観察用に設定したG-H(南東-北西)およびE-F(南西-北東)ラインにより堅穴を4分割し、それぞれN、E、S、W区としたが面積的には均等ではない。

このうち焼失時(前)の原位置をほぼ保っていると考えられる(完形)土器は、CP27・29・31・35・40・41の6点である。甕CS27は炉内黒色土(15層)上面(P2)に、甕CP29は灰穴内暗褐色土(12層)上面(P3)にそれぞれ(検出時は南東側に折り重なるように倒れ込んでいたが)ほぼ正立して、壺CP31(P4)・CP35(P6)・CP40(P5)は南東隅床面に、甕CP41(P9)は南側床面に(総て正立していたかどうかは別として)置かれていたものと推定され、焼失(直)前に堅穴内で使用されていたものと考えたい。炉・灰穴中のCP27・29の出土状況から、煮炊中に(不慮の失火で?)焼失したものであろう。他の床面出土土器では甕(?)CP36(P7)・土製円盤(紡錘車未製品)CP32(P7地点)が堅穴内で使用されていた可能性がある。ともに南東隅で壺3点と共伴しており、未製品である後者は別として、前者は完形に復することはできなかったが、少なくとも胴中位以上まではほぼ完形の大型破片であり、(焼成後)底部に穿孔を施す転用品(その用途は別に問題であるが)として(口縁部を欠損する等の不具合はあったとしても)使用に耐えるものであった可能性が高い。

他の土器は北側出土の底部片が多いが、炉内出土のCP39や床面出土のCP30(P1)・37(P8)を含め、確実に堅穴内で使用されていたといえるものはない。焼失後堅穴埋め戻し時に堅穴外から投棄され(流入し)た可能性があり、重複する第13号堅穴からの混入品の可能性もわずかではあるが残る。このうち口縁部に突起を有し外面に縄文を施した壺CP34は天王山系土器と考えられ、また二孔一対の蓋結束孔を有し口縁部付近に3条の木目状沈線を施す壺CP33は、同一個体とみられる破片(CP151)が混入(後述)ではあるが第1号環濠(N区、第12号堅穴北西側斜面下)から得られている。

石器・木器では、東側床面出土の台石CS54(S2)が原位置を保っていると推定される他

第2節 A地区の遺構と遺物

は小品が多く、大部分は出土位置を特定できなかったため、確実に堅穴内で使用されたといえるものは少ない。石鏃11点(凹基無茎式6(CS31~36)、円基式?1(CS37)、欠損不明4(CS38~41))は土坑内3点(CS34~36)を含め8点が北および東側から出土、東側で砥石(CS43、北側出土破片と接合(復元)完形品)、敲石(CS56)、台石(CS55(S1)、土坑上で床面から約10cm浮いている)、焼失時に炭化して遺存した火鑽板(CW2)・火鑽棒(CW1、ともに堅穴内で使用されていたものと考えられる)、北側で白色凝灰岩製の石鏃素材剥片(CS42)、中央で桂化木(CS57)、灰穴から扁平片刃石斧(CS44)、詳細出土地点は不明であるが樹皮の残る炭化した建物部材(CW3)が得られたほか、黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の石鏃素材剥片・石屑が土坑から約26g、灰穴から約15g、支柱穴P1から約13g出土しており、埋土からも北東側で約85g、南東側で約46g、北西側で約23g、南西側で約15gの計約223gが得られているほか、白色凝灰岩製の石屑も微量(約1g)ではあるが埋土から検出されている。これらは総ての(床面近くの)埋土を篩にかけて得たものではないため、堅穴内の分布を正確に示してはいないが、堅穴北東側を中心に(少なくとも黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の)石鏃を製作していたとの推定は可能である。

なお、ドングリ類の種子の子葉については渡辺誠氏の調査結果(第7章第3節)を参照されたい。調査時の所見では、原位置を保って出土したとはいえないが堅穴内に貯蔵されていたのは確実で、今後の類例の増加が待たれるところである。

本遺構の所属時期は、出土遺物(土器)から弥生時代中期後半と推定される。

第13号堅穴式建物

N区中段に位置する。北側の一部を除き大部分は第12号堅穴に重複する一方、南隅は第6号土坑に切られ、西側は攪乱を受け、中央部も東西方向に植林(あるいは耕作?)にともなう溝状の攪乱が走る。平面(長)方形を呈し、長径3.9、短径3.7m(推定)、深さは約30cmである。床面では支柱穴4基(P1~4、径20~30cm、深さ15~30cm)と中央部に小穴(P5、30×55×25cm)、北東壁際(土坑1、100×100×25cm)およびP1-P2間やや内側(土坑2、102×95×15cm)で土坑2基を検出した。P5は掘りすぎた可能性もあり、炬と考えたが確証はない。支柱穴間の距離は1.85m(P1-P2)、2.15m(P3-P4)、1.75m(P1-P3)、1.8m(P2-P4)である。埋土は黄褐色土、P5・土坑1が黒褐色土、土坑2が焼土と炭化物を多く含む褐色土である。出土遺物は極少量、土器2点(甕・鉢、CP42・43)を実測し、黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の石鏃素材剥片17点(計約27g)を得た。土器はいずれも弥生時代中期の所産と推定されるが、第12号堅穴にともなう可能性があり、本遺構の所属時期は不明である。

第14号堅穴式建物

W区中段に位置する。平面隅丸長方形を呈し、長径3.1、短径2.25m、検出面(上位)からの深さは約60cmである。径25cm、距離約1.7mを測る柱穴P1とP2(深さ15cm前後)は、ともに壁面までの距離が30cm前後と近く、壁面の傾斜は総じて緩やかである。埋土は黄褐色

土、遺物の出土は少量で土器2点(甕・壺、CP9・10)、石器2点(小型両刃磨製石斧・砥石、CS5・6)を実測した。前者はいわゆる天王山系土器で、弥生時代中期後半頃の所産であろう。小片であるため確定はできないが、遺構の所属時期も同期である可能性がある。他に黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の石鏃素材剥片1点(約7g)を得ている。

第18号竪穴式建物

E区中段に位置する。第1章第2節でふれたとおり、北西側約二分の一は調査区内に遺存していたと推定されるが、上段から中段へ移行する変換部分にあたることから(おそらくは地山質の)流土の堆積が厚く、その上部で第10号段状遺構・第3号土坑を検出したものの本遺構の確認にいたらなかった。調査後の(法面)掘削工事で断面が露出し遺存部分にも崩落の恐れが生じたため、計画変更により影響範囲外となっていた箇所(南東側約二分の一)の発掘調査を実施した。なお、(拡張)調査区東側には昭和61(1986)年7月に古墳の存在を想定した試掘トレンチが所在する(若干の焼土を検出したものの、遺構・遺物を検出できなかったという意味では二重の体たらくであった)。

土砂の流出と攪乱のためか、壁は南西側で一部遺存していたにとどまり平面形の確定はできなかったが、径7m程度の円形と推定され深さは25cm以上を測る。床面で検出された多数の小穴のなかからP1～4(径20～30cm、深さ15～25cm)を用い推測を重ね、P2を主柱穴、P1・3・4を支柱穴とする一辺3.6m程度の方角4本主柱を想定したが確証はない。中央では炭化物を含んだ焼土面(最大厚10cm)が4箇所、その直下床面との間に炭化物(炭)面(同厚5cm、範囲は1.7(推定)×2.15m)、さらにその下(床面)で炉(110×118×50cm、径は推定、下部には黒色の灰が最大15cmの厚さでレンズ状に堆積する)と炉の南西側に隣接する灰穴(50×65×30cm)が検出された。ただし炉と灰穴の最終埋土(やや暗い黄褐色土)上には基本的には上記二面は堆積していない。このことから竪穴の廃棄に際して炉の周辺で火が使用され(床面が赤化していないという問題は残るが)、その後被せられた土が焼土化したものと推定した。廃棄時の火の使用(直)前に炉および灰穴が埋め戻されていない(埋土の切り合いからみれば炉→灰穴の順であるが)とすれば、炉と灰穴の最終埋土下面が生活時の状態に近いものと考えられ、規模はそれぞれ径90×深さ35cm、同40×同10cm程度となる。なお、竪穴そのものの埋土は上部が褐色土、下部がやや暗い黄褐色土である。下部の埋土については地山質で汚れが少ないことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物の出土は比較的多く土器12点(壺・甕、CP46～57)、石鏃5点(CS13～17)、同素材剥片13点(CS18～30)を実測した。壺・甕の底部(小)片(CP47・48・50～54)はもとより、比較的大形の破片であるCP46・55～57(壺・甕)も完形品ではないため生活時のものとの判断はできないが、炉内黒色灰層上面で出土した壺・甕(CP55・56)と灰穴の西側床面で検出された壺(CP46)は、竪穴廃棄時に廃棄(あるいは遺棄)されたものと推定される。図化はできなかったが、南東側床面(P1地点)で出土した壺胴部片(総重量1290g)も

第2節 A地区の遺構と遺物

同様である。石鏃は凹基無茎式4点(CS13~16)、尖基式1点(CS17)で、CS16が炉内から出土したほかは、凶化しなかった剥片・石屑(後述)の大半がそうであるように、床面近くの埋土を篩にかけて得られたものである。剥片はCS8がpit8から出土したほか、CS19~24が南側床面(S1地点)に、CS25~30が東側床面(S2地点)に集中して出土した。このほかpit8を中心とする南東側小穴群と埋土から、黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の剥片・石屑がそれぞれ約38、480g、少量ではあるが埋土からは白色凝灰岩および硬玉質岩製の石屑も約1g得られており、(おそらくは竪穴南東側で)石鏃を製作していたことが知られる。

本遺構の所属時期は、出土土器から弥生時代中期後半と推定される。

第4号竪穴状遺構

中央部S区とE区の境界付近に位置する。西側で第5・6号竪穴を切るが、南北に重複する第4B・5B・7号竪穴、第49号土坑との切り合いは不明、東側の壁の立ち上がりは確認できなかった。平面形は六角形(長径3.9m、推定)を呈するのであろうか。深さは約30cmであるが、南側は一段高い(床面との比高約7cm)。埋土は上部がやや暗い黄褐色土、下部が黄褐色砂質土である。出土遺物は少ないが土器4点(甕・壺、CP1~4)を実測し、黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の石鏃素材剥片1点(約2g)を得ている。遺構の所属時期を表すものかどうかは別として、土器は弥生時代中期の所産(CP2は不明)であろう。

第4号B竪穴状遺構

S区中央に位置。重複する第4・5B号竪穴、第49号土坑との切り合いは不明。深さ約8cmを測るが、平面形は不明(長径1.7m以上)。出土遺物はなく所属時期は不明。

第5号B竪穴状遺構

S区中央に位置。重複する第4B・5号竪穴との切り合いは不明。平面は隅丸方形(長径1.65m以上)を呈するのであろうか。深さは約5cm、出土遺物はなく所属時期は不明。

第7号竪穴状遺構

中央部4区画にまたがって位置。重複する第4号竪穴との切り合いは不明、南側壁の立ち上がりは確認できなかった。平面形は六角形(長径4.1m、推定)を呈するのであろうか。深さ約10cmを測るが、南東側は一段低い(床面との比高約10cm)。出土遺物は極少量で土器2点(甕?、CP7・8、弥生時代中期?)を実測したが、遺構の所属時期は不明。

第8号竪穴状遺構

S区上段に位置。重複する第8号B竪穴、第47号土坑との切り合いは不明。南西側がやや流出しているが、平面隅丸方形を呈し、長径3.05(推定)、短径1.75m、深さは約50cm、北および東側の壁の立ち上がりは緩やかである。出土遺物はなく所属時期は不明。

第8号B竪穴状遺構

S区上段に位置。北東側は第48号土坑に切られているが、北西側に重複する第8号竪穴との切り合いは不明、南西側はやや流出している。平面隅丸方形を呈し、長径2.7(推定)、短径1.05m以上、深さは約40cmを測る。出土遺物はなく所属時期は不明である。

3 掘立柱式建物(第164図)

第1号掘立柱式建物

N区上段から中央にかけて位置する。当初は2間×2間の総柱建物を想定していたが、南西側の柱列のあり方がやや不自然であることから、それらを除外して梁間1間(2.45～2.55m)、桁行2間(4.65～4.95m)の建物と考えた。桁行方向の方位はN40°Wで、柱穴(P1～P6)は径18～31cm、底面の標高は69.54～69.77m、検出面からの深さは5～34cmを測る。柱穴間の距離は桁行では2.15m(P1-P2)、2.8m(P2-P3)、2.15m(P4-P5)、2.5m(P5-P6)、梁間では2.55m(P1-P4)、2.5m(P2-P5)、2.45m(P3-P6)である。柱穴埋土は茶褐色土、出土遺物はなく所属時期は不明だが、北西側の柱列(P1-P4)間に所在する第5号土坑(後述)から本地区唯一の土師器?(CP18、器種不明、古代のものか)が出土しており、それを重視すれば本遺構も同期である可能性がある。

4 段状遺構(第160・165・167・180図)

第9号段状遺構

上段の縁辺部N区からE区にかけて所在する。当初は床面の大半が流出した竪穴式建物が3基(南側から第3・10・11号)連続するものと考えていたが、前節でふれたとおり段状遺構として報告する。幅(1.6m以上)は東側が急斜面に面し調査不能であったため不明だが、長さは約11.6m、断面形は緩やかなL字状を呈する。法面の傾斜は一様ではなく、下部では複数の(おそらくは幅の狭い)高さの違う平坦面がみられ、最深部の深さは検出面から約50cmである。埋土は上位が黄褐色土、中位が黄褐色土ないしは黄灰色土、下位が淡褐色土であるが、北側中位上面では黒褐色の炭(粒、灰?)が充満した土坑状の掘り込み(径70cm以上、深さ22cm)が認められた。中段への傾斜変換点にあたることから、機能的には柵と考えておきたい。出土遺物は少ないが土器3点(壺・甕、CP13～15、いずれも北側)、石器1点(石核、CS7、南側)を実測した。土器はいずれも弥生時代中期(後半)に属するとみられ、遺構の所属時期を表している可能性がある。

第10号段状遺構

E区中段に位置する。当初は第1号竪穴(南西部は第2号土坑)と考えていたものである。幅約2m、長さ約3m、深さ60cm前後(南西部は一段高い、比高差約5cm)を測り、断面形はL字状を呈する。遺構内には大小6基の小穴が検出された。長さの点で柵よりも建物造成面の可能性を考え、P1-P2(径26cm、深さ13cm、距離1.4m)から東へ延びる1間×1間の掘立柱建物を想定したが確定はできなかった。遺物の出土は少量で土器2点(鉢・甕?、CP11・12)を実測したほか、黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の石鏃素材剥片3点(約14g)を得たにとどまる。土器はともに弥生時代中期(後半)に属するとみられるが、前述の第18号竪穴(弥生時代中期後半)に隣接(あるいは重複)しかつ後出する可能性

があるため、遺構の所属時期を表すものかどうかは問題が残る。

5 土坑・小穴(第158～161・164・167・169・181図)

本地区で検出された土坑・小穴はいずれも性格不明である。形態・法量(および埋土)は節末の一覧(表)に譲り、遺物が出土したものについて説明する。

第1号土坑

第6号堅穴を切る本遺構では、土器1点(壺?、CP16、弥生時代中期?)を実測した。同堅穴と同じく遺構の所属時期は判然としない。

第3号土坑

第18号堅穴に重複しかつ後出する可能性の高い本遺構では、天王山系土器1点(壺?、CP17、CP24と同一個体?)を実測した。弥生時代中期後半に属するとみられるが、第10号段状遺構同様遺構の時期を表すものかどうかは不明である。

第5号土坑

第1号掘立柱建物との関連性が考えられる本遺構からは、土器1点(土師器?、器種不明、CP18)が出土した。古代に属するものであろうか。

第6号土坑

第12・13号堅穴を切る本遺構では、土器2点(壺・甕?、CP44・45)、石器1点(石鏃、CS45)を実測し、他に黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の石鏃素材剥片6点(約13g)を得ている。CP44は坑底で検出したP6より得たが、前後関係は確定的ではない。CP45も第12号堅穴にともなっていた可能性があり、本遺構の所属時期は不確実である。

第49号土坑

第4・4B号堅穴と重複する本遺構では、弥生時代中期(後半)に属するとみられる土器1点(甕?、CP19)を実測したが、遺構の所属時期を表すものかどうかは不明である。

6 環濠(第165・166・171～179・181図)

第1号環濠

下段全域(S・W・N区)を延長約40mにわたって環状に巡る。検出面(谷側)の標高は62.3(南部)～65.8(南西部)m、中央最高所との比高差は4.4～7.9mである。調査前は急斜面に数段にわたって造成された開墾(植林あるいは耕作?)にともなう帯状の平坦面(幅約4mとやや広めではあったが)のひとつにみえた箇所であったが、同面の内側に幅0.7(北部)～3.0(西部)m、深さ1.1(北部)～1.8(南西部)m、断面V字形の環濠(内外ともに傾斜変換点を法面上端とした)が検出された。調査後に延長部分(民地)を踏査し、急斜面から緩斜面へと変わる同様の地形を確認(南西部のような二段掘り箇所(後述)やC地区第2号環濠谷部のような入口部(土橋部)の有無は未確認)、現況の測量図(S=1/500)に重ね合わせた(委託事業)結果、北東部はすでに崩落しているものの、環濠は東西約85、南北約

47mの範囲を楕円形に巡るものと推定された。

調査区内で検出された環濠は北部と南部では狭小であるが、前者は谷側が開墾によって削平され当時の規模を有していない可能性が高く、後者は崩落によって谷側の立ち上がりの大部分はすでに失われていた。これにたいして西部の遺存状況は比較的良好である。谷側の平坦面も中央急斜面からの傾斜に不自然さがないところから、掘削当時も緩斜面にあたっており、開墾にともなう削平は最小限に止まっているものと推定される。こうした地形変換点に立地する環濠は、確かに掘削作業そのものを容易にはするが、それが一般にいわれるような防禦的性格を有するものとすれば、外側に広がる緩斜面は一方でその防禦性を損なうこととなる。いま環濠の掘削土をそのままの断面形で天地を逆にし緩斜面に盛土したとすれば、外側からの深さは2倍(西部では1mから2mへ)、幅も3～4割大きく(同3mから4mへ)なりこの欠点を三重の意味で解消できるが、あくまで推測の域を出ず、調査でも盛土の検出に努めたが具体的な確証は得られなかった。

なお南西部は他の箇所と異なり、V字溝(狭義の環濠)の外側が幅4.2m、延長(開墾による土砂の移動で北西側のプランは不明瞭であるが)11m以上にわたり平面台形に二段掘りされている(外側からの深さは約60cm、内側V字溝底からの比高は56cm)。調査では同箇所を大溝と呼称し、その内部で土坑(4.3×3.55×0.2m)、土坑内で炭粒の充満した小土坑(100×16cm、坑底は土坑底から約10cm高い)、土坑底で炭粒面(94×74×2cm)を検出した。大溝掘削の目的は、同部が中央からのびる細い尾根筋にあたることから、その掘削土を外側に盛土したかどうかは別として、掘削によって実質的な比高差をより高くするためと考えられるが、内部の土坑、小土坑、炭粒面については、特に床面が焼土化(赤化)しているわけでもなく性格不明である。

環濠の埋土は基本的にはレンズ状の堆積をみせることから、人為的な埋め戻しの可能性は低く環濠廃棄後に自然堆積したものと考えられる。地点により若干異なるものの共通する要素も少なくない。土層堆積を観察した6地点(北部(N区土層)、西部(W区1～3土層)、南西部(大溝・S区1土層)、南部(S区2土層))では、まず南西部を除き上部に焼土・炭化物を含む黒褐色土(4層)がみられる。これは廃棄後主として内側急斜面からの土砂の流入が一段落し、周辺に樹木の繁茂し始めた頃の堆積土と考えられる。この場合最上部の茶褐色土(2層、炭化物を含む)および暗褐色土(3層)は、周辺が二次林化したのち開墾により現在の表土が形成されるまでの旧表土といえようか。

一方、黒褐色土の下部では比較的柔らかい褐色土系の土(7・9・10・11層)が堆積しており、これらは廃棄後の(第一次)流土に相当するものであろう。南西部に堆積する褐色土および黄茶褐色土系の土(5・6・12層)もこれに対応するものと考えた。同部では二次林化以前に濠内が流土によりほぼ最上部まで埋まりきったものと推定される。これにたいして、西部および南西部では、最下部に地山ブロックを含んだ褐色土(8層)および地山質の黄茶褐色砂質土(13層)が堆積する。前者は極めて堅くしまっており、後者はや

第2節 A地区の遺構と遺物

や柔らかいものの色調・土質は地山とはほぼ同じであった。環濠掘削後その形状・規模を維持するためには、定期的に下部を中心とした再掘削が必要と考えられるが、当初あるいは再掘削時の深度(以上)に維持管理される補償や必要はなく、再々掘削されない(しきれない)箇所が存在したとしても特に不自然ではない。同層はそのような最終的には再掘削されなかった部分であり、その上面の形状が環濠廃棄時のプランに近いものと考えておきたい。この場合同層がみられない北部と南部は、比較的維持管理が行き届いていた箇所といえなくもないが、もとより確証があつてのことではない。

遺物の出土は本地区で最も多く、土器99点(CP58~156)、石器10点(打製石斧・敲石・砥石・素材剥片・打製石鏃、CS1・2・46~53)、炭化米塊1点(CR1)の計110点を実測し、他に黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の石鏃素材剥片277g(S区118g、W区130g、N区29g)を得ている。南西部大溝からの出土が極少量である他は地点的な偏りはみられないが、層位的には大半が上部および下部から出土し、最上部および最下部からの出土量は少ない。土器では弥生時代の前半期に遡る可能性のあるもの(CP86)があり、単独では時期を特定できないものも少なくないが、概ね弥生時代中期(後半、CP64・70・71・87・99・100・122・137・141・142他)、後期後半(CP65・73・78・88・91・94・121・132・135・145他)、終末期(後半、CP134・136・146他)に属するものがみられ、時期幅は大きいものの連続はしていないようである。終末期のものは最上部からの出土が多い反面量的には少ないという印象を受けたが、中期と後期後半(実測率自体は施文頻度の関係から前者が高いが)の量比については判断が難しく、層位的にもともに下部からも上部からも出土し整合性は保っていない。ちなみに南西部S区2の土層観察用の畦の取り外しの際、層位を確認しながら取り上げた後期後半の壺CP65は、最上部と下部(同地点では連続しているが)からの出土品である。

遺物が多く出土した上部および下部埋土の性格が、廃棄後比較的短期間のうちに堆積した流土であり、下部での確実な多量出土品の下限が後期後半であることから、終末期のもの出土層位が確認できていないという問題が残るが、環濠の廃棄時期は後期後半頃である蓋然性が高く、中期のもの大半(人為的な投棄あるいは廃棄が含まれるとしても基本的には後期後半も同様)は、廃棄後中段より上位の遺物包含層あるいは遺構埋土の崩落にともなうものと考えたい。終末期については本遺跡B・C地区で遺構・遺物が確認されており、本地区でも何らかの活動があつたことは確実であるが、環濠がすでに廃棄され流土の堆積が進行しているとすれば、環濠の大半が埋まる二次林化の時期の上限を表している可能性がある。翻って環濠の掘削時期は、現状では空白の後期前半に環濠が機能していたとの確証はなく、中期と後期後半の二時期に環濠が掘削された可能性が残るが、掘削から廃棄にいたるまで平面的にも断面的にも基本的なプランに変更が認められないことから、同時期も後期後半のうちに求めるのが妥当であろう。

なお、石器のうち打製石鏃4点(CS50~53)については、比較的細かい器面調整をお

こなっており、形式(凹基無茎式)的にも本地区第12・18号竪穴式建物出土品に類似することから中期に属するものとみたい。また時期は特定できないものの、W区から出土した第2号炭化米塊(CR1)は、次節で報告する本遺跡B地区第22号竪穴式建物出土第1号(チマキ状)炭化米塊(CR2)に類似し、調理・加工されたものである可能性が高いが、欠損部分が多く全体的な形状を窺うことはできない。かりに第1号炭化米塊と同様の形状をとるものとすれば、幅約4.5cm、厚さ約3.5cm程度と推定される。

さて本遺構では、単一遺構としては県内でも最も多量の天王山系土器が出土しており、確実なものでは24点(CP58・69・79～85・95・101～108・110・113・114・116・117・123)を実測した。細片を含め実測率は100%に近い反面、同一個体とみられる破片も含まれることから実数は20点程度であろう。壺(CP95他)・甕(CP114他)の2類があり、北陸地方の例を検討した田中靖氏の時期区分〔田中1988〕によれば「体部が球形で筒状の頸部をもつ壺」(CP95)、「口径が体部最大径をしのぐ甕」(CP113・114)、「体部文様帯下半の区画文が、鋸歯状となる」もの(CP108)などI期(成立段階)に属するものを確実に含む。県内における天王山系土器は溝・遺物包含層出土例がほとんどで、在来系土器を主体とする竪穴式建物などから出土する例も、本地区第12号竪穴例(CP34)のように小片である場合が多く、時期的には後期後半以降に確実にともなった例はない。本例も環濠という流土の堆積により埋没した遺構であるからこそ大形の破片が得られたものと考えられる。時期比定に確証を欠くが、他の出土例にならない後期前半以前と考えた場合、同期が空白であることからさらに遡った中期(後半)にともなう蓋然性が最も高いといえよう。

7 遺構外出土遺物(第158・167・179・180図)

表土、包含層、流土出土遺物のうち、土器5点(壺2・甕2・鉢1、CP20～24)、石器6点(打製石斧1、打製石鏃2、素材剥片3、CS3・8～12)、金属製品3点(寛永通宝、CM1～3)を実測した。土器はいずれも天王山系とみられる。打製石斧(CS3)は下段で出土したもので、第1号環濠周辺として扱った。寛永通宝はS区環濠掘削中に表土から3枚が重なって出土したものであるが、その性格は不明である。また図化しなかったが中段から中央にかけて、黒色頁岩あるいは輝石安山岩製の石鏃素材剥片・石屑が約60g出土している。

8 小 結

本地区では竪穴式建物7基、竪穴状遺構6基、掘立柱建物1基、段状遺構2基、土坑9基、小穴7基、環濠1基を検出し、土器・土製品156点、石器・石製品57点、木製品3点、炭化米塊1点、金属製品3点の計220点を実測し報告した。時期が確実なものは弥生時代中期後半の竪穴式建物2基、同後期後半の環濠1基を数えるにすぎないが、掘立柱建物を除き遺構はいずれかの時期に属する可能性が高い。

第2節 A地区の遺構と遺物

土器は中期後半(天王山系を含む)および後期後半に属するものが圧倒的に多く、終末およびその他の時期に属するものは少量および微量である。石器・木器は打製石鏃・同素材剥片を主として中期後半に属するものが多いが、そのなかにあって第12号竪穴式建物出土の火鑽棒・火鑽板のセット(中期後半)は、県内最古級のものとして特筆される。

引用・参考文献

- 田中 靖 「北陸地方における天王山式系土器について」『新潟考古学談話会会報』 第2号
新潟考古学談話会 1988
- 細口 喜則 「オカ遺跡出土の天王山式土器について」『オカ・ノギヤチ遺跡』 石川県中島町教育委員会 1992

第4章第2節挿図断面図土層一覧

第159図

- 1 表土
- 2 暗黄褐色土(炭粒を含む)
- 3 黄褐色土
- 4 黄褐色土(やや暗い)
- 5 礫混黄褐色土
- 6 黄褐色土(やや明るい)
- 7 黄褐色砂質土

第160図

- 1 黄褐色土
- 2 黄茶褐色土

第161図

- 1 攪乱
- 2 黄褐色土
- 3 黒褐色土(やや明るい)
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土(やや暗い)
- 6 褐色土(焼土・炭化物を多く含む)

第162図

- 1 黄褐色土(やや暗い)
- 2 褐色土(やや明るい)
- 3 褐色土(やや明るい、炭化物を含む)
- 4 褐色土
- 5 褐色土(炭化物を含む)
- 6 褐色土(炭粒を多く含む)
- 7 焼土・炭化物(粒)を多量に含む褐色土
- 8 炭化材(物)
- 9 焼土
- 10 黄色土
- 11 黄褐色土(やや明るい)
- 12 暗褐色土(焼土・炭化物を多く含む)
- 13 黄褐色土(炭化物と少量の焼土を含む)
- 14 褐色土(炭化物と少量の焼土を含む)
- 15 黒色土(灰、炭化物と焼土を含む)

第163図

- 1 表土
- 2 淡褐色砂質土
- 3 褐色土
- 4 黄褐色土(やや暗い)
- 5 炭化物を含んだ焼土
- 6 炭化物(灰)
- 7 黄褐色土(黄橙色粘土ブロックを含む)
- 8 黄褐色土
- 9 黒色土(灰)

第165図

- 1 黄褐色土
- 2 黄灰色土
- 3 黄灰色土(やや暗い)
- 4 黒褐色土(炭粒)
- 5 黒褐色土(炭粒、やや暗い)
- 6 黄褐色土(やや暗い)
- 7 淡褐色土

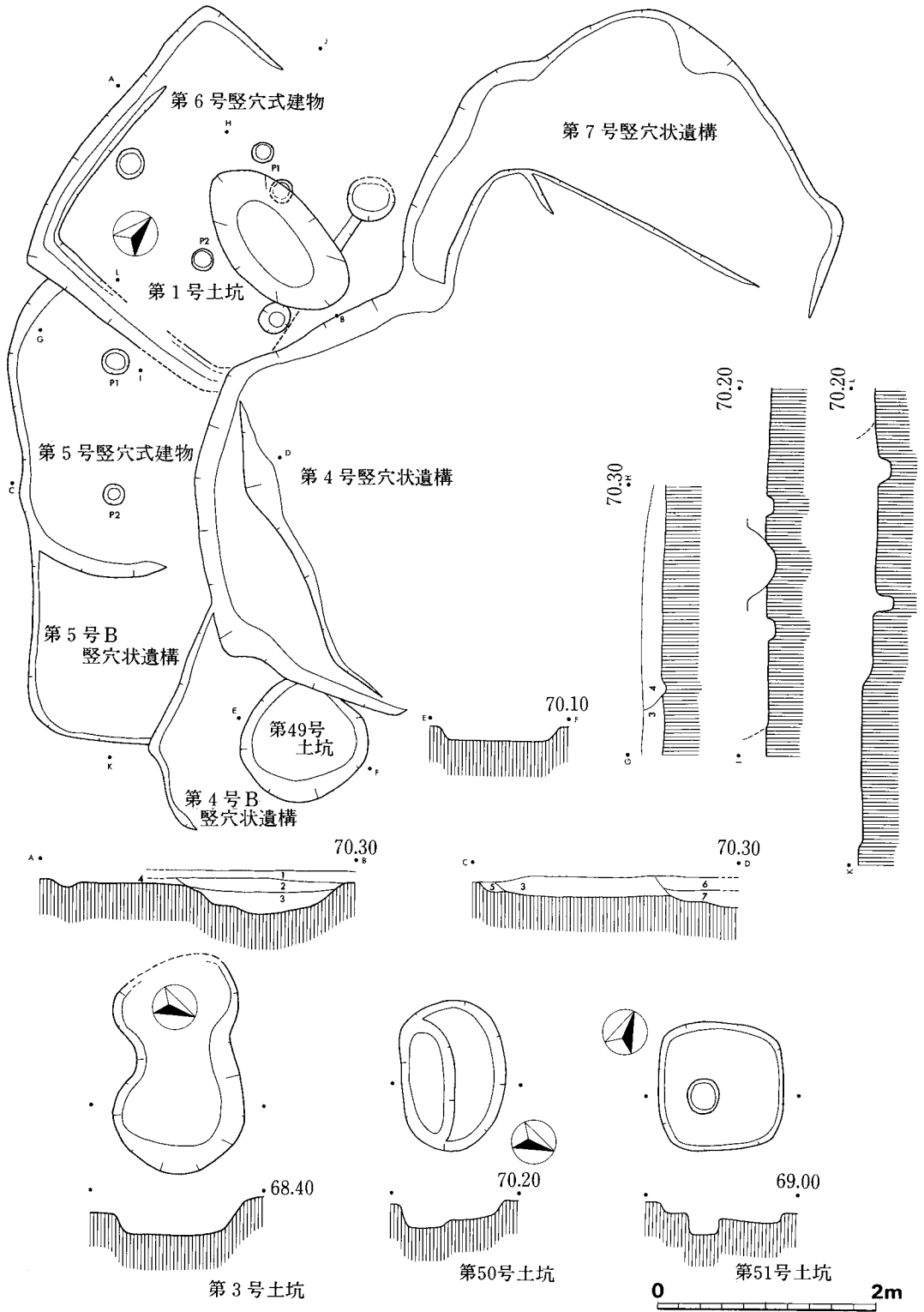
第166図

- 1 表土
- 2 茶褐色土(炭化物を含む)
- 3 暗褐色土
- 4 黒褐色土(焼土・炭化物を含む)
- 5 褐色土(炭化物を含む)
- 6 黄茶褐色土
- 7 褐色土(焼土・炭化物を含む)
- 8 褐色土(地山土ブロックを含む)
- 9 褐色土(やや明るい)
- 10 褐色土
- 11 褐色土(やや暗い)
- 12 黄茶褐色土(やや明るい)
- 13 黄茶褐色砂質土
- 14 黒褐色土(炭粒)
- 15 淡茶褐色土
- 16 炭粒
- 17 橙褐色土

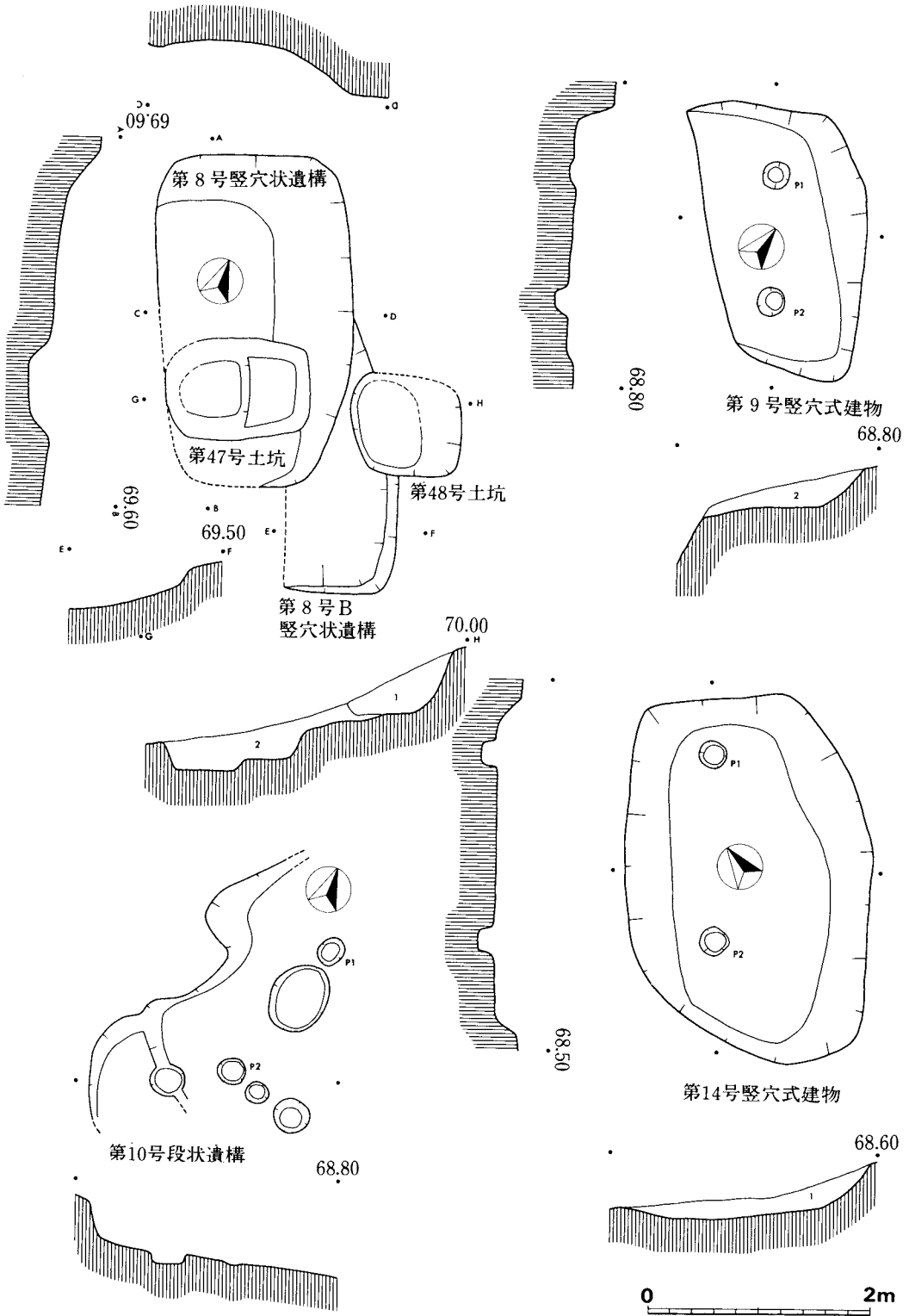
A地区遺構一覧

遺構名	位置	平面形態	長径m×短径m×深さcm	備考
第5号竪穴式建物	S区中央	隅丸方形	(2.8) × (2.0) × 20	時期不明
第6号竪穴式建物	SW中央	長方形	(2.85) × (2.5) × 15	時期不確実
第9号竪穴式建物	S区中段	隅丸方形	2.35 × (1.5) × 35	時期不明
第12号竪穴式建物	N区中段	隅丸方形	4.5 × 3.9 × 60	弥生時代中期後半
第13号竪穴式建物	N区中段	長方形	3.9 × (3.7) × 30	時期不確実
第14号竪穴式建物	W区中段	隅丸方形	3.1 × 2.25 × 60	弥生時代中期後半?
第18号竪穴式建物	E区中段	円形?	(7.0) × (7.0) × 25	弥生時代中期後半
第4号竪穴状遺構	SE中央	六角形?	(3.9) × 1.8~ × 30	時期不確実
第4B号竪穴状遺構	S区中央	?	1.7~ × 0.7~ × 8	時期不明
第5B号竪穴状遺構	S区中央	長方形?	1.65~ × 1.65~ × 5	時期不明
第7号竪穴状遺構	中央	六角形?	4.1 × 2.7~ × 10	時期不確実
第8号竪穴状遺構	S区上段	隅丸方形	(3.05) × 1.75 × 50	時期不明
第8B号竪穴状遺構	S区上段	隅丸方形	(2.7) × 1.05~ × 40	時期不明
第1号掘立柱建物	N区上段	1間(2.45~2.55m) × 2間(4.65~4.95m)、古代?		
第9号段状遺構	NE上段	長さ11.6m、幅1.6m以上、柵?		弥生時代中期後半?
第10号段状遺構	E区中段	長さ約3m、幅約2m、建物造成面?		時期不確実
第1号土坑	S区中央	楕円形	1.6 × 0.9 × 33	時期不確実
第3号土坑	E区中段	不整楕円	(2.05) × 0.9 × 32	時期不確実
第5号土坑	N区上段	楕円形	1.2 × 0.9 × 40	古代?
第6号土坑	N区中段	隅丸方形	2.05 × 1.65 × 22	時期不確実
第47号土坑	S区上段	隅丸方形	1.3 × 0.95 × 37	時期不明
第48号土坑	S区上段	隅丸方形	1.05 × (0.9) × 57	時期不明
第49号土坑	ES中央	略円形	1.2 × (1.15) × 14	時期不確実
第50号土坑	ES中央	楕円形	1.4 × 1.0 × 25	時期不明
第51号土坑	E区中央	隅丸方形	1.15 × 1.2 × 30	時期不明
第1号小穴	S区中段	底68.855	0.45 × 0.42 × 20	時期不明
第2号小穴	S区中段	底68.595	0.48 × 0.4 × 38.5	時期不明
第3号小穴	S区上段	底69.820	0.47 × 0.33 × 30	時期不明
第4号小穴	N区中段	底68.410	0.52 × 0.5 × 24.5	時期不明
第5号小穴	N区上段	底69.185	0.66 × 0.5 × 7	時期不明
第6号小穴	N区中段	底68.870	0.48 × 0.28 × 17	時期不明
第7号小穴	E区中央	底69.680	0.69 × 0.48 × 21	時期不明、2段掘比高11.5
第1号環濠	下段	幅0.7~3m、深1.1~1.8m、断面V字形		弥生時代後期後半

第2節 A地区の遺構と遺物

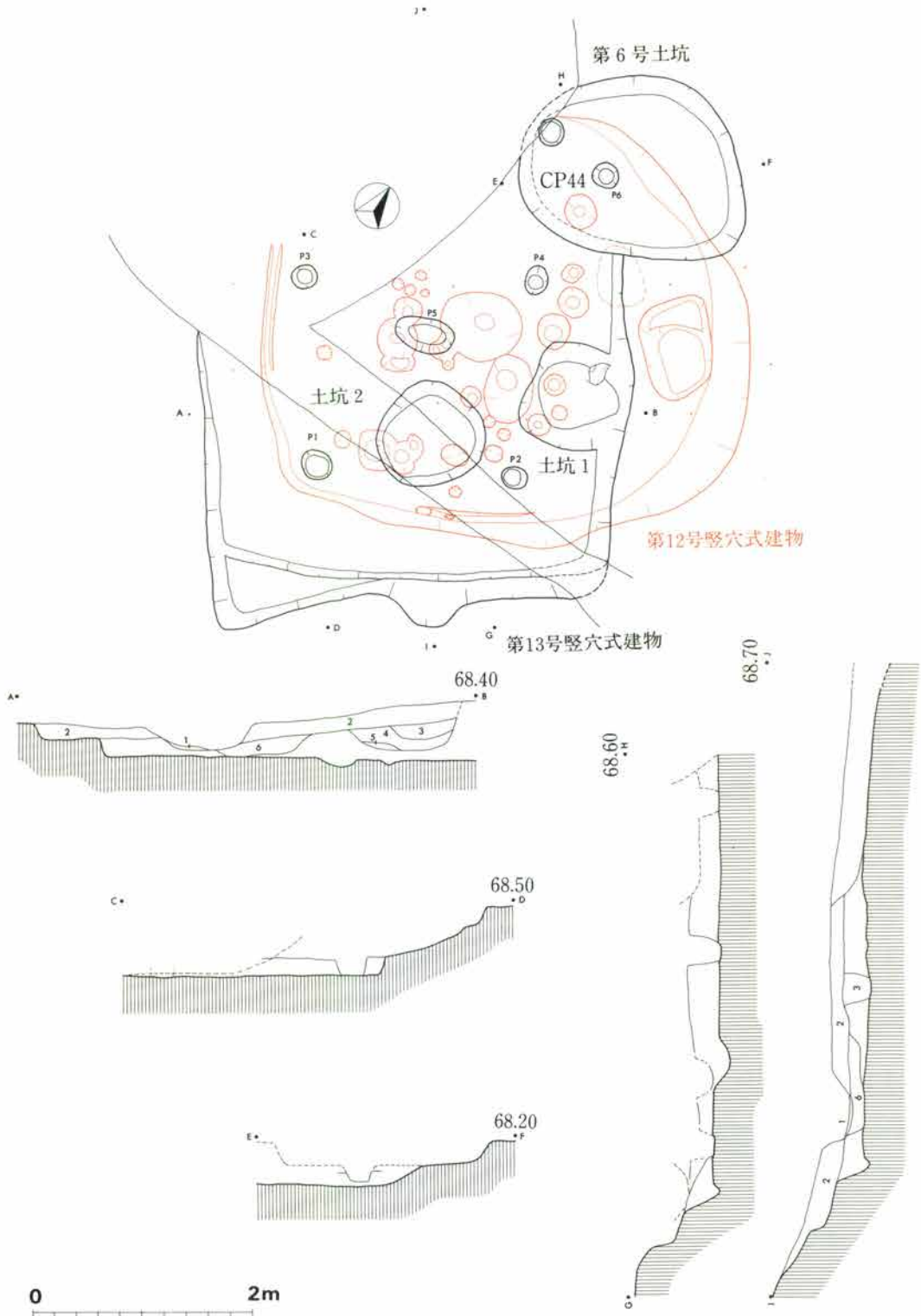


第159図 竖穴式建物・土坑他(S=1/60)

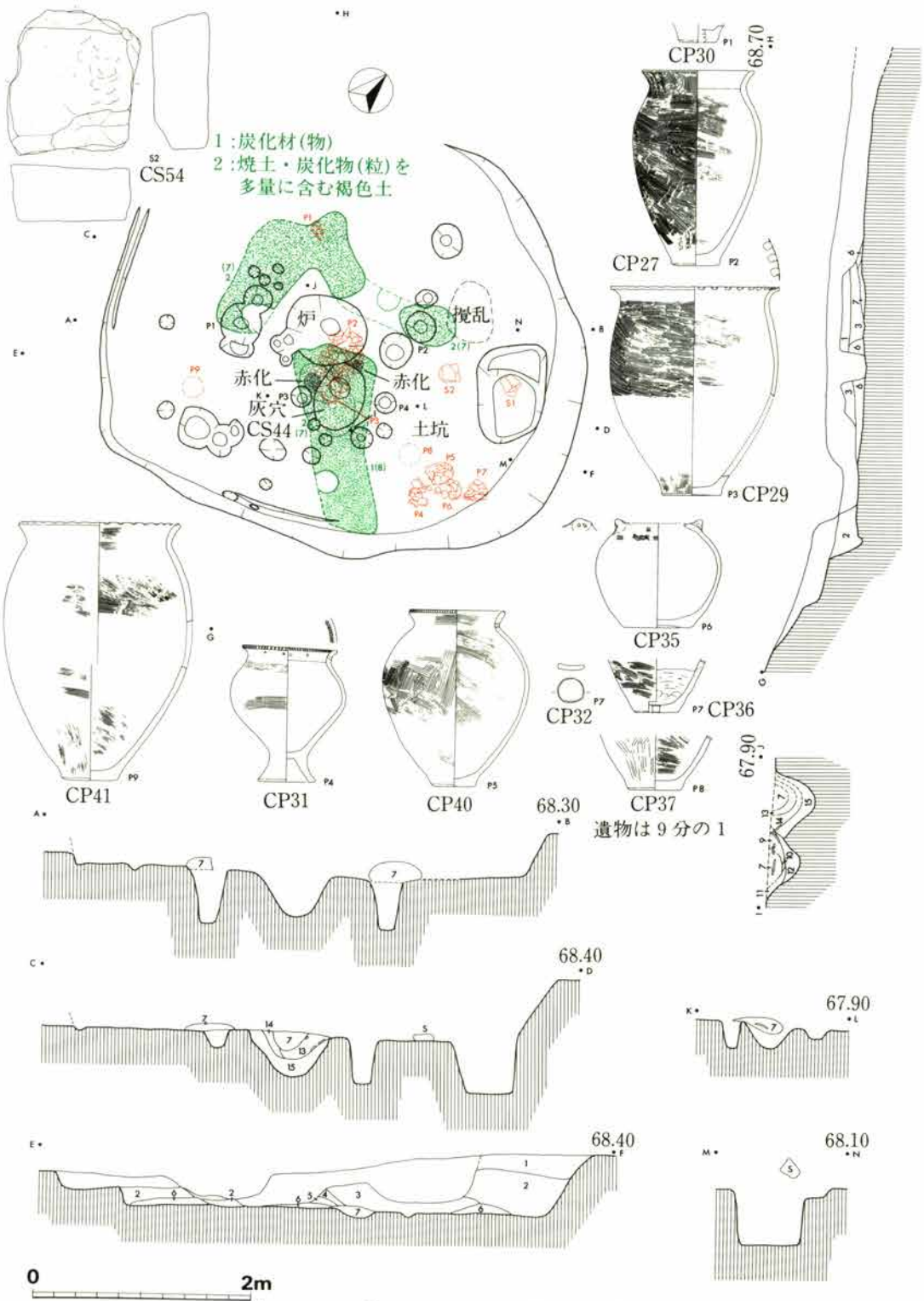


第160図 竖穴式建物・段状遺構他(S=1/60)

第2節 A地区の遺構と遺物

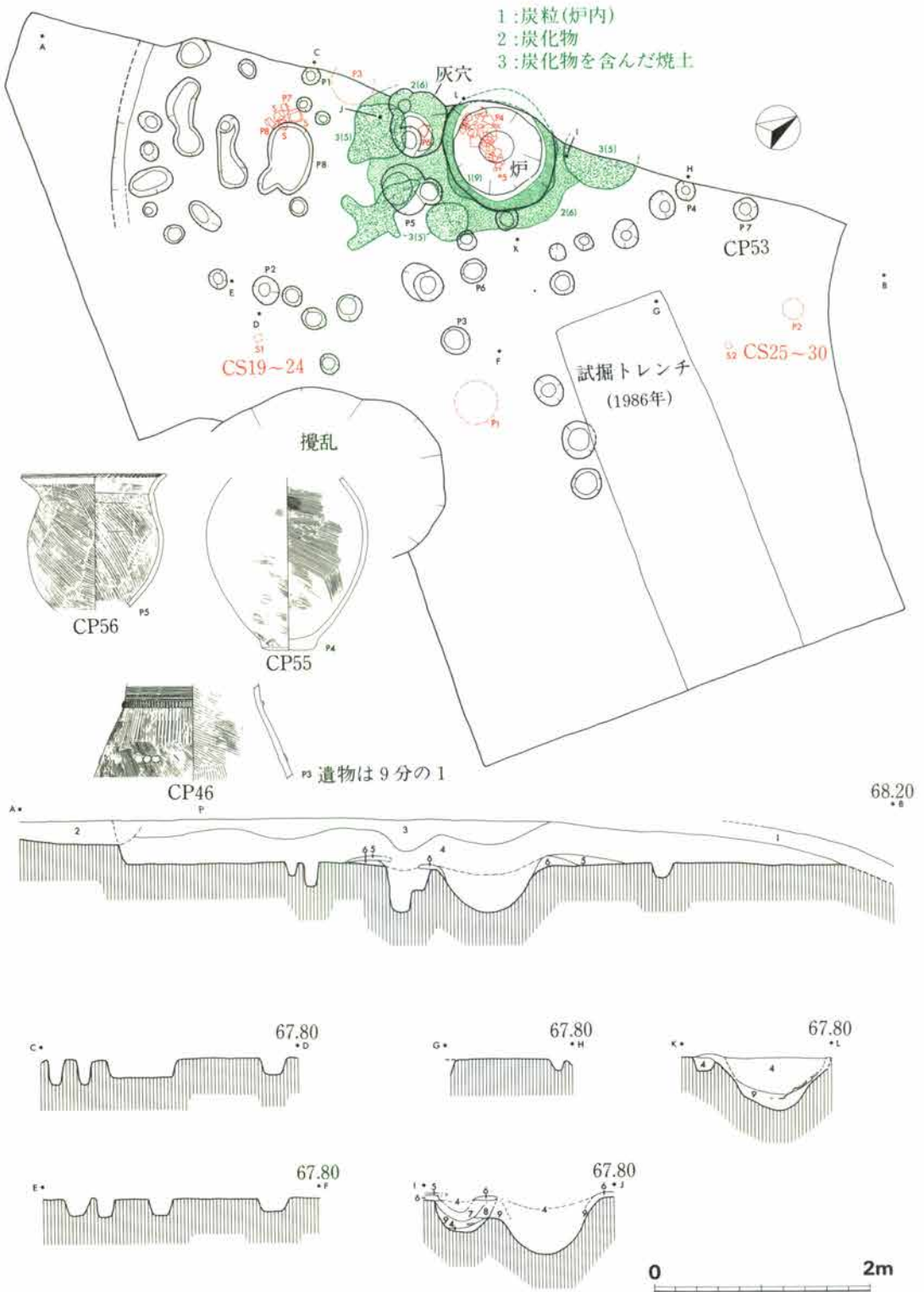


第161図 第13号竖穴式建物他(S=1/60)

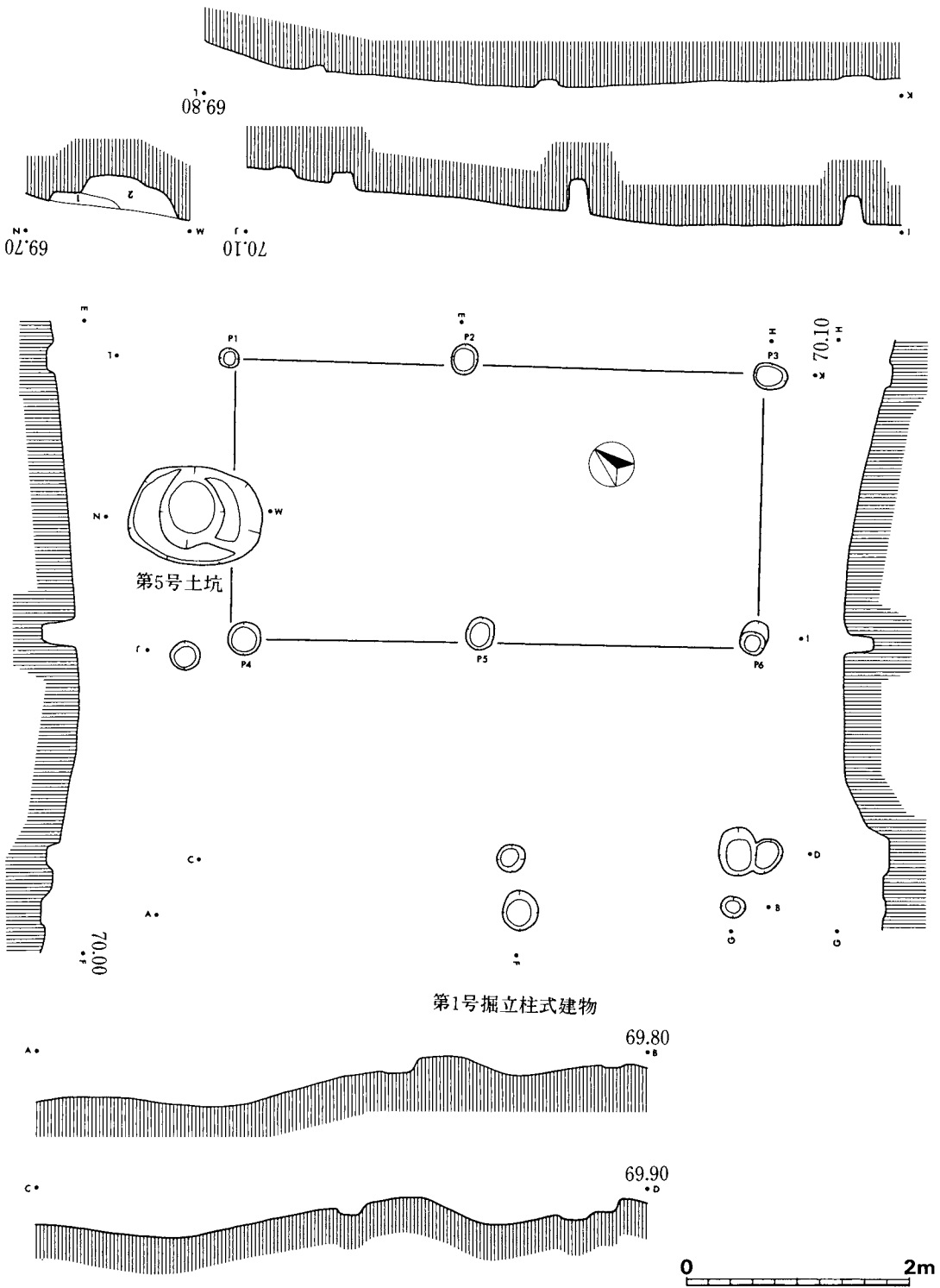


第162図 第12号竪穴式建物(S=1/60)

第2節 A地区の遺構と遺物

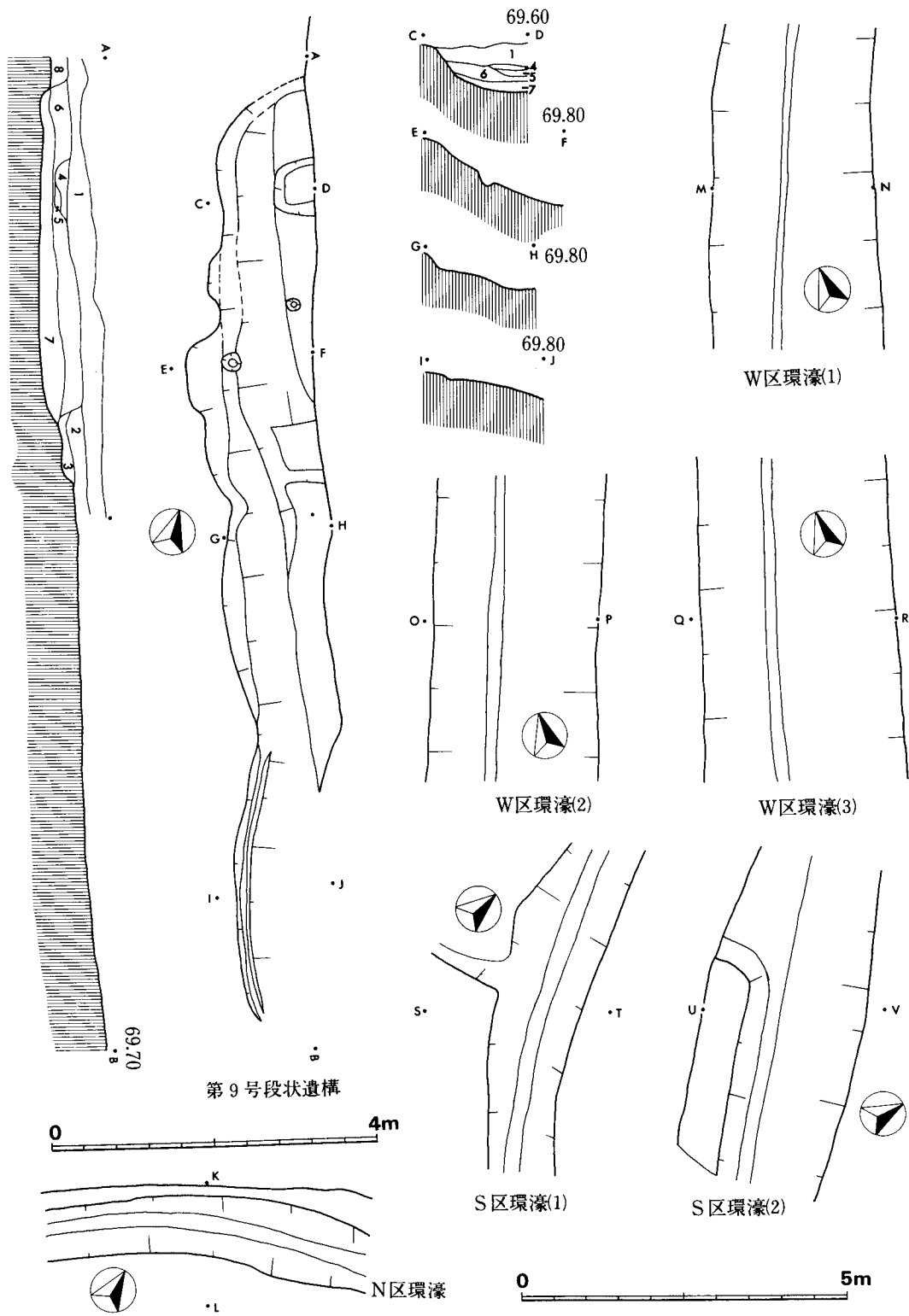


第163図 第18号竖穴式建物(S=1/60)

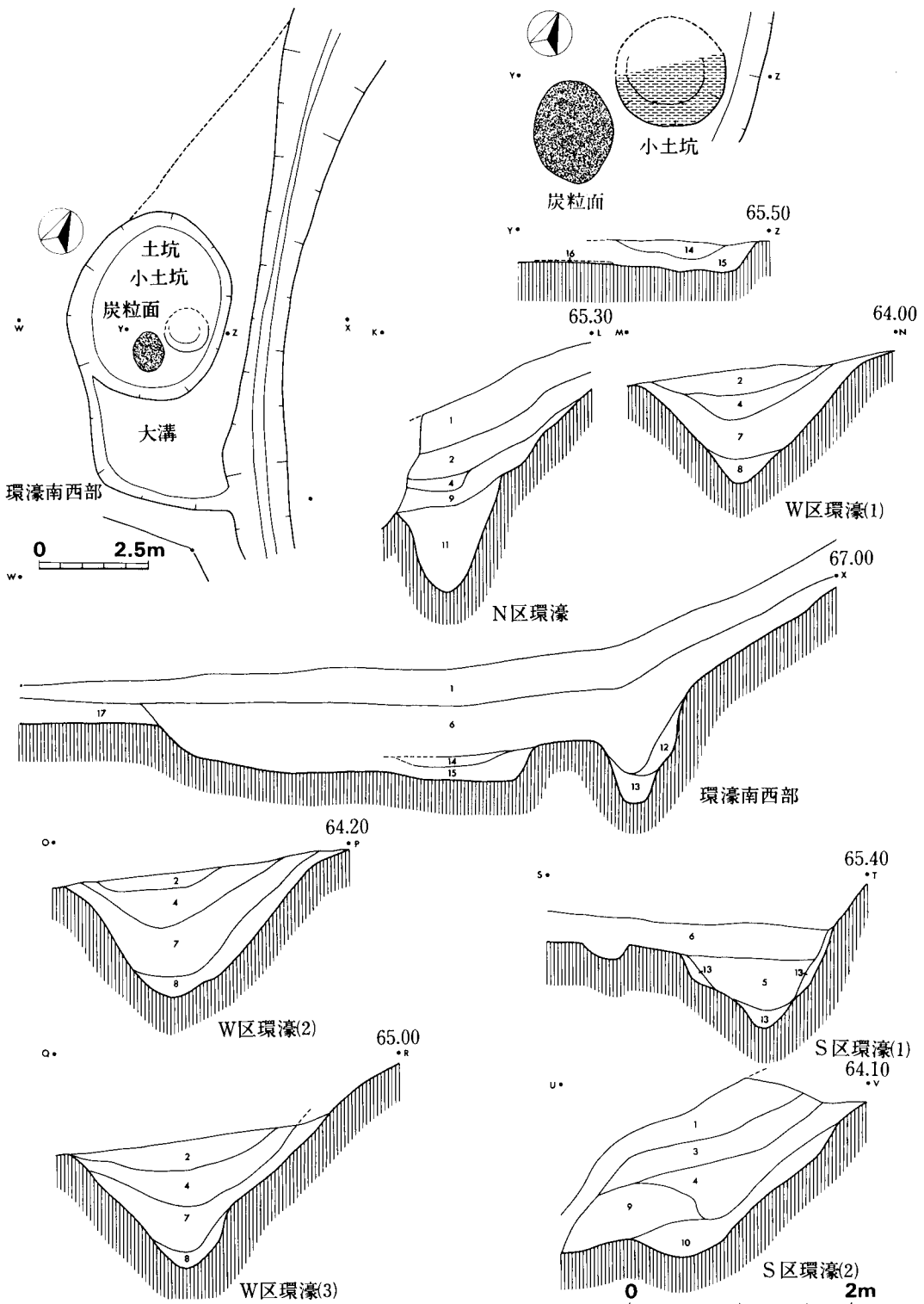


第164図 第1号掘立柱式建物他 (S=1/60)

第2節 A地区の遺構と遺物

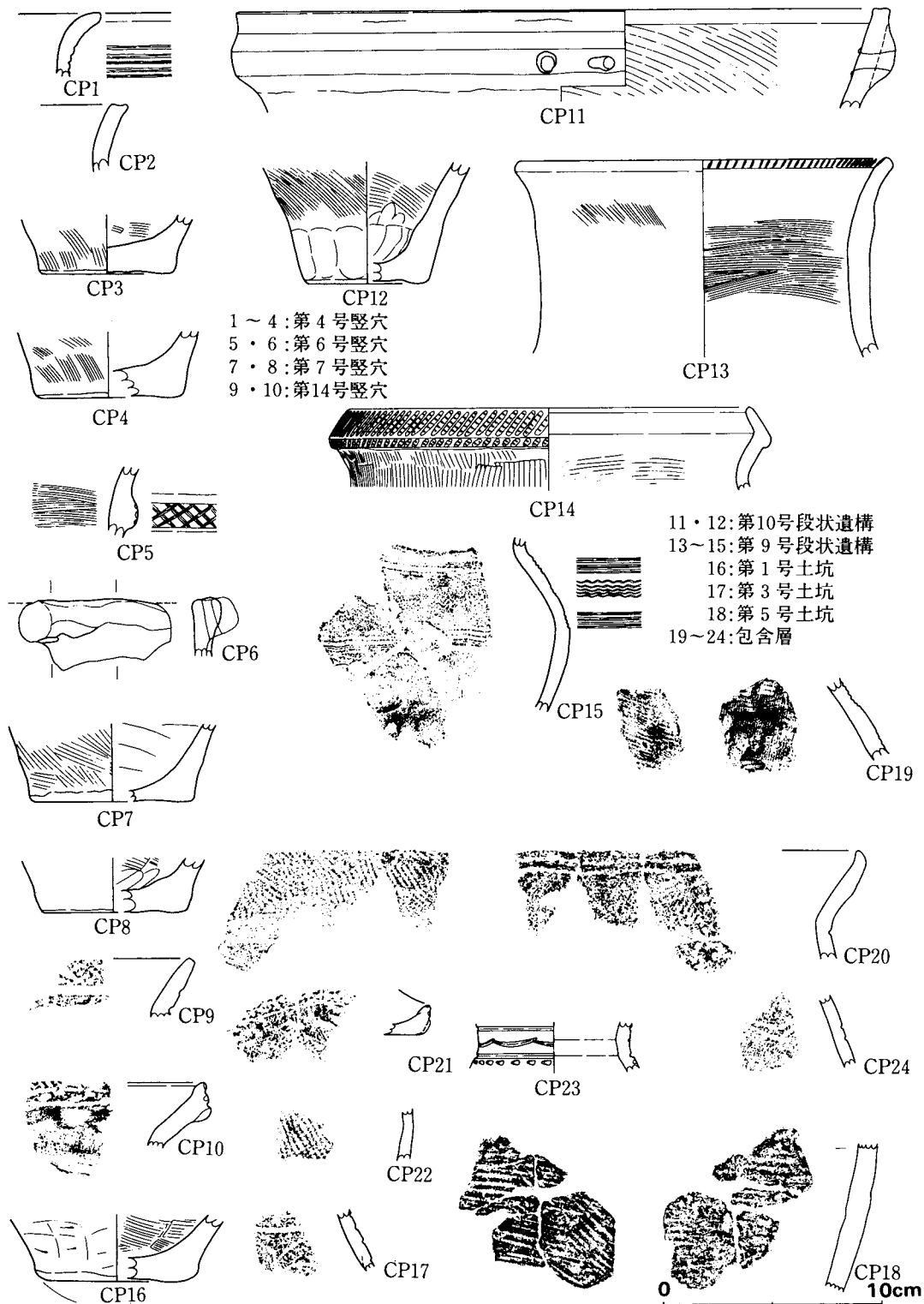


第165図 段状遺構(S=1/80)・環濠(S=1/100)

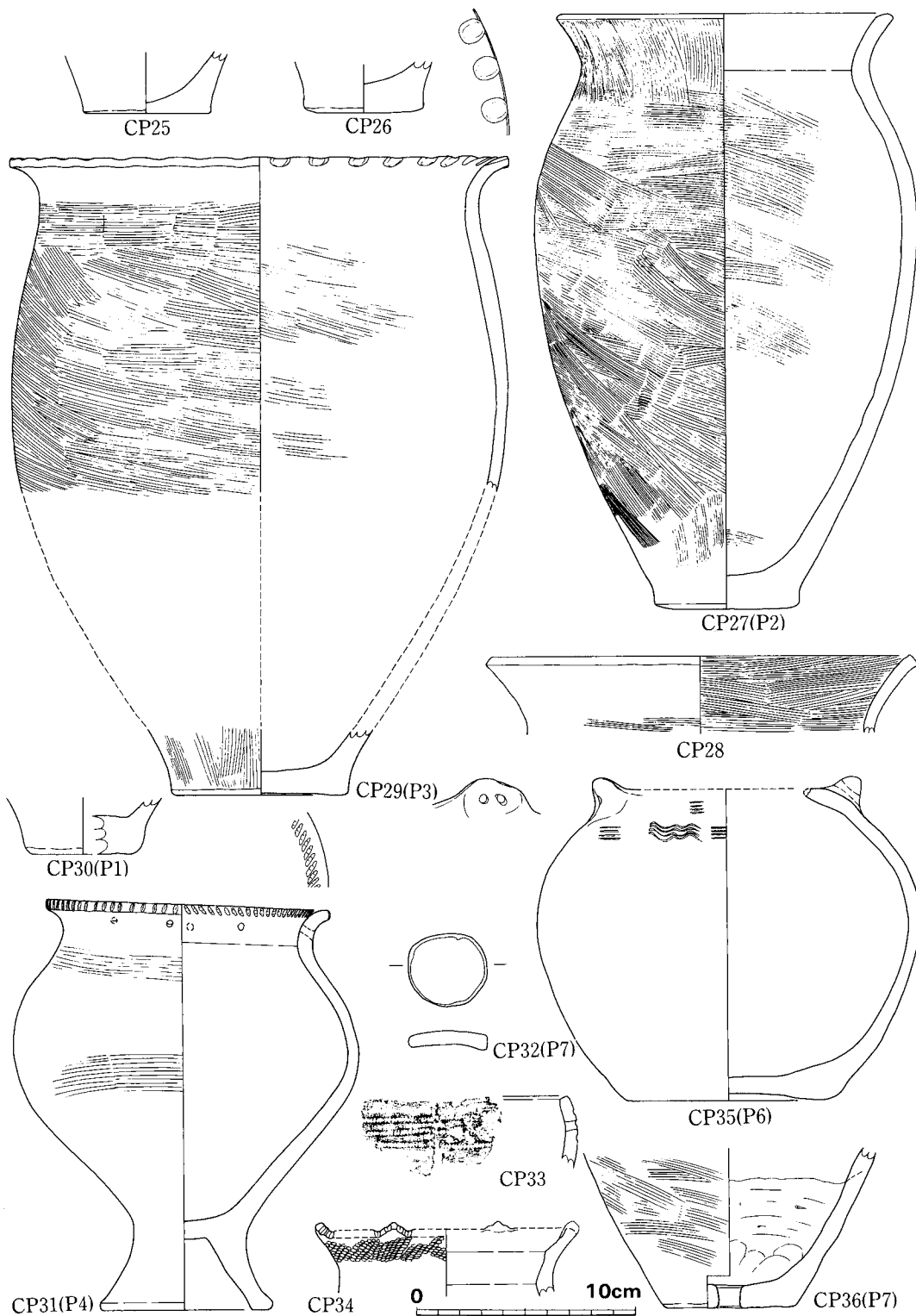


第166図 第1号環濠(S=1/60, S=1/150)

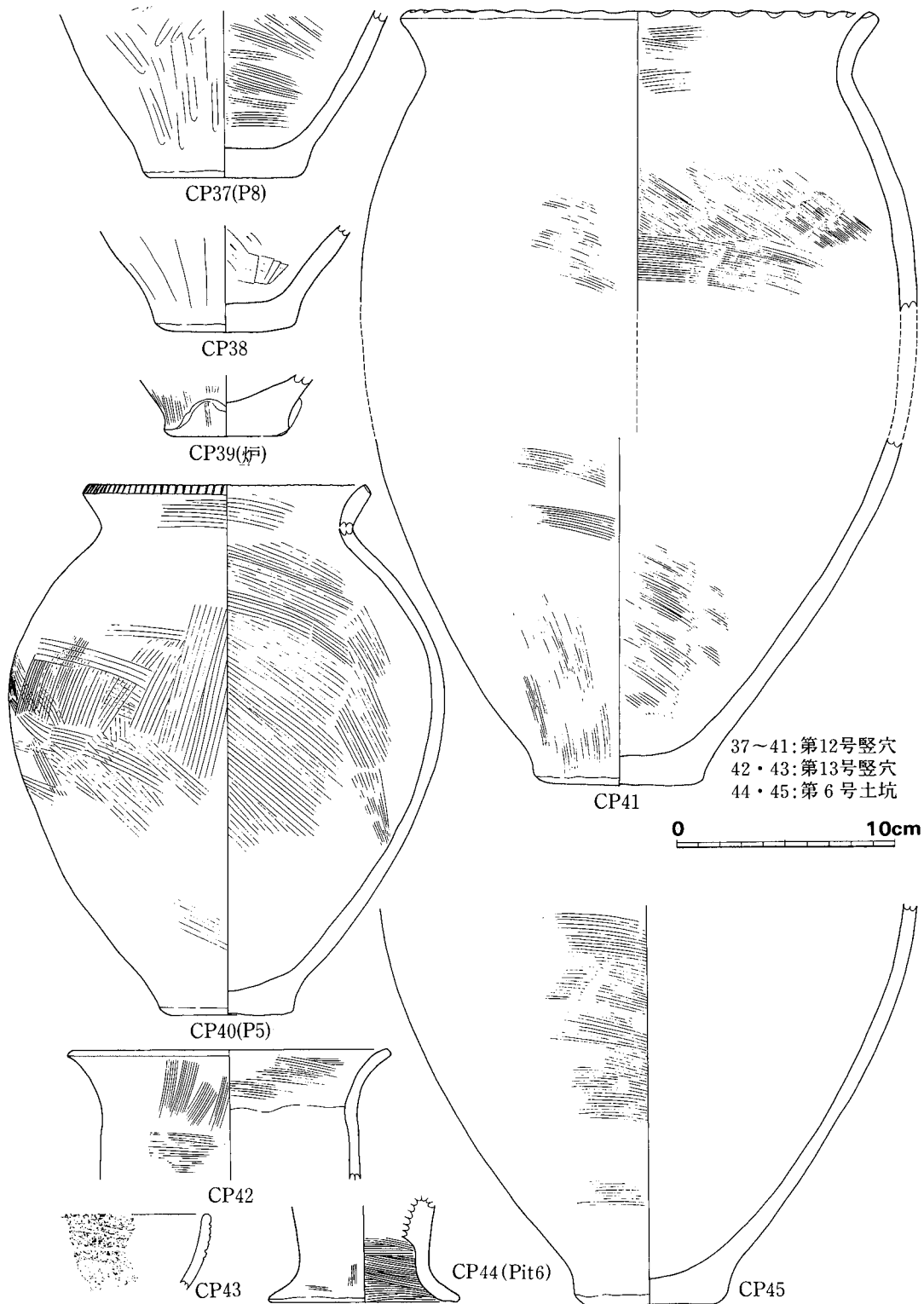
第2節 A地区の遺構と遺物



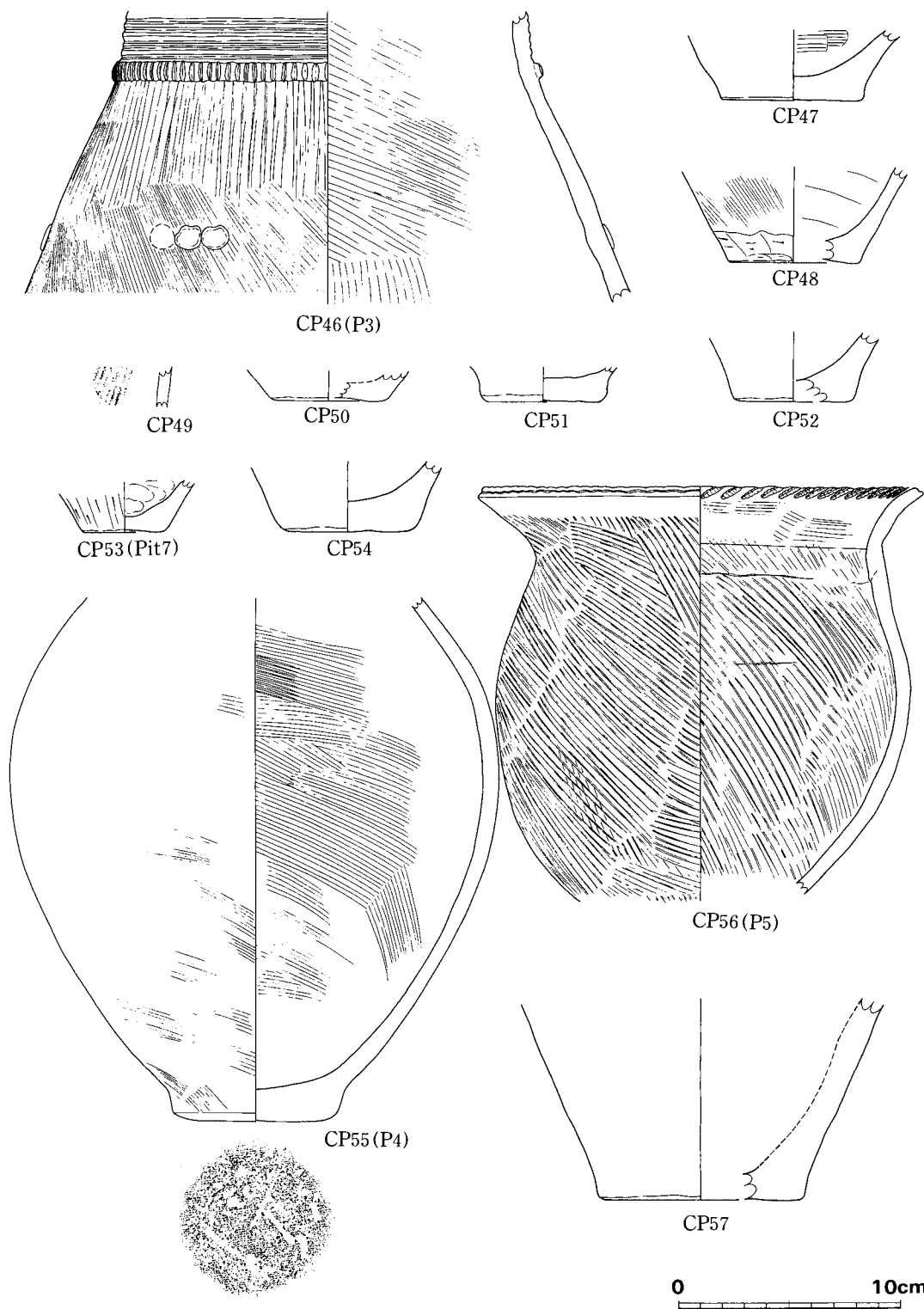
第167図 A地区出土土器(S=1/3)



第168図 第12号竖穴式建物出土土器 (S=1/3)

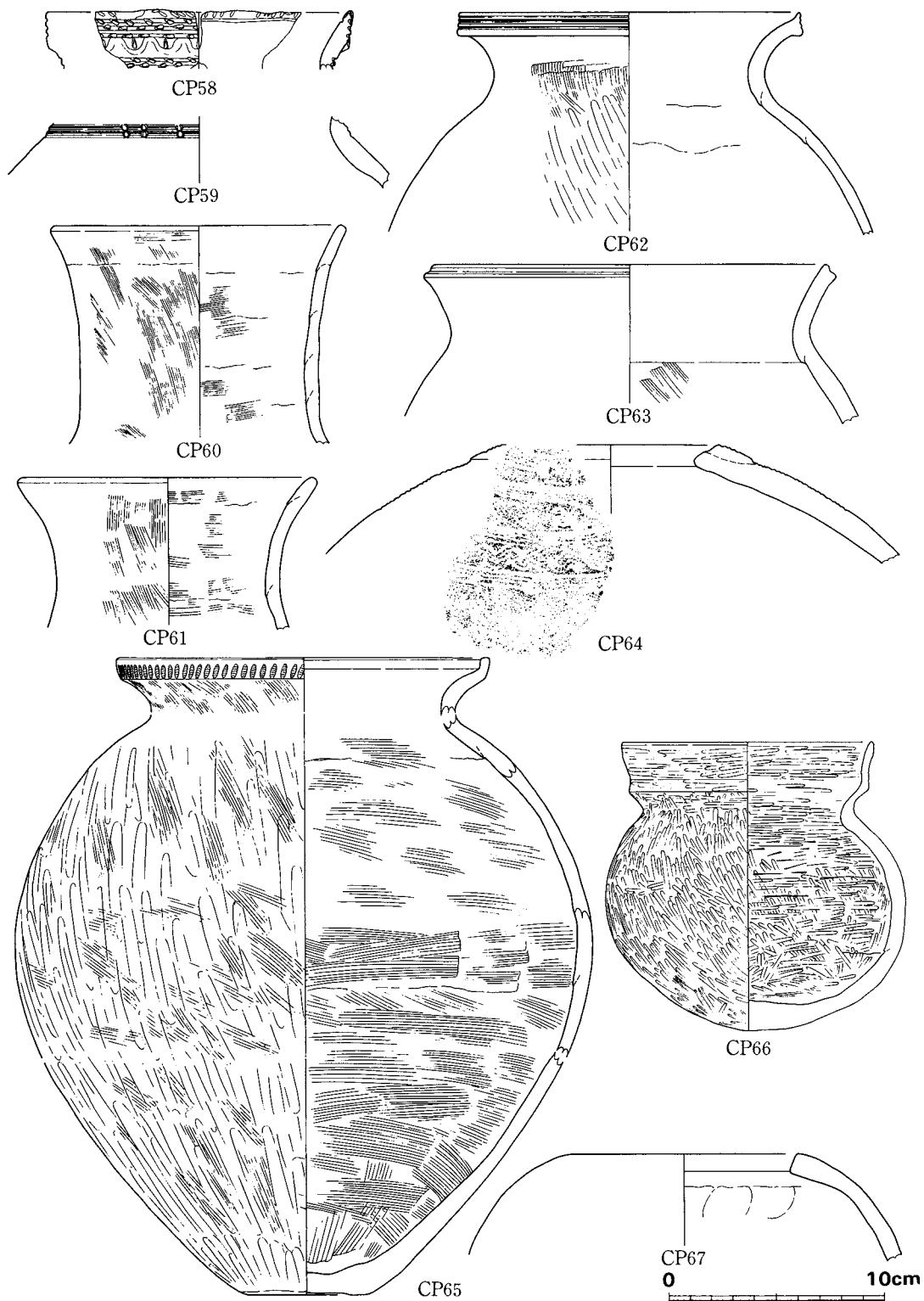


第169図 第12号竖穴式建物出土土器他(S=1/3)

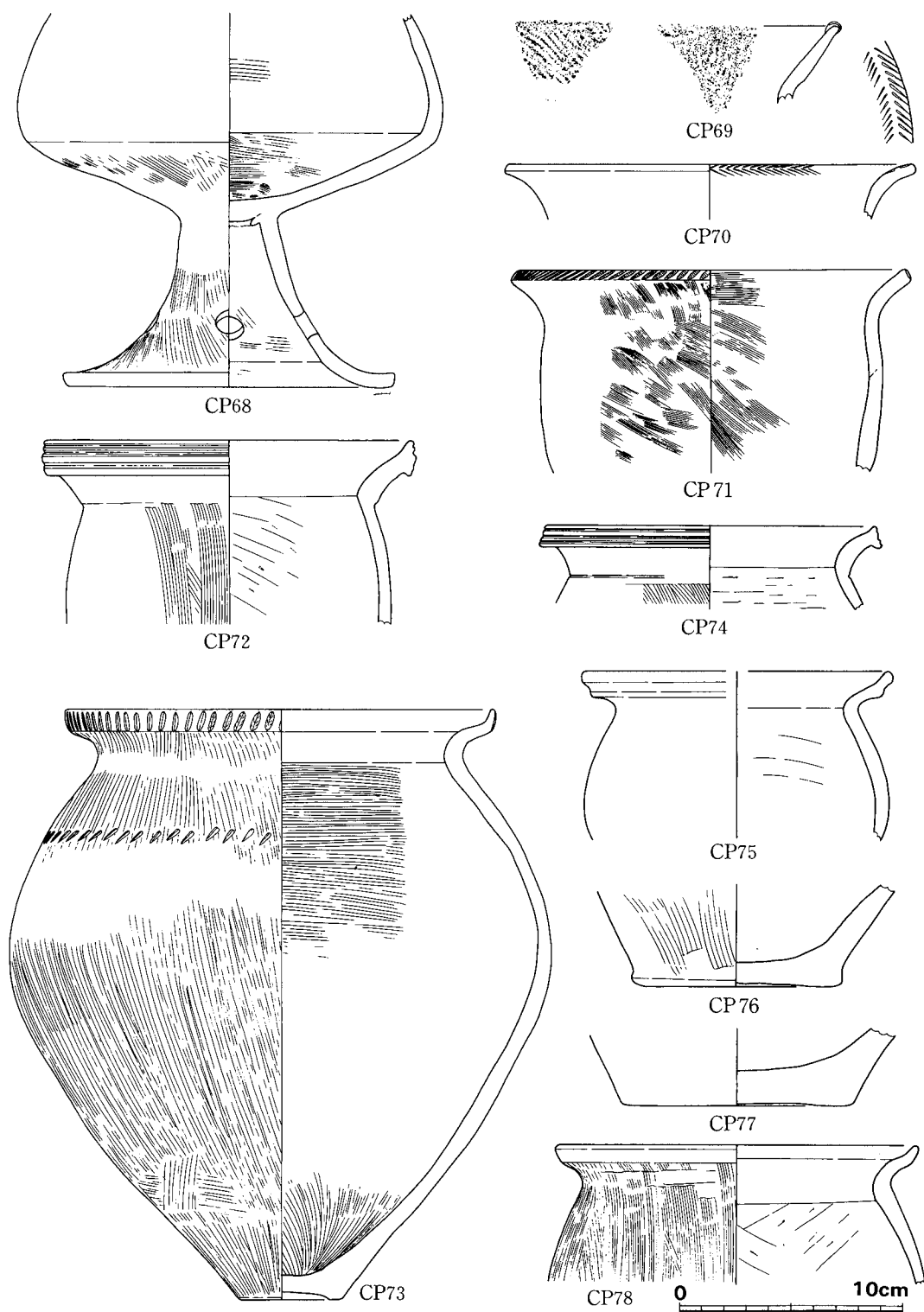


第170図 第18号竖穴式建物出土土器 (S=1/3)

第2節 A地区の遺構と遺物

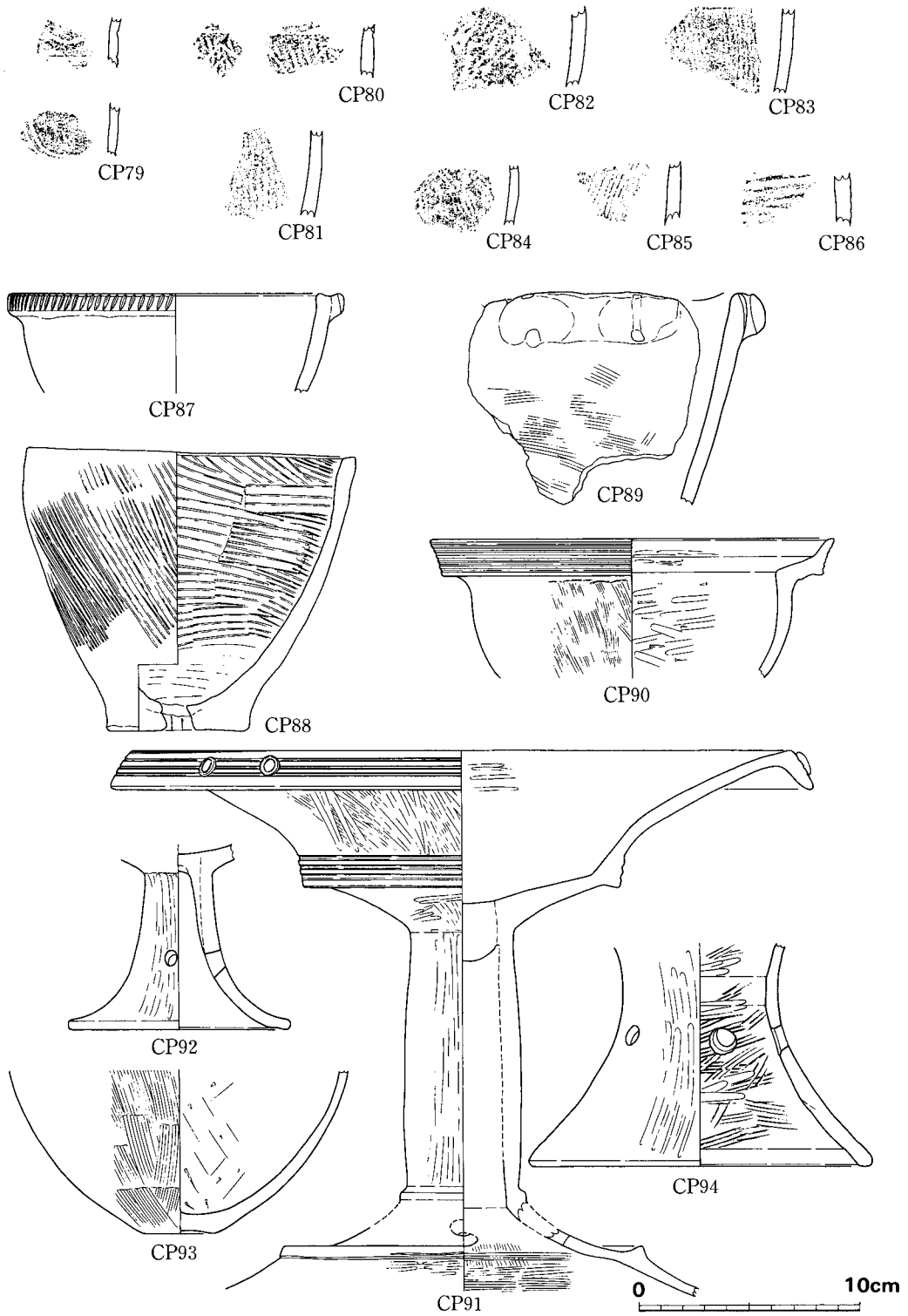


第171図 第1号環濠(S区)出土土器(S=1/3)

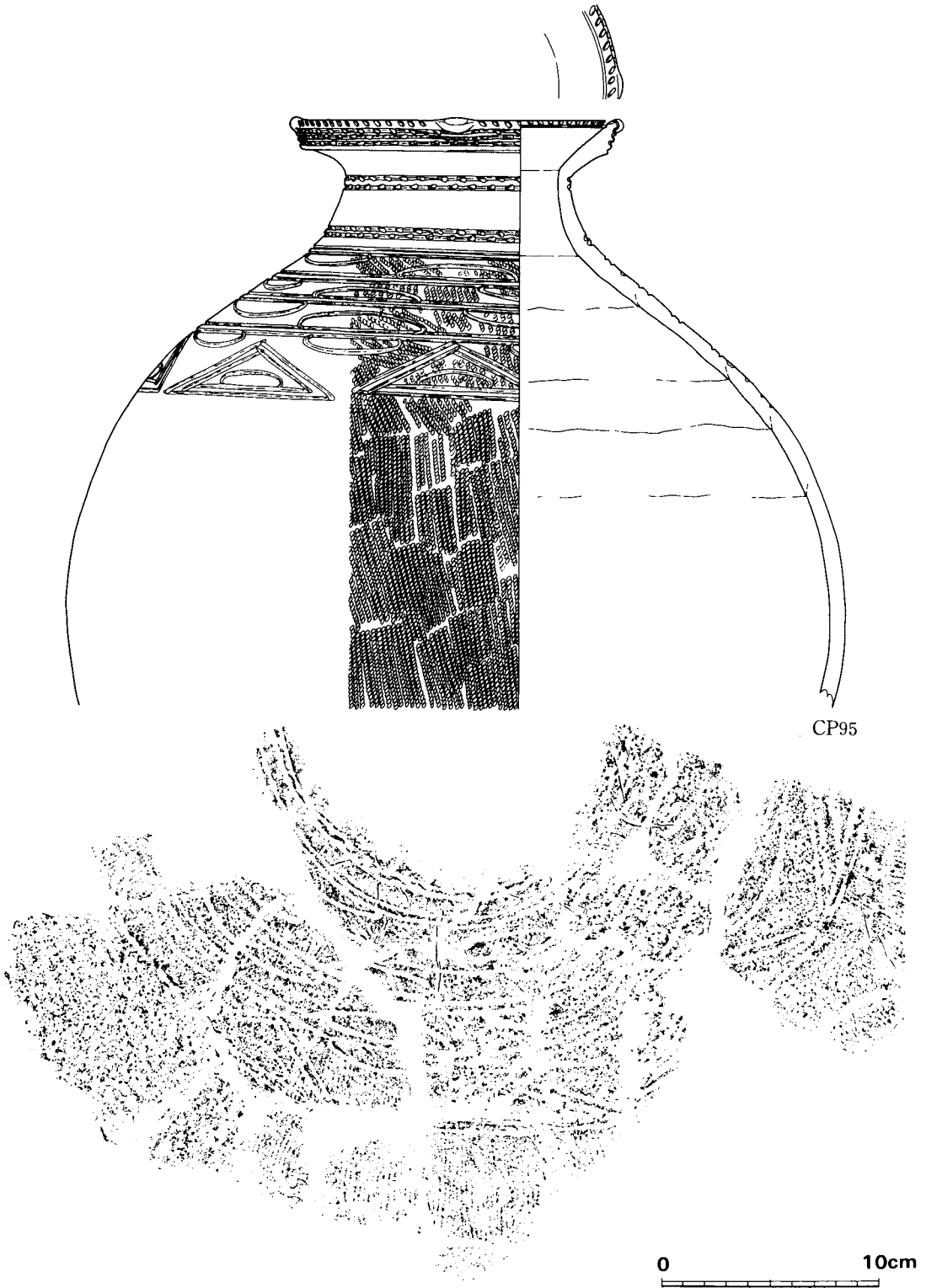


第172図 第1号環濠(S区)出土土器(S=1/3)

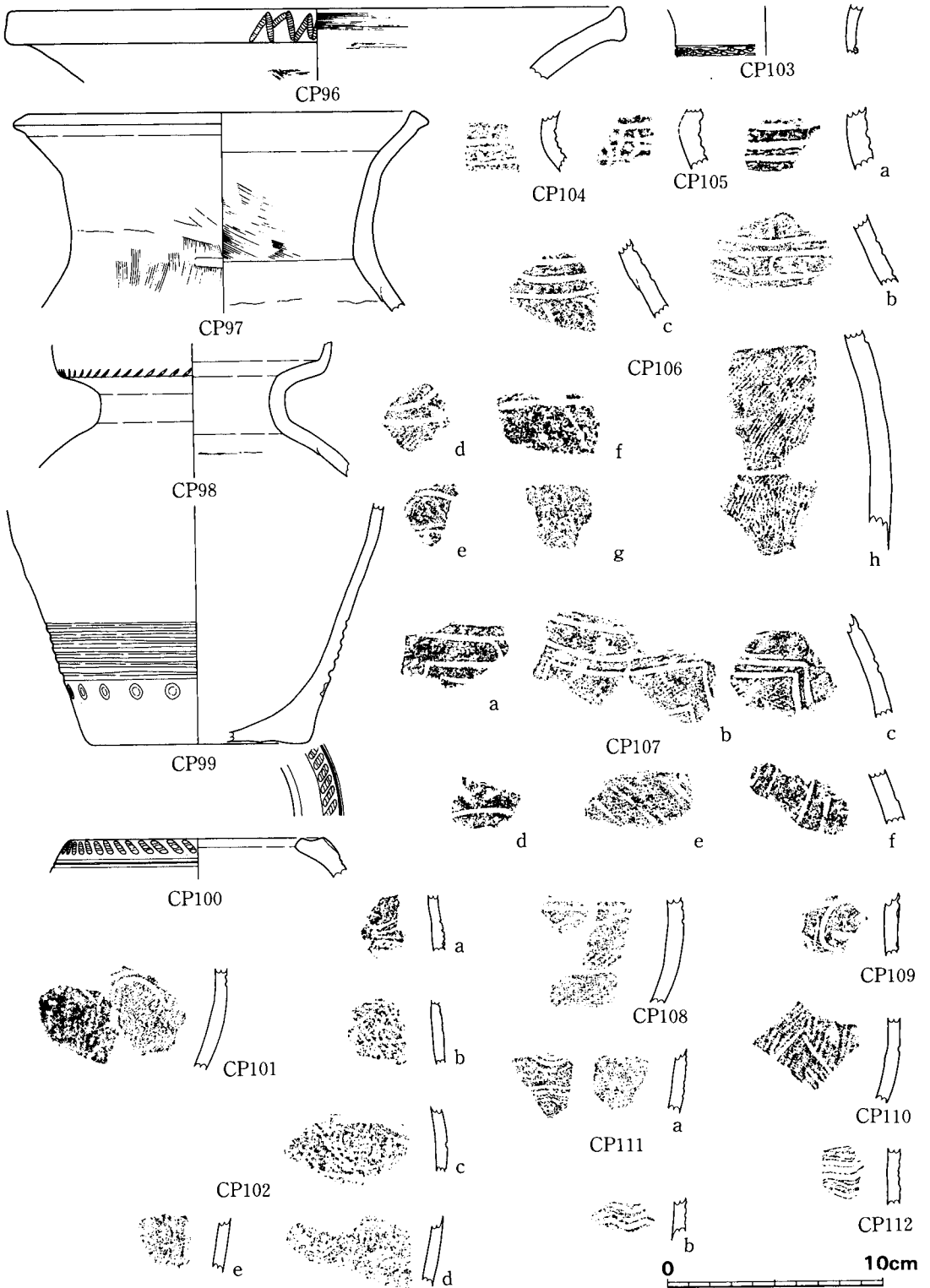
第2節 A地区の遺構と遺物



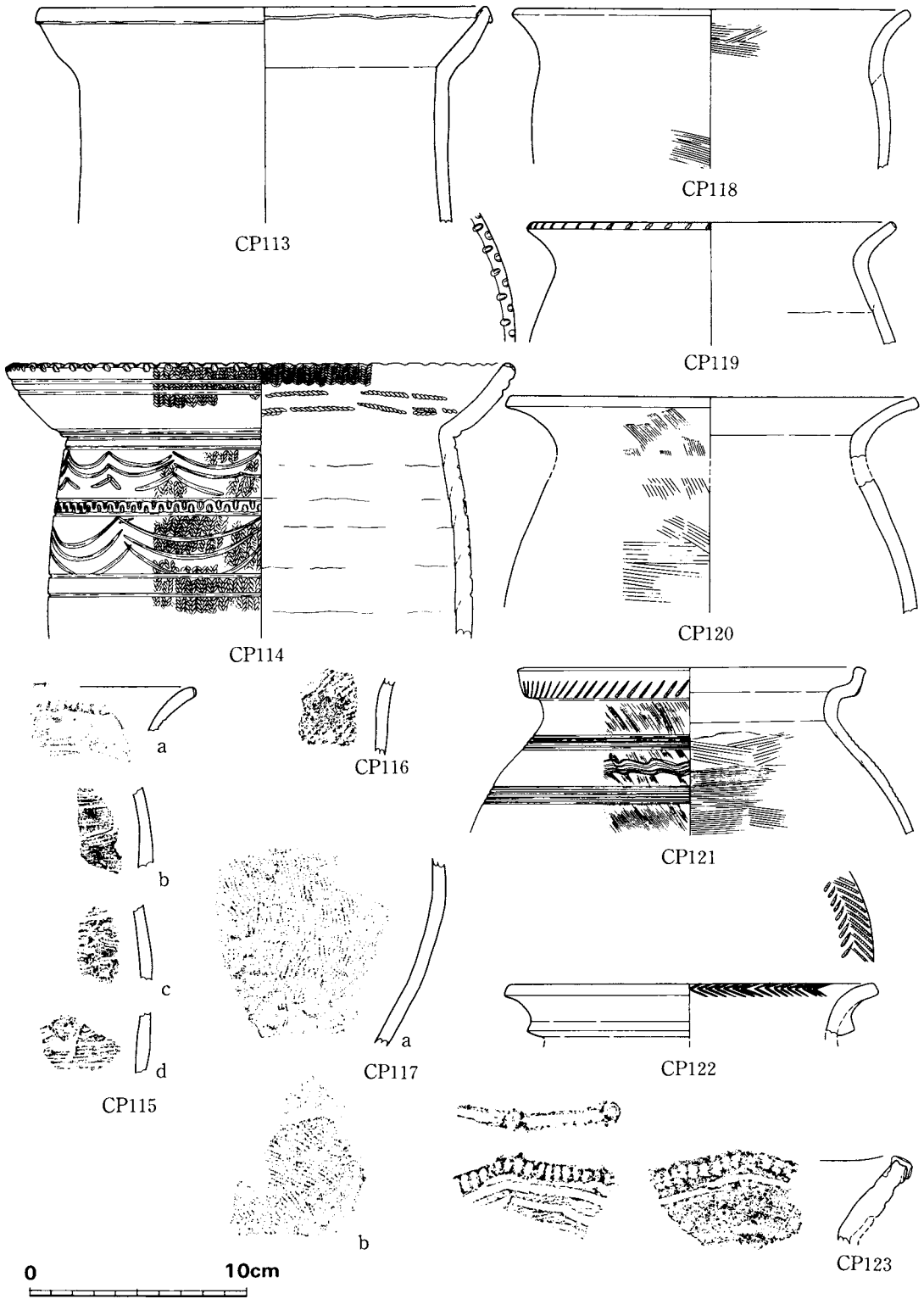
第173図 第1号環濠(S区)出土土器(S=1/3)



第174図 第1号環濠(W区)出土土器(S=1/3)

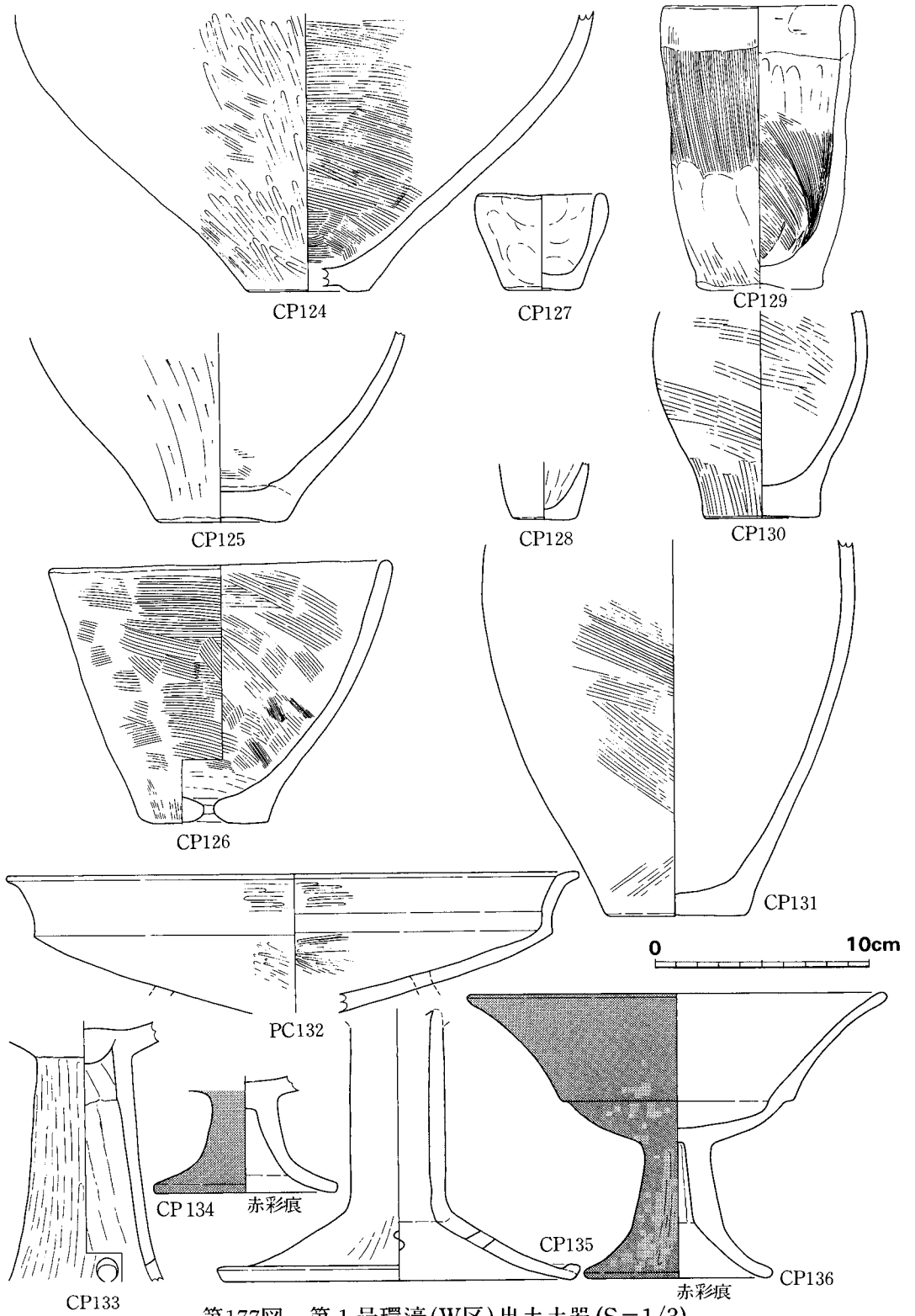


第175図 第1号環濠(W区)出土土器(S=1/3)

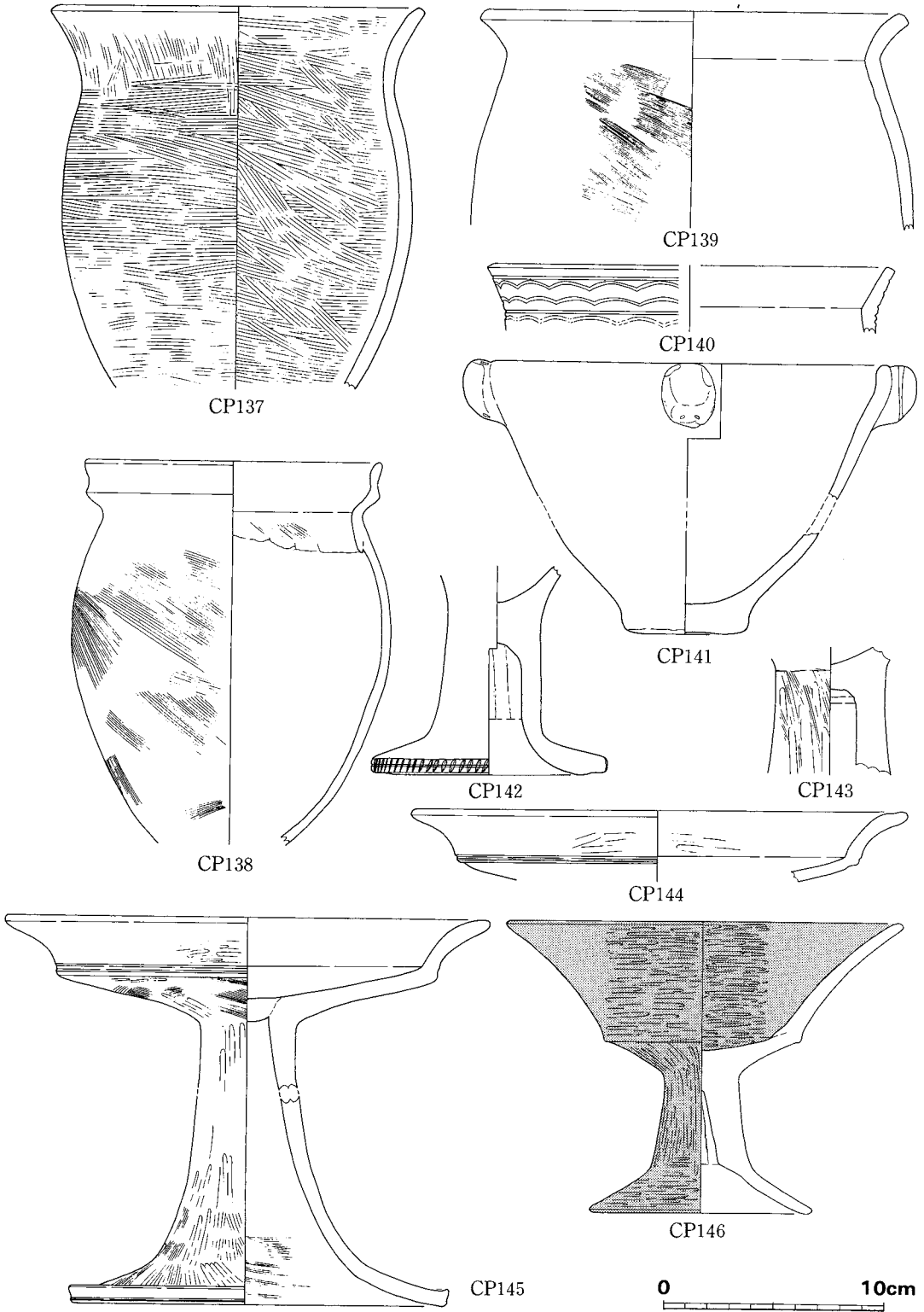


第176図 第1号環濠(W区)出土土器(S=1/3)

第2節 A地区の遺構と遺物

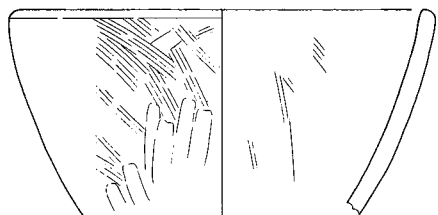


第177図 第1号環濠(W区)出土土器(S=1/3)

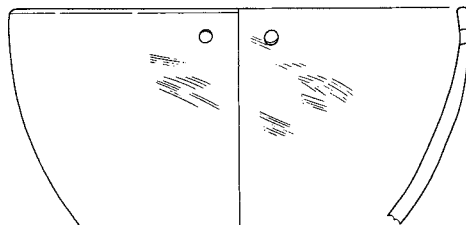


第178図 第1号環濠(N区)出土土器(S=1/3)

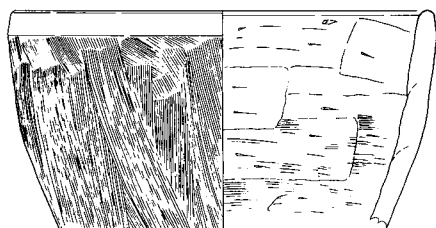
第2節 A地区の遺構と遺物



CP147



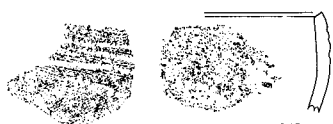
CP149



CP148



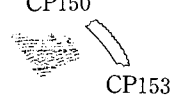
CP150



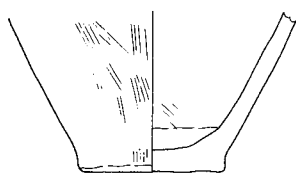
CP151



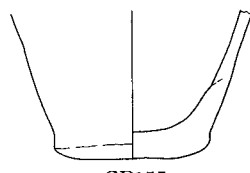
CP152



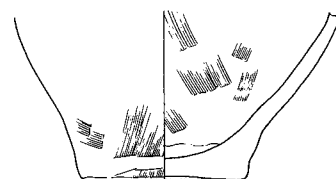
CP153



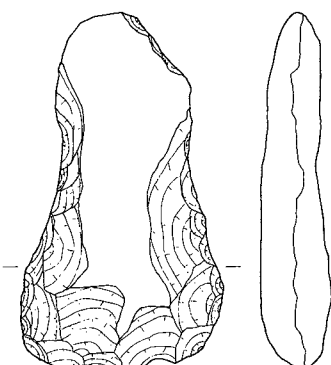
CP154



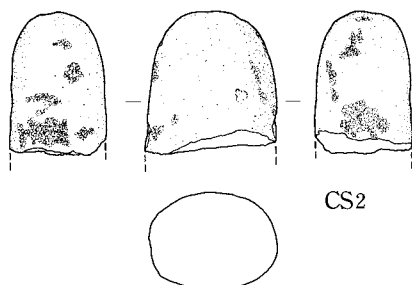
CP155



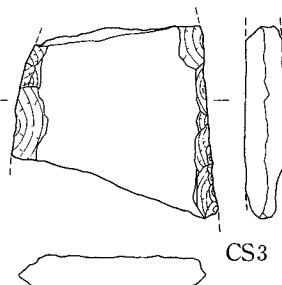
CP156



CS1

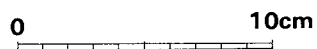


CS2

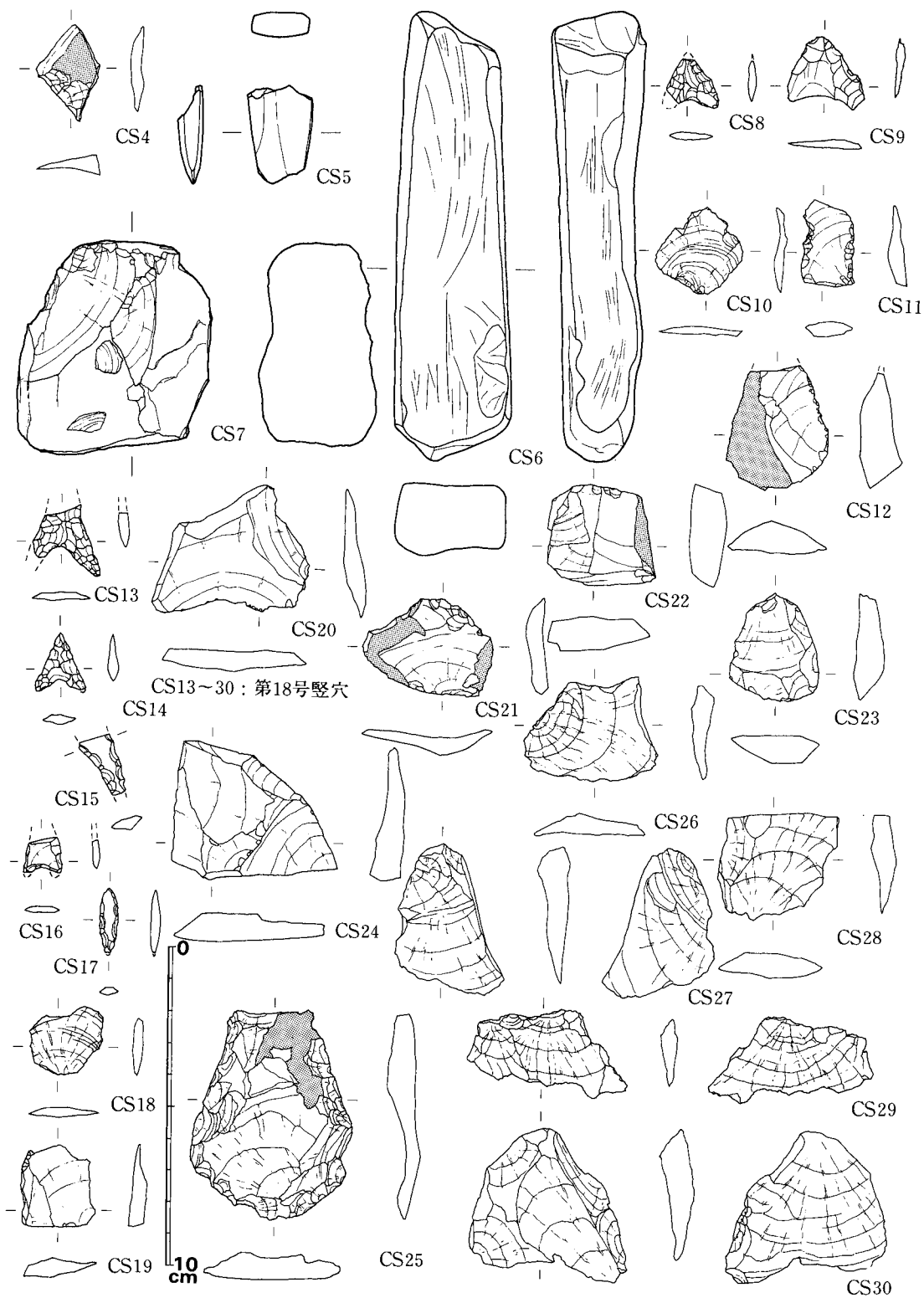


CS3

CS1・2 : 第1号環濠
CS3 : 第1号環濠周辺

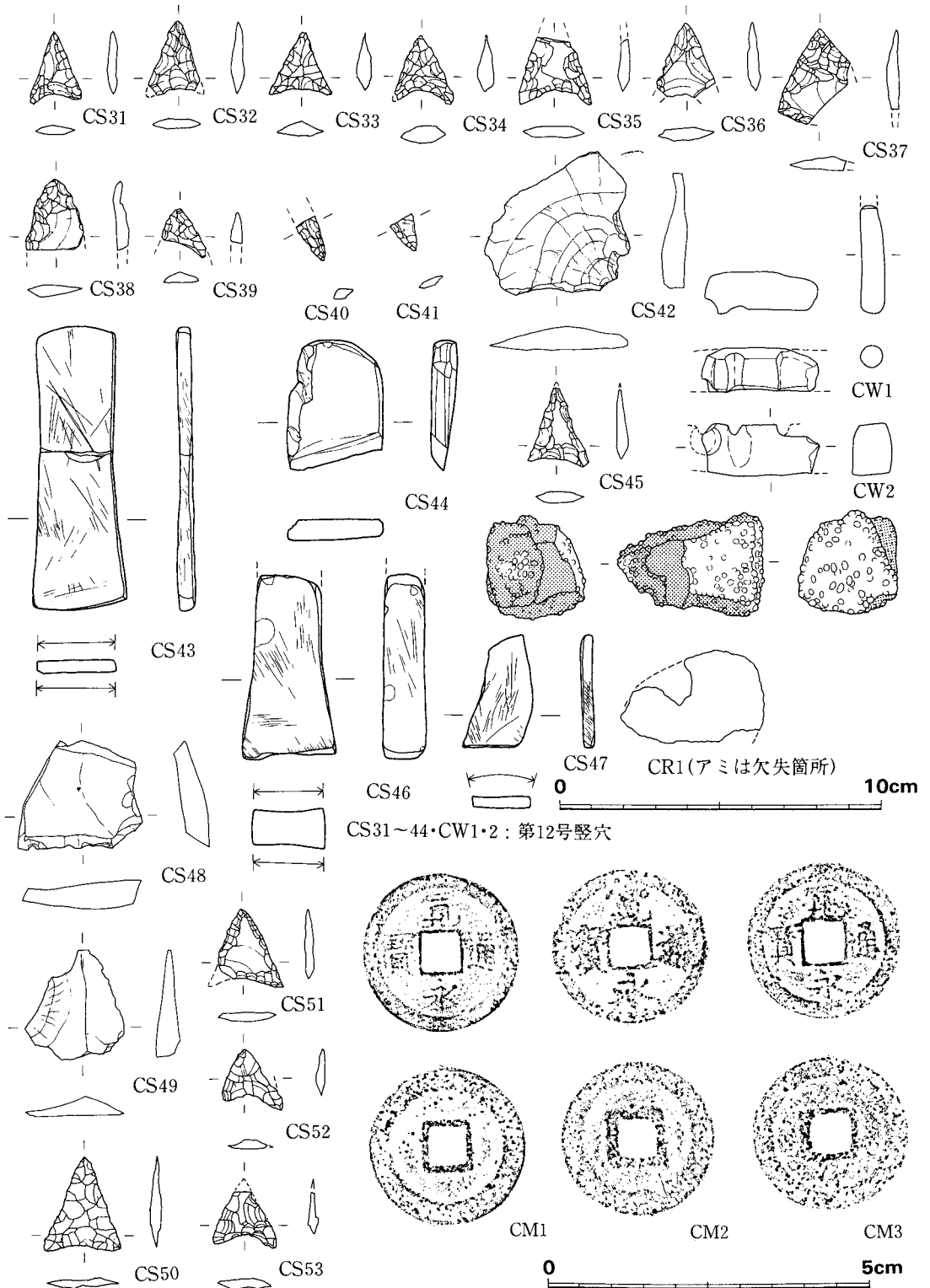


第179図 第1号環濠(N区)他出土土器・石器(S=1/3)



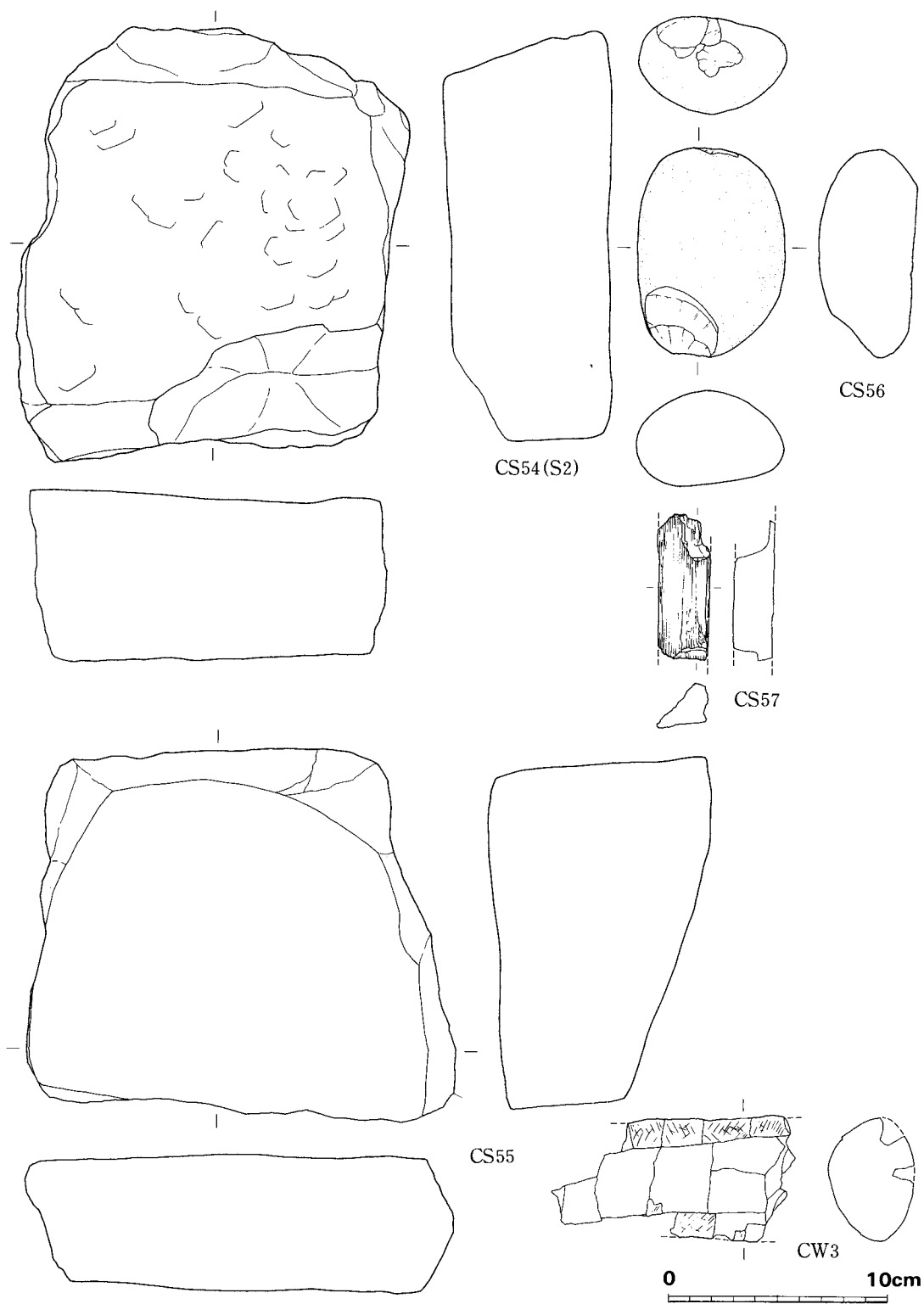
第180図 A地区出土石器(S=1/2)

第2節 A地区の遺構と遺物



CS31~44・CW1・2：第12号竖穴

第181図 A地区出土石器他(S=1/2・=1/1)



第182図 第12号竖穴式建物出土石器他(S=1/3)

第2節 A地区の遺構と遺物

A地区出土土器観察表 (a:口径 b:胴径・脚最小径 c:底径・台径・裾径 h:器高)

番号 整理No	出土 地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度	番号 整理No	出土 地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度
CP 1 90A 59	4号 壺穴	壺	にぶい黄橙色	沈線5以上 小片	CP 36 90A 28	12号 壺穴	壺? P7	c: 6.0 にぶい黄橙色	底部焼成後穿孔1 胴部中位以上ほぼ完
CP 2	4号 壺	壺?	淡黄色	90A57 小片	CP 37 90A 29	12号 壺穴	壺? P8	c: 7.6 黄橙色	底部 ほぼ完
CP 3	4号 壺	壺?	c: 6.0 淡黄色	90A52 1/3	CP 38 90A 30	12号 壺穴	壺? P9	c: 6.6 浅黄橙色	北側出土 ほぼ完
CP 4	4号 壺	壺?	c: 6.6にぶい橙	90A53 1/4	CP 39 90A 31	12号 壺穴	壺? P9	c: 5.8 黄橙色	炉内、外面煤付着 1/2
CP 5 90A 63	6号 壺穴	壺	浅黄橙色	突帯上に斜格子の刻 み目 小片	CP 40 90A 1	12号 壺穴	壺 P5	a:12.7 b:20.2 c: 6.3 h:24.5	外面煤、内面炭化物 ほぼ完
CP 6 90A 54	6号 壺穴	鉢	にぶい橙色	口縁部に蓋結束穴 小片	CP 41 90A 22	12号 壺穴	壺 P9	a:21.2 b:(26) c: 7.8	外面煤、内面炭化物 にぶい褐色 ほぼ完
CP 7	7号 壺	壺?	c: 7.0浅黄橙色	90A55 小片	CP 42 90A 62	13号 壺穴	壺	a:15.0 灰白色	北側出土、外面煤、 内面炭化物 小片
CP 8	7号 壺	壺?	c: 6.6 黄橙色	90A58 1/4	CP 43 90A284	13号 壺穴	鉢	にぶい黄橙色	北側、凹描波状文・ 直線文 小片
CP 9 90A274	14号 壺穴	壺	明褐色	平行沈線2・縄文、 内面炭化物付 小片	CP 44 90A 40	6号 土坑	壺? 脚台	c: 8.6 浅黄橙色	土坑内pit6出土 1/2
CP 10 90A259	14号 壺穴	壺	にぶい黄橙色	刻み、沈線2・交互刻 突、指頭押圧 小片	CP 45	6土	壺?	c: 7.1 橙色	90A41 1/4
CP 11 90A 60	10号 段状	鉢	a:30.2 にぶい黄橙色	蓋結束穴二孔一組 小片	CP 46 90A 23	18号 壺穴	壺 P3	貼付突帯+刻み にぶい橙色	凹線5以上、円形浮 文三層一組×6 1/2
CP 12	10号 段状	壺?	c: 5.4浅黄橙色	90A51 ほぼ完	CP 47	18号 壺	壺?	c: 6.4浅黄橙色	90A 44 完
CP 13 90A 65	9号 段状	壺	a:16.8 浅黄橙色	端部内面刻み目 1/4	CP 48	18号 壺	壺?	c: 5.8明黄褐色	90A 49 1/2
CP 14 90A264	9号 段状	壺	a:18.4 淡橙色	刻み目長短二段 小片	CP 49	18号 壺	壺?	にぶい黄橙色	90A268外縄文 小片
CP 15 90A 61	9号 段状	壺	浅黄橙色	直線文+波状文+直 線文 小片	CP 50	18号 壺	壺?	c: 5.2にぶい橙	90A 50 1/4
CP 16	1土	壺?	c: 7.2 橙色	90A56 1/4	CP 51	18号 壺	壺?	c: 5.2にぶい橙	90A 47 完
CP 17 90A296	3号 土坑	壺?	CP24と同一? 淡黄色	直線文2〜、弧線文 2〜 小片	CP 52	18号 壺	壺?	c: 5.4にぶい橙	90A 46 1/4
CP 18 92D 1	5号 土坑	?	外面:淡黄色 内面:橙	破片重量275g	CP 53	18号 壺	壺?	c: 3.2にぶい橙	90A 48 pit7 完
CP 19 90A 64	49号 土坑	壺?	小片 灰白色	連続斜行短線+直線 文+波状文+直線文 小片	CP 54	18号 壺	壺?	c: 6.0浅黄橙色	90A 45 1/3
CP 20 90A290	W区	壺	外面煤付着 小片 淡黄色	外面縄文・沈線、内 面縄文? 小片	CP 55 90A 42	18号 壺穴	壺 P4	b:22.4 c: 7.4 橙色	外面煤、内面炭化物 付着 3/4
CP 21 90A295	E区	鉢?	波状口縁? にぶい黄橙色	沈線文・刺突文、底 部に小突起 小片	CP 56 90A 2	18号 壺穴	壺 P5	a:19.6 b:18.9 c: 5.2 浅黄橙色	外面煤、内面炭化物 付着 3/4
CP 22	S区	壺?	90A282 暗褐色	外縄文・煤付 小片	CP 57 90A 43	18号 壺穴	壺 P5	c: 9.2 浅黄橙色	破片は胴中位付近ま で相当量有 ほぼ完
CP 23 90A273	W区	壺	にぶい黄橙色	直線文2、弧線文1 刺突文 小片	CP 58 90A265	1環 S区	壺	a:14.0 小片 淡黄色	外沈線・刺突・指頭 押圧、内沈線・刻目
CP 24 90A281	S区	壺?	浅黄橙色	弧線文2 CP17と同一? 小片	CP 59 90A121	1環 S区	壺	にぶい黄褐色	外平行沈線・円形刺 突(二層一組) 小片
CP 25 90A 33	12号 壺穴	壺? 底部	c: 5.8 にぶい橙色	北側出土 1/3	CP 60	1環 壺	壺	a:13.4浅黄橙色	S区 90C14 ほぼ完
CP 26 90A 34	12号 壺穴	壺? 底部	c: 5.5 にぶい橙色	北側出土 小片	CP 61	1環 壺	壺	a:13.6明黄褐色	S区 90C24 1/3
CP 27 90A 21	12号 壺穴	壺 P2	a:14.8 b:17.4 c: 6.5 h:27.2	口縁波状の可能性有 外煤 ほぼ完	CP 62	1環 壺	壺	a:15.8浅黄褐色	S区 90C29 1/3
CP 28 90A 38	12号 壺穴	壺	a:19.0 灰白色	北側出土 外面煤付着 小片	CP 63 90A115	1環 S区	壺?	a:18.2 淡黄色	外面磨耗 1/3
CP 29 90A 37	12号 壺穴	壺 P3	a:22.6 b:22.6 c: 6.0	外煤、内炭化物付着 にぶい黄褐色 ほぼ完	CP 64 90A119	1環 S区	壺	a:10.0 浅黄褐色	直線文4、波状文2 1/3
CP 30	12号 壺	壺?	c: 5.0 淡黄色	90A32 P1 1/2	CP 65 90C152	1環 S1壺	壺	a:17.4 b:27.0 c: 6.1 h:29.7	2・5層出土、口頸 部小片、他ほぼ完
CP 31 90A 4	12号 壺穴	壺 P4	a:12.8 b:15.8 c: 7.6 h:18.9	外煤 二孔一対結束 孔 浅黄橙 ほぼ完	CP 66 90C140	1環 S区	壺	a:11.5 b:13.9 c: 1.8 h:13.4	外面煤付着 浅黄褐色 ほぼ完
CP 32 90A 39	12号 壺穴	土製 円盤	P7 浅黄橙色 紡錘車未製品	径33-36、厚5-7mm 外ナデ、内ハケ 完	CP 67 90A117	1環 S区	壺	a:10.5 橙色	外面磨耗 1/4
CP 33 90A 36	12号 壺穴	壺 小片	CP151と同一?外 煤、にぶい黄橙	北側、二孔一組蓋結 束孔、木目沈線3 小片	CP 68 90C137	1環 S区	壺	b:19.4 c:14.7 浅黄褐色	脚最小径4.4、孔4 1/3
CP 34 90A 35	12号 壺穴	壺 小片	a:11.5 浅黄褐色	北側、外面縄文、口 縁端部に小突起、 外面煤付着 小片	CP 69 90A283	1環 S区	壺	内外面縄文 浅黄色	口縁端部に小突起、 外面煤付着 小片
CP 35 90A 3	12号 壺穴	壺 P6	a:(7.6) b:17.3 c: 9.0 h:14.8	結束孔一対、波状・ 直線文、外煤、黄橙	CP 70 90A107	1環 S区	壺	a:18.2 黄褐色	外面煤付着、内面 縞文 小片
					CP 71 90A110	1環 S区	壺	a:17.5 黄褐色	口縁端部に刻み目、 外面煤付着 1/4

第4章 杉谷チャノバタケ遺跡

番号整理No	出土点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項 遺存度	番号整理No	出土点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項 遺存度
CP 72 90C 17	1環 S区	壺	a:16.8 浅黄褐色	擬凹線3、外面煤、 口縁1/2、肩部小片	CP107 90A272	1環 W区	壺?	CP106と同一? にぶい黄褐色	平行沈線、縦位沈線 ?、縄文 小片
CP 73 90C 3	1号環 SW	壺	a:19.5 b:24.7 c:4.9 h:27.1	外面煤・内炭化物付 着、口縁・肩部 目、浅黄褐色	CP108 90A260	1環 W区	壺?	明褐色	平行沈線、山形文 縄文 小片
CP 74 90C 25	1環 S区	壺	a:14.6 浅黄褐色	擬凹線3、外面煤付 着	CP109 90A287	1環 W区	?	にぶい黄褐色	平行沈線?、横位弧 線? 小片
CP 75 90C 28	1環 S区	壺	a:(13.7) b:(13.7)	外面煤付着 浅黄褐色 小片	CP110 90A298	1環 W区	?	CP80と同一? 浅黄褐色	弧線文、縄文 小片
CP 76	1環	壺?	c:9.5 橙色	S区 90A105 完	CP111 90A271	1環 W区	?	CP112と同一? にぶい黄褐色	波状文 小片
CP 77	1環	壺?	c:10.4 浅黄褐色	S区 90A106 ほぼ完	CP112 90A269	1環 W区	?	CP111と同一? にぶい褐色	波状文 小片
CP 78 90A 34	1環 S区	壺	a:16.2 橙色	外面煤付着 ほぼ完	CP113 90A129	1環 W区	壺	a:20.6 にぶい褐色	外面煤、内面炭化物 付着 1/4
CP 79 90A267	1環 S区	?	CP101・102と同 一? 淡黄色	直線文、弧線文、縄 文 小片	CP114 90A299	1号環 W区 W2畦	壺	a:23.0 b:19.7 4・7層出土 浅黄褐色	平行沈線文、交互縄 文、弧線文、約3 cmの縄文、(長さ約 3cm) 1/2
CP 80 90A262	1環 S区	?	CP110と同一? 浅黄褐色	刺突文、直線文、弧 線文、縄文、縄文	CP115 90A113	1環 W区	壺	外面煤付着 褐色	構状具による直線文 ・波状文 小片
CP 81	1環	?	S区 淡黄色	90A277 縄文 小片	CP116 90A278	1環 W区	?	にぶい黄褐色	縄文、外面煤付着 小片
CP 82	1環	?	S区 灰黄褐色	90A291 縄文 小片	CP117	1環	?	縄文にぶい黄褐色	90A266W区 小片?
CP 83	1環	?	S区にぶい黄橙	92A275 燃系 小片	CP118	1環	壺	a:18.0 橙色	90A114W区 1/3
CP 84	1環	?	S区にぶい黄橙	92A270 縄文 小片	CP119 90A116	1環 W区	壺	a:16.5 にぶい褐色	口縁端部に刻み目、 外面煤付着 1/4
CP 85	1環	?	S区にぶい黄橙	92A293 縄文 小片	CP120 90A122	1環 W区	壺	a:18.5 淡黄色	外面煤付着 小片
CP 86	1環	壺?	S区にぶい黄橙	92A280 条痕 小片	CP121 90C 12	1環 W区	壺	a:15.3 浅黄褐色	構状具による刻目・ 直線文・波状文 1/3
CP 87 90A108	1環 S区	鉢	a:14.9 橙色	外面突帯上に刻み目 外面煤付着 小片	CP122 90A130	1環 W区	壺	a:16.7 浅黄褐色	内面杉文、外面頸 部突帯? 1/3
CP 88 90A 17	1環 S区	有孔 鉢	a:14.8 c:6.1 h:12.8 橙色	孔内に絞り目痕 口縁1/4、他ほぼ完	CP123 90A279	1環 W区	壺 小片	波状口縁 にぶい黄褐色	刻み目、沈線、弧線 縄文、刺突文、沈線
CP 89 90A123	1環 S区	鉢	橙色	二孔一対蓋結束孔 1/3	CP124 90C141	1環 W区	壺	c:5.9 にぶい黄褐色	外面煤付着 1/2
CP 90 90C 32	1環 S区	鉢	a:18.2 にぶい褐色	擬凹線6 1/3	CP125 90C 22	1環 W区	壺?	c:6.1 浅黄褐色	体部 2/3、底部完
CP 91 90C 1	1号環 S区	高杯	a:30.0 b:4.7 裾部孔数不明 褐色	竹管押圧円形浮文2 層×3箇所、脚部 杯部 1/3、裾部 1/4	CP126 90A 15	1環 W区	壺	a:(15.8) c:6.0 h:(12.3) 浅黄橙	底部焼成後穿孔、有 孔鉢として転用? 1/2
CP 92 90C 27	1環 S区	台付 鉢	b:3.1 c:9.8 浅黄褐色	孔4 脚ほぼ完、裾部 1/2	CP127 90C 26	1環 W区	小型 土器	a:5.4 c:3.6 h:4.5 浅黄橙	体部 1/2、底部完
CP 93	1環	壺	c:3.4 黄褐色	S区 90C30 1/4	CP128 90C 16	1環 W2畦	小型 土器	c:3.0 浅黄褐色	7層出土 体部 1/2、底部完
CP 94 90C 23	1環 S区	器台	b:7.0 c:15.3 褐色	孔4 2/3	CP129 90A 13	1環 W区	鉢	a:8.9 c:5.9 h:13.3 浅黄橙	体部 1/2、底部完
CP 95 90A 5	1号環 S区	壺	a:15.0 b:36.4 淡黄色 ほぼ完	口縁部突起4、平行 沈線、交互刺突、弧 線文、三角形文、縄文	CP130 90A279	1環 W区	壺?	b:10.0 c:5.3 浅黄褐色	外面煤付着 ほぼ完
CP 96 90A118	1環 W区	壺	a:28.5 にぶい黄褐色	口縁端部構状具によ る刻み目	CP131 90A 20	1環 W区	壺	b:17.5 c:6.6 褐色	外面煤付着 体部 1/2、底部完
CP 97	1環	壺	a:18.0 浅黄褐色	W区 90C13 ほぼ完	CP132 90C138	1環 W区	高杯	a:26.8 浅黄～黄灰色	体部に孔(把手接合 孔)一対 1/2
CP 98 90C 15	1環 W区	壺	浅黄褐色	口縁屈曲部刻み目 1/4	CP133 90C 20	1環 W区	高杯	b:4.5 にぶい黄褐色	孔4 ほぼ完
CP 99 90A 16	1環 W区	壺	c:10.2 褐色	平行沈線6、竹管文 上位1/4 下位ほぼ完	CP134 90C 31	1環 W区	台付 鉢	b:3.1 c:8.4 にぶい黄褐色	外面赤彩、脚内面一 部赤彩痕 ほぼ完
CP100 90A111	1環 W区	壺	a:19.8 褐色	構状具による刻み目 平行沈線2～ 1/4	CP135 90C 21	1環 W区	高杯	b:4.4 c:16.4 褐色	孔数不明 脚部ほぼ完 裾部小片
CP101 90A288	1環 W区	小片	CP79・102と同一? にぶい黄橙	弧線文、刺突文、縄 文、内面炭化物付着	CP136 90C135	1号環 W区	台付 鉢	a:19.3 b:3.0 c:8.2 h:13.5 浅黄褐色	外面赤彩、脚部内面 一部赤彩、脚部ほぼ 完 体部・裾部 1/2
CP102 90A285	1環 WN	小片	CP79・101と同一? 淡黄色	弧線文、平行沈線、 連続刺突文、縄文	CP137 90A 14	1環 N区	壺	a:16.7 b:16.2 黄褐色	外面煤・内炭化物付 着 口縁ほぼ完、脚 部 1/2
CP103 90A258	1環 W区	壺	淡黄色	平行沈線2、交互刺 突文	CP138 90C139	1環 N区	壺	a:13.5 b:14.8 褐色	外面煤・内面炭化物 付着 3/4
CP104 90A263	1環 W区	壺?	灰黄褐色	平行沈線4? 小片					
CP105 90A294	1環 W区	壺?	淡黄色	平行沈線4～、縦位 沈線3～ 小片					
CP106 90A289	1環 W区	壺?	CP107と同一? にぶい黄褐色	平行沈線、横位弧線 ?、縄文 小片					

第2節 A地区の遺構と遺物

整理No	出土点	器類	法量等 (cm) 調色	特記事項 遺存度	番号	出土点	器類	法量等 (cm) 調色	特記事項 遺存度
CP139 90A19	1環 N区	甕	a:18.8 灰褐色	外面煤付着 1/4	CP147 90C19	1環 N区	鉢	a:16.0 浅黄褐色	外面煤付着 小片
CP140 90A261	1環 N区	甕	a:18.0 褐色	直線文・弧線文 小片	CP148	1環	鉢	a:16.4にぶい橙	N区 90A18 1/3
CP141 90A128	1環 N区	鉢	a:18.0 c:5.3 h:(12.5) 橙褐色	二孔一組蓋結束孔部 口縁部小片・底部完	CP149 90C18	1環 N区	鉢	a:17.8 灰白色	二孔一組蓋結束孔 小片
CP142 90A112	1環 N区	高杯	b:4.3 c:10.8 黄橙褐色	脚端部沈線・刻み目完	CP150	1環	甕?	c:6.8 浅黄橙	N区 90A132 1/3
CP143	1環	高杯	b:5.2 浅黄橙	N区90A120 ほぼ完	CP151 90A292	1環 N区	壺	CP33と同一? にぶい橙褐色	外面煤付着、木目状 沈線3 小片
CP144	1環	高杯	a:22.5 浅黄橙	N区90C33 ほぼ完	CP152	1N	?	にぶい黄橙	90A276沈線 小片
CP145 90C136	1号環 N区	高杯	a:22.2 b:4.3 c:17.4 h:(18) にぶい橙褐色	脚(1/2)と体部(ほぼ完)は別個体の 能性が残る	CP153 90A109	1環 N区	?	橙褐色	直線文・波状文 小片
CP146 90C2	1号環 N区	高杯	a:18.0 b:3.4 c:9.7 h:13.5 赤色	外面・内面体部赤彩部 脚部完、体部・鋸部 2/3	CP154	1N	甕?	c:5.6 橙褐色	90A124 ほぼ完
					CP155	1N	甕?	c:6.2 黄橙褐色	90A127外煤 ほぼ完
					CP156	1N	甕?	c:6.5 浅黄橙褐色	90A126外煤 ほぼ完

A地区出土石器・木器・金属器等観察表 (*: 残存値)

番号	整理No	出土地点	器種等	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質等特記事項
CS 1	89 S 75	第1号環濠	打製石斧	13.1	8.0	2.8	343	片麻岩
2	90 S 11	"	打製石斧	* 5.7	5.3	1.6	* 178	片麻岩
3	89 S 74	"	打製石斧	* 7.6	* 8.1	1.6	* 117	片麻岩
4	90 S 7	第5号竪穴	打製石斧	* 3.1	2.1	0.8	2.5	片麻岩
5	89 S 20	第14号竪穴	打製石斧	* 3.1	* 2.1	* 0.8	6.3	片麻岩
6	89 S 46	第14号竪穴	打製石斧	14.0	3.7	3.0	209	片麻岩
7	90 S 13	第9号竪穴	打製石斧	6.7	6.2	3.9	18.4	片麻岩
8	89 S 35	"	打製石斧	* 1.6	* 1.6	0.3	* 0.6	片麻岩
9	89 S 42	"	打製石斧	* 2.3	* 2.4	0.3	* 1.5	片麻岩
10	90 S 4	"	打製石斧	2.7	2.7	0.3	1.7	片麻岩
11	90 S 2	"	打製石斧	2.6	1.6	0.5	2.3	片麻岩
12	90 S 4	"	打製石斧	4.0	3.1	1.2	10.4	片麻岩
13	89 S 32	"	打製石斧	* 2.2	* 2.2	0.4	* 1.0	片麻岩
14	89 S 31	"	打製石斧	1.8	1.6	0.3	0.5	片麻岩
15	89 S 33	"	打製石斧	-	-	* 0.4	* 0.8	片麻岩
16	89 S 34	"	打製石斧	* 0.7	* 0.8	* 0.3	* 0.4	片麻岩
17	89 S 45	"	打製石斧	2.1	0.6	0.3	0.3	片麻岩
18	90 S 8	"	打製石斧	2.2	2.2	0.3	1.3	片麻岩
19	90 S 20	"	打製石斧	2.6	2.2	0.5	3.4	片麻岩
20	90 S 15	"	打製石斧	4.5	4.0	0.6	12.7	片麻岩
21	90 S 16	"	打製石斧	4.1	3.0	0.5	6.5	片麻岩
22	90 S 17	"	打製石斧	3.3	3.1	1.1	14.9	片麻岩
23	90 S 16	"	打製石斧	3.4	2.8	0.8	6.6	片麻岩
24	90 S 19	"	打製石斧	5.6	4.2	0.8	21.1	片麻岩
25	90 S 21	"	打製石斧	6.3	5.0	0.7	32.2	片麻岩
26	90 S 23	"	打製石斧	4.3	3.5	1.0	9.7	片麻岩
27	90 S 26	"	打製石斧	4.7	3.4	0.8	10.8	片麻岩
28	90 S 22	"	打製石斧	3.7	3.4	0.8	10.7	片麻岩
29	90 S 25	"	打製石斧	5.1	2.8	0.5	6.2	片麻岩
30	90 S 24	"	打製石斧	5.0	4.9	1.2	17.5	片麻岩
31	89 S 41	第12号竪穴	打製石斧	2.3	1.6	0.3	0.7	片麻岩
32	89 S 51	"	打製石斧	* 2.3	* 1.6	0.3	* 0.9	片麻岩
33	89 S 39	"	打製石斧	2.0	2.0	0.5	1.0	片麻岩
34	89 S 29	"	打製石斧	* 2.1	* 1.9	0.5	* 1.2	片麻岩
35	89 S 28	"	打製石斧	* 2.2	* 2.3	0.4	* 1.3	片麻岩
36	89 S 30	"	打製石斧	* 2.4	* 1.9	0.4	* 1.4	片麻岩
37	89 S 52	"	打製石斧	* 3.0	* 2.2	0.4	* 2.2	片麻岩
38	89 S 56	"	打製石斧	* 1.2	* 1.8	0.4	* 1.6	片麻岩
39	89 S 53	"	打製石斧	* 1.5	* 1.4	0.3	* 0.4	片麻岩
40	89 S 44	"	打製石斧	-	-	* 0.2	* 0.3	片麻岩
41	90 S 6	"	打製石斧	-	-	* 0.2	* 0.2	片麻岩
42	90 S 3	"	打製石斧	4.6	4.5	0.8	13.3	片麻岩
43	89 S 24	"	打製石斧	8.8	2.9	0.6	19.4	片麻岩
44	89 S 21	"	打製石斧	4.1	3.0	0.8	17.1	片麻岩
45	89 S 40	第6号土坑	打製石斧	* 2.8	1.9	0.4	* 1.2	片麻岩
46	89 S 22	第1号土坑	打製石斧	* 3.5	* 3.4	0.4	* 27.7	片麻岩
47	89 S 25	"	打製石斧	* 3.8	* 3.9	0.4	* 13.0	片麻岩
48	90 S 1	"	打製石斧	3.4	3.1	0.8	4.6	片麻岩
49	90 S 9	"	打製石斧	3.0	2.4	0.4	1.7	片麻岩
50	89 S 27	"	打製石斧	* 2.5	* 2.1	0.3	* 1.1	片麻岩
51	89 S 43	"	打製石斧	* 1.9	* 1.9	0.3	* 0.6	片麻岩
52	89 S 37	"	打製石斧	* 1.8	2.0	0.3	* 0.8	片麻岩
53	89 S 36	第12号竪穴	打製石斧	20.2	18.3	8.0	5000	片麻岩
54	90 S 86	"	打製石斧	20.3	17.0	10.3	5500	片麻岩
55	90 S 87	"	打製石斧	9.8	6.8	4.4	410	片麻岩
56	90 S 12	"	打製石斧	6.8	2.4	2.0	35.1	片麻岩
57	90 S 14	"	打製石斧	* 3.3	0.7	0.5	* 0.5	片麻岩
58	89 W 1	"	打製石斧	* 3.6	1.6	1.2	* 1.8	片麻岩
59	89 W 2	"	打製石斧	* 11.2	5.8	3.9	* 71.8	片麻岩
CR 1	89 R 106	第1号環濠	打製石斧	2.5	?	?	?	片麻岩
CM 1	89 M 13	"	打製石斧	2.4	1.0	1.0	3.0	片麻岩
2	89 M 14	"	打製石斧	2.4	1.0	1.0	2.8	片麻岩
3	89 M 15	"	打製石斧	2.4	1.0	1.0	2.8	片麻岩

第3節 B地区の遺構と遺物

1 概要(第156・183・184図)

B地区は、本遺跡の中で最も平野部側のA地区と逆に西側最高所に位置するC地区との中間に所在する。本来は南および東向きの丘陵斜面から一部谷部(範囲東西約80m、南北約70m、標高60~80m)にかけて遺構が展開していたものと推定されるが、範囲確認調査(昭和61(1986)年度10月~11月)時には、中央を東側を下る谷筋(調査区南側縁辺)から南側は伐根作業等によってすでに損壊しており、特に本地区南側東向き斜面については埋蔵文化財の有無を確認できない状態であった。谷筋においても上部流土は完全に失われ、一部では掘削が地山にまで及んでおり、翌年度5月に残存する下部流土を掘り下げ、遺物を採集するとともに遺構検出を試みたが、時期不明の土坑2基(第7・8号土坑、掘り下げは7月)を検出したにとどまる。同部での遺物の採集にあたっては、上位(西側)から下位(東側)に任意に(谷部)1~3区を設定しておこなった。

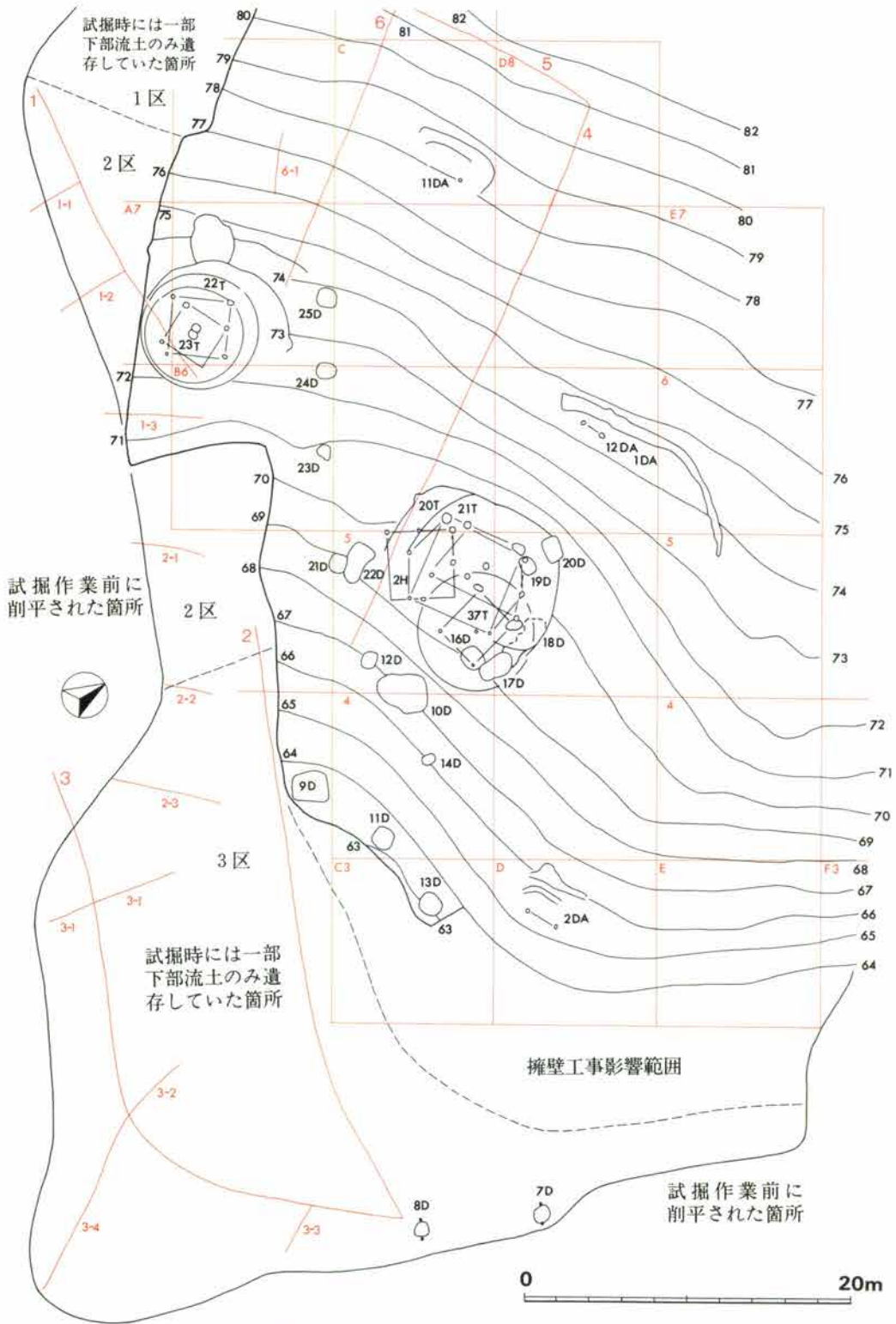
残る北側南向き斜面は、伐採は終了していたものの掘削はおこなわれておらず、表土以下の遺存状態は良好であった。まず6月に東側(逆T式)擁壁工事影響範囲を調査(遺構なし)、本格的な調査は8月から12月まで、平板測量と第2号段状遺構周辺の調査は翌昭和63(1988)年度4月に実施した。昭和62(1987)年度8月以降の調査では、調査区に10m×10mの区画を設定した。基準は調査区南側に工事用として設けられていたI P 13、E C 13、No.40の3点で、3点を通る直線をAライン、E C 13を通りI P 13-No.40に直交する直線を4ライン(E C 13=A-4)とし、各区画を西側杭名で代表した。遺構は斜面中腹(標高65~75m)に集中し、斜面上位および谷部では比較的希薄であるが、前者には第11号段状遺構、後者には第9・11・13号土坑が所在する。

検出された遺構は、土坑18基(第7~14・16~25号、第15号は欠番)、竪穴式建物5基(第20~23・37号、第24・25号は欠番)、掘立柱式建物1基(第2号)、段状遺構4基(第1・2・11・12号)、小穴(ピット)群1基(第1号)であり次項以下この順に報告する。谷部では流土中より多量の遺物が出土したが、他の遺物の大半は遺構からの出土で21箱を得ている(個々の遺物の詳細は節末の観察表を参照されたい)。

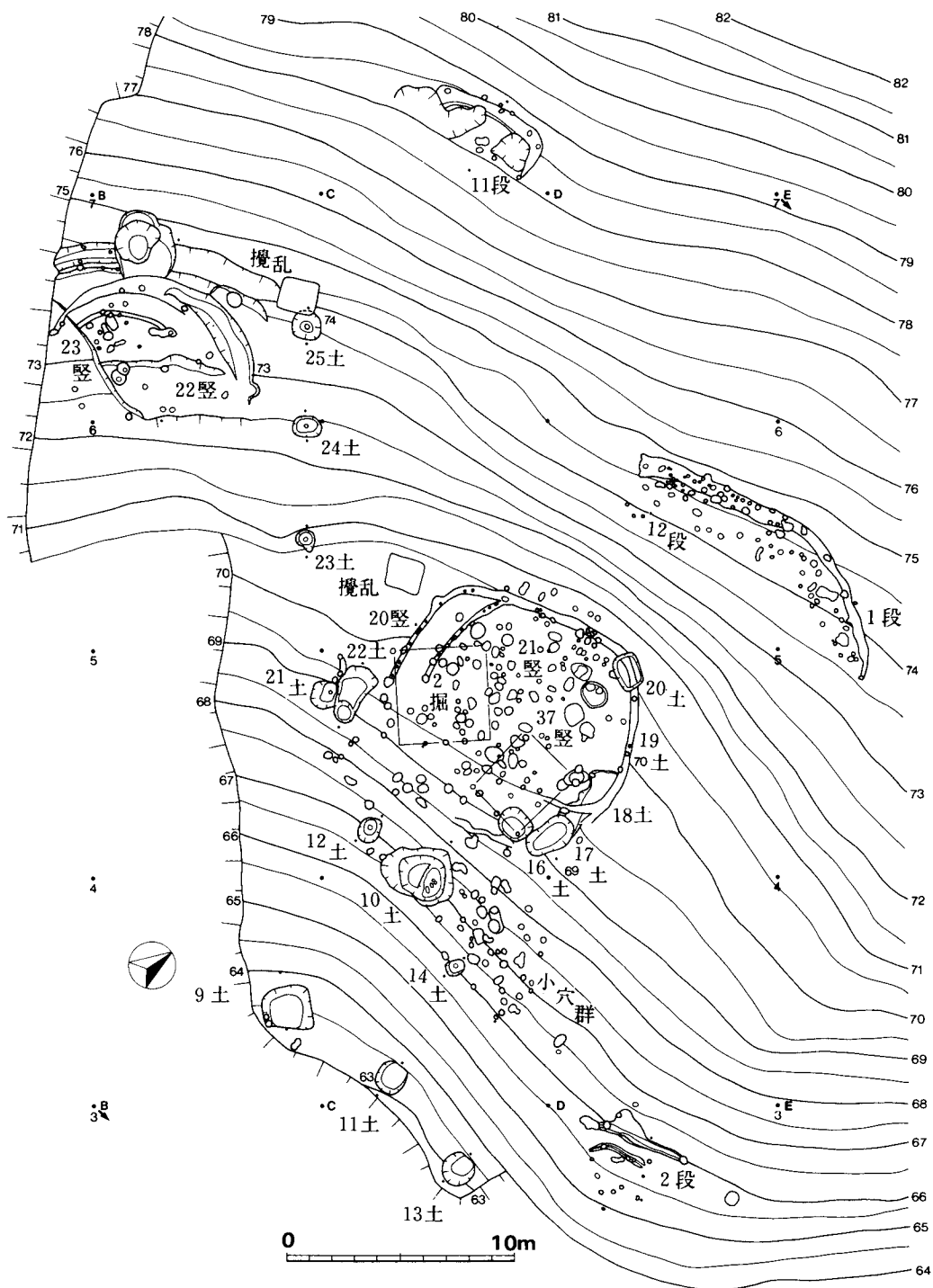
2 土坑(第185・186・191・197・206図)

本地区で検出された土坑は、縄文時代の(あるいはその可能性のある)落し穴(10基、第9~14・21・23~25号土坑)、時期比定に問題を残すが土坑内あるいは周辺で火が使用されたと推定されるもの(5基、第16・17・19・20・22号土坑)、性格不明ながらおそらくは弥生時代に属するもの(1基、第18号土坑)、時期・性格ともに不明のもの(2基、第7・8号土坑)の4類に分けられ、落し穴についてはさらに谷部に弧状に展開するもの(3

第3節 B地区の遺構と遺物



第183図 B地区遺構配置図(S=1/400)



第184図 B地区全体図(S=1/300)

第3節 B地区の遺構と遺物

基、第9・11・13号土坑)、斜面に弧状に展開するもの(6基、第12・14・21・23～25号土坑)、斜面に単独で所在するもの(第10号土坑)の3群が認められる。

第9・11・13号土坑

谷部(B-4・C-3・4区)に弧状に展開する。各土坑(中心)間の距離は約5.0および5.5mである。坑底には径10cm未満、最大深度20～25cmの断面V字状の小穴が30数基～40数基穿たれており、性格的には落し穴が考えられる。極少量出土した遺物の中に縄文時代前期前葉頃に属するものがあり、同期の所産の可能性はある。

第9号土坑 B-4区に位置する。下位に隣接する第11号土坑との距離は約5.0mである。平面形は方形、上面規模は2.12×1.92m、深さ124cmを測り、坑底には径10cm未満、最大深度25cmにも達する断面V字状の小穴が50基弱穿たれている。埋土は(暗)茶褐色土系で全体に締まりは弱い。遺物の出土は少量で土器4点(CP157～160)を実測した。CP157は上部から他は中位以下からの出土である。外面に爪形文(CP157・160)あるいは(羽状)縄文(CP158・159)を施すもので、縄文時代前期前葉(関山式並行)頃の所産と考えられる。総じて小片ではあるが、本土坑の所属時期を考えるうえで手掛かりを与えてくれる。

第11号土坑 C-4区に位置する。上位および下位に隣接する第9および第13号土坑との距離は、それぞれ約5.0および5.5mである。平面形は隅丸方形、上面規模は1.41×1.31m、深さ124cmを測り、坑底には径10cm未満、最大深度20cmの断面V字状の小穴が40基弱穿たれている。埋土は(暗)茶褐色土系で全体的に締まりは弱い。遺物の出土は極少量で、実測しうるものは得られなかった。

第13号土坑 C-3区に位置し、上位に隣接する第11号土坑との距離は約5.5mである。平面形は隅丸方形、上面規模は1.40×1.38m、深さ110cmを測り、坑底には径10cm未満、最大深度15cmの断面V字状の小穴が50基弱穿たれている。埋土は(暗)茶褐色土系で全体的に締まりは弱い。遺物の出土は極少量で、実測しうるものは得られなかった。

第12・14・21・23～25号土坑

丘陵斜面(B-5～7・C-4・5区)に延長約30mにわたって弧状に展開する。各土坑(中心)間の距離は、約4.3～7.2mである。坑底に(楕)円形小穴1基を有し、性格的には落し穴が考えられるが、出土遺物がなく時期比定は困難である。弥生時代(後半期)以降は建物の展開する広義の集落域となるため、それ以前とすれば、周辺流土中より得られた縄文土器を根拠に同期に属する可能性が高いものと考えられる。

第12号土坑 C-5区に位置し、上位および下位に隣接する第21および第14号土坑との距離は、それぞれ約6.2および7.2mである。平面形は隅丸方形、上面規模は1.16×0.94m、深さ150cmを測り、坑底に径19cm、深さ32cmの円形小穴を有する。

第14号土坑 C-4区に位置し、上位に隣接する第12号土坑との距離は約7.2mである。平面形は隅丸方形、上面規模は0.86×0.66m、深さ120cmを測り、坑底に径20×22cm、深さ26cmの円形小穴を有する。

第21号土坑 BC-5区に位置し、北東部は第22号土坑に切られている。上位および下位に隣接する第23および第12号土坑との距離は、それぞれ約6.8および6.2mである。平面形は隅丸方形、上面規模1.38×1.26m、深さ136cmを測り、坑底に径16cm、深さ31cmの円形小穴を有する。

第23号土坑 B-5区に位置し、上位および下位に隣接する第24および第21号土坑との距離は、それぞれ約5.0および6.8mである。平面形は略円形、上面規模0.86×0.75m、深さ128cmを測り、坑底に径16×27cm、深さ32cmの楕円形小穴を有する。

第24号土坑 B-6・7区に位置し、上位および下位に隣接する第25および第23号土坑との距離は、それぞれ約4.3および5.0mである。平面形は隅丸方形、上面規模1.30×0.93m、深さ146cmを測り、坑底に径16×18cm、深さ26cmの円形小穴を有する。

第25号土坑 B-7区に位置し、上部には攪乱が重複するが直接的な切り合いはない。下位に隣接する第24号土坑との距離は約4.3m、平面形は隅丸方形、上面規模1.29×1.25m、深さ98cmを測り、坑底に径20cm、深さ27cmの円形小穴を有する。

第10号土坑

丘陵斜面、C-4およびC-5区にまたがって位置する。平面形は不整形を呈し、上面規模は3.14×2.56m、深さ192cmを測り、坑底には小穴が4基(径22(P3)~59(P1)、深さ11(P1)、16(P2)、18(P3)、27(P4)cm)穿たれている。西側壁の傾斜は比較的緩やかで、半円状の平坦面(127×62cm、坑底との比高33cm)が坑底を取りまくように巡っている。埋土はやや複雑であるが、上部1~6層(第186図土層断面A-B、以下同様)のうち、1・2層は11世紀以降に堆積したと推定される流土(CP374~379出土)、3~6層はそれ以前の流土で本土坑を被覆する。7~23層が本土坑の埋土であるが、総じて地山ブロック(8層のような巨塊もある)を多量に含み、全体的には西側から東側へ傾斜した堆積をみせる。確証があるわけではないが、初めに小穴P4を中心とする落し穴(上面径2m前後?)が掘削され、のち土坑西側壁から一部東側上部壁までを破壊するかたちで再掘削がおこなわれ、さらに同じく西側から埋め戻されたものと考えておきたい。遺物の出土は極少量で、土器2点(CP166・167)を実測した。CP166は胴部外面に撚糸文を施すもので、天王山系土器(弥生時代中期?)の可能性が考えられる。埋め戻しにかかる最終埋土である7層からの出土であり、同期の上限を示すものといえるが、再掘削と埋め戻しが複数回おこなわれた可能性もあり、ただちに坑底にまでおよぶ下部埋め戻し土の堆積時期と関連づけるわけにはいかない。CP167は胴部外面に貝殻腹縁による刺突を施すもので、縄文時代前期頃の所産と考えられるが、小片であり本土坑との関連については判然としない。

第16・17・19・20・22号土坑

第2号掘立柱式建物が所在する丘陵斜面中腹(C-D5区)、東西約12m、南北約10mの範囲に位置する。所属時期を特定し得ないが、土坑内あるいは周辺で火が使用されたと推定される点で共通しており、その配置から第16・17号土坑(中腹南東側、C-D-5

第3節 B地区の遺構と遺物

区)、第19・20号土坑(同北側、D-5区)、第22号土坑(同南西側、C-5区)の3群に分けられる。炭化物の含み方には多様性があるが、各群に1基壁の焼けた土坑(第17・20・22号土坑)が存在し、うち2群には隣接してあるいは至近距離に炭粒を多量に含んだ壁の焼けていない土坑(第16・19号土坑)が付属する。単独で所在する第22号土坑も、それ自体南東側上部約二分の一を流失している可能性を考えると、同様な遺構が(南東側に)付属していた可能性は残る。各土坑は切り合い関係のうえでは検出された他の遺構総てに後出しており、特に第19・20号土坑は弥生時代終末に属する第20号竪穴を切っている。周辺で得られた遺物で同期に後出するものの大半は11世紀代に属しており、本土坑群も当該時期である蓋然性が高いと考えている。その性格については別に検討が必要であるが、ほぼ同時期と考えられる第2号掘立柱建物との関連性が重要視される。

第16号土坑 C-5区に位置し、北東側に第17号土坑が隣接するが、時期を特定できる遺構との切り合いはない。平面形は隅丸方形、上面規模1.51×1.28m、深さ29cmを測り、坑底には径6~14、深さ7~15cmの小穴3基が認められるが、東側で検出したP1は第37号竪穴の支柱穴と考えられる。埋土は(暗)茶褐色土系、下部は炭粒を多量に包含するが壁は焼けていない。遺物の出土は少量で、弥生土器3点(CP269~271、中期)を実測したが、本土坑の時期を表すものとは考えにくい。

第17号土坑 C-5およびD-5区にまたがって位置する。南西側に第16号土坑が隣接し、北側では重複する第18号土坑(弥生時代中期?)を切っている。検出面はほぼ表土直下、平面形は楕円形、上面規模2.29×1.33m、深さ47cmを測り、西側壁には径10cm前後の浅い小穴3基が認められる。埋土は(暗)茶褐色土系、炭化物の含みは極少量である。壁の掘削を不用意におこなったため範囲を特定できなかったが、南西壁上部(土層断面E-Fライン)では壁が焼土化しているのを確認しており、西側壁上部の一定範囲は焼土化していた可能性が高い。遺物の出土は極少量で、弥生土器2点(CP272・273、中期?)を実測したが、本土坑の時期を表すものとは考えにくい。

第19号土坑 D-5区に位置し、第20号竪穴(の埋土)を切っている。北側に65cm離れて第20号土坑が所在する。平面形は略円形、上面規模1.26×1.04m、深さ23cmを測り、坑底に径5~26、深さ5~24cmの小穴11基が認められる。埋土は上部が黄褐色・灰褐色土、下部に褐色土ブロックを含んだ炭粒が充満するが壁は焼けていない。出土遺物はない。

第20号土坑 D-5区に位置し、第20号竪穴を切っている。南側に65cm離れて第19号土坑が所在する。平面形は方形、上面規模1.52×1.11m、深さ38cmを測り、北側壁の上部が約160cmにわたって焼けている。埋土は上部が褐色、黄褐色および灰褐色土、下部は炭粒を含んだ灰褐色土、褐色土ブロックを含んだ炭粒である。出土遺物はない。

第22号土坑 C-5区に位置し、南側では重複する第21号土坑を切っている。北側約1.5mに第2号掘立柱式建物の柱穴(P1)が所在する。中央から南東側にかけてプランがやや不整形であるが、すでに上部が流失している可能性が高く、本来の平面形は隅丸方形と

推定される。残存上面規模は2.68×1.50m、深さ122cmを測るが、坑底は全体的に南東(谷)側へ傾斜しており、南東部は円形(残存径0.86~1.0m)に二段掘り(上段との比高27cm)されている。上段と下段との境界部北東および南西側両壁が、それぞれ22および58cm以上にわたって焼けている。埋土は茶褐色土および暗茶褐色土、出土遺物はない。

第18号土坑

丘陵斜面中腹(D-5区)に位置する。第20・21号竪穴、第17号土坑に切られており、特に南側のプランは不明瞭である。平面形は土坑が3基連続するような不整形を呈し、上面規模3.40(残存径)×1.28m、深さ54cm(残存値)を測る。埋土は南側では灰褐色土であるが、北側では地山との識別が困難であった。遺物の出土は極少量で、実測し得る土器はないが、おそらくは石鏃用と推定される素材剥片12点(CS61~72、黒色頁岩(7)、輝石安山岩(1)、硬質白色凝灰岩(3)、凝灰質細粒砂岩(1))を得ている。切り合いでは弥生時代終末以前となるが、石鏃製作に関わるとすれば同中期の可能性が高い。概ね同期と考えられる第37号竪穴と重複することになるが、先後関係(同時期の可能性もある)は不明である。

第7・8号土坑

谷部3区に隣接して(距離は約7.5m)所在する。伐根作業により損壊しているため、正確な規模は不明。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

第7号土坑 谷部3区に位置する。上部から東側壁にかけては伐根作業により欠失している。平面形は略円形、上面規模は1.18×1.04m、深さは84cmを測る。

第8号土坑 谷部3区に位置する。上部から東側坑底にかけては伐根作業により欠失している。平面形は不整形円形、上面規模は1.02×0.90m、深さは110cmを測る。

3 竪穴式建物(第187~189・193・195・196図)

第20号竪穴式建物

丘陵斜面中腹全域(C・D-5・6区)に位置する。第19・20(・16・17)号土坑と小穴10数基が(おそらくは第2号掘立柱式建物も)埋土上部から切り込んでおり、逆に床面で本竪穴拡張前の第21号竪穴や第18号土坑・第37号竪穴を検出した。調査前も小さな作業小屋のある平坦面であったが、平坦面そのものが本遺構にかかるもので、第2号掘立柱式建物や件の作業小屋もそれを利用して構築されたものであった。本遺跡群最大の竪穴である。

平面形は胴の張る隅丸等脚台形を呈し、長径約11.3、短径約9.4m、深さは北西側壁で58cmを測り、南東側は一部流失している。支柱穴はP5・P6(径62~98cm、穴底標高69.06~69.07、距離約5.0m)・P8・P9(径18~20cm、同標高68.95~69.26、距離約5.5m)の4本を想定したが、P5-P9(距離約5.5m)およびP6-P8(距離約5.6m)間にはやや外側に膨らんだ位置にそれぞれP10・P7(径28~33cm、同標高69.675・69.42、支柱からの距離は2.8~3.2m)があり、支柱と考えることもできる。中央で炉(径40~44、深さ15cm、暗茶褐色埋土中に炭粒を多量に含む)を検出したほか、壁際に周溝(幅30~50、深さ10cm前後、

第3節 B地区の遺構と遺物

溝底に10数基の小穴をともなう)が巡る。

埋土は(暗)褐色(1・2・4層)および(淡)黄褐色(3・5～8層)土系であるが、2層から須恵器甕胴部片(CP390a)が出土しており、上部の1・2層(6層も?)は11世紀頃の整地にかかるものである可能性が高い。また7層と一部5層は拡張前の第21号竪穴の埋土、中央付近下部に堆積する地山質の堅く締まった8層は本遺構構築時の整地土と考えられ、本遺構の埋土は3・4層および一部5層といえる。

遺物の出土は少量で、土器15点(壺・甕・鉢・蓋、CP214～222・225～230)、石器1点(平基有茎式打製石鏃、CS60)を実測した。CP215(P5)・219(P6、一部)・227(P12)が主柱穴・小穴から、CP217が西側床面から出土したほかは埋土中から得られたもので、CP230は同一個体が第1号段状遺構からも出土している。土器は概ね弥生時代終末(後半?)に属し、良好な出土状況とはいえないが本遺構の所属時期を表しているものと考えられる。

なおCP231は、1986年11月の試掘調査時に4トレンチから出土したもので、本遺構西側埋土中と考えられるため、参考資料として本図に併せて掲載した。他に本遺構との関係は不明だが、埋土から輝石安山岩あるいは黒色頁岩製の剥片約3.4gを得ている。

第21号竪穴式建物

丘陵斜面中腹ほぼ全域(C・D-5・6区)に位置する。本遺構拡張後の第20号竪穴床面で検出したもので、第18号土坑・第37号竪穴を切っている。平面形は胴の張る隅丸等脚台形を呈し、長径約9.9、短径約7.8m、深さは北西側壁で最大58cm、南側の壁は第20号竪穴の構築により失われ、一部床面も流失している。

主柱穴はP1～P4(径26～52cm、穴底標高はそれぞれ69.540、445、105、515m、距離はP1-P2約4.1、P2-P3約3.5、P3-P4約5.9、P4-P1約3.7m)の4本を想定した。P3-P4間がやや広く支柱が存在した可能性もあるが、特定するにいたらなかった。中央で炉(径32～51cm、深さ30cm以上)、壁際で周溝(幅20～30、深さ10cm前後、溝底に数基の小穴をともなう)を検出した。本遺構にともなう遺物の出土は極少量で、土器1点(CP223、破片は第2号掘立柱式建物の柱穴(P19)からも出土)を実測したにとどまるが、二辺を共有する第20号竪穴への建て替え拡張が連続的になされたものと推定し、本遺構の所属時期も弥生時代終末のうちに求めておきたい。

第22号竪穴式建物

谷部斜面(A・B-6・7区)に位置する。南東側はすでに床面が流失しており、南側は1986年の伐根作業の影響で削平を受け、南西側は1987年6月の暫定法切りによって失われている。貼り床(14層)の下で拡張前の第23号竪穴を検出したほか、山側に附属する段状施設の大半は第23号竪穴にともない、一部は本竪穴に後出する可能性もある。

平面形は直径約7.0mの円形と推定され、深さは北西側壁で最大74cmを測る。主柱穴はP1～P4(径22～53cm、穴底標高72.285～580、距離は3.35～3.55m)の4本、中央で炉(径60cm、深さ50cm以上)を検出したほか、北西側壁際に周溝(下幅6～18、深さ約10cm)が残

存する。上記の段状施設は竪穴壁の山側(上位)に附属し、西側では上位(幅約90cmの溝状)、下位(幅25~130(～)cmの平坦面)の二段に分かれており、北西側では不整楕円形の土坑(1、径2.3×2.6m)のなかに同形の土坑(2、径1.9×2.0m)が重複するような形態を呈し、北側では幅2.5~3.5mの間に三段の異傾斜面をもちながら、中位(幅60~110cm)および下位(幅30~70cm)に三日月形の平坦面が形成されている。

埋土は全体を(暗)黄褐色土(1・2層)が被覆し、北西側土坑には(暗・茶)褐色土(3~6層)、竪穴には茶褐色土(5・7層)、周溝には黄褐色土~暗褐色土(8~13層)が堆積する。14層(炭化物を含んだ褐色粘質土)は貼り床である。段状施設との直接的な切り合いは西側下位平坦面でしか確認できなかったが、それによれば同平坦面埋土(16層)を竪穴周溝埋土(9層)が切っており、西側段状施設全体の形状が第23号竪穴の周溝に概ね対称であることから、同施設は建て替え前の第23号竪穴にともなう可能性が高い。同様に北側上位斜面と中位平坦面も、切り合いは不明だが第23号竪穴にともなうものと考えたい。北西側土坑は、土層観察では両側の段状施設に先行することではなく、本竪穴との切り合いは不明だがプラン上は重複関係にあり、第23号竪穴から本竪穴への建て替え拡張が連続的なものであるとすれば、先行竪穴にともなう可能性がわずかに残るが、逆に本竪穴に後出する可能性もある。したがって、本竪穴にともなう段状施設は竪穴西側壁から連続していく北側下位平坦面のみといえる。同平坦面は少なくとも大部分は竪穴屋根の内側にあたると思われる、壁の構造によっては竪穴内部である可能性も残るもので、その機能はチマキ状炭化米塊の出土状況(後述)を考えるうえでも別に検討が必要である。

遺物の出土は少量で、北側下位平坦面を含め土器・土製品17点(CP238~254)、石器2点(CS58・59)、炭化米塊1点(CR2)、鉄製品1点(CM4)の計21点を実測したほか、輝石安山岩あるいは黒色頁岩製の剥片・石屑を埋土から約7.2g、炉(第23号竪穴炉出土品混入の可能性あり)から約13.7g、北側下位平坦面から約8.3g得ている。CP238~241は検出面前後、CP242~247は埋土中から得られたもので、弥生時代中期前半以前(CP240)、同中期後半(CP238・246他)、同後期後半(CP241・244・245他)など時期の異なるものを含んでおり、本遺構の所属時期を直接表すものとはいえない。CP248は炉上部で検出したもので、壺・甕の判断に苦しむがいずれにせよ弥生時代中期後半に属し、本遺構の所属時期の根拠となったものである。炉からは他に砥石(CS59)・土製紡錘車(CP251、取り上げの過程で第23号竪穴炉出土品が混入した可能性がある)が出土した。小片であるが主柱穴(P1)からも同期の土器片を得ている。CP250は西側床面で器種不明の鉄片(CM4)とともに出土したもので、胴部中位付近まで遺存していたが取り上げに時間がかかり元に復することができなかった。他に南側埋土中より器種不明の石器(CP58)が、北側下位平坦面から土器3点(CP252~254)が出土し、同面の南西端竪穴壁際(床面との比高約10cm、同平坦面の比高は約20cm)からチマキ状炭化米塊(CR2)を得ている。

同炭化米塊は、平面形が略二等辺三角形(底辺約5.0cm、他の二辺が約8.5、8.0cm)を呈

第3節 B地区の遺構と遺物

し、底辺中央は内側へ約0.7cm凹む。裏面が剝離・脱落したため不正確であるが、厚さは約3.5cmと推定される。表面には不整形な圧痕が認められるが、成因は特定できない。米粒に粃(殻)の付着はみられず、比較的堅く凝集したありかたからみても調理・整形されたものと考えられる。検出時炭化米塊は完形品で、周辺に米粒の散乱はなく一個体のみ出土であった。前述のとおり出土位置は、竪穴の内部か外部か北側下位段状施設をめぐって評価の分かれるところであり、また原位置を保っているという保証もない。かりに二次的な移動を被っているとすれば、竪穴中央部からではなく同平坦面からの転落あるいは上部(軒?)からの落下という可能性が高いと考えられる。

佐藤敏也氏の米粒の解析結果(第7章第4節)によれば、本炭化米塊は、(1)短粒・極小粒の日本型を呈する(4)水稲品種の(5)晩稲の糯米で、(1)(おそらく)蒸されたのち(2)焼かれたものとされている。蒸す・焼くといった調理方法の具体的な検討はできていないが、底辺がやや凹んだ縦長の二等辺三角形という形状と糯米を蒸すという調理方法の概略から、「握り飯」より「粽」に近いものといえる。機能的には第一に保存食、第二に(本竪穴外への?)携行食が考えられるが、いずれにせよなぜ一個体なのかという点で、用途も「食用」であったかどうか検討の余地が残る。そこで本炭化米塊の用途をあえて「非食用」とみた場合、その呪的な形状〔佐々木1988〕と相俟って糯米が発揮する霊力〔大村1993〕から、まずは霊的なものへの供物あるいは厄除けといった用途が想像されるが、民俗学的には前者は神饌、後者は祇園粽〔室井緯1973〕がその代表といえる。本例にそのままあてはめるわけではないが、炭化米塊をただ単体として機能的にのみみるのではなく、北側下位平坦面の機能(転落?)や上屋を含めた周辺構造(落下?)等、出土状況のなかから具体的な用途を検討していく必要があるようである。

第23号竪穴式建物

谷部斜面(A・B-6・7区)に位置する。第22号竪穴の貼り床(14層)の下で検出した。床面の流失・削平状況は第22号竪穴と同様である。前述のとおり、山側に西側段状施設、北側上位斜面・同中位平坦面を(および可能性はわずかだが北西側土坑も)ともなっていたと考えられる。同施設の機能は不明だが、一部は柵かもしれない。

平面形は直径約6.0mの円形、支柱穴は4本と推定されるが、検出し得たものは3基(P5~P7、径22~42cm、穴底標高72.505~670、距離は2.70~2.80m)で、他に炉(中央、径70cm、深さ60cm以上)、周溝の一部(北西側、幅約20、深さ約8cm)を検出した。本遺構にともなう遺物の出土は極少量で実測しうるものは得られなかったが、西側段状施設から土器2点(CP259・260)、北西側土坑(別に輝石安山岩あるいは黒色頁岩製の剝片・石屑約6.4gを得ている)から同3点(CP256~258、CP257は天王山系土器)が出土した。前者には中期前半のもの(CP259)も含まれ、本竪穴の所属時期を推定するには不十分であるが、中央をほぼ固定したかたちでなされた第22号竪穴への建て替え拡張が連続的なものと推定し、本遺構の所属時期も弥生時代中期後半のうちに求めておきたい。

第37号竪穴式建物

丘陵斜面中腹(C・D-5区)に位置する。第20・21号竪穴床面で検出したもので、主柱穴(P14・P15)が第21号竪穴(P3)・第16号土坑に切られている。壁が完全に失われているため平面形は不明だが、円形でそれほど大きな削平を被っていない(北東側で第20号竪穴の壁を越えない)とすれば径7m程度になるろうか。主柱穴はP13~P16(径38~106cm、穴底標高はそれぞれ68.930、755、630、69.000m、距離はP13-P14約3.05、P14-P15約3.50、P15-P16約2.90、P16-P13約3.50m)の4本を想定し、中央で炬(上面標高69.515m、径21・深さ24cm以上)を検出した。

本遺構にともなう遺物は炬から出土した小形土器1点(CP224)のみである。弥生時代中期に属するものとみられ、本遺構の所属時期を表している可能性が高い。その場合、北東側ではほぼ同期の可能性のある第18号土坑と重複することになるが、先後関係(同時期の可能性もある)は不明である。

4 掘立柱式建物(第187図)

第2号掘立柱式建物

丘陵斜面中腹(C-5・6区)に位置する。第20号竪穴の埋土を切り込むかたちで構築されたと推定されるが、大部分は同竪穴床面でしか検出できなかった。規模は2間×2間を想定した。北西側柱列(P17~P19、径は25~35cm、穴底標高はそれぞれ69.520、69.490、69.555m、距離はP17-P18・P18-P19ともに約2.05m、柱列方位はN30°E)は2間以上の規模はもたないが、中央から南東側にかけては検出面が低かったためか柱穴2基(P20・P21、径は22~35cm、穴底標高はそれぞれ69.690、69.325m、距離はP19-P20約2.05、P18-P21約4.15m)を確認したのみである。検出状況を考えると、同様な建物が他にも存在した可能性は否定できない。

実測はし得なかったものの、P17からは11世紀頃の無台椀(?)と両面黒色有台椀の底部小片が、P18からは同じく土師器椀あるいは皿の口縁部小片が出土しており、本遺構の所属時期を表すものと考えられる。前述のとおり、本遺構を取り巻く第16・17・19・20・22号土坑および第20号竪穴の埋土を切り込む10数基の小穴に関連し、土坑群の整地土(あるいは未確認の小穴)出土品(CP390・391、須恵器甕)や、C-4区を中心とする遺構群南東側下位斜面出土土師器椀・皿類も、主として本遺構を中心とした上記遺構群が所在する丘陵斜面中腹(C・D-5・6区)で使用されたものである可能性が高い。

5 段状遺構(第189・190・193・194・197図)

第1・12号段状遺構

丘陵中腹上位斜面、D-6区からE-5・6区にまたがって所在する。傾斜に直交して東西方向に延びる溝状遺構と約90基の小穴により構成される。当初は第1号溝としていた

第3節 B地区の遺構と遺物

ものである。溝は延長14.4m、幅20～88cm、深さ15(南東側)～40(南西側)cmを測り、東側では南に屈曲し、南西側では幅を拡げつつ20～30cmの距離をおき、延長約6mにわたって溝内に2条の溝(幅はそれぞれ20、30cm前後)が並走する。小穴は径10～65cm、深さ10～50cmを測り、切り合い関係は不明だが約40基が溝と重複する。遺物の出土は多くはないが、土器6点(壺・甕、CP232～237)を実測したほか、第20号竪穴出土土器(蓋、CP230)の同一個体を得ている。総て溝の南西側(D-6区)から出土したもので、小穴(P1～P6)出土品は実測し得なかった。CP232は溝底で一括出土(P1)したもので、(破片)量はほぼ完形とみられるが、取り上げに時間がかかり完全に復することができなかった。底部付近の小片が第20号竪穴からも出土している。また不用意にも離れた位置に割り付けてしまったが、CP233と235は同一個体とみられる。時期的には弥生時代中期後半(CP232～235)と同終末期(後半、CP236・237)に属するものがある。

本遺構(群)は、基本的には約10m離れて下位丘陵中腹(比高約4m)に所在する第20・21号竪穴式建物に関連する柵と推定されるが、遺物の出土状況を再考した結果、南西側については中期後半の段状遺構が重複していた可能性が高いと判断し、ここではそれを第12号段状遺構と呼称する。性格的にはP7-P8(径22～44cm、深さ20、14cm、距離約1.4m)から南東へ延びる掘立柱式建物(1間×1間?)およびその附帯施設が想定される。

第2号段状遺構

丘陵斜面(D-3区)に位置し、傾斜に直交して東西に並走する上下2条の溝状遺構と約20基の小穴により構成される。当初は上位を第2号溝、下位を第25号竪穴と呼称していた。ほぼ直線的な上位の溝は断面逆台形を呈し、幅約0.4m、長さ約5.1m、深さ20cm前後を測り、切り合いは不明だが径30～40cm、深さ25～40cmの小穴4基が重複する。0.9m離れて南西側で南にやや屈曲する下位の溝も断面逆台形を呈し、幅0.3m前後、長さ約2.5m、深さ25cm前後を測り、同様に径15～20cm、深さ30～40cmの小穴3基が重複する。性格的には下位の溝からさらに1.4m程離れたP1-P2(径16～28cm、深さ47、39cm、距離約2.0m)から南東へ延びる掘立柱式建物(1間×1間?)とその附帯施設を想定しておきたい。遺物の出土は極少量で、上位の溝から出土した土器1点(甕、CP268、弥生時代中期後半)を実測した。確定はできないが、本遺構の時期を表している可能性がある。

第11号段状遺構

丘陵斜面(C-8区)に位置し、当初は単に段状遺構としていたものである。南東(谷)側が一部流出しているほか伐根により大きな攪乱を被っているが、平面隅丸方形を呈し、長径5.4、短径2.4(残存径)m、検出面(上位)からの深さは約60cmを測る。小穴が数基重複する北西(山)側壁面の傾斜は比較的緩やかで、深さ25cm前後の小穴5基が検出された床面との境界には幅15cm、深さ5cm前後の溝が巡る。竪穴式建物としては床面の流出が大きいいため、確証はないが掘立柱式建物の造成面の可能性を考えておきたい。遺物の出土は比較的多く、土器7点(甕5・鉢2、CP261～267)を実測した。いずれも弥生時代終末期

(後半)に属するもので、ほぼ完形品のCP261が西側隅から一括出土(P1)しており、本遺構の時期を直接表しているものと考えられる。

6 小穴群(第190・191図)

第1号小穴群

丘陵斜面(C-4・5・D-4区)に所在し、東西約11.8m、南北約5.3mの範囲(南北方向の比高約2.8m)に展開する小穴群。西および南側に第10号土坑および第14号土坑が隣接する。木の根による攪乱が比較的軟質な地山にまで及び、プランを正確に把握できなかったものもあるが、約50基(径15~70cm、深さ15~60cm)よりなる。うち6基(P1~P6、最大深度はそれぞれ21、44、22、28、48、54cm)から土器小片が出土した。実測し得たものは縄文土器4点(CP168~171、P1~P4出土)で、CP168・170はそれぞれC-4区出土CP180・174と同一個体の可能性があり、後者(CP174)には結節浮線文が施される。周辺出土品(C・D-4・5区、次項後述)と同じく縄文時代前期頃の所産と考えられ、本遺構の所属時期を表している可能性がある。南側約5mに(東西方向に)展開する第9・11・13号土坑に関連するものかとも考えたが、確証はなくその性格も判然としない。

7 遺構外出土遺物(第191~193・198~207図)

表土および流土他遺構外出土遺物では、土器172点(CP161~165・172~213・231・274~398)、土製品1点(CP397、管状土錘、谷部出土)、石器12点(CS73~84)、金属製品1点(CM5、寛永通宝、谷部出土)の計186点を実測した。土器には縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器があり、時期的には縄文時代から江戸時代におよぶ。

縄文土器では、1区2点(CP202・203)、3区8点(CP161・162・204~209)、B-4区3点(CP163~165)、C-4区14点(CP172~185)、C-5区2点(CP186・187)、C-6・C-7・D-4区各1点(CP188・189・190)、D-5区6点(CP191~196)、擁壁工事影響箇所5点(CP197~201)、地点不明の採集品4点(CP210~213)の計47点(同一個体及びその可能性のあるものを含む)を実測した。地点的なまとまりとしては、第1号小穴群周辺(C・D-4・5区)からと考えられるものが23点、第9・11・13号土坑の谷側下位周辺(B-4区・擁壁工事影響箇所・3区)からと考えられるものが16点となり、両者をあわせると全体の8割をこえる。ともに外面に縄文を施す深鉢が主体であるが、うち羽状縄文を施すものは前者が2点(CP184・192)、後者が3点(CP198・200・201)、結節浮線文を施すものは同1点(CP174)、同3点(CP161・162・197、161・197は同一個体?)で、他に前者には爪形文類似の列点文を施すもの(CP175)、後者には爪形文(CP208)・押圧縄文(CP199)を施すものなどがある。取り組みが浅いため細かな位置づけはできないが、概ね縄文時代前期の幅に収まるものと推定される。なお、他の地点不明あるいは単独出土8点(CP188・189・202・203・210~213)のうち、1区出土CP202・203(同一個体)は、他と

第3節 B地区の遺構と遺物

は出土地点が大きく異なり時期的にも縄文時代後期前葉(気屋式)に属するものと考えられる。

弥生土器では、CP231・274～313の41点を実測した。CP231は第20号竪穴にともなう可能性があるほか、CP291・299とCP300・303はそれぞれ同一個体とみられる。時期的には中期前半以前(CP306～310、谷部採集)、中期後半(CP276・282・283他、上位丘陵斜面出土)、後期後半(CP280他、上位丘陵斜面)、終末(CP285・286・291・293～296・300・303他)に属するものがある。他の地区に比較して終末期のものが多く、第20・21号竪穴・第1・11号段状遺構の存在とあわせて、同期に活発な活動があったことを窺わせている。

須恵器では、CP314～323・383・390・391の13点を実測した。前者は6世紀後半～7世紀後半に属する杯類で、総て谷部で採集された。ほぼ完形のCP314と315(7世紀前半)は口縁部を合わせるかたちで出土したようである。CP383(瓶)を除く後者は、第19・20号土坑周辺の整地土(あるいは未確認の小穴)から出土したもので、CP390aの外面(と一部内面)は二次的使用によって平滑化しているうえ、外面には赤色顔料が付着しており特殊な用途を想定させる。後述の土師器碗・皿類の大半とともに、第2号掘立柱式建物(11世紀頃)を中心とする遺構群(周辺)で使用されたものであろう。

土師器では、CP324～382・384～389・392～396・398の計71点を実測した。C-4区(CP324～373、50点)およびC-5区(CP374～382・384・385、11点)の流土上部から出土したものが大半で、全体の8.5割以上を占めている。以下、両地区出土土器を中心に報告する。器類は碗・皿で、非黒色・内面黒色・両面黒色土器があり、無台・有台・柱状高台のものがある。皿では、口径8.0～10.0、底径4.7～6.0、器高1.4～2.0cmの非黒色無台皿①(CP337～339・340・342・343・377・382他)、口径9.5～10.3、底径4.6～5.0、器高3.2～4.2cmの非黒色柱状高台皿②(CP347～349他)、口径15.8cm(CP370他)と口径10.7、底径6.6、器高3.6cm(CP378他)の非黒色有台皿③・④の4種があり、碗では口径8.5～9.9、底径3.8～4.8、器高2.5～2.9cmの非黒色無台小碗①(CP331・333・335・336・376他)、口径12.7～13.6、底径5.8～6.6、器高3.3～4.2cmの非黒色無台碗②(CP324～326他)、口径17.2、底径7.5、器高7.0cm(CP350他)および口径14.7、底径6.4、器高4.3cm(CP380他)の非黒色有台碗③・④、口径16.0～18.4、底径6.0～7.9、器高5.7～6.6cmの内面黒色有台碗⑤(CP360～362他)、口径8.7、底径4.9、器高3.3cmの両面黒色有台碗⑥(CP385他)の6種があり、全形を窺えないが他に非黒色柱状高台碗(CP344)、非黒色有台小碗(CP365)、内面黒色有台小碗(CP369)なども想定される。無台の碗・皿を主として器面に油痕・炭化物の付着がみられる(CP326～328・333・339・340・350・374・381・389・392)ほか、両面黒色有台小碗(CP385)の外底面には赤色顔料が付着する。本地区出土土師器は、全体的にみれば相当の幅をもつ可能性があるが、C-4・5区出土品については、前述のとおり第2号掘立柱式建物を中心とする丘陵中腹の遺構群(第16・17・19・20・22号土坑他)との強い関連性が想定されるもので、概ね11世紀の幅のなかに収まるものと考えたい。これら一般集落とは様相を異にする遺構・遺物群が指し示す性格については、細かな時間的な位

置づけとともによくなしうるところではなく今後の課題としたい。

石器は小型磨製石斧(CS73)、削器(CS74)、敲石(5点、CS75~79)、石皿(CS80)、軽石製品(4点、CS81~84)5種よりなり、削器・石皿は縄文時代の、軽石製品は弥生時代の所産と考えられる。他に輝石安山岩あるいは黒色頁岩製の剝片257gを得ている。

8 小 結

本地区では、竪穴式建物5基、掘立柱式建物1基、段状遺構4基、土坑18基、小穴群1基を検出し、土器・土製品241点、石器・石製品27点、炭化米塊1点、金属製品2点の計271点を実測し報告した。

縄文時代あるいはその可能性のあるものでは、落し穴10基と小穴群1基、弥生時代中期後半では、竪穴式建物3基・段状遺構2基(掘立柱式建物造成面?)・土坑1基、同終末では竪穴式建物2基・段状遺構2基(柵・掘立柱式建物造成面?)、11世紀頃では掘立柱式建物1基、土坑5基がそれぞれあげられ、他に遺物では弥生時代中期前半(以前)、同後期後半、6世紀後半~7世紀後半、江戸時代のものが得られており、遺構・遺物ともに本遺跡のなかでは最も時期幅が広い。

そのなかにあって第22号竪穴式建物出土「チマキ状炭化米塊」(CR2)は、1987年11月の発見当初から「日本最古のおにぎり」として大きな話題を提供し続けてきたもので、調理・整形された米塊としては現在でも我が国最古級のものである。

参考文献

- 佐々木哲哉 1988 「鳥飼八幡宮の宮座と神饌」『福岡市立歴史資料館研究報告』第12集 福岡市立歴史資料館
 大村 和男 1993 『めし、むすび、もち、すしのルーツ—コメの食文化にさぐる「かたち」と「こころ」—』
 静岡市立登呂博物館
 室井 緯 1973 『ものと人間の文化史・竹』 法政大学出版局
 白石 真理 1993 「第99A号住居跡」『武田VI』 (財)勝田市文化・スポーツ振興公社

第3節 B地区の遺構と遺物

第4章第3節挿図断面図土層一覧

第185図

- 1 茶褐色土（やや明るい）
- 2 暗茶褐色土
- 3 茶褐色土
- 4 茶褐色土（やや暗い）
- 5 暗茶褐色土（茶褐色土・黒色土ブロックを含む）
- 6 茶褐色土（やや暗い）
（やや明るい茶褐色土ブロックを含む）
- 7 茶褐色土（やや暗い）
（茶褐色土・黒色土ブロックを含む）
- 8 茶褐色土（やや明るい）
（茶褐色土・黒色土ブロックを含む）

第186図

- 1 暗茶褐色土
- 2 暗茶褐色土（褐色土ブロックを含む）
- 3 茶褐色土
- 4 褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土（淡褐色地山土ブロック含）
- 7 褐色土（やや灰色ががる）
- 8 茶褐色地山土ブロック
- 9 褐色土（茶褐色地山土ブロック含）
- 10 橙褐色土（褐色土ブロック多量含）
- 11 橙褐色土（褐色土ブロック少量含）
- 12 橙褐色土
- 13 淡褐色土
- 14 淡褐色土（茶褐色地山土ブロック含）
- 15 淡褐色土（淡黄褐色小礫ブロック含）
- 16 淡黄褐色小礫ブロック
- 17 褐色土（淡黄褐色小礫多量含）
- 18 淡褐色土（淡黄褐色小礫ブロック多量含）
- 19 黄褐色土（淡褐色地山土ブロック含）
- 20 黄褐色土
- 21 暗褐色土（炭化物多量含）
- 22 淡茶褐色土
- 23 淡茶褐色土（やや黄色がかる）
- 24 暗茶褐色土
- 25 茶褐色土（炭粒極少量含）
- 26 暗茶褐色土（炭化物多量含）
- 27 暗茶褐色土（地山小礫含）
- 28 表土
- 29 暗茶褐色土
- 30 茶褐色土（褐色土ブロック含）
- 31 褐色土

- 32 灰褐色土（黄色地山礫含）
- 33 暗灰褐色土
- 34 灰褐色土
- 35 黄褐色土
- 36 炭粒（褐色土ブロック含）
- 37 灰褐色土（炭粒含）

第187図

- 1 暗褐色土
- 2 褐色土（炭粒含）
- 3 黄褐色土
- 4 褐色土
- 5 黄褐色土（やや明るい）
- 6 黄褐色土（黄色粘質土ブロック含）
- 7 黄褐色土（黄色地山土ブロック含）
- 8 淡黄褐色土（堅い、地山質）

第188図

- 1 黄褐色土（砂礫多量含）
- 2 暗黄褐色土
- 3 茶褐色土
- 4 茶褐色土（やや明るい）
- 5 茶褐色土（やや粘質）
- 6 褐色土
- 7 茶褐色土
- 8 茶褐色土（褐色土ブロック含）
- 9 茶褐色土（やや明るい）
- 10 暗褐色土
- 11 淡茶褐色土（褐色土ブロック含）
- 12 褐色土
- 13 黄褐色土（黄褐色粘土ブロック含）
- 14 褐色粘質土（炭化物含）
- 15 茶褐色土（黄色砂礫多量含）
- 16 茶褐色土（やや暗い）

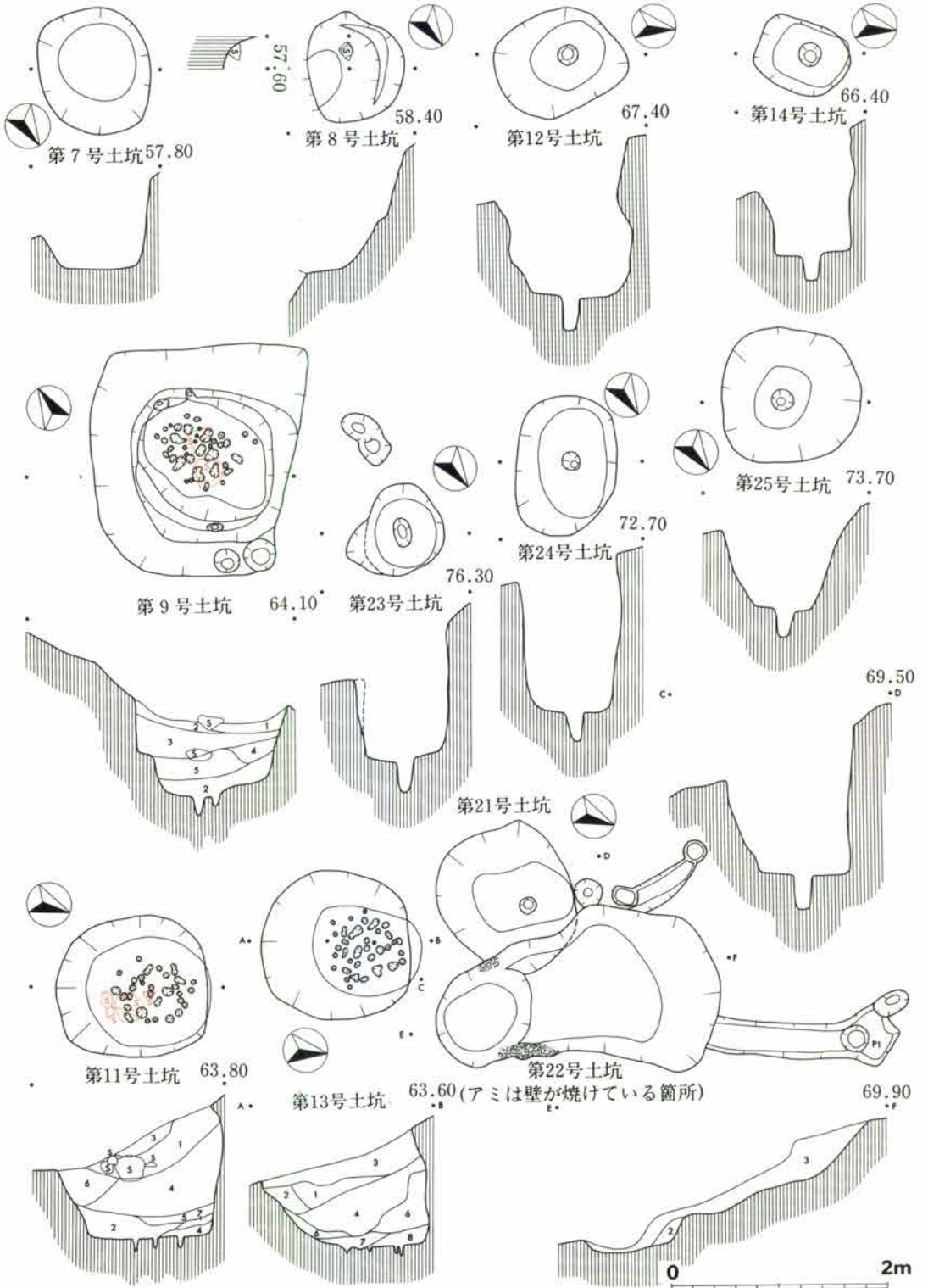
第189図

- 1 暗黄褐色土
- 2 暗黄褐色土（炭粒含）
- 3 暗黄褐色土（炭粒多量含、黄褐色土ブロック含）
- 4 暗黄褐色土（炭粒少量含、黄褐色土ブロック含）
- 5 暗黄褐色土（焼土ブロック多量含）
- 6 暗黄褐色土（炭化物含）
- 7 暗黄褐色土（炭化物多量含）
- 8 暗黄褐色土（礫含）

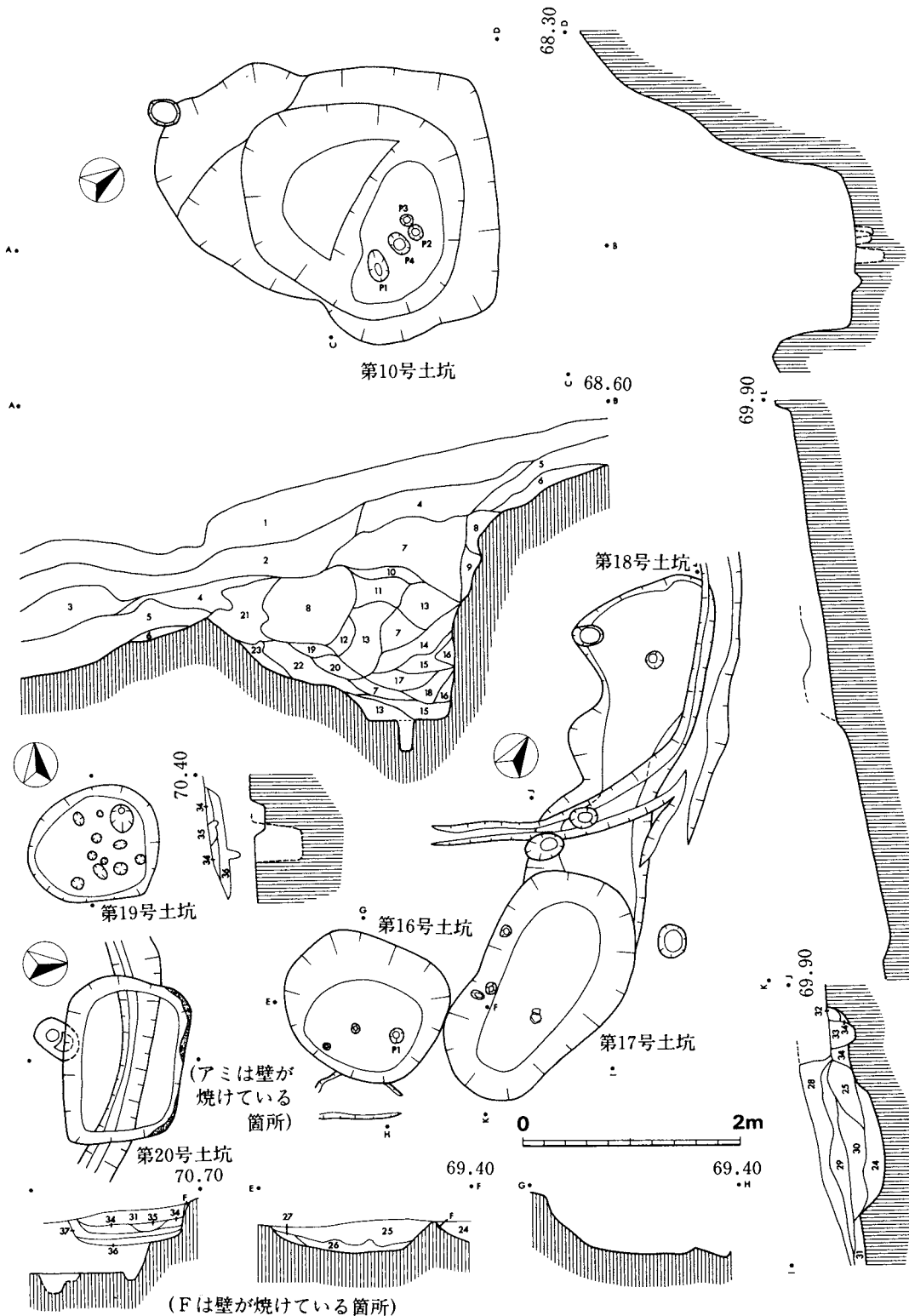
B地区遺構一覧

遺構名	位置	平面形態	長径m×短径m×深さcm	備考
第20号竪穴式建物	C・D-5・6区	等脚台形	11.3 × (9.4) × 58	弥生時代終末21→20
第21号竪穴式建物	C・D-5・6区	等脚台形	9.9 × 7.8 × (58)	弥生時代終末21→20
第22号竪穴式建物	A・B-6・7区	円形	(7.0) × (7.0) × 74	弥生時代中期後半23→22
第23号竪穴式建物	A・B-6・7区	円形	(6.0) × (6.0) × ?	弥生時代中期後半23→22
第37号竪穴式建物	C・D-5区	円形?	(7.0) × (7.0) × ?	弥生時代中期
第1号段状遺構	E5・DE6	J字形溝	延長14.4×幅0.2~0.88×深15~40	弥生時代終末
第12号段状遺構	pit 7	底74.245	0.22 × 0.30 × 20	弥生時代中期
	pit 8	底74.270	0.30 × 0.44 × 14	
第2号段状遺構	D-3区	平行溝2	上溝 延長5.1×幅0.4×深さ20 下溝 延長2.5×幅0.3×深さ25	弥生時代中期
第11号段状遺構	C-8区	隅丸方形	5.4 × (2.4) × 60	弥生時代終末
第2号掘立柱建物	C-5・6区	2間(4.05m)×2間?(4.15m)、11世紀頃		
第7号土坑	谷部3区	略円形	1.18 × 1.04 × 84	時期不明
第8号土坑	谷部3区	不整円形	1.02 × 0.90 × 110	時期不明
第9号土坑	B-4区	方形	2.12 × 1.92 × 124	縄文時代前期 坑底に小穴多数
第10号土坑	C-4・5区	不整形	3.14 × 2.56 × 192	縄文時代? 坑底に小穴4
第11号土坑	C-4区	隅丸方形	1.41 × 1.31 × 124	縄文時代前期? 坑底に小穴多数
第12号土坑	C-5区	隅丸方形	1.16 × 0.94 × 150	縄文時代?、坑底小穴1
第13号土坑	C-3区	隅丸方形	1.40 × 1.38 × 110	縄文時代前期? 坑底に小穴多数
第14号土坑	C-4区	隅丸方形	0.86 × 0.66 × 120	縄文時代?、坑底小穴1
第16号土坑	C-5区	隅丸方形	1.51 × 1.28 × 29	11世紀頃?
第17号土坑	C・D-5区	楕円形	2.29 × 1.33 × 47	11世紀頃?
第18号土坑	D-5区	不整形	(3.40) × 1.28 × (54)	弥生時代中期?
第19号土坑	D-5区	略円形	1.26 × 1.04 × 23	11世紀頃?
第20号土坑	D-5区	方形	1.52 × 1.11 × 38	11世紀頃?
第21号土坑	B・C-5区	隅丸方形	1.38 × 1.26 × 136	縄文時代?、坑底小穴1
第22号土坑	C-5区	隅丸方形	2.68 × 1.50 × 122	11世紀頃?
第23号土坑	B-5区	略円形	0.86 × 0.75 × 128	縄文時代?、坑底小穴1
第24号土坑	B-6・7区	隅丸方形	1.30 × 0.93 × 146	縄文時代?、坑底小穴1
第25号土坑	B-7区	略円形	1.29 × 1.25 × 98	縄文時代?、坑底小穴1
第1号小穴群	C-4・5 ・D-4区	約50基より構成される。範囲は東西約11.8m、南北約5.3m。		縄文時代前期?

第3節 B地区の遺構と遺物

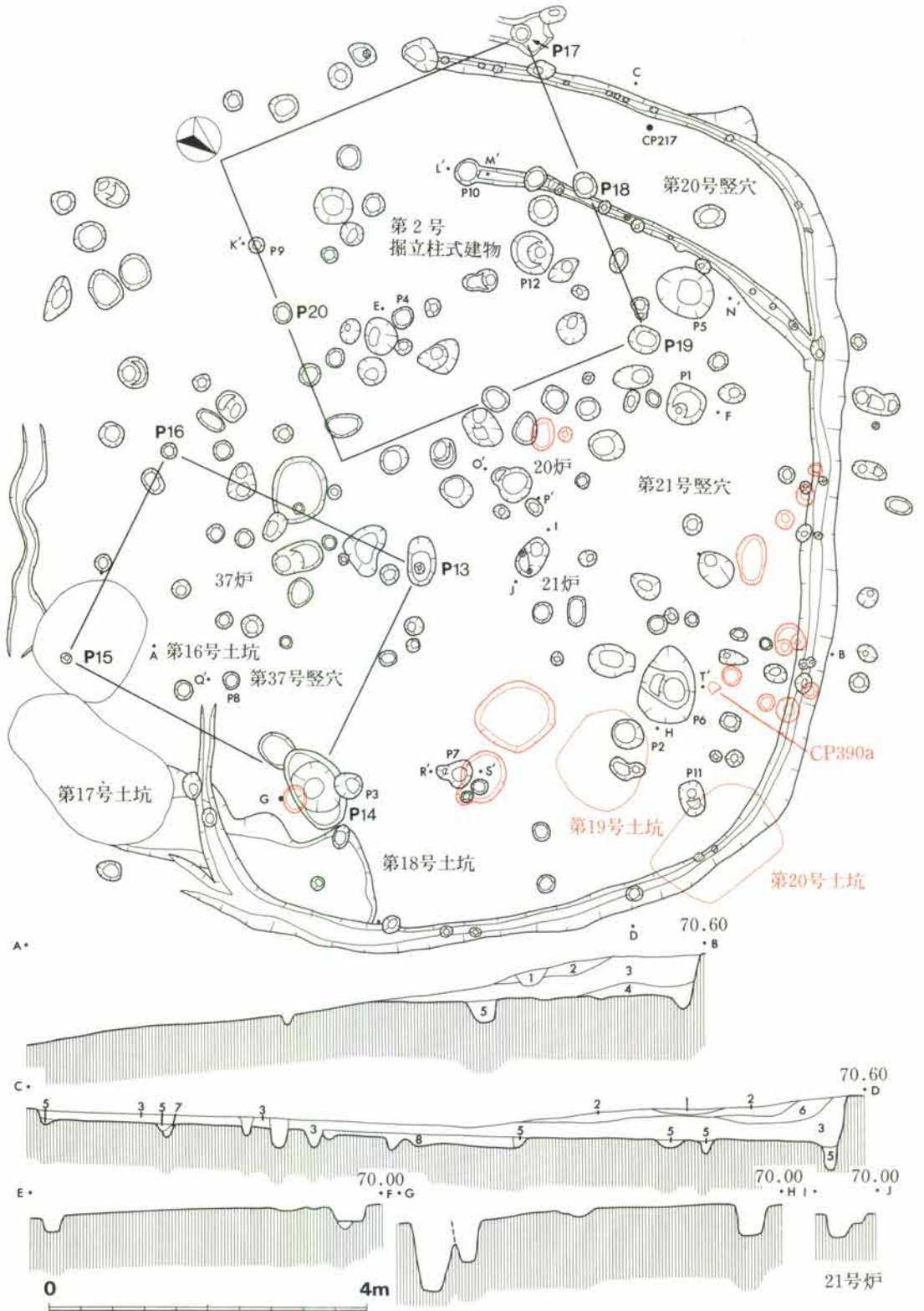


第185図 土 坑 (S=1/60)

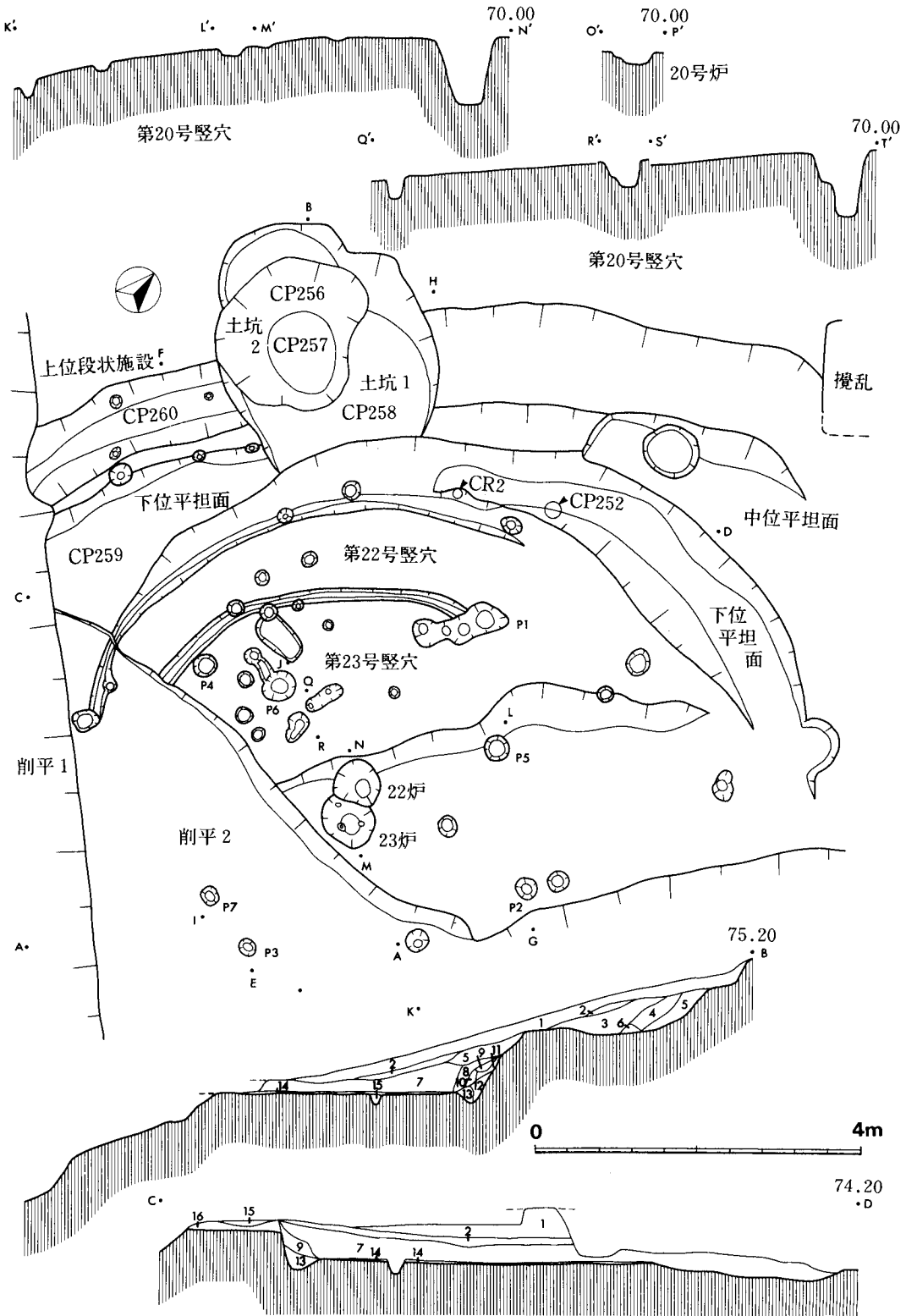


第186図 土 坑 (S=1/60)

第3節 B地区の遺構と遺物

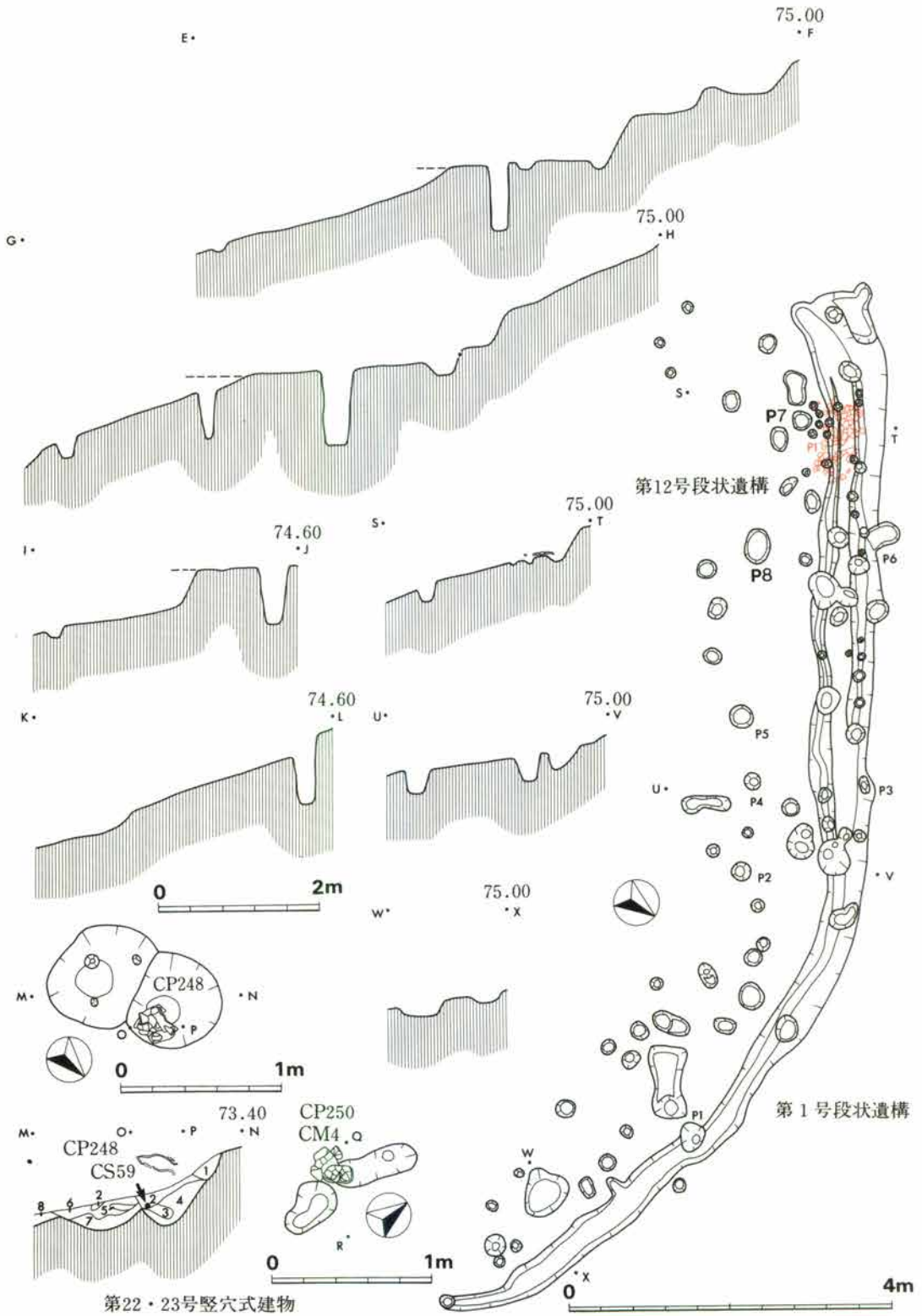


第187図 第20・21・37号竖穴式建物他 (S=1/80)



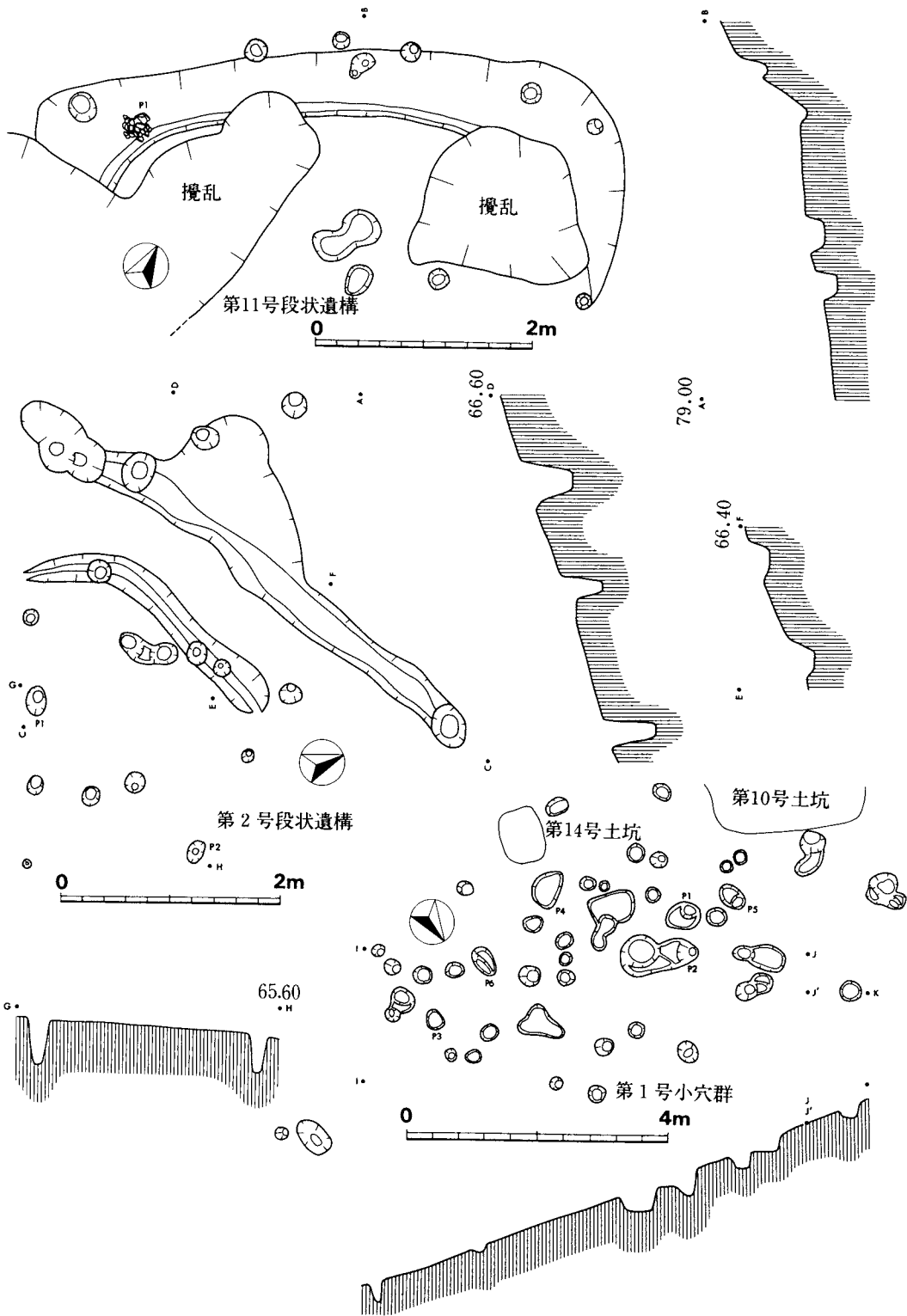
第188図 第20・22・23号竖穴式建物 (S=1/80)

第3節 B地区の遺構と遺物



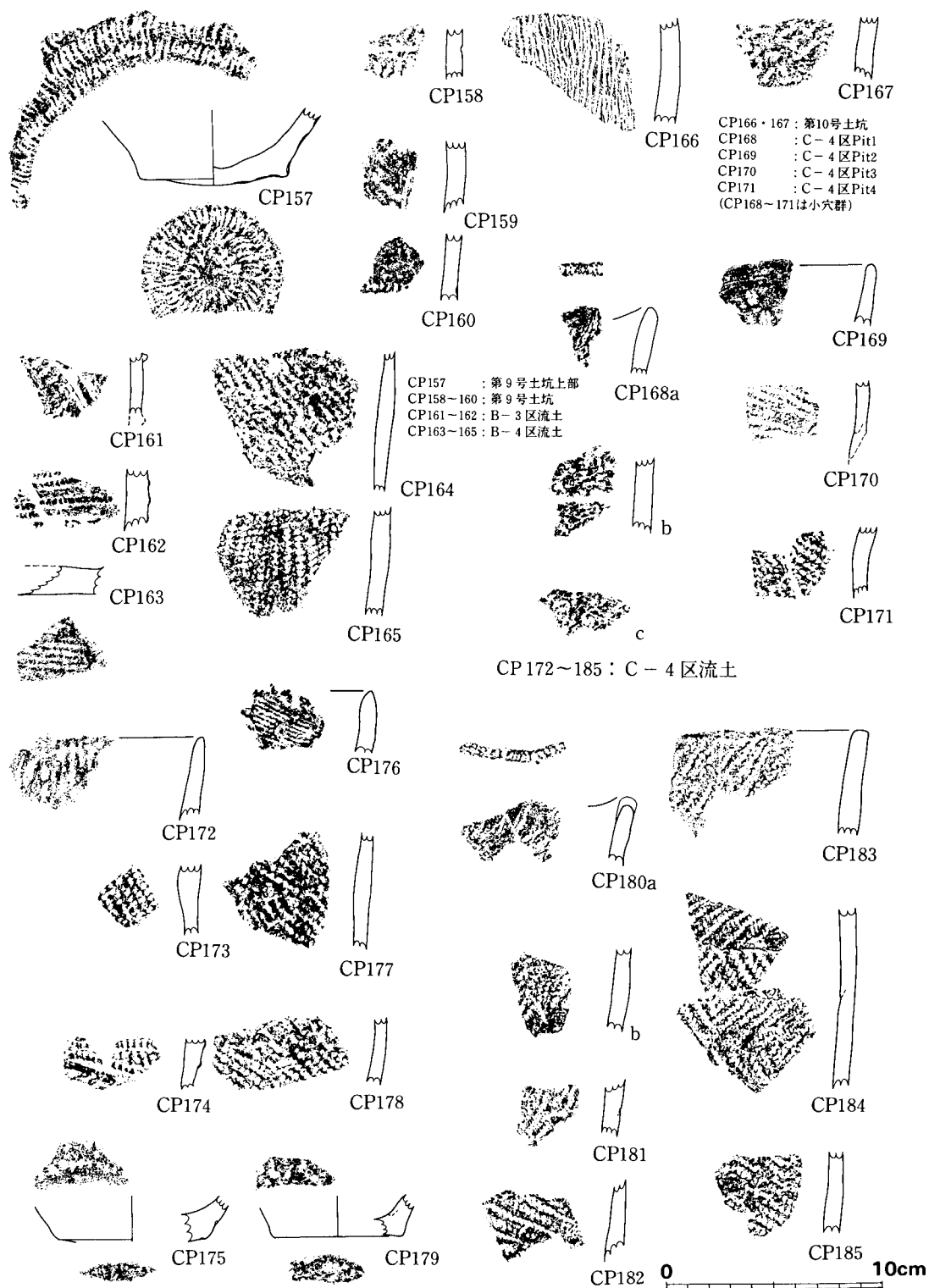
第22・23号竖穴式建物

第189図 竖穴式建物・段状遺構(S=1/40・=1/8)

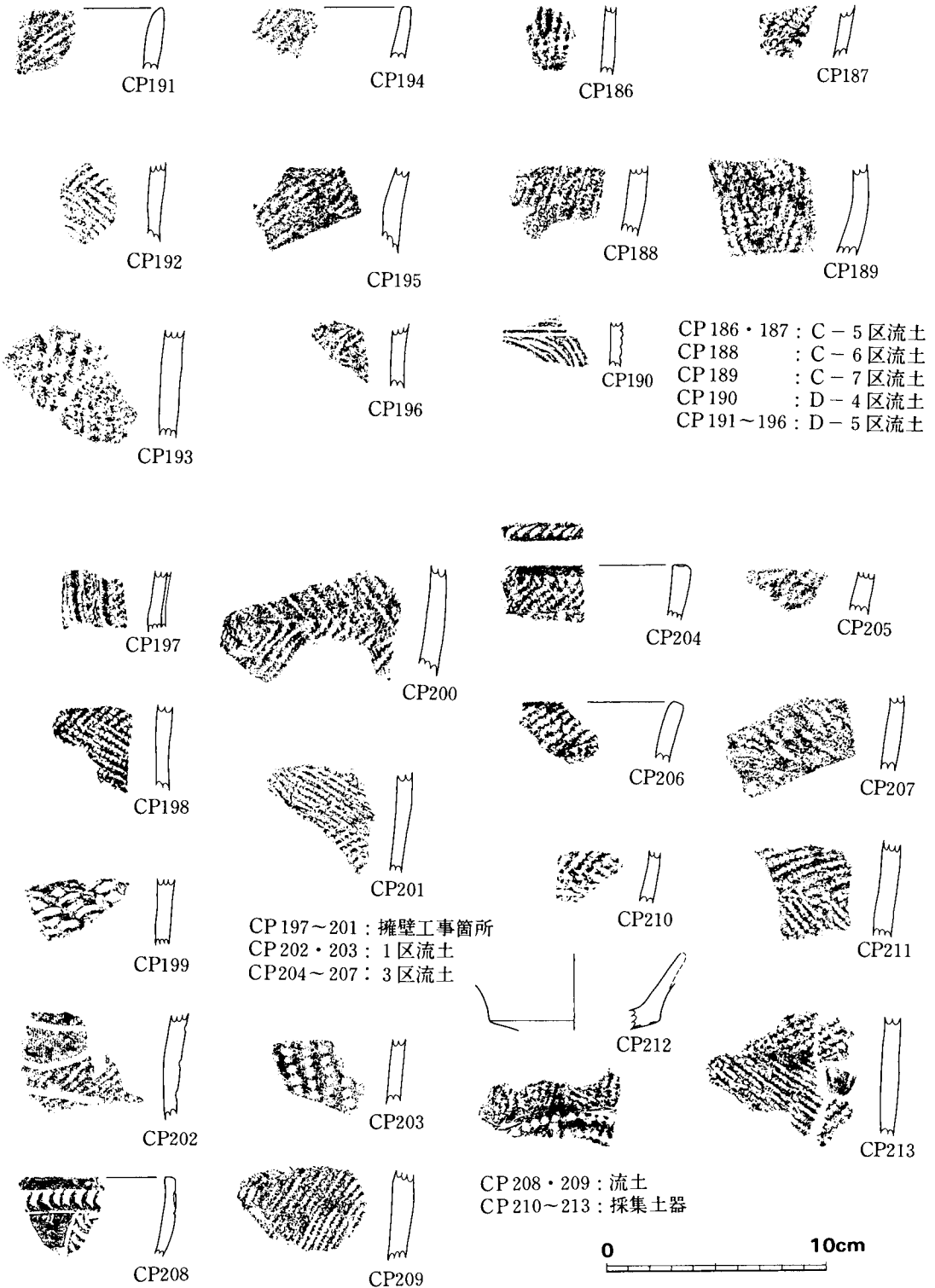


第190図 段状遺構 (S=1/60)・小穴群 (S=1/100)

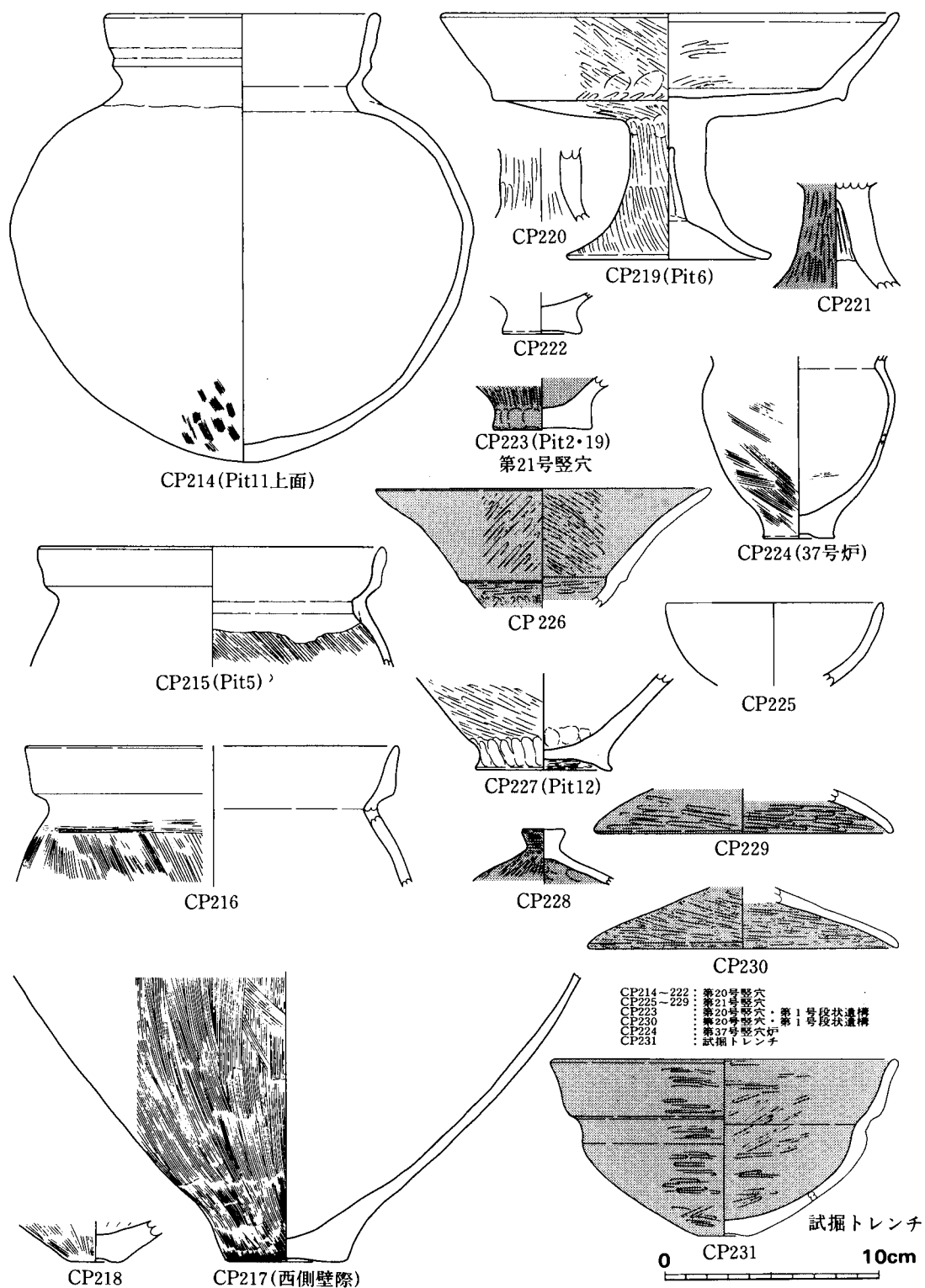
第3節 B地区の遺構と遺物



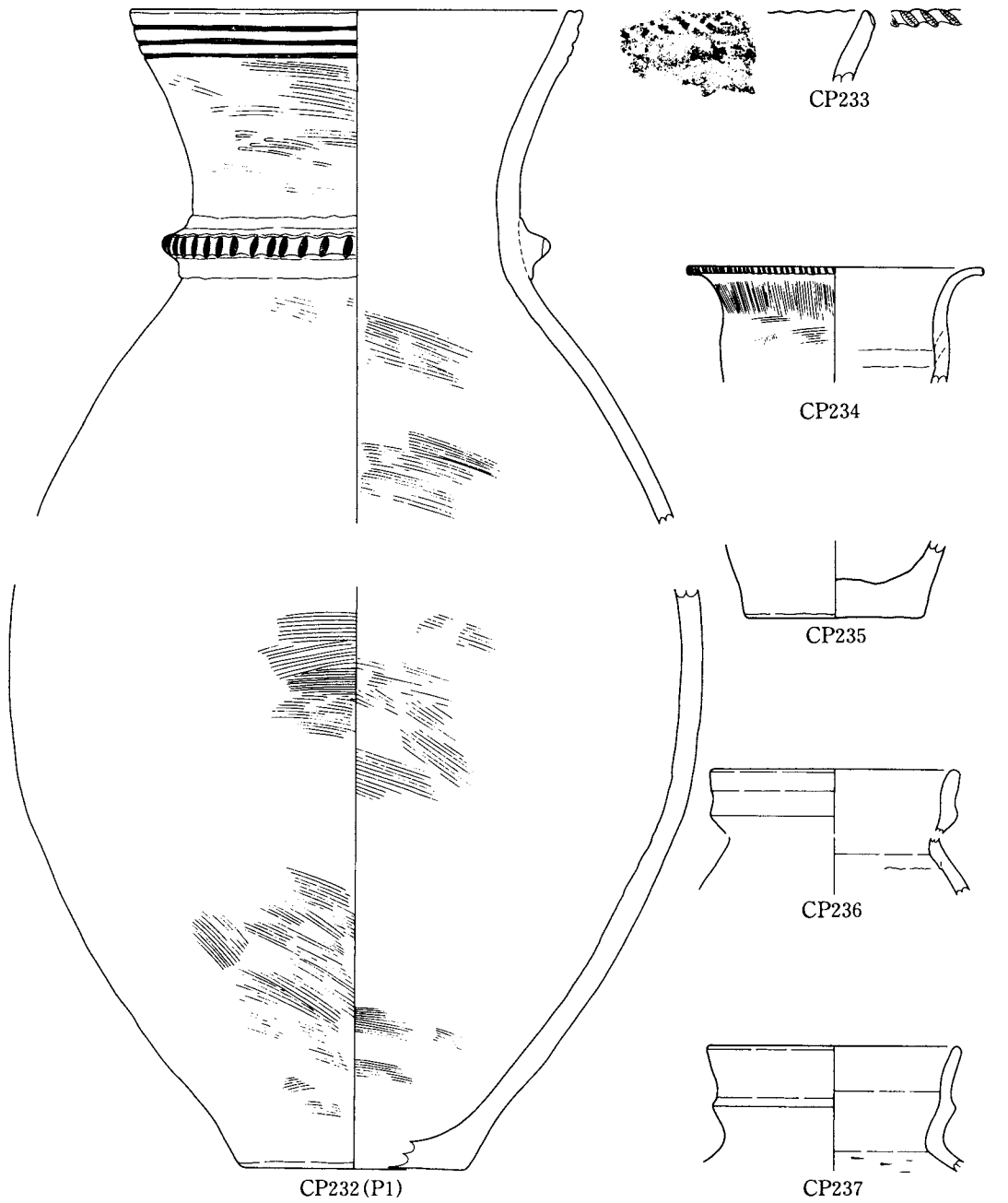
第191図 B地区出土縄文土器他(S=1/3)



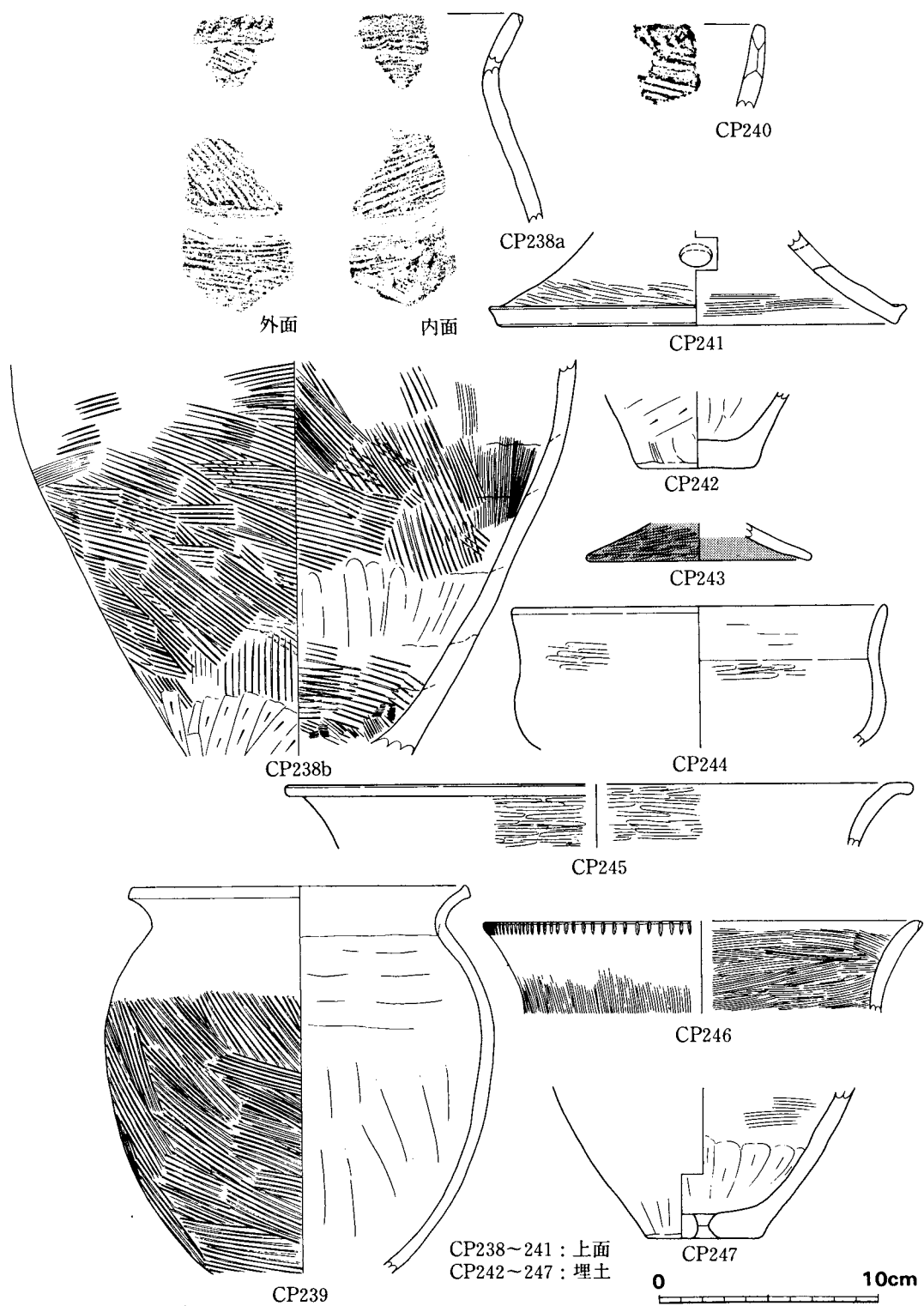
第192図 B地区出土縄文土器(S=1/3)



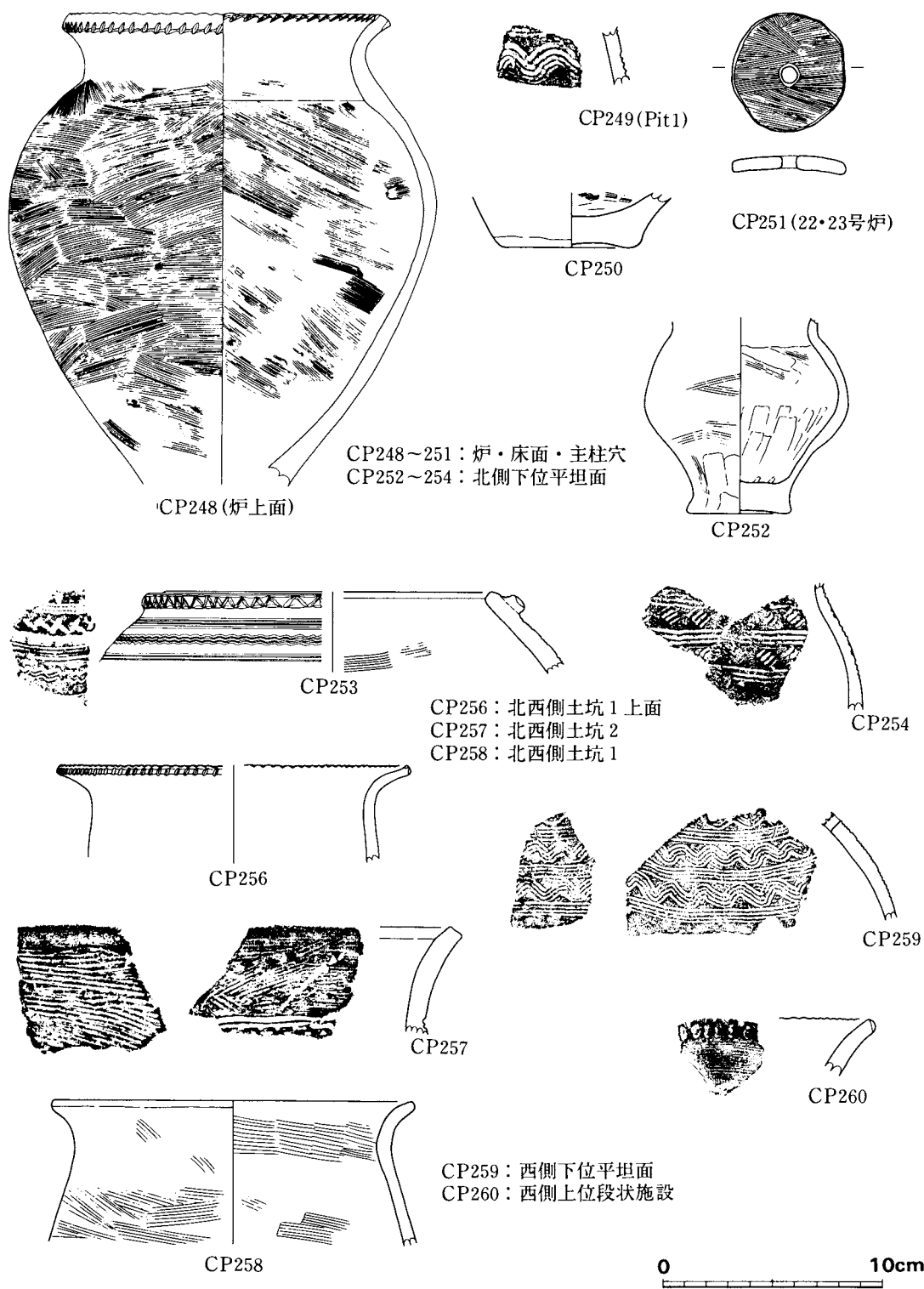
第193図 竖穴式建物他出土土器 (S=1/3)



第194図 第1号段状遺構出土土器(S=1/3)



第195図 号22・23号竖穴式建物他出土土器(S=1/3)

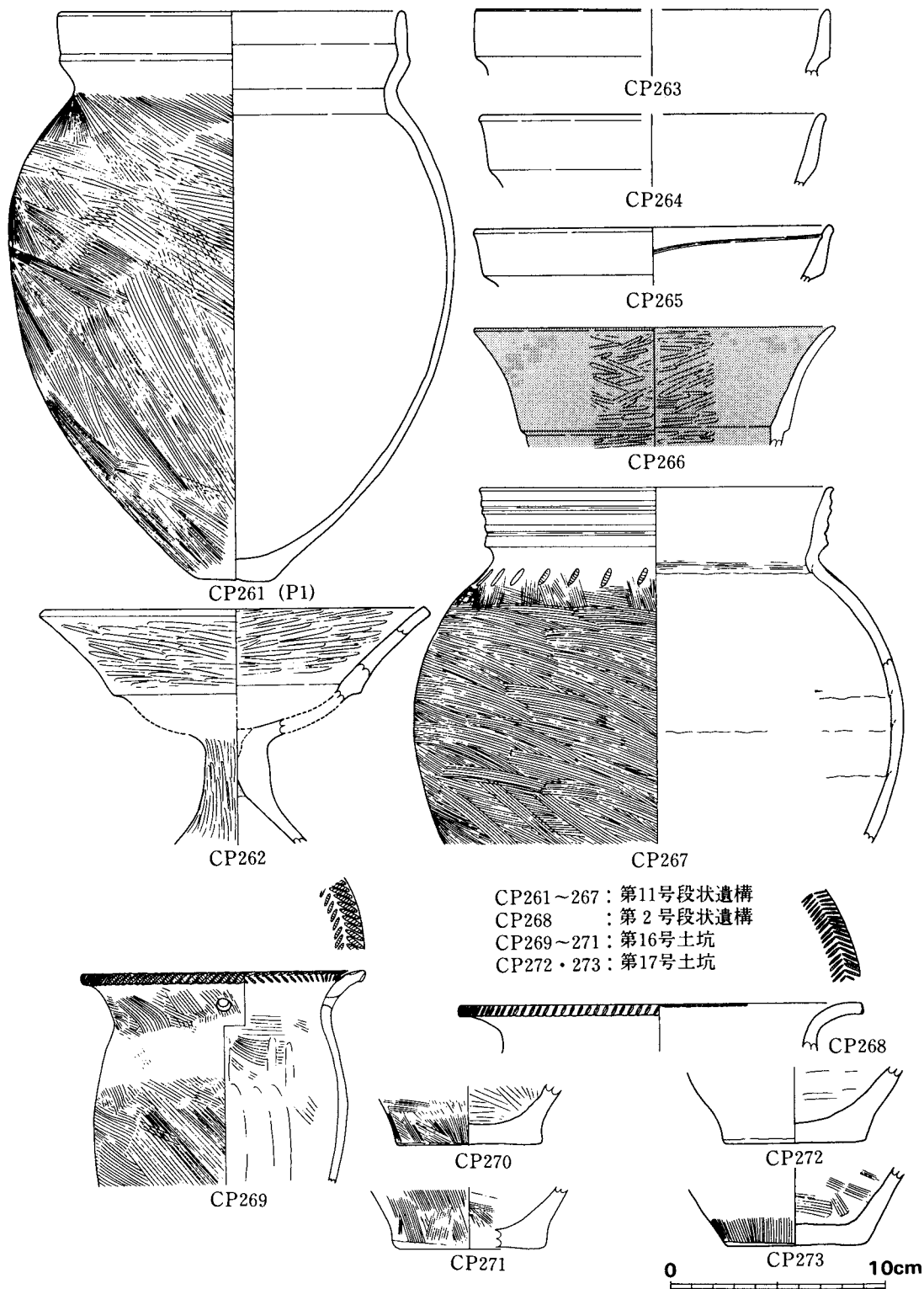


CP248～251：炉・床面・主柱穴
 CP252～254：北側下位平坦面

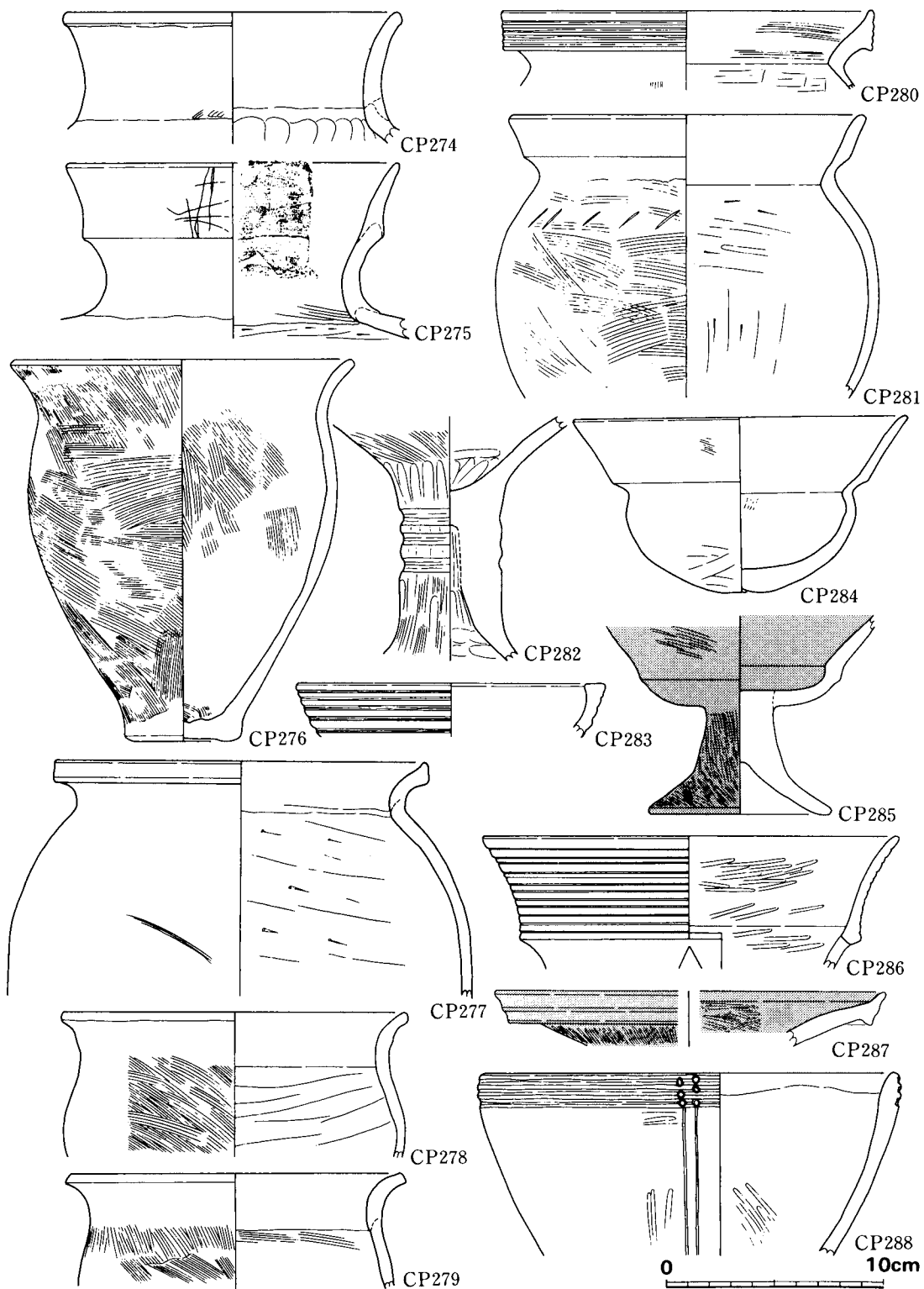
CP256：北西側土坑 1 上面
 CP257：北西側土坑 2
 CP258：北西側土坑 1

CP259：西側下位平坦面
 CP260：西側上位段状施設

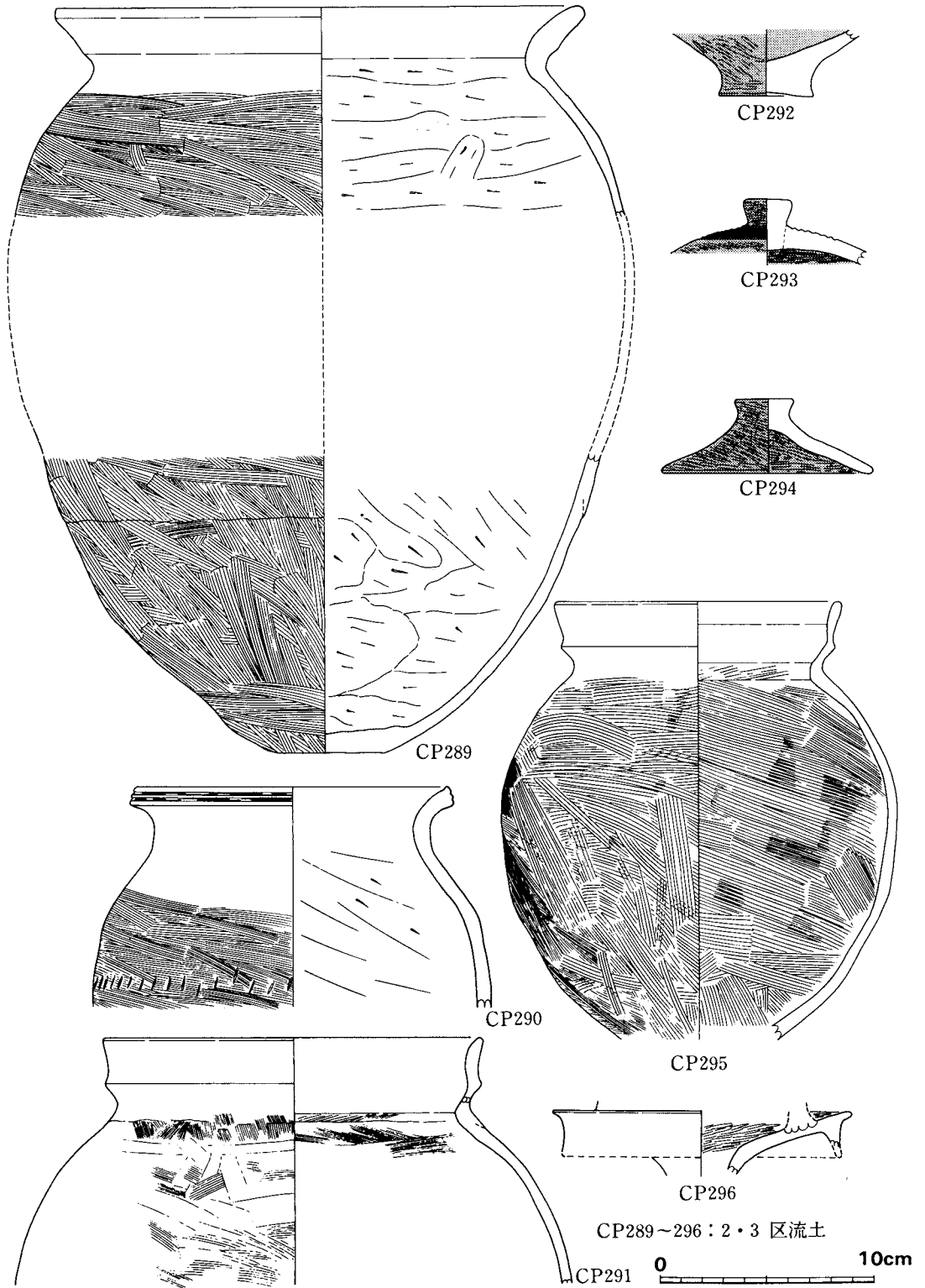
第196図 第22・23号竖穴式建物・段状施設出土土器 (S=1/3)



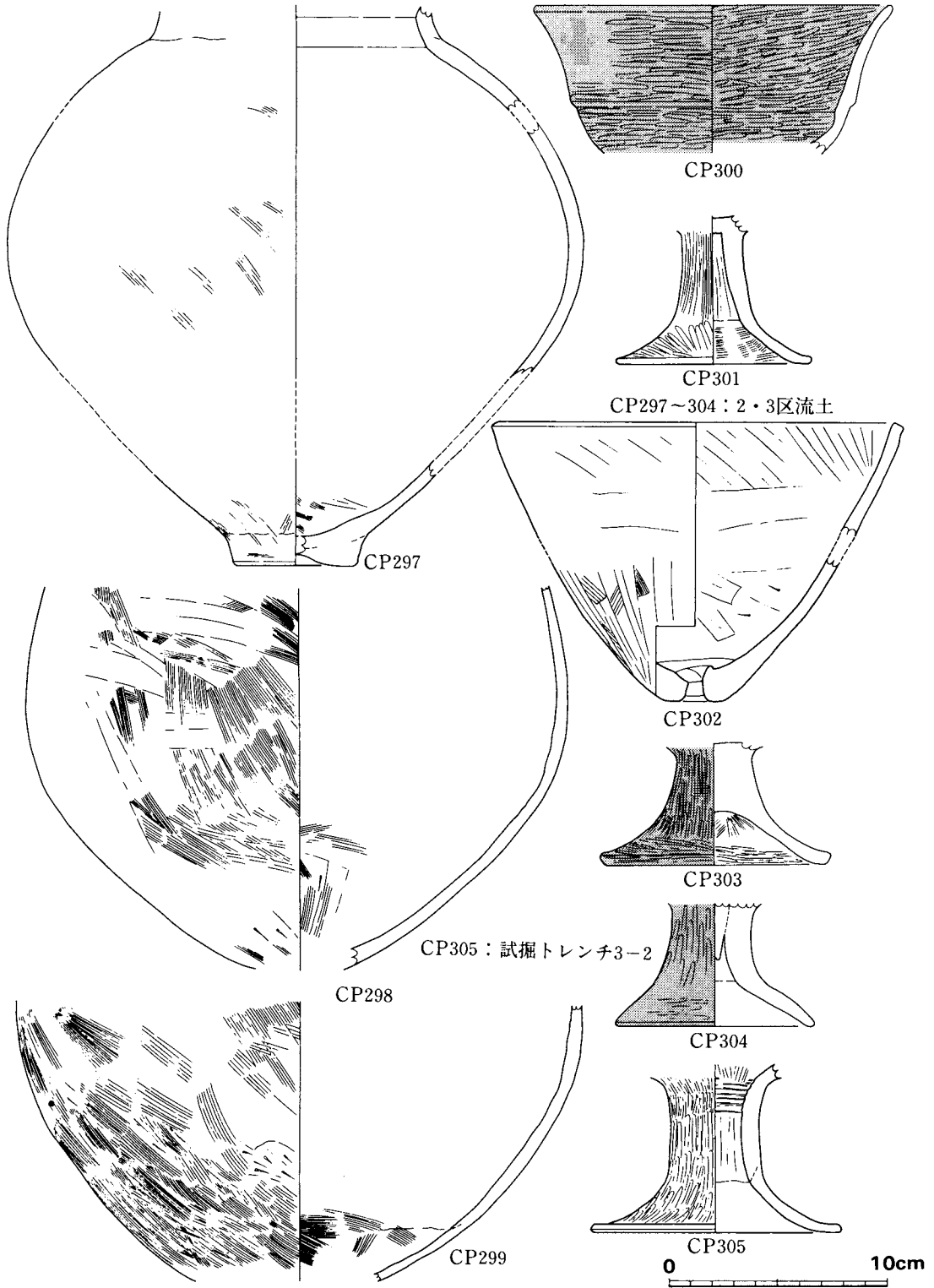
第197図 段状遺構・土坑出土土器 (S=1/3)



第198図 B地区流土出土土器(S=1/3)

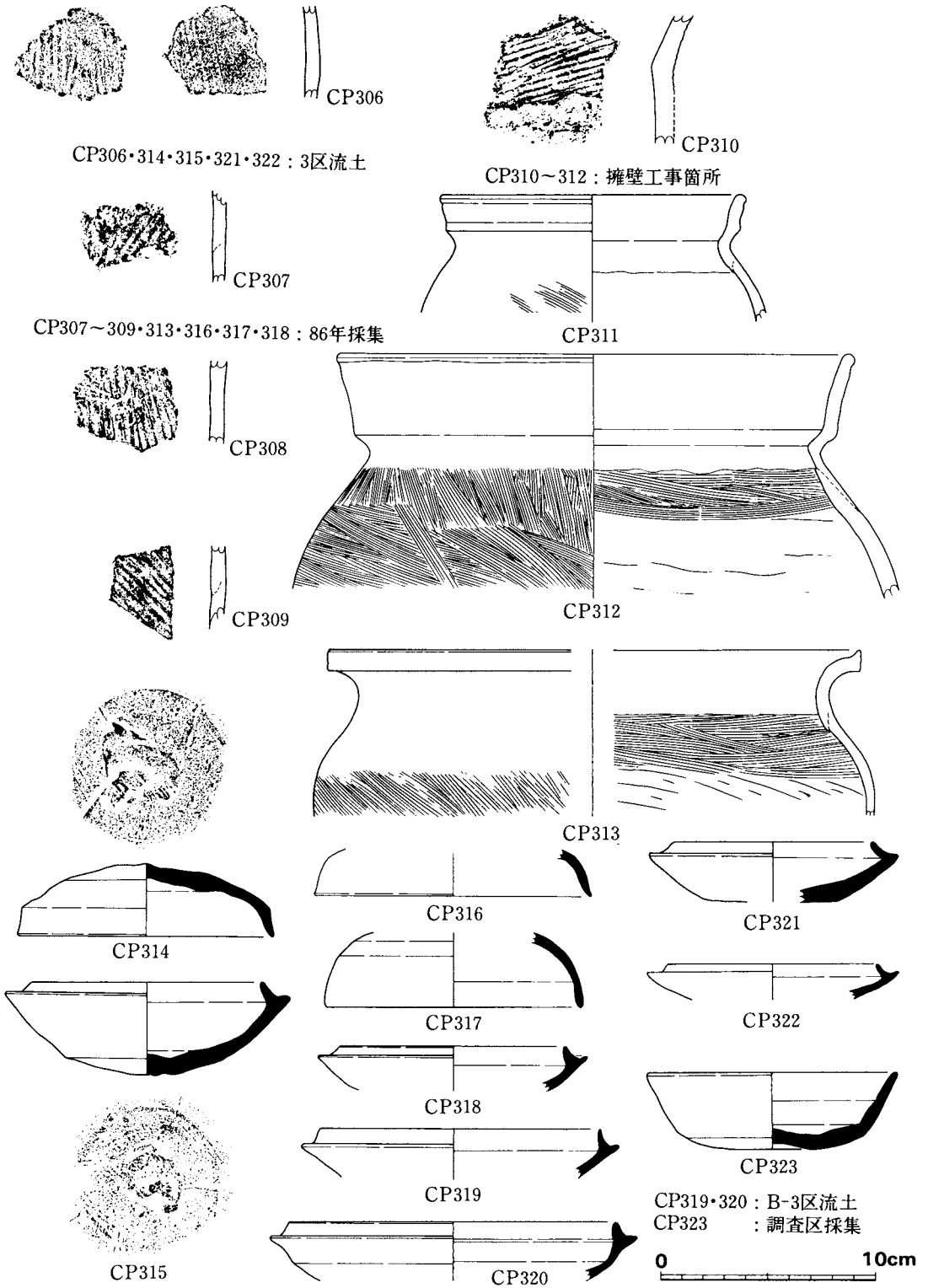


第199図 B地区流土出土土器(S=1/3)

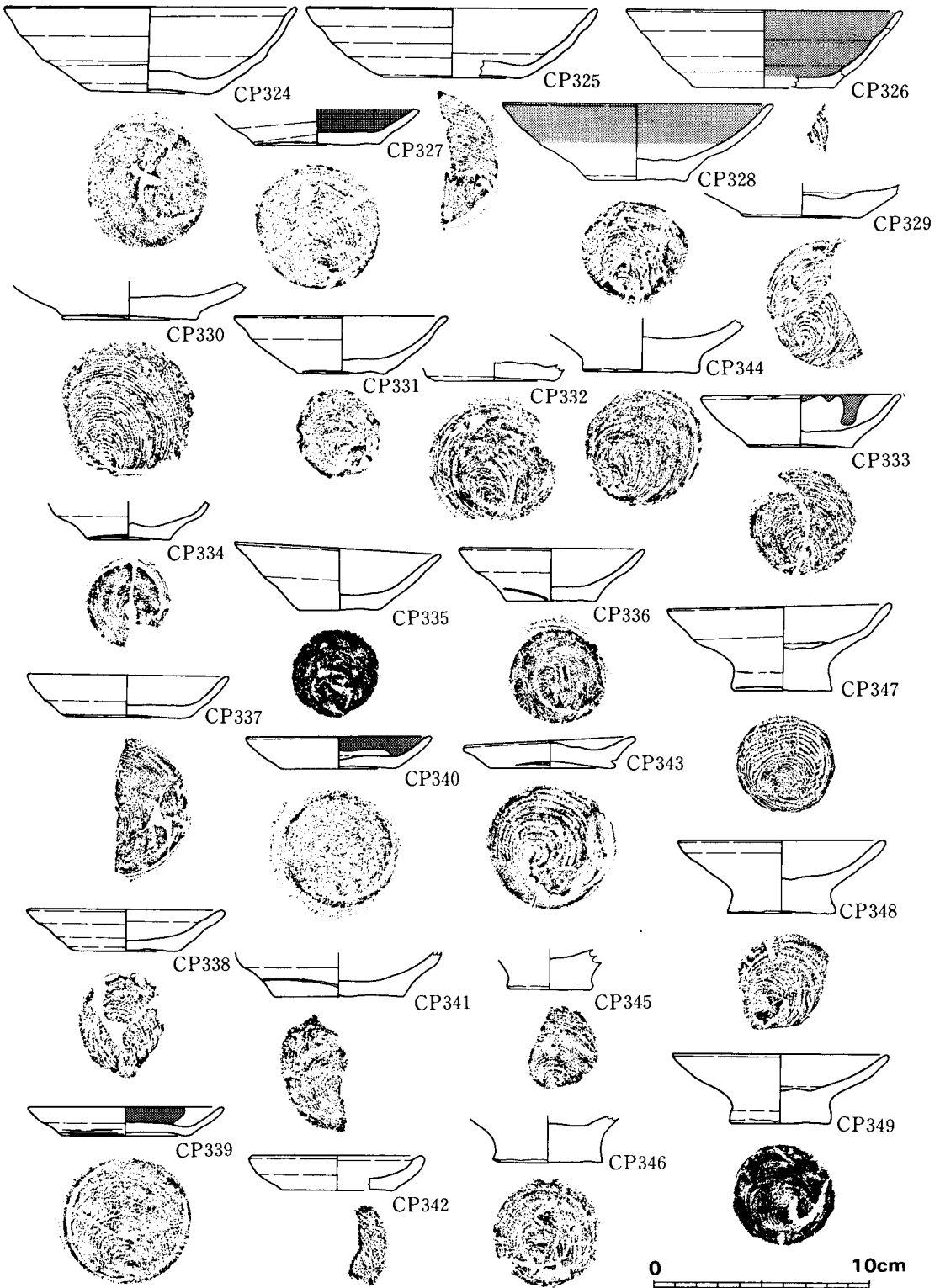


第200図 B地区流土出土土器(S=1/3)

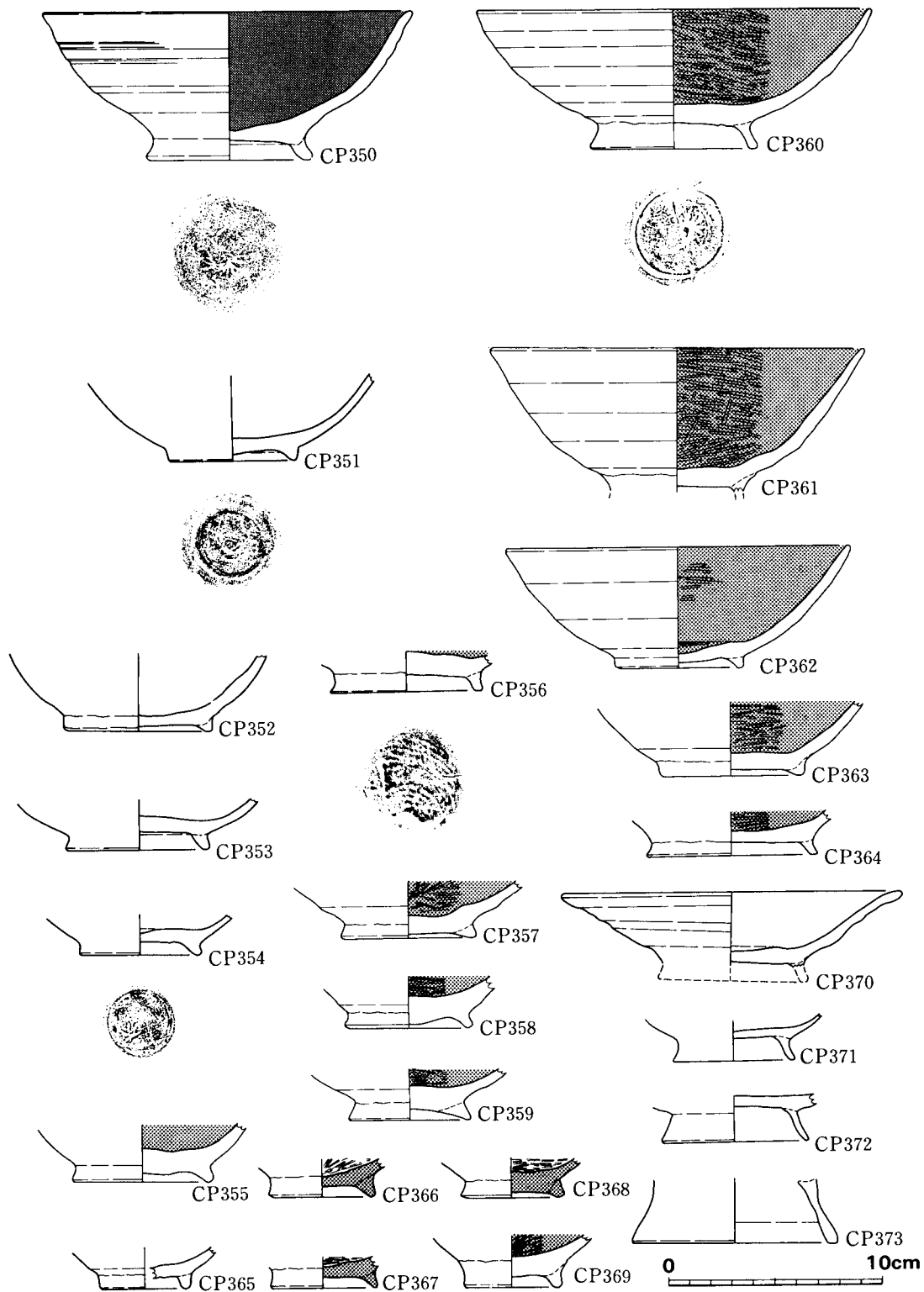
第3節 B地区の遺構と遺物



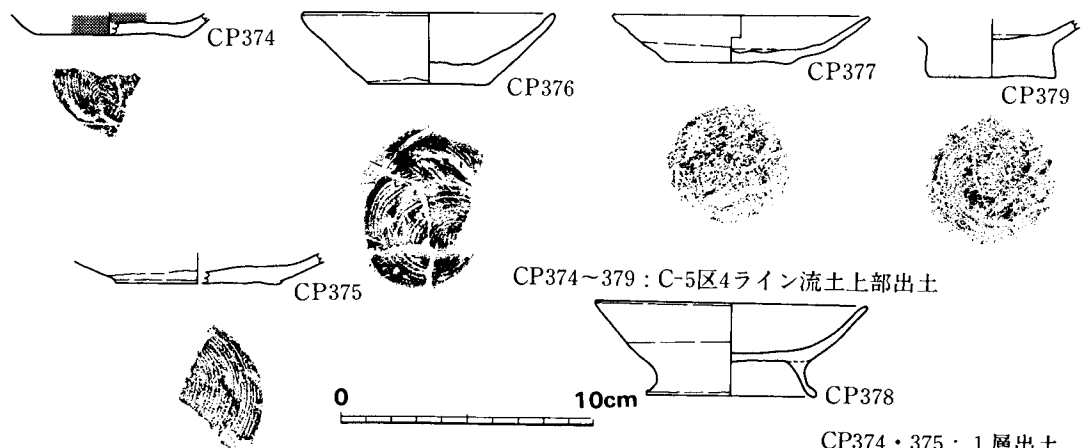
第201図 B地区流土出土土器(S=1/3)



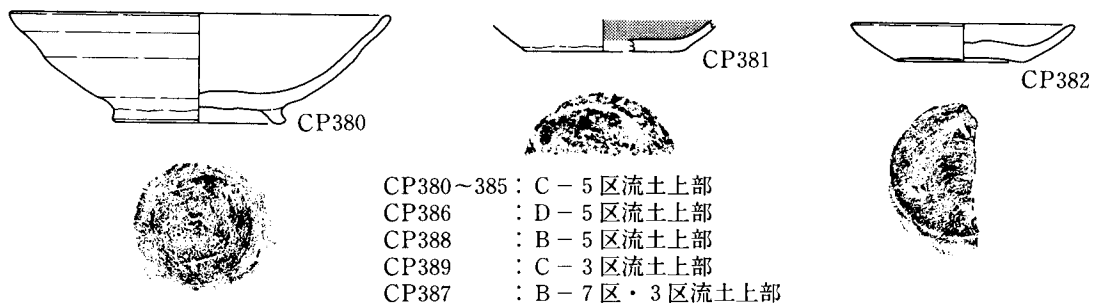
第202図 C-4区流土上部出土土器(S=1/3)



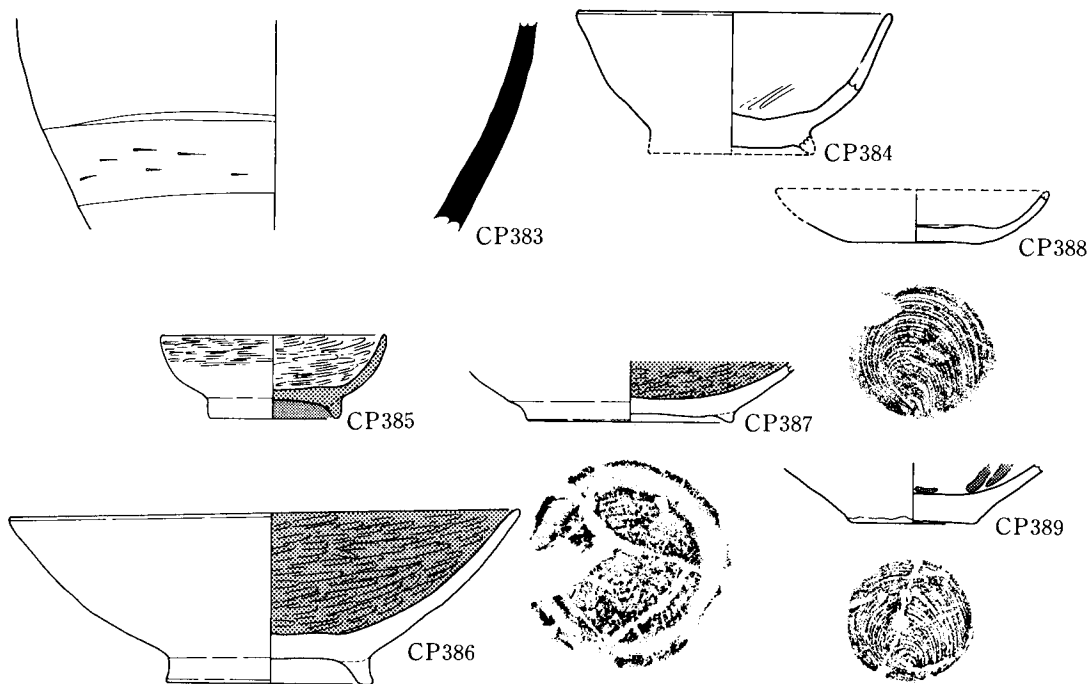
第203図 C-4区流土上部出土土器 (S=1/3)



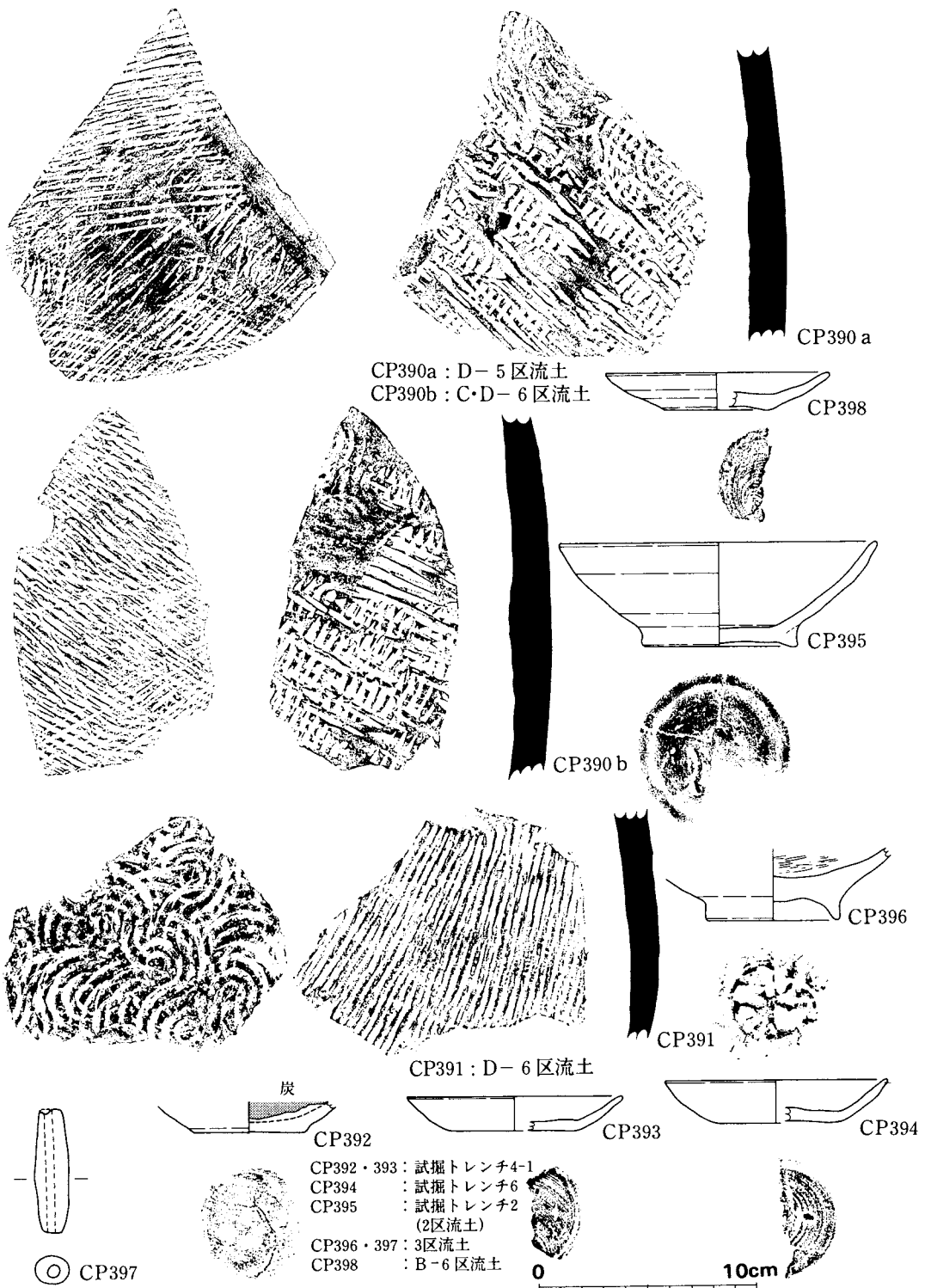
CP374・375 : 1層出土
 CP376~379 : 2層出土



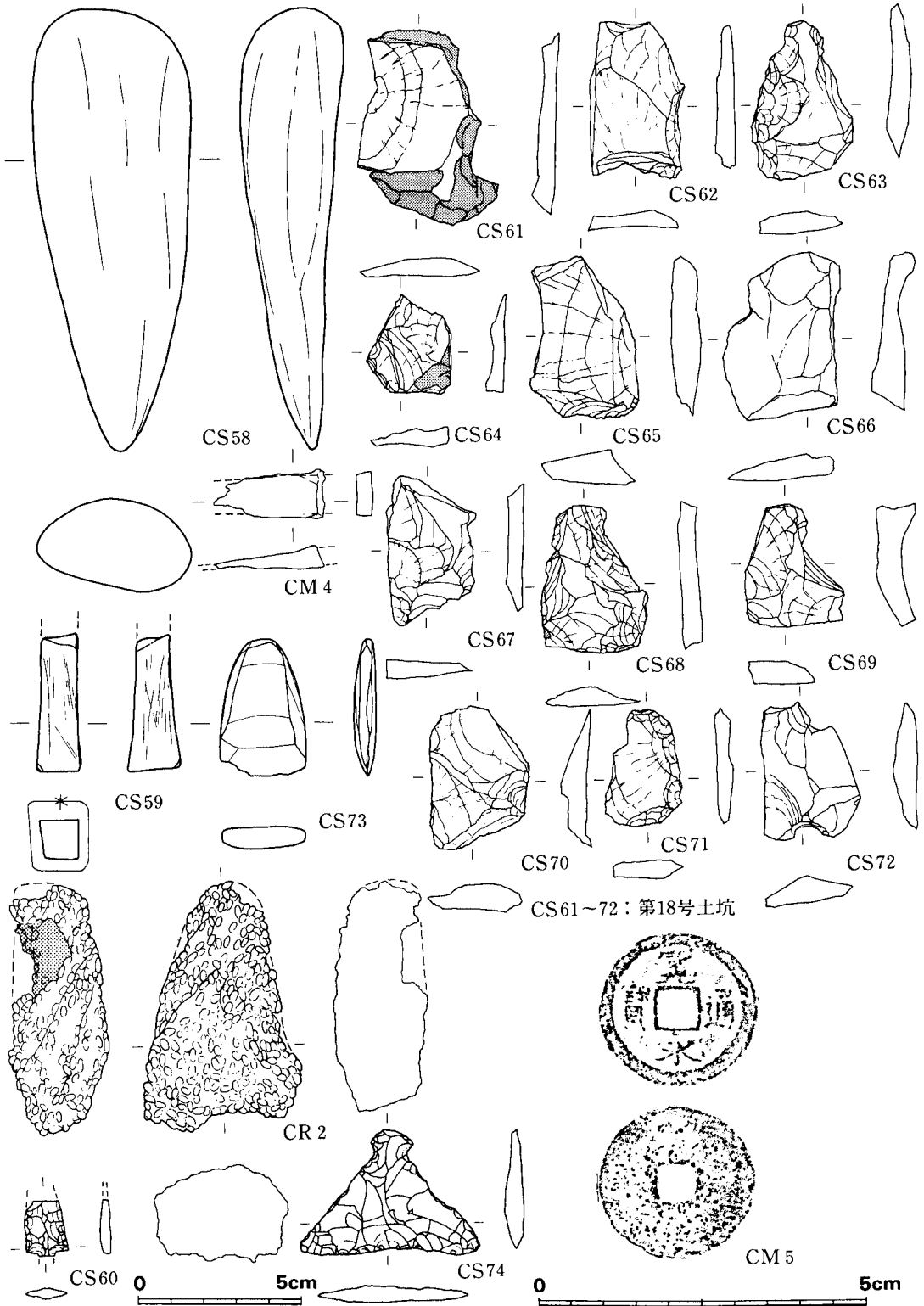
CP380~385 : C-5区流土上部
 CP386 : D-5区流土上部
 CP388 : B-5区流土上部
 CP389 : C-3区流土上部
 CP387 : B-7区・3区流土上部



第204図 B地区流土上部出土土器 (S=1/3)



第205図 B地区流土上部出土土器(S=1/3)



第206図 B地区出土石器他(S=1/2・=1/1)



第207図 B地区出土石器 (S=1/3)

B地区出土土器観察表

(a:口径・蓋鈕部径 b:胴径・脚最小径・結合壺受部径・杯最大径 c:底径・台径・裾径・(杯)蓋口径 h:器高)

番 号 整理No	出 土 地 点	器 類	法 量 等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度	番 号 整理No	出 土 地 点	器 類	法 量 等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度
CP157 90B 45	9号 土坑	底部	c: 6.9 にぶい橙色	外面爪形文 上部出土 ほぼ完	CP189 90B 31	C 7 流土		浅黄橙色	外面縄文 小片
CP158 90B 54	9号 土坑		にぶい黄橙色	外面縄文・沈線 小片	CP190 90B 6	D 4 流土		にぶい黄褐色	外面半截竹管文 小片
CP159 90B 56	9号 土坑		にぶい黄褐色	外面(羽状?)縄文 小片	CP191 90B 4	D 5 流土	深鉢	CP195と同一 橙色	外面縄文 小片
CP160 90B 55	9号 土坑		にぶい黄褐色	外面爪形文 小片	CP192 90B 11	D 5 流土		にぶい橙色	外面羽状縄文、内面 炭化物付着 小片
CP161 90B 52	3区 流土		CP197と同一? にぶい黄褐色	外面縄文・結節浮線 文2条 小片	CP193 90B 25	D 5 流土		にぶい橙色	外面縄文 小片
CP162 90B 46	3区 流土		浅黄橙色	外面結節浮線文3条 小片	CP194 90B 7	D 5 流土	深鉢	にぶい黄褐色	外面縄文 小片
CP163 90B 8	B 4 流土	底部	にぶい橙色	外底面縄文? 小片	CP195 90B 23	D 5 流土	深鉢	CP191と同一 橙色	外面縄文 小片
CP164 90B 16	B 4 流土		にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP196 90B 3	D 5 流土		黒褐色	外面縄文 小片
CP165 90B 18	B 4 流土		にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP197 90B 53	谷部 隆壁		CP161と同一? 灰黄褐色	外面縄文・結節浮線 文2条 小片
CP166 90B 43	10号 土坑	覆?	天王山系土器? 暗褐色	?層出土、外面繫系 文・煤付着 小片	CP198 90B 12	谷部 隆壁		黒褐色	外面羽状縄文 小片
CP167 90B 39	10号 土坑		褐灰色	外面貝殻複雑による 刺突文 小片	CP199 90B 38	谷部 隆壁		にぶい橙色	外面押圧縄文 小片
CP168 90B 39	1小 穴群	深鉢	P1出土 CP180と 同一、灰黄褐色	外面縄文、内外面炭 化物・煤付着 小片	CP200 90B 9	谷部 隆壁		灰黄褐色	外面羽状縄文 小片
CP169 90B 42	1小 穴群	深鉢	P2出土 灰黄褐色	外面刺突文? 小片	CP201 90B 2	谷部 隆壁		褐灰色	外面羽状縄文 小片
CP170 90B 5	1小 穴群		P3出土 CP174と 同一? 橙色	外面縄文 小片	CP202 90B 51	1区 流土		CP203と同一 橙色	外面縄文・沈線 小片
CP171 90B 37	1小 穴群		P4出土 橙色	外面縄文 小片	CP203 90B 50	1区 流土		CP202と同一 橙色	外面縄文 小片
CP172 90B 40	C 4 流土	深鉢	にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP204 90B 21	3区 流土	深鉢	浅黄橙色	外面縄文、口唇部刻 目 小片
CP173 90B 24	C 4 流土		にぶい橙色	外面縄文 小片	CP205 90B 28	3区 流土		橙色	外面縄文 小片
CP174 90B 35	C 4 流土		CP170と同一? にぶい橙色	外面縄文・結節浮線 文2条 小片	CP206 90B 36	3区 流土	深鉢	黒褐色	外面縄文 小片
CP175 90B 47	C 4 流土	底部	c: 6.8 にぶい橙色	外面列点文 小片	CP207 90B 27	3区 流土		橙色	外面縄文 小片
CP176 90B 58	C 4 流土	深鉢	にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP208 90B 48	3区 流土	深鉢	灰褐色	外面沈線・爪形文、 外面煤付着 小片
CP177 90B 20	C 4 流土		にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP209 90B 34	3区 流土		にぶい橙色	外面縄文 小片
CP178 90B 19	C 4 流土		にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP210 90B 30	採集 86年		11月採集 褐灰色	外面羽状縄文 小片
CP179 90B 49	C 4 流土	底部	c: 6.0 にぶい黄褐色	外面縄文? 小片	CP211 90B 10	採集 86年		10月採集 にぶい黄褐色	外面羽状縄文 小片
CP180 90B 1	C 4 流土	深鉢	CP168と同一 黒褐色	外面縄文、内外面炭 化物・煤付着 小片	CP212 90B 44	採集 86年	底部	10月採集C: 7.8 にぶい黄褐色	外面縄文、外底面刺 突文 小片
CP181 90B 29	C 4 流土		にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP213 90B 17	採集 87年		排土中より採集 にぶい黄褐色	外面羽状縄文 小片
CP182 90B 13	C 4 流土		にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP214 90C130	20号 竪穴	壺	a:12.5 b:21.8 h:20.9 外磨耗	pit11上面出土 にぶい橙色 1/2
CP183 90B 41	C 4 流土	深鉢	にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP215	20竪	壺	a:16.0 90C 66	pit5、淡黄色、小片
CP184 90B 14	C 4 流土		にぶい黄褐色	外面羽状縄文 小片	CP216	20竪	壺	a:17.4 90C 71	にぶい黄褐色、小片
CP185 90B 15	C 4 流土		にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP217 90C129	20号 竪穴	底部	c: 5.7 にぶい橙色	西側壁腐出土 胴部 1/2、底部完
CP186 90B 33	C 5 流土		にぶい黄褐色	外面縄文 小片	CP218	20竪	底部	c: 2.2 90C 69	黄橙、内炭化物、完
CP187	C 5		90B 32 褐灰色	外面縄文 小片	CP219 90C127	20号 竪穴	台付鉢	a:21.2 b: 3.6 c: 9.2 h:11.5	pit6・20号土坑出土 黄褐色、1/2、脚は完
CP188	C 6		90B26 浅黄褐色	外面縄文 小片	CP220	20竪	脚部	b: 3.8 灰白色	90C 67 3/4
					CP221	20竪	脚完	b: 3.0 90C 59	外赤、にぶい黄褐色

第3節 B地区の遺構と遺物

番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特記事項 遺存度	番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特記事項 遺存度
CP222 90C 68	20号 整穴	底部	b: 3.8 浅黄褐色	1/2	CP257 90A246	23号 整付?	甕	北西側土坑2 灰褐色	外面沈線2・交互 刺小片
CP223 90C 60	21号 整穴	底部	c: 4.6 浅黄褐色	pit2・19出土、外底 を除き赤彩、ほぼ完	CP258 90A144	22号 整付?	甕	a:16.6 b: 北西側 土坑1 黄褐色	外面煤付着 小片
CP224 90C 64	37号 整穴	小型 壺	b: 9.0 c: 3.2 にぶい褐色	炉出土 胴部1/4、底部1/2	CP259 90A143	23号 整付 附設	壺	外面煤・内面炭 化物付着 にぶい黄褐色	西側下位平坦面、直 線文・波状文、二孔 一對蓋結束孔、小片
CP225 90C 62	20号 整穴	鉢	a:10.0 90C 70	褐色	CP260 90A150	23号 整付 附屬	甕?	外面煤付着 灰白色 小片	西側上位段状施設、 口縁端部外面刻み目
CP226 90C 65	20号 整穴	台付 鉢	a:15.8 にぶい黄褐色	内外面赤彩 1/4	CP261 90C142	11号 段状	壺 P1	a: 16.0 b:20.9 c: 3.4 h:26.5	外面煤内面炭化物付 着、灰黄色
CP227 90C 72	20号 整穴	底部	c: 6.4 にぶい黄褐色	pit12出土 胴部1/2、底部完	CP262 90C 76	11号 段状	台付 鉢	a: 17.8 b: 2.9 浅黄褐色	口縁部小片(図上復 元) 脚部ほぼ完
CP228 90C 72	20号 整穴	蓋	a: 1.9 にぶい黄褐色	内外面赤彩 体部1/4、紐部ほぼ完	CP263	11号 段状	壺	a: (16.4)90C 78	浅黄褐色 小片
CP229	20号 整	蓋?	c:14.0 90C 61	橙、内外赤彩、小片	CP264	11号 段状	壺	a: (16.0)90C 77	浅黄褐色 小片
CP230 90C 63	20号 1段	蓋	c:14.4 1/4 にぶい黄褐色	+1号段状遺構、内 口縁端煤付着、赤彩	CP265	11号 段状	壺	a: 16.6 90C 79	褐色 1/4
CP231 90C 4	86年 試掘	鉢	a:16.0 c: 2.5 h: 8.4 3/4	4トレンチ、にぶい 褐色、外面煤・赤彩	CP266	11号 段状	鉢	a: 16.7 90C 80	にぶい黄褐色 1/2
CP232 90A 24	1段 20号	壺	a:19.2 b:29.6 c:10.0 にぶい黄褐色	+20号整穴、木目状 沈線3、貼付突ぼ完	CP267 90C143	11号 段状	壺	a: 16.4 b:20.9 にぶい褐色	口縁凹線4、肩部 刻み目、外面煤1/3
CP233 90A136	1号 段状	甕?	CP235と同一 浅黄褐色	口縁端部に斜格子の 刻み目	CP268 90A139	2号 段状	壺	a: 18.8 にぶい黄褐色	口縁端部外面刻み 目小片
CP234	1段	壺	a:12.4 90A138	褐色、口端刻目、1/4	CP269 90A25a	16号 土坑	壺	a: 13.3 b:12.0 外面煤付着 にぶい褐色 1/2	口縁端部外面刻み 目、内面斜文、 結束孔一對蓋
CP235	1段	壺?	3/4CP233と同一	黄橙、90A137 c:7.4	CP270	16号 土坑	底部	c: 6.8 90A135	にぶい黄褐色 完
CP236	1段	壺	a: 10.2 90C81	浅黄褐色 小片	CP271	16号 土坑	底部	c: 7.2 90A25b	にぶい褐色 1/4
CP237	1段	壺	a: 10.2 90C82	浅黄褐色 1/3	CP272	17号 土坑	底部	c: 6.6 90A134	黄褐色 完
CP238 90A 27	22号 土面	壺	b:(26.1)口縁刻 目、にぶい黄褐色	外煤・内炭化物付着 口頸小片、胴部1/2	CP273	17号 土坑	底部	c: 6.6 90A133	浅黄橙、外面煤、完
CP239 90A140	22号 土面	壺	a: 15.5 b:18.0 にぶい黄褐色	外面煤付着 口縁小片、胴部1/3	CP274	C 4	壺	a:15.4 90C 40	にぶい黄褐色 1/4
CP240 90A250	22号 土面	壺	焼成後穿孔1? にぶい黄褐色	外面刺突文・条痕 小片	CP275 90C 49	C 4 流土	壺	a:15.4 浅黄褐色	口縁部外面へラ先 による線刻
CP241	22号 土面	高杯	c:18.2 90C 41	褐色、孔数不明、1/4	CP276 90A 6	B 8 流土	壺	a:15.8 b:14.5 c: 5.5 h:17.9 にぶい赤褐色	外面煤・内面炭化物 付着、口縁部小片・ 胴部1/4・底部完
CP242 90A145	22号 土面	底部	c: 5.2 にぶい黄褐色	外面煤付着 完	CP277 90C 38	C 6 流土	壺	a:17.2 b:21.8 浅黄褐色	外面煤付着 1/4
CP243	22号 土面	蓋?	c: 10.0 90C 74	淡褐色、赤彩、小片	CP278 90A152	C 4 流土	壺	a:15.8 にぶい黄褐色	外面煤・内面炭化物 付着 1/2
CP244	22号 土面	蓋?	a: 17.0 90C 75	浅黄褐色 小片	CP279	C 4	壺	a:15.4浅黄褐色	90A155、外面煤1/3
CP245	22号 土面	高杯	a: 28.6 90C 73	にぶい黄褐色 小片	CP280 90C 50	B C 9・10	壺	a:17.0 浅黄褐色	口縁外面凹線4、 外面煤付着 小片
CP246 90A142	22号 土面	壺	a:(20.0) にぶい黄褐色	口縁端部外面刻み 目小片	CP281 90C 5	B C 9・10	壺	a:16.3 b:17.9 にぶい黄褐色	外面肩部列点文、外 面煤付着 1/4
CP247 90A147	22号 土面	底部	c: 5.2 淡黄色	底部焼成後穿孔1 胴部1/3、底部完	CP282 90A154	B C 9・10	高杯	b: 4.8 浅黄褐色	脚部外面凹線3 ほぼ完
CP248 90A 7	22号 土面	壺?	a: 14.4 b:19.8 にぶい褐色 にぶい褐色	口縁端部内外面刻 目、外面煤・内面 炭化物付着	CP283 90A157	B C 9・10	高杯	a:14.4 にぶい黄褐色	口縁部外面凹線5 小片
CP249 90A151	22号 土面	?	pit1出土 灰白色	外面波状文・直線文 外面煤付着 小片	CP284 90C 6	C 5 流土	鉢	a: 15.4 b:10.7 c: 1.5 h: 8.2	褐色、口縁部～体 部1/3、底部完
CP250 90A149	22号 土面	底部	c: 6.2 褐色	西側床面・CM4伴出 外面煤付着 小片	CP285 90C 43	B 7 流土	台付 鉢	b: 3.1 c: 8.2 褐色	外面・体部内面赤彩 体部1/2、脚ほぼ完
CP251 90A146	22号 土面	土製 円盤	炉(22or23)出土 新築車 にぶい黄褐色	径52～55、厚さ4～ 6、孔径6.5mm 外面煤付着 完	CP286 90C 45	B 6 流土	結合 壺	a: 19.2 褐色	外沈線12、雨滴形透 孔(詳細不明) 小片
CP252 90A 26	22号 土面	小型 壺	b: 9.4 c: 4.5 にぶい褐色	北側下位平坦面 外煤、胴部1/2、底部完	CP287 90C 42	B C 9・10	器台 ?	a: (18.0) 褐色	内外面赤彩 小片
CP253 90A141	22号 土面	壺	a:14.8 にぶい黄褐色 小片	北側下位平坦面、直 線文・斜格子の状 文、貼付突ぼ完	CP288 90A156	C 4 流土	鉢	a: 19.0 にぶい黄褐色 小片	横位沈線3、竹筒位 2列×3段土(2箇所 以上)
CP254 90A148	22号 土面	壺	にぶい黄褐色	北側下位平坦面、直 線文・斜格子の状 文、貼付突ぼ完	CP289 90C 35	3区 流土	壺	a:24.6 c: 4.9 にぶい黄褐色	外面煤付着 口縁部～胴 部下位1/4、底部完
CP256 90A153	23号 土面	壺	a(16.0) 小片 にぶい黄褐色	北西側土坑1上面 口縁端内外面刻み 目	CP290 90C 36	2区 流土	壺	a:14.6 b:18.8 1/2 浅黄褐色	口縁部沈線2、胴部 列点文、外面煤付着

第4章 杉谷チャノバタケ遺跡

番号 整理No	出地 地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度	番号 整理No	出地 地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度
CP291 90C128	3区 流土	甕	a:17.7 にぶい橙色	CP299と同一個体? 外面煤付着 1/3	CP326 90D 18	C 4 流土	無台 無碗	a:12.7 c: 6.5 h: 3.6 黄灰色	内面炭化物?付着 1/3
CP292 90C 52	3区 流土	鉢	c: 4.4 橙色	内外面赤彩 ほぼ完	CP327 90D 31	C 4 流土	無台 無碗	c:5.6 橙色	内炭化物?付着 ほぼ完
CP293 90C 56	2区 流土	蓋	a: 2.2 にぶい黄橙色	外面沈線7、内外赤 彩、鋸部完 体部1/4	CP328 90D 20	C 4 流土	無台 無碗	a:12.6 c: 4.6 h: 3.6 灰白色	内外炭化物?付着 体部小片、底部完
CP294 90C 54	3区 流土	蓋	a: 2.6 c: 9.6 にぶい黄橙色	内外面赤彩 完	CP329	C 4	無碗	c: 5.3 浅黄橙	90D 46 1/2
CP295 90C133	3区 流土	甕	a:13.2 b:18.6 にぶい黄橙色	外面煤付着 1/2	CP330	C 4	無碗	c: 6.2 浅黄橙	90D 38 ほぼ完
CP296 90C 46	3区 流土	結合 壺	b:13.8 浅黄橙色	小片	CP331 90D 41	C 4 流土	無台 小碗	a: 9.9 c: 4.1 h: 2.7 浅黄橙	体部小片、底部完
CP297 90C132	2区 流土	壺	b:26.8 c: 5.8 にぶい黄橙色	小片	CP332	C 4	無碗	c: 5.7 黄灰色	90D 19 ほぼ完
CP298 90C134	3区 流土	甕	b:25.3 にぶい褐色	外面煤付着 1/2	CP333 90D 40	C 4 流土	無台 小碗	a: 9.1 c: 4.7 h: 2.5 黄橙色	内外面油痕 ほぼ完
CP299 90C131	3区 流土	甕	b:26.4 にぶい褐色	CP291と同一個体? 外煤内炭化物 1/2	CP334	C 4	小碗	c: 3.8 浅黄橙	90D 30、無台、3/4
CP300 90C 53	2区 流土	台付 鉢	a:16.4 橙色	CP303と同一? 内外面赤彩 小片	CP335 90D 1	C 4 流土	無台 小碗	a: 9.6 c: 3.8 h: 2.9 底部完	外面にぶい黄橙色、 内面灰色、体部 3/4
CP301 90C 57	3区 流土	脚	b: 2.8 c: 9.0 にぶい黄橙色	ほぼ完	CP336 90D 29	C 4 流土	無台 小碗	a: 8.5 c: 4.3 h: 2.5 黄橙色	体部小片、底部完
CP302 90C 51	2区 流土	有孔 鉢	a:18.2 c: 2.8 浅黄橙色	口縁部小片、底部ほ ぼ完	CP337 90D 36	C 4 流土	無台 皿	a: 9.3 c: 6.0 h: 2.0 浅黄橙	体部小片、底部完
CP303 90C 44	2区 流土	脚	b: 3.4 c:10.0 浅黄橙色	CP300と同一?、外 面赤彩、脚完 1/2	CP338 90D 37	C 4 流土	無台 皿	a: 9.1 c: 5.0 h: 2.0	にぶい褐色 体部 1/2、底部完
CP304 90C 47	3区 流土	脚	b: 3.6 c: 9.0 浅黄橙色	外面赤彩 完	CP339 90D 33	C 4 流土	無台 皿	a: 9.0 c: 5.8 h: 1.4 黄橙色	内面炭化物?付着 体部 1/3、底部完
CP305 90C 55	86年 試掘	器台	b: 4.0 c:11.2 にぶい黄橙色	3-2トレンチ 脚部完、鋸部1/3	CP340 90D 32	C 4 流土	無台 皿	a: 8.6 c: 5.8 h: 1.5 黄橙色	内面炭化物?付着 体部 2/3、底部完
CP306 90A251	3区 流土	甕	にぶい黄橙色	外面条痕、内面炭化 物付着 小片	CP341 90D 42	C 4 流土	無台 碗	c: 6.0 橙色	体部 1/3、底部 1/2
CP307 90A248	86年 探集	甕	にぶい黄橙色	10月探集 外面条痕 小片	CP342 90D 43	C 4 流土	無台 皿	a: 8.1 c: 5.3 h: 1.7 褐色	1/4
CP308 90A249	86年 探集	甕	灰黄褐色	10月探集 外面条痕 小片	CP343 90D 35	C 4 流土	無台 皿	a: 7.9 c: 5.8 h: 1.5 黄橙色	ほぼ完
CP309 90A247	86年 探集	甕	灰黄褐色	11月探集 外面条痕 小片	CP344 90D 39	C 4 流土	有台 碗	c: 5.5 浅黄橙色	柱状高台 ほぼ完
CP310 90A245	谷部 障壁	甕	にぶい黄橙色	外面条痕 小片	CP345	C 4	有皿	c: 4.1柱状高台	90D52 橙色、ほぼ完
CP311 90C 39	谷部 障壁	甕	a: 14.0 にぶい黄橙色	外面煤付着 1/4	CP346	C 4	有皿	c: 5.2柱状高台	90D51 橙色、ほぼ完
CP312	谷部	甕	a: 23.8 90C 37	浅黄橙色 小片	CP347	C 4 流土	有台 皿	a:10.3 c: 4.6 h: 4.2 褐色	柱状高台 ほぼ完
CP313	谷部	甕	a:(25.0)90C 48	にぶい黄褐色 小片	CP348 90D 48	C 4 流土	有台 皿	a: 9.5 c: 5.0 h: 3.4 褐色	柱状高台 体部小片、底部完
CP314 90D 73	3区 流土	杯蓋	c: 11.8 h: 3.4 灰色	CP315伴出、天井部 ほぼ完、口縁部小片	CP349 90D 2	C 4 流土	有台 皿	a: 9.9 c: 4.6 h: 3.2柱状高台	外浅黄橙色、内灰色 体部小片、底部完
CP315 90D 72	3区 流土	杯身	a: 10.8 b:13.3 h: 4.4 灰色	CP314伴出 ほぼ完	CP350 90D 22	C 4 流土	有台 碗	a:17.2 c: 7.5 h: 7.0 褐色	内面炭化物?付着 体部 1/3、底部完
CP316 90D 77	86年 探集	杯蓋	c: 12.9 灰色	11月探集 小片	CP351 90D 27	C 4 流土	有台 碗	c: 5.8 黄橙色	体部 1/3、底部完
CP317	86探	杯蓋	c: 12.0 暗灰色	10月、90D 76、小片	CP352 90D 24	C 4 流土	有台 碗	c: 7.0 浅黄橙色	体部小片、底部 2/3
CP318	8611	杯身	a: 10.6 b:12.8	灰色、90D 81、小片	CP353 90D 25	C 4 流土	有台 碗	c: 6.4 浅黄橙色	体部小片、底部完
CP319	3区	杯身	a: 13.2 b:15.0	灰色、90D 79、小片	CP354	C 4	有碗	c: 5.5 浅黄橙	90D 26 ほぼ完
CP320	3区	杯身	a: 14.1 b:17.3	灰白、90D 80、小片	CP355 90D 7	C 4 流土	有台 碗	c: 6.6 浅黄橙色	内面黒色 体 部小片、底部ほぼ完
CP321	3区	杯身	a: 9.2 b:11.6	灰色、90D 74、1/4	CP356 90D 6	C 4 流土	有台 碗	c: 7.2 浅黄橙色	内面黒色 ほぼ完
CP322	3区	杯身	a: 9.8 b:11.8	灰色、90D 78、小片	CP357 90D 9	C 4 流土	有台 碗	c: 6.4 褐色	内面黒色 体部 1/4、底部 1/3
CP323 90D 75	87年 探集	杯身	a: 11.6 c: 8.0 h: 3.7	8月探集、灰オリー ブ色 1/2	CP358	C 4	有碗	c: 5.8 浅黄橙	内黒90D14 ほぼ完
CP324 90D 44	C 4 流土	無台 碗	a:13.6 c: 5.8 h: 4.2 浅黄橙	体部 2/3、底部完	CP359 90D 12	C 4 流土	有台 碗	c: 4.8 灰白色	内面黒色 体部小片、底部 1/2
CP325 90D 45	C 4 流土	無台 碗	a:13.5 c: 6.6 h: 3.3 浅黄橙	体部 1/3、底部 1/2	CP360 90D 5	C 4 流土	有台 碗	a:18.4 c: 7.9 h: 6.6 浅黄橙	内面黒色 体 部 1/4、底部ほぼ完

第4節 C地区の遺構と遺物

1 概要(第156・208・209図)

C地区は本遺跡の西側(本遺跡群中)最高所に所在し、南西から北東側へ延びる丘陵尾根(東西約170m、南北約80m)を中心に遺構が展開するものと推定されるが、発掘調査(昭和63(1988)年度)はそのうち東側約三分の一についておこなっている。調査区では、北西側に南西から延びる緩やかな尾根(筋)が位置し、その南西および北東側両端でそれぞれ南東側へ傾斜を強めながら尾根が下り、その間に南東向きの斜面と谷部を形成している。第2章第2節でふれたとおり、南側では前年度6月の暫定法切りによって第2号環濠の一部と土坑3基(第44～46号土坑)以上が損壊していた。谷部流土を除き遺物包含層がほとんど遺存せず、空中写真測量を用いた(本節挿図方位は総て座標北)こともあって、調査にあたっては特に区画は設定しなかった。なお、南西側では杉谷A古墳群第11号墳(第5章第2節)が重複している。

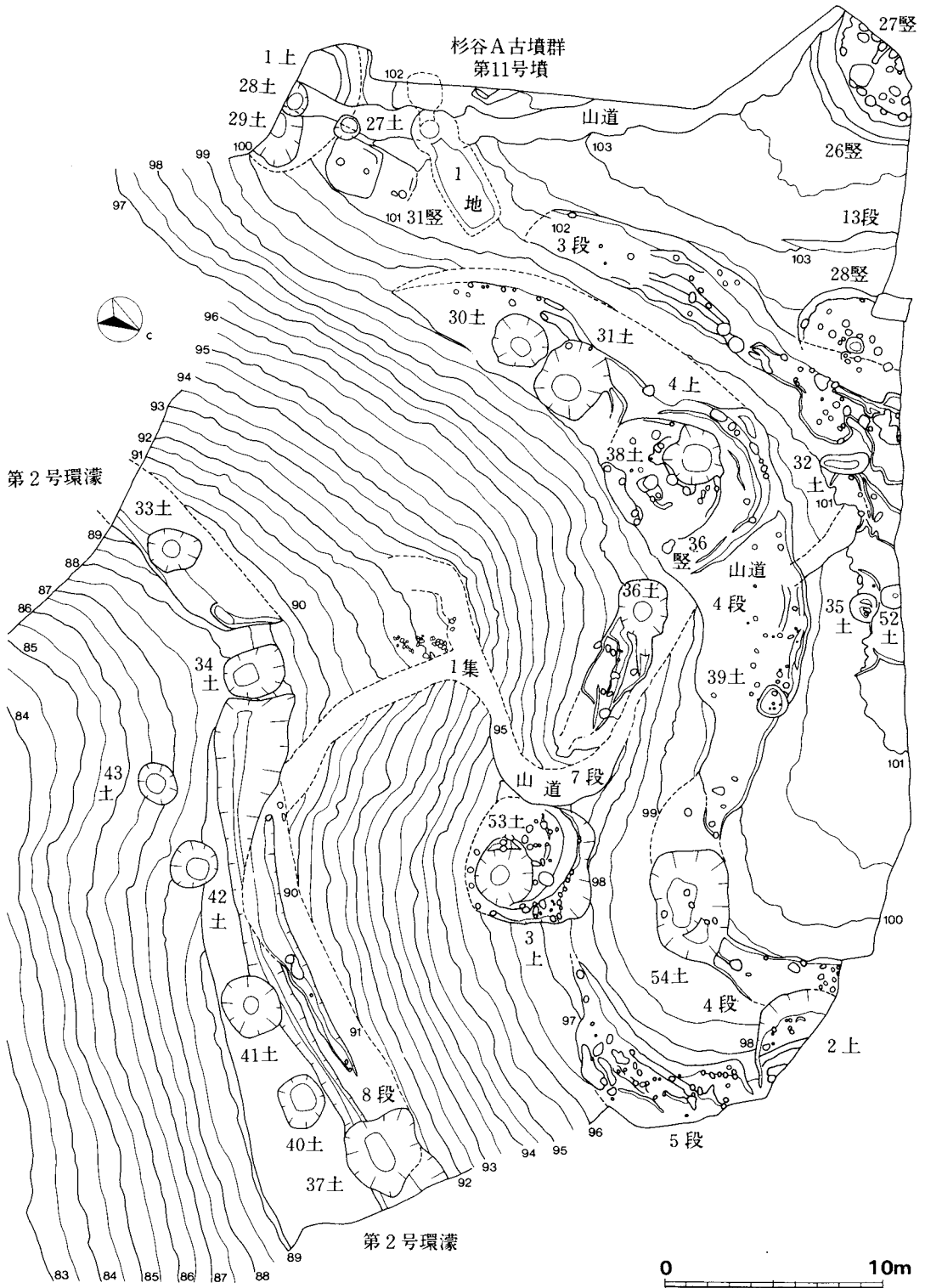
遺構は等高線に沿うかたちで概ね上(標高101m～)、中(同96m～)、下(同87～92m)3段に分かれて所在し、さらに上段は標高103m前後で最上部と上段下に、同様に中段も東側では98～99m前後で遺構面が上下に分かれる。中段から下段にかけての急斜面では、遺構は存在しないものの谷部を中心に遺物が多く出土した。下段よりさらに下った南東側下位斜面では、本節で段状遺構1基(第14号)を報告するが、遺物の出土は相対的には少なく、本来はB地区に含めるべきものであろう。

検出された遺構は竪穴式建物5基(第26～28・31・36号、第29・30・32～35号は欠番)、上屋4基(第1～4号、貯蔵穴の上屋と推定されるもの)、段状遺構7基(第3～5・7・8・13・14号、第6号は欠番)、土坑23基(第27～46・52～54号、第26号は欠番)、集石1基(第1号)、環濠1基(第2号)、地下式墳1基(第1号)であり、基本的には次項以下この順に報告するが、段状遺構のうち土坑に関連すると推定されるもの(第7・8号段状遺構)、および土坑のうち上屋をとまなうもの(第29・35・38号土坑)については、それぞれ後者ととともに報告する。中段下谷部流土中を除いた遺物の大半は遺構からの出土で31箱を得ている(個々の遺物の詳細は節末の観察表を参照されたい)。

2 竪穴式建物(第187～189・193・195・196図)

第26号竪穴式建物

上段最上部、本遺跡群の調査区内では最高所に位置する。内側に第27号竪穴が本遺構を切って所在するが、本遺構の床面掘削段階までその重複に気付かず、遺物の取り上げに一部不手際が生じた。西側約三分の二は調査区外で、南側隅も一部山道に切られているが、平面形は円形(径8.5m前後)と推定され、深さは東側壁で最大20cmを測る。壁際に幅22～



第209図 C地区全体図(S=1/300)

第4節 C地区の遺構と遺物

45cm、床面からの深さ5～12cmの周溝(溝底に小穴数基をともなう)が巡るほか、主柱穴としてP1・P2(径39～42・34～41cm、床面からの深さ68・77cm、P1-P2間は4.2m)を検出した。その位置関係から本竪穴は方形4本主柱配置をとるものと考えられるが、その場合P1-P2間やや外側で検出したP3(径32～48cm、P1-P3・P2-P3間は2.10・2.05m)は、床面からの深さが36cmとやや浅く支柱穴となるものかもしれない。

埋土は岩盤ブロックを含む淡茶褐色土でほぼ単一の土層である。遺物の出土は少量、土器4点(CS399～402、器台(あるいは壺)・壺・甕)を実測した。第27号竪穴上部出土品が混入している可能性があるが、いずれも弥生時代中期(後半)の所産と考えられる。本遺構の所属時期は、平面形、主柱配置からも弥生時代中期(後半)の可能性が高い。

第27号竪穴式建物

外側に先行して構築された第26号竪穴同様、上段最上部に位置する。北西側約三分の二は調査区外であるが、平面形は隅丸方形(一辺6.5×6.0m前後)と推定され、深さは西側調査区壁で最大30cmを測る。おそらくは長方形4本主柱(配置)の南東側柱列と考えられるP4・P5(径40～53・39～52cm、床面からの深さ39・33cm、P4-P5間は2.25m)、P4-P5間の外(南東)側壁際で土坑(径1.12×1.16m、床面からの深さ30cm)、南西および北東壁際で幅20～53cm、床面からの深さ5～13cmの周溝を検出した。

埋土は上部に淡褐色土②、中位から下部に淡茶褐色土③、下部に一部茶褐色土④、土坑内に炭化物を含んだ褐色土⑤が堆積する。遺物の出土は多くはなく、しかも②層および③層の一部は前述のとおり第26号竪穴とともに掘削したため、本遺構にともなう遺物を抽出できなかったが、以下では土器8点(CS403～410、甕・壺・高杯他)を実測し、輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の剥片約2.7gを得た。CP409(小片)は土坑から、CP410(上半部はほぼ完形)はP4-P5間のほぼ床面で倒位で出土した。埋土中の遺物は弥生時代中期(CP406)、同後期後半(以降、CP408)を含むが、床面出土のCP410を根拠に本遺構の所属時期を弥生時代終末と考えておきたい。

第28号竪穴式建物

上段下位北側に位置する。東側二分の一弱は第3号段状遺構と重複するが、床面の流失が著しく辛うじて土層断面で本竪穴床面が同段状遺構の埋土上に構築されたことを確認した。北側壁際は調査区外、北および北西側上部は一部山道により削平を受け、西側隅は調査前年度末のコンクリート製境界柱埋設作業により損壊している。南西約2mに所在する第13号段状遺構をともなう可能性がある。

平面形は隅丸長方形(5.4×5.0m程度)と推定され、深さは西側壁で最大40cmを測る。主柱は2本(P1・P2、径34～38・22(上部流失)cm、床面からの深さ32・40(推定)cm、P1-P2間は2.25m)で、竪穴の長軸方向に配置される。中央で炉(径82×92cm、深さ40cm)を検出し、炉と主柱穴の間にも性格不明の小穴2基(P3・P4、径26～35・22～29(上部流失)cm、床面からの深さ29・30(推定)cm、P3-P4間は1.30m)を検出した。南西壁際約二分

の一には幅17～50cm、床面からの深さ約7cmの周溝が遺存する。

本遺構はいわゆる焼失竪穴で、上部埋土(②～④)が比較的均質な地山質土であることから、焼失後人為的に埋め戻された可能性が高い。下部および炉上部には屋根の構成土かと推定される焼土ブロック(⑥・⑦)が堆積し、さらに床面上には炭化材・炭化物・炭粒(⑨・⑩)が広範囲に分布している。床面では大小4箇所の赤化面が認められた。炭化材の多くは角材(板材に対して)で、炉を中心に放射状に分布することから屋根材(垂木)かと推定されるが、壁際では板材とみられるものもあり一部壁材が含まれる可能性がある(床面ごと取り上げた炭化材は10箱を数えるが、今日に到るもクリーニングをおこなっておらず詳細な検討はできていない)。土層断面(第211図)では10層(炭粒、西側壁際下部)が壁材の痕跡、同11層(橙褐色地山土ブロック、西側周溝内)が壁材下端の抑えの土と考えたが、逆に炭化材(同9層)をはさんで上部に堆積する同8層(暗褐色土、西側壁際上部)については性格をよく把握できなかつた。なお、炉下部の炭粒(同13層)・炭粒を含む暗褐色土(同14層、中央厚約3cm)は焼失前の堆積土である可能性が高い。

遺物の出土は極少量で、わずかに土器・土製品2点(CP411・412、底部片・土錘)、石器2点(CS95・96、凹基無茎式(?)打製石鏃)を実測し、輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の剥片約13.3gを得たとどまる。所属時期を確定するには心許ないが、ここでは炉の両側に2基の小穴をもつ竪穴型式を根拠に、弥生時代中期後半(第3号段状遺構廃絶後あるいは規模縮小後が前提であるが)の所産と考えておきたい。

第31号竪穴式建物

上段下位南側に位置し、南西隅を第27号土坑に切られている。平面形は一辺約2.5mの方形、深さは西側壁で最大30cmを測る。主柱は2本(P1・P2、径23～25・34～38cm、床面からの深さ7・17cm、P1-P2間は約1.3m)と推定されるが、北側のP1が浅く不安が残る。北西隅では床面からの深さはわずかであるが、幅18～29cmの周溝を延長約1.2mにわたって検出した。北側に一段上がって(竪穴床面からの比高20～35cm)長さ約1.8m、幅1.1m以上の段状施設(当初は第29号竪穴と呼称していた)が接続する。

出土遺物は多くはないが、竪穴本体では土器5点(CP413～417、甕、CP416・417は同一個体の可能性あり)・石器1点(CS108、砥石?)、北側段状施設では土器3点(CP418～420、甕・高杯・鉢、CP418は同一個体破片が竪穴本体からも出土)を実測した。竪穴本体の土器は弥生時代後期後半に属するもの(CP414～416)が主体を占め、遺構の所属時期を表すものと考えられるが、北側段状施設の土器は弥生時代中期に属する可能性が高く、同施設が竪穴本体に先行する別の遺構との理解も可能であるが、いずれも小片であり竪穴本体からも弥生時代中期に属するもの(CP413・418)が出土していることから、ここでは両者を混入品と考え、北側段状施設を第31号竪穴に附属する柵と考えておきたい。

第36号竪穴式建物

中段上位中程に位置する。ほぼ全域にわたって第4号上屋による削平を受け、北西側で

第4節 C地区の遺構と遺物

は第38号土坑、南西隅では第31号土坑附属段状施設に切られ、南東側床面はすでに流失している。第4号段状遺構との切り合いは不明だが、本遺構が後出することはないようである。西側斜面上約4mに所在する第3号段状遺構(柵)をともなう可能性が高い。

平面形は円形(径約6.0m)、深さは西側壁で最大20cmを測る。支柱は4本(P1~P4、径30~31・27~32・29~35・34~42cm、床面からの深さ64・69・71・69cm、P1-P2間2.7、P2-P4間2.4、P4-P3間2.6、P3-P1間2.45m)、中央で片(南東)側が二段掘りの炉(径90×65cm、深さ30cm、南東側上段の深さは10cm)、炉の南西-北東方向に70cm離れて性格不明の小穴2基(P5・P6、径23~24・25~28cm、床面からの深さ32・36cm、P5-P6間は1.4m)を検出した。北西壁際約三分の一には幅10~23cm、床面からの深さ5cm前後の周溝(西側では断面V字状を呈する)が遺存する。

本遺構はいわゆる焼失堅穴で、上部を削平されているため人為的な埋め戻しの有無は判断としないが、焼土・炭化物をほとんど含まない褐色シルト(第213図17層)・灰褐色土(同9層)、淡褐色粘質土(第214図17層)の上部には、基本的にはそのまま第4号上屋の埋土(一部は整地土(同15・16層)?)が堆積し、逆にその下部には①焼土・炭化物を多量に含んだ暗(灰)褐色土(第213図18・19層)→②焼土他(同20~24層、屋根の構成土?)→③炭化材(同W)・炭粒ブロック(第214図18層、灰化した部材?)が床面との間に介在している。

炉の上部(同25~28層、②・③)、炉の北東側(第214図22・23層、②)および支柱P1-P3間と(おそらくは)P2-P4間(第213図19層・第214図19~21層、①他)の浅い落ち込み(床面からの深さはいずれも10cm程度)中の堆積土も焼失後のものとみられ、後者の落ち込みも焼失前(生活時)に何らかの機能を担っていた可能性が高い。炭化材の多くが炉を中心に放射状に分布することから、そのほとんどは屋根材(垂木)かと推定される(床面ごと取り上げた炭化材は3箱を数えるが、第28号堅穴同様詳細な検討はできていない)。なお、炉下部の炭粒(第214図29層、中央厚約3cm)については、焼失前(生活時)の堆積物であろう。

遺物の出土は比較的多く、土器7点(CP431~437、甕・他)、石器13点(CS119~131、砥石・石鏃素材剥片・他)を実測した。炉内下部(P1地点、第213図29層上面)、支柱P1の北東際(落ち込み内)床面(P2地点)、小穴P5の南際床面(P3地点)から出土したCP435、CP434、CP431は、堅穴南側(おそらくは)壁際床面(S1地点)から一括で出土した石鏃素材剥片(CS121~131)とともに、焼失前に遺棄されたものであろう。地点は詳らかではないが、CP432(CP433(底部)と同一個体の可能性が高い)、CP436・437(破片は第4号上屋・第38号土坑からも出土)も、大形の破片であり同様と考えたい。上記一括出土素材剥片の他、埋土中より輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の石鏃素材剥片・同石屑約143.3gを得ていることから、堅穴内で石鏃を製作していたことはほぼ確実といえる。なお本遺構の所属時期は、出土土器から弥生時代中期後半と考えられる。

3 上屋(第212～216・227～229図)

本項で報告する上屋(第1～4号)とは、隅丸方形の竪穴状の遺構で、貯蔵穴(第29・35・38号土坑)の附帯施設と推定されるものである。実際4基のうち3基に貯蔵穴がともなっており、残る1基も調査区外に所在した可能性が高い。竪穴式建物に比べて格段に深い(80～140cm)ものの壁の立ち上がりは緩やかで、主柱穴・炉が存在しない等の特徴はあるが、基本構造を普遍化するまでには到らなかったため、以下では対応する貯蔵穴とあわせて個々の事象に則して報告する。

第1号上屋・第29号土坑

上段下位南側位置し、中央部を山道および第27・28号土坑に切られている。南側約二分の一については、急斜面のため調査を断念した。

第1号上屋 平面形および規模は調査中の崩落のためやや不正確となったが、長径7.0m程度の隅丸方形と推定され、深さは北側壁で最大80cmを測る。当初は第30号竪穴としていたものである。床面北西壁際に幅30～48cm、床面からの深さ約5cmの周溝が3.0mにわたって巡るが、山道による削平を挟んで北東側では検出できなかった。埋土は南側調査区壁で本遺構を覆う土層が第29号土坑の上部に大きく沈み込んでいるのを確認しており、少なくとも土坑(貯蔵穴)が後出することはなく、また先行する可能性も少ない。西側床面で出土した弥生時代中期(後半)の略完形の甕(CP458)が、本遺構の所属時期を表すものと推定される。

第29号土坑 第1号上屋の床面で検出した。平面形は隅丸方形、上面規模2.90(推定)×2.54m、深さ232cmを測る。図化し得る遺物は出土していないが、第1号上屋と同時存在したものと推定される。

第2号上屋

中段下位北側に位置し、南西側で第4号段状遺構と重複するが、少なくとも本遺構は同遺構の上面では検出されていない。当初第33号竪穴としていたものである。平面形は隅丸方形と推定されるが、過半が急斜面により調査不能であったことから規模は不明である。床面中央を南東から北西へ延びる幅24～40cm、南西側床面からの深さ約20cmの溝を挟んで北東側は一段低く(比高約15cm)、南西側壁から本遺構床面最深部までの深さは130cmを測る。

調査区内(床面)では土坑(貯蔵穴)は検出されなかったが、北東側の調査区外に所在した可能性が高いと考えている。遺物の出土は少量で、土器3点(CP459～461、甕)、石器1点(CS112、凸基有茎式打製石鏃)を実測した。弥生時代中期(後半、CP459・CS112)と同後期後半(CP460・461)に属するものがあるが、前者はいずれも床面近くで検出され、本遺構の所属時期を表している可能性があるのにたいして、小片の后者は第4号段状遺構にともなうことも考えられる。

第3号上屋・第35号土坑

中段下位中程に位置し、西側壁は一部山道に切られている。第5・7号段状遺構と重複する可能性があるが、上部流失のため切り合い関係は不明である。

第3号上屋 平面形は隅丸方形、上面規模5.8×5.3m、深さは北側壁で最大140cmを測る。当初第34号竪穴としていたものである。壁北側中位で幅10cm前後の小段と十数基の小穴、床面北壁際で幅30cm以上、深さ10cm未満の周溝(東側では第35号土坑の上面に取りついている)、床面東壁際と床面西側で幅15cm前後の小溝、床面全体で20基前後の小穴を検出している。出土遺物は少量で、土器3点(CP490~492)を実測し、輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の剥片約33.0gを得たとどまる。土器はいずれも弥生時代中期(後半)に属し、本遺構の所属時期を表しているものと推定される。

第35号土坑 第3号上屋床面で検出した。平面形は円形、上面規模3.22(推定)×2.70m、深さ220cmを測る。埋土は大きく上中下三つに区分でき、上位は黒褐色土②→茶褐色土①で最終埋土、中位(③~⑥)は淡褐色土⑤・茶褐色土③を主とし、このうち5層(第215図)下部は平坦で中位以上が再掘削された可能性を示している。下位(⑦~⑫)は概ね褐色土系であるが、程度の差こそあれ地山(岩盤)ブロックを含んでおり、廃棄後の周辺からの崩落は比較的短期間のうちに進行したものとみられる。出土遺物は少量で、土器1点(CP493、甕)、石器2点(CS110・111、凸基有茎式?打製石鏃他)を実測したにとどまるが、前記第3号上屋出土土器と所属時期の矛盾はない。

第4号上屋・第38号土坑

中段上位中程に位置する。第36号竪穴を確実に切っているほか、第4号段状遺構とはほぼ全域にわたって、南側に隣接する第(30・)31号土坑ともわずかながら重複している。土層の堆積(第213図C-Dライン他)は(第36号竪穴→)第30・31号土坑→第4号上屋・第38号土坑→第4号段状遺構の順となるが、あくまで(廃棄後の)堆積の順位であって、出土遺物による検証も困難であることから、ここでは上屋・土坑群については相互に関連しつつ継起的に構築され、また段状遺構については(少なくとも複数の)上屋・土坑と同時存在したものと推定しておきたい。

第4号上屋 南東側が一部流失しているが平面隅丸方形、上面規模一辺7.5m程度と推定され、深さは西側壁で最大120cmを測る。当初第35号竪穴としていたものである。北側から南西側にかけての壁際では小穴8基をともなった幅40~60cmの小段(床面との比高15~50cm)が、一部北西側では床面壁際に幅70cm(深さ5cm前後)の溝が巡るが、その他床面の施設は第36号竪穴との重複が著しく判然としない。埋土の大部分(第213図1~12層・第214図1~6・13層)は第38号土坑と一連の自然堆積であるが、一部西側の壁際下部には廃棄後の流土とは明らかに異なる非常に硬く締まった土層(第213図13~16層・第214図14層)があり、第38号土坑再掘削の可能性(後述)などを考えあわせると、規模拡張のための整地あるいは構造物の裏込め等廃棄時にはすでに堆積していた可能性が高い。

出土遺物は比較的多く土器12点(CP446～457、壺・甕・鉢他、CP446・447は同一個体破片が第38号土坑からも出土)、石器7点(CS90・91・114～118、砥石(?))、磨製石剣、凹基無茎式・平基有茎式打製石鏃、楔形石器他)を実測し、(本来第36号竪穴にともなっていた可能性があるが)輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の剥片約133.1gを得た。CS90(砥石?)・CS114(磨製石剣)は西側小段ほぼ床面(S2・S3地点)で検出したもので、前述のとおり廃棄時にはすでに埋土下にあったと推定される。土器では弥生時代中期(後半、CS446～453)と同後期後半(CS454～456)に属するものがあるが、第36号竪穴との重複を考えれば前者は混入の可能性がある、後者が本遺構の所属時期を表すものと考えたい。なお自然面を残し調整も粗雑な凹基無茎式打製石鏃(CS117)は、本遺跡の弥生時代中期(後半)に通有の技法とは異なるようにみえ所属時期が注目される。

第38号土坑 第4号上屋床面で検出した。平面形は円形、上面規模3.12×2.58m、深さ225cmを測る。埋土上部(第213図3・6・9層・第214図1～6層)は第4号上屋と一連の自然堆積であるが、下部(第214図7～12層)では6および8層下面等が水平に近く、数回にわたり再掘削された可能性がある。出土遺物は多くはないが、土器8点(CP438～445、高杯・土鍾他、CP444・445は同一個体破片がそれぞれ第4号上屋・第4号段状遺構、第4号上屋からも出土)、石器3点(CS85～87、軽石製品)を実測し、輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の剥片約24.4gを得た。土器では弥生時代中期(後半?、CS441～443)に属するものを含むが、第4号上屋をとまなうとの判断から、同後期後半(CS438・444)に属するものが本遺構の所属時期を表すものと考えておきたい。

4 段状遺構(第211・213・219～221・225・229・231・241図)

本地区で検出された段状遺構は7基であるが、土坑(貯蔵穴)との関連性が高いと推定される第7・8号段状遺構は、それぞれ第36号土坑・第40～42号土坑とともに報告し、ここでは残る5基(第3～5・13・14号段状遺構)について報告する。

第3号段状遺構

上段下位中央に位置し、北側では第28号竪穴が本遺構上に構築されている。傾斜に直交して南北方向に延びる断面L字形の溝状の遺構で、内部に数十基の小穴と数条の溝状遺構をとまなう。当初第3号溝としていたものである。延長は20m以上、幅は2～3mを測る。埋土は上部(から一部では下部にかかるが)に暗茶褐色土①・黄褐色土②・褐色土④・淡褐色土⑧、下部に橙褐色の地山ブロックを含んだ(黄)褐色土系の土(③・⑤～⑦)が堆積していた。

出土遺物は多くはないが、土器9点(CP422～430、壺・甕・高杯他)、石器・石製品3点(CS97・103・104、平基無茎式打製石鏃・扁平片刃石斧・他)を実測し、他に輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の剥片約8.9gを得た。流出のためと考えられるが、CP423・CP429、CP425は破片がそれぞれ東側斜面下の第4号上屋・第38号土坑、第30号土坑からも

第4節 C地区の遺構と遺物

出土している。土器はほとんどが弥生時代中期後半に属し(CP428は弥生時代終末頃の所産であろうか)、本遺構の所属時期を表すものとみられる。急斜面に所在することから本遺構の機能は柵と推定され、ほぼ同時期と考えられる東側斜面下約4mに所在する第36号竪穴にともなう可能性が高い。

第4号段状遺構

中段下位はほぼ全域に所在する。概ね傾斜に直交して南北にZ字形に蛇行する断面L字形の溝状の遺構。内部に数十基の小穴と数条の溝状遺構をともなう。北東部で第54号土坑を切り、中央部で第39号土坑に切られているが、重複する他の中段下位の遺構群(第30・31号土坑、第4号上屋・第38号土坑、第36号竪穴、第2号上屋)については、いずれも本遺構の上面では検出できていない。当初は第54号土坑以北を第6号溝、以南を第4号溝としていたものである。延長45m以上、幅1.5~6.0mを測る。

出土遺物は少量であるが、土器4点(CP486~489、壺・高杯他)、石器1点(CS100、凹基無茎式打製石鏃)を実測した。本遺構の所属時期を表すものという確証はないのだが、弥生時代後期後半(以降)に属するものが主体を占め、本遺構の機能として柵、通路、竪穴式建物・貯蔵穴等構造物構築に係る造成面が想定されることから、一部第36号竪穴、第2号上屋にかかる弥生時代中期(後半)の段状施設が重複している可能性は残るものの、大部分は同後期後半の遺構(第30・31号土坑、第4号上屋・第38号土坑)にともなうものと考えておきたい。

第5号段状遺構

中段下位北側に位置する。傾斜に直交して南北に延びる断面L字形の溝状の遺構。内部に数十基の小穴と数条の溝状遺構をともなう。当初は第5号溝としていたものである。延長10m以上、最大幅3.4mを測る。標高や方向が概ね合致することから、本遺構の南西約10mに位置する第7号段状遺構との関連性(連続性)を検討したが、流失のため確定できなかった。出土遺物は極少量で、土器1点(CP462、底部片)を実測し、輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の剥片約2.7gを得たにとどまる。本遺構の所属時期を推定するには心許ないが、弥生時代中期に属するものであろうか。下位斜面が急峻であることから、機能的には通路等が考えられる。

第13号段状遺構

上段下位北側に位置する。傾斜に直交して北西から南東に延びる断面L字形の切土面。傾斜角は約30度で、延長5.4m以上を測る。埋土についての印象は薄く、出土遺物もないため所属時期・性格ともに不明であるが、北東約2mに所在する第28号竪穴造成にかかる可能性がある。

第14号段状遺構

下段よりさらに下った南東側下位斜面(標高約82m)に位置する。本来はB地区に含めるべき遺構である。傾斜に直交して北東から南西に延びる断面L字形の溝状の遺構。延長

11.6m、幅0.8～1.4mを測る。埋土は脆弱で表土に類似している。出土遺物はなく、所属時期・性格ともに不明である。

5 土坑(第210・212・214・216～218・221 図) 225・230・231・238・240・241)

本地区で検出された土坑23基の内訳は、弥生時代に属する貯蔵穴16基、うち上屋をとともなうもの3基(第29・35・38号、本節第4項)、段状施設・遺構をとともなう(可能性のあるものを含む)もの6基(第30・31・36・40～42号)、附帯施設を確認できなかったもの7基(第33・34・37・43～46号)、他に時期(および性格)不明6基、性格不明1基である。貯蔵穴の位置は、上段下位1基(第29号)、中段上位3基(第30・31・38号)、中段下位2基(第35・36号)、下段10基(第33・34・37・40～46号)となっており、上屋をもつものは上段下位から中段下位に、段状施設・遺構をとともなうものは中段上位から下段に、他のものは下段に位置し、時期的にも傾向性がありそうである。以下、概ね貯蔵穴からその他の土坑、中段から下段の順に報告する。

第30・31号土坑

中段上位南側に位置し、第4号上屋・第38号土坑の南側に南北に隣接して(第31号土坑が北側)所在する。第4号段状遺構と重複するが切り合いは不明、第31号土坑におそらくは附属する北側段状施設は、土層観察(第213図C-Dライン)の結果、第36号堅穴を切っ
てはいるが、第4号上屋・第38号土坑に少なくとも後出することはないようである。

第30号土坑 平面形は円形、上面規模は2.70×2.32m、深さは220cmを測る。第31号土坑の南西側段状施設(CP483出土)は、本遺構に附属する可能性もある。遺物の出土は少量であるが、土器5点(CP472～476、CP476は破片が第31号土坑からも出土)、石製品2点(CS89・106)を実測した。弥生時代後期後半のもの(CP473)を含んでおり、本遺構の所属時期を表している可能性がある。

第31号土坑 平面形は円形、上面規模は3.49×2.42m、深さは268cmを測る。北および南西側に溝状の段状施設をとともなうが、後者(CP483出土)は第30号土坑に附属する可能性もある。遺物の出土は少量で、土器6点(CP477～482、第30号土坑出土CP476は破片が第31号土坑からも得られている)を実測した。弥生時代後期後半のもの(CP479・481)を含んでおり、本遺構の所属時期を表している可能性がある。

第36号土坑・第7号段状遺構

中段下位南側に位置する。検出段階では単一の溝状の遺構であったが、掘削途中で西側が(第36号)土坑となった。両者の切り合いは確認できていない。

第36号土坑 平面形は円形、上面規模は2.60×2.26m、深さ292cmを測る。埋土は基本的には凸レンズ状の自然堆積なのであるが、上部(1～8)と下部(10～21)の境界面(7・8層と10層)に水平に近い乱れがあり、同面より上部が再掘削された可能性が高い。埋土上部は上位が褐色・茶褐色・淡褐色土、下位が黄褐色あるいは淡褐色の粘(質)土あるいは

第4節 C地区の遺構と遺物

はそのブロックを含む層よりなる。上部壁際の茶褐色粘質土⑨は、当初掘削段階の埋土と考えられる。埋土下部には大きく上下に4単位の堆積があり、下位から淡灰色シルト⑳→炭化物層(第1単位)、淡茶褐色細砂㉑→灰(褐)色シルト⑲・㉒→灰褐色土⑳→炭化物層(第2単位)、茶褐色地山岩盤ブロック㉓→淡(灰)褐色砂質土・細砂⑮・⑭→淡(灰)褐色シルト・土⑬・⑫→炭化物層(第3単位)、淡褐色砂質土⑪→褐色土⑩(第4単位)となっている。各単位は概ね下位から砂→シルト→(粘)土→炭化物層の順に堆積していることから、断続的に進行した土砂を含んだ雨水の流入とその沈澱過程を表しているものと考えられる。各単位上面の炭化物層は、雨水の浸透あるいは蒸発後に表面に浮遊していた植物遺体を取り残されたものであろう。坑底から中位まで約120cmに4単位が堆積する時間を推定する術をもっていないが、少なくとも年単位以上ということは考えにくい。

出土遺物は多くはないものの、土器・土製品6点(CP466~471、甕・土製紡錘車・他)、打製石器1点(CS102)を実測した。CP466・468・469・471・CS102の5点が上部から、CP467・470の2点が下部から出土した。弥生時代中期後半のものが多いが、上部から出土したCP471(甕)は同後期後半に属する可能性が高い。上部出土であることから再掘削の時期を表しているものかもしれない。

第7号段状遺構 傾斜にほぼ直交して東西に延びる断面L字形の溝状の遺構。内部に十数基の小穴と数条の溝状遺構をともなう。当初第7号溝としていたものである。延長6m以上、最大幅2.4mを測る。標高や方向が概ね一致することから、本遺構の北東約10mに位置する第5号段状遺構との関連性(連続性)を検討したが、流失のため確定できなかった。出土遺物は少量で、土器3点(CP463~465、甕・他)、石器1点(CS101、平基無茎式打製石鏃)を実測し、輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の剝片約38.0gを得たにとどまる。自然面を残し調整も粗雑な石鏃(CS117)は後出するものかもしれないが、土器(CP463~465)は弥生時代中期に属し、第36号土坑の当初掘削段階にともなうものとみられる。機能的には柵・通路・作業空間等が考えられる。

第33号土坑

下段南側に位置し、第2号環濠を切っている。平面形は円形、上面規模2.46×2.04m、深さ208cmを測る。埋土は凸レンズ状の自然堆積で、上部(1~6)下部(7~15)に二分されるが、いずれも地山質の土を含んでおり、比較的短期間の内に堆積が進行したものと推定される。出土遺物は極少量、底部片1点(CP569)を実測したが、本遺構の所属時期を表すものかどうかは判然としない。

第34号土坑

下段南側、第2号環濠の入口部分に位置し、谷部に堆積した無遺物の茶褐色土(23)から切り込んでいる。平面形は隅丸方形、上面規模は2.80×2.18m、深さは238cmを測る。埋土は概ね凸レンズ状の自然堆積であるが、斜面上位側の壁上部の崩落が顕著である。出土遺物は少量で、土器4点(CP570~573)を実測した。弥生時代後期後半(CP573)あるいは

はそれ以降(CP570)を含んでいるが、本遺構の所属時期は確定できない。

第37号土坑

下段北側に位置し、第2号環濠を切っている。平面形は隅丸方形、上面規模3.90×3.46m、深さ390cmを測り、16基中最大規模の貯蔵穴である。埋土は斜面上位から流入した地山質の締まりの弱い土を主体とし、多層堆積は示さなかった。出土遺物は極少量、底部片1点(CP574)を実測したが、本遺構の所属時期を表すものかどうかは判然としない。

第40～42号土坑・第8号段状遺構

下段北側に位置する。第41号土坑を中心に北東へ約5m離れて第40号土坑、南西へ約7m離れて第42号土坑が所在し、第40～42号土坑の北西側に1～1.5m離れて第8号段状遺構が並走する。第41号土坑と第8号段状遺構が直接第2号環濠を切っているほか、同部分の環濠は削平を受け浅くなっている。

第40号土坑 平面形は隅丸方形、上面規模は2.34×2.02m、深さは200cmを測る。遺物の出土は極少量で、甕?1点(CP575)を実測したが、本遺構の所属時期を表すものかどうかは判然としない。

第41号土坑 平面形は隅丸方形、上面規模は2.80×2.51m、深さは214cmを測る。遺物の出土は少量で甕?1点(CP576)を実測したが、本遺構の所属時期を表すものかどうかは判然としない。なお細片のため実測し得なかったが、弥生時代後期後半以降の高杯の口縁部も出土している。

第42号土坑 平面形は円形、上面規模は2.34×2.12m、深さは193cmを測る。遺物の出土は極少量で実測し得るものはなかったが、高杯・器台類の裾部細片(弥生時代後期後半以降?)が得られている。

第8号段状遺構 傾斜に直交し北東から南西方向に延びる断面逆台形の溝状の遺構。当初第8号溝としていたものである。延長12m以上、最大幅1.8m、最大深度73cmを測る。埋土は凸レンズ状の自然堆積で、上中下に大きく三分される。上位は(淡)茶褐色土系の最終埋土⑩・⑨、中位は下部から地山岩盤ブロックを含んだ褐色土⑫→(淡)褐色土④・⑧→黒褐色土⑪、下位は下部から地山質の黄褐色シルト⑮→暗褐色土⑭→黒色土⑬よりなる。中位以下の堆積は、基本的には斜面上位の地山(質の土)の崩落・流入から、植物遺体を主とした有機物の堆積までの一連の過程を示していると推定されるが、その形成単位が降雨毎なのか、年単位なのか、周辺の二次林化といった比較的長いサイクルなのかは判然としない。

出土遺物は少量であるが、土器3点(CP578～580、甕・高杯)、石器1点(CS105、柱状片刃石斧?)を実測した。弥生時代中期後半期(CP580)と後期後半(CP578)に属するものがあるが、第2号環濠と切っていることから、前者は混入品の可能性が考えられる。本遺構は、第40～42号土坑(貯蔵穴)の斜面上位に構築された柵と推定され、周辺の第2号環濠の削平も本遺構群構築にかかるものであろう。

第43号土坑

下段中央やや下位(東側)に位置する。平面形は隅丸方形、上面規模は2.07×1.70m、深さは159cmを測る。遺物の出土は極少量、高杯? 1点(CP577)を実測したが、本遺構の所属時期を表すものかどうかは判然としない。

第44～46号土坑(図版第44)

下段南側に位置する。第2章第2節および本節冒頭でふれたとおり、第2号環濠の南側延長部分とともに、1987年6月の暫定法切りによって損壊したもので、北側から第44～46号土坑と呼称する。法面最上部に遺存する箇所も、安全確保の点から調査(掘削)を断念したため、形態・規模・所属時期は不明だが、下段に位置する他の貯蔵穴(第33・34・37・40～43号土坑)と大きく異なるものではないとの印象をもっている。

第27号土坑

上段下位南側に位置する。南および東側で第1号上屋・第31号竪穴を切り、西側は山道に切られている。平面形は円形、上面規模は1.16×1.04m、深さは99cmを測る。遺物の出土はなく、所属時期・性格ともに不明である。

第28号土坑

上段下位南側に位置する。第1号上屋(中央)・第29号土坑(西側)を切り、上部は山道に切られている。平面形は円形、上面規模は1.58×(1.30)m、深さ110cm以上を測る。遺物の出土はなく、所属時期・性格ともに不明である。

第32号土坑

上段下位北側に位置する。東側で不整形な落ち込みを切り、南側上部は山道により削平されている。平面形は隅丸方形、上面規模は2.26×0.94m、深さは94cmを測る。遺物の出土は少量で、弥生時代中期に属する壺1点(CP421)を実測したにとどまる。出土遺物が本遺構の所属時期を表している可能性はあるが、性格は不明である。

第39号土坑

中段上位やや北側に位置し、第4号段状遺構を切っている。平面形は隅丸三角形、上面規模は1.43×1.30m、深さは42cmを測る。北側壁上部が約120cmにわたって焼けている一方、床面で径8～14cm、深さ4～13cmの小穴4基を検出した。埋土は炭化物を含む暗褐色土、特に下部は炭化物を多量に含んでいる。遺物の出土は少量で、弥生時代中期に属する甕2点(CP484・485)を実測したが、本遺構の所属時期を表しているのかどうか、土坑内で火の使用は認められるにしても、その性格などは不明である。

第52・53号土坑

ともに上段下位北側に位置し、不整形な落ち込みと重複するが切り合いは不明である。いずれも平面形は円形、上面規模および深さは、第52号土坑が(1.35)×1.13m・24cm、第53号土坑が1.36×1.14m・36cmを測る。遺物の出土は極少量、ともに実測可能なものは得られず、所属時期・性格は不明である。

第54号土坑

中段上位北側に位置する。土層断面を示さなかったが、上部全域(86cm以上)が第4号段状遺構に切られている。平面形は隅丸方形、上面規模は5.08×3.28m、深さ132cm以上を測る。埋土は上部が黄褐色系の地山礫を多量に含んだ茶褐色土、下部は黄褐色地山岩盤ブロックである。遺物の出土は極少量で、凝灰岩製の磨製石斧1点(CS88、弥生時代中期?)を実測したが、本遺構の所属時期を表すものかどうかは判然としない。確証はないものの、性格としては風倒木痕の可能性が考えられる。

6 集石(第222図)

第1号集石

中段下谷部中央に位置する。傾斜角約20度の地山面にほぼ接して、1.5~3.0mの範囲に人頭大から拳大の礫が数十個集積している。集石上位の傾斜はより急峻であるが、下位は第2号環濠土橋部(第34号土坑所在)へ向けてやや緩やかとなっている。伴出遺物は谷部流土(遺構外)出土品(CP581~601、CS146・147・149・150)の一部が想定され、概ね弥生時代中期および後期後半に属するものと考えられるが、そのほとんどが斜面上位から二次的に移動(流出)したものと推定されることから、本集石の所属時期(下限はもとより場合によっては上限についても)を直接表すものとはいえない。本集石が片付け等消極的にであれ、あるいは使用を意図して積極的にであれ人為的に集積されたものなのか、または斜面上位の土砂の崩落・流出によって自然的に結果として集積したものなのか、集積時期を含めていくつかの事例が想定されるが、特定するにいたっていない。

7 環濠(第156・221・222・234~237・240・243図)

第2号環濠

南東側下段に位置する。幅3.05(下端)~3.40(上端)mにわたって谷部中央を掘り残して入口部としており、調査では同部を挟んで東側(谷部~尾根部)、南側(谷部)と呼称した。南側では第33号土坑、出入口部では第34号土坑、東側では第8号段状遺構・第37・41号土坑が本遺構を切っている。調査前は急斜面に数段にわたって造成された開墾(植林あるいは耕作?)にともなう帯状の平坦面(群)を形成していたが、箇所によっては1mを越える流土の堆積があり、本遺構の存在を想定することはできなかった。調査区内での検出延長は40m弱であるが、(環濠)南側10mのさらに南には、前年度6月の暫定法切りによって損壊し同面の最上部に遺存する(おそらくは第44~46号土坑に切られている)箇所を約20mにわたって確認している。さらにその南側と翻って(環濠)東側の延長部分も数m(急斜面のため調査を断念した)を残していずれもすでに崩落しているものと推定される。調査区外の(急)斜面は旧状をとどめない箇所が少なくなく、踏査によって本遺構の全形を確定することはできなかったが、本地区西端の濠状の窪みを本遺構の西端と考え

ば、東西約160m、南北約80mの範囲を楕円形に巡ることとなり、本遺跡A地区第1号環濠(東西約85m、南北約47m)を凌ぐ規模である可能性がある。

検出面(谷側)の標高は、東側では88.8~90.0、南側では88.2~89.2mを測り、調査区内の最高所(103.7m、地区内では推定約109m)との比高差は13.7~15.5mであるが、谷部では規模は不明ながら上部はすでに流失しており、東側尾根部も第8号段状遺構・第37・40~42号土坑構築にともない削平を受け(北東調査区壁付近で最大幅4.6mを測る谷側の平坦面もその結果と考えられる)、ともに掘削当時の面を有していない可能性が高い。尾根側も崩落が著しいが、傾斜変換点(調査中の流失のためやや不正確となったが)を検出面(標高は東側では89.0~91.7、南側では89.4~90.6m)とすると、幅は東側では2.85~3.6、南側では2.85~3.15m、深さは東側北東部で1.8~1.9、中央部で2.1(最大)、南西部で1.7~1.8、南側で1.4~1.6m(濠底の標高は東側では87.2~89.8、南側では87.9~89.0m)を測る。ともに第1号環濠を上回る規模を有し、同環濠ほどではないが断面形はV字状を呈する。なお、入口部に接する環濠の東および南両側壁の立ち上がりは、濠底比高差が約70cmあるにもかかわらずともに比較的急で、平面的にも同部に対して弧を描いており意図的な造作が想定される。

埋土は東側尾根部では暗茶褐色土系の単調なものであるが、同谷部(およびおそらくは南側谷部も)では、基本的にはレンズ状の自然堆積ながらいくつかの単位が認められる。最下部の礫を挟んだ灰褐色シルト⑩・⑪層は廃棄時までに再掘削されなかった堆積物、下部の暗茶褐色土⑨層が廃棄後の初期流土で、次いで暗褐色系の⑥~⑧層(下位⑧層はシルト質、上位⑥・⑦層は炭粒を含む)が流入したものと推定される。遺物の多くは⑥層以下の出土で、東側尾根部の暗茶褐色土は⑨(ないしは⑥~⑧)層に対応するものであろう。上部の黄褐色系の流土④・⑤層は地山質で、そのうち上位④層は非常に硬い。最上部の褐色土系の①~③層は最終埋土、④・⑤層同様遺物をあまり含まないことから、すでに遺物を包含した上部の土砂の流出が一段落したのちの堆積物と推定される。⑨層から①層までの堆積速度を推し量る術を持たないが、少なくとも⑥層までは比較的短期間のうちに進行したのではなかろうか。

遺物の出土は本地区の遺構のなかでは最も多く、土器・土製品45点(CP524~568、壺・甕・鉢・高杯・水差・土錘、東側尾根部5点、同谷部14点、南側26点)、石器・石製品12点(CS92~94・132~140、砥石・軽石製品・凹基無茎式?打製石鏃・石核・素材剥片、東側尾根部3点、同谷部1点、南側8点)の計57点を実測し、他に輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の剥片約65.4gを得た。出土土器は概ね弥生時代中期後半の所産であり、遺構の所属時期を表しているものと考えられる。高杯類が定着していること、搬入品を含め諸器類に西日本諸地域から波及した凹線文系土器群の影響が顕著に認められることなどから、(北)加賀地域での磯部式(中期後半古段階)→戸水B式(同新段階)という変遷のうち、後者に並行するものと推定される。現在能登地域では、前者の段階も本遺跡(A地区第12号

堅穴式建物他)が資料的には最も充実しているのだが、とりわけ後者の段階についてはまとまった資料はこれまで皆無とってよく、溝(環濠)とはいえ本遺構資料(および並行する本遺跡遺構資料)がほとんど唯一のものである。

8 地下式墳(第223図)

第1号地下式墳

上段下位南側に位置する。当初は第26号土坑としていた平面円形の堅坑と、北東側に長方形、南西側に隅丸方形の地下室をもつもので、前者を第1、後者を第2地下室と呼称する。堅坑(上面径2.16、底面径0.88、深さ4.0(～)m)上部を山道に切られているほかは他の遺構との切り合いはない。第1地下室の床面は、堅坑底面より1.2m高く、長さ3.6、幅1.4～1.6mを測り、堅坑に向かって幅を狭めつつ同坑とは長さ0.7、幅0.6～1.1mの通路により連結する。壁面はいずれの面も垂直に近く、天井部はすでに崩落しているものの高さは1.7m以上と推定される。検出面の規模は調査中の崩落のため正確とはいえないが、長さ4.0、幅2.0～2.3m程度である。第2地下室の床面は、堅坑底面とほぼ同じ高さで、長さ1.5、幅1.5～1.6mを測り、堅坑に向かって幅を狭めつつ同坑とは第1地下室と同規模の通路(高さ1.2m)により連結する。奥壁は垂直に近く、側壁、通路上部の順に天井部への立ち上がりはやや緩やかとなる。天井部は若干崩落しているが、高さは1.8m程度と推定される。このほか、第1地下室の通路より南東隅床面で長さ48cm、幅22cmの礫を、同地下室から堅坑へ下る壁面の南東側で幅10cm前後、高さ15および25cmの小段を2箇所検出した。

埋土は堅坑部分では上位に(表土①・)暗茶褐色土②・黄褐色土③、中位から下位に黄褐色砂質土④・淡茶褐色砂質土⑤・(黄褐色)岩盤ブロック⑥(第223図同層中程の点線は、岩盤ブロックの堆積の方向性を示したもので、同部分に何か土層の境界があるわけではない)が堆積する。第1地下室は地山質の砂質土が主体で、第2地下室は天井部の崩落土が若干堆積するものの、堅坑からの土砂の流入はわずかでほぼ空洞であった。第2地下室への土砂の流出のため中央部がやや窪んだのであろうが、堅坑の少なくとも中位から下位の地山質の埋土は、壁面に大きな崩落が認められないことから人為的に埋め戻されたものと推定される。本遺構からは所属時期を表す遺物は全く出土していないが、県内外の類例〔江崎武1985〕にしたがい中世に属する墓と考えておきたい。

9 遺構外出土遺物(第232・233・238・239・241・244図)

表土および流土他遺構外出土遺物では、土器・土製品52点(CP494～523・581～602)、石器・石製品13点(CS598・99・113・141～150)の計65点を実測し、輝石安山岩ないしは黒色頁岩製の剥片約214.6gを得た。土器には弥生土器、須恵器、磁器(染付)があり、時期的には弥生時代、古代、明治時代に属する。

第4節 C地区の遺構と遺物

弥生土器・土製品は37点(CP508～523・581～601)を実測した。CP508～523(土錘3点(CP520～522)を含む)の16点は、CP513(中段下斜面出土)を除き総て中段から出土したもので、ほとんどは弥生時代中期(後半)に属するもの(CP523の高杯は同後期後半)とみられる。CP581～601の21点は谷部流土中より得たもので、弥生時代後期後半(以降)のものも若干含まれる(CP595他)が中段同様同中期(後半)に属するものが多い。小片ではあるが四頭渦紋(?)の陽刻紋スタンプを施したCP581が特筆される。

須恵器は14点(CP494～507、蓋・(無台)杯・瓶)を実測した。総て中段から出土したもので、蓋類が8割近くを占める。時期的には7世紀末～8世紀初頭に属するものが主体を占め、一部8世紀前半代に下るもの、さらにそれ以降(9世紀代?)のものも含まれるのであろうか。ほとんどは鳥屋窯跡産と推定される。

磁器は中段下の谷部流土中より、美濃の染付摺絵椀1点(CP602)が出土した。明治時代(19世紀後半)に属するものである。

石器は打製石鏃3点(CP98・99・113、凹基無茎式2・凸基有茎式1)、磨製石斧3点(CP141・142・145、太型蛤刃石斧、CS142は完形品)、有溝石錘2点(CS146・147、完形品)、敲石2点(CS149・150、CS149は完形品)、軽石製品1点(CS143)、他(CS144・148)が各地点から出土している。ほとんどは弥生時代中期に属するものであろう。

10 小 結

本地区では、竪穴式建物5基、(貯蔵穴)上屋4基、段状遺構7基、土坑23基(貯蔵穴16基)、集石1基、環濠1基、地下式墳1基を検出し、土器・土製品204点、石器・石製品66点の計270点を実測し報告した。

弥生時代中期(後半)では竪穴式建物3基・上屋3基・段状遺構4基(柵・通路他)・土坑4基(貯蔵穴3基)・環濠1基、同後期後半では竪穴式建物1基・上屋1基・段状遺構2基(柵・通路他)、土坑(貯蔵穴、後期後半以降を含む)13基、同終末では竪穴式建物1基、(不確実だが)中世では地下式墳1基がそれぞれあげられ、他に遺物では古代・明治時代のものが若干得られている。

そのなかにおいて弥生時代中期後半の遺構と遺物は、水稻耕作が可能視される低地(標高10m以下)との比高80～110mを測る丘陵部という特殊な立地(たとえば上屋をともなう貯蔵穴や段状遺構の存在、石器組成に石製穂摘具が欠落するといった点などにその特殊性が表れているのかもしれない)であるとはいえ、本遺跡群はもとより能登地域では現在最も充実した資料といえる。とりわけ第2号環濠をともなう新段階(おそらくは第28・36号竪穴・第3号段状遺構などが並行するのであろう)のそれは、丘陵部に立地し急斜面に環濠を巡らす狭義の高地性集落としては北陸最古のものである。

参考文献

江崎 武 1985 「中世地下式墳の研究」『古代学探叢』 II 早稲田大学出版部

第4章第4節挿図断面図土層一覧

第210図

- 1 表土（黄色盛土を含む）
- 2 淡褐色土
- 3 淡茶褐色土
- 4 茶褐色土
- 5 褐色土（炭化物を含む）
- 6 淡茶褐色土（岩盤ブロックを多量に含む）
- 7 褐色土
- 8 淡茶褐色土（岩盤ブロックを含む）
- 9 暗褐色土（炭化物を含む）
- 10 暗褐色土（炭化物を多量に含む）
- 11 茶褐色粘質土

第212図

- 1 茶褐色土

第213図

- 1 黄褐色土
- 2 黒色土（炭化物を含む）
- 3 暗褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 褐色土
- 6 茶褐色土
- 7 淡褐色土
- 8 暗灰褐色土
- 9 灰褐色土
- 10 黄褐色土（暗灰褐色土ブロックを含む）
- 11 暗灰色土（炭化物を含む）
- 12 淡茶褐色土（地山土を含む）
- 13 淡褐色土（硬い）
- 14 淡灰褐色土
- 15 淡褐色土（非常に硬い）
- 16 黄褐色土（非常に硬い、地山土を含む）
- 17 褐色シルト
- 18 暗灰褐色土（焼土・炭化物を多量に含む）
- 19 暗褐色土（焼土・炭化物を多量に含む）
- 20 焼土・炭化物
- 21 焼土（黄褐色、やや脆い）
- 22 焼土（黒褐色）
- 23 黄褐色土
- 24 焼土（黄褐色、硬い）
- 25 暗褐色土（焼土ブロックを含む）
- 26 暗褐色土
- 27 黄褐色土（硬い）
- 28 炭粒ブロック
- 29 炭粒（暗黄色土ブロックを含む）

第211図

- 1 暗茶褐色土（攪乱）
- 2 淡褐色土
- 3 淡褐色土（橙褐色地山ブロックを含む）
- 4 黄褐色土
- 5 褐色土
- 6 焼土ブロック（赤褐色）
- 7 焼土ブロック（黄褐色）
- 8 暗褐色土
- 9 炭化材・炭化物（褐色土を含む）
- 10 炭粒
- 11 橙褐色土（地山ブロック）
- 12 暗茶褐色土（橙褐色地山ブロックを含む）
- 13 炭粒（炭化物を含む）
- 14 暗褐色土（炭粒を含む）

第214図

- 1 黄褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 茶褐色土
- 4 暗褐色土（焼土・炭粒を多量に含む）
- 5 灰褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗黄灰色シルト
- 8 灰褐色砂質土
- 9 暗灰褐色砂質土
- 10 暗橙黄色シルト
- 11 暗黄灰色シルト（地山土ブロックを含む）
- 12 暗茶灰色シルト
- 13 黄褐色土（暗灰褐色土ブロックを含む）
- 14 黄褐色土（非常に硬い、地山土ブロックを含む）
- 15 黒色土（炭化物を含む）
- 16 淡褐色土（地山土ブロック）
- 17 淡褐色粘質土
- 18 炭粒ブロック
- 19 褐色土（炭粒を含む）
- 20 褐色土（焼土・炭粒を含む）
- 21 黄褐色土（炭粒を多量に含む）
- 22 焼土（黄褐色）
- 23 黄褐色土（硬い）

第215図

- 1 茶褐色土
- 2 黒色土
- 3 淡茶褐色土
- 4 淡茶褐色土（焼土・炭粒を多量に含む）
- 5 淡褐色土（地山岩盤ブロックを含む）
- 6 黄褐色地山岩盤ブロック
- 7 淡褐色土
- 8 褐色土（地山岩盤ブロックを含む）
- 9 暗褐色土（地山岩盤ブロックを含む）
- 10 暗褐色土（地山岩盤ブロックを多量に含む）
- 11 淡褐色土（地山ブロックを含む）
- 12 茶褐色土（地山ブロックを含む）

第4節 C地区の遺構と遺物

第216図

- 1 褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 淡褐色土
- 4 黄褐色粘土（小礫を含む）
- 5 黄褐色粘質土
- 6 褐色土（黄褐色粘土ブロック・炭化物を含む）
- 7 淡褐色粘土（小礫を含む）
- 8 褐色土（黄褐色粘土ブロック・炭化物を少量含む）
- 9 茶褐色粘質土
- 10 褐色土
（灰褐色粘土ブロック・炭粒・茶褐色地山岩盤ブロックを含む）
- 11 淡褐色砂質土（茶褐色地山岩盤ブロックを含む）
……………炭化物層（最大厚1cm）……………
- 12 淡褐色土
（淡灰褐色シルトブロックを含む）
- 13 淡灰褐色シルト
- 14 淡灰褐色細砂
- 15 淡褐色砂質土（小礫・炭粒を含む）
- 16 茶褐色地山岩盤ブロック
……………炭化物層（最大厚1cm）……………
- 17 灰褐色土
- 18 灰褐色シルト
- 19 灰色シルト
- 20 淡茶褐色細砂
……………炭化物層（最大厚1cm）……………
- 21 淡灰色シルト

第217図

- 1 褐色土
- 2 橙褐色地山岩盤ブロック
- 3 淡褐色土（橙褐色地山岩盤ブロックを含む）
- 4 淡褐色土
- 5 淡褐色土（黄褐色地山岩盤ブロックを含む）
- 6 淡褐色土（黄褐色地山岩盤ブロックを少量含む）
- 7 淡褐色土（黄褐色地山岩盤ブロックを多量に含む）
- 8 明褐色土（黄褐色地山岩盤ブロックを含む）
- 9 淡褐色土（黄褐色地山岩盤ブロックを含む）
- 10 淡茶褐色土
- 11 黄褐色シルト（地山質）
- 12 黄褐色粘質土
- 13 褐色土（黄褐色地山岩盤ブロックを含む）
- 14 黄褐色砂質土（地山質）
- 15 褐色土（黄褐色地山岩盤ブロックを多量に含む）
- 16 黄褐色土（拳大以下の礫を含む）
- 17 黄褐色土
- 18 淡褐色土（拳大以下の礫を含む）
- 19 淡褐色土
- 20 茶褐色土（淡褐色土ブロックを含む）
- 21 淡褐色土（茶褐色土ブロックを少量含む）
- 22 淡褐色土（茶褐色土ブロックを含む）
- 23 茶褐色土

第221図

- 1 暗茶褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土（橙褐色地山ブロックを含む）
- 4 褐色土
- 5 褐色土（橙褐色地山ブロックを多量に含む）
- 6 褐色土（橙褐色地山ブロックを少量含む）
- 7 褐色土（橙褐色地山ブロックを含む）
- 8 淡褐色土
- 9 茶褐色土
- 10 淡茶褐色土
- 11 黒褐色土
- 12 褐色土（地山岩盤ブロックを含む）
- 13 黒色土
- 14 暗褐色土
- 15 黄褐色シルト

第222図

- 1 暗褐色土
- 2 褐色土
- 3 淡褐色土
- 4 黄褐色土（非常に硬い、小礫を含む）
- 5 黄褐色粘土
- 6 暗褐色土（炭粒を含む）
- 7 暗褐色土（炭粒を多量に含む）
- 8 暗褐色シルト
- 9 暗茶褐色土（下部に20cm大の礫を含む）
- 10 灰褐色シルト（下部に5～6cm大の礫を含む）
- 11 灰褐色シルト
- 12 茶褐色土

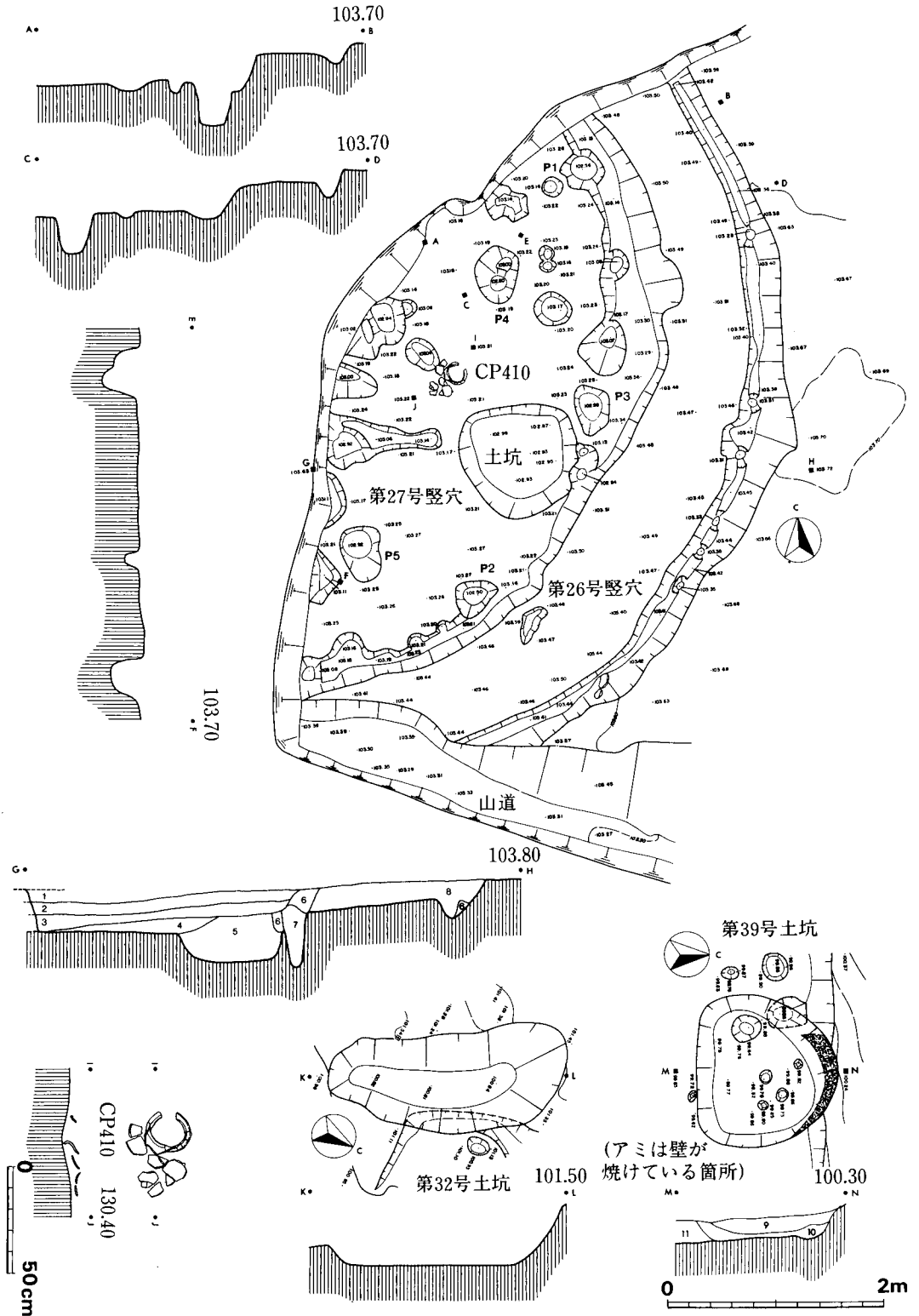
第223図

- 1 表土
- 2 暗茶褐色土（硬い）
- 3 黄褐色土
- 4 黄褐色砂質土
- 5 淡茶褐色砂質土（岩盤ブロックを多量に含む）
- 6 岩盤ブロック（淡茶褐色土を含む）

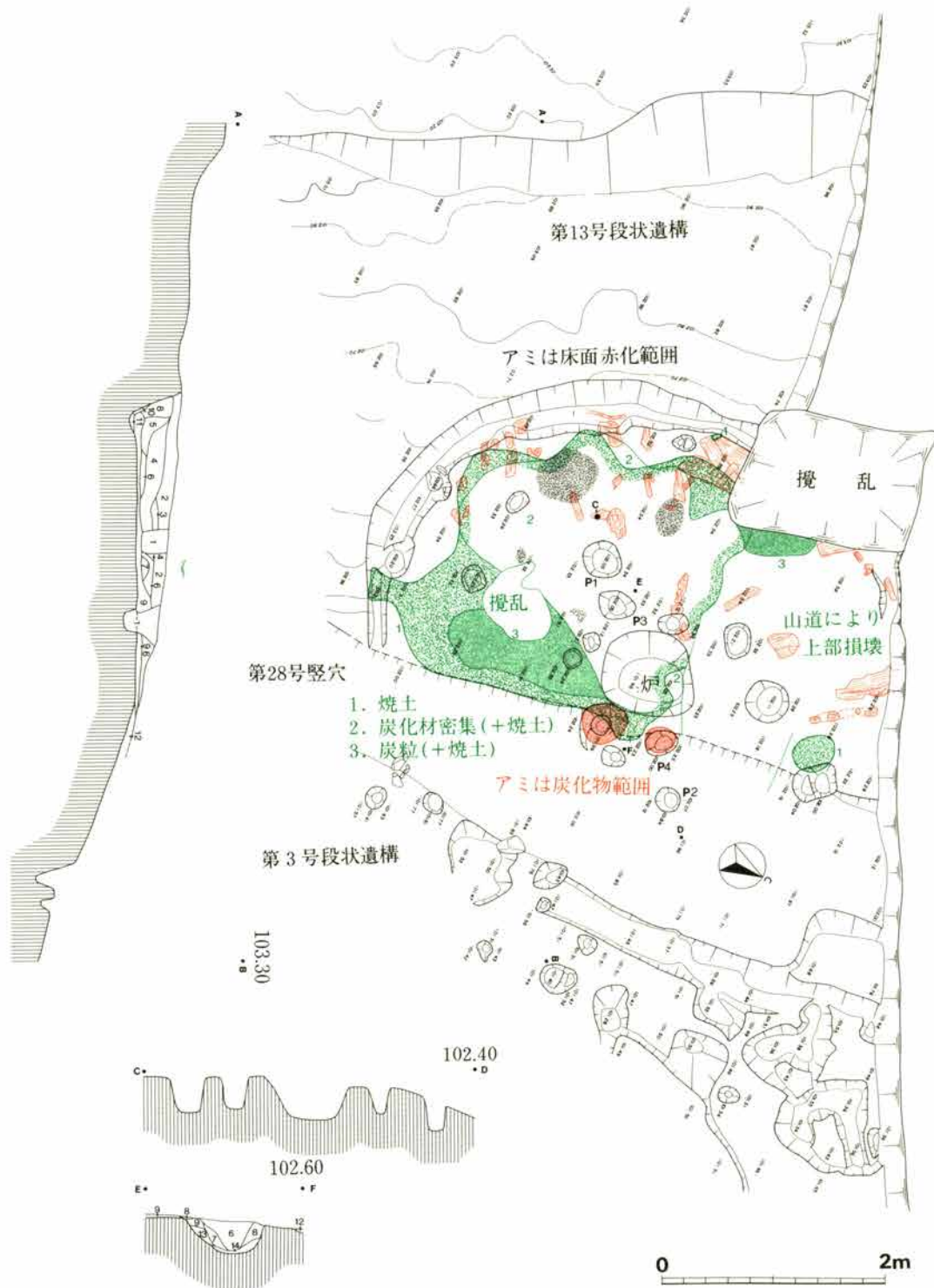
C地区遺構一覧

遺構名	位置	平面形態	長径m×短径m×深さcm	備考
第26号竪穴式建物	上段最上	円形	(8.5)×(8.5)×20	弥生時代中期後半?
第27号竪穴式建物	上段最上	隅丸方形	(6.5)×(6.0)×30	弥生時代終末
第28号竪穴式建物	上段下位	隅丸方形	(5.4)×(5.0)×40	弥生時代中期後半?
第31号竪穴式建物	上段下位	方形	2.5×2.5×30	弥生時代後期後半
第36号竪穴式建物	中段上位	円形	(6.0)×(6.0)×20	弥生時代中期後半
第1号上屋	上段下位	隅丸方形	(7.0)×-×80	弥生時代中期後半
第29号土坑		隅丸方形	(2.90)×2.54×232	
第2号上屋	中段下位	隅丸方形	-×-×130	弥生時代中期後半
第3号上屋	中段下位	隅丸方形	5.8×5.3×140	弥生時代中期後半
第35号土坑		円形	3.22×2.70×220	
第4号上屋	中段上位	隅丸方形	(7.5)×-×120	弥生時代後期後半
第38号土坑		円形	3.12×2.58×225	
第3号段状遺構	上段下位	延長20～・幅2.0～3.0m、断面L字形		弥生時代中期後半
第4号段状遺構	中段上位	延長45～・幅1.5～6.0m、平面乙字形		弥生後期後半
第5号段状遺構	中段下位	延長10～・幅～3.4m、断面L字形		弥生時代中期?
第7号段状遺構	中段下位	延長6～・幅～2.4m、断面L字形		弥生時代中期(後半)
第8号段状遺構	下段	延長12～・幅～1.8m、断面逆台形		弥生時代後期後半
第13号段状遺構	上段下位	延長5.4m～、傾斜約30°のカット		弥生時代中期後半?
第14号段状遺構	下段下位	延長11.6・幅0.8～1.4m、断面L字形		時期不明
第27号土坑	上段下位	円形	1.16×1.04×99	時期不明
第28号土坑	上段下位	円形	1.58×(1.30)×110～	時期不明
第30号土坑	中段上位	円形	2.70×2.32×220	弥生時代後期後半
第31号土坑	中段上位	円形	3.49×2.42×268	弥生時代後期後半
第32号土坑	上段下位	隅丸方形	2.26×0.94×94	弥生時代中期?
第33号土坑	下段	円形	2.46×2.04×208	弥生時代後期後半～?
第34号土坑	下段	隅丸方形	2.80×2.18×238	弥生時代後期後半～
第36号土坑	中段下位	円形	2.60×2.26×292	弥生中期後半・後期後半
第37号土坑	下段	隅丸方形	3.90×3.46×390	弥生時代後期後半～?
第39号土坑	中段上位	隅丸三角	1.43×1.30×42	時期不明
第40号土坑	下段	隅丸方形	2.34×2.02×200	弥生時代後期後半
第41号土坑	下段	隅丸方形	2.80×2.51×214	弥生時代後期後半
第42号土坑	下段	円形	2.34×2.12×193	弥生時代後期後半
第43号土坑	下段	隅丸方形	2.07×1.70×159	弥生時代後期後半～?
第44～46号土坑	下段	-	-×-×-	未調査
第52号土坑	上段下位	円形	(1.35)×1.13×24	時期不明
第53号土坑	上段下位	円形	1.36×1.14×36	時期不明
第54号土坑	中段上位	隅丸方形	5.08×3.28×132～	時期不明
第1号集石	中段下谷	1.5×3.0mの範囲に人頭から拳大の礫が数十個集積、時期不明		
第2号環濠	下段	幅～3.6m、深さ～2.1m、断面V字形		弥生時代中期後半
第1号地下式墳	上段下位	平面円形の竪坑と地下室2、深さ4m		中世?

第4節 C地区の遺構と遺物

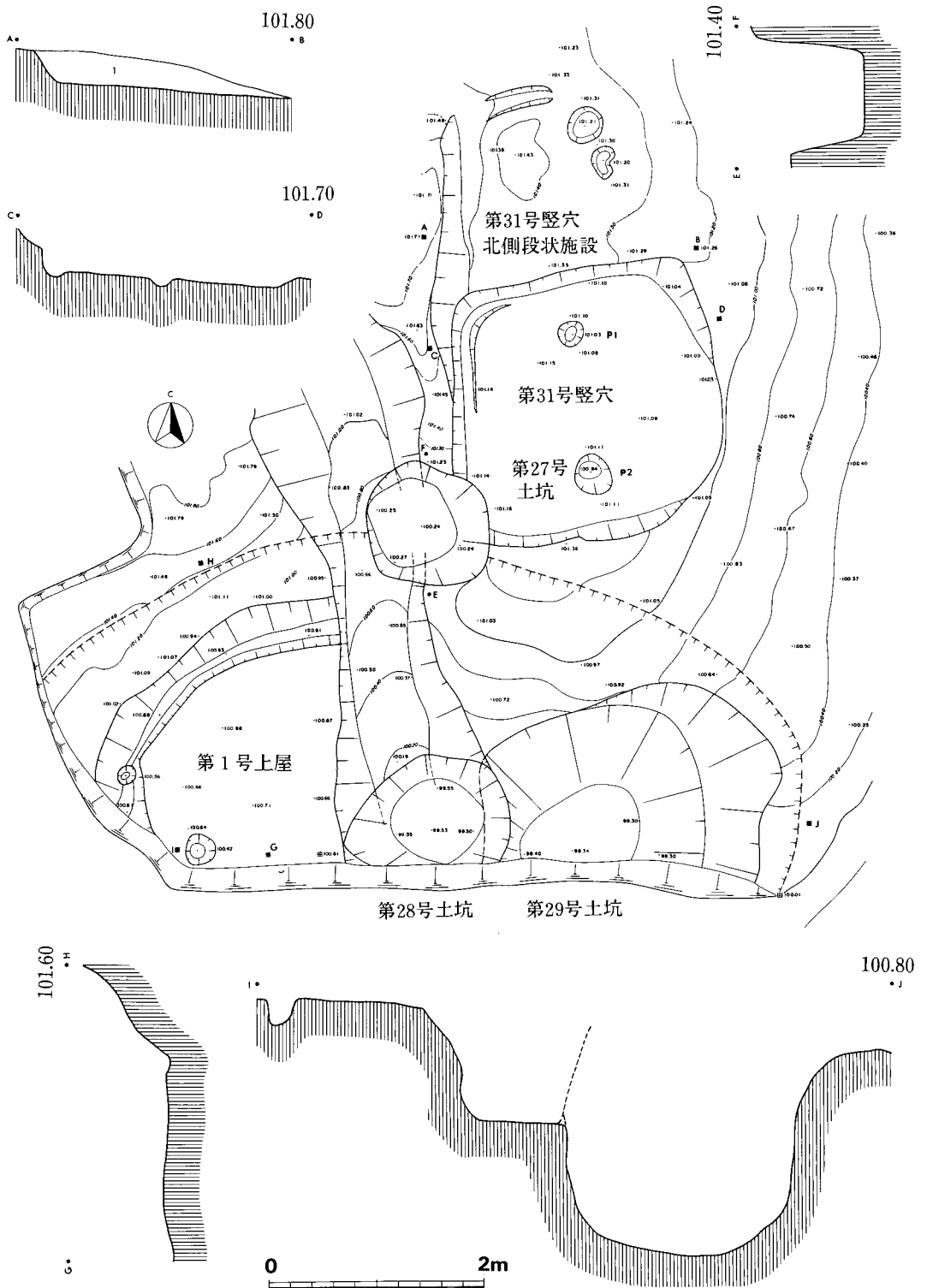


第210図 竖穴式建物・土坑(S=1/60・=1/30)

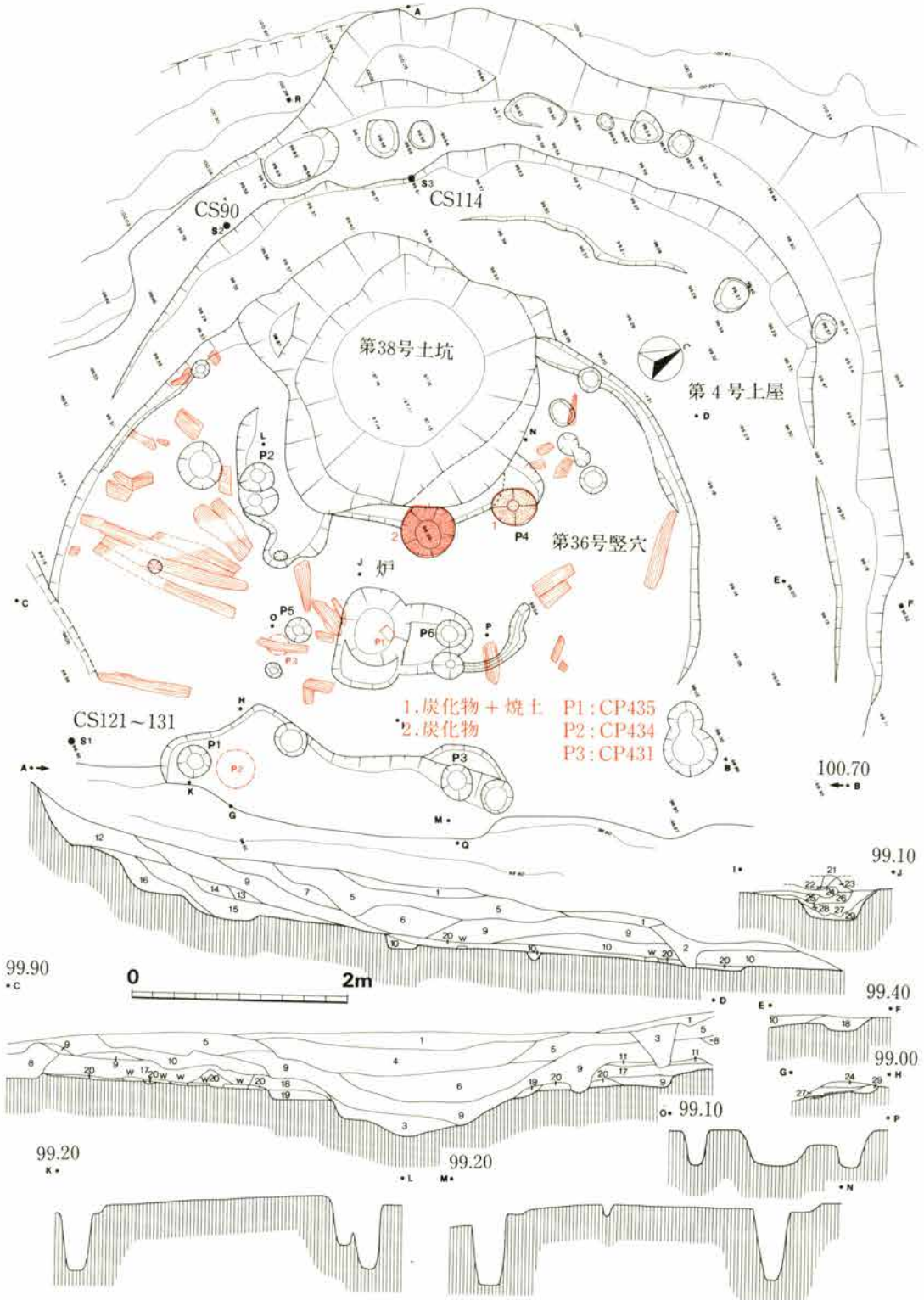


第211図 竪穴式建物・段状遺構 (S=1/60)

第4節 C地区の遺構と遺物

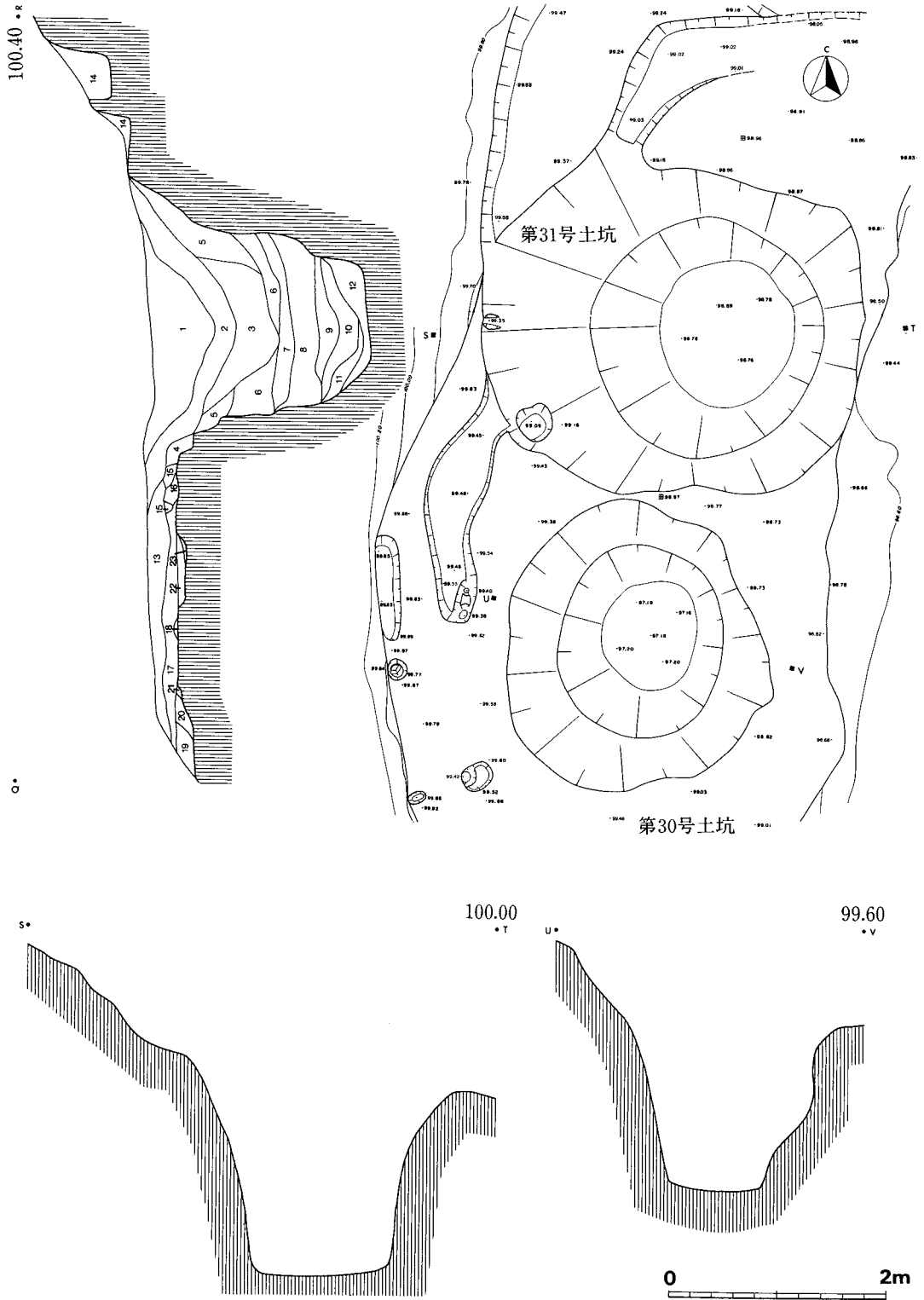


第212図 竖穴式建物・上屋・土坑 (S=1/60)

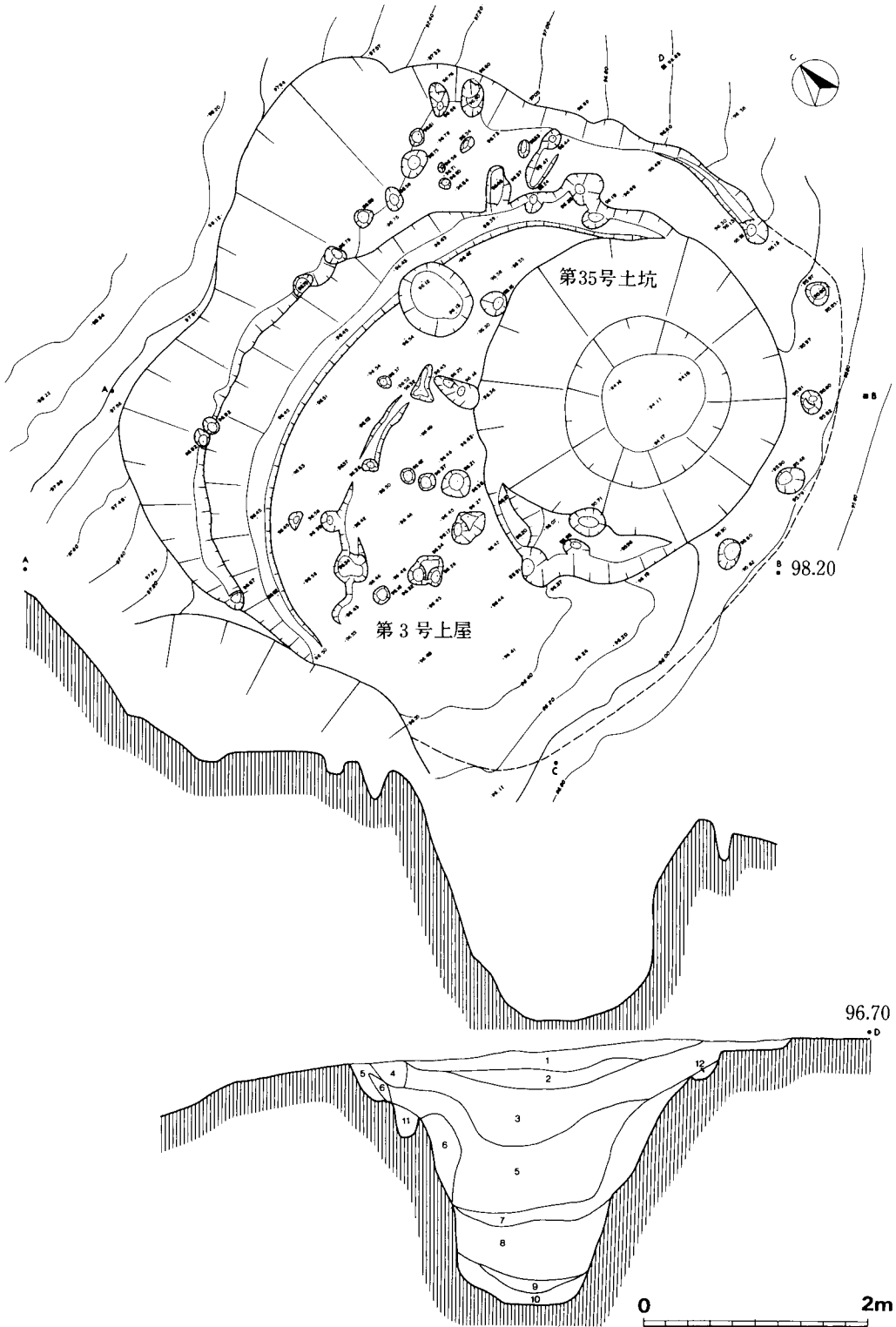


第213図 竖穴式建物・上屋・土坑(S=1/60)

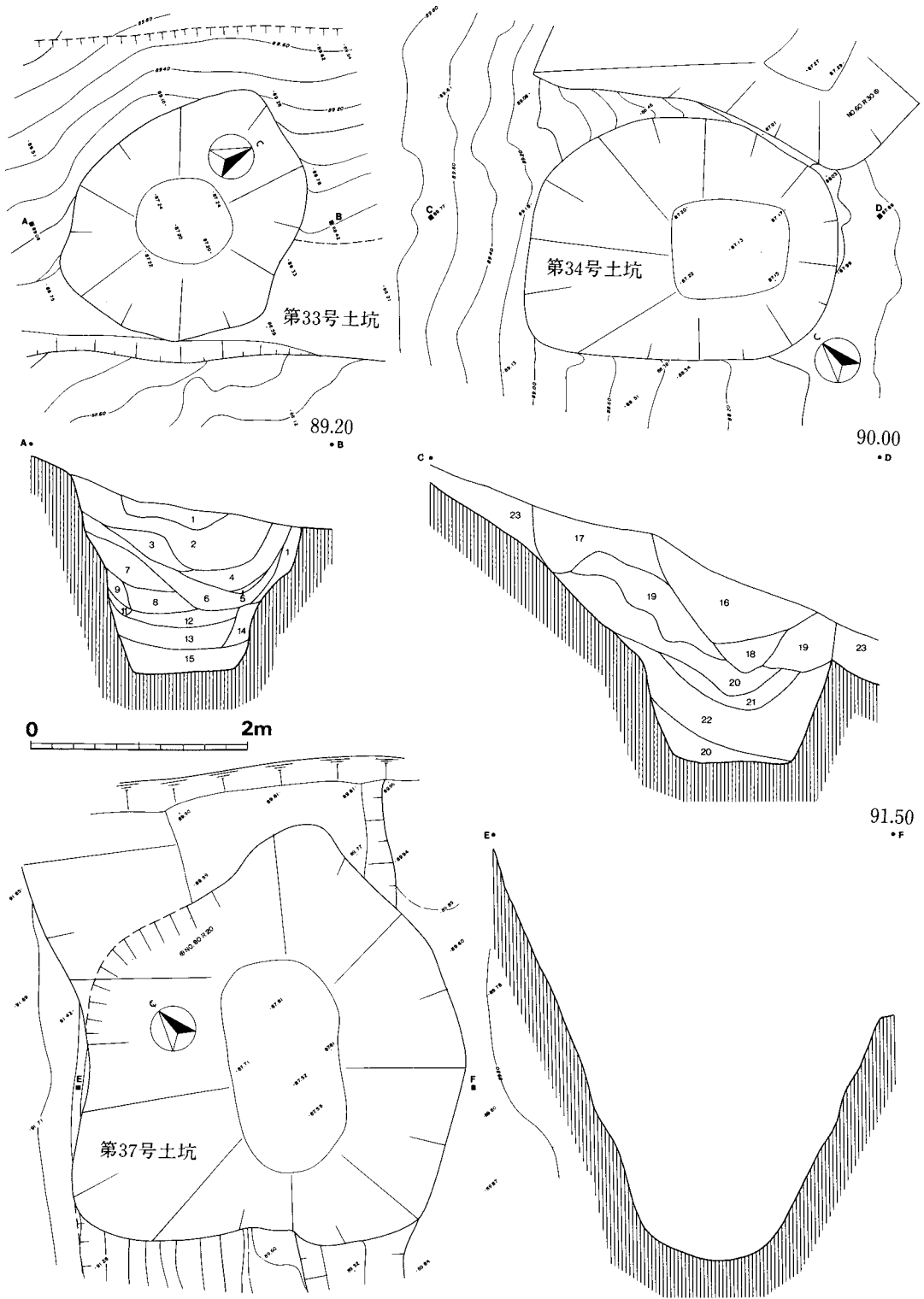
第4節 C地区の遺構と遺物



第214図 第30・31・38号土坑(S=1/60)

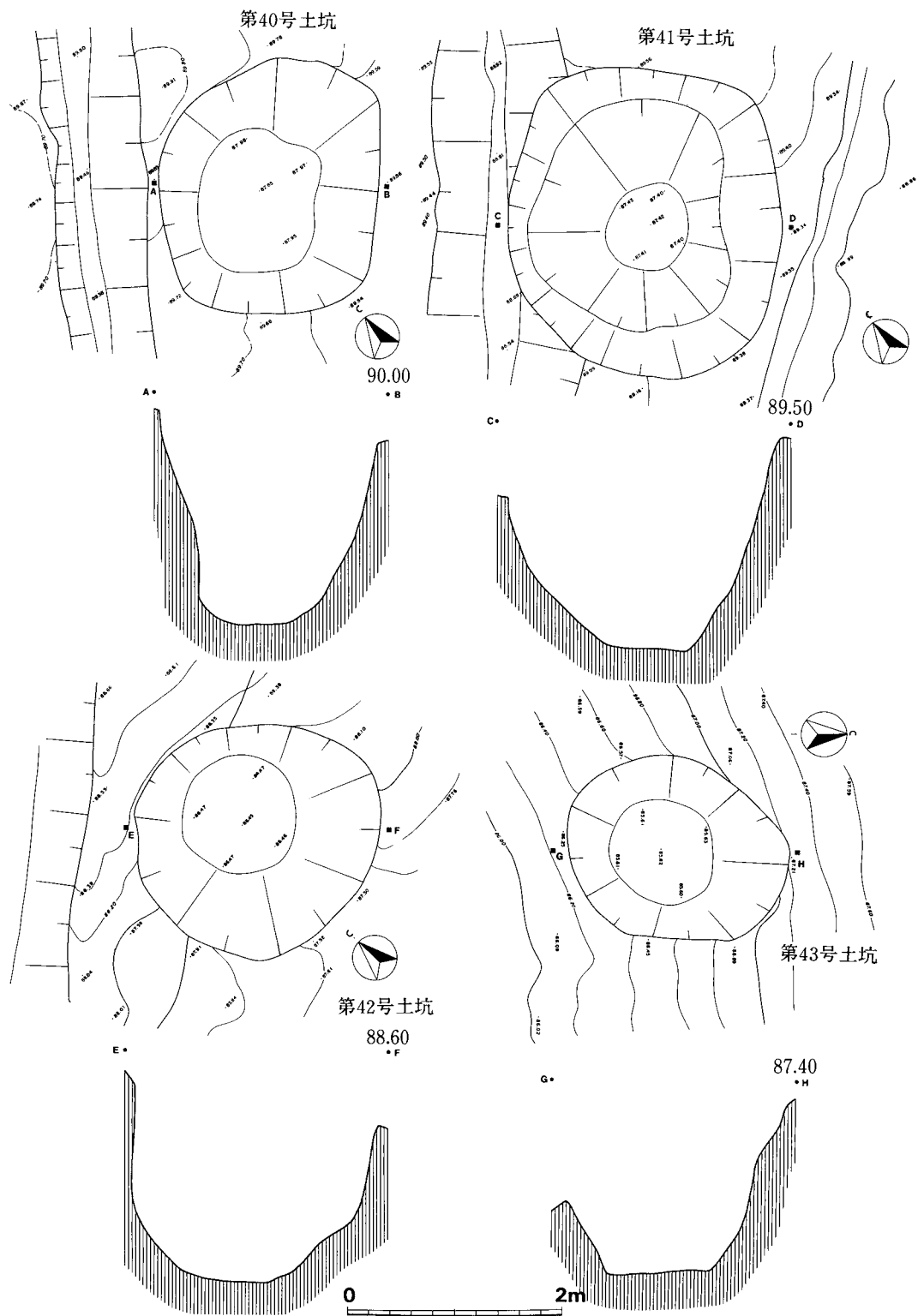


第215図 第3号上屋・第35号土坑(S=1/60)

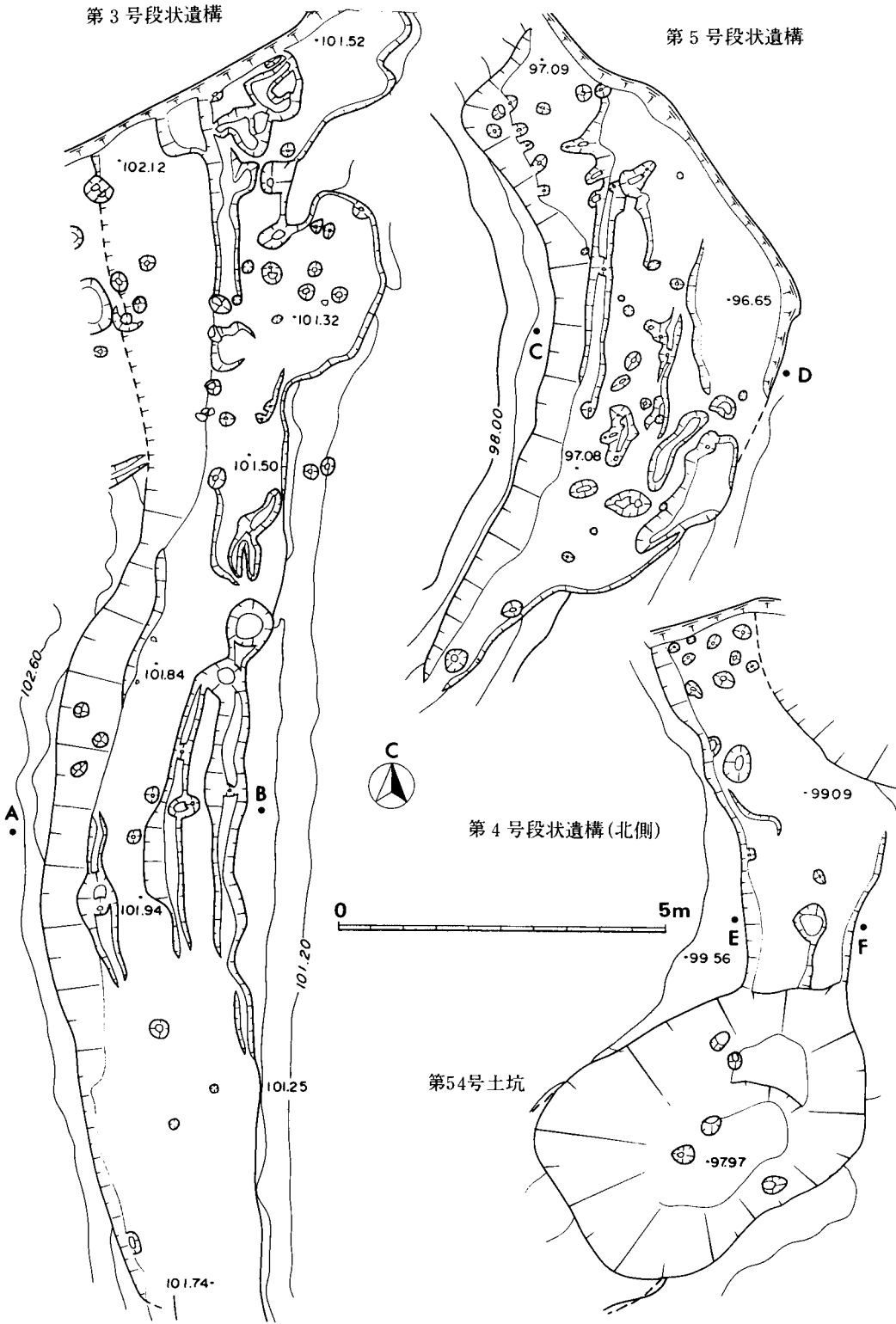


第217図 第33・34・37号土坑(S=1/60)

第4節 C地区の遺構と遺物

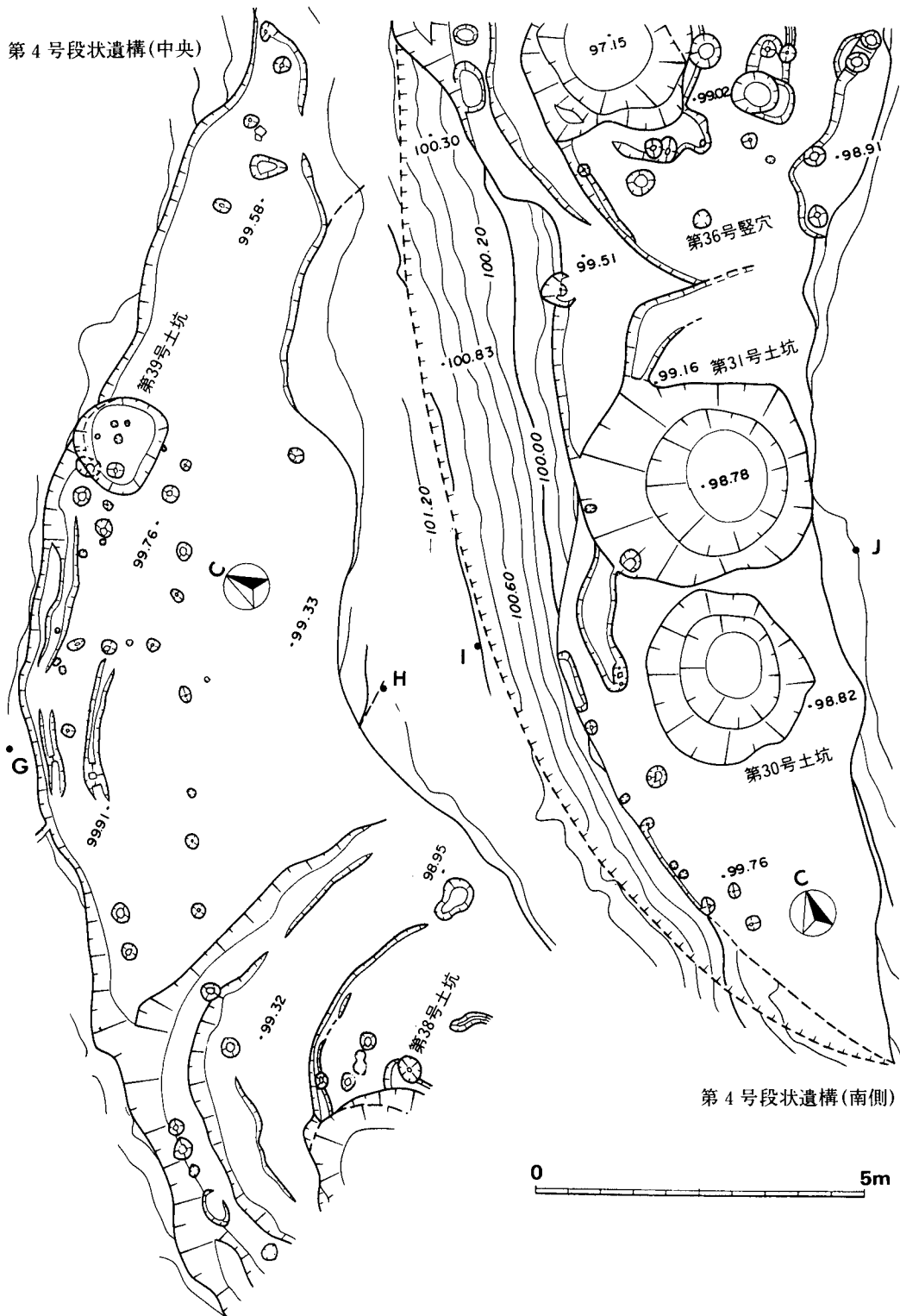


第218図 第40～43号土坑(S=1/60)



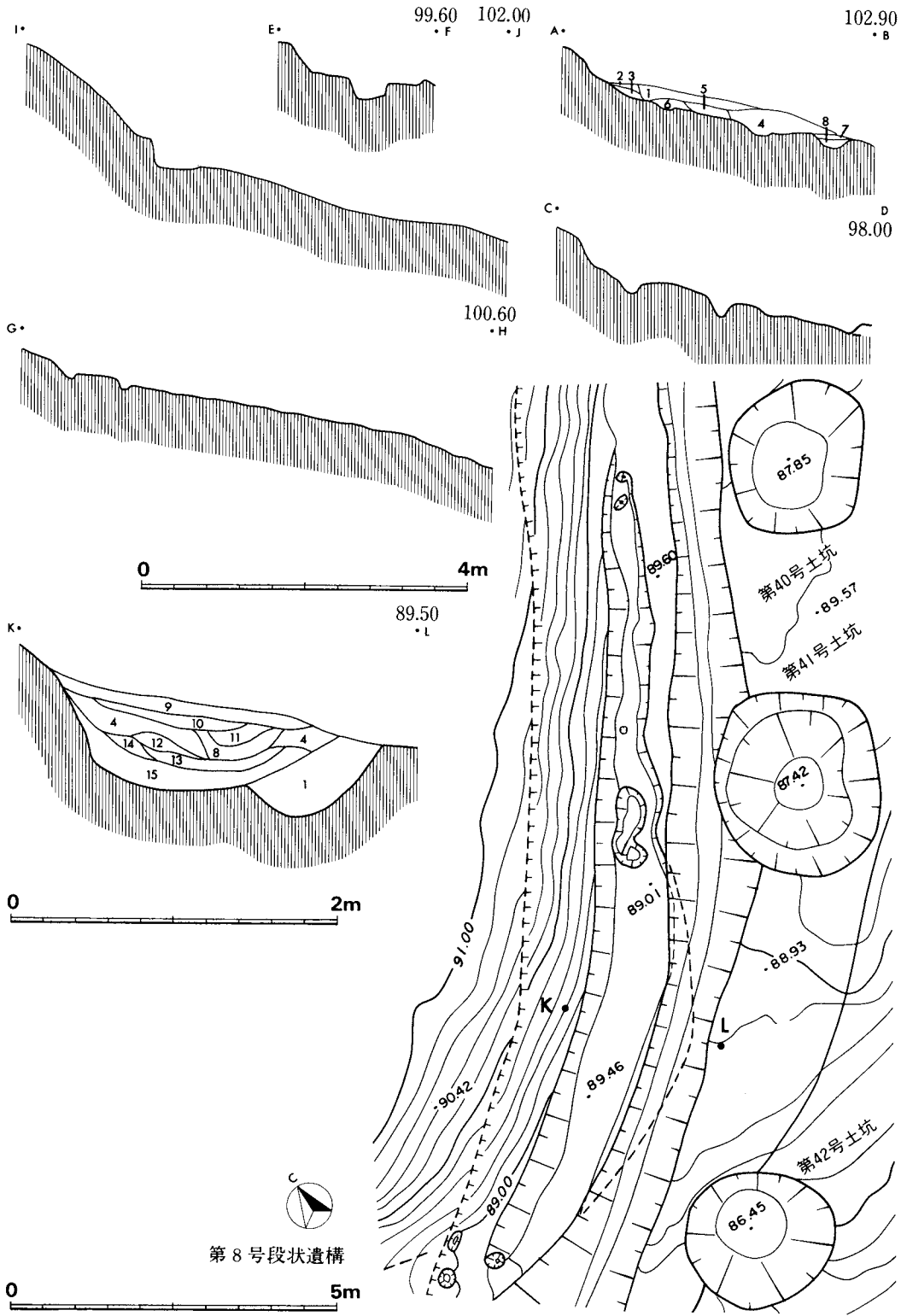
第219図 第3～5号段状遺構(S=1/100)

第4号段状遺構(中央)



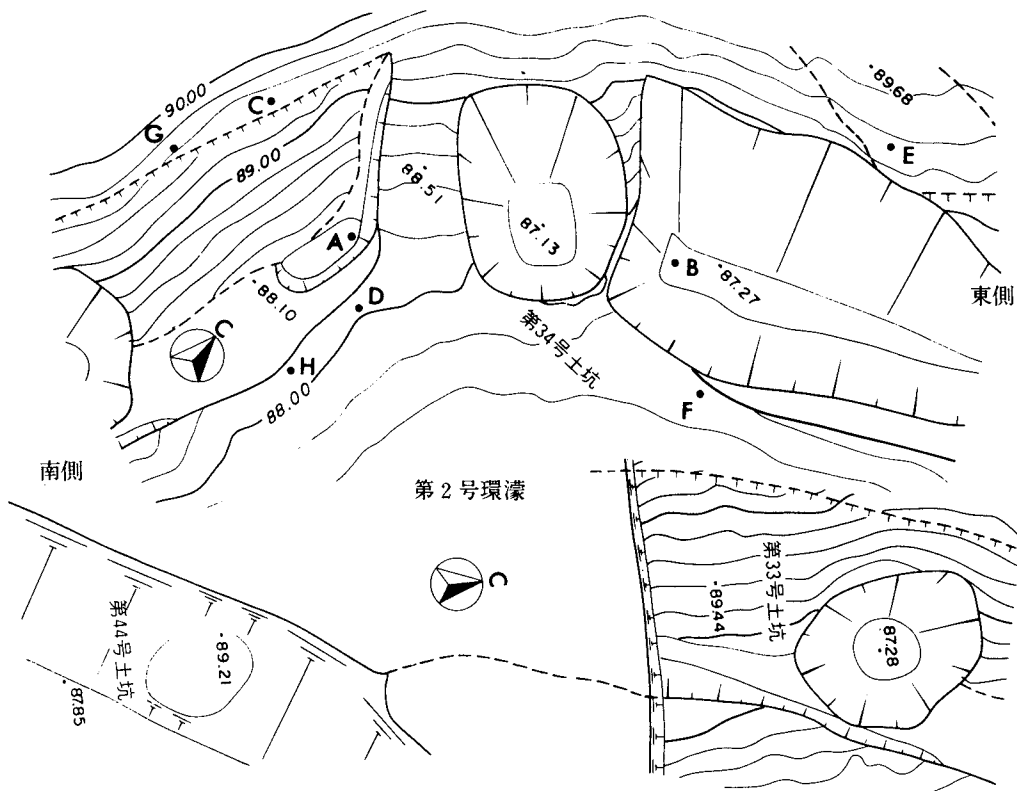
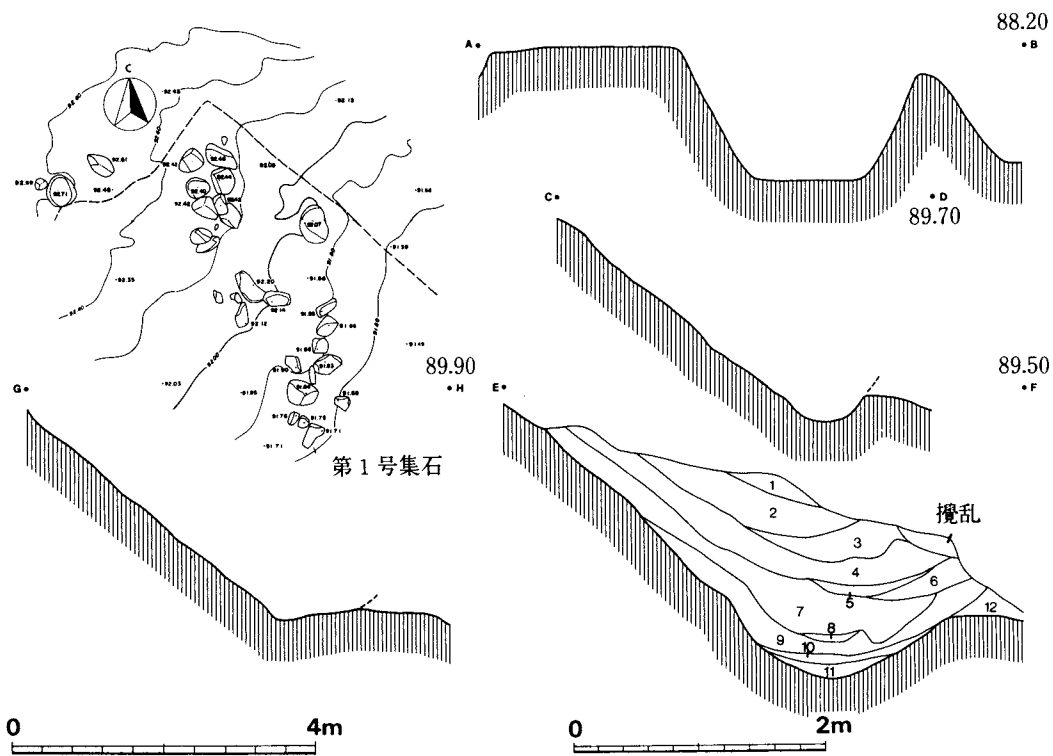
第4号段状遺構(南側)

第220図 第4号段状遺構(S=1/100)

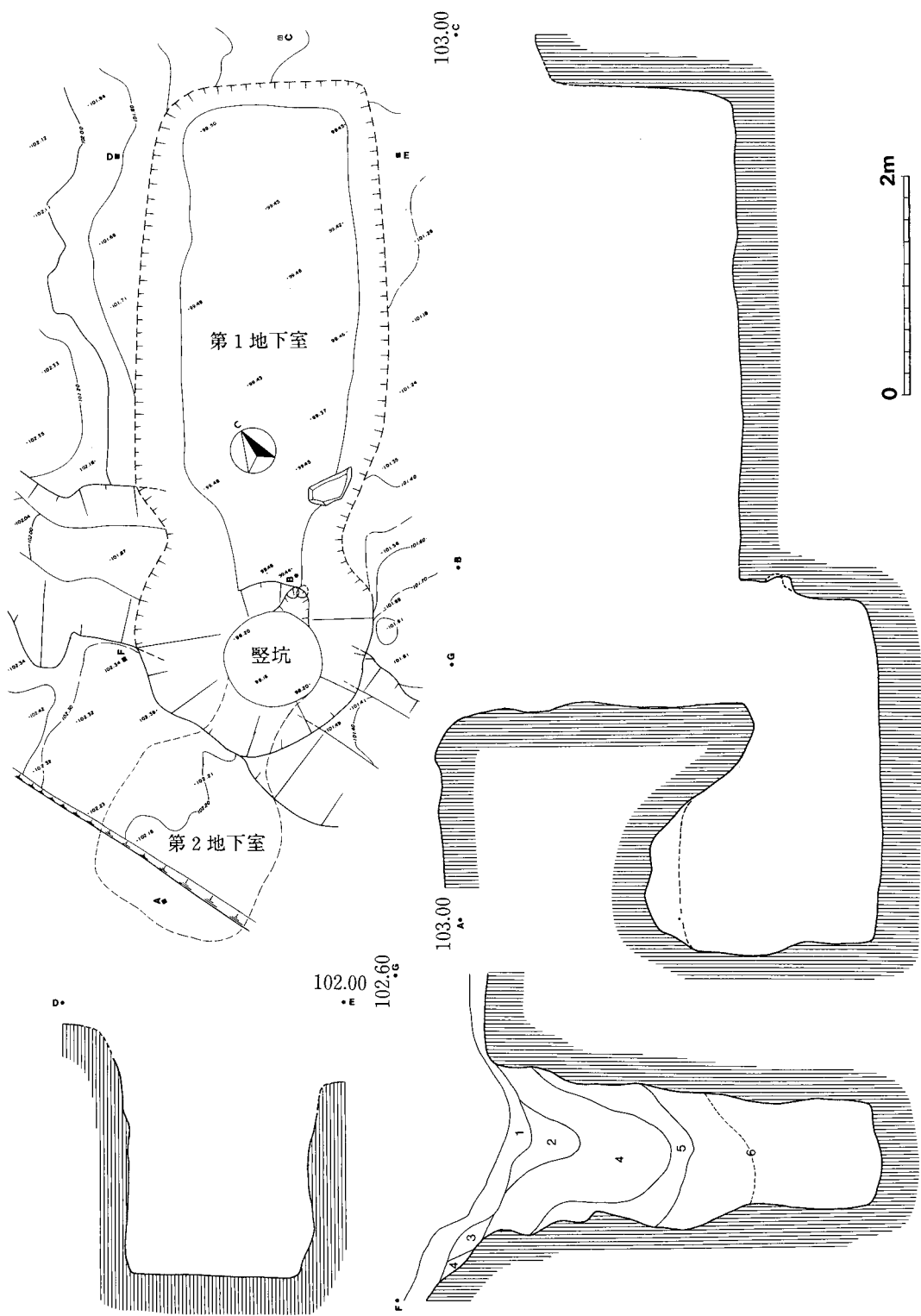


第221図 段状遺構 (S=1/40・=1/80・=1/100)

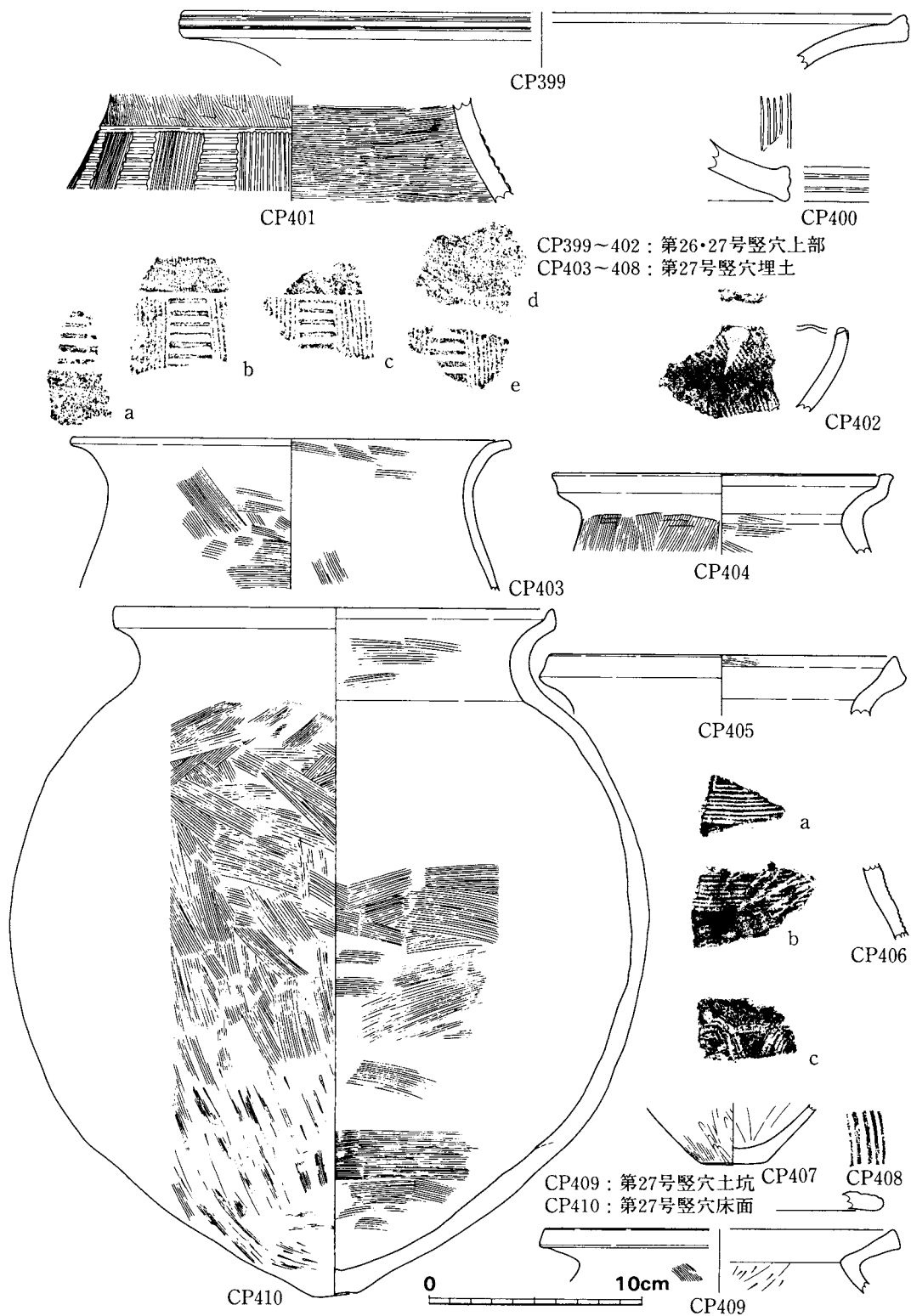
第4節 C地区の遺構と遺物



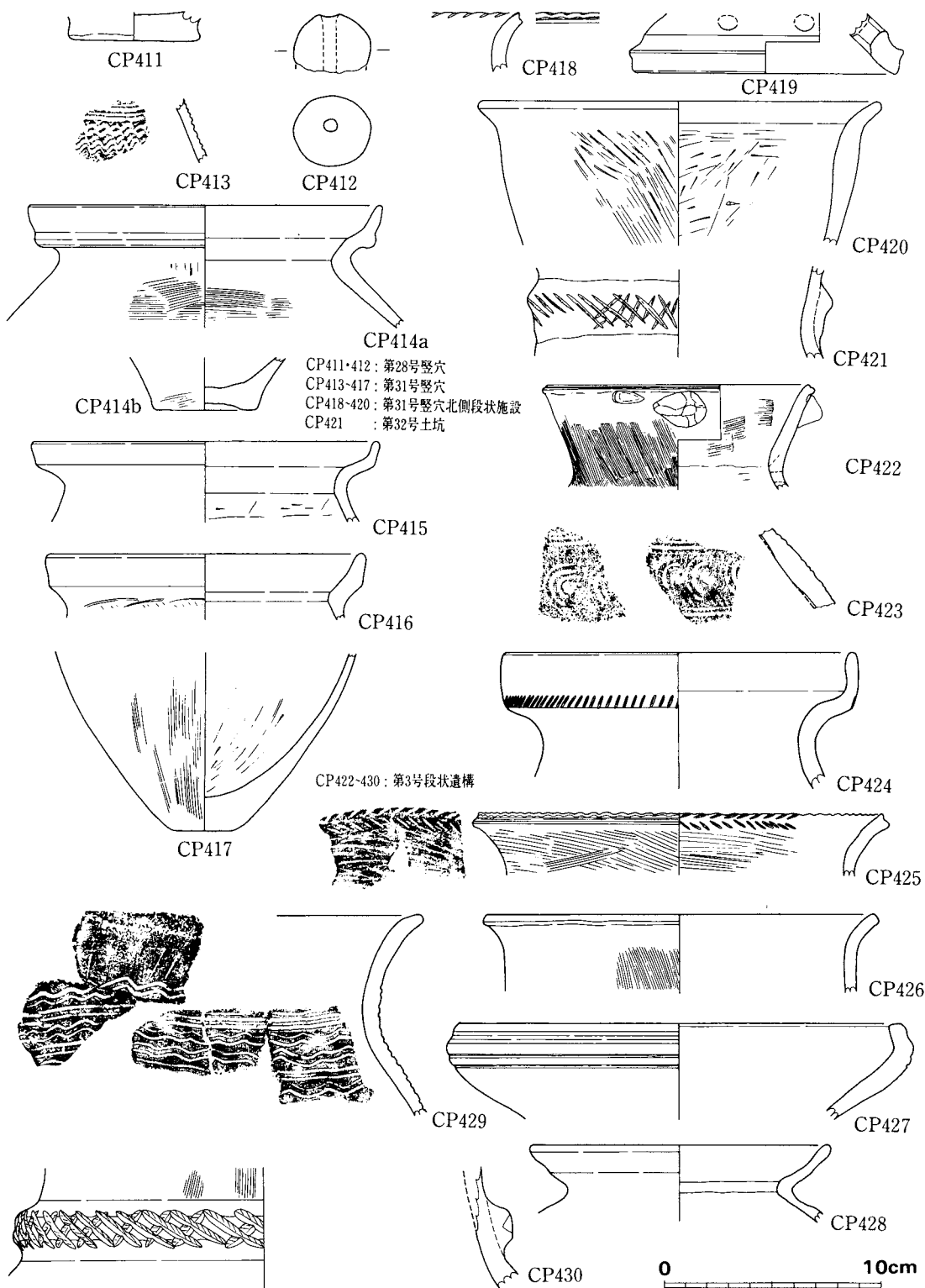
第222図 集石・環濠・土坑(S=1/60・=1/100)



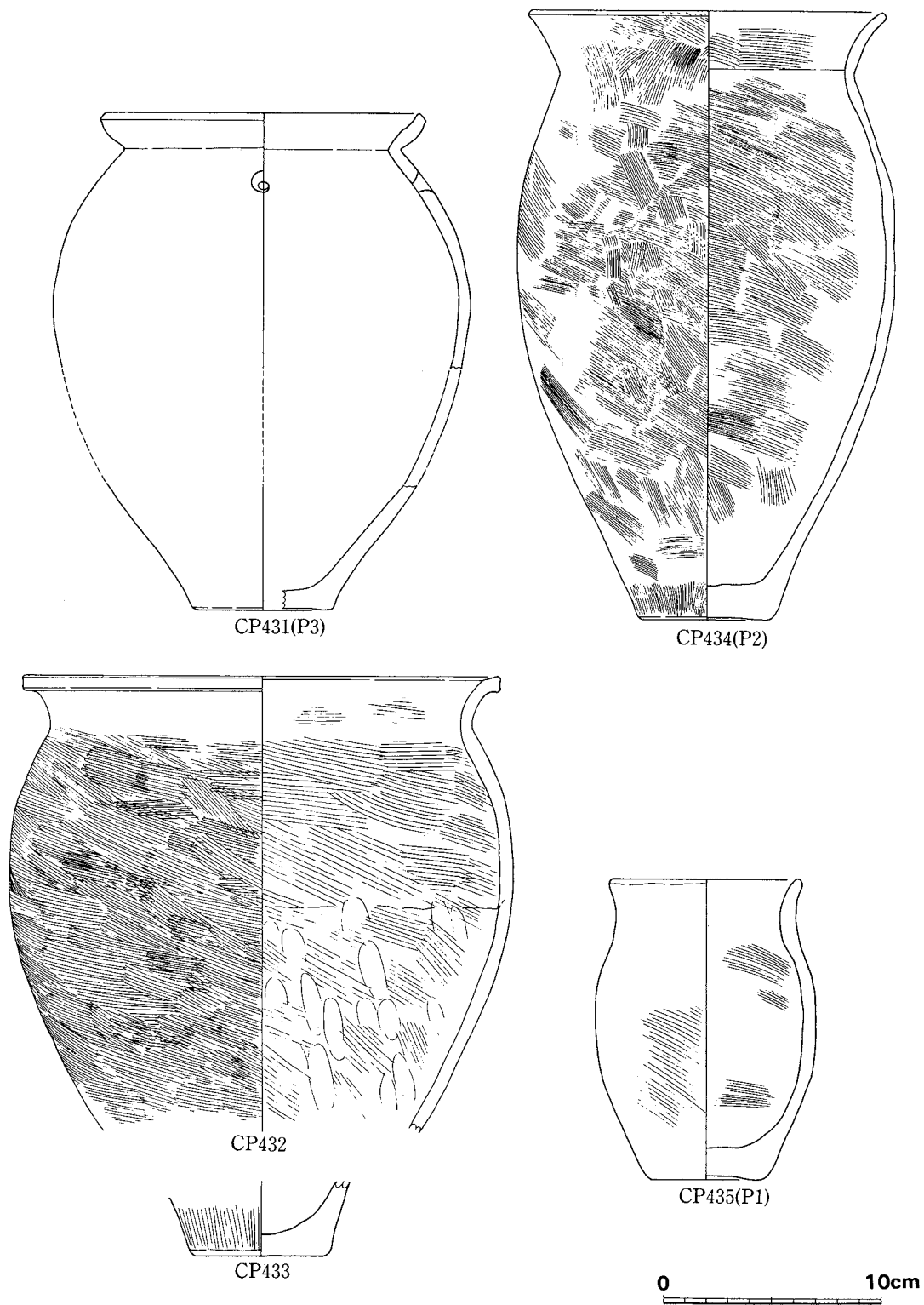
第223図 第1号地下式壙(S=1/60)



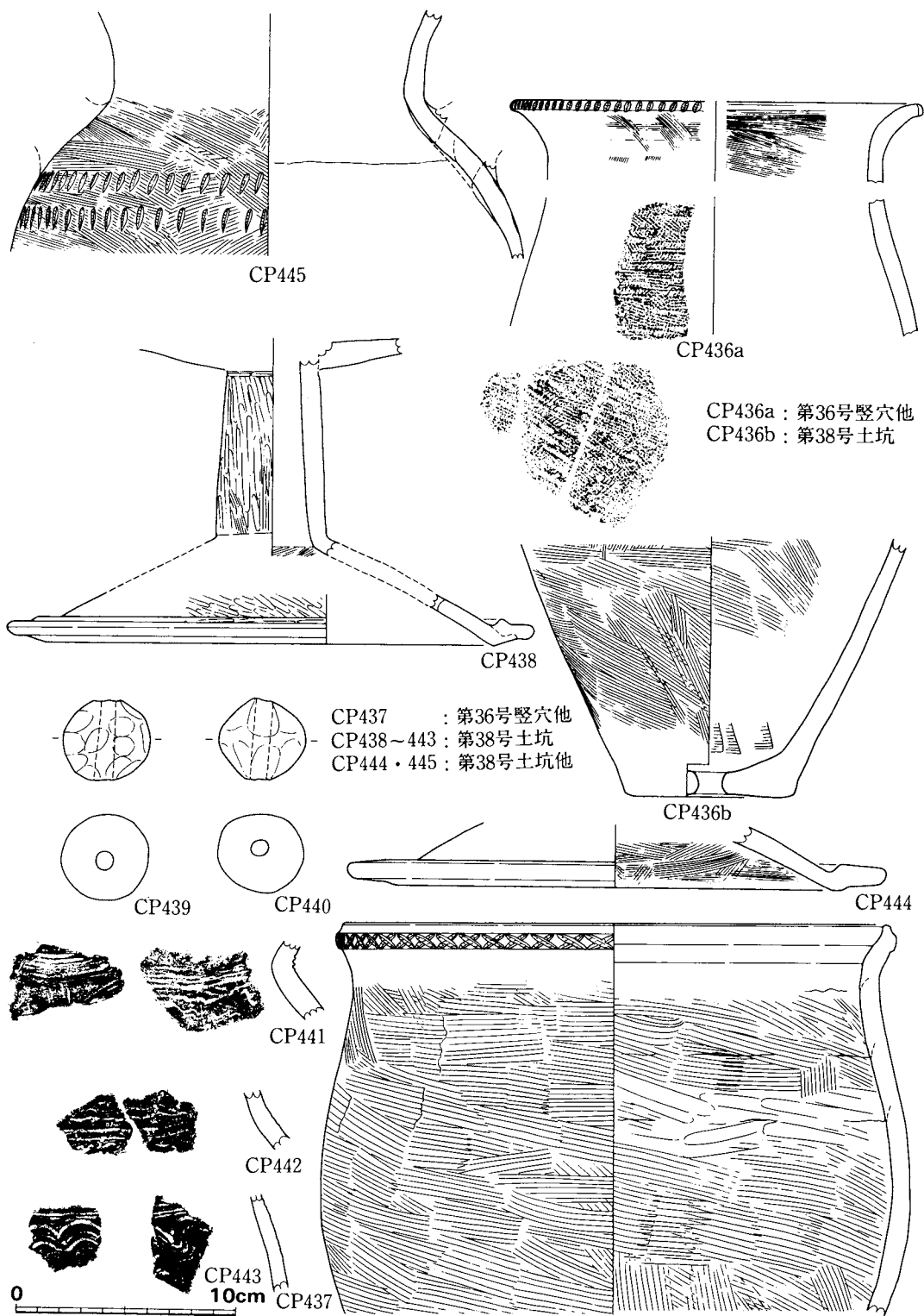
第224図 第26・27号竖穴出土土器(S=1/3)



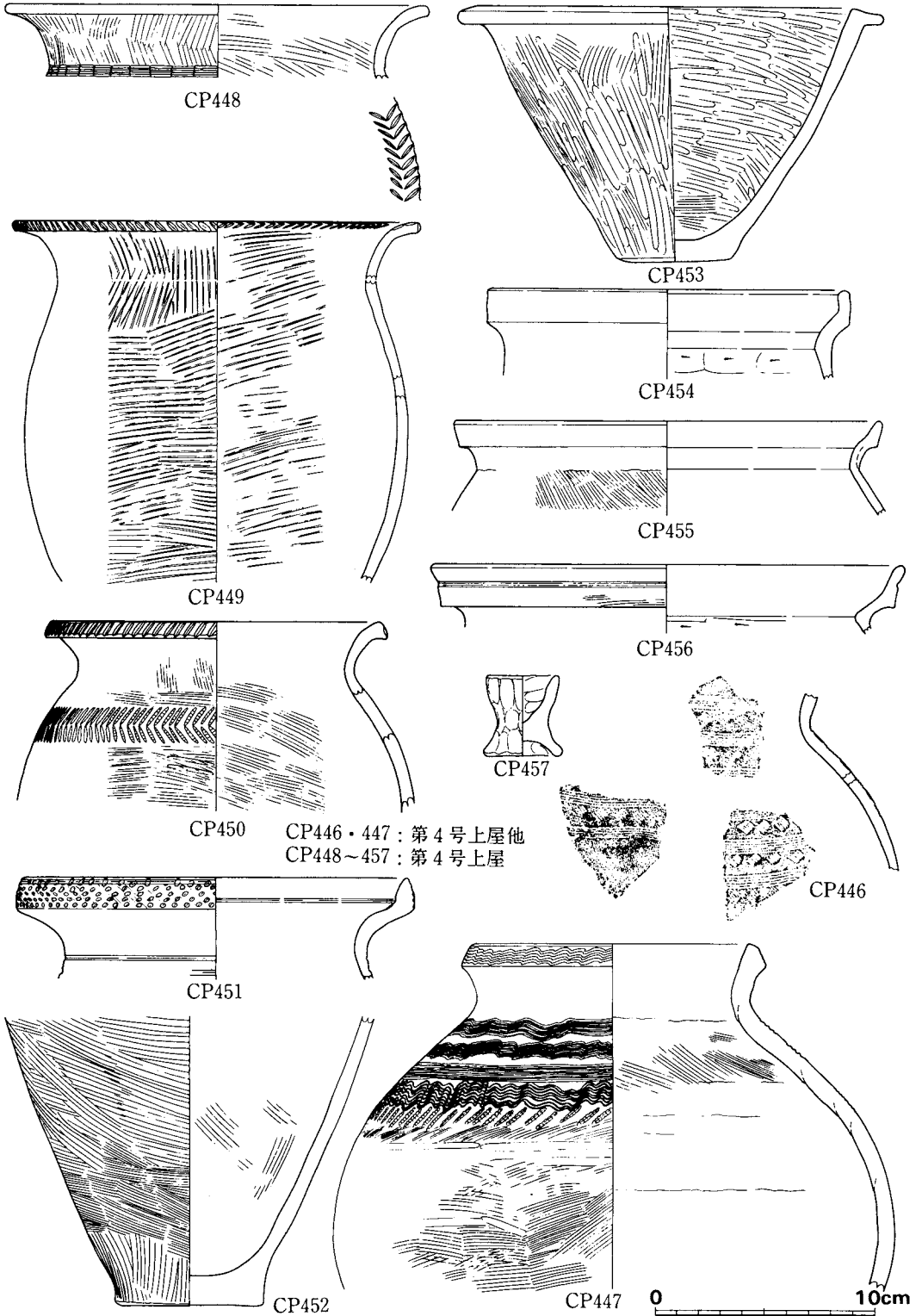
第225図 竪穴・段状遺構他出土土器 (S=1/3)



第226図 第36号竖穴式建物出土土器(S=1/3)

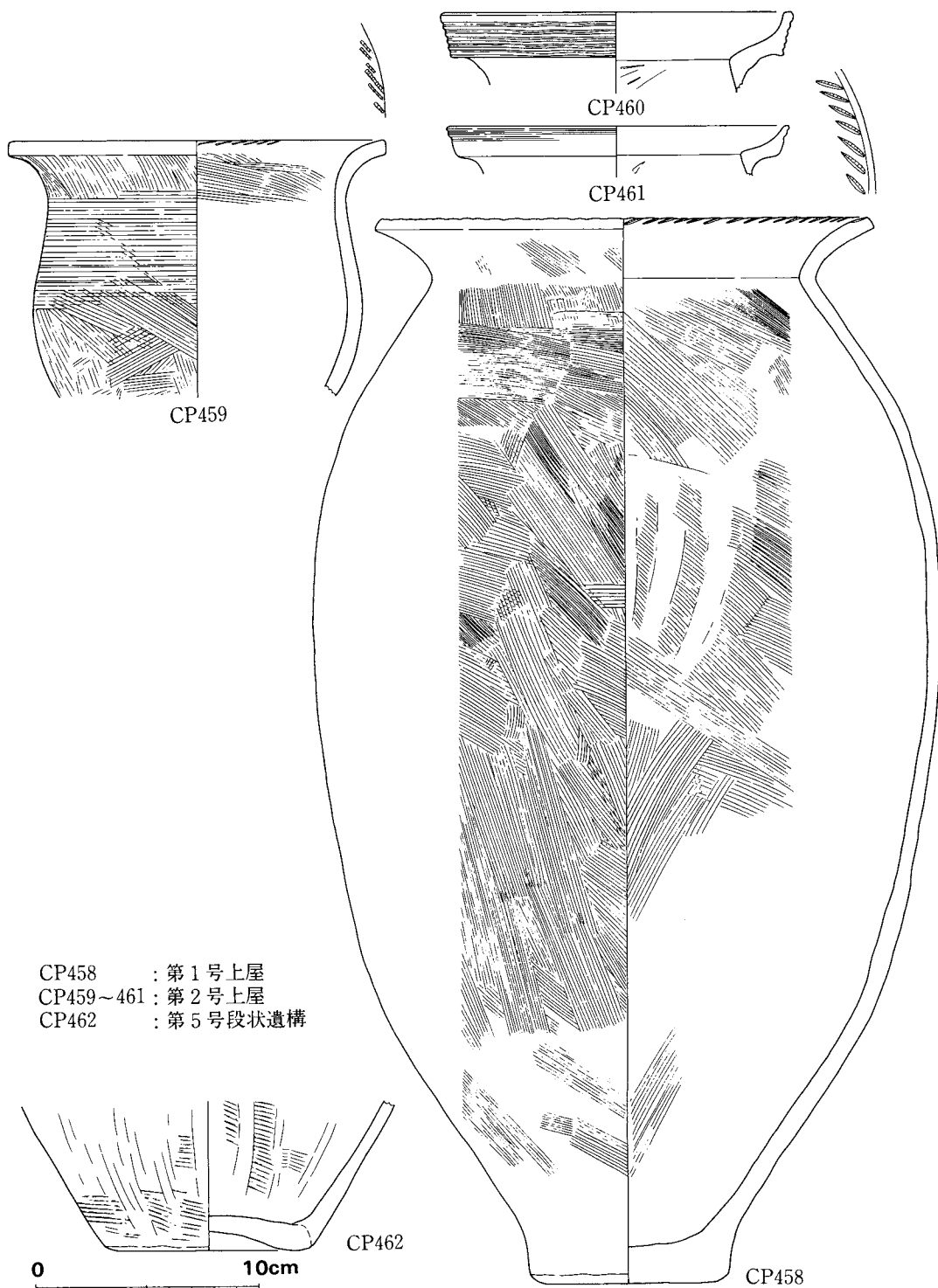


第227図 竖穴・土坑他出土土器 (S=1/3)



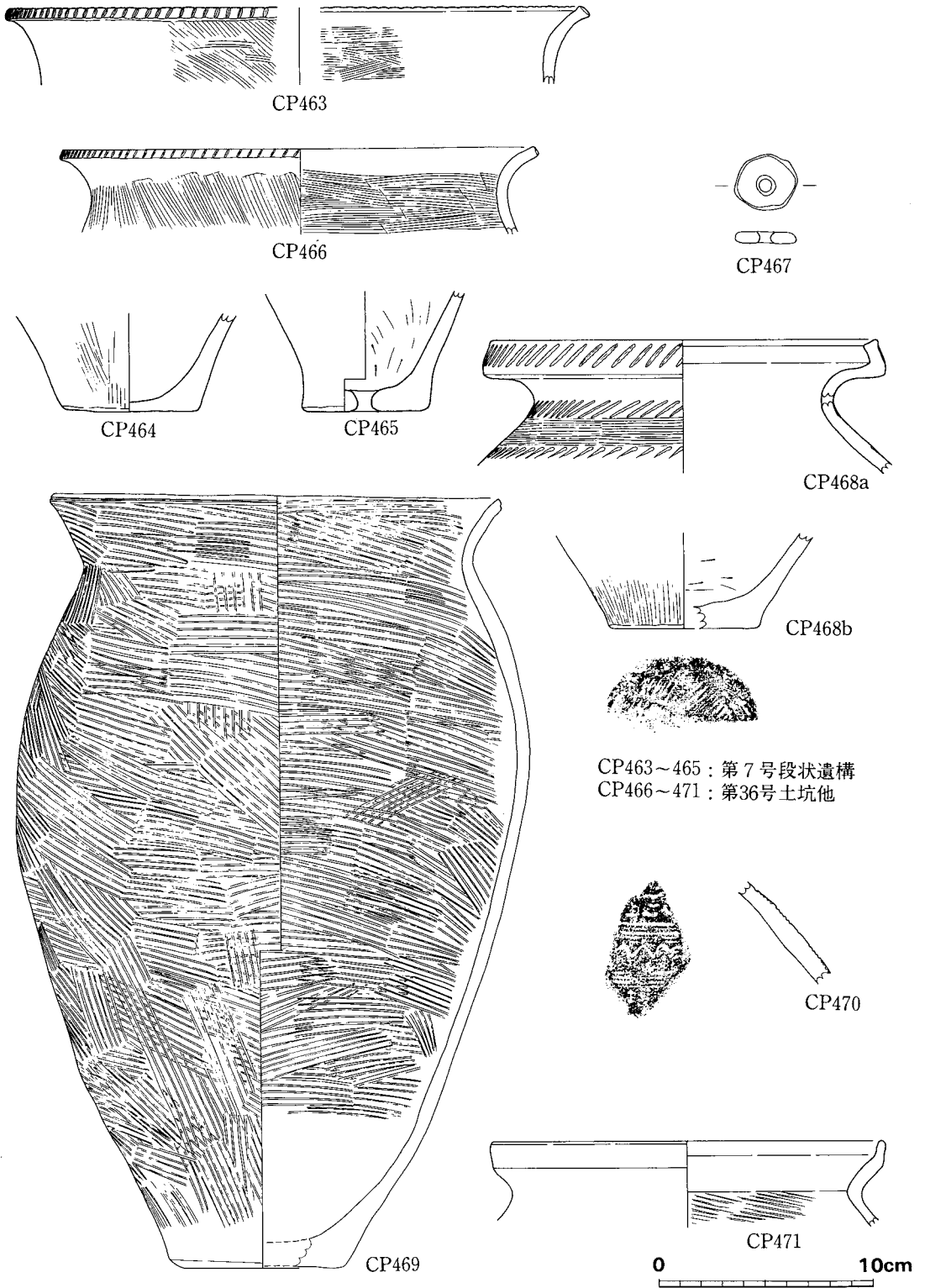
CP446・447：第4号上屋他
 CP448～457：第4号上屋

第228図 第4号上屋他出土土器(S=1/3)

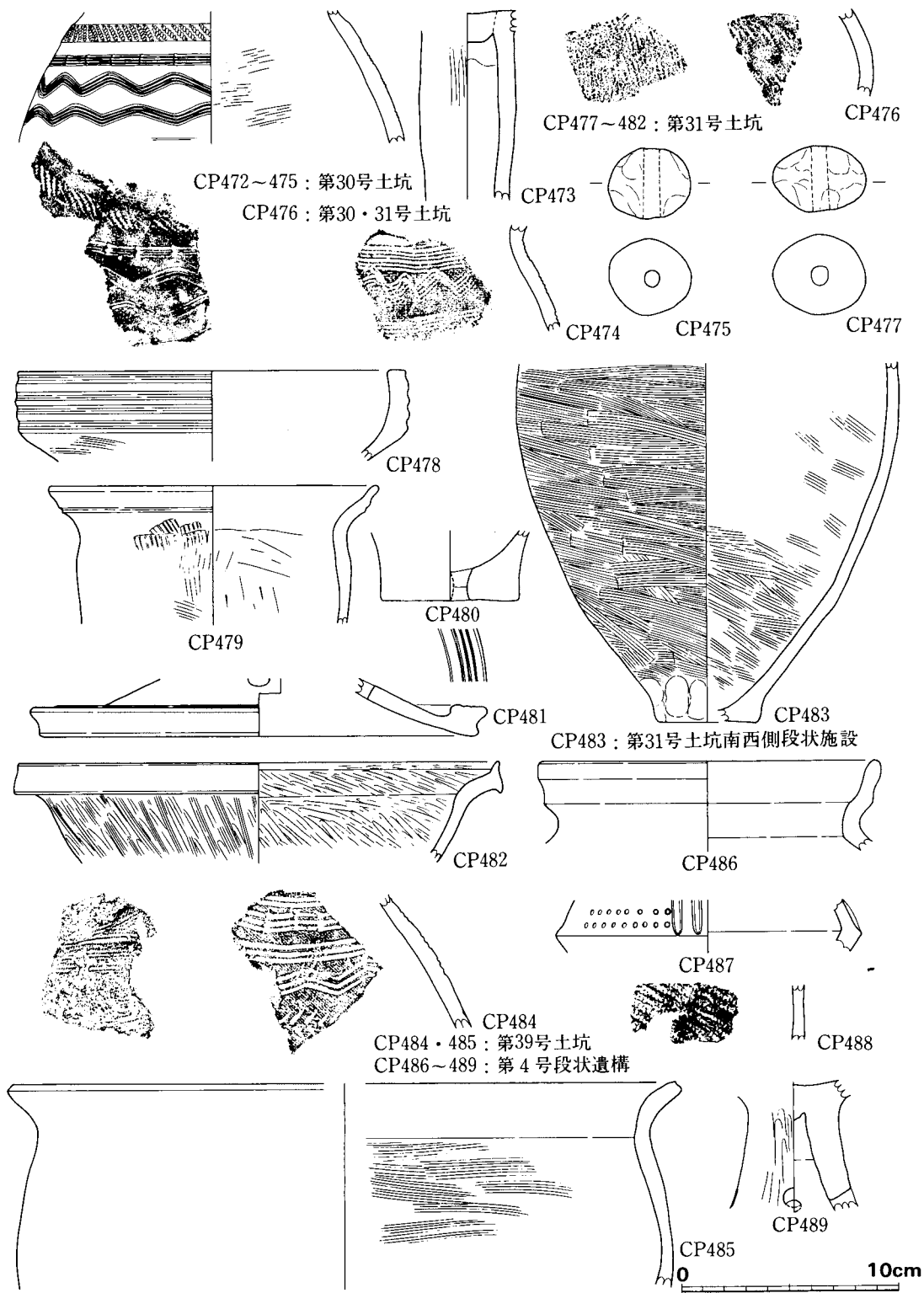


- CP458 : 第1号上屋
- CP459~461 : 第2号上屋
- CP462 : 第5号段状遺構

第4節 C地区の遺構と遺物

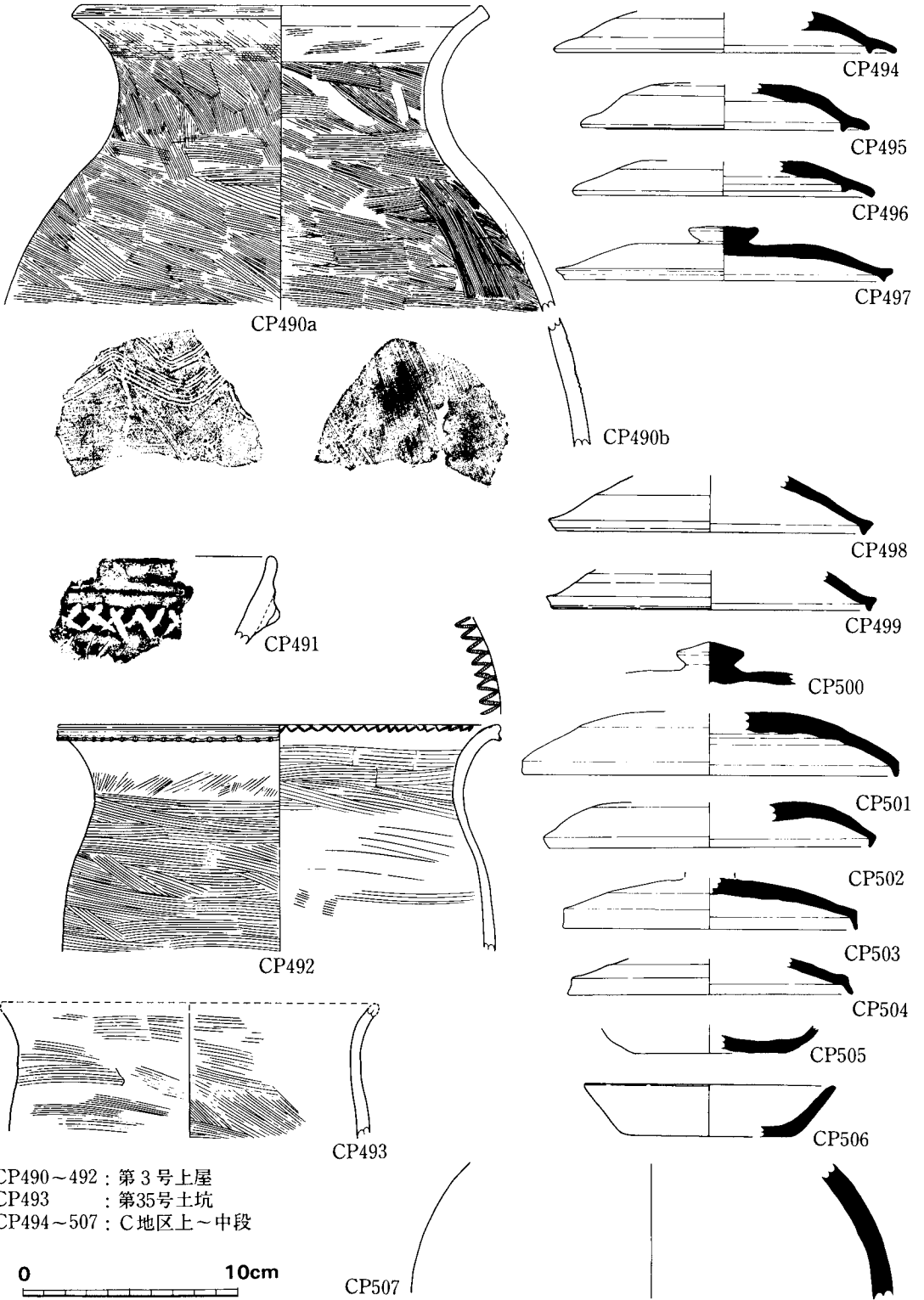


第230図 土坑・段状遺構出土土器(S=1/3)

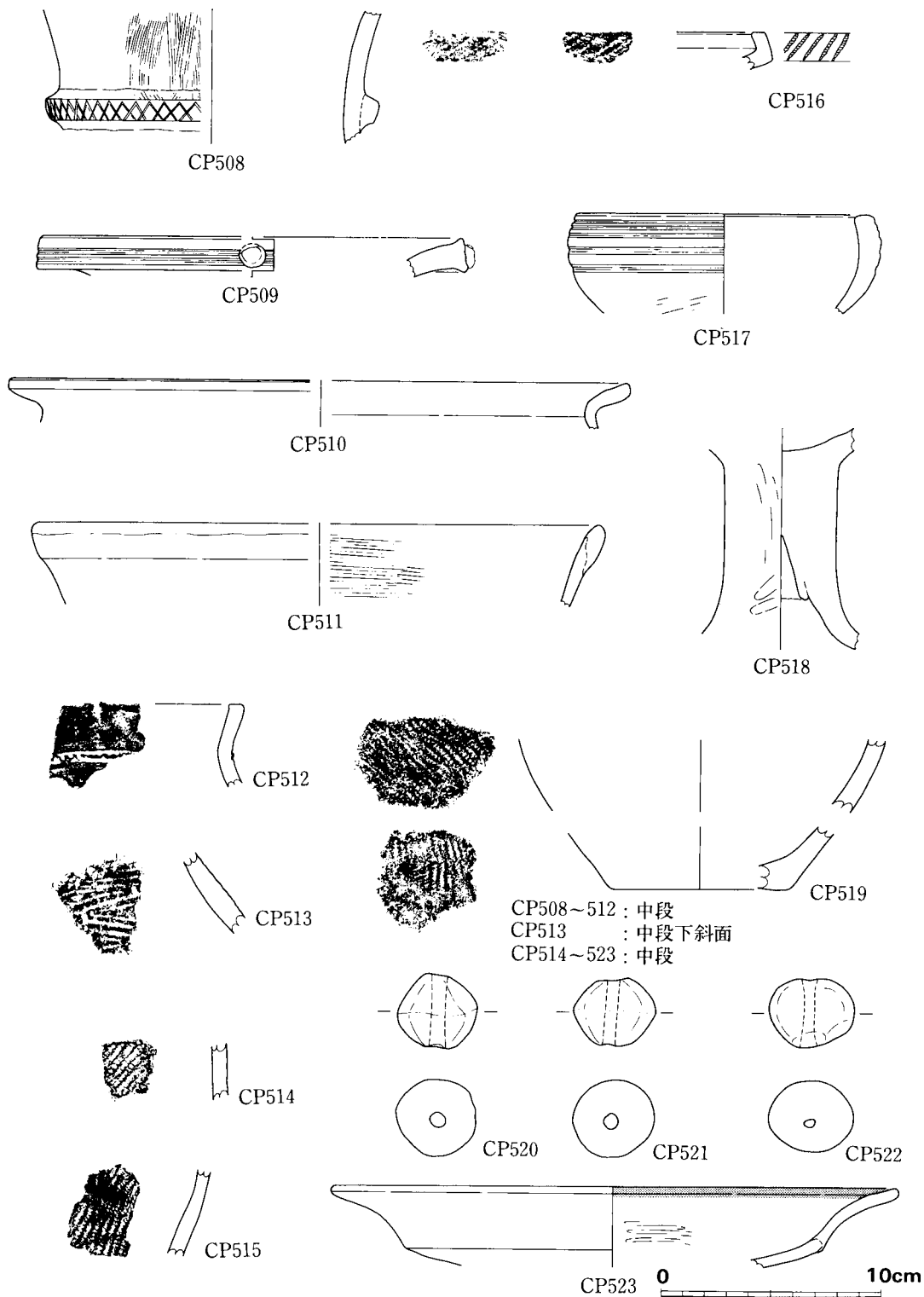


第231図 土坑・段状遺構他出土土器(S=1/3)

第4節 C地区の遺構と遺物

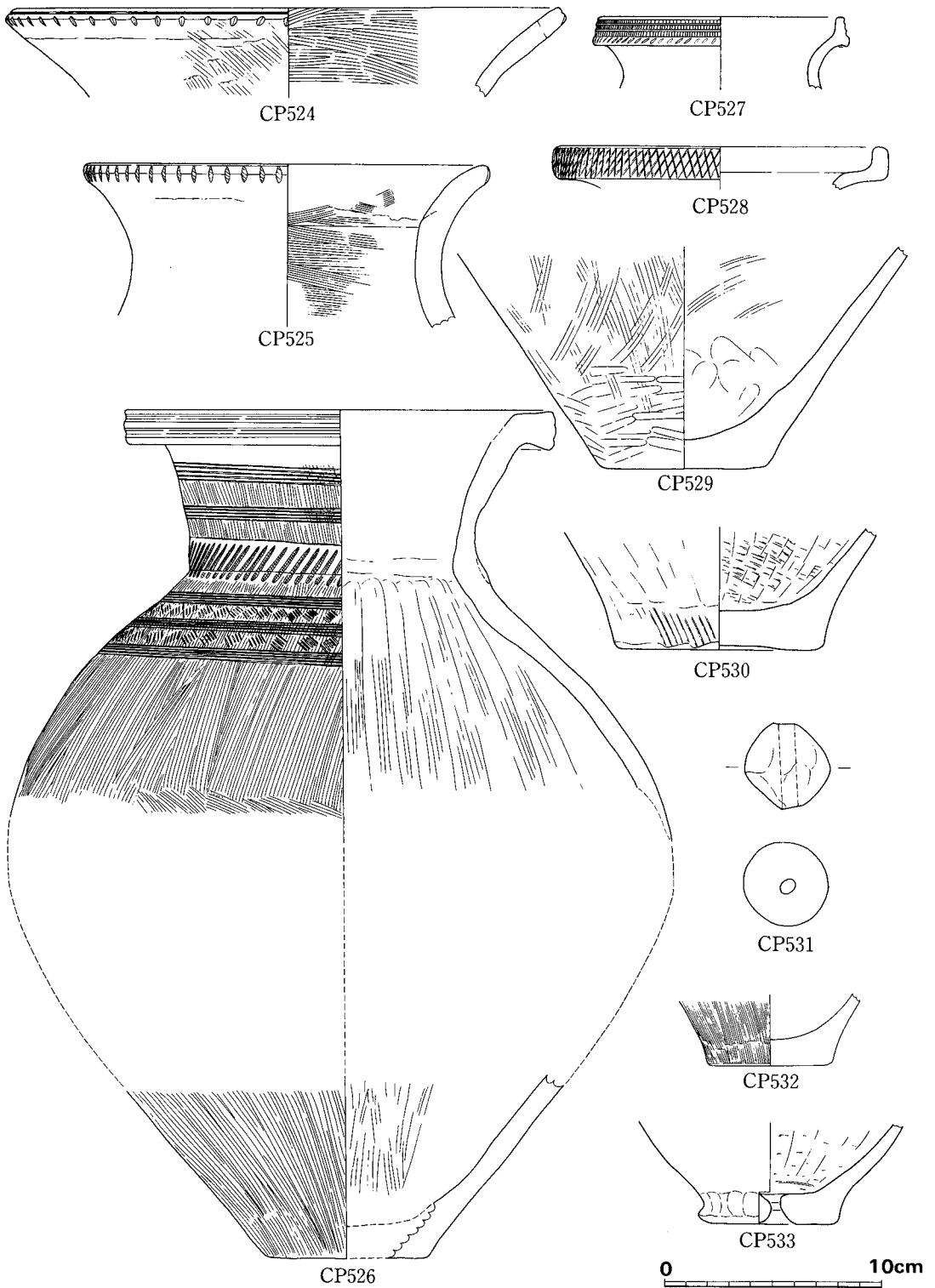


第232図 上屋・土坑他出土土器 (S=1/3)

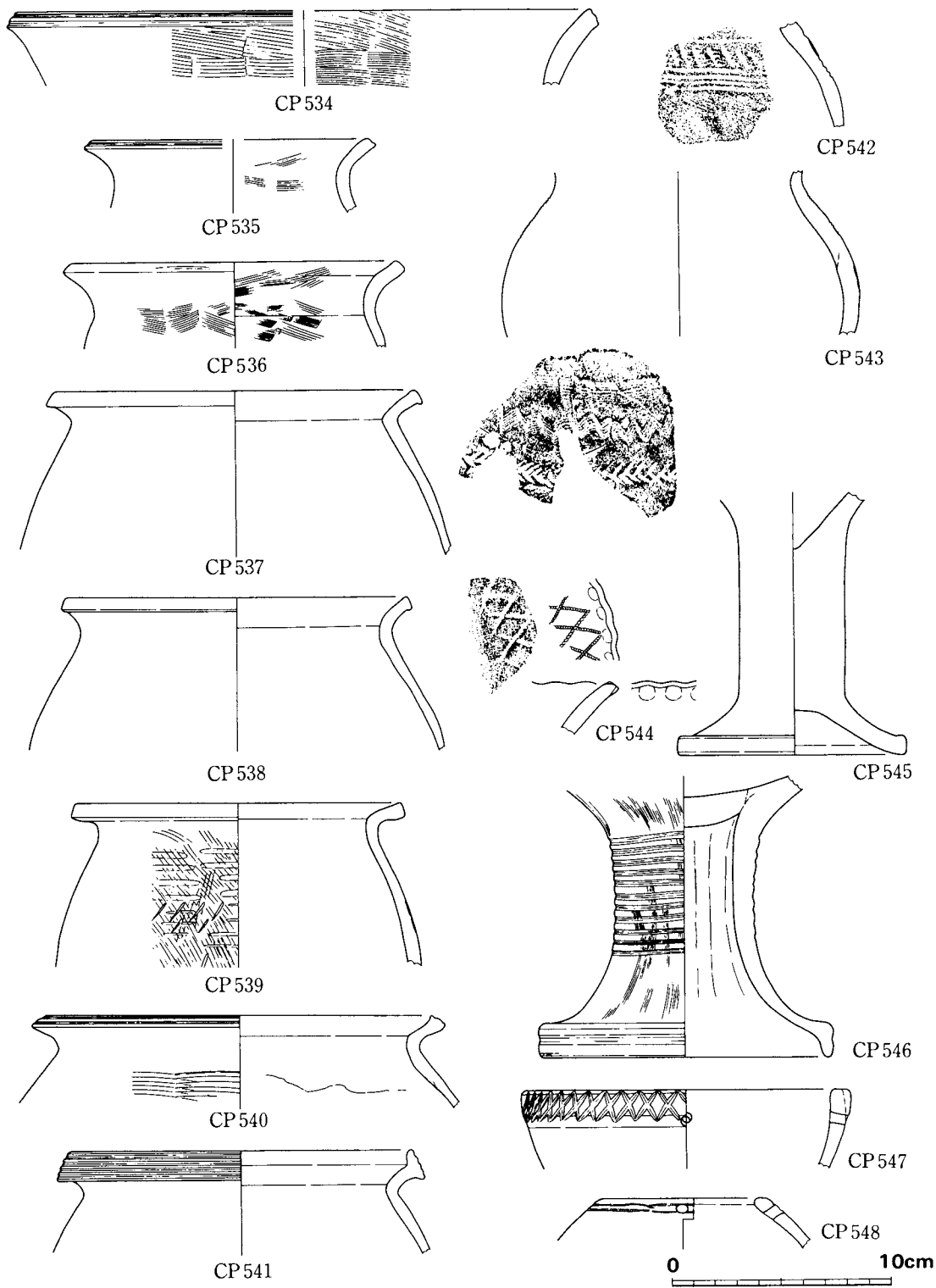


CP508~512 : 中段
 CP513 : 中段下斜面
 CP514~523 : 中段

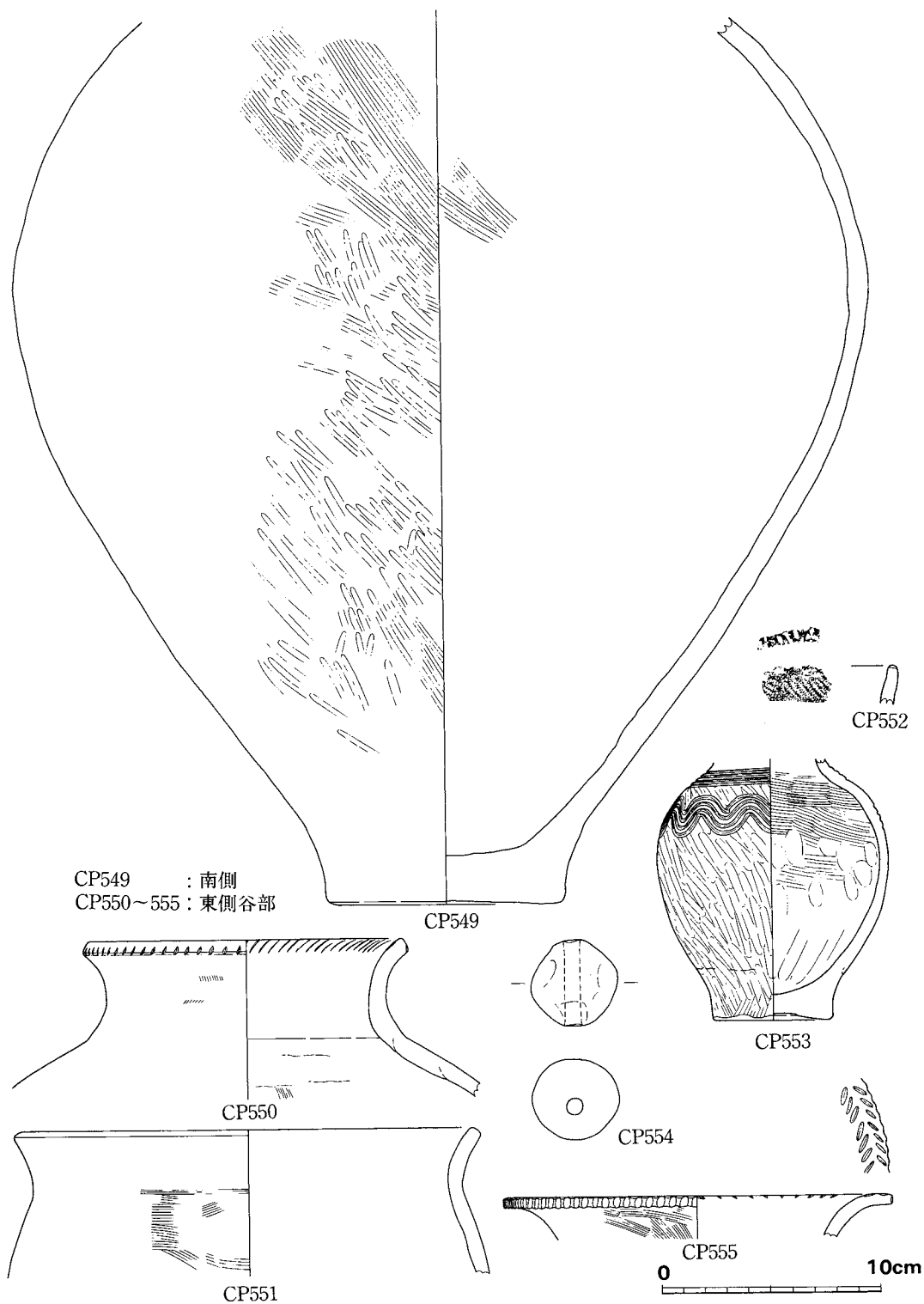
第233図 C地区中段他出土土器(S=1/3)



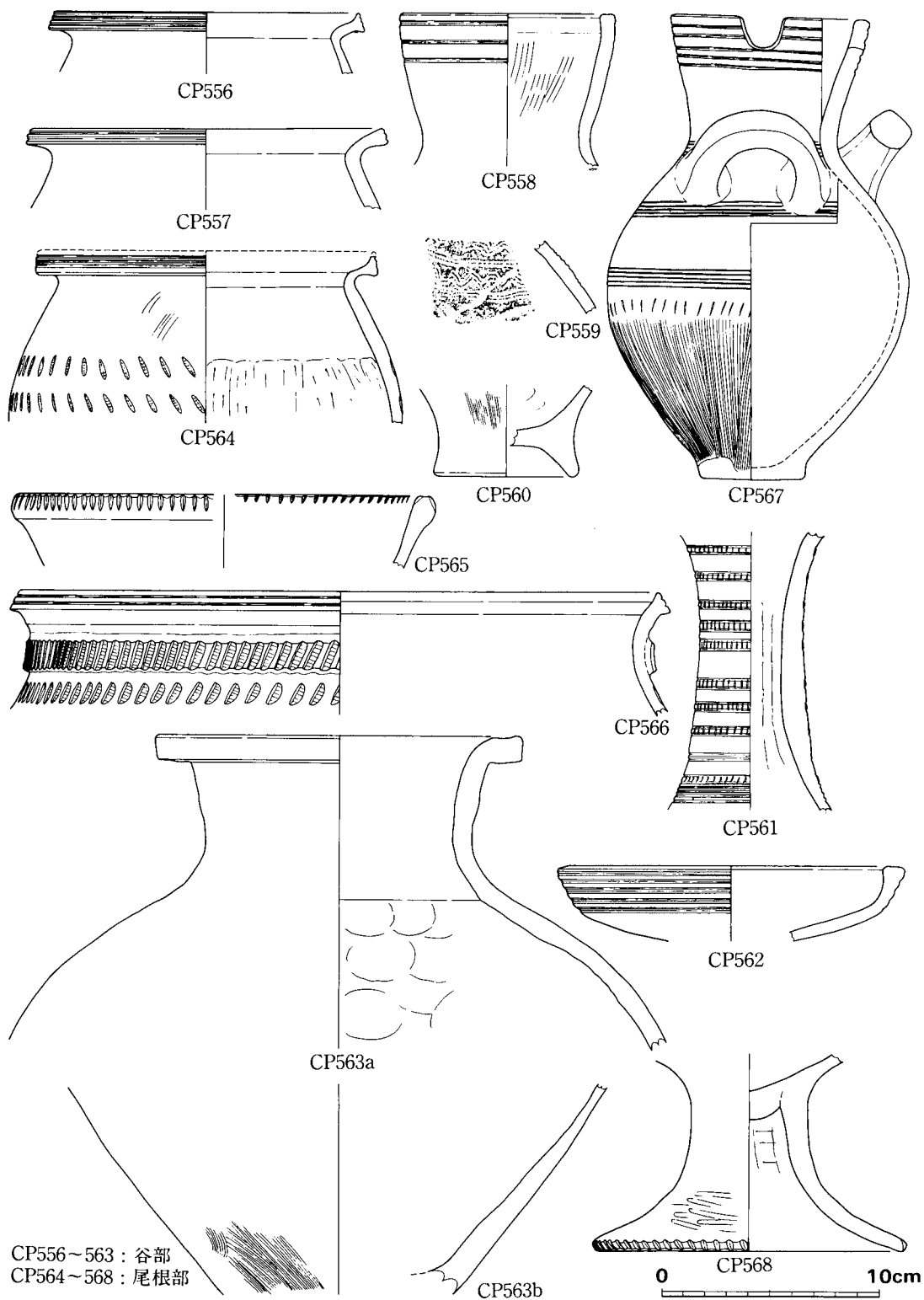
第234図 第2号環濠(南側)出土土器(S=1/3)



第235図 第2号環濠(南側)出土土器(S=1/3)

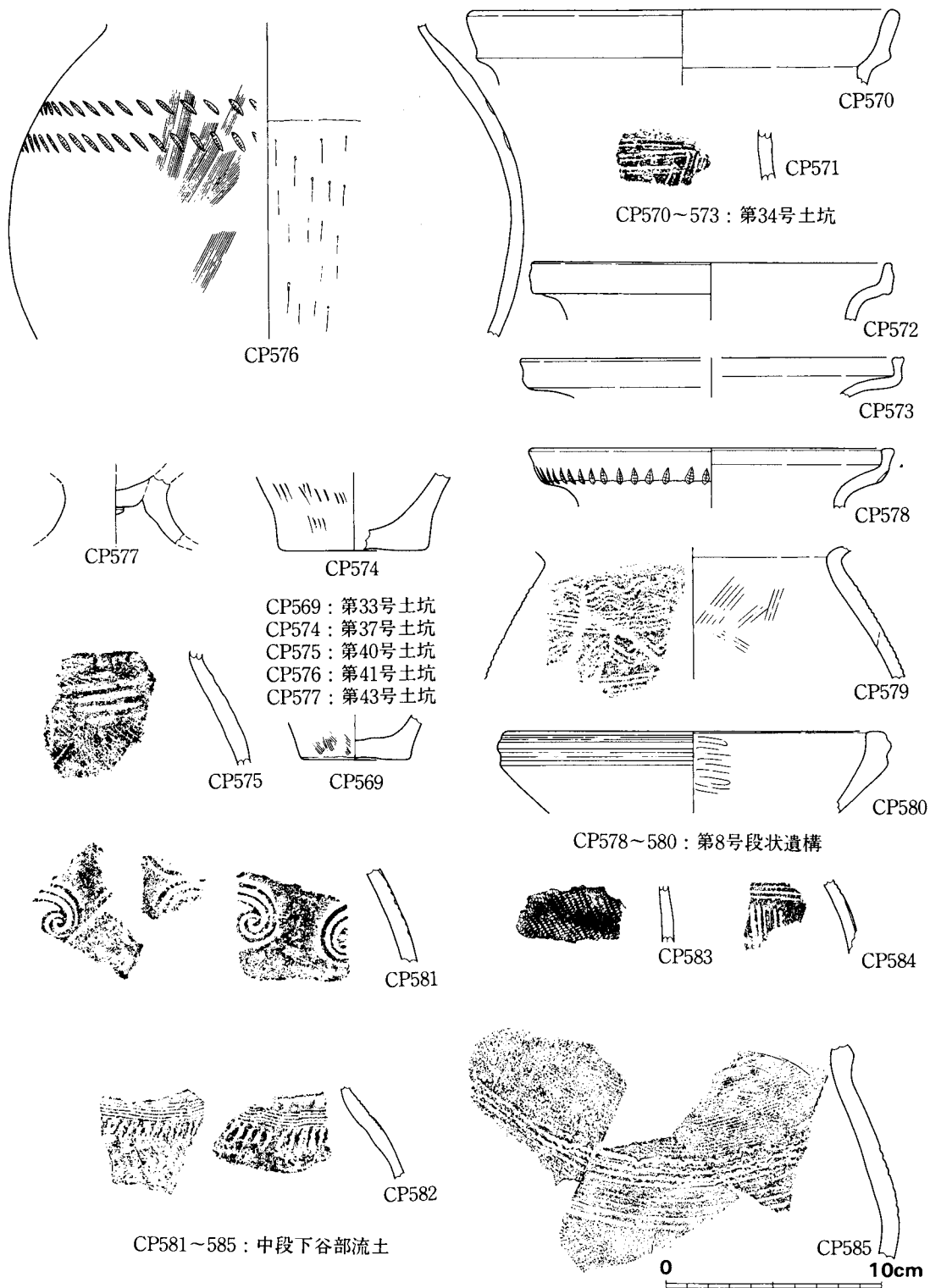


第236図 第2号環濠出土土器(S=1/3)

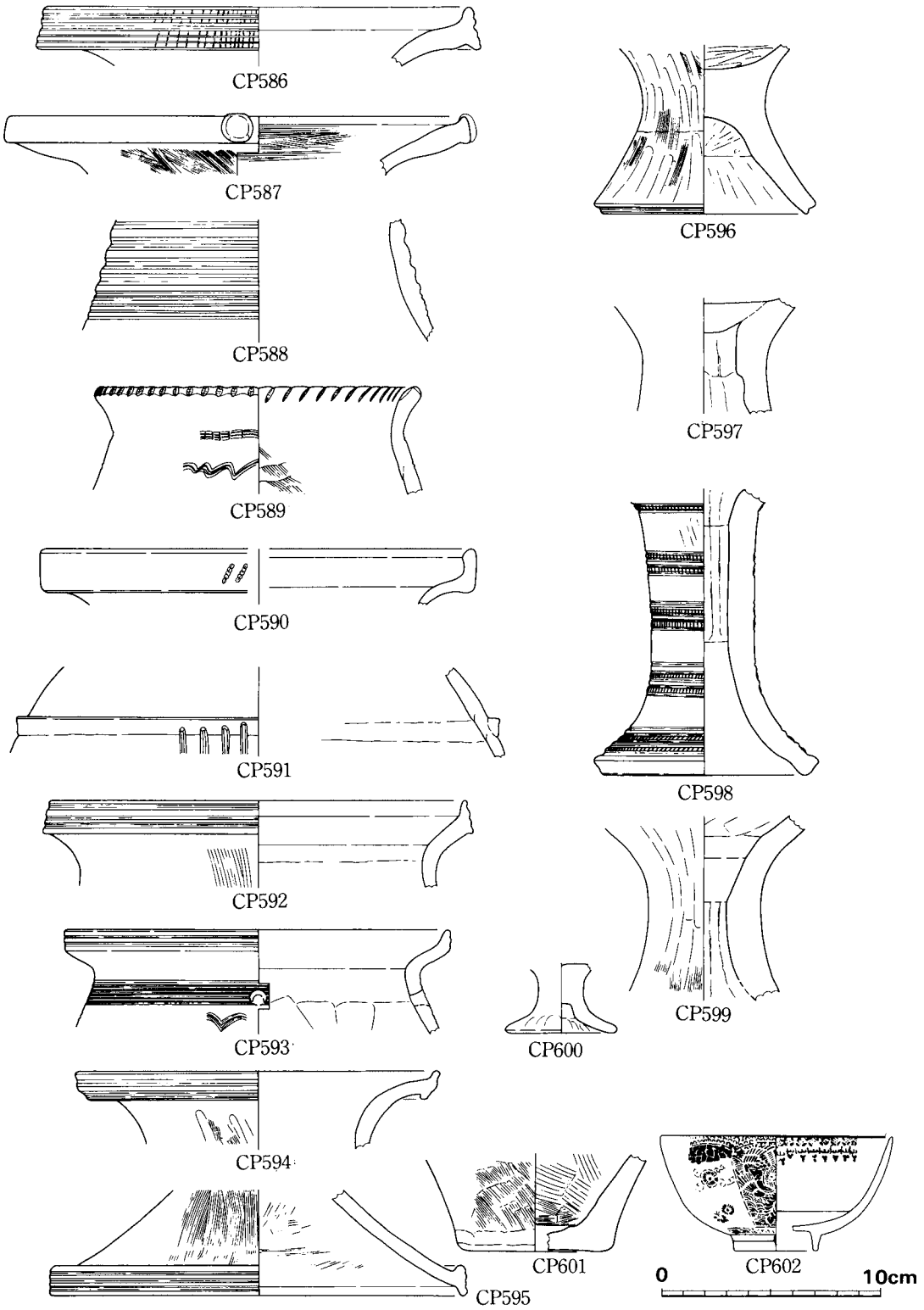


第237図 第2号環濠(東側)出土土器(S=1/3)

第4節 C地区の遺構と遺物

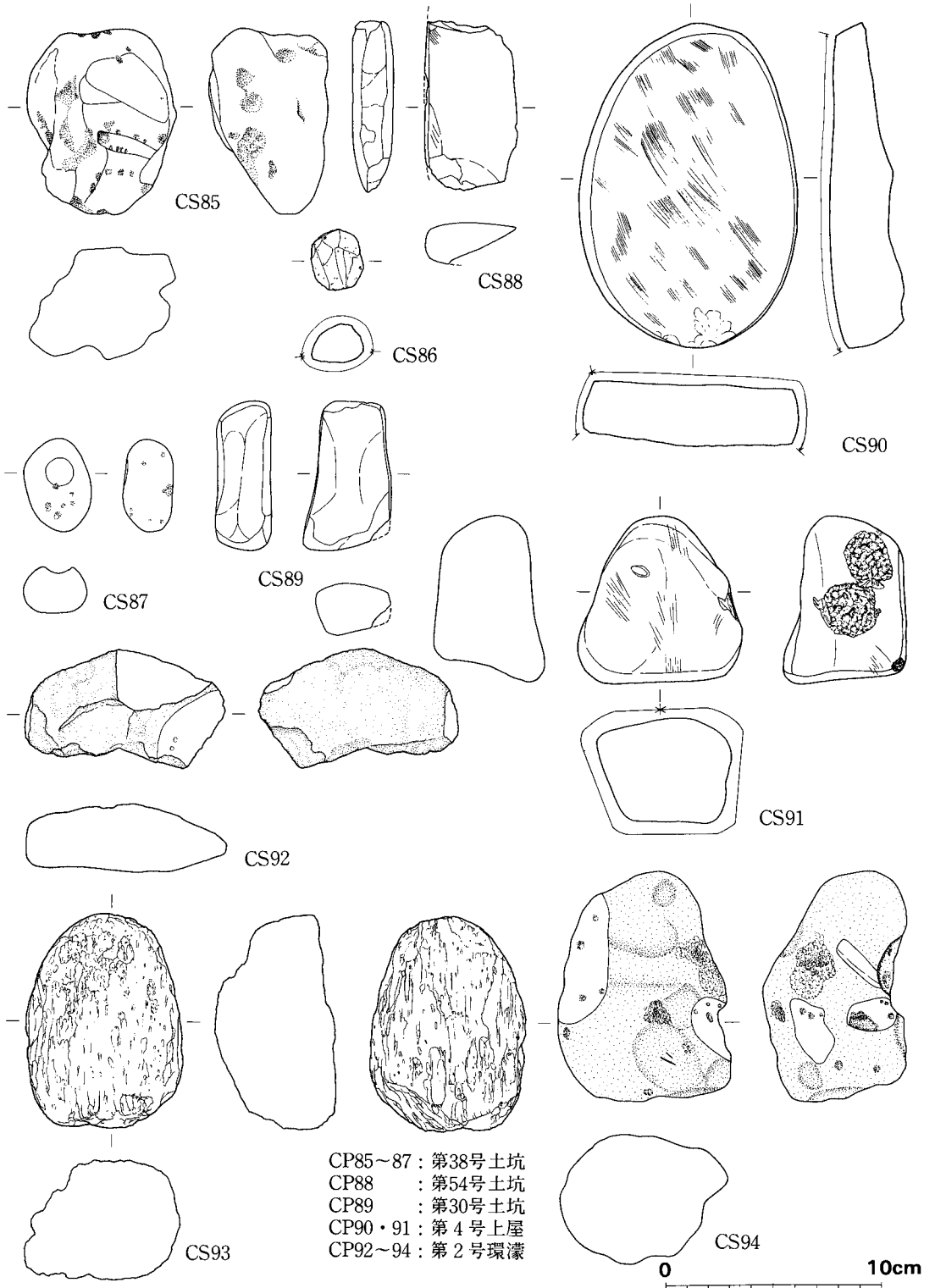


第238図 土坑・段状遺構他出土土器(S=1/3)



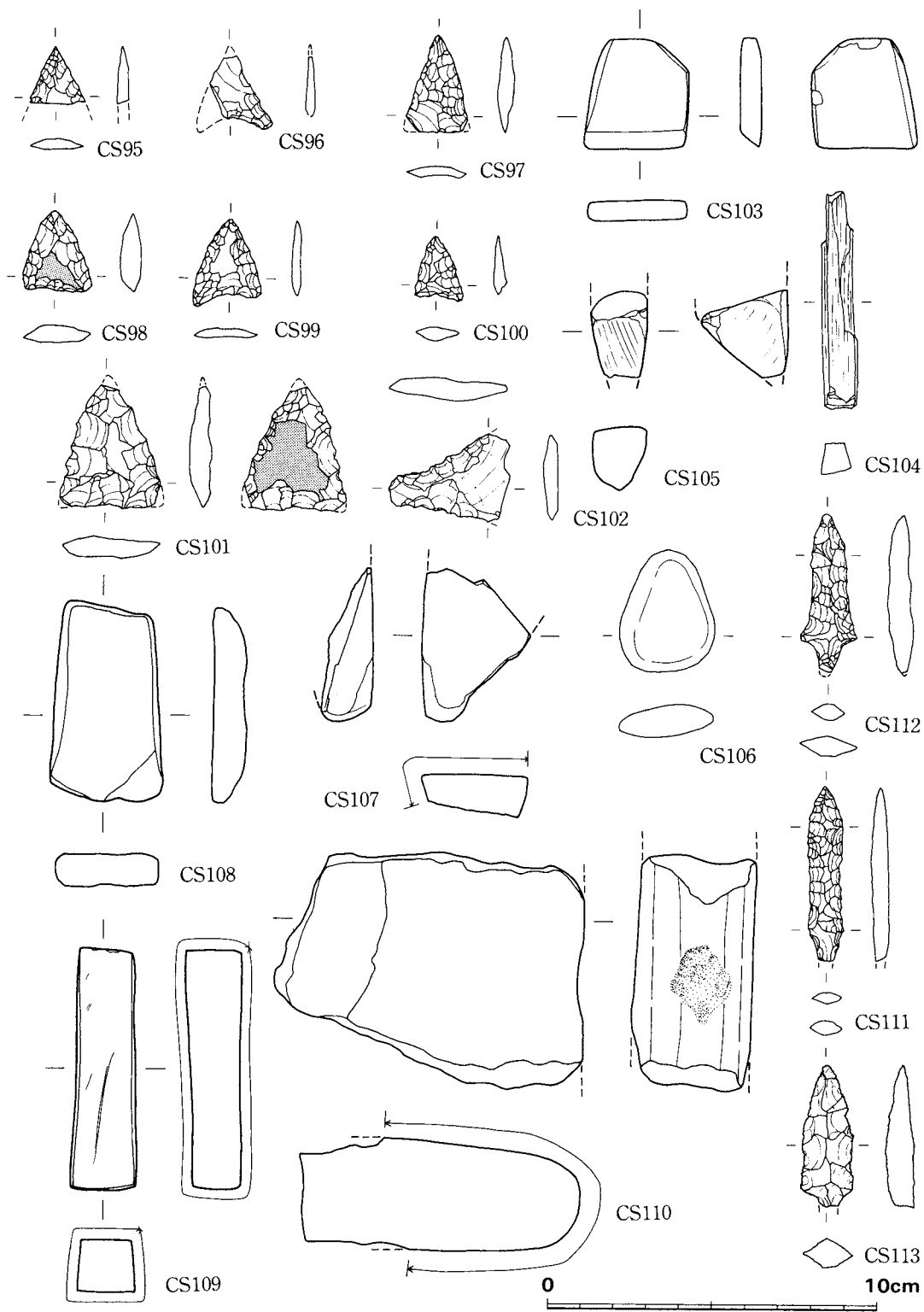
第239図 C地区中段下谷部出土土器(S=1/3)

第4節 C地区の遺構と遺物

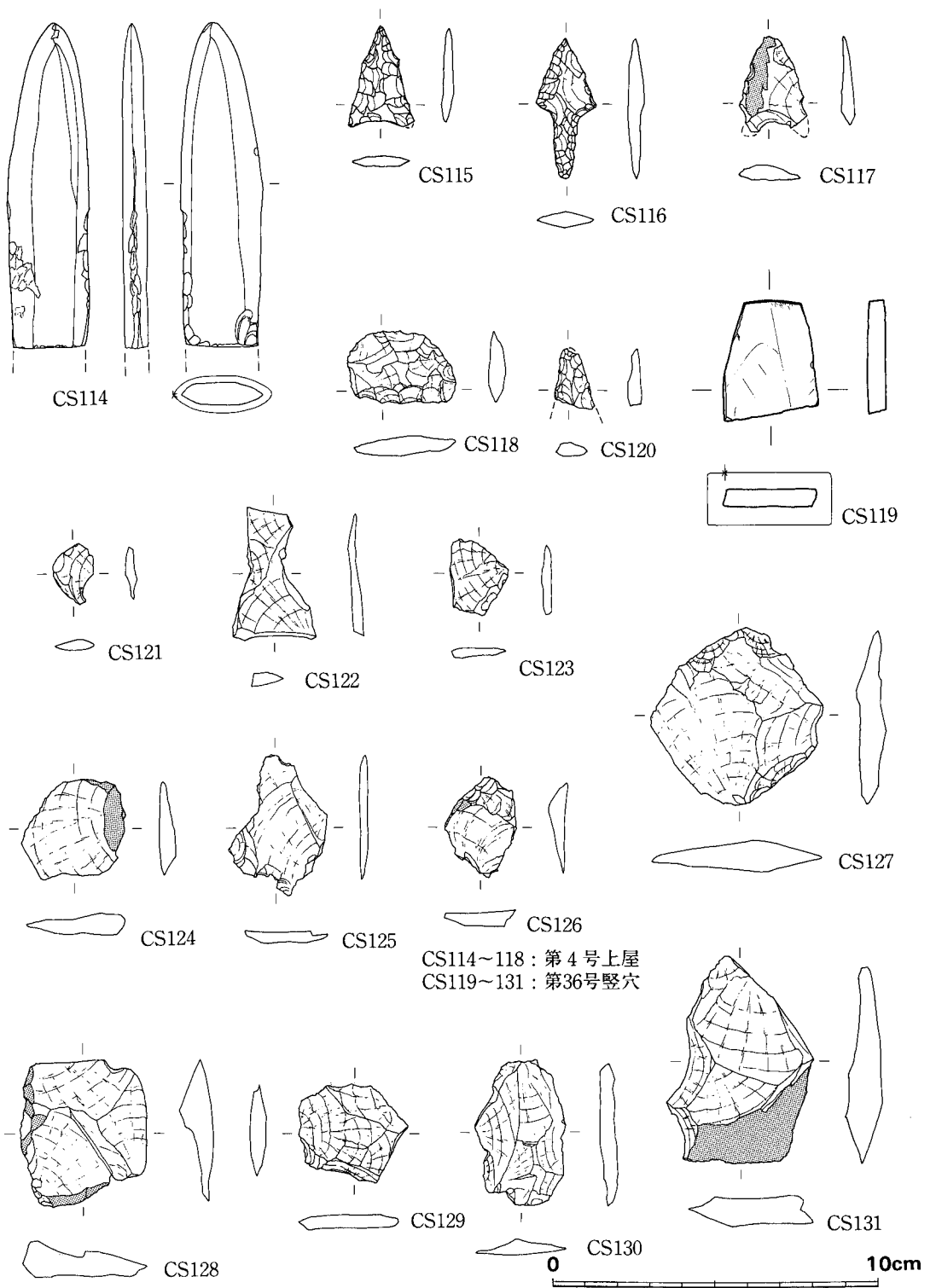


CP85~87 : 第38号土坑
 CP88 : 第54号土坑
 CP89 : 第30号土坑
 CP90・91 : 第4号上屋
 CP92~94 : 第2号環濠

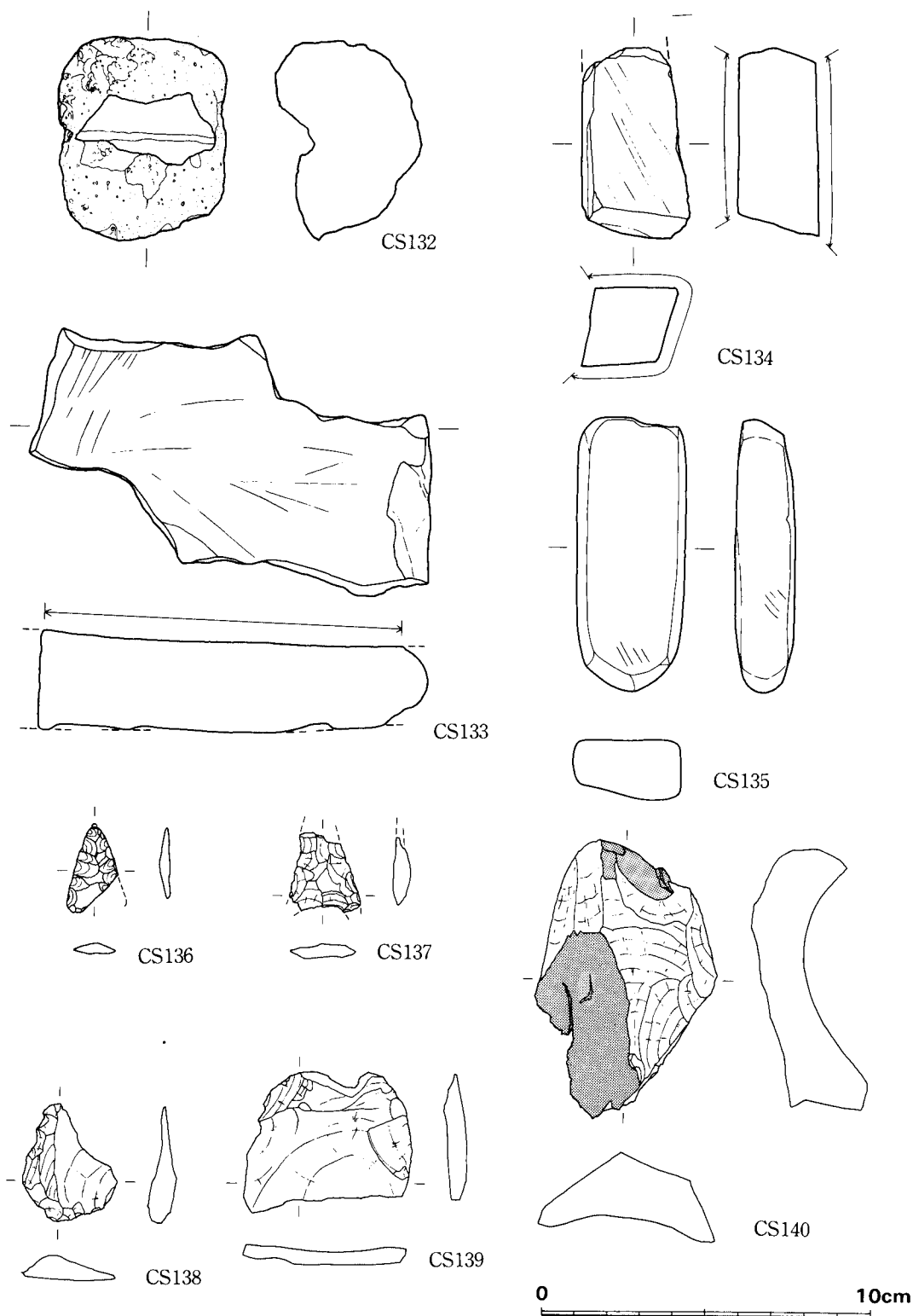
第240図 C地区出土石器(S=1/3)



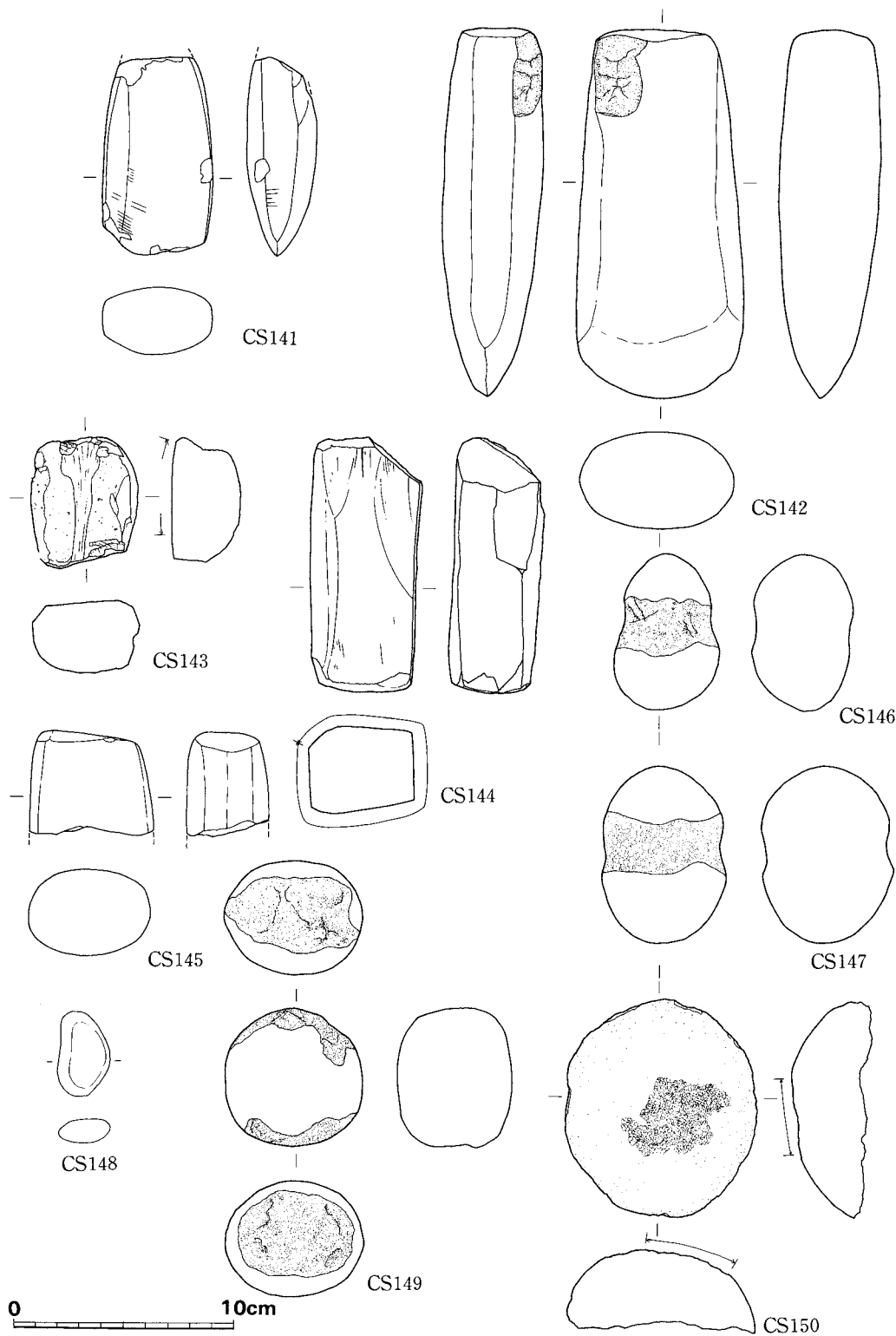
第241図 C地区出土石器(S=1/2)



第242図 C地区出土石器 (S=1/2)



第243図 第2号環濠出土石器(S=1/2)



第244図 C地区出土石器(S=1/3)

C地区出土土器観察表 (a:口径・蓋紐径 b:胴径・脚最小径・蓋最大径 c:底径・台径・裾径・蓋口径 h:器高)

番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項 遺存度	番号整理No	出土地点	器類	法量等 (cm) 色調	特記事項 遺存度
CP399 90A228	26・27 壺台?	壺台?	a:(33.3) ぶい 橙色	凹線 2、CP400と同一? 1/3	CP432 90A 66	36号 壺	壺	a:22.0 b:23.4 外煤付 浅黄橙	外面叩き→刷毛 CP 433と同一? 1/2
CP400 90A230	26・27 壺台?	壺台?	外面叩き痕 ぶい 橙色	凹線 2、CP399と同一? 小片	CP433 90A 76	36号 壺	壺	c 6.2 浅黄橙色	CP432と同一? 完
CP401 90A313	26・27 壺	壺	ぶい 黄橙色	沈線、槽描文 1/4	CP434 90A 8	36号 壺	壺	a:16.1 b:17.4 c:6.3 浅黄橙色	ぶい 橙色、外煤付着 口縁小片はほぼ完
CP402 90A297	26・27 壺	壺	ぶい 黄橙色	外面縄文、波状口縁 外面煤付着 小片	CP435 90A 73	36号 壺	壺	a:8.6 b:10.1 c:5.2 h:14.0	ぶい 橙色、外面煤付着 完
CP403	27 壺	壺	a:20.4 橙色	90C105、外煤、1/4	CP436a 90A 69	36号 壺	壺	a:(18.1)c:7.6 外煤内炭化物付 4号上屋 浅黄橙	外面叩き→刷毛 一底部 焼毛 11mm ほぼ完
CP404	27 壺	壺	a:15.7 橙色	90C103 小片	CP436b 90A223	38号 壺	壺	a:24.6 b:26.8 ぶい 黄橙色	口縁部 斜格子の刻目 4号上屋・38号土坑 1/4
CP405	27 壺	壺	a:15.9 浅黄橙	90C101、外煤、1/3	CP437 90A221	36号 壺	壺	a:24.6 b:26.8 ぶい 黄橙色	口縁部 斜格子の刻目 4号上屋・38号土坑 1/4
CP406 90A301	27号 壺	壺	ぶい 黄橙色	槽描直線・波状文 小片	CP438 90C 96	38号 高杯	高杯	b:4.2 c:24.0 橙色	二孔一対?孔数不明 脚完他は小片
CP407	27 壺	壺	c:3.1 褐灰色	90C106 ほぼ完	CP439 90C 95	38号 土釜	土釜	径3.9 長3.6 重49.5g	孔径8mm ぶい 黄橙色 完
CP408	27 壺	壺	沈線 4、浅黄橙	90C104 小片	CP440 90C 94	38号 土釜	土釜	径3.9 長3.7 重38.7g	孔径8mm ぶい 黄橙色 完
CP409 90C102	27号 壺	壺	a:(16.0) 浅黄橙色	外面煤付着 上半部 ほぼ完、下半部 1/2	CP441 90A254	38号 壺	壺	ぶい 黄橙色	直線文・波状文 他小片
CP410 90C111	27号 壺	壺	a:20.4 b:29.7 c:1.9 h:32.0 ぶい 黄橙色	90A207 ほぼ完	CP442 90A257	38号 壺	壺	ぶい 黄橙色	直線文・波状文 小片
CP411	28 壺	壺	c:6.2 明黄褐	90A219にぶい 橙 径38、孔径6mm、1/2	CP443 90A256	38号 壺	壺	ぶい 黄橙色	直線文・波状文 小片
CP412	28 壺	壺	90A286にぶい 橙	直線・波状文、小片	CP444 90C 92	38号 壺	壺	c:19.8 端部は 1/3にぶい 黄橙	4号上屋・4号段状 遺構からも出土
CP413	31 壺	壺	a:16.5 c:4.8 橙色	外面煤付着 口縁部 2/3、底部 完	CP445 90A 70	38号 壺	壺	肩部刻目、把手 2、ぶい 橙色	4号上屋からも出土 口頭部 小片
CP414 90C110	31号 壺	壺	a:16.1 ぶい 黄橙色	外面煤付着 3/4	CP446 90A 75	4号 壺	壺	38号土坑からも出土 外煤付着	直線文・斜向短線文? 破片6点 小片?
CP415 90C107	31号 壺	壺	a:14.7 ぶい 黄橙色	外面煤付着、CP417 2/3	CP447 90A 68	4号 壺	壺	a:12.3 b:25.8 1/3 浅黄橙色	38号土坑からも出土 直線・波状文・刻目
CP416 90C108	31号 壺	壺	c:3.0 ぶい 黄橙色	外面煤付着、CP416 3/4	CP448 90A224	4号 壺	壺	a:19.2 浅黄橙色	外面頭部 簾状文 1/3
CP417 90C109	31号 壺	壺	31号壺穴からも 出土	口縁部 沈線・刻目 ぶい 橙色 小片	CP449 90A227	4号 壺	壺	a:18.6 b:(17.6) 浅黄橙	口縁外刻目・内縁 杉文、外面煤付着 1/4
CP418 90A232	31号 壺	壺	c:12.0 ぶい 黄橙色	孔径9mm、2以上 小片	CP450 90A226	4号 壺	壺	a:15.0 浅黄橙色	外口縁刻目・肩部 焼杉文、外煤付着 1/4
CP419 90A233	31号 壺	壺	a:18.4 ぶい 橙色	外面煤付着 小片	CP451 90A 71	4号 壺	壺	a:17.6 外面煤 付着 黒褐色	口縁外面 桶状具による 二段の刺突 1/2
CP420 90A231	31号 壺	壺	ぶい 黄橙色	頭部貼付 突帯+斜格子 刻目 1/4	CP452 90A222	4号 壺	壺	c:6.8 橙色	外面煤付着 底部完、他は 1/2
CP421 90A208	32号 壺	壺	ぶい 黄橙色	外面貼付による 瘤、 梨形 1/3	CP453 90C 93	4号 壺	壺	a:17.1 c:5.3 h:11.9 浅黄橙	底部完、他は 1/2
CP422 90A212	3号 壺	壺	a:12.0 ぶい 黄橙色	槽描直線文・扇形文 浅黄橙色 小片	CP454	4上 壺	壺	a:16.1 外煤 1/3	90C99 ぶい 黄橙色
CP423 90A 74	3号 壺	壺	4号上屋・38号 土坑からも 出土	槽描直線文・扇形文 浅黄橙色 小片	CP455	4上 壺	壺	a:19.3 外煤付着	90C97 浅黄橙色 1/4
CP424 90A206	3号 壺	壺	a:16.0 ぶい 橙色	口縁部 刻目 2/3	CP456	4上 壺	壺	a:21.3 外煤 小片	90C98 ぶい 黄橙色
CP425 90A213	3号 壺	壺	a:18.8 30号 土坑からも 出土	沈線・綾杉文、外煤 付、浅黄橙色、小片	CP457 90C100	4号 壺	壺	a:3.2 b:2.3 c:3.4 h:3.7	口縁小片、体部 1/2 他はほぼ完
CP426 90A209	3号 壺	壺	a:18.0 ぶい 黄橙色	外面煤付着 1/3	CP458 90A 10	1号 壺	壺	a:21.8 b:28.1 c:8.9 h:48.1 ぶい 橙色	外面煤・内面炭化物 付着、口縁部 1/4、 胴部 3/4、底部 完
CP427 90A214	3号 壺	壺	a:20.0 ぶい 黄橙色	凹線 3 1/4	CP459 90A197	2号 壺	壺	a:16.8 b:14.8 黄橙色	口縁部 桶による 刻目 外面煤付着 1/4
CP428	3号 壺	壺	a:13.8 浅黄橙	90C 91 1/3	CP460 90C 84	2号 壺	壺	a:15.5 橙色	凹線 5 外面煤付着 小片
CP429 90A253	3号 壺	壺	ぶい 黄橙色 4号上屋・38号 土坑からも 出土	二本一組の直線文・ 波状文、破片 10数点 小片?	CP461 90C 85	2号 壺	壺	a:15.2 橙色	凹線 2以上 外面煤付着 小片
CP430 90A225	3号 壺	壺	浅黄橙色	頭部貼付 突帯+斜格子 刻目 小片	CP462 90A198	5号 壺	壺	c:9.2 橙色	胴部 1/3、底はほぼ完
CP431 90A 72	36号 壺	壺	a:14.5 b:(19.4) c:6.4 h:(23.0) 赤橙色	肩部焼成? 後?穿孔 二煤 孔?一炭化物付着 1/2					

第4節 C地区の遺構と遺物

番 号 整理No	出土 地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度	番 号 整理No	出土 地点	器類	法量等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度
CP463 90A239	7号 段状	壺	a:(27.0) 浅黄橙色	口縁端部刻目 1/4	CP499	中段	蓋	b:15.3 c:14.7	90D 94 灰白色 1/4
CP464	7号 段状	底部	c: 6.4 90A240	にぶい黄橙 ほぼ完	CP500	中段	蓋	a: 3.1 90D 97	灰色 鈕完体部 1/4
CP465 90A241	7号 段状	底部	c: 6.0 浅黄橙色	底部焼成後穿孔1径 8mm、胴部1/3底完	CP501	中段	蓋	b:12.4 c:12.4	90D 91 灰白色 1/2
CP466 90A234	36土 上部	壺	a:22.2 浅黄橙色	口縁端部刻目 小片	CP502	中段	蓋	b:15.4 c:14.8	90D 92 灰色 1/4
CP467 90C112	36号 土坑	土製 円盤	紡錘車 浅黄橙色	径25~30、厚さ5、 孔径 5-6mm 完	CP503	中段	蓋	b:13.7 90D 86 c:13.5	にぶい黄橙色 1/4
CP468 90A244	36号 土坑	壺	a:18.0 c: 6.7 7号段状遺構か らも出土 灰褐	外口縁~肩部刻目3 段~、口縁部1/3、 肩部小片、底部1/2	CP504	中段	蓋	b:13.2 c:13.1	90D 95 淡黄色 1/3
CP469 90A 9	36号 土坑	壺	a:21.0 b:24.0 c: 8.2 h:36.0 口縁部 2/3、胴 部ほぼ完	明赤褐色、7号段状 遺構から出土 灰褐 外付著 内面炭化物 部は1/3	CP505	中段	無杯	c: 7.0 90D 99	暗青灰色 小片
CP470 90A235	36号 土坑	?	浅黄橙色	扇形文・直線文・波 状文 小片	CP506	中段	無台 杯	a:11.3 c: 8.0 h: 2.5 90D 87	灰白色 小片
CP471	36土	壺	a:18.2 浅黄橙	90C113上部出土 1/4	CP507	中段	瓶	90D 98	灰色 小片
CP472 90A303	30号 土坑	?	灰褐色	縄文・簾状文・波状 文 小片	CP508 90A 85	中段	壺	浅黄橙色	貼付突帯+斜格子の 刻目 小片
CP473 90C114	30号 土坑	高杯	b: 4.0 浅黄橙色	上部は ほぼ完、下部は1/2	CP509 90A 89	中段	壺?	a:(19.2) 浅黄橙色	凹線2、円形浮文 1小片
CP474	30土	?	直線文・波状文	浅黄橙 90A238 小片	CP510	中段	壺	a:(28.4) 90A94	橙、外煤付着 小片
CP475 90C115	30号 土坑	土錘	径 3.6 長 3.3 重39.8g	孔径 8mm 浅黄橙色 完	CP511	中段	鉢	a:(25.8) 90A82	橙色 1/3
CP476	30土	?	90C307 外縄文	+ 31土、灰褐 小片	CP512 90A 89	中段	壺?	外煤・内炭化物 付着 にぶい橙	二条の沈線+交互刺 突文 小片
CP477 90C116	31号 土坑	土錘	径 3.0 長 4.3 重40.6g	孔径 8mm にぶい黄橙色 完	CP513	中下	壺	90A304 浅黄橙	重菱形文 小片
CP478	31土	高杯	a:18.0 浅黄橙	凹線4 90A242 1/3	CP514	中段	?	90A308 外縄文	浅黄橙色 小片
CP479	31土	壺	a:15.2 浅黄橙	外煤付 90C117 1/4	CP515	中段	?	90A305 外縄文	にぶい黄橙色 小片
CP480 90A243	31号 土坑	底部	c: 6.4 浅黄橙色	焼成後穿孔1、径6 mm 1/2	CP516	中段	壺	90A 89 黒褐色	口縁外面刻目 小片
CP481 90C118	31号 土坑	高杯	c:20.0 橙色	擬凹線3、孔1以上 端部1/4、他は小片	CP517 90A 90	中段	高杯	a:12.2 浅黄橙色	凹線5、外面煤付着 小片
CP482	31土	鉢	a:22.4 にぶい橙	90C119 1/4	CP518	中段	高杯	b: 5.1 浅黄橙	90A 80 完
CP483 90C120	31土 段状	壺	b:17.8 c 4.6 浅黄橙色	31土坑南西側段状 遺構、外面煤付着 1/2	CP519	中段	底部	c: 7.8 外縄文	浅黄橙 90A302 小片
CP484 90A237	39号 土坑	?	にぶい黄橙色	直線文・簾状文・波 状文・縹杉文 小片	CP520 90A101	中段	土錘	径 3.7 長 3.4 重31.7g 橙色	孔径 7mm 完
CP485 90A236	39号 土坑	壺	a:(31.0) 浅黄橙色	直線文・簾状文・波 状文・縹杉文 小片	CP521 90A100	中段	土錘	径 3.8 長 3.2 重30.9g 橙色	孔径 6mm 完
CP486	4号 段	壺?	a:15.4 にぶい橙	90C122 2/3	CP522 90A 99	中段	土錘	径 3.9 長 3.1 重31.7g 橙色	孔径 5mm 完
CP487	4号 段	壺	竹管・縹状浮文	90A 93浅黄橙 小片	CP523 90C 10	中段	高杯	a:25.8 浅黄橙色	内面一部(?) 赤彩 小片
CP488	4号 段	?	外面縄文	90A312浅黄橙 小片	CP524 90A185	2環 南側	壺?	a:25.2 浅黄橙色	口縁部沈線・刻目、 CP529と同一? 1/4
CP489	4号 段	高杯	c: 4.2 浅黄橙	90C121孔4? ほぼ完	CP525 90A189	2環 南側	壺	a:18.0 浅黄橙色	口縁部刻目 1/4
CP490 90A216	3号 上屋	壺	a:18.6 b:21.4 にぶい黄橙色	外面波状文・煤付着 1/3	CP526 90A 11	2環 南側	壺	a:19.8 c: 7.6 浅黄橙色 1/2	凹線2、直線文、直 線文・斜向短線文、 貼付突帯+斜向刻目
CP491 90A215	3号 上屋	?	浅黄橙色	貼付突帯+斜格子の 小片	CP527 90A177	2環 南側	壺	a:11.0 橙色	口縁部木目沈線文3 ・刻目 小片
CP492 90A 67	3号 上屋	壺	a:20.6 b:20.2 にぶい橙色	口縁部沈線・内外面 刻目 3/4	CP528 90A161	2環 南側	壺	a:15.4 橙色	口縁部斜格子の刻目 2/3
CP493 90A217	35号 土坑	壺	a:(17.2) にぶい黄橙色	外面煤付着 小片	CP529 90A166	2環 南側	底部	c: 7.4 浅黄橙色	CP524と同一個体? ほぼ完
CP494	中段	蓋	b:15.8 c:13.4	90D 90 灰色 1/3	CP530 90A167	2環 南側	底部	c: 9.8 浅黄橙色	ほぼ完
CP495	中段	蓋	b:13.2 c:11.0	90D 89 灰色 1/3	CP531 90A183	2環 南側	土錘	径 4.0 長 4.0 重42.7g 橙色	孔径 8mm ほぼ完
CP496	中段	蓋	b:14.0 c:11.1(c:13.7)	90D 93 灰色 1/4	CP532 90A201	2環 南側	底部	c: 5.8 橙色	内面炭化物付着 完
CP497	中段	蓋	a: 3.2 b:15.6 c:14.8 h: 2.5	90D 93 灰色 鈕部完、体部 1/4	CP533 90A175	2環 南側	底部	c: 6.2 橙色	焼成後穿孔1、径5mm ほぼ完
CP498	中段	蓋	b:15.0 c:14.3	90D 88 灰色 小片	CP534 90A191	2環 南側	壺?	a:(26.6) 橙色	口縁部凹線? 2、外 面煤付着 小片
					CP535 90A187	2環 南側	壺	a:(12.7) 浅黄橙色	口縁部凹線? 1、外 面煤付着 1/4

第4章 杉谷チャノバタケ遺跡

番 号 整理 No	出 土 地 点	器 類	法 量 等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度	番 号 整理 No	出 土 地 点	器 類	法 量 等 (cm) 色 調	特 記 事 項 遺 存 度
CP536 90A196	2 環 南側	甕	a:15.0 浅黄橙色	外面煤付着 1/2	CP569	33土	底部	c: 5.1 浅黄橙	90A205 ほぼ完
CP537 90A195	2 環 南側	甕	a:16.5 浅黄橙色	外面煤付着 小片	CP570 90C 87	34号 土坑	甕	a:19.7 にぶい橙色	外面煤付着 1/4
CP538 90A192	2 環 南側	甕	a:15.8 浅黄橙色	外面煤付着 3/4	CP571 90A310	34号 土坑	?	にぶい橙色	沈線(重菱形文?) 小片
CP539 90A188	2 環 南側	甕	a:15.0 口縁部 小片 浅黄橙色	外面叩き痕・刻目、 煤付着 1/4	CP572 90C 88	34号 土坑	甕	a:16.5 浅黄橙色	外面煤付着 小片
CP540 90A193	2 環 南側	甕	a:17.9 浅黄橙色	外面凹線2・叩き痕 煤付着 小片	CP573	34土	甕	a:17.5にぶい橙	90C 89 小片
CP541 90A181	2 環 南側	甕	a:15.8 浅黄橙色	外面凹線4・煤付着 小片	CP574	37土	底部	c: 6.9 橙色	90A205 1/3
CP542 90A190	2 環 南側	甕?	にぶい橙色	外面直線文・刻目、 煤付着 小片	CP575	40土	甕?	90A218 浅黄橙	外面叩き痕 小片
CP543 90A170	2 環 南側	?	b:16.5 外面煤 付着 浅黄橙色	外面直線文・波状文 ・綾杉文 1/2	CP576 90A204	41号 土坑	甕?	b:24.1 浅黄橙色	外面刻目2段、外煤 ・内炭化物付 小片
CP544 90A189	2 環 南側	壺?	口縁内面斜格子 の刻目 浅黄橙	口縁端部指頭押庄 により波状 小片	CP577	43土	高杯	b: 4.7 橙色	90A202 2/3
CP545	2 南	高杯	b: 4.8 c:10.2	橙 90A163 ほぼ完	CP578 90A200	8号 段状	甕	a:16.8 橙色	口縁部刻目、外面煤 付着 1/4
CP546 90A164	2 環 南側	高杯	b: 6.4 c:13.1 浅黄橙色	外面脚凹線9-10・裾 1-2 外面赤彩? 小片	CP579 90A199	8号 段状	甕?	浅黄橙色	外面波状文・直線文 小片
CP547 90A171	2 環 南側	鉢	a:14.9焼成前? 穿孔1~ 浅黄橙	外面貼付突帯+斜格 子の刻目 1/4	CP580 90C 86	8号 段状	高杯	a:17.6 橙色	外面凹線2 1/3
CP548 90A173	2 環 南側	壺	a: 7.4 橙色	外面木目条沈線2 焼成前穿孔1~ 1/4	CP581 90A 84	谷部 流土	壺	黄橙色	外面陽刻文スタンプ (双頭渦文?) 小片
CP549 90A102	2 環 南側	壺	b:39.3 C:10.7 橙色	1/4	CP582 90A 98	谷部 流土	?	浅黄橙色	外面直線文・刻目、 外面煤付着 小片
CP550 90A104	2 環 東側	壺	a:14.3 浅黄橙色	口縁部内外面刻目 1/2	CP583 90A306	谷部 流土	?	浅黄橙色	外面縄文 小片
CP551	2 環	甕	a:20.8 浅黄橙	東側谷 90A176 小片	CP584 90A 91	谷部 流土	?	CP586・588 と同 一? 浅黄橙色	外面直線文・縦位直 線文 小片
CP552 90A311	2 環 東谷	?	黒褐色	口縁端部交互刻突文 外面縄文 小片	CP585 90A77a	谷部 流土	?	浅黄橙色	外面波状文・直線文 小片?
CP553 90A311	2 環 東谷	壺	b:10.6 c: 5.5 灰白色	外面直線文・波状文 ほぼ完	CP586 90A 86	谷部 流土	壺	a:19.6 小片 浅黄橙色	口縁部凹線4+刻目 CP584・588 と同一?
CP554 90A182	2 環 東谷	土鉢	径 4.1 長 4.0 重 44.2g 褐灰色	孔径 8mm 完	CP587 90A 88	谷部 流土	壺	a:21.2 灰褐色	口縁部円形浮文 1以 上 小片
CP555 90A184	2 環 東谷	壺?	b:16.8 浅黄橙色	口縁外面刻目・内面 綾杉文 小片	CP588 90C 8	谷部 流土	壺	CP584・586 と同 一? 浅黄橙色	類部凹線4以上、肩 部直線文 小片
CP556 90A180	2 環 東谷	甕	a:14.1 黒褐色	口縁部凹線3 小片	CP589 90A 87	谷部 流土	甕	a:14.4 浅黄橙色	口縁部内外刻目、外 面縞状文・波状文、 外面煤付着 小片
CP557 90A178	2 環 東谷	甕	a:16.3 橙色	口縁部凹線2、外面 煤付着 小片	CP590 90C 7	谷部 流土	甕	a:(20.0) 黄橙色	口縁部刻目、外面煤 付着 小片
CP558 90A172	2 環 東谷	壺	a:10.0 浅黄橙色	外面凹線3 小片	CP591 90A 92	谷部 流土	壺	浅黄橙色	外面貼付突帯+棒状 浮文4以上 小片
CP559 90A174	2 環 東谷	?	橙色	外面直線文・波状文 小片	CP592 90C 9	谷部 流土	甕	a:19.2 黄橙色	口縁部擬凹線3、外 面煤付着 1/4
CP560 90A168	2 環 東谷	甕? 底部	c: 6.4 橙色	脚台付甕? 外面煤付着 1/2	CP593 90A 97	谷部 流土	甕	a:17.5 肩部焼 成後穿孔1以上 径5mm 浅黄橙色	口縁部凹線2・肩部 直線文・波状文、外 面煤付着 小片
CP561 90A162	2 環 東谷	高杯	b: 4.8 浅黄橙色	2条沈線+刻目、沈 線 2/3	CP594	谷流	壺	a:16.7 黄橙色	90A95 凹線2 1/4
CP562 90A165	2 環 東谷	高杯	a:14.5 にぶい黄橙色	口縁部凹線5 小片	CP595	谷流	器台	c:19.0 浅黄橙	90C11 擬凹線3 1/2
CP563	2 環	壺	a:16.9 浅黄橙	東側谷 90A103ほぼ完	CP596 90A 79	谷部 流土	高杯	b: 5.6 c: 9.3 浅黄橙色	裾端部沈線1 端部小片他はほぼ完
CP564 90A179	2 環 東尾	甕	a:(15.6) にぶい橙色	口縁凹線3、外刻目 2段・煤付着 小片	CP597 90A 81	谷流	高杯	b: 5.6 黄橙色	1/2
CP565 90A186	2 環 東尾	鉢	a:(19.0) 浅黄橙色	口縁部内外面刻目 小片	CP598 90A 78	谷部 流土	高杯	b: 4.7 c: 9.1 浅黄橙色	凹線+凹線間の刻目 ほぼ完
CP566 90A160	2 環 東尾根	甕	a:29.8 にぶい黄橙色	口縁部凹線2、外面 頸部貼付突帯+刻目 3/4	CP599 90A314	谷部 流土	高杯	b: 5.2 黄橙色	1/2
CP567 90A 12	2 環 東尾	水差	a: 9.2 b:13.9 c: 4.9 h:16.8	浅黄橙色、凹線5、 外直線文3・刻目1 完	CP600 90A 83	谷部 流土	鉢?	b: 2.1 c: 5.2 黄橙色	脚部ほぼ完裾部 1/2
CP568 90A158	2 環 東尾	高杯 ?	b: 5.3 c:14.8 浅黄橙色	裾端部刻目 裾部小片脚部ほぼ完	CP601 90A77b	谷部 流土	底部	c: 6.7 浅黄橙色	1/4
					CP602 90D100	谷部 流土	碗	a:10.5 b:4.2 c: 3.75 h:5.45	美濃磁器染付繪輪 1/4

第4節 C地区の遺構と遺物

C地区出土石器観察表(*:残存値)

番号	整理No	出土地点	器種等	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質等特記事項
CS85	89 S 63	第38号土坑	?	8.6	6.9	5.3	37.5	軽石
86	90 S 64	" 北側	"	2.9	2.5	2.1	1.3	軽石
87	89 S 62	"	"	4.3	3.1	2.1	8.4	軽石
88	89 S 72	第54号土坑	磨製石斧	* 7.9	* 4.4	* 1.9	* 87.6	凝灰岩
89	89 S 70	第30号土坑	砥石	7.0	4.2	2.4	103	黒雲母角閃石片麻岩
90	90 S 54	第4号上屋	" ?	15.1	10.2	3.4	705	白色凝灰岩
91	89 S 69	" 上部西側	敲石・砥石?	7.8	7.6	5.7	462	安山岩
92	90 S 49	第2号環濠	?	9.4	5.6	* 3.5	* 28.8	軽石
93	90 S 48	"	"	10.0	7.4	5.8	62.9	軽石
94	89 S 64	"	"	10.7	7.8	6.1	75.9	軽石
95	89 S 82	第28号整穴	打製石鏃	* 1.8	* 1.7	* 0.4	* 0.8	黒色頁岩(中生代)
96	90 S 46	" 北側	"	* 1.9	* 1.5	* 0.3	* 1.0	黒色頁岩(中生代)
97	89 S 48	第3号段状遺構	"	3.0	* 1.9	0.5	* 2.3	輝石安山岩
98	89 S 54	中段上位	"	2.5	3.2	0.6	3.0	黒色頁岩(中生代)
99	89 S 47	上段下位	"	2.7	2.1	0.3	1.4	黒色頁岩(中生代)
100	89 S 50	第4号段状遺構	"	2.0	1.5	0.4	0.9	黒色頁岩(中生代)
101	89 S 55	第7号段状遺構	"	* 3.8	* 3.1	0.7	* 7.7	黒色頁岩(中生代)
102	90 S 43	第36号土坑	打製石器	* 2.4	* 4.0	* 0.7	* 5.4	黒色頁岩(中生代)
103	89 S 61	第3号段状遺構	扁平片刃石斧	3.4	3.2	0.6	14.7	硬玉質岩
104	90 S 62	"	?	9.8	* 5.5	5.2	* 318	珪化木
105	90 S 63	第8号段状遺構	柱状片刃石斧	* 2.6	* 2.6	* 1.6	* 14.3	シルト岩
106	90 S 39	第30号土坑	?	3.7	2.9	0.9	15.3	硬玉質岩(含翡翠)
107	89 S 79	第28号整穴	砥石	* 4.7	* 3.4	* 1.6	* 22.3	白色凝灰岩
108	90 S 61	第31号整穴	" ?	6.2	3.6	1.0	17.9	白色凝灰岩
109	90 S 60	第3号上屋	"	7.5	2.0	1.7	49.0	白色凝灰岩
110	89 S 80	第35号土坑	敲石・砥石?	* 6.9	* 9.3	3.5	* 393	角閃石安山岩
111	89 S 59	"	打製石鏃	* 5.4	1.1	0.5	* 3.0	輝石安山岩
112	89 S 58	第2号上屋	"	* 4.9	1.8	0.6	* 3.8	黒色頁岩(中生代)
113	89 S 57	中段下斜面	"	* 4.4	1.6	0.9	* 4.6	赤色珪質岩
114	90 S 10	第4号上屋	磨製石刺	* 10.0	* 2.6	0.8	* 25.6	黒色頁岩(中生代)
115	89 S 49	" 北側	打製石鏃	3.1	2.1	0.3	1.7	黒色頁岩(中生代)
116	89 S 60	" 西側	"	4.3	1.9	0.5	2.6	輝石安山岩
117	90 S 40	"	"	* 2.6	* 1.9	0.4	* 2.3	黒色頁岩(中生代)
118	90 S 42	" 西側	楔形石器	2.2	3.2	0.6	5.0	黒色頁岩(中生代)
119	89 S 78	第36号整穴	砥石	* 3.7	2.9	0.6	* 9.3	中粒砂岩(中生代)
120	90 S 41	"	打製石器	* 1.7	* 1.2	* 0.5	* 0.8	黒色頁岩(中生代)
121	90 S 29	" S1地点	石鏃素材刺片	1.9	1.3	0.3	0.7	黒色頁岩(中生代)
122	90 S 31	"	"	4.1	2.6	0.5	4.2	CS122・131と接合 黒色頁岩(中生代)
123	90 S 32	"	"	2.3	1.8	0.3	1.5	CS121・131と接合 黒色頁岩(中生代)
124	90 S 33	"	"	3.3	3.1	0.8	6.7	黒色頁岩(中生代)
125	90 S 34	"	"	4.4	3.0	0.4	4.0	黒色頁岩(中生代)
126	90 S 35	"	"	3.1	2.3	0.6	3.6	黒色頁岩(中生代)
127	90 S 36	"	"	5.4	5.2	1.0	3.6	黒色頁岩(中生代)
128	90 S 37	"	"	4.0	2.3	1.2	24.3	黒色頁岩(中生代)
129	90 S 27	"	"	3.5	3.0	0.6	18.1	黒色頁岩(中生代)
130	90 S 30	"	"	4.6	2.9	0.5	5.9	黒色頁岩(中生代)
131	90 S 28	"	"	6.4	4.5	1.0	25.1	黒色頁岩(中生代) CS121・122と接合
132	90 S 51	第2号環濠	?	6.3	5.3	4.1	21.3	軽石
133	89 S 81	" 南側	砥石?	* 12.4	* 7.1	3.1	* 434	輝石角閃石安山岩
134	90 S 58	" 東尾根	"	* 5.8	* 3.5	2.4	* 66.1	白色粗粒凝灰岩
135	89 S 71	" 谷部	"	8.4	3.3	1.8	87.5	白色凝灰岩
136	89 S 83	" 尾根	打製石鏃	* 2.7	* 1.3	0.4	* 1.1	黒色頁岩(中生代)
137	90 S 44	" 南側	"	* 2.3	* 2.1	0.5	* 2.6	黒色頁岩(中生代)
138	90 S 47	" 東尾根	素材刺片	3.7	2.9	0.8	4.3	流紋岩
139	90 S 45	" 南側	"	5.1	4.0	0.6	16.6	白色凝灰岩
140	90 S 55	"	石核	8.6	5.4	2.0	123	輝石安山岩
141	89 S 68	上段下位	大型蛤刃石斧	* 9.0	5.0	3.2	224	安山岩
142	90 S 56	中段下斜面	大型蛤刃石斧	16.8	7.0	4.4	1003	黒雲母角閃石片麻岩
143	90 S 50	中段上位	?	6.0	4.9	3.2	21.2	軽石
144	89 S 77	上段下位	砥石	* 11.6	5.1	4.4	* 382	安山岩
145	89 S 67	地点不明	大型蛤刃石斧	* 4.8	* 5.7	* 3.9	* 184	輝石安山岩
146	90 S 59	中段下斜面	有溝石鏃	7.1	4.8	4.6	181	安山岩
147	90 S 57	"	"	8.1	5.7	6.0	380	安山岩
148	90 S 38	地点不明	?	3.9	2.4	1.1	17.5	硬玉質岩(含翡翠)
149	90 S 52	中段下斜面	敲石	6.3	6.3	5.3	308	安山岩
150	90 S 53	"	"	* 9.9	* 8.7	* 3.8	* 399	黒雲母角閃石花崗岩

第5章 杉谷 A 古墳群

第1節 古墳群と調査の概要

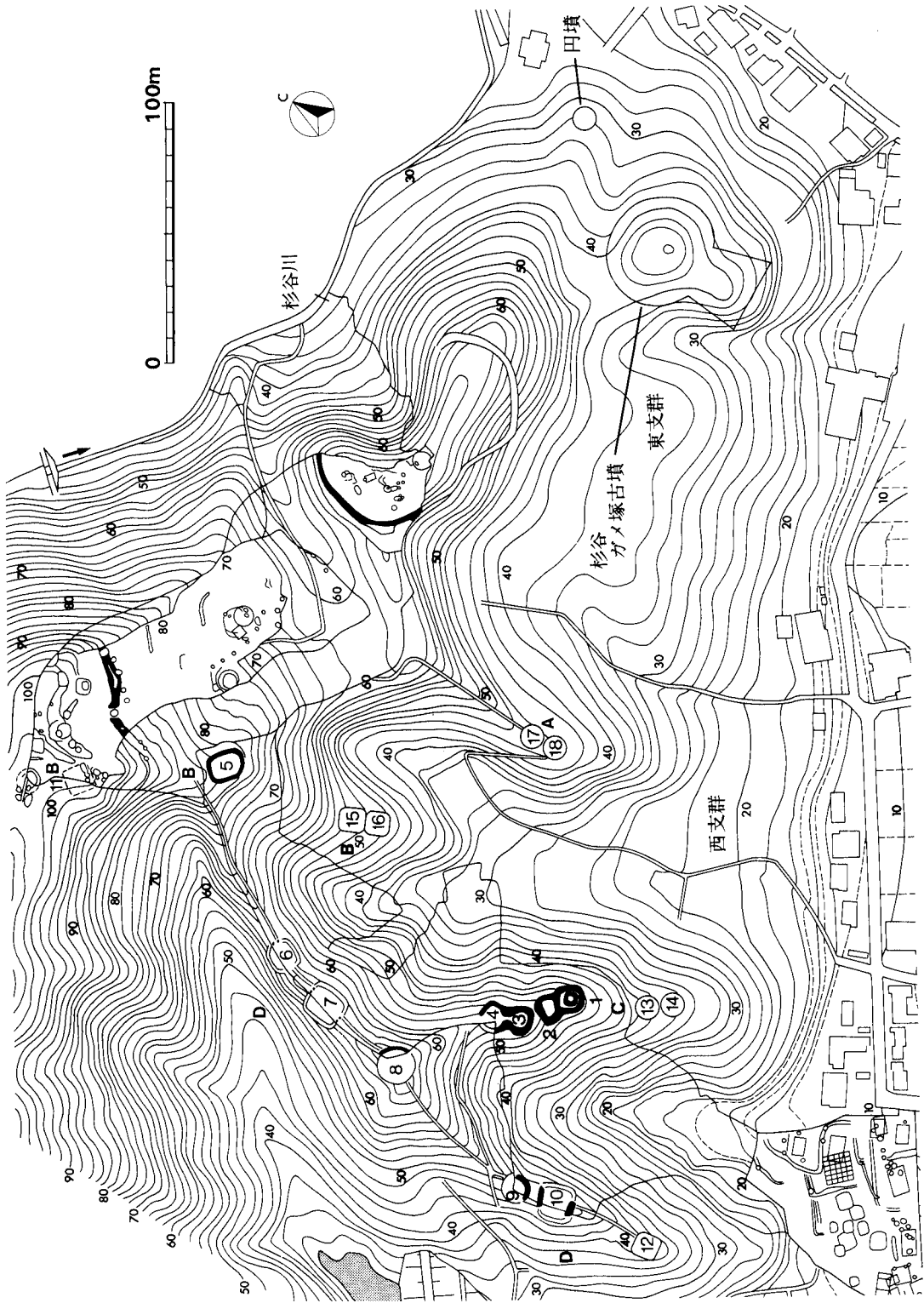
発見の経緯と分布状況(第245図)

谷内・杉谷遺跡群の発掘調査が始まった昭和60(1985)年当時、本古墳群は前方後円墳(杉谷ガメ塚古墳)1基、円墳1基の計2基よりなる古墳群(杉谷古墳群)であった。杉谷ガメ塚古墳は『金丸村史』にも記載があるように、かつては長軸19m、短軸14m、高さ約6mの円墳とされていたが、昭和49(1974)年の中越照次・濱岡賢太郎両氏(石川考古学研究会々員)の踏査によって前方後円墳と確認されたものである。その後平成3(1991)年に古墳文化を学ぶ会によって測量調査がおこなわれ、全長約60m、後円部径約37m、前方部幅約29m、後円部高約8m、前方部高約4mと推定された。他方円墳については、『石川県遺跡地図』(昭和55(1980)年)には掲載されているが、『雨の宮古墳群の調査』(昭和53(1978)年)には記載がなく、発見の経緯はいささか不明瞭である。杉谷ガメ塚古墳の墳形変更の際に混乱が生じた可能性もあるが、現在は杉谷ガメ塚古墳の北東約60mに所在するものを指している。

他の古墳については、昭和61(1986)年の唐川明史氏(石川考古学研究会々員)による踏査と、県水道用水供給事業に係る土木工事と並行しておこなわれた県埋文センターによる分布(試掘を含む)調査により、周知の古墳群の北および西側で確認されたものである(『石川県遺跡地図』昭和62(1987)年度改定判)。その後『石川県遺跡地図』の全面改定(平成4(1992)年)の際、北側の古墳群を杉谷B古墳群、西側の古墳群を含めた従来の杉谷古墳群を杉谷A古墳群と改称したものである。杉谷A古墳群は、現在では前方後円墳1基、円墳9基、方墳10基の計20基よりなるものと推定される。

西支群の発掘調査

杉谷A古墳群は、約150mの距離を隔てて大きく東西2群に分けることができ、本事業にかかり発掘調査をおこなったものは総て西側の古墳群に属する。次節ではこれら西側の古墳群を杉谷A古墳群西支群(従来の杉谷古墳群は杉谷A古墳群東支群と呼称する)とし報告する。西支群は円墳8基、方墳10基よりなり、東側からA～Dの4小群に分けることができ、B～Dの3小群はそれぞれさらに南北2群に細分できる。このうち発掘調査の対象となったものは、第5・11号墳(B群北)、第1～4号墳(C群北)、第6～10号墳(D群)の11基である。なお古墳の名称は発掘調査順とし、第12号墳以降は西側から東側へ順次名称を与えた。調査年度は第1～4号墳が昭和61(1986)年度、第5～10号墳が昭和62(1987)年度、第11号墳が昭和63(1988)年度である。



第245図 杉谷A古墳群全体図(S=1/2,500)

第2節 西支群の遺構と遺物

1 C群(第1～4・13・14号墳)

概要

円墳4基(第3・4・13・14号墳)、方墳2基(第1・2号墳)の計6基よりなる。D群第8号墳から南東に尾根を約10m(水平距離は約30m)下って第4号墳、第4号墳と一部周溝を共有して第3号墳、第3号墳から約1.5mの距離を以て第2号墳、第2号墳と一部周溝を共有して第1号墳が所在し、第1号墳から約20m離れて第13・14号墳が所在するものと推定される。第1号墳と第13号墳の間は、確認前に工事用の仮設道路が掘削されたため古墳の有無は判断できなかった。

第1号墳(第246～248図)

辺約8.0m(周溝内側上端で計測、以下同様)を測る方墳で、東側約三分の一は確認前に工事用仮設道路の掘削で損壊した。墳丘主軸方位をN28°Wにとり、高さは約1.3m(稜線方向下位の周溝内側上端と埋葬施設検出面との比高差で計測、以下同様)を測る。北側では第2号墳と周溝を共有する一方、墳丘内には第1号周溝(後述)が重複する。墳丘内には部分的に淡褐色砂質土が堆積するが、盛土であるとの確証は得られなかった。周溝の幅は1.5m前後、断面形は北および南側では逆台形、西側は現状ではL字形を呈する。検出面からの深さは70cm前後、埋土は黄褐色砂質土である。なお、北側周溝の埋土の状況から、本墳が第2号墳に先行したもの(後述)と考えられる。

埋葬施設(木棺直葬)は墳丘中央部で1基検出された。墓壇は片側(北側)のみ略二段掘り、長さ2.4m(両端が木の根により不明瞭であったため推定値)、幅1.4m、検出面からの深さは50～60cmを測る。棺は組合せ式の箱形木棺と推定され、長さ2.25m、幅0.45～0.55mを測り、西側がやや広いことから西側頭位(N98°W)と考えておきたい。壇底には両端に小口板の痕跡(長さ約45cm、幅約13cm、深さ約10cm)が認められ、同痕跡に平行して40～60cm間隔で3条の溝状の痕跡(長さ50～55cm、幅約10cm、深さ6～10cm)、南側では中央から東端にかけて同じく溝状の痕跡(長さ約70cm、幅約10cm、深さ約8cm)が確認された。棺底を安定させる施設の痕跡であろうか。埋土は墓壇上部に黄褐色砂質土、下部にやや赤味をおびた黄褐色砂質土、小口板および棺底安定施設に相当する箇所は暗黄褐色砂質土であった。

遺物は墳頂部表土中より石板の小片(SS1)が出土したが、本墳にともなうものとは考えられない。重複する第1号周溝の北西側周のほぼ溝底より出土した鉄鏃(SM1、後述)が本墳にともなう蓋然性が高い。

第2号墳(第246～248図)

辺約5.6mを測る方墳で、一部東側は確認前に工事用仮設道路の掘削で損壊し、南西側

第2節 西支群の遺構と遺物

約二分の一はすでに土砂が流出しており検出できなかった。墳丘主軸方位を $N48^{\circ}W$ にとり、高さは約0.7mと推定され、墳丘内には盛土は確認されなかった。なお、墳丘南西側の溝状の落ち込みは時期、性格ともに不明である。

前述したように、本墳は南東側では第1号墳と周溝を共有する。東隅付近の周溝内の土層(第247図)は4層よりなるが、上部2層(上からやや暗い黄褐色砂質土、暗黄褐色砂質土)は、下部2層(同黄褐色砂質土、地山(岩盤)ブロックを少量含む黄褐色砂質土)が堆積した後改めて周溝が掘削されたことを示している。上部2層の北西側(本墳側)上端のラインは、平面では東隅から南西へ少なくとも1m強にわたり本墳北西側周溝と平行していることから、本墳が第1号墳に遅れて築造されたと考えられる。その場合、共有部分の北西側(本墳側)周溝上端のほとんどは、本墳北西側周溝と並行しないことから逆に第1号墳築造時のプランである可能性が高い。

周溝共有部分を分層発掘しなかったために、結果的に本墳の南東側の周溝プラン(第1号墳北側周溝も一部同様であるが)は不明瞭なものになったが、北東および北西側周溝では幅1.5~2.0m、検出面からの深さは30~70cmを測り、断面形は北西側(南東側も?)では逆台形、北東側は現状ではL字形を呈し、埋土は黄褐色砂質土であった。

埋葬施設(木棺直葬)は墳丘のやや南側で1基検出された。南側約二分の一はすでに流出しており、長さについては不明である。南隅周溝との距離は短い、前述したとおり同箇所が第1号墳築造時に掘削され、本墳築造時にはすでに埋まっていた可能性があることから、本墳の本来のプランからすれば著しく中央部を外れているわけではない。墓壇は木の根による攪乱がひどく状態は良くないが、幅約1.2m、検出面からの深さは約50cmを測る。棺は組合せ式の箱形木棺と推定され、壇底北端の小口板の痕跡(幅8~10cm、深さ約8cm)から、幅は0.7m程度と考えられる。頭位方向は不明だが主軸は $N20^{\circ}E$ (または $N160^{\circ}W$)にとっている。墓壇内の埋土は上から暗黄褐色砂質土、黄褐色砂質土であった。

遺物は墳丘内の表土から弥生土器底部片(SP2、詳細時期は不明)が出土したが、本墳にとまなうものは得られなかった。

第1号周溝(第246~248図)

辺約4.0mを測る方形の周溝で、東側約三分の一は確認前に工事用仮設道路の掘削で損壊した。主軸方位は $N13^{\circ}W$ 、中央部との比高差は約0.5mと推定され、第1号墳の墳丘部に重複する。周溝の内側で盛土の有無や周溝にとまなう他の遺構は確認できなかった。周溝の幅は約1.15m、断面形は北西側ではゆるやかなU字状、南東側では逆台形、南西側では現状ではゆるやかなL字形を呈する。検出面からの深さは30(南西側)~60(南東側)cm、埋土は黄褐色砂質土である。

遺物は周溝北隅上部より土師質皿小片(SP1)、周溝北西側やや内側で溝底から2.5cm浮いた状態で鉄鏃(SM1)が出土した。前者は14世紀代(前後)の所産と考えられ、本遺構(中世の墳墓か)にとまなうものであろう。後者は鏃身が直線的に垂下し斜め鬩を形成す

るもので、莖部断面は方形を呈する。全長11.9cm、鍔身長7.9cm、鍔身幅2.5cm、鍔身関部幅2.4cm、重量21.2gを測り、遺存状態の比較的良好な面では、鍔身部下位から鍔身関部にかけて、幅約4.5cmの範囲で繊維状の有機物が付着しているようである(図中アミで表示)。杉山秀宏氏の分類〔杉山秀宏1988〕によれば「柳葉鍔群第IV形式第3型式A(無頸)2(両丸造)類」に属し、編年的にはⅢ・Ⅳ期に位置づけられるものであろう。4世紀末から5世紀初頭頃の所産であろうか。本遺構出土の原因が遺構築造時の二次的な移動(混入)であるとすれば、まずもって重複する第1号墳からである可能性が高い。同墳の埋葬施設に二次的な攪乱の痕跡は確認できていないが、墓壇の両端を中心に木の根による攪乱があり、一部プランが不明瞭な箇所もあったことからその可能性は捨てきれない。もとより第1号墳に確実にともなうとはいえないが、その蓋然性は低くはないものと考えている。

第3号墳(第246・249・250図)

長径7.8m、短径7.4mを測る円墳で、墳丘主軸方位をN29°W(円墳は稜線方位、以下同様)にとり、高さは約1.1mを測る。墳丘内には部分的に褐色土、茶褐色土、淡茶褐色土、黄褐色土が堆積するが盛土であるとの確証は得られなかった。周溝は北側尾根部を1.1m幅で切り残す一方、その両側で第4号墳と周溝を共有する(切り合い関係は不明)。周溝の幅は1.0~2.1m、検出面からの深さは80~100cmを測るが、断面形は現状では南側でゆるやかなL字状を呈する他は、第4号墳との共有部分西側(深さ約25cm)を除き溝底に平坦面をもっていない。埋土は黄褐色土である。

埋葬施設は墳丘中央部で1基検出された。南側約四分の一はすでに流出しており、残り約四分の三も遺存部分は壇底付近だけであった。墓壇(やや暗い黄褐色土)はN20°W(N160°E)に主軸をとり、幅は約1.15m、検出面からの深さは約10cmを測る。両側縁に溝状の痕跡(幅10cm前後、深さ約14cm、黄褐色土)が認められたが性格は不明である。木棺直葬と推定されるものの、墓壇内では棺の痕跡は確認できなかった。なお、本墳では遺物は出土しなかった。

第4号墳(第246・249・250図)

径9.0mを測る円墳で、墳丘主軸方位をN23°Wにとり、高さは約1.0mを測る。墳丘内には部分的に褐色土、茶褐色土が堆積するが盛土との確証は得られなかった。墳丘西側は調査区外にかけて土砂の流出がみられる。周溝は北西側および南東側尾根部をそれぞれ2.9m(推定)、0.95m幅で切り残し、南東側尾根部の両側では第3号墳と周溝を共有する(切り合い関係は不明)。周溝の幅は1.0~1.3m、検出面からの深さは50~100cmを測るが、断面形は現状ではゆるやかなL字状を呈し、尾根部付近(深さ約25cm)を除き溝底に平坦面をもっていない。埋土は黄褐色土である。

埋葬施設(木棺直葬)は墳丘中央部やや北西で1基検出された。南西側約五分の一はすでに流出あるいは木の根による攪乱をうけ幅は不明である。墓壇(茶褐色土)は少なくとも北東および南東側の二方が二段掘り(壇底との差は約6cm)で、N53°W(N127°E)に主

第2節 西支群の遺構と遺物

軸をとり、長さは約2.3m(推定)、検出面からの深さは約25cmを測る。棺は箱形木棺と推定され、長さは1.8m以上、幅は0.45m以上である。

遺物は東側斜面で外面に撚糸文を施した縄文土器胴部片(SP 3、前期?)が出土したが、本墳にともなうものは得られなかった。

2 B群(第5・11・15・16号墳)

概要

方墳4基(第5・11・15・16号墳)よりなる。古墳群中最高所に立地する第11号墳から南東に尾根を約20m(水平距離は約45m)下って第5号墳が所在し、第5号墳から約40m離れて第15・16号墳が所在するものと推定される。第5号墳と第15号墳の間は、確認前に工事的な仮設道路が掘削されたため古墳の有無は判断できなかった。

第5号墳(第251～253図)

長辺約12.2m、短辺約8.0mを測る方墳で、墳丘東側過半を中心に開墾(茶畑?)にともなう切り盛りがみられ、切土面は本墳の周溝にもおよんでいる。墳丘主軸方位をN46°Wにとり、高さは約2.1mを測る。墳丘内では盛土は確認できなかった。周溝の幅は1.0m前後、断面形は北西および南東側では逆台形、南西側は現状ではL字形を呈する。検出面からの深さは30～50cm、埋土は茶褐色土である。

埋葬施設(木棺直葬)は、墳丘中央部で1基検出された。東隅および南西端部がすでに流出しているが、墓壇は少なくとも北西側が二段掘り(墳底との差は約10cm)で、長さ2.05m以上、幅は1.05m、検出面からの深さは20cm前後である。棺は箱形木棺と推定され、長さ1.5m以上、幅は0.5m前後、南西側がやや広いことから西側頭位(N140°W)と考えておきたい。

遺物は墳丘北東側を中心に、表土および開墾にともなって切り盛りされた土層より出土した。弥生土器甕3点(SP 4～6、後期後半頃)は、本墳の北西および北東側に所在する杉谷チャノバタケ遺跡B地区(もしくはC地区)に関連するもので、白磁紅皿(SP 7、近世後半頃)は耕作にともなうものかもしれない。なお図化しなかったが、本墳調査中に鉄滓が出土している。本来の形態からみて二分の一程度を欠失していると考えられるが、現存最大長7.2cm、最大厚さ2.8cm、重さ147gを測る。所属時期は不明である。

第11号墳(第253図)

杉谷チャノバタケ遺跡C地区の調査中に埋葬施設を検出し第11号墳とした。同箇所調査にあたっては、古墳の存在は十分予想していたのだが、山道や地境の柵の列、第1号地下式墳(中世?)などが重複していたために、最後まで周溝を確認できず墳形も特定できなかった。埋葬施設が第1号墳等方墳に類似することから、ここでは方墳と考え報告する。なお、他の方墳の埋葬施設が墳丘主軸(稜線主軸)に概ね直交していることから、本墳の墳形を破線で示してみたが、もとより推定の域を越えるものではない。

埋葬施設(木棺直葬)は東側約二分の一を検出したが、第1章第2節でふれたとおり、民地となる西側約二分の一は地権者の同意が得られず未調査となった。墓壙はおそらくは北側のみの略二段掘り、長さ2.0m以上、幅1.3m以上、検出面からの深さは20cm前後である。棺は組合せ式の箱形木棺と推定され、長さは不明だが幅は0.6m前後となろう。壙底東端には小口板の痕跡(長さ約70cm、幅約20cm、深さ約5cm)が認められる。頭位方向は不明だが主軸をN62°W(またはN118°E)にとっている。

遺物は埋葬施設上面で黒色頁岩製の打製石鏃(CS99)が出土したが、重複する杉谷チャノバタケ遺跡C地区の遺物と考えられることから、第4章で報告した。

3 D群(第6～10・12号墳)

概要

円墳2基(第8・9号墳)、方墳4基(第6・7・10・12号墳)の計6基よりなる。B群第5号墳から南西に尾根を約15m(水平距離は約65m)下って第6号墳、第6号墳から約10mの距離をおいて第7号墳、さらに約20mの距離をおいて第8号墳、第8号墳から南西に尾根を約20m(同約55m)下って第9号墳、第9号墳から約3.5mの距離をおいて第10号墳が所在し、第10号墳から約30m離れて第12号墳が所在するものと推定される。

第6号墳(第250・254図)

辺約10.4mを測る方墳で、稜線方向にそって約2m幅で検出した。北西側(調査区外)はすでに崩落し急崖となっており、南東側も下部は工事中仮設道路の掘削により損壊したが、すでにその上部から流出していた可能性が高い。墳丘主軸方位はN41°E(推定)、高さは約0.3m(現況)である。周溝は北東および南西側尾根部で幅0.5m前後を切り残している。周溝の幅は0.5～0.9m、断面形は逆台形ないしはゆるやかなU字状を呈し、検出面からの深さは30cm前後である。

埋葬施設(木棺直葬)は墳丘中央部で1基検出された。北西側の過半が崩落し長さ(0.9m以上)については不明。墓壙(幅0.7m)は南東および南西側が二段掘り(壙底との差は約6cm)で、検出面からの深さは10cm前後。棺は箱形木棺と推定され長さ0.75m以上、幅は0.45m前後、主軸方位はN54°W(N126°E)を測る。本墳では遺物は出土しなかった。

第7号墳(第250・254図)

辺約14.4mを測る方墳で、検出状況、北西および南東側の状況は第6号墳と同様である。墳丘主軸方位はN25°E(推定)、高さは約0.7m(現況)を測り、周溝は北東および南西側尾根部でそれぞれ幅約5cm、50cmを切り残している。周溝の幅は0.7～1.5m、断面形はゆるやかなU字状を呈し、検出面からの深さは40cm前後である。

埋葬施設は墳丘中央部で1基検出された。北西側約二分の一が崩落しており長さ(1.4m以上)については不明であるが、幅は0.65m前後、検出面からの深さは約8cm、主軸方位はN51°W(N129°E)を測る。本墳では遺物は出土しなかった。

第2節 西支群の遺構と遺物

第8号墳(第255図)

径11.0m以上と推定される円墳。墳丘の三分の一弱を調査し、幅1.0m前後、検出面からの深さ0.3~0.4m、断面形がゆるやかなU字状を呈する周溝を検出したが、埋葬施設は確認されず、遺物も出土しなかった。

第9号墳(第256図)

径12.0m前後と推定される円墳。墳丘の三分の一弱を調査し、幅1.0~1.5m、検出面からの深さ0.5m前後、断面形が逆台形(南側尾根部、埋土は淡褐色土)ないしはL字状を呈する周溝を検出したが、埋葬施設は確認されず、遺物も出土しなかった。

第10号墳(第250・256・257図)

辺約10.3mを測る方墳で、墳丘主軸方位を磁北にとり、高さは約1.0m、盛土は確認されていない。墳丘中央稜線付近から西側約二分の一が民地となるが、周溝はもとより埋葬施設も全掘できない可能性があったため、第1章第2節でふれたとおり、協議のうえ民地を借地し墳丘全体を調査した(調査後、民地については埋め戻しをおこなった)。墳頂部にも開墾による削平がおよび、また稜線にそって南北に地境の柵の列が走る。西側では北西から南東方向に山道が上り、東端は確認前に工事前仮設道路の掘削で損壊している。周溝は稜線に直交して北および南側で検出されたが、東および西側にも存在したかどうかは上述の事情により不明である。周溝の幅は北側では1.2~1.6m、南側では1.8~3.3mを測り、断面形は逆台形、検出面からの深さは30~40cmで埋土は黄褐色土である。

埋葬施設(木棺直葬)は墳丘中央やや北側で1基検出された。施設中央にあった柵の根株のためプランは不明瞭であるが、墓壙は南東側が二段掘り(壙底との差は約5cm)で、長さ約2.7m(推定)、幅約0.85m(同)、検出面からの深さは約35cmを測る。棺は箱形木棺と推定され、長さは不明だが幅は0.5m程度と考えられる。西側へ向かってやや広がるとみられることから西側頭位(N91°W)と考えておきたい。埋土は墓壙上部が褐色土、下部が黄褐色土であった。

遺物は墳丘表土中より須恵器蓋(SP8、8世紀後半)、珠洲焼甕胴部片(SP9、中世)を採集したにとどまる。

第1号土坑(第250・257図)

第10号墳の南側周溝外側上端から南約9mの地点で検出。長径119cm、短径74cm、深さ86cmを測る。断面形は逆台形で出土遺物はない。所属時期、性格とも不明である。

4 A群(第17・18号墳)

概要

東支群の西約150mの丘陵尾根部に所在する。円墳2基(第17・18号墳)よりなり、ともに径10m、高さ1m前後と推定されるが、古墳中央部が山道により寸断されているため確定的ではない。第18号墳の下位にさらに数基の古墳が存在する可能性もある。

5 小 結

以上、杉谷A古墳群西支群に属する円墳4基(第3・4・8・9号墳)および方墳7基(第1・2・5～7・10・11号墳)、他に中世の第1号方形周溝(墳墓?)と時期・性格ともに不明の土坑(第1号土坑)について報告した。本古墳群をめぐる問題は多岐にわたるが、取り組みが浅く、今回は扱うことすらできなかった。

参考・引用文献

- 『金丸村史』 金丸村史刊行委員会 1959
 『雨の宮古墳群の調査』 石川県鹿西町教育委員会 1978
 『石川県遺跡地図』 石川県教育委員会 1980(昭和62(1987)年度一部改定)
 『石川県遺跡地図』 石川県教育委員会 1992(全面改定)
 古墳文化を学ぶ会 「加賀・能登の古墳測量調査」『石川考古学研究会々誌』 第35号 石川考古学研究会 1992
 杉山 秀宏 「古墳時代の鉄鏃について」『権原考古学研究所論集』 第八 権原考古学研究所編 吉川弘文館 1988

第5章挿図断面図土層一覧

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 第247図 | 10 礫混黄褐色土 |
| 1 表土 | 11 茶褐色土 |
| 2 褐色土(攪乱) | 12 暗茶褐色土 |
| 3 黄褐色砂質土 | |
| 4 黄褐色砂質土(地山(岩盤)ブロック少量含) | 第250図 |
| 5 淡褐色砂質土 | 1 黄褐色土(やや暗い) |
| 6 黄褐色砂質土(やや暗い) | 2 黄褐色土 |
| 7 暗黄褐色砂質土 | 3 茶褐色土(やや暗い、攪乱) |
| | 4 茶褐色土 |
| 第248図 | 5 茶褐色土(地山(岩盤)ブロック含) |
| 1 黄褐色砂質土 | 6 表土 |
| 2 黄褐色砂質土(やや赤味をおびる) | 7 褐色土 |
| 3 暗黄褐色砂質土 | 8 黄褐色土(地山(岩盤)ブロック少量含) |
| 4 黄褐色砂質土(地山(岩盤)ブロック含) | |
| 5 淡黄褐色細砂 | 第252図 |
| | 1 表土 |
| 第249図 | 2 茶褐色土(地山(岩盤)ブロック含) |
| 1 表土 | 3 茶褐色土 |
| 2 褐色土 | |
| 3 暗茶褐色土(地山(岩盤)ブロック少量含) | 第256・257図 |
| 4 黄褐色土(地山(岩盤)ブロック含) | 1 表土 |
| 5 茶褐色土(地山(岩盤)ブロック多量含) | 2 黄褐色土 |
| 6 淡黄褐色土 | 3 黄褐色土(地山(岩盤)ブロック) |
| 7 黄褐色土(やや暗い) | 4 黄褐色土(やや暗い) |
| 8 黄褐色土 | 5 黄褐色土(地山(岩盤)ブロック) |
| 9 礫混淡茶褐色土 | 6 淡褐色土 |

第2節 西支群の遺構と遺物

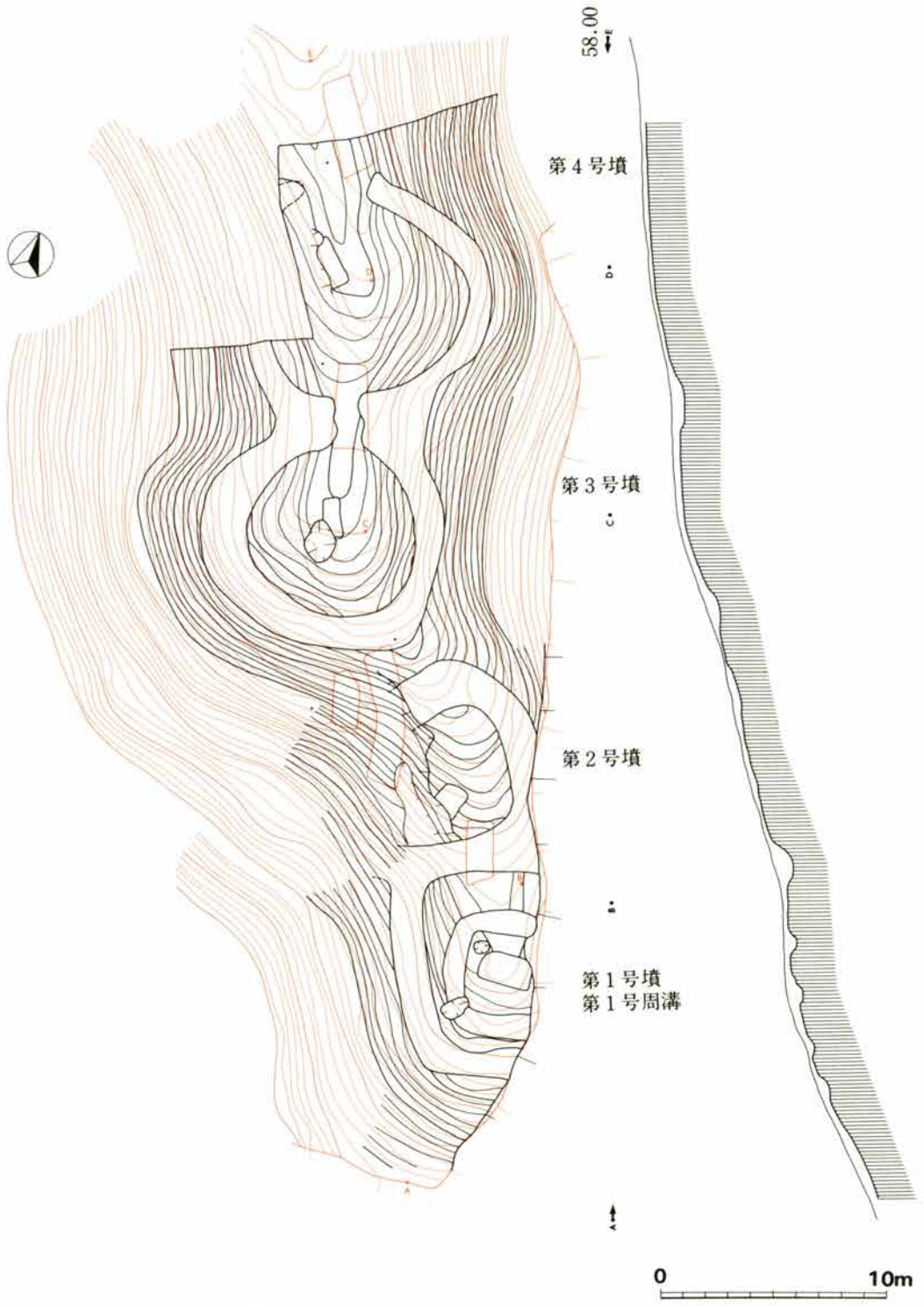
杉谷A古墳群一覽

支群	小群	古墳名	墳形	規模(m)		墳丘 主軸方位	埋葬施設 主軸方位	備考
				径または辺	高さ			
東支群		杉谷ガメ塚古墳	前方後円墳	全長約60m、後円部径約37m、前方部幅約29m、後円部高約8m、前方部高約4m。「加賀・能登の古墳測量調査」『会誌』35号。				
			円墳	—	—	—	—	墳丘は比較的高い。
西支群	A群	第17号墳	円墳	—	—	—	—	第18号墳の北側に隣接する。
		第18号墳	円墳	—	—	—	—	第17号墳の南側に隣接する。
	B群	第11号墳	方墳	—	—	—	N62°W? (座標北)	組合せ式箱形木棺。 1988年一部発掘調査
		第5号墳	方墳	8.7×12.2	2.1	N46°W	N140°W?	箱形木棺。1987年発掘調査。
		第15号墳	方墳	—	—	—	—	第16号墳の北側に隣接する。
	C群	第16号墳	方墳	—	—	—	—	第15号墳の南側に隣接。標高約50m。
		第4号墳	円墳	9.0×	1.0	N23°W	N53°W?	箱形木棺。1986年一部発掘調査。
	D群	第3号墳	円墳	7.4×7.8	1.1	N29°W	N20°W?	箱形木棺。1986年発掘調査。
		第2号墳	方墳	5.6×	0.7?	N48°W?	N20°E?	組合せ式箱形木棺。 1986年発掘調査。
		第1号墳	方墳	8.0×	1.3	N28°W	N98°W	組合せ式箱形木棺。 1986年発掘調査。
		第13号墳	円墳	—	—	—	—	第14号墳の北側に隣接。標高約40m。
		第14号墳	円墳	—	—	—	—	第13号墳の南側に隣接する。
第6号墳		方墳	10.4×	0.3?	N41°E	N54°W?	箱形木棺。1987年発掘調査。	
支群	D群	第7号墳	方墳	14.4×	0.7?	N25°E	N51°W?	箱形木棺?。1987年発掘調査。
		第8号墳	円墳	11m以上	—	—	—	1987年一部発掘調査
	第9号墳	円墳	12m前後?	—	—	—	1987年一部発掘調査	
	第10号墳	方墳	10.3×	1.0	N0°	N91°W	箱形木棺。1987年発掘調査。	
	第12号墳	方墳	—	—	—	—	D群では最も平野部側。標高約40m。	

杉谷A古墳群出土遺物観察表 (括弧付数値は残存・推定値)

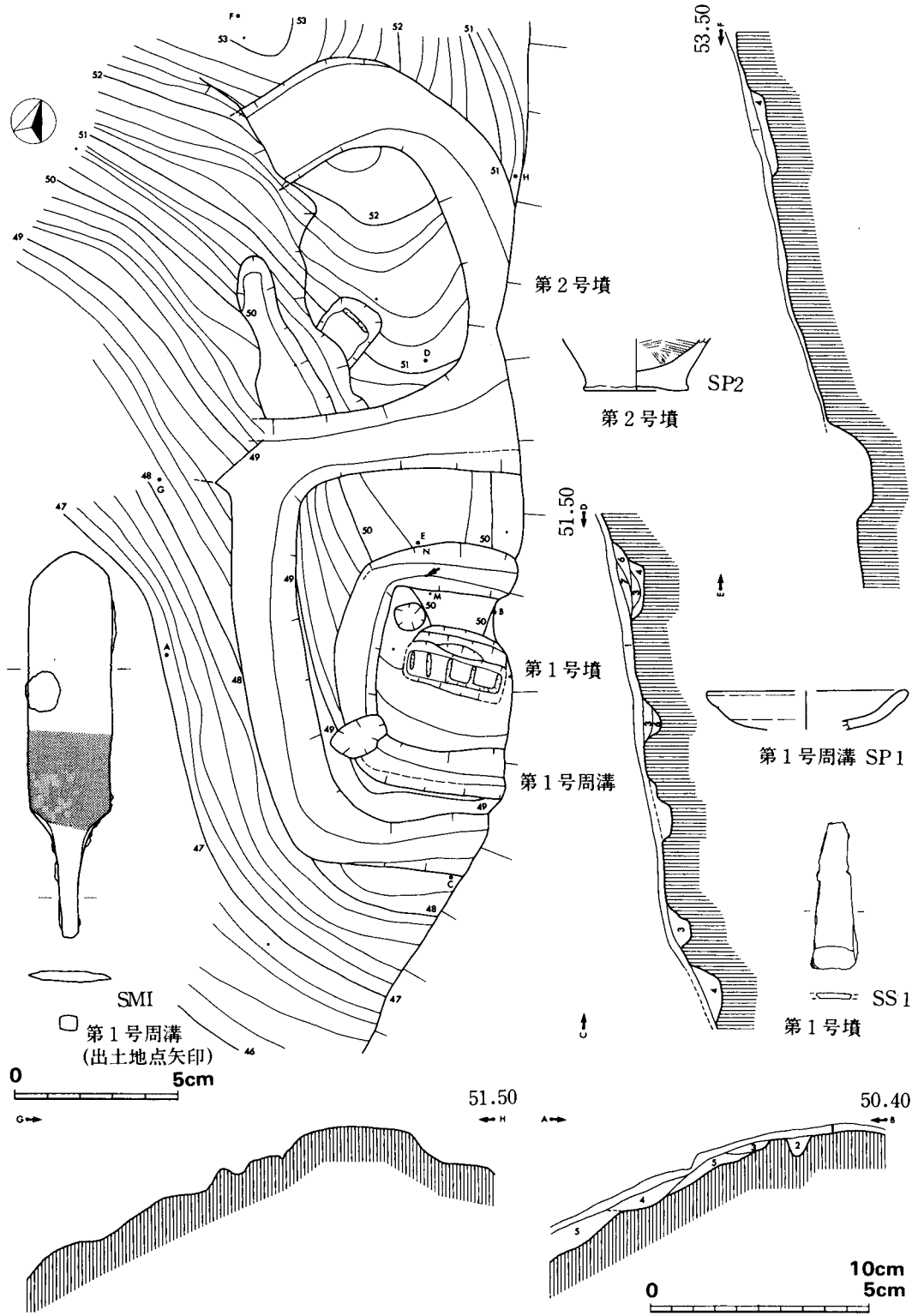
(L:最大長 B:最大幅 T:最大厚 W:重量 a:口径 c:底径 h:器高)

番 号 整理No	出 土 地 点	器 類 等	法 量 等 (cm・g)	特 記 事 項	番 号 整理No	出 土 地 点	器 類 等	法 量 等 (cm・g)	特 記 事 項
SM 1 92M1	1号 周溝	鉄鏃	L:11.9 B:2.6 T:0.5 W:21.2	周溝北西側溝底より出土、Tは莖部	SP 5 90C123	第5 号墳	弥生土 器	a:(16.6) 浅黄褐色	内外面ナデ、1/ 4以下。
SS 1 92S1	第1 号墳	石板	L(6.73)B(2.16) T:0.24 W(5.10)	第1号墳墳頂部表 土中より出土。	SP 6 90C125	第5 号墳	弥生土 器	a:(14.0) 浅黄褐色	外面・内面口縁部 ナデ、1/4以下
SP 1 90D101	1号 周溝	土師器 皿	a(9.0) h(1.9) 浅黄灰色	周溝北隅上部より 出土、1/8。	SP 7 90D102	第5 号墳	白磁 紅皿	a:(5.0)	外面磨唐草文、1/ 4以下。
SP 2 90A300	第2 号墳	弥生土 器	C:4.8 にぶい黄褐色	外面ナデ・内面ハ ケナデ、1/2	SP 8 90D104	第10 号墳	須恵器 蓋	a:(15.6) 灰白色	砂粒を多く含む、 1/2。
SP 3 90B 57	第4 号墳	縄文土 器深鉢	にぶい橙色	東斜面出土、外面 燃糸文・内面ナデ	SP 9 90D103	第10 号墳	珠洲焼 器	灰色	外面並行叩き、内 面無文叩き目文。
SP 4 90C124	第5 号墳	弥生土 器	a:(17.8) 橙色	外面磨凹線7条、 1/8以下。					

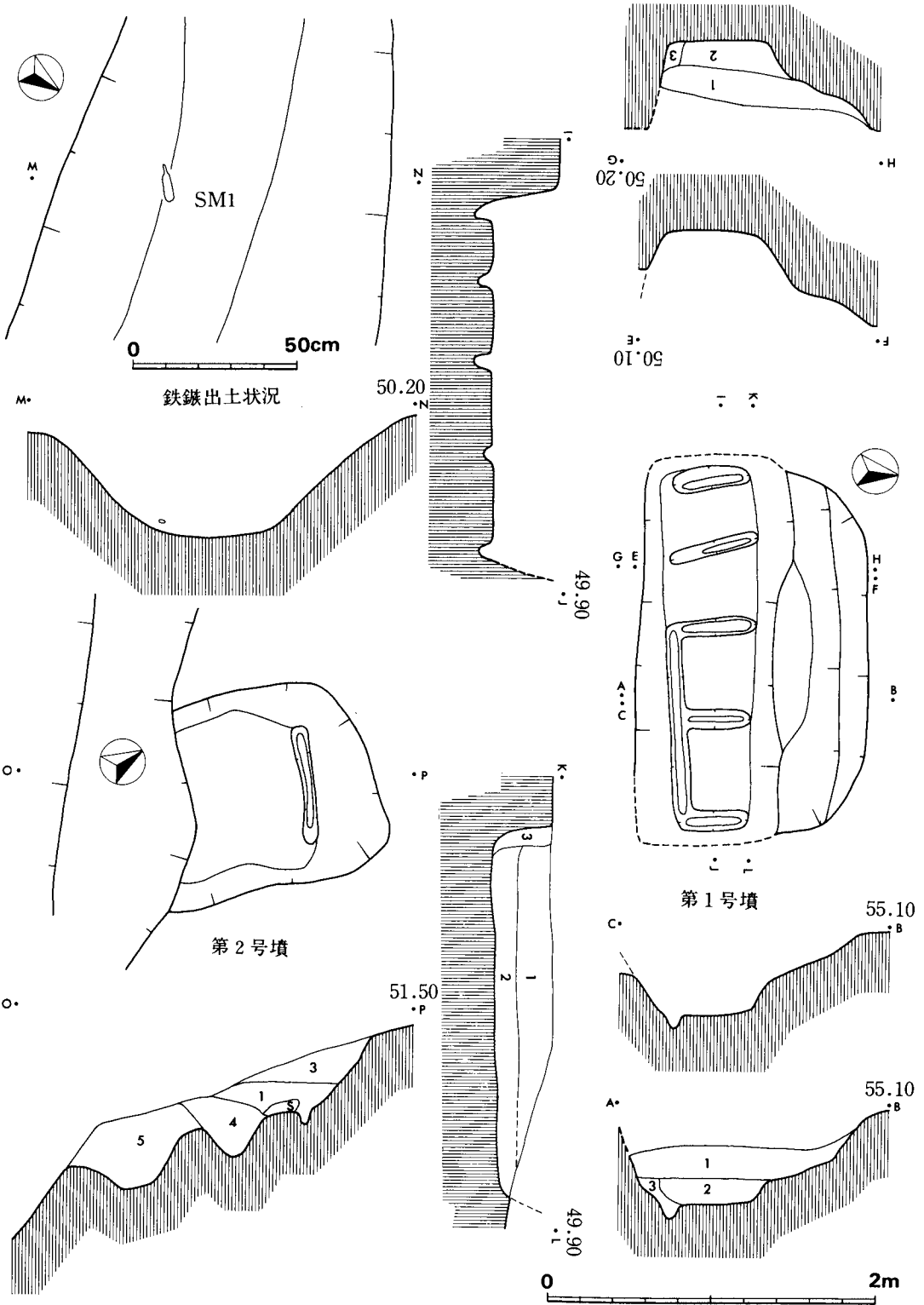


第246図 第1～4号墳(S=1/300)

第2節 西支群の遺構と遺物

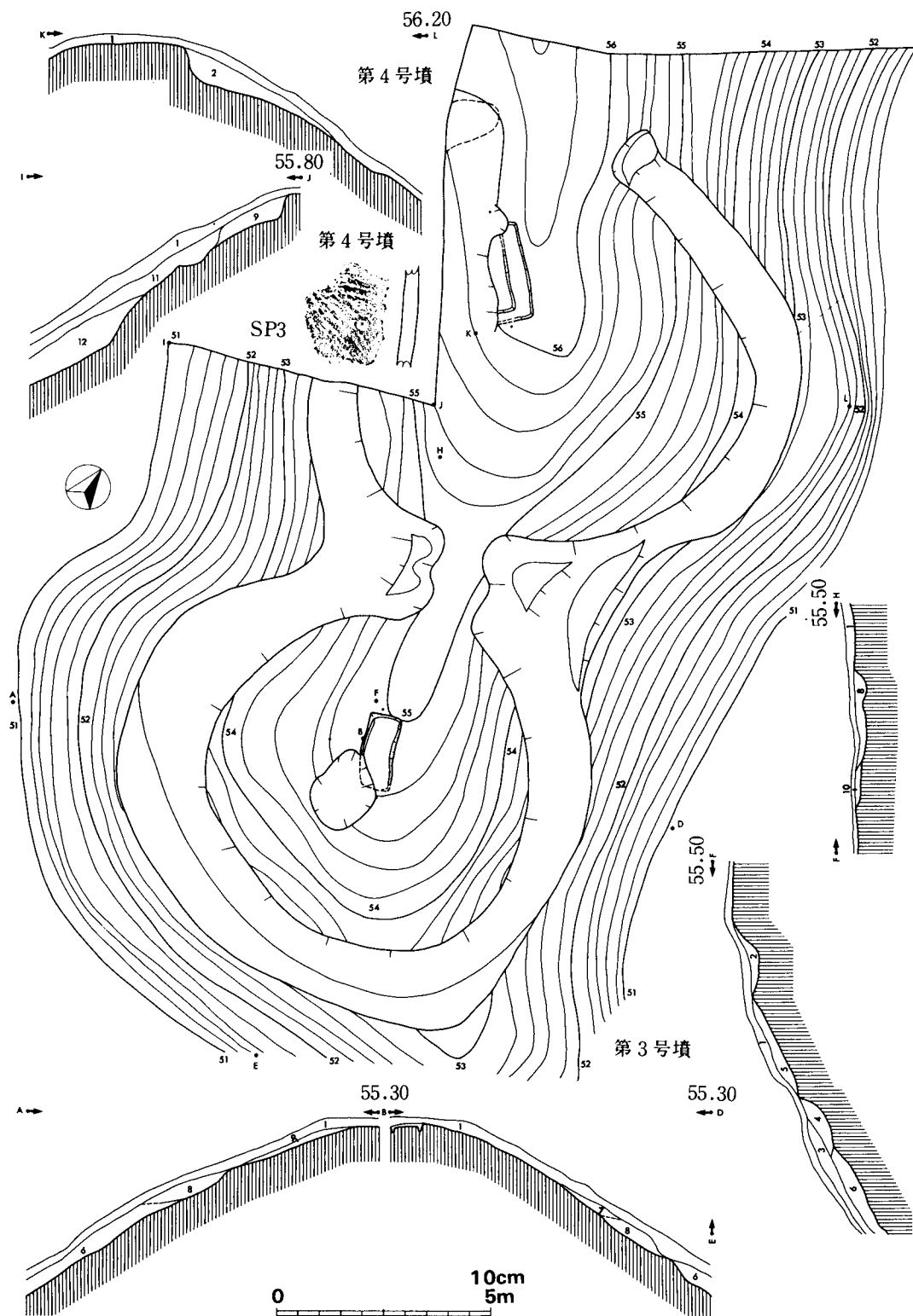


第247図 第1・2号墳(S=1/150)・出土遺物(S=1/3・=1/2)

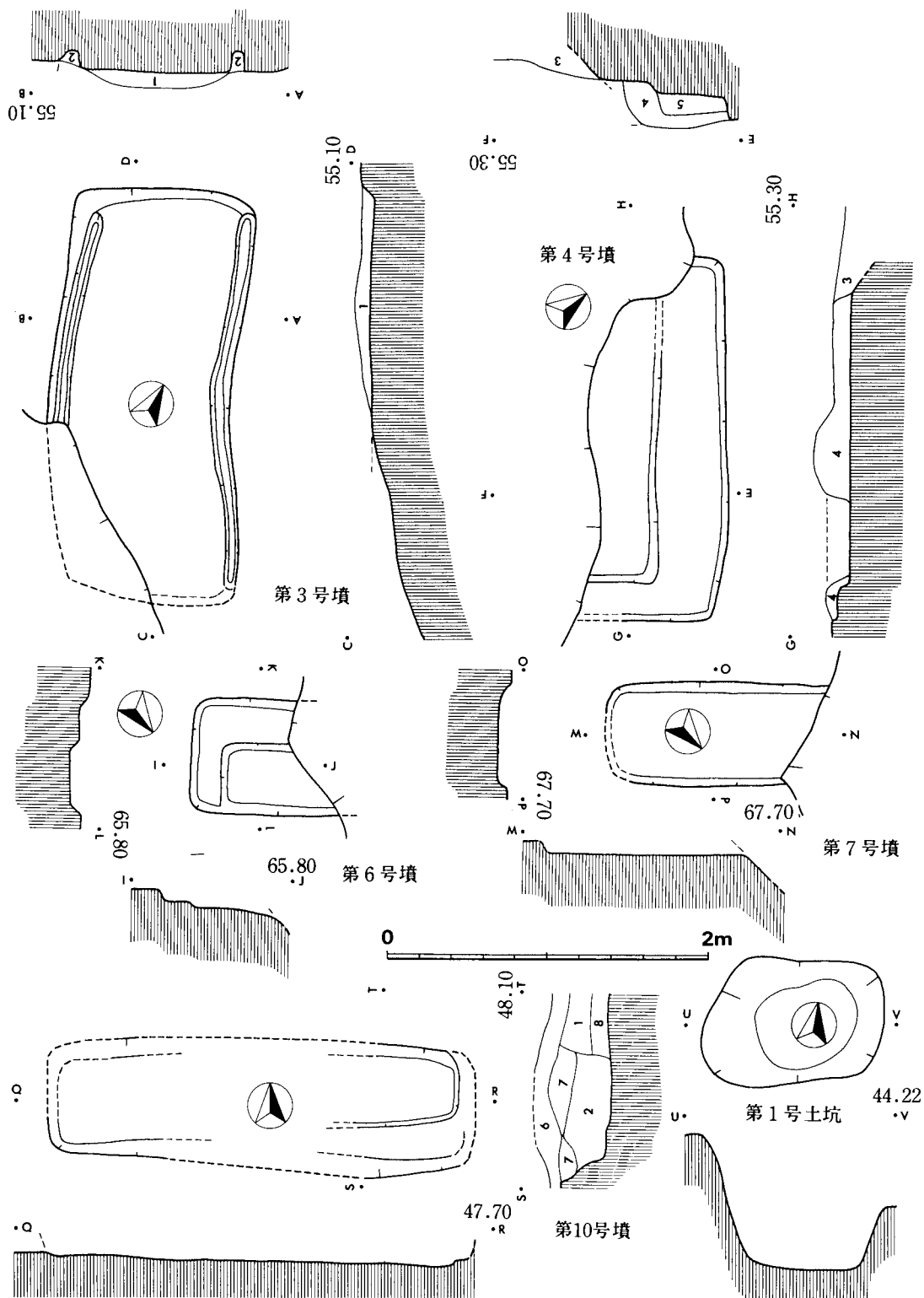


第248図 第1・2号墳埋葬施設(S=1/40)・第1号周溝鉄鍬出土状況(S=1/20)

第2節 西支群の遺構と遺物

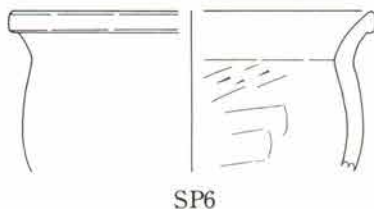
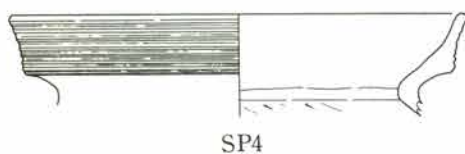
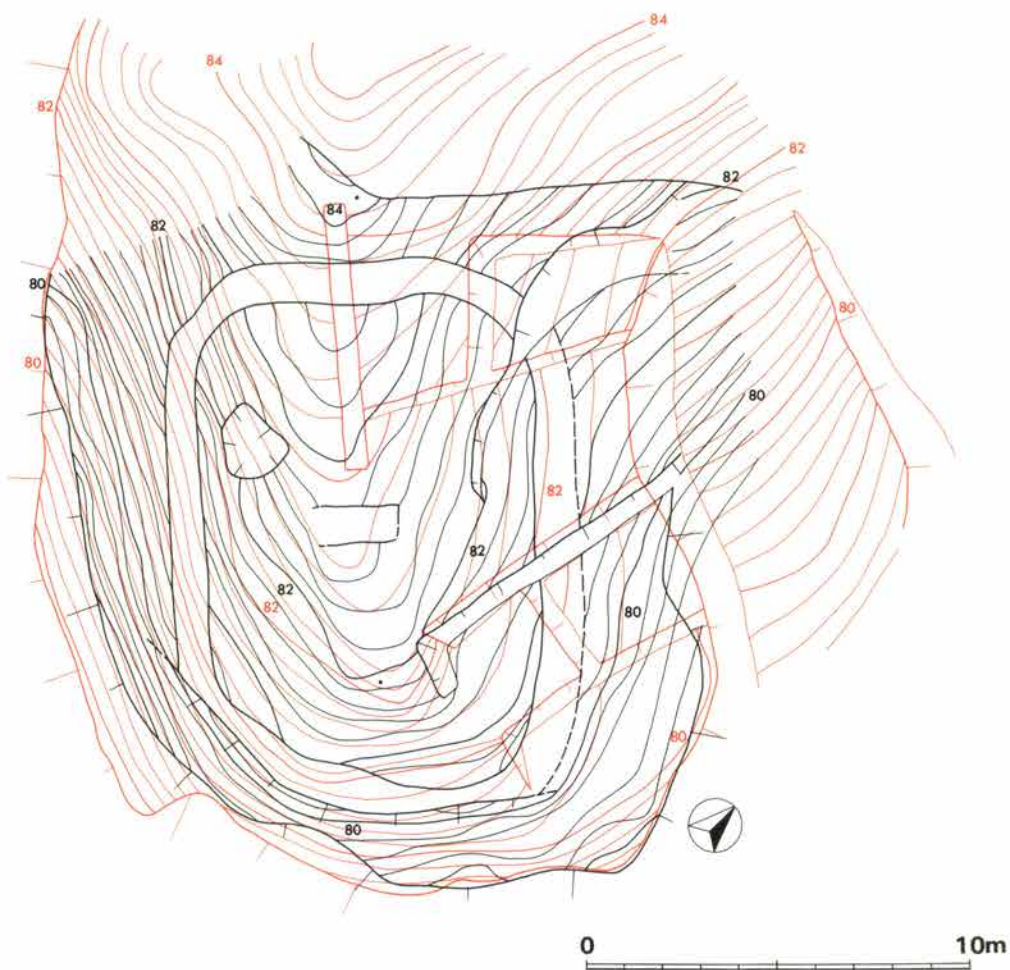


第249図 第3・4号墳(S=1/150)・出土土器(S=1/3)



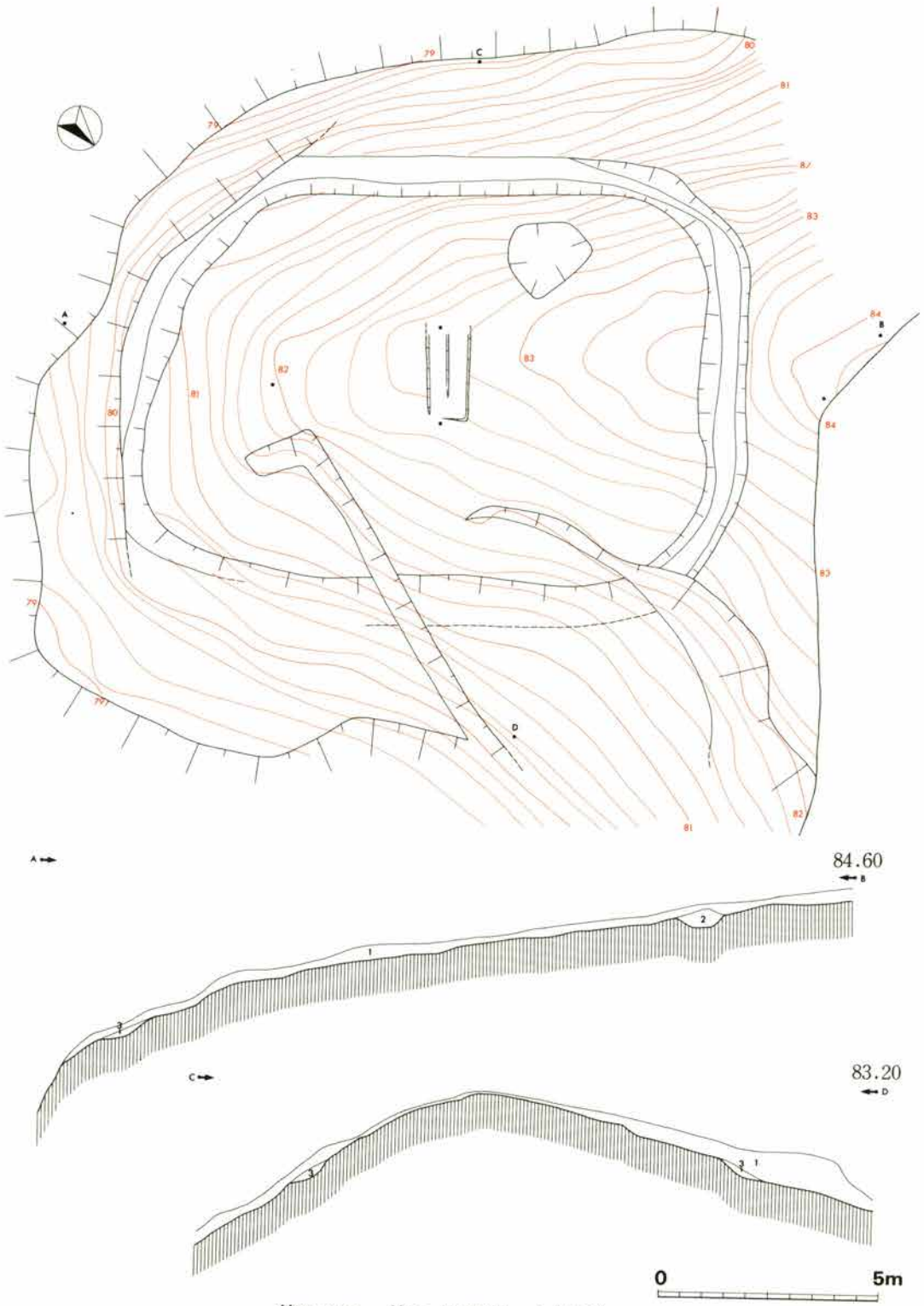
第250図 第3・4・6・7・10号墳埋葬施設他(S=1/40)

第2節 西支群の遺構と遺物



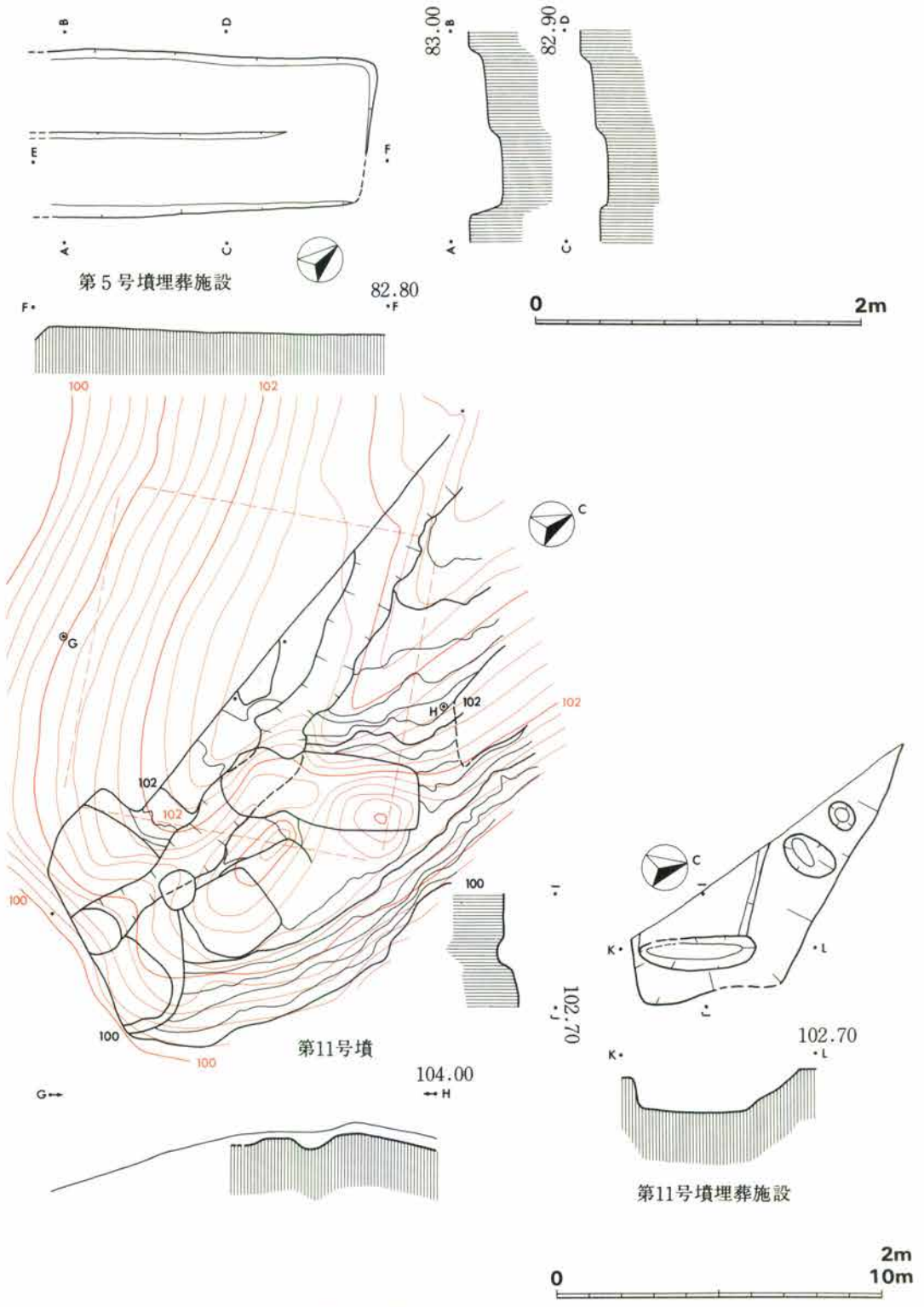
0 10cm

第251図 第5号墳・出土土器(S=1/200・=1/3)

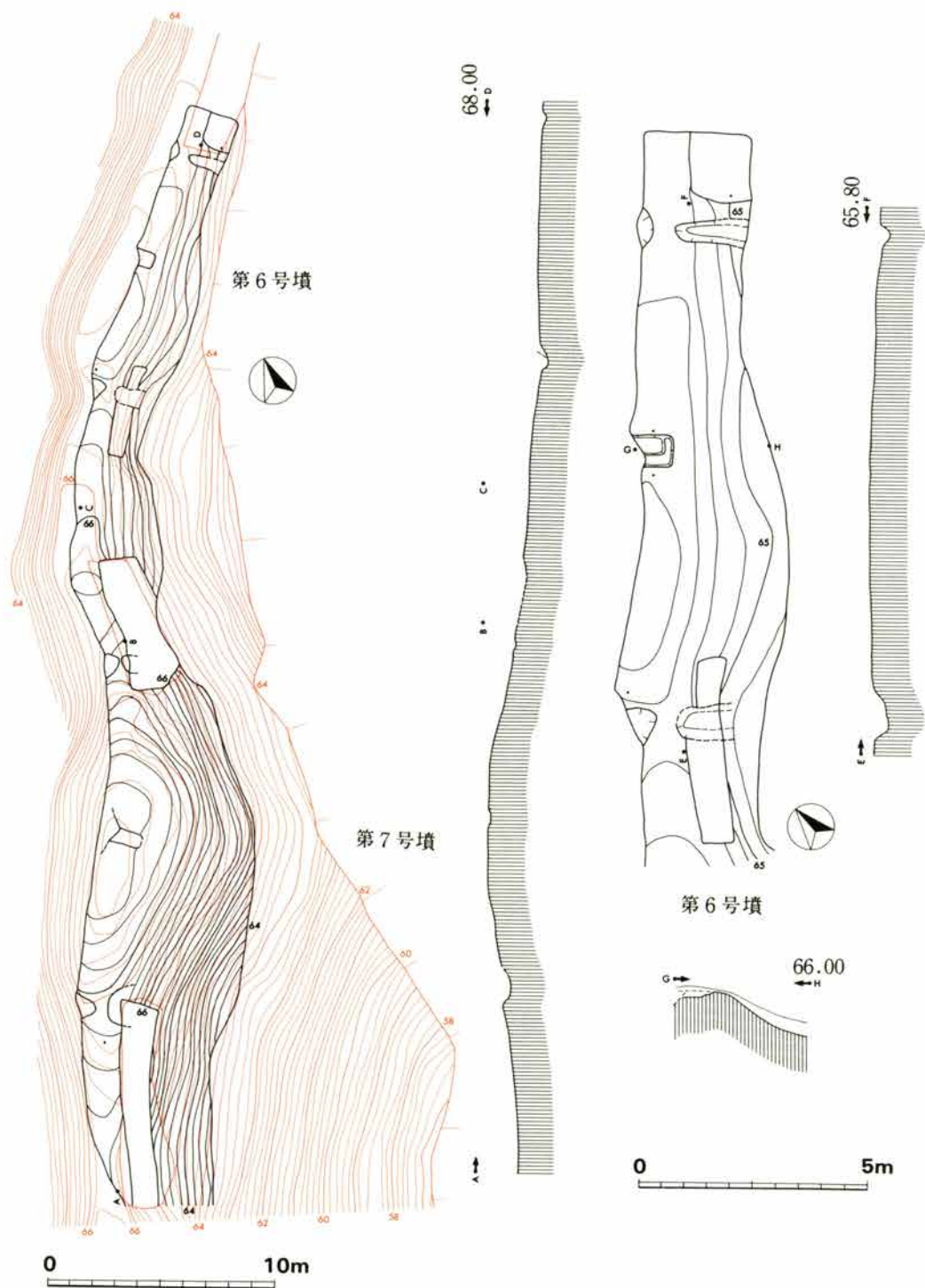


第252図 第5号墳(S=1/150)

第2節 西支群の遺構と遺物

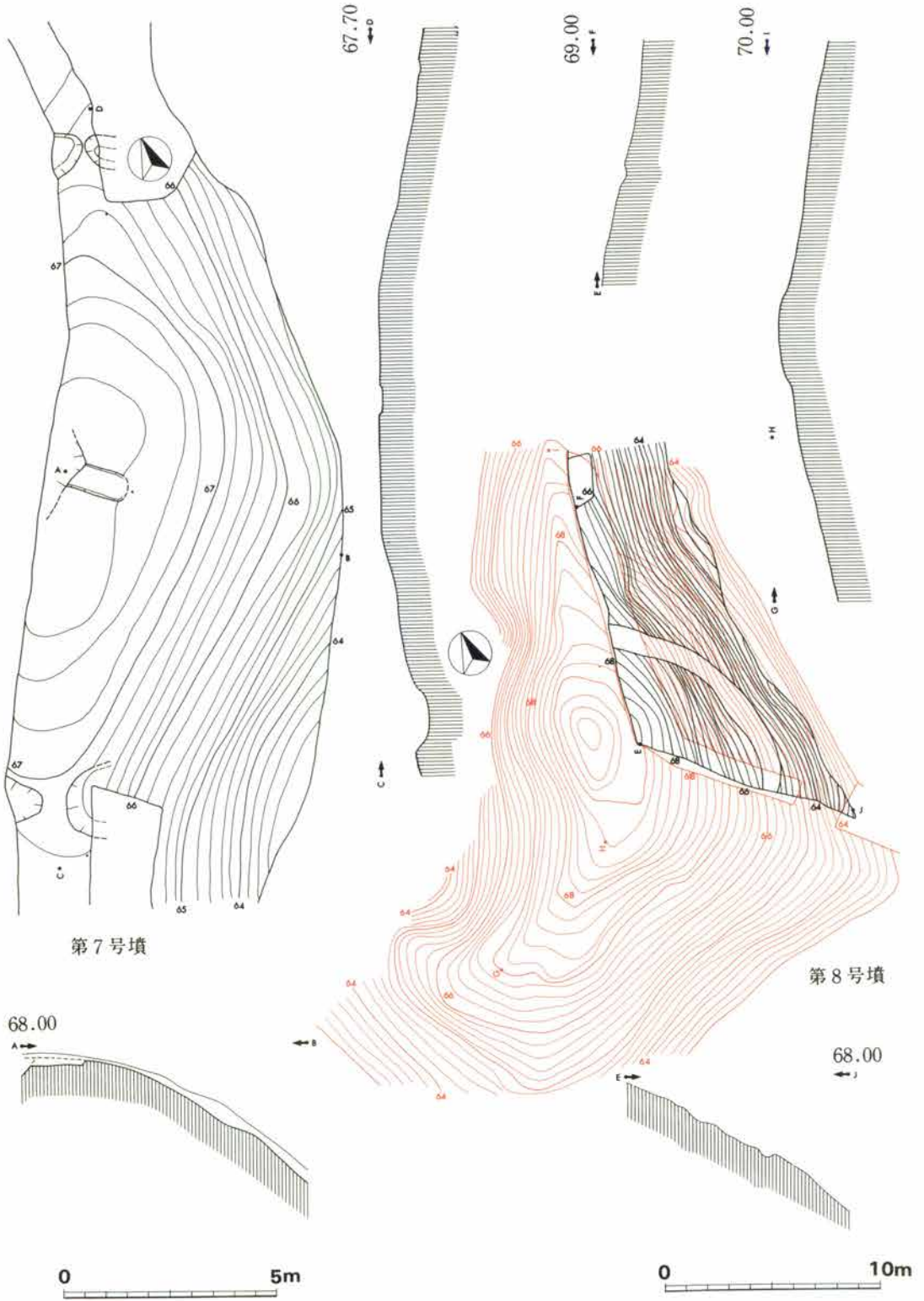


第253図 第5・11号墳(S=1/40・=1/200)

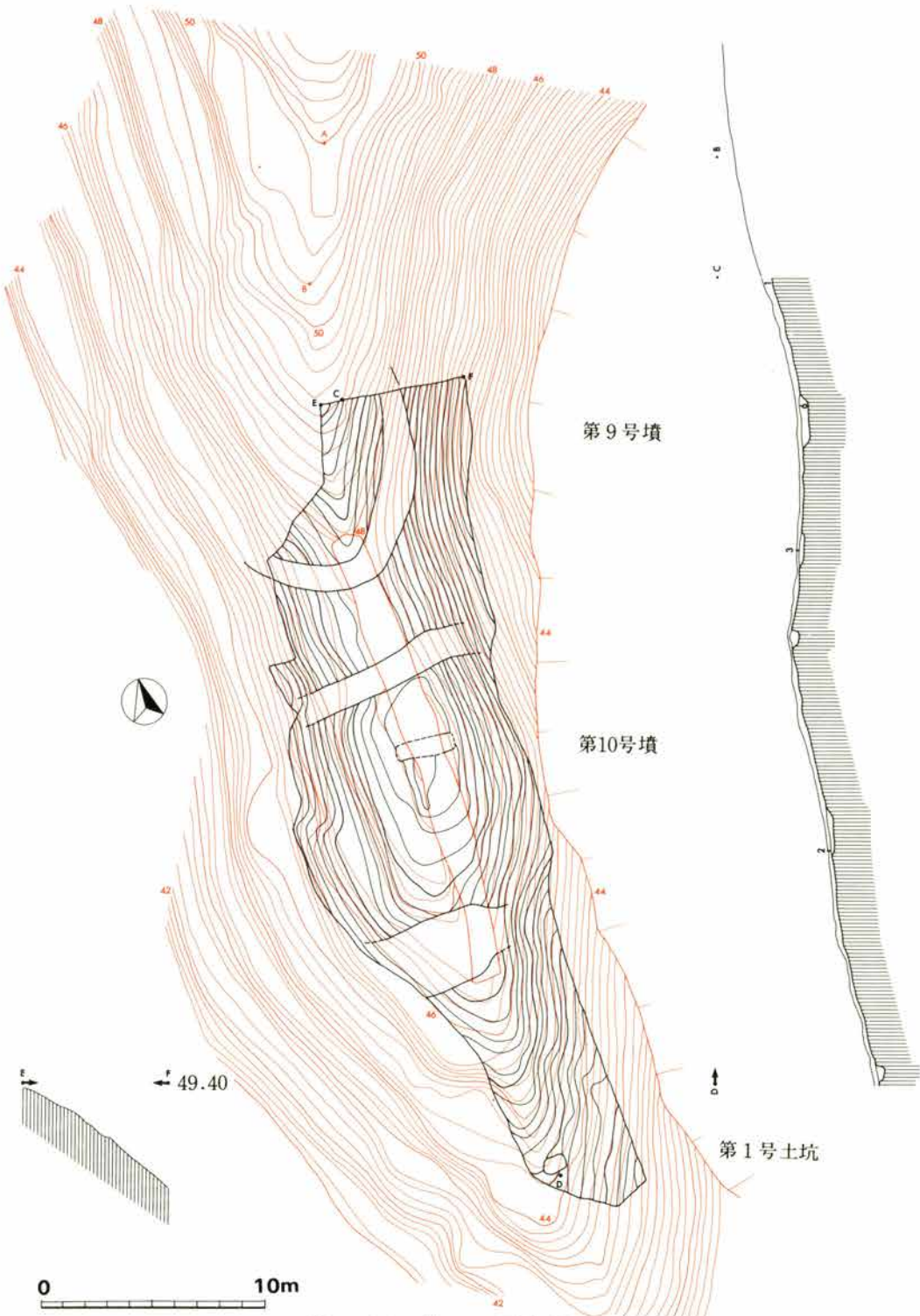


第254図 第6・7号墳 (S=1/300・=1/150)

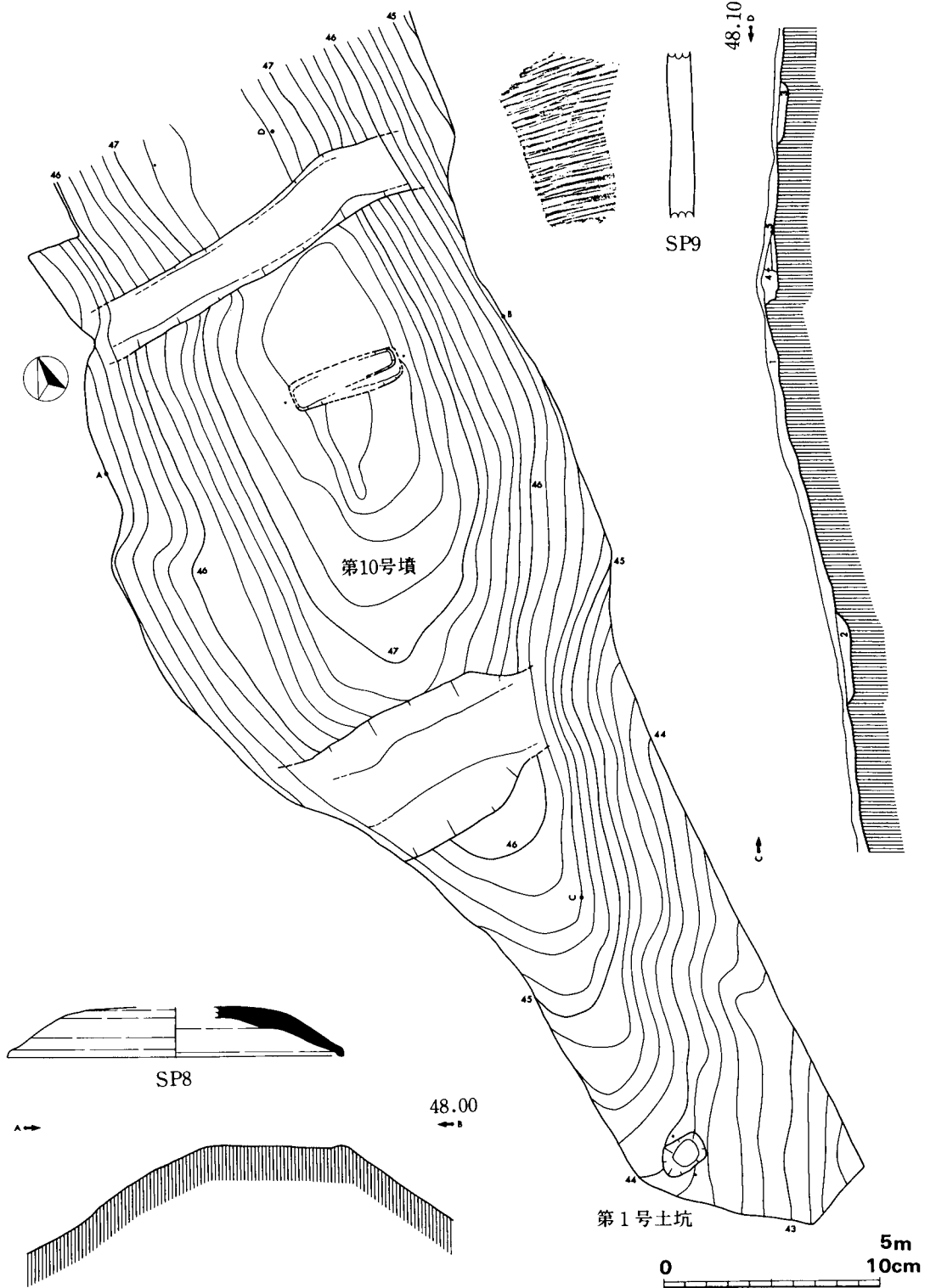
第2節 西支群の遺構と遺物



第255図 第7・8号墳 (S=1/150・=1/300)



第256図 第9・10号墳(S=1/300)



第257図 第10号墳・出土土器他(S=1/150・=1/3)

第6章 金丸杉谷遺跡

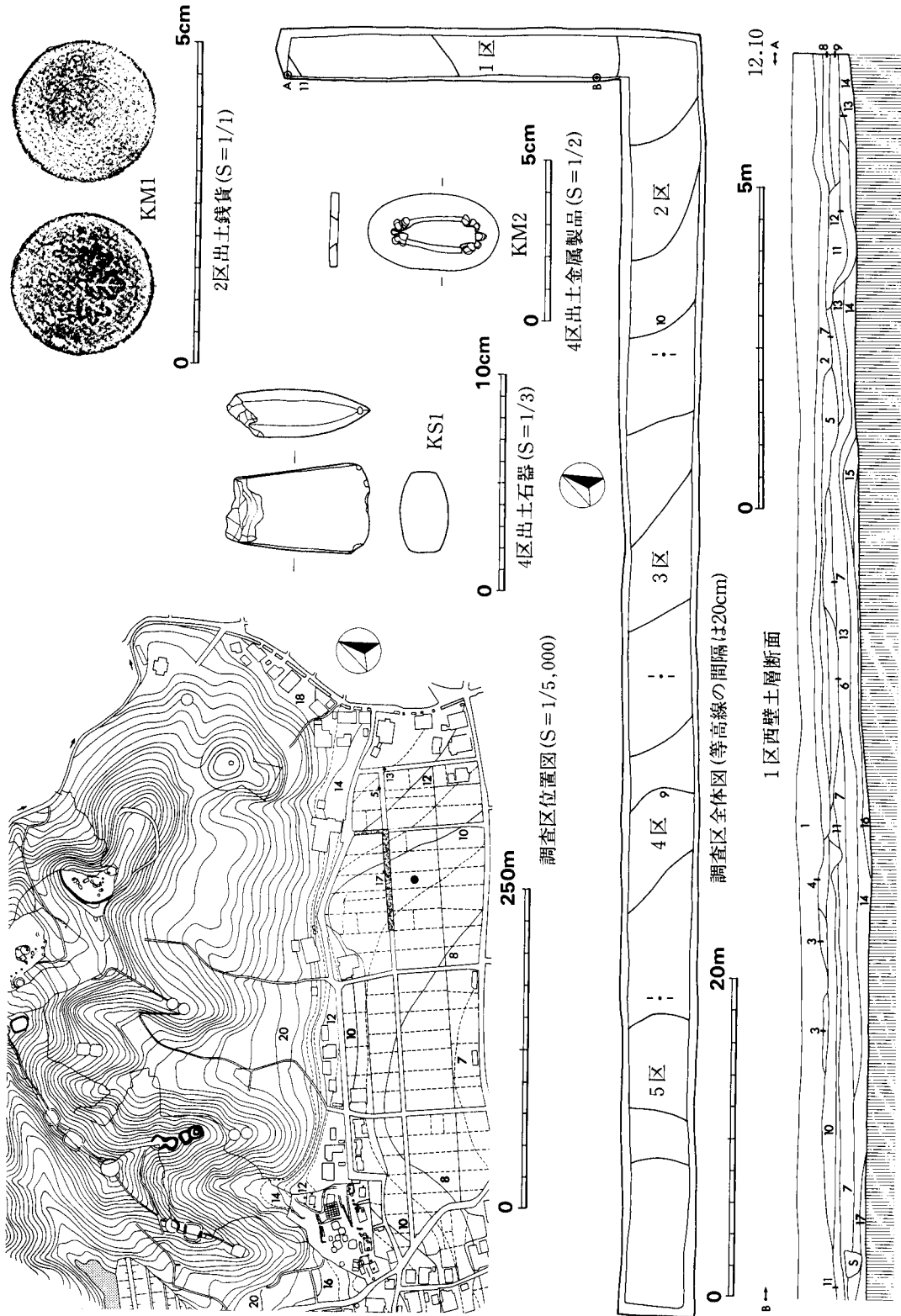
1 遺跡と調査の概要(第258図)

金丸杉谷遺跡は、昭和32(1957)年3月上旬杉谷地内での耕地整理中、通称イゲタといわれる水田(金丸井48甲番地)より土師器壺に内蔵された隆平永宝(延暦15(796)年初鑄)11枚(現存9枚)他が出土したことで知られる。耕地整理前の遺跡周辺の水田は概して狭小で不定型をしていたが、整理後の水田区画は全く変容してしまったといわれ、現在では杉谷の集落から南西方向へ下っていく等高線(田面高より復元)に往時の景観を偲ぶよりない。土師器壺の出土箇所は、現在の水田区画では第258図黒丸で示した水田である。同壺は火葬蔵骨器で隆平永宝もそれに埋納されたものと考えられているが、出土状況が詳らかではないため、埋納当時の位置を保っていたものか、その後二次的に移動したものか、さらには耕地整理中に移動したものは確定できない。こうして特異な遺物の出土が注目されたわりには、長らく遺跡の実態は不明瞭なままであった。

遺跡発見よりおよそ30年、県水道用水供給事業に係る道路補償(舗装)工事に伴い遺跡が再び影響を受ける可能性が生じたため、昭和61(1986)年と同63(1988)年に工事予定箇所を人力および重機により試掘し埋蔵文化財の影響範囲を確定した。工事は影響範囲外で順次おこなわれ、発掘調査は谷内・杉谷遺跡群の現地調査の最終年度である平成元年度に実施した。試掘調査では比較的広い範囲で遺物の出土を見たが、それらはそれぞれ少量で破片も小さく耕地整理とその後の耕作による二次的な移動を窺わせているようであり、明瞭な遺構も確認されなかった。そのなかにあって後述の本調査区(面積約630m²)は、遺物が多く出土し発掘調査の対象となったものである。

本調査区は、杉谷の集落から南西にやや離れた現道下で、丘陵裾部から南に約20m、その南端から西へ約80mのL字形を呈する。幅約3m(下法、工事幅は3.5m)の南北調査区を1区とし、幅4m(同、同7m)の東西調査区は東から20m間隔に区切り2～5区とした。調査区の傾斜は1区北端が最も高く、一応の基盤と考えた面(後述)の標高は11m前後である。最も低い5区西端では8m強と1区北端とは約3mの比高差をもち、概略では現地形と対応している。1区西壁の土層断面をもとに調査区の層序をみると、盛土(後記土層1)下の土層は基本的には地形にそうかたちで傾斜しており、そのなかに耕作にともなうとみられるもの(同2、8、10)やその基盤となるもの(同5、7、9、11、12)が不連続面を構成している。

遺物は2層から12層まで散発的に出土したが、13層(やや明るい暗青灰褐色土)からの出土が最も多く、その下部の14～17層では出土をみなかったため、14層(青灰褐色土)上面を一応の基盤と考えた。区ごとの出土量は、1・2区が多く次いで3・4区、5区での



第258図 金丸杉谷遺跡調査区全体図(S=1/400)・1区土層断面(S=1/100)他

出土は少量である。1層は耕地整理時(後)、2～5層は耕地整理直前の層と考えたが、6層より下位の土層の堆積時期は明確にはできなかった。ただし13層については、遺物包含層というよりも流土的な性格が強いが、古代(以前)の遺物が主体であるため古代あるいはそれより大きく下らない時期のものと考えておきたい。

14層上面の精査で明瞭な遺構が確認できなかったため、14～17層より下位での遺構・遺物の有無を確認するため一部で断ち割りをおこなった。その結果、同様の斜め堆積を見せる無遺物層が続くのみで遺構も確認できなかった。この間1区の両壁および2～5区の北壁の高さが部分的に1mを越え、砂質土を主体とする土層の崩落が続いた。隣接する水田に影響が及び早期の調査終了を余儀無くされたため、とりわけ下部の調査は十分とはいえなかったが、本遺跡に関して以下の所見を得ることができた。調査区では明瞭な遺構を確認できなかったため、狭義の集落域の縁辺部に位置するものと考えられる。5区での遺物の出土が少量であるため、広義の集落域も同区付近を限界とする可能性がある。狭義の集落域は、3・4区の南東側で出土した隆平永室内蔵土師器壺の出土状況とその性格が改めて問題となるが、本調査区の北および北東側を中心に展開するものと推定される。

1区西壁土層一覧

- | | |
|----------------------|------------------|
| 1 褐色土(盛土) | 10 礫混暗灰色土(旧耕土?) |
| 2 暗灰褐色土(旧耕土?) | 11 黄褐色粗砂 |
| 3 礫混黄褐色粗砂 | 12 暗灰色腐植物層 |
| 4 暗灰褐色土ブロック混淡灰色土 | 13 暗青灰褐色土(やや明るい) |
| 5 暗黄褐色粗砂(暗灰色土薄層を含む) | 14 青灰褐色土 |
| 6 黄褐色粗砂(暗灰色土薄層を多く含む) | 15 礫混青灰褐色砂 |
| 7 灰褐色土 | 16 暗灰色シルト |
| 8 暗灰褐色土(やや明るい、床土?) | 17 暗灰色土 |
| 9 暗青灰褐色土 | |

2 出土遺物(第259～263図)

本調査区で出土した遺物は5箱(周辺採集遺物と試掘坑出土品を若干含む)、うち1箱は4区で出土した須恵器の大型品が占める。時期的には弥生時代終末期前後から古代、中世、近世(以降)におよぶが、量的には古代に属するものが大半である。そのうち土器62点(KP1～62)、石器1点(KS1)、金属製品2点(KM1・2)を実測した。以下1区出土品から順に報告する(個々の土器の詳細は章末の観察表を参照されたい)。

1区では土器21点(KP1～20・57)を実測した。KP1～4は須恵器蓋、有台杯、無台杯。1は天井部から口縁部にかけて再調整(内面ナデ、外面磨き)をおこない、成形時の破損を補修している。3は外底面中央に墨書(判読不可)がある。KP5は珠洲焼壺、破損後再使用(転用)したためか、内底面に使用(擦)痕が認められる。KP6～15・57は土師器碗、皿、鉢。57は不注意にも採集土器とともに貼り込んでしまったが1区出土土器である。KP16・17は土師器甕、KP18は甑、KP19は甑(あるいは竈?)、KP20は製塩土器である。

2区では土器25点(KP21~45)、銭貨1点(KM1)を実測した。KM1は直径2.26cm、厚さ1.1mm、重さ3.0gを測る青銅製一銭貨、大日本、大正十一年の文字が読める。KM21~31は須恵器蓋、有台杯、無台杯、盤。21は天井部内面に一のヘラ記号を施す。29は小片から口径(15.0cm)を復元したものでやや大きすぎた可能性がある。KP32~38は土師器椀、KP39~43は製塩土器。後者は口縁部2点底部3点を実測したが、個体数は特定できていない。KP44は土師器甕、KP45は珠洲焼あるいは須恵器系の甕である。

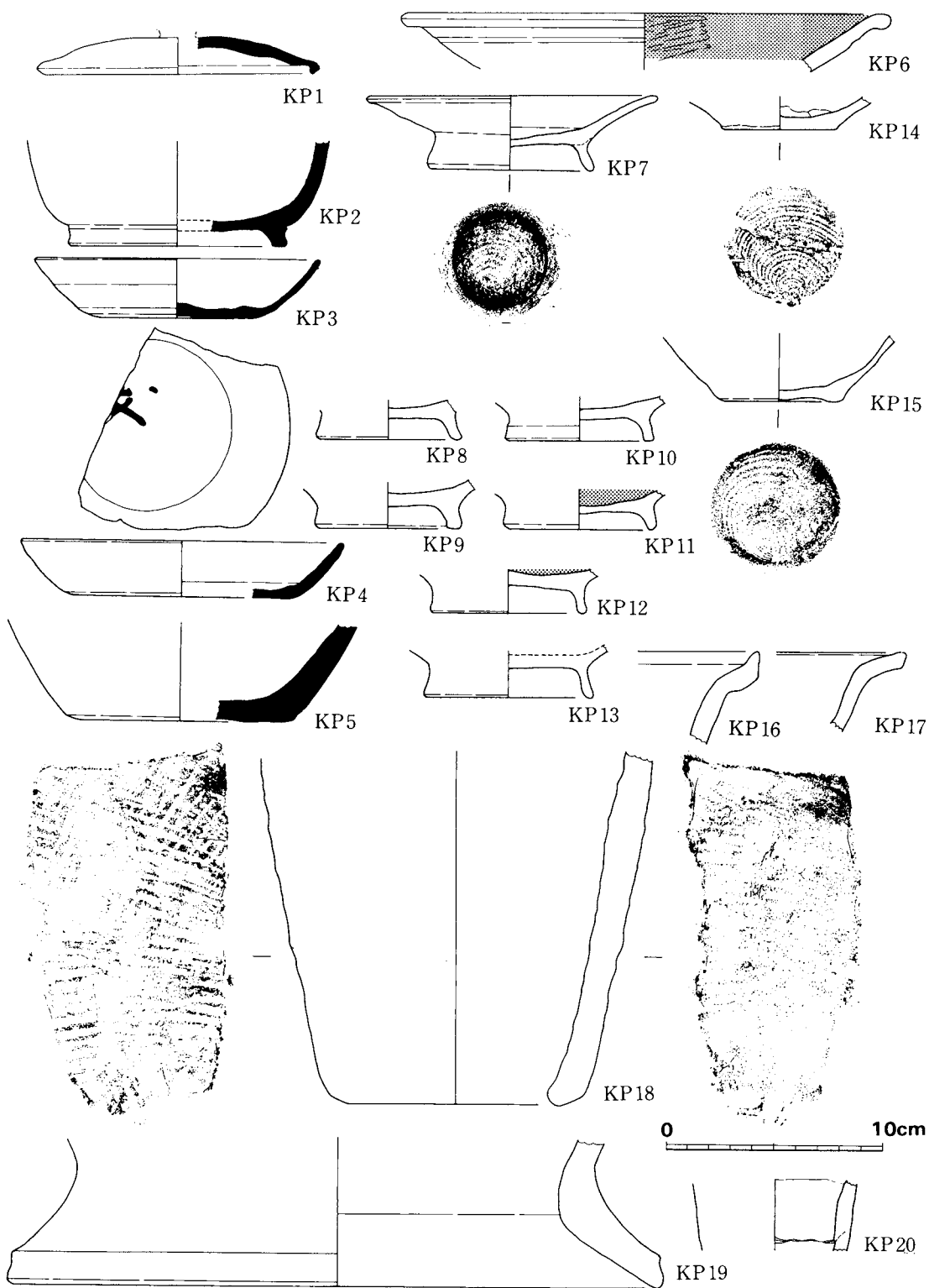
3・4区では土器9点(KP46~51・61・62)、石器1点(KS1)、金属製品1点(KM2)を実測した。KS1は磨製石斧、基部を欠損しているが残存最大長6.85cm、最大幅4.17cm、最大厚2.27cm、残存重量101gを測る。KM2は銅製刀装具(切羽台)、長径4.10cm、幅2.39cm、厚さ2.4mm、重さ11.3gを測る。KP46・47・50は須恵器杯類、KP48は双耳瓶。48の内面の叩き目文は無文である。KP51・61・62は須恵器甕。61の内面の叩き目文は同心円文b2類〔内堀信雄1988〕である。KP49は土師器皿である。

採集品、試掘坑出土品では土器8点(KP52~56・58~60)を実測した。KP52~55は須恵器蓋、無台杯、盤、小壺、52~54は発掘調査時の周辺採集品、外底面に×のヘラ記号を施した55は、1987年4月中旬に周辺の水田より採集したものである。KP56は珠洲焼甕、地点は異なるが55と同時期に採集した。KP58~60は土師器小甕、皿、それぞれ1986年10月に実施した試掘坑No.17、13、5(地点は第258図参照)より出土した。

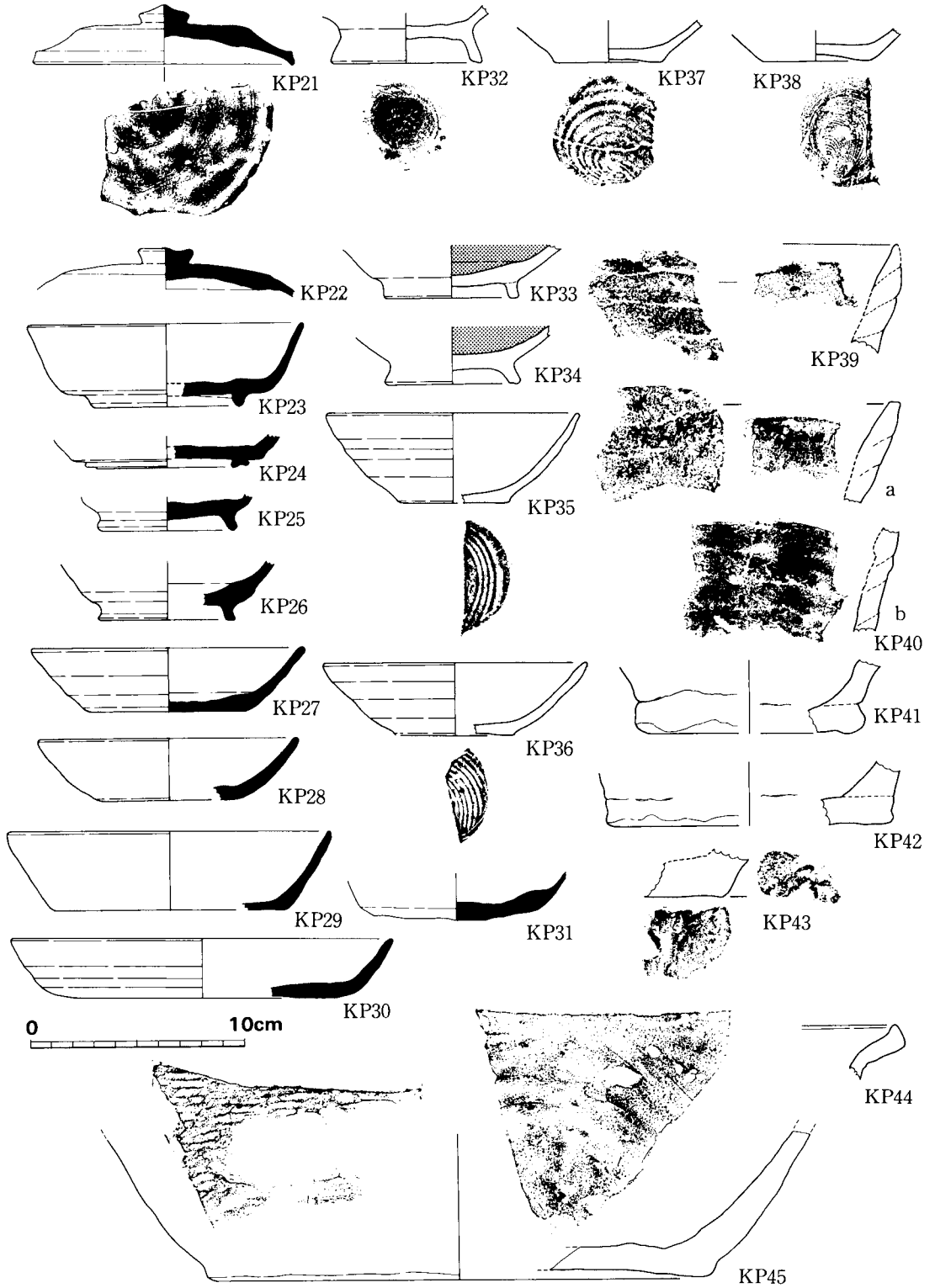
以上、1区から順に出土品について報告した。同時性を窺わせる出土状況とは到底いえないため、遺物の所属時期については個別に検討するよりないが、土器については中世の珠洲焼、土師器皿(KP49・56・59・60、14・15世紀代を中心とするものか)を別とすれば、ほとんどは古代のもので占められている。須恵器では8世紀後半頃(KP1・2・23・46)、8世紀後半~9世紀前半頃(KP27・30)、9世紀後半~10世紀初頭頃(KP3・4)と数段階にわたるものが確認でき、ほとんどが鳥屋窯跡群産(KP55は非鳥屋産?)と推定される。土師器椀・皿類は9世紀後半以降の所産であるがやや幅をもつようである。製塩土器ではKP20が7世紀代、KP39~43が9世紀頃の所産と考えておきたい。出土遺物から遺跡の性格を推定することは難しいが、その中心が古代であることは間違いなく、継起的にその活動が営まれたところに少なくとも特徴のひとつがあるといえよう。

参考文献

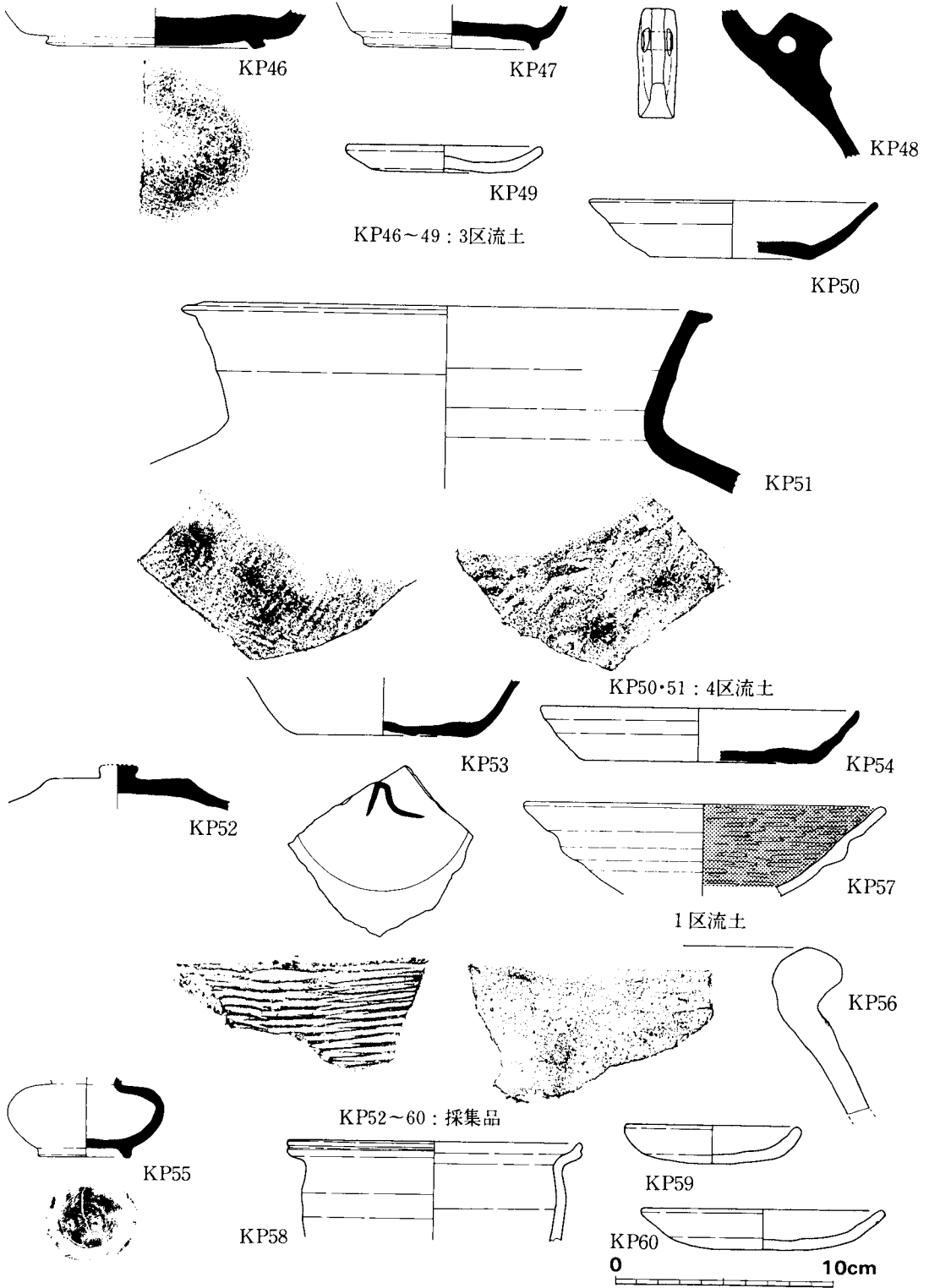
- 浜岡賢太郎・吉岡 康暢 1965 「隆平永宝を包蔵した土師質壺の新例」『石川考古学研究会々誌』第9号石川考古学研究会
- 内堀 信雄 1988 「須恵器甕にみられる叩き目文について」『北陸の古代土器研究の現状と課題』 報告編 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会



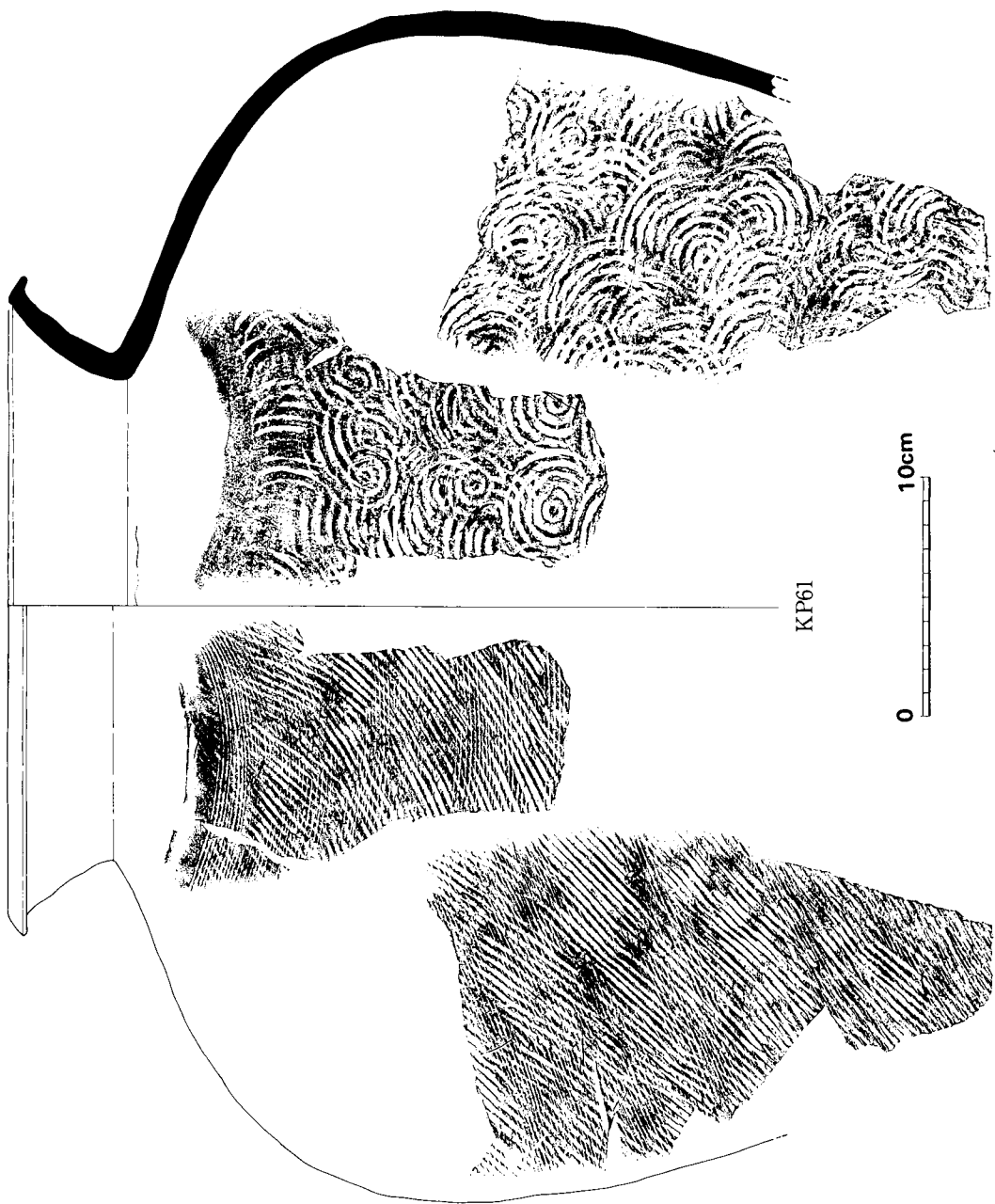
第259図 1区出土土器(S=1/3)



第260图 2区出土土器(S=1/3)



第261図 3・4区出土土器他(S=1/3)



第262图 4区出土土器(S=1/3)



第263図 4区出土土器(S=1/3)

金丸杉谷遺跡出土土器観察表 (a : 口径 b : 胴径 c : 高台径・底径 h : 器高)

番 号	出 土 地 点	器 類 等	法 量 等 (cm・g)	特 記 事 項	番 号	出 土 地 点	器 類 等	法 量 等 (cm・g)	特 記 事 項
KP 1 91D535	1区 流土	須惠器 蓋	a:12.6 褐灰色	砂粒を多く含む	KP33 91D559	2区 流土	土師器 鉢	c: 6.2 橙色	内面黒色 (不良)
KP 2 91D529	1区 流土	須惠器 杯	c:10.1 青灰色	砂粒を多く含む 焼成は良好	KP34 91D551	2区 流土	土師器 鉢	c: 6.2 にぶい黄橙色	内面黒色
KP 3 91D523	1区 流土	須惠器 杯	a:13.2 c: 7.2 h: 2.8 明緑灰	細かい砂粒を含む 細外底面中央墨書	KP35 91D558	2区 流土	土師器 器	a:11.8 c: 5.3 h: 4.2	外底糸切り にぶい黄橙色
KP 4 91D585	1区 流土	須惠器 杯	a:14.8 c:10.2 h: 2.6 青灰色	細かい砂粒を含む 焼成は良好	KP36 91D562	2区 流土	土師器 鉢	a:12.4 c: 5.6 h: 3.4	外底糸切り にぶい黄橙色
KP 5 91D540	1区 流土	珠洲 壺	c:10.6 青灰色	砂粒を多く含む	KP37 91D561	2区 流土	土師器 鉢	c: 4.8 橙色	外底糸切り
KP 6 91D528	1区 流土	土師器 鉢	a:22.0 にぶい黄橙色	細かい砂粒を含む 内面黒色	KP38 91D547	2区 流土	土師器 鉢	c: 4.9 浅黄橙色	外底糸切り
KP 7 91D525	1区 流土	土師器 皿	a:13.3 c: 7.7 h: 3.5 浅黄橙	細かい砂粒を含む 外底糸切り	KP39 91D570	2区 流土	製塩器 土器	橙色	口縁部 内面剝離あり
KP 8 91D526	1区 流土	土師器 碗	c: 5.5 明褐色		KP40 91D590	2区 流土	製塩器 土器	暗赤褐色	口縁部 内面剝離あり
KP 9 91D533	1区 流土	土師器 碗	c: 6.6 浅黄橙色		KP41 91D588	2区 流土	製塩器 土器	暗赤褐色	底部
KP10 91D532	1区 流土	土師器 碗	c: 6.8 浅黄橙色		KP42 91D589	2区 流土	製塩器 土器	暗赤褐色	底部
KP11 91D531	1区 流土	土師器 碗	c: 6.8 黄橙色	内面黒色	KP43 91D591	2区 流土	製塩器 土器	にぶい褐色	底部 内面剝離あり
KP12 91D530	1区 流土	土師器 碗	c: 7.0 浅黄橙色	内面黒色	KP44 91D549	2区 流土	土師器 器	にぶい橙色	口縁部
KP13 91D537	1区 流土	土師器 皿	c: 7.6 浅黄橙色	内面剝離	KP45 91D550	2区 流土	珠洲 焼壺	c:23.0 青灰色	須惠器系壺の可能 性もある
KP14 91D527	1区 流土	土師器 碗	c: 5.2 黄橙色	外底糸切り	KP46 91D572	3区 流土	須惠器 杯	c: 9.1 灰色	砂粒を多く含む 外底2条並行沈線
KP15 91D539	1区 流土	土師器 碗	c: 5.8 橙色	外底糸切り	KP47 91D571	3区 流土	須惠器 杯	c: 7.8 明青灰色	砂粒を多く含む 焼成は良好
KP16 91D583	1区 流土	土師器 壺	にぶい黄橙色	口縁部	KP48 91D573	3区 流土	須惠器 瓶	灰白色	内面無文叩き目文 砂粒を多く含む
KP17 91D584	1区 流土	土師器 壺	にぶい黄橙色	口縁部	KP49 91D575	3区 流土	土師器 皿	a: 9.0 c: 5.2 h: 1.3 褐灰色	口唇部灯芯油痕2 箇所以上
KP18 91D541	1区 流土	土師器 瓶	c:10.0 橙色		KP50 91D569	4区 流土	須惠器 杯	a:13.0 c: 7.4 h: 2.7 赤黒色	砂粒を多く含む
KP19 91D542	1区 流土	土師器 瓶	c:30.4 浅黄橙色	竈の可能性あり	KP51 91D574	4区 流土	須惠器 壺	a:22.8 青灰色	砂粒を多く含む 焼成は良好
KP20 91D587	1区 流土	製塩器 土器	浅黄橙色		KP52 91D534	89年 採集	須惠器 蓋	褐灰色	砂粒を多く含む
KP21 91D548	2区 流土	須惠器 蓋	a:12.0 h: 2.8 灰白色	砂粒は少ない 天井部内面一記号	KP53 91D536	89年 採集	須惠器 杯	c: 8.2 青灰色	砂粒を多く含む 外底面中央墨書
KP22 91D557	2区 流土	須惠器 蓋	青灰色	砂粒を多く含む	KP54 91D524	89年 採集	須惠器 壺	a:14.6 c:10.6 h: 2.5	細かい砂粒を含む 明青灰色
KP23 91D546	2区 流土	須惠器 杯	a:12.8 c: 6.8 h: 3.9 青灰色	砂粒を多く含む 焼成は良好	KP55 91D566	87年 採集	須惠器 小壺	c: 4.1 b: 7.3 暗オリープ色	外底糸切り 外底面×記号
KP24 91D556	2区 流土	須惠器 杯	c: 6.6 青灰色	砂粒を多く含む	KP56 91D565	87年 採集	珠洲 焼壺	青灰色	口縁部
KP25 91D544	2区 流土	須惠器 杯	c: 6.1 灰白色	砂粒を多く含む	KP57 91D538	1区 流土	土師器 鉢	a:16.4 黄褐色	内面黒色
KP26 91D553	2区 流土	須惠器 杯	c: 6.3 青灰色	砂粒を多く含む	KP58 91D567	試掘 坑17	土師器 小壺	a:13.6 褐灰色	86年10月
KP27 91D555	2区 流土	須惠器 杯	a:12.8 c: 7.4 h: 3.0 青灰色	砂粒を多く含む	KP59 91D563	試掘 坑13	土師器 皿	a:14.6 h: 1.8 にぶい黄褐色	86年10月
KP28 91D545	2区 流土	須惠器 杯	a:12.0 c: 6.4 h: 2.9 明緑灰色	細かい砂粒を含む	KP60 91D564	試掘 坑5	土師器 皿	a:10.9 h: 1.9 にぶい褐色	86年10月 内面油痕2箇所～
KP29 91D554	2区 流土	須惠器 杯	a:15.0 c:10.8 h: 3.7 灰白色	細かい砂粒を含む	KP61 91D577	4区 流土	須惠器 壺	a:25.6 b:50.0 灰色	砂粒を多く含む 同心円文b2類
KP30 91D552	2区 流土	須惠器 蓋	a:17.8 c:12.2 h: 2.8 明褐色	細かい砂粒を含む	KP62a 91D576	4区 流土	須惠器 壺	a:31.4 青灰色	砂粒を多く含む
KP31 91D543	2区 流土	須惠器 杯	c: 7.8 明オリープ灰色	砂粒を多く含む	KP62b 91D578	4区 流土	須惠器 壺	灰白色	砂粒を多く含む
KP32 91D560	2区 流土	土師器 鉢	c: 6.9 浅黄橙色	外底糸切り					

第9節 谷内ブンガヤチ遺跡出土の 中近世陶磁器類について

滝川 重徳

1 中世

a. 陶磁器様相の概要（第275図・第15表）

当遺跡出土の中世陶磁器は、接合後の破片数で約2,200点を数える。但し12・13世紀の製品は、貿易陶磁・珠洲・土師器皿に見い出せるものの、多くてもそれぞれ10点前後に過ぎない。他の大部分は14世紀半ば以降に属するものである。そのためこれから概観する陶磁器様相は、さしあたり中世後半の状況を示すこととなろう。

供膳具 碗は青磁が最も多い。青磁の中でも鎬蓮弁文碗は数点認められるのみで、見込みに印花文をもつもの、内面に陽刻を施すもの、口縁部に雷文帯を巡らすもの、線刻蓮弁文碗など、15世紀以後見られるタイプが目立つ。白磁にはⅣ類底部一点の他、見込みに印刻を持つ枢府手風のものがある。青花は15世紀後半～16世紀前半に位置付けられるが6点と少ない。瀬戸美濃では古瀬戸後期様式の平碗、大窯期の丸碗があるが量的には数個体程度であろう。天目茶碗はやや多く青磁の半数ほどの点数を占める。碗類全般の傾向としては、15世紀主体と考えられるタイプが多く、16世紀代には量的に低下するようである。

皿は青磁・白磁が共に10点強、青花は10点未満、瀬戸美濃の縁釉皿が3点、大窯期の灰釉・鉄釉皿が21点を数える。青磁皿の主体を占めるのは稜花皿で、15～16世紀に跨がるものであろう。白磁は挟り高台を典型とする小皿がほとんどを占め、16世紀的なやや大振の端反り皿は確認していない。なお青花に関しては漳州窯系の製品とおぼしき破片がある。大攪みでは15世紀から16世紀にかけて、青磁・白磁を主とする組成から、瀬戸美濃大窯期皿を主とし若干の青花が加わる組成への変化が窺われる。この他朝鮮陶器皿が1個体みられるが、出土位置から判断すると使用時期は近世に下るものと思われる。なお土師器皿は893点を数え陶磁器の種類としては最も多い。その変遷については後述する。

貯蔵具 壺・甕はあえて分類せず集計した。越前が珠洲を圧倒しているが、一つには甕の完形品が多いことに原因があろう。また本来近世に属するものも多くはないが混じっている。15世紀後半～16世紀前半が主体であり、口縁部のヴァリエーションは少ない。珠洲はⅣ・Ⅴ期が多い⁽¹⁾。

調理具 播鉢は珠洲・越前、それに土器製のものがある。珠洲は越前を量的に大きく上回っている。口縁部を見るとⅣ期の製品が最も多く、Ⅴ期がこれに続く。越前は丸みを帯びた口縁部でその内面下端に沈線を持つⅢ a類⁽²⁾が目立ち、口縁部が断面三角を呈する

IV類は比較的少ない。III a類は15世紀後半、IV類は16世紀代とされる。土器製品は数量的に極めて少なく、所属時期も確証がないが、16世紀から近世初頭の間にとまるものであろう。

宗教用具・調度具 香炉・花瓶・瓶子・合子の類は量的にごく限られており、それぞれ多くても3個体を越えることはない。このうち香炉・花瓶・瓶子は瀬戸美濃で占められる。貿易陶磁は中世前半と考えられる青白磁の合子が1点認められる他、褐釉陶器の壺が同じく1点知られる。火鉢・風炉の類には瓦質土器があるが数量は多くない。15世紀代のものとしては風炉の底部が1点確認できるのみである。半割花文の印花を巡らす破片(第275図)は火桶あるいは瓦灯の一部と思われるが、16世紀に下る可能性を考えたい。これらの他は所属時期・器種などはっきりしない。

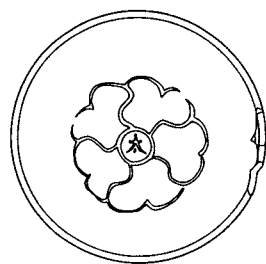
b. 供膳具を巡る問題

当遺跡における陶磁器様相の概況を説明し終えたところで、他遺跡と適宜比較しながらその特徴を、とくに供膳具に絞って記してみよう。第一に問題としたいのは供膳具を巡って競合する貿易陶磁と瀬戸美濃陶器の比率である。

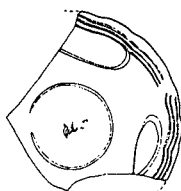
当遺跡では互いの総計は前者が109点、後者が92点となり量的に伯仲する。但し互いのピークには時期的なずれがある。すなわち貿易陶磁の主体は青磁・白磁であり、中でも15世紀代に帰属するものが多い。一方瀬戸美濃陶器で目立つのは大窯期の製品であり、ほぼ16世紀を中心とするものである。つまり両者は、常に伯仲していたわけではなく、時期により量的な優劣関係にあったと言える。

穴水町白山橋遺跡は中世後半の典型的な農村遺跡として評価されているが、その指標の一つに貿易陶磁の瀬戸美濃に対する量的劣勢が挙げられている⁽³⁾。この視点に立てば、15世紀頃の谷内ブンガヤチ遺跡は、反対に町場的な要素を帯びていたといえるかも知れない。遺跡は能登加賀を結ぶ主要街道である西往来に面し、検出された遺構のうちに、越前焼の大甕を並べ据えていたとおぼしき小穴群も確認され、商業活動の存在も推定できる。しかしながら港湾遺跡として名高い金沢市普正寺遺跡⁽⁴⁾と比較すれば、陶磁器全体の絶対量からして相当の開きがある。都市的遺跡の条件は、むしろ陶磁器の絶対量に重点を置くべきかと思われるので、当遺跡に積極的な評価を与えるのは控え、ここでは15世紀代の貿易陶磁・瀬戸美濃の在り方を、農村における町場的要素の反映とみなすか、あるいは流通上の問題に帰すべきか、両方の可能性を並記しておく。後者の見方には、14世紀後半から15世紀にかけて、瀬戸美濃製品に歩を合わせるかのように北陸に浸透する瓦質の火鉢類が、当遺跡では意外に少ないことも念頭に置いている。

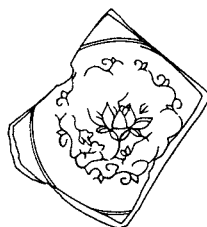
16世紀代の状況は、瀬戸美濃大窯期皿類の量的優位に特徴付けられるが、破片数21点という数字は、絶対的数量としてみれば決して多いとは言えない。また貿易陶磁には、16世紀代に帰属させてしかるべき青磁の一群も確実に存在する。しかし第一に前代の縁釉小皿



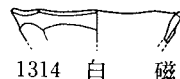
1322 青磁



529 青磁



1316 白磁



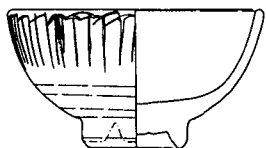
1314 白磁



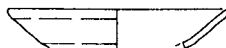
543 白磁



468 青白磁



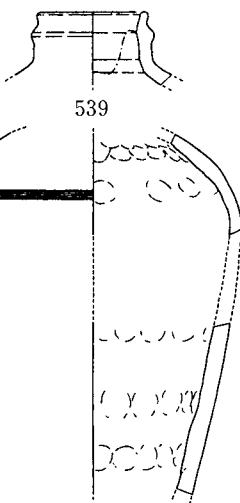
1323 青磁



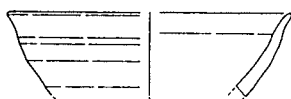
668 朝鮮陶



651 青花



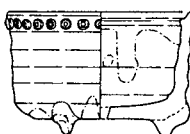
1225 瀬戸美濃



1198 瀬戸美濃



1327 瀬戸美濃大窯

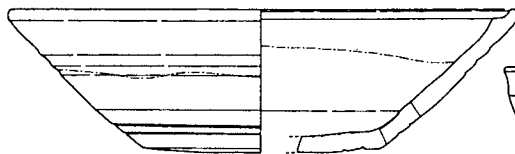


584 瀬戸美濃

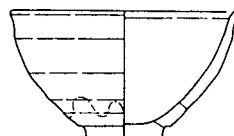


1212

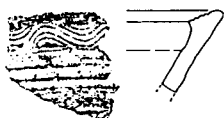
1213 瀬戸美濃大窯



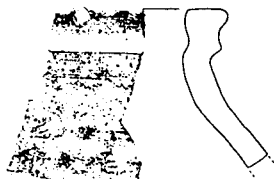
1222 瀬戸美濃



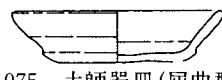
1201 瀬戸美濃天目



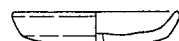
1157 珠洲 V



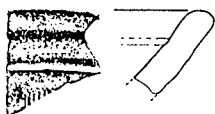
1166 越前



1075 土師器皿(屈曲型)



1088 土師器皿(直立型)



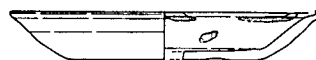
534 越前 IIIa



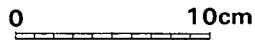
510 瓦質



661 土師器皿(丸底型)



1070 土師器皿(京都系)



第275図 主要中世陶磁器(S=1/4)

第9節 谷内ブンガヤチ遺跡出土の中近世陶磁器類について

第15表 中世陶磁器集計表

(接合後総破片数)

産地	器種	碗	皿	盤	香炉	壺・甕	播鉢	その他	合計
中国									
	青磁	56	11	3	-	-	-	-	70
	白磁	5	13	-	-	-	-	杯 5	23
	青白磁	-	-	-	-	-	-	合子 1	1
	青花	6	8	-	-	-	-	-	14
	褐釉陶	-	-	-	-	1	-	-	1
朝鮮陶器		-	2	-	-	-	-	-	2
瀬戸美濃									
	古瀬戸後期	8	3	6	3	瓶子15	-	10	45
	大窯	5	21	-	-	-	-	-	26
	(天目)	21	-	-	-	-	-	-	21
珠洲		-	-	-	-	392	89	-	481
越前		-	-	-	-	575	30	-	605
土師器		-	893	-	-	-	5	-	898
瓦質土器		-	-	-	-	-	-	鉢他11	11
合計		101	951	9	3	983	124	27	2198

第16表 中世土師器皿出土頻度
(形態\地区)

形態	区	LM	NO	PQ	合計
直立型		3	50	24	77
屈曲型		4	35	29	68
丸底型		1	10	27	38
京都系		0	1	9	10
合計		8	96	89	193

がごく少数であるがゆえに、瀬戸美濃陶器自身の供膳具部門での増量は明らかである。さらに競合相手の貿易陶磁をみると、15世紀後半以後の流行たる青花が少なく、加えて青花と共に16世紀代に盛行する白磁端反り皿がほとんど確認できないこと、また青花の内には、景德鎮系の他に16世紀末葉以降流通が本格化する漳州窯系(スワトウ)の製品が若干含まれるようであり、これがむしろ近世に引き付けて理解すべき種類であることが注意される。これらの点から、当遺跡のこの期の供膳具、ことに皿類については、瀬戸美濃大窯製品を基調としていたとみなして良いだろう。その供膳具の在り方は、先に引いた白山橋遺跡の16世紀代と、今度はよく一致する。他方、七尾城下町の一角に比定される七尾市シッケ地区遺跡⁽⁵⁾は、瀬戸美濃大窯製品と青花との比率は明示されていないが、青花の破片数は130点に達する。600㎡程度の面積であることを考慮に入れると、谷内ブンガヤチ遺跡との格差はより広がることとなる。

貿易陶磁と瀬戸美濃陶器の関係は以上の通りであるが、15世紀から16世紀にかけて認め得る特徴として、今一つ、陶磁器碗の減少がある。青磁から瀬戸美濃大窯製品への移行は、器種に置き換えると碗から皿への変化と見ても大過ない。青磁の場合、碗が絶対的に多数であり、白磁皿類の存在を考慮に入れてもなお、15世紀代は碗が陶磁器供膳具の主体を占めるのは疑いを入れない。他方、次代の貿易陶磁の一群においては、碗形態は明らかに相対化され、瀬戸美濃陶器にしても、喫茶具としての用途が指摘される天目碗⁽⁶⁾を除き碗の占める比率は極めて低くなっている。この傾向は当遺跡のみの特徴ではないようで、この間の北陸地方における陶磁器碗の退潮現象について、一般には漆器碗の興隆と対応するものと解釈されているようである。この状況は肥前磁器の本格的流入が始まる17世

紀中葉まで続く。

c. 土師器皿の形態について

谷内ブンガヤチ遺跡出土の中世土師器皿は約900点を数える。しかし良好な状態で他の陶磁器と共伴した例は、意外に少ない。一方形態的には特徴が掴みやすく、比較的グルーピングが容易である。ここでの課題は、共伴例のみならず、平面分布や他遺跡での出土例を援用して、各形態の時期差なり変遷を推測することにある。不明な点の多い能登地域の中世後半の土師器皿編年の一助となれば幸いである。

当遺跡には、12世紀代と推測される底部回転糸切り製品や、口縁端部の面取りがシャープな13世紀代の製品も少数確認されているが、差し当って分析の対象としたいのは、中世後半と考えられる各形態である。その大まかな年代観は後に触れることとし、まず形態の特徴を記す(第275図)。

屈曲型 : 体部が中位で屈曲し、口縁に至って再度内屈するもの。底部は概ね平坦で体部との境は強調される。体部の屈曲程度により細分できる。口径10~11cmの中皿が主体である。

直立型 : やや丸みを帯びた底部から軽い稜を作って体部=口縁部が直立気味に立ち上がるもの。口径10cm以下の小皿がほとんどである。

丸底型 : 丸い底部からそのまま体部・口縁部に連なるもの。器壁がほぼ均一で口縁部に至っても減じないためか、厚ぼったい印象を受ける。中皿・小皿とも定量認められる。

京都系 : 平坦な底部から体部が緩やかに外反しつつ開き、口縁部に至り小さく内屈もしくは内削ぎ気味に整えられるもの。15世紀後半~16世紀前半に各地に広がるいわゆる京都系土師器皿である。中皿・小皿とも確認できる。

これらから逸脱する形態は勿論存在するが、それらはグルーピングを行なうには少数である。また京都系を除く前三形態間には、中間形態とでもいうべき個体も存在するようであるがこれも量的に少ない。中間形態を系譜的連続性の中で捉えるのか、異系統間の折衷型とみるのかはなお議論の余地があるが、よしんば系譜的連続性があったとしても、形態的な変異は速やかに行なわれたと言え、各型の形態的独立性を侵すものではない。このため、以上の四形態が当遺跡土師器皿の主体をなすと言っても過言ではない。そこでこの四形態同士の先後関係について整理する。但し当遺跡の場合、土師器皿を含んだ陶磁器一括資料に恵まれず、各形態の共伴資料同士を比較することは困難である。そこで遺構の切り合い関係及び平面分布状況により、相対的な先後関係を検討することとした。

土師器皿を出土した遺構同士の切り合い関係が明らかなのは一例にすぎない。第1号小穴群は土師器皿の年代観を判断する上でも重要な遺構であるが、これは後説することとし、ここでは第1号小穴群に伴う主体的な土師器皿が丸底型であり、この遺構に切られて

第9節 谷内ブンガヤチ遺跡出土の中近世陶磁器類について

いる小穴中より直立型の土師器皿が出土していることを確認しておきたい。なお切り合い関係を示すものではないが、この際付け加えておくべき事例として、第15号建物柱穴出土遺物がある。当遺跡唯一の総柱建物で、その先行性を推測せしめる第15号建物の柱穴出土の土師器皿は、少量ながら直立型及び屈曲型で占められ、丸底型・京都系は認められない。

これら遺構出土資料を補う意味で、次に各形態の平面分布状況を検討する。第16表は当遺跡の東側約三分の一、L～Q区の包含層より出土した土師器皿を形態別に集計したものである。いずれの形態もLM＝西側に少なく、N～Q＝東側に多いのは共通しているが、詳細にみれば各形態ごとに分布の比重が異なっている。例えば各形態におけるPQ区出土率をみれば、京都系の場合、10点中9点で90%となり、丸底型では38点中27点で71.1%と比較的高率なのに対し、屈曲型は68点中29点で50%を割り、直立型に至っては77点中24点となり31.2%にとどまる。勿論結局の所、直立型・屈曲型の点数が多く、どの区でも多数を占めるわけであり、排他的な分布を示すのではないが、丸底型・京都系が他の二者に比べ偏在的でその在り方が似通っていることは首肯できよう。特に留意すべきことは、L～N-7～9区には当遺跡唯一の総柱建築である第15号建物が存在し、N～P-7～8区には後出的な側柱建築による第7号建物が前者に重複する形で位置している点である。土師器皿のうち中世の掉尾に位置する京都系がPQ区に集中することを重視すれば、平面分布という制約はあるものの、L～N区に一定の分布を示すものの方が、N～Q区に主体を置くものより、相対的に古相を呈する傾向にあると理解して良いように思われる。

当遺跡の事例以外にも、類似の様相を示す遺跡が知られる。同じ鹿西町に所在する阿弥陀蔵遺跡は中世後半を主体とする墓地遺跡であるが⁽⁷⁾、組合せ式五輪塔・珠洲焼の蔵骨器を有する東地区と、石塔・陶製蔵骨器をもたない土坑墓で構成される西地区に分かれる。東地区の造営者は武士身分に連なる階層と推測され、珠洲焼の年代観からみても、遅くとも14世紀代には成立していると見做される。他方西地区は百姓層による造営とみなすのが妥当であり、全国的に見ても当階層が墓地を形成し始めるのは概ね15世紀以降のこととなる。この時期差は出土土師器皿の組成に如実に反映しており、東区ではB類(＝直立型)が主体を占め、C類(＝丸底型)は少量、D類(＝京都系)に至っては1点みられるのみであるが、西地区ではD類が断然多く、以下C類・B類と続き順序が逆転している。阿弥陀蔵遺跡では墓地という性格を反映しているせいか小皿が目立ち、当遺跡で言う「屈曲型」を基本的に欠いてはいるが、土師器皿が、直立型→丸底型→京都系の順序でセリエーションをなしていることは確認できる。このように、先にあげた四形態相互の先後関係は、直立型・屈曲型が先行しており、続いて丸底型、そして京都系が掉尾に位置することが想定できよう。

次に遺構出土資料における共伴例を挙げる。決して多くはないが以下の各例がある。第10号井戸出土資料は、青磁稜花皿・珠洲VI期及び越前III a期の播鉢等で構成される。特に越前播鉢はほぼ同一型式のものが3個体あり、出土遺物の時期的まとまりを示唆している

ようである。まず15世紀後半頃の遺物群と見て大過ないであろう。土師器皿には丸底型の完形品の他、直立型との中間形態的なものがみられる。第14号井戸は出土点数は少ないが、15世紀代の白磁杯と、丸底型の土師器皿の完形品3点が出土している。第1号小穴群は、遺構自体に段階差があるが、越前焼の甕と丸底型の土師器皿が主要な遺物である。越前焼甕は新旧を感じさせる数個体があり、Ⅲc～Ⅳa期にかけて、実年代としては15世紀後半～16世紀前半頃に属するようである。なお先述の通り、第1号小穴群に先行することが明らかな小穴から直立型の土師器皿が出土している。

これらを整理すれば、丸底型は15世紀代、それもその後半に盛行期があると考えるのが妥当のようである。これを軸にすれば、直立型・屈曲型は15世紀前半かそれ以前、京都系は16世紀前半頃の盛行が推測されよう。なお屈曲型においては器高の高低・屈曲の度合いにヴァリエーションを見い出せるが、おそらく時期的変異を反映していると考えられる。

ところで能登地域の中世土師器皿の編年は、穴水町西川島遺跡群出土資料に立脚した四柳嘉章氏の作業(西川島編年)⁽⁸⁾に負う所が大きい。その論考には本稿でいう屈曲型・丸底型・京都系も取り上げられているが、年代観にややずれがあり、それぞれ14世紀前半、15世紀前半～中頃、15世紀後半とされている。このうち京都系については全く外来の器形であり、遺跡・遺構の性格によっては15世紀後半代に出現していても首肯できるので、前二者の場合に問題を絞ることとする。このずれが生じる原因には様々な見方があると思うが、ここでは以下の点について留意しておきたい。

第一に、西川島編年で典型とされる屈曲型は、体部と底部との境、つまり腰部が強く突出し、かつ口径に対し著しく器高が高い特徴があり(以下A型とする)、当遺跡で主体を占める屈曲型(以下B型とする)とは必ずしも一致するものではない。これは地域性による差異とも考えられるが、西川島遺跡群の包含層資料中にはB型が散見され、当遺跡には少量ながらA型が確認されるから、両者の間に時期差を想定してもおかしくない。

第二に、丸底型は西川島遺跡群では明確にされておらず、編年では当遺跡に近い鹿島町武部出土の備蓄銭関係資料が検討されている。共伴の土師器皿をみると丸底型が一定量存在する他、器高が低く体部の中折れが鈍い屈曲型のヴァリエーションも見いだされる。西川島編年では寧ろこの形態が重視され、A型以来の傾向の最終形態として評価されている。備蓄銭中最新の初鑄年を示すものは宣徳通宝の1433年であり、この年以後に埋納されたことは確実であるため、西川島編年では埋納時期を15世紀前半～中頃に比定している。一方後に備蓄銭の銭種・量比を他地域資料との比較により検討した芝田悟氏の論考⁽⁹⁾では、埋納時期をやや遅らせて15世紀中頃～後半に比定している。年代観を銭貨に依拠するならば従うべき見解であり、当遺跡資料とも矛盾なく理解することができよう。

なお小皿に関しては、西川島遺跡群ではA型と共伴するものは腰が突出するタイプが多く、A型と共通の特徴を持つものとして理解できるが、当遺跡では先述の通り屈曲型の小皿は基本的には見られず、セットとなるものはおそらく直立型である。なぜ当遺跡のこの

時期、中皿と小皿に顕著な形態上の共通性がないのか、今は説明がつかない。なお例外として第1号土器埋納小穴出土資料がある。この遺構は、第2号建物に付随する施設と考えられるもので、屈曲型の土師器皿が41点、ほぼ完形で出土している。ここでは中皿と小皿が同形態で存在しているが、遺構の性格が建物造営に伴う地鎮に関係すると評価されていること、土師器皿の胎土・色調が極めて統一であることを考慮すれば、この祭祀に用いることを前提に一括生産された、特殊な資料として理解するのが妥当だと思われる。

2 近世

本項では16世紀末～17世紀初頭以降生産された陶磁器を取り上げる。但し18世紀後半以後、すなわち近世後半の資料は全体的に少なく、遺構の展開も基本的には認められないため検討から除外し、対象を近世前半の資料に限定しておく。

a. 第50号溝出土陶磁器の概要

当遺跡における近世陶磁器の様相を説明するにあたり、18世紀初頭までの陶磁器が多量に、しかも概ね良好な遺存状況で検出されている第50号溝出土資料を中心に、代表的な種類を提示しておく(第276図)。これらはその盛行期間により、17世紀以前・17世紀前半・17世紀後半・17世紀後半～18世紀前半・18世紀前半の5グループに概ね分類できる。

第一群(17世紀以前)

瀬戸美濃大窯段階の灰釉丸碗・丸皿・天目茶碗、青花碗、朝鮮陶器皿等は、16世紀末以前の生産年代が考えられ、本来中世に属する一群である。これらのうち瀬戸美濃灰釉丸碗・青花碗(底部)は、溝本体の裏込めの性格が想定される南西肩部において、次に述べる肥前陶器胎土目積皿等と共伴している。このことから近世初頭に16世紀代の陶磁器の一部が残存して使用されていることが窺え、これらを第一群とした。但し以後の近世陶磁器の集計には含めていない。

第二群(17世紀前半)

肥前陶器胎土目積碗・皿、越中瀬戸印花文皿・削り出し高台皿、肥前陶器砂目積皿・鉄釉碗、肥前磁器Ⅱ期染付皿がある。このうち肥前胎土目積皿、越中瀬戸印花文皿・削り出し皿の一部は南西肩部より出土しているが、肥前砂目積皿は出土しておらず、このグループが細別できることを示唆している。

肥前陶器胎土目積皿は、小振りで浅く内湾するものと、比較的大振りで体部に段をもつものの二者が一般的である。なお第50号溝では平鉢はなく、調査区全体でも極めて少ない。越中瀬戸印花文皿は削り出し高台皿に先行することが指摘されているが⁽¹⁰⁾、本遺跡では印花文皿自体の出土が少なく、出土状況に明確な相違は認められない。削り出し高台皿は体部が逆ハの字状に開くタイプが主体的で、他にいわゆる向付タイプがある。

肥前砂目積皿は大振りで深い溝縁皿で占められる。なお第50号溝以外でも溝縁皿が多

い。肥前磁器Ⅱ期染付皿は内湾する小皿であり、大橋編年のⅡ－2期の資料であろう⁽¹¹⁾。第50号溝からは出土していないが、遺跡全体では同時期の肥前磁器製品として染付碗・小杯が少量ながら見られる。調理具では、越中瀬戸銹釉播鉢がこの時期の所産であろう。また肥前播鉢では、ロクロ成形で、鉄釉掛けした口縁部の内面に突帯を持つタイプがある。

第三群(17世紀後半)

肥前磁器Ⅲ期染付碗・皿、肥前陶器器手碗がある。第50号溝以外では肥前京焼風陶器碗が知られるが少量である。このグループは全体的に僅少で、第一群に比べると碗が優勢である。肥前磁器Ⅲ期染付碗は一重網目文碗に代表される、やや粗製のタイプが主体を占めている。皿では典型的な長吉谷窯系の製品はほとんど確認できず、初期伊万里(Ⅱ期)の特徴を残したものが少量みられる。

第四群(17世紀後半～18世紀前半)

第三群にやや後行するようであるが、時期的にかなりの重なりを持つと思われる。このグループの皿形態はいわゆる蛇の目釉剥ぎ技法によるもの主体で構成される。肥前磁器青磁皿・染付皿、肥前陶器銅緑釉・半磁胎染付皿、産地不明橙色釉皿等⁽¹²⁾がある。碗形態では半筒形に近い、小振り・薄手の肥前磁器染付が見られる。染付文様には、丁寧な印判が認められるようになる。いわゆるくらわんか手に先行するタイプと考えたい。また肥前陶器刷毛目系平鉢⁽¹³⁾もこの一群に属する。播鉢は肥前産で玉縁状の口縁部のみに鉄釉掛けするものと、産地は不明であるが、折り返し口縁、ロクロによる削り出し高台、薄い銹釉全面掛けといった特徴を有するものがある⁽¹⁴⁾。

第五群(18世紀前半)

第四群に若干遅れて盛行すると思われる一群で、肥前陶器刷毛目碗・陶胎染付碗、京焼系碗・皿、肥前磁器染付Ⅳ期のうちの、いわゆるくらわんか手等で構成される。第50号溝ではわずかに肥前陶器刷毛目碗の小片が出土している程度で、このグループの盛行直前には廃棄行為が行なわれなくなったと考えられる。遺跡全体での量は少なくないが、概ね包含層からの出土である。播鉢では肥前産の全面鉄釉掛け、叩き成形のタイプが出現するようであるが、第50号溝からの出土はない。

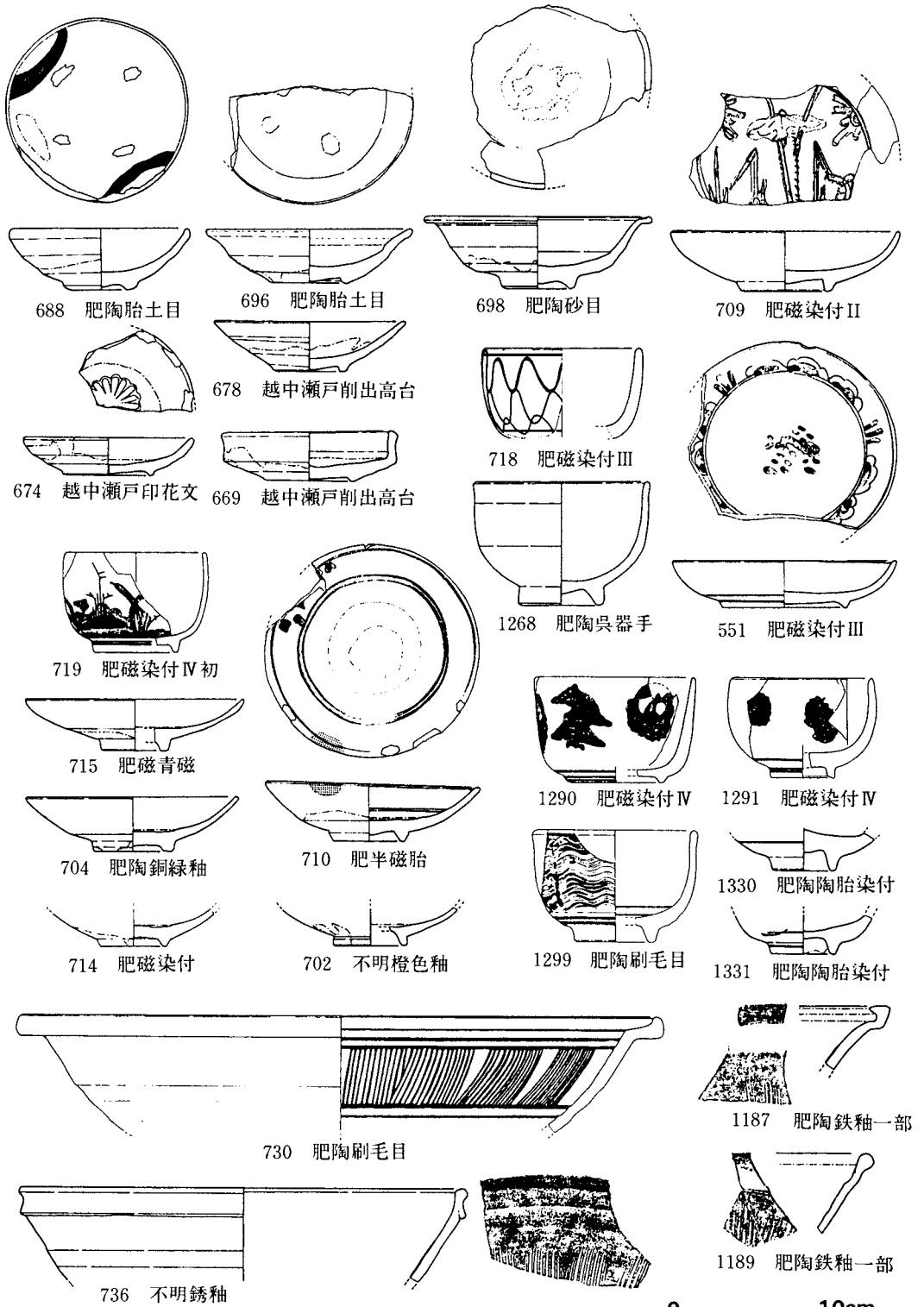
なお貯蔵具に関しては中・小型品は肥前製品を主として一部越中瀬戸製品があり、大型品では越前製品がほぼそのすべてを占める状況にある⁽¹⁵⁾。

b. 陶磁器の数量的傾向

第17表は調査地全体における近世陶磁器の種類別破片数である。これを基に、生産地・器種・時期(供膳具グループ＝群の盛行期間)・地区(屋敷地)のそれぞれごとの数量的傾向を概観する。

生産地及び器種

生産地では肥前陶器・肥前磁器が圧倒的多数を占め、16世紀代までの主体、瀬戸美濃・



第276図 主要近世陶磁器(S=1/4)

0 10cm

第17表 近世陶磁器集計表(1) (接合後総破片数)

産地	器種	碗・杯	皿	鉢・平鉢	香炉類	瓶・壺	播鉢	合計
肥前陶器								
	胎土目	4	37	1	-	-	-	42
	砂目	-	59	-	-	-	-	59
	不明	6	28	-	-	-	-	34
	京焼風 呉器手	9	-	-	-	-	-	9
	銅緑釉	51	-	-	-	-	-	51
	刷毛目系	2	37	-	-	-	-	39
	刷毛目系 陶胎染付	14	-	44	-	1	-	59
	半磁胎染付	34	-	-	2	1	-	37
	半磁胎染付	-	9	-	-	-	-	9
	土灰釉等	-	-	-	-	12	-	12
	鉄釉一部	-	-	-	-	-	29	29
	鉄釉全面	-	-	-	-	-	5	5
越中瀬戸								
		2	65	1	-	6	16	90
瀬戸美濃志野								
		-	2	-	-	-	-	2
京焼系								
		28	-	-	2	1	-	31
産地不明								
	橙色釉	3	9	-	-	-	-	12
	銹釉	-	-	-	-	-	8	8
肥前磁染付								
	Ⅱ期	6	17	-	-	-	-	23
	Ⅲ期	8	9	-	-	-	-	17
	蛇目釉剝		6	-	-	-	-	6
	Ⅳ期	78	31	1	-	7	-	117
青磁								
	蛇目釉剝	-	8	-	-	-	-	8
	他	1	1	-	4	-	-	6
白磁								
	鉄釉	11	5	-	-	1	-	17
	鉄釉	1	-	-	-	-	-	1
	色絵	1	-	-	-	-	-	1
合計		259	323	47	8	29	58	724

肥前陶器不明…目積みが不明なもの

第18表 近世陶磁器集計表(2)(群別)

産地	器種	碗・杯	皿	鉢・平鉢	合計
肥前陶器					
	胎土目Ⅰ期	4	37	1	42
	不明	6	28	-	34
越中瀬戸					
		2	65	1	68
瀬戸美濃志野					
		-	2	-	2
肥前陶器					
	砂目Ⅱ期	-	59	-	59
肥前磁器					
	染付Ⅱ期	6	17	-	23
小計		18	208	2	228
肥前陶器					
	京焼風	9	-	-	9
	呉器手	51	-	-	51
肥前磁器					
	染付Ⅲ期	8	9	1	18
小計		68	9	1	78
肥前陶器					
	刷毛目	-	-	44	44
	銅緑釉	2	37	-	39
	半磁胎染付	-	9	-	9
産地不明					
	橙色釉	3	9	-	12
肥前磁器					
	蛇目釉剝	-	14	-	14
小計		5	69	44	118
肥前陶器					
	刷毛目	14	-	-	14
	陶胎染付	34	-	-	34
京焼系					
		28	-	-	28
肥前磁					
	Ⅳ期	78	31	1	110
小計		154	31	1	186
合計		245	317	48	610

供膳具のみ(白磁等除く)

越前は激減する。越前は中近世を合わせて集計したため表に現われないが皆無ではない。だが少数なのは間違いなく、特に播鉢の分野では肥前に大きく引き離されている。また瀬戸美濃は表に示す志野の他、大窯末期の灰釉丸皿が存在するようであるがやはりごく少ない。これらの傾向は金沢城下町の一般的状況と同じである。やや異なるのは越中瀬戸が一定量みられることであるが、これは先述したようにほぼ17世紀前半に限定されるようである。

器種別には、中世に比べて碗皿を主体とした供膳具が遥かに多く、調理具たる播鉢の比率は相対的に低下している。大まかにみて、15世紀後半～16世紀末に至る約150年間の播鉢の総破片数と、17世紀～18世紀前半までの同じく約150年間の播鉢の総破片数は、あまり変わらないように思われる。つまり播鉢の数量は据え置きであり、供膳具が一方的に激

増したとみるのが妥当であろう。また香炉等調度具の比率は、中世と同じく低く、水滴などの文房具もみられない。概して器種組成自体単純といえる。土師器皿は、17世紀前半まで京都系の系譜を引くものが少量残存する可能性はあるが、基本的には組成から抜け落ちている。供膳具のうち碗と皿との比率は、近世前半を通して見ると概ね等しいが、実際は時期的な変動が極めて大きいと思われる。この点については後述する。この他器種に準じる項目として法量について触れておくと、当遺跡の場合、磁器には大皿・大鉢の類はほとんど見当たらない。もっとも陶器では肥前陶器刷毛目系平鉢があって、大型供膳具をほぼ独占している状況にある。

時期

時期ごとの量的傾向については、理想的には一括資料により共伴関係を確認し、ほぼ均等な年代区分を設定するべきであろうが、条件を満たすような資料には恵まれないため、先に示した陶磁器各群を単位として把握することとする(第18表)。但し集計では供膳具に限定し、かつ時期判別の困難な白磁等は除いてある。また肥前磁器Ⅳ期については、集計の時点では細別できなかったため、全て第五群に含めることにしたが、Ⅳ期でも初期のものは本来第四群に属すべきことは先述のとおりである(なお第一群は生産年代は中世に遡り、かつ出土状況が明瞭な場合のみ判別できる性質のグループなので除外しておく)。さて群別の量比は、第二群が最も多く230点近くに達する。次いで第五群が190点未満、第四群は120点未満となるが、両者の差はもう少し縮まると思われる。これらに対し第三群は80点に満たない。

このように見ると第三群がいかに貧弱で、延いては17世紀後半に陶磁器購入量の一時的な落ち込みがあるような印象を受ける。但し、第四群の盛行時期について、17世紀後半により比重を置くことが許されるなら、少なくとも17世紀後半代と18世紀前半代との量差は余程均等に近付くこととなろう。50溝からの出土頻度に示される、第四群と第五群との断絶性を考えると、上記の想定も不自然とは言えない。第三群の少なさは、17世紀後半代に「限定」できる資料が少ないためといっても過言ではない(例えば長吉谷窯製品を典型とする肥前磁器Ⅲ期の製品は、意外にも先行する初期伊万里すなわちⅡ期の製品よりも少ない)。

しかし全体のバランスを考慮すれば、第二群、即ち17世紀前半代に属する資料が一頭抜き出て多いことは明白であり、先行する16世紀代の資料と比べても、この段階で急激な陶磁器供膳具の増加があったことが理解される。

次に、碗皿構成比の時期的変動について説明する。第二群においては、肥前陶器・越中瀬戸とも皿が断然多く、碗を1とすればその17倍に達する。また越中瀬戸の碗は第三群に属する可能性も否定できないので、この傾向はより強まることとなろう。16世紀代の状況以上に、陶磁器碗の数量的地位の低下は深刻である。第三群では、肥前陶器呉器手碗が安定した数量を示すようになり、肥前磁器においても一重網目文に代表される碗の比率が高

まる。しかしながら第四群を構成する銅緑釉・半磁胎染付等の皿の多さを無視できないとすれば、18世紀初め頃までは、全体としてなお皿の比率が高いと考えるべきであろう。第五群(18世紀前半)では、肥前磁器のコンニャク印判、肥前陶器陶胎染付、京・信楽系陶器の碗が多く、碗皿の比率は逆転するようである。

地 区

当遺跡では、掘立柱建物・井戸など遺構の配置から、6～7区画程の屋敷地の存在が想定できるものの、境界施設の不明瞭さも与って、領域の限定を行なうことは至難である。一方近世陶磁器が集中して検出されたのは、平面分布からみると南西区(A～D-3～6区)、南東区(J～M-3～6区)、北東区(P～Q-7～10区)の三地区であり、それぞれパッチ状のまとまりを示す。地区間に空白域があるのは、その部分に近代以後も宅地が存続していた等の理由で、包含層が十分に遺存していなかったせいでもあるが、一応この三地区の範囲を屋敷地に準じる単位と考えてみたい。

地区間では数量にばらつきがあり、その差は大きいですが、ここではこれを捨象し、地区ごとの陶磁器種類別量比を比較できるように百分比で示してみた(第19表・第277図)。これによると、遺跡全体における陶磁器群の数量構成が、各地区にそのまま貫徹するわけではないことが理解される。

陶磁器を群としてまとめた場合、南東区と北東区を両極とし、南西区をその中間的様相として評価することができそうである。まず南東区では第二群が全体の約半数を占め、第三群・第五群共に劣性である。南西区では第二群がやはり高い比率を占めるが、南東区ほどではなく、逆にその分第三群・第五群が比率を高めている。北東区では陶磁器群の各比率がほぼ均等に近くなっている。これらの様相差は、結局のところ、建物の新規造営・存続時期のずれと対応するものと考えたい。

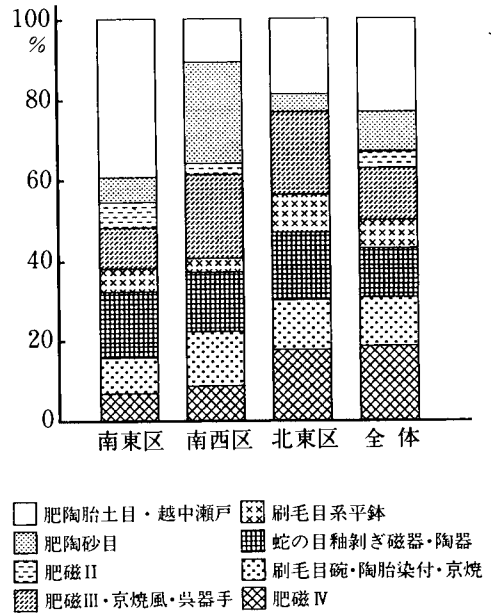
いま少し詳細に検討すれば、南東区と南西区は共に第二群の陶磁器が多いが、群内において主体となる陶磁器の種類は、前者では肥前陶器胎土目積皿・越中瀬戸皿、後者では肥前陶器砂目積皿であって、鮮やかな対照を示す⁽¹⁶⁾。これに関連して、出土状況の点から興味深い事実が指摘できる。南東区では、第8号建物の柱穴から青花皿・瀬戸美濃志野菊皿・肥前陶器鉄絵向付(胎土目積段階)が出土しているのに対し、南西区では、第4号建物の柱穴(P85049)など建物造営に関わる遺構には肥前陶器砂目積皿が伴う。第8号建物付近には、これにはほぼ重複する形で15世紀代の第17号・19号建物が存在するが、第8号建物はそれらの軸線を踏襲していない点が注目される。以上から、建物の新規造営が、南東区では17世紀第一四半期頃、南西区ではやや遅れて第二四半期頃に行なわれており、建物造営と時期を同じくする陶磁器の種類こそが、その地区において量的に優勢となっていることが了解される。

この関係を偶然の一致ではないものとして重視するなら、先に言及した陶磁器第二群の多さの意味についても展望が開けよう。例えば建物の新規造営に伴い、陶磁器を含む什器

第19表 近世陶磁器集計表(3) (単位：%)

陶磁器種類 \ 地区	南東地区	南西地区	北東地区	遺跡全体
肥陶胎土目・越中瀬戸※	39.2	11.0	18.8	23.6
肥陶砂目	6.4	24.8	4.6	9.7
肥磁Ⅱ	6.4	2.7	0	3.8
肥磁Ⅲ・京焼風・呉器手	10.3	21.1	20.3	12.9
刷毛目系平鉢	5.8	3.6	9.4	7.2
蛇の目釉剥ぎ磁器・陶器	16.7	14.7	17.2	12.2
刷毛目碗・陶胎染付・京焼	8.8	13.8	12.5	12.5
肥磁Ⅳ	6.4	8.3	17.2	18.1
(母数：点)	204	109	64	608

※肥前陶器のうち目積不明のものを含む



第277図 近世陶磁器供膳具地区別構成比

類が定量購入されたとの想定も、あながち不自然ではない。それはともかく、陶磁器第二群の群内組成はどの地区も同じというわけではなく、その量的優位について、生産・流通側の事情からのみ解釈するのは不適當であり、屋敷地レベルでの出土状況まで分解すれば、購入側固有の事情によっても左右されることが考えられよう。

以上は地区別時期組成の比較であったが、器種にみる量的差異は認められるだろうか。この場合前述のように、器種自体も通時的に組成が安定しているわけではないので、時期差を無視した比較はあまり意味がない。そこで第四群に属する小型の蛇の目釉剥ぎ皿類と、肥前陶器刷毛目系平鉢との関係に、比較対象を絞り込んでみると、南西地区において、やや平鉢の比率が低いように思われるが、両者の関係は、地区間で大きな差異はないものと見るのが穩当であろう。両者の関係に留意した意図は、言うまでもなく大型供膳具の所有に富裕度が反映することを想定したものであるが、この結果からは、屋敷地間の経済的格差については、大きな差を見いだせないということになる。

c. 金沢城下町遺跡との比較

ここでは近年盛んに調査されている金沢城下町遺跡との比較により、当遺跡の近世陶磁器の特徴について検討を加える。

当遺跡では確かに城下町で見られるものがしばしば欠けている。前述の通り、土師器皿は確実に近世に属するといえるものは見当らない。磁器の大型供膳具は極めて少なく、磁

器色絵は18世紀代と考えられる破片が一点確認できるのみである。また肥前磁器Ⅲ期の製品では、長吉谷窯などに見られる、海外輸出にも供される精緻なタイプはほとんど見ることができない。金沢城下町においても肥前磁器Ⅲ期の皿類は多いとはいえないが、下級の武家屋敷地においても散見されるものである。

しかしこの一方、肥前陶器・越中瀬戸陶器はその初期から豊富に消費されている。越中瀬戸については、金沢城下町ではまとまって出土することがなく、能登においても当遺跡の出土量は抜きんでていると言える。肥前磁器Ⅱ期(初期伊万里)の製品も、碗皿類等小型供膳具に限ってはさほど少量という印象は持てない。17世紀後半以後供膳具の主体となるのは、皿類では蛇の目釉剥ぎ技法による一群、碗では肥前陶器呉器手碗であり、肥前磁器Ⅳ期初頭の染付碗皿類がこれに続く。大型供膳具として肥前刷毛目系平鉢が加わるのも見逃せない。特に当遺跡における蛇の目釉剥ぎ皿類は、種類(意匠)的には金沢城下町で知られるもののほぼ全てを網羅していることを強調しておきたい。肥前半磁胎染付などは、城下の各遺跡においても決して多くはないものである。この点よりみれば、粗製の陶磁器供膳具であれば、近世前半の段階で農村部においてかなり行き渡っており、城下町に対し、さほどの遜色はなかったと判断できる。蛇の目釉剥ぎ皿類に代表される、粗製の陶磁器供膳具は、勿論城下町でも多く見られ、その陶磁器様相の基盤を為していると思われる。その意味で、農村部の陶磁器様相を貧弱とみなすのではなく、むしろ根幹的・実質的な側面を評価すべきであろう。

なお同じ能登国に属する石動山大宮坊跡の出土陶磁器は、土師器皿の基本的欠如といった共通面も指摘できるが、磁器大型供膳具の存在、肥前京焼風陶器の充実など、当遺跡にみられない要素もみられ、こちらの方がより付加的要素を備えている⁽¹⁷⁾。

以上、中近世陶磁器類の様相について検討してきたが、中世・近世を分別して説明したため、移行期や両時期を通観した際の問題に、十分に言及できたとはいえない。特に16世紀～17世紀にかけて顕著になる、供膳具の量的増加と生産地組成の変換に対し、器種組成の変化がどのような関係にあるのか、なお理解が至らなかった点を痛感している。陶磁器供膳具のみならず、漆器製品等を併せた供膳具全体の機能分担について、近世後半まで視野に入れた通時的な見通しを得ることが、今後の課題の一つである。

註

(1) 珠洲焼の年代観は以下の文献による。

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

(2) 越前焼の分類は以下の文献による。

福井県立朝倉氏遺跡資料館 1983「第36次調査報告」『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』

小野正敏 1989「戦国から近世へ、越前陶の生産の実態－平等岳の谷窯跡群の調査より－」

第9節 谷内ブンガヤチ遺跡出土の中近世陶磁器類について

『北陸における越前陶の諸問題』 北陸中世土器研究会

- (3) 吉岡康暢 1989「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集
- (4) 垣内光次郎他 1984『普正寺遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- (5) 善端直他 1992『七尾城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書』七尾市教育委員会
- (6) 天目碗の機能について、出土傾向との関わりにおいて触れている文献として以下のものがある。
- 藤澤良祐 1993『瀬戸市史 陶磁史篇四 瀬戸大窯の時代』
- (7) 貞末堯司他 1990「阿弥陀藪遺跡の発掘－1990年－」『金沢大学日本海域研究所報告』第23号
- (8) 四柳嘉章 1987「中世土師器の編年」『西川島－能登における中世村落の発掘調査』石川県穴水町教育委員会
- (9) 芝田 悟 1990「能登鹿島町武部の出土銭貨に関する予察」『石川考古学研究会会誌』第33号
- (10) 宮田進一 1988「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号 富山考古学会
- (11) 肥前陶磁器の年代観については以下の文献を主として参考にした。
- 大橋康二 1988『有田町史・古窯編』
- 1989『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- (12) 半磁胎染付皿として記載したものは、淡灰色の緻密な胎土で、緑灰色がかった釉を掛ける染付製品を指している。九州陶磁文化館1986文献の44頁、No.705の類品と判断して肥前産とした。また橙色釉としたものも肥前産の可能性が高いと思われる。
- 九州陶磁文化館 1986『国内出土の肥前陶磁』
- (13) いわゆる刷毛目の他、三島手・二彩手等、白化粧土を効果的に用いた装飾を有する肥前陶器平鉢について、本稿ではこのように仮称する。
- (14) 金沢城下町遺跡でも定量出土している。なお北部九州出土の近世播鉢を扱った論考で類似の製品が取り上げられており、執筆者の佐藤浩司氏によると、山口県阿武郡須佐町に所在する須佐唐津窯の製品となっている。氏の説明による限り、北陸で出土しているものと特徴が似通っており、近く確認作業を行なう予定である。
- 佐藤浩司 1993「近世播鉢考－北部九州における播鉢の生産と流通(1)－」『法哈噠』第2号 博多研究会
- (15) 以上に挙げた陶磁器供膳具のうち、第二群の肥前磁器Ⅱ・Ⅲ期染付皿・小杯には同種の文様を持つ個体が数組確認できる。Ⅱ・Ⅲ期の染付皿全体については、少なくとも14個体確認できるが、このうち互いに同意匠の文様を共有する個体は7個体に及ぶ。他にも陶磁器の各種類において数個体ずつセットになるとされる例があり、特に皿の場合、数枚以上を組として購入することが多かったようである。
- (16) 肥前陶器のうち目積み不明の製品は胎土目積みに加えて集計した。当遺跡の砂目積皿の多くが溝縁口縁を持つことに対し、目積み不明の口縁はそうでないことに加え、胎土目積みが多い地区では、目積み不明も多いことから、地区ごとの特徴をより明示するため以上の措置を行なった。全てが胎土目積みに含まれるとは考えがたいが、大過ないものと判断している。
- (17) 滝川重徳 1995「V－第1節 近世陶磁器」『史跡石動山環境整備事業報告書Ⅱ』石川県鹿島町教育委員会

第8章 考察

本章は、谷内・杉谷遺跡群の弥生時代後半期の遺構と遺物のあり様を、地域のなかに位置づけ評価したいという意図から、「能登弥生社会論によせて」と題した考察のために設けたものである。現地着手から報告書刊行まで、調査全般に係わってきた唯一の担当として、それは積年の最低限の目標であったが、力及ばず果たすことができなかった。

以下は、検討の出発点として辛うじて行き着いた土器分類の骨格部分(第20～35表・第278～290図)と、本文執筆にあたって使用してきた土器細分編年の素案をそれら分類に整合させるべく取りまとめたもの(第291～293図)である。紙幅の関係から説明を付与することができず不体裁の誹りは免れないが、本書理解の一助になればと掲載する。

対象地域は、本遺跡群が所在する能登南部(東西約8、南北約40km)、対象時期は弥生時代後期後半から古墳時代前半期である。具体的には、七尾市、鹿島郡鹿島町・鹿西町、羽咋市、羽咋郡志雄町・押水町および河北郡高松町大海川流域の2市5町計27の遺跡、実年代では2世紀の始めから4世紀(本書で報告した杉谷チャノバタケ遺跡A地区の理解と深く係わる7期と8期(後述)の界線は、概ね190年頃と考えている)である。

分類では、機能性と系統性という二つの基準を設けた。前者(器種分類)に係わる属性として寸法(LL～SS、細別として1～s)と大まかな形態的な特徴(A～E、一部長胴・球胴等大別あり)、後者(器形分類)に係わる属性として細部の形態的・技(手)法的な特徴(a～h、細別としてアラビア数字1～、さらに小文字のローマ数字i～)を想定した。究極の単位は形態等変化を同じくするもの(形式)であるが、極一部を除いて細分の余地がある。なお従来の器種は、個々の器種をまとめるものとして器類と呼称した。これらは概ね、その意図するところは別として加納俊介の提案に沿ったものである。

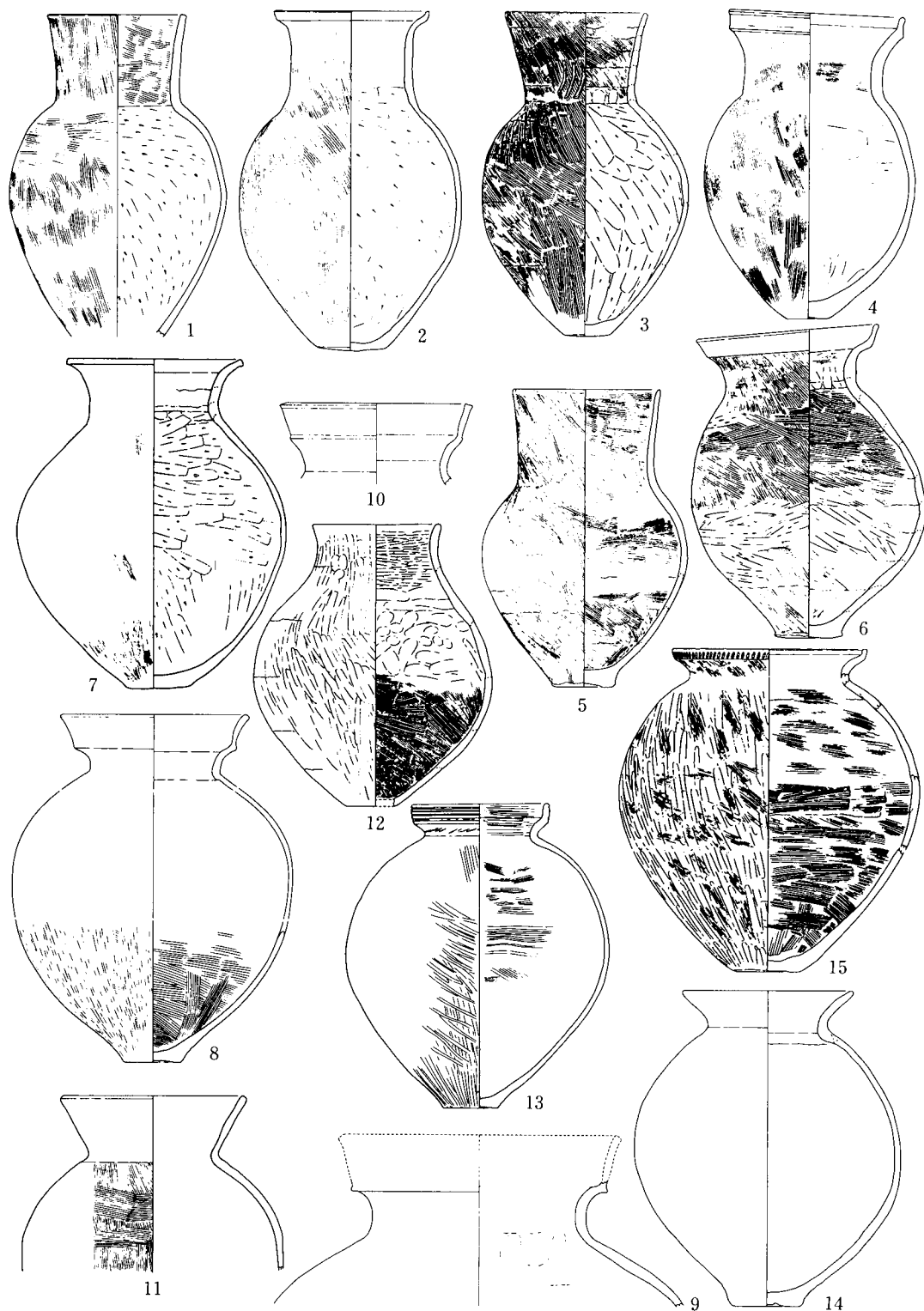
編年では、当該時期(7～10期、1～6期は弥生時代前期～後期前半)を14小期に細分した。7・8期がそれぞれ北加賀の法仏・月影式、9・10期が田嶋明人による南加賀漆町編年の5群から10群土器に対応し、祭式土器の変化を根拠に両期間に時期中最大の画期を考えた。両者は当初に出現した土器に(も)みられる新たな祭式の消長という点で共通している。なお、田嶋明人が提唱した「能登形甕」は、狭義には甕b ii類(b 1 ii類は七尾市・鹿島郡、b 2 ii類は羽咋市・羽咋郡を中心とする)である。

谷内・杉谷遺跡群がまだ影も形もなかった1985年9月17日、確認のため一人現地に立ってから流れた足かけ10年の歳月を振り返ると、それなりの感慨がないではないが、やはり日暮れて道遠し、総括(次章)に辿り着くことができず愕然とする。その責めは後日必ず果たすこととし、なお現時点で本調査の成果に特筆すべきものがあるとするれば、それらは宮下栄仁・田畑 弘の両氏をはじめとしたこの間の多くの協力者に帰すべきもの、とりわけ550日にわたって苦楽をともにしていただいた山本利雄氏以下総勢46名、延べ10,278人の現地調査作業員の方々に深く深く感謝する。

第20表 特大型・大型長胴壺類

(第278図 1～15)

胴高／胴径：0.89～1.19 口径：11～24cm 胴径：17～35cm 器高：25～38cm			口径cm No. 口径cm 器高cm	LL (特大型)	L (大 型)	
					l (大)	s (小)
A ● 長頸・直口大型長胴壺 口径：11～16 胴径：17～25 器高：26～33	a 胴部内面へラ削り、外底の立ちあがり内彎する(平底)	1 口縁端部が素縁	—————	—————	12～14 1 20～22 31～32	11～16 3 18～20 27～30
		2 口縁端部が有段状	—————	—————	14～16 2 20～25 31～33	13～16 4 17～23 27～30
	b 胴部内面はハケ・ナデ調整、外底の立ちあがり外反する(突出平底)	1 口縁端部が素縁	—————	12～14 5 17～20 26～29	—————	—————
		2 口縁端部が有段状	—————	12～16 6 18～21 26～30	—————	—————
B ● 長頸・広口特大・大型長胴壺 口径：13～24 胴径：21～35 器高：29～38	c 直口・外反口縁		—————	16～17 7 22～25 29～32	—————	—————
	d 有段口縁		—————	13～24 8 21～35 31～38	—————	—————
	e 複合口縁		9 ——— ————— —————	13～17 10 ——— —————	—————	—————
	f 直口・外傾口縁		—————	16 11 24 —————	—————	—————
C ● 短頸・広口大型長胴壺 口径：11～18 胴径：21～27 器高：25～30	c 直口・外反口縁		—————	12 12 22 26	—————	—————
	d 有段口縁		—————	11～18 13 21～24 28	—————	—————
	f 直口・外傾口縁		—————	11～16 14 21～25 25～29	—————	—————
	g 受口状口縁		—————	17 15 27 30	—————	—————



第278図 特大型・大型長胴壺類(S=1/6)

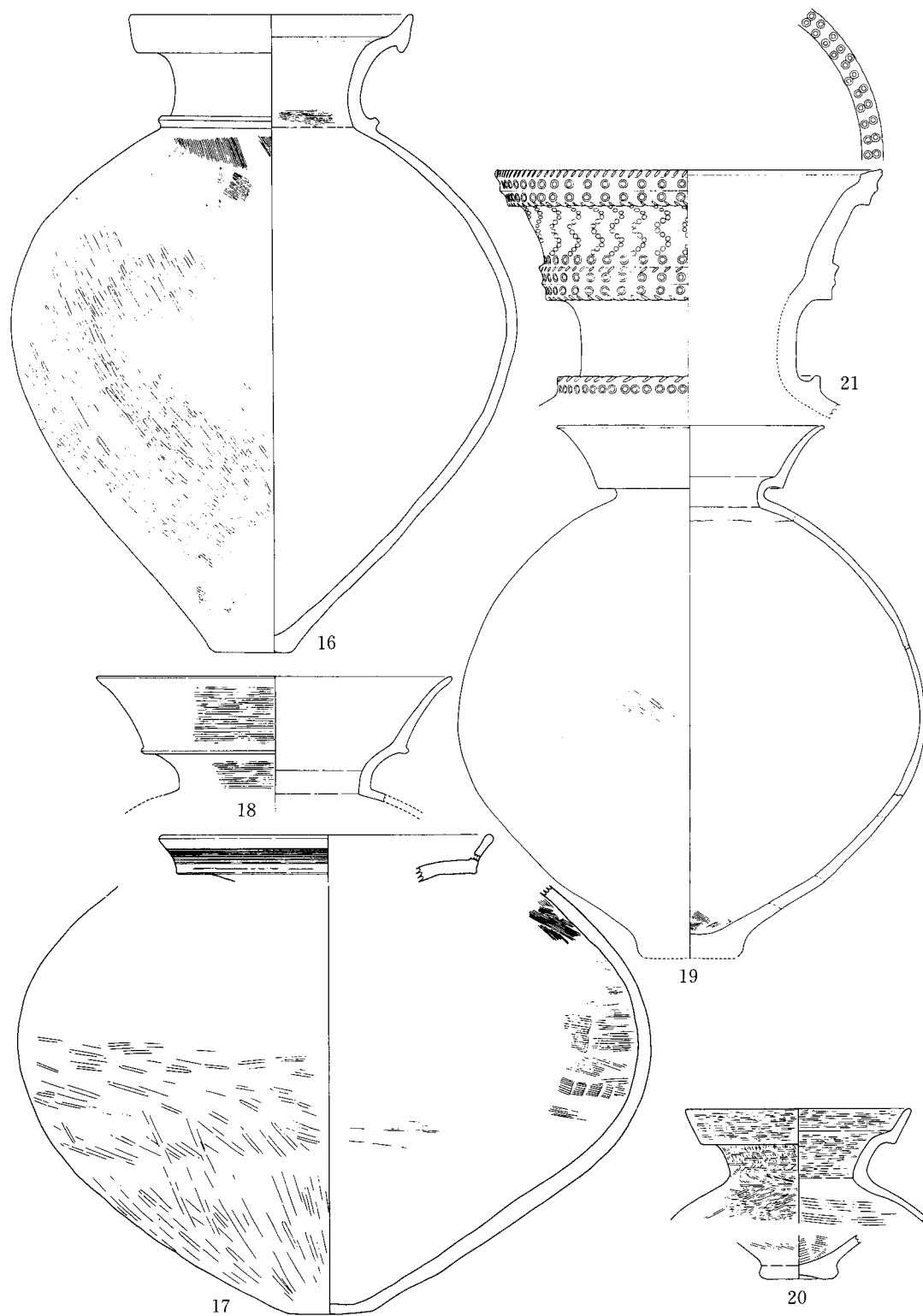
第21表 特大型球胴壺類

(第279図16~21)

	口径：15~35cm 胴径：39~59cm 器高：43~49cm	口径 cm No 胴径 cm 器高 cm	LL (特大型)		
			l (大)	s (小)	
C .. 広 口 大 型 球 胴 壺	a 外傾・外反口縁	16 $\frac{26}{\text{---}} \sim \frac{30}{\text{---}}$	---	---	
	b 有段口縁	17 $\frac{30}{59}$	---	---	
	d 二重口縁	1 短頸・外反口縁	---	18 $\frac{27}{\text{---}} \sim \frac{33}{\text{---}}$	19 $\frac{24}{43} \sim \frac{43}{49}$
		2 長頸・外反・外傾口縁	---	---	20 $\frac{15}{39} \sim \frac{20}{43}$
	e 綾杉文施紋二重口縁	21 $\frac{35}{\text{---}}$	---	---	

第278~285図(番号は第20~27表に同じ)掲載壺・甕類(1~154)出土遺跡一覧

4・92・134	: 高松町	大海西山遺跡	高松町教委	1992
13・16・17・28・32・33・34・45・48・				
65・67・72・73・79・84・91・131	: 高松町	中沼C遺跡	高松町教委	1987
1・8・20・39・52・64・66・71・74・75・76・78・				
95・97・99・108・120・121・122・124・126	: 押水町	宿東山遺跡	県埋文センター	1987
18・24・40・44	: 押水町	宿東山古墳群	同 上	同上
49・107・117・136・146・149	: 押水町	宿向山遺跡	県埋文センター	1987
25・31・42・81・109・113・116・118・129・				
133・135・143	: 押水町	冬野遺跡	県埋文センター	1991
9・10・63・141・144・150・151	: 押水町	免田一本松遺跡	同 上	同上
21	: 押水町	冬野小塚古墳群	同 上	同上
11・29・83・101・111・112・123・153・154	: 押水町	竹生野遺跡	県埋文センター	1988
30・106	: 押水町	上田出西山遺跡	押水町教委	1980
55	: 羽咋市	吉崎・次場遺跡	県埋文センター	1987
22・23・37・47・51・60・68・70・77・				
94・114・140・147・148	: 羽咋市	吉崎・次場遺跡	県埋文センター	1988
59・62・139	: 羽咋市	吉崎・次場遺跡	羽咋市教委	1994
80・115	: 羽咋市	太田遺跡	羽咋市教委	1991
96・119・138	: 羽咋市	寺家遺跡	羽咋市教委	1993
145・152	: 志雄町	二口かみあれた遺跡	志雄町教委	1995
3・6・7・12・27・35・36・61・89・				
98・110・127・137	: 鹿西町	谷内ブンガヤチ遺跡	本書	
15・38	: 鹿西町	杉谷チャノバタケ遺跡	本書	
57・100	: 鹿西町	能登部小学校遺跡	鹿西町教委	1992
43	: 鹿島町	徳前C遺跡	県教委	1978
41・46・54・56・58・86・87・88・105・				
142	: 鹿島町	徳前C遺跡	県埋文センター	1986
2・5・85・93・102・130	: 鹿島町	徳前C遺跡	県埋文センター	1993
14・19	: 七尾市	藤橋遺跡	県埋文センター	1992
26	: 七尾市	矢田遺跡	七尾市教委	1986
50・104	: 七尾市	奥原遺跡	県埋文センター	1982
53・69・82・90・103・128・132	: 七尾市	国分高井山遺跡	七尾市教委	1984
125	: 七尾市	下町茶畑遺跡	七尾市教委	1993

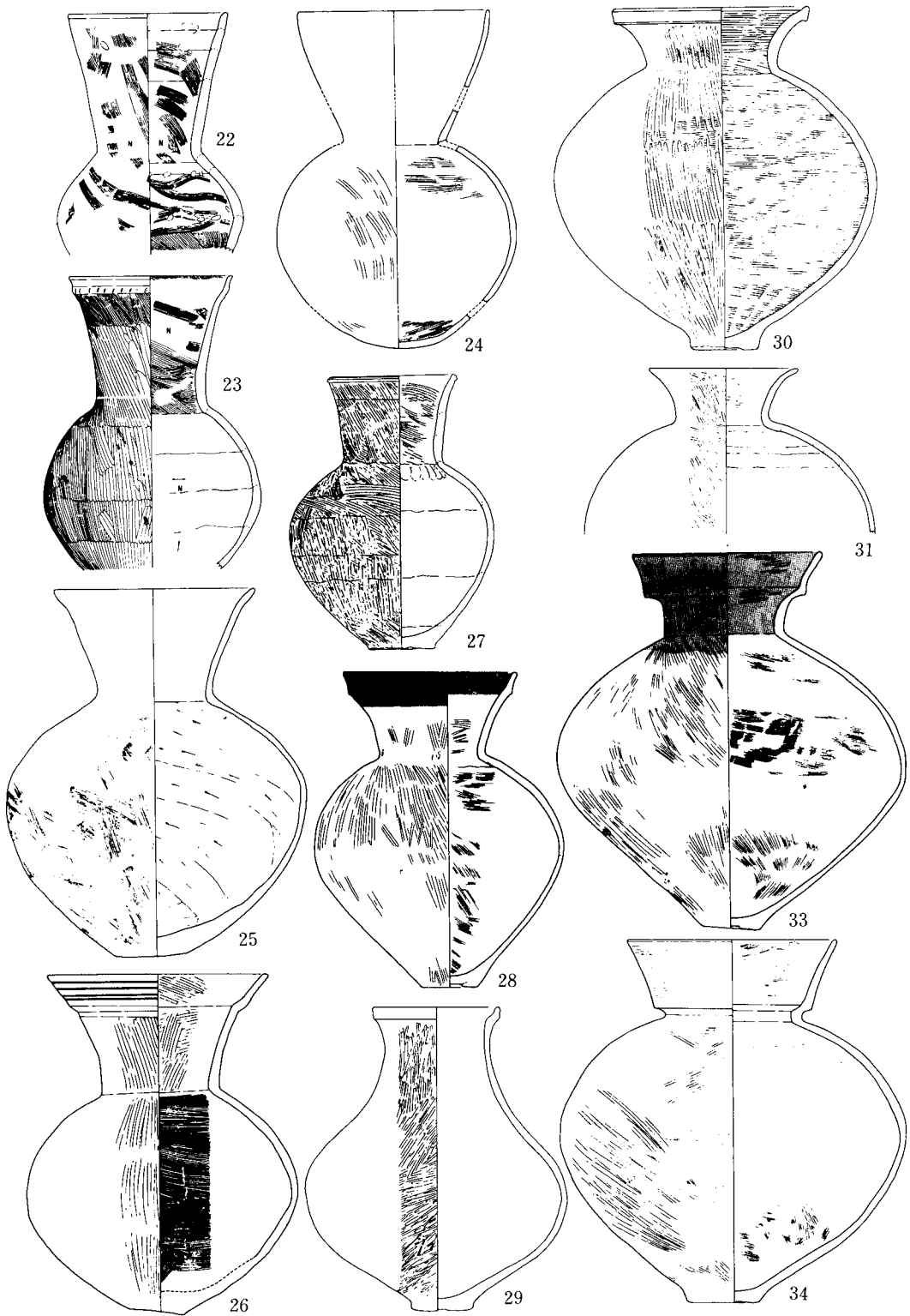


第279図 特大型球胴壺類(S=1/6)

第22表 大型球胴壺類

(第280・281図22~44)

口径11~23cm 胴径14~33cm 器高18~38cm		No.	口径cm		L (大型)	
			口径cm	器高cm	l (大)	s (小)
A : 長頸・直口大型球胴壺 口頸高/胴高 : 0.63 ~ 0.75	c 平底 (口縁部は直線的にのびる)	1 口縁端部が素縁	14 22 17~18 25	_____	_____	
		2 口縁端部が有段状	15~17 23 20~24 30~36	_____	_____	
口径14~17 胴径18~24 器高25~36	d 丸底 (口縁部が内彎する)		17 24 22 30	_____	_____	
B : 短頸・直口大型球胴壺 口頸高/胴高 : 0.18 ~ 0.56	a 外傾・外反口縁、頸部-肩部境界明瞭	1 口縁端部が素縁	_____	19 25 28 34	11~14 27 19~20 25~29	
		2 口縁端部が有段状	_____	17~20 26 25~26 30~33	12~16 28 20~25 26~30	
口径11~20 胴径19~28 器高25~34	f 無果花形胴、頸部-肩部境界不明瞭		11 29 24 28	_____	_____	
C : 広口大型球胴壺	a 外傾・外反口縁	i 厚手	_____	30 i 12~18 25~32	11~13 32 22~24	
		ii 薄手		31 ii 27~33	22~25	
	b 有段口縁	1 長頸・外傾口縁	_____	13~20 33 27~33 33~38	17 35 24~27 24~29	
		2 短頸・外反口縁	_____	13~19 34 28~31 33~34	16~18 36 20~28 24~27	
		3 短頸・外傾口縁	13~14 37 22~27 25~29	_____	_____	
	4 短頸・短口口縁	i 無文	38 i 13~17 22~23	_____	_____	
		ii 擬凹線文	39 ii 21~22	_____	_____	
	d 二重口縁	1 外反・短頸	_____	18~23 40 24~27 26~27	11~12 42 14~19 21	
2 直立・長頸		_____	20~22 41 _____	13~16 43 18		
口径11~23 胴径14~33 器高18~38	e パレススタイル壺		15~21 44 27~29 28~30	_____	_____	

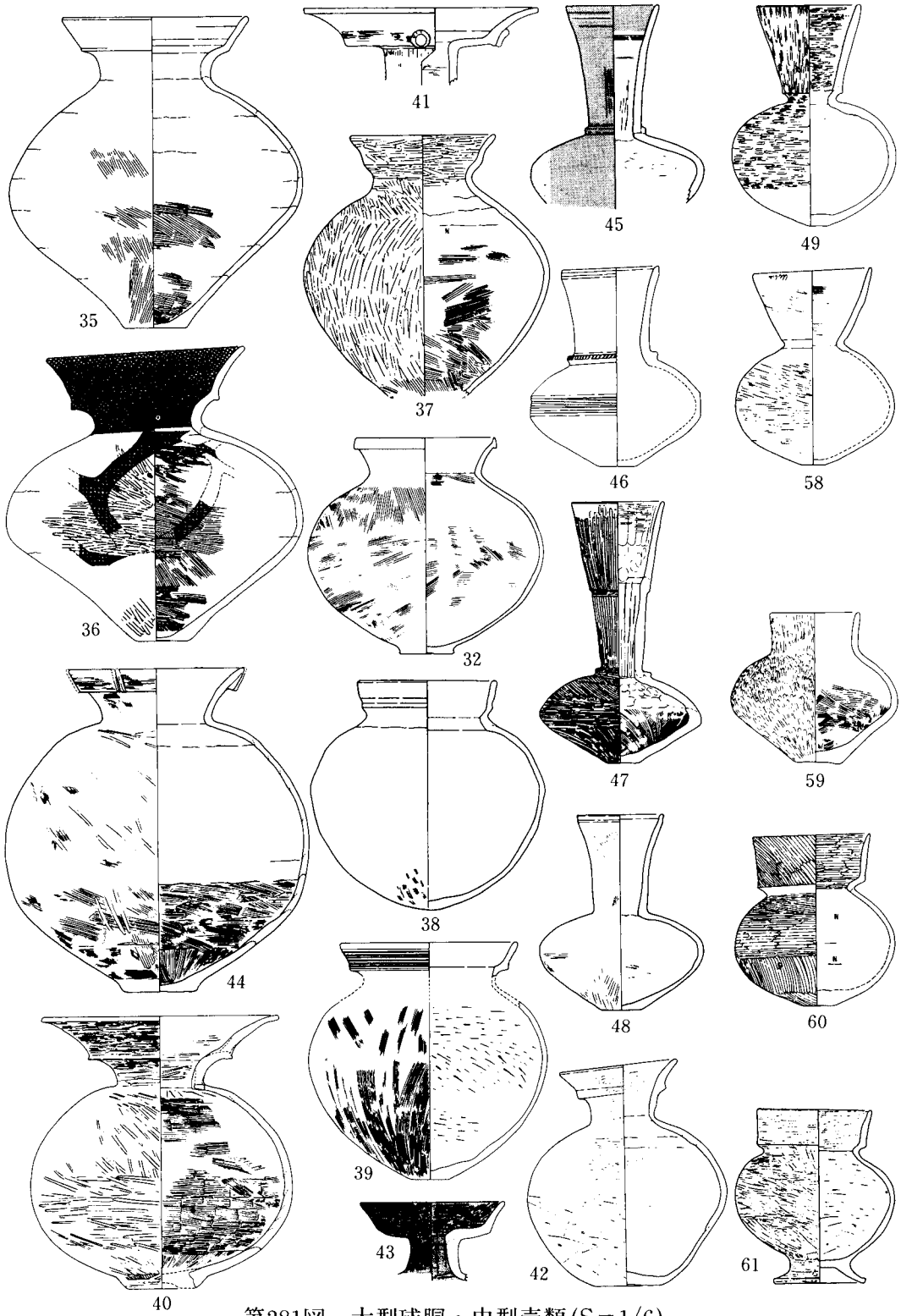


第280图 大型球胴壺類(S=1/6)

第23表 中型壺類

(第281・282図45~68)

口径 6~18cm 胴径12~21cm 器高13~25cm				M (中 型)				
				No.	口径 cm	胴径 cm	器高 cm	
A : 長口頸・直口細頸壺	a 扁平球胴・無台、頸部と肩部の境界が明瞭	1 頸部突帯付	i 口縁無段・長口	45	9	16	—	
			ii 口縁無段・短口	46	9	16	19	
			iii 口縁有段・長口	47	6~9	15~16	22~25	
		2 頸部無突帯	ii 頸部無段・短口	48	7~9	15	18	
			iv 頸部有段・短口	49	8~9	13~15	16~21	
	b 無花果形胴・台付、頸部-肩部境界不明瞭 口径 6~9 胴径14~21 器高 23	1 頸部無稜	i 胴部突帯付内彎	50	7~8	16~17	—	
			ii 胴部突帯付外反	51	7~8	15~18	—	
			iii 胴部無突帯屈曲	52	6~9	15~21	—	
		2 頸部有稜 (胴部突帯付)	53	9	14	23		
	c 口頸部有段・台付、頸部-肩部境界明瞭 口径 6~10 胴径12~17 器高19~20	1 扁平球胴	i 胴部無突帯短口	54	6~10	12~17	19	
			ii 胴部突帯付短口	55	—	16	—	
		2 無花果形胴	iii 胴部無突帯長口	56	9	13	—	
			iv 胴部突帯付長口	57	8	13	20	
口径 6~12 胴径12~21 器高16~25	d 頸部無段、無台		58	8~12	13~15	18		
B : 短頸・直口広口壺 口径 8~12 胴径12~16 器高14~19	e 素縁			59	8~10	14~16	14~15	
	f 有段口縁	1 無台			60	11	15	16
		2 有台			61	8~11	12~15	17~19
C : 短頸・外傾口縁 広口壺 口径10~18 胴径13~19 器高13~18	e 素縁			62	13	19	16	
	f 有段口縁	1 短口	(算盤玉形胴) i 無文 (球 胴)	63	10~14	13~18	13~15	
			ii 擬凹線文	64	14~18	16~18	15	
		2 長口 (外反口縁)	i 無文	66	12~15	—	—	
			ii 擬凹線文	67	15~18	18	17	
	g 内彎口縁			68	11~12	14~15	18	



第281図 大型球胴・中型壺類(S=1/6)

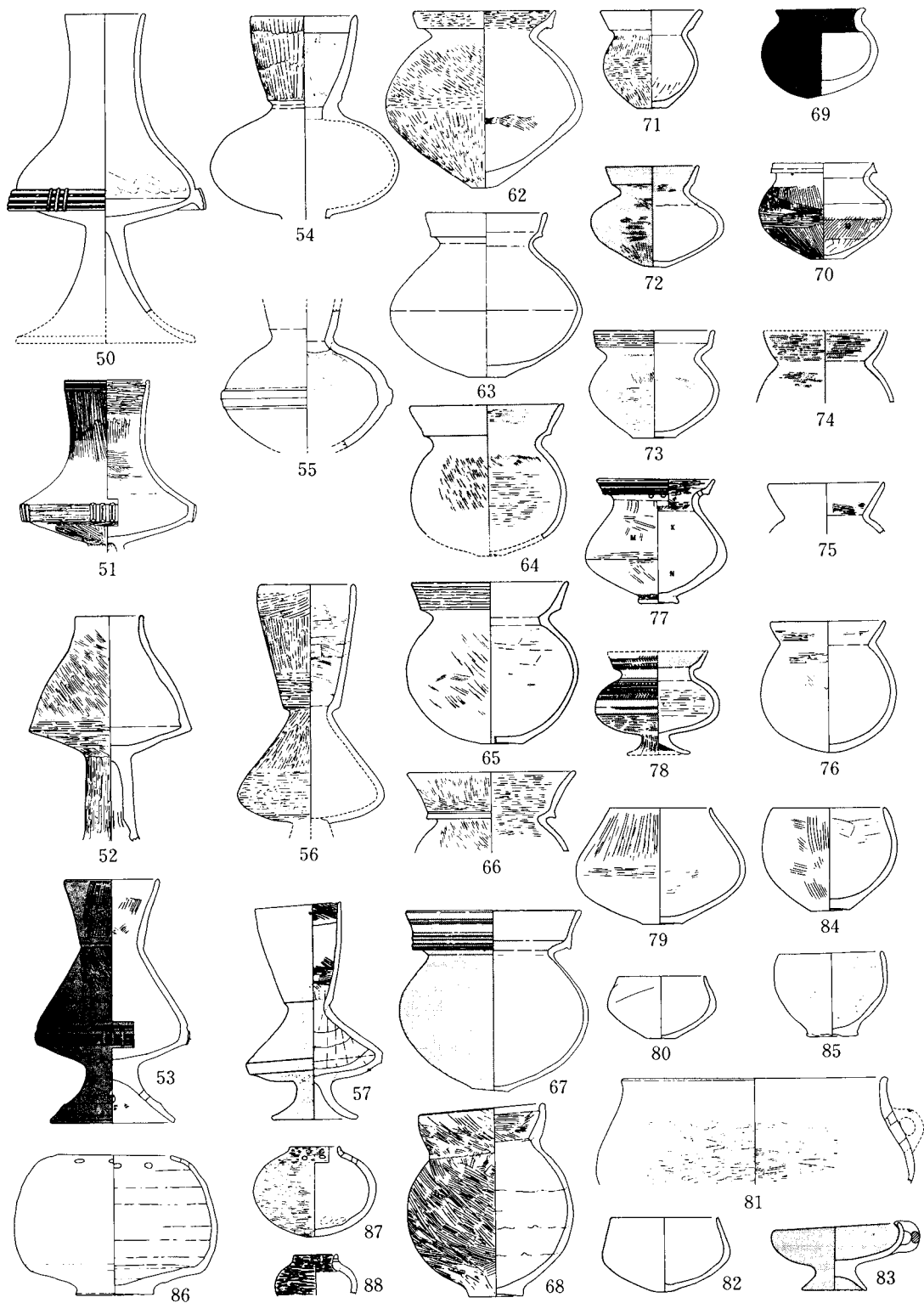
第24表 中型・小型壺類

(第282図69~88、一部大型を含む)

口径 8~12cm 胴径 8~14cm 器高 8~12cm			S (小 型)				
			No.	口径 cm	胴径 cm	器高 cm	
C : 短頸・ 外傾口縁 広口壺	e 素縁	0 細分可	69・70	8~9	8~12	8~9	
	f 有段口縁	0 細分可	i 無文	71・72	9~12	9~12	8~10
			ii 擬凹線文	73	11	12	10
	g 内彎口縁	1 長口	74・75	10~11	10	—	
		2 短口	76	10~12	12~14	12	
口径 8~12 胴径 8~14 器高 8~12	h 二孔一對 蓋結束孔付 有段口縁	1 無台	77	10	13	11	
		2 有台	78	9	12	10	
口径 4~13 (大型を除く) 胴径 7~19 (大型を除く) 器高 5~14			No.	口径 cm	胴径 cm	器高 cm	
			L (大型)	M (中型)	S (小型)		
D : 口縁部 無孔無頸壺 (除大型)	a 体部 把手付	1 壺形 口径/胴径 : ~0.8	—	7~13	4~8		
			—	79 12~18	80 7~10		
		2 鉢形 口径/胴径 : 0.8~	—	8~13	5~6		
			81 24	—	—		
			—	—	—		
i 無台 器高/胴径 : 0.5~	—	—	8~10				
	—	—	82 8~13				
ii 有台 器高/胴径 : ~0.5	—	—	5~7				
	—	—	9~12				
			—	—	83 10~13		
			—	—	6		
口径 4~13 胴径 7~18 器高 5~13	b 体部無把手 (粗製) 口径/胴径 : 0.7~0.9	—	—	84 7~10			
		—	—	9~13			
			—	—	85 7~9		
E : 口縁部二孔一對蓋結束孔付無頸壺			口径 4~13	—	10~13	87 4~5	
			胴径 8~19	—	86 16~19	8~12	
			器高 6~14	—	13~14	88 6~8	

第25表 特大型・大型・極小型甕 a~d 類 (第283~285図89・90・99~101・119・126~128)

a 無文有段口縁	LL (特大型)	89 口径 22~33cm 胴径 31~36cm 器高 37~39cm
	L (大型)	90 口径 17~22cm 胴径 25~28cm 器高 29~31cm
	SS (極小型)	99 口径 10 cm 胴径 9 cm 器高 10 cm
b く の 字 口 縁 ・ 平 底	LL (特大型)	100 口径 30 cm 胴径 37 cm 器高 47 cm
	L (大型)	101 口径 19~23cm 胴径 26~27cm 器高 30~31cm
	SS (極小型)	119 口径 9~10cm 胴径 9~10cm 器高 9~10cm
c く の 字 口 縁 ・ 丸 底	SS (極小型)	126 口径 10 cm 胴径 10 cm 器高 10 cm
d 擬凹線文有段口縁	LL (特大型)	127 口径 35 cm 胴径 — cm 器高 — cm
	L (大型)	128 口径 20 cm 胴径 28 cm 器高 35 cm

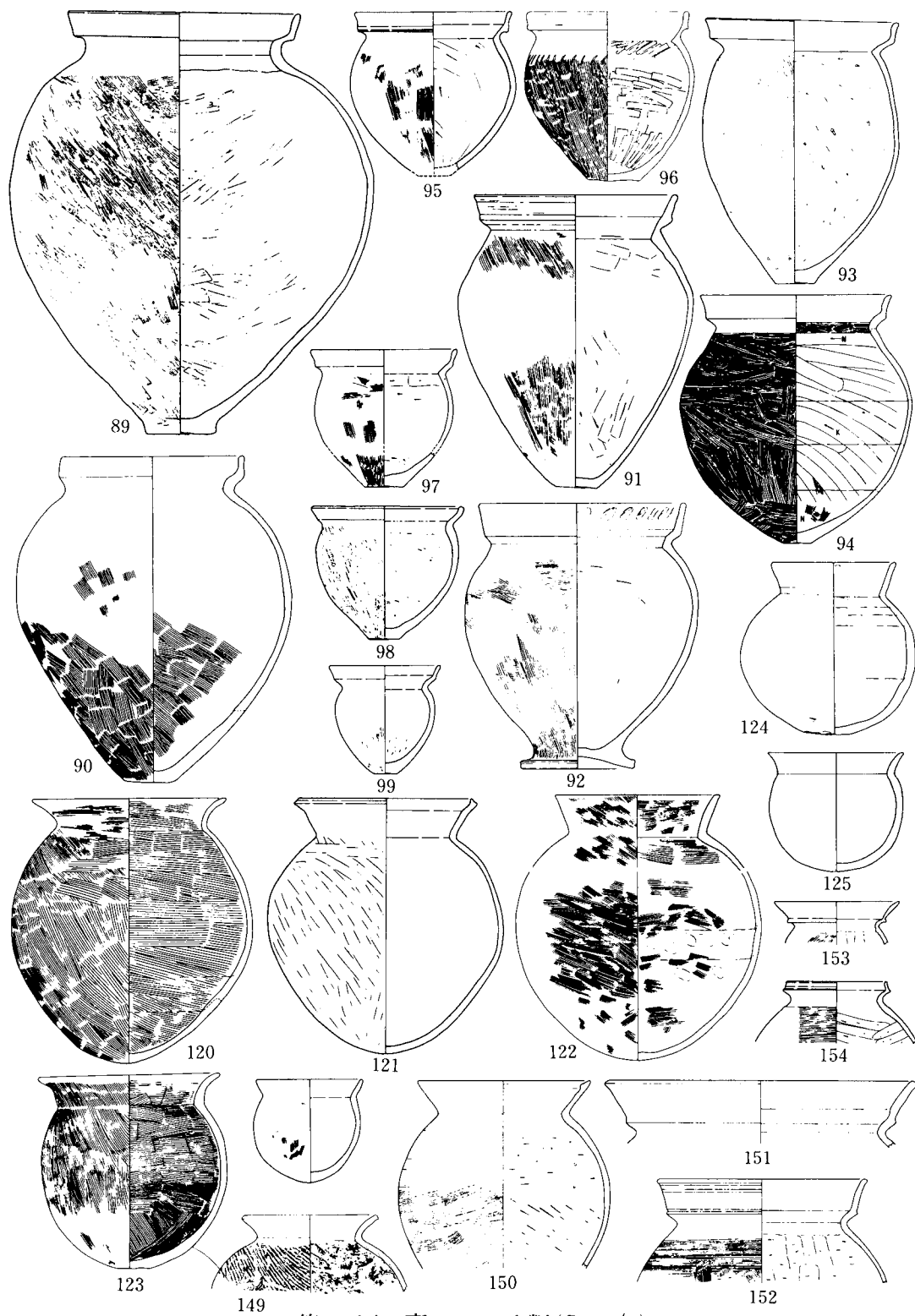


第282図 中型・小型壺類(S=1/6、一部大型を含む)

第26表 中型・小型甕 a～c類

(第283・284図91～98・102～118・120～125)

		口径 cm No. 胴径 cm 器高 cm	M (中型)		S (小型)		
			l (大)	s (小)	l (大)	s (小)	
a 無 文 有 段 口 縁	0 細分可	i 長 胴 胴径/器高 : 0.68~0.87	91 15~21 20~27 92 24~30	15~18 93 17~23 22~25	— — —	— — —	
		ii 球 胴 胴径/器高 : 0.86~0.99	— — —	15~17 94 21 23~24	— — —	— — —	
	0 細分可	iii 甕 形 胴径/器高 : 0.80~0.99	— — —	— — —	11~18 95 12~18 15~20	13~14 97 12~13 12~14	
		iv 鉢 形 胴径/器高 : 0.94~1.19	— — —	— — —	14~20 96 14~17 13~19	13~15 98 11~13 10~13	
	b く の 字 口 縁 ・ 平 底	1 口縁端上下拡張 ・外底の立ちあがり は外反(突出平底)	i 長 胴 胴径/器高 : 0.73~0.89	15~19 102 21~23 24~27	14~15 104 17~18 21~24	— — —	— — —
			ii 球 胴 胴径/器高 : 0.91~1.09	17~20 103 23~24 25~26	15~17 105 17~20 19~21	— — —	— — —
2 口縁端上部または 下部拡張・外底の 立ち上がりは内彎		i 長 胴 胴径/器高 : 0.77~0.93	18 106 21~22 27~28	108 14~17 17~20 109 20~23	— — —	— — —	
		ii 球 胴 胴径/器高 : 0.95~0.98	18 107 24 26	110 16 19~21 111 19~21	— — —	— — —	
3 口縁丸縁または 幅の狭い平縁、外底 の立ち上がりは内彎		i 長 胴 胴径/器高 : 0.82~0.87	17 112 21 25	14~18 113 17~19 20~22	— — —	— — —	
		ii 球 胴 胴径/器高 : 0.95~1.02	— — —	17 114 19~23 20~23	— — —	— — —	
0 細分可	iii 甕 形 胴径/器高 : 0.88~1.04	— — —	— — —	12~17 115 15~17 13~19	12~14 117 11~13 13~14		
	iv 鉢 形 胴径/器高 : 0.97~1.27	— — —	— — —	16 116 14 14	10~15 118 10~14 9~13		
c くの字口縁・丸底			No.	口径 cm	胴径 cm	器高 cm	
M (中 型)	口14~19		1	外反口縁・口端丸縁	120 14~19	19~24	19~27
	胴19~24		2	外反口縁・口端平縁	121 16	22	24
	器19~27		3	直口口縁	122 14	22	23
S (小 型)	口11~17	l (大)	1	外反口縁・口端丸縁	123 17	17	17
			3	直口口縁	124 11	16	16
	胴12~17	s (小)	1	外反口縁・口端丸縁	125 12~13	12~13	10~11
	器10~17						



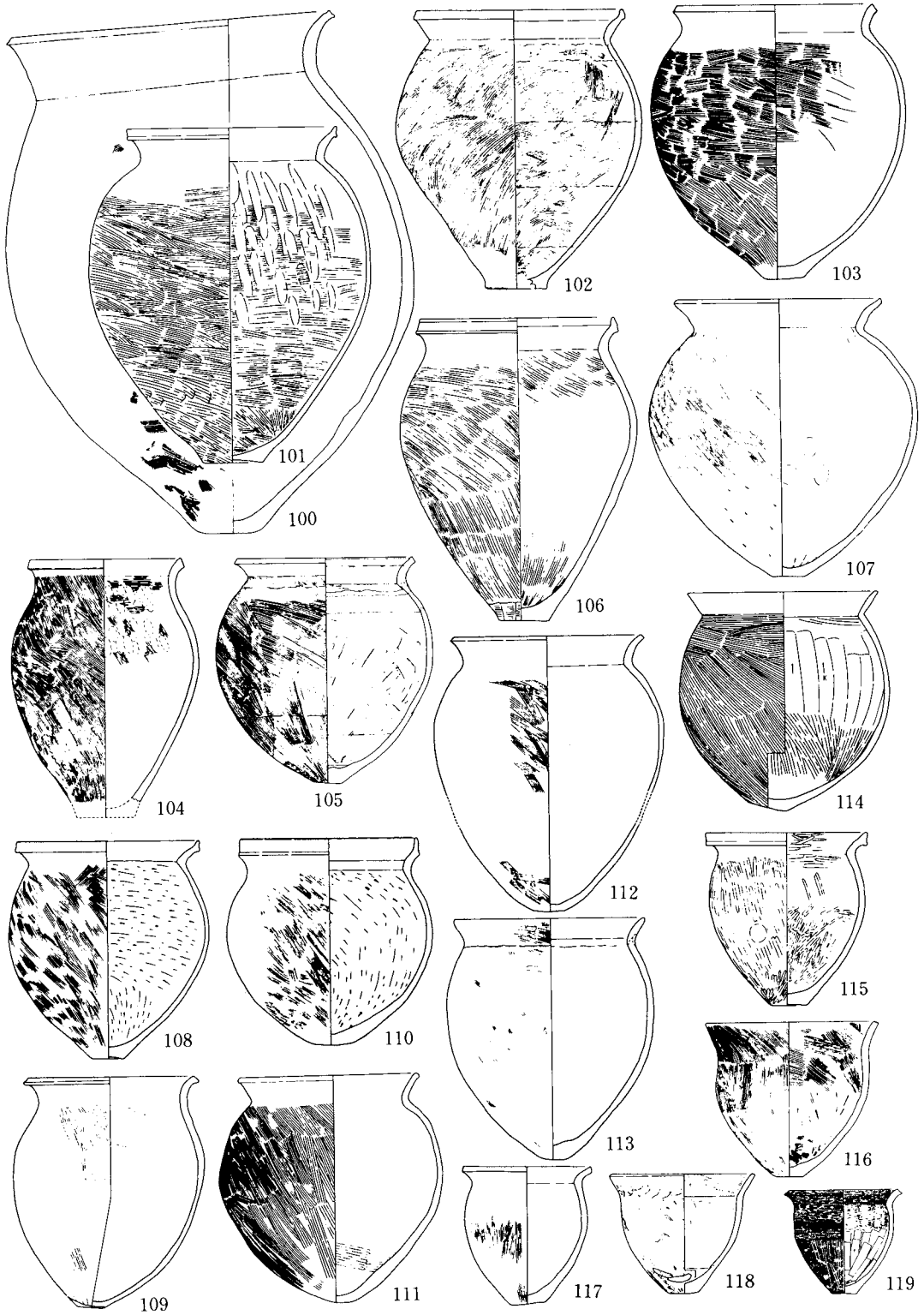
第283図 甕a・c~g・h類(S=1/6)

第286～290図（番号は第28～35表に同じ）掲載鉢・高杯・器台他（155～287）出土遺跡一覧			
186	: 高松町	大海西山遺跡	高松町教委 1992
198・200・217・219・252・254・255・256	: 高松町	中沼C遺跡	高松町教委 1987
265	: 高松町	二ツ屋遺跡	古代学研究32 1962
155・159・168・172・173・182・185・189・213・214・224・225・229・235・237・246・257	: 押水町	宿東山遺跡	県埋文センター 1987
204・230・234 238・286	: 押水町	宿向山遺跡	県埋文センター 1987
160・181・251・287・280	: 押水町	冬野遺跡	県埋文センター 1991
191	: 押水町	冬野小塚古墳群	同上 同上
190・207・210・241・244・264・285・271・278	: 押水町	竹生野遺跡	県埋文センター 1988
212・222	: 押水町	上田出西山遺跡	押水町教委 1980
178・232・233	: 羽咋市	吉崎・次場遺跡	県埋文センター 1987
169・175・187・195・209・211・236	: 羽咋市	吉崎・次場遺跡	県埋文センター 1988
216・250・253	: 羽咋市	吉崎・次場遺跡	羽咋市教委 1994
183・215・261	: 羽咋市	太田遺跡	羽咋市教委 1991
167	: 羽咋市	寺家遺跡	県埋文センター 1988
218	: 羽咋市	寺家遺跡	羽咋市教委 1993
223	: 羽咋市	三ツ屋遺跡	羽咋市教委 1994
284	: 志雄町	二口かみあれた遺跡	志雄町教委 1995
170・171・177・179・184・192・197・201・206・226・227・231・247・259・262・263・266・270・273・276・279・283	: 鹿西町	谷内ブンガヤチ遺跡	本書
203・221・258	: 鹿西町	杉谷チャノバタケ遺跡	本書
188	: 鹿島町	徳前C遺跡	県教委 1978
157・161・176・202・228・239・240・242・245・248・249・272・274・275・277・281・282	: 鹿島町	徳前C遺跡	県埋文センター 1986
162・260・269	: 鹿島町	徳前C遺跡	県埋文センター 1993
174・243・267	: 七尾市	藤橋遺跡	県埋文センター 1992
165・166・220	: 七尾市	矢田遺跡	七尾市教委 1986
156・158・163	: 七尾市	奥原遺跡	県埋文センター 1982
164・180・196・199・205・208・268	: 七尾市	国分高井山遺跡	七尾市教委 1984
193	: 七尾市	万行赤岩山遺跡	七尾市教委 1983
194	: 七尾市	津向大杉崎B遺跡	石考研会誌11 1968

第27表 蓋類

(第290図268～283)

口径 6～25cm 器高 2～9cm				L (大型)	M (中型)	S (小型)
A : 鈕部無孔	a 体部返り無し	1 体部外反・直線	i 鈕部上面が凹む	No. 口径cm 器高cm	269 14～16 5～7	271 8～10 3～5
			ii 鈕部上面が凸・平坦	268 25 9	270 — —	272 7 3
	b 体部返り有り	2 体部内彎	i 鈕凹	—	273 12～18	8
			ii 鈕凸・平	—	274 4～6	275 3
B : 鈕部有孔	a 体部返り無し	b 体部返り有り	i 鈕凹	—	—	276 8
			ii 鈕凸・平	—	—	277 4
C : 二孔一対蓋結束孔付・無鈕	a 体部返り無し	b 体部返り有り	i 鈕凹	—	278 14～15 5～8	279 11 4
			ii 鈕凸・平	—	—	280 11 5
D : 一対蓋結束孔付・無鈕	a 体部返り無し	b 体部返り有り	i 鈕凹	—	281 13～14 3～4	279 6～7 2～3
			ii 鈕凸・平	—	—	283 —

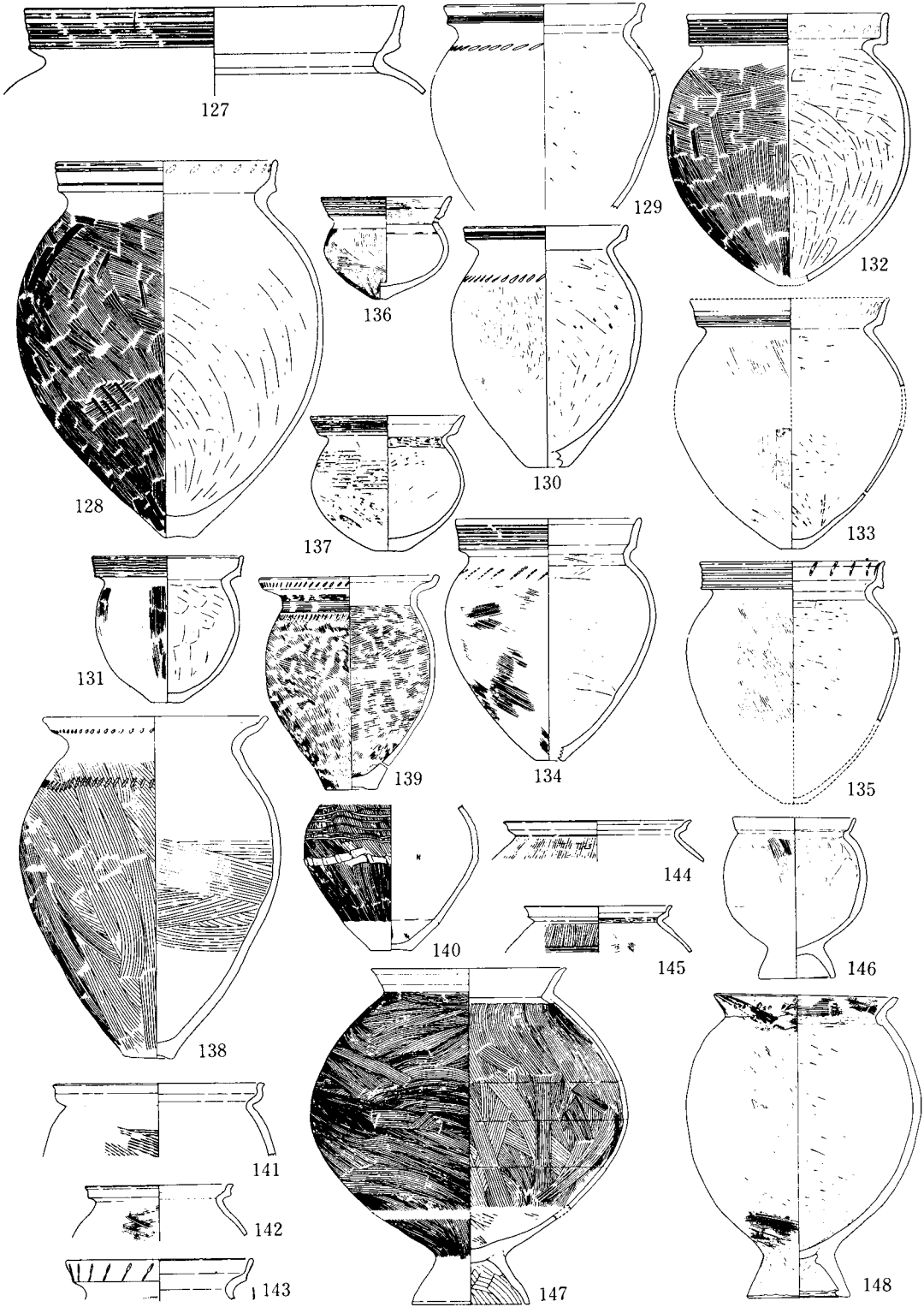


第284図 甕b類(S=1/6)

第28表 中型・小型甕 d、甕 e～h 類

(第283・285図129～154)

		No.	口径 cm 胴径 cm 器高 cm	M (中型)		S (小型)	
				1 (大)	s (小)		
d 擬凹線 文有段 口縁	1 短口 口径13～19cm 口頸高/頸 径: ~0.20	i 丸縁	16～19	15～17	13～14		
			129 20～21	130 17～19	131 13～14		
	口径12～19 胴径12～22 器高 9～25	口径13～21cm 器高13～22cm	22	13			
	2 長口 口頸高/頸 径: 0.20～	i 丸縁	16～18	16～17	12		
			132 20～22	134 17～19	136 12		
	口径12～18cm 胴径12～22cm 器高 9～25cm	24～25	21～22	9			
		ii 尖縁	18～20	15～17	14		
			133 20～21	135 17～19	137 14		
			23	19	13		
				No.	口径 cm	胴径 cm	器高 cm
e 受口状 口縁	1 外面口縁～肩部有文	L (大型)	138	17～20cm	21～24cm	28 cm	
		M (中型)	139	14～17cm	16～17cm	19 cm	
	2 外面胴部突帯付	M (中型)	140	—	16 cm	—	
		L (大型)	141	19 cm	—	—	
	口径14～20 胴径16～24 器高19～28	M (中型)	142	14 cm	—	—	
4 外面口縁有文 (長口)		L (大型)	143	19～20cm	—	—	
f 台付甕	1 S字状口縁	L (大型)	144	17 cm	—	—	
		M (中型)	145	14 cm	—	—	
		S (小型)	146	10 cm	13 cm	11 cm	
	口径10～18 胴径13～21 器高11～31	2 く字口縁	L (大型)	147	18 cm	29 cm	31 cm
			M (中型)	148	16 cm	21 cm	28 cm
g 外来系 くの字 口縁	1 外反口縁・胴部外面たたき目		149	12 cm	—	—	
	2 内彎口縁・口縁端部内面肥厚		150	15～20cm	20～21cm	—	
h 複合 口縁	1 長口	L (大型)	151	25～28cm	27～30cm	—	
		M (中型)	152	19 cm	—	—	
		S (小型)	153	12 cm	—	—	
	2 短口		154	9 cm	—	—	

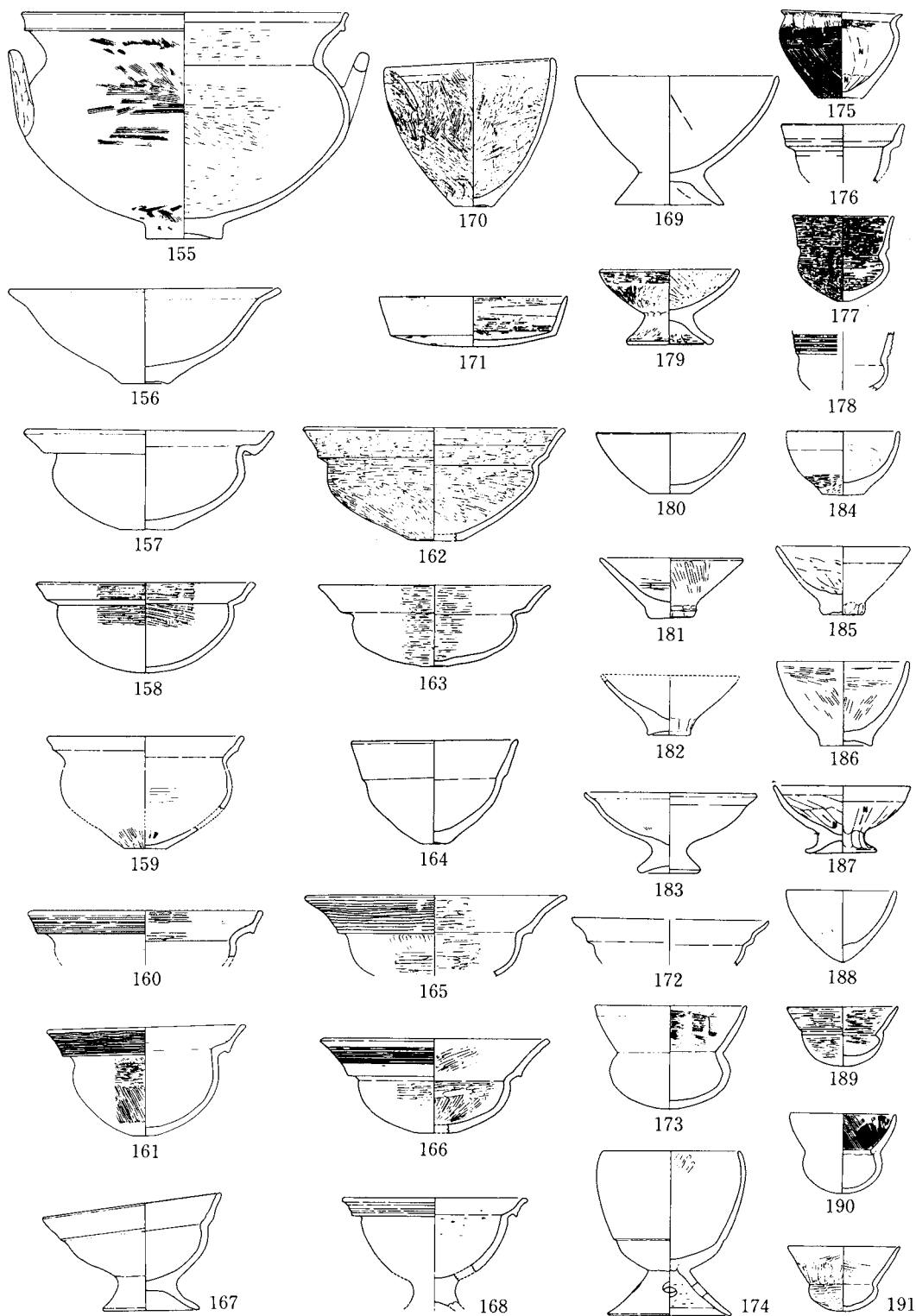


第285図 甕d~f類(S =1/6)

第29表 無台・有台鉢類

(第286図155~191)

口径 6~30cm 器高 4~26cm				No.	口径 cm	胴径 cm	器高 cm	
L	a 環状把手付			155	25~30	22~30	21~26	
M (中型) 口径 12 ~ 25 cm 器 高 4 ~ 15 cm	a くの字口縁			156	14~24		7~10	
	b 無台・有段口縁	1 短口 口径13~23 高6~11	i 無文	l (大)	157	22~23		9
				m (中)	158	19~21		6~11
				s (小)	159	13~18		6~11
		2 長口 口径12~25 高6~11	ii 擬凹線文	l (大)	160	22		—
				m (中)	161	19		10
				s (小)	162	22~25		8~11
	c 有台・有段口縁	i 無文	l (大)	162	22~25		8~11	
			m (中)	163	19~21		6~11	
			s (小)	164	12~18		8~11	
	d 有台・碗形	ii 擬凹線文	l (大)	165	24		—	
			m (中)	166	20		9	
			ii 擬凹線文	167	15~16		10	
	e 有台・碗形	ii 擬凹線文	168	16		—		
	f 無台・碗形(深身)		169	16~20		8~12		
g 無台・碗形(深身)		170	12~15	14~16	11~13			
h 体部屈曲・無頸・浅身		171	15~17		4~5			
h 丸底(系) 口径12~22cm 器高5~15cm	1 無台	i 浅身	172	13~22		5~7		
		ii 深身	173	14	11	9		
	2 有台		174	12		15		
S (小型) 口径 6 ~ 15 cm 器 高 4 ~ 9 cm	a くの字口縁			175	8~11	8~10	5~8	
	b 無台・有段口縁	1 短口	i 無文	176	9~11	7~9	7~9	
			ii 擬凹線文	177	9	8	8	
		2 長口	i 無文	178	—	8	—	
	d 有台・碗形		179	10~12		7~8		
	e 無台・碗形	1 浅身 口径12~15 高4~9	i 平底	180	13~15		5~7	
			ii 突出平底	181	13~14		4~8	
			iii 突出上底	182	12~14		6~9	
			iv 高台付様	183	12~15		6~8	
		2 深身 口径6~12 高5~9	i 平底	184	7~10		5~7	
			ii 突出平底	185	8~12		5~9	
			iii 突出上底	186	11~12		6~8	
			iv 高台付様	187	6~11		5~6	
	g 碗形・尖底(深身)		188	10		7		
	h 丸底 口径9~12cm 器高5~8cm	1 短口		189	10		5~6	
2 長口		i 体高/器高: 0.52~	190	9		7		
	ii 体高/器高: ~0.48	191	11~12		6~8			



第286図 無台・有台鉢類(S=1/6)

第30表 脚付鉢類

(第287図192~208)

口径13~33cm 裾径 8~21cm 器高12~25cm			No.	口径 cm	裾径 cm	器高 cm
L (大型) 口径22~33cm 裾径15~21cm 器高16~25cm						
a 有段口縁	1 八の字状長脚		192	29	—	—
b 体部有段 口径22~33cm 裾径15~21cm 器高16~25cm	1 八の字状長脚	i 浅身	193	28~29	15	16
		ii 深身	194	28~30	15	21
	2 有段脚	i 口縁端部丸縁	195	31~33	17~21	21~25
		ii 口縁端部面取	196	22	—	—
M (中型) 口径21~27cm 裾径 9~20cm 器高12~21cm						
a 有段口縁	1 八の字状長脚		197	21~26	—	—
b 体部有段 口径22~27cm 裾径13~20cm 器高16~21cm	1 八の字状長脚		198	22~27	15	21
	2 有段脚		199	25	15	18
	3 器台結合脚		200	26	20	—
	4 八の字状短脚	i 浅身・外反口縁	201	22~27	—	—
ii 深身・外傾口縁		202	26~27	13	16	
c 体部屈曲	4 八の字状短脚		203	21~27	9~13	12~15
S (小型) 口径13~20cm 裾径 8~14cm 器高12~14cm						
a 有段口縁	3 器台結合脚		204	18	14	—
b 体部有段	4 八の字状短脚 細分は有段部径/口径	i 0.63~	205	16~19	9~10	13
		ii 0.54~0.60	206	13~20	8~11	13~14
		iii ~0.50	207	16~18	—	—
c 体部屈曲	4 八の字状短脚		208	16	12	12

第31表 有孔鉢

(第290図258~262)

A : 焼成前穿孔 (cm)		1 (大) 口径15~19 器高11~17	s (小) 口径 13 器高12~13
a 単孔	1 平底	No.258 口径15~17 器高12~16	No.260 口径 13 器高12~13
	2 尖底	No.259 口径15~19 器高11~17	No.261 口径 13 器高 12
b 多孔	1 平底	No.262 口径 17 器高 16	—

第32表 結合器台

(第290図263~267)

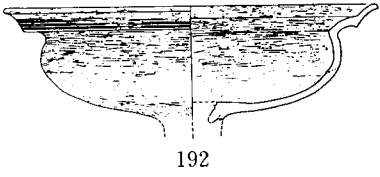
(cm)			No.	口径14~21	裾径15~16	器高 9~13
a 壺結合	1 有段口縁	i 八の字状有段脚	263	口径17~19	裾径 —	器高 —
		ii 棒状有段脚	264	口径 19	裾径 14	器高 —
	2 二重口縁	i 受部有孔	265	口径16~21	裾径15~16	器高 9~13
		ii 受部無孔	266	口径 14	裾径 11	器高 9
b 鉢結合	3 小型丸底鉢		267	口径 18	裾径 —	器高 —

第33表 その他

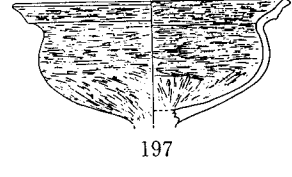
(第290図284~287)

手培形土器	284	—	杓子形土製品	286	幅 3~6 高 3~6 長さ(13)
皮袋形土器	285	体部短径 4 同長径 9~15	桶形土製品	287	口径 9 底径13 器高 15

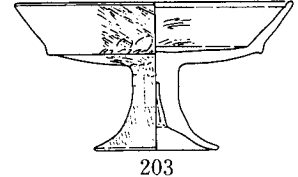
(手捍ねによる小型土器や土鍾は未検討)



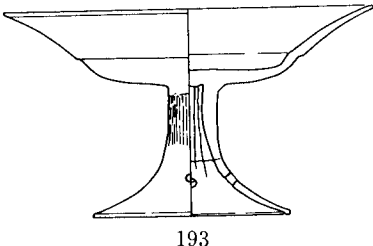
192



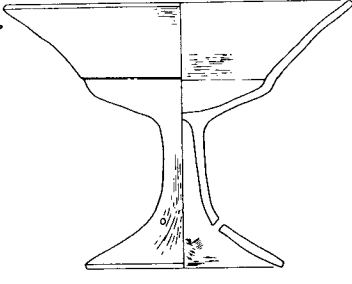
197



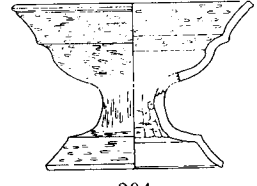
203



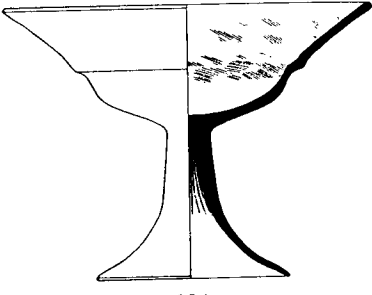
193



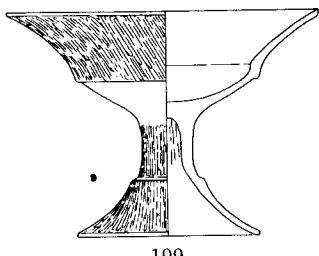
198



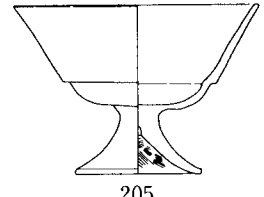
204



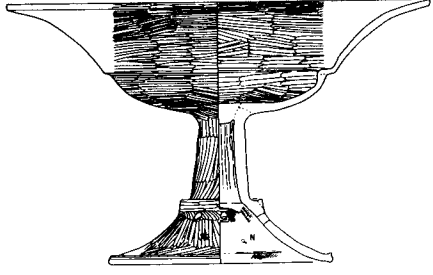
194



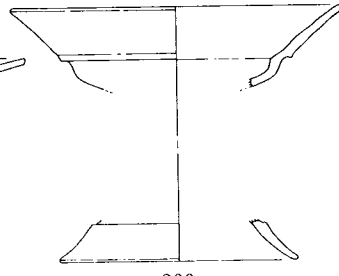
199



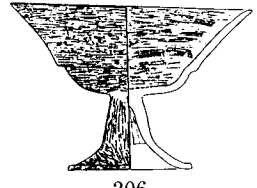
205



195



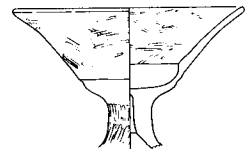
200



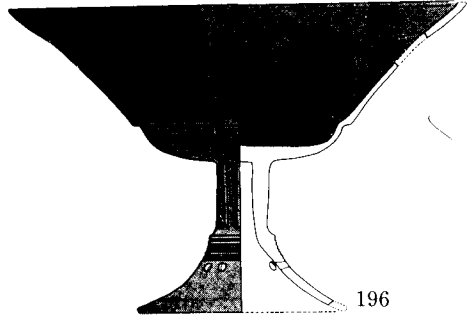
206



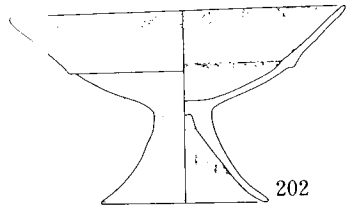
201



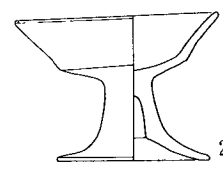
207



196



202



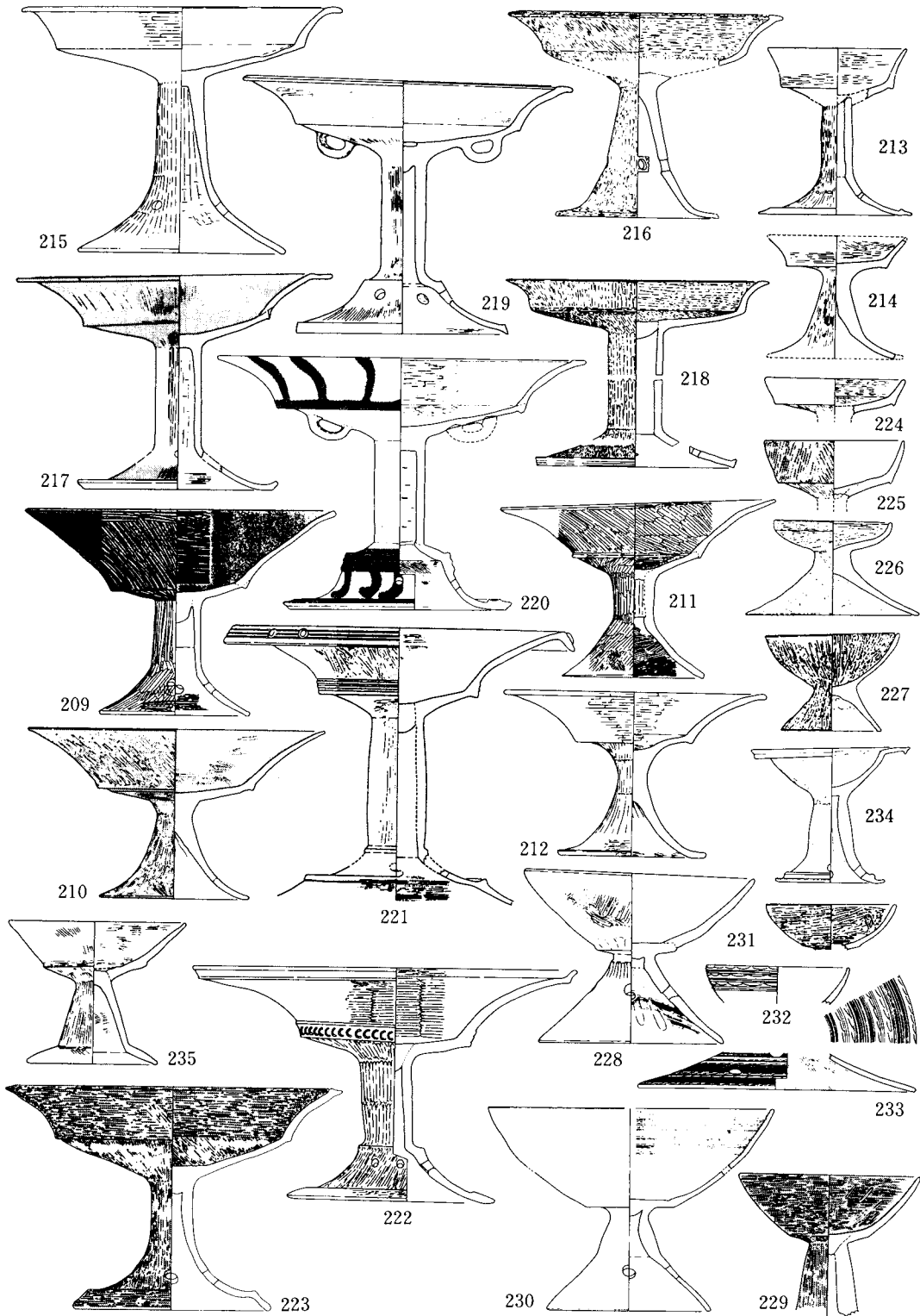
208

第287図 脚付鉢類 (S=1/6)

第34表 高杯・脚付鉢類

(第288図209~235)

		口径 9~35cm 裾径 5~25cm 器高 7~27cm	No.	口径 cm 裾径 cm 器高 cm	L (大型)	M (中型)	S (小型)
a 外反口縁・ 八の字状脚	1 口縁端部丸縁 口径10~30cm 裾径 9~18cm 器高11~19cm	i 脚頂部 粘土塊充填	27~30	15~25	10~14	209 13~16 16~19	213 14 15
			27~29	17~24	12~14		
		ii 脚頂部中実	210 13 15	212 11~14 13~17	214 12 11		
口径10~30cm 裾径 9~18cm 器高11~22cm	2 口縁端部面取	口径23~30cm 裾径15~18cm 器高14~22cm	28~30 215 17~18 14~22	23~24 216 15~17 19	— — —		
b 外反口縁・ 棒状無段脚	2 口縁端部面取	口径24~29cm 裾径 18 cm 器高 — cm	29 217 18 —	24 218 18 —	— — —		
c 外反口縁・ 棒状有段脚	2 口縁端部面取 口径29~33cm 裾径17~22cm 器高21~27cm	i 脚有段部 無突帯	29~31 219 18~19 21~23	— — —	— — —		
		ii 脚有段部 突帯付	29~33 220 17~22 22~27	— — —	— — —		
	3 口縁端部垂下面取		28~30 221 — —	— — —	— — —		
	4 口縁端部受口状		30~35 222 17 22	— — —	— — —		
口径28~35cm 裾径17~22cm 器高21~27cm							
d 外反口縁・ 器台結合脚	2 口縁端部面取		29 223 17 21	— — —	— — —		
e 体部内彎 ・無文	1 体部屈曲 ・直口	i 浅身	— — —	— — —	224 12 — —		
		ii 深身	— — —	— — —	225 — — —		
	2 体部無屈曲 ・外傾	i 浅身・長脚	— — —	— — —	226 9~15 5~10 227 7~9		
		ii 深身・短脚	— — —	— — —	— — —		
f 杯部内彎	1 無文	i 脚部無屈折	— — —	228 19~22 11~17	231 12~13 — —		
		ii 脚部屈折	— — —	229 15~16	— — —		
口径12~26cm 裾径11~25cm 器高15~19cm	2 有文		— — —	24~26 230 14 19	232 12~13 21~25 233 —		
g 口縁端部外折・脚端部折り返し			— — —	— — —	14 234 9 12		
h 外傾口縁・屈折脚			— — —	16~18 235 11~12 13~15	— — —		

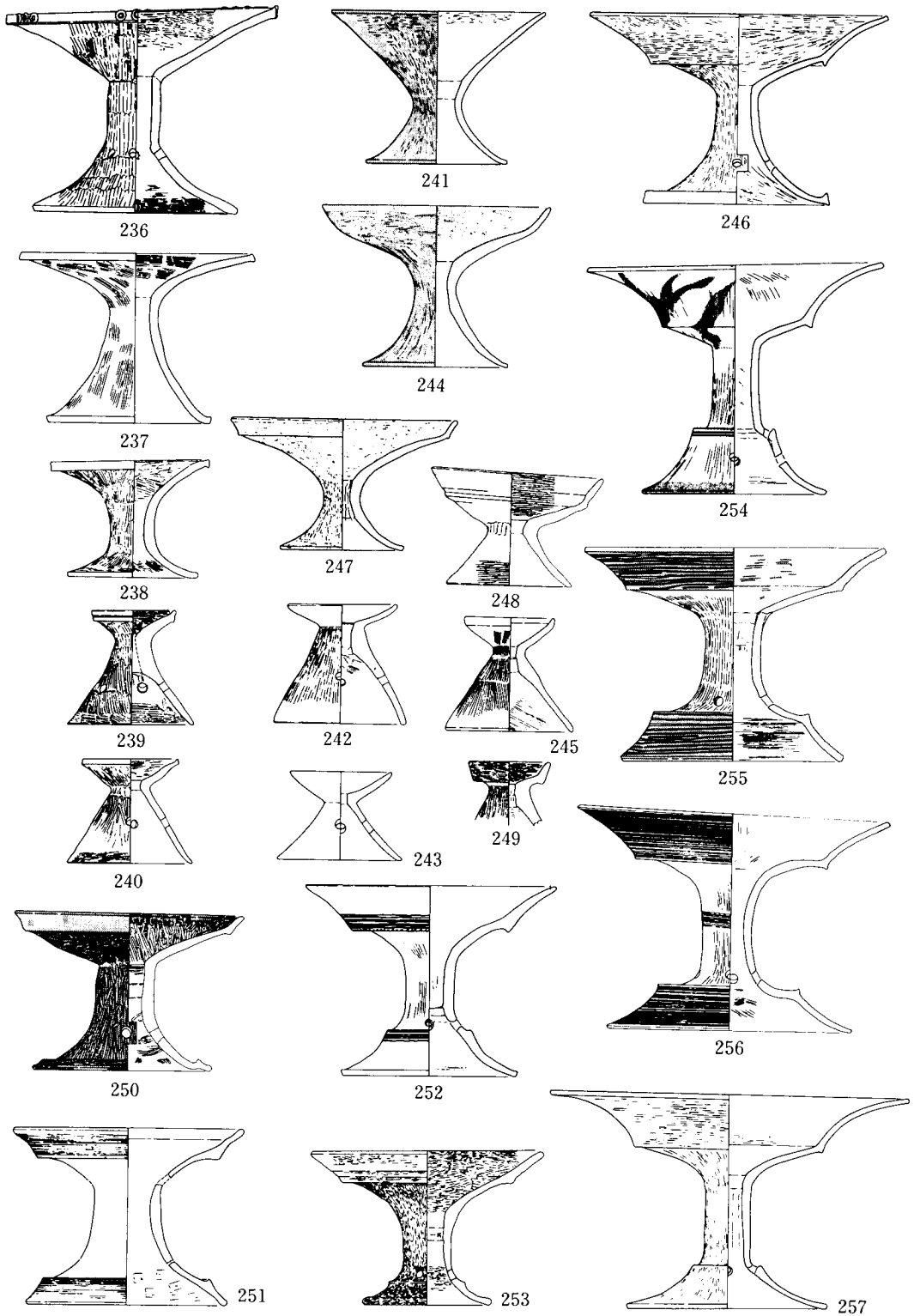


第288図 高杯・脚付鉢類(S=1/6)

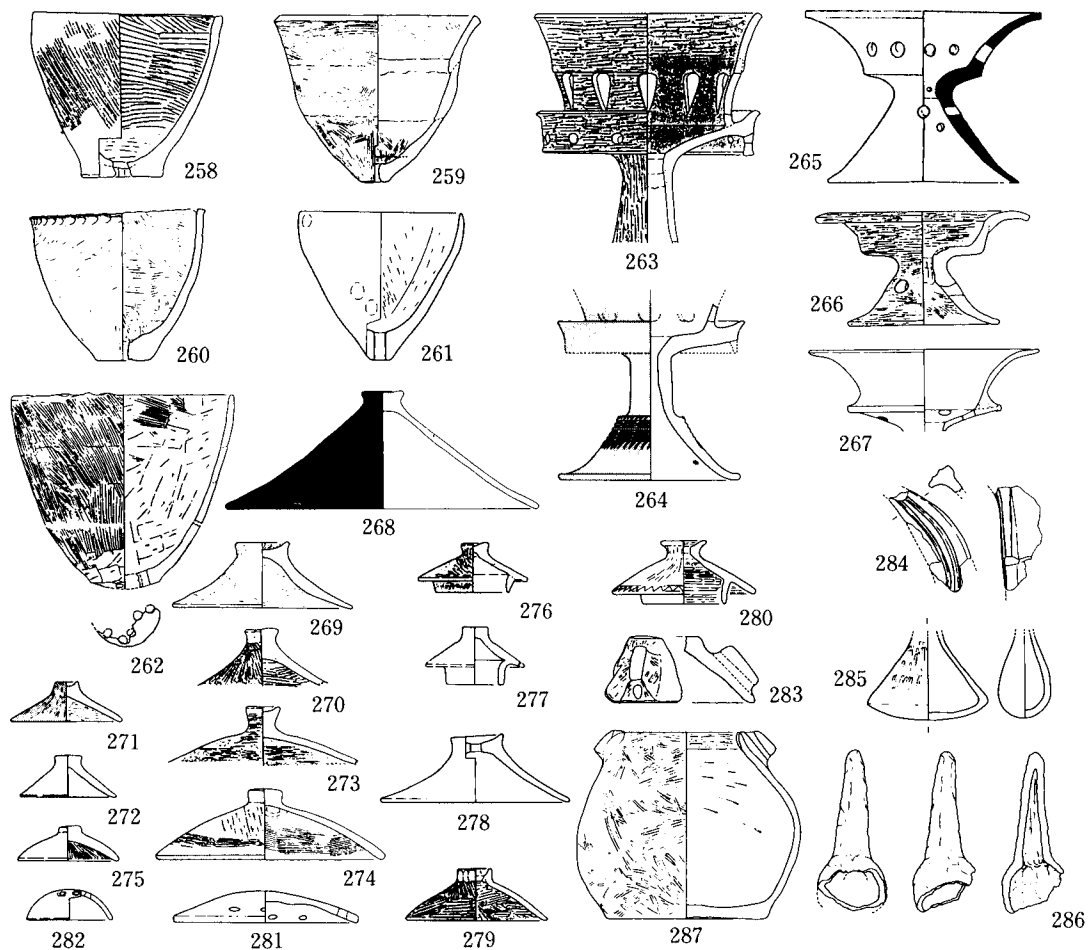
第35表 器台類

(第289図236~257)

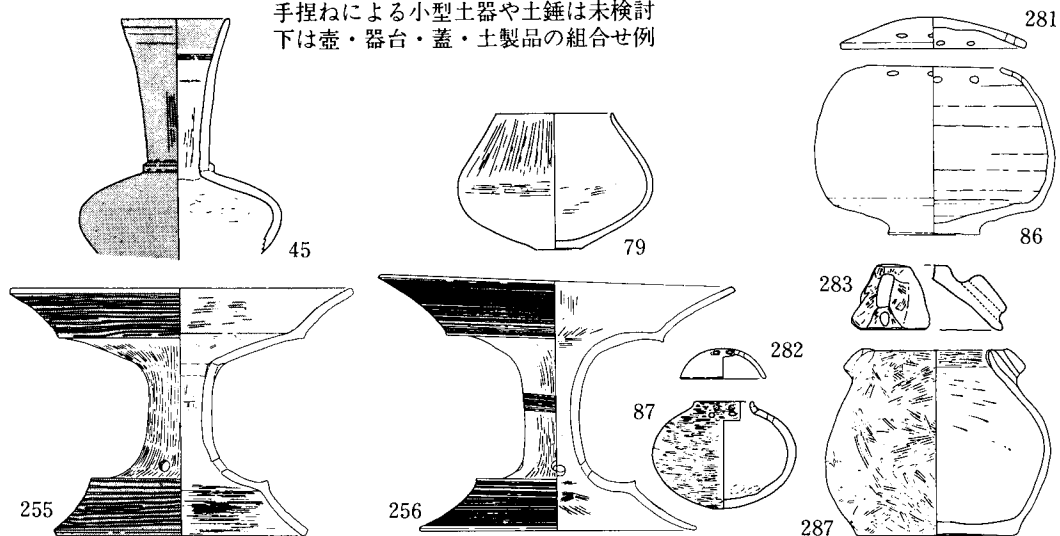
			L (大型)			M (中型)		S (小型)	
			口径24~36	裾径16~22	器高17~25	14~26	10~19		8~21
			l (大)	m (中)	s (小)	l (大)	s (小)		
			口径 7~36cm 裾径 9~22cm 器高 7~25cm	口径33~36 裾径20~22 器高23~24	口径27~31 裾径18~22 器高19~25	口径24~27 裾径16~17 器高17~21	口径18~26 裾径11~19 器高10~21		口径14~16 裾径10~13 器高8~13
a : 受脚無段	1 受部平縁	i 受部端部浮文	No. 口径 cm 裾径 cm 器高 cm	—	—	236 18 18	—	—	
		ii 受部端部無文	—	—	—	237 11~19 10~21	238 14~16 10~13	—	
	7~10 9~12 7~10	iii 筒状の脚頂部	—	—	—	—	—	239 8~10 11~12 9~10	
		iv 八字の脚頂部	—	—	—	—	—	240 7~9 9~11 7~10	
	2 受部丸縁	20 13 14	—	—	—	241 20 13 14	—	—	
	口径 : 7~26 裾径 : 9~19 器高 : 7~21	i 長脚	—	—	—	—	—	242 8~10 11~12 9~11	
			ii 短脚	—	—	—	—	—	243 8~10 10~14 7~10
		3 受部屈曲(有稜)	7~23 10~16 7~18	—	—	—	244 21~23 13~16 15~18	—	245 7~10 10~12 7~11
	b : 受部有段	0 細分可	7~27 10~17 8~17	—	—	246 27 17 17	247 18~23 11~14 12	248 14~16 10~11 8~10	249 7~8 —
	c : 受脚有段	1 脚最小径 5 cm ~	i 端部無文	—	—	—	250 21 15 14	—	—
ii 端部擬凹縁文			—	—	—	251 21 15 16	—	—	
2 脚最小径 ~ 5 cm		i 脚部腰高	—	—	—	252 23~24 16~17 17	—	—	
		ii 脚部扁平	—	—	—	253 22 12 14	—	—	
口径 : 21~36 裾径 : 12~22 器高 : 14~25		24~27 16~17 17~21	—	—	—	254 24~27 16~17 17~21	—	—	
			iii 厚手	—	255 27~31 18~20 19~25	—	—	—	—
27~31 18~22 19~25		iv 薄手	—	—	—	—	—	—	
			—	256 28~30 18~22 20~24	—	—	—	—	
33~36 20~22 23~24	—	—	257 33~36 20~22 23~24	—	—	—	—		
		—	—	—	—	—	—		



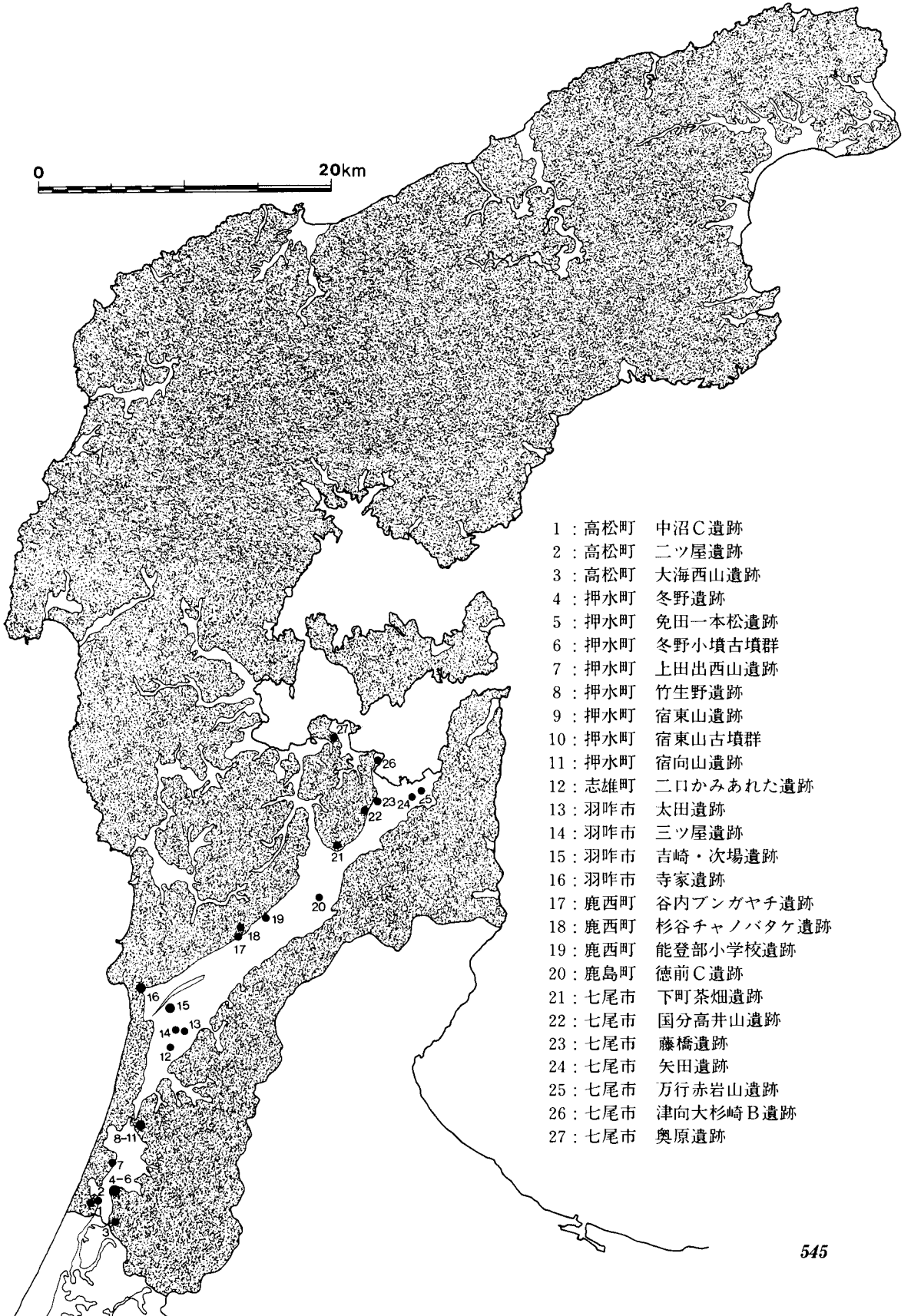
第289図 器台類(S=1/6)



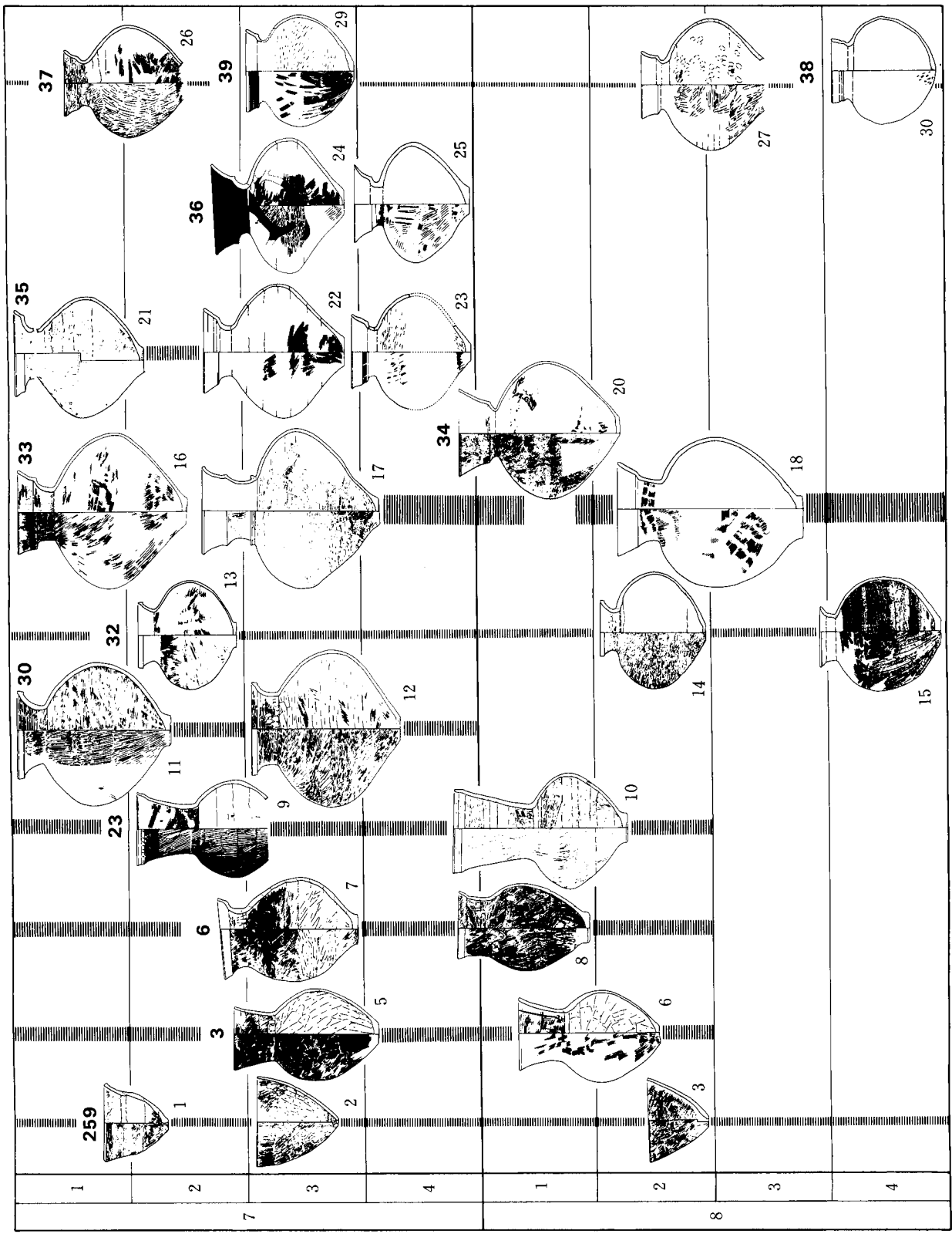
手捏ねによる小型土器や土錘は未検討
下は壺・器台・蓋・土製品の組合せ例

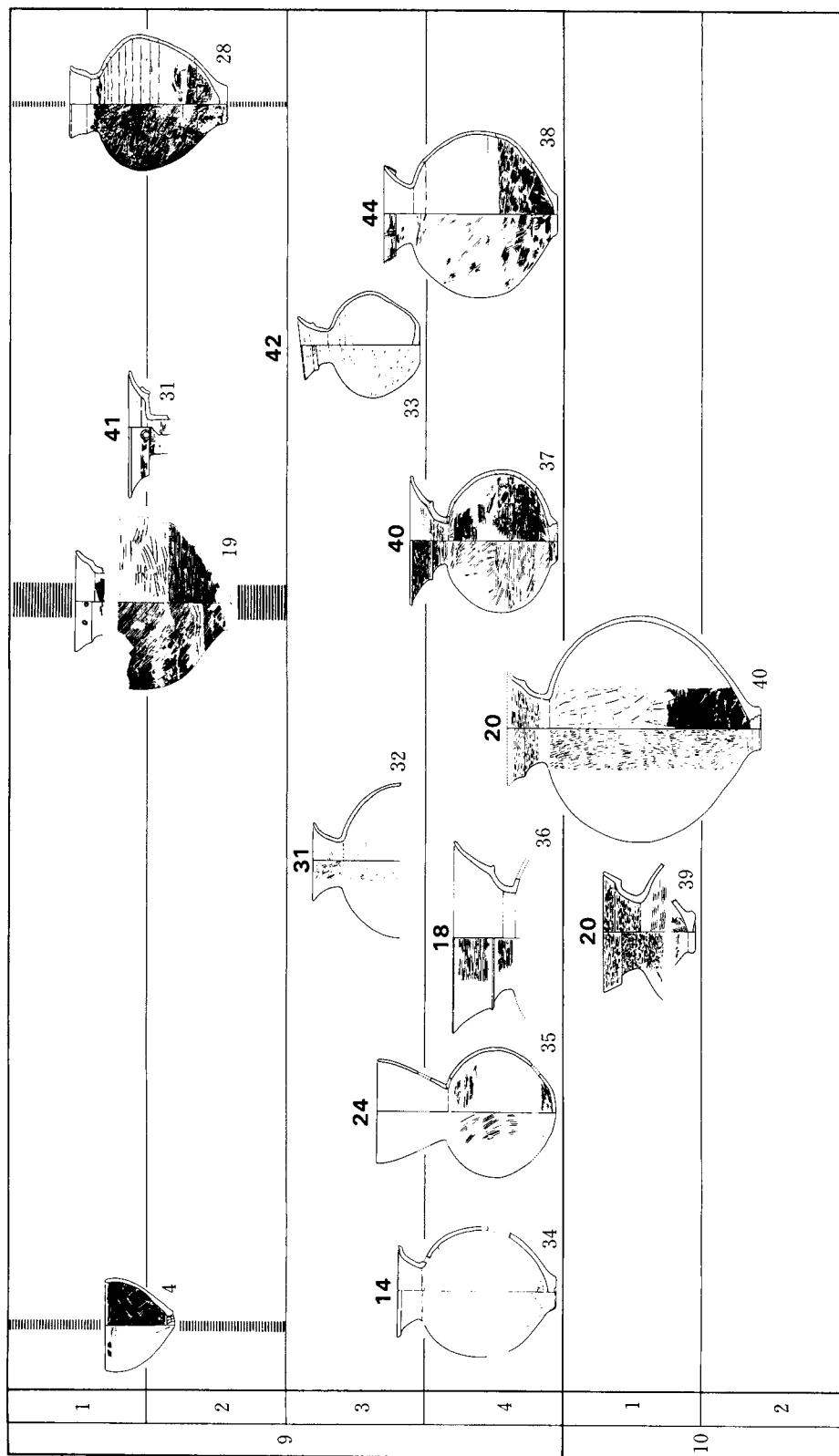


第290図 有孔鉢・結合器台・蓋類・その他(S=1/6)



- 1 : 高松町 中沼C遺跡
- 2 : 高松町 ニツ屋遺跡
- 3 : 高松町 大海西山遺跡
- 4 : 押水町 冬野遺跡
- 5 : 押水町 免田一本松遺跡
- 6 : 押水町 冬野小墳古墳群
- 7 : 押水町 上田出西山遺跡
- 8 : 押水町 竹生野遺跡
- 9 : 押水町 宿東山遺跡
- 10 : 押水町 宿東山古墳群
- 11 : 押水町 宿向山遺跡
- 12 : 志雄町 二口かみあれた遺跡
- 13 : 羽咋市 太田遺跡
- 14 : 羽咋市 三ツ屋遺跡
- 15 : 羽咋市 吉崎・次場遺跡
- 16 : 羽咋市 寺家遺跡
- 17 : 鹿西町 谷内ブンガヤチ遺跡
- 18 : 鹿西町 杉谷チャノバタケ遺跡
- 19 : 鹿西町 能登部小学校遺跡
- 20 : 鹿島町 徳前C遺跡
- 21 : 七尾市 下町茶畑遺跡
- 22 : 七尾市 国分高井山遺跡
- 23 : 七尾市 藤橋遺跡
- 24 : 七尾市 矢田遺跡
- 25 : 七尾市 万行赤岩山遺跡
- 26 : 七尾市 津向大杉崎B遺跡
- 27 : 七尾市 奥原遺跡



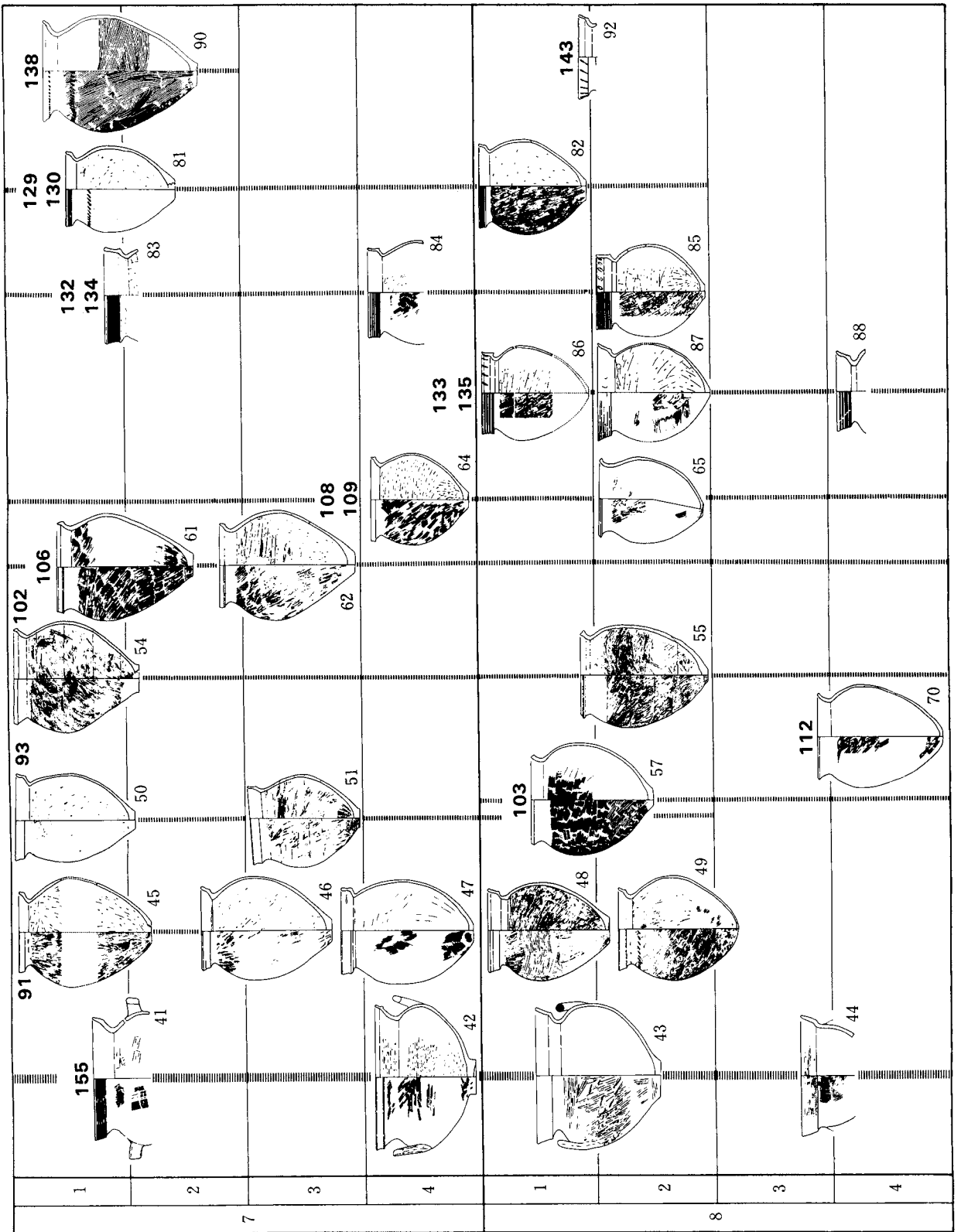


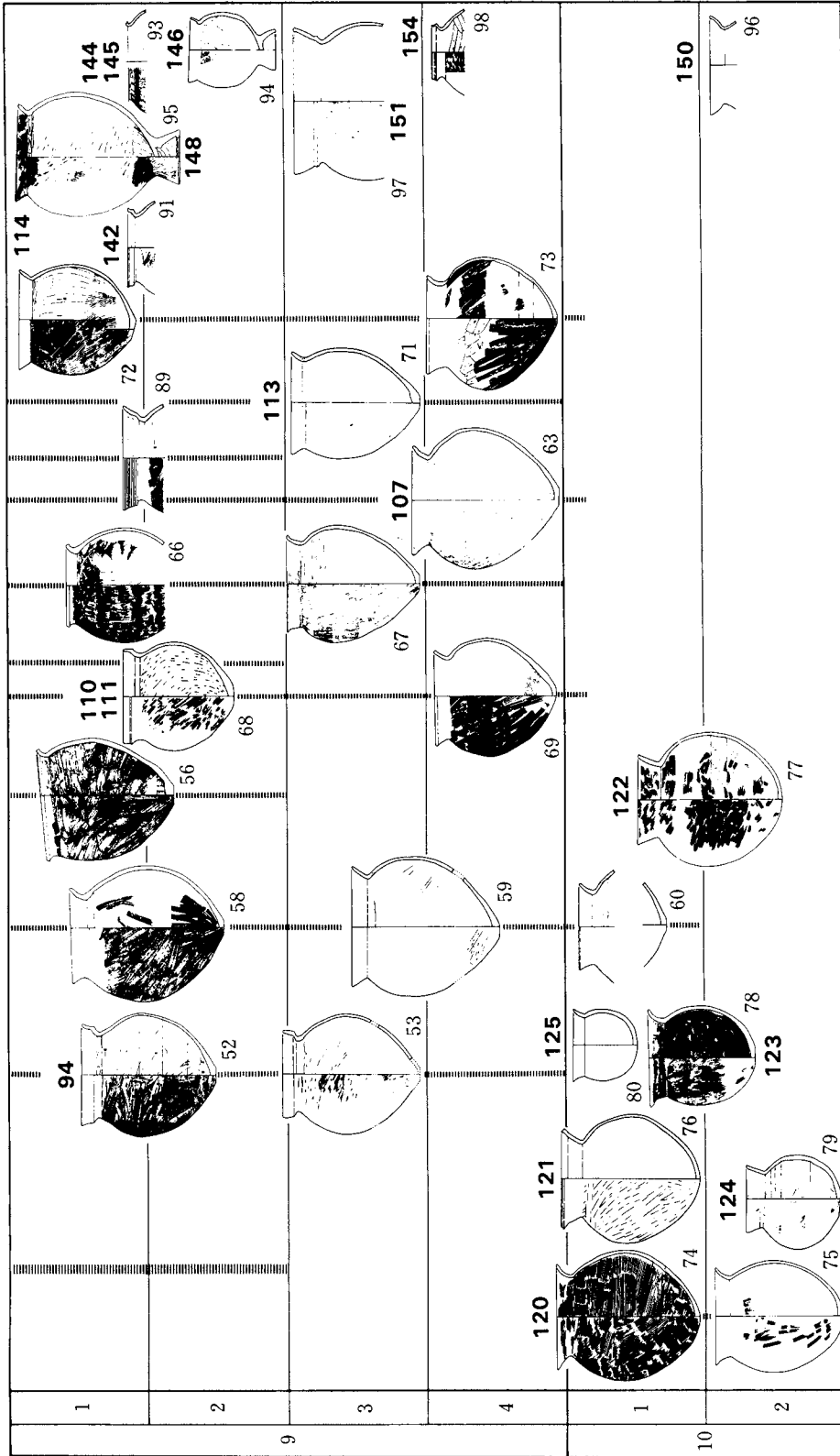
ゴチック体数字は第278～290図の形式番号と一致する。

- 16・20・47・99・100・101・102・119・120・129・146. 高松町教委 1987 13・23・29・39・40・42・64・74・75・76・77・
- 163・164・166・181・183・186・188・189・190. : 中沼C遺跡 1987 78・79・84・96・116・117・118・121・127・
- 6・8・10・32・33・48・53・65・67・71・82・86・87・92. 県埋文センター 1991 128・131・135・136・139・142・144・161・
- 97・150・152・162・167・180・193・200. 同 同上 165・170・178・191・196・198・201
- 143 : 冬野遺跡 同上 35・36・37・38・110・174
- 19・43・44・66・69・70・73・88・98・137・141・153. 県埋文センター 1988 11・61
- 158・159・203・204. : 竹生野遺跡 1988 11・61

- : 宿東山遺跡 県埋文センター 1987
- : 宿東山古墳群 同 同上 1987
- : 宿向山遺跡 県埋文センター 1987
- : 上田出西山遺跡 押水町教委 1980

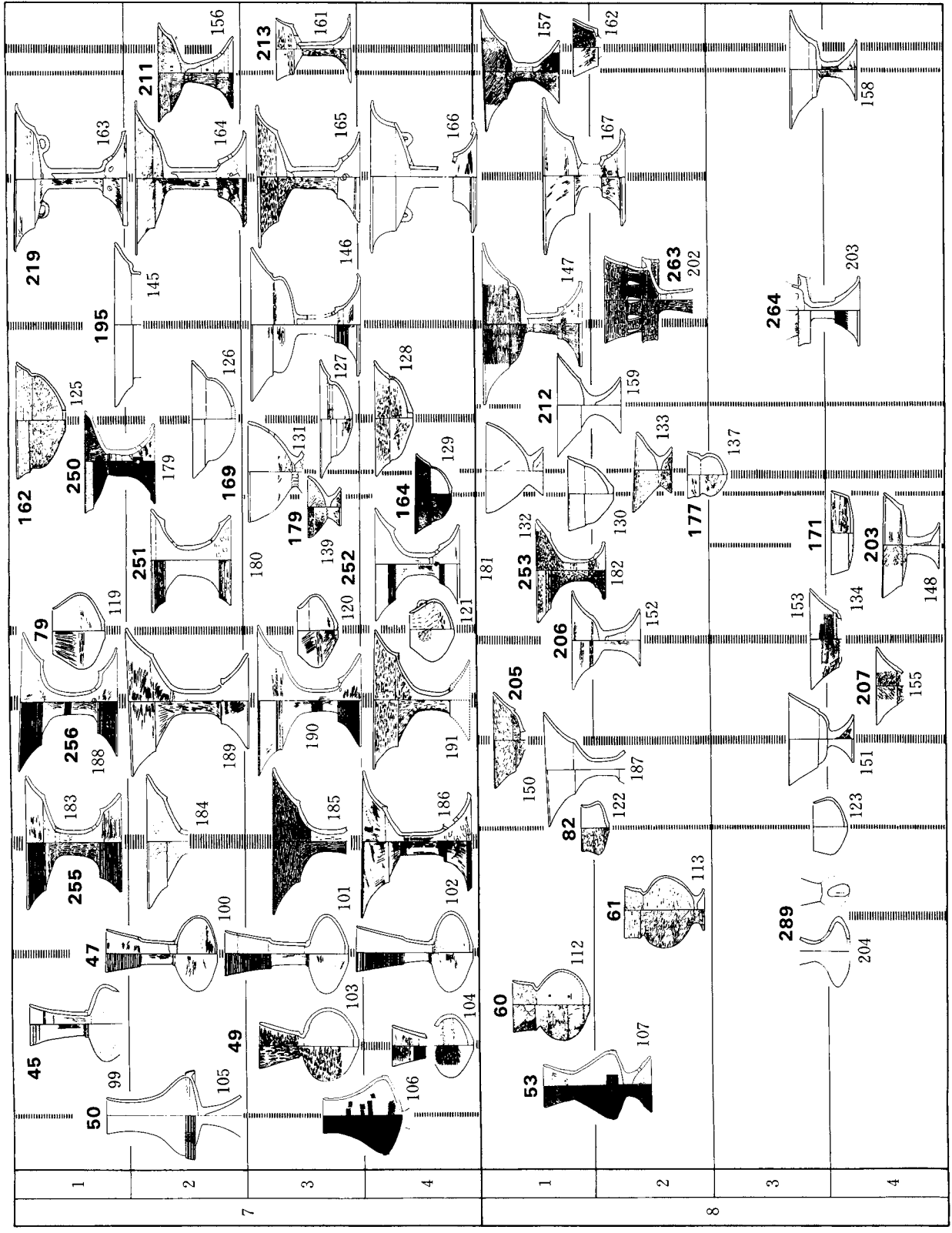
第291図 土器細分編年 1 (S=1/12)

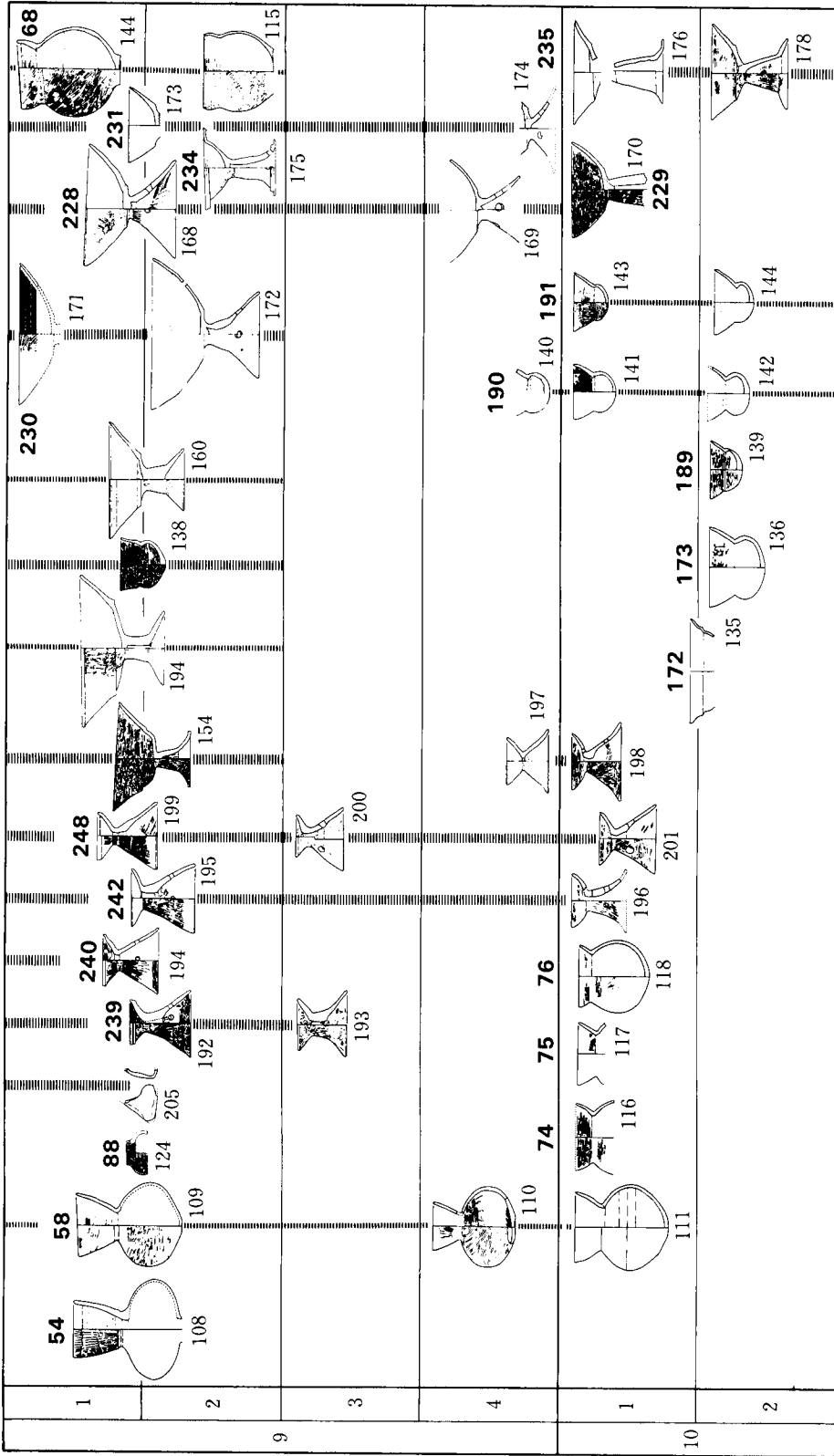




ゴチック体数字は第278～290図の形式番号と一致する。
 羽咋市教委 1991 179・182：吉崎・次場遺跡 羽咋市教委 1994
 41・145 : 本田遺跡 25・104：寺家遺跡 県埋文センター 1988
 122 : 吉崎・次場遺跡 83・90：寺家遺跡 羽咋市教委 1993
 9・26・52・72・89・93・95・112・ 114・132・147・156・157・171・173 : 吉崎・次場遺跡 県埋文センター 1988

第292図 土器細分編年2 (S=1/12)





ゴチック体数字は第278～290図の形式番号と一致する。

- 1・2・3・4・5・7・12・14・15・17・22・
- 24・27・28・46・49・51・55・62・68・85・
- 113・133・134・138・154・185・202 : 谷内アマガヤチ遺跡 本書
- 30・148・155 : 杉谷チャノバタケ遺跡 本書
- 31・56・58・91・108・109・124・149・
- 160・168・192・194・195・199・205 : 徳前C遺跡

- 21・45・50・54・81・125
- 105・126・184
- 106
- 18・57・107・123・130・151・187
- 59・60
- 80・111・176

- : 徳前C遺跡
- : 奥原遺跡
- : 矢田遺跡
- : 国分高井山遺跡
- : 藤橋遺跡
- : 下町茶畑遺跡

- 県埋文センター 1993
- 県埋文センター 1982
- 七尾市教委 1986
- 七尾市教委 1984
- 県埋文センター 1992
- 七尾市教委 1993

第293図 土器細分編年3 (S=1/12)

報告書抄録

ふりがな	やち・すぎたにいせきぐん							
書名	谷内・杉谷遺跡群							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤 則雄・渡辺 誠・佐藤敏也・奥田 尚・辻森由美子・鈴木三男・能城修一・四柳嘉章・滝川重徳・栃木英道							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒921 石川県金沢市米泉町4-133 TEL 0762-43-7692							
発行年月日	1995年3月17日(平成7年)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡No.					
やち 谷内ブンガヤチ	石川県鹿島郡 鹿西町金丸 谷内	17406	36024	36° 56' 58"	136° 50' 6"	1985. 9. 25) 1989. 12. 12	3800	水道 用水 供給
すぎたに 杉谷チャノバタケ	石川県鹿島郡 鹿西町金丸 杉谷	17406	36026	36° 57' 11"	136° 50' 21"	1987. 4. 16) 1988. 9. 2	5700	水道 用水 供給
すぎたに こぶん 杉谷A古墳群	石川県鹿島郡 鹿西町金丸 杉谷・谷内	17406	36028	36° 57' 8"	136° 50' 20"	1986. 9. 8) 1988. 9. 2	11基 方7 円4	水道 用水 供給
かねまるすぎたに 金丸杉谷	石川県鹿島郡 鹿西町金丸 杉谷	17406	36025	36° 57' 5"	136° 50' 27"	1989. 10. 23) 1989. 11. 9	630	水道 用水 供給
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
谷内ブンガヤチ	集落	弥生～古墳 奈良～平安 室町～戦国 安土～江戸	竪穴式建物10 小鍛冶遺構 1 掘立柱建物17 井戸34・墓 1	土器・金属器 石器・炭化米 木器・粘土塊		弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の集落 平安時代の小鍛冶遺構 中世後期～近世の集落		
杉谷チャノバタケ	その他 集落 その他	縄文時代 弥生時代 奈良・平安 中世	落とし穴 10 竪穴式建物17 掘立柱建物 2 地下式墳 1	土器・石器・ 木器・金属器 チマキ状 炭化米塊		縄文時代の落とし穴群 弥生時代中期末葉と後 期後半の二時期に環濠 を巡らせた高地性集落		
杉谷A古墳群	古墳 その他	古墳時代 室町時代	方墳 7 円墳 4 墓 1	鉄鏃 1 土器類 9 石製品 1		全長約60mを測る前方 後円墳杉谷ガメ塚古墳 他、方墳10、円墳9、 計20基よりなる古墳群		
金丸杉谷	集落	平安時代		土器・金属器 石器		1957年、耕地整理中に 土師器壺に内蔵された 隆平永宝11枚他が出土 9世紀～10世紀が中心		

版 图

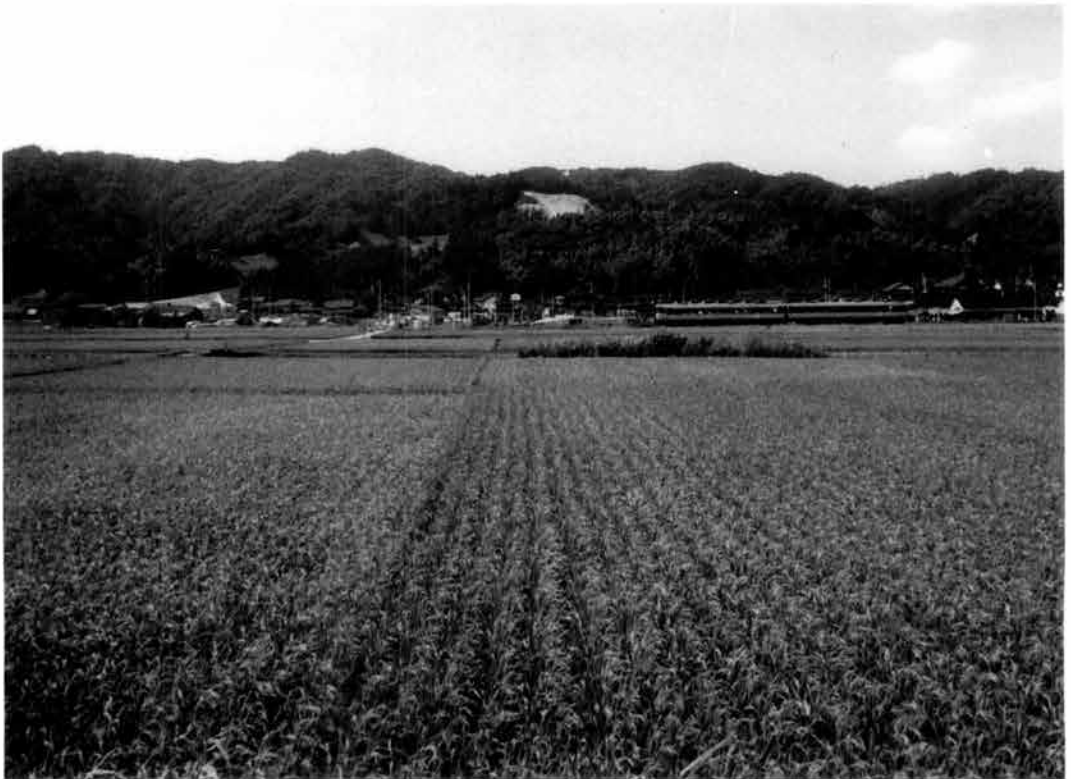


遺跡群全景 (1979年、㈱セントラル航業提供)

図版第 2 谷内・杉谷遺跡群



遺跡群全景（1987年、南東から）



遺跡群全景（1988年、南東から）



表土除去作業



遺構検出作業



遺構検出状況（北側）



完掘状況（北側）



完掘状況（南側）



作業状況



流土掘削作業



遺構検出状況 (中央部)



遺構検出状況 (中央部)



表土除去・遺構掘削作業



遺構検出状況（西側）



完掘状況（西側）



完掘状況（南側）



完掘状況（北側）



作業状況（1987年）



完掘状況（1987年、南東から）



排水作業（1988年）



完掘状況（南西から）



完掘状況（北東から）

図版第 8 谷内ブンガヤチ 調査：1989年



実測作業



実測作業



遺構掘削作業



完掘状況（東側）



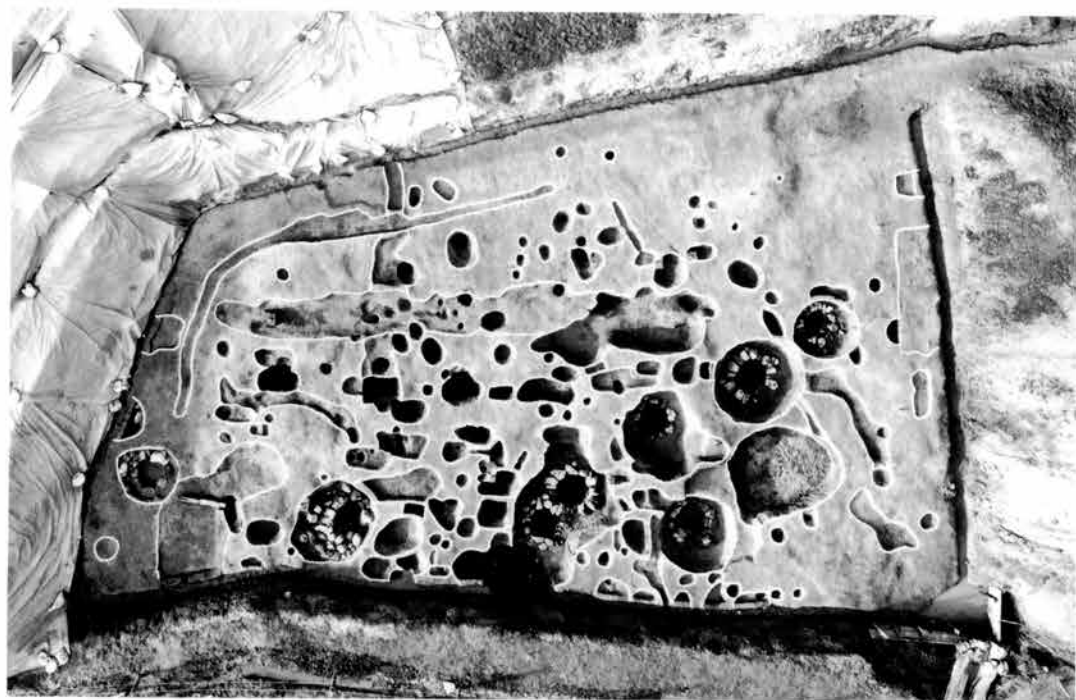
完掘状況（北側）



排水作業



写真測量作業



完掘状況（南側）



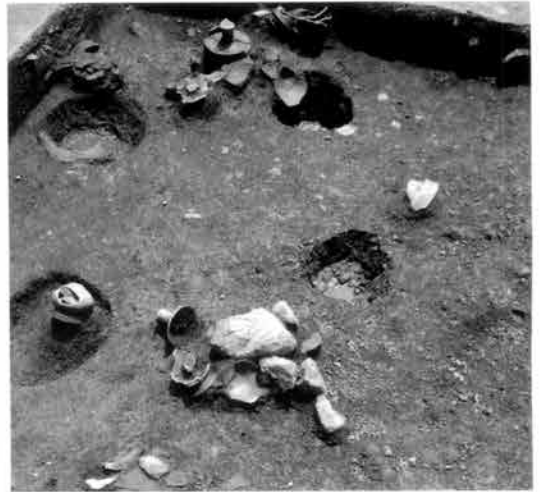
第 1 号竪穴完掘状況（北西から）



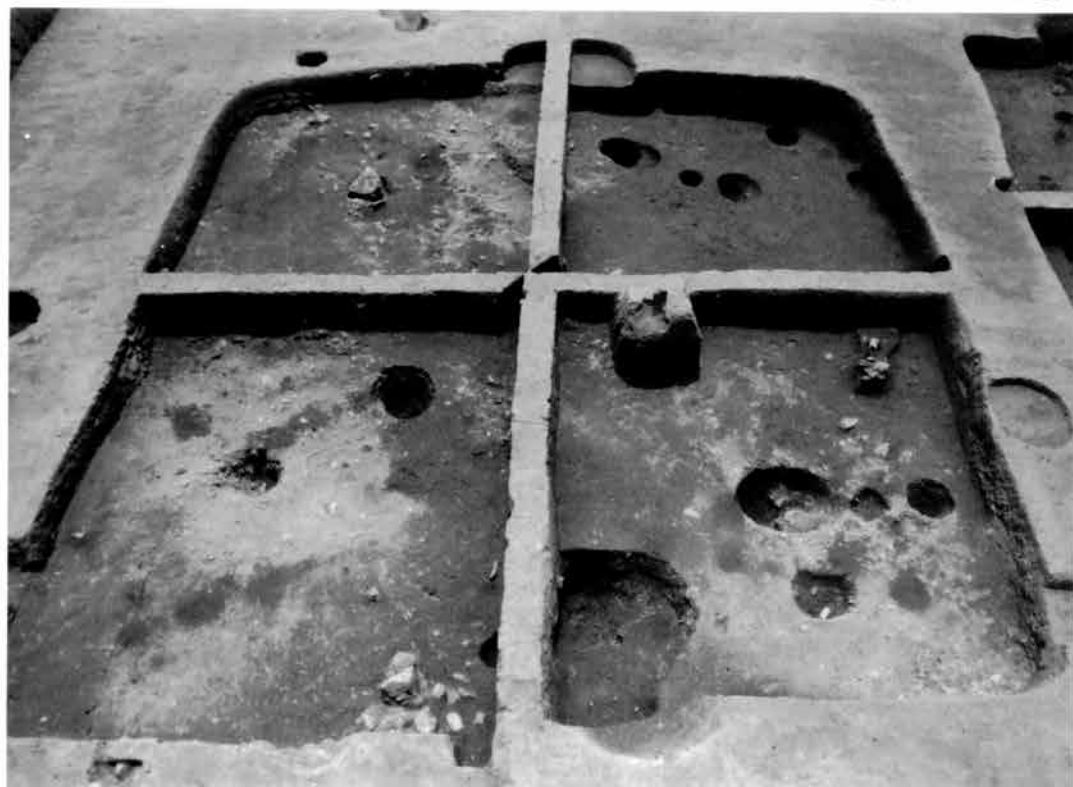
第 2 号竪穴検出状況（北西から）



同上遺物出土状況（北側）



同上遺物出土状況（西側）



第3号竪穴（北西から）



同上遺物出土状況（西側）



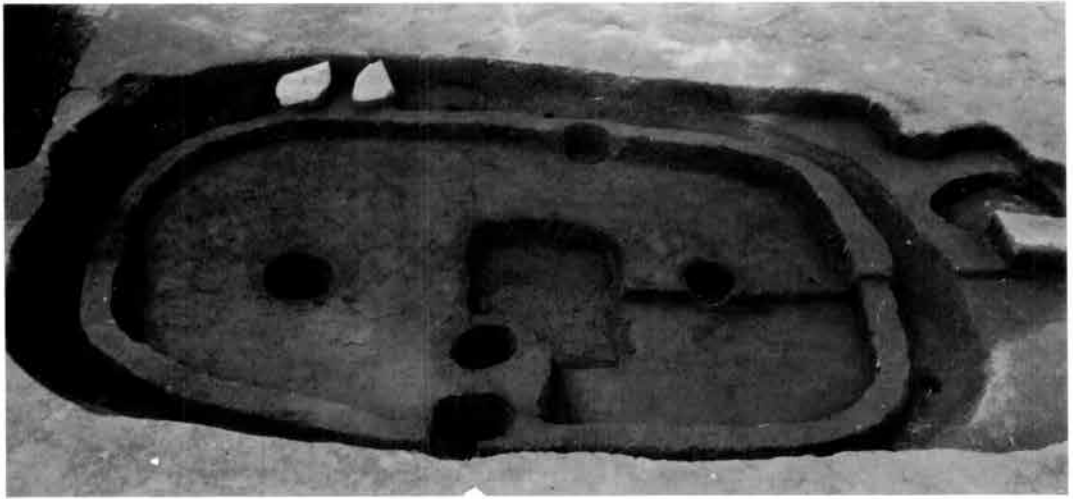
第7号竪穴（北西から）



第4号竪穴（北東から）



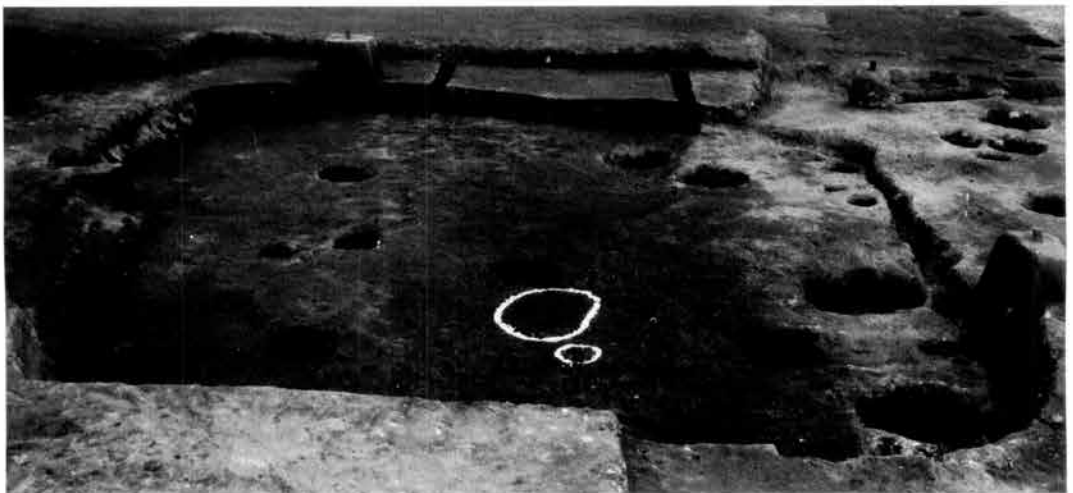
第8号竪穴（北西から）



第9号竪穴完掘状況（南東から）



第10・11号竪穴完掘状況（北西から）



第12号竪穴完掘状況（南西から）



第1号土坑（北西から）



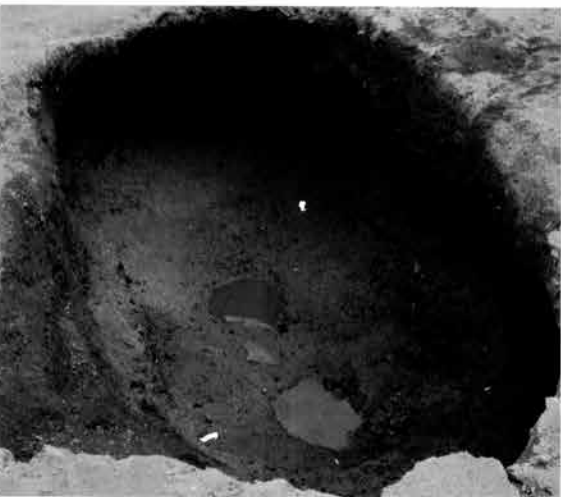
第3号土坑（北西から）



第2号土坑（北西から）



第9号土坑部分（南西から）



第10号土坑（北西から）



第11号土坑（北西から）



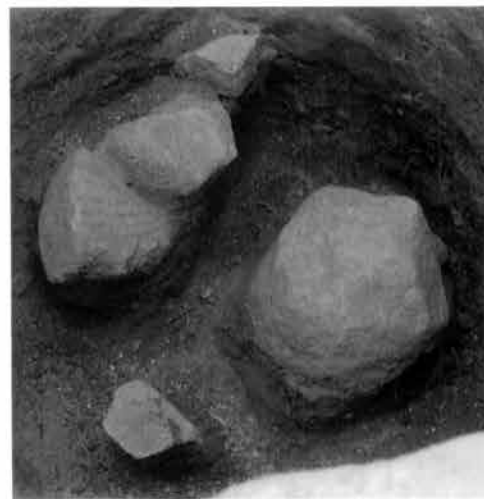
第12号土坑（北東から）



第25号土坑（北東から）



第30号土坑（東から）



同上坑底（東から）



第1号小穴群(第34号土坑他)・第35号土坑（北西から）



第1号小穴群(第34号土坑)遺物出土状況(北から)



同上部分(東側)



同上部分(西側)



第35号土坑(北西から)



第1号土器埋納小穴(北東から)



第1号墓(南東部)遺物出土状況(北西から)



第11号溝(北西から)



第19号溝(南から)



第50号溝(北西から)



第60号溝(東から)



第1号井戸（北西から）



第3号井戸全景（南東から）



第3号井戸部分（北西から）



第3号井戸内部



第4号井戸（東から）



第4号井戸断面（北東から）



第 5 号井戸 (北東から)



第 6 号井戸 (北東から)



第 7 号井戸 (北西から)



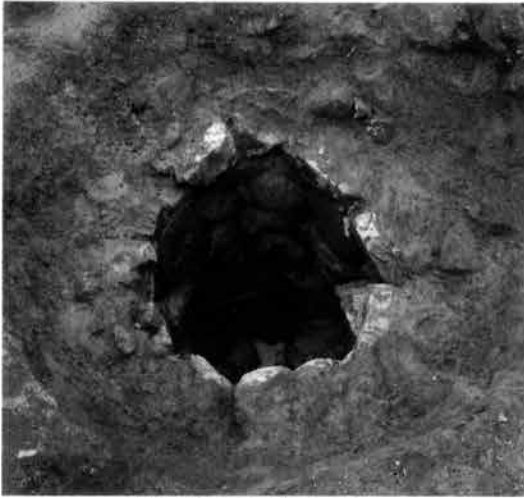
第 8 号井戸 (南東から)



第 9 号井戸 (北西から)



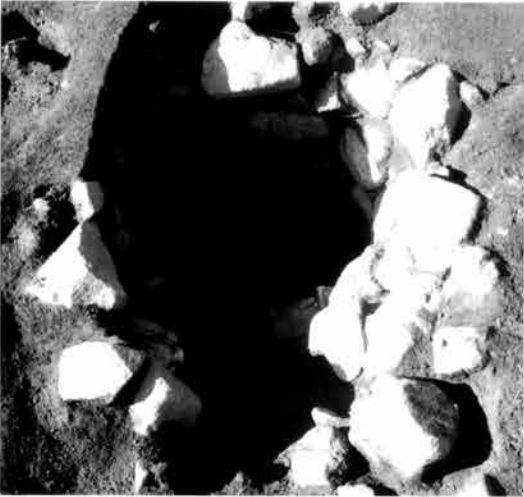
第 10 号井戸 (南東から)



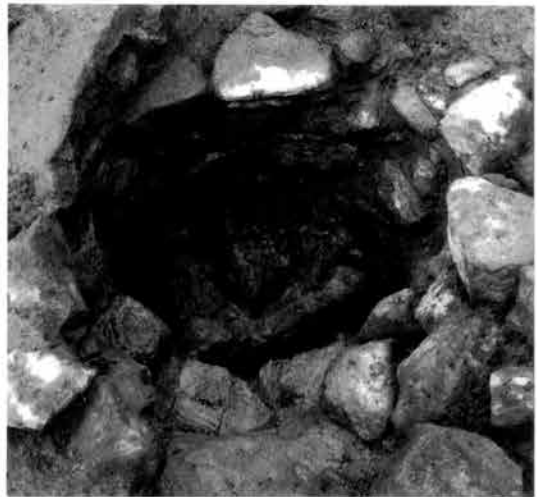
第11号井戸（北西から）



第12号井戸（北西から）



第13号井戸（南東から）



第13号井戸（部分）



第14号井戸（南東から）



第16号井戸（西から）



第17号井戸（東から）



第18号井戸（東から）



第19号井戸（東から）



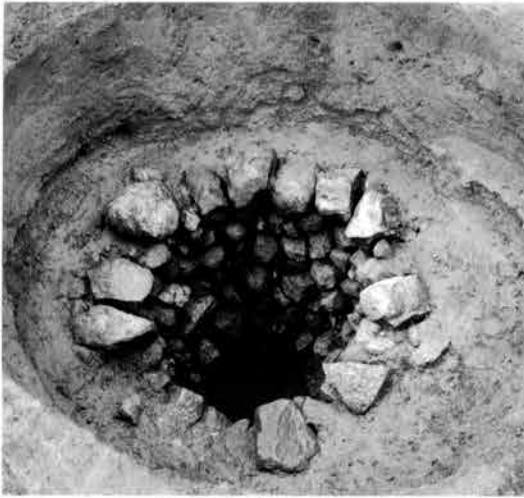
第20号井戸（北西から）



第21・22号井戸（北西から）



第23号井戸（北東から）



第24号井戸（東から）



第25号井戸（北西から）



第26号井戸（北西から）



第27号井戸（西から）



第30号井戸（南西から）



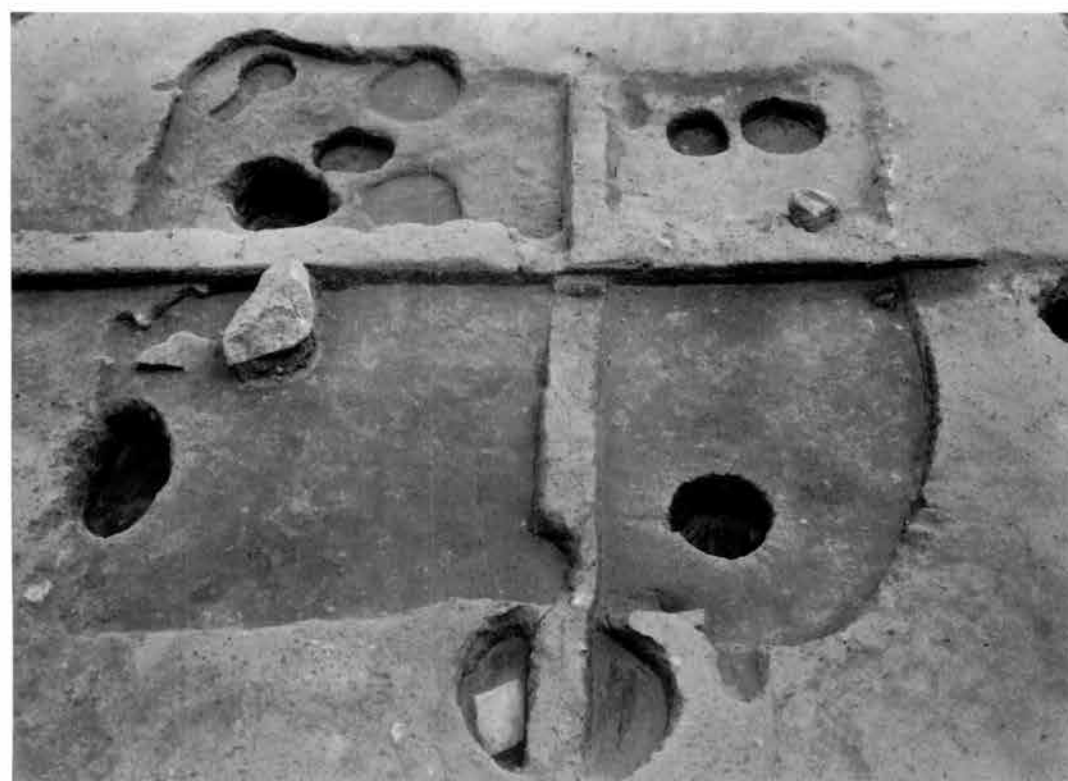
第31号井戸（南西から）



第1号室（北西から）



第5号室（北東から）



第5号竪穴状遺構（北西から）



第 2 号掘立柱式建物（南西から）



第 3 号掘立柱式建物（南東から）



第 5 号掘立柱式建物（南東から）



第 8 号掘立柱式建物（南西から）



第 15 号掘立柱式建物（西から）



第 16 号掘立柱式建物（西から）



調査区積雪状況（1985年12月、北から）



調査参加者（1989年12月）



掘削前全景（西から）



完掘状況（西から）



中央部完掘状況（東から）



抜根作業



第1号環濠掘削作業



第1号掘立柱式建物検出状況（南東から）



第9号段状遺構（南から）



第10号段状遺構（南西から）



第12・13号竪穴完掘状況（南東から）



第12号竪穴（南東から）



同左遺物出土状況（西側）



同上遺物出土状況（中央部）



同左上部分（中央部）



第18号竪穴（南から）



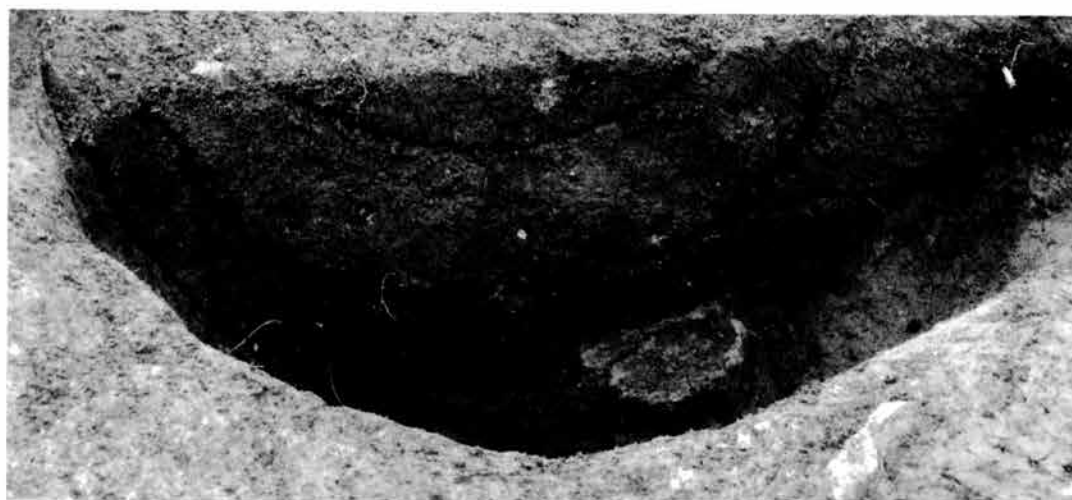
同左中央部焼土他検出状況



同上遺物出土状況（中央部）



同左上部分（中央部）



第18号竪穴灰穴土層断面（東から）



第1号環濠土層断面



同 左



第1号環濠西側完掘状況（南から）



同上（北から）



第1号環濠南西部土層断面（北西から）



同上部分（北西から）



第1号環濠南西部完掘状況（南東から）



掘削前全景（南東から）



完掘状況（南東から）



完掘状況（北西から）



試掘作業 (1986年)



谷部流土完掘状況 (南東から)



南東部掘削作業



表土除去・搬出作業



南部掘削作業



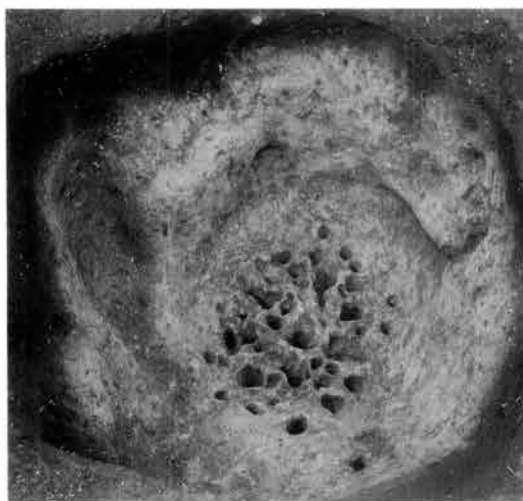
南部清掃作業



平板測量作業 (1988年)



南部掘削作業 (1988年)



第9号土坑 (南東から)



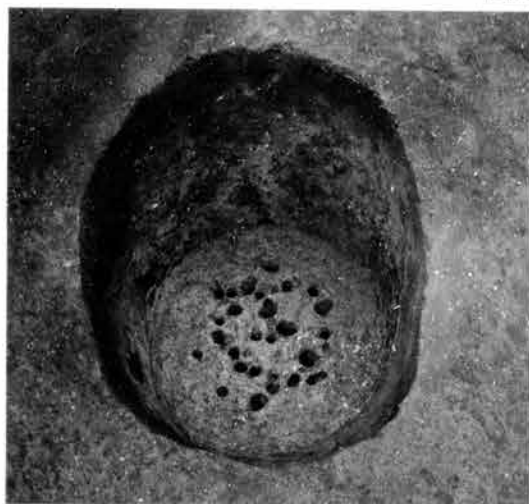
第10号土坑 (西から)



同右上土層断面 (南から)



同左下部 (南から)



第11号土坑 (南から)



第13号土坑 (南から)



第12号土坑 (南東から)



第14号土坑 (南から)



第23号土坑 (南東から)



第24号土坑 (南西から)



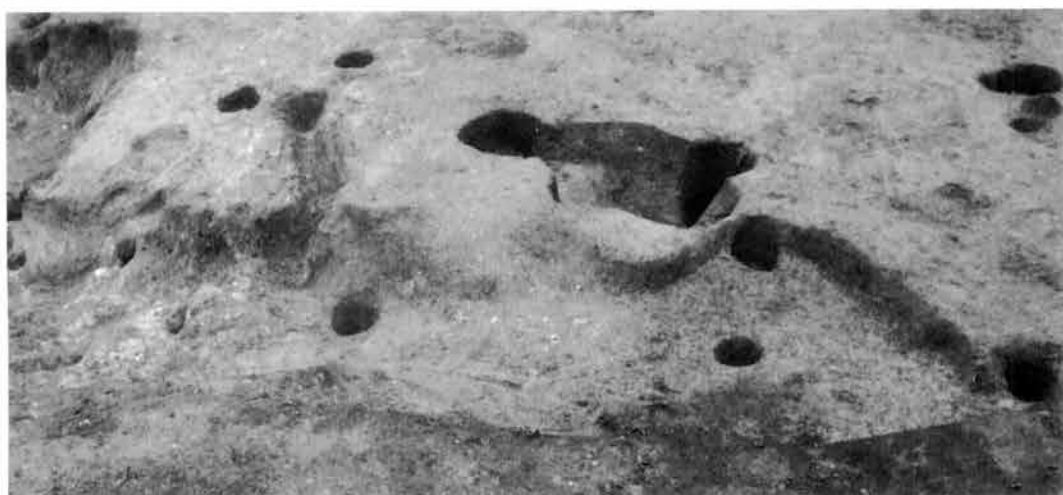
第25号土坑（南から）



第21・22号土坑（南東から）



第16・17号土坑完掘状況（南東から）



第18号土坑完掘状況（東から）



第20・21号竪穴他完掘状況（北西から）



同上（南から）



第1・12号段状遺構（南西から）



第2号段状遺構完掘状況（南から）



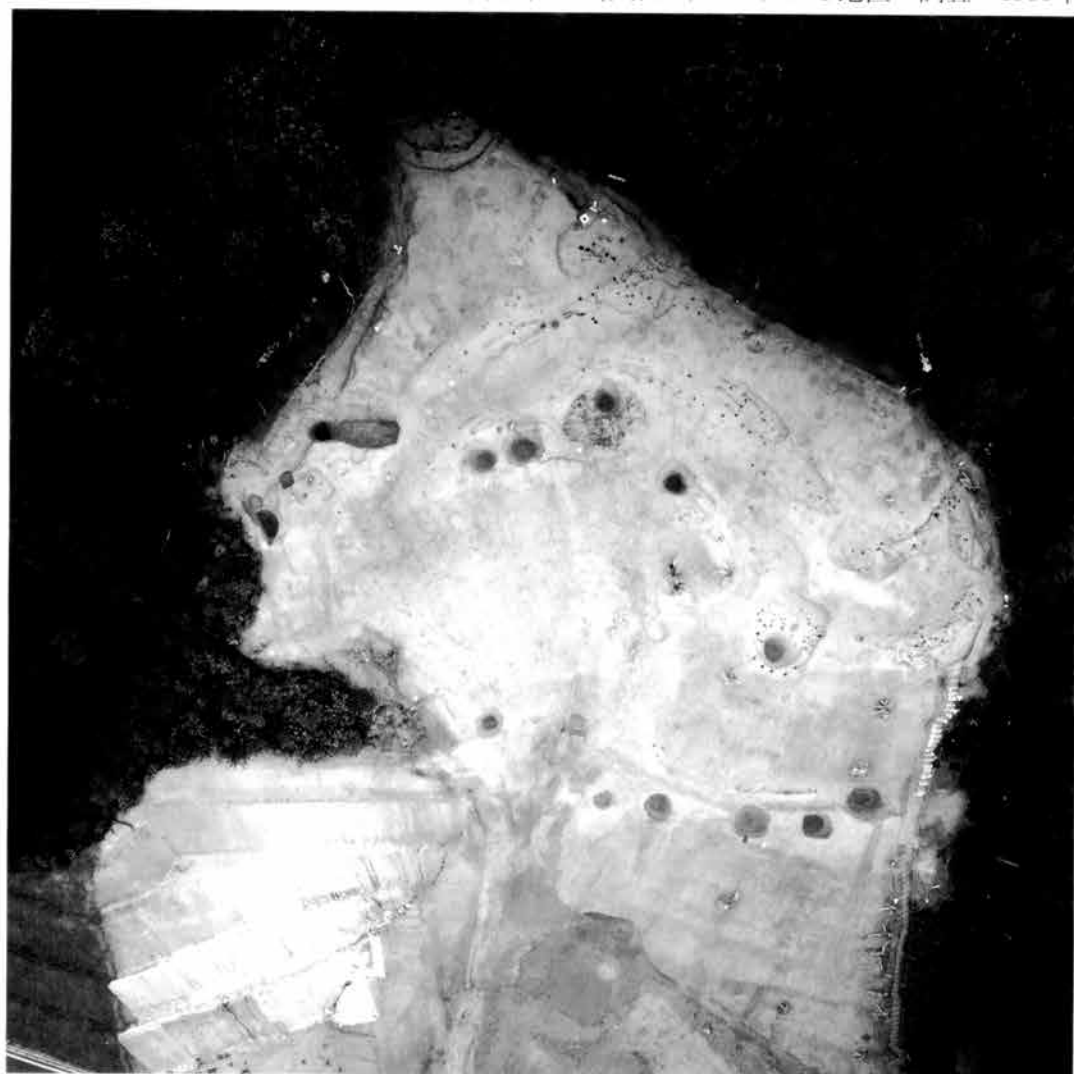
第22・23号竪穴完掘状況（北から）



同上部分（北部、南東から）



第22・23号竪穴炉土層断面・遺物出土状況（南西から）



完掘状況



完掘状況（南東から）



機材搬入作業



遺構掘削作業



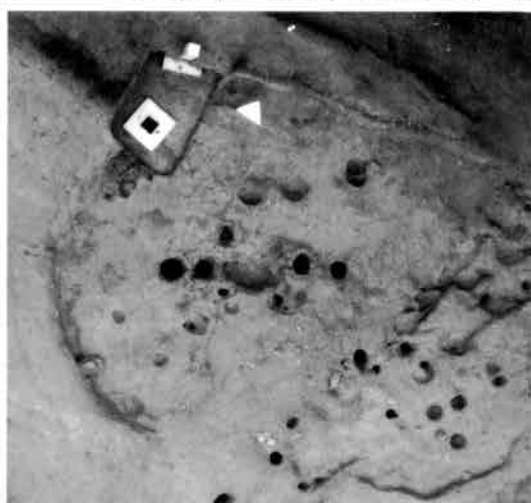
同 上



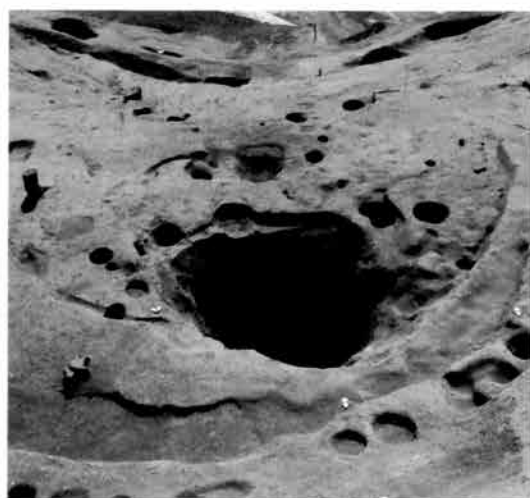
谷部掘削作業



第26・27号竪穴



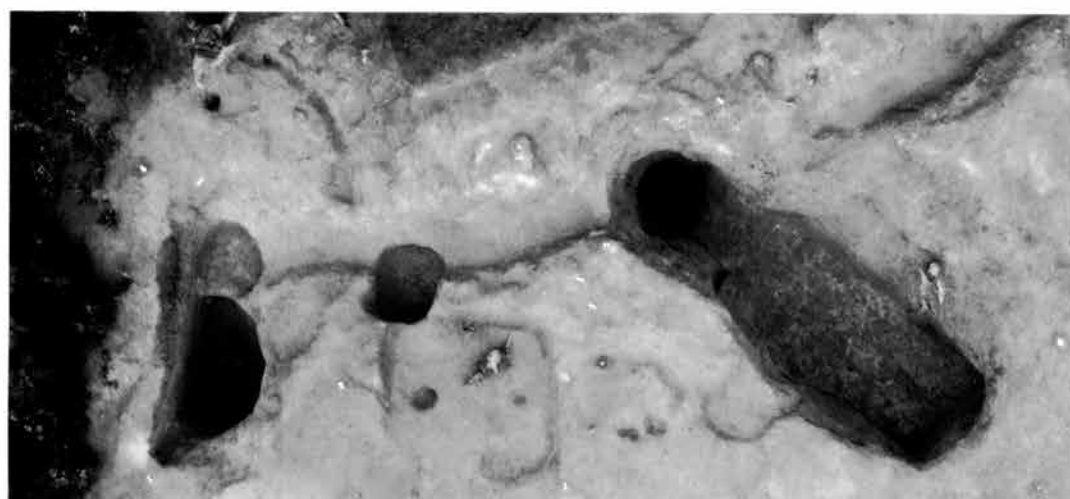
第28号竪穴



第36号竪穴（北東から）



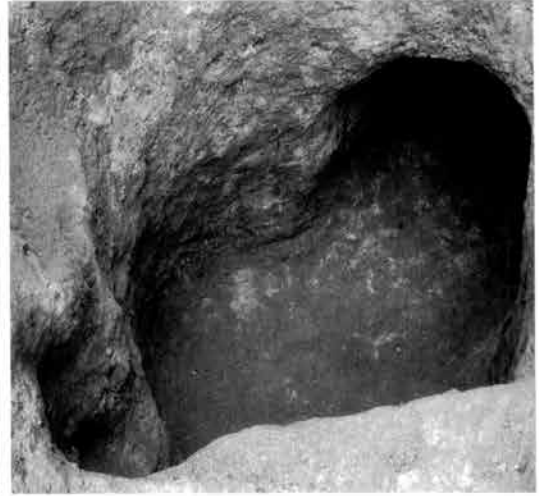
第2号土屋（北西から）



第1号地下式墳他完掘状況



第1号地下式壙側面（北東から）



同左坑底（北東から）



同上縦坑部分（南西から）



第35号土坑・第3号上屋（南西から）



第36号土坑・第7号段状遺構



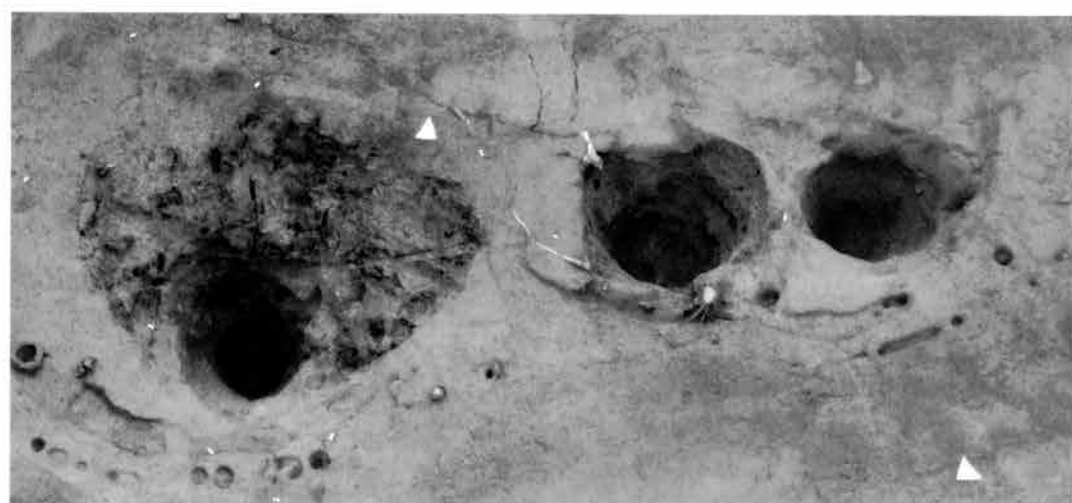
第32号土坑（北西から）



第3号段状遺構（北から）



第5号段状遺構（南から）



第30・31・38号土坑他完掘状況



第4号上屋・段状遺構南部他（北から）



第38号土坑・第4号上屋部分（南東から）



第2号環濠北東部完掘状況（南西から）



同上北東側断面（南西から）



同上中央部（北東から）



第46号土坑

第45号土坑 第44号土坑

第2号環濠西南部検出状況



試掘作業（第5号墳）



供養風景（第1～4号墳）



掘削前全景（南西から）



完掘状況（南西から）



第3・4号墳掘削作業



完掘状況（南東から）



第1号墳埋葬施設完掘状況（北西から）



第1号墳周溝・第1号周溝南東側土層断面（南西から）



第1・2号墳間周溝土層断面（南西から）



第2号墳埋葬施設土層断面（南東から）



第3号墳埋葬施設（南西から）



第3・4号墳（北西から）



第4号墳埋葬施設（北西から）



第5号墳（南西から）



同左（北西から）



第5号墳埋葬施設完掘状況（北西から）



第6～8号墳完掘状況（北東から）



第7・8号墳掘削作業



第8号墳（北東から）



第6号墳埋葬施設（南西から）



第7号墳埋葬施設（北東から）



第10号墳掘削前（東から）



第9・10号墳（北東から）



第9・10号墳（北から）



第10号墳埋葬施設土層断面（西から）



同右上完掘状況（北から）



第1号土坑（西から）



第11号墳埋葬施設（北から）



掘削作業風景（西から）



南部掘削作業



北部完掘状況（南東から）



南部完掘状況（北東から）



竪穴式建物出土土器



YP27



YP33



YP37



YP38



YP28



YP35



YP32



YP39



YP29



YP41



YP34



YP42



YP30



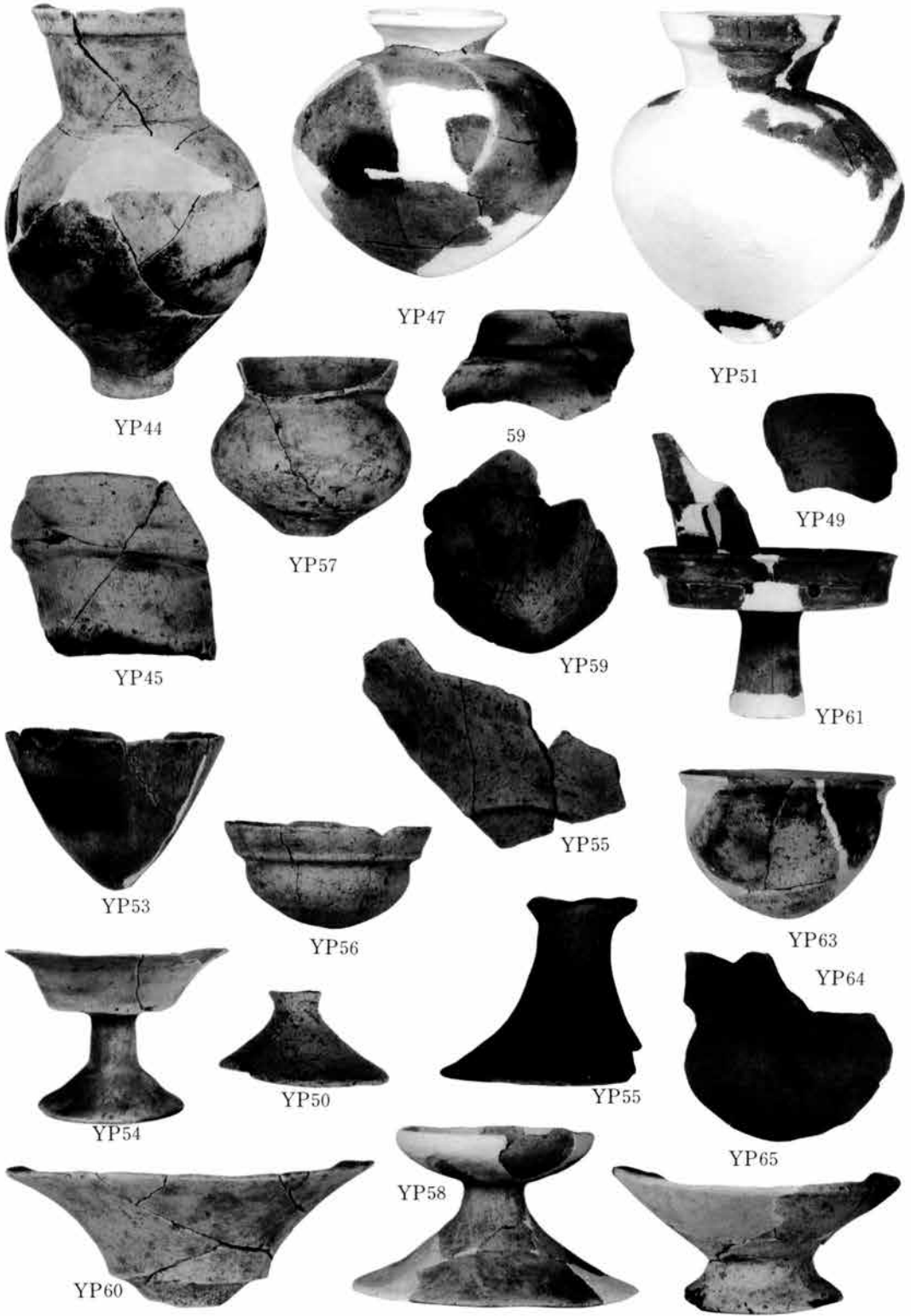
YP31



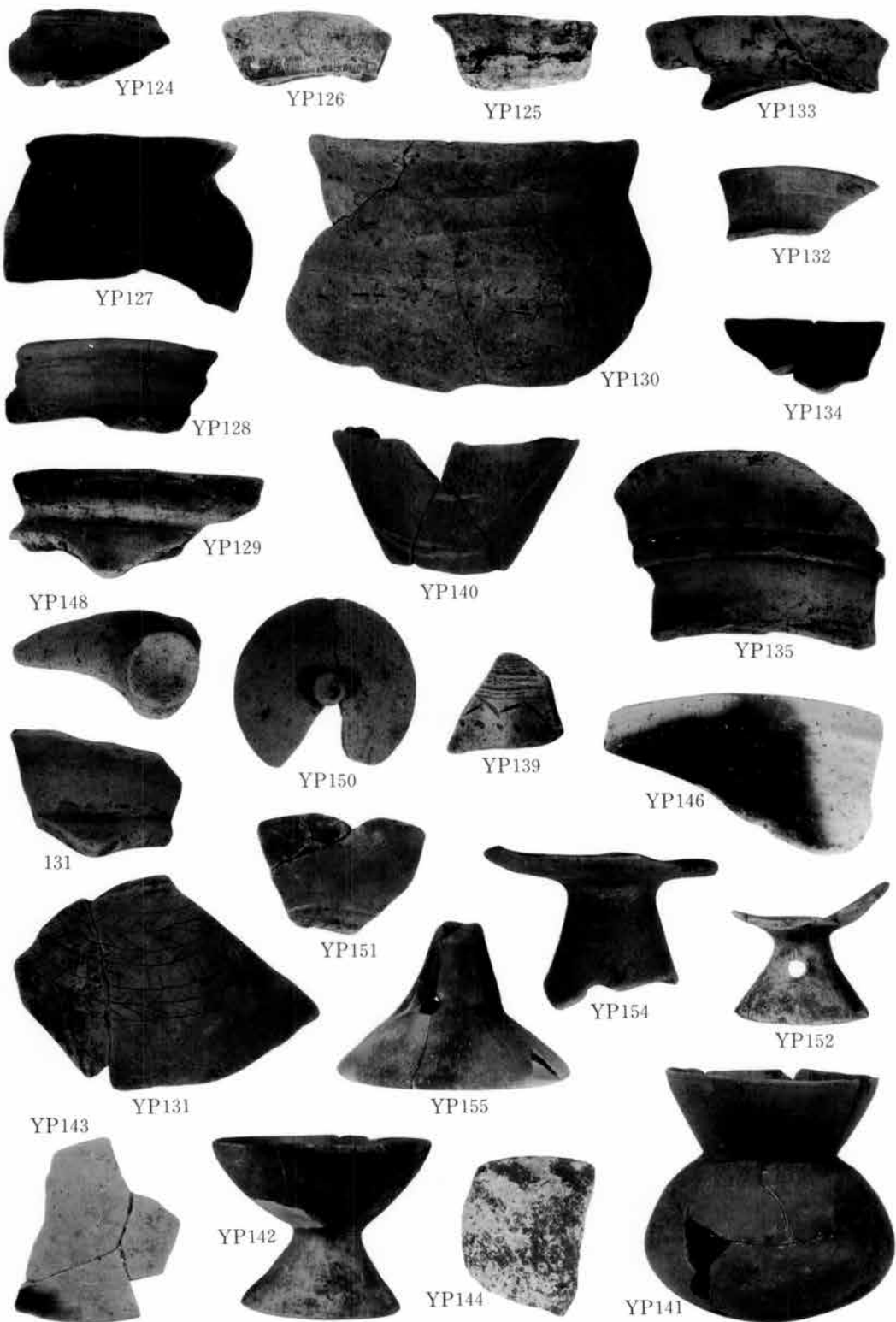
YP36



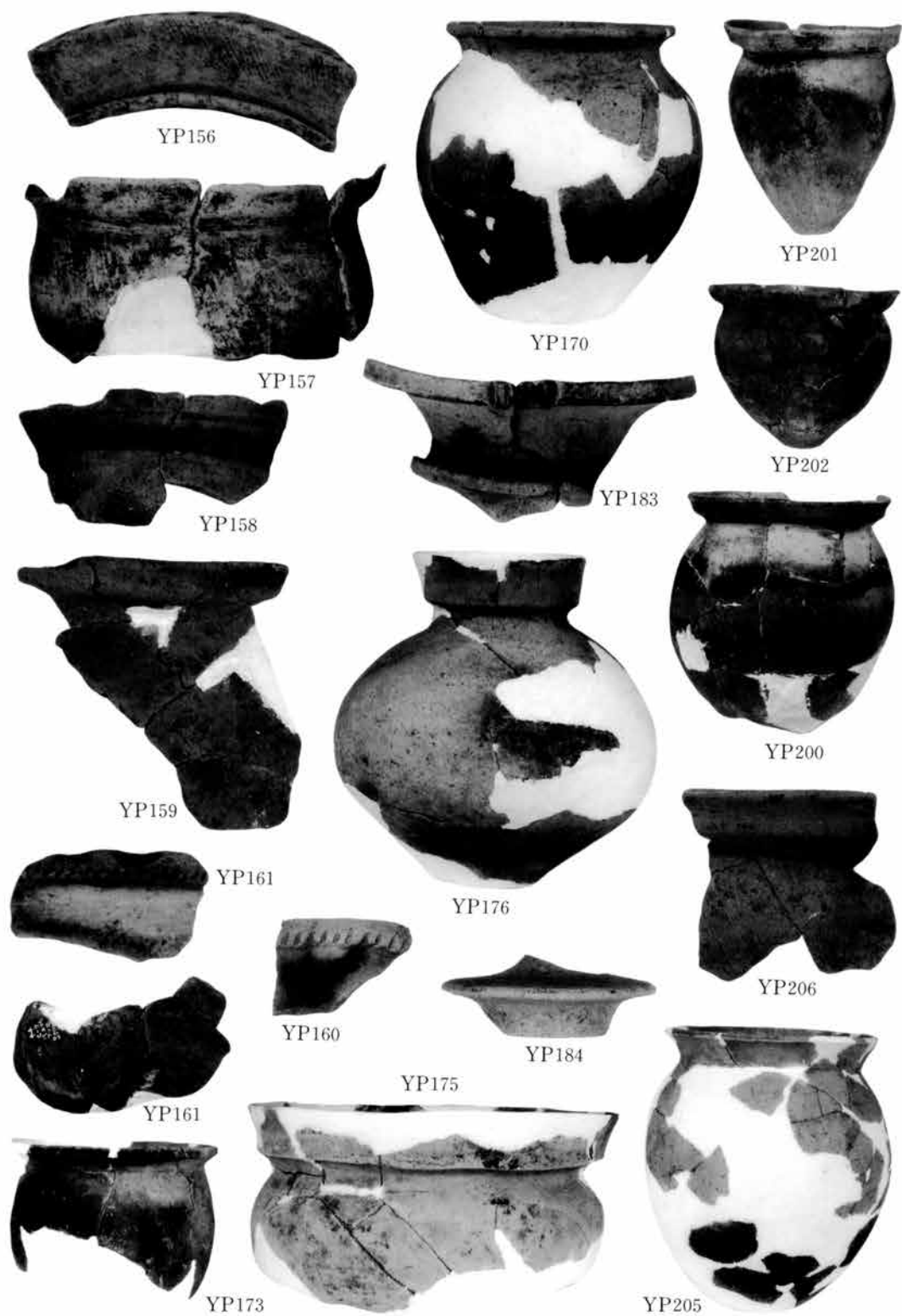
YP43



第 2 号竖穴式建物出土土器



第12号竖穴式建物出土土器



土坑出土土器



YP219



YP234



YP230



YP218



YP221



YP233



YP223



YP225



YP234



YP222



YP231



YP226

第 2 号土坑出土土器



第 2 号土坑出土土器



YP252



YP247



YP246



YP220



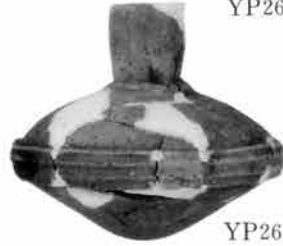
YP263



YP244



YP259



YP261



YP262



YP258



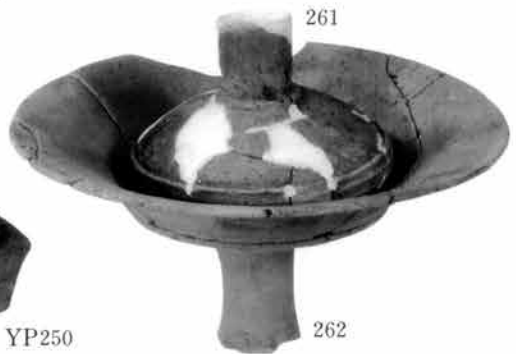
YP264



YP251



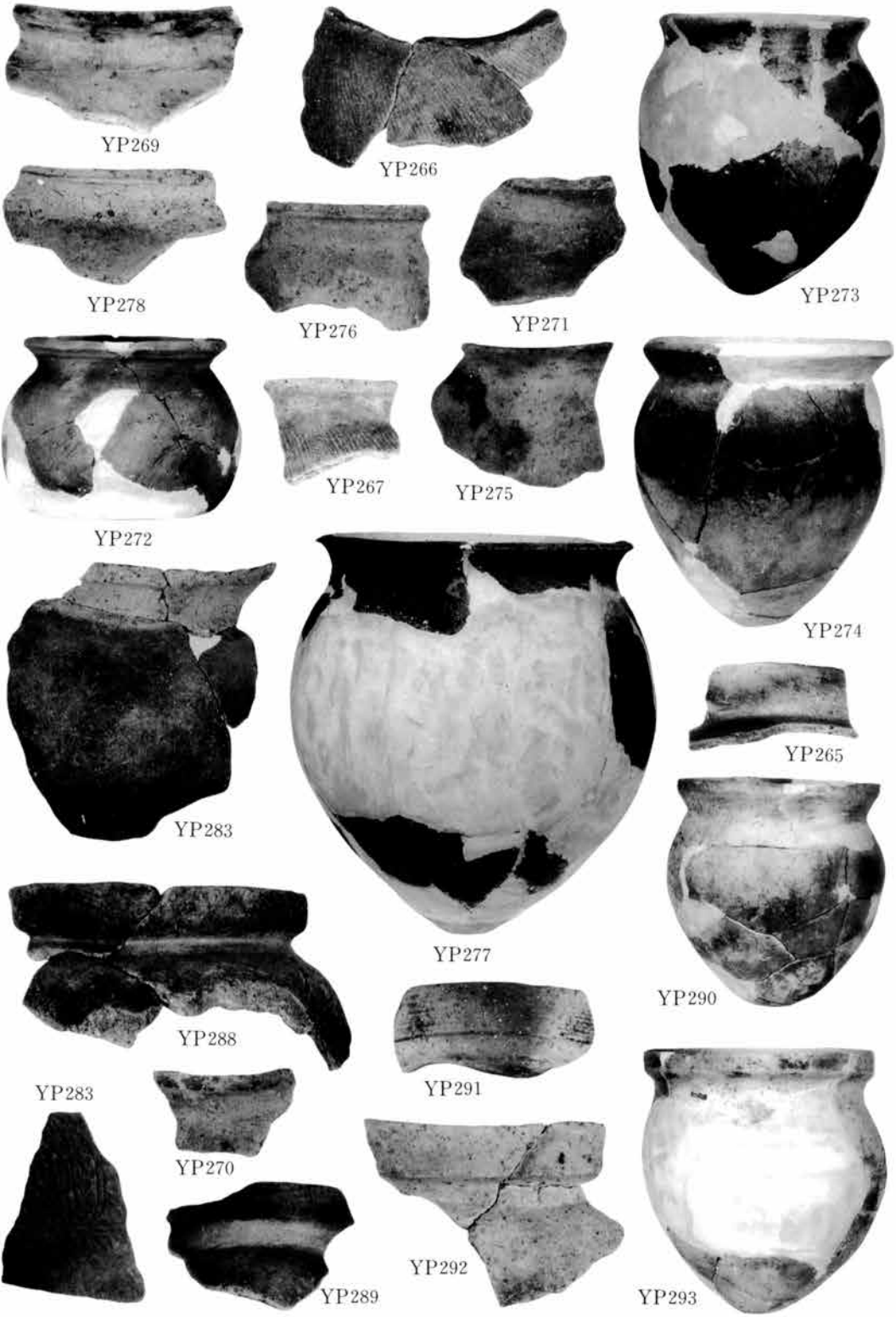
YP250



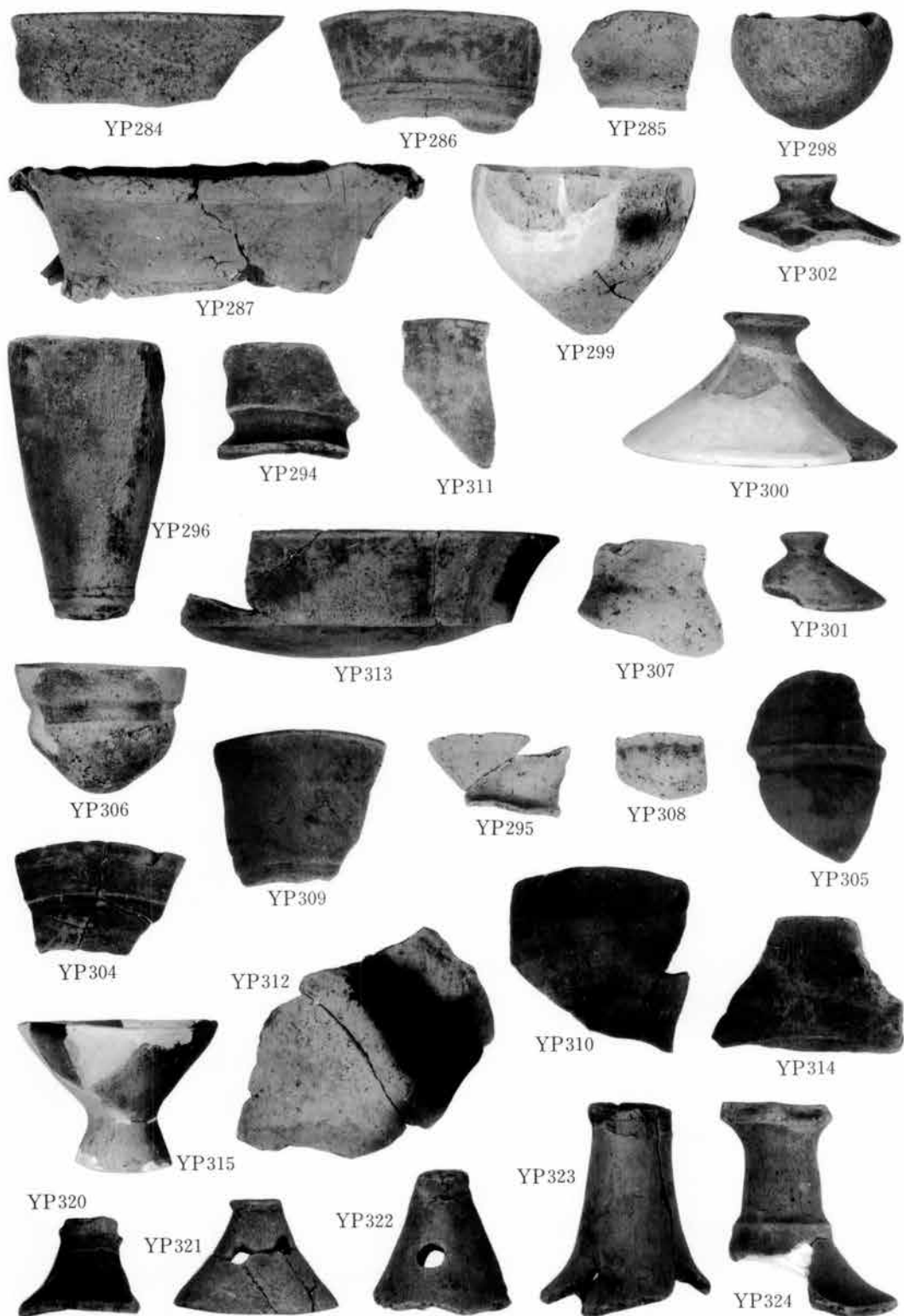
261

262

第 2 号土坑出土土器



第10号土坑出土土器



第10号土坑出土土器



YP353



YP354



YP355



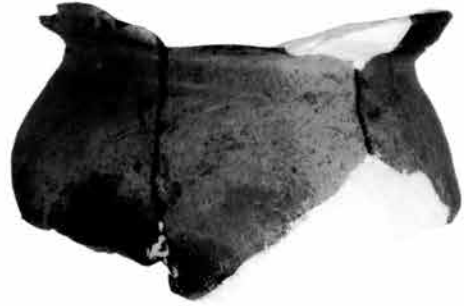
YP357



YP360



YP361



YP356



YP358



YP363



YP367



YP370



YP366



YP364

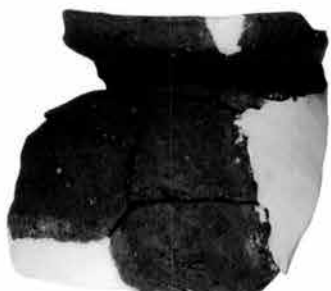


YP368

第30号土坑出土土器



YP374



YP377



YP399



YP396



YP382



YP383



YP388



YP378



YP395



YP387



YP381

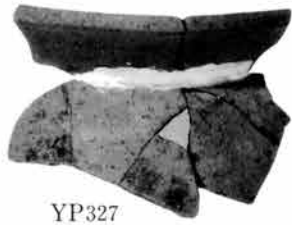


YP397



YP398

第30号土坑出土土器



YP327



YP338



YP330



YP335



YP349



YP329



YP343



YP340



YP341



YP337



YP339



YP342



YP407



YP404



YP412



YP402



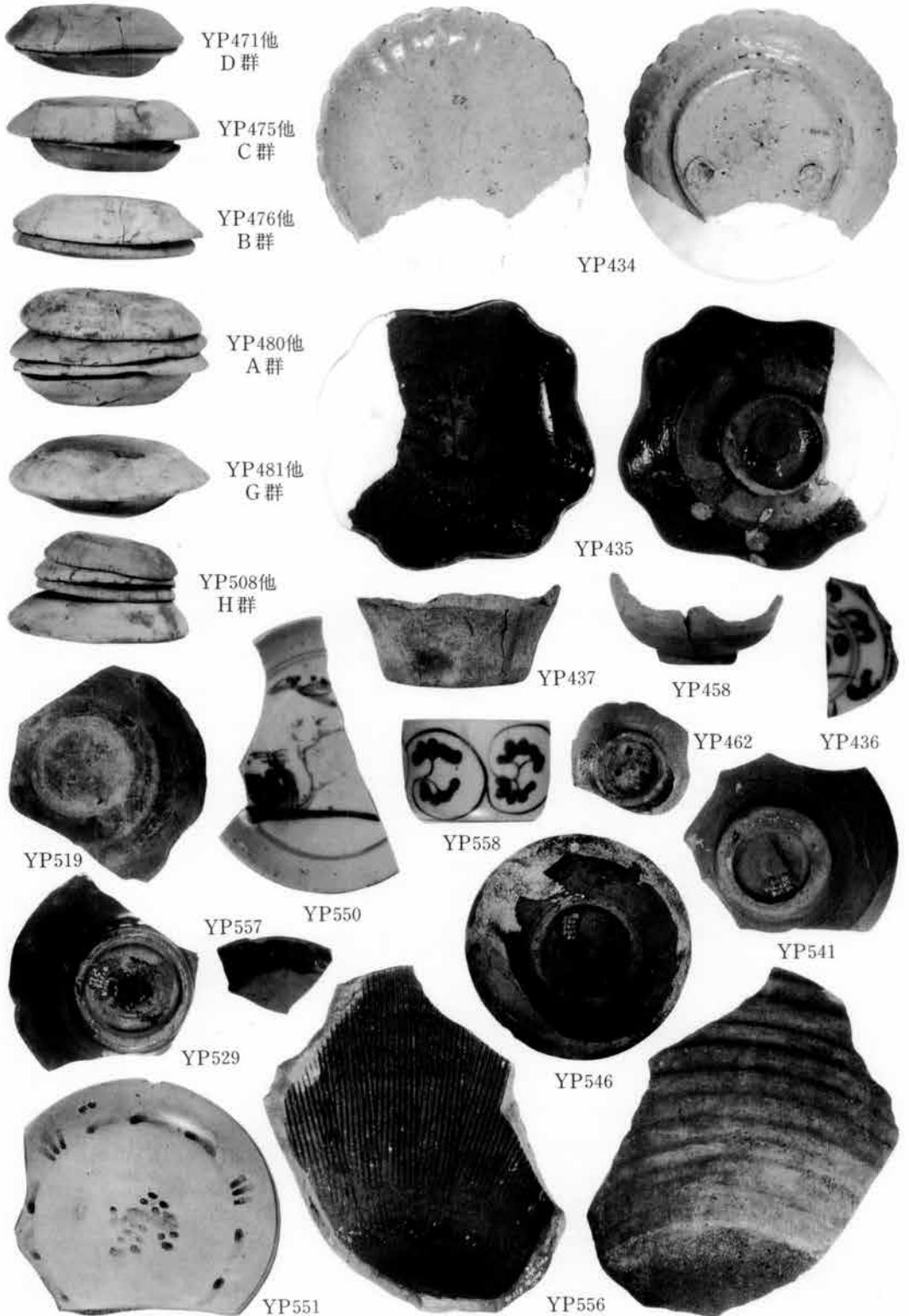
YP411



YP413

土坑・溝出土土器

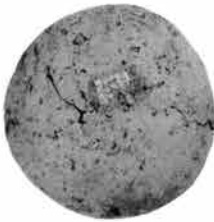
図版第 66 谷内ブンガヤチ遺跡 遺物



柱穴・小穴・井戸出土土器類



YP560



YP561



YP562



YP584



YP586



YP567



YP566



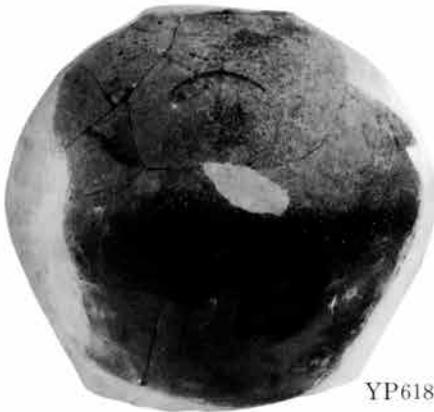
YP602



YP603



YP651



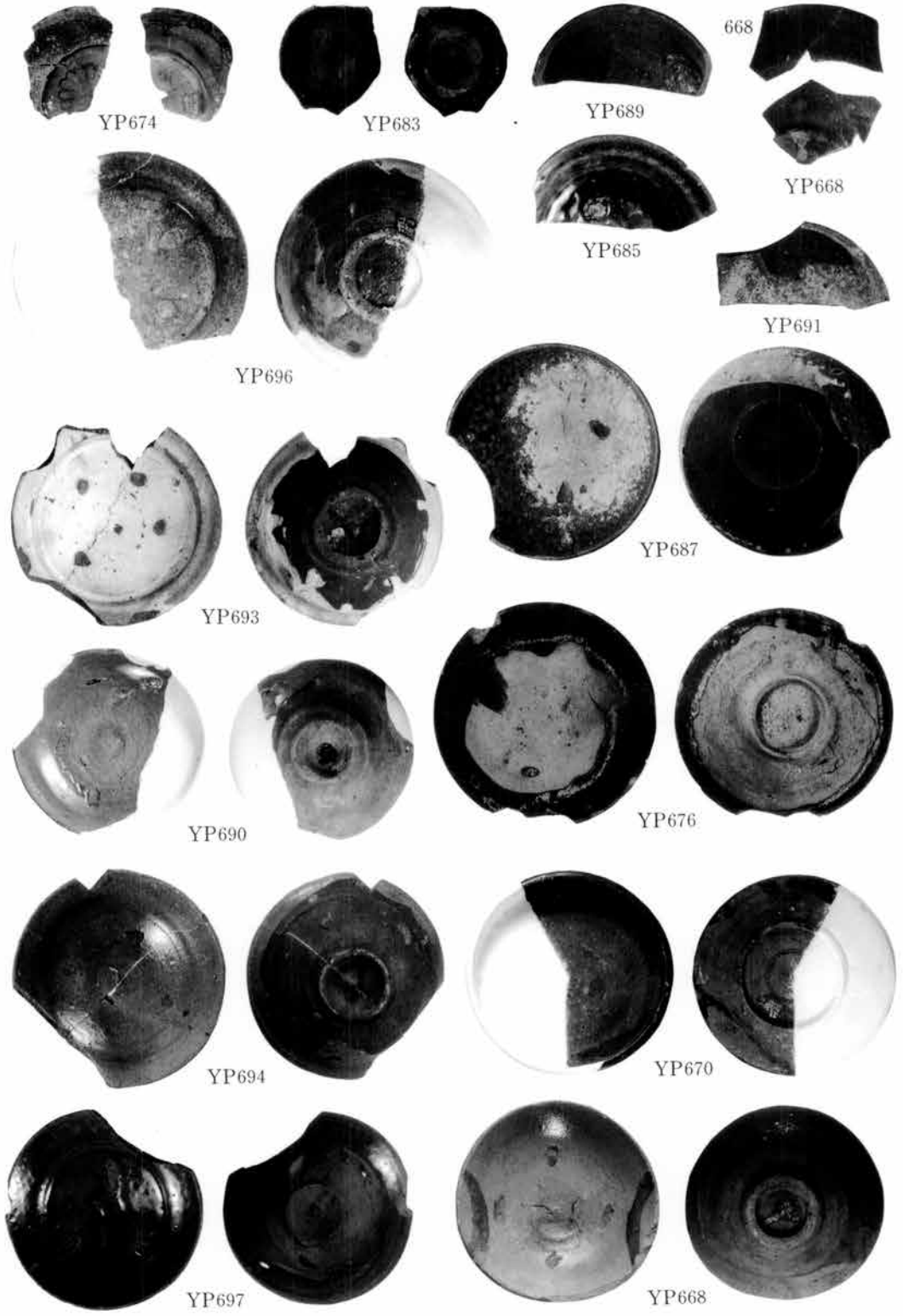
YP618



YP615



YP605



第50号溝出土土器



第50号溝出土土器類



YP740



YP741



YP758



YP749



YP752



YP795



YP797



YP780



YP796



YP787



YP794



YP799



YP807



YP801



YP800



YP785



YP783



YP786



YP820



YP850



YP837

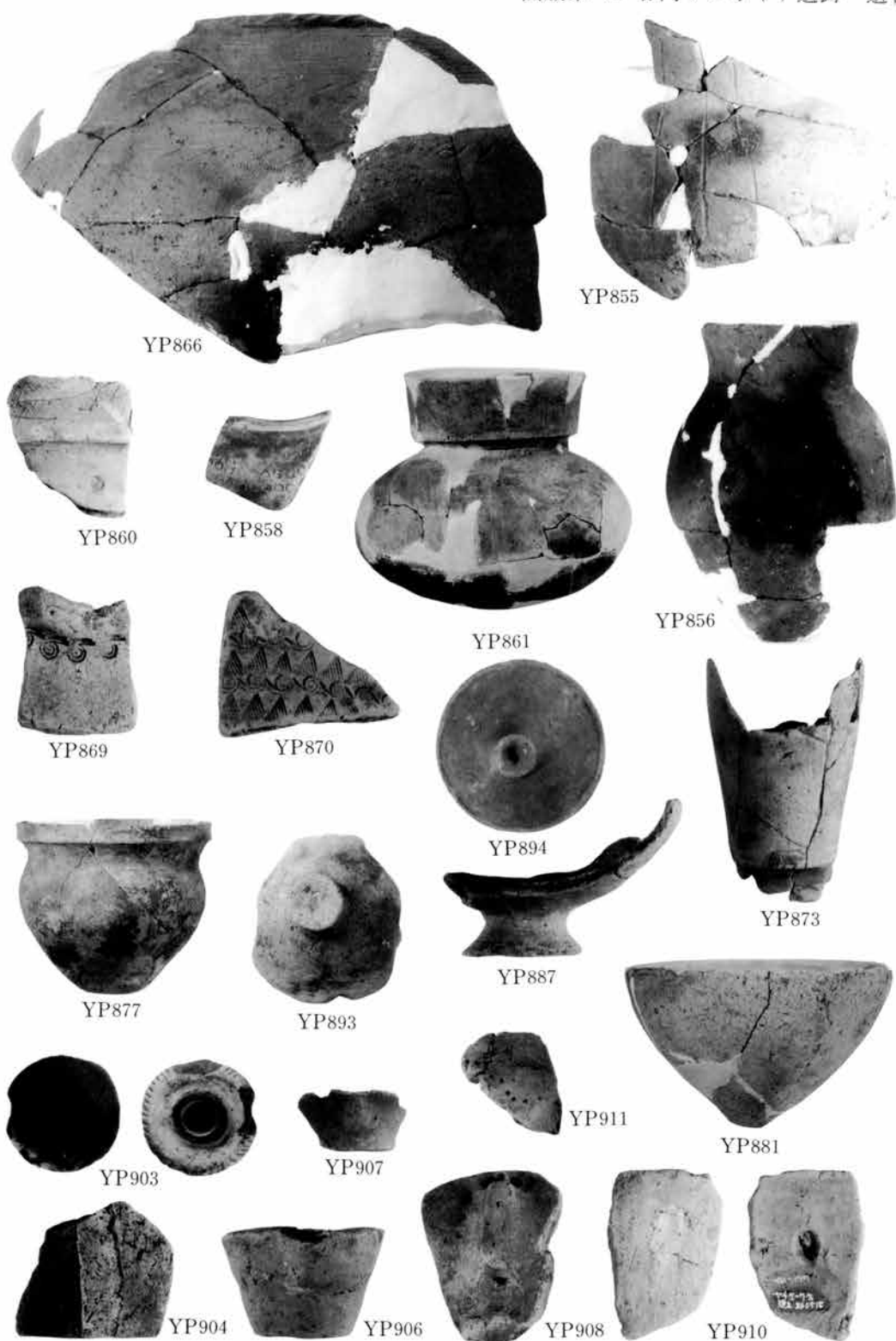


YP832



YP879

遺構外他出土土器



遺構外他出土土器



YP945



YP948



YP949



YP919



YP917



YP918



YP920



YP936



YP932



YP951



YP952



YP924



YP627



YP966



YP952



YP987



YP989

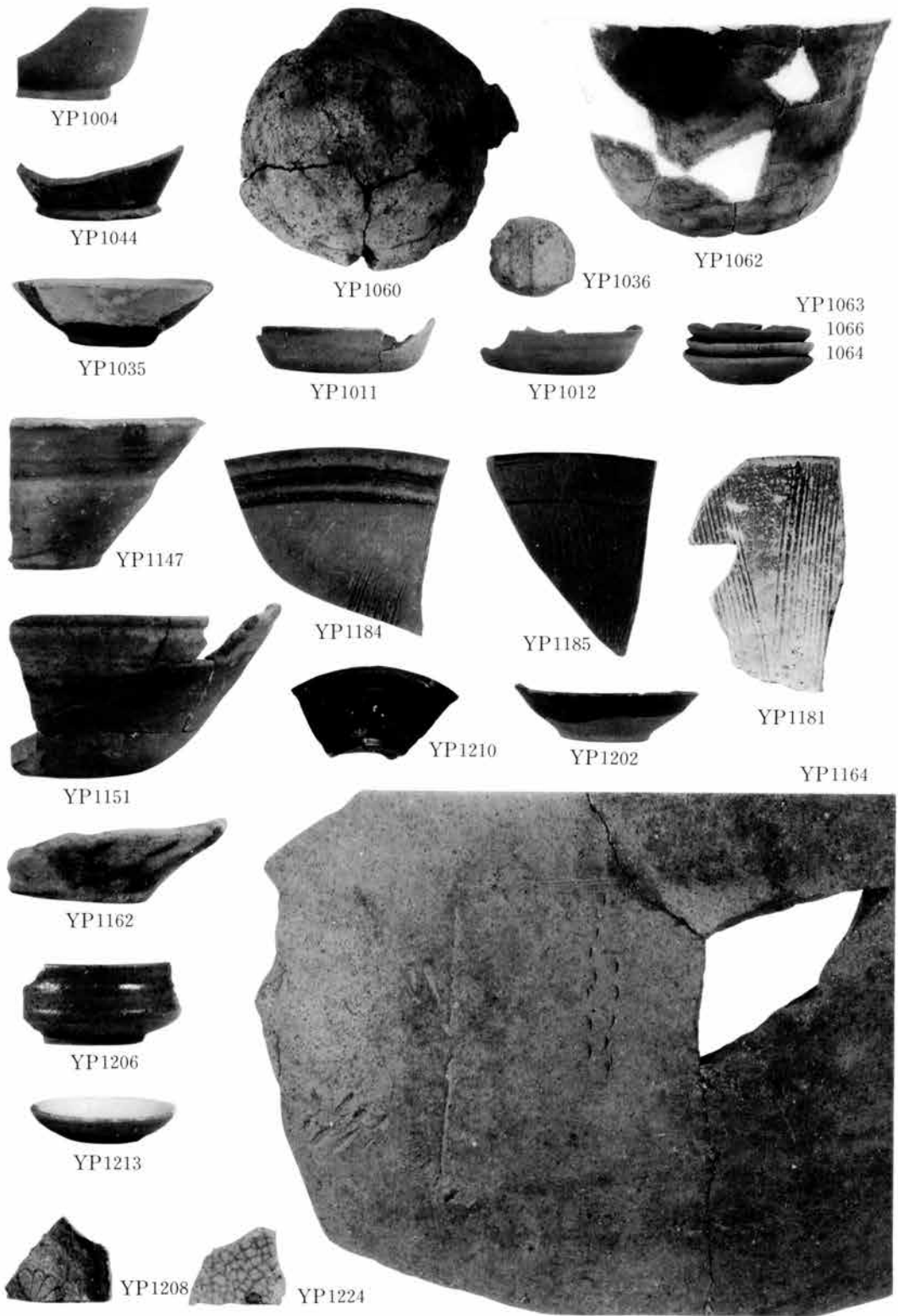


YP995



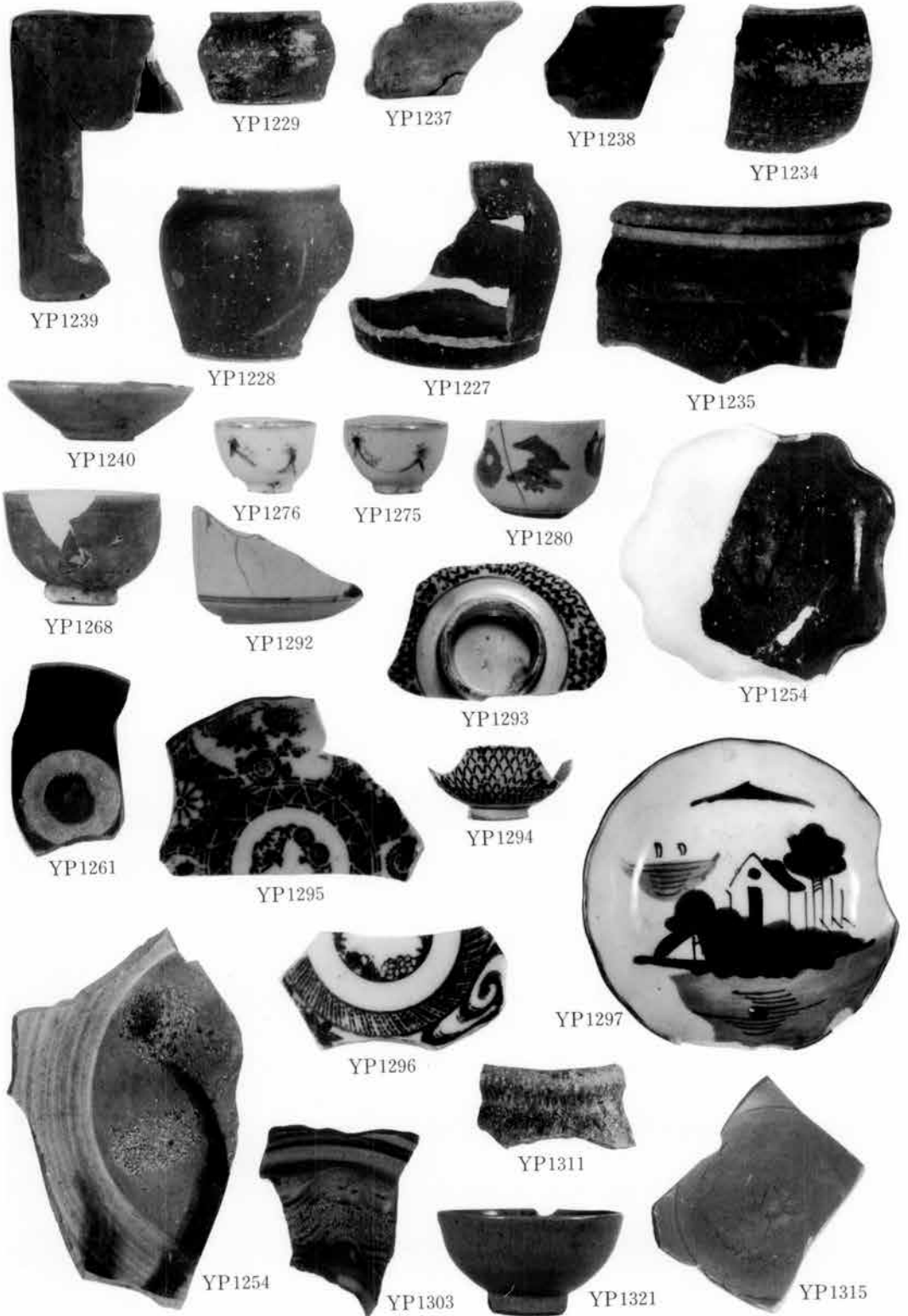
YP988

遺構外他出土土器



遺構外他出土土器

図版第 74 谷内ブンガヤチ遺跡 遺物



遺構外出土土器類



YS 1



YS 2



YS 3



YS 4



YS 6



YS 7



YS 14



YS 5



YS 11



YS 15



YS 9



YS 16



YS 8



YS 10



YS 12



YS 18



2 豎 1 豎



YS 13



YS 17



YS 19



10 豎



3 豎



3 豎



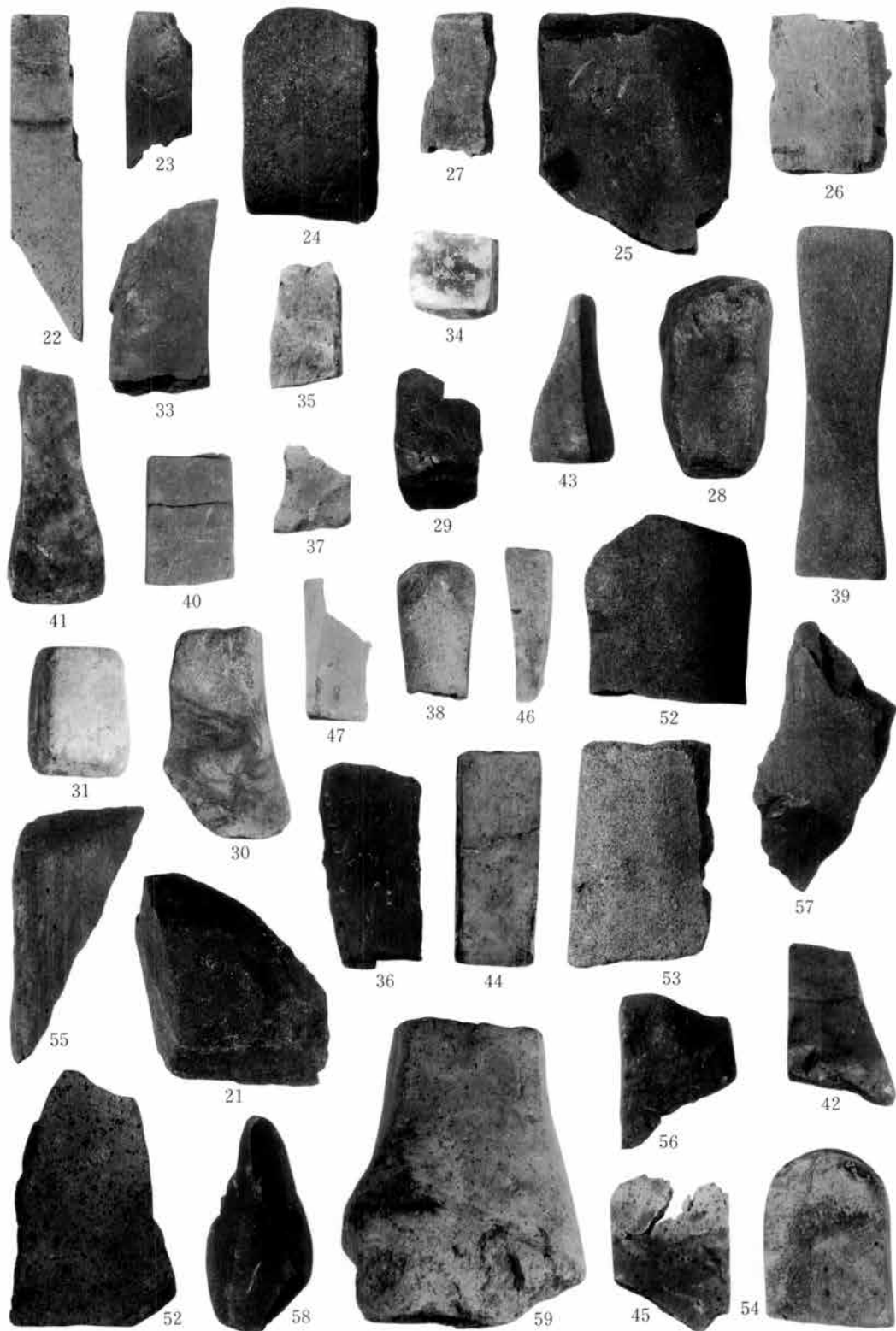
3 豎



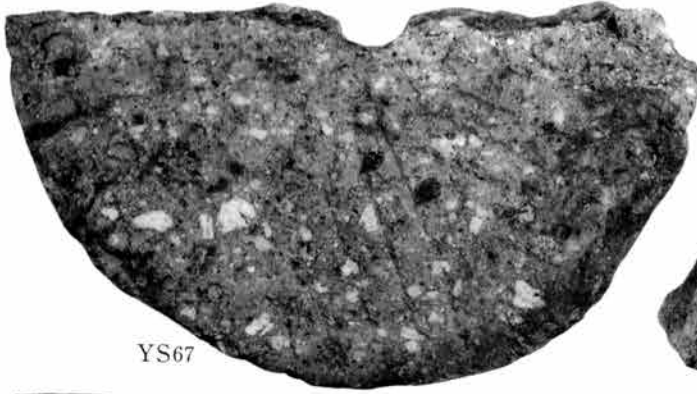
7 豎



出土石器



出土 砥石



YS67



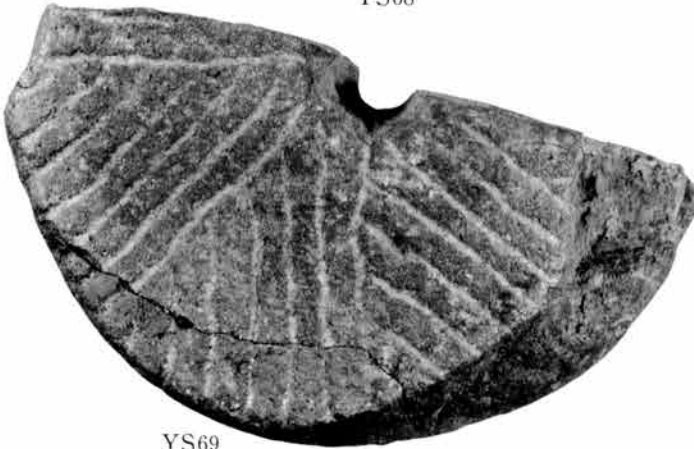
YS60



YS68



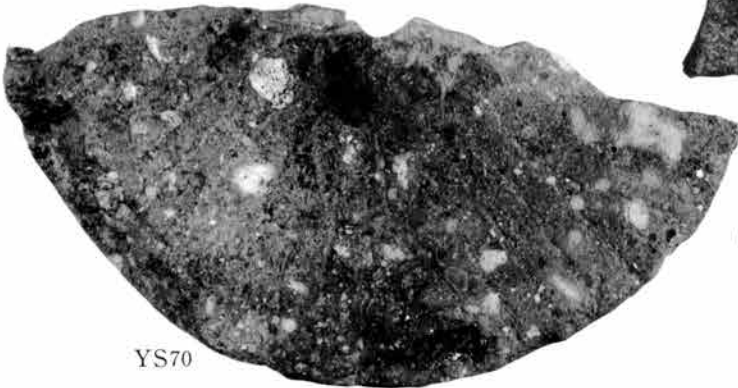
YS61



YS69



YS66

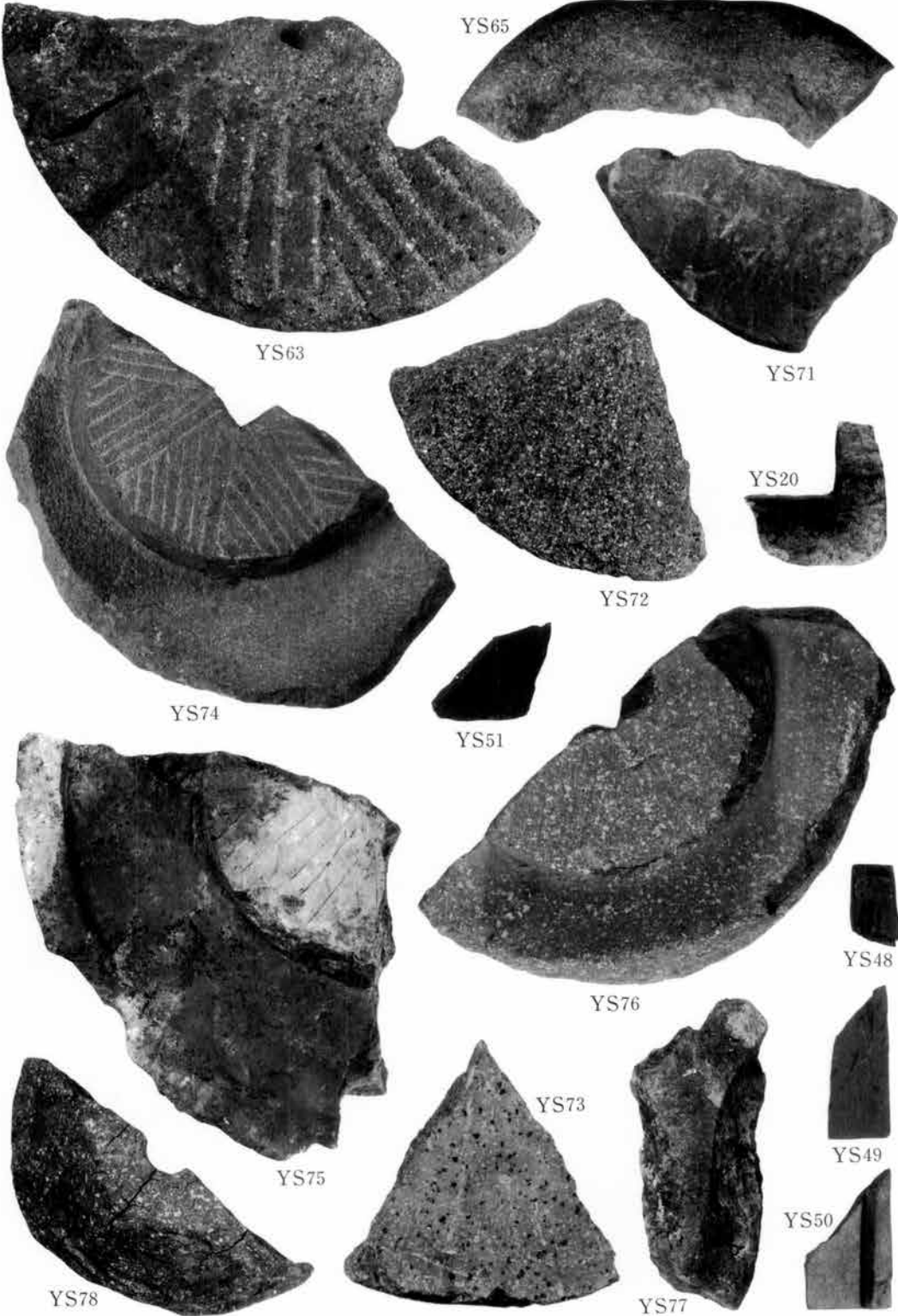


YS70

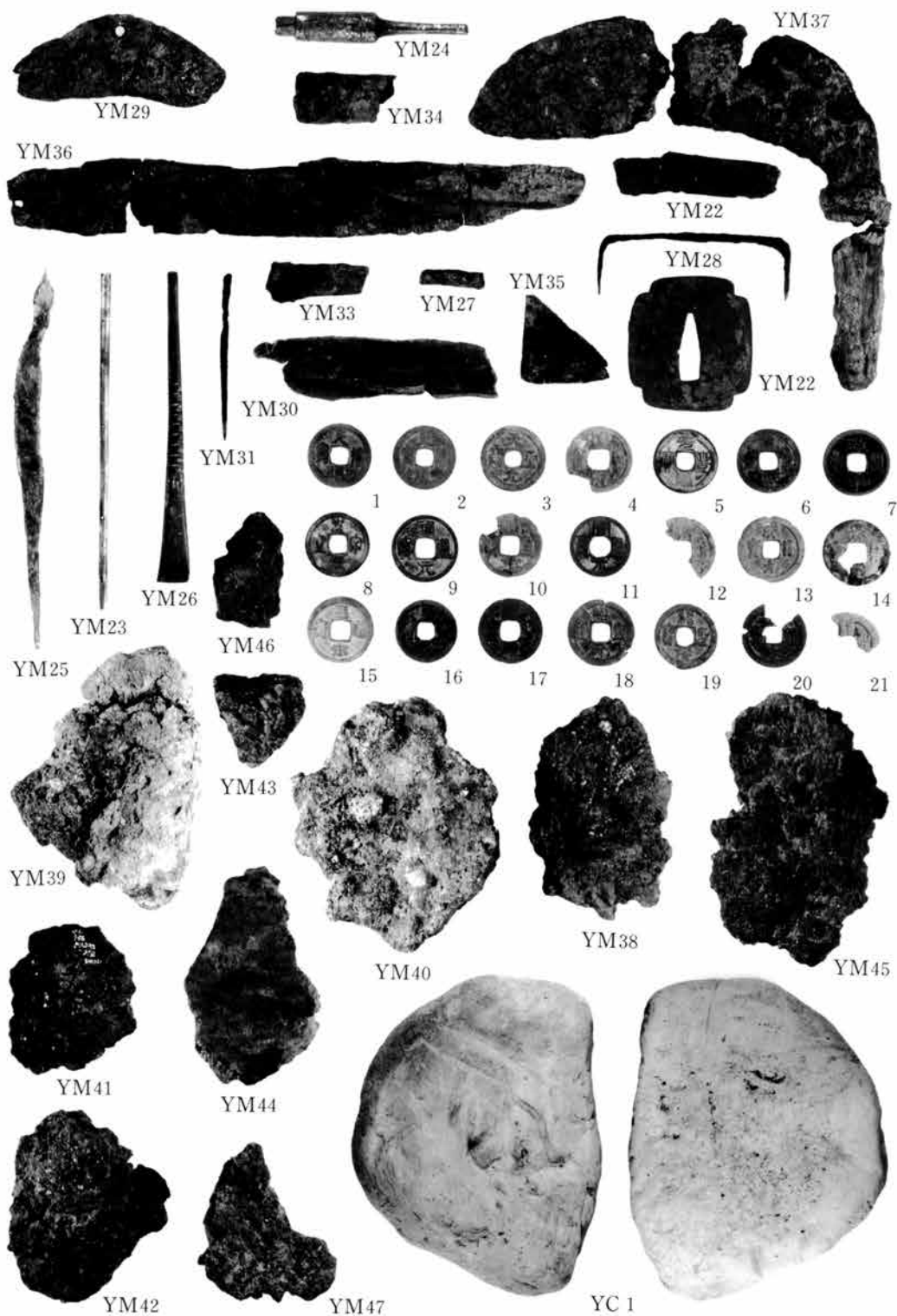


YS64

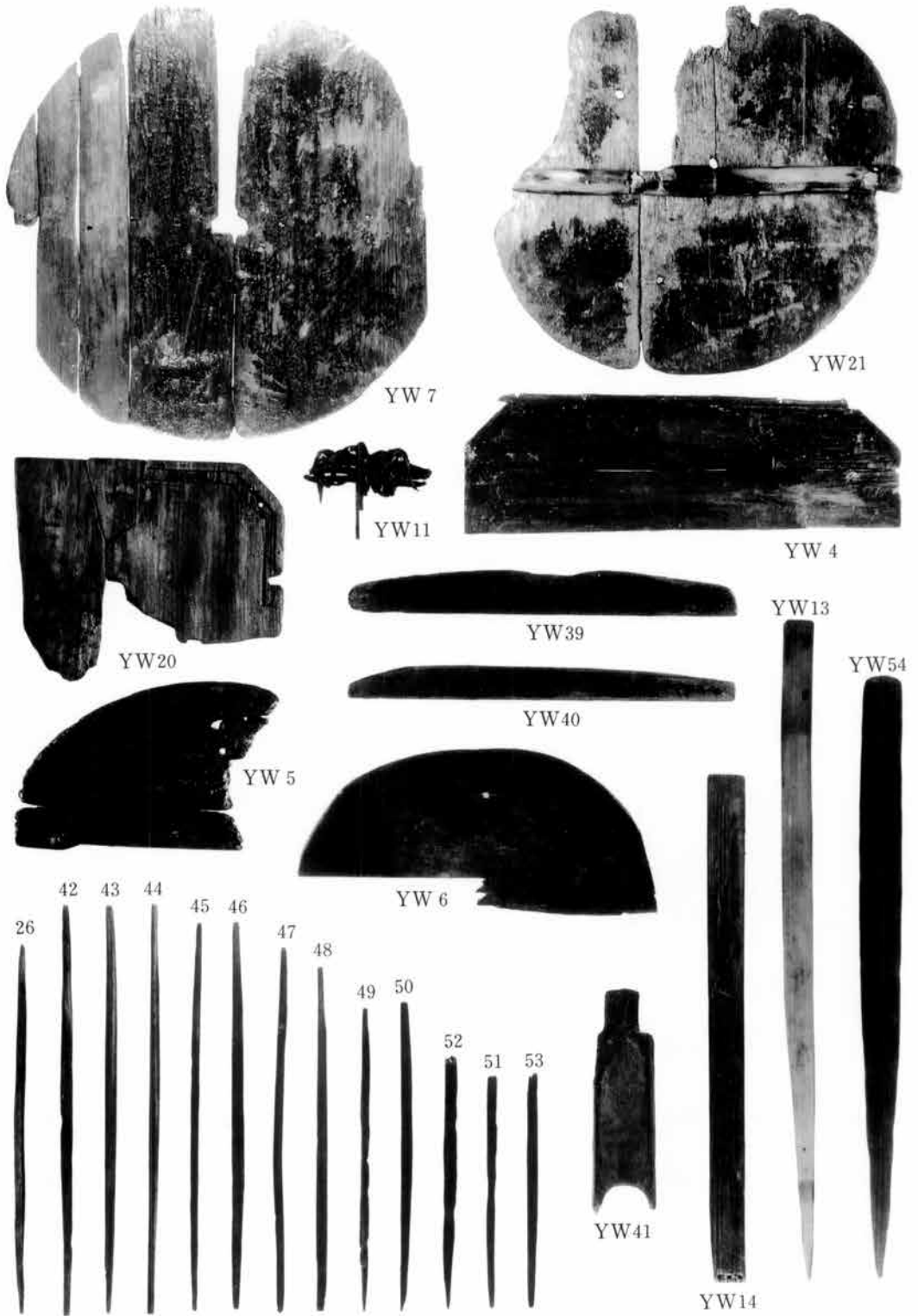
出土粉挽白



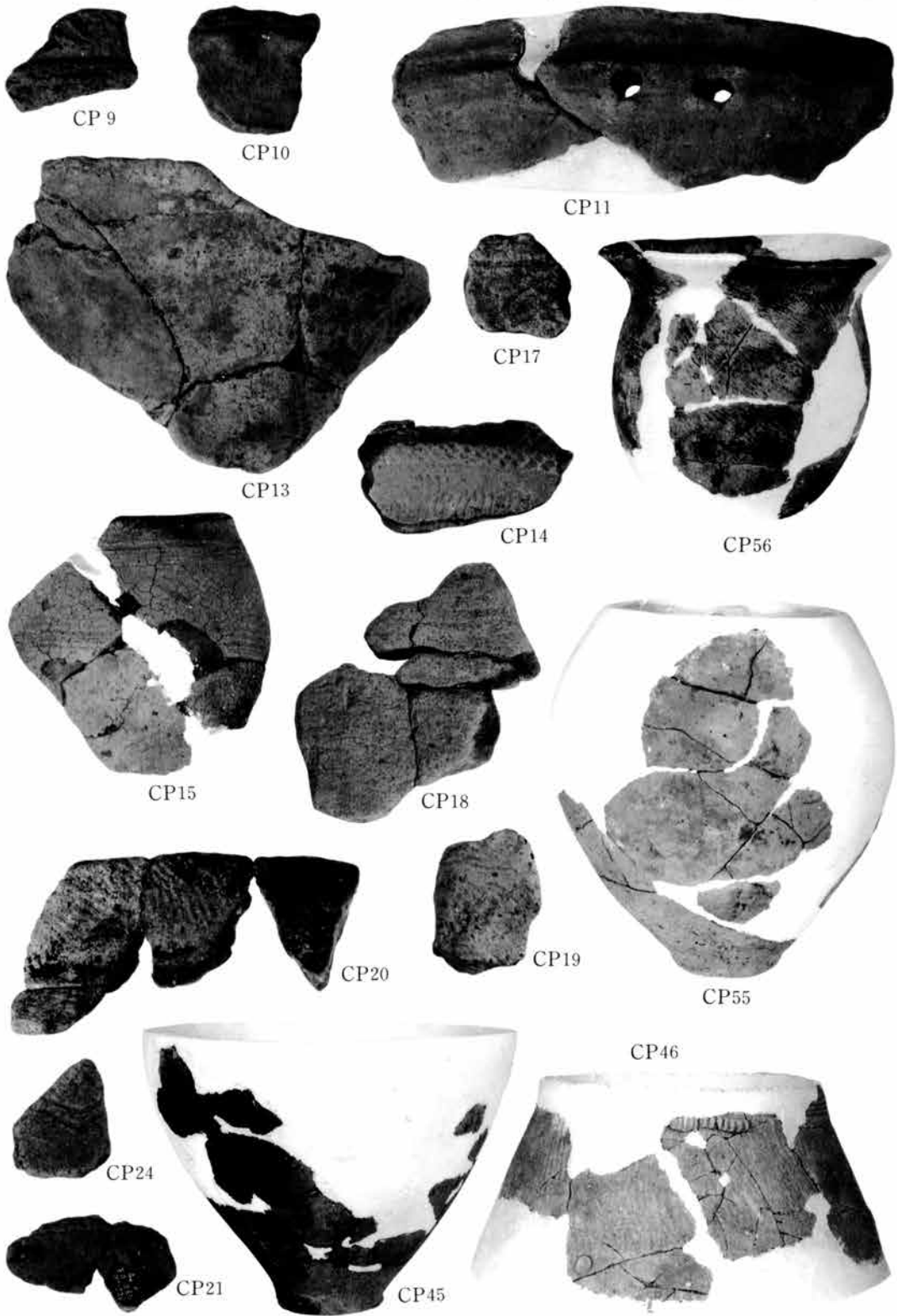
出土茶白他



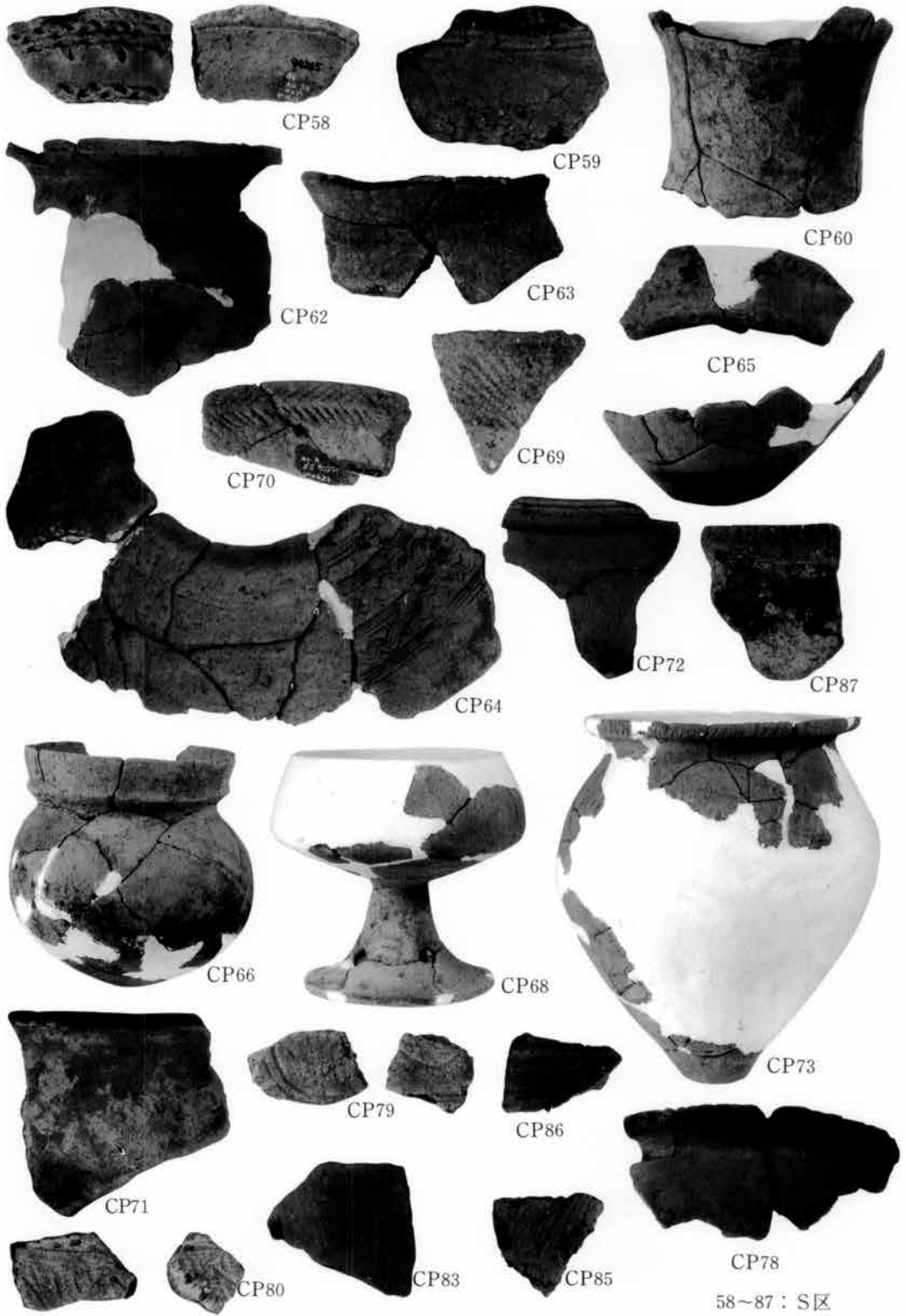
出土金属器・金属製品他



出土木器・木製品他



A地区出土土器



第1号環濠出土土器



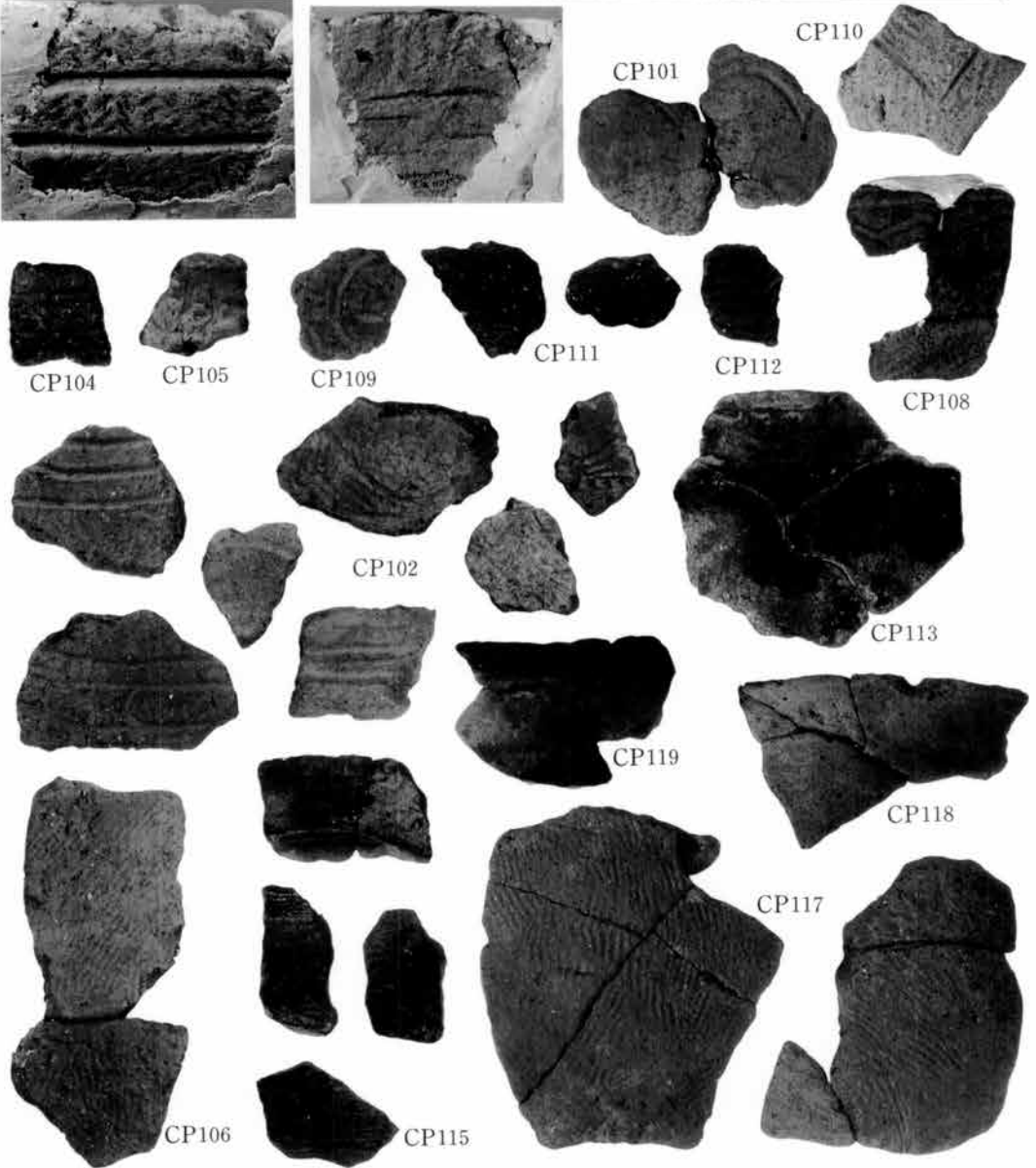
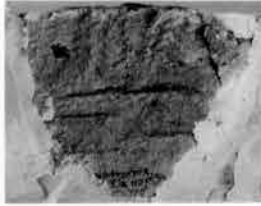
第1号環濠出土土器



101~119: W区



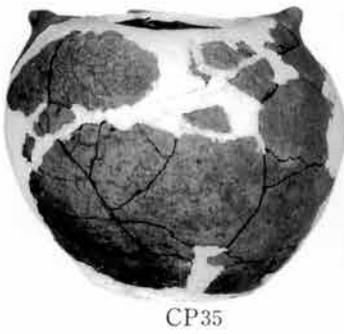
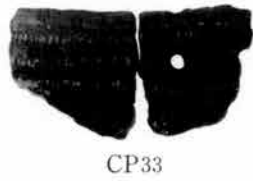
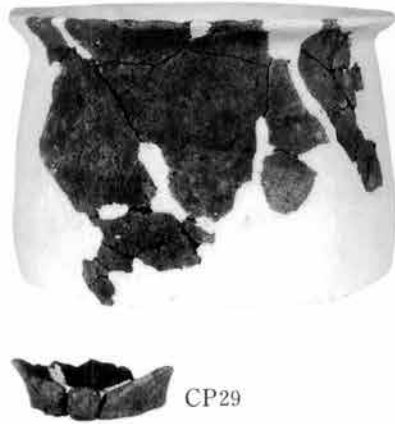
CP114



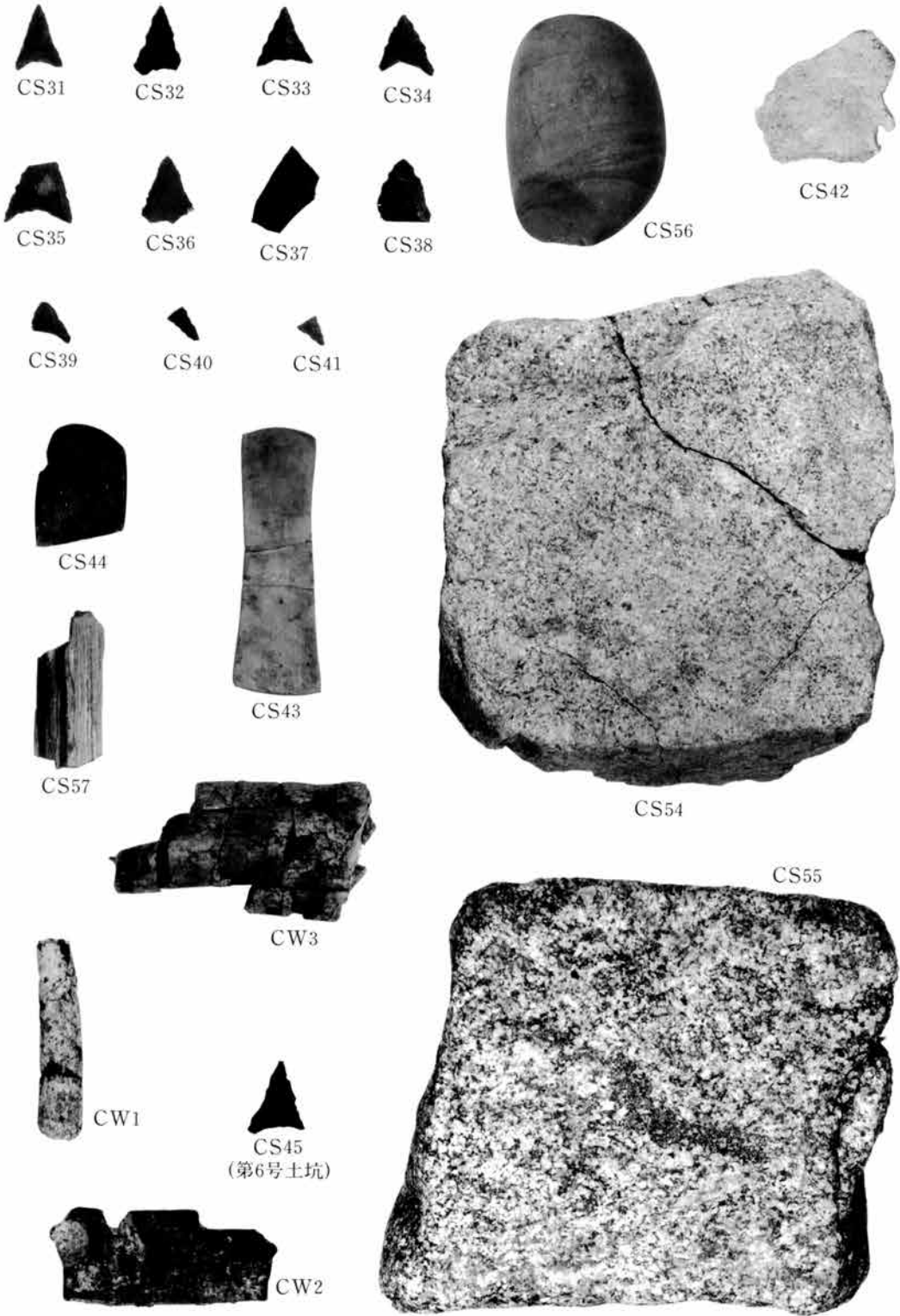
第1号環濠出土土器



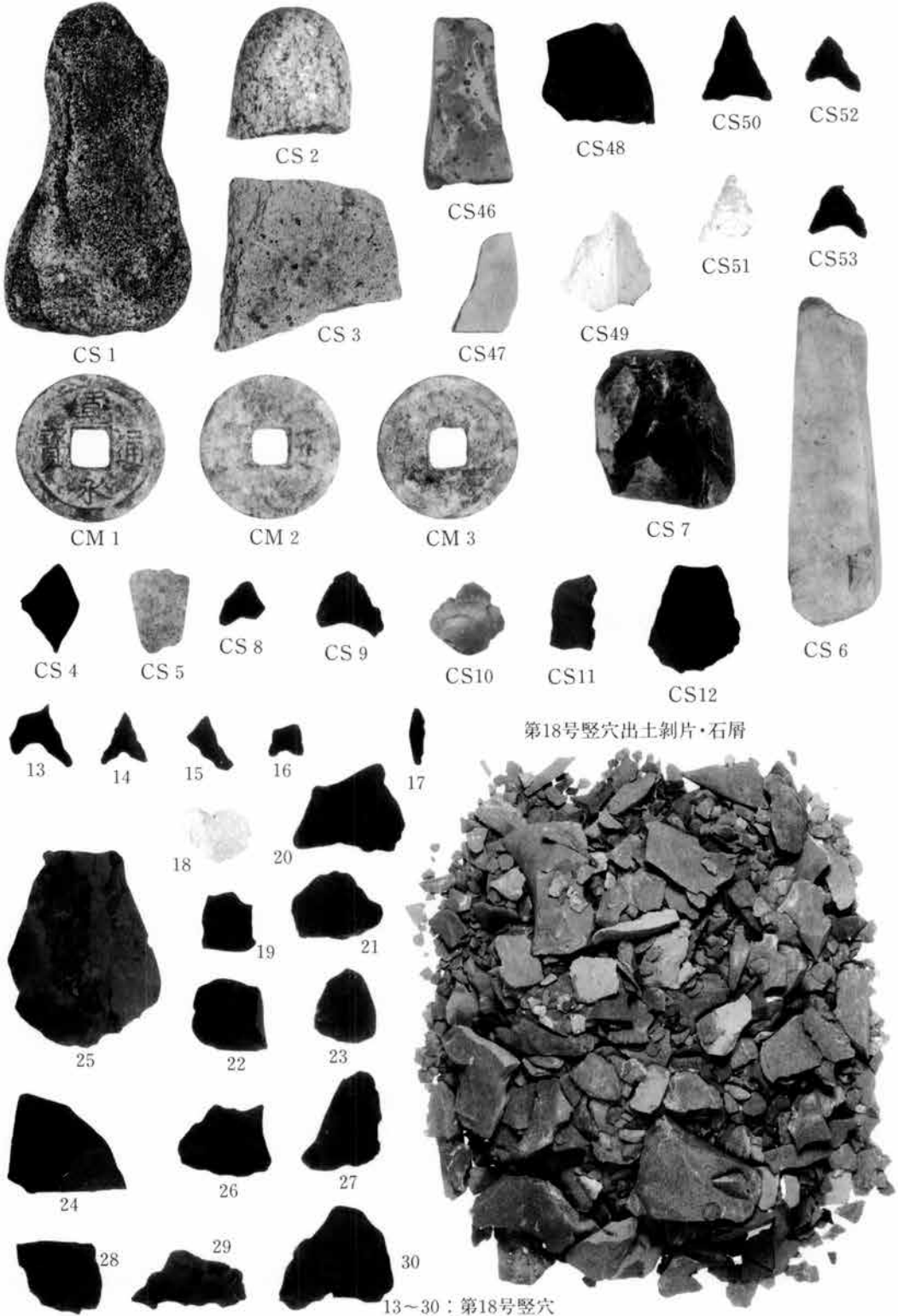
第1号環濠出土土器



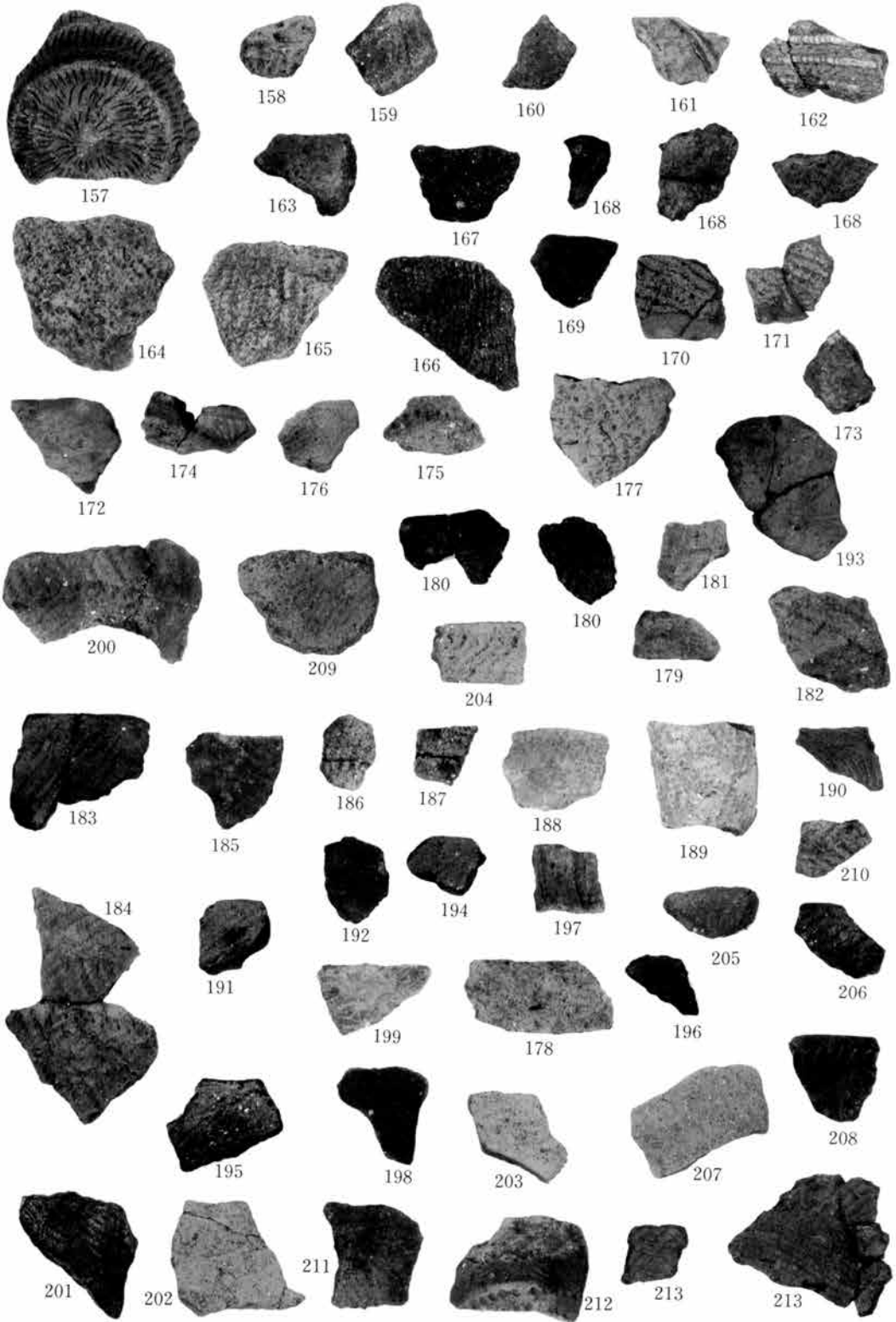
第12号竖穴式建物出土土器



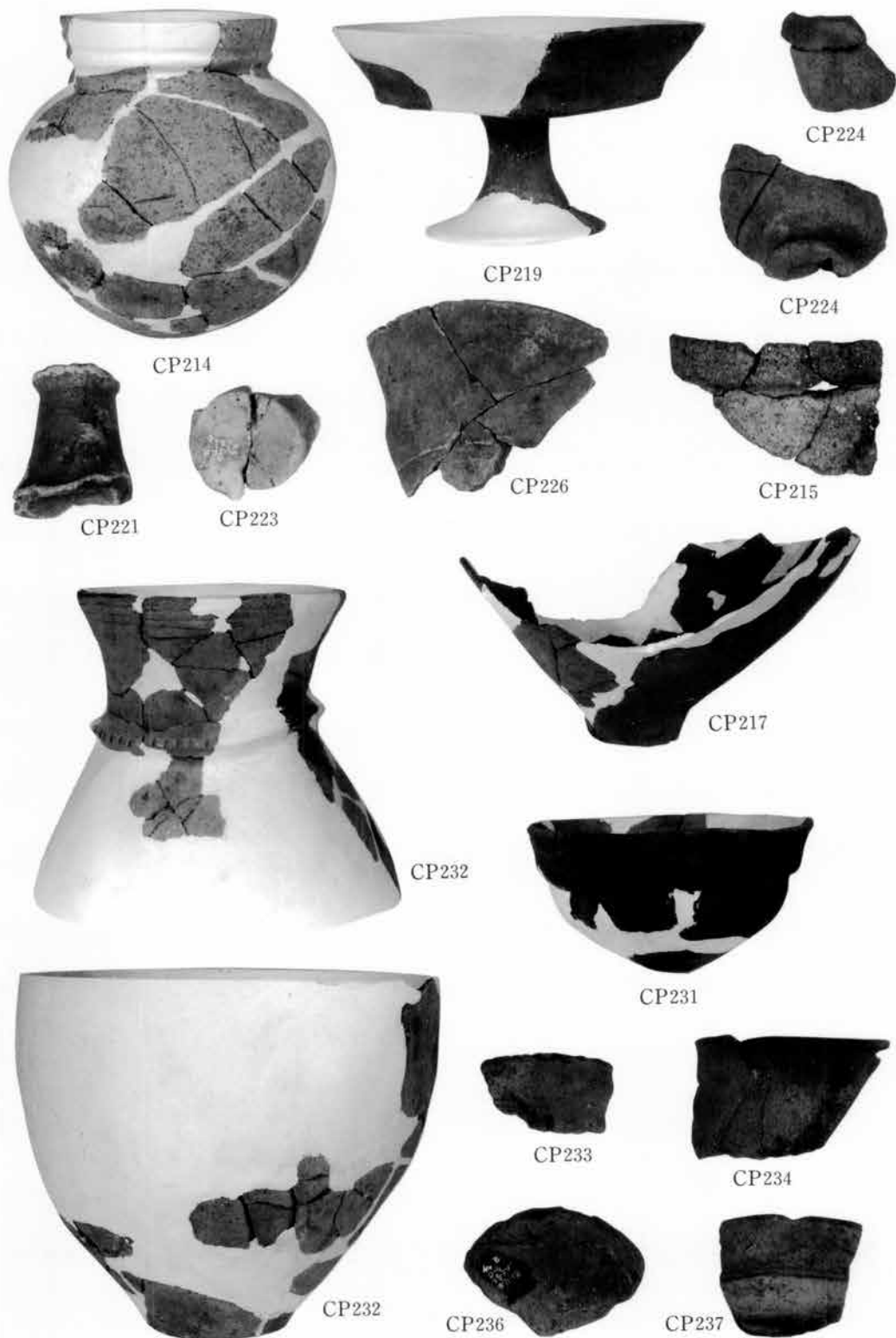
第12号竖穴式建物出土石器・木器・他



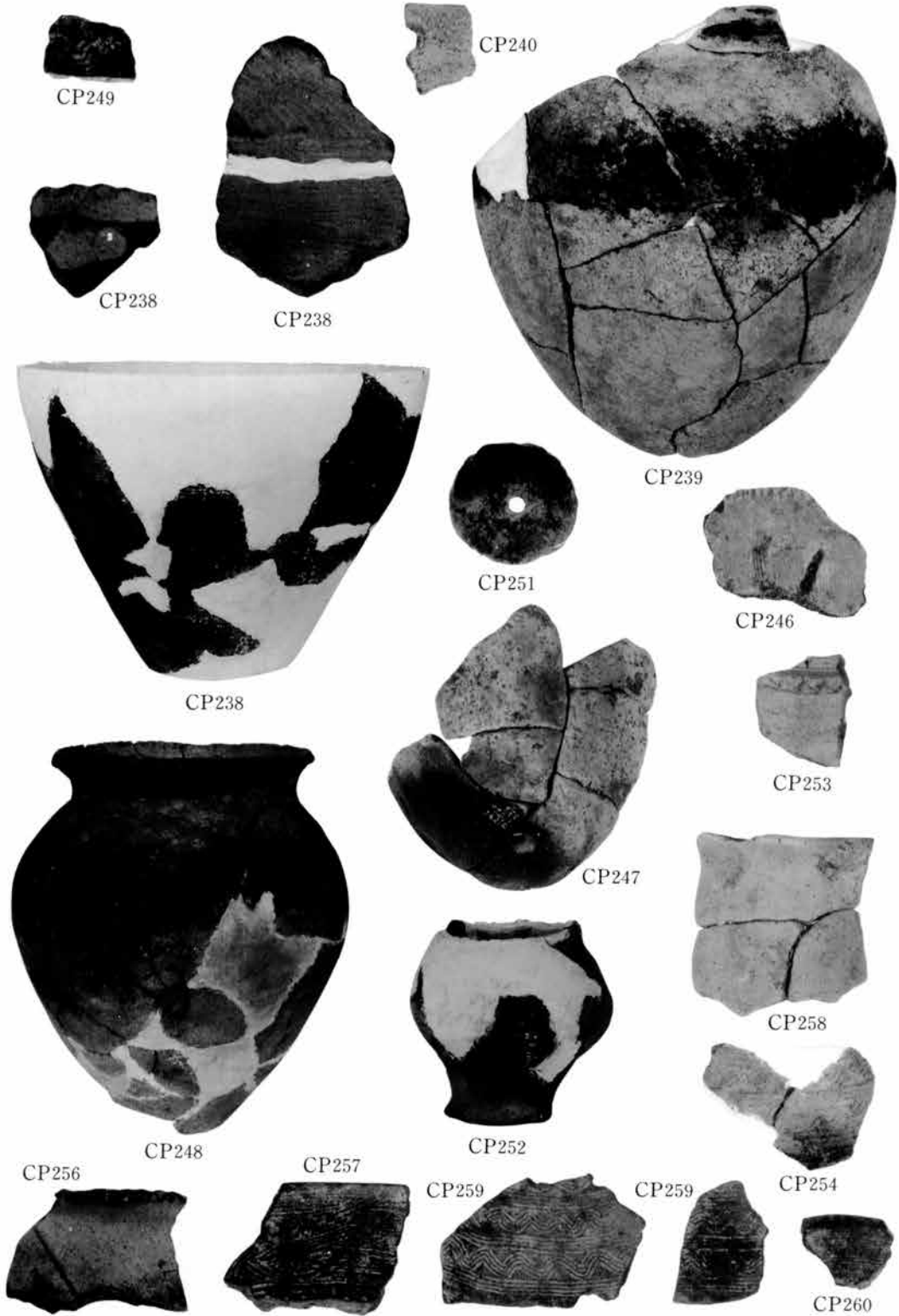
A地区出土石器・銭貨



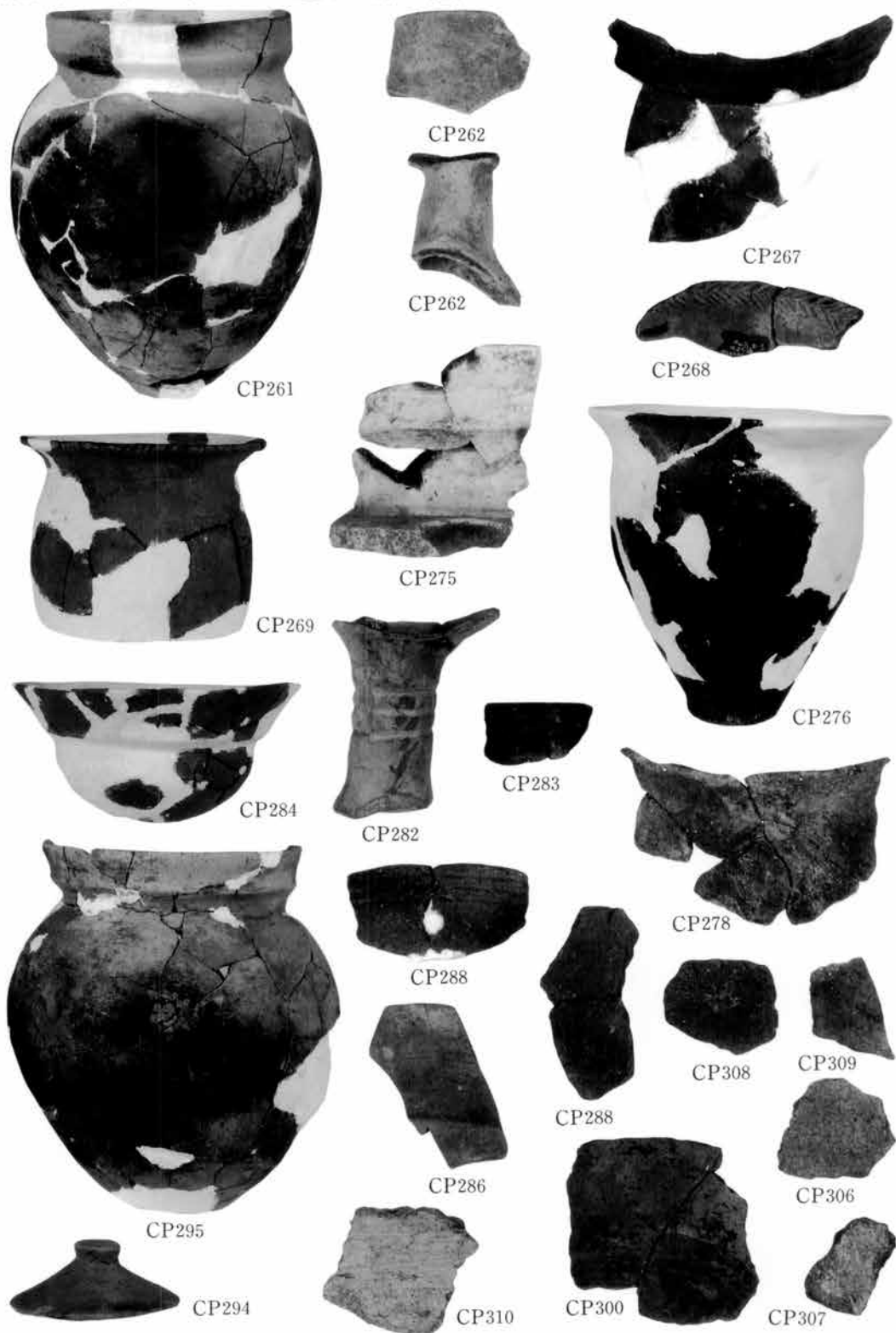
B地区出土土器



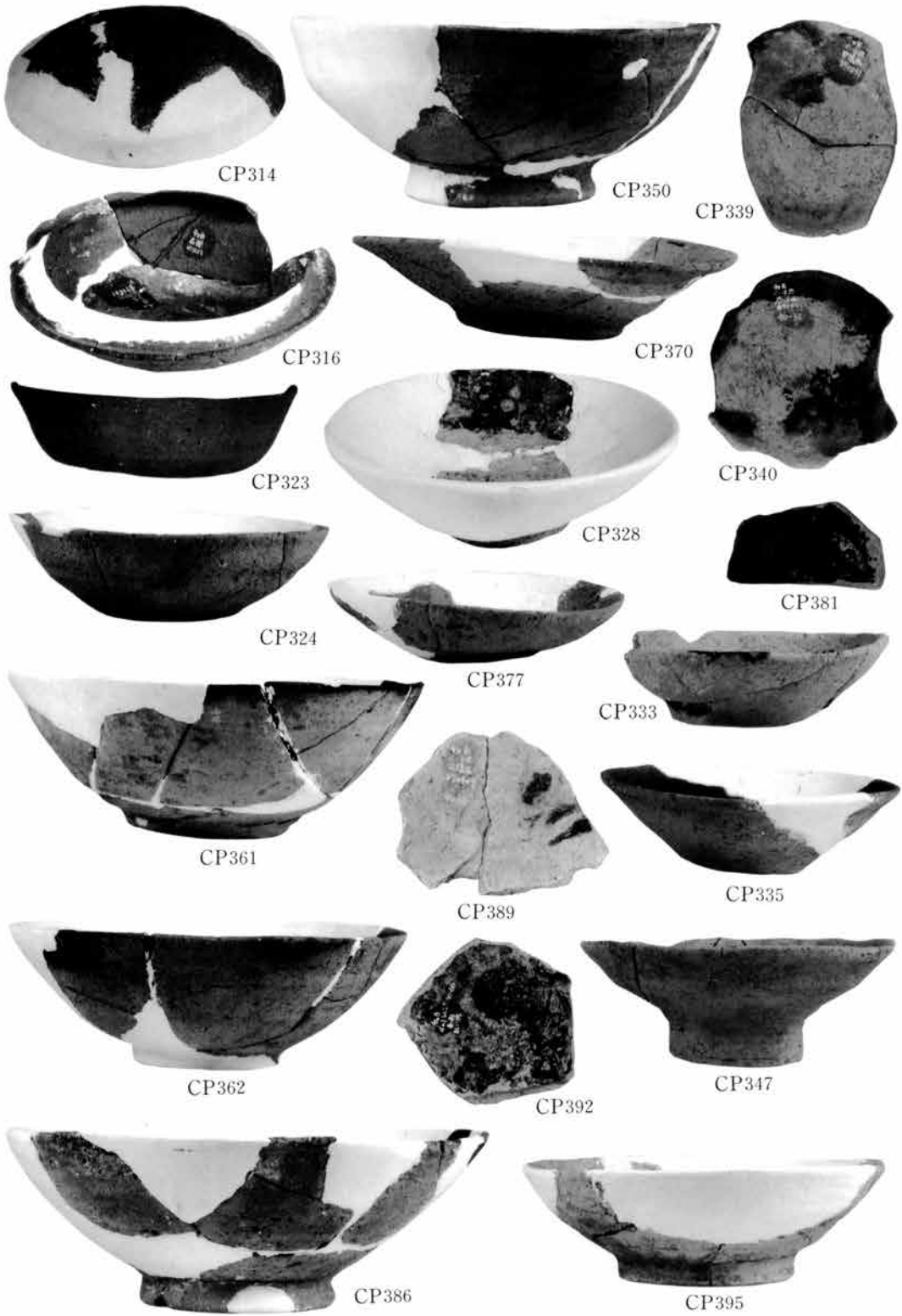
B地区出土土器



第22号竖穴式建物他出土土器・土製品



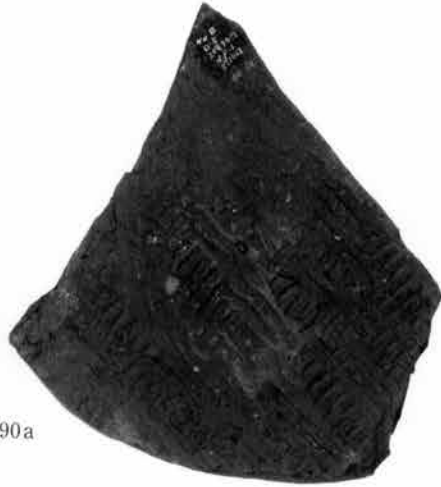
B地区出土土器



B地区出土土器



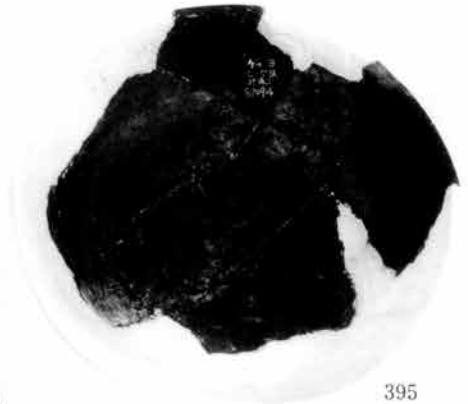
CP390a



CP397



CP390b



395



第2号掘立柱式建物



395

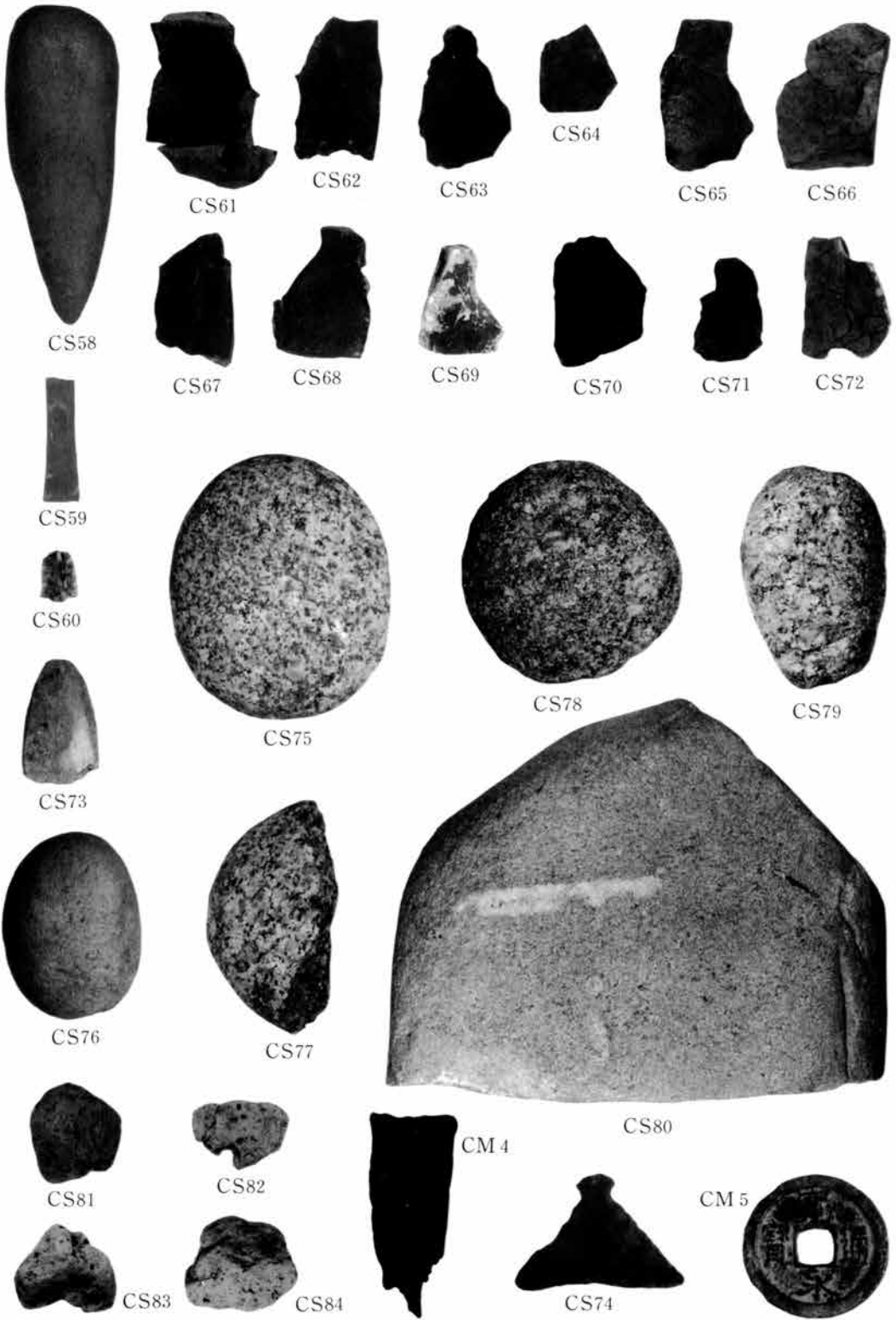


CP391

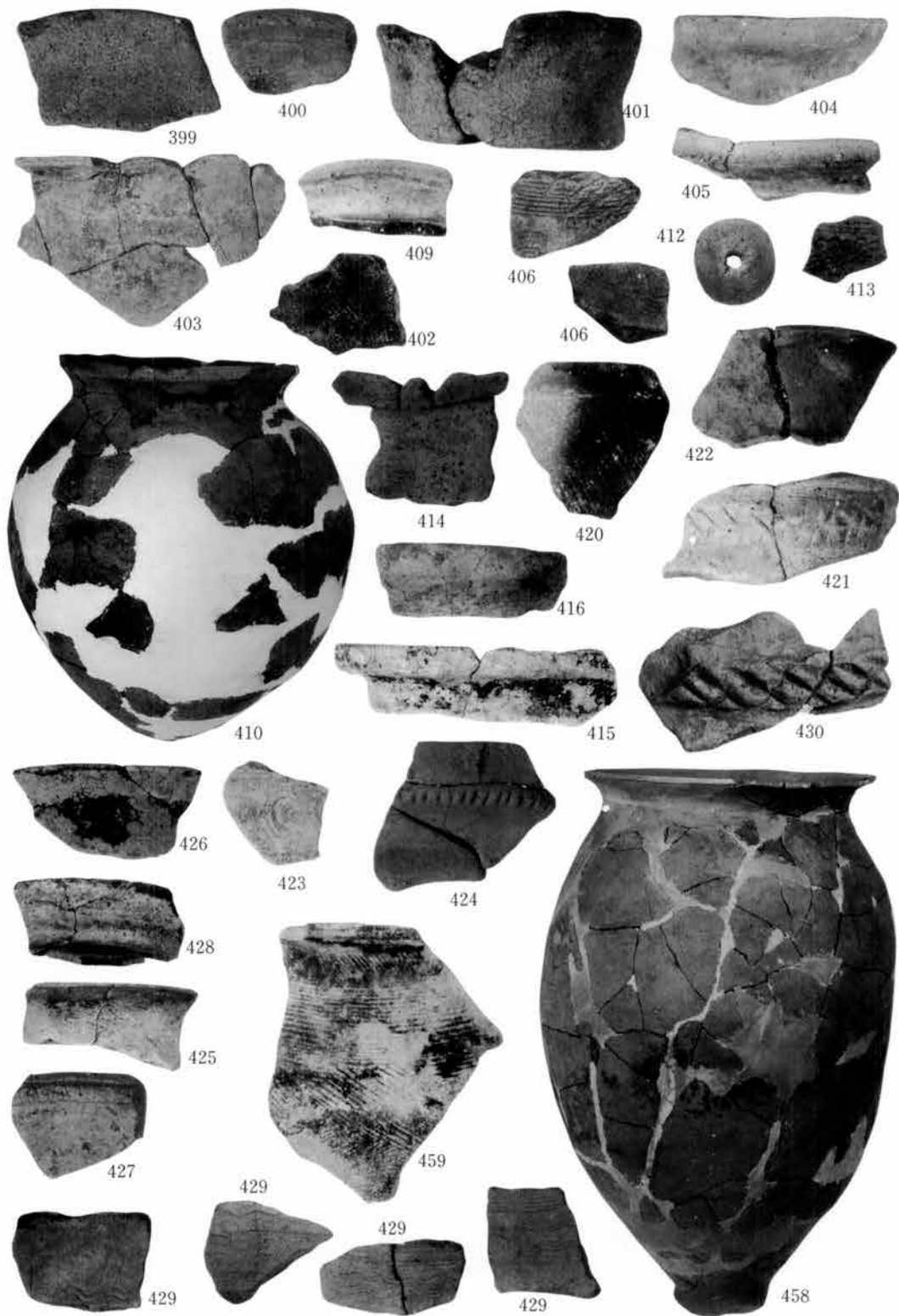


CP395

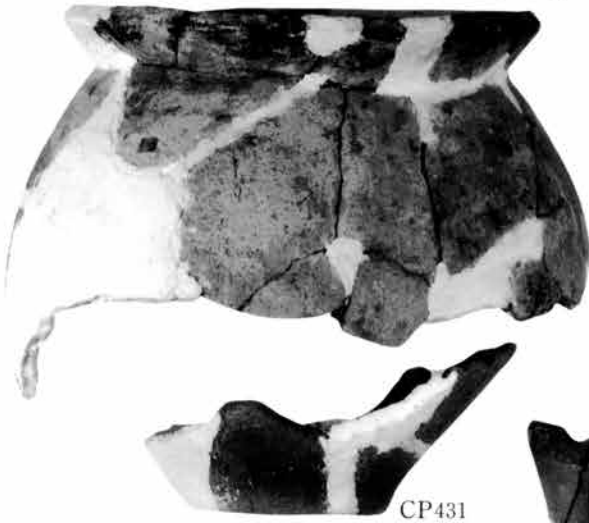
B地区出土土器



B地区出土石器・鉄器・銭貨



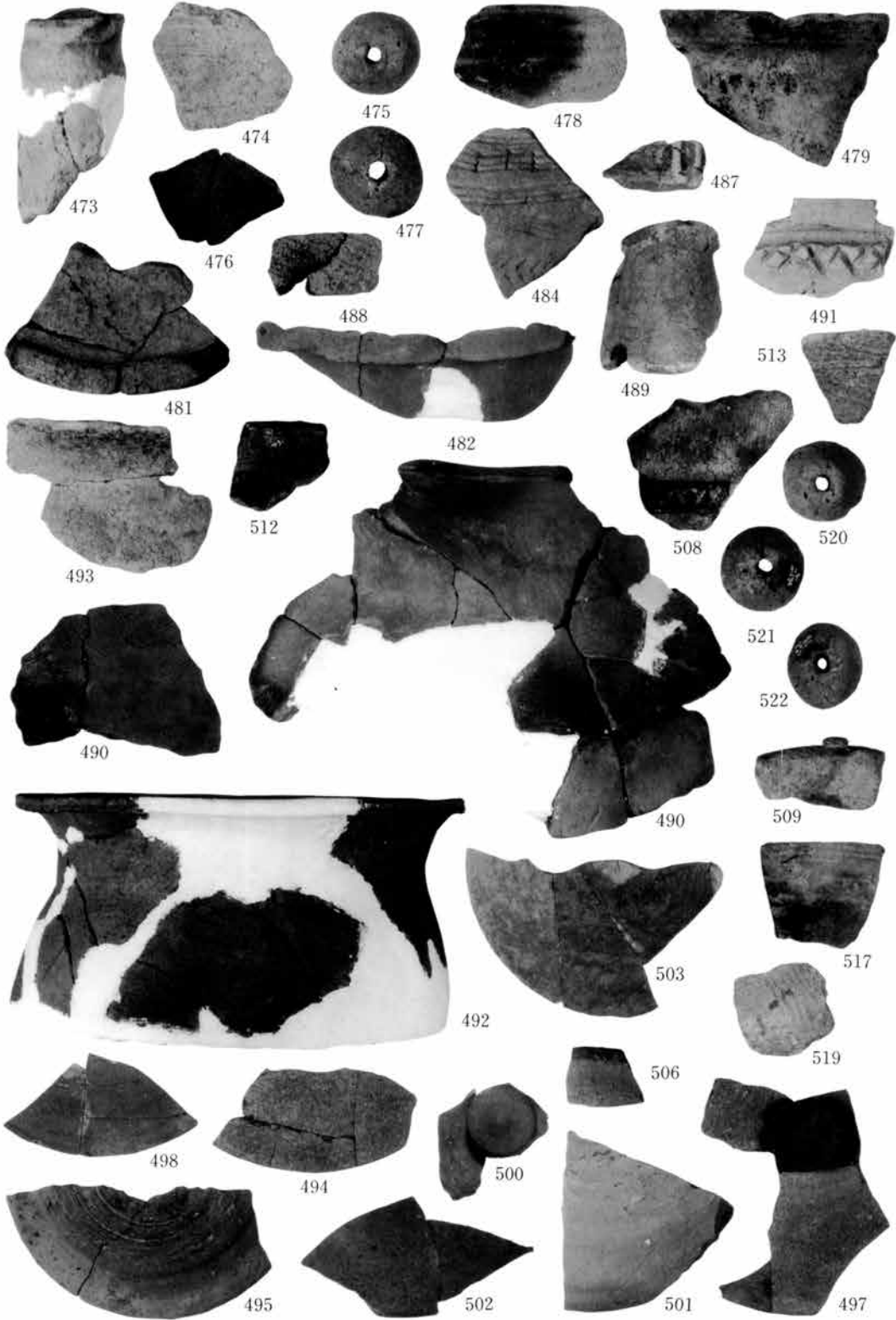
C地区出土土器



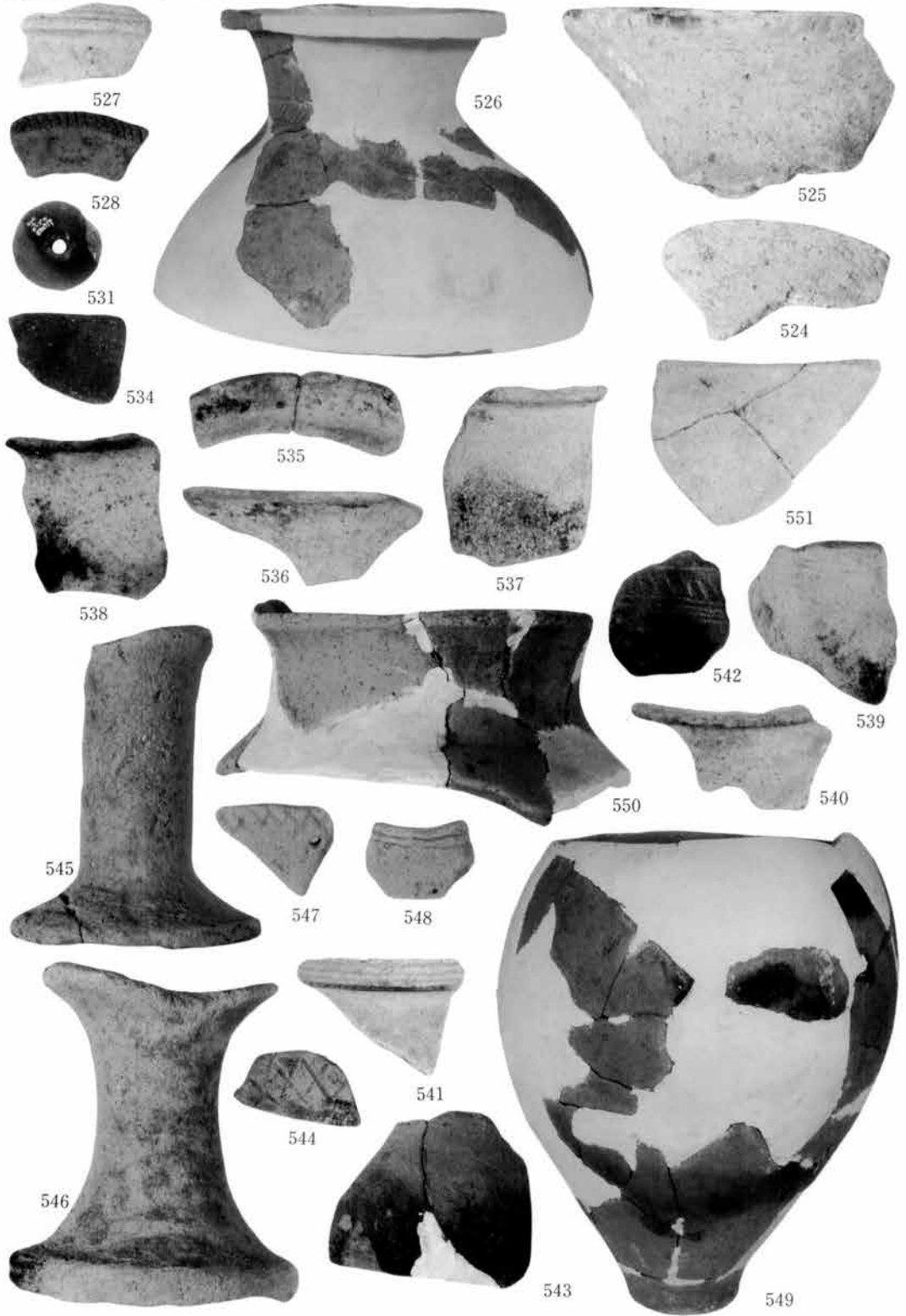
第36号竖穴式建物出土土器



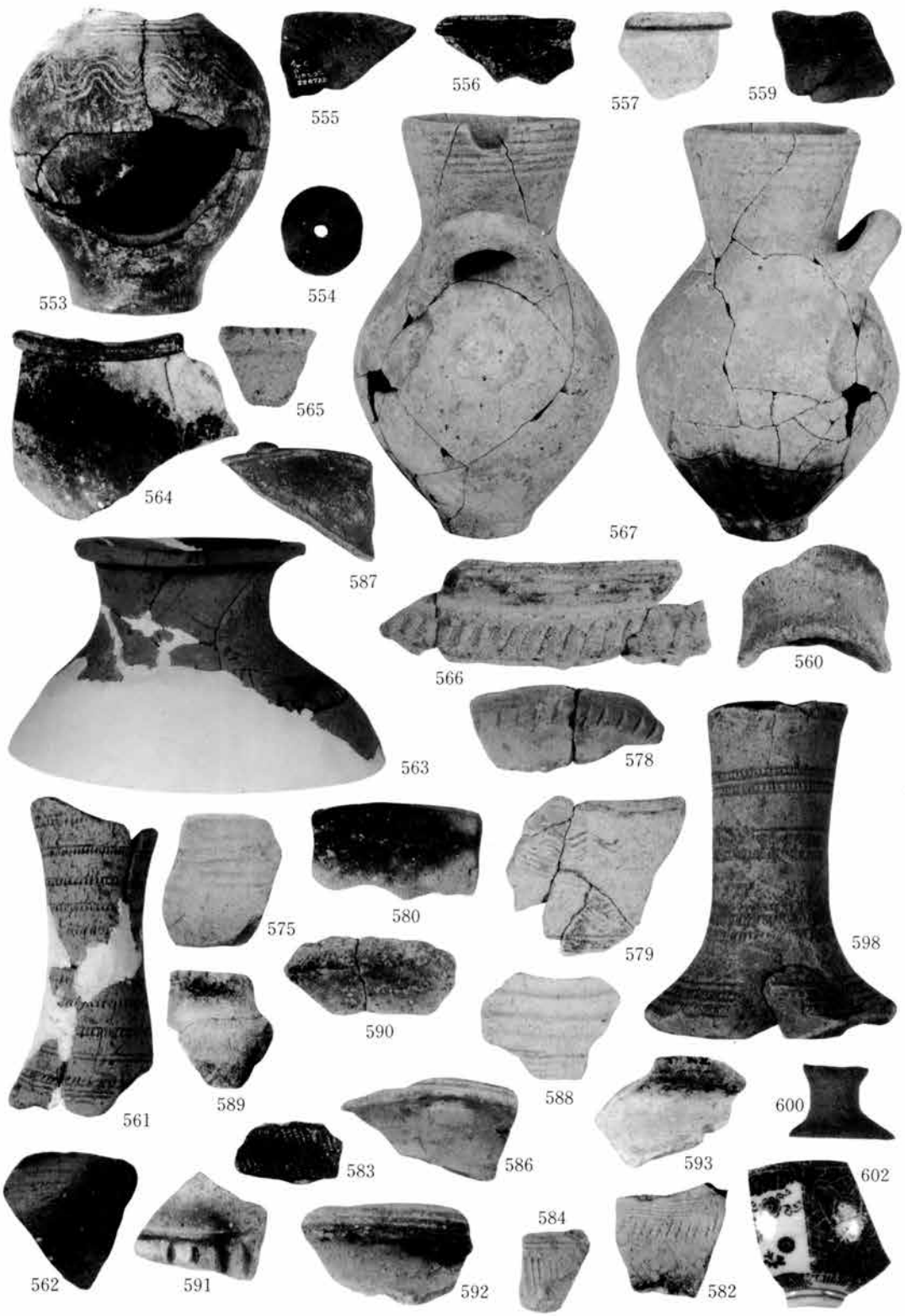
C地区出土土器



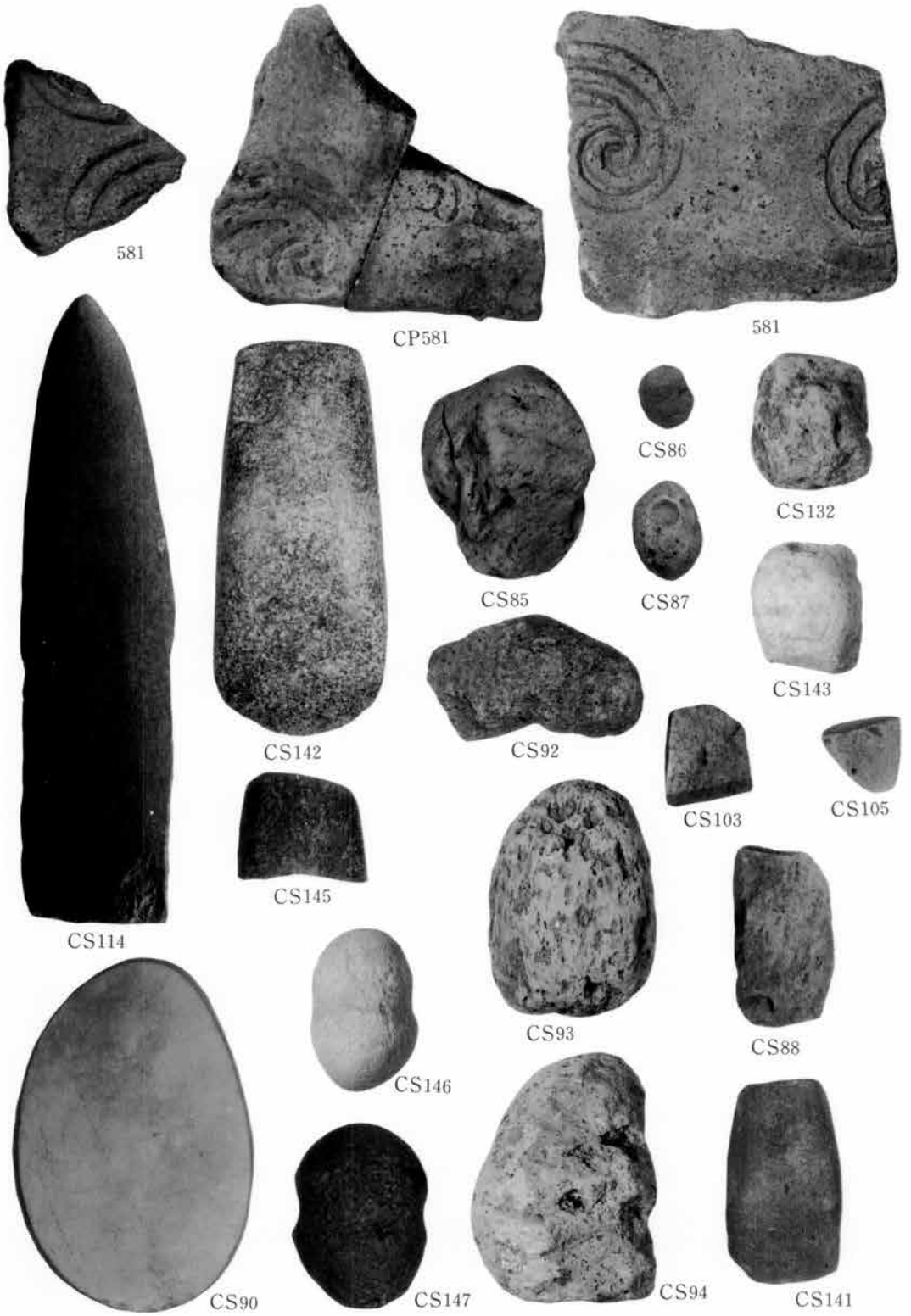
C地区出土土器



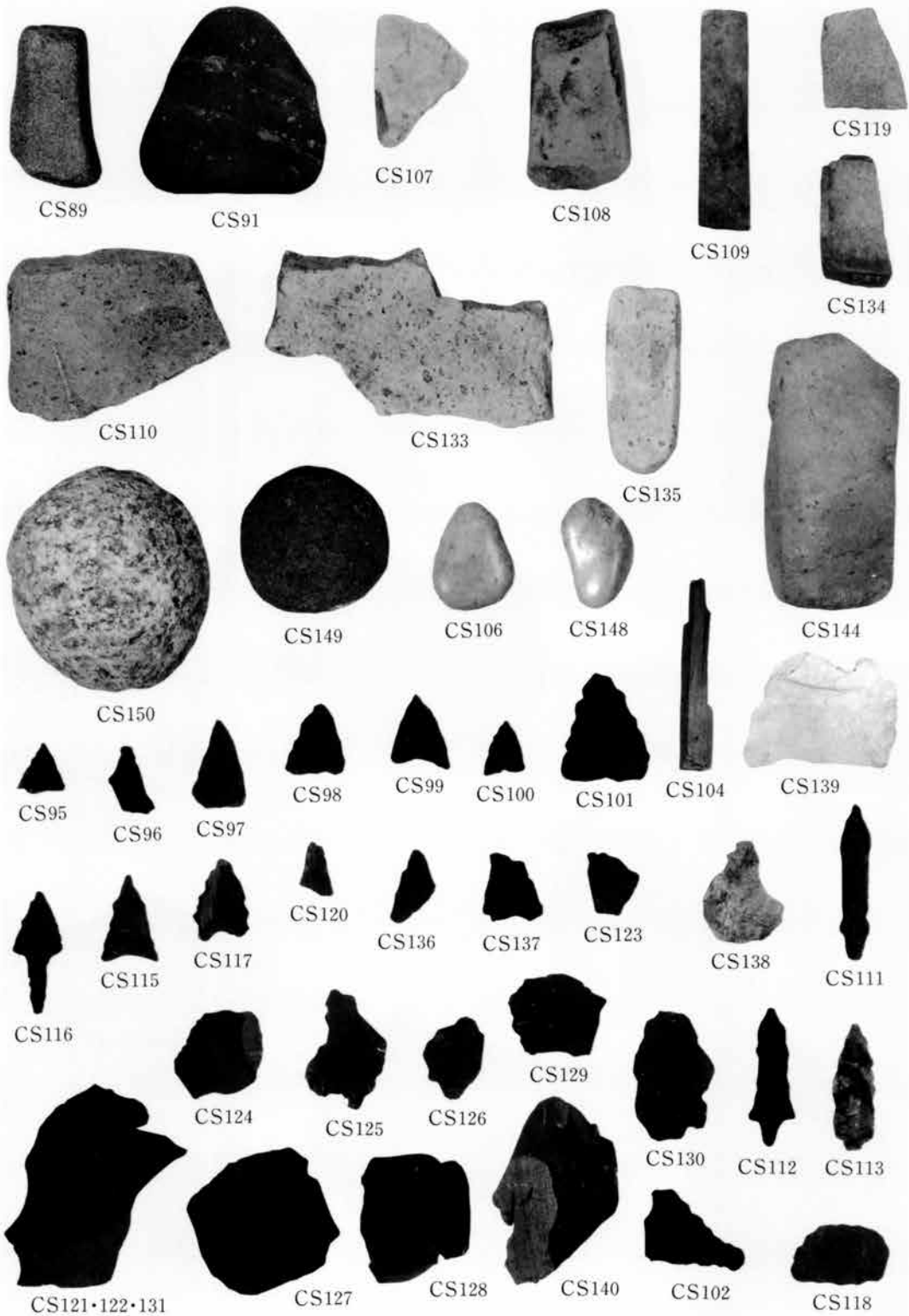
第 2 号環濠出土土器



第2号環濠他出土土器類



C地区出土土器・石器



C地区出土石器他



SM 1
(原寸)



SS 1



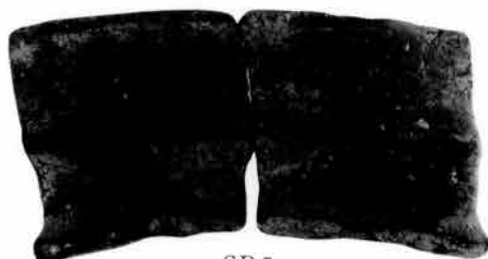
SP 2



SP 3



SP 1



SP 5



SP 7



SP 4



SP 6



第5号墳
(S=1/2)



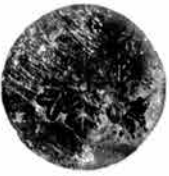
SP 8



SP 9



出土遺物



KM1
(原寸)



KP 3



KP15



KP 9



KM2
(原寸)



KP 3



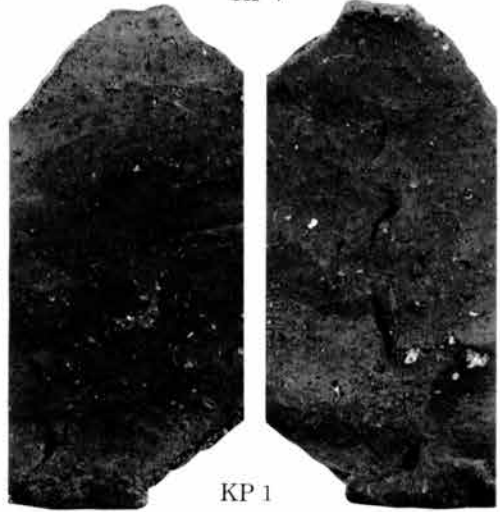
KP 7



KS 1



KP 5



KP 1



KP18



出土遺物



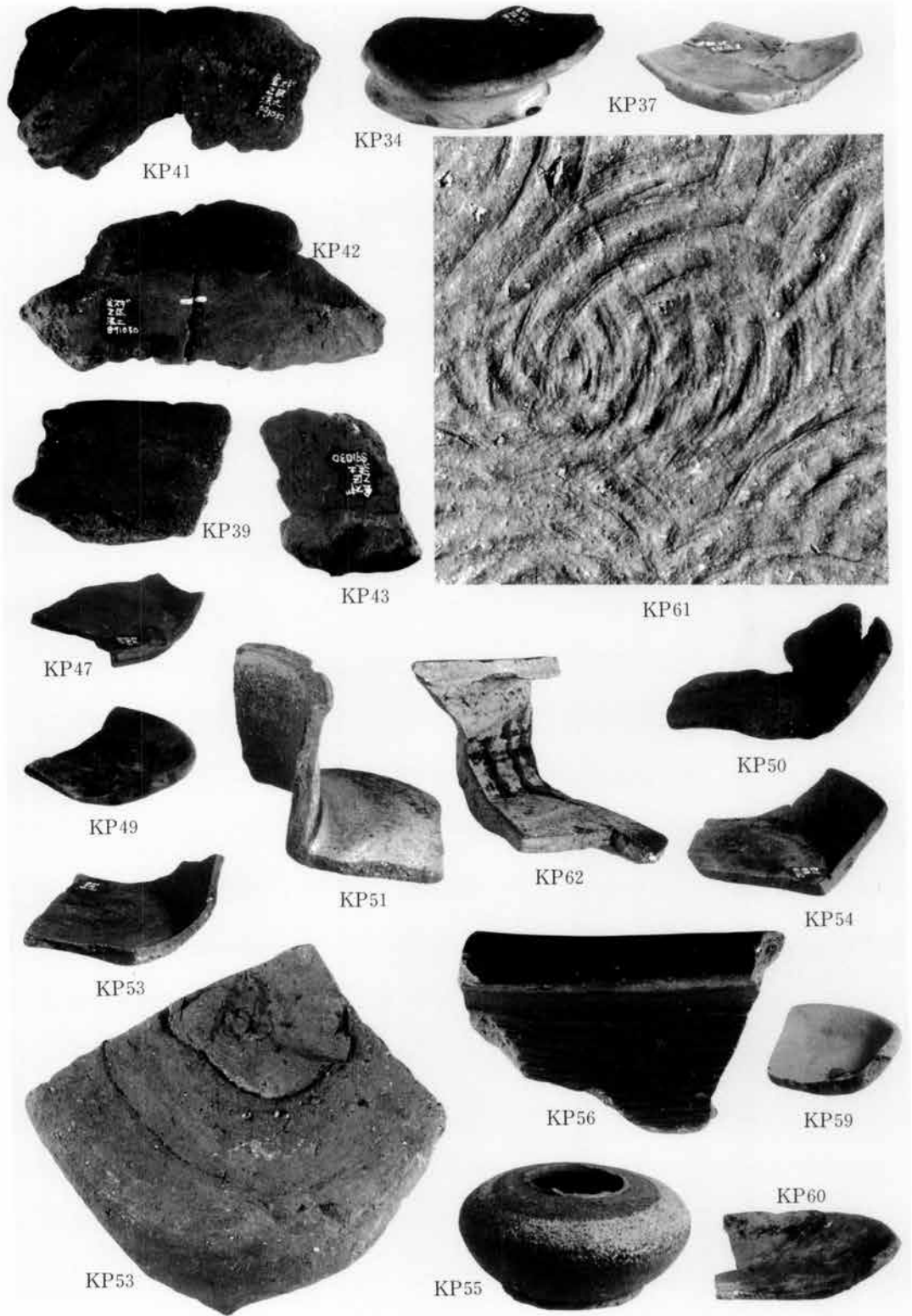
KP27



KP33



KP45



出土土器

谷内・杉谷遺跡群

平成7年3月10日 印刷

平成7年3月17日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

〒921 石川県金沢市米泉町4丁目133番地

☎ (0762) 43-7692

印刷 ヨシダ印刷株式会社

〒920 石川県金沢市御影町19番1号

